

パラオの曙

瑞穂国

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界の海を席卷する謎の艦艇群・深海棲艦。

それに対抗しうる唯一の存在・青い海の戦艦。

青い海の戦艦を操る、艦艇の記憶を持った少女たち・艦娘。

これは、彼女たちと、彼女たちの指揮官・提督の、奮戦の記録――

新設されたパラオ泊地に着任したのは、若き新人提督・榊原広人少佐。そして、彼の秘書艦・曙。当地に置かれていた警備隊と合流し、新たに艦隊が創設される。

新人提督の成長、新しい仲間との出会い、深まる謎。そして始まる、トラック環礁を巡る激戦。

南海の三日月に立てた誓いを果たすため、今日も曙は、厳しく、時に厳しく、やっぱり厳しく、パラオ泊地で奮闘する。

※連動作品もよろしくお願ひします

「T・T独立艦隊海戦譜」

「Eの海」

「欧州激戦録」

「戦海の守護者たち」

目次

プロローグ

パラオ沖海戦

1

パラオの新提督

提督、着任ス

6

提督南洋航海記

14

警報ハ当テニナラナイ

21

駆逐艦ノ本懐

28

パラオ到着

35

結成、パラオ泊地艦隊！

43

敵ハ執務室ニアリ

50

敵艦隊接近！

58

強攻偵察部隊ヲ迎撃セヨ

65

進メ！パラオ泊地艦隊

72

未知、アルイハ既知トノ邂逅

80

曙「閑話よ」

88

新たな出会い

建造ノ条件

95

扉ヲ開ク時

102

黒鉄ノ城

110

大和八国ノマホロバ

117

祥ノ海、鳳ノ空

124

嵐ノ前ノ一時

132

第一次トラック沖海戦

攻略艦隊到着

140

悩メル夜ニ

朋アリ遠方ヨリ来タル

過去ノ影

作戦前夜

発動！『IF作戦』！

夜明ケノ強襲

対空戦闘用意！

時ハ来タ

接近

戦艦ノ本分

海ヲ震ワセテ

最強ノ矛、最強ノ盾

逆襲ノ砲火

斬リ込ミ

夜闇ノ島影

夜ノ海ニ浮カブ

ソノ身ヲ賭シテ

守リタクテ

帰ルベキ場所

訪レタ風、来ル荒波

二人ノ提督

見エザル機動部隊

摩耶「閑話だぜ」

艦艇データファイリ

艦艇データファイリ（第一次トラック沖海戦）

314

307

300

292

284

277

270

262

254

247

240

233

226

218

210

203

197

190

183

177

169

161

154

147

始まりの話

全テノ始マリ

艦娘、吹雪

艦娘、ソシテ提督

異端者たち、探究者たち

休日ト改装

乾杯ノ音頭

米艦隊カラノ接触

猛牛

未成ノ艦隊

モウ一人ノ提督

航海、後悔

二ツ名

夜、ラムネ、摩耶

悩メル艦娘

ルソン警備隊ノ提督

発動!? プレゼント大作戦!

朗報

岐路ニ立ツ

ルソン到着

乙海域進入

乙海域強行突破作戦

閉海ノ探索者

異端者、先駆者

静カナ海、静カナ夜

479

472

465

458

451

444

437

430

424

417

410

403

396

389

382

375

367

360

353

345

338

330

322

新タナル船出

486

それぞれの想ひ、そして

想イ

493

空ノ護り主、海ノ護り主

500

アノ日

507

過去ヲ告ゲル者

514

幻

521

空襲警報

528

鷲ハ進発セリ

535

パラオ防空戦

541

ソノ手ハ届カズ

548

マリアナ強襲

555

海ヲ走ル救援

562

マリアナ沖ノ砲火

569

守護者

575

マリアナ急行

581

摩耶、奮闘

588

第二夜

595

戦海ノ乙女たち

602

佐世保ノ記憶

609

目的ハ何カ

616

第二陣到着

623

新型戦艦ヲ撃破セヨ

629

意志ノアル所

635

マリアナ沖ノ火ハ鎮マリ

641

初メテノ接触

647

深海ト艦娘

654

知覚ヲ求メル者

660

木曾「閑話だ」

667

決戦前夜

彼女ノ決意

674

新シイ風

681

飢エタ狼

688

決戦ニ備エテ

694

進ンダ先ニ待ツモノ

700

過去ニ隠サレタ

706

仕組マレタ今

712

南海ノ防人タチ

718

静カナル盾

724

満タセ盃

730

青イ空、白イ雲

737

波間ノ艦娘タチ

744

第二次トラツク沖海戦

本土防衛艦隊

751

艦隊集結

757

機動部隊ノ主タチ

763

出撃ヲ前ニ

771

全艦抜錨セヨ

778

機動部隊、会敵

784

飛行場強襲

790

敵機動部隊見ユ	797
攻撃隊、発艦セヨ	804
機動部隊ノ攻防	810
防空駆逐艦	816
紙一重	822
突撃隊形作レ	829
静謐ノ海、激動ノ空	836
三時間	842
反撃ノ天山	849
闇夜カラ迫ル影	856
見エザル敵機	863
夜明ケノ足音	870
環礁ノ番人	877
銀翼ト巨砲	884
頂上決戦	890
火矢ノ雨	897
巨艦ノ饗宴	904
巨砲潰エル時	910
水道攻防	916
海戦ノ決着	923
南水道ノ攻防	931
日米共闘	938
結末ト思惑	944
環礁ニ待ツモノ	950
失ツタ世界	958

本土近海防衛戦

横須賀ノ防人

激浪ノ御楯

刺シ穿ツ死棘ノ槍

弾雨ノ先二

襲撃者

993 986 979 972 965

プロローグ パラオ沖海戦

南洋の海を、鋼鉄の箱船が白波を蹴立てて進んでいく。伝説のノアの箱船もかくやというほどに巨大なそれは、その腹に金属製の猛禽をたっぷりと住まわせる、洋上の移動基地だ。高速航行のために、二六〇メートル長の全長に比してかなり細く絞られた船体の上には、怪鳥たちの巣となる二段の格納庫と、突起物のほとんどないまったくな飛行甲板が設けられている。

艦首方向から白い水蒸気の線をたなびかせ、彼女の艦は風上へと疾走していた。

“彼女”。航空母艦の艦上、艦橋脇の発着艦指揮所に立つ長い黒髪をなびかせる弓道着姿の女性は、風の来る方向へ向かって矢を番え、長大な和弓を引き絞る。

リン。

轟々と風の唸る艦上に、一瞬の静けさが訪れた。次の瞬間、
「第一次攻撃隊、発艦始めっ！」

舞い昇る鶴のように一声を上げ、張力の一杯まで張り詰めた弦を物理法則の中に解き放った。突発的な力積によって加速された矢が宙空へと躍り出ると同時に、飛行甲板上に並べられて暖機運転を終えていた艦載機隊が駆け出し、甲板の前縁を蹴って飛び上がる。重力によってわずかに沈み込んだ機体は、発動機の推進力と主翼が生み出した揚力をフルに活用して、雲量三の空へ翔けていった。

一番機に続いて、二番機三番機と次々に発艦していく。それを満足げに見送った後、彼女はくるりと踵を返して、小ぶりの艦橋内へと入っていった。

羅針艦橋は、艦体の大きさに比べてかなり手狭だった。とは言っても、彼女一人では持て余すくらいには広さがある。どこか物寂しいのも事実だ。

艦橋内を小さな人影がチョコチョコと行き来する。妖精と呼ばれる彼らは、正体はよくわからないものの、この艦の乗組員の役割を果たしていた。艦載機の操作や見張り、各種機器の整備などを行う。しかし、この艦そのものの操作を行うことは滅多にない。

では誰が、この艦を動かしているのか。それこそが、彼女がこの艦に乗り込んでいる理由に他ならなかった。

「ありがとう、妖精さん」

臨時で舵を取ってくれていた妖精に微笑むと、エツヘンと胸を張って、それから自分の持ち場へと戻っていった。それを見送って、彼女もまた所定の位置につく。深呼吸を一回。

「ブレイン・ハンドシエイク」

瞬間、彼女の頭の中に膨大な情報と記憶の奔流が流れ込んでくる。時間の流れを振り返るように、全てを繰り返すように、仮想空間の彼女の目の前を高速で通り過ぎていく。それは彼女の記憶だけじゃない。いつの日か、誰かが見たもの、感じたこと。

努力。鍛錬。邂逅。出撃。改装。困惑。決意。抜錨。甘味。成功。失敗。定食。仲間。誇り。夕飯。慢心。轟沈。

いくつもの時間が過ぎ去るのを待つ。追いかけてはならない。彼女の居場所はここであって、記憶の中にはないからだ。

やがてすべてが終わわり、目を開く。艦橋の中に光が満ちていた。

「精神同調完了。システム正常。舵もらいます」

心なし、艦の動きが変わる。機関部の鼓動が高鳴るのを感じた。

彼女は、俗に『艦娘』と呼ばれる。かの戦争で戦った艦艇たちを模した姿の、いわば幽霊船と共に現れる彼女たち艦娘は、精神同調によってその艦を自在に操り、戦うことができた。

「誰」と戦うのか。

人類共通の敵というのは、長らく宇宙の彼方から来るものと思われていた。地球上に人類の手の及ばないところはなく、生態系の頂点に君臨する自分たちが脅かされるとしたら、それは他の恒星系からやってきた別の知性体だと。

その認識は間違いだった。

「奴ら」は海から来た。「奴ら」は船だったが、決して人類が造り出したものではなかった。しかし何の皮肉か、その姿はかの戦争中の軍艦——日米、あらゆる国家に所属していた船たちがまるで一つに合わさったような姿をしていた。数年前に突如として出現した「奴ら」は、人類の船を軍民間わず片つ端から沈めていった。水底から現れ、海上に死を振りまく「奴ら」を、人類はいつの日からか『深海棲艦』と呼ぶようになった。

通常兵器の通用しない深海棲艦に対して、現在は唯一艦娘たちの操る艦艇群のみが有効な対抗手段だ。

甲板の最後尾にいた天山艦攻が発艦するのを確認した彼女は、別の人影が艦橋に入ってくるのに気がついた。カツカツと近づくと足音に、彼女はちらりと後ろを振り返った。

「あら、提督」

艦橋に足を踏み入れたのは、深い紺の軍服を着こなす、若い男性だった。彼は彼女を含めた艦娘たちの指揮を執る、提督と呼ばれていた。

「お邪魔するよ、赤城」

彼女——艦娘、赤城の名前を呼んだ秋山真好中將は、艦の操作を続ける彼女の横に立った。その首には、よく使い込まれた双眼鏡が提がっている。

「やはり司令室よりも、ここの方が落ち着くな」

「相変わらずですね」

赤城は苦笑する。深海棲艦との戦いが始まって既に三年。提督の数も増えたが、秋山はいまだに、こうして前線で部隊の指揮を執り続けていた。横須賀に所属する提督たちの長である彼は、本来ならば前線指揮を他の提督に譲って、執務室で書類とだけ戦っていればいいのだが。

「そろそろ他の方に譲ってもいいのではないですか？」

「いや、そのつもりだったんだがな。角田が打撃部隊に集中したいと言ったばかりにこうなった」

元々この攻略艦隊全体を指揮するはずだった提督——角田治美大佐は今、赤城や秋山の乗り込む航空母艦「赤城」を含む機動部隊の遙か前方で、打撃部隊の指揮を執っている。

「角田大佐らしいですね。まさに闘将といった感じで」

「まったく。まあそんなわけで、結局俺が出撃することになってしまった」

「角田大佐の暴走を抑えられるのは、提督か塚原大佐くらいしかいませんからね」

赤城は、まだ提督が秋山しかいなかった頃から艦隊に所属している。そのため秋山と二人だけの時は、彼を「提督」とだけ呼んでいた。「違う。それに、秘書艦が優秀だから。鎮守府にいてもやるこゝとがない」

「吹雪ちゃんは真面目ですから」

「むしろ吹雪が提督でいいんじゃないかな」

軽口を叩いて、二人で笑う。件の秘書艦は、今秋山の変わりに横須賀鎮守府を預かっている。

発艦した第一次攻撃隊が編隊を整えて進撃を開始したと、見張りの妖精から報告が入った。それに赤城は頷く。先程までの柔和な笑みは二人から消え、代わりに戦場へと赴く引き締まった軍人の顔があった。

「第二次攻撃隊、準備急げ」

「赤城」の甲板では、格納庫に残されていた第二次攻撃隊の機体が昇降機で引き出され、妖精の手によって並べられていく。準備の終わった機体から、暖機運転も始まっていた。

「どれくらいで出せる」

「後三十分です」

「わかった。発艦次第、針路〇九〇へ転針」

「はい」

それだけ言い残すと、秋山は再び司令室へ引き上げていった。

第二次攻撃隊が進発すると、「赤城」以下十二隻の機動部隊は東寄りに針路を取る。ほぼ同時に、敵前衛部隊と接触した「比叡」以下六

隻の打撃部隊が、これと交戦状態に入った旨、報告があつた。

後に『パラオ沖海戦』と公称される海空戦。ここから、この物語は
始まっていく――

パラオの新提督 提督、着任ス

横須賀鎮守府。

隅々までよく掃除の行き届いた木張りの廊下を、真新しい徽章をつけた若い男が歩いていく。

榊原広人少佐。『提督』の有資格者として、海軍の課す試験と各種課程を修了した彼は、本日付で正式な提督となった。着任の挨拶をするために、今は横鎮の執務室長——俗に言う提督長が詰める執務室へと向かっている。しばらくの間、カツカツと廊下を打つ足音だけが響いた。

「失礼します」

一際重厚なドアの前で立ち止まり、ノックをする。中からの返事を待って、ノブを捻った。

執務室は広かった。というよりも、重厚なドアに比して室内がかなり簡素にまとめられているために、そのような印象を受けるのだろう。飾り気のない本棚に、小さな観葉植物がある程度だ。その中で執務机に腰掛ける男に、彼は敬礼する。無帽なのでお辞儀だ。

「久しぶりだな、榊原少佐」

「お久しぶりです、秋山中将」

年齢はさほど変わらないように見えるが、三年も前から横須賀で戦い続ける目の前の男と彼では、階級も経験も雲泥の差がある。長年の悪弊を改め、戦果による昇進——場合によっては降格を認めた海軍の中で、秋山は正に若き才能と呼ぶにふさわしかった。

「やはり慣れないな、同年代の人間から階級で呼ばれるのは」

秋山は苦笑して頭を搔くと、一度咳払いしてから話し始めた。

「さて、まずは提督就任おめでとう、榊原少佐」

「はっ、ありがとうございます」

榊原は軽く会釈する。

「本題に入る前に。艦娘については、どの程度聞いている？」

「いえ、ほとんどなにも。講義では、深海棲艦に対抗し得る『艦』を操れる存在だと」

提督候補生のすべてが提督になれるわけではない。中央に配属されるものも多く、もちろん課程を修了できずに脱落するものもある。そうしたところから艦娘の機密が漏れないように、研修過程では最低限の知識以外何も詳しいことは知らされていなかった。

「その通りだ。他にはどうか？研修内容からある程度目星はついてるだろう？」

「はっ……。考えられる限りは。自分でもにわかには信じ難いですが」「まあ、最初は誰でもそう言う。けど、考えてもみる。今のこの状況こそ、全く持つて信じられないものじゃないか？少なくとも、数年前の俺は想像もしていなかったよ」

秋山が言い終わるのを見計らったように、もう一度執務室のドアがノックされた。榊原が叩いたときよりも柔らかく、軽やかな音が鳴り響いた。

「失礼します」

「お、来たか。入ってくれ」

ドアが開かれる気配を感じて、榊原もそちらを振り向く。入口には、何らかの資料を抱えた少女が立っていた。

「あ、もういらしてたんですね」

少女はそう言つて、執務室に足を踏み入れた。

歳は十代後半、高校生か大学生といったところだろうか。今時に珍しいセーラー服を着て、後ろ髪をちよこんど結んだ、どこにでもいそうな女の子だ。ただし、そのささやかな胸元には、鎮守府の職員であることを示す小さな銀のバッジがきらめいていた。

榊原に会釈をして秋山のもとに向かう少女からは、微かに染み付いた潮の香りがした。明晰な榊原の頭脳は、少女が何者であるかを理解した。

「はい、司令官。頼まれていた資料です」

少女は両手で持った数冊の本と紙束の山を、ゆつくりと執務机に置き、それを二つの山に解体する。無駄のない動きで、随分と手慣れて

いるようだった。

「ありがとう。助かった」

「いえ、お安いご用です」

少女はそう言って微笑むと、本棚に歩み寄って、観葉植物の鉢を手
に取った。

「お水だけ変えてきますね」

「わかった。なるべく早く戻ってくれ。彼女は？」

「外で待ってもらってますよ。あまり待たせ過ぎると拗ねちゃいます
からね」

それだけ言い残して、少女は執務室の隣の給湯室へ入っていった。

「——中将、彼女は・・・？」

「ん？ああ、うちの秘書艦だよ」

秋山は、二つに分けられた山のうち一つをパラパラと確認しながら
答えた。

「秘書艦・・・ということは、彼女も艦娘なのですか？」

「・・・正確には「元」だけだな」

「元・・・ですか？」

秋山の表情が、一瞬険しくなる。

「まあ、色々あったんだ。——よし、こっちが少佐の分だ」

話はここまでとばかりに、秋山は二つの山のうち一つを榊原の方へ
示した。

「うちにある資料だ。これから必要になると思う。持って行くとい
い」

「はあ・・・」

榊原は生返事をする。状況が飲めない。どこへ持って行くとい
うのか。

結局、さらに質問を重ねることはできなかった。給湯室から、観葉
植物を持った少女が戻ってくる。彼女はそれを元あったところへ置
くと、秋山の横にすっと立った。

「さて、本題に入ろうか」

机の上で軽く手を組んだ秋山は、鋭さを増した視線で榊原を見据え

る。榊原は自然と背筋を伸ばし、姿勢を整えた。研修課程の中で身に付いた、一種癖のようなものだった。

「榊原広人少佐」

「はっ」

踵を揃えて、全身に神経を行き渡らせる。

「早速ですまないが、君にはパラオに行ってもらおう」

「パラオ、ですか」

パラオの名はもちろん知っている。太平洋に浮かぶ小さな島々で、かの戦争中には激戦地ともなった。深海棲艦の出現後は孤立を恐れて政府をフィリピンに移しているはずだが、未だに現地で暮らしている人も多い。

「パラオに泊地が新設される。君の配属はそこだ」

「パラオ泊地・・・」

二ヶ月ほど前、海軍呼称『パラオ沖海戦』が生起したことは記憶に新しい。この時奪還した諸島に、海軍は早速前線基地を築いたようだ。かの戦争で旧海軍の泊地が置かれていたことからわかるように、パラオは艦隊の投錨地にうってつけだった。太平洋の制海権奪還を目指す海軍にとって特に重要な拠点であることはもちろん、当面の目標と掲げるトラック環礁の解放にあたっては、作戦展開の最前線基地となることは明白だった。それだけの価値がある泊地であり、それを理解しているからこそ、深海棲艦の海上封鎖も激しかったのだらう。

しかしながら、この配属は異例と言えた。普通新任の提督というのは、本土の三鎮守府——横須賀、呉、佐世保のいずれかに半年ほど配属され、艦娘を指揮するノウハウを実地で学ぶことになる。研修課程で叩き込まれた各艦種の特性を体に染み込ませ、以後の鎮守府、泊地、基地での艦隊運用に支障をきたさないためだ。それが唐突に最前線基地への配属と言われても、榊原にとっては正に寝耳に水といったところだ。

「すでに設営隊から、工期の八十パーセントを消化したと報告がきている。泊地としての運用に支障はない。このまま、すでに現地に駐在

している警備隊にうちから一人を加えて、艦隊を編成する」

「では、自分は……」

秋山が頷いた。

「少佐には、その艦隊の指揮を執ってもらおう」

至極簡単に言つて、秋山はファイリングされた数枚の用紙を引き出しから取り、榊原に差し出す。受け取った用紙をめくると、どうも履歴書のように、少女の顔写真と経歴——戦歴と言うべきだろうか、それらがかなり大雑把に書かれていた。おそらく詳しい経歴については軍機指定が入っていて、これ以上のことを書けないのだろう。

——アイツに頼めば、もつと詳しいのが手に入るかな。

そんなことを考えてみる。見つかったら軍法会議ものだが、そんなへまをするような友人ではない。

「私からは以上だ。何か質問は？」

「……では、ひとつ」

説明を終えた秋山に確認すると、目で続きを促してきた。

「パラオの提督長は、どなたがお務めになるんですか」

「少佐だよ」

即答した秋山に、今度こそ榊原は目を見開いた。

「本気でおっしゃっているんですか!」

「もちろんだ。まあ正確に言えば、実質的な提督長ということになるがな。当面の間パラオは、横須賀の直轄として、書類上は私が指揮を執る。ただしこの通り、そう簡単に動ける身ではないのでね。実際の指揮は少佐にお願いしたい」

「はあ……。しかし、自分には艦隊指揮の経験など……」

「その点は問題ない。泊地の艦隊には、特に優秀な艦娘を集めた。私の考えうる限り、最強の布陣だ」

秋山は殊更楽しそうに、イタズラっぽい笑みを浮かべる。その表情に、榊原は初めて秋山が自らと同じ若い青年のように見えた。

この人には敵わない、と諦めて、榊原はもう一度、背筋を真っ直ぐに伸ばした。いずれにせよ、軍人である彼は、命令に従わなくてはならない。

「わかりました。榊原少佐、パラオ泊地提督の任、慎んでお受けします」

「よろしく頼む。出立は明日だ。それまでは、横須賀を堪能してくれ」
「はっ」

身を引き締めて答える。

話はこれで終わりと判断した榊原は、執務室を後にするべく回れ右をしようとした。が、どうも続きがあつたらしい。それまで静かに秋山の横に控えていた少女が、その袖を引いて訴えた。

「もう、司令官」

「ああ、そうだった。少佐、君に会わせたい娘がいる」

少女が、秋山の頷くのを見て執務室のドアに駆け寄り、そつと開いて外と二言三言交わす。やがてその身がドアの外に消え、しばらくしてもう一人の少女の腕を引いて戻ってきた。

「お待たせしました！」

元気よく入ってきた彼女とは対照的に、もう一人の少女は強引に連れてこられたらしく、多少なりと慌てていた。

「ちよつ、吹雪引つ張らないでよ！」

「だって、曙ちゃんが恥ずかしくて入らないから」

「あたし一言もそんなこと言っていないでしょうが！」

「またまたー」

今にも食いつきそうな勢いの少女に、吹雪は笑顔のまままで答えていた。その様子に、秋山も相好を崩す。

「お前らなあ・・・」

苦笑する秋山と違って、榊原は突然執務室で始まったあまりにも日常的すぎる光景に目をしばたくしかなかった。ふと、実家に残してきた二人の妹のことが思い出される。そして同時に、初めて間近に見る“艦娘”という存在が、ごく普通の少女であることに一種の安堵と驚きを覚えた。

「うるさいーあ、あたしをあんたたちの愛の巢に巻き込むなー」

・・・なんだかトンデモナイ言葉が聞こえた気がするのだが。

「あ、曙ちゃんナニいってるの!?!」

「ふ、ふんっ。あたしは事実を言ったまでよ」

そう言った少女の顔も赤い。十二を言っているのかわからないが、どうやら耳年増というやつのようなのだ。

「へ、へえ。そーゆーこと言っていいいんだ？」

「な、なによ」

「・・・右の、上から二番目の引き出し」

「ちよつと待った、なんで吹雪が知ってんの!？」

「ふふん、それはもちろん、秘書艦ですから」

勝ち誇る吹雪に、少女が再び反論することはなかった。よつぽど重要な秘密を握られていたのか、この吹雪という艦娘、なかなか侮れない。

「ほら、その辺にしておけ」

もう苦笑を隠そうともしない秋山が、最後にはプイツとそつぽを向いてしまった少女と自らの秘書艦を呼ぶ。しぶしぶといった感じで動き出した少女は、それでもすらりと姿勢よく、吹雪より半歩ほど前に出て執務机の横に立った。

見た目は吹雪よりも幼く見える。中学生か高校生といった体つきだが、目はしっかりと勝ちな印象を抱かせた。長くしなやかな髪は、群青の輝きを帯び、顔の右側から流れている。その結び目に開く、大きな花の飾りも、こちらの目を引いた。

何度も繰り返すようだが、ここが横須賀鎮守府でなく、榊原も提督でなかったのならば、彼女を謎の敵と戦う力を持った艦娘であろうな。どと思ってもよらなかったことだろう。目の前の少女は、どこにでもいるごく普通の娘で、しかしながらただの人間にはない、独特の雰囲気をもとっているのも事実だった。

「というわけで少佐、君の初期艦を紹介しよう」

初期艦というのは、新任の提督に一連の艦隊運動を教える艦娘のことで、大抵の場合は駆逐艦が務める。そのため初期艦には、高い能力が求められた。

何が可笑しいのか、秋山は満面の笑みで少女に目配せをした。ちなみに、本当にちなみにだが、後ろに控えている吹雪もまた、微笑まし

げな視線でこちらを見つめていた。

——なんだ、一体。

ただハテナマークを浮かべるしかない榊原と違って、少女はウンザリといった様子で視線を受け流し、彼の方へさらに一歩、進み出た。息を吸い込み、榊原の目をまっすぐに見つめて、少女はこう名乗った。

「特Ⅱ型、綾波型駆逐艦八番艦の曙よ」

提督南洋航海記

本土に比べて日差しが強く反射する南洋の海面を、鋭い艦首が切り裂いていく。乾舷の低さを補うためにかけられた強いシアアの向こう側で白い水飛沫が散り、舷側を艦尾に向けてゆらゆらと漂う。前方から流れる風にかぶった軍帽を飛ばされないように押さえながら、榊原人少佐は羅針艦橋横の見張所に立っていた。

榊原の乗る艦は今、一路ファイリピンを目指していた。艦の名は、駆逐艦「曙」。艦娘である曙が操る。艦橋内に立つ彼女は、登山用のリュックサックより二回りは大きいだろうかという「艤装」と呼ばれるものを背負って操艦にあたっていた。

潮風に吹かれつつ、榊原はここに来るまでの間に読んだ、中將からの資料を思い返す。

艦娘が彼女たちの艦——BOB（青い海の戦艦）を操るとき、精神同調という技術が使われている。この技術は、人類も主に遠隔操作式人型ロボットの操縦システムとして研究していたため、理解にさほど苦労はなかった。俗にブレイン・ハンドシイクやドリフトと呼ばれるこの技術を、艦娘は艤装に籠められた「遠き日の軍艦の魂」を引き継ぐことによって可能にしていた。だから艦娘は、かつて太平洋戦争を戦った軍艦の記憶を持っている。

BOBを構成するのは、ブルーアイアンと名付けられた未知の金属だ。自己増殖するこの金属は、まるでプログラムが組み込まれているかのように、損傷したBOBの艦体をもとの形状に修復する。破孔を塞ぎ、歪みをリセットして復元し、もとの通り戦闘ができるようになるのだ。

が、この金属について、人類の技術者はなんの答えも得られず、ついに両手を上げた。ナノマシンの一種ではないか、という仮説が一番しつくり来たが、それでは細胞のように増殖する原理が説明できない。

そもそも、こんな金属がいったい地球のどこに存在していたのか。

わかっていることは、深海棲艦もまた、同じ金属で船体を構成していること、そしてBOBも深海棲艦も、使用する火器で相手の自己修復機能を奪えること。人類製の兵器が深海棲艦に通用しなかったのは、この能力を持たなかったからだ。

そして、何よりも重要なことは、人類は自らの手で艦娘、そしてBOBを造り上げることができないということだ。

もちろん、建造というシステムで艦娘とBOBの基となる船魂を召喚することは可能だった。ただしそれには、艦娘と妖精の手助けが必要だ。

だから人類は、BOBとその指揮を執る艦娘を、簡単に失うわけにはいかなかった。幸いにして、BOBは艦娘と精神同調している間は、余程のことがない限り沈むことはない。同調のレベルを高めることで、ブルーアイアンを強制的に活性化できるからだ。この能力を使えば、沈没するほどの被害を受けても、迅速な対応で最低限の復旧が可能だった。

が、問題点もある。深海棲艦によって奪われた修復能力を無理矢理活性化させるので艦娘本人の負担が大きく、復旧しても戦闘を行うことは難しい。再び戦闘を行うには、整備が必要だ。

研修課程の講義からある程度想定はしていたが、全くもって信じ難い技術だ。榊原は、自らが手についている見張り所の縁を見つめる。白手袋越しに伝わる生暖かい感覚も、軍艦色の下に秘められた金属光沢も、彼の知る鉄なんかと何ら変わらない。

———すごいな、これは。

榊原は「曙」の艦首から艦尾までを流し見る。駆逐艦独特の細く滑らかな艦体は、鉄とリノリウムによく似たブルーアイアンで覆われ、三基の一二・七センチ連装砲と、同数の六一センチ三連装魚雷発射管が軸線上に並んでいた。特II型———綾波型らしく、主砲はB型改で発射管にはシールドが取り付けられている。いつだったか、祖父の持っていた写真集で見たものと瓜二つだった。

「本当に……駆逐艦「曙」なのか」

「そうだけど・・・それがどうかした？」

榊原の眩きに答える声があつた。紺の襟をしたセーラー服に膝上でスカートを穿き、長い髪を花飾りのついた髪止めで一つにまとめた少女——曙は、羅針艦橋と見張り所を隔てる扉を開けて、榊原の隣に頬杖をつく。

「いや、少し感傷に浸っていただけだよ。気にしないでくれ。それより、操舵はいいのか？」

「オートナビゲーションよ。さすがに何日間も艤装を背負ってらんないわ」

曙の言う通り、彼女が先程まで背負っていた艤装は、羅針艦橋内に据えられたままだった。

「まあ、それもそうだよな」

納得した榊原は、もう一度海に目を遣ろうとして、自らに視線を向ける暫定秘書艦に気がついた。いわゆるジト目と言うやつでこちらを見る横顔に目をしばたく。

「・・・ジト」

ご丁寧に擬音までついてきた。何かしたか、と思いついても思い当たる節はなく、無意味に頬を掻く。

「・・・どうかしたのか？」

「・・・別に、なんでもないわよ」

ぶつきらぼうに答えた曙は、パイとそっぽを向いてしまう。この年頃の娘はよくわからない、とまるでいい歳をした父親のような感想を浮かべた榊原は、内心で苦笑しつつ、海と、そして艦の後方に目を向けた。

「曙」の後ろには、十隻ほどの船団が続いている。パラオ泊地に行くにあたって立ち寄る、フィリピンはルソン島への生活物資を乗せた輸送艦は、帰り道には南方からの資源を本土へ持ち帰ることになっていた。これを護衛するのが、「曙」を含めた四隻の駆逐艦だ。「曙」はこのままパラオへ向かうが、残りの三隻——「長月」、「黒潮」、「浦風」は復路の船団護衛も担う。

静かに洋上を航行する船団に目を細めていると、金属の扉を開く音

がした。曙は、その中に半分ほど身を入れたところでこちらを振り向き、なぜか冷めた視線で口を開いた。

「ほら。そろそろ昼御飯にするわよ、クソ提督」

「おう・・・うん？」

聞き間違いかと思つて首を傾げる榊原を急かすように見つめる曙は、至つて自然体だ。

「曙、今『クソ提督』って・・・」

「言つたけど？」

それが何？みたいな顔を向けられ、榊原の困惑は増すばかりだ。

「なんで『クソ提督』・・・俺が何かしたのか？」

「さあね。自分の胸に手を当てて考えてみたら？」

とりつく島もない。羅針艦橋の中へと姿を消した曙の背中を見つめ、軍帽を取つて頭を搔く。やはり、この年頃の娘が何をどのようか考えているのか、榊原にはよくわからなかった。

被り直した軍帽の位置を確かめ、榊原も扉に手を掛ける。一先ず、今にも鳴り出しそうな腹の虫を鎮めるために、腹ごしらえをしなくては。

消耗品や本土からの書類を積み込み終わり、出港準備の整つた『曙』の前で、榊原は積み込みを担当してくれた港湾部に敬礼を送つた。半袖半ズボンの作業着に身を包んだ彼も同様に答礼する。

「積み込み作業、感謝します」

「ご無事の航海を」

短く言葉を交わし、榊原が甲板に降り立つのと同時に、錨鎖を巻き上げる金属のこすれる音が聞こえた。アンカーが定位置に固定されると、いよいよ艦体が埠頭を離れ、微速前進を始める。先ほどまで出港準備を手伝っていたであろう、小さな妖精たちも、ひよこひよこ艦内に入つていった。

妖精は、この通りBOBの乗組員の役割を果たしている。艦娘ではカバーしきれない、艦の細かな作業を担当するのが彼らだ。

彼らは、基本的に不死身とみられている。例えば、艦載機を操る妖

精は、乗機が撃墜されてもいつの間にかもといた艦に戻っていた。曰く、彼らは船に憑く精霊の類であり、艦体が無事な限り消えることはないのだという。

それはともかくとして。彼らもやはり海の人(？)、働き者という点では、人間の海の男たちにも引けを取らない。艦娘の手となり足となり、戦闘から整備、ダメコン、さらには海難救助までを手掛ける彼らは、神話の世界に登場する小さき働き者、ドワーフさながらだ。

彼らの作業の邪魔とならぬように、駆け足でラツタルを昇りきった榊原は、手狭な羅針艦橋の中へと入っていった。いくつかの大型双眼鏡と各種計器、使いどころがあるのかは懐疑的な伝声管以外は何もない、殺風景な艦橋内には、当然のように曙が、艤装を着けて立っていた。

「両舷半速」

微速からわずかに速力を上げるよう彼女が指示すると、すぐに半鐘のような音がして、主機が出力を調整する。『曙』はルソン島を離れ、最終的な目的地であるパラオへと向かい始めていた。

腕組みをして艦橋に立つ曙は、次第に遠ざかる島の影をちらと見やって、榊原に口を開く。

「なかなか筋のいい敬礼をするのね、クソ提督」

——その呼び方は決定なんだ。

結局、原因のわからずじまいな初期艦の『クソ提督』呼びに、どこか達観の境地に至った榊原は、曙の珍しい褒め言葉に首を傾げる。

「そうか？自分ではよくわからないんだが・・・」

「クソ提督は、軍人じゃないでしょ？」

「その通りだ」

提督は、一般公募——という名の強制召集によって集まった有資格者の中から選出されるが、それは最近の話。いわゆる初期組と呼ばれる第〇期生と第一期生は、元も含めた軍人の中から選りすぐられていた。十日組(第二期生募集が七月十日からだったため)と揶揄される第二期生からは、軍人よりもそうした経験のまったくない一般人が多くなっている。

「どーもへなちよこな敬礼をするのが多いのよ、軍人じゃないと。もちろん、戦う中で精錬されていくんだけど」

「そういうもんなのか?」

「そういうもんなの。ちなみにクソ提督みたいに、最初からキビキビ動く奴には可愛げのないのが多いから」

よく覚えときなさい。何故かダメ出しをされて戸惑う。曙の顔を窺うが、彼女は波飛沫の先を静かに見つめているだけだった。

「それは、今の俺に可愛げがないってことか?」

「・・・あると思ってるの?」

「ないな」

即否定した榊原を、曙は流し目で見遣った。やがて心底可笑しそうに、初めてその表情を崩した。

「あはは、何それ? 自覚アリなの?」

可愛らしい笑い方に、ほう、と感心する。こういう顔もできるのか。というより、こっちが素なのかもしれない。

「大の大人に可愛げを求められてもなあ」

「それもそうね」

曙はそれだけを言って、また前を向いた。

「そういう曙はどうなんだ?」

「あたし?」

会話を続ける意思はあるらしい。どこかドキリとした声色で、曙は答えた。

「あたしは、別に・・・」

彼女には珍しく、曖昧で控えめな言葉だった。基本的に気が強く、思うことはズバズバ言ってきた彼女だが、こと自分のことについて話すのは、苦手なのかもしれない。自信なさげなその様子が、榊原には微笑ましい。

「結構可愛いと思うぞ」

こんなところで嘘をついても仕方がない。榊原は、至って自然に、自分の思ったことを口にしていった。

「・・・そういうことを言うから、クソ提督なのよ」

しばしの沈黙の後、不機嫌そうに、でも力の抜けた声で、曙はぼそりと呟いた。ついとそっぽを向いてしまった顔からは、最早感情を読み取ることはできなかつた。

外洋に出たところで、航行がオートナビゲーションに切り替えられる。艤装を脱いだ曙は、陽光の差し込む窓に向けて大きく伸びをした。微かに声が漏れる。

「さ、ご飯にするわよ。今回はクソ提督の番でしょ」

曙からのリクエストで、榊原も食事当番をすることになっていた。昨日までは、曙や妖精たちが作っていた。

「ああ、任せてくれ」

「ん、期待してる」

メニューを考えながら、二人一緒に艦橋を後にする。これでも、料理はできる方だ。二人の妹によくせがまれて、オムライスやビーフシチューを作っていた。

仲良く羅針艦橋から出ていく二人を、大型双眼鏡に取り付いていた妖精が微笑ましげに見送っていた。

警報ハ当テニナラナイ

警告の一報が入ったのは、二人が昼食に舌鼓を打ち、一通りお腹休めも終わったところだった。

今二人は、羅針艦橋から艦首方向を見つめている。曙は自らの艦装を装着し、すでに精神同調を完了していた。いつでも戦闘状態に移行可能だ。一方の榊原も、落ち着いた様子で、曙の横に立っている。その首からは、提督任命時に支給された新品ピカピカの双眼鏡が提がっていた。

「警戒レベルは二だったよな」

「そうよ」

海軍の制定する警戒レベルには五つの段階がある。

警戒レベル一：海上輸送路近海で深海棲艦を確認。

警戒レベル二：海上輸送路への深海棲艦の接近。

警戒レベル三：海上輸送路への深海棲艦搭載機の接近。

警戒レベル四：海上輸送路への深海棲艦の侵入。

警戒レベル五：海上輸送路における深海棲艦の襲撃。

もちろん、これは判断の一基準にすぎず、実際には哨戒部隊――

旧自衛隊の航空機を運用する基地航空隊が最終的に判断を下し、周辺を航行する船舶へ警告を発していた。

「曙」の進む海域は、フィリピンに展開する日米合同部隊の管轄だ。旧式のP-3Cが主力とはいえ、最前線の航空隊ということもあって、隊員の士気も緊張感も高い。

「こういう時は、一番近くの港に退避する、だったか」

警戒レベル二以上の際に適用される環太平洋各国の取り決めに思いついて、榊原は呟いた。BOBも船に変わりはないので、一応この取り決めが適用される。つまり、無駄な混乱を避けるために、掃討艦隊以外は当該海域から退避するのだ。

とはいえ、BOBに対しては強制力がないので、退避を選ぶ艦娘は半々だ。輸送船団を伴っていない限り、大抵は掃討艦隊への加勢を具申する。まあさらに言えば、大体は却下されるのだが。

——さて、どうするか。

榊原は、曙を見る。その表情は険しかった。

「・・・悪いけど、そんな暇はなさそうね」

いつもと明らかに様子が違う。どういうことか、そう尋ねる間はなかった。曙が五感を研ぎ澄ますようにゆっくりと目を閉じ、静かな呼吸を繰り返す。

やがて、そつと目を開く。艦橋内に、低い艤装の唸りが響いた。

「敵艦隊発見！前方、距離二三〇（二万三千メートル）！一八ノットで接近中！」

「何?！」

曙の叫びに反応して、榊原は咄嗟に、提げていた双眼鏡を覗く。だが前方の水平線に、艦影は見えなかった。と、するならば。

「電探か？」

「そ。火を入れといて正解だったわ」

後ろを振り向いた曙は、そこにいた妖精に親指を立ててみせる。電探を担当しているのだろう彼は、不敵に笑って同じポーズをした。

再び前を向いた曙は、幾分か柔らかくなった表情で毒づく。

「何が警戒レベル二よ、文句言ってやるわ」

榊原も同感であるが、あえて口にはしなかった。代わりに軍帽の位置を確かめ、居住まいを正す。

「数はいくつだ？」

「反応弱いけど、三つ」

「三隻か・・・」

曙はそれ以上何も言わない。黙考する榊原をチラと見遣っただけで、前方の水平線を見つめている。

「・・・付近に、民間船の航行予定はあったか？」

「二時間後に一つ。航路を変えている可能性が高いけど」

「・・・一番近いのはルソンの警備隊か。とすると、到着まで二、三時間」

いくつか小声で呟く。一つずつ、情報を引き出しては並べ、整理する。

答えは出た。是非もなしだ。後は――

「曙」

榊原は、自らの相棒カツコカリの名を呼ぶ。何かを期待するような目線で、彼女は答えた。

「何？」

――まさか、こんなところで始めての命令を出すことになるのかな。

人生、何がどう転ぶかわからないものだ。

「やれるな？」

断定に近い問い掛けに、曙は口角を吊り上げた。答えは決まっていたようだ。

「はっ。あたしを誰だと思ってるのよ」

それだけで十分だった。榊原はこくりと頷いて、「提督」として初めて命令を発した。

「深海棲艦の長期侵入は危険だ。ここで迎撃する」

「了解！」

曙の返答と同時に、「曙」の機関の唸りが高まる。曙は艤装との精神同調率を高め、艦――正確にはそれを構成するブルーアイアンを戦闘状態へと移行し始めた。

「ねえ、クソ提督」

前甲板の先、飛沫を振り撒く艦首を見つめる曙が、今度は逆に榊原を呼んだ。

「戦闘は曙に任せるよ」

「・・・わかったようなこと言ってくるじゃない」

「違ったか？」

「違うないけど。了解。戦闘指揮をもらおうわ」

言うや否や、曙は合戦準備を下令した。妖精たちが慌ただしく動き、それぞれの持ち場につく。大型双眼鏡に取り付いた妖精が、そのレンズを前方の海面へと向けた。

「飛ばすわよ！しっかり掴まって！」

言われた通り、榊原は艦橋のへりに掴まり、両足に力を入れて踏ん

張る。曙と同じように前方を睨み、手に力を込めた。

「第四戦速！」

次の瞬間、〃曙〃が主機を唸らせ、一気に加速した。慣性力に持つていかれそうになる体をなんとかその場に留める。速力の上昇に伴って増した抵抗が、艦首に大きな波を起こし、海面にうねりを作り出した。駆逐艦らしい快速で〃曙〃は驀進する。

やがて、水平線上に小さな影が現れた。艦橋よりも高いメインマストに設けられた見張り所からも同様の報告が来ている。

「敵艦見ゆ！」

彼我の距離、およそ二万。駆逐艦の足を持つてすれば、すぐに縮めることのできる距離だ。

こちらの接近に気づいたのだろうか、三隻の駆逐艦もまた、一斉に加速する。

正面を向いて突撃する両駆逐艦の相對速力は五〇ノットを超えた。みるみる接近する敵駆逐艦のシルエツトが、次第にはつきりとした輪郭を持ちだし、その細部も見て取れるようになる。

榊原は、秋山から渡された資料の中にあつた、深海棲艦の識別表を取り出す。首に提げた双眼鏡を使って、艦型を割り出すためだ。

「・・・はい、これ」

その動きを狙つて、曙は艤装の背部から何かを取り出すと、榊原の方へと差し出した。

「これは・・・？」

「それ、支給品でしょ？こつちのがよく見えるわよ」

曙が手に持っていたのは、艶やかな黒の双眼鏡だ。一目で、よく使いこまれているのがわかる。整備もしっかりと為されているようだ。本体の周りに、首から提げるためのベルトが巻かれている。

「吹雪がクソ提督に、つて。中将からの餞別だそうよ」

「これを、俺にか？」

曙がぶつきらぼうに首肯した。榊原は、その手をしげしげと見つめる。数秒の後、小さく頷いて、それを受け取った。

「ありがたく、使わせてもらおうよ」

手に取ったそれは、ズツシリとした存在感があった。冷たい表面が白手袋越しに触れる。

それまで提げていた双眼鏡と取り替えて、早速覗き込む。ピントはすぐに合った。手にピタリと収まったそれは、先ほどの重々しい存在感が嘘のように、腕の疲れを全く感じさせなかった。

「先頭は八級……。後ろはイ級が二隻か……」

識別表の艦型に照らし合わせる。前甲板に主砲が一基しかないのがイ級、背負い式に二基を配置したのが八級だ。背負い式の方、八級の方が艦橋が高く、どっしりとした印象を受ける。

「距離、一五〇！」

眼前の一二・七センチ連装砲が、ゆっくりと砲身を持ち上げる。その直線上には、当然のように敵艦がいた。

「一番連管用意！」

次に曙は、一番煙突のすぐ後ろにある三連装魚雷発射管を呼び出す。

「魚雷を使うのか？」

榊原は疑問を口にした。が、曙は前を向いたまま、首を横に振る。「囮に使うだけ。駆逐艦相手なら、砲撃の方が早いから」

「囮」の魚雷発射管に装填されているのは、日本海軍必殺の九三式酸素魚雷ではない。わずかに性能で劣る、九〇式通常魚雷だ。これは、燃烧剤に圧縮空気を使っているので、酸素魚雷ほど射程が長くない。航跡もくつきりと見える。

実は、海軍——というより、妖精たちで構成された海軍工廠部は、三連装発射管の酸素魚雷対応版を開発できていなかった。そのため、睦月型、特型、初春型については、未だに九〇式を使用している。酸素魚雷対応版の配備は、もう少し先になりそうとのことだ。

彼我の距離が一万を切った辺りで、「囮」が面舵を切り、同時に左舷前方に向けて一番連管三本の魚雷を放つ。海中に突っ込んだ魚雷が正常に作動しているのを確認した。

「……着いてきたわね」

「囮」の動きを見た三隻の敵艦も舵を切る。それを確認した曙は、

意味ありげにほくそ笑んだ。

転舵によつて、お互いが反航から同航に移った。上空から見れば、ハの字に見えるだろうか。それまでと違い、じりじりと距離が縮まつていく。

「左砲戦！」

距離八千、ついに“曙”の主砲が戦闘の火蓋を切った。

「てーっ！」

大音声、一拍置いて、前甲板二門、後甲板四門の主砲口に閃光が走る。腹の底に響く砲声が、全力で唸る機関音をかき消して、大気を震わせた。

——駆逐艦とはいえ、すごいものだな。

したたかに鼓膜を打った音を聞き届け、榊原は双眼鏡を覗き込む。数秒後、敵一番艦の周囲に、六本の水柱が立ち上った。

「ほう……」

榊原は感嘆の声を上げる。水柱は二本が敵艦の手前に、四本が向こう側に出現した。夾叉と呼ばれるこの状態では、次に命中弾が出る確率が極めて高い。

本来夾叉は、二、三度の射撃による誤差修正を経て、初めて得られるものだ。まして、大型艦に比べて観測機器の貧弱な駆逐艦が、距離八千から初弾夾叉を得るなど、並大抵の練度では不可能だ。

——秋山中将が、曙を選んできた理由がわかる気がする。

これほど優秀な駆逐艦だ。初期艦に選ばれない方がおかしい。特に、自分のように経験もなく、艦隊指揮を任された者には。

「てーっ！」

曙は、すでに四度目の斉射を放っていた。敵一番艦には命中弾による火災炎が生じており、速力も落ちている。そこへ、さらに二発が命中して、爆風と破片を振りまく。千切れた構造物の一部が宙を舞った。

敵弾も飛んでくる。一二・七センチ砲とほぼ同等の威力を持つ五インチ砲弾がバラバラと落ちてきて、水柱を作り出した。しかし、その精度は“曙”の砲撃と比べるべくもない。全てが明後日の方向に弾

着して、虚しく炸裂するばかりだ。

“曙”の第五斉射が落下する。瞬間、一番艦の中央部に、弾着とは明らかに異なる光が迸った。

水柱が収まるのを待たずに、特大の火柱が噴き上がった。敵一番艦のほぼ中央で生じた光球は、瞬く間に拡大して艦体を包み込み、衝撃で押し潰す。本来BOBに向けられるはずだった魚雷は、運悪く命中した一二・七センチ砲弾によって一時に誘爆を起こし、駆逐艦の竜骨をいとも簡単にへし折って艦体を真っ二つにした。

轟沈だ。

「目標を二番艦へ変更！」

一番艦を無力化したと判断した曙が、その砲口を二番艦へと指向する。同時にほんのわずかに舵を切って、敵弾の予想落下点を回避した。測敵がやり直され、距離七千まで接近した敵二番艦へ砲弾を命中させるための諸元を導く。

「てーっ！」

十数秒後、諸元の入力された“曙”の主砲が、再び砲炎を吐き出した。

駆逐艦ノ本懐

小口径砲ゆえの短い斉射は、まるで太鼓が打ち鳴らされているような、小気味いいリズムを刻んでいた。曙の艦橋左舷側に見える敵艦の様子を確認して、榊原は再び感嘆の声を漏らす。

今度も曙は、三度目の射撃で命中弾を出していた。前甲板に火焰が踊り、それまで盛んに撃ち続けていた五インチ単装砲が沈黙した。よく見れば、砲座が黒煙を噴くスクラップと化していることがわかる。「まだまだっ！」

曙が叫ぶ。それに呼応して、二番艦に対して四度目の斉射が放たれた。ほとんど平射の砲身から一斉に褐色の炎が沸き起こり、高初速の一二・七センチ砲弾が敵艦へ向けて飛翔する。

曙が、今一度斉射を放とうとした時だ。二隻の敵艦の動きが、にわかには慌ただしくなった。突然面舵を切ると、こちらへ向けて突撃を始めたのだ。

「なんだ・・・一体・・・？」

榊原は、敵艦のおかしな動きに、首を傾げた。曙を窺うと、してやったりといった表情で敵艦を見ていた。榊原はその理由を確かめようと、双眼鏡を覗き込んだ。

「なるほど、そういうことか・・・！」

榊原は、曙が魚雷を囷だといった理由を理解した。

九〇式は、くつきりとその航跡が見える。ましてや、今は日中だ。敵艦には、自らに迫りくる魚雷の白い航跡が、はつきりと見えたことだろう。

接近する三本の魚雷に気づいた敵艦は、相対面積を最小にしようと、魚雷の来た方向——つまり「曙」の方へと舵を切るしかなかったのだ。それはつまり、魚雷が通過するまでの間、まっすぐ進み続けるしかないことを意味していた。「曙」は、敵の進行方向へと射弾を送り込むだけでいい。

「逃がしはしないわ！」

相対位置が変わったことで、諸元の計算自体はやり直さなければな

らなくなった。しかし、敵艦との距離はみるみる縮まっており、結果として射撃精度は向上する。ニヤリと口角を吊り上げた曙の表情に、榊原は身震いに近いものを感じた。

「測敵完了、てーっ！」

諸元入力、即砲撃再開。放たれた砲弾は、狙い変わらず、敵二番艦に直撃する。対する深海棲艦は、抵抗する手段が三番艦の前甲板一門のみとなっていた。二番艦の一番砲は潰したし、それ以外の砲は射角が取れないのだ。

「当たらないわよー！」

虚しく立ち上る水柱に見向きもせず、連続斉射を放ち続ける。その度に、二番艦に命中弾が生じ、甲板を焼く。前甲板を火がのたうち、その煙で艦橋が見えなくなっていた。

魚雷が通過——もとい、射程一杯まで航走したおかげで力尽きた頃には、敵二番艦の前甲板は火の海となっていた。水線下にも被弾したのか、ガクリと速度を落として、艦首をずぶずぶと沈めだす。直角的な艦首が白波を生じることではなく、今は艦内から逃げてきた水泡の吹き溜まりとなっていた。

「・・・後、一隻」

敵三番艦は、それでも果敢に挑みかかってきた。失速した二番艦を追い抜くと、全速力で突撃しつつ、五インチ砲を乱射する。まぐれとはいえ、そのうちの一发が至近弾となった。

「やる気なの？いいわ、相手になってあげる」

眩くような、うっそりとした言葉。暗黒微笑という表現が似合うだろうか。あるいは、獲物を見つけた狩人の目か。相手に敬意を払いつつ、全力で——叩き潰す。

「取舵、両舷一杯！」

「曙」の機関が、この日で一番大きな轟音を響かせた。唸りの調が変わり、主機に回されるエネルギーが最大となって、二千トン弱の艦体を前へと強く押しやった。彼我の相対速度は六〇ノットを超えている。

敵艦も「曙」も、前方に指向可能な砲を振り立てて撃ちまくる。一

二・七センチ砲弾と五インチ砲弾が波の上で交差し、それぞれが目標とする相手の周囲に水柱を上げた。『曙』の砲弾が艦橋基部を炙れば、敵弾がカタターを粉々に撃ち砕く。激しい応酬が続いた。

「二、三番砲塔は左舷へー」

射角の関係で今は撃てない後部の二砲塔が、曙の指示で旋回し、左舷方向へと砲口を向ける。このまま全速力で接近し、すれ違いざまに連続砲撃を見舞うつもりだ。

みるみると接近してくる敵艦の細部は、もはや双眼鏡などなくともはつきりと見て取れる。

やがて『曙』と敵艦の距離が、これ以上ないほどに接近した。お互いの左舷を通過していく敵艦へ向けて、装備した全砲門が咆哮し、衝撃で艦が左右に揺れる。ありったけの砲弾を撃ち込んだ両艦がすれ違ったのは、ほんの一瞬のことだった。

一航過が終わった時、無事な姿で海上にあつたのは『曙』だけだった。艦体各所にまんべんなく被弾した三番艦は、破孔から黒煙を噴き上げ、行き足を止めている。主砲は全てが爆砕され、被害のひどい左舷側に傾いていた。聞こえる軋みは、その断末魔だろうか。

「・・・トドメよ」

速力を落とし、反転した『曙』は、満身創痍の敵艦を主砲で介錯する。被弾と浸水の拡大した三番艦がひっくり返ると、その目標を二番艦へ変更し、再び発砲した。やがてその二番艦も、ゆっくりと艦尾を持ち上げ、波間へと没していく。

「全艦の撃沈を確認」

「了解」

圧壊音と共に沈みゆく敵艦を見送った榊原は、短く答えると、敵艦を飲み込んだ渦から目を離れた。そこには、どこか誇らしげに立っている曙がいる。

「すごいじゃないか」

「・・・ふんっ、何よ。もっと感謝したら？このクソ提督」

厳しいお言葉が返ってきた。彼女らしいと言えらしいのだろう、榊原は苦笑を浮かべた。それから、自分の肩ほどしかない低い頭に、

そつと手を伸ばす。ポンポン、と二回叩いた。

「よくやってくれた。ありがとう」

柔らかな髪を撫でる。よく手入れされた、滑らかな手触りだった。
「・・・あ、あつそ。なら、いいけど」

曙もまんざらではなさそうだったが、ハッと何かに気づくと、顔を赤くして榊原を睨んだ。

「頭撫でないでよ、このクソ提督！」

「す、すまん。つい、癖で」

榊原はパツと手を離した。

不機嫌そうに顔を赤くした曙は、予定されていた航路に「曙」を戻すと、オートナビゲーションを再設定して、艀装を取り去った。軽やかに抜け出た彼女は、艦橋を出る直前で立ち止まり、いまだに赤い頬で早口にまくし立てた。

「シャワー浴びてくる。航海日誌は書いておくから、後でサインして」

航海日誌の記入は、船乗り——ひいては、艦娘の義務だ。さらに、戦闘があつた場合はこれも記入し、提督が確認してサインをする。

「わかった」

「よろしく」

それだけ言い残すと、曙は艦橋を出ていった。ラツタルを駆け下りる音が聞こえてくる。

その背中を見送った榊原は、通信機器を立ち上げると、先の戦闘についてルソンに一報を入れた。

報告書、その他諸々が終わった時には、陽は随分と傾いていた。というのも、ルソンに一報を入れ、曙の航海日誌に目を通した後、真水がもつたいないとの理由で、そのままシャワーを浴びたからだった。それから、夕飯の下準備まで終わらせている。

夕焼けのオレンジに染まる艦橋に上がると、見張り所からウエーキの先を見つめる曙がいた。流れる風に結んだ髪が揺れ、水平線と接しよるかという太陽に照らされて、水面のようにキラキラと輝いている。静かにたたずんでいる姿は、絵画的な美しさを放っており、まさ

しく絵に描いたような美少女そのものだった。

榊原は、たそがれる曙の邪魔にならないよう、静かにその横に立った。曙はチラとこちらを見遣ったが、すぐにまた、波間へと視線を戻した。

お互い、特に何か話すわけでもなく、しばらくはただ静かに、二人で同じ方を向いていた。

———なんだか、いい匂いがする。

風呂を上がったすぐというわけでもないのに、曙からは甘酸っぱい女の子の匂いがした。潮風に混じって鼻孔をくすぐる程度の、ほのかな薫りだ。艦内唯一のシャワー室には、支給品のシャンプーしかなかったはずなのに、こうも違うものか。

艦上には、休むことなく風が吹いている。巡航速度のため、その風もそこまで強くはなく、夕陽ときらめく水面に合わせたように、*“*曙*”*を優しく包み込んでいた。

それまで黙っていた曙が、先に口を開いた。ポツポツと呟くように話します。

「・・・あいつらも、さ。船なんだよね」

見張り所のへりに体を預け、そっと目を閉じる。きれいなまつ毛が強調された横顔を、榊原はそっと窺った。

「さっきの・・・深海棲艦のことか？」

「そう」

再び開かれた目は、遠くを見つめて、澄んだ輝きを宿していた。光の粒が反射されて、よりいっそうきらめきが増す。榊原もそれに倣い、境界線のはつきりしない波頭を目で追っていた。橙色の海面が、やけに神々しく映る。

「船、だな。確かに」

当たり前の事実にも、今さら思い至った自分がいた。こうして海に出て、実際に*“*曙*”*が戦うところを見るまで、ただ漠然と、深海棲艦は敵であるとしか認識していなかった。今だって、その認識は変わらない。が、先に戦闘が起きた際、こちらに敵意を向けてきたのは、紛れもなく船だった。

「なんていうか・・・同じ船としてなんだけど」

躊躇うような間があった。ほんの数秒の時間にも、柔らかな風は流れていく。

「たとえ敵だとしても、せめて沈んだ後ぐらい・・・祈ってあげてもいいと思う」

それだけ言うと、曙は頬杖をついて、もと来た方向——三隻の駆逐艦が沈んだ方を眺める。

「・・・それも、そうだな」

榊原も彼女に倣う。傾いた太陽がようやく水平線に達して、ゆつくりとそこにくつつき始める。夕陽にたそがれる二人の影が伸びて、艦橋の壁にそっと寄り添った。

太陽がその姿を水平線に消し、海面を照らす役割を月と星に交代するまで、静かな祈りの時は続いた。

「そういえば」

なぜか前甲板に夕食を広げている榊原と曙は、ランプの照らし出すアルミ製の机に腰掛けていた。すでに星たちが支配する海面を進む「曙」の艦上は、ささやかなパーティー会場となっており、二人以外にも妖精たちが、いたる所で夕食を頬張っている。

その席上、夕食に手を付けだした辺りで、榊原がぼつりと呟いたのだ。

「・・・何？」

たつぷりドレッシングのかかったサラダを咀嚼した曙が、怪訝な顔でこちらを見る。それを確認して、榊原は咳払いを一つ、それから話を始めた。

「まだ、ちゃんと挨拶をしてなかったと思ってな」

「・・・はあ」

曙の表情が益々怪訝になるのがわかった。

「挨拶って・・・どういうこと？」

「よろしく、ってことだ」

一瞬固まった曙は、それから堪えかねたようにプツと吹き出した。

「なにそれ、今更じゃない？」

「今更だな」

「あはは、ほんつと、クソ提督可愛げない」

遠慮なく笑った曙に、榊原は頬を搔く。

「俺はまだまだ未熟だ。だから、曙の助けを借りたい。曙の知ってることを、教えてほしい」

「・・・あたしが助けるような状態にならないことが理想だけど？」

「言ってくれるなあ」

苦笑を浮かべて、さらに続けた。

「これから、よろしく頼む」

「・・・」

曙は手を止め、じつと榊原を見つめる。その双眸を、榊原もしつかりと見つめ返した。しばらくの沈黙の後、曙がふつと表情を和らげた。

「たく、やれやれしようがないわね」

それからスツと手を差し出した。

「こちらこそ、よろしく。クソ提督」

今までで一番優しげな「クソ提督」に、榊原も頬を綻ばせる。そして差し出された手を、しっかりと握り返した。曙の手は、榊原のそれよりもずつと小さく、それでも暖かで、確かな意志と決意を秘めていた。

更けていく南洋の海に、妖精たちの微笑みが広がっていた。

パラオ到着

朝陽——と言うには、いささか遅いかもしれない。海面と天頂の真ん中に位置する太陽の下、眩しい波間の向こうに、島の輪郭が見えてきた。朝食後に確認した海図を頭の中に描き、榊原は目の前のそれが目的の島であるかどうかを見極めようとした。

「あれが、パラオか・・・」

大小二百もの島々で構成される地域と、そこにある国家を指し示す単語を呟く。修正は、横からすぐに入った。

「正確には、バベルダオブ島ね」

榊原の横に立つ曙は、腕組みをしてパラオ——バベルダオブ島を見つめている。現在はオートナビゲーションを起動しており、その背に艀装は装着されていない。彼女は暗唱するようにして、島の名前を挙げた。

「デカいのがバベルダオブ島、その横がコロール、マラカル」

「バベルダオブ島に首都があるんだったか」

「形式だけでしょ」

現在、パラオの行政は、外界との遮断を嫌って臨時にフィリピンへ移されている。それに伴い、国民の二割程度もフィリピンに移住していた。それでも、まだ八割近い現地人が、およそ十島に分かれて暮らしていた。

「あたしたちの目的地は、コロール島よ」

「・・・あれか」

目の前の大きな島の横に、まだうっすらと稜線が見える程度の島を見つけて指差す。旧首都のコロールを含む小さな島に、榊原たちが着任する泊地の港湾施設は設けられていた。

「・・・さて、そろそろ艀装着けるわ」

「ああ。よろしく」

「はいはい」

入港に際しては、細かな操作が必要とされる。そのためには、曙がBOBと精神同調をしたうえで、自ら舵を取る必要があった。

艦橋中央に吊り下げられた艦装をテキパキと装着する。駆逐艦の艦装は、着脱が簡単にできることが売りだそうだ。一分もせずに着が終わり、深呼吸を一つ。曙の瞼が閉じられ、深い息が吐き出された。沈黙。

榊原には、今曙に起こっていることを知る由はない。精神同調がどういう仕組みで、彼女が駆逐艦「曙」の記憶を通してBOBと繋がることは知っていても、その時彼女の中に流れ出るものを、察することなどできなかった。

やがて曙が目を開く。艦装の低い唸りが艦橋内に木霊し、心持ち機関の音も異なる。

「精神同調完了」

「了解」

艦装を身に着けた曙は、やはり普段と変わりない。その鋭い目線は、目の前の海と島を見つめている。

「・・・あれ？」

と、彼女に珍しい間の抜けた声に、榊原は反応する。振り返ると、曙が額に指を押し当て、何やら思案顔で首を傾げた。

「電探に感・・・？」

「電探？」

榊原が尋ね返す。曙にしてはつきりとしなない口ぶりが、ついつい気になる。

「お迎えみたいね」

「お迎え？」

怪訝な顔になるのがわかった。まだお迎えが来るには早い年齢だと思うが。

曙は構わずに続けた。

「距離二〇〇（二万メートル）」

察するに、天からではなく、水平線の向こうからのお迎えであったようだ。二万ならば、そろそろ有視界範囲に入るはずだ。榊原も曙も、水平線の辺りを凝視する。ほどなくして、細長い槍のようなマスケットが見えだした。次第にはつきりするそのデイトールに、二人分の

視線が注がれる。

正面からもわかる、細身の艦体。その上に載った、箱型の艦上構造物。丈高いメインマスト。何より目を引いたのは、艦体に施された、特異な迷彩柄だった。白と黒のコントラストが明瞭な、ホワイトタイガーを思わせる色合いだ。

「あれは・・・北方迷彩じゃないか？」

双眼鏡を覗き込んで確認した榊原が、疑問符付きで呟く。曙も同意して、そこへさらに、見張り妖精からの情報を付け足した。

「球磨型みたいね」

「とすると・・・」

秋山から託されたパラオ泊地所属艦娘の履歴書を脳内でめぐり、榊原は一人の艦娘の姿を思い描いた。セーラー服に短く無造作な髪、何より特徴的な右目の眼帯。元は幌筵にいたというから、北方迷彩はその時のものだろうか。

榊原がその名前を口にしようとした時、丁度前方の艦から通信が入り、接続されたスピーカーから声を響かせた。

『こちらは、日本海軍パラオ警備隊所属、軽巡洋艦“木曾”だ。貴艦の所属と、航行目的を知らされたい』

キビキビと事務的で凜々しく、しかしその端々に女性らしい温かみのある声音だった。通信内容を了解した榊原は、その声に応えるべく、曙の差し出したマイクを受け取り、スイッチを入れた。

「こちらは、日本海軍所属、駆逐艦“曙”。俺は、新しくパラオ泊地提督に任じられた者だ」

『あー、噂の新任提督か』

返ってきたのは、打って変わって気さくな言葉だった。

『ようこそパラオへ。さつきも言った通り、俺は軽巡洋艦の木曾だ。以後、よろしく頼むぜ』

「こちらこそ、よろしく。俺は榊原広人だ」

マイク越しであるが、お互いに名乗る。フツという微かに笑う声が聞こえて、木曾はさらに言葉を続けた。

『積もる話は、また後だ。これより、貴艦をコロールへ誘導する。着い

て来てくれ』

通信はそこで切れる。件の軽巡洋艦は、そのままこちらへ向かてきていた。こちらを、泊地へと誘導してくれるらしい。

「意外と世話焼き・・・？」

見たところ、哨戒中だったということとはなさそうだ。先ほどの通信も、どこことなく歓迎的で、好感を抱くには十分すぎる。もしかしたら、入港する「曙」を、わざわざ出迎えに来たのかもしれない。

「よく知らないけど、軽巡には世話好きが多いんだって」

解説を入れてくれた曙は、変わらずに艦橋の外を眺め、艦の動きをコントロールしている。その横顔が、どこか面白くなさそうに見えたものの、次の瞬間にはわからなくなった。

やがて、「木曾」との距離が、数百メートルに近づく。と、鋭くターンをした「木曾」は、こちらを先導するように、その艦首をコロール島——パラオ泊地へと向けた。艦尾付近で爆雷等の対潜装備をチェックしていたらしい妖精たちが、「着いてこい」と言わんばかりに大きく手を振っていた。

「木曾」に従い、その後ろに着いた「曙」も、コロールへの入港を目指す。二人が目指した泊地は、もう目の前だ。

「結構整ってるわね」

近づいてきた港湾施設を見て、曙が感想を漏らした。工期八十パーセントと言っていたから、その外見は見るからに新しい。元々あったものもいくらか引き継いでいるのだろうが、やはり「ペンキの匂いも香しい」という表現がぴったりだった。

「ひい、ふう、み・・・。浮きドックは四つか」

浮きドックは、本土から離れた泊地には必須と言っているいい装備だ。ブロック式に切り分けられた機材を輸送船で運び、現地で組み立てる。すると、マンモス級タンカー一隻が余裕で入る、巨大な浮きドックが出来上がる。パラオには、それが四つあった。泊地としては多い数だ。トラック攻略戦前線基地としての用意であることは、想像に難くなかった。

自己修復能力を持つBOBにドックが必要なのかというと、答えはイエスだ。深海棲艦との戦いで傷ついた部分を修復するには、ドックに入ったうえで、妖精の力を借りて自己修復能力を回復しなければならない。

「工廠はまだ工事中ね」

「そうか。当分、開発なんかは無理だな」

「無理ね。いくらか装備は回してもらってると思うから、当分はそれで遣り繰りしないと」

「最低限、ソナーは数を揃えておきたかったんだが」

榊原は残念そうに言った。こればかりは仕方ない。装備の開発は、妖精で構成された工廠部と施設あつてのものだ。

『曙』は、一番右の埠頭に着けてくれ』

「ちよつと掠ったから、入渠したいんだけど」

『あー……。わかった、ドックは開けさせるから、今は取り敢えずそっちに頼む』

「りよーかい」

木曾の指示に頷いて、『曙』が舵を切る。逆に『木曾』は、左に舵を切った。

六つある埠頭には、すでに二隻のBOBが停泊していた。一隻は、『曙』と同じ、見るからに軽快そうな駆逐艦だ。砲塔や魚雷発射管の配置から、おそらく甲型駆逐艦と思われる。日本海軍の主力駆逐艦だ。もう一隻は、かなりがっしりとした艦上構造物を持つ重巡洋艦だ。『木曾』よりも二回りは大きい。前後に二基ずつ、連装砲塔が配置されており、特徴的な艦橋は、どこことなく旧自衛隊のイージス艦を想起させた。

榊原が泊地を見渡している間に、『曙』はすでに埠頭への接岸準備を終えていた。微速前進で進んでいた艦体から、ついに推進力が切られると、港湾部のタグボートが接近し、『曙』を押しやる。前甲板上でも妖精が慌ただしく行き来し、埠頭へ舳を投げる用意をしていた。数人がかりで舳を持ち、埠頭側の妖精と息を合わせている。

やがて、柔らかな衝撃が横方向に襲った。艦橋がわずかに揺れた

が、艦体と埠頭の間に入った緩衝材が、自らを変形させることでこれを和らげ、上手く接岸する。すぐに舳が投げられ、埠頭とがっしり繋がれた。

「接岸完了」

甲板の妖精が大きく丸を作ったのを確認して、曙が宣言する。榊原もそれに頷き、曙が精神同調を解除して艤装を外すのを待った。

「・・・わざわざ待つてなくてもいいのに」

「いや、ちよつと・・・下らない事を考えただけだ」

「は？」

「折角だから、第一歩は曙と一緒に、と思つてな」

「なっ・・・!」

艤装を解除した曙は、パラオの気候に当てられたのか、顔を赤くして絶句している。わずかな間の後、早口でまくし立てた。

「ほっ、ほんと下らない!」

それから急かすように、榊原の背中を押して行く。よくわからない彼女の様子に困惑しながらも、榊原は先に立ち、艦橋を出てラツタルを下った。

潮の香りがする。ただそれは、本土とはまた違った香りだ。鼻孔をくすぐる匂いと風を感じて、榊原と曙は埠頭に降り立った。そこにいた妖精たちが、歓迎するように手を叩いた。

「おーい、こつちだこつち」

手を振る人影は、すぐに見つかった。二人は頷いて、この泊地まで案内してくれた軽巡洋艦の艦娘の元へと向かう。隻眼の彼女が、勇ましい笑みで迎えてくれた。

「ようこそパラオ泊地へ。改めて、俺は木曾だ」

男っぽい喋り方が板についていて、容姿と共に、まるで海賊船の船長だ。口元を吊り上げて自己紹介した彼女に、榊原も答える。

「パラオ泊地提督の任を受けた、榊原広人だ。以後、よろしく頼む」

それからチラリと、隣を見遣った。促されるまでもなく、曙も名乗る。

「曙よ」

「おうおう、お前がうちの六人目か」

ニヤリと笑った木曾が、曙の首に手を回して頭をくしゃくしゃと撫でる。

「な、ちよっ、やめてっ！」

「はっはっ、よろしくな。これで、うちも晴れて『艦隊』だ」

——正しく、キャプテン・キツソだな。

そんな感想を抱いた榊原であったが、このあだ名が実際に使われていることを知るのは、もう少し後のことだ。

ひとしきり曙を撫でくり回すと、ようやく離れた木曾は、先に立つて歩きます。

「二人、哨戒中でいないが、面子を紹介しようか。着いてきてくれ」

乱れた髪を整える曙は、その背中を軽く睨んで、榊原にだけ聞こえるよう、呟いた。

「前言撤回。軽巡は駆逐艦で遊びたいだけ」

「間違いないな」

わざとらしく首肯して、榊原も歩きます。向かうのは、どうやら目の前の建物——泊地の庁舎らしかった。澄んだ青空と同じくらい綺麗な白で、できたてホヤホヤらしい、ペンキ独特の臭いがした。

庇のついた庁舎の入り口、そのドアに手をかけた木曾が、目で「中だ」と示す。それに付いて、中に入ろうとした榊原は、ふと足を止めている曙に気がついた。

彼女は、瞳の大きな目を細め、庇の柱に掛けられている、真新しい板に書かれた『パラオ泊地』の文字を見ていた。その板をなぞり、感慨深げに柱に手をつく。

「あ、そうだ」

一度は中に入った木曾が戻ってきたのは、そんな時だった。

「その辺、ペンキ塗ってただから、気を付けろ・・・よ」

木曾の注意は、遅きに失した。

固まった曙が、壊れかけのロボットか何かのように、ゆっくりとその右手を柱から離れた。が、すでに遅く、その手には白いペンキがベツトリと着いていた。

曙の顔が引きつり、肩がプルプル震える。

襲ってきた笑いの波に、榊原は何とか耐えた。丹田の辺りに意識を集め、腹筋が震えるのを抑える。だが、

「……くっ、だ、ダメだっ、ククッ、堪えられねえ」

先に崩壊した木曾の爆笑が、榊原の腹筋もまた誘爆させた。

腹を抱えて笑い転げる二人に対して、

「……注意すんのが一拍遅いのよっ!!」

曙は涙目で、烈火のごとく抗議するのだった。

結成、パラオ泊地艦隊！

太平洋に浮かぶ小島。そこに建てられたこの施設の廊下からは、真昼の太陽が港湾施設を照らすさまが、よく見えた。一年のうちで気温変化がほとんどなく、温かいこの島では、燦々と降り注ぐ太陽の下でも、特に冷房をつける必要性は感じられなかった。証拠に、冷房等が利いていないこの廊下も、特に暑さは感じなかった。

曙の手に着いたペンキを落としていた結果、十分ほど遅れての庁舎入りとなった。木曾曰く、庁舎の外観は立派にできているが、中身にはまだまだ手を入れているところも多く、散らかっている場所もあるとのことだ。確かに、廊下の奥の方、工場へと通じているであろう通路からは、工事業者の出す工具の甲高い音が聞こえてきた。

「そーいや、お前」

前を歩く木曾が、榊原を振り返って尋ねた。

「艦隊に昇格したわけだし、秘書艦を置くんだろ。誰にするんだ？」

艦隊に必ず置かれる秘書艦は、提督と共に作戦等を立案、遂行する役目を負う。二重チェックの意味と、作戦に艦娘側の意見も反映させるためだ。

秘書艦には、これといつて制限はない。よって、鎮守府や基地ごとの特色がよく現れる。横須賀のように、一人で固定するところもあるが、作戦ごと、さらには曜日ごとに変えるところもあった。

「秘書艦か。まだ考えていなかったな」

「早めに決めた方がいいぞ。当分は、初期の山のような書類が待っている」

「・・・心得ておこう」

そんな他愛もない会話の間も、曙は終始黙っていた。先ほど、二人して大笑いしたのを未だに根に持っているらしい。腕組みをして、いかにも不機嫌そうな顔で着いて来ている。

「さて、と。ハンナだ」

木曾に案内されたのは、手書きで『警備執務室』と書かれた部屋の前だ。奇妙な名前の部屋だ。ドアの横には、辛うじて整理されている

ことがわかる段ボールが積み重ねられており、開いたままの一番上のものを覗くと、書類やら本やら訳のわからない小物やら雲やらペンギンやらが入っていた。

中からは人の気配がする。そのドアを、木曾は遠慮なく叩いて次の瞬間には開けた。そのまま中に通される。

「だから、返事してから開けるよ。——って、なんだ、提督着いたのか」

部屋の中央、首を振る扇風機の前に置かれた机で書類を覗き込んでいた少女が言った。そしてもう一人、ソファに腰掛ける少女は、扇風機の風が当たらないのか、団扇で自分を扇いでいる。

「いや、予定時刻だから迎えに行くって言っただろ・・・陽炎？」

木曾が半目でソファを見遣る。そこに腰掛けた少女が、何かを思い出したように拍手を打った。

「あ、そういうえば、そんなこと言ってたっけ」

「おい」

テヘツと可愛らしく舌を出す少女——陽炎に、机に腰掛ける少女が嘆息した。

「たくよー。忘れんなよ。——よっこいせ、っと」

少女は立ち上がり、こちらの前に立った。

肩口で揃えられたショートカット。勝気な目元に、挑戦的な表情。セーラー服のようなデザインの服は体にピッタリと密着しており、彼女のプロポーションを引き立てる。年の頃は二十歳前後といったところか、いかにも健康的な、運動系の少女だ。

彼女はまっすぐにこちらを見据え、悪戯っぽい笑顔で名乗った。

「あたしは、パラオ警備隊旗艦の摩耶様だ。よろしくな、提督」

その声音も勇ましい。軽やかな親しみやすさを感じさせる口調だ。

「新しく、パラオ泊地を任された、榊原広人だ。君が——摩耶が、警備隊の指揮を？」

「おう。つつても、やれることは限られてっから、哨戒と報告書ぐらゐしかやってねえけどな。後で、溜まった書類の確認も頼むわ」

そう言っつて摩耶は、机の横に置かれた段ボールを指差した。半分ほ

どの高さまで書類が積まれており、仕切りを隔てて「済」と「未済」に分かれている。

「でもって、そっちが・・・?」

摩耶は榊原の後ろを覗き込み、そこに立つ駆逐艦娘に尋ねた。

「・・・曙。よろしく」

明らかに不機嫌な様子で、曙が答える。

「おう・・・よろしく。なんで不機嫌なんだ?」

「やめろ摩耶、思い出して笑いそうだから、イッテエ!」

クツクツと思い出し笑いを滲ませた木曾の膝裏に、曙の無言のツツコミが決まった。予告なしのクリティカルヒットに、木曾が被弾箇所をさする。摩耶の溜息はより一層深くなった。

「お前、まーたなんかやったのか」

「いやいや、濡れ衣だつて」

なあ。木曾は榊原に同意を求めたが、背後から伝わる黒いオーラを感じ取った彼は、

「まあ、木曾のせいと言えなくはないな」

内心謝りつつ、自らの本能に従ったのだった。まあ実際、曙の機嫌が急降下中なのは、木曾が堪えきれずに吹き出したためでもあるのだから、あながち間違いとは言えない。

「お前、俺を身代りにしたな!」

木曾の方も、笑い半分で驚いてみせた。

「ま、それはとりあえず置いとくか。そっちは陽炎な」

「なんか、あたしの紹介おざなりじゃない?」

「んじや、ちゃんと自分で挨拶しろよな」

「はーい」

陽炎と呼ばれた少女は、勢いをつけてソファから起き上がり、タツタツと摩耶の横に立った。高い位置で二つに結ばれた、朝焼けを思わせるオレンジの髪が元氣よく跳ねる。

「陽炎よ。よろしくね、司令」

「ああ、よろしく」

極めて自然に出された手を、榊原もしっかりと握り返す。太陽のよ

うな笑みが返ってきた。

「とまあ、これで一通り挨拶は終わりだな。満潮と霞は、哨戒が終わってからだから・・・昼飯の時かな。ちゃんとした挨拶は、そんなときに頼むわ」

摩耶はそう言つて、もう一度机へと戻った。それから、引き出しから書類をいくらか引つ張り出して、机の上へと出す。それから申し訳なさそうに、榊原に頼み込んだ。

「わりい、提督。早速なんだけど、こいつだけ確認してくれねえか?」
「・・・わかった」

それから昼食まで、しばらく書類仕事が続いた。

「それではっ！パラオ泊地艦隊の正式発足を祝しまして！乾杯！」

摩耶の音頭で、ジュースの入ったグラスが打ち鳴らされた。パラオ泊地所属の全艦娘が一堂に会した食卓に、ジュースを飲み干した溜息が重なる。榊原もその一人だった。

正午の太陽は、優しく食堂に差し込む。食卓に並ぶのは、木曾が腕によりをかけた料理の数々だ。摩耶によると、今泊地にいるのは、港湾部などの最小限の人員だけで、食堂部と工廠部の着任は、一週間後の船団になるとのことだった。

毎日、ご飯は自炊だったらしい。

「なんかよくわかんねえんだけど。港湾部は泊地所属だから、連合艦隊司令部が独断で送れるらしい。逆に、食堂部と工廠部は、泊地の艦隊、つまり提督の指揮下だから、着任には提督の承認がいるんだと」
木曾が焼いたピザトーストのチーズを伸ばして、摩耶が言った。

「面倒な仕様になってるんだな・・・」
「ほんとだよな」

同じようにしている榊原も、摩耶に同意する。摩耶は殊更感慨深げに、ピザトーストにかじりついた。

「うつつ、これでようやく、自炊生活ともおさらばだぜ・・・」
「・・・摩耶の料理、まずいもんな」

本日のシェフ、木曾は、容赦のない言葉を投げかけた。

「うぐぐ・・・」

「ていうか、この艦隊でまともにご飯が作れるの、あたしと木曾だけじゃない」

木曾に同調したのは、サイドテールを気にしながらピザトーストを頬張る霞だった。哨戒任務から帰った彼女と満潮は、すり減らしたエネルギーをきつちりと補っている。

霞の言葉に陽炎が反論する。

「あたしもできたじゃない」

「あんたのは、料理じゃなくてぶつ切りっていうのよ」

陽炎の主張は、霞によって文字通りぶつ切りにされてしまった。

「・・・意外ね。霞に料理の才能があったなんて」

容赦なく撃沈された陽炎が変わって口を開いたのは、意外にも曙だった。ピザトーストのピーマンに顔をしかめながら、彼女もパンをかじっている。

———そういえば、霞は横須賀にいた頃の知り合いだって言ったな。

パラオ所属艦娘の名前を聞いた曙の言っていたことを、今更のように思い出す。霞は呉鎮守府からの派遣だが、その前は横須賀にいたらしい。

「どっかの世話の焼ける後輩が、ぴーちくぱーちく餌を求めてくるからよ」

ちらっと、霞は陽炎を見遣る。その目線に、陽炎は投げやり気味に鳥の雛のまねをした。

「ていうか曙、あんたも料理できたでしょ」

「まあ・・・人並みには。普通できるでしょ」

こともなげに言った駆逐艦娘の言に、若干二名の艦娘の周囲がズーンと重くなった。

「満潮はどうなんだ？」

榊原は、先ほどから黙々とピザトーストを食べている、もう一人の駆逐艦娘にも話題を振ろうとした。瞬間、満潮の口元がウツと詰まった。

「き、急に何よっ」

なんとかパンを嚙下した満潮は、顔を赤くしてまくし立てる。その様子を、摩耶がニヨニヨと眺めていた。

「わ、わたしは別に、料理とか・・・」

「パンを焼くと黒焦げになるもんな」

「あ、あれはっ！たまたま目を離してただけでっ！」

「・・・つまり、まともに料理ができるのは、あたしと霞、木曾だけってわけね」

満潮の反応から全てを察したらしい曙が呟く。お皿に並べられていたトーストとサラダは、すでになくなっていった。手に付いたパンの粉を、パラパラと振り落とす。

摩耶も最後の一切れを口に入れ、モグモグと咀嚼する。

「ま、てことであと一週間、食事の方は頼むわ」

「・・・わかったわ」

ひらひらと手を振る『元』警備隊旗艦に、マダム・ボーン、キャプテン・キッツ、霞ママが嘆息するのであった。

「俺もやろうか？」

同じく昼食を平らげた榊原も、食事当番に名乗り出る。こう見えて、料理はできる方だ。それに、誰かに作って喜んでもらえることほど、料理をやっている嬉しいこともない。パラオに来る途中の食事でも、曙に認められている。

「何、提督料理できんのか？」

摩耶が驚いたように言った。

「ああ。人並みには・・・。妹が二人いたつてのが大きいな」

それを聞いた、妹持ちの二人の艦娘が、再び大きく肩を落としたことは、最早言うまでもない。

そしてそこへ、トドメを刺すようなこの会話。

「曙は、提督の料理食べたわけ？」

「まあ・・・一応。ここに来る途中で」

「どうなの？」

「悪くはないんじゃない。ていうか、むしろいい腕してると思う」

榊原の着任初日、早速パラオ泊地艦隊からは、轟沈艦が出ることとなった。

敵ハ執務室ニアリ

「ここが執務室か……」

目の前の惨状を眺めて、榊原は言葉を失いそうになった。

執務室。本来そこは、鎮守府や泊地の提督長が日常業務を行う部屋であり、秋山中将を参考にするならば、きちんと理論的に、整然と整理されているものはずだ。

さて、改めて、目の前の光景を冷静に見てみようか。

冷静に見るまでもなかった。

「何これ……空き巣でも入ったわけ？」

横の曙が諦めの感想を漏らすぐらい、執務室は散らかっていた。積みまれた段ボール。謎のペンギンと綿雲の群れ。海図だろうか、丸められた棒状のものがちらほら。

「……敵艦隊の襲撃を受けたのかもしれない」

「ちよつと探して、しばいてこようかしら」

二人して溜息を吐く。と、そこへ通り掛かったのは、榊原着任までパラオを預かっていた警備隊旗艦だった。摩耶は書類が入っている段ボールを抱えて、二人の方を見る。

「どうかしたのか？」

榊原が何かを言う前に、曙がキツと目元を険しくして、執務室の惨状を指差した。

「どうもこうも、何よこの部屋。倉庫の間違いでしょ」

「いや、ここが間違いなく執務室だぜ」

よっこいせ、と段ボールを下ろす。それから部屋を見渡して、一角を示した。

「執務机はあれだ。埃被んねえようにシート掛けといた。それ以外のは、書庫に入れるやつだな。書庫が工事中だから、ひとまず空いてたこの部屋に入れさせてもらった。今日中には工事終わるらしいから、そしたらそつちに移す」

——工期八十パーセント消化って、嘘じゃないのか。

秋山に知らされていた情報を思い出して、榊原は一人首をひねっ

た。

じつと、目の前の摩耶を見つめる。横須賀に連絡を入れたのだとすれば、それは間違いなく警備隊旗艦の摩耶のはずだ。

仮に、八十パーセントが嘘だとしたら、何のために。虚偽の報告をするような理由はなさそうなものだが……。

——まさか、早く自炊生活から開放されたくて？

思考が変な方向に走りそうなのを感じて、榊原は余計なことを考えるのはやめた。代わりに尋ねる。

「最優先で確認しとくものは？」

「一番は、あっちの資材と納入物品関係。で、その次がこいつかな」

摩耶はそう答えて、さっきまで抱えていた段ボールをポンと叩いた。

「結構な量だな」

「一応、あたしの権限で書けるところまでは書いといたから、今日中には終わると思うぜ」

「そうか。ありがとう、助かるよ」

「それほどでもねえって」

摩耶は照れたように頭を掻いた。どこか戸惑っているような表情には、見た目相応の若さが見えた。素直に褒められるのには弱いのかもしれない。榊原も、その感覚はよくわかった。

「そ、そっぴや」

段ボールを置いた摩耶は、部屋の簡単な片付けと執務机を引っ張りだすのを手伝いながら、話題を転換した。

「提督、秘書艦はどうするんだ？」

「……あ」

そういえば、まだ言っていないかった。木曾に言われてから、あれこれ考えてみたはいいものの、艦娘たちに言わないんじや、何の意味もない。

三人係りで執務机を動かし、上げられていた椅子を下ろしてから手をはたく。

二人分の視線が、榊原に注がれていた。

「秘書艦なんだが・・・曙に頼もうと思う」

うんうんと大げさに頷く摩耶の横で、曙の大きな目がより一層見開かれた。

「ちよっ、あたし!?!」

「もちろん、曙が嫌だと言うなら、無理強いはしない」

一時の沈黙が流れた。

「・・・頼めるかな?」

榊原の問いかけに、曙は腕組みをしてそっぽを向き、

「・・・別に、誰も嫌なんて言っていないじゃない」

聞こえるか聞こえないかの音量でぼそりと呟いた。

「わかったわ。クソ提督がどーしてもって言うなら、秘書艦やってあげる」

ツイットと外れた視線で、曙はそんなことを言った。その仕種が、意地の張り切れない子供のような可愛さだと思えるほど榊原は大人ではなかったが、それでも曙の言に苦笑するくらいには、彼女の可愛げをわかっていた。

「ああ。どーしても、だ」

「あっそ」

曙の言葉尻を捉えてそう返すと、まるでそっけない返事が返ってきた。今度は摩耶も、そんな駆逐艦娘の様子に苦笑するのだった。

「よっし、これで一通り、何とかなっただろ」

ある程度——本当に申し訳程度に片付いた執務室を見渡して、摩耶はやりきったように額の汗をぬぐった。同じ仕種を、榊原と曙もする。

「まあ、何とか執務はできそうだな」

榊原の抱いた、率直な感想である。並み居る段ボール諸君には、早々に執務室から退去してもらいたいものだ。

「んじゃ、あたしはこれで。秘書艦の件は、あたしから残りの面子に伝えておくぜ」

「ああ、よろしく頼む。午後も哨戒か?誰が出る?」

「予定だと、木曾と陽炎だな。二時あたりに出て、一時間」
「わかった」

それじゃあな。そう残して、摩耶はひらひら手を振る。その後姿は、すぐに執務室の扉の向こうへと消えてしまった。室内には、榊原と秘書艦が残るのみとなった。

「さ、ちやつちやと片づけちやうわよ、クソ提督」
「そうしようか」

そういう訳で、早速今日中にやるべき書類と格闘することにした。布巾で拭いた執務机の横に、摩耶の指示した段ボールを持ち出し、中の書類を取り出して積む。一方曙は、段ボールを開いて中身の書類や資料を、組み立てた本棚に入れ始めた。

「しつかし・・・とんでもない量だな」

取り敢えず最優先でやるべき資料関係の報告書を積み上げて、榊原は絶句した。半分も取り出していないというのに、ものすごい山が執務机の上に築かれていた。

「二ヶ月分ともなると、こんなに多くなるのか・・・」

資料関係だけでこれだけの量だ。これから戦わなければならない書類の総量を想像した榊原は、まるで自分が積み上げられた紙の山に挑む登山家のように思えた。

「さしずめ、エベレストかチョモランマといったところか」

山の前で腕を組む。さて、どう攻略するべきか。

「・・・いやいや、何を考えてるか知らないけど、精々富士山つてとこでしょ。ていうか、エベレストもチョモランマも同じじゃない」

至極全うなツツコミは、完成した本棚に資料を突っ込んでいた曙からもたらされた。

「言われてみればそうだな・・・」

「下らないこと考えてないで、さっさと書類やりなさいよ。資料整理はあたしがやっつくから」

「そうするか」

言われた通り、榊原は世界最高峰への挑戦を諦め、執務机に腰掛けると、目の前の書類に手を伸ばした。

小一時間。

「クソ提督・・・書類仕事苦手なのね」

曙の指摘に、榊原はうつと言葉を詰まらせた。

最初に積んだ山は、まだ半分ほどしか減っていない。本来この時間なら、山一つ分ぐらい終わっていないといけないのだが。

「自覚はあったんだがな・・・」

「自覚あったのね・・・」

理由はわかっている。必要な資料やら何やらの数値がしつかり頭に定着していないのだ。それにそもそも、こうした書き物はあまり得意ではなかった。一年ほど前までは、極々普通の大学生だったのだから。

「・・・こつち、終わったわよ」

「そうか。ありがとう」

——こつちも頑張らなくては。

首を回し、もう一度書類に向き直る。まあ、何とか頑張れば、今日中にやっておくことは終わるはずだ。・・・多分。

そんなことを考えていた榊原の目の前に、影が落ちた。

「あのねえ、クソ提督」

見れば、榊原の正面に、曙の顔があった。執務机に頬杖をつき、まっすぐな瞳でこちらを見つめている。その口元が、文句を言うように動いた。

「秘書艦が何のためにいると思ってるのよ」

「それは・・・」

言い淀んだのは、果たして何故だったのか。そんな榊原の様子に、苛立ったように溜息を吐いて、曙は執務机から離れた。それから、部屋の隅に立て掛けられていた折り畳み机を持ち出し、器用に開く。あえて自己主張するよう執務机の横に置き、満足げに手を腰に当てた。

「これ、もらうわよ」

そう言って、問答無用で書類を段ボールから引き出す。ペンを取ると、榊原と同じように書類と格闘を始めた。右手が流れるように動

く。

「クソ提督にしか権限がないものなんて、ほとんどないでしょうが。秘書艦の権限は、それくらいには大きいんだから」

実際、秘書艦の持つ権限は大きい。提督とほぼ対等と言ってもいい。もちろん、作戦案の承認や各艦隊との資材、装備のやり取りなんかは、提督でなければできないが、それ以外——護衛任務等で得た資材量の確認や哨戒任務の報告書なんかは、秘書艦でも確認の印を押せる。

さらさらと書類を仕上げている曙に、今度は榊原が目を見開く番だった。一点も迷わないその動きは、随分と手馴れているように感じられた。

「曙、慣れてるな」

「ま、まあ、ね」

チラツと見えた横顔が、わずかに赤い。

「初期艦の依頼が来た時から、秘書艦の仕事も一通り習うのよ。だから、クソ提督よりは慣れてるの」

「そうなのか・・・」

初期艦というのは、そんなことまでやるのか。まさに、あらゆる面で提督を仕込む「教官」だ。

「初期艦つてのも、大変なんだな」

「・・・そんなこと言ってる前に、手を動かす」

曙教官の容赦ない指摘に、榊原も止まっていた手を動かし始める。

二人でやれば、速度は二倍——いや、今の榊原の速度を基準にすれば、二倍半か三倍か。

カリカリ。二人分のペンを走らせる音が、執務室の静寂に紛れていた。

静寂を破るノックは、しばらくしてから響いた。榊原は手を止め、顔を上げる。扉に向かって答えた。

「どうぞ。開いてるから、入ってくれ」

「失礼します」

元気な声と共に、女子中学生風の少女が扉を開けた。陽炎だ。

「哨戒任務、終わったわよ」

「お疲れ様。報告書は？」

「今木曾さんが書いてる。後で持ってくるから、先に返ってきたことだけ知らせに行けって」

「そうか。助かる。何か異常はあったか？」

陽炎はフルフルと首を振った。

「なーんにも。ていうか、この二ヶ月、潜水艦の侵入も数回しかないのよねえ」

「らしいな」

これは、片付け中に摩耶が教えてくれたことだ。

「まあ、聴音器も九三式だし、見落としとかあるかもしれないけど。にしたって少ないと思わない？ 最前線基地でしょ、ここ？」

「普通なら、もっと偵察に来てもおかしくない、か」

コクリと陽炎が頷いた。

もつともな指摘だ。深海棲艦は、極めて高度な戦略眼——人間のそれと遜色ない、確かな行動原理を持っていた。それに照らし合わせるとすれば、こんな最前線の泊地を放っておくはずがない。もつと積極的な情報収集を行っていくはずだ。

が、実際には行われていない。

「気になるが・・・現状ではやりようがないな。引き続き、哨戒を厳に頼む」

榊原としては、そう言うしかなかった。

「はい。わかったわ」

陽炎も了承して、執務室から退出していった。

ふと、隣の曙を窺う。彼女は真剣な目で、じつとこちらを見つめていた。

彼女にも、思うところがありそうだ。

「曙は、どう思う？」

自らの教官に問い掛ける。曙はわずかに思案顔になった後、おもむろに口を開いた。

「仕掛けてくる、と思うべきね」

「何かしらのアクションをしてくる、と？」

「それ以外には考えられないけど？」

ふむ。榊原も小さく首肯した。

何にせよ、その時には迅速に対応しなければならぬ。そのためには、何よりこの泊地のことを知らなければ。

榊原も曙も、再び目の前の情報の山に向き合った。

曙の予見は、すぐに現実のものとなる。

敵艦隊接近！

榊原がパラオ泊地に着任して、一週間が経過した。

「よし！早速やってくれ、提督！」

威勢のいい摩耶の掛け声に、榊原は戸惑いの苦笑を浮かべて、横向きに構える。右手に意識を集中し、その先にある的に狙いを定めた。

「羅針盤回すわよー！」

見計らったように、榊原の狙いをつけた的が回転し始める。陽炎が『羅針盤』と呼んだそれは、表に書かれた文字が読めないくらい高速で回転していた。榊原は、そこに向かってダートを投射するのだ。

「パージェーロー！パージェーロー！」

摩耶が古いテレビ番組の掛け声で鼓舞する。榊原でも、見たかどうかわかえていないような番組のことを、一体どこで知ったのだろうか。

———今！

ダートを手放す。右腕の振りによって勢いがついた小さな矢は、まっすぐに的へと飛んでいき、回転中のそれにきれいに突き刺さった。確認した陽炎が、的の回転速度を落としていく。刺さった位置を確かめるためだ。

やがて完全に停止した的の、ダートが刺さっている位置を、陽炎が読み上げる。

「午前十時。満潮、霞ペア」

それを聞き届けた二人の朝潮型駆逐艦娘は、呆れの溜息を吐いた。ダーツに興じているパラオ泊地所属の面々だが、もちろん遊びでやっているわけではない。これも大切な任務の内だ。哨戒の開始時間と担当艦娘をランダムに選ぶのだ。『哨戒配置決め』と呼ばれるこのダーツは、深海棲艦にこちらの行動パターンを悟られないよう、苦心の末に編み出された方法だった。

と、言うのは摩耶である。

「ねえ、これってここまで大掛かりにやる必要がある？」

もつともな質問は、現在パラオ泊地で秘書艦を務めている曙からもたらされたものだ。

キョトンと不思議そうな顔をしたのは、若干二名の艦娘——摩耶

と陽炎だった。

「なんでだ？楽しいだろ？」

「ダーツじゃなくて、ルーレットにしてみる？」

「そういうことじゃないでしょうが」

パラオ泊地のボケとツツコミが決まった瞬間だった。

「さて、と」

哨戒部隊が出撃した後、ようやく段ボールが退出した執務室で、榊原はペンを取った。今日も今日とて、初期の山のような書類と格闘だ。それに午後からは、演習も行う予定だった。新米提督の彼には、やるのがいくらでもある。

いくらか慣れてきたとはいえ、そのスピードはお世辞にも早いとは言えない。曙に叱咤されながらの毎日だ。

「哨戒記録の確認は、今日で終わりそうだな」

二ヶ月分の哨戒記録を精査している榊原が、手を止めることなく呟いた。引き出した折り畳み机——秘書官机と呼ばれるようになったその机で、榊原と同じように書類を確認する秘書艦の曙も、それに頷いた。

「これで、溜まっていた分は終わりそうね」

「そうすると、いよいよ泊地も本格稼働か」

「そういうこと」

工廠施設の完成は一週間以内であるとの報告も来ている。パラオ泊地も、ついにまともな運用ができるレベルになるのだ。

まあ、まだ寮施設は完璧とは言えないが。

「艦隊として動きだすんだから、クソ提督にも覚えてもらおうことがたくさんあるわよ」

「・・・心しておこう」

曙は曙で、色々と考えているらしかった。

それつきり、二人黙ってペンを動かし続ける。時折、ぺらぺらと資料をめくる音が聞こえる以外は、これといって音はしない。今日の陽

気は、扇風機を必要としなかった。

どれくらい時間が経っただろうか。

首の辺りに軽い凝りを感じた榊原が頭を起こし、コキコキと動かし、時計を見ると、後十分ほどで十一時といったところだった。そろそろ、哨戒部隊が帰ってくる頃合いだろうか。

ちらつと、窓の外を見る。そこからなら、ギリギリ港湾施設が見えた。

そんなのん気な思考をぶち壊す音は、窓とは反対側の扉からやってきた。執務室の扉を蹴破らんばかりの勢いで現れたのは、息を切らした木曾だった。ただならぬ気配を感じ取った榊原も曙も、一瞬にして思考を臨戦態勢へと持って行った。

「何があった」

「奴ら、仕掛けてきやがった」

間髪入れずに木曾が答えた。一呼吸を挟んで続ける。

「満潮から緊急電があった。『敵艦隊見ゆ』だ」

戦慄が走った。

「摩耶と陽炎は？」

「待機室に集まってる」

待機室——一週間前まで『警備執務室』だった部屋に、哨戒部隊以外の艦娘は集まっているらしい。

「すぐに行く。曙？」

「書類は取り敢えず片付けといた」

言おうとしたことを先にやっている、優秀な秘書艦に微笑む。執務室の扉を開けて待つ木曾に続き、二人も執務室を後にした。

「駆け足！」

木曾の号令に合わせて、普段はランニング厳禁の廊下を、待機室目指して駆けていく。二階の執務室から一階に階段を降り、開け放された待機室へ飛び込む。すでに険しい顔の摩耶と陽炎が、海図台にパラオ周辺の海図を広げていた。

「まずは、状況を」

開口一番、榊原は尋ねた。心得たとばかりに摩耶が頷き、海図の上

に置かれた模型を指し示して、走り書きのメモを読み上げる。

「バベルダオブ島の北東、三〇海里だ。満潮によると、敵の編成は重巡一、軽巡二、駆逐四。偵察艦隊だな」

「威力偵察か」

「だろうな。潜水艦の接近が少なかったのは、こういうことか」

摩耶は、海図台に置かれた敵艦隊を示す駒をつついて、苦々しげに呟いた。それから顔を上げ、榊原を見据える。

「で、どうすんだ提督？」

改めて確認するまでもないことだが、榊原はあえて考えるように目を閉じてみせた。

——さて、やりますか。

「もちろん、打って出る」

「そうこなくっちゃな」

摩耶の表情は、打って変わって挑戦的な色を帯びた。いつも通りの彼女だ。

「満潮と霞は、接敵を続けてる。砲撃を受けないギリギリで見張ってるように指示した」

「わかった。急ごう、全艦出撃だ」

彼我の戦力は同じだ。パラオ泊地全艦で出撃する必要があるだろう。

「それと、旗艦だが・・・」

当然、榊原も一緒に出撃する。艦娘は艦の操作に集中し、艦隊全体の動きは提督が指示する。そのための提督であり、榊原だ。

榊原は、もちろん摩耶を旗艦にするつもりだった。艦隊でもっとも大きく、通信設備も充実している彼女からなら、作戦指揮をとりやすいからだ。

が、榊原が摩耶を指名する前に、彼女が右手を突き出してそれを制した。

「あー、あたしはパス。そういうの柄じゃねえ。乗るなら、曙にしてくれ」

摩耶は旗艦指定を断ると言った。その場の全員が目を見開き、木曾

だけはその片目を陰しくした。

内心驚いた榊原だが、今は、細かいことを詮索する暇はない。いくつかの質問を押し殺し、代わりに横の秘書艦に尋ねた。

「曙、どうだ？」

小柄な駆逐艦娘は、じつと、何かを見定めるように摩耶を見ていた。表情からは、何も読み取れない。しばらく、ただ静かに摩耶を見つめていた。

やがて、小さく嘆息する。コクリと、確かに首肯した。

「わかったわ」

これで決まりだ。

「それじゃあ、行こうか」

榊原が軍帽の位置を改め、全員が姿勢を正す。ピンと一本弦の張つたような緊張感が、待機室に満ち満ちていた。

「パラオ泊地艦隊、出撃！」

これが、パラオ泊地の初陣だ。

「・・・まさか、摩耶に断られるとは」

曙が精神同調を終え、埠頭から離れるのを待つだけとなった。『曙』の艦橋で、榊原はポツリと呟いた。左手に見える重巡洋艦は、すでに埠頭から離れたし、外洋へと出ていこうとしている。

気分としては、女子にフラれた感じだろうか。という例えは、あまり適切ではないなと自分で自分にダメ出しをして、苦笑いする。学生の思考が、まだまだ抜けきっていないみたいだ。

「無駄なこと考える暇があるなら、ちよつとは作戦とか考えなさいよ、このクソ提督」

演習諸々をすつ飛ばして、いきなり実戦指揮を経験することになった榊原を叱咤するのは、彼の教官である駆逐艦娘だ。普段のセーラー服に艦装を背負い、精神同調もすでに臨戦態勢となっている。

「作戦か・・・。ここは、セオリー通りに、だよな」

「今のあるたじや、教科書通りに艦隊を動かすしかないでしょうが」
「それもそうだよな」

ここで下手を打つ必要はない。経験のない榊原には、黒田官兵衛や竹中半兵衛のような軍略は、到底望めない。だからセオリー通り、堅実に。

「『摩耶』で重巡を押さえ、水雷戦で決着を着けるしかないな」
「でしようね」

曙も首肯する。それ以外に取れる作戦は、なさそうだ。

「・・・出港よ」

迫りつつあるタグボートを確認した曙が、そつと告げる。榊原もそちらを見遣り、決意も新たに双眼鏡を握りしめた。

「曙」がゆっくりと動き出す。タグボートに押されて埠頭から離れ、少しずつ外洋へ。中天に近い太陽光が甲板を焼き、水平に保たれている主砲身を力強く輝かせた。

「微速前進」

埠頭から離れた「曙」の主機が、ゆっくりと回転を始める。タグボート上の港湾部員に手を振り、外洋を目指す。すでに出港した「摩耶」と「木曾」が、そこで待っていた。

「おーい、提督。聞こえてるか?」

頭上のスピーカーから流れてきたのは、泊地最大の巨軀を誇る重巡洋艦の艦娘からの声だった。榊原は曙からマイクを受け取り、スイッチを入れる。

「聞こえてる。何かあったか?」

「いや。作戦だけ確認しておこうと思ってさ」

「作戦は、これと違ってないな。セオリー通り、摩耶が重巡を押さええる間に、水雷戦で決着を着ける」

「オツケー。満潮と霞は下がらせていいよな?」

「ああ。途中で合流するように言っておいてくれ」

「はいよ」

短い会話があつて、通信が切れる。丁度その頃、最後になった「陽炎」が埠頭を離れて、こちらへと向かってきた。これで、泊地全艦の出撃が完了したことになる。

重巡一、軽巡一、駆逐二。ここに、現在接敵中の「満潮」、

「霞」

が加わって、全六隻の艦隊だ。敵偵察艦隊と戦力的には互角である。

「全艦集合したみたいね」

腕組みをして艦橋の外を見つめる曙が呟いた。そのきらめく瞳が、榊原を流し見る。「指示は？」と、そういうことだろうか。

「行こう」

彼女の視線に領き、榊原はもう一度マイクのスイッチを入れた。

「摩耶を先頭に、単縦陣。全艦進発せよ」

「了解」の返信が重なり、榊原の指示通り、四隻の快速艦が「摩耶」を先頭にして単縦陣を組んだ。榊原の乗る「曙」は、「木曾」に続いて三番艦の位置につけた。羅針艦橋からは、単装砲の並ぶ「木曾」の後部甲板と、ほっそりとしたマストが見える。その向こうに、一際がっしりとした「摩耶」の艦上構造物があった。

「第一戦速に増速」

艦隊が速力を上げる。「曙」の主機も、さらに回転数を上げて、細くまとまった駆逐艦を加速させた。

確かな意志。そして誇り。頼もしい彼女たちの息吹を確かに感じて、榊原は余計な一言をマイクに付け加えた。

「暁の水平線に、勝利を刻め！」

強攻偵察部隊ヲ迎撃セヨ

速力を上げた四隻の艦艙が、艦首から白い波のスカートをはたなびかせて南の海を走っていく。鋭い艦影は見るからに俊敏で、供えられた黒鋼の兵装と相まって、闇夜を駆けていく忍者のようだ。

もつとも、今は思いつき真昼間であるが。

三番艦の位置につける「曙」の艦橋で両足を踏ん張る榊原は、内から漲るものに、戸惑いと心地良い高揚感を覚えていた。その横には、変わらずに腕を組む曙が立っている。これといって気負うことなく、その双眸は艦首で割れる波を見つめていた。

『「満潮」と「霞」だ』

先頭に行く「摩耶」からの通信に、榊原は短く「了解」とだけ返した。

哨戒中に敵艦隊と会敵した二隻の駆逐艦がすれ違い、反転すると「陽炎」の後ろにピタリと着けた。これで六隻が揃ったパラオ泊地艦隊は、榊原の指示でさらに速力を増し、今まさに接近中の敵艦隊を、その交戦圏内に捉えんとする。

——そろそろ、「摩耶」の電探が敵を捉える頃か・・・？

出撃前に確認した敵艦隊の情報を思い返して、榊原は黙考した。

「摩耶」のメインマスト頂部には、二一号電探が据えられている。これは一応対空電探という扱いになっているが、水上目標も捕捉可能で、早期警戒にはもってこいだ。電波は光よりも重力によって曲がりやすいから、水平線を回り込んだ位置にいる目標にも反応する。艦隊規模の対象なら、そろそろ捕捉してもよさそうな頃だが・・・。

案の定、待ち望んだ報告がやってきた。

『敵艦隊を捉えたぜ』

「来たか」

スピーカーから聞こえてきた報告に、小さく呟く。

さて、これからどうしたものか。

「なににせよ、迎撃だな」

悩むまでもないことなので、思ったことはそのまま口を吐いて出

た。それが聞こえたのだろうか、曙がチラツとこちらを見遣り、それから前方の水平線を睨んだ。

「なんにせよ、迎撃ね」

思わずそちらを振り向く。榊原をまねて軽口を叩いた曙は、バツチり目の合った彼に対して口角を吊り上げ、不敵に笑っていた。

まったく、この秘書艦は。

抜け目ない艦娘だ。

通信機のスイッチを入れる。言うことは決まっていた。

「迎撃する。『摩耶』 目標敵重巡。『木曾』 以下水雷戦隊は突撃、接近して魚雷戦で仕留める」

『了解！』

六つの返事が重なった。頼もしい響きに、心地良さを感じずにいられない自分は、まだまだ子供なのだろうか。それが確かな鍛錬に裏打ちされた自信の表れであることは、まだ薄々しかわからなかった。

『なあ、提督。あたしはフリーハンドってことでいいんだよな？』

戦いたくてウズウズ、といった様子の子の摩耶のリクエストにお応えして、榊原はマイクのスイッチを入れる。一対一でも怯まない辺り、余程腕に自信があるのだろうか。

「もちろんだ」

『サンキュ。きつちりスコア更新してくから、見てなつて』

スコア更新——撃沈を宣言して、摩耶の通信が切れる。その末尾に、微かな笑いが聞き取れた。

「相当な自信家ね」

「曙もそうだろうか？」

「あたしはいいの。ほんとに腕があるから」

——自分で言うんだ。

まあ、実際曙の腕はすごいので、榊原も何か言うつもりはない。相も変わらず腕を組んでいるこの駆逐艦含め、パラオ泊地は秋山が特に選りすぐった腕利き揃いらしい。その言を信じるに足ると思わせてくれたのは、他でもない曙だった。

『おい、駆逐ども。しっかりついて来いよ』

先頭で砲戦準備を進める「摩耶」に代わって、今度は男勝りな太い声が出た。木曾だ。

「言われなくてもわかかってるっての」

曙も減らず口を叩く。

『木曾こそ、ちゃんとしなさいよ』

『いいから、あんたは前だけ見てなさい』

『あんたら二人は、まず「曙」に着いていきなさい!』

順に、陽炎、満潮、霞である。この艦隊の駆逐艦娘、みんな口が悪くないか？

『へっ、いい意気だ』

それを平然と受け流せるのだから、さすがは水雷戦隊のボスといったところか。逆に、木曾がああいう性格だからこそ、駆逐艦娘がこれだけ好き放題言っているのかもしれないが。

『敵艦見ゆ!』

再び「摩耶」の通信だ。先頭に立つ彼女は、ついに接近する敵偵察部隊を発見したらしい。

この一週間で完璧に頭に叩き込んだ深海棲艦の識別表を思い浮かべて、そのページをめくる。重巡り級は、八インチ三連装砲塔三基搭載の、がっしりとした巡洋艦だ。一応、雷装もあるらしい。軽巡は三形式があるが、果たしてどれであろうか。こればかりは、実際に目で見てみるしかない。

『・・・おい、満潮。軽巡って・・・へ級じゃねえか』

文句を垂れたのは、先頭を慕進する摩耶だ。へ級、の言葉に脳内で該当ページが表示されるようになった分、特訓の成果はあったということだろうか。

軽巡へ級は、三形式の軽巡の中でも、特に対艦能力の高い艦種だ。六インチ三連装砲を四基搭載し、魚雷発射管は片舷六射線。flagshipになると、これが十射線になる。重巡並みの能力を持った軽巡だ。発想としては、一五・五サンチ砲を三連装五基搭載した、初期の最上型が一番近いだろうか。

『言ったらビビると思ったから、言わなかった』

当の満潮、悪びれる気ゼロである。

『ふんっ、スコアが一つから二つになるだけだよ』

摩耶はそれだけ言つて、また通信を切った。

「木曾」

代わりといつては何だが、榊原はマイクを取り、目の前を行く軽巡洋艦を呼び出した。

『ああ?』

「言うまでもないと思うが、へ級に妨害されると厄介だ。少し間を取って突撃だな」

『だな。それが一番だ。けど、逆にこっちが向こうを妨害してもいいんじゃないか?』

それは、非常に挑戦的な言葉のように、榊原には聞こえた。自然と、その口の端が持ち上がった。『やれるんだな?』

『当然』

「それじゃあ、そうしようか」

榊原も賛成だ。

『うっし。いいか駆逐ども!お前たちの心意気、見せてみる!』

キャプテン・キッツの号令が響く。すると先ほどと同じように、四人の駆逐艦が威勢よく答えた。

相変わらず、口は悪いが。

——まあ、こっちの方が、らしいか。

この口の悪さを、賑やかでいい、と思える程度には、榊原の周囲にも悪友はいたものだ。中央勤めのアイツなんか、いい例だ。

『敵距離、二〇〇(二万メートル)』

摩耶が読み上げる。重巡同士の砲戦距離としては、少し遠いだろうか。この距離を、摩耶は果たしてどう判断するのか。

両艦隊は、現在お互いに向かい合つて、反航戦で対峙している。相対速力は、大体三五ノットといったところか。接近は意外と早い。

『一八〇から砲撃を始める。後は頼んだぜ』

「了解。お手並み拝見と行こうか」

『提督も、中々言ってくれるじゃねえか』

そんな会話の間に、彼我の距離は一万九千まで縮まっていた。

「そろそろだな」

「そうね」

答えた曙の言葉も短い。滲むのは覚悟と、駆逐艦の矜持。間もなく中天に辿り着こうとする太陽の下、計十二隻の艦艇が、静かに睨み合っていた。

「『摩耶』、転針！」

曙が叫んだ。距離は、ついに一万八千。先頭を進んでいた『摩耶』は、かの有名な東郷ターンの要領で取舵を切り、敵艦隊に対して全主砲が向けられるように位置取ろうとする。それまで『木曾』の陰に隠れていた『摩耶』のどっしりとした艦体が視界の左に見えてくる。前甲板二基、後甲板二基の連装主砲が、その鎌首をもたげて、自らの目標へ牙を剥かんとしていた。

「続いて、敵一、二番艦も転針。『摩耶』と同航戦に移行する模様」なるほど、そう判断したか。敵一、二番艦——つまりリ級とへ級が『摩耶』に向き合うということは、深海棲艦は二隻がかりで『摩耶』と戦おうということだ。純粋な重巡であるリ級と、重巡にも引けを取らない砲戦火力を誇るへ級の数の暴力で、『摩耶』を封じようということか。

『乗ってきたな』

木曾のうっそりとした低い声が届いた。狙い通りだ。

『行くぞ！最大戦速！』

木曾の号令が、電波に乗って四隻の駆逐艦に飛んだ。榊原は双眼鏡を握りしめ、両足に最大限の体重をかける。次の瞬間、

「了解！最大戦速！」

四つの返事と、巨大な慣性力が同時に襲ってきた。発揮しうる最大の出力で回転する『曙』のスクリュー二軸が、その小さな艦体に大きな加速度を与えて、前に押しやった。浮揚感すら感じる急加速に、榊原は鍛えた脚力で抗った。

艦首で飛び散る水飛沫の量が、一気に増える。鋭い艦首は透き通っ

た海面を引き裂いて白濁させ、航跡をくつきりと引いていく。これぞまさしく水雷戦隊。高速力で敵の懐に入り込み、必殺の魚雷を見舞うのが、彼女たちの仕事だ。

「『摩耶』、発砲！」

加速した五隻の水雷戦隊が追い抜くころ、転針を終えた『摩耶』の二〇・三センチ連装砲が、敵艦隊に向けて火を噴いた。弾着観測用の交互撃ち方が上げるオレンジの砲炎は、パラオ泊地艦隊が初めて上げた咆哮だ。榊原は、その記念すべき第一射の結果を見守った。

弾着の水柱が噴き上がる。四本の巨塔は、敵重巡を狙っていたらしく、その手前に林立している。精度はかなりいい。

弾着修正を終えたのだろう。『摩耶』が第二射を放つ。それから一拍遅れて、リ級、そしてへ級が発砲した。

『おい、提督！二隻同時はさすがにきついから、なるはやで頼むぞ！』砲戦中にもかかわらず、そんな要求を寄越す余裕が、摩耶にはあった。

「わかった。なるはやでご期待に沿おう」

『頼んだぜ！』

——とはいえ、木曾はどうするつもりなんだ？

前に行く『木曾』からは、これといって特別な指示はない。彼女は、一体何を仕掛けるつもりなのか。

動きはすぐにあつた。

『取舵〇五！』

木曾からの指示だ。『木曾』がわずかに艦首を左に振り、すぐに『曙』たちも舵を切った。そのコースは、今『摩耶』を狙っている二隻の巡洋艦に向いていた。

敵艦隊、特にへ級とそれに続く駆逐艦たちの間に動揺が走ったのは、端から見えていてもすぐにわかった。

『少々荒っぽくいくぜ』

木曾の宣言の直後、へ級が発砲した。六インチ砲弾が弓なりの弾道を描き——

飛翔音を引きずって、『木曾』の手前に水柱を噴き上げた。

——こつちを狙ってきたか！

へ級は、こちらが急加速と転針をしたことで、接近しての雷撃を試みようとしていることに気付いたのだろう。だから慌てて、こちらに目標を変更したのだ。

——そういう妨害の方法か・・・！

戦闘時の攻撃優先順位には、いくつかある。そのうちの 하나가、より脅威度の高い目標から叩くというものだ。

大事なのは、“摩耶”よりも水雷戦隊の方が、脅威度は高いと思わせること。そのため急加速と、転針だ。こちらが雷撃による決着を狙っている（まあ、実際そうなのだが）と思わせることで、攻撃をこちらに向けさせ、結果として“摩耶”に対する敵艦の射撃を妨害することになる。

その分、リスクは高まるだろう。

『面舵二〇』

木曾はすぐに、二回目の転針を指示した。最初の言葉通り、無理をする気は微塵もないのだろう。のらりくらりと、敵の攻撃を躲す魂胆らしかった。

全ては、“摩耶”が敵重巡を撃ち負かしてからだ。

進メ！パラオ泊地艦隊

降り注ぐ弾雨の中、〃木曾〃以下駆逐艦四隻の水雷戦隊は、その時を待ち続けていた。

へ級からの牽制射撃は続いていた。速射性能の高い六インチ砲が咆哮を上げれば、まるでミシン目のように海面が沸き立つ。その中を、〃木曾〃は的確な転舵の指示で掻い潜り、敵艦隊との距離を保っていた。

時が来れば、いつでも突撃できる位置だ。

「再び命中弾！」

リ級に嘖き上がった火柱を見つけて、曙が叫んだ。前方の〃木曾〃だけを見つめている榊原は、彼女の報告にコクリと首肯した。

「これで、十二発か」

リ級と撃ち合っているのは、パラオ泊地随一の火力を誇る重巡洋艦の〃摩耶〃だ。第三射で夾叉弾を出した彼女は、すぐに斉射に移行し、これで七度目。約二十秒おきに八門の二〇・三サンチ砲の斉射音が轟き、リ級へ射弾を浴びせかける。当のリ級は、すでに激しく炎上し、満身創痍の状態だ。

「そろそろ、ね」

その様子を見たであろう曙も、ぼそりと呟く。

リ級を沈黙させれば、〃摩耶〃はその砲口をへ級へと向けるはずだ。その時が狙い目だ。〃摩耶〃の砲撃が始まり次第、全艦が突撃を始める。

〃木曾〃の右舷に水柱が上がる。六インチ砲弾のそれがバラバラと降り注いでは、沸騰した海水が白濁の摩天楼となる。

——至近弾……！

敵弾に空を切らせ続けている〃木曾〃の操艦だが、いよいよ敵の精度も上がってきている。このままでは、遠からず命中弾が出るだろう。軽巡として大きい部類ではない〃木曾〃では、へ級の連続斉射は命取りになりかねない。

焦りによる冷えた汗が、額に浮かぶ感覚がした。

『待たせたな！』

そんな思いを断ち切るような、頼もしく明るい声がスピーカーから聞こえた。

『敵重巡沈黙。目標を軽巡に変更！』

『やつと来たか！』

摩耶の意気に応えるのは、今も転舵を続ける木曾だ。その口角が挑戦的に歪められる様が、ありありと想像できた。

轟々と炎を噴き上げ、行き足を止めているり級への射撃はすでに止んでいる。『摩耶』の主砲は、新たな獲物に対して、その牙を突き立てんと欲していた。

再び六インチ砲弾が落下する。今までで一番近い。崩れた水塊が、バラバラと『木曾』に降り注いでいた。だが、逃げるのはここまでだ。

「『摩耶』、再び発砲！」

曙の言った通り、沈黙していた『摩耶』が測距を終えて、再びその砲口に火焰を躍らせた。観測用の交互射撃が始まり、およそ二十秒後に弾着の水柱を上げた。へ級の左舷側海面が大きく持ち上がる。『摩耶』の照準は、二番艦のへ級へと移ったのだ。

『者ども、続け！』

それを確認したように、木曾が叫んだ。途端、回避運動が止まり、脇目も振らず全速力で突撃を始める。三四ノツトの速力が水雷戦隊に与えられ、さながら戦国の騎馬の如く、一本槍となって真っ白な航跡を引いていった。

「距離は？」

迷うようにした後、結局『摩耶』に向けて発砲したへ級の様子を確認しながら、榊原は曙に尋ねた。

「二〇〇（二万メートル）。投雷までは四、五千つてとこね」

曙に返答を受け、榊原は素早く計算した。三四ノツト——およそ六十キロ毎時の水雷戦隊が、四千の距離を縮めるには、単純計算で四分がかかる計算だ。そこに、微妙な転舵や敵駆逐艦の妨害が入ってくるから、実際には五分か六分。

『駆逐艦は、こつちでなんとかするぞ。投雷は五〇』

“木曾”以下の動きには一切の乱れがない。雷撃戦距離を指示されても、その返答は短く端的なものだ。何を言わずとも、通じているところがある気がした。

“摩耶”は、へ級へ砲弾を撃ち続けている。至近弾は与えているが、命中弾はまだだ。一方、へ級の砲もまた、その射撃精度を詰めてきている。

「前方、敵駆逐艦！」

瞬間、榊原は意識を目の前に戻した。双眼鏡を向ければ、へ級の斜め後ろ——こちらから見て手前側に、四隻の駆逐艦が見える。種別は口級と八級だろうか。綺麗な縦列を組んでおり、こちらの投雷を防がんとしていることは火を見るより明らかだった。

『取舵二〇』

木曾が転舵を指示する。彼我の巡洋艦の射弾が行き交う下を、お互いの軽艦艇が入り乱れていた。こちらの転舵に合わせるように、敵駆逐艦も一斉転舵する。“木曾”が逆に艦首を振れば、またそちらへと転舵した。こちらの動きにピタリと付いてくる、厄介だ。

——敵駆逐艦の距離は・・・目測で七千か？

現在の二隻の敵巡洋艦（とは言っても、リ級はすでに沈黙しているが）との距離は、先より縮んで八千。その手前に着かず離れずだから、およそその程度だ。砲撃で蹴散らせるような距離ではない。

『・・・しつこいやつだ』

若干イラついたような声の後、“木曾”が転舵を止めた。もう小細工なしで、正面から突破するつもりだ。

——とはいえ、厄介だな。

敵艦隊を雷撃で屠るのだとすれば、あの駆逐艦の存在は邪魔でしかない。投雷点に取り付こうとすれば、妨害の弾幕が張られる。さて、どうしたものか。

一つの方法は、酸素魚雷の超長射程を生かした遠距離での雷撃だ。敵駆逐艦と六千程度距離を取っておけば、さすがに妨害を受けることはない。ただ、これだとそもそも魚雷の命中率が悪すぎて、何隻か取

り逃がす可能性が高い。

それでも問題なさそうだが……この艦隊は偵察艦隊だ。こちらの詳しい情報を持っていかれるわけにはいかない。だからこそ、全艦を撃沈する。

そうなれば、取れる方法は一つ。何としてもあの妨害を突破して、駆逐艦諸共、海の藻屑に変える肉薄雷撃を試みるしかない。

その意思を示すがごとく、五隻の水雷戦隊は韋駄天となって突き進む。駆逐艦など、はなから眼中にないかのような、堂々とした様だ。榊原は込み上げる武者震いと共に、自然とその背筋が伸びる心地だった。

大丈夫だ。彼女たちならやれる。俺は指揮官として、堂々と立っていればいい。

『投雷のタイミングに変更はない！あんなちんけな野郎どもなんか、気にすんじゃないやねぞ！』

木曾の檄が飛ぶ。

「さつきまで逃げ回ってたやつ言葉とは思えないわね」

『さつきと投雷点に取り付きなさいよ、遅いつたら』

『早くしないと、昼食作る時間がなくなるじゃない』

軽口にしては、いささか口の悪い駆逐艦たちの答えも変わらない。木曾の呵々とした笑いがスピーカーを震わせ、心なしか「木曾」の艦体も小刻みに震えているような気がした。

『六〇一』

次の瞬間、「木曾」が発砲する。前部に指向可能な前甲板と艦橋両脇の一四サンチ単装砲が咆哮し、陣取る敵駆逐艦を牽制する。射角の取れない「曙」以下四隻の駆逐艦は、砲戦準備だけは入念にして、じつとその様子を見ていた。

「……全砲塔右舷三十度へ」

曙が指示すると、機械の駆動音が機関の轟々たる音に交じり、艦橋に響く。前部の連装砲一基、そしておそらく、後部の二基も、曙の指示した方角へと、その砲口を向けているはずだ。

『五〇一！取舵三〇、右砲戦、右雷撃戦用意！』

木曾の指示のもと、それまで一直線に突き進んでいた五隻は、単縦陣を維持したまま鋭くカーブを描く。まもなく投雷点だ。

『撃ち方、始め!』

撃ち方であるから、砲撃の指示だ。木曾はまだ、魚雷を放つつもりはないのだろう。

「てーっ!」

真つ先に発砲したのは、すでに砲塔を指向し終えていた「曙」だった。曙の甲高い号令の後、六門の主砲が一斉に火を噴いた。反動が細長い艦体を揺らし、ビリビリと艦橋の窓を震わせる。駆逐艦とはいえ艦砲。その衝撃波は凄まじいの一言に尽きた。

「曙」に続くようにして、「木曾」や、他の駆逐艦も発砲する。一方で、こちらを妨害せんとしていた敵駆逐艦も一斉に発砲し、彼我の砲弾が海面の上で交差した。

太鼓を打ち鳴らすような、小気味いい連続斉射。ここでも曙の練度は高い。牽制弾幕のはずなのに、わずか二射で敵駆逐艦の二番艦に命中弾を与え、斉射の度に一寸刻みに被害を与えていく。

『投雷用意!』

そこで、初めて木曾から魚雷発射準備の号令がかかった。敵味方の小口径砲弾が入り乱れる中、全艦の魚雷発射管が敵艦隊へ指向される。

『投雷始め!』

「一番から三番まで、投雷始め!」

木曾の号令一下、五隻が次々と魚雷を放つ。箱型の発射管から圧搾空気によつて放出された魚雷は、小さな飛沫と共に海面に飛び込むと、予め調定された深度で驀進を始めた。「曙」は通常魚雷だが、それに続く三隻の駆逐艦は、全て酸素魚雷に対応した発射管を持つ。そこから放たれた魚雷は、海面に飛び込んだつきり、一切航跡も残すことなく、深い海の青に消えていった。

『しばらく粘るぞー撃ちまくれ!』

木曾の指示は単純だ。全艦が激しい弾幕を張り、決して敵艦には投雷を悟らせない。全艦を一網打尽にするための、明快な戦術。

榊原は、チラとストップウオッチを見遣る。投雷した瞬間から計っているものだ。これで、敵までの到達時間を計測する。魚雷が到達するまでは、およそ四分といたところか。

そこで榊原は、『摩耶』と八級の戦闘に意識を移した。見れば、その戦闘は、すでに決着がついたと言つてよかつた。『摩耶』が健在な姿で洋上にその姿を浮かべているのに対し、八級の方は全体に満遍なく被弾し、どす黒い煙を引きずっている。それでもなお、行き足を止めず砲撃をする様は、敵ながら哀れに見えなくもなかつた。

だが、それももうしばらくだ。

『もう十分だろ。離脱にかかる』

いいだろ提督。牽制は十分と判断した木曾が問いかける。榊原も異存はない。

それまで射弾を浴びせかけていた五隻のBOBは、同時に取舵を切り、離脱にかかる。右に見えていた敵艦隊が後ろへと流れ、やがて艦橋の陰で見えなくなった。敵弾はなおも降ってくるが、それらが『曙』“たちを捉えることない。

「・・・そろそろだ」

ストップウオッチの秒針を見つめていた榊原は、静かに呟いた。魚雷の到達時間が来る。もう間もなく、馳走していた魚雷たちが敵艦隊に到達し、その横腹を喰い破るはずだ。

「見張り員、戦果確認」

曙が、マストに陣取る見張り妖精に命じる。

曙の魚雷の航跡は、敵からもくつきり見えるはずだ。それに気付いたのか、敵駆逐艦がにわかに慌ただしくなった。ただし、曙によつて多数の一二・七サンチ砲弾を被弾した一隻だけは、フラフラと覚束ない航行を続けている。

敵艦隊の回避行動は、遅きに失した。

五隻から放たれた鋼鉄の魚たちは、自らの獲物に全速力で突撃、その横腹に食いつき、喰い破った。

盛大な水柱と火柱がほとんど同時に上がった。艦首と言わず、艦尾と言わず、小柄な駆逐艦には過剰過ぎるほどの炸薬が威力を發揮する

たびに、まるで木製の小舟か何かのようにその艦体が浮き上がり、竜骨がへし折れて弾火薬庫の誘爆を起こす。

あつという間の出来事だった。四隻の敵駆逐艦は、あつという間に滯標となつてしまったのだ。

が、それだけでは終わらなかつた。一分ほどが経った時、今度はへ級の左舷に二つの瀑布が生じた。『摩耶』の砲撃によつてすでに満身創痍だつたへ級には、それだけで十分だった。

燃え盛る艦体は、その真ん中から真つ二つになり、急速に浸水を拡大して沈みゆく。炎で熱された艦体が海水に触れて、濛々たる水蒸気が立ち上つていた。

見張り員からの報告を、曙が読み上げる。榊原は首肯した。

「・・・重巡の方は、どうなつてる？」

榊原が尋ねると、曙はすぐに見張り員に確認を求めた。リ級もまた、甲板の火災地獄が収まる気配はなく、すでに左舷への傾斜を大きくしているとのことだった。

「撃沈確実ね」

曙がチラツとこちらを見遣つた。トドメはどうするか、訊いているのだ。

「・・・霞」

『何よ』

呼びかけには、すぐに返事があつた。

「万全を期したい。魚雷を再装填後、雷撃処分してくれ」

できれば曳航して、調査などしてみたいものだが、さすがにあの状態のものを曳いていくのは無理というものだろう。それに、パラオの設備は、そこまでできるほど整つてはいなかつた。

『・・・何も、そこまでしなくても』

「万が一にも、この泊地の詳しい情報を持つて帰られたら厄介だ。強攻偵察部隊が全艦撃沈となれば、深海棲艦もそうそう手を出そうとは思わなくなるはずだ」

『・・・わかつた』

若干不服そうであつたが、霞は素直に従つた。反転し、海上に取り

残されているり級へと向かう。霞が備える次発装填装置には、もう一斉射分の酸素魚雷が詰められていた。

やがて、後方から轟音が聞こえた。どす黒い煙が天へと消え、海上から焰が消えた時、パラオ沖の戦闘は終焉を迎えた。

未知、アルイハ既知トノ邂逅

「結局、もうお昼ね」

頭上の太陽を見上げる仕草をして、曙がぼやいた。現在太陽は、一日のうちで最も高い位置まで昇りつめ、キラキラと海面を照らしていた。時計を見れば、確かに正午を過ぎている。

いまだに食堂部が着任していないパラオ泊地の食事は、三食すべて自炊だ。これから帰るとして、損傷艦のドック入りや、補給作業の準備を勘案すると、昼食は随分遅くなりそうだった。

「腹、減ったな」

榊原も呟く。実際に戦闘を行っていない自分ですらこれなのだ。まして彼女たちは、どれ程であろうか。

「昼ごはん、ね」

何やら思案顔の曙は、今日の食事当番であった。大方、メニューでも考えているのだろう。

「パン、だな」

「まあ、そうね」

「魚もあった」

「そっちは夕食でしょ」

「ソテーか、煮込みか」

「・・・ねえ」

「どうした？」

「なんであたしたち、ご飯のメニューを考えてるの？」

もったもな質問であった。

「何でだろうな・・・」

人間、お腹が減ると、思考が偏るものなのである。主に、何かを食べる方向に。

クーっと、可愛らしい音がした。榊原の隣からだ。チラツとそちらを——曙の方を見ると、

「・・・こっち見んな、クソ提督！」

お腹の辺りを押さえて、赤くなった顔を背けている。

彼女の腹の虫が鳴いた音だったらしい。

腹が減っては戦はできぬ。できるだけ早く、腹ごしらえをしたいものだ。

が、結局榊原の願いは、若干の延長を余儀なくされた。

きっかけは、陽炎からの通信だった。

『ねえ、司令』

昼食のメニューについてあれやこれやと考えていた榊原と曙は、不意を突かれる形となった。そのため、普段以上に堅い受け答えとなったのは、榊原も自覚していた。

「何があった?」

『いや、深海棲艦じゃないんだけど・・・』

そう前置いて、陽炎は続ける。

『ドロップじゃないかな、って』

「・・・ドロップ?」

聞いたことのない言葉を耳にして、榊原は首を傾げる。そんな彼の代わりに、曙が返答した。

「近い?」

『右舷。すぐそこよ』

「わかった。ちよつと待って」

陽炎に待つように指示すると、曙が榊原の方を向く。彼が何かを問いかける前に、その小さな口元が動いた。

「艦娘の邂逅には、二つの種類があることは知ってるわよね?」

「ああ。もちろんだ」

建造と、海域での邂逅。前者は、妖精と艦娘（大抵は秘書艦）の助けを借りて、資材を消費し、艦娘とBOBの基となる『船魂』を召喚する方法だ。これは泊地のドックで行える。後者は、その船魂と海域で邂逅する方法だ。こちらはランダム要素が強く、出現の詳しい条件等もわかっていないが、主に深海棲艦との戦闘があった付近で邂逅することが多いと言われる。

「海域での邂逅を、あたしたちはドロップって呼んでる」

「つまり、近くに新しい艦娘がいる、ということか？」

「そうなるわね」

それだけ説明すると、曙はもう一度陽炎と通信を開く。それを待っていたのか、陽炎は詳しい話を始めた。

『場所わかったわ。三時の方向、距離一二（一千二百メートル）』

榊原はマイクを取り、その声に答えた。

「わかった。本艦と陽炎で邂逅に向かおう」

『りよーかいよ』

短いやり取りの後、通信を艦隊全体に向ける。

「全艦、先に泊地に帰投してくれ。俺が帰るまでは、摩耶に指揮を任せろ」

『OK。で、やっつくことは？』

「ドック入りと補給。それが終わったら、昼食の準備」

『了解』

まあ、とは言っても残りのメンバーでまともに料理ができるのは霞だけである。今度、何か奢らなければ。

「面舵九〇。陽炎、続いて」

曙の号令に呼応して、すぐに艦首が右に振られる。『陽炎』も同じだ。排水量の軽い駆逐艦は、舵の反応も早い。

艦隊から分かれた二隻の駆逐艦は、新艦娘との邂逅が予想される海域へと向かう。一千二百を詰めるのに、原速の彼女たちなら数分とかからない。

「あれね」

前方を見据えていた曙が呟くのに合わせて、榊原も双眼鏡を覗き込む。

前方の海域が、淡く光り輝いていた。まるで、海の底から何者かが光を当てているような、そんな色彩だ。魚の群れかとも思ったが、光の色は白銀ではなく黄色、いやむしろ金に近いだろうか。たゆたう海面が光を拡散して、真昼なのに確かな存在感を放っていた。

「あの光が、そうなのか」

資料で見て、知ってはいた。それでも、実際に見るのとは大違い

だ。揺れ動き、波動を放つあの船魂は、まさしく生命そのものだ。息遣いまでもが、この「曙」に伝わってきそうだった。

それでも、この距離まで近づかなければ、視認するのは不可能だ。陽炎は、一体どうやって、あの光を見つけたのだろうか。

「陽炎、お願い」

『了解。接近します』

「陽炎」が「曙」を追い抜いて、光へと近づいていった。主機を止めたのか、その艦体はやがて惰性だけで動き始め、その動きも光り輝く海面の真上で完全に止まった。一方の「曙」は、そんな「陽炎」を見守るかのように舵を切り、彼女の周囲をある程度の距離を持って旋回し始める。

「なぜ、接近しない？」

双眼鏡から海域を眺めていた榊原は、疑問を呈する。できれば、邂逅の場に居合わせたいものだが。

「艦種によつては、出現時の衝撃が馬鹿にならないからよ」

「しかし、「陽炎」は大丈夫なのか？」

「邂逅者選ばれたのは陽炎よ。問題ない」

また知らない単語が出てきた。最近の若者の言葉は解りにくいね、などと思う榊原も、実は若者であるはずなのだが。

「艦娘の邂逅は、その邂逅者を選ぶ。なんていうか、感覚的なことしか言えないんだけど、テレパシーみたいなもんね」

「テレパシー、か」

なるほど、つまりこういうことだろう。

新しい艦娘の居所がわかったのは、陽炎が「彼女」からテレパシーを受け取ったから。邂逅者というのは、そのテレパシーを受けた艦娘のことだろう。顕現——邂逅した艦娘を、BOBと共に形作る行程は、その邂逅者でなければ担えないということか。

彼の推測を裏付けるように、陽炎から快活な声が聞こえてきた。

『船魂の回収に成功。顕現に入りまーす』

「了解」

見れば、海面から光は消え失せ、代わりに光の粒のようなものが、臙

装を外して甲板に立つ陽炎の手に収まっている。特大の蛍のように明滅するその光が照らす陽炎の横顔に、榊原は一瞬言葉を失った。神々しいまでの光。くつきりと濃くなった陰が、逆に光を際立たせ、白く透き通るような肌を輝かせていた。

——綺麗だ。

海軍人も含めて、一部の人々が「神の遣わした者」と艦娘を呼ぶのもわかる気がする。

「そういえば、顕現ってというのは、どうするんだ？」

「眠れる船魂を起こすのよ」

曙は事も無げに言い切った。

「起こすって・・・王子様のキスでもするのか」

榊原としてはジョークのつもりだった。が、

「その通りよ」

「・・・えっ」

大真面目に肯定されてしまったので、間の抜けた声を上げる羽目になつてしまった。

“陽炎”の甲板上では、いよいよ顕現が始まろうとしていた。自らの手の内に宿る淡い光の粒に、陽炎が形の良い唇を近づけ、そつと口づける。途端、それまでの波動が大きく変化し、眩いばかりの光の本流を、陽炎の手のひらから溢れさせた。生命の息吹を吹き返した光の粒を、陽炎は宙空へと放った。

「衝撃に備えてー！」

余りの光景に息を呑んでいた榊原は、曙の呼びかけで我に返り、両足を踏ん張った。

陽炎の手を離れた光の粒は、ゆつくりと放物線を描いて、元のように海面に降り立とうとした。その勢いが、まるで重力に逆らうかのよう衰え、海面に着く頃にはほとんどゼロとなる。

変化は唐突にして劇的だった。光の粒が海面に触れた途端、それまでの何十倍という光が溢れ、一瞬のうちに視界を真っ白に染めた。思わず目を細めた榊原を次に襲ったのは、横殴りの衝撃波。“曙”の艦橋が揺れ、あたかも小舟のように波を乗り越える。

光の渦の中で、激しい水飛沫が上がるのも見える。強烈な閃光に霞んだその内に、大きな物体が形作られているのが、辛うじてわかった。始まりがそうであったように、終わりも突然やってきた。溢れていた光の本流は、ある時を境に収束を始め、その中心——物体のある方へと向かっていく。それが完全に収まった時、*“陽炎”*の横には、もう一隻の艦がいた。

——頭現は、成功か・・・？

双眼鏡を覗き込むと、その艦の細部がよくわかる。

艦形はどうみても駆逐艦だ。横に並ぶ*“陽炎”*とほぼ同じである。すなわち、一二・七センチ連装砲が前部一基、後部二基。艦橋のすぐ後ろには一番煙突があり、それに続いて四連装魚雷発射管が二基、二番煙突を挟んで配置されている。

『頭現に成功。なんか、あたしの妹みたいね』

陽炎本人が言うのなら、そうなのだろう。

さて、と。

「ここからどうしたもんか・・・」

「まあ、基本的に艦娘が自分で機関を始動してくれることを祈るしかないのよね」

「・・・始動しないときは？」

「海賊に倣って、強制接舷」

何とも原始的なやり方である。

もつとも、その心配は必要なかったみたいだ。

頭現したBOBから、大きな機関の始動音が聞こえた。新たな艦に、新たな息吹が宿る音だ。駆逐艦とはいえ、その機関から発せられる鼓動は力強い。心を奮わせる、頼もしい音だ。

『陽炎、離脱しまーす』

「わかった。お疲れ様」

甲板に立って、感慨深げに艦を見つめていた陽炎が、タツと踵を返して艦橋へと登っていく。すぐに主機が回転を始め、*“陽炎”*が微速で動き出した。

「ほら、自己紹介して」

代わりにゆつくりと近づくと「曙」。曙に促された通り、榊原はもう一度マイクのスイッチを入れて、「彼女」との通信を試みた。

「始めまして。こちらは、パラオ泊地提督の榊原広人少佐と、駆逐艦「曙」だ。貴艦の名前を教えてくださいたい」

しばらくの間があった。じりじりとした時間。通信回線は開かれたまま、「彼女」はまるで何かを見定めるように、ゆつくりとその口を開いた。

『夕雲型駆逐艦、長波様だぜ。よろしくな、提督！』

威勢のいい声だった。元気ハツラツな、少女の声だ。

フツと頬が緩むのを感じた。

「ああ。こちらこそ、よろしく」

ボーツ。「長波」の汽笛が、それはそれは嬉しそうに鳴り響いた。それに応えるように、今度は曙が汽笛を鳴らす。新たな仲間を歓迎する、暖かなやり取りに、榊原はついに破顔した。

「着いて来てくれ。長波を、パラオに案内しよう」

「改めて。よろしくな、提督」

軽やかに埠頭に降り立った少女——長波は、キシシと笑ってその右手を差し出した。榊原も微笑み、その手を握り返す。

「こちらこそ、よろしく。そしてようこそ、パラオ泊地へ」

次の瞬間、榊原の後ろで控えていたパラオ泊地所属艦娘たちから、歓声が上がった。我先にと長波に駆け寄ると、少々手荒い歓迎をしていた。もみくちゃにされて、「わわっ!？」と驚いた声を上げながらも、長波の表情は晴れやかだった。

「よっしゃーっ！今日は長波の着任を祝って歓迎会だーっ！」

摩耶の号令に全員が「おーっ！」と腕を突き上げる。それから善は急げとばかりに、準備に取り掛かろうと食堂へ駆けて行った。

榊原は、それを苦笑して見送る。今晩は、これまでで一番の賑わいになりそうだ。もちろん、榊原も嬉しい。何と言っても、パラオ泊地に着任して初めての邂逅だ。それに、昔から賑やかなのは大好きだ。

——俺も、準備を手伝わないとな。

料理要員は曙と霞、木曾、そして榊原しかない。歓迎会用の料理を作るなら、人手は必要はずだ。

しかし、榊原は大事なことを失念していた。

歓迎会の準備の前に、出撃によって後回しとなった書類の山を相手取ることを思い出したのは、榊原の秘書艦が半目で彼を連れ出しに来た時だった。長波が榊原に抱いた第一印象が「曙の尻に敷かれている」だったのも、無理からぬことというものである。

曙によって執務室に連行された榊原が、そこから出て来られるのは、歓迎会の準備も大詰めになった時であった。

曙「閑話よ」

執務室で一人書類と向き合っていた榊原は、凝りだした肩のあたりを伸ばそうと、大きく伸びをした。書類が飛ばないようにする重しを乗せると、彼は執務机から立ち、背後の窓の前に立った。

窓を開け放つ。昼前の日差しと空気が心地よかった。基本的に気の悪いこの島は、暑くとも日本のように冷房器具をガンガンにする必要がない。こうして風に当たるだけで、十分な涼を取ることができた。

窓から目を凝らせば、沖にある演習海域の様子が何とか見える。そこには四隻の艦が航行していた。三日前に着任した長波と、彼女を教導する木曾、曙、陽炎だ。

そういうわけで、秘書艦のいない執務室で、彼は書類と格闘していたのであった。

「入るぜ」

「どうぞ」

ノックもそこそこに開かれた扉から、摩耶が入ってきた。扉を開いたことで風が通り抜け、彼女の短い髪が揺れる。女性らしいしなやかな髪だ。

「修復終わったってさ」

「そうか、もうそんな時間か」

BOBの修復は、通常軍艦に比べて遥かに短い。ドックに入渠したBOBは、妖精の手助けでその艦体を構成するブルーアイアンを再度活性化させ、後は自己修復能力に任せて元の形状になるのを待つ。この、ブルーアイアンの再活性化に手間と資材と時間がかかるだけで、一度活性化してしまえば、破孔を塞ぐのに数分と要さない。

ただ、再活性化したブルーアイアンを元の状態に復元するには、艦娘が精神同調する必要がある。妖精による活性化作業が終わった段階で艦娘に声がかかり、精神同調後の最終修復が行われる手筈だ。

「ちよつくらドックに行くてくるから。終わったらまた声を掛ける」

「ああ。よろしく頼む」

それだけ告げて執務室を後にしようとした摩耶は、扉の向こうに半身ほどを入れたところで振り返り、イタズラっぽい笑みを浮かべた。「早く書類終わらせろよ。じゃないと、秘書艦様に『提督がサボってた』って、報告しちまうぜ」

「わかった。すぐにやるから、シャレにならないことはやめてくれ」
午後の演習でこつてり絞られかねない。

懇願した榊原に、それはそれは楽しそうに笑って、摩耶は執務室の扉を閉めた。後に残された榊原は、もう一度だけ肺一杯に新鮮な空気を吸い込むと、窓を閉じて、執務机に向かい合う。キムチよりも苦手な書類たちが、「やあ」と言っているような気がしてならなかった。

「提督、曙！ちよつと来いって！」

午後の演習を終えた榊原と曙に、摩耶が元気よく声を掛けてきた。午後の演習は、榊原が艦隊運動を確認するためのもので、教官役である「曙」に乗り込み、様々な指示を出す。今はまだ、「曙」一隻で運動を行っているが、これからは艦隊全体の指揮も取れるようになることはならない。曙が指摘する通り、榊原にはまだ、学ばなければならぬことが多かった。

激しい艦の運動と、連続して出す指示のせいで若干声が枯れている。できれば早々に風呂に入って、疲れを癒したいところだが、摩耶に呼ばれたのなら仕方がない。二人して足を速め、摩耶に付き従って庁舎へと入った。

「こつちだこつち！」

摩耶が二人を招いたのは、艦娘たちがつめる待機室だった。すでに中には、パラオ泊地所属艦娘が全員集まって、海図台を囲んでいた。

「お、来たな」

三人の入室に気付いた木曾が、顔を上げて口角を吊り上げた。

「どうかしたのか？」

全員が囲む海図台を覗こうとした榊原の前に、摩耶が両手を広げて立ち塞がった。

「おっと、ちよつと待ってくれ提督」

「いいけど・・・一体何があるんだ？」

益々気になるが、何か深刻なものというわけではなさそう。そういう意味で筋肉を弛緩させて、それでは摩耶が呼んだ理由は何だろうか、さらに興味を引かれた。

「んーと、どっから話したもんかなー」

「もったい付けずに、早く言いなさいよ」

若干イライラした様子で曙が急かす。慌てるなって、と彼女を宥めた摩耶は、おもむろに語り始めた。

「妙高型姉妹は知ってたんだろ？」

「あの四人がどうかしたの？」

「あいつら、全員所属艦隊がバラバラだろ？文通はしてるみてえだけど、直接会えるのは年に二、三回程度なんだってさ」

摩耶の言わんとしていることが掴めずに、榊原は「そうか」と曖昧に頷くことしかできなかった。それに構うことなく、摩耶は話を続ける。

「でもよ、『心だけでも一緒にいよう』って、自分たちで妙高型の紋章みたいなを作って、艦体に描いてんだ」

「ほう・・・」

——心だけでも一緒にいよう、か。

胸に沁みるような言葉だ。

「その話を聞いてさ、考えたんだ」

摩耶は殊更イタズラっぽい笑みを浮かべて、海図台の上から何かを取った。長方形のそれは、榊原の見た限りではスケッチブックのように見える。

「じゃーんー」

摩耶はそれをめくる。描かれていたのは、やはり絵だった。

ラフ画だが、そういつたことに詳しくない榊原でも一目で上手いかわかる。三日月を背景に、艦の碇、そして碇に体を預ける長髪の女性

——女神だろうか。

「これは・・・」

「この絵をさ、うちの艦隊の紋章にしようぜ。横須賀鎮守府パラオ特

務戦隊、みたいな感じだよ」

キラキラと眩しい目で、摩耶が榊原を見つめる。程度の違いはあれど、他の艦娘たちも同じように、期待の眼差しでこちらを見ていた。「へえ……。なかなか上手いじゃない。誰が描いたの?」

極力抑えようとしているが、曙も興味津々なのがまるわかりだった。彼女の質問に、控えめに手を上げたのは、長波だ。顔をわずかに染めて、照れたように頬を掻く。

「い、いやー……。なんか、そんなにべた褒めされると、照れるな」
「長波、絵上手いな」

榊原も褒めると、長波はさらに照れたように、長めの袖を揺らした。「な、なんていうか……。描いてみたら、意外と描けたっていうか」
そういう彼女の表情は、照れと同時にどこか戸惑いのような色が見て取れた。

ふむ。興味深い話だ。彼女は、特に練習をするということもなく、これだけの絵を描くことができたのだ。

——艦娘の個性は、顕現した時からある程度備わっているのか。興味と疑問は尽きないが、ともあれ、今はそういう話は抜きだ。気付いたことを頭の中のメモに書き込むと、それを隅にやる。摩耶からスケッチブックを受け取り、曙と共にためつすがめつして、大きく頷いた。滑らかなタッチ。流れるような女神の髪と、力強い碇。背後の三日月に向かって今にも歌いだしそうな、生き生きとした唇。

「いいな、この絵。俺は好きだ」
「だろ?なあ、どうだよ提督ー。いいだろー?」

全員の意味を代弁するように摩耶が言う。木曾、満潮、霞、陽炎。長波はどこか不安げだ。そして、隣の曙は、
「あたしは賛成」

と雄弁に語る眼差しで、まだスケッチブックの絵を見ていた。「ロゴは気に入った。ただ、その……。横須賀鎮守府パラオ特務戦隊っていうのは、ちよつとどうなんだ?」

榊原の言葉に歓声が上がった。ただ一人、
「なん……。だと……」

摩耶を除いて。愕然とした表情の摩耶を見て、榊原が内心首を傾げた。今のセリフのどこに、摩耶があごが外れるほどがっかりするような要素があっただろうか。

その答えを知っているのか、木曾がその肩に手を置く。ニヤニヤと、勝ち誇ったような笑みを浮かべている。

「残念だったな、摩耶」

「ぐぎぎ・・・」

心底悔しそうに睨んだ摩耶に代わり、木曾が前に出る。ヒョイと曙からスケッチブックを受け取り、それを掲げて部屋を後にしようとした。

「妖精さんに頼んで、描いてもらってくるわ。艦橋の横でいいだろう？」

異議なしの声が上がリ、木曾に続いて長波もその場を後にした。描いた張本人の彼女が、紋章の書入れを直接指示するつもりなのだろう。

「くっそ、あのやろ・・・」

・・・なんで摩耶がここまで悔しそうなのか。榊原にはいまだによくわからなかった。そこへ解説を入れてくれたのは、腕組みをして溜息を吐いた満潮だった。二つに束ねた髪が、頭を振る仕種に合わせて左右に揺れる。

「あの名前、摩耶が考えたのよ」

「・・・なるほど」

原因は俺か。榊原は、彼女渾身の出来のネーミングをばつさりと切ってしまったわけである。

「ま、待て提督。実はもう一つ、候補があるんだよ」

「・・・聞こうか」

若干の罪悪感が湧かなくもなかった榊原は、摩耶の続きを促す。ただし、ここまでの勘からして、ロクなネーミングが出てくるとは思えなかった。

「三日月夜の鋼鉄乙女たち」

摩耶が大真面目に考えた艦隊名を告げた時、場の空気がシンと静まり返った。

「・・・い、意外といいセンスじゃない」

珍しく頬を上気させた霞がパイとそっぽを向いて賛意を示した。

月夜の海は、パラオの国旗のモチーフとも言われる。日本国旗に似たパラオの国旗は、青地に美しい黄色の円が描かれる。そんなパラオの地を守るこの艦隊に、ピッタリのネーミングと言えた。若干厨二病っぽい気がしないでもないが。

「じゃあ、決まりだな」

榊原は笑った。摩耶が拳を握り、グツとガッツポーズをした。

『三日月夜の鋼鉄乙女たち』。自らをそう名乗り、艦橋の横に、月夜に歌う美しい女神が描かれたBOBたち。若き提督と、個性的な艦娘たちが所属するパラオ泊地艦隊がその勇名を馳せるのは、まだ先の話である。

◇

「司令官、終わりました・・・よ？」

ノックの音に続いて扉を開き、部屋の主に呼びかけた吹雪は、自らの司令官が満面の笑みで書類を読み込んでいるのを眺めて、不思議そうに思う前にこう言い放った。

「司令官・・・ついに頭が・・・」

「おかしくなってないからな」

とつさに釘を刺されるも、しばらく疑いの目で彼を見つめる。秋山は眉を八の字に下げて、柔らかな溜息を吐いた。

「つくづく、面白いやつだな、榊原少佐は」

ピラツ。手に持っていた書類を机の上に置いて、秋山はさも可笑しそうに微笑んだ。書類は、大きさからして戦闘詳細だろうか。パラオからルソンを経由しての定期便が入港したのは正午だから、早速それを読んでいたのだろう。

最近の秋山は、パラオ泊地の動向に終始ご執心であった。そんな彼の様子も、若干面白くないのもまた、事実である。

「何かあったんですか？」

給湯室に入ってお茶を淹れる準備をしながら尋ねる。口の端に笑

いを含んで、秋山は答えた。

「艦隊の名前を決めたらしい」

「艦隊の名前ですか？」

「二つ名、ってやつだな」

「へえー。それは、面白いことを考えてますね」

コポコポと音を立てて沸いたポットのスイッチが上がり、それに合わせて湯呑みと急須を用意する。今日は新しい茶葉を使ってみようかな。

「どんな二つ名ですか？」

「三日月夜の鋼鉄乙女たち」

間違いなく摩耶さんの考えた名前だ。吹雪は直感して、お盆に乗せた湯呑みを運んでいく。二つの湯呑みからは、温かな湯気が立ち上って茶葉のいい香りがしていた。

「パラオ泊地にはぴったりの名前ですね」

「まったくだ」

ありがとう、と湯呑みを受け取った秋山は、大きく笑ってから口を付けた。

「あっつ!!」

途端、予想以上に熱かったお茶に、慌てて舌を冷やす。ヒーヒー言いながら、涙目でこちらを見る秋山に対し、吹雪はいい笑顔のままだ。

「吹雪さん、熱いです」

「そうですか」

「・・・なんか、怒ってらっしゃいます？」

「いえ、別に」

それから吹雪は、フーフーと冷まして自分の湯呑みに口付ける。あれやこれやと、こちらの機嫌を取ろうとする秋山から、週末デートの約束を引き出したところで、吹雪は満面の笑みを浮かべるのだった。

新たな出会い 建造ノ条件

榊原がパラオ泊地に着任して、一月が経った。

最初の襲撃以来、深海棲艦の接近は起きていない。代わりに潜水艦の出現が増えているが、過去の各泊地のデータを鑑みるに、常識の範囲内と言えた。現在の任務は、もっぱらこの潜水艦の掃討と、輸送船や連絡船の護衛だった。ルソンを経由してやってくるこれらの船と護衛艦を迎えに行くのだ。

泊地は、すでに本格的な稼働を始めている。工廠部の稼働は二週間前、食堂部も同時に着任し、やっと自炊生活から解放された摩耶は涙を浮かべて喜んでいた。

工廠部が稼働を始めたことで、各種兵装の開発も進められていた。当面の目標は、全艦に配備する分の三式水中探信儀と三式爆雷投射機の開発だ。

開発は、建造の装備版と言える。主砲や対空砲、魚雷といったBOBに最初から備わっている基本装備とは別に、オプションとなる装備を製作し、必要に応じて艦体に組み込むことができた。つまり、やろうと思えば、駆逐艦に戦艦の主砲を搭載することも、理論上は可能なのだ。

ただ、それをやったところで、駆逐艦は海に出た瞬間沈んでしまうのが関の山である。BOBとて船なのだ。過剰な武装は重心の上昇と復元力の低下をもたらす。

軍艦というのは、あらゆる無駄を省いて設計されている。戦艦を例に取れば、主砲と射撃指揮装置、装甲が絶妙なバランスをもってその艦体の上に配置されているのだ。そのバランスを崩す——主砲の換装等は、すなわち艦体の再設計を求められることとなる。

また、開発・装備できるものにも制限があった。人類製の現代兵器は開発することも、装備することもできなかった。理由はよくわかっていないが、BOBが拒絶反応を示すのだ。丁度、血液型の合わない

人間から輸血を受けた時のように。

これらの理由があり、BOBは基本的に元となった軍艦が装備していた主兵装をそのまま使用し、その他の補助装備——対潜兵器や電探、機銃の増設等については、重量バランス等を鑑みながら、ある程度制限を設けて搭載することとしていた。

さて、そうした換装の方法だが、至ってシンプルだ。艦体に乗つけて、精神同調と接続するだけである。もつとも、簡単に言っているが、これをやるにはブルーアイアンを扱うことのできる妖精が必要だった。人類はいまだに、ブルーアイアンの技術に関してはノータッチなのだから。

パラオ泊地の工廠部主任は、夏川明美技師。常にぼさぼさ頭の女性だ。ここに、開発したい装備に合わせて、各BOBから十数名の妖精が加わって開発を担当する。現在は対潜兵装の開発を推進しているため、「木曾」と「曙」から六人ずつが派遣されていた。

見てくれはアレだが、夏川の腕は本物だ。失敗し、無為に資材を捨てることも多い開発において、彼女のチームはすでに全艦が配備する分プラス予備の九三式水中聴音器を製作し、三式についても三隻分を揃えていた。現在は、対潜哨戒に当たるBOBがこれを交代で使っている。

対潜哨戒の精度は、確実に上がった。

そんな、順風満帆なパラオ泊地であったが、問題がないわけではない。航空兵力が足りないのだ。

バベルダオブ島には、使われなくなった空港がある。ここに、第一二航空戦闘団が着任していた。所属機体は人類製であるが、敵艦載機を落とすだけなら、人類製の最新鋭ジェット戦闘機でも可能だ。

ただ、装備類が圧倒的に足りなかった。元々、国防に当てられるお金も資材も、日本はあまり多くない。今でこそ、非常時ということでもそれなりに便宜を図ってもらえているが、それでもBOBを運用するので手一杯だ。深海棲艦に対して有効打を与えられない、高価な現代兵器は、細々と生産されているだけで、それも本土防衛の部隊に回るのが精々となっている。

第一二航空戦闘団も、あまり満足のいくものではない。所属機体は練習機を改造したT-4や、F-4であり、レシプロ機と変わりない性能の深海棲艦艦載機に対しては十分に優位であるが、装備的に恵まれているとは言えなかった。

艦娘の航空戦力はどうなっているのだろうか。パラオ泊地にも、機動部隊に力を入れる呉から、軽空母が一隻配備される予定だった。着任が遅れているのは、改装による新装備の調整と、慣熟を行っているからとのことだ。件の軽空母には、海軍で初めて開発できた装備が組み込まれており、今後のためにもそのデータを取っているのだという。

最新装備を持った軽空母を優先的に回してもらえということから、パラオの重要性が窺えた。

◇

執務室に詰める榊原は、数日前からある書類とにらめっこを続けていた。初期の嵐のような書類たちが去り、今はいくらか落ち着いている。この際に、まだ読み込んでいなかった資料に手を付けようとしたところ、ある書類に目が留まったのであった。

扉がノックされたのは、そんな時であった。榊原が答えると、ゆっくりと扉が開かれ、群青の長髪をサイドテールにしたパラオ泊地秘書艦が入ってきた。

「・・・何読んでるの?」

入るなり、曙は半目で尋ねた。読んでいたページに指を差し入れたまま、榊原は資料の表紙を掲げる。

『建造資料』

無機質な活字で表紙にそう書かれているのは、秋山が持たせてくれた、過去の建造に関する記録であった。

「建造の資料を、ね」

「ふーん」

曙は興味なさげに生返事をする。

「ねえ、それで」

話題を転換するべく、彼女は早速本題を切り出した。

「執務が終わったつてのに、わざわざあたしを呼び出した理由は、何？」

時刻は、まだお昼には早い。今日の執務はかなり早く終わったので、榊原はこうして資料を読みふけることができた。

「それなんだがな」

ひとまず資料を閉じて、秘書艦の目をまっすぐに見据える。澄んだ蒼を微かに帯びる、大きな瞳がそこにはあった。

「建造を、やってみようと思う」

そんな事だろうと思つた、とでも言うように、曙は盛大に溜息を吐いて、腕組みをする。これが、彼女がものを考えるときの癖だというのは、最近わかってきたことだ。

「最初に言つとくけど、クソ提督その資料は全部読んだんでしょ？」

「もちろんだ」

「じゃあ、この一年、建造で新たな艦娘との邂逅がなされていないのを知つててなお、建造をするつての？」

確認する曙に、榊原は無言で頷いた。

建造は、『開発資材』と呼ばれる霊媒とある量の資材を憑代として、船魂の片鱗を召喚する儀式だ。召喚された片鱗は、言わばパズルのピースであり、これを基にして船魂を顕現が可能となるまで集める。この作業にかかる時間は『建造時間』と呼ばれ、大型艦の船魂であるほど長くなる傾向があった。

ただし、この建造も、開発と同じくいつも成功するわけではなかった。召喚された片鱗が、すでに顕現した船魂のものであることがあり、その場合は、集めるべき船魂がすでに形を持っているため、顕現を行おうとしても、わずかばかりのブルーアイアンになるだけだ。これは、工廠部などで研究開発のために利用されている。

海軍が各鎮守府、泊地での建造の成果についてまとめた『建造資料』によれば、日本ではここ一年、建造による新たな艦娘との邂逅には成功していなかった。まるで何らかの制限がかかったように、どんな資材配分にしても、新規艦が召喚されることはなかったのだ。

榊原は、それに挑もうとしている。

「説明して」

資材を無駄にしかねない自らの指揮官に、曙も有無を言わさぬ口調で問い詰める。『建造資料』を執務机に置いた榊原は、この数日間考え続けた内容を説明し始めた。

「艦娘の邂逅の方法としては、海域での邂逅がパッシブ、建造がアクティブという認識で間違いないよな？」

「妙な言い回しね。でも、それで間違いないわ」

「船魂から呼び掛けてくるのを待つのではなく、こちらからコンタクトを試みる。それが建造だ。だが、そこになぜ、制限がかかるのか。俺なりの仮説を考えてた」

「その仮説を、検証してみたい？」

理解の早い秘書艦に微笑む。今日も彼女は冴えている。

「そういうことだ」

肯定すると、曙が続きを促す。

「建造に制限があるのは、船魂の眠りに二つの段階があるからじゃないか？」

「と、言うത്？」

「浅い眠りと、深い眠り。浅い眠りの船魂は、こちらからの呼び掛けに気付いてくれるが、深い眠りの船魂は、気付いてくれないんじゃないかと思っただ。いや、眠りより封印と言った方がいいか？」

曙の目が見開かれた。冷静な瞳の光に、自然と榊原の思考も落ち着く。

「面白い考えだね。確かにそれなら、建造に制限がかかる理由も納得いく。でも、海域での邂逅はどう説明するの？」

「そっちは、元々建造と方法も条件も違うから詳しくは言えないが、何らかの条件があつて、船魂の方からこっちに接触してくるんだ。おそらく、外部への発信器官のようなものが、作用しているんだと思う」
「なるほど。続けて」

何とも不躰な物言いだ、彼女にとってはこれが平常運転だ。むしろ落ち着くと思ってしまう自分は、マゾではないと思いたい。

「太平洋戦争に参加した軍艦で、まだ顕現していない艦がいるだろ？」

例えば大和や、大鳳といった」

「戦艦と空母に関する制限って、露骨よね」

曙の言った通りだった。現在世界の海に浮かぶ戦艦のうち、一六インチ級の砲を搭載するのは、第二次世界大戦以前に竣工した『ビッグ7』と呼ばれる七隻だけだ。英国の『キング・ジョージ五世』級や、独国の『ビスマルク』級などと同時期に建造された『大和』型や米国の『ノースカロライナ』級といった一六インチ以上の砲を積む戦艦は、顕現されていなかった。

空母にも似たようなことが言えた。『大鳳』や『雲龍』型、米国の『エセックス』級や『インディペンデンス』級、英国の『イラストリアス』級の後期型等は、やはり顕現できていない。駆逐艦などより余程制限が露骨だった。

「それで？結局クソ提督は何がしたいわけ？」

「深い眠りの方を、建造してみたい」

「具体的には、どうするの？」

「単純に、コンタクトを取るためのシグナルを、強くしてみようと思う」

榊原が言うのは、開発資材のことだ。ようはこれが、船魂へ呼び掛ける通信機のようなものであり、シグナルを強くしたければ、その分開発資材の量を増やせばいい。榊原はそう考えていた。

「言うならば、大出力船魂召喚儀式——大型建造とでも呼ぼうか」

説明を締めくくった榊原は、曙の方を窺う。表情を変えず、ただじつと、見定めるような視線でこちらを見つめていた曙の双眸が、フイツと外れた。それから、溜息混じりに口を開く。

「開発資材を増やすってことは、それだけ消費する資材の量も増やすわけね？」

「その通りだ」

「・・・今の備蓄量なら、三回が限度よ。それで実績が上がらなかったら、検証は中止。それでいいわね」

曙が頭の中で導き出したであろう回数は、凶らずも榊原の出した結論と同じだった。

「それが妥当だな。夏川技師には、俺から相談に行ってみる」

考察中も、彼女には色々アドバイスをもらった。最終的に、可能か否かを判断するのは、工廠部主任であり建造も取り仕切る彼女だ。

方針は決まった。大型建造の実施。果たしてそれは、吉と出るか凶と出るか。艦娘との邂逅における、転換点となりうるのか。

太陽が真上から少し西に傾く頃、お昼を告げるチャイムが、執務室にも聞こえてきた。

扉ヲ開ク時

通称を『大型建造』とされた榊原の考えた手法は、夏川によっていくらかの修正をされた後、正式に行うことが決まった。実施日は、それから三日後のことだ。

建造には、邂逅者となる艦娘と、船魂を集めるための妖精が必要だ。これに名乗りを上げたのは、曙だった。

「建造つてのは、普通秘書艦が行うんだから。あたしがやるのは当然でしょ」

彼女は平然と言った。

開発資材は確かに通信機のようなものだが、実際にコンタクトを取るのは邂逅者である艦娘だ。出力の強化は、それだけ負担が増加することも予想された。

一番浮きドックでは、その日の朝から建造の準備が進んでいた。開発資材と、鋼材やボーキサイトといった資材が運び込まれ、妖精や港湾部員が動き回る。建造された艦を引き出すために、タグボートも準備をしている。

「なんか、落ち着かない様子だねえ」

一番浮きドックの管制室で、記録を取るためのパソコンを端末に繋ぎながら、細身の眼鏡をかけた夏川が榊原に言った。髪は相変わらずぼさぼさであるが、目つきは真実を探求したいと願う研究者そのものだ。

「そう、見えますか」

夏川とは、余り実年齢は変わらないはずだ。彼女の方がいくらかか老成して見えるのは、まだ自分が若い青年だからだろうか。

「見えるねえ」

口調は変わらない。繋ぎ終わったパソコンを手隙のスペースに置いて、夏川はその画面とにらめっこをしている。時折キーボードを打つ手つきが異様に早いのは、職業柄ゆえなのだろうか。

「ねえ」

それだけの言葉と共に管制室に入ってきたのは、これから大型建造

に挑むパラオ泊地の秘書艦だ。右側で一つにされた長髪を揺らす曙は、キリツと吊り上げられた目を細くして、管制室内の二人に言った。「準備、できた？」

「ああうん、もうちよつと待って」

夏川がひらひら手を振る。そこからのキーボードを打つ早さは、それまでよりも二割ほど増していた。カタカタという音が連続してメロディーを奏でる。

管制室に入った曙は、夏川に落ち着きがないと評された榊原の横に立って、眼下のドックを見つめた。同じようにしている榊原は、横目でそれがわかった。

「落ち着きなさいよ、クソ提督」

「・・・技師長と同じこと言うんだな」

そんなに落ち着きなく見えるだろうか。

「初めての建造で、しかも実験的建造だったのはわかるけど。ちよつとソワソワしすぎ」

榊原のソワソワした視線は、ドックを見渡して、埠頭からこちらを窺っている人影に気付いた。スケッチブックに、なにやら熱心に書きつけているのが長波。その横で小さな鳥を餌付けしているのは陽炎だろうか。どうやら建造の様子を窺っているらしかった。

——気になるのは、みんな同じ、か。

「俺が気にしても仕方ないしなあ」

「そういうこと」

成功するかどうかは未知数だ。仮説は仮説で、榊原が都合よく解釈しただけかもしれない。深く眠る船魂は、彼が思う以上に堅い壁の向こうかもしれない。

だがそれを確かめるためには、やってみるしかないのだ。それが、人間が唯一知っている、真実の探求の仕方なのだから。

「成功は約束できないけど。あたしに任せなさい」

自信たっぷりの曙の表情を見ると、あれこれ心配するのが馬鹿らしくなってくる。それが彼女に勇気づけられているのだと気づけるくらいには、自分は大人だと思っていだろうか。

「よろしく頼むよ」

榊原の言葉に、曙は満足そうに頷いた。

「これより、建造に入ります。各作業員は退避を」

全ての準備が整ったのを確認した夏川が、マイクを掴んで第一浮きドックへ知らせた。各部の準備をしていた作業員のヘルメットが、ドックから離れていった。

「曙、そっちはどう？」

『いつでもどうぞ』

ただ一人、邂逅者である曙だけが、ドックのど真ん中に資材と共に立っていた。時折吹き抜ける風が長い髪を揺らし、キラキラと輝かせる。静かにたたずむ姿は、しゃんと伸びた背筋と共に、頼もしくもまた神々しくも映った。こうして見るのがなければ忘れてしまいうな、艦娘独特の雰囲気だった。

作業員が全員退避したことが確認された。夏川がパソコンと端末両方の数値を確かめ、榊原を向く。

「始めるよ」

「はい。お願いします」

榊原もはつきり頷いた。夏川は再びマイクを取る。

「じゃ、始めようか」

チラリ。一瞬曙と目が合った気がした。

普段の二十倍の出力を確保できるという量の開発資材に、曙が手を触れる。瞬間、その周囲の空間が妖しく脈を打ったように、榊原には見えた。記憶を手繰るまでもなく、それがドロップの時に見た船魂の脈動に似ていると、榊原は気づいた。

「発信始め」

夏川がスイッチを入れた。

あの時と同じだ。爆発的な光線は瞬く間にドックを、そして榊原の視界を包み込み、金色というよりもむしろ乳白色で辺りの空間に充満していた。生命の息吹をまとう大きな拍動。大気を震わせる、神秘的なまでのリズム。生きとし生けるもの、それは母なる地球に刻まれた

ハーモニー。

光は収束へと向かう。幾筋ものオーロラのような、輝く龍たちは、自らの居場所へと帰っていく。あるべき魂の行き場は、それを優しく包み込む曙の手のひらへと吸い込まれていった。

——綺麗だ。

ありきたりの言葉しか知らないことを悔やむのは、ものを書く人間ばかりだと思っていた。だが今、目の前に広がる絶景を言い表す言葉を知らないことに、榊原はわずかな後悔と寂寥の感を抱いた。

それは表すならば、母なる美しさ。たゆたう海のごとき、大らかな抱擁。光と影、くつきりと分かれた曙の表情は、そこにいるもの全てを魅了する、万物の祖たるものきらめきだ。今、この時。海は彼女であり、世界は彼女に守られていた。そう錯覚するほどの、圧倒的な存在感が、パラオ泊地を支配している。

集まった光の粒たちは、特大の蛍となつて曙の手のひらに包まれている。以前、長波がドロップした時よりは、その光は小さく儂い。魂の片鱗という意味が、今はつきりとわかった。

海へと解き放つには、あまりにもか弱い。

曙が片鱗に口付ける。脈を打った片鱗は、ドック内へと運び込まれていた資材の上にゆっくりと降り立ち、心臓のようにリズムを刻みながらそこに鎮座した。

片鱗は舞い降りた。後は、

——これが、船魂まで育つかどうか。

仮説はあくまで仮説でしかない。仮説が正しいと立証されるまでは。

「片鱗、着床を確認」

着床か。言い得て妙だった。船魂が大洋に出でて艦娘となるための、成長期間。さしずめドックは子宮であり、資材の山は胎盤であるうか。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか」

「・・・それ、どっちも出たらダメな奴ですよね」

「細かいことは気にしないの」

パソコンの前で構え、夏川は端末を見続ける。そこには『建造時間』の文字とタイマーが映されており、着床した魂の集積が始まると、おおよその時間が表示されるのだ。

タイマーは、一向に時間を示さない。じりじりとした沈黙の時間が流れる。

失敗か？やはり、仮説は間違っていたのか？額を汗が流れた。

「・・・来た」

そう言った夏川の声には、喜色がありありと浮かんでいた。

思わず、管制室の端末を凝視した。それまで、無慈悲なゼロの羅列だったタイマーが、にわかには動きだしたのだ。一秒ごとに数字が切り替わり、船魂の集積が終わるまでの時を刻み始めている。

成功だ。仮説は正しかった。扉は開かれたのだ。

一年もの沈黙を破り、今新たな船魂が、この世に生を受けようとしている。

「・・・やった、んですよね」

「そう。大成功と言っているいわね」

夏川はまた慌ただしくキーボードを叩いている。世紀の大発見かもしれないこの成果を、ひとつも漏らさず記録しようとするその目は、この世の真理を探求しようという光に満ちていた。

『ねえ、どうなったの』

片鱗の放つ光に照らされるドックには、いまだに曙が立っている。慈しむように片鱗を見つめていた曙は、くつきりと浮き上がる人並み以上に整った顔を、管制室の方へと向けた。

打ち込みに夢中な夏川に代わって、榊原がマイクを取った。

「無事、成功だそうだ」

『そう。よかった』

あまりにもそっけないその口調の端に、わずかばかりの喜びと安堵を、榊原は見つけることができた。

『で？建造時間は？』

曙は重ねて訪ねる。言われて、先程ちゃんと見ていなかった、端末に表示される建造時間のタイマーを確認した榊原は、そこに映る残り

時間に絶句した。

七時間五十八分二十二秒。

建造時間は、およそ八時間。

『ちよつと。どうしたのよ』

黙ってしまったのを訝しむ曙の声で我に返ると、榊原はとりあえず、ありのままを伝えることにした。

「八時間だ」

『・・・は？』

我が耳を疑うというのは、今の曙のことを言うのだろう。

「建造時間は、八時間だ」

『八時間!?!』

普段の彼女からは想像もつかないような、素つ頓狂な声と、それを慌てて取り繕うような咳払い。間違いない、今のは彼女の素だ。

過去に行われた建造において、最長建造時間となったのは、“翔鶴”
“建造時の六時間だ。現在米国の“ヨークタウン”級や英国の“イ
ラストリアス”級前期型と並ぶ最新鋭大型空母である“翔鶴”を二
時間も上回る建造時間ということは――

――大和型、あるいは大鳳、雲龍型か。

いずれにせよ、結果如何がわかるのは夕方になってからだ。

興奮状態でも、変なところで冷静な自分に気づいて、榊原は苦笑する。

『もう上がるわよ。八時間も待ってらんないから』

曙がドックからの退場を宣言して、ひとまず建造は終了した。

◇

夕闇――と言うには少し早い、西に大きく傾いた陽光の中で、パラオ泊地所属の全艦娘は第一浮きドックに一番近い埠頭に、電線にとまる雀よろしく並んで立っていた。榊原もその中に加わっている。八人分の目線は、そのどれもが第一浮きドック内部の、光輝く船魂を見つめていた。

船魂の集積が終了したとの連絡を受けたのは、十分ほど前だ。すでに今日の課業は全て終えており、こうして全員が集まることになっ

た。

「しつかし、どんな奴が来るんだろうな」

腰に左手を当てる摩耶は、反対の右手を庇にして、ドックの様子を窺っていた。新しい仲間を楽しみにしているのがありありとわかる双眸は、夕陽も相まってキラキラと笑っている。

『ドック、注水開始』

スピーカーから、管制室の夏川の声がした。すぐに浮きドックが沈降を始める。海に浮いて乾ドックとなっていた浮きドック内に、ゆつくりと海水が流入していった。その脇では、艦を引き出すためのタグボートが控えている。

沈降に合わせて、ドック内の水かさが増していく。海面は刻々船魂に接近していった。そして。

本来あるべき海へと触れた船魂が、朝陽を思わせる鮮やかな閃光を放って弾けた。燦々と海面を照らす光と、立ち込める水蒸気。その内側で、巨大な何かが形作られる気配。

ドックの沈降が止まる頃に、劇的な変化は終わっていた。霧がかかった景色が晴れるにしたがって、全員が息を呑むのがわかった。

接近したタグボートが、その艦を引き出すために接近を試みている。水蒸気のカーテンは完全に晴れて、マンモスタンカーも収容できるといふ浮きドックからはみ出んばかりのその艦の姿が、夕陽の陰影を伴って浮き彫りとなっていた。

誰もが、口を閉じたままだ。沈黙を強要されるほどの、圧倒的な存在感と威容。それは、海洋の覇者たるもののみ、許されているもの。なだらかな坂を描く艦首。たつぷりとポリウムのある艦体。自己主張の強い巨大な三連装砲塔。スツキリとまとまった艦上構造物。丈高くもがっしりとした塔状の艦橋。見るからに力強い傾斜煙突。シャープなマスト。

「大和……」

曙が眩く。

タグボートによってドックから引き出され、ついにその巨軀を海上

に浮かべた史上最大最強の戦艦は、夕陽に映える泊地を背景にして、優雅にたたずんでいた。

黒鉄ノ城

彼女は彷徨っていた。

深い、深い眠りの中を。

それはまるで、封印されていたような感覚。

孤独と、安らぎ。

悲しみと、決意。

絶望と、祈り。

永遠とも思える闇。

否、光あつての闇であり、光のなかった彼女にとって、そこは闇ではなく、ただ自分の居場所でしかなかった。

けれども、彼女は気づいた。

ある時差し込んだ、一筋の光によって。

光が教えたのだ、今いる場所が闇であることを。

彼女は手を伸ばす。

呼びかける、温もりに溢れた光に。

私を呼ぶ光に。

わたしはだあれ？

わたしはだあれ。

私は。

私は、大和。

戦艦、大和。

その瞬間、時間と記憶の奔流が、彼女を押し流した。
長大な時間の体験が、彼女に使命を授けた時。

彼女は、闇の中で眠っていたことを忘れていた。

*

鋼鉄製の浮き城は、ドックから引き出されたことでその威容をさらに際立たせていた。空はすでに夕焼けと言って差し支えない色であり、それがまたその艦に差す後光のようで存在を主張する。しかしその凶暴なまでの魅力には、隠しようのない工学的な美しさと、深窓の令嬢を思わせるたおやかさがあつた。

戦艦“大和”。誰もが知る、世界最大の戦艦だ。

「いや待て。大和だって断定するのは、早計じゃないか？」

呆気にとられている中、まず初めに口を開いた摩耶は、そう指摘した。

「確かに、それもそうだな」

数ある日本戦艦の中でも、“大和”型の二隻は特に見分けるのが難しい艦として有名だ。機銃等の増設をしていない建造当時の艦影は、正に瓜二つである。

ドックから引き出されたのは、両舷に一五・五サンチ三連装砲を備えている、建造当時のものだ。これでは、大和か武蔵か見分けるのは無理である。

さて、どうしたものか。

「直接訊くしかないな」

「直接訊くしかないわね」

「直接訊くしかねえな」

くしくも、榊原、曙、摩耶の三人の意見は一致した。幸い、甲板へと上がるためのラツタルは出ている。乗り込むことは可能だ。

「内火艇を出す。ちよつと待ってくれ」

長波が着任してから、摩耶はBOBを埠頭ではなく少し沖に泊めていた。そのため、相互に行き来するための艦載艇——内火艇を、常に埠頭に着けている。これなら、すぐに接近できるはずだ。

妖精さんの手で操作される内火艇はすぐに動かせた。

「木曾、しばらく待っててくれ。俺と曙、摩耶で挨拶に行ってくる」

「わかった。その間は預かる」

主に自由奔放な駆逐艦——というか、陽炎と長波のことだ。

寄せられた内火艇に摩耶、曙の順で乗り込み、最後に榊原が足を踏み入れる。すぐに内火艇が動きだし、埠頭を大和型戦艦の方へと離れていった。

「しかし、なんて大ききなんだ」

内火艇で接近したことにより、その大きさはより一層感じられた。まるで山だ。海上にそびえる山。遙かなる頂を見つめる目は、自然と

細くなった。

「摩耶」も大きいと思った。だがこの戦艦に比べれば、その艦体などまるで子供のようにはか見えないことだろう。それほどまでに巨大で、ポリウムを感じさせる存在感があった。

「接舷してくれ」

摩耶の指示に、内火艇を操る妖精がコクコクと頷く。摩耶によく似た、愛らしい妖精だった。

ゆっくりと巨大戦艦の舷側に接近した内火艇の前に、ラツタルが迫る。完全には接舷できないので、この先は飛び移るしかない。

まずは榊原だ。上手くラツタルの一段目に飛び移り、数段を登って次を待つ。

「曙、先行け」

次は摩耶が来ると思ったが、彼女は曙に先を譲った。榊原は曙に手を差し出す。

「ひ、一人で登れるからー」

なぜかムキになった曙は、榊原の手を掴むことなく、内火艇から飛び移り――

「っー」

損ねた。左が上手く一段目に乗らず、バランスを崩す。

「危ないー」

とっさに手を伸ばしたのは、榊原も摩耶も同じだ。なんとか曙の右手を掴んだ榊原は、思いつきり引つ張る。背中側から、摩耶も押してくれたらしかった。

ドスツ。尻もちをつくると、引き寄せた曙の体が圧しかかる。曙の体は華奢で、そして軽い。それでも柔らかかで甘い香りのする少女の体に、改めて艦娘というのがどういう存在なのか、気づかされた気がした。

「大丈夫か？」

「だ、だいじょう」

ぶ、と言い切る前に、曙の動きが止まった。というか固まった。至近距離の彼女の頬が、みるみる朱に染まっていた。

「い、いつまでくつついてんのよ、このクソ提督！」

受け止めた———というか下敷きになったのに、ひどい言われようである。

慌ただしく榊原から離れた曙は、顔を真っ赤にしたままそっぽを向いてしまった。それを可笑しそうに見ながらも喉元まで出かかっている感想を口にしない摩耶を、曙は軽く睨んだ。

「ほらほら、さっさと行こうぜ」

目線だけで榊原を急かす。勾配の急なラツタルを、ほとんどよじ登るようにして、海面からかなりの高みにある甲板へと、三人は上がった。いった。

夕陽に照らされてオレンズに染まった舷側を上りきると、開けた甲板に出る。丁度第一砲塔の辺りだ。呆れたほどに巨大なそれを、榊原はしばし見つめていた。

少し遅れて、曙も甲板に顔を出す。再び榊原が差し出した手は、さっきの件もあったのだろう、遠慮がちに掴まれた。彼女が最後の数段を上るリズムに合わせて、そっと引き上げる。

「あ、ありがと・・・」

上りきった彼女の言葉は、微か過ぎてやっと聞き取れる程度だった。

「摩耶も」

曙が甲板に立つと、最後に上ってくる摩耶にも手を差し出す。目を見開いて驚いた様子だった彼女は、照れたようにしながら手を取り、甲板へと上がった。

「はー、でっけえな」

甲板をぐるりと見回し、天高くそびえる艦橋を見上げた摩耶が、感嘆の声を上げた。

見るからに頑丈そうな艦橋だ。基部には司令塔があり、構造物の中段辺りに第二艦橋、トップは第一艦橋と露天の防空指揮所、さらに射撃指揮装置一式。相当な大きさと太さがあるにもかかわらず、その外観はかなりすっきりとまとまっている。高層ビルを思わせる構造だ。

「目覚めた艦娘は、どこにいるんだ？ やっぱ、艦橋なのか？」

しばらく感傷に浸っていた榊原であったが、ようやく用件を思い出して曙に尋ねる。上を見上げたままの彼女は、無言で首肯した。

——これを、上るのか……。

エレベーターはあったはずだが、機関が動いていない今、稼働しているかどうか。とすると、最頂部まで上る方法はただ一つ。艦橋に張り付いているラツタルを使うことだ。

一度、東京タワーを階段で上ったことを思い出して、榊原はげんなりとした。

艦橋背面のラツタルに向かおうとした榊原であったが、その必要がなくなったことにすぐ気が付いた。艦上構造物群の基部、鋼鉄製の小さな扉がおもむろに開き、中から女性が現れたからだ。

シャナリ。シャナリ。一步を踏み出す度、そんな音が聞こえそうなほど、優美な歩き方だった。一目で、彼女がこの艦の艦娘なのだと思いついた。

背は高い。目測では摩耶より頭一つほど抜けているだろうか。ヒールが高い靴を履いているとはいえ、榊原といい勝負だ。すらりとしたプロポーシヨンと、足元まで届きそうな長い髪。夕陽には不釣り合いな番傘。

三人の背筋が伸びる。甲板をこちらまで歩いてきた彼女は、夕焼けの中で花のように微笑んだ。

「お初にお目にかかります」

言葉の端々に、気品が溢れる。

「始めまして。俺は、パラオ泊地で提督をしている、榊原広人少佐だ。貴艦の名前を伺いたい」

榊原の言葉を黙って聞いていた彼女は、目を閉じて呟くように「榊原、広人少佐」と反芻した。それから再び目を開き、微笑を湛えてこう名乗った。

「始めまして。私は、超弩級戦艦『大和』型、一番艦のやまひよです」場の空気が凍り付いた。

誰も、身じろぎ一つしない。

急速に傾いていく夕陽は、すでに三分の一が水平線の向こうに消え

ている。

沈黙に耐えかねた榊原は、左隣の曙の方へ体を傾けると、微かな声で囁いた。

「……囁んだよな」

「……囁んだわね」

「……囁んじまったな」

やまひよ——もとい、大和と名乗った彼女は、さつきまでの淑やかさはどこへやら、顔を真っ赤に染めて、何かを堪えるように肩を震わせている。十数秒の後、

「……だからイヤだって言ったのにつ!!」

決壊した。両手で顔を覆って、その場にしゃがみ込んでしまう。大和撫子はどこへ行ってしまったのか。手から落ちた番傘が、ハタリと音を立てた。

「し、初対面の殿方の前で、とんだ醜態をつ!大和は…大和はっ!!」
まるで少女のように泣き出してしまった大和に、榊原はただただ困惑するだけだった。

「……おい、殿方。ちゃんと責任取れよ」

「俺のせいか!?!」

摩耶はしれっとした顔をして逃れた。

「何泣かせてんのよ、このクソ提督」

ちやつかり、曙も責を逃れている。

頬を搔いた榊原は、崩れ落ちている大和のそばに寄る。落ちた番傘を拾い上げ、それを片手に、自らもしゃがみ込む。目線は、大和と同じ高さだ。

「大和」

妹たちをあやした時のことを思い出す。時々喧嘩をしていた、小さい妹たちを宥めていたのは、いつも榊原だった。

声を掛けるときは、優しく。彼女の心に、届くように。

目元にうつつすらと涙を浮かべていた大和は、それでも榊原の声に顔を上げてくれた。その双眸に、柔らかく微笑みかける。

「大丈夫。皆、君のことを歓迎しているよ」

ほんとですか。そう呟いた彼女の目元を、そつと白手袋で拭い、それから頭をポンと叩いたのは、ついいつもの癖が出てしまったからだ。

「もちろんだ。会えて嬉しい。これから、よろしく頼む」

片膝をつき、右手を差し出すと、大和は小さく頷いてその手を握り返した。戸惑いながらも、その瞳に笑顔が浮かんだ。

「はい……。よろしくお願ひします、榊原提督」

立ち上がった榊原は、握った大和の手を引き上げる。姿勢よく立つ彼女は、やはり榊原と同じくらいの背丈があった。番傘を手渡す。

「彼女たちは、曙と摩耶」

一緒に乗り込んだ二人を紹介する。摩耶はイタズラっぽい笑みで、曙はそつぽを向いて「よろしく」と言った。

「さあ、今夜は歓迎会だ。他の皆も待つてる」

そう言って促し、先ほど乗り込んできた内火艇へと向かう。摩耶が先頭でラツタルを勢いよく下つていき、それに大和が続く。榊原は最後だから、三番目は曙だ。

先に降りる曙が榊原の前を通るとき、チラリとこちらを流し見た。

「……さつき。女性の口説き方としては○点」

「……そりやどうも」

若干不機嫌な気がしたが、それを確かめる間もなく、曙はさつきとラツタルを駆け降りてしまう。まだ慣れない榊原は、一步一步気をつけながら、急勾配を降りていった。

「遅い！クソ提督！」

まるで先任伍長のようなことをのたまう曙に苦笑して、榊原は少しペースを早めた。

その日の夕食は、食堂部が腕によりをかけた料理の数々が並ぶこととなった。

大和八国ノマホロバ

黒鉄の城が、ゆっくりと動きだした。緩慢な動きでも、六万トンなど軽く超えている艦体を動かすために上げられる機関の轟音は、並の船の追従など許さない。晴れ渡った午後空の下を、榊原を乗せた「大和」は、泊地沖の演習海域へ向けて、微速で向かっていく。

「舵ブレてるぞ、まっすぐ」

「は、はい」

同じく艦橋に立つ摩耶が、大和に注意する。これだけの規模の艦だ。舵一つとっても、その動きには細心の注意が払われるのだろう。

海面から四〇メートル近い高さの艦橋から見える景色は、壮観の一言に尽きた。ただし、大和の方にはその景色を楽しむ余裕はないらしく、摩耶の指導のもとで艦の操作に集中している。沖に出るまでは手待ち無沙汰な榊原は、微速から半速に増速した「大和」の右舷側を見た。

駆逐艦が一隻、随伴している。細く絞られた艦体一杯に武装を積み込んだ快速艦は、「大和」に寄り添うようにして波間を進んでいた。

並走する「曙」の艦橋から、こちらを窺う気配がした。実際には、角度的な問題で直接見えることはないのだが、何となくそんな感じが生じていた。

大和着任から三日。今日から本格的な習熟を行う。戦艦だけあって、一度動くために必要な資材は馬鹿にならないが、調べた結果、「大和」の燃費はむしろ良好であることがわかっていて。そもそも、B O Bの機関は通常艦よりも二割から三割ほど熱効率がいいので、基本的に低燃費の艦が多い。それに、こんなところで出し惜しみしても仕方ないので、大和の一日も早い戦力化に向けて、積極的に錬成に努めていくことになった。

通常軍艦の慣熟には、半年近くがかかると言われる。大型艦では千人を越える乗員が、各々の持ち場に慣れ、連携が確立するまでにそれだけの時間がかかるのだ。それに対しB O Bは、基本的な動きを艦娘一人で制御できるので、艦娘がその操作に慣れるだけで慣熟訓練は終

わる。その期間は艦娘によってまちまちだが、大体一、二か月と言われた。

教官役は摩耶。その他の軍艦とは比べ物にならない規模を持つ戦艦の教導ができるのは、パラオには摩耶しかいなかった。

榊原はというと、パラオ初の戦艦ということで、格段に難しくなる艦隊運動に慣れるために、昼食を取り終わった時点で摩耶に確保され引き摺られて来たのであった。大和はともかく、榊原は慣れがなければ、他艦との適切な連携指示は出せない。

ちなみに曙は、「あたしが演習中の対潜護衛をやる」と強固に主張して、着いてきたのであった。

——「健気な秘書艦だな」

出港前、含みたつぷりの、摩耶が見せた笑顔の意味はわからない。

舵が安定したのか、それ以降は摩耶から特別指示が飛ぶことはない。三人とも、静かに艦橋に立っていた。もっともそれは、当の大和におしやべりをしている余裕がないからなのだが。

「提督、指示出してみろ」

「わかった」

いくらか沖に出たところで、摩耶が促す。

「原速」

「り、両舷原速」

大和が復唱し、主機の回転数が上がる。同時に曙にも指示を出すと、見事にピタリと並走を続けた。さすがの錬度だ。

「曙ちゃん、すごいですね」

心底感心したように、大和が呟く。艦を動かすことで精一杯の彼女にしてみれば、こんなにピタリと追従してくる曙の技能は、まるで魔法のように思えるのだろう。艦隊運動を第一とする駆逐艦ゆえの、優れた腕前だった。

「艦隊行動つてのは、一人でやるもんじゃないからな。自己主張は強いが、あいつはそういうのをちゃんと弁えてる」

同じように「曙」の動きを見遣った摩耶が、そう評した。それは、パラオ泊地に所属する全ての艦娘に言えることだ。各々の個性は強

烈を通り越した何かだが、それでも艦隊運動は整然として美しい。榊原は改めて、彼女たちの技量に感服する思いだった。

大和も、そこまですらなくなるとはならない。

「よし、この辺でいいだろう」

演習海域に到着すると、早速とばかりに摩耶が領く。まずは動かしてみろ。そういうことだろう。

予定される練習用の航路は、頭海図にはつきりと描かれている。後はそれに沿って、的確に指示を出すだけだ。

榊原にとつても、戦艦の操艦は初めてだ。それまで泊地最大だった摩耶の、七倍はあろうかという大和である。その舵がどの程度のものなのか、想像もつかなかった。

大和に手渡された通信機を握る。そろそろ、最初の転針ポイントだ。

「転針、取舵二〇」

マイクに吹き込む。すぐに大和が復唱した。『曙』の方でも、タイミングを見計らって、転舵をするはずだ。

転針の指示を出した後も、『大和』は前進を続ける。莫大な排水量は慣性力となって艦の周囲に働き、水流を作り出す。舵が利きだすには、この力に打ち勝つたうえで、横向きのモーメントが生まれることが必要だ。それまでの間、艦はただひたすら、惰性で進み続ける。

それにしても、なかなか舵が利きださない。それまで乗っていたのが駆逐艦の『曙』が主であったからか、戦艦ゆえの緩慢な転舵には、焦れるものがある。それは大和も同じらしい。摩耶からの厳命で、最初に動かして以来、舵には手を着けていないみたいだが、不安で仕方がないのだろう、うっすらと汗を浮かべて、艦首に立つ波を見ていた。

結局、『大和』が艦首を左に振ったのは、転舵の指示からたつぷり一分近くも経った時だった。横向きのモーメントが艦を動かし、鋭いカーブを描く。指示通り二十度の回頭があった後、艦は再び直進に戻った。

『曙』も、しれっとした顔で着いて来ている。転針前と位置取りもほとんど変わっていない。

「今見た通りだ」

摩耶が言う。摩耶は昨日も、基礎的な外洋航行の指導をしていた。舵の利きについては、すでに見ていたはずだ。

「『大和』の艦体はでかくて、舵が利き始めるまで相当なロスがある」
——回避運動の時は、要注意だな。

航空機に対する回避行動は、敵機の未来位置を予想したうえで取らなければならない。長いロスタイムは、それだけ回避を難しくする。「ただし、舵が利き始めてからは早い。それと、カーブの半径も小さい。多分、長門型なんかより断然鋭く曲がれるぜ。艦隊行動には有利だな」

旋回時に描く半径は、そのまま艦隊運動のしやすさに直結する。小回りの利く艦は、複雑な艦隊行動にもついていきやすい。それだけ、他艦との連携もできる。

「タイミングさえ掴んじまえば、後はどうとでもなる」

摩耶はそう締めて、励ますように大和の肩を叩いた。大和もコクリと頷く。「頑張ります」と、そういうことだろう。

——俺も、頑張らないとな。

結局のところ、艦隊全体に転舵などの指示を出すのは提督である榊原だ。彼自身にも、『大和』の転舵タイミングを掴む義務がある。そのため、摩耶も彼をここに呼んだのだから。

「にしても、化け物だな、あいつ」

打って変わった気の抜けた口調で、摩耶は窓の外の『曙』を見遣った。『曙』と『大和』が行動を共にするのは、今日が初めてだ。にもかかわらず、寸分違わずにピタリと位置を合わせる彼女の操艦術に、舌を巻いている様子だった。

それをさも当たり前のように、特に偉ぶるところもない彼女は、謙虚というか、可愛げがないというか。

——可愛げがないのは、俺の方だったか。

初めての航海で、そう言われたことを思い出した。

「とにかく、慣れだ。慣れるしかない」

「は、はい」

摩耶が力説する。頷いた大和もやる気だ。

転舵の指示は繰り返される。取舵、面舵、減速、増速。提督の指示が飛ぶと、大和が復唱し、舵や主機を動かす。戦艦の習熟訓練は、結局夕暮れ近くまで続いた。

訓練が終わり、泊地沖に投錨した「大和」から、内火艇で泊地へと戻る。指示の連続で若干声が枯れた榊原は、横で疲労の色を浮かべる大和を見遣った。トレードマークの番傘は、昼に出港した時よりも低い位置で開いている。

「はー、早く風呂入りてー」

摩耶が体の節々を伸ばして息を吐く。涼やかな風が泊地から吹くと、三人の髪がそれに揺れた。

「お風呂・・・いいですね」

大和もうつとりと呟く。あれだけ集中していたのだ、相当にエネルギーを消費したに違いない。風呂は、疲れを癒すにはもってこいだ。パラオの大浴場は、庁舎の割に豪華で、なんと露天風呂までついている。ありがたい限りだった。

「・・・おっ？」

前方に迫る埠頭に目を遣った摩耶が、面白いものを見つけたように声を漏らす。小柄な人影が一人、静かに立っていた。

先に戻っていた曙だ。

内火艇が埠頭に着いても、特に動くでもなく、三人が上がってくるのを待つ。先上がった摩耶が、ニヨニヨと笑って声を掛けた。

「お疲れ。お迎え、ご苦労様」

肩を叩くと、曙の眉がピクリと跳ねて、目を逸らした。小声で「お疲れ」と言った横顔からして、何か思うところがあって、こうして埠頭で待っていたらしかなかった。

摩耶と違い、榊原には皆目見当もつかない。大和に先にも上がってもらうと、摩耶と同じように「お疲れ様」と声を掛けて、さらに待ち続ける。

——用件は俺か。

それだけは、やっとわかった。

内火艇の妖精がニヤニヤとこちらを見ている。『大和』所属の妖精だが、大和とは違ってお茶目な妖精だ。ちなみに、着任時に大和が自ら降りてきたのは、この妖精が勧めたかららしい。

彼の笑顔の意味が解らず、とりあえず埠頭に上がる。腕組みして待つ曙に近寄ると、その双眸が細くなつてこちらを見ていた。

「……ただいま」

なんて言ったものか、迷つた末に、「お疲れ様」ではなくそう言うことにした。曙の目が見開かれ、ツイツとそっぽを向いてしまう。

これは間違いだったか。改めて「お疲れ様」と声を掛けようとしたが、その前に、

「……お、おかえり」

か細い声で、曙が言った。

——可愛げがない、なんてことはないな。

微笑んだ榊原から益々目を背けてしまった曙は、何も言わずに庁舎へと歩きだす。

相変わらず、何を考えているのかはいまいちわからない。

「操艦の腕は、さすがだな」

「……別に。あれぐらい普通でしょ」

何気ない口調で褒めると、いつも通りのそつけない答えが返ってきた。

「ついでに、訊きたいことがあるんだが」

「何？」

「艦隊の操艦で、大事なことは何か聞きたくてな。こういうのは、曙に訊くのが一番だと思った」

「そんなこと」

さもつまらなそうに、曙は喋り出す。転針指示のタイミング、各艦の位置関係の把握や、相対位置の変化。そつけない態度とは裏腹に、アドバイスは的確でわかりやすい。噛み砕いて言っている様子はないから、これが彼女の素の教え方なのだ。

——本当に、初期艦の鑑だ。

他の初期艦に会ったことはないが、それでも曙の指導は、群を抜いて上手いと思う。知識も豊富だ。

「——とまあ、こんな感じ。わかった？」

「ああ、助かった。ありがとう」

「ふんっ、別に。クソ提督が変な指示したら、あたしたちが困るじゃない」

最後に憎まれ口が着いてくるのもお約束だ。

「曙のその知識は、やっぱり初期艦になるときに勉強したのか？」

「・・・違う。特にそういうことはやってない。あたしが着任した時に教えてもらったことを、そのままクソ提督に言ってるだけ」

「先輩の艦娘請け負いか。誰なんだ？」

何気ない質問に、影が差したように見えた。並んで歩く曙は一瞬黙って、わずかに険しくなった表情で庁舎の扉を開けながら、ボソリと呟いた。

「・・・吹雪よ」

祥ノ海、鳳ノ空

南の海は、吹く風も暖かく陽気だ。呉も暖かかったが、この辺りは一年中、気温の変動も少なく過ごしやすいらしい。深海棲艦によつて海洋が封鎖される以前は、日本人にも人気の観光地だったというから、暇があればビーチで遊ぶこともできるかもしれない。

——まあでも、その前に仕事ね。

弾む心を抑えて、祥鳳は自らが守っている船団を見遣る。他に呉からの駆逐艦二隻と、マリアナからの途中で迎えに来たパラオの駆逐艦二隻、合わせて五隻の護衛艦に守られた輸送船団は、一路南国の楽園——否、最前線基地パラオを目指していた。

船団の上空には、早期警戒と対潜哨戒を行うための九七艦攻が飛んでいる。『祥鳳』から発艦した機体だ。もつとも、マリアナからここまでの途上、一度も潜水艦発見の報告はない。何とも平和な航海で、実に結構だった。

実に結構なのだが、オートナビゲーション中で手持無沙汰になると、退屈以外の何ものでもない。海も散々見て見飽きてしまった。提督の一人でもいれば話ぐらいできるのだが、今はそんな提督もいない。必然的に、祥鳳の思考はあらゆる方向へと飛んで行った。

パラオに着いたら何をしようとか、持ってきた外出用の服とか。南国の空気に当てられたわけではないが、浮かれた気分で行っているのは間違いない。

———そういえば、パラオ泊地はどんなところなんだろう。

パラオ泊地への配属と、それに伴う改装を受けた祥鳳は、その間に色々聞いていた。

曰く、パラオ泊地には、『あの』横須賀鎮守府執務室長が自ら選りすぐった腕利きが揃っているらしいこと。それは、今後のトラック環礁攻略戦に備えたものであること。当分は、横須賀の直轄地となること。そして、

若い提督が、指揮していること。

第五期生の課程を、一般からの募集でありながら第二席で卒業した

逸材らしい。歳は二十二。

——どんな提督か、今から楽しみね。

窓の向こう、庇のように艦橋の前にかかる飛行甲板のさらに前面で割れる青い海面を、祥鳳は蠱惑的な笑みを浮かべて見つめていた。

『祥鳳さん、後はこちらで誘導します。先に入港を』

ようやくパラオ泊地に辿り着いた船団の前に出て、祥鳳にそう告げたのは陽炎だった。泊地の港湾部に入る輸送船やタンカーはすでに船団から分かれており、後はパラオに民間用の物資を運ぶ輸送船が残るだけだ。こちらはパラオの民間港に入る。その誘導を、パラオ所属の陽炎が買って出た。

「それじゃあ、お願いしますね」

あえて断る理由もないので、祥鳳は素直に承諾する。それから、陽炎以外の護衛艦にもパラオ泊地へ入港するように伝えて、船団から分かれるように舵を切った。

『はー、やっとお風呂に入れるわー』

浦風の眩きが電波に乗って届いた。自分の気持ちを代弁するような声に自然と頬が緩む。前線の艦娘たちを癒すため、パラオには豪華な大浴場があるとのことだ。今から楽しみだった。

——でも、その前に着任の挨拶をしに行かないと。

できればお風呂に入ってから挨拶に行きたいものだが、そうもいかないの、早めに艦内シャワーだけ浴びてさっぱりとしておいた。

前方から、巨大な戦艦が迫ってきた。海を割るといふよりも、まるで押し退けているような堂々たる威容に、思わず息を呑んだ。演習でも行うのだろうか、護衛部隊の艦たちとすれ違いながら、一隻の駆逐艦を伴って沖合へと向かっていく。

艦橋横の見張り所に出て、すれ違う艦影をまじまじと見つめる。高層ビルのような艦橋のトップで、艦を操る艦娘が見えた。操艦に集中しているのか、こちらの視線に気づいた様子はない。

そろそろ、入港準備だ。艀装を着けて精神同調を行うために、艦橋内の所定の位置へと向かう。

祥鳳は、あまりこの作業が好きではない。精神同調の際に流れ込む「祥鳳」の記憶は、あまりいいものとは言えなかったからだ。追い掛けることはなくとも、頭のどこかに棘のように刺さり、引つかかる。ふとした瞬間に思い出されるそれを、けれども何とか押し込めることにしていた。

悲劇の記憶を持つのは、自分だけではないのだから。

——あの艦娘も、そうなのかな。

先ほどすれ違った戦艦の艦娘を思う。彼女の迎えた最後の記憶は、果たしてどんなものなのか。祥鳳がそんなことを思っても無意味だということに。

——さつそく、暑さに当てられたみたい。

そんなことを思ってから、彼女は艤装との精神同調に入った。

記憶の奔流が、溢れ出て押し流した。

入港した「祥鳳」は、整備のためにドックに入れられた。もつとも、特に損傷などはないから、すぐに出て来られると思う。三番浮きドックから港湾施設に降り立った祥鳳は、真昼の太陽を見上げて、大きく伸びをした。長い黒髪が風でなびく。

「庁舎はあちらですよ」

港湾部員が声を掛けてくれた。その親切に満面の笑みを浮かべると、彼の顔が朱に染まった。

——簡単、簡単。

わざと色つぼく見えるように、ゆつくりと歩いていく。庁舎は港湾施設からそれほど遠くない。

庇のかかった庁舎の入り口には、濃い影が落ちていた。庇を支える柱の一本には、『パラオ泊地』と書かれた木の板が掲げられている。その横にはなぜか手形があるのだが、理由はよくわからなかった。

庁舎の扉を開けると、中も風通しが良いのだろう、空気が籠ることもなく、外と変わらずに過ごしやすい気温だった。

——とりあえず、執務室を探さないと。

そう思っ、案内板のようなものがないかと思渡すが、それらしき

ものは見当たらなかった。

「・・・あんた、なにやってんの?」

声は庁舎の奥の方からかかった。よく見ると、並ぶ扉のうち一つが開いて、顔が覗いている。表札には『休憩室』と書かれていた。

「執務室を探しているんだけど」

「何?司令官に用事?」

扉から覗く双眸はこちらを見定めるようにした後、何かに思い至ったらしく、ようやくその体を見せた。ドーナツのような二つのお団子が特徴的な、気の強そうな顔立ちの娘だ。

「もしかして、新しく着任するっていう、軽空母?」

「そう。その通り」

祥鳳が頷く。少女——おそらく駆逐艦娘と思われる彼女は、こちらへと歩み寄ってきた。小柄だが、なかなか様になっている歩き方だ。

「あたしは満潮」

端的に言った後、右手が差し出される。

「私は祥鳳よ。よろしく」

笑顔で答えて、その右手を握る。体温の高い、ぬくぬくとした手だった。

「それで、提督は?」

「ああ、司令官なら・・・」

そう言っただけ後ろを振り向いた満潮は、盛大な溜息を吐いて首を振った。

「執務室に行っても意味ないわ。今は、鬼教官にたっぷりしごかれる頃だから」

「・・・え?」

どういう意味か問い質す前に、満潮はくるりと身を翻して、目線だけで着いてくるように促す。向かった先は、休憩室の一つ奥、『作戦室』と書かれた部屋だ。その扉をノックすると、中から「何?」と、若干攻撃的な返事があった。

——今の、どこかで聞き覚えが。

そんなことを思いながら、祥鳳は満潮の後ろで待つ。

「新任の軽空母来たわよ。司令官を出しなさい」

なんだか、人質を取って立て籠もる犯人を、説得する刑事みたいだ。ほどなくして、扉が開く。そこから覗いた顔と、ぼつちり目が合った。

「え？」

「・・・げっ」

祥鳳の顔見知り——曙は、彼女の顔を見るや口の端をひくつかせた。

「曙ちゃん・・・。久しぶり！最近連絡がないって、漣ちゃんが寂しがってたわよ」

曙の姉妹艦である漣は、祥鳳の僚艦でもあった。呉で最初の艦娘である彼女は、横須賀の姉妹からちつとも便りが来ないことを、餡蜜を食べながら愚痴っていた。

「何、あんたら知り合い？」

「ええ、その通り」

「そんなんじゃないから」

満潮の問いに対する二人の答えは、真つ向から食い違った。間に挟まれた満潮は、やれやれとばかりに首を振る。

「いいわよ、入って。もう少して兵棋演習が終わるから」

曙がそう言って、プイツと部屋の中へ戻ってしまう。会ったことは数回だが、漣から色々とは話は聞いているので、そっけない彼女の態度も逆に微笑ましくさえある。

作戦室の中は、それほど広くない。なにせ、中央に大きな海図台があり、部屋の隅には大型の通信設備が置かれている。十人入れればいい、といったところだ。

その海図台の上には、赤と青の船を模した模型が置かれている。兵棋演習だから、これを動かして両軍が戦うのだ。もつとも、赤のほとんどには、撃沈や撃破を示す旗が立っているが。

海図台の横に、紺の第一種軍装を来た将校が立っている。背格好から、男性であることはわかった。考え込むようにして海図台を覗き込

んでいた彼は、新たに部屋に入ってきた二人に気付いて、顔を上げた。

——本当に、若いのね。

顔立ちは整っていて、十分美形と言える。引き締まった男性の顔つきだが、精悍とは言えない。目元や表情に、まだまだあどけなさが見て取れた。祥鳳の好みどストライクである。

「こんなところで、申し訳ない」

さつと着衣を整えた彼は、そう断ってから右手を上げて敬礼した。

「パラオ泊地提督、榊原広人少佐だ。以後、よろしく頼む」

その言葉遣いも、必死に威厳を保とうとしているみたいで可愛い。思わず相好を崩しそうになった祥鳳は、それでも表情を引き締めて、敬礼で答えた。

「呉より転属を命じられました。軽空母、祥鳳です。こちらこそ、よろしくお願いします」

お互いに手を下ろす。微笑を浮かべると、彼も同じように笑って、頷いた。

「ほら、挨拶終わったんなら続き」

彼の隣に立った曙が促す。

海図台を見れば、明らかに赤軍が不利だ。状況説明を求める。

「両軍とも、二個機動部隊同士で戦闘を行っている。俺の一個機動部隊が壊滅したところだ」

負けていたのは、榊原の方だったらしい。

「・・・相変わらず、容赦ないわね、曙」

「はあ？クソ提督相手に容赦なんていらないでしょ」

「まあ、それもそうだけど」

そんなことを言っているうちに、曙の機動部隊B群の索敵機が、榊原最後の機動部隊を捉えた。攻撃隊が発艦を始める。

——面白そう。

そう思った祥鳳は、榊原を挟んで曙の反対側に立つ。わざと、「曙に對抗している」かのように見えるように。

曙の表情が歪んだ。

「ねえ、提督」

祥鳳は榊原の方に身を寄せる。わざと、体が密着するように。若い彼がたじろいだのがわかった。湧いてくる笑みを噛み殺し、榊原の手を取ってアドバイスをする。

「この、防空輪形陣のうち一部分を前に出して、空母から出した防空戦闘機を全機、その上空に留めてみては？」

「・・・即席の防空専門艦隊か」

「今の時刻からして、今日中に攻撃隊を出すことはできませんけどね。それでも、明日に希望を繋げることが大切ですよ」

なるほど、と言いながら、榊原が試しに盤上の模型を動かす。

「ほら、曙ちゃんの攻撃隊が・・・」

防空艦隊の網にかかった曙の攻撃隊は、確実に数を減らす。少なくとも、機動部隊全艦が沈められるということはない。

「これは、なかなか・・・うごっ!」

榊原が変な声を上げた。見ると、不動明王のような表情をした曙の肘が、榊原の横腹にめり込んでいる。撃沈確定だ。

「・・・デレデレすんな、気持ち悪い」

「・・・ひどい言われようだ」

それまで状況を静観していた満潮は、ついに呆れて部屋から出て行ってしまった。パタン。扉が閉まる。

次の瞬間、轟音が響き渡った。まるで雷でも落ちたようなものすごい音に、祥鳳は思わず、掴んでいたものにしがみついた。

雷は苦手だ。

「な、なに、今の」

「多分、”大和”の砲撃だな」

榊原が呟く。件の戦艦は、沖合の演習海域にいるはずだ。そこからここまで轟音が届くとは、彼にしても予想外だったらしい。

「・・・何となくきに紛れて、クソ提督に抱き着いてるのよ」

まるで氷のように冷え切った曙の声が聞こえてきた。背後に猛吹雪が見える。見ると、祥鳳が反射的にしがみついたのは、榊原の腕だった。弓道着の胸元に、その腕を引き寄せている。

祥鳳は慌ててその腕を放し、榊原から距離を取る。熱くなった頬を

悟られないように、顔を海図台へと落とすとした。

結局、猛吹雪が吹き荒れるような曙の追撃戦と、翌日早朝の空襲で、榊原の機動部隊は壊滅した。ここに、週末の特別休暇とビーチ行きが決まったのであった。

嵐ノ前ノ一時

深海棲艦は強大な敵であり、油断は大敵だ。だが、常に気を張り詰めていることは、人間にも、もちろん艦娘にもできない。緊張の継続は過度のストレスを生み、パフォーマンスの低下をきたす。つまり軍事的な効率から見ても、適度な休息は必要なのだ。

「月月火水木金金」の言葉が示すように、旧帝国海軍は厳しい訓練で有名だった。その伝統を受け継ぐ旧自衛隊にしてもそうだ。しかしそれでも、日曜日は決まって休みである。

もちろん、これは平時に限った話だが、戦時においても、休日というものは必ず与えられる。

自衛隊から海軍となっても同じだ。そして今日は日曜日である。最前線のパラオ泊地にも、東の間の休日が訪れていた。

——だが、なにがどうなって、こうなった。

砂浜に立つ榊原の格好は、普段の第一種軍装とは程遠い。短パン——海水パンツに、無難なパーカーを羽織り、パラソルを抱えた麦わら帽子は、どこからどうみてもバカンスに來た観光客そのものだ。数年前のパラオでは、ありふれた格好だったが、観光客などいない現状では、榊原の姿は浮いてる以外の何ものでもなかった。

「司令ー、こっちー」

砂浜から元気に呼ぶのは陽炎だ。彼女も、榊原と同じように水着を着ている。真っ白い肌が日焼けしてしまうのではと心配するのは、二人の妹が重なって見えるからだろうか。

「・・・行くか」

多分、ここ数年で最大の決心をして、榊原は陽炎の方へと歩きだした。

大丈夫、これは休暇だ。海軍に知られたからと言って、更迭されるようなことはない。・・・と、思う。

色々な心配事をわざと頭の外へと掃き捨てて、とりあえずはパラソルを立てることにした。

今日は、コロールからほど近い浜辺へと、パラオ泊地所属艦娘全員

で繰り出している。曙との兵棋演習に負けた結果、特別休暇としてビーチへ行くこととなつてしまったからだ。

さすがはパラオ、水着の購入には困らなかつた。種類はあまりなかつたが、各々お気に入りの一着を見つけられたようだ。

泊地の方はどうしているかというところ、何かあつたらすぐに知らせるように言い置いてきた。榊原は海軍特製の完全防水緊急通報機——要するに防水携帯電話を持っており、何か異常があればそこに連絡が入る。

以前行つていた近海哨戒は、BOBたちから港湾部の哨戒艇に移されておられ、こちらに割く艦娘も必要ない。よつて、パラオの全員が、このビーチで束の間の休暇を楽しめることになつた。ありがたいと言えば、ありがたい限りだ。

——トラック攻略戦も近い。丁度いい、息の抜き時かもしれないな。

そんなことを思いながら、手際よくパラソルを開く。ほんの半年ほど前までは、極々普通の学生だった身だ。夏休みを利用して、海にもよく行つた。このくらいはお手のものである。

同じく持ち出したレジャーシートを、パラソルの陰に敷けば、ひとまず拠点は完成だ。陽炎が感心して言う。

「司令、随分手馴れてるわね」

「海はよく行つたし、海の家でバイトなんかもしてたしな。まあ、仕事のうちみたいなものだ」

シートが飛ばされないように、持っていた荷物を置く。陽炎もそれに倣つた。

「他の皆は？」

「着替え中。もうそろそろ、来る頃よ」

早速準備体操を始めている陽炎の言う通り、着替えを終えたパラオ泊地の艦娘たちが次々と榊原の方にやって来た。

思わず息が詰まる。榊原とて、若き男性だ。うら若き少女たちばかりとなると、ドギマギもしてしまう。まして艦娘たちは、皆人並み以上に美人だ。

美女美少女たちと海水浴に来て、何も思わずにいられるほど、榊原は老成してはいなかった。

「お、パラソル準備できたか。サンキュな、提督、陽炎」

先頭に立つ摩耶が声を掛ける。露出の多いビキニが、惜しげもなくそのボディラインを晒していた。

「ほとんど司令一人でやっちゃったわよ。あたし、なーんにもしてない」

「そうなのか？ま、いいや。荷物置くぜ」

広げたシートの上に、それぞれの荷物が置かれる。

「おっし、早速遊ぶぜーっ！」

待ちきれないとばかりに海へと走っていかうとする摩耶を、慌てて引き留める。

「待て待て、ちゃんと準備体操してからだ。それと、日焼け止めも塗らないと」

「えー」

摩耶の表情が不満げなものになるが、木曾以下水雷戦隊が率先して準備体操と日焼け止めを塗りだしたので、渋々従う。

海の家でアルバイトをしていた時に知り合ったライフセーバーの請け売りだ。「準備体操疎かにするべからず」、「紫外線侮るべからず」である。

艦娘たちに混ざりながら、榊原も準備運動をする。特に、彎ると致命傷になりかねない足は入念に。

「よっしやーっ！突撃ーっ！」

終わった途端、真っ先に駆けだしたのは摩耶と陽炎だ。足を取られやすい砂浜をもともせず、韋駄天の如く駆けていく。その後を追って、木曾と長波、満潮が続く。それを溜息と共に見送った曙と霞は、お互い顔を見合わせて苦笑する。それから、競い合うように駆けていった。

「二人はいいのか？」

最後に残った、番傘を差す二人に、榊原は問いかける。元気一杯にはしやぎ始めた駆逐艦娘たちを見ていた大和と祥鳳は、コテンと首を

傾げて視線を合わせる。

その間に、空中放電のような現象があったことには、榊原は気づかないようにした。

「それより提督」

先に口を開いたのは祥鳳だ。普段の弓道着の際はさらしで抑えているらしい大きな胸が揺れる。

ものすごく嫌な予感がした。

「せっかくですから、私が日焼け止めを塗りましょうか？」

思いつきり咳き込みそうになった。

「な、なぜそうなる」

「いいじゃないですか、親睦を深めると思っ」

「いえ、祥鳳さん。その役目はこの大和が」

割って入ったのは大和だ。こちらも、すらつとした長身に似合う、均整の取れたボディをしてしている。

二人が対抗するように見つめ合う。

「大和さん、海は初めてでしょう。遠慮せずに、楽しんできていいんですよ」

そう言った祥鳳が、榊原の左腕を掴んで引き寄せる。

「祥鳳さんこそ、親睦を深めたいでしょう？どうぞ、皆さんと遊んでみてください」

そう言った大和が、榊原の右腕を掴んで引き寄せる。

——何この、安いラブコメ状態。

向かい合う、二人の大型艦娘。互いを主張するように胸を突き出し、静かに見つめあっている。その間に見えるアーク放電を、今度は無視することはできなかった。二人の背後に、大量の艦載機隊と、巨大な三連装砲塔が見える。

「ふ、二人とも落ち着くんだ。日焼け止めなら、俺一人で塗れる。わざわざやってもらわなくても大丈夫だ。それより、せっかくの特別休暇なんだから、二人とも楽しんできて」

榊原の訴え、というよりも懇願に、二人は再び押し黙る。見つめあっていたのは十数秒程度だったはずだが、間に容赦なく火花が散つ

ているせいで、まるで永遠のように感じられた。

「提督の言う通りですね」

「そうですね」

それぞれ番傘を畳み、ゆっくりと海へ歩いていく。

「提督も、早く来てください」

そう言った祥鳳に、曖昧に手を振る。

——俺なんかのどこがいいんだか。

周囲から鈍感鈍感と言われ続けた榊原であるが、さすがにここまではつきりと好意を示されればわかる。もつともそれが、どの程度の想いによるものなのかを見極められるほど、恋愛経験は豊富ではなかった。

吐きそうになった溜息を呑み込み、自らも海へ飛び込むべく準備する。諸々は抜きにして、目の前に広がる透明度の高い波打ち際は、童心を思い出すほど魅力的だった。

駆逐艦娘たちに散々弄ばれた後、一旦浜へ上がった榊原は、近くの栈橋まで来ていた。目的は単純だ。静かに釣り糸を垂らし、南国の魚たちがかかるのを待つ。釣れば引き上げ、針を外してリリース。

栈橋の下駄に打ち付ける波は静かなものだ。ここ数年は使われていないらしく、フジツボの類がうじゃうじゃ張り付いている。

浜の方では、艦娘たちがまだまだ元気にはしゃぎ回っている。持ってきたシュノーケルを装着し、しばかり沖の方で泳いでいる娘もいる。透明感あふれる魚の豊富な海は、さぞ綺麗な光景が広がっているに違いない。

——のどかだ。

自然と綻ぶ頬を感じながら、たった今吊り上げたカラフルな魚を針から外し、海へと戻す。チャポンと飛び込んだ魚は、再び元気よく泳ぎだした。

「・・・何一人で黄昏てんのよ」

ペタペタと栈橋を歩いてきた足音が、ふいに榊原へ声を掛けた。見上げるまでもなく、声の主が曙だとわかる。

「黄昏時じゃないから、別に黄昏てたわけじゃないぞ」

「揚げ足はいいの」

餌を取り付けながら、曙の方を振り仰ぐ。しっとりと濡れた髪を垂らす少女は海から上がったばかりらしく、体全体が艶っぽい。水着の上から腰巻のような布——いわゆるパレオを着ていた。花柄のそれが風に揺れ、たなびく。

榊原の視線に気づいたのか、海の方を向いた曙が、言い訳がましくまくし立てる。

「ほ、ほらあれよ。パラオだから・・・」

パレオ。頬を赤く染めて、ツイとそっぽを向いたままの彼女の言に、榊原は盛大に吹き出した。

腹を抱え、肩を揺らして笑う。若干頬を膨らました曙も、同じようにして笑いだしてしまった。

「ははは、なんだその理由」

目元に涙まで浮かんでできてしまった榊原は、呼吸を整えて曙と向かい合う。

「いいな、パレオ。似合ってる」

「・・・あんだだけ笑つといて、よく言うわ。・・・ありがと」

照れたように言った曙は、そのまま榊原の隣に腰を下ろした。履いていたビーチサンダルを脱いで脇で揃え、海面に足先を浸ける。ゆらゆらと楽しそうに足を揺らしていた。

「で、何してたの?」

「釣りだよ」

「そういうことじゃなくて」

誤魔化そうかと思っただが、曙に通じるわけもなかった。内心で敵わないなと思いつつ、苦笑を浮かべる。

「ちよつと、思案に耽ってた」

「そう」

特に促すわけでもない。彼女はただ聞いているだけ。そう思うと、すつと楽になるものがあった。そういう不思議な雰囲気というか、魅力が曙にはある。

「いよいよ、始まるんだなと思ってな」

トラック攻略戦の実施が正式に決定した旨の暗号は、くしくも今日の朝に入ってきた。作戦概要は追って連絡船が持つてくることだ。

ついにこのパラオが、最前線基地としての役目を果たす時が来た。トラック攻略の足掛かりとして設置されたパラオが、激戦の要となる。当然、その戦闘にはパラオ所属の各艦娘たちも参加することになる。

「クソ提督が気負ってどうすんのよ」

隣の曙はさりとらと言った。

「最高指揮官でもなし、実際に戦うわけでもなし。クソ提督があれこれ心配したってどうにもならないでしょうが」

「・・・身も蓋もないことを」

榊原は再び苦笑する。こういうところで遠慮をするような曙でないことは知っていた。

「まあ、でも、」

水面をピチャピチャと波立たせる曙は、広がる波紋に目を落とし、さも何気ない風続ける。

「例えどんな編成になっても、あたしたちが最後に頼る指揮官は、他でもないクソ提督よ」

曙の立てた波に、釣糸の浮きが揺れる。波間を漂う標の動きが、何かを暗喩しているような。

「これ以上ない危機の時、あたしたちが指示を仰ぐのは、クソ提督よ」
確信、信頼、決意、矜持、とてつもなく大きなそれらを、榊原は背負っている。そのことを改めて知らしめられた気がした。

「あたしたちは、クソ提督を頼りにしてる。だからクソ提督も、あたしたちを信じて」

——それは、殺し文句だよ。

だがそれは、今自分が欲していた答えのように、榊原には思えた。彼女たちが戦うというなら、提督である俺が信じないでどうするか。

「信じてる」

今なら言える。覚悟などという高尚なものではないが、それでも自信を持って言える。その背中を押したのは、紛れもない、一月もの間隣にいてくれた曙の言葉だった。

「俺は信じている」

繰り返した榊原に、曙が満足げに頷いた。

「おーい、二人ともー。そろそろ飯だぜー」

摩耶の呼ぶ声が聞こえた。そろそろ昼時だ。

「行こうか」

竿を引き上げ、榊原が立ち上がる。一方の曙は、立ち上がる気配を見せなかった。不審げに窺うと、

「ほ、ほら。信頼の証」

スツと手を差し出してきた。引いて立ち上がらせろ、ということだろうか。そつぽを向いた頬が赤い。

榊原は、その手を取る。優しく、そつと包み込むように。柔らかい曙の手は、とても温い。陽射しにきらめく濡れた髪を揺らして、彼女は精一杯の——そしてとびきりの笑顔を見せた。

第一次トラック沖海戦 攻略艦隊到着

トラック攻略作戦——『I F作戦』と名付けられた作戦の概要が届いたのは、特別休暇から三日後のことだった。

一読した榊原は、黒い表紙の書類の束を机に置き、鍵を取り出す。執務机に三つある鍵付きの引き出しのうち、作戦資料などを入れる引き出しを開いて、その中に嚴重に仕舞い込んだ。ないとは思うが、深海棲艦のスパイに見られてはことだからだ。

それから別の鍵を取り出し、もう一つ引き出しを開く。そこには、連絡船で一緒に届いた、中央勤めの友人からの贈り物を仕舞い込む。ファイルされたわずか数枚の資料だが、本来はここにあつてはいけないう代物だ。

——さすがに、わからないか。

帽子を脱いだ榊原は、背もたれに体重を預ける。疑問は結局解決されていなかった。

榊原が届けさせた贈り物というのは、最高機密であるところの、艦娘の詳しい戦歴書だ。どの作戦に参加し、どういう役回りをしたのか、そういった軍事上のことも含めて、かなり詳しく書かれている。なぜ、摩耶が艦隊旗艦を断ったのか。結局、その理由はわからずじまいだ。作戦発動前にはつきりさせておきたかったが、摩耶本人はあれこれと誤魔化すばかりだ。そこで強く押せない自分も、提督としてはまだまだなのだろうか。

——だが、やはり無理やり聞き出すっていうのは……。

さすがによろしくない。もしかして、彼女の戦歴を見れば何かしらがわかるかと思っただが、そんなことまで書いているはずもなかった。とにかく、摩耶には、艦隊旗艦を拒む何らかの理由があるということなのだろう。ならばそれを、できる限り尊重してやりたい。

「摩耶本人が話してくれるのを待とう」

榊原はそう決めて、取り敢えずこの件については、頭の隅に仕舞い

込んだ。

まずは、目の前の『IF作戦』だ。これからパラオは忙しくなる。作戦参加艦艇が各地から続々と集まる。作戦時に必要な資源を輸送する船団も増える。そして発動前には、対潜哨戒も密にしなくては。

この時に備えて、艦娘用の寮が随分と大きく造られていたのだ。そちらの管理もしなくてはならない。

最初に入港予定の艦は、四日後。横須賀から、十二隻。そして二人の将校も一緒とのことだ。それから一週間ほどをかけて、四十隻を超えるBOBがこのパラオ泊地に集まる。

これからは多忙を極める。特別休暇を取っておいて正解だったと、榊原は痛感していた。

◇
輸送船団を伴って入港してくる艦隊を、榊原は港湾施設に立って出迎えた。

『IF作戦』参加艦艇の第一陣が到着した。事前の連絡によれば、内訳は戦艦一、重巡三、軽巡一、駆逐七とのことだ。全艦がコロール沖に停泊する。

指示した位置に投錨したBOBのうち、戦艦から内火艇が降りて、各BOBに立ち寄る。それぞれの艦娘を乗せ終えたらしい内火艇は、小さな飛沫を散らして、榊原の待つ埠頭へと走ってきた。その艇首には、巫女服のような制服を纏った女性と、第一種軍装を着込む将校が並んで立っていた。

——将校は二人じゃなかったのか？

榊原が疑問に思っているうちに、内火艇が埠頭に横づけて止まる。次々に上がってきては、榊原の前で一列に並んだ。

サツと右手を上げた榊原は、彼の目の前に立った将校に敬礼する。

「パラオ泊地提督、榊原広人少佐です」

相手の将校も答礼する。随分と様になった敬礼だった。

「横須賀鎮守府提督、角田治美大佐だ」

目の前の将校——角田治美と名乗った彼女は、端正な顔をさらに凛々しくして、右手を下げる。それに倣って榊原も敬礼を解いた。

途端、角田の相好が崩れる。後に残ったのは、人懐っこい笑みを浮かべる女性の表情だった。

「君が榊原君かあ」

「は、はあ」

口調まで変わっている彼女に生返事をする、肩を思いつき叩かれた。痛い。

「噂は聞いているよ。一般からの募集なのに、五期生の中で二位だったんだって？」

提督候補生となる『有資格者』は、第二期募集以降ほとんどが一般から取られている。軍人の割合は一割ほどだ。しかし、元々そうした分野に疎い一般募集生が上位に食い込むことは難しい。結果、百名前後の候補生のうち、成績上位の十人は、半分以上が軍出身だ。実際、榊原の同期も、榊原を除いた七位まで全員が軍人だった。

もともと、成績がよければ提督に選出されるというわけでは必ずしもないらしく、榊原と同じく提督志望だった三位と四位は、提督ではなく中央勤務になっていた。

「そんなに珍しいことなんですか？」

「珍しいも何も、過去に一般募集で上位五人に入ったのは、たった二人だけだよ」

二期生から五期生まで、計二十人いる上位者のうち二人。割合は一割だ。この数字が珍しいと言える部類なのかどうかは、榊原にはよくわからない。

「ちなみに、別の一人は僕のことね」

角田はニコニコとそう言っ、自分のことを指差した。いまいち掴みどころのない、女性将校だ。

「もう一人将校がいらつしやると聞いたのですが、ご一緒ではなかったのですか？それに、艦娘も一人いないようですが」

榊原が尋ねる。角田は海の方を振り向いて、すぐに答えた。

「ああうん、すぐに来ると思うよ。沖で鯨を見つけたらしくて、一狩りしてくるって」

「鯨、ですか」

「潜水艦のことだよ。どうやら偵察に来てたみたいだね」

もう一人の将校も、一緒だという。

「応援を出しましょう」

「ああ、大丈夫だよ、あの二人なら。こーゆーの慣れてるし」

すでに撃沈の報告が来ていたらしい。周辺を哨戒してから、こちらへ向かってくるとのことだ。

「・・・あのー、司令。いい加減、私たちもご挨拶したいんですが」

一人で喋っていた角田を遮るように口を開いたのは、先ほど彼女と並んで内火艇に立っていた巫女服の女性だった。すらりとした立ち姿が様になっていて、外側にはねた短髪が印象的だ。角田の腹心らしく、今も艦娘たちの中で彼女に一番近い位置に立っている。

角田の両目が可笑しそうに細められた。艦娘の腕に抱き着くと、思いつき頬擦りをしようとする。が、それは彼女によって阻止された。

「もー、比叡ちゃん、さては嫉妬してるなー?」

「してません、そんなんじゃないやありません」

「照れなくてもいいのに。僕は比叡ちゃん一筋だよ」

「やーめーてーくーだーさーいーっ」

艦娘——比叡は、必死に抵抗する。他の艦娘たちが、それを苦笑いで見ている辺り、日常茶飯事なのだろう。比叡の苦労が窺えた。

角田を力づくで引き離れた比叡は、肩で息をしながら彼女との距離を取る。逆に角田の方は、ネコ科の猛獣のように、その間合いを詰めようとしている。完全に獲物を狙うハンターの姿勢だ。

「とりあえず!とりあえず、挨拶させてください!いつまで榊原少佐を待たせるつもりですか!」

「・・・よかろう。この続きは、また後でね」

お互いに野生の生存本能を治めた角田と比叡が、格闘中に乱れた衣服を整える。それから、比叡が艦娘たちの中で最初に敬礼をする。それに続くように、全艦娘が敬礼した。

「比叡です。お世話になります」

挨拶が続く。比叡に続いたのは、重巡洋艦娘の三人、高雄、愛宕、鳥

海。いずれも摩耶の同型艦だ。さらに七人の駆逐艦娘、白雪、初雪、深雪、叢雲、磯波、綾波、敷波。

「ようこそパラオへ。提督の榊原広人少佐です。当泊地の艦娘たちは、夕食で顔合わせを予定しています。寮へは食堂部が案内するから、そちらの指示で部屋をもらってください」

はい。返事が重なる。すぐに控えていた食堂部が、寮への案内を始めた。埠頭には榊原と角田が残される。

「角田大佐の部屋は、官舎の方に」

「ん、りょーかい」

角田は変わらずに軽い雰囲気で答える。

「榊原君は？ここで待つのかな？」

「はい。そのつもりです」

「そっか。それじゃあ、先に部屋に行かせてもらおうね」

そう言った角田もまた、食堂部の案内で、官舎に用意された士官用の部屋へと向かって行く。軽やかな足取りは、海軍内で猛将と言われるイメージからは、かけ離れているように見えた。

「あ、そうだ」

角田の行動は、何をするにしても唐突だ。足を止めてこちらを振り向いた彼女は、悪戯っぽい笑みを軍帽の下に覗かせて、口を開く。

「その将校見て、驚くんじやないよ」

「・・・はあ」

角田の言の意味を計りかねたが、尋ねる間もなく彼女は身を翻す。改めて引き留めるわけにもいかず、榊原は再び、埠頭から海を見つめて立っていた。

パラオの海は静かだ。今日は風も緩やかで、波も立っていない。透明度の高い海面が、高い位置にある太陽の光を受けてきらめいていた。

——さっきのは、どういう意味だ？

角田の言葉に首を捻る。何か、もう一人の将校に関して、驚くようなことがあるのだろうか。

穏やかな波の先、水平線に新しい艦影が見えた。最初は細いマスト

だったが、みるみるうちに大きく、はつきりとした輪郭を持ち始める。艦形は非常にシャープで、いかにも素早そうだ。箱型の艦上構造物は、どこか「木曾」に似ているような気がする。

——軽巡洋艦か。

パラオにまだ入港していなかった艦だ。

軽巡の艦影は随分と大きくなった。目測で一キロほどだろうか。微速で進む軽巡が舵を切ると、その艦形がよりはつきりとわかった。じょうろのような単装砲を持つ前甲板、物見櫓のような艦橋、屹立した四本の煙突、後部甲板のカタパルト。五千五百トン級の最終型、「川内」型軽巡洋艦の一隻だ。

投錨した軽巡が、沖合に停泊する。煙突からの排煙が止まり、機関が完全に停止した。

しばらくの後、艦上から海面に内火艇が降ろされた。ラツタルを二人の人間が降りていくのが、遠目にも分かった。軽巡の艦娘と、角田の言っていた将校だろうか。

軽巡から離れた内火艇は、独特の音を響かせて埠頭へと接近してくる。その接近に伴って、榊原は背筋をしっかりと伸ばした。

件の将校を見る。背格好はそれほど大きくない。隣に並ぶ軽巡艦娘よりも少し高いくらいだろうか。制服のデイトールからして、女性であることは間違いないはずだ。

「比叡」から降ろされた内火艇の手前に横付けた内火艇から、真っ先に艦娘が飛び降りた。元気一杯といった表情で、開口一番こう名乗る。

「川内参上！」

上に腕を突き上げる。川内と言った彼女は、それから取り繕うように敬礼した。

——軽巡洋艦娘は、皆はっちゃけてるものなのか？

パラオの泊地にもいる軽巡洋艦娘を思い出して、榊原も答礼した。「パラオ泊地提督、榊原広人少佐です。わざわざの参上、痛み入りませす」

「おー、ノリのいい提督だね！」

川内は満足げに大きく頷いた。二つに結んだ髪が跳ねる。

それを待っていたのか、もう一人、一緒に乗っていた将校が前に進み出た。線は細い。紺の軍帽の下には艶やかな前髪が覗いて、風に揺れた。どこか幼いその双眸には、柔らかな笑みが湛えられている。とても澄んだ瞳の色だ。

否。榊原はこの将校を知っている。いや、最初にあつた時は将校ではなかった。

彼女は、横須賀の秘書艦だったはずだ。

前に垂れる二房の髪の間で、彼女がコロコロと笑ったように見えた。

「お久しぶりです、榊原少佐」

少佐の徽章をきらめかせる彼女——吹雪は、啞然とする榊原をよそに、鮮やかな敬礼をきめた。

悩メル夜二

第一陣が到着したことで、パラオ泊地の食堂はいつも以上に賑わっていた。元々パラオ泊地は、各地から選りすぐられた艦娘たちが所属しており、第一陣として馳せ参じた艦娘たちの中にも顔見知りが多い。

呉出身の霞と陽炎が、長波を連れて綾波と敷波と話し込んでいる。若干緊張気味だった長波もうまく打ち解けて、駆逐艦娘として先輩である二人の話に聞き入っていた。

それ以外でも、方々で様々な会話が交わされる。普段は泊地の姉御役である摩耶も、久々の姉妹との会話は年頃の少女そのものだ。時々漏れる笑い声が、いつになく微笑ましい。

頬が緩みそうになった榊原は、ふと、入口の辺りでこちらを窺う視線に気づいた。食堂の入り口から、隠れるようにして——実際には全然隠れていないのだが、長い髪が揺れていた。大和だ。

チラリ。榊原と目が合った。が、途端にそ知らぬふりで躲されてしまう。何かしら、悩んでいるのはわかった。

食堂に並んだ机のうち、一か所を見る。今日入港してきた艦隊の指揮を執る女性将校が、彼女の腹心と談笑——もとい、一方的にちよつかいを出しながら食事を楽しんでいた。

——・・・大和のためだ。

「はい、榊原提督。今日の定食です」

「ありがとうございます」

食堂部を取りまとめる釣掛美穂部長から夕御飯が乗った膳を受け取り、身を翻す。席に着く前に入口へ向かい、そこで隠れているつもりの大和に声をかけた。

「大和」

「ひゃいっ」

また噛んでいる。大和の顔が真っ赤に染まった。

「一緒に食べないか？」

「えっ」

「いや、嫌ならいいんだ。でも、そこについても仕方がないだろう?」

「い、嫌なんてことはありません」

「ご一緒させてください。大和はそう言って、自分の分の夕御飯を受け取りに、食堂のカウンターへと小走りで向かっていった。釣掛部長からトレーを受け取ると、上に載った料理をこぼさないように注意して、榊原のもとへと戻ってくる。

「どちらに座りましょうか?」

先ほどとは打って変わって、いい笑顔だ。自分と食べることを、そんなに嬉しく思ってもらえるのなら、悪い気はしなかった。

榊原は、最初からある席に目星をつけていた。少しでも、彼女の緊張が和らげばいいのだが。

「角田大佐」

比叡にちよつかいを出し続ける角田に、榊原は声をかけた。

「およ?榊原君?」

どうしたの?そんな視線でこちらを見ている。その隙に、比叡が彼女の手を離れた。

「相席、いいですか?大和も一緒に」

「ふえっ?」

小さな悲鳴を大和が上げた。

角田は一瞬真剣な光を帯びた後、思いつきり相好を崩した。榊原の短絡な考えなど、お見通しのようだった。

「いいよ、いいよ。さ、座って」

比叡も頷く。遠慮なく、榊原は角田の向かいに腰掛け、大和にも着席を促した。

「し、失礼します」

再び緊張気味の様子となった大和が、恐る恐る比叡の前に腰掛ける。榊原の方を不安げに窺った後、若干俯き気味にチョココンと座っていた。

「なにかね榊原君。僕に興味があるのかね?」

可笑しそうに笑う双眸に、榊原は苦笑する。

「からかわないでください」

「あはは、まだまだ若いねえ」

そう言う角田も随分と若く見えるが、それについては何も言わなかった。

いただきます。榊原と大和は手を合わせ、食事の挨拶をする。箸を取り、真っ先にほうれん草のお浸しに手を付けた。

「ね、ね、大和」

真っ先に口を開いたのは比叡だった。外に跳ねた髪が、ピョコピョコと動きそうな、楽しげで明るい声だ。気圧されながらも、大和が答える。

「は、はい」

「パラオの海って、とっても綺麗なんだねっ」

「そ、そうですね」

戦艦娘同士の会話を、二人の提督は何気ない風を装って聞いていた。

「作戦発動までに泳いでみたいなあ」

「・・・近くにビーチ、ありますよ?」

「ほんと!？」

身を乗り出した比叡が、ズズイと大和に迫る。

「先週末に、特別休暇を使って、提督と行きました」

「えっ、榊原少佐、もしかして職権濫用・・・?」

「違うっ」

半日の比叡の言葉に、まるで自分が艦娘たちとの海水浴を強要した、みたいなニュアンスを感じて、榊原は即否定した。

「いいなー。あ、そうだ、作戦前に行こうよ、ヤマちゃん」

「や、ヤマちゃん?」

終始比叡のペースだが、二人の間に会話が生まれている。先ほどは緊張した様子だった大和も、いくらか解れて、比叡と話している。相槌の合間に、微かながら笑みも見受けられるようになってきた。

「君の読み通りだね」

そう言っているような角田のウィンクに、榊原は頬を緩める。

大和に必要なのは、同じ戦艦の先輩だ。できれば、気兼ねなく話せ

るような、そんな娘が。その相手として比叡に目星を着けたのは事実だが、それでもここまで進展したのは、やはり彼女の持つ親しげな雰囲気があったからだろう。比叡の才覚、と言える。頭の下がる思いだ。

二人の会話を聞きながら、箸を進める。沢庵にも匹敵する、ご飯が進む会話は、最終的に一緒にお風呂に入るところまで発展した。

夜も更けた泊地。しかし食堂には、まだ明かりが灯っていた。先ほどのまでの喧騒はなく、中には二人の人物がいるのみだ。

榊原は、ついに目的としていた人物と、一対一で向き合うことができた。

机の向かい側、榊原の淹れたコーヒーを、吹雪は啜っていた。

「わざわざ、すみませんでした」

何となく、彼女には敬語になってしまった。吹雪は笑って、カップを置く。

「いえ、お気になさらず。私も、榊原少佐とは一度お話してみたかったので」

笑顔のままの吹雪と向き合い、榊原が切り出した。

「ビックリしました。まさかあなたが来るとは」

「角田大佐にも、似たようなことを言われました」

「なぜ、ですか？あなたは横須賀の秘書艦では？」

うんうんと頷きながら話を聞いていた吹雪は、しばらくの間を置いて、微笑を湛えたまま答えを示した。

「司令官——秋山中将は、今回の作戦に大きな関心を寄せています。トラック環礁の攻略戦は、海軍にとって大きな転換点になりますから。ですが、今回に関しては、秋山中将が直接出てくるわけにはいきませんでした」

「・・・今回は、司令長官が直接指揮をなさるから、ですか」

「そういうことです。横須賀は最古参の鎮守府であり、秋山中将は最古参の提督です。必然的に、持っている権限も大きい。連合艦隊司令部に何かがあった時は、秋山中将が臨時に指揮権を引き継ぐことにな

ります。ですから、東郷長官と秋山中将が、同時に作戦に出ることは避けるべきと判断したんです」

妥当だ。軍隊に置いて、指揮系統の乱れは命取りに繋がりがかねない。優先順位の第一、二指揮権は、同時に失われるようなことがあってはならないのだ。

「そこで、代わりとして私が参加することになりました。この戦いを、見届けるために」

吹雪は言った。

「角田大佐では、ダメだったのですか？ それに他にも、横須賀から参加される提督はいるのでは？」

「角田大佐と、塚原大佐のことですね。ですが、二人には務まりません。二人は、各々が信じるところに従って、提督として戦っています」

その信念は、曲げるべきでも、否定するべきでもありません。吹雪は微笑みを絶やすことなく、きっぱりと言い切った。

見届ける。一体、吹雪は——そして秋山中将は、何を見届けようというのだろうか。榊原にはわからない。推測するには、あらゆる情報が足りていなかった。これ以上の詮索は無意味だろうと、榊原は判断した。

代わりにもう一つ、訊いておきたいこと。最高機密にすら残っていないなかったと、中央の友人が音を上げた、彼女自身のこと。

「吹雪さんは、〃元艦娘だと聞きました」

「はい。〃元艦娘です」

突然の話題の転換にも、吹雪は特に表情を変えない。容姿よりも幾分か大人びて見えるその笑顔は、昼間であればまさに太陽の如く映つたのかもしれない。だが夜である今は、不釣り合いな神々しきさを感じさせた。

「私の艦体は、すでに轟沈しています」

「復旧はしなかったのですか？ 時間はかかりますが、例えば轟沈しても、艦娘が健在なら艦体を再構築することは可能なはずですよ」

BOBは、艦娘がいれば失った艦体を再構築することができる。建造と同じようにして、轟沈によって散り散りになった船魂の片鱗を集

め、形を与える。かかる時間は、駆逐艦でも二、三か月と長いが、やる価値は十分にあるはずだ。

しかし、吹雪は首を横に振った。

「復旧できなかつたんです」

「復旧・・・できなかつた？」

ここからは、あくまで私の推測です。吹雪はそう前置いて、話を続けた。

「艦娘こそが、船魂の本体なんです。ですから本体が無事である限り、艦体を復元することができる。ところがある拍子で、艦娘から船魂が抜け落ちたとしたら。どんな要因なのかはわかりませんが、今の私はそういう状態だと考えられるはずですよ」

根拠はないが、妙な説得力があった。

艦娘が、遺伝子的には人類——ホモ・サピエンスと全く変わりない生命体だということは、初期の段階からわかっていた。では、艦娘を、艦娘たらしめているものは、一体何なのだろうか。

その答えが、船魂の有無だとしたら。

「まだまだ考察を重ねる必要があります。今後のためにも」

轟沈と、船魂の欠如、その因果関係。少なくとも、今のところそうした特殊例は、吹雪だけなのだろう。

だが、それとは別に。榊原の中で繋がったものがあつた。二週間ほど前に、パラオ泊地秘書艦が見せた表情。沈黙と覚悟を滲ませた横顔。夕陽の中のその表情の意味は、あるいは吹雪と繋がっているのかもしれない。もしくは、彼女の性格そのものにも。

「・・・その轟沈と、曙との関係は？ 一体その時、何があつたのですか」
若干声が堅くなったのが、榊原にもわかつた。

吹雪は、一瞬だけ驚いたように、目を開いた。しかしすぐに、元の——それまでよりもさらに頬を緩めて、答えにならない答えを返した。

「鋭いですね。秋山中将が見込んだだけはありません」

それから、しばらく黙考する。人差し指を唇に当て、上を向いて考え込む仕種。やがて困ったように、細く整った眉をハの字に下げた。

「今、私から言えることはありません」

「・・・そうですか」

——結局、何も得られなかった。

一人の軍人としては、目の前の少女の方が二枚も三枚も上手だ。そのことがわかっただけでも、収穫と言うべきだろうか。

「でも、これだけは言わせてください」

内心の落胆をできるだけ隠して、榊原はなおも吹雪と向かい合う。わずかに上体を傾けた吹雪は、打って変わった真剣な目で、榊原の瞳を捉えていた。澄んだ色に、言葉を失う。

「時が来れば、曙ちゃんは必ず、全てを榊原少佐に話します。その時は・・・」

その時は、どうか、

「どうか、曙ちゃんを受け止めてあげてください」

朋アリ遠方ヨリ来タル

攻略艦隊第二陣の到着は、第一陣到着から五日後のことだ。規模は、第一陣とは比べるべくもない。まさしく、トラック攻略艦隊——連合艦隊の主力、威風堂々たる艦隊たちの群れだ。

戦艦三、空母五を中心とした大部隊は、パラオ泊地に所狭しと錨を下ろした。

三隻の戦艦は、連合艦隊司令長官東郷源八郎大将直率で、全艦横須賀に所属する。海軍の象徴であり、世界のビッグセブンと謳われる二隻の四一サンチ砲戦艦、〃長門〃と〃陸奥〃も加わっていた。

空母部隊は、二隻の正規空母と三隻の軽空母から構成されている。指揮官は、塚原二四郎大佐。横須賀所属で、角田大佐とは同期とのことだった。

その他、多数の護衛艦艇、さらには潜水艦までいる。

艦だけではなく、人もすごい。旗艦となる〃長門〃には連合艦隊司令部が設けられ、多数の参謀たちが集っている。海軍の頭脳だ。

この艦隊が、まさしく連合艦隊の総力ともいえる。

そして榊原にとっては、嬉しい来客もあった。司令部付きの将校に、彼の同期を見つけたのだ。

「久しぶりだな、相模」

「おう、お前も元気そうだな！」

同期——相模篤少佐は、最後に会った時と変わらない、陽気な返事で手を上げた。

「驚いた。まさか、お前と会えるなんてな」

「こっちもビックリしたぜ。なにせ突然のことだな」

苦笑いしながら、相模は言った。元は、現在の相模の上司である広瀬武雄少将が司令部に同行するはずだったのだが、直前に急遽相模になったとのことだ。なんでも、広瀬直々の申し出だったらしい。

「多分、前線を見とけ、つてことなんだろう。本土にいる俺たちにとっては、前線の雰囲気つてのはなかなか掴み難いものがあるからな。油断大敵、そういうことだと思う」

「そうか」

戦場に置いて最も恐れるべきは、仲間の中での温度差だ。戦線が伸びれば伸びるほど、中央には前線の熱が届きにくくなる。熱を循環させなければ、鍋の中の水は、ある時突然沸騰して暴発する。

それを避けるために、今のうちから前線を知っておけ、そういうことなのだろう。

———　　そういえば、俺も中央のことはあまり知らないな。

今まで、この泊地を動かすことで精一杯だった。だが真に彼女たちのことを想うなら、これからはもつと視野を広く、そうしたことにまで気を付けなければならぬのかもしれない。

まあ、そうした話は、また後だ。

「せっかく会えたんだ。どうだ、久々に一杯」

そう言った相模は、右手で酒を飲む仕種をした。本土から、手土産に持ってきたらしい。

「いいな。そうしよう」

榊原も笑って、親友の申し出に頷いた。

「・・・で？あんたら馬鹿なの？」

パラオ泊地の秘書艦は、容赦ない言葉を二人の若い将校に浴びせかけた。呆れた溜息を吐きながら、コップに汲んだ水を二つ差し出す。榊原も相模も、それをありがたく受け取った。

夕食後、静かに酒を酌み交わしていた若い将校を、災難が襲った。彼らの先輩にあたる横須賀所属の女性将校———　　もとい酒豪が、美味しそうな酒の匂いを嗅ぎつけてきたのである。散々飲まされた結果、彼女の同期兼お守り役である塚原大佐が引き摺って行った際には、すでにご覧の有様となっていたわけであった。

二人とも、決して酒に弱い方ではなかったのだが、角田の酒豪っぷりは凄かった。酒に関するエピソードには事欠かないという。そしてそれを収めるために、毎回塚原が駆り出されているとのことだった。

塚原の苦勞が窺えた。

「あたしはもう寝るから。クソ提督もさっさと寝なさいよ」

「ああ、わかった。おやすみ」

「おやすみ」

そう言い残して、曙は食堂を後にした。残された榊原と相模は、コップを傾け、冷たい水を一気に呷る。火照った体に、流れ込む冷気が心地よい。

「・・・いい娘だな」

空になったコップをいじりながら、相模が言った。榊原も頷く。

「俺なんかにはもつたいないくらい初期艦だ」

「もつたいない、なんてことはないだろう？第二席様」

からかうように言った相模に苦笑する。そういう相模も、なんだかんだで第七席だ。

「そうだ相模」

「なんだ、改まって」

「きちんと礼をしてなかった。例の件、色々助かった。ありがとう」
例の件というのは、機密書類持ち出しの件だ。パラオに来て以来、その件については彼に頼りつきりだった。

「ほんとだぜ、ったく。いい加減、広瀬さんが気付くかと思っただぞ」

「お前はそんなへましないだろ」

「それとこれは別問題だ。『IF作戦』同行の辞令を持って来た時なんか、ついにばれてクビになるのかと思っただわ」

「クビにならなかつたんだから、ばれてないってことだろ。よかったじゃないか」

「いいわけあるか」

苦笑を滲ませて、相模が言った。

「ともかく、助かった。今後とも、何かの時はお願いしたい」

「あー、それなんだがな。ちと、難しくなりそうだ」

「どういうことだ？」

榊原の問いに、相模は咳払いをして居住まいを正した。何やら重大な案件みたいだ。

「まだ正式に辞令があつたわけじゃないが、この作戦が終わったら、ル

ソンの警備隊に行くことになりそうだ」

「そうか！」

嬉しそうに言った相模に、自然と榊原の相好も崩れる。

ルソン警備隊は、艦隊規模こそ小さいものの、日本の交易航路を守る重大な部隊だ。それに、現地には日米合同の基地航空隊もあり、同盟国アメリカとの架け橋の役目もある。この先は、米軍のBOB艦隊も配備されるようになるはずだ。太平洋が、日本とアメリカ、どちらか一方で平定するには広すぎる以上、これから二国間での協力は欠かせない。

「それじゃあ、ルソンで提督に？」

「ああ。中央で手取り足取り教えてる暇はないんだと」

「俺と一緒にだな」

榊原は苦笑する。本来は、本土で半年ほど実習をしてから、各地へ配属になるものだ。相模はそれを現地でやる。榊原に至っては、全てすっ飛ばされた。

———そういえば、俺はなぜ、いきなりパラオの配属になったんだ？

この二か月、忙しさのあまりまともに考えてこなかった。ぶっつけ本番にもかかわらず、パラオ泊地が機能しているのは、所属する艦娘たちの技能によるところが大きい。

「まあ、期待されてる、と思っくいいいんじゃないか？」

「・・・そうだな」

単純にそれだけではない気がしたが、今は詮索のしようがない。

「てわけで、俺はルソンに行くから、これからは機密情報を持ち出すお仕事はできません」

相模がおどけて言う。その仕種に苦笑いしつつ、榊原は腕を組んで考えた。

「誰か、別の人を見つけないとなあ」

「機密情報を持ち出さないとって選択肢は無いんだな」

相模は呆れた様子で言う。それに対して、榊原はさも当然のように答えた。

「俺たちは提督だ。艦娘たちを守る義務がある。知りうることは全て知っておきたいし、手に入れられるなら手に入れるべきだ」

「お前らしい。相変わらず、変な方向に真面目だな」

「他人のことは言えないだろ」

「まったくだ」

榊原が相模に機密情報の持ち出しを依頼したのには、はつきりとした理由がある。相模は、ギンバイの名手だったのだ。それに、上官との付き合い方も同期の中では群を抜いて上手かった。おまけに大事なところでは口が固いので、非常に信頼のおける友人だ。相模がそういう男だからこそ、機密情報の持ち出しという、軍法会議ものの依頼をすることができた。

「だが、お前の考え方には賛成だな」

相模は言う。

「俺も提督として、艦娘を守ろう。そのための協力は惜しまない」
力強く誓った。酒気で頬は赤いが、その瞳には熱い炎が宿っていた。榊原も負けじと、大きく頷く。

「少し早いが、ルソンでも元気でやれよ」

「何言ってるんだ。寒くなきゃ、俺はいつでも元気だよ」

ひらひらと手を振って笑う。確かに、相模の元気っぷりは、筋金入りだ。というか、実際には寒くても元気そのものである。教官からは、「元氣と無茶がそのまま服を着てる」と呆れられたほどだ。

「初期艦は、もう決まったのか？」

「ああ。その娘も、俺のルソン行きに合わせて転属する。それともう一人、新しく着任した娘も、一緒に基礎錬成中だ」

「新任艦娘？」

「瑞穂、って言ってな。水上機母艦だ。まあ、俺とは同期みたいなもんだな」

同じ艦娘を教官としている、そういう意味だろう。

「初期艦は、今回の作戦には？」

「横須賀で留守番だ。連れてけ、って騒いでたよ」

その時を思い出したのか、相模が小さく笑う。

「いい娘みたいだな」

「ああ、いい奴だ。俺にはもつたないくらいに、な」

「謙遜だな、第七席様？」

先ほどの相模を真似た言葉に、どちらからともなく吹き出した。

「あー、ダメだ。やっぱり酒が抜けてないな」

「ああ。笑いの沸点が低くて困る」

腹を抱えて笑い合った二人は、涙の滲んだ目元を拭って、席を立つ。引いた椅子の立てる音が、ガランとした食堂に響いた。しかしそれも、今の気分には心地良い。

誓いを立てた二人の、新たな立ち上がりだ。

「俺は、もう一度風呂に入ってくる。士官用の方はまだ開いてるだろ」

「ああ。この時間でも開いてる」

「お前は？一緒に来るか？」

友人の申し出に、榊原は首を横に振った。

「俺はいいよ。曙に言われた通り、早々に寝るとするさ」

「いい感じに、尻に敷かれてるなあ」

そんな軽口を叩きながら食堂を出て、廊下を庁舎と官舎の方へと歩いていく。相模にあてがわれたのは官舎の一室だが、榊原が寝泊まりする提督私室は、庁舎内の執務室横にある。非常時に、迅速に指揮を執れるようにだ。

「そういえば、」

辿り着いた官舎の一室、扉のノブに手を掛けた相模は、思い出したように榊原を振り向いた。

「清水も来てたぞ。知ってたか？」

「あいつも来てたのか」

清水——清水隆之。榊原たち第五期生の首席で、連合艦隊司令部への配属になっていたはずだ。連合艦隊司令長官——ひいては、連合艦隊司令部が直接指揮する今回の作戦に同行しているも、何ら不思議はなかった。

冷静沈着をそのまま絵に描いたような冷血漢、に見える。どちらかと言えば、ただシャイなだけなんじゃないかと、薄々気づいているの

は、多分同期の中でも榊原と相模ぐらいだ。

「俺も知ったのは、こっちに着いてからだけだな。まあ、あつちからわざわざ声をかけてくるような奴でもないし」

相模はノブを捻り、扉を開く。タオルを取ってから、士官用の小浴場に向かうらしい。

「どうせ、明日の最終打ち合わせでは顔を合わせるんだ。そんな時にちよつとつついてやろう」

さも可笑しそうに言った相模と「おやすみ」と言い交わして、庁舎の方へと戻る。官舎と庁舎の間で見上げた空には、日本とは違う星たちが、朗らかに輝いていた。

過去ノ影

連合艦隊司令部と各提督の最終打ち合わせは、多少白熱したものの、滞りなく終了した。結果、参加する艦艇と編成は以下の通り。

・第一制圧艦隊

東郷源八郎大将直率

「長門」、「陸奥」、「金剛」、「大和」、「曙」、「霞」

・第二制圧艦隊

塚原二郎大佐

「赤城」、「加賀」、「飛鷹」、「隼鷹」、「五十鈴」、「秋月」

・第三直衛艦隊

近藤信忠中佐

「摩耶」、「祥鳳」、「瑞鳳」、「満潮」、「陽炎」、「長波」

・第四水雷艦隊

吹石雪花少佐（吹雪）

「川内」、「白雪」、「初雪」、「深雪」、「叢雲」、「磯波」

・第五遊撃艦隊

角田治美大佐

「比叡」、「高雄」、「愛宕」、「鳥海」、「綾波」、「敷波」

・第六潜水艦隊

板倉光希中佐

「伊一六八」、「伊五八」、「伊一九」、「伊八」

この他、本土防衛艦隊より、第一潜水隊群所属第一潜水隊「みちしお」、「まきしお」、「いそしお」、「じんりゆう」の四隻が、艦隊の海中の守りとして展開する。

第一潜水隊の保有する通常兵器ではブルーアイアンを無効化できず、深海棲艦を撃沈できないが、こと潜水艦が相手なら話は変わってくる。ブルーアイアンが艦体を再構築する間に、浸水と内殻の破壊によつて、敵潜を圧壊沈没させることができた。これなら、敵潜を長時間行動不能にできるし、運が良ければ撃沈も可能だ。対潜水艦に限れば、旧自衛隊が保有していた最新鋭兵器は非常に有用だった。

さて、当の榊原はというと、“大和”に乗り込むこととなった。これは、東郷長官直々の要請によるものだ。

「二制艦（第一制圧艦隊）所属の戦艦三隻は、横須賀所属だ。だが、大和と護衛の駆逐艦はパラオ所属であり、特に大和と他艦の連携を考えると、補佐となる人間が必要だ。この役目は榊原少佐に任せるのが妥当であろう。それに、これが初陣となる大和も、気心知れた榊原少佐と一緒に多少なりと緊張も和らぐはずだ」

東郷はそう言った。泊地に残って、後方の守りを任されると思っていた榊原は、一も二もなく承諾した。やはり、パラオ泊地を預かる者として、前線で艦娘たちと共に戦いたい気持ちが強かった。

打ち合わせが終わり、いよいよ本格的に、作戦が始まるうとしていた。艦隊がパラオを発つのは、一週間後の予定だ。

そしてその前に。榊原には、やはりどうしてもやっておかねばならないことがあった。

夜も更けていく泊地。風呂上がりの榊原は、湯冷めしないように気を付けながら、ある人物が出てくるのを待っていた。

大浴場前の休憩スペースには、大きな窓がある。空になったコーヒー牛乳のビンを片手に、そこから見える空を眺めていた榊原は、目的の人物が出てきたのに気づいた。

「出たぜ、提督」

風呂上がりの髪をタオルで乱雑に拭きながら、摩耶が榊原の方へとやって来る。しなやかな髪に水滴が絡まり、艶やかに輝く。風呂上がりで上気した顔から、ほかほかと湯気が立っていた。

「わざわざ呼び出してすまなかった」

「いいっていいって。こっちこそ、風呂先にさせてもらって悪かったな」

「さっぱりしたか」

「ああ。いい湯だな、パラオは。星も綺麗だしよ」

「同感だ」

摩耶は冷蔵庫に入ったコーヒー牛乳を一本取り出し、蓋を開ける。榊原の横に腰掛け、一気に呷った。美味しそうに息を吐く。

「それで、話つてのは、なんだ？」

一息で空になったビンを榊原と同じように弄びながら、摩耶は話を促した。榊原はチラツと摩耶を見遣り、その目を見つめる。普段には見れない不安を孕んだ瞳は、これから榊原が話そうとすることの内容を、ある程度予想しているのかもしれない。

「単刀直入に言おう」

泊地の姉御分に、誤魔化しは利かないだろう。

「摩耶に、艦隊旗艦の話が来ている」

瞬間、摩耶の表情が苦悶に歪んだように見えた。

「第三直衛艦隊の旗艦として、艦隊を守ってほしい」

これはあくまで榊原の希望だ。答えを出すのは、摩耶であると思っ
ている。

重苦しいほどの沈黙が流れる。冷蔵庫の上げる低い音だけが、休憩
室内に不気味に響いていた。

「・・・ダメだ」

それから絞り出すように、摩耶は言った。

「艦隊旗艦は受けられない」

「なぜなんだ？近藤中佐は防空戦闘の経験が豊富だし、十分に摩耶の
能力を引き出してくれるはずだ」

「ダメなものはダメなんだっ！」

低く、苦しいまでの拒否だった。ビンを握る手に力が入り、今にも
割ってしまうのではないかとさえ思えた。

「あたしは・・・あたしは、もう人間を乗せるつもりはない」

——前には、乗せたことがあるのか。

ただ単純に、旗艦が嫌ということではないようだ。何かもっと、大
きく深い理由で、彼女は艦隊の旗艦になることを——自らに人間を
乗せることを拒んでいる。それは、きつとすぐに克服できるようなも
のではないのだろう。

「そうか」

「悪い、提督。わがままだったのは、わかっているんだ。けど、あたしは
旗艦はやらない」

摩耶は、榊原と目を合わせようとはしない。顔を下に向け、目を伏せて足元を見ている。横顔で、辛うじて唇を噛んでいることがわかった。垂れた前髪から、小さな滴がしたたる。

「・・・わかった」

「・・・え？」

榊原の言葉に、摩耶は驚いたように顔を上げた。その目端に見えた光るものは、果たして風呂上がりの水滴だったのか、あるいは・・・。

——ダメな提督だな、俺は。

これ以上、彼女を苦しめるわけにはいかない。摩耶の葛藤がなくなるわけでもなくとも、少しでもその心労を減らしてやることができるのならば。

「旗艦は別の娘にしてもらおう。近藤中佐には、俺から話しておく」

「け、けど、提督。お前・・・」

困惑したように、摩耶は言い淀んだ。言葉を探すように、答えを求めるように、榊原の顔を覗きこもうとする。だから榊原は、そんな摩耶に少しでも優しく見えるよう、表情を柔らかくして微笑む。

「摩耶は、やりたくないんだろ？どんな理由かはわからないけど、摩耶のやりたくないことを、強要はしたくない。選択権は摩耶にもあるんだからな」

摩耶の瞳が大きく見開かれ、またその顔を伏せてしまう。

「たく・・・甘いんだよ、お前は・・・」

そう呟いたように聞こえた。

「話はそれだけだ。風邪引かないように気を付けて」

立ち上がった榊原は、空になった摩耶のビンをヒョイと取り上げる。すでに力が入っていなかったらしく、いとも簡単に取れた。それを冷蔵庫横のビン入れに差し込む。

「提督！」

休憩室を立ち去ろうとした榊原を、摩耶の声が引き留めた。振り向いても、摩耶の顔はこちらを向いていない。それでも、彼女の意識が、しっかりと榊原のことを捉えているのがわかった。

「わがまま言って、ごめん。あたしを・・・信じてくれて、ありがとう」

息を吐く間があった。

「今は無理だけど。そんなあたしで、ごめんだけど。・・・いつか、絶対に話すから」

だから、待っててほしい。消え入りそうな声に、榊原ははっきりと答える。

「摩耶が待つてほしいなら、俺は待つよ」

その時。榊原の右手が自然と摩耶の頭に伸びたのは、染みついた癖だった。乗せた手で、湿った髪を撫でる。

「・・・子ども扱いするなよ」

再びの小さな言葉は、端がわずかに震えた。榊原は手を離す。

おやすみ。お互いにそう言っつて、榊原は今度こそ休憩室を後にした。

◇

翌日。早朝にもかかわらず、近藤はすぐに捉まった。軽装の彼はラニンングをしていたらしく、わずかに早くなった呼吸を整えながら、庁舎に戻ってきた。榊原は、それを庇の下で待つ。

近藤が、着けていたイヤホンをはずした。

「おはようございます」

「おはよう。何か用か、榊原少佐？」

「近藤中佐に、意見具申があります」

意見具申という言葉に、近藤が怪訝な表情となる。整理体操を取り止め、真っ直ぐに榊原の方を向いた。

「聞こうか」

「第三直衛艦隊の旗艦を、摩耶ではなく祥鳳にしてはいかがでしょうか」

「・・・理由はなんだ？」

額の汗をタオルで拭い、近藤は榊原の話を聞く姿勢を作ってくれた。ありがたい。

「防空戦闘において、摩耶は最後の砦——対空射撃の要です。当然、戦闘の最前線に出ますし、被弾覚悟で艦隊を守ります。摩耶はそういう艦娘です」

榊原の言葉を、近藤は黙って聞いていた。合間に納得するように頷く。

「近藤中佐は、対空戦闘全体を指揮する提督です。でしたら、対空射撃において前線から距離を取れる祥鳳が、旗艦には適任かと」

すでに、祥鳳に了承は取った。摩耶が旗艦を拒む理由については詮索されなかったが、旗艦を引き受ける代わりに作戦後の一日デートを約束させられた。

「・・・わかった」

榊原の言を聞いた近藤は、全てを了承して強く頷いた。

「少佐の意見具申を入れよう。三直艦（第三直衛艦隊）の旗艦は、祥鳳にする」

「ありがとうございます」

礼を口にする榊原に、近藤は微笑を浮かべて首を振る。

「礼には及ばない。むしろ、少佐の意見具申に感謝したい。三直艦はほとんどパラオ所属艦だから、私としてもわからないことだらけだ。これからも、何かと助言をお願いするよ」

なんでも、近藤配下の艦隊は、『IF作戦』と同時に実施されるインド洋攻撃作戦に引き抜かれてしまったらしい。「どうせなら、私もそつちに連れて行ってくればいいのだが」と、榊原より二、三ほども年上の顔が苦笑いを浮かべた。口元が爽やかな好青年だ。

「長官には私から言っておこう」

近藤はそう言って戻っていった。その背中に深々とお辞儀をする。

—— 大丈夫だ。あの人なら、艦隊を守ってくれる。

榊原はそう確信していた。

このまま庁舎に戻ろうかとも思ったが、清々しいパラオの朝が、榊原を強く引き留めた。泊地を照らす朝陽を、手をかざして見上げる。混じりつけのない空気に、太陽光線がまっすぐに浸透していた。

「・・・提督？」

背後から声がかかった。大和だ。

「おはよう」

「おはようございます。どうされたのですか、こんなところまで？」

柔らかい所作で榊原の横に立った大和も、榊原と同じように手を庇にして、朝陽と、そして光に満ちる海面を眺めた。その相好が、緩く綻んだ。

「綺麗な朝ですね」

何も混じらない、素直な感嘆が、大和の口からこぼれ出た。心に染み入る言葉に、榊原も頬を緩めて頷く。

「ああ。いい朝だ」

余計な言葉などいらぬのだ。感じたまま、この風景を美しいと思えば。

「もう二か月もいるのに、改めて思った」

なぜ、いまさらそんなことを思ったのだろうか。理由はよくわからなかった。それでも構わない。本当に、美しいのだから。

「・・・あの、大丈夫ですよ、提督」

「?どうした、急に」

こちらを窺うようにしていた大和は、わずかに頬を染めながら、視線を惑わせてこう言った。

「大和は、これが初めての实战ですけど。必ず、提督のことをお守りします」

——ああ、そうか。

この娘も、だ。俺のことを信じてくれている。

——俺は、まだまだダメだな。

大和にまで、気を遣わせてしまうようでは。本当は長官が言ったように、俺が彼女の緊張を和らげる側なのだから。

なぜなら俺が、彼女たちの提督なのだから。

「ありがとう」

彼女たちには、感謝してもしきれない。

——だから俺も、彼女たちを守ろう。

彼女たちと共に戦う者として。

榊原は右手を差し出して、大和に握手を求める。共に戦う、提督と艦娘として。

その手の意味を理解したのか、大和は恥ずかしそうに朱を強くし

て、そつと手を握り返した。

作戦前夜

「隣、座るぞ」

夕食の席で、その声は唐突に掛かった。

『IF作戦』発動前夜。それまでよりもさらに増した緊張感の中でも、食堂の艦娘たちは賑やかだ。その様子を眺めながら夕食の鮭に手を付けようとしていた榊原は、不意にかかった声の主を振り返る。榊原と同じトレーを持った将校は、彼の同期であり、第五期生主席であった、清水隆之少佐だった。

細身で長身、短く揃えた髪に、細い目と、同じぐらい細いフレームの眼鏡。白衣を着ていれば、海軍の人間というよりもむしろ研究者に見える。

元々の性格なのか、清水はあまり自分から他人に関わろうとするタチではなかった。同期たちがたまの休暇に飲みに行こうとすると、着いてくるかは半々といったところだ。

そんな清水が、自分から榊原に声をかけてきた、のみならず隣に座ってもいいかと聞いてきたのだ。明日辺り、槍でも降って来ると、じゃなからうかと、榊原は一瞬本気で思ってしまった。

「い、ごぞ」

まあ、特に拒否する理由もないので、榊原は隣の席を示す。清水は腰を下ろすや、すぐに手を合わせて夕御飯に手を付け始めた。

——なんで、わざわざ俺の隣に座ったんだ。

つくづく、この主席様の考えることはよくわからない。

変に気を遣ってもアレなので、榊原も箸を動かす。出撃前だからだろうか、鮭の塩気が、いつもよりも効いている気がした。

そのまま食事は進んで行く。しかし、隣に珍客がいるせいで、妙に意識してしまう。この時ほど、気さくに話せる悪友の存在を欲したことはなかった。

「・・・榊原」

突然、清水が榊原の名を呼んだ。あまりに唐突だったので、思わずご飯をむせてしまった。ゴホゴホと咳き込む榊原を、清水は怪訝な目

で見遣る。

「・・・なんだ、お前」

「いや、すまん。ちよつと・・・」

ちよつとビックリした、とは言えずに、榊原はそのまま姿勢を正した。

「で、どうした？」

榊原は続きを促す。が、自分から話し始めたくせに、清水は一向に口を開かなかつた。悠然と鮭の最後の切り身を咀嚼して、きれいさっぱり片付いた夕御飯に手を合わせた。

「・・・随分と、艦娘たちと親しいんだな」

冷淡な声だ。そもそも清水の話し方からは、感情が読み取れることはまずない。

「ああ。俺は彼女たちの提督だからな。できるだけ、いろんなところで交流を持つようになっている。その上で、俺を信頼してくれているなら、嬉しい」

清水は何も言わずに、こちらを見つめていた。そして特に何か反応するわけでもなく、トレーを持って席を立つ。相変わらず、食べるのが異様に早い。

「気を緩めるな」

立ち去り際、清水が言った。

「彼女たちはただの少女じゃない。現状唯一、深海棲艦に対抗できる戦力だ。情をかけ過ぎると、いざという時に正しい判断ができなくなる」

忘れるな。彼女たちは仲間ではなく、兵器だ。そう言い残して、清水はトレーを片付けに行った。

——油断するな、つてことか。

榊原はそう思うことにした。清水なりの、励ましなのだ。

清水の本当に考えていることが理解できる者など、少なくとも榊原たちの同期にはいなかった。

◇

「あつ」

風呂から上がった榊原は、同じようにして暖簾から出てきた彼女とばったり出くわした。普段と違い、風呂上がりの髪の毛はストレートに後ろへ流れ、水滴を帯びて群青に輝く。風呂用具を持った曙は、榊原の登場に目を開いて、間の抜けた声を出しつつも、すぐにいつもの切れ長な目元に戻った。

「曙も、今上がったところか」

「見ればわかるでしょ」

攻略艦隊到着以来、それまでよりも交わす言葉が少なくなった秘書艦は、それでもいつもと変わらないそっけない返事を榊原に返した。「それもそうだ」

自らの間拔けな質問に苦笑して、榊原は休憩室の方を向いた。冷蔵庫では、コーヒー牛乳が冷えている。

「曙は、コーヒー牛乳、飲むか？」

「・・・今日は、やめとく。明日の朝、お腹壊したらシャレにならないし」

もの欲しげな表情だったが、曙はそれを振り払うようにさつきと歩きます。相変わらず、本当に真面目な艦娘だ。彼女に倣って、榊原もやめておくことにした。

大浴場から、提督私室と艦娘寮のある庁舎の方へと廊下を歩いている。隣に並んだ榊原を流し見て、曙がギリギリ聞こえる声で言った。

「別に、わざわざ一緒に来なくてもいいのに」

「俺と一緒に歩きたいだけだよ」

「・・・ふんっ。あつそ」

そっけない返事のようにだが、さつきと違ってどこか喜色のようなものが見て取れた。こうしているのは、まんざらでもないらしい。可愛いやつである、という感想は、失礼であろうか。

「・・・何こつち見てんのよ、クソ提督」

緩みそうになる頬を懸命に抑えて曙を見ていたことは、彼女にはバレバレだったようだ。それを誤魔化そうとして、榊原は別の話題を探した。

「曙の髪、随分長いな。綺麗にするの大変じゃないか？」

「へ？」

榊原の言葉は、曙の意表を突いたらしい。どこか恥ずかしそうに流したままの髪をいじりながら、曙は何でもない風を装って話し始めた。

「ま、まあね。あたしたち、基本毎日潮風に当たるし。色々大変よ」

でも、短くしようとは、思わないかな。曙は呟いた。そうして、風呂上がりで整えられたばかりの髪をいじる姿は、榊原に何かを思い起こさせた。

だから、ついこんな言葉が、口を突いて出てきた。

「髪、梳こうか？」

バツ。ものすごい勢いで、曙がこちらを見た。

「な、何でクソ提督が・・・っ！」

「いや、嫌ならいいんだ」

もちろん、榊原も無理強いする気はない。

一転してそっぽを向いてしまった曙は、ボソボソとやはり聞き取れるか聞き取れないかの声の大きさを、先を口にする。

「別に、嫌なんて、言っていないでしょ」

本当に可愛いやつである。

また緩みそうになった頬を堪えているうちに、榊原の腕が強引に引っ張られた。小柄な体でも榊原をぐいぐいと引っ張っていく曙は、まるで何かを誤魔化すように速足だった。

「ちよっ、どこに行くんだ？」

「決まってるでしょ。あたしの部屋よ」

マジですか。

いかに提督とはいえ、艦娘寮に入ることはほとんどない。うら若き乙女たちの秘密の花園だ。強引にいばら混じりかもしれない花園へと曳かれていく榊原の動揺は推して知るべしである。

そうこうしているうちに、榊原は艦娘寮の一室の前に連れて来られた。基本的に同じデザインの扉が並ぶ寮だが、それぞれが誰の部屋であるかを示す表札には、結構凝った工夫がされている。出撃先でも自作の表札を持っていき、与えられた部屋にわざわざかけるのだとか。

ちなみに曙の表札には、ウサギやらカニやらがデコレーションされていた。

——あつ、可愛い表札。

榊原がそんなことを思った時、曙が自室の扉を開いて、モジモジとしながら、彼を招き入れた。

「ど、どうぞ」

「あ、ああ。失礼するよ」

榊原も、若干緊張気味に、曙の部屋へ足を踏み入れる。女子の部屋に入ったのは初めて——ではないが、少なくとも中学以来だろうか。

室内は、榊原たちの部屋よりも一回りほど小さい。ベッドと机、タンス。質素なのは変わらないが、小物が多いのと、一応申し訳程度にはドレッサーが置かれていた。どこか、「曙」の艦橋に近い匂いがする。

こほん。曙がわざとらしく咳払いをする。

「じゃあ、クソ提督。ベッドに座って」

「え……？」

ドレッサーの前じゃなくていいのか？とは思ったが、曙が有無を言わさない表情なので、大人しく従うことにした。腰掛けたベッドはホテルなんかのそれよりはいくらかしつかりとして、反発を返してくれ。代わりに、掛布団は柔らかだ。夜もそこまで暑くならないので、どちらかと言えば薄手になっている。

ベッドに腰掛けた榊原とは別に、曙はドレッサーの前に向かって、櫛を取る。差し出されたそれを受け取ると、榊原の想像もしていなかった事態が起こった。

ポスツ

風呂上がりの軽やかな曙の体が、榊原の膝の上にチョココンと乗ったのである。

「あ、曙!」

思わず彼女の表情を覗き込もうとした榊原から逃げるように、曙は早口でまくし立てた。

「な、何よ!?!文句ある!?!」

否、それは開き直りと言うべきか。

「文句は・・・ない」

ない。が、理由はよくわからない。若干どころではない榊原の困惑を封じ込めるように、曙が催促してきた。

「ほら、早く」

「・・・わかった」

この二か月で、曙に無理に理由の説明を求めることが無意味であることは理解していた。太ももに乗る彼女の柔らかな感触が気にならないわけではないが、それを押し殺せるぐらいには、榊原は理性的だった。

「それじゃ、梳くぞ」

「お、お願い」

慎重に、それこそ壊れ物でも扱うように、榊原はゆつくりと、蒼く輝く髪に櫛を入れた。

スツ

風呂上がりで湿っていても、その櫛通りは驚くほどいい。日頃気を付けているというのは本当なのだろう。流れるような、綺麗な髪だ。

「・・・ほんとに綺麗だな。櫛がよく通る」

「クソ提督こそ。随分慣れてるのね」

「妹によくせがまれてな。髪を梳くのに関しては、世界一うるさい女だった」

その間もゆつくりと髪を梳いていく。最初はこわばっていた曙の体も、次第に力が抜けて、時折心地よさそうに足を揺らす。

「・・・なんていうかさ」

曙は、いつもと同じく、おもむろに口を開いた。

「あたしたちは艦娘だけど、年頃の女の子とあんまり変わんないって
いうか・・・。可愛いものは好きだし、おしゃれとかだっ
てほしい」

榊原は、髪を梳く手を止めずに、その話に耳を傾ける。こちらがちゃんと聞いていることを察してくれているのか、曙はそのまま話を続けた。

「でも、そう好きに言つてられないでしょ？おしゃれな服を着て、可愛いバックなんか持って、出かけることは、あたしたちにはできない。だから、さ」

だから、せめて髪だけは。どれほど潮風に吹かれても、髪だけは綺麗でいよう。

それは、艦娘という年頃の女子の、意地のように榊原には思えた。この一線だけは譲れないという、気高い意志。

思い知らされる。彼女たちが、ただの兵器などではないことを。目の前の曙は、ともすればどこにでもいる、極々普通の女の子にしか見えない。

海を思わせるこの群青のきらめきは、どれだけの想いが込められているのか。

「・・・綺麗だ」

榊原は、もう一度はつきりと口にする。

「曙の髪は、すごく綺麗だ」

単純と思われるかもしれない。けど、それでもいい。榊原は、心の底から、そう思っているのだから。

「な、何度も言い過ぎよ、このクソ提督！」

厳しいお言葉が返ってきた。ただ、その最後に、小さく「ありがとう」という言葉が聞き取れた。

やはり、曙は可愛い。

「終わったぞ」

頃合いはよくわかつている。差し出した櫛を受け取った曙は、朱の差した顔のまま、榊原を追い出しにかかる。

「クソ提督は、さっさと出て行って！」

それが彼女の照れ隠しであることは、二か月も一緒ならよくわかった。扉から出た榊原は、部屋の中にいる曙に微笑む。

「おやすみ」

「・・・おやすみ」

真っ赤になりながらも、彼女の顔には確かな笑みが浮かんでいた。なお、この後比叡に見つかった榊原が、半目の彼女に必死になつて

誤解を解こうとしたことは、また別の話である。

発動！『IF作戦』！

朝焼けに輝くパラオ沖の海面は、揺らめく波のグラデーションがこの上なく美しい。艦形が小柄ゆえに、その波間に揺さぶられることもある潜水艦だが、今日はまさに出撃日和と言えた。

潜水艦「伊一六八」の司令塔頂部から海を見つめていた板倉光希中佐は、超が付くほど低い乾舷の艦首で波が割れていくのを確認した。艦隊の出撃に先駆けて警戒任務へと出撃する彼女麾下の潜水艦隊には、すでに微速前進を命じている。

泊地を出る四隻の潜水艦、その先頭にいるのが「伊一六八」だ。ただし、艦娘であるイムヤは、艦の操作のために指揮所におり、見張り所には板倉と妖精が三人いるのみとなっている。泊地の外に出てしまえばオートナビゲーシオンに切り替えられるが、それまでは細かな操作が必要になるので、妖精の報告をもとにイムヤが操艦する。

「イムヤ、調子はどう？」

マイクを取った板倉は、司令塔直下の指揮所を呼び出す。返事はすぐにあった。

『機関は良好。充電も始めたわ』

伊号潜水艦が潜航航行をするには、水中で電動機を動かすための二次電池を蓄電する必要がある。これは、大体八時間で完了する。

「泊地を出たら、オートナビゲーシオンに切り替えていいからね」

『了解』

妖精が停泊する駆逐艦の存在を知らせ、それを受けたイムヤが転針を指示する。「伊一六八」がすぐに艦首を右に振り、泊地の外を目指していく。

板倉が率いる第六潜水艦隊——六潜艦の役割は、トラック沖の戦闘時において、ハワイ方面から敵艦隊が接近してこないか、見張ることにある。

横須賀に全艦が集められ、板倉の麾下で行動する潜水艦部隊だが、数は十分と言えない。現状では四隻だけであり、必然的に取れる作戦も限られてくる。

そもそも、第二次大戦級の戦術では、潜水艦とは数あつてこそ威力が發揮される代物だ。水上でこそ、それなりの速力を發揮しうる伊号潜水艦だが、水中速力は最新鋭の潜水艦と比べるべくもない。潜ってなんぼの潜水艦だが、伊号潜は所詮、まだ『潜水艦』ではなく『可潜艦』の部類だ。水中速力の不足は、数で補うしかない。

それに、深海棲艦という敵の存在そのものが、潜水艦の役割を低減させている。通常艦やBOBと違い、深海棲艦には艦を動かすための燃料が必要な素振りも微塵もない。輸送艦の類は、ハワイやトラックからその他の拠点に向けて出撃しているものの、その役割はいまだに不明で、数も少ない。即ち、敵の喉元を絞める潜水艦の十八番、通商破壊が深海棲艦には有用ではないのだ。

となると、数少ない潜水艦を生かす方法は、かつて帝国海軍が夢想していた艦隊決戦の前哨戦、漸減作戦ということになる。が、これはそもそも侵攻してくる敵艦隊を迎え撃つための作戦であり、今回の『IF作戦』には使えない。

これに対し板倉は、「攻撃的漸減作戦」とでも呼ぶべきものを提案したが、準備期間の不足などを理由に却下された。代わりに、ハワイ方面から来寇するかもしれない増援部隊を見張れとの命令が出た。

—— たった四隻で、どうしろって言うのよ！

という文句は、板倉と四人の潜水艦娘に共通だが、決まった以上はやるしかない。対策はいくらか練ってきた。

これだけの大規模作戦だ。深海棲艦も、パラオに主力級の艦隊が集まっていることは察知しているだろう。とすれば、ハワイから増援部隊が来た際に取りうる航路は、大体推察できる。そこを中心に、四隻で警戒線を構築するつもりだ。

泊地内には、伊号潜とは別の潜水艦の姿も見える。旧海上自衛隊が保有し、現在は海軍の本土防衛艦隊に所属する四隻の潜水艦だ。切れ長の刀を思わせる伊号潜とは違い、こちらは丸っこい葉巻のようなフォルムだ。その艦影の違いは、彼女たちが海の中を本分としていることをありありと示している。

そちらに目を凝らしていた板倉は、ふと、潜水艦の艦上が慌ただし

くなつたのに気づいた。ハッチから乗組員たちが溢れ出て、司令塔と
言わず、甲板と言わず、整然と並ぶ。

四隻の潜水艦上で、乗組員全員が一斉に敬礼した。一足先に泊地を
出港する同志たちを、精一杯送り出そうとしてくれている。

——仲の悪いのは上だけ、ってね。

組織というのは、常に軋轢を孕むものだ。こと、深海棲艦の出現後
に創生され、現代艦船とBOBを同時に保有する海軍という組織の中
での衝突は大きい。すなわち、「自衛隊組」と呼ばれる、旧自衛隊から
引き継がれた本土防衛艦隊と、「海軍組」と呼ばれる、唯一深海棲艦に
対抗しうるBOBを中心とした連合艦隊との派閥争いだ。

前者は旧帝国海軍から続く伝統と誇り、後者はBOBの登場によつ
てここ三年で上げた戦果。お互いの意地がぶつかり合い、火花を散ら
す。

だが、それはあくまで上層部の話。現場レベルでは、むしろ旧自衛
隊の人間は、艦娘たちに感謝しているし、強い畏敬の念を抱いている。
と言うのは、板倉の同期で、元は海自の潜水艦乗りだったという男だ。
その言葉に、偽りはなさそうだ。でなければ、あんな敬礼はできな
いはずだ。

——艦隊の方を、どうかよろしくお願いします。

その想いを込め、板倉も彼らに敬礼する。

朝陽をバックにしたパラオ泊地から、潜水艦隊は出撃して行った。

◇

夜の海は、真つ暗などというものではない。墨汁を厚く塗りたくつ
たような海面の動きは、全くと言っていいほど見えなかった。星の瞬
きが、辛うじて海面に反射し、その高低差を可視化してくれている。

夜間仕様で、電灯の落とされている航空母艦「赤城」の艦橋。仮眠
を済ませて戻った塚原二四郎大佐は、自らの目で海面を見ることを諦
めた。代わりに、隣で同じようにして海面を見つめている弓道着姿の
女性に尋ねる。

「見えるか？」

艦娘、赤城は苦笑して首を横に振った。

「いいえ、全く」

「そうだよな」

予想通りの答えに、塚原は相槌を打つ。チラツと、赤城とは逆方向を見遣った。大型双眼鏡に取り付いた妖精は、これといって見辛そうにすることもなく、夜の海面を見張っていた。

「視力には自信があるんだがな」

塚原は呟く。彼は元戦闘機パイロットだ。

「視力が良いのと、夜目が利くのはまた別ですから。それとも、夜間見張り員訓練を受けてみますか？」

「いや、遠慮しておこう」

かつて海軍が誇った超能力集団は、特殊な訓練によって、夜間にもかかわらず二万メートル先の敵艦を見つけられたという。まだまだ性能的に信頼できるものでなかった当時のレーダーより、ずっと優れた能力だ。

ただし、日中は目をやられないように目隠しやサングラスをするなど、色々と制限が多い。

話題を切り替えようと、塚原は咳払いをする。

「攻撃隊の準備は？」

「第一次攻撃隊の準備は、間もなく。第二次攻撃隊は、対艦装備で待機させます」

「そうか」

塚原は腕時計を見る。日本時間で〇二二〇。時差は一時間早いから、陽の出と同時に攻撃隊を出すなら、そろそろ攻撃隊を甲板に並べなければならぬ。

「・・・始めようか。攻撃隊を甲板に出してくれ」

「了解です」

赤城が頷く。妖精さんに伝えると、すぐに格納庫で攻撃隊を上げる準備が始まった。通信用の探照灯に取り付いた妖精は、“赤城”に続く第二制圧艦隊——二制艦の各艦に、攻撃隊の発艦準備を下令した。

「ブレイン・ハンドシェイク」

塚原の横から離れた赤城は、艦橋の中央に立ち、自らの艤装を背負って精神同調に入った。心なしか、唸る「赤城」の機関音が、そのリズムを変えたような気がした。

「精神同調完了。システム正常、舵もらいます」

赤城が宣言する。次の瞬間、低いモーターの駆動音が響き始めた。暗闇の中、艦橋右にある飛行甲板に目を凝らせば、三か所設けられた奈落——昇降機が、ゆっくりと動きだしているのが見えた。艦載機が格納庫から引き出され、甲板に並べられるのだ。

赤城に搭載されているのは、零式艦上戦闘機六四型と「天山」艦上攻撃機だ。これには理由がある。今回二制艦を構成する二隻の軽空母、「飛鷹」、「隼鷹」は、「赤城」とその僚艦「加賀」に比べて速力が遅く、重い「天山」を扱うには不安があった。そこで、「赤城」と「加賀」には「天山」を集中的に配備し、「飛鷹」と「隼鷹」には「彗星」艦上爆撃機を搭載していた。

艦載機の重量増加は進む。そこで必要となってくるのが、発艦補助装置、つまりカタパルトだ。工廠部は試作品の開発に成功しており、二隻の空母に搭載してデータを取った。すでに、呉では「翔鶴」と「瑞鶴」への搭載が決まり、それに伴う改装に入っていた。

その、試験的にカタパルトを搭載した二隻の空母というのは、「赤城」の僚艦である「加賀」と、三衛艦旗艦の「祥鳳」である。

「全機引き出すまでの時間は？」

「一時間弱です。暖機運転まで含めると、一時間半で攻撃隊の準備が完了します」

「丁度ぐらいか」

塚原は呟く。

「第一潜水隊はどうしますか？」

艦隊に付き従う潜水艦は、一二ノットで艦隊外縁部を航行している。航空隊発艦のために、風上に向かって疾走する必要がある機動部隊には、着いてくることはできなかった。

「こちらの発艦作業が優先だ。その間は、潜っただけでもらおう」

発艦作業が終われば、合流はいつでもできる。

「赤城」の飛行甲板には、格納庫から引き出された艦載機が続々と並べられていく。第一次攻撃隊に参加する零戦と「天山」は、発動機の暖機運転を始めていた。

「三直艦」「祥鳳」より発光信号です。『索敵機、発艦準備完了』」

機動部隊直衛の任を負った三直艦の旗艦軽空母は、「赤城」たちよりも後ろにいる。搭載機はほとんどが防空用の零戦六四型で、この他少数の対潜哨戒用九七式艦上攻撃機と二式艦上偵察機を搭載している。姉妹艦の「瑞鳳」も同じだ。

「加賀さんも準備できたみたいですね」

「赤城」の隣を航行する僚艦を見遣って、赤城が付け加えた。「事前に決めた通り、索敵線を形成するように伝えてくれ」

塚原は、先に索敵機を出してしまうことに決めた。本格的な機動部隊同士の戦いは、おそらく第二次攻撃隊以降になるだろうが、敵艦隊の発見は早ければ早い方がいい。

三隻の空母が速力を上げる。幸い、風は艦隊のほぼ正面から吹いているので、大きく針路を変える必要はなかった。

「加賀」、索敵機発艦始めました」

赤城が報告する。それに続くようにして、後続の防空軽空母からも二式艦偵が次々と飛び立っていった。これが、艦隊の目だ。

機動部隊の戦いは、すでに始まっていた。

——だから、勝手に突き進むんじゃないぞ。

塚原たち機動部隊の遙か前方に展開し、今日の日没後にトラック諸島へ夜襲をかける予定の高速遊撃部隊。その部隊を率いる向こう見ずのバカ——もとい、猛将と謳われる同期の女性将校に、届くはずのない懇願を送る。

索敵機が飛んで行った空。その先で太陽が顔を出す頃、「赤城」以下四隻の空母から、第一次攻撃隊がトラック諸島に向けて発艦を始めた。

夜明ケノ強襲

太陽の昇った海面を、十二隻の艦艇が駆けていく。細く絞られた艦体は見るからに速そうで、今でこそ全艦が一八ノットしか出していないが、その機関が唸ればたちどころに三〇ノットに迫る高速力を発揮可能だった。彼女らはまさしく、海原の高速遊撃部隊だ。

複縦陣を敷く艦隊の、左列最前に位置取る戦艦「比叡」の艦橋には、二つの人影がある。言わずもがな、艦娘である比叡と第五遊撃艦隊——五遊艦の指揮官角田だ。

五遊艦と第四水雷艦隊——四水艦で構成されるこの艦隊は、東郷や塚原が指揮する主力部隊よりもさらにトラック諸島に接近した位置にいる。今日一日の戦闘が終わり、日没時点でトラック諸島に最接近できるよう、速力も調整していた。

目的は、トラック諸島内の敵港湾施設を叩くことだ。

「と、長官はおっしゃっていましたが」

いつものおどけた感じで、角田は比叡に言った。

「どう見ても、なーんか裏がありそうだよねえ」

「そうですね」

比叡も同意する。こうした他愛もない会話の間も、複縦陣の位置関係に常に気を配る。「比叡」には五遊艦の六隻が付き従い、右隣の列には「川内」を先頭として四水艦の六隻が連なっていた。

「さて、そこで比叡ちゃんに問題です」

「・・・なんですか」

殊更迷惑そうに、比叡が応える。何だかんだと言って会話に付き合ってくれているところ、優しい娘だなあ、と角田は思うのだった。

「僕たちの本当の目的は何でしょうか」

「えらく唐突ですね。ヒントはないんですか？」

「比叡ちゃんの弾薬庫の中身、かな」

「弾薬庫の中身、ですか」

ヒントをもらった比叡が考え込む時間は、それほど長くなかった。

「・・・昔、飛行場を砲撃した時の装備に、似てる気がします」

程度の差はあれ、艦娘はかつて太平洋戦争を戦った軍艦の記憶を宿している。そして、戦艦「比叡」が沈んだ戦いは、僚艦の「霧島」と共にガダルカナル島ヘンダーソン飛行場を砲撃しようとした作戦の途上で起きた、帝国海軍呼称『第三次ソロモン沖海戦』だ。

「うん。僕もそう思う」

角田も同意する。

「金剛」に続いて大規模改装を受けた「比叡」の装備類は、大きく更新されている。舷側のケースメイト式副砲は全廃、代わりに四〇口径一二・七センチ連装高角砲が増設され、片舷五基、両舷で十基と、対空火器が大幅に強化されている。

が、それ以上に大きいのが、主砲の換装だ。「長門」型戦艦に準じる四五口径四一センチ連装砲を四基。それに伴い、射撃指揮装置も更新し、艦体には装甲とバルジを追加した。

その主砲弾薬庫には、現在一式徹甲弾、零式通常弾、三式通常弾が搭載されている。普段はこれらを、八割、一割、一割の割合で搭載していた。だが、今回の作戦に当たっては、五割、二割、三割に変更されている。

これの意味するところは、角田も比叡もわかっていた。

「僕たちの本当の目的は、トラックにある飛行場の砲撃だ」

「でも、事前偵察では、それらしきものは確認できなかったんですよ？」

比叡が疑問を呈する。

「それに、深海棲艦は腐っても艦艇ですよ。どうやって航空基地を建設するんですか？」

比叡の質問はもつともだ。現在、深海棲艦と一番近い存在であるB O Bは、基地航空隊を保有できない。というのも、搭乗員妖精は航空母艦の顕現と共に現れるので、その母艦で運用可能な人数しかいないからだ。基地航空隊を形成できるような人員の余りはない。

だが、角田は首を振った。

「長官と塚原は、危惧してたよ」

「・・・お二人が」

比叡の声が真剣みを帯びる。

「・・・ちよつとちよつと比叡ちゃん。何で僕が言うかと疑って、長官と塚原が言うかと微妙に信賴してるのかな？」

「言わなきゃわかりませんか？」

「辛辣っ」

せつかくのシリアスな雰囲気台無しである。

「ま、だとしても多分、建設途中が関の山だろうね。作戦時に脅威とはならないよ。でも、艦砲射撃で叩ければ、完成を一か月は伸ばせる。その分、僕たちの負担は減るし、もしかしたら基地建設自体を諦めさせることができるかも」

「そう、うまくいきますか？」

「どうかなあ」

角田は緊張感のない眩きを漏らす。

「塚原の航空攻撃次第かな。一時的でもトラックの制空権を握ることができれば、この作戦はやれるよ」

「・・・相変わらず適当ですね」

「適当なのが僕のいいところさ」

角田は笑う。一方の比叡は、諦めたように溜息を吐いた。

「っ！電探に感あり！」

電波の目を感じ取った機影の接近を比叡が報告する。一瞬にして、艦隊は緊張感に包まれた。

「方位二六五。感大きい」

「・・・味方攻撃隊かな？」

「その可能性が高いですね」

比叡の報告に、角田は腕時計を見、続いて天井を見上げる。後方から接近する攻撃隊は、間もなくその上空を通過するはずだ。

「備えあれば、憂いなし、ですよ司令」

比叡が彼女の妹の口調をまねた。戦闘中の彼女には珍しい、おどけ方だった。

「それもそうだね。どっちにしろ、敵攻撃隊には備えなきゃいけないし、艦隊の警戒レベルを上げておこうか」

角田はそう言つて、比叡に頷く。艦隊内通信用の探照灯が明滅し、五遊艦と四水艦に警戒レベルを上げるように指示をした。

各艦の主砲には対空用の砲弾が装填され、あらゆる高角砲や機銃が高空を睥む。大規模改装なつた「比叡」も、その高い対空能力を、いつ現れるかわからない敵航空機に向けて怒らせていた。

厳かに海を行く高速遊撃艦隊の上空、美しい編隊を組んだ機動部隊の第一次攻撃隊が、水平線の先に鎮座するトラック諸島へと、その銀翼をきらめかせて飛び去つて行つた。

◇

第一次攻撃隊を見送つた機動部隊。その斜め右前方に、第一制圧艦隊——一制艦の六隻は位置取つていた。二制艦と三直艦が輪形陣を敷いているのに対し、一制艦は単縦陣を敷いている。上空から見る目があるならば、三つの艦隊はまるで音符のように見えたことだろう。

一制艦の四番艦、「金剛」の後ろに着ける「大和」の艦橋に、榊原と大和は立つていた。二人の目は、すでに海面から離れている太陽に照らされる、揺らめく波間を見つめていた。

攻撃隊からの「突撃体勢作れ」——トツレはすでに受信している。トラック諸島へと飛び立つた第一次攻撃隊は、そこにある港湾施設、そして警戒艦隊を叩く予定だ。

環礁内に敵主力艦隊が残っている可能性も考えたが、榊原たちはすでに四度ほど敵潜水艦の接触を受けており、こちらの接近が気付かれていないなどと考える道理はない。主力となる機動部隊と戦艦部隊は、すでに環礁を出て、こちらとの戦闘の機会を窺つていると考えるのが妥当だ。

「第一次攻撃隊より入電！ト連送です！」

「全機突入せよ」を意味する信号を、いくらか興奮気味に、大和が報告する。初実戦とあつて、出撃当初は緊張の目立つた大和だったが、今はいくらか余裕が出てきたらしい。榊原との雑談にも、よく付き合つてくれていた。

「始まつたか」

「はい」

大和が頷く。

これで、深海棲艦はこちらの存在を完全に掴んだだろう。敵機動部隊の索敵機に見つかるのは時間の問題だ。

——その前に、こちらが敵艦隊を見つけれられるか、否か。

可能性は低いと、榊原は見ている。深海棲艦の潜水艦と、すでに四回も接触しているのだ。その全てを第一潜水隊が沈黙させているとはいえ、哨戒の潜水艦が消息を絶てば、その配置からこちらの大体の位置を割り出せる。後はその辺りを中心に索敵機を出せばいい。逆にこちらは、ほぼ手探りの状態で敵艦隊を探す必要がある。どちらが先に相手を見つけるかなど、火を見るよりも明らかだ。

「大和、対空兵装の状態は？」

「いつでも射撃可能です。主砲も、揚弾機に載る分は三式弾にしてあります」

淀みない大和の答えに、榊原は大きく頷く。

「おそらく、こちらが先に攻撃を受けることになるだろう。一制艦の存在は、二制艦の大きな盾になる」

守り抜こう。それが、一制艦と三直艦に与えられた任務だ。

武者震いだろうか。大和が口を引き結び、両の拳を強く握りしめる。やがて、榊原を真っ直ぐに見据えて、大きく返事をした。

「はいっー」

そして、榊原の予感現実のものとなる。

最初にそれを捉えたのは、「大和」の艦橋頂部に置かれた、二一号電探だった。

機動部隊のほとんどのBOBには、二一号電探、または一三号電探といった、対空電探が搭載されている。艦隊防空に主眼を置いた「祥鳳」に至っては、より性能の高い四二号電探を装備していた。だが、それらの中で真っ先に「大和」の電探に感があったのは、その設置位置が最も高いところだったからだ。

「電探に感あり！方位〇六五、感小さい！」

大和の報告は、すぐに機動部隊全体に伝わる。陽が昇った時点で、

機動部隊の無線封止は解除されていた。

「索敵機の可能性が高いな」

編隊を組んだ機体なら、感はもつと大きくなるはずだ。

防空戦闘の統括指揮をとる『祥鳳』からの指示で、上空待機していた直掩隊のうち三機が、接近する機体に向かう。およそ一分後、零戦からの射撃を受けて、敵機がオレンジの炎に包まれ、錐揉みとなって墜ちていった。

だが、撃墜はいささか遅すぎた。

「・・・敵機から無電が出てました。こちらの位置を報せたようです」
——そう、うまくはいかないか。

残念ながら、単機的目標を遠距離で捉えることは困難だ。こっちが見つけた時は、相手も見つけた時。索敵機を早期に発見して撃墜するのは、よほどの幸運に恵まれなければ不可能だった。

『対空警戒を厳となせ』

『祥鳳』に座乗し、防空戦闘全般の指揮を執る近藤が、艦隊全体に警戒を促す。それを受け、各艦の緊張が嫌でも高まった。中でも、特に迅速な動きを見せたのが、機動部隊の最前部に位置取る『摩耶』だった。増設された六基の一二・七センチ連装高角砲を振り立て、わずかに速力を上げてさらに前に出る。対空戦闘に対する、絶対の自信と自負。艦隊を守らんとする、強靱な意志。

——摩耶らしい。

榊原は内心で微笑む。今回の作戦において、近藤は摩耶に、ある程度のフリーハンドを与えていた。摩耶が持つ対空戦闘のセンスを信頼してのことだ。

「提督、あの・・・。空母が、甲板に艦載機を出す作業を続けてるみたいなんですけど・・・。」

対空兵器の最終確認を行っていた大和が、戸惑いの色をありありと浮かべて榊原に尋ねた。

「直掩機の発艦準備じゃないのか？」

「いえ、それがどうも違うみたいで。『天山』を並べてるんです」
「・・・ちよつと、見せてくれ」

塚原の意図がわからない。榊原は艦橋の窓から、機動部隊の方に双眼鏡を向けた。すると確かに、四隻の空母の飛行甲板では、第二次攻撃隊の準備が進んでいた。

——一体、何のために・・・？

だが、戦場には悠長に考えていられる時間など、存在しなかった。新たな状況の変化は、いつでも唐突に訪れて、艦隊を揺さぶる。

「索敵機から入電しました！『敵艦隊見ゆ』です！」

「このタイミングでか！」

神様というのは、実に残酷な偶然を産み出すものなのだ。

敵索敵機との接触から約三十分。なぜこんなにも、まるで狙い済ましたかのようなタイミングで、敵艦隊を見つけたのだろうか。

——今は待つしかない。

第二次攻撃隊を甲板に敷き詰め、全機を発艦させるには、どう短く見積もっても一時間近くかかる。そしてそれまでに、機動部隊は間違いなく、敵攻撃隊の空襲を受けることになる。今は耐えて、しかる後に第二次攻撃隊を出す他なかった。

敵艦隊を捉えておきながら、そこに手を伸ばせないのは、忸怩たるものがある。だからこそ、必ず艦隊を守り抜き、第二次攻撃隊に全てを託す他ない。榊原はそう考えた。

だが、塚原の考えは違った。

『「赤城」より。一機艦（第一機動艦隊。一、二制艦、三直艦で構成される艦隊）転針、針路〇七六』

——まさか・・・！

榊原の「まさか」を裏付けるかのように、塚原の言葉は続いた。

『艦首、風上にたて！』

対空戦闘用意！

最初、それは小さな点に過ぎなかった。

艦隊に迫りくる敵攻撃隊を捉えたのは、やはり“大和”の二一号電探が最初だった。続いて“祥鳳”の四二号電探も敵攻撃隊を捉え、艦隊全体に対空戦闘用意が下令される。

『敵編隊接近。方位〇六五、距離四万。数、概算で百六十。全艦対空戦闘よーいっ！』

近藤の良く通る声が、スピーカーを通して艦隊中に伝わった。

「主砲三式弾、装填よしー！」

大和が榊原を見る。コクリ、その視線に頷いた。

艦隊各艦の高射装置や測距儀が、迫りくる敵攻撃隊の方へと向けられる。それに伴い、主砲という主砲が、高角砲という高角砲が、機銃という機銃が、旋回し、その砲口を敵攻撃隊へと振り立てた。

だが、そんな一機艦の中にあつても、輪形陣中央の四隻の空母だけは変わらなかった。

また一機、“赤城”から攻撃隊が発艦する。“加賀”と“飛鷹”、“隼鷹”も同じだ。敵攻撃隊の接近を受けても、二制艦は第二次攻撃隊の発艦作業を止めなかった。

最も発艦作業が進んでいるのは、やはり“加賀”だった。カタパルトを用いることで、次から次に艦載機を発艦させていく。すでに“天山”の発艦が半分ほど終わっていた。残りの三隻は、カタパルトがないたため、一機ずつ甲板を疾走しては発艦していく。こちらは、ようやく“天山”と“彗星”の発艦作業に入ったところだ。

塚原は、敵の空襲によって被弾した空母から艦載機隊が発艦できなくなるよりも、敵攻撃隊と交戦しながら可能な限り攻撃隊を発艦させることを選んだのだ。

——だから、俺たちが守らなくちゃならない。

発艦作業中の空母ほど、無防備な存在はない。風上に向かって航行を続けなければならず、狙い撃ちにされる可能性が高いのだ。

『全艦、陣形を密にせよ』

近藤が輪形陣の間隔を詰めるように指示を出した。

輪形陣には、大きく分けて二つの種類がある。各艦の連携と弾幕の密度を重視する密集型と、回避運動を含めた艦隊行動を重視する散開型だ。

今回、輪形陣中央の空母がまともに回避行動を取れないので、近藤は密集して弾幕で敵攻撃隊を防ぐことにしたようだ。

「敵編隊、距離三万五千」

大和が読み上げる。双眼鏡を覗き込めば、迫りくる敵攻撃隊がゴマ粒のように見えた。

『距離二万より、対空戦闘開始』

その指示と共に、上空直掩の零戦隊が、迫りくる敵編隊に襲いかかった。

上空直掩に着く零戦は、六隻の空母から出ている。二制艦の四隻は攻撃隊にも着けなければならないので、一隻当たり三機と少ない。よって、直掩隊の主力は、三直艦の「祥鳳」、*「瑞鳳」*の戦闘機隊ということになる。「瑞鳳」は十二機、カタパルトを装備していた「祥鳳」に至っては、実に二十四機もの零戦を上げている。

合計で四十八機。このうちの半数に当たる二十四機が、先頭に行く敵戦闘機隊に突っ込んでいった。

たちまち、熾烈な制空権争いが始まる。とはいえ、二十四機の零戦に対して、敵戦闘機の数はほぼ倍。歴戦の戦闘機隊は、その技量をもって何とか拮抗を保っているが、彼我共にもつれ合う格闘戦では、決して有利とはいえなかった。

では、残りの二十四機は何をしていたのか。その答えはすぐに示された。

味方直掩隊と戦闘を繰り広げながら、じりじりと一機艦に接近していた敵攻撃隊の上空から、人工的なきらめきが降り注いだ。まるで流星群のように敵攻撃隊に突き刺さった零戦が、主翼に一三ミリと二〇ミリの機銃を瞬かせ、弾丸を雨霰と撃ちこんだ。

薄く広がっていた雲をうまく利用したこの攻撃は、非常に有効だった。零戦隊が攻撃隊後部を高速で通過した後、真っ赤な火焰と黒煙が

踊る。

「防空指揮所より、敵機十機撃墜確認！八機落伍！」

艦橋のすぐ上にある露天の防空指揮所からの報告を、大和が叫ぶ。防空指揮所には、見張りの妖精たちが大型双眼鏡に取り付いて、敵機の様子を見張っている。

一航過の後、二十四機の零戦は反転して、今度は攻撃隊の下方から攻撃を仕掛ける。それに気づいた敵戦闘機隊は、慌てて攻撃隊の護衛に戻ろうとするが、その一瞬の隙を見逃すほど、最初に敵戦闘機隊に取り付いた二十四機は甘くなかった。

巧みな空戦技術で、戦闘機隊を攻撃隊から引き剥がし続ける。

結局、二度の降下と一度の上昇で、敵攻撃機は二十二機が撃墜された。また、他にも多数機が被弾し、白煙や黒煙を引きながらなんとか攻撃隊に付き従おうとする機体もある。攻撃を諦めて、爆弾や魚雷を投棄し、帰投する機体もあった。

零戦隊の攻撃は終わった。攻撃隊に戻った敵戦闘機隊が何とか追い払おうとして、再び乱戦の様相を見せる。が、これで零戦の数は、敵戦闘機とほぼ互角になった。これなら、負けはしない。

一三ミリや二〇ミリの機銃が送り、彼我の曳光弾が入り乱れる。優位を保つ直掩隊だが、攻撃隊を再攻撃できるだけの余裕はなかった。

ここからは、対空砲火が迎撃の主役だ。

ゴクリ。大和が生唾を呑み込む。敵攻撃隊は、確実にこちらへと接近してきていた。

「大丈夫だ。落ち着いてやればできる」

榊原は、できるだけ落ち着いて聞こえるように、ゆつくりと大和に言った。

「はい」

大和も頷く。

『一制艦、対空射撃用意』

一制艦の旗艦、単縦陣の先頭に位置取る「長門」が、一制艦の戦艦四隻に下令する。各艦の主砲には、対空用の三式弾が装填され、すでに迫りくる敵攻撃隊の方へと、その砲口を向けていた。

三式弾の有効射程距離は二万メートル。そこからが、大和たちの出番だ。

敵攻撃隊は、高度二千で輪形陣に突入してくる。艦隊の進行方向から見て十時の方向だ。

「長門」、陸奥、金剛の四一センチ砲二十四門、そして大和の四六センチ砲九門が、その巨大な鎌首をもたげ、射撃の機会を窺っていた。

「敵編隊、距離二万！」

大和が叫ぶ。同時に、主砲発射を告げる、甲高いブザーの音が艦上に鳴り響いた。あまりにも強烈な大和の主砲発射時の爆風に巻き込まれないようにだ。

——頼むぞ、大和。

主砲発射の衝撃に備え、榊原は大和を見遣る。その真剣な眼差しが、今しも機動部隊に迫らんとする敵編隊を、真っ直ぐに見据えていた。

まず撃つのは、長門と陸奥だ。日本海軍戦艦部隊の主力艦は、統制砲撃の訓練を受けており、その砲撃には寸分の狂いもない。十六門の四一センチ砲が一斉に咆哮し、褐色の砲炎を噴き上げる。

それから一拍を置いて、金剛が発砲。長門型にも劣らない、堂々たる斉射だ。

そして、大和の番が来た。ブザー音が止み、一瞬の静寂が艦上に訪れる。

「撃ち方、始めっ」

次の瞬間、めくるめく閃光が迸り、巨大な砲声が榊原の聴覚を支配した。七万トン近い巨艦にもかかわらず、四六センチ砲九門の一斉砲撃は艦を横方向に動揺させ、衝撃波が艦橋の窓をビリビリと震わせ。万雷にも勝る圧倒的な爆音が、海上に響き渡った。

——とてつもない威力だ。

これが、最強の戦艦大和の砲撃。神の雷にも似た、暴力的なまでの破壊力。

放たれた三式弾は、音速の二倍という速度で空を切り裂き、敵攻撃

隊へと迫る。二十数秒後、敵編隊の上空に、花火が開いた。丁度、ススキ花火に似た形だ。漏斗状に広がったその一つ一つが、三式弾に込められた子弾である。

真つ赤な火箭が、敵攻撃隊に降り注ぐ。計三十三発の三式弾が敵編隊を押し包み、さながら一網打尽にしたようだった。

「やった!」

大和が歓声を上げる。が、そう甘くはなかった。

敵攻撃隊は、進撃を続ける。撃墜された機体は少ない。黒煙を引いて落伍している機体はいくらか見えるが、撃墜は精々十機といったところだろうか。

三式弾は、通常の対空砲弾とは違う。爆風の威力や、断片で切り刻むのではなく、内部に込めた子弾を高速で吹き飛ばし、高い貫通能力を与える。結果、効果範囲は全方位ではなく、特定の角度に限定される。つまり、炸裂するタイミングと位置が適切でなければ、効果が薄いのだ。

最大有効射程距離の二万では、そのタイミングを計るのは難しかった。

敵編隊が散開する。爆撃機は上昇、逆に雷撃機は高度を下げる。

「『摩耶』、撃ち方始めました!」

大和が報告する。輪形陣先頭に位置取るパラオ泊地所属の重巡洋艦が、その主砲と高角砲から一斉に砲炎を迸らせた。

それを皮切りに、機動部隊各艦が一斉に発砲する。あらゆる高角砲が、迫る敵機を撃墜せんと、砲弾を吐き出す。途端に、上空は真つ黒い高角砲弾の花で覆い尽くされた。

射撃は低空の雷撃機に集中している。近藤は雷撃機の方が脅威度が高いと判断したのだろう。

『一制艦、目標敵降爆（急降下爆撃機）編隊』

敵雷撃機と反対方向に位置する一制艦は、機動部隊上空への侵入を図る爆撃機に、その狙いを定めた。左舷側に指向可能な全高角砲が仰角を引き上げ、高射装置から送られる諸元をもとにして信管が調節される。

「撃ち方、始めっ」

大和の号令。『大和』の左舷側にある高角砲三基が、一齐に砲炎を上げ、敵爆撃機へと砲弾を投げつけた。さらに、左舷へ指向可能な三基の一五・五センチ三連装砲も咆哮し、零式弾を撃ち出す。

高角砲弾の速射能力は高い。大体五秒から六秒に一回、二門の砲が同時に褐色の炎を噴き上げる。

対空射撃の主役となったのは、やはり『摩耶』と『五十鈴』、『秋月』の三隻だった。三隻とも、一機艦の中では対空能力がずば抜けており、その訓練も欠かしていない。正確無比な対空射撃が、接近を試みる雷撃機を確実に屠っていった。

「『加賀』、発艦作業完了ー」

大和が叫ぶ。カタパルト装備の大型空母が、真つ先に発艦作業を終えたのだ。

——『赤城』はまだかかりそうだな。

双眼鏡を覗き込んでその様子を確認した榊原は、額を汗が伝うのを感じた。『飛鷹』と『隼鷹』の『彗星』は、後数機を残すのみだが、『赤城』には『天山』が後十機は残っている。

「主砲、三式弾再装填完了」

どうしますか？大和が目線で尋ねる。艦橋から見える爆撃機を見上げた榊原は、コクリと頷いた。

爆撃前の敵機は、編隊を組んで固まっている。絶好の機会だ。

「やれるな？」

「・・・はいー」

大和は確かに頷いて、主砲に諸元を入力する。再び、艦上にある要塞のような、巨大な主砲塔が駆動し、距離一万を切ろうとしている爆撃機にその砲口を向ける。砲身の微調整があった後、本日二度目の斉射を知らせるブザー音が鳴り響いた。

「第二射、撃ーっー」

九門の四六センチ砲が、大気を鳴動させる轟音と共に、重量一トン半の砲弾を音速の二倍という速度で吐き出す。等速度的に広がる衝撃波は海面に巨大なクレーターを産み出し、榊原の鼓膜を容赦なく打

ち据える。まるで濡れ雑巾で思いつきり引つ叩かれたかのような感覚に、榊原は両足を踏ん張って耐えた。

艦の動揺が収まるころ、三式弾炸裂の花火が開く。今度こそ。その思いを込めて固唾を呑むのは、榊原も大和も同じだった。

「・・・よしっ！」

思わず、ガッツポーズを作る。三式弾に巻き込まれた敵機が多数、炎を引いて墜ちていく。目測で十数機。もつとかもしれない。

「て、提督！大和・・・大和、やりました！」

「ああ！よくやった！」

二人とも興奮気味に言い合う。完璧な炸裂位置とタイミングだった。精神同調によって「大和」そのものになった大和だからこそ、実現できたことだ。

『長門より大和。今の射撃、見事なり』

旗艦の「長門」からも、賛辞が届く。

「守ろう。大和なら、やれる」

榊原の言葉に、大和は自信を持って頷いた。

だが。

「っ！敵機急降下！「赤城」に向かいます！」

恐れていた事態が、ついに起こってしまった。

時ハ来タ

対空砲火を突破した爆撃機が「赤城」を狙うのは、必然と言えた。もとは巡洋戦艦改造の大型空母だ。その巨躯は「長門」型戦艦をも上回り、僚艦の「加賀」よりも目立つ。機動部隊でその大きさを超えるのは、榊原の乗る「大和」だけだ。

「赤城」の飛行甲板では、なおも発艦作業が続いている。残った「天山」は九機。「赤城」が風上への驀進を止めることはない。

雷撃機に相對していないBOB、すなわち輪形陣右翼の各艦と一制艦の高角砲が、まさに急降下に入った爆撃機編隊へと、その射撃を集中させた。

「赤城」自身も応戦する。飛行甲板両舷に設けられた一二・七センチ連装高角砲が仰角を一杯にして、艦尾上空から急降下を仕掛ける敵機に向けて火を噴く。改装によって大幅に増設された二五ミリ機銃も同じだ。炎の礫のような弾丸が上空へと伸びて、爆撃機の進路を阻害する。

「金剛」の放った高角砲弾が、爆撃機を切り刻んで落とす。機銃をまともに浴びて、コントロールを失う機体もある。

高角砲弾の直撃を受けて爆発四散した機体にもろに突っ込んで、共に墜ちていく。

それでもなお、急降下を止めない。

高度がみるみるうちに下がる。高角砲の有効射程を突破した敵機には、機銃弾だけが雨霰と撃ちこまれた。曳光弾の嵐に押し包まれる敵機は、耐えきれずに炎に包まれるかと思った。だが実際には、そうそう命中せず、敵機はなかなか撃墜できなかつた。

なんとかさらに一機を撃墜した時、先頭の爆撃機がついに投弾した。高度は千を切っている。腹から離れた爆弾が、陽光の中にキラキラと反射して、「赤城」へ降り注ぐ。

——当たるな……！

投弾を許した時点で、もはや祈ることしかできない。二制艦旗艦の無事を念じて、榊原は爆弾の行方を追った。

投弾した敵機は引き起こしをかけ、「赤城」の艦上をフライパスする。直後、爆弾が落下して、盛大な水柱を噴き上げた。

最初の一発は、「赤城」の右舷艦首付近に落ちる。そこから、続くようにして次々と爆弾が降り注いだ。艦首、右舷左舷。着弾のたびに瀑布が上がり、巨大な「赤城」の姿を覆い隠す。

「・・・よしっ！」

八発目を最後に、着弾が止んだ。被弾はゼロ。至近弾による被害が若干あるかもしれないが、ともかく「赤城」は、何事もなかったかのように航行を続けていた。

おそらく、濃密な弾幕が先頭機の照準を狂わせたのだ。編隊での急降下爆撃は、先頭機の投弾タイミングと照準に全てがかかっている。それを狂わせたことが、「赤城」の幸運だった。

ついでにいる。そう思った時だ。

別の場所で、轟音が鳴り響いた。炸裂音と破壊音が連続し、大気を震わせる。

「「隼鷹」被弾！」

大和が叫んだ。「赤城」よりも後方に位置していた軽空母に、敵弾が命中したのだ。

被弾はまだ続く。甲板中央付近への被弾に続いて、今度は艦尾に爆炎が踊った。薄い甲板がめくれ上がり、最後尾で発艦を待っていた「彗星」が吹き飛ばされる。のたうつ炎が、甲板を焼いていた。

さらにもう一発。今度も甲板中央だ。島型艦橋の向こう側で火柱が上がり、飛行甲板の切れ端が飛び散る。真っ黒い煙が、すさまじい勢いで噴出していた。

「隼鷹」の被弾は、最終的にその三発。甲板をズタズタにされた以上、その攻撃能力が完全に損なわれたのは、誰の目にも明白だった。

だが、攻撃隊の発艦は完了した。「隼鷹」、そして僚艦の「飛鷹」から発艦した攻撃隊は、一機艦上空から少し離れた空域で、編隊を組んでいた。

——後は、「赤城」だけだ。

幸運にも難を逃れた大型空母の甲板に並ぶ「天山」も、残り少なく

なってきた。全機の発艦完了までは後少しだ。

「右舷、雷撃機接近！」

——来たか。

それまでとは反対方向を、榊原は見た。海面付近、まるで這うようにして一制艦に迫る機影がある。輪形陣右舷へと回り込んだ、敵雷撃機隊の半分だ。

——狙いは、一制艦か。

榊原はそう判断した。でなければ、わざわざ対空砲火に優れるこちらへ突っ込んでくる道理がない。

もしかしたら、敵は戦艦同士による決戦を望んでいるのかもしれない。だからその前に、こちらの戦力を少しでも削ろうとした。

とにかく、考えるのは後だ。

接近する雷撃機は、およそ二十五機。距離は六千を切った。

「右舷高角砲群、撃ち方始めっ！」

大和が指示をする。高射装置からの諸元入力を終えた高角砲が、一斉に火を噴いた。「長門」と「陸奥」、
「金剛」も同じように発砲する。さながら活火山のように、迫る敵機へと高角砲弾を撃ちまくった。

一制艦の右舷に、真つ黒い花が次々と花開く。爆風と鋭い断片を振り撒く高角砲弾が、戦艦部隊に迫る雷撃機を落とそうと、触手を伸ばす。

一機が絡め取られ、高度を落としていく。

爆風をもろに受けた敵機が海面に衝突する。

断片に切り刻まれ、黒煙を噴きながら波間に消えた機体もあった。

チラリ。榊原は、「大和」のすぐ右舷を航行する二隻の駆逐艦を見遣る。一制艦隷下の「曙」と「霞」だ。両艦とも、一二・七センチ連装砲を振り立てて、対空砲弾を撃ちまくる。平射砲ゆえに、対空射撃においては高角砲よりもロスタイムが大きくなりがちだが、相手が雷撃機なら話は別だ。仰角が〇度付近の射撃なら、高角砲に遅れを取ることはない。

もつとも、「曙」には高射装置が搭載されていないので、四隻の戦

艦ほど正確な対空射撃は行えない——はずなのだが。

——「雷撃機くらい、勘で落とせなくてどうすんのよ」

事も無げに言った曙の言葉に、嘘はなかった。

高速で移動するとはいえ、海面付近を飛ぶ雷撃機は、曙に言わせれば水上目標と変わらないらしい。おまけに、わざわざまっすぐ飛んできてくれるのだ。距離八千でいきなり夾叉を得られるほど射撃の腕がたつ曙なら、それを落とすことも可能だと言う。

その言葉通りのが起きています。炸裂した対空砲弾に一機が巻き込まれ、墜落する。『曙』の射撃は、高射装置を載せていないとは思えないほど正確だった。

『霞』も負けていない。呉所属時に、対空火器強化のため第二砲塔を降ろし、代わりに高射装置と機銃を増設した彼女もまた、『曙』に負けず劣らずの弾幕を形成する。

二隻からの射撃が、機銃に切り替わった。

雷撃機との距離は、三千を切った。高角砲の有効圏を突破された以上、後は機銃のみが頼りだ。

一制艦各艦の艦体各所から、細く鋭い火箭が何十と伸びる。標準装備となつている二五ミリ機銃が、弾倉が空になるまで撃ち続ける。機銃に取り付く妖精が、空になつた弾倉を交換し、再び発砲。それが幾度となく繰り返され、雷撃機の進路を阻害する。

そもそも機銃は、敵機の撃墜よりも攻撃進路の阻害を主眼においている。とはいえ、その威力は零戦の搭載する二〇ミリ機銃よりも強力だ。まともに受けければ無事ではすまない。

弾幕に突っ込んだ雷撃機が、錐揉みとなつて墜落する。

機銃弾にズタズタに引き裂かれた機体が、海面に衝突する。

推進機をやられたのか、形を崩すことなく落ちていく機体もある。

だが、全機を撃墜することなど不可能だった。

「敵機投雷しました！」

大和が絶叫した。雷撃機との距離は一千。投雷距離としてはまずまずだ。

「雷跡十三！」

焦りの滲む声で大和が報告する。一制艦上空をフライパスした雷撃機の後から、白い航跡が迫ってきた。

榊原は左舷方向を見た。一制艦と並んで行動する二制艦と三直艦もまた、左翼から迫る雷撃機に射弾を浴びせかけている。そしてその中央、旗艦「赤城」の攻撃隊は、まだ発艦を終えていなかった。

回避行動は取れない。そもそも間に合わない。

——当たるなよ……！

榊原は、その白い航跡を睨む。ここで倒れるわけにはいかないのだ。

その時。二隻の駆逐艦が発砲した。榊原は目を見開く。

海面に水柱が上がる。一制艦直衛の「曙」と「霞」は、一二・七センチ連装砲に俯角をかけ、海面を撃っているのだ。触発信管は海面衝突と共に炸裂し、衝撃波を海中に伝える。上手くすれば、魚雷の信管が作動して誘爆させることができるかもしれない。

——……ダメか！

だが、そううまくはいかなかった。対潜迫撃砲の類いならまだしも、対艦に特化した駆逐艦の主砲では、魚雷の迎撃など無理難題もいところだ。さすがの「曙」も、こればかりはどうにもならなかった。

十三本の雷跡の内、明らかに命中コースなのは、「金剛」に二本、「大和」に三本。避けることも、防ぐこともできない。

——万事休す……！

天をふり仰ぎたい衝動を抑え、榊原はじつとその時に備えた。

だが、予想だにしない事態が起きた。「金剛」と「大和」に向かっていた魚雷に、別方向から白い線が伸びていったのだ。榊原が目を見開くのと同時に、敵の魚雷と白線が交差し、巨大な海水の柱が現出する。莫大な水の塊となった魚雷が、その航跡をさらに引きずることはなかった。

残りの魚雷は、一制艦各艦の艦首、あるいは艦尾をすり抜ける。命中弾は皆無だ。敵機の魚雷は、ついに一本も一制艦を捉えることがなかった。

「一体、何が・・・？」

たった今、目の前で起こったことが信じられないといった様子で、大和が呆然と呟く。一機艦の編成を思い返した榊原は、たった一つ、こんな芸当が可能な存在に思い至った。

「・・・第一潜水隊だ」

「おやしお」型と「そうりゆう」型計四隻で構成された、最新鋭潜水艦隊。そこから放たれた魚雷が、一制艦に伸びた魚雷を誘爆させたのだ。

「魚雷で魚雷を誘爆させるなんて・・・」

「ああ。なんて練度だ」

例え、深海棲艦を沈めることができなくとも。自らのやれることを、百パーセントの能力でやりきる。そしてそのための鍛練は欠かさない。そんな、プロとしての心意気を感じた。

輪形陣左翼での戦闘も、終息に向かっていった。こちらは、「摩耶」、「五十鈴」、「秋月」の対空射撃が非常に的確で、投雷前に多数を撃墜することができた。被雷はなし。

「発艦作業中の対空戦闘という困難な選択を、一機艦は成し遂げたのだ。」

敵の攻撃隊が集合をかけたつつ撤退していく。被害報告が寄せられ、集計の結果、被弾は「隼鷹」の三発のみ。至近弾による被害がいくらかあったが、戦闘に支障はない。「隼鷹」も、被弾が爆撃だけだったことと、早急な応急処置が功を奏して、速力の低下等はない。

「ブルーアイアンを強制活性化させて、破孔を修復してみるよ。多分、着艦はできる・・・と思う！」

当の隼鷹は、あつけらかんと言った。以降、損傷機の回収は、「隼鷹」が一括して受け持つこととなった。

そして。

『「赤城」、攻撃隊発艦完了！』

ついに、第二次攻撃隊が発艦作業を終え、美しい編隊を組んで進撃を始めた。

接近

敵編隊が引き上げた一機艦では、トラック諸島の空襲から帰還した第一次攻撃隊の回収作業が進んでいた。

事前に決めた通り、損傷箇所をブルーアイアンの強制活性化によってなんとか塞いだ「隼鷹」には、損傷が激しく、再出撃が不可能な機体が降り立つ。それ以外の機体は、「隼鷹」所属機も含めて三隻の空母に着艦した。

その様子を、「長門」艦橋に立つ東郷源八郎大將は横目で見遣った。健在な三隻の空母には、第一次攻撃隊参加の零戦や「彗星」、
「天山」が次々に着艦し、燃弾補給と整備のために格納庫へと下ろされていく。

「危ない賭けをする男だ」

二制艦旗艦に目を止めて、東郷は呟く。その声に答える者があった。

「だが、結果として『隼鷹』の艦載機を出せたではないか。それに、敵の第二次攻撃を受ける前に、敵艦隊を攻撃できる」

艦橋中央に腕組みして立つのは、艦娘の長門だ。引き締まった体躯に、凛々しい顔立ち。まさに連合艦隊旗艦たる威厳に満ちていた。

長門と、僚艦の陸奥は、横須賀に籍を置いている。だが実際には、連合艦隊司令部直属の向きが強く、横須賀艦隊からは半ば独立した指揮系統を持っていた。司令部においては、艦娘側のオブザーバーとして参加することが多く、東郷は二人を参謀の数に入れている。

「結果論だな」

長門の意見に、東郷が短く返答した。

「回避運動を取れば、空母の被弾がゼロになったかもしれない」

「それは・・・そうだが」

長門が顔をしかめる。

「まあ、塚原大佐の指揮にとやかく言うつもりはない。彼に機動部隊の指揮を任せたのは、他でもないこの私だ」

東郷はそこで話を切る。元々、塚原の執った指揮に何か言うつもり

は、東郷にはなかった。

もしも、東郷が塚原と同じ立場なら、同じ判断をしたかもしれない。だが、今の東郷は提督ではない。連合艦隊司令長官という立場だからこそ見えてくるものもある。

「今日は、第三次攻撃が精一杯だな」

上空を仰いだ長門が呟く。艦載機の回収や補給作業を勘定すると、こちらも敵も、攻撃隊は第三次攻撃が今日一日で出せるギリギリだろう。

「三直艦の防空戦術は、予想以上にうまく働いている。粘れるはずだ」
むしろ問題は……。

二制艦とは別に、先ほど一制艦から放った水上偵察機。彼らの探し物は、まだ見つかっていなかった。

トラック攻勢において、障壁となる二つの深海棲艦艦隊。機動部隊と、もう一つは戦艦部隊だ。

——まあ、実際にはさらにもう一つ。

ルソン警備隊の「秋津洲」に所属する二式大艇が撮影した写真では、遊撃艦隊のようなものがトラックの南方に展開しているのが確認できた。こちらは、別働艦隊が抑えてくれるはずだ。

ともかく、一制艦が本来の相手と想定する、トラックの戦艦部隊は、いまだにその姿をくまらなかった。

機動部隊方面——つまりトラックの北西方面への索敵で見つからなかったということは、トラックを挟んだ反対側、南西方面にいる可能性が高い。

そこで一制艦は、敵の空襲が終わった時点で各艦に搭載されていた零式水上偵察機——零水偵を発艦させ、トラック南西方面への索敵に当たっていた。

「長門」、
「陸奥」、
「金剛」からは一機ずつ。
「大和」からは四機。さらに、
「摩耶」からも二機出ていた。

一制艦にはもう一機種、零式水上観測機——零水観が搭載されているが、こちらは砲撃戦時の弾着観測に使用する機体のため、足が短い。索敵にはあまり向かなかった。

「『瑞鳳』直掩機の第二陣が、発艦を始めた」

索敵機の行き先に思いを馳せていた東郷を、長門の言葉が引き戻した。見れば、艦隊後部に位置取る防空用の軽空母から、直掩の零戦が飛び立つところだった。発艦作業が終わり次第、『瑞鳳』には現在上空に張り付いている直掩隊の第一陣が着艦して、燃弾補給を受ける手はずだ。

「『祥鳳』の方はどうか？」

『長門』の艦橋からは死角になって見えない位置にいる、もう一隻の軽空母の状況を探ねる。長門が見張り所に確認し、すぐに答えた。

「燃弾補給を終えた機体から、順次発艦させている」

『祥鳳』は、直掩機の第一陣に、搭載する全零戦を参加させていた。

『祥鳳』に所属する二十四機の零戦は、空襲終了後、未帰艦の六機を除いて全機が『祥鳳』に着艦、燃弾補給を受けていた。

本来空母は、出撃する全機を並べ、昇降機を上げて甲板を真っ直ぐな一枚の板にしなければ発艦作業を行うことができない。だが、『祥鳳』が装備するカタパルトを使えば、燃弾補給を終え、暖気運転の完了した機体から、順次発艦させることができた。

「全機の発艦まで、後十分ほどだ」

「そうか」

長門の報告に、東郷はやはり短く答えた。

このまま、敵の第二次攻撃に備えることになりそうだ。東郷がそう思った時だった。

「っ！索敵機より入電、『敵戦艦部隊見ゆ』！」

長門が声を張った。もう一つの主力艦隊を、零水偵の一機が捉えたのだ。

「どの機体だ？」

「『大和』三号機からだ」

『大和』三号機の割り当ては、方位一三〇だった。すなわち、現在の艦隊進路から五〇度ほど南寄りということになる。

索敵機からの報告は続いた。

「本艦隊よりの距離、五十海里。戦艦四、駆逐二。速力一八ノット」

「近いな」

速力がそのままなら、接敵まで二時間といったところか。

「艦隊は動かせないな。風が東から吹いている以上、戦艦部隊に接触されるのも時間の問題だ」

索敵機からの情報を、冷静に精査するように、長門が言った。

一機艦の速力は、最も遅い「飛鷹」型の二隻と第一潜水隊に合わせれば、二三ノットということになる。対する深海棲艦戦艦部隊は、二七ノットが発揮可能だ。さらに、空母は発艦作業中風上に向かう必要があるので、一定時間の進行方向が限定される。これらを勘案すると、一機艦が戦艦部隊の追撃を振り切ることは不可能だった。

高い攻撃能力を誇る機動部隊だが、近距離戦闘の能力は皆無と云っている。空母にとって最悪の事態は、敵の水上部隊に捕捉されることだ。

これを防ぐ方法は、現在の一機艦には一つしかない。

「二制艦と敵機動部隊の戦力は互角だ。新たに、戦艦部隊を叩く余力はあるまい」

東郷はそう断じた。

「では？」

「一制艦をもって、これを迎え撃つ」

東郷は淀みのない声で決断を下す。今、敵戦艦部隊と満身に戦えるのは、一制艦しかないのだ。

「下の参謀連中は、また騒ぎそうだな」

長門が苦笑する。艦橋基部の下には、参謀たちが控える作戦指揮室が設けられていた。

元々、連合艦隊司令部の参謀たちは、連合艦隊旗艦の「長門」が出撃することに反対だった。出撃するにしても、司令部は本土、あるいは前線基地のパラオに置いて、そこから指揮を取るべきだと主張していた。

それを一蹴して出撃したのは、他でもない東郷だった。

「何とでも言えばいいさ」

特に気にする風もなく、東郷が呟く。長門の苦笑が、益々大きく

なつた。

「それでは、参謀の意味がないではないか」

「彼らは所詮、戦術の専門家だ。戦略に口を出せるほど、達者ではない」

「それもそうだ」

長門はそれ以上なにも言わなかった。代わりにマイクを差し出す。受け取った東郷は、スイッチを入れて、機動部隊を指揮する提督を呼び出した。

「塚原大佐」

『はっ』

横須賀所属の機動部隊戦の名手は、相変わらずの落ち着いた声で答えた。

「偵察機が敵戦艦部隊を発見した。一制艦でこれを迎え撃つ」

『了解しました。こちらの指揮はもろいます』

「任せた」

やり取りは簡潔に終わった。一制艦は、一機艦の指揮系統から離脱し、東郷の指揮下で敵艦隊と相対する。東郷に万一のことがあれば、指揮権はそのまま塚原に移されることとなった。

「一制艦各艦に到達。『一制艦転針、針路一三〇』」

「一制艦転針、針路一三〇」

東郷の命令を、長門が一制艦の各艦に伝える。他の提督たちとは違い、東郷が自ら号令することはまずなかった。

「おーもかーじー！」

独特の抑揚をつけて、長門が号令する。数十秒後、四万トン近い長門の艦体が、緩やかにカーブを描いて右に艦首を振った。

◇

東郷からの通信の後、しばらく黙考していた塚原は、着艦作業と燃弾補給を指揮する赤城の横で、盛大に溜め息を吐いた。

「どうかされましたか?」

「……いや」

——非常に気が進まない。

一制艦が抜けた以上、長期戦はこちらに不利だ。だから、できるだけ早く、決めたい。幸い、塚原には切り札があったし、彼女ならやれると思っっている。だが、それとこれとは別問題だ。

それでも、やるしかない。他に選択肢はなかった。

「赤城、角田に繋いでくれ」

「あ……了解です」

その一言で、赤城は溜め息の意味を察してくれたらしかった。すぐに、機動部隊の前方を進む遊撃部隊の旗艦、そしてそこで指揮を執る彼女に回線を開いた。

「こちら一制艦、塚原。角田、聞こえるか」

しばらくして、能天気な声が返ってきた。

『誰かと思えば、塚原じゃないか。感度良好だよ、用件はなにかな？』
もう一度吐きたくなった溜め息を、塚原は強靱な精神力で呑み込んだ。

「敵戦艦部隊が接近している。今、一制艦が迎撃に向かった」

たったそれだけで、角田は全てを理解してくれた。

『なるほど。つまり、決着を早くつけるために、僕たちに北へ六十海里ほど爆走しろと、塚原はそう言いたいんだね？』

——腹立たしいやつだ。

腹立たしいくらい、俺の考えを理解してくれる、全くもって可愛いげのないやつだ。

遊撃艦隊の北六十海里には、一機艦が相手取る敵機動部隊がいた。元の作戦計画では、これを一機艦だけで叩くつもりだった。が、たまたま敵機動部隊が遊撃艦隊の近くにいてくれたのは好都合だ。

「その通りだ」

塚原は肯定した。

「五遊艦の砲火力で、これを叩いてほしい」

機動部隊にとって最悪の事態は、近距離での戦闘に巻き込まれること。それは、敵も味方も関係ない。

五遊艦と四水艦に所属するBOBのうち、最も遅い「比叡」でも三〇ノットが発揮できる。敵機動部隊に突撃を敢行することは十分に

可能だ。

敵機動部隊の護衛艦に、戦艦は含まれていない。重巡が二隻と、後は軽巡と駆逐艦だ。戦艦一隻と重巡三隻を擁する五遊艦なら、火力で圧倒できる。

『それはつまり、大暴れしてこいつて、そういう意味でいいのかな？』
「・・・非常に気が進まないが、そういうことだ」

こいつに自由を与えたら、何をしでかすかわかったもんじやない。案の定、角田は殊更嬉しそうにして、塚原に切り返した。

『そつかそつか。それじゃあ、全速で突っ込んで来るとするよ。どうせ陸上攻撃じゃ徹甲弾は使わないし、この際撃ち尽くすぐらいのつもりで』

———本当にこいつは。

通信を切ろうとする角田に、塚原はポツリと付け加える。

「無茶はするなよ」

『あはは、無茶ってなんのことさ』

やはり能天気な笑い声の後、通信は切れた。

———こつちの気も知らないで。

それまで溜めに溜めていた溜め息を一気に吐き出した塚原に、赤城が気の毒そうな苦笑を漏らした。

戦艦ノ本分

一機艦から離脱した一制艦は、単縦陣を保って第三戦速で進んでいた。対潜哨戒を担う「霞」を先頭にして、四隻の威風堂々たる戦艦が続いている。

すでに一時間、そろそろ会敵してもいい頃合いだ。

過去最大の、戦艦同士の砲撃戦に参加することとなった「大和」艦橋の榊原と大和は、やはり緊張した様子で艦首を見つめていた。

彼我共に戦艦は四隻、護衛の駆逐艦が二隻。敵の編成について詳しい情報はまだだが、少なくともelite以上が三隻と見積もられていた。

『長門より、一制艦各艦。観測機、発艦始め』

——来た……！

四隻の戦艦のうち、先頭を進む旗艦の長門が、弾着観測機の発艦を指示した。

四隻の戦艦には、それぞれ水上機を運用するための航空作業甲板とカタパルトがある。そこに載せられているのが、砲撃戦時に主砲の弾着を確認する弾着観測機、零水観だ。

砲戦距離の増大によって、艦そのものからの弾着観測と修正が難しくなった第二次世界大戦前、各国は高空から弾着の様子を観察し、誤差修正を手助けする弾着観測機に着目した。

BOBも同じだ。二万をゆうに越える砲戦距離では、弾着の様子を正確に知ることは難しい。やはり、上空の目が必要だった。

その役目を果たすべく、各艦一機ずつ計四機の零水観が準備されていた。

カタパルトからの射出も、空母と同じだ。風上に向け、一気に加速させる。そうして、発艦に必要な揚力を得るのだ。

「長門」後部甲板のカタパルトが、零水観を載せたまま風上に旋回する。「陸奥」、「金剛」もそれに倣った。

「大和」でもやることは同じだが、こちらは艦の最後部、艦尾に全ての航空機装が据えられている。二基あるカタパルトのうち、左舷側

のものが旋回し、風上を向いたところで固定した。

“長門”の零水観が発艦する。続いて“陸奥”、“金剛”。最後が“大和”だ。

「観測機、発艦―」

大和の号令で、カタパルトの火薬が点火される。弾けるような音の後、爆発によって急加速された台車が、零水観を海上に押し出した。一瞬沈み込んだ双葉単フロートの機体は、ペラでしっかりと空気を掴み、揚力を得て空へと舞い上がる。

「発艦完了」

大和が安堵するように言った。カタパルトからの発艦は、一見簡単そうに見えて、実はかなりの技術と忍耐が必要な作業だ。

「あの、提督」

上空を旋回する零水観を見遣った後、大和が遠慮がちに口を開いた。

「どうした？」

「えっと、装填済みのものと揚弾機のもの、合わせて三斉射分が三式弾のままですけど、いいんですか？」

大和が首を傾げる。確かに、先ほどまで対空戦闘を行っていたため、揚弾機には三式弾が残っていた。

戦艦の主砲は、非常に大きく複雑な機構だ。砲弾は砲室の下にある弾薬庫から揚弾機を使って持ち上げられ、尾栓から砲身に装填される。言っていることは簡単だが、これが実にややこしい。

揚弾機は、丁度ベルトコンベアのようなものだ。主砲一門ごとに専用の揚弾機があり、弾薬庫から砲弾を選んで乗せ、上部の砲室へと運んでいく。乗せられるのは四発だ。

一回撃つと、揚弾機の最上部にあった砲弾が砲身へと装填される。その後ベルトコンベアが動き、二番目の位置にあった砲弾が最上部に移動する。三、四番目にあった砲弾も同じだ。そして、ベルトコンベアの回転によって空白になった最下部に、新しい砲弾が弾薬庫から乗せられる。こうして、揚弾機には常に四発の砲弾が乗っていることになる。

さて、ここで問題なのが、すでに揚弾機に乗っている砲弾の換装だ。日本海軍の戦艦には、基本的に三種類の砲弾が搭載されている。対艦用の一式徹甲弾、対空及び軽目標（軽巡や駆逐艦といった、装甲の薄い目標）用の零式通常弾、対空用の三式通常弾だ。これらは当然、信管も炸薬量も全く違う代物である。一式徹甲弾で航空機は落とせないし、三式弾で戦艦は沈まない。だから、目標に応じて弾種を切り替える必要があった。

が、ことはそう簡単ではない。何せ、四一センチ砲弾は一トン、大和の四六センチ砲弾に至っては一トン半もの大重量物だ。動かすだけでも一苦労なのに、すでに揚弾機に乗っている砲弾を降ろして交換するのは、さらに手間と時間がかかった。

結局、一番手っ取り早いのは、揚弾機に残っている分を撃つてしまふことだ。

もちろん、一時間あれば、揚弾機の砲弾を交換することはできる。実際、「長門」、「陸奥」、「金剛」の三隻は、この間に揚弾機に残っていた三式弾を一式弾に換えていた。

が、「大和」ではこれを行わなかった。

建造から一か月ほどしか経っていない「大和」は、揚弾機の砲弾を取り換える訓練も経験もない。それ以上に、下手に一トン半の砲弾を動かすことは危険だと、榊原は判断したのだ。

「換装するよりも、撃つた方が早いし、安全だ」

「それは、確かにそうですね……。なんだか、無駄撃ちしてるみたいで」

——無駄撃ち、か。

艦娘の大和が、どの程度戦艦「大和」の記憶を受け継いでいるのか、それは榊原にはわからなかった。ただ、かつて第二次世界大戦を戦った戦艦「大和」の艦歴は知っている。その生涯で、本分とする主砲射撃を、ほとんど行えなかったことも。

「……無駄撃ちなんかじゃないさ」

榊原は言った。

「瞬発信管にすれば、水柱が立つ。その水柱があれば、弾着観測と誤差

修正ができる」

大和が目を瞬く。緊張した頬を緩めて、榊原は続けた。「最初から斉射だ。斉射を三回も弾着修正に使えるんだ」

弾着の誤差を修正する観測射は、通常交互撃ち方——各砲塔一門ずつの砲撃で行う。弾薬を無駄に消費しないためにだ。

だが、当然より多くの砲弾を撃ち込む斉射の方が、観測射としての精度は上がる。練度では他の三艦に及ばない大和でも、早い段階で正確な射撃諸元を得られるかもしれない。

命中弾を得るための観測射。それは、決して無駄撃ちなどではない。

榊原の言葉に、大和は小さく、それゆえにはつきりした声で「はい」と頷いた。

「観測機より、『敵艦隊見ゆ』！」

「来たか・・・っ！」

静寂は唐突に破られた。視点の上がった零水観が、水平線の向こうから迫り来る敵艦隊を発見したのだ。

二人の間に、再び緊張の糸が張られた。

『全艦合戦準備』

そんな中でも、長門の声音は変わらずに落ち着いていた。

「艦隊正面、距離四五〇（四万五千米メートル）。戦艦四、駆逐二。単縦陣を敷いて、一八ノットで接近中」

「目視まで十分といったところか」

——砲戦距離を、長官はどうするつもりだ？

チラリ。単縦陣のために「大和」からは見えない「長門」の方を見遣る。それを待っていたかのように、答えが返された。

『二五〇で取り舵、回頭終了後に砲戦開始』

砲戦距離は二万五千メートルと決まった。

合戦準備の下令を受け、先頭を進んでいた「霞」が舵を切る。戦艦同士の砲撃戦に巻き込まれようものなら、小柄な駆逐艦などひとたまりもない。

先頭を離れた「霞」は、そのまま弧を描いて「大和」の後方、もう

一隻の駆逐艦「曙」の左隣に位置取った。砲撃戦の間は、下手に巻き込まれないよう、四隻の戦艦から距離を取るはずだ。

「・・・提督」

砲撃戦に備え、各部が対爆風の準備を進める中、艦橋中央の大和が、不意に榊原を呼んだ。

「ん？」

「大和、言いましたよね。何があっても、貴方を守る、って」

「・・・ああ」

作戦開始前の会話だ。当然覚えていた榊原は、静かに頷いて先を促す。

「大和は、貴方を守ります。今度こそ、この主砲で。大切なものを守り抜いてみせます」

どこまでも純粹に真剣な眼差し。淡い色彩を湛える大和の瞳を、榊原もまた真っ直ぐに見つめた。

「大和は・・・貴方のために、戦います」

そう言い切った後、大和の頬がみるみる朱に染まり、それを隠すようにして前を向いた。

——ここにも、可愛いやつがいた。

そう思うのは、いささか失礼だろうか。

「ありがとう」

戦ってくれて。守ると言ってくれて。

榊原の言葉に、大和はやはり、照れたように微笑した。

「取り舵一杯！針路〇四〇！」

気合いの限り、大和が叫んだ。

一制艦は、ついに敵艦隊を水平線上に捉えた。以降、互いの距離は見る間に縮まり、長門が回頭点として指定した距離二万五千に、あつという間になってしまった。長門の『取り舵一杯、針路〇四〇』の号令に応えて、大和は艦の回頭を指示したのだ。

とはいえ、一制艦に所属する四隻の戦艦は、どれも三万五千トンを超える巨艦だ。そう簡単に舵が利きだすはずもなく、転舵の指示から

三十秒が経過しても、艦は惰性で前に進み続けていた。

やがて、ゆつくりと舵が利き始める。一度曲がりだしてしまえば早い。特に「大和」は、全長に比して全幅が大きいため、鋭いカーブを描くことができた。

全艦の回頭が終わる。これで、一制艦は敵艦隊に対して丁字を敷くことができた。丁度、かの有名な東郷ターンの要領だ。

——さて、敵はどう出てくるだろうか。

舵を切ったことで、右舷方向へと流れた敵艦隊を、榊原は注視していた。

砲戦距離が短く、艦艇の足も遅かった日露戦争の頃ならいざ知らず、二万以上の距離で砲戦を行い、三〇ノット近い速力を発揮可能な第二次世界大戦級の戦艦同士の戦いにおいて、丁字戦が成立することはまずない。島嶼の地形や軽艦艇をよほど上手く使わない限り、そんなことは不可能だ。

そもそも、東郷ターンで有名な日本海海戦にしても、最終的な勝因は、秘匿兵器下瀬火薬を使用した榴弾による火炙りと、執拗なまでの水雷戦隊による追撃があったからだ。東郷ターンは、その過程でとられた苦肉の策にすぎない。丁字戦の効果については、大きな疑問符が着いた。

ともかく、深海棲艦がこのままノコノコとやって来るわけではない。必ず、取り舵か面舵を切る。前者なら一制艦からも一機艦からも離れていくことになり、後者なら一制艦との同航戦を戦う腹積もりというわけだ。

「敵艦隊面舵！一制艦と同航します！」

敵艦隊の反応も迅速だった。深海棲艦戦艦部隊は、一制艦と雌雄を決する構えだ。

勝つ自信があるのだろうか。一般的に、BOB戦艦部隊が深海棲艦戦艦部隊に勝つことは、非常に難しいと言われている。一六インチ砲で統一されている深海棲艦戦艦部隊と互角に戦えるBOB、すなわち同じように一六インチ級の主砲を搭載しているのは、世界にたった七隻しかないなかった。

日本海軍は、変則技で「金剛」型に四一センチ砲を搭載しているが、防御に関しては十分とは言えない。正面切つて殴りあえるのは、やはり「長門」型の二隻しかいなかった。

その「長門」型にしても、敵艦隊の先頭を行く、旗艦と思しき戦艦——ル級flagshipと渡り合うのは厳しい。現在、深海棲艦の戦艦中最大の火力と防御を誇る難敵だ。BOBは、いまだに一度として、この戦艦を撃沈できていなかった。

これらを考慮すれば、敵艦隊が一制艦に勝てると判断したことは、あながち間違いとは言えなかった。

——だが、大和は違う。

ついに、敵艦隊が回頭を終え、一制艦と同航した。

『本艦目標一番艦。陸奥』 目標二番艦。『金剛』 目標三番艦。『大和』 目標四番艦。 測敵始め』

「四番艦への測敵、始めます」

大和が割り振られたのは、同じように単縦陣の最後部に位置するル級の通常型だった。敵艦隊の中で最も性能が低いとはいえ、一六インチ砲九門を搭載していることには変わりない。油断は禁物だ。

「測敵完了、主砲諸元入力」

大和の声に呼応して、鈍い機械の駆動音が響いた。巨大極まりない、三基の四六センチ主砲塔。極太の砲身が鎌首をもたげ、二万五千メートル先の四番艦に、その砲口を向けた。

「『長門』 発砲！」

真つ先に撃つたのは、先頭の「長門」だ。四基の連装砲のうち、左砲のみが発砲、観測射を放つ。

「大和」艦上にも、主砲発射を告げるブザー音が鳴り響く。その間に、「陸奥」と「金剛」も撃ち方を始めた。

やがて、ブザーが鳴り止む。こちらを窺った大和に、榊原は力強く頷いた。

「撃ち方、始めっ！」

大和の号令。

刹那、強烈な閃光が迸り、轟音と爆風が艦上を走り抜けた。大気を

鳴動させる衝撃波が艦橋を揺さぶり、海面に波一つ立たない真円のクレーターを産み出す。爆発的なエネルギーを与えられた九発の三式弾は、巨大なアーチを描いて飛翔を始めた。

“大和”という戦艦が、初めて敵戦艦に向けて放った砲撃だった。

海ヲ震ワセテ

深海棲艦戦艦部隊よりも、一制艦の方が先に発砲したのは、必然と言えた。先に回頭を終えていた一制艦の方が、敵艦隊の回頭を待っているだけの分、射撃諸元を完成させるのが早い。

射撃諸元は、測距儀などを用いて得られた敵艦と自艦の距離、方位、針路、速度、緯経度、さらにはその日の天気や気温、湿度、風向などあらゆる情報を専用の計算機に入力し、主砲の旋回角と俯仰角を導いたものだ。

第一射は、この諸元をもとに行われ、以後は弾着の位置を見ながら修正を加えていく。観測機あり、距離二万五千なら、大体三射から四射で諸元の修正を終え、夾叉を得られるはずだ。

本来なら、夾叉を得た段階で斉射に移行するのだが、三式弾が揚弾機に残っていた“大和”は、これを消費するために最初から斉射を放っていた。

“大和”の発砲から十秒ほど。今度は、敵戦艦部隊の一番艦が、褐色の砲炎を吐き出した。それに続くようにして、二番艦以降も撃ち始める。

いよいよだ。ここに、過去最大の戦艦対戦艦の戦いが始まった。

先に弾着するのは、一制艦四隻の砲撃だ。“長門”から放たれた四発が敵一番艦の左舷に落下したのを皮切りに、次々と砲弾が弾着し、水柱を噴き上げる。

「弾着、今！」

“大和”の砲弾も落下する。瞬発信管に設定された三式弾が海面に衝突して炸裂した。観測機からの報告は、全弾遠。もっと手前を狙う必要がある。

主砲に次弾が装填され、修正された諸元が入力される間に、今度は敵艦隊の砲弾が降り注ぐ。一制艦の四隻に、万遍なく一六インチ砲弾が落下して、その威力を誇示するかのような瀑布を現す。だが、こちらも命中や夾叉はなく、各艦の右舷や左舷にまとまって立ち上っていた。

負けじと、一制艦各艦も第二射を放つ。それから十秒の間があり、今度は敵艦隊だ。

お互いの砲弾は、相対速度マツハ五に近い速さですれ違い、放物線を描いて相手に急降下していく。

再び、連続的に水柱が上がる。各艦とも、先より精度は上がった。

“大和”の砲撃は、またしても全弾遠。九発の三式弾は、敵四番艦の向こう側の海面を、虚しく沸騰させただけだった。

「誤差修正、急いで！」

大和の声にも、焦りが見える。それをかき消すかのように、敵四番艦の射弾が水柱を噴き上げた。

「これで、三式弾は最後です。次より一式弾」

揚弾機に残った三式弾を撃ちきることを、大和が報告する。

「了解」

榊原の短い返答を聞き届け、大和は主砲発射のブザーを鳴らした。

三度目の砲撃。再び轟音が響き渡り、九発の三式弾が宙空へと解き放たれた。

敵四番艦も発砲する。褐色の炎が沸き起こり、一六インチ砲弾三発が放物線の頂点へと登っていく。

——今度こそは……！

その想いは、榊原と大和に共通だった。第三射。観測機を用いた決戦距離の砲撃なら、そろそろ夾又が得たいところだ。

一制艦の第三射が弾着する。直後、大和が嬌声を上げた。

「敵二番艦に命中弾！」

「“陸奥”か！」

二番艦の位置につけるビッグセブンの一隻が、ついにその目標を捉えたのだ。また、命中弾こそ得られなかったが、一番艦の“長門”も敵一番艦に対して至近弾を与えている。命中弾までは時間の問題だ。

——さすがの練度だ。

海軍一の練度を自称するだけのことはある。

“金剛”の射弾が落下した。こちららもかなり精度は高くなっている。

「弾着、今！」

今度は大和の番だ。弾着までの時間を計っていた大和が、弾着を知らせる。二人は、艦橋から見える敵四番艦を凝視した。

「・・・ダメッ」

大和が悔しさを滲ませた声を絞り出す。九発の三式弾は、派手な水柱を上げたものの、敵艦を捉えるには至らず、再び四番艦の右舷へと弾着していた。『大和』の砲撃は、またも空振りを繰り返したのだ。

今度は入れ替わりに、敵艦隊の砲弾が一制艦に迫る。音速を突破した一六インチ砲弾十二発は、三発ずつに分かれて一制艦の四隻の戦艦に降り注ぐ。

嫌な予感がした。

「『長門』に命中弾！」

——喰らったか・・・！

両艦隊は、ほとんど同条件で撃ち始めたのだ。こちらが命中弾を得たのなら、敵もまた、命中弾を得ても何らおかしくない。ましてそれが、最も優れたflagshipなら、なおさらだ。

ル級flagshipが搭載するのは、やはり一六インチ三連装砲だ。ただし、航空写真等から見ると、その砲身は通常型やeliteに比べて長いことがわかつている。おそらく、五〇口径の長砲身砲だ。一六インチ砲としては最大級の威力を持っている。

もつとも、『長門』はもとから四一サンチ砲艦であり、その防御も四一サンチ砲弾——一六インチ級の砲弾に耐えられるようになってる。長砲身砲とはいえ、ちよつとやそつとの被弾でやられはしないはずだ。

——大丈夫、次で命中弾を得ればほぼ互角だ。

先頭を進む一制艦旗艦の被弾を、榊原はそう思うことで頭の隅に追いやろうとした。

だが、彼は知らなかった。いや、知り得なかった。それは榊原の若さゆえなのだろう。嫌な予感は、必ずしも何かが起こる直前に感じるものではないということ。

「て、提督・・・」

榊原を呼ぶ大和の声は、わずかに震えていた。

「敵弾、本艦を夾叉してます・・・！」

榊原の背筋を、冷たいものが走り抜けた。

敵四番艦から放たれた、三発の一六インチ砲弾。それが上げた水柱も同じく三本。ただし、それを同時に視界に入れることはできなかった。一本は右舷、二本は左舷に立ち上ったからだ。

夾叉——敵艦を砲弾で挟み込んだこの状態は、つまるところ主砲の散布界内に敵艦を捉えているということなのだ。この状態で砲撃を続けると、命中弾が出る確率が非常に高い。

——大和の装甲なら十分に耐えられる、って言葉は、意味はないな。

不安になっっている彼女に、事実を言ったとしても、それは気休めにしかならない。今、彼女が求め、榊原が与えるべきなのは、そんなものではないはずだ。

そこで、大和の頭に手が伸びたのは、やはり何か本能的なものだったのだろう。

多少強引なくらい、しっかりと感触が伝わるように。彼女が、こちらを見てくれるように。

「大和」

「は、はい」

不安を湛えた彼女の瞳が、真っ直ぐに榊原を見つめていた。

「君ならならやれる。そうだろう？」

——笑うんだ。

指揮官は、辛い時ほど笑わなければならない。

榊原の笑顔は、ぎこちなかったかもしれない。それでも目を見開いた大和は、榊原の言葉に力強く頷いて、右舷の敵艦を見遣った。

「・・・私は、大和ですから」

不安を孕みながらも、確かな決意を秘めた呟き。

ポンポン

軽く彼女の頭を叩いて、手を降ろす。もう一度榊原を見た大和は、やはりぎこちなく笑った。

「一式弾は、交互撃ち方で行こう。三式弾の射撃で、諸元は相当に詰まっているはずだ。命中弾もじきに出る」

「はっ」

「大和」の主砲塔、三本ある砲身のうち、左砲が持ち上がる。

先頭の「長門」が、四度目の射撃を放つ。それに続いたのは「陸奥」ではなく「金剛」だ。夾叉を得た「陸奥」は、おそらく斉射に向けた準備に入っているのだろう。

「大和」の艦上にも、四度目の発砲を告げるブザーが鳴り響いた。「当たってー！」

三門の四六サンチ砲が、砲口から火球を生じる。轟音は先よりも小さいとはいえ、戦艦の砲撃に変わりはない。十分過ぎる殺傷能力を持った衝撃波が艦上を走り抜けた。

十秒ほどの間があつて、敵艦隊も発砲する。ただし、「長門」に命中弾を与えた一番艦、そして「大和」を夾叉した四番艦は、斉射に移行するためか、不気味な沈黙を保っていた。

「陸奥」、斉射に移行しましたー！」

一制艦の二番艦に位置する「陸奥」が、今日最初の斉射を放った。それまでに倍する勢いで褐色の炎が沸き上がり、八発の四一サンチ砲弾を吐き出す。

斉射は、搭載する主砲全門をもつて砲撃を行うことだが、日本海軍は微妙に違う。これは、主砲の散布界に起因する。

主砲の散布界は、その範囲に砲弾が落下することを意味する。これが広いと夾叉を得ることは容易いが命中弾を得にくく、狭いと夾叉しにくいが命中弾を得やすくなる。基本的には、この散布界が狭い方がよいとされていた。

とはいえ、そう簡単に狭くできるものではない。ちよつとした影響で、砲弾はずれるからだ。

散布界が広がってしまふ要因は様々だが、旧帝国海軍ではこのうち砲弾同士の衝撃波による干渉に注目した。同時に放たれた砲弾は、そのまま平行に飛び続けるのではなく、お互いの衝撃波が影響を及ぼし合い、結果として弾道がぶれてしまふのだ。

そこで旧帝国海軍は、斉射の際に各砲塔の右砲と左砲を若干ずらして発砲することを思いついた。こうして開発されたのが、発砲遅延装置である。

「敵一番艦斉射！続いて敵四番艦斉射！」

深海棲艦の戦艦は、発砲遅延装置を積んでいないとみられている。その散布界は広い。とはいえ、斉射は斉射だ。強烈な打撃が襲い来ることに変わりはない。

榊原も大和も、たつた今はなつた第四射の結果を見守りながら、敵弾命中の衝撃に備えた。

まず「長門」の砲撃が弾着する。確認できた水柱は三本。真っ白な摩天楼が、敵一番艦の前にまるでカーテンのように広がる。そしてその向こう側、深紅の火柱が上がるところも垣間見えた。

続くのは「金剛」だ。こちらも同じく、四発の四一サンチ砲弾が敵三番艦を包み込む。命中弾炸裂の火焰こそ見えなかったが、四本の水柱は敵艦の両舷に二本ずつ噴き上がっていた。夾叉である。

「長門」と「金剛」は、第四射にして敵艦を散布界に捉えたのだ。

——流れは来ている。

榊原は、じつとその時を待った。

「弾着、今！」

大和が、今日四度目の声を上げる。ゴクリ。二人は息を呑んで砲弾の行方を見守った。

——・・・ダメか・・・っ！

榊原は声にならない呻きを上げた。敵艦に向けて落着いた三発の一式弾は、その左舷至近に巨大なオベリスクを産み出したものの、散布界には捉えきれなかったのだ。

それをあざ笑うかのように、敵弾が落下する。

敵二番艦の射弾は、またしても「陸奥」を捉えることはなく、空振りだった。だが敵三番艦から「金剛」に向けて放たれた砲弾まで、そう都合よくはいかなかった。二本が左舷、一本が右舷に噴き上がり、「金剛」の艦体を挟み込む。

それから数秒して、「陸奥」の第一斉射が弾着する。白濁した水の

塊が敵二番艦の姿を覆い隠し、その内側に命中弾炸裂の閃光がきらめく。巻き起こる炎の中に、千切れ飛んだ敵艦の破片が見て取れた。

そして、今度は敵一番艦と敵四番艦の斉射が降ってきた。九発ずつの一六インチ砲弾が、単縦陣最前部と最後部の二隻を押し包み、その甲板を喰い破らんとする。榊原はその衝撃に備え、両足に全体重をかけた。

が、榊原も大和も拍子抜けしてしまった。予想していたような命中弾炸裂の衝撃が感じられなかったからだ。

否、確かに敵弾は“大和”を捉え、その信管を作動させた。しかし、対四六サンチ砲を想定した分厚い装甲と、七万トンに迫る巨体は、その爆発に十分過ぎる耐性を誇っていた。

「て、敵弾後部甲板に命中。損害軽微。戦闘航行に支障なし」

大和自身も、どこか呆気にとられた様子で被害を報告する。二人の間に、妙な沈黙が流れた。

「・・・あ、諸元修正完了。第五射、いけます」

慌てて思い出したように、大和が言った。艦上に、五度目の発砲を告げるブザーが鳴り響く。

「あの・・・提督」

榊原を呼んだ大和は、前を見つめたまま、スツと手を差し出した。その頬が、ほんのりとした赤に染まっている。

「手を握っていただけませんか？」

安心、できるので・・・。そんな小さな声に、榊原は無言で応える。

細くしなやかな指。柔らかな感触。手のひらに伝わる温もり。榊原が握れば、大和の方も恐る恐る握り返してくる。

「第五射、撃っっ」

各砲塔の中砲が発砲する。爆発エネルギーが砲弾に運動を促し、砲弾はそれを位置エネルギーに変換しながら、波頭の上を飛翔していく。

ギユツ。固唾を呑んでその行方を追ううちに、お互いの手に自然と力がこもる。

——当たれ・・・！

その願いは、二人に共通だった。

一制艦他艦の砲声も、敵艦隊の砲撃も、全く気にならなかつた。ただひたすらに、たった今放った第五射の四六サンチ砲弾三発が、その飛翔を終えるのを待ち続ける。

時は来た。

「弾着、今！」

絞り出すような大和の声。

敵四番艦の周囲に、水柱が上がる。いや。

「敵四番艦に命中弾！」

最後尾の戦艦に、待ち望んだ命中弾炸裂の爆炎が踊った。

最強ノ矛、最強ノ盾

一制艦は不利だった。

「長門」型戦艦は、確かに強力な戦艦だ。走攻守のバランスが整っており、ビッグセブンでも最強の艦だと言っている。だがその性能をもつてしても、eliteとは互角、flagshipには分が悪かった。

「陸奥」は善戦している。先に命中弾を得、斉射に移行した彼女は、およそ四十秒ごとに八発の四一サンチ砲弾を放ち、確実に敵二番艦——ル級eliteの戦闘力を削いでいく。

だが、「長門」はそうもいかなかった。お互いに、斉射を始めたタイミングはほとんど一緒。ただし、「長門」の斉射能力が四十秒に一回なのに対し、敵一番艦——ル級flagshipは三十秒に一回。しかも、攻撃力も防御力もelite以上だ。斉射を繰り返す度に、分が悪くなるのは「長門」の方だった。

状況は「金剛」も似たようなものだ。四一サンチ砲を搭載しているとはいえ、もとは三六サンチ砲搭載の巡洋戦艦だ。強化された装甲も、一六インチ砲に耐え得るものではない。

全体を見て、一制艦が押されているのは、明らかだった。

ただ一隻。榊原の乗り込む「大和」を除いては。

「長門」被弾！」

夾叉弾を得たことで、斉射へと移行する準備を進める「大和」の艦橋に、大和の悲鳴に似た報告が響いた。お互いが斉射を放った一制艦と敵艦隊の一番艦は、被弾に耐えながら再び斉射を実施する。一発や二発の被弾では、どうということはない。

敵四番艦の第二斉射も、「大和」を押し包む。今度も命中弾が生じるが、やはり衝撃は小さなものだった。

「射撃準備完了！」

「陸奥」の三度目の斉射、そして「長門」と「金剛」の第二斉射を見届けた後、大和が知らせた。艦上に主砲発射を告げるブザーが鳴る。

「第一斉射、撃て！」

大和の号令から一拍。右舷に指向した全九門の四六センチ主砲から、雷鳴のごとき爆轟音が響いて、榊原の聴覚を支配した。こちらの方が、敵弾弾着などより余程衝撃が大きい。艦橋の窓が割れんばかりにビリビリと震え、水圧機が吸収しきれなかった反動が艦体を揺らす。それだけのエネルギーを得た九発の四六センチ砲弾は、音速の二倍を超えて敵四番艦へと飛んで行った。

「敵四番艦斉射！」

艦橋からもよく見えた。〃大和〃と同じ九門の主砲を振り立て、紅蓮の炎を産出する。四六センチ砲弾は確かに強力だが、たった一発程度では大した損傷を与えられるはずもなかった。

——だが、斉射に移行すれば、話は別だ。

発砲遅延装置を搭載する〃大和〃は、一度に多数の命中弾が望める。それに、こちらが敵弾に対して十分な防御力を持っているのに対し、敵四番艦——ル級の通常型の装甲は、対四一センチ砲防御としては十分とは言えないことがわかつている。決戦距離で撃ちこまれる四六センチ砲弾に耐えられる道理がなかった。

そうこうしているうちに、第一斉射が落下した。榊原は双眼鏡を覗き込み、二万五千メートル彼方の海面に白濁したカーテンがかかるのを見た。

敵四番艦のマストを遙かに凌ぐ巨大な水柱が多数、その姿を覆い隠す。命中弾があった気がするが、その様子も水柱に隠されてよく見えなかった。

これが、艦上からの限界だ。だが、上空から見ている零水観は違う。「観測機より、命中弾二」

大和が読み上げるのを見計らったかのように、海水の仕切りが崩れて敵艦が姿を現す。後部甲板から、細いながらも黒煙が尾を引いていた。

しかし、その様子を長く観察することはできなかった。今度は逆に、敵弾が〃大和〃に降り注いで、命中弾炸裂の閃光と衝撃を伝える。被弾箇所が艦橋に近かったのか、今回は確かな揺れを感じた。

「大丈夫です。損害軽微」

大和の表情に変わりはない。聞くところによれば、BOBの被害は、艀装を通じて精神同調をする艦娘にも痛みとして伝わるらしい。その大和が平然としているのだ。本当に、大した被害ではないのだろう。

被弾に耐えた「大和」は、第二斉射を放つ。横方向の反動が七万トン近い巨艦を揺さぶった。

敵四番艦も同じタイミングで発砲する。相手の主砲は、約三十秒で装填を完了するのだ。若干ではあるが、発射速度は深海棲艦の方が速い。

超音速の大重量物が、大きな弧の頂点付近で交差し、それぞれの目標へと急落下を始める。衝撃波を振り撒く砲弾が、二隻の巨艦に突入した。

「あうっ・・・っー！」

大和の表情が、一瞬苦悶に歪んだ。被弾の衝撃は後部から来ている。

「大丈夫か？」

「は、はい。問題ありません。ちよつと、非装甲区画に当たったみたいで」

大和は気丈に笑っていた。

被弾箇所は後部航空作業甲板だった。バイタルパート外のこの区画には、十分な装甲が施されていないかった。

それでも、戦闘航行に支障はない。非装甲区画に被弾したところで、舵や推進機系を破壊されるか、艦首に大穴でも開かない限り、艦の運行そのものには何ら影響がなかった。

「観測機より、命中弾二」

上空の零水観がもたらした観測結果を大和が報告する。今回も二発が命中弾となった。

——これで、計五発。

これまでに敵四番艦に与えた命中弾を数える。被害のほどはわからないが、第二斉射を受けた敵四番艦からは、所々黒煙が漂っていた。

「その調子だ」

「はい！」

今度の斉射は、敵四番艦の方が早かった。黒煙を噴きながらも、九門の主砲は変わらずに咆哮を上げ、爆風が黒煙を吹き飛ばす。奴の砲戦能力は、まだまだ健在だ。

「第三斉射、撃て！」

敵弾が飛翔する最中、大和ももう一度発砲を指示した。万雷すら圧倒する爆音が轟き、艦の右舷へと巨大な火球が現出する。その中から超音速で飛び出す砲弾を、榊原の目は捉えることができなかった。

主砲塔内で次の斉射に向けた準備が進む中、敵弾が落下する。連続的な炸裂音が榊原の鼓膜を震わせた。

「被弾二。右舷高角砲二番大破」

“大和”の高角砲にはシールドが取り付けられているが、それはあくまで“大和”自身の主砲の爆風に耐えるためのものだ。一六インチ砲弾の直撃を受けては一たまりもない。

“大和”を押し包み、榊原から視界を奪っていた水柱が崩れ去る。それを見計らったかのように、今度は“大和”の第三斉射が敵四番艦に襲い掛かった。

多数の水柱が噴き上がり、敵艦の甲板にぶつかった徹甲弾は、その信管を正常に作動させる。今回も後部に二本、水柱に紛れて火柱が生じていた。

——— どうだ・・・？

水柱が崩れ去り、敵四番艦が再び姿を現すのを、固唾を呑んで見守る。ほどなく、天を突かんばかりの白い巨塔が倒壊し、その向こうの敵四番艦が確認できた。

浮いている。だが、その様子は先程までとは大きく違っていった。艦後部が、物凄い量のどす黒い煙で覆われているのだ。甲板には、チロチロと踊る炎まで見える。

“大和”第三斉射の二発は、敵四番艦に有効打を与えた可能性が高かった。

「次弾装填急いで！」

砲身を下げ、第四斉射の準備をする三基の砲塔を、大和が鼓舞する。その間、敵四番艦が再び発砲した。だが、その様子は明らかに違う。主砲発射の炎は、艦前部だけで上がったのだ。後部にある三連装砲塔は、黒煙の向こう側で沈黙を保っている。

「敵艦、第三砲塔沈黙！」

大和が喜色を滲ませて報告した。命中した四六センチ砲弾は、その威力を存分に発揮して、敵四番艦から三分の一の火力を奪い去ったのだ。

装填の完了した各砲が、ゆつくりと鎌首をもたげる。信じられないほどに分厚い正面防盾を持つ「大和」の主砲は、その全てがいまだ健在だ。

四度目の斉射が放たれる。火球は衝撃波を伴って発生し、海面にできたクレーターに赤々と反射する。状況に似合わず、美しくさえある光景だ。

敵四番艦の斉射が落下する。五本の水柱が立ち上り、残った一発が第二砲塔の基部辺りに命中する。頑強なバイタルパートは、その衝撃によく耐え、一六インチ砲弾を弾き返した。

入れ替わるようにして、「大和」から放たれた九発の四六センチ砲弾が、敵四番艦の頭上から落下する。丈高い水柱が林立した。

観測機が報告した命中弾の数は一発。艦上構造物の脇にある高角砲群に飛び込んだらしく、水柱の合間に箱型の物体が散り散りに舞うさまが見えた。それ以外に、敵艦の上を飛び越えたらしい砲弾の一発が、太い煙突の上半分をぶっそりと削っていた。煙突部分の装甲が薄すぎて、四六センチ砲弾の信管が作動しなかったらしい。

黒煙の量はさらに増えている。どす黒い雲が敵四番艦の後部を飲み込んでしまったかのようだ。一見、相当な被害を受けているように見える。

「敵艦、再び斉射！」

——しゅとい・・・っ！

大和の報告に、榊原は感嘆にも似た呻きを上げる。性能は深海棲艦戦艦部隊の中で最も低いとはいえ、戦艦であることに変わりはない。

四六サンチ砲弾八発を被弾してもなお、敵四番艦はさらなる射弾を送り込んできたのだ。

たまたま当たり所が致命傷となることを外していたのか、あるいは深海棲艦は想像以上に堅牢な造りをしていたのか。それを知ることとは、榊原にはできなかった。

ともかく、目の前の事実として、敵四番艦はまだ戦える余力を残しているのだ。

「第五斉射、撃て！」

“大和”が五度目の咆哮を上げると数秒違いで敵四番艦からの斉射が弾着した。今度も一発が命中弾となる。が、またしても“大和”のバイタルパートが、その規格外の性能を発揮して弾き返す。被害は軽微だ。

「何だか・・・不思議な感覚です」

当の大和がポツリと呟く。彼女にしても、自らのこの耐久力には、驚きを隠せていない様子だった。

第五斉射が飛翔している間に、敵四番艦はさらにもう一度斉射を放った。何ともしぶとい敵艦だった。

その気合いを押し潰すかのように、“大和”の砲撃が降り注いだ。命中弾は三発。今回は榊原の双眼鏡からもよく見えた。艦前部に

二発、中央に一発が命中し、火柱を噴き上げた。

のたうつ炎はもはや止まりようがない。容赦なく甲板を焼き、黒々とした煙が天を燻らせる。艦上は正に地獄絵図であった。

その主砲塔に、再び主砲発射の焰がきらめくことはない。実に十一発の四六サンチ砲弾を受けては、さすがの敵戦艦も、その主砲を放つ能力を喪失してしまったのだ。

最後に放たれた敵艦の斉射が“大和”を包み込む。だが、生じた一発の命中弾では、“大和”の戦闘能力が削がれることはなかった。

——トドメをさすか？

今一度か二度の斉射で、敵四番艦は完全に復旧不能になるはずだ。しかし、大和の叫びが、その迷いを一瞬にして吹き飛ばした。

「“金剛”被弾、炎上中！速力低下、落伍します！」

双眼鏡で覗くまでもない。当初一千メートル以上あつた「大和」と「金剛」の間隔は、いつの間にか五百メートルを切ろうとしていた。その艦上は、これ以上ないほどに燃えている。最後部の四番砲塔は、ありえない方向へ砲身を捻じ曲げて擱座していた。指示を。そう言っているような大和の瞳に、榊原は一切躊躇なく応えた。

「目標を敵三番艦に変更」

たつた今あげた初のスコアを喜ぶ間もなく、「大和」は次なる目標へと測敵を始めた。

逆襲ノ砲火

「金剛」と敵三番艦——ル級eliteは、ほぼ同時に夾叉弾を得て、斉射へと移行した。だがここでも、やはりモノを言ったのは、ル級eliteの頑強さだった。

「金剛」の命中弾にしぶとく耐える敵三番艦に対して、装甲で劣る「金剛」は徐々に劣勢に立たされていった。

その限界が訪れたのは、実に七度目の斉射が二発の命中弾を生んだ時だった。後部甲板に命中した二発の一六インチ砲弾は、黒煙を引いていた「金剛」の艦上を、もはや止めようのない状態にした。さらに運の悪いことに、砲弾が水線下にも命中して破孔を開き、速力の低下と右舷への傾斜をもたらす。

艦の傾斜が大きくなると、揚弾機が動かせず、主砲の射撃が困難となる。「金剛」は、最早砲戦に参加することが不可能だった。

「測敵完了！」
その代りに。敵三番艦にその砲口を向けようとしている艦影があった。

「金剛」の後方に位置取っていた「大和」が敵三番艦への測敵を終えたのは、落伍した「金剛」を正に追い抜こうとした時だった。

——はやく、こちらに砲撃を向けさせなければ。

大和の報告に領きながら、榊原は敵三番艦を見遣る。その後方にいた敵四番艦は、すでに火災の勢いが激しく、戦線からの離脱にかかっていた。

現状、一番避けたいのは、敵三番艦の砲火が「長門」や「陸奥」に向くことだ。そのためには、敵三番艦に「大和」を重大な脅威と思わせなくてはいけない。

——大和には苦勞をかけるな。

横に立つ長身の彼女を想う。その大和は、各砲塔に諸元を入力し、右砲での観測射撃に入ろうとしている。

「皆守るって、誓いましたから」

主砲発射を告げるブザーの合間に、そう呟く声が聞こえた。

号砲一発。鎌首をもたげた各砲塔の右砲が、新たな目標に対する観測射の第一射を放った。

「大和。上空の観測機から、敵三番艦の様子は見えるか」
できれば、その動きが知りたい。

大和は、上空を旋回しながら弾着観測を続ける零水観の妖精に問い合わせる。

『ほくろの数までわかる』

というのが、妖精からの返答だった。

「戦艦のほくろって、何でしょうね」

受けた大和も、そう言って苦笑していた。

第一射が落下する。全弾近。三発の四六センチ砲弾は、その全てが敵艦の手前に落ちている。

零水観から、弾着位置のずれが報告される。それをもとにして、
大和の射撃諸元に修正が加えられていった。

それともう一つ。

『敵三番艦、大和に砲口を向ける』

通達が入った。大和の観測射を受けた敵三番艦は、その新たな目標に、一六インチ砲を指向したのだ。

「先に命中弾を得ます！」

意気込んだ大和が第二射を放つ。測敵を終えていないのか、敵三番艦はまだ撃ってこなかった。

結局、敵三番艦の第一射は、大和の第二射が弾着してからとなった。三本の砲身を振り立てて、その砲口に褐色の砲炎をきらめかせる。

負けじと、大和も第三射を放つ。左砲が強烈な唸りを上げ、一トン半もの徹甲弾を宙空へと放り投げた。

お互いの砲弾が遥かな高みで交錯し、落着する。盛大な水柱が噴き上がった。

「右舷に至近弾！」

大和が叫ぶ。正確な射弾に、艦橋の二人は唸った。たった一射で、敵三番艦はここまで誤差なく撃ってくるのだ。

だが、その点では「大和」も負けてはいなかった。むしろ今日二隻目の敵艦ということもあって、大和も主砲の諸元修正には慣れていた。

観測機が知らせてきた弾着は、近弾二、遠弾一。なんと「大和」の第三射は、敵三番艦を夾叉していたのだ。

「次より斉射」

報せる大和の声は、喜色が見えても落ち着いていた。彼女の緊張は、少しずつ和らいでいる。

各砲塔が逆襲の斉射を準備する間に、敵三番艦の第二射が落下する。噴き上げた水柱は再び右舷に三本。その衝撃が艦をわずかに動揺させる。相当に近い位置に落ちたはずだ。

だが、至近弾程度では、「大和」から射撃の機会を奪うことはできない。

時は来た。今日何度目になるか、艦上に鳴り響くブザー音は、どこか高鳴りを抑えているかのような雰囲気だった。

「金剛さんの仇です！」

「大和」の主砲九門が、一齐にその砲声を奮わせた。

天地が鳴動するとは、まさにこのことを言うのだろう。

艦が横方向に揺れる。それだけの反動を産み出す恐ろしい火砲が、「大和」の四六センチ砲だった。

その圧倒的暴力に抗おうとするかのように、敵三番艦は再び砲炎を上げた。第二射があれだけの精度だったのだ。命中が夾叉される可能性が高いと、榊原は予感していた。

先に弾着するのは、「大和」の第一斉射だった。位置エネルギーを全て消費した砲弾は、空気との摩擦で若干のエネルギーを失いながらも、十分過ぎる威力を持って敵三番艦の装甲に突き刺さった。

堅牢なル級eliteの装甲は、「金剛」の放った四一センチ砲にもよく耐えていた。しかしその装甲厚をもつてしても、距離二万から撃ちこまれる四六センチ砲弾には紙と同義であった。

命中弾は三発。うち、バイタルパートに突き刺さったのは二発。重要防御区画として嚴重に守られているだけあり、そこには艦の運行や

戦闘行動に関わる機能が集中している。四六センチ砲弾は、それよりも簡単に喰い破った。

榊原の双眼鏡からも、まるで敵三番艦そのものが激震したかのように見えた。巨大な火柱が噴き上がる。

「命中弾三ー！」

その報告とほぼ同時に、敵三番艦の第三射が降り注ぐ。林立した水柱が崩れ去るとき、まるでスコールのように、水滴がバラバラと甲板を叩いた。

敵弾は、やはり「大和」を夾叉していた。次からは、「金剛」を落伍へと追い込んだ敵三番艦の斉射が、この「大和」に向けられることになる。

「第二斉射、撃てー！」

そうはさせない。そんな意志のこもった第二斉射が、厳かに放たれた。

音速を突破した砲弾が飛翔していく。その軌跡を追うことは叶わなかったため、代わりに敵三番艦を見つめる。

敵三番艦の艦上に、先ほどよりも巨大な炎の塊が現出する。「大和」に遅れたとはいえ、敵三番艦もまた、斉射へと移行したのだ。

もちろん、砲弾の到達は「大和」の方が早い。九発の一式徹甲弾が、その貫通能力を遺憾なく発揮して、敵三番艦の装甲を喰い破った。命中弾は二発。艦中央部に、二本の火柱が上がった。抉り取られた艦上構造物の破片と思しきものが、宙空を舞っている。

入れ替わりに、今度は敵三番艦の射弾が弾着の水柱を上げる。艦橋の後ろ、そう遠くない位置で炸裂音が響き、衝撃が襲い来る。金属同士が擦れるような異音だ。

「三番副砲のバーベットに異常、旋回不能です！」

右舷側の三連装一五・五センチ副砲塔を支えるバーベットが、被弾の衝撃で歪んだらしい。それ以外に、艦内電路がいくらか断絶したが、幸いすぐに復旧できるとのことだ。

今日だけで、「大和」はすでに一六インチ砲弾十発以上を被弾していた。にもかかわらず、まだまだ戦闘を行える余力を残している。恐

るべき防御能力だ。

再装填を待っていた三基の四六サンチ砲塔から、装填完了の報告が上がる。諸元に基づいて砲塔が旋回、砲身も仰角を上げる。敵三番艦に対する三度目の斉射が発射されることを告げるブザーが、甲高く艦上に鳴った。

「第三斉射、撃て！」

三度、「大和」の四六サンチ砲九門が咆哮する。衝撃波に艦橋が揺さぶられ、榊原は足を踏ん張る。微かにだが、硝煙の匂いが鼻をついた。

敵三番艦も新たな斉射を放つ。こちらも「大和」に劣らない、全九門の斉射だ。敵三番艦の艦上には黒煙と炎が燻っているが、それをものもしない砲撃だった。爆風がその黒煙をまとめて吹き飛ばしている。

ここまで、敵三番艦の被弾は「金剛」の四一サンチ砲弾八発、「大和」の四六サンチ砲弾五発。「大和」も大概だが、敵三番艦もなかなか堅牢だ。被弾数だけで言えば、むしろ敵三番艦の方が多い。

——eliteでも、これだけ堅いのか。

より高い性能を持つflagship——現在「長門」が相手取っている敵艦は、一体どれほど頑丈な戦艦だというのだろうか。

ゴクリ。一制艦旗艦が直面している危機に、榊原は生唾を呑みこんだ。

「大和」の第三斉射が弾着し、敵三番艦を押し包む。瞬間、眩い閃光が敵三番艦の艦上に生じて、急速に拡大していった。

敵三番艦の一番砲塔が、まるで段ボールか何かのように、宙に浮かび上がっていた。さっきまで主砲塔が乗っていた砲座では、地獄の窯がその口を開けている。

紅蓮の炎が溢れた。さながら巨大な龍の如く、火焰が甲板をのたうち、巨大な破壊力をもって敵三番艦を押し潰さんとする。

榊原と大和が目を見開く。その視界から自らを隠そうとするかのように、敵三番艦の一六インチ砲弾が、艦橋の近くに水柱を噴き上げた。

被弾による損傷は軽微だった。そして崩れた水柱の向こう、それまで海上を爆走していた敵三番艦は、その原形を留めることなく、ただ海面を漂う鉄塊と成り果てていた。

一番砲の天蓋を破り砲塔内へと突入した四六センチ砲弾は、その内部で爆発エネルギーを開放した。砲塔は非常に気密性の高い密室だ。その内部で生じた熱は逃げ場を失って周囲のものを巻き込む。周囲のもの——すなわち、戦艦の中で最も可燃性の高い、砲弾という劇薬。

着火点に達した百発を超える砲弾が、一時に誘爆を起こす。分厚い装甲で覆われた弾薬庫の中で、爆発エネルギーの逃げ場は上しかなかった。

第一砲塔を持ち上げたのは、その爆発エネルギーだった。だが一部に過ぎない。上に逃げてみたところで、そのエネルギーが満足するはずはなかった。

爆発は、ついに頑丈な弾薬庫の装甲を、内側から吹き飛ばした。それがとんでもない圧力をキールにかける。艦体を支える一本の柱が、その重圧に負けた時、敵三番艦の運命は決していた。

第一砲塔付近から真つ二つになった敵三番艦は、波間に漂い沈没を待っただけの濔標となってしまった。これが、水柱が崩れ去る間に、敵三番艦に起こっていたことの顛末だ。

「提督！敵残存艦、撤退していきますー！」

大和が報告した。双眼鏡を移すと、先ほど撃破した敵四番艦、陸奥の相手取っていた敵二番艦、長門の相手取っていた敵一番艦、三隻の敵艦が、駆逐艦に守られて退避を始める。もっとも、無事なのはル級flagshipのみだ。大和が撃破した敵四番艦も、陸奥の相手取っていた敵二番艦も、火災炎は収まる気配がなく、黒煙で艦上が包まれている。大和同様、陸奥も多数の命中弾によって、敵二番艦を戦闘不能に追い込んでいた。

——もう一押しだ。

まだ余力のある陸奥と大和なら、速力の落ちている敵艦隊を追撃し、少なくとも炎上中の二隻を仕留めることはできるはずだ。

榊原はそう踏んでいた。

「っ！長門より、『逐次集まれ』です！」

「何!?!」

——追撃をしないんですか!?!

「長門」艦橋の東郷に、心の中で問いかける。

「どうしますか・・・?」

大和が迷いを滲ませて尋ねた。榊原もまた、迷いを見せつつもゆっくりと答える。

「・・・追撃はしない」

「・・・了解です」

加熱した砲身が下げられる。各部では、損傷の具合と応急修理の状況が集計され始めた。

這う這うの体で戦場を後にする敵艦隊。その様子を尻目に、一制艦もまた、集合を始めた。

過去最大の砲撃戦は、撃沈一（ル級elite）、撃破二（ル級elite）、ル級通常型）、被撃破二（「長門」、「金剛」）で、一制艦の辛勝と言える結果で幕を閉じた。

斬り込ミ

三〇ノット近い速力を発揮する「比叡」の艦首で、それに伴う大きな波が起きている。四万トン近い艦体に押し退けられた海水が、白い飛沫を飛ばして後方へと流れていった。

角田率いる五遊艦と四水艦は、一機艦からの要請を受けて、敵機動部隊へと驀進していた。二時間程度での接敵を想定しており、そろそろ敵影を捉えるはずだ。

「全艦合戦準備」

角田が下令する。比叡以下十二人の艦娘たちは、すでに艤装との同調率を高め、戦闘状態へと移行していた。

「逆探の感、強い。敵の対空電探と思われれます」

各艦から合戦準備完了を告げる報告が入る中、比叡が逆探が感知した電波の存在を知らせた。波長がわかれば、それが対空用か対艦用かは、すぐに判別がつく。

「結構近いね」

角田は相変わらずのん気に呟いた。

「強さからして、そろそろ視界に捉えるはずですよ」

「逃げるかな?」

「さあ、それはどうですかね」

答えた比叡も、割りと適当である。まあ、元々二人とも、敵艦隊を逃がすつもりなどさらさらないので、愚問といえは愚問であった。

「角田大佐」

どこかのほほんとした「比叡」艦橋に、遊撃部隊のもう一人の将校の声の木霊する。吹石雪花少佐——元艦娘の吹雪である。

「四水艦は、突撃の支援ということですよよろしいですね?」

「あ、うん。よろしく」

『了解です』

短いやり取りがあつて、すぐに通信が切れる。

「・・・あの、前から気になつてたんですけど」

吹雪とのやり取りを終えた角田に対して、比叡が遠慮がちに手を上

げる。角田は笑顔で、その続きを促した。

「吹雪ちゃんは、何で今回の作戦に参加したんですか？それも、艦隊を率いる、提督として」

角田の視線が、一瞬鋭くなった。それを自分でもわかって、努めて目を緩くする。ゆっくりと、必死に頭を回転させて言葉を選びながら、角田は口を開いた。

「秋山中将の考えがあるのは、間違いないね」

話している間も、二人は周囲の状況に意識を向ける。これはあくまで、戦闘の合間の雑談だ。角田は、そういうことにしておきたかった。「秋山中将は、何かを探してるみたいなんだよね。これは東郷長官にも言えることだけど。それが何なのか、僕には想像もつかないよ。でも、その何かが、吹雪に関わることだっていうのはわかる」

それから角田は、しばらく悩むようにして、最後の部分だけ言い直す。

「吹雪が追い求める、艦娘という存在の根源に迫るものだっていうのは、わかる」

「艦娘の存在、ですか」

比叡も呟く。いまいち、実感の湧いていない様子だった。

「考えたことありませんね。艦娘は艦娘です。深海棲艦と戦うのが、私たちの存在意義だと思ってます」

「・・・それもそうだねえ」

——・・・もしも。

もしも、深海棲艦がいなくなつて。その後、艦娘が残つて。その時彼女たちは、一体“何になる”のだろうか。

一人の人間として生きていけるのか？艦娘は、艦娘のままなのか？

吹雪は、その壁に挑もうとしている。

秋山は、その壁に風穴を開けようとしている。

そして東郷は、その壁を切り崩そうとしている。

目的は同じ。けれども、手段は三者三様。

——まあ、それも無事、この戦いが終わったらだけ。

深海棲艦が現れて五年。艦娘が現れて三年。この『戦い』には、い

まだに終わりが見えていない。『戦争』ではない、純粋な『戦い』。落としどころの見えない、生存競争。

「あー、やめやめ。こーゆー難しいこと考えるのは苦手なんだよねえ」苦笑しながら角田は言った。

私は提督だ。艦娘たちと共にあり、共に戦う。彼女たちを導くために、私はここにいるのだ。

残念ながら、角田は未来への道を敷く術を知らない。けれども、道なき道を切り開いた先に、未来があることは知っている。

「司令に考え事なんて、これほど似合わないこともありませんね」

比叡もなかなかひどいことを言っている。角田は益々苦笑を大きくした。

「ひどいなあ、比叡ちゃん。僕だって、いつつも真剣に考えてるんだよ？」

「真剣に考えてる人が、どうしてセクハラしてくるんですか？」

「セクハラじゃないよ、スキンシップだよ」

「それ、同じですから」

比叡は呆れ気味に言った。

「・・・まあ、私たちのこと、大切にしてってくれるのはわかってるつもりですから」

「・・・そっか」

「ですから私、頑張ります。司令が見たいものがあるなら、私が見せてあげます」

お姉様以外では、司令が特別ですからね。若干そっぽを向きながら、比叡は気恥ずかしげにそう締めくくる。胸の辺りがむず痒くなるのを、角田はこう言って誤魔化した。

「比叡ちゃんが可愛いので、スキンシップしてもいいですか？」

「どんな理屈ですか!?!セクハラですからね!?!」

「もうセクハラでもいいや」

「開き直らないでください!ダメです、却下です!」

「中央突破!喰い破るよ!」

先程までとは打って変わって、角田は鬼気迫る声で五遊艦の各艦を叱咤激励する。気迫のこもった指示に、六つの声が応えた。

敵機動部隊にとって災難だったのは、たった二つ。一つに、帰投した第二次攻撃隊の収容作業中だったこと。もう一つに、それを追うようにして、一機艦の第三次攻撃隊——敵機動部隊に対する第二派攻撃が実施されたことだ。

艦載機と水上艦隊。性格の異なる二つの敵を前にして、敵機動部隊は大いにうろたえた。しかし、トラックという重要拠点の防備に当たっていた艦隊だけあり、その立ち直りもまた早い。

乱れかけた陣形は、すぐに整えられる。二十隻近い数を生かして、敵艦隊は輪形陣のまま、二つの敵と相對することを選んだのだ。

——そういうのを、思う壺って言うんだけどね。

突撃を敢行する「比叡」の艦橋にあって、角田は内心でほくそ笑んだ。

一機艦を指揮するのは、あの塚原だ。あいつが、万に一つも、状況を見誤ることはない。

水上を猛進する遊撃艦隊の頭上を、攻撃隊が通過していく。軽快な零戦が敵直掩機と死闘を繰り広げ、その合間を縫うようにして攻撃機が迫る。見るからに速そうな水冷エンジンの「彗星」と、力強い印象の「天山」が、編隊を崩すことなく敵艦隊の輪形陣へと突入していった。

真っ先に火の手が上がったのは、輪形陣外縁部の駆逐艦だ。「彗星」隊の華麗な急降下爆撃を受けた駆逐艦が、炎を噴き上げて行き足を止め、あるいは爆轟音と共に波間に沈んでいく。

巡洋艦でも火の手上がる。もっとも、こちらは駆逐艦よりはいくらか丈夫なので、すぐに沈むようなことはなかった。それでも、炸裂した爆弾が大穴を穿ち、爆風と破片で対空火器を薙ぐ。その度に、攻撃機へと伸びる火箭が弱くなっていった。

「敵外縁部沈黙。「天山」隊、突入します！」

比叡が報告する。角田は叫ぶようにして確認した。

「敵空母との距離は?！」

「二五〇（二万五千メートル）！」

三〇ノットで輪形陣に迫る五遊艦が、その有効射程に空母を捉えるにはまだ時間がかかる。その間の足止めは、「天山」の役割だ。

低空に舞い降りた「天山」は、いくつかの編隊に分かれて輪形陣へと迫る。プロペラが波を叩いてしまうのではと錯覚するほどに、その高度は低い。発動機の馬力によって後方に投げつけられる空気が、海水を巻き上げて白い飛沫を散らす。

薄くなったとはいえ、深海棲艦の放つ対空砲火は強烈だ。特に、「彗星」の急降下爆撃を逃れた巡洋艦が、激しい弾幕を形成する。しかし、それをもとせずに、「天山」は輪形陣へと突入していった。外縁部の小物には目もくれない。「天山」の狙いは、中央の空母のみだ。少しでもダメージを与え、行き足を鈍らせれば、最早五遊艦の砲火から逃れることはできない。

——と、敵さんは思っているだろうね。

実際には違う。「天山」の狙いもまた、「彗星」と同じく外縁部の敵艦だ。

「天山」が中央の空母を狙うとばかり思っていたのだろう、輪形陣外縁部を形成する残存の巡洋艦や駆逐艦は、自らに向かって放たれた魚雷に気付き、慌てて回避しようとした。だがもう遅い。輪形陣の両翼から投網のように放たれた魚雷の航跡を、各艦が回避することは叶わなかった。

輪形陣の各所で、ほぼ同時に白い柱が立ち上る。敵艦の構造物を上回る巨大な水柱は、その基部で艦体に破孔を生じ、大量の海水を呑みこませる。まともに受けた敵艦はひとたまりもなく、その行き足を止める。まさに一瞬で轟沈した艦もいた。

今回の攻撃を予測しろというのも酷な話だ。爆撃機が輪形陣外縁を叩き、こじ開けた穴から雷撃機が中央へと突入する。これは、日本海軍が機動部隊の基本戦術としている戦い方だ。

塚原は、その裏をかいいた。第三次攻撃隊の突入が、遊撃艦隊と敵機動部隊の接触と重なることに気付いた彼は、攻撃隊の総指揮を執る。「赤城」所属の妖精に、今回の攻撃を指示したのだ。

第二次攻撃隊は、いつも通りの戦術で敵機動部隊に突入し、駆逐艦三隻を沈めて、ヲ級eliteと又級elite各一隻ずつに魚雷を当てていた。これを見て敵機動部隊は、今回もまた、同じ戦術が執られると予想したのだろう。だから、輪形陣の間隔を詰めて、攻撃隊と水上部隊の両方に備えようとした。

それが裏目に出た。不意を突かれた輪形陣外縁の各艦は、「彗星」と「天山」の攻撃で、実に五隻（巡洋艦二、駆逐艦三）が沈没し、四隻（巡洋艦一、駆逐艦三）が大きな損傷を受けた。輪形陣としての機能はともかく、水上部隊に備えるべき戦力は、大きく減じてしまった。これを、角田たちは待っていたのだ。

「さすが塚原！わかつてるねえ！」

最早笑みは隠しきれていない。獣性の強い眼光で敵艦隊を見つめる角田は、今か今かと待ち望んだその瞬間に、一際大きく声を張り上げた。

「全艦砲戦開始！残りを蹴散らせ！」

五遊艦各艦が一齐に発砲する。「比叡」の四二センチ砲に続き、「高雄」、「愛宕」、「鳥海」の二〇・三センチ砲も火を噴き、五遊艦が突入した輪形陣左翼に残る敵艦を叩く。必死に反撃を試みる敵艦隊だが、左翼に残ったのが巡洋艦一隻と駆逐艦五隻ではなす術がない。あつという間に片付けられてしまった。

これで、中央の敵空母は丸裸だ。

最早輪形陣も何もない。示し合わせたかのように反転にかかる空母は、しかし、その判断が遅すぎたことに気付かされる。

新たな獲物を見つけた五遊艦の主砲が、その砲口に火焰を生じたからだ。

真つ先に餌食となったのは、第二次攻撃によって損傷していたヲ級eliteと又級eliteだった。前者には「比叡」の砲弾が、後者には「愛宕」と「鳥海」の砲弾が雨霰と撃ちこまれ、瞬く間に炎上する。

この間、空母の撤退を支援しようと、その身を挺して五遊艦を止めようとする勇敢な敵駆逐艦が多数いた。だが、その努力が報われるこ

とはなかった。

“川内”以下の四水艦は、吹雪の指示のもとに華麗な艦隊運動を見せる。敵駆逐艦を五遊艦に近づけさせない。それどころか、射撃を集中しては、次々に火の玉へと変えていった。

遮るものなくなった五遊艦は、残った三隻の空母に砲撃を集中する。

最初に悲鳴を上げたのは、もう一隻のヲ級eliteだ。正規空母であるヲ級ほど装甲の厚くないヲ級にとって、戦艦と巡洋艦による集中砲撃は荷が重すぎた。艦載機用の燃料が弾薬に引火したのだろう、一際巨大な火柱を噴き上げて、その動きを完全に止めてしまった。

必然的に、攻撃は残った二隻のヲ級(eliteと通常型各一隻)に向かう。敵も必死だ。機関を一杯に吹かして、何とか離脱しようとする。

ヲ級の発揮しうる最大速度は三三ノットだ。“比叟”では、わずかに足りない。

「高雄、後は任せた」

『了解しました!』

角田は即断する。最大戦速に加速した“高雄”型三隻は、発揮しうる三四ノットの高速力で二隻のヲ級に食い下がった。

連続する砲火。二隻の敵空母が、飛行甲板をズタズタに引き裂かれ、炎上して擱座するまでに、さして時間はかからなかった。

夜闇ノ島影

闇に沈む海面には、日中と変わらず穏やかなさざ波が立っている。押し引きする波が舷側に当たってあがる音が、昼間以上に心地よく響いた。静かなこの時に、今しばらく身を置いていたいものだ。

夜戦仕様で灯火を落としている「比叡」艦橋は、暗夜の静寂に包まれていた。もつとも、そこに詰める角田と比叡、そして幾人かの妖精たちは、緊張感の中で口を引き結んでいる。

敵機動部隊への襲撃という寄り道をした五遊艦と四水艦は、日没から二時間が経った今も、トラツク諸島に向けて突き進んでいた。目的は、島々に存在する港湾施設、及び建設中の航空基地の破壊だ。

とはいえ、ことはそう簡単に進まないはずだ。機動部隊は撃破したが、トラツク周辺にはいまだ巡洋艦を主体とした警戒艦隊がいるし、場合によっては、敵の遊撃艦隊が増派されているかもしれない。油断は大敵だ。

「後一時間ほどで、トラツク諸島です」

報告した比叡の声も、心持ち潜められている。灯火を落としていると、どうしても声は小さくなった。

トラツク諸島。深海棲艦の出現前は、チューク諸島と呼ばれていた島々だ。円形に近い配置の島々に囲まれた環礁で、艦隊の投錨地としてこれほど適した場所もなかった。深海棲艦が、ハワイと並ぶ太平洋の拠点としているのも、納得のいく話である。

事前偵察で、敵艦隊が艦隊の投錨地として各種港湾施設を設けているのは、環礁内の東側、四季諸島（ナモネアス諸島）の周辺だ。五遊艦と四水艦は、北東水道から環礁内に突入し、これを叩く。

それと、敵の飛行場も。チューク諸島からの避難時に破壊された、春島の飛行場。そこが、何者かの手によつて修復されつつあった。こんなことをするのは、深海棲艦以外に考えられない。

昼間のうちに索敵機から寄せられたこれらの情報から、連合艦隊司令部は港湾施設に加えて建設中の敵基地も攻撃するよう、角田に伝えしてきた。

優先順位は付けられていなかった。大きく損傷した「長門」から「陸奥」に移された連合艦隊司令部では、港湾施設を叩くことを優先するという意見が強かった。しかし東郷は「現場の判断に任せる」と言つて、あえて優先順位を付けてこなかった。もつとも、これらの経緯は、角田には与り知らぬことである。

——さて、と。

角田は考える。普通に考えれば、優先して叩くべきは港湾施設の方だ。今回の『IF作戦』第一段階において、最大の目標は敵の継戦能力を削ぎ、次回以降の本格的な攻略作戦への布石とすることだ。

艦隊戦力はともかく、さすがの深海棲艦も、港湾施設を早急に作ることはできない。実際、ハワイもトラックも、本格的な艦隊の拠点として稼働が確認されたのは、その占拠から半年以上をおいてからだ。

港湾施設を優先する理由は他にもある。それは、深海棲艦の航空機に関することだ。航空基地が完成したとして、そこで運用される機体、すなわち深海棲艦が使用する機体は、艦載機である。これは、移動する航空基地——空母での運用を考えた機体であり、陸上基地で運用される機体に比べて航続距離が短い。

深海棲艦の機動部隊が使用する機体は三機種。正三角形に近い形をした戦闘機（コードネーム「デネブ」）、戦闘機を縦に伸ばした急降下爆撃機（コードネーム「ベガ」）、矢印のような雷撃機（コードネーム「アルタイル」）。そのどれも、行動半径は二百海里前後と見られている。これでは、トラックに基地を作ったところで、空襲できる海域は限定的だし、まして陸地に攻撃を仕掛けることなどできない。

わざわざ滅多打ちにしなくとも、航空基地はさして脅威にならない。であるならば、当然優先すべきは、敵の港湾施設だ。

だが、角田は違った。

それは、非科学的な、人間の勘とか、予感といった類いのものだ。角田の頭の中で、何かが警鐘を鳴らす。

——「お前は直感型だろうが！ だったら、自分の勘には従え！」
いつだったか、理論型の同期にそう言われたことがある。以来、角田は彼の助言通り、自らの勘と予感を信じて、ただひたすら前を見て

戦ってきた。角田が闘将と言われる由縁である。

だから角田は、今回も自らの予感を信じる。

「比叡ちゃん、残弾はどのくらいかな？」

念のため、比叡に尋ねる。

「まだ八割近く残ってます。特に、三式弾と零式弾は全く使ってますんから、全弾あります」

淀みのない答えが返ってきた。暗闇の中のわずかな視界でもわかるように、角田はハッキリと頷く。

叩く。完膚なきまでに。深海棲艦が、二度と飛行場など作るまいと思うほどに。

角田の決断と共に、遊撃艦隊は、夜闇の中を進んでいった。

「水上電探に感！敵哨戒艦隊と認む！」

案の定、敵は現れた。トラック諸島が暗闇の向こうにうつすらと見える頃、“比叡”の三三号電探が、遊撃艦隊に迫る艦影を捉える。反応から見て、一個高速水上艦隊だ。

「無線封止解除！合戦用意！」

角田は即座に反応する。各艦の間で禁止されていた通信が再開され、艦隊は急速に戦闘の準備を整えていく。その間も、比叡はさらに詳しい情報を知らせ続けた。

「敵艦隊、本艦よりの方位〇八五、距離二二〇（二万二千メートル）」

「砲戦にはまだ早いかな？」

「夜戦ですから、一五〇くらいまでは詰めたいですね」

角田は考える。哨戒艦隊に見つかったということは、残存の敵艦隊も襲いかかってくる可能性が高い。やはり、物事そううまくは行かないのである。

当然、角田は砲戦でこれを叩くつもりだった。そして、まさにその指示を出そうとした時。

『角田大佐、敵艦隊は四水艦が引き受けます』

吹雪からの具申だった。

さすがの角田も、これには戸惑いを隠せない。四水艦は、確かに練

度の高い水上高速部隊だ。とはいえ、その主兵装は魚雷であり、砲戦能力は必ずしも高いとはいえない。さらに、所属する「川内」と「吹雪」型各艦は、魚雷の次発装填装置を持つておらず、一度発射管の魚雷を放つてしまえば、海戦に参加することはできなくなる。

敵哨戒艦隊の編成は肉眼で確認しなければわからないが、それでも四水艦とは拮抗以上であるはずだ。まともに戦うなら、四水艦は魚雷を使わざるを得なくなる。

四水艦の本来の役割は、環礁内で身動きの取りづらい大型艦を多く含む五遊艦の支援だ。地上砲撃中に、五遊艦に接近を試みる、敵水上部隊の迎撃を行う。

敵水上部隊には、格上の重巡や戦艦もいることだろう。ここで魚雷を使うということは、環礁内でそれらの迎撃が困難になるということだ。

——吹雪は何を考えているのかな・・・？

魚雷以外で、何か迎撃する方法があるのだろうか？

しばし迷った後、角田はマイクを取る。

「それじゃあ、お願いするよ」

『任せてください』

吹雪からの返答があつてすぐに、「川内」以下の四水艦が加速する。彼女たちの発揮しうる速力は、三四ノット。排水量が小さいので、みるみるうちに速力が上がり、まさしく韋駄天となって、二万先の敵艦隊に向かっていった。

「どういふつもりなんですかね、吹雪ちゃんは」

四水艦の後ろ姿を見送る比叡も、角田同様に首を傾げる。

「うーん、具申してきたつてことは、何か考えがあつてのことだと思うけど」

角田もいまいち、掴めていなかった。

突撃を敢行した四水艦から、敵艦隊の編成について連絡が入る。

『重巡一、軽巡一、駆逐四』

川内が淡々とした声で敵艦隊の数を読み上げる。やはり、残存の重巡が含まれていた。これでは、四水艦が砲撃戦で勝利することは難し

い。

「比叡ちゃん、一応いつでも支援ができるようにしておこう」

「はい」

角田の号令で、五遊艦も速力を上げる。四水艦支援のための砲弾を装填し、いつでも射撃が可能な状態にしておく。

「敵先頭艦発砲！」

——始まった。

比叡の報告通り、単縦陣を敷いていた敵艦隊の先頭艦から、めくるめく炎が生じる。四水艦に向け、敵艦隊が砲撃を始めたのだ。

見張りからは、先頭艦の艦影は重巡のそれであることが報された。

「比叡ちゃん、今ので撃てる？」

「うーん、ちよつと難しいですね」

比叡は申し訳なさそうに答える。無理もない。現在距離は一万八千。夜間の戦闘距離としては、十分とは言えない。

四水艦からも砲炎が上がる。『川内』の一四サンチ砲、『吹雪』型の一二・七サンチ砲が応戦を始めたのだ。

とはいっても、その砲炎はお世辞にも大きいとは言えない。敵重巡の主砲に比べれば、ずっと小さなものだ。

両艦隊の間で、砲火が入り乱れる。しかし、端から見れば、四水艦側が押されているのは間違いなかった。

「比叡ちゃん、砲撃準備！」

角田は即断する。頷いた比叡は、沸き起こる砲炎を目印にして、射撃諸元を導くように指示を出した。

その時。二人が想像もしなかったことが起こった。

「敵重巡に魚雷?!」

「何だって!?!」

比叡の叫びに目を見開いた角田は、自らもまた暗闇の中に目を凝らす。

砲撃を続けていた敵重巡の舷側に、巨大な水柱が立ち上っていた。

——まさか、魚雷を使ったのか!?

『川内』は、改装時に魚雷発射管を酸素魚雷に対応したものに換え

ていた。配置は姉妹艦の“神通”や“那珂”と同じだ。片舷発射能力は四門。

“吹雪”型各艦も改装を受けている。対空兵装の増設が主だが、同時に魚雷発射管も換装している。

海軍工廠部が苦心の末に開発した、三連装魚雷発射管の酸素魚雷対応版。全艦が、それを二基ずつ装備する。片舷発射能力は六門。

四水艦全艦が放った魚雷は、全部で三十四本。うち、命中弾は五本。重巡と軽巡に二本ずつ、四番艦の位置にいる駆逐艦に一本。命中率としてはまずまずだ。

急速に傾いでいく二隻の巡洋艦は、最早四水艦の驚異とはなり得ない。残った三隻の駆逐艦は、四水艦の猛射を受けて、瞬く間に炎の塊となった。

「敵哨戒艦隊、沈黙」

比叡が報告するが、その声にはやはり困惑の色が見えている。

なぜだ。なぜ、吹雪は魚雷を使った。

角田はマイクを取る。しかし、彼女が何かを言う前に、疑問に答える声がスピーカーから流れた。

『大丈夫ですよ、角田大佐。トラックの敵艦隊は、これで最後です』

——…なんで。

なんで、僕の言おうとしたことがわかったんだ。

冷たい汗が背中を伝う。確信に満ちた吹雪の声に、角田はただ「了解」と言うことしかできなかった。

吹雪が言ったことは本当だった。北東水道に到達するまで、遊撃艦隊はついに一度も、敵艦隊の接触を受けなかった。平穩そのもので、艦隊は水道を抜け、環礁内へと侵入する。

角田は再び驚愕した。否、その場にいたほぼ全員が、戦慄にも似た驚きを感じていた。

深海棲艦の港湾施設が燃えている。燻っているなどという生半可なものではない。まるで地獄絵図だ。

港湾施設が、長期に渡り使用不能になったことは明白だった。

一機艦による空襲の戦果かと思った。だが、明らかに違う。たった一度しか実施されなかった一機艦による空襲では、港湾施設にここまでの被害を与え、さらに他にもいたであろう哨戒艦隊を壊滅に追い込むなど不可能だ。

少なくとも、後一度か二度、空襲する必要があるはずだ。

——吹雪は、これを知っていたんだ。

確証はない。だが吹雪は、港湾施設をここまで破壊した「何者か」と繋がっていて、その「何者か」から敵艦隊壊滅の報を受けていたら、あれだけ断言できたのだ。

「・・・港湾施設は、もう叩かなくてもよさそうですね」

比叡が呆然とした様子で呟く。

「五遊艦各艦に通達。目標、建設中の敵航空基地。観測機発艦始め」

角田の指示で、弾着観測用の機体が各艦から飛び立つ。夜間の砲撃となるため、目標となる吊光弾を投下するのだ。

『周囲の警戒に当たります』

そう言つて四水艦を引き連れていく吹雪の声音には、明らかな余裕が見えていた。

——そら恐ろしい娘だよ、本当に。

吊光弾の投下から少し。敵基地に向けて、戦艦一隻と重巡三隻から、おどろおどろしい砲声が響き渡った。

夜ノ海ニ浮カブ

海は闇に包まれていても綺麗だった。月明かりが海面を進む艦たちを照らし、幻想的な光景を映しだす。その様子を、榊原は静かに見つめていた。

敵艦隊を壊滅に追いやった一機艦は、損傷艦に速力を合わせ、トラック環礁から遠ざかりつつあった。

一機艦は、結局二度の空襲を受けた。一度目こそ「隼鷹」の被弾と他数隻の至近弾で済んでいたものの、一制艦の抜けた二度目は、さすがに全てを防ぐことはできなかった。

結果、一機艦が受けた被害は以下の通り。

沈没・・・「隼鷹」

大破・・・「飛鷹」、
「五十鈴」

中破・・・「瑞鳳」

小破・・・「赤城」、
「秋月」

沈没した「隼鷹」だが、撃沈前に艦娘は「長波」によって救助されており、時間はかかっても艦体の復旧は可能と見られていた。

これだけの被害を受けた一機艦だが、収穫もあった。

損傷艦を庇うようにして航行する「大和」艦橋から、チラリと輪形陣中央を見遣る。そこに浮いている空母は全部で六隻だ。

沈没した「隼鷹」に変わって航行しているのは、戦闘後に邂逅した新しい航空母艦だ。名を「天城」。彼女は健在な各艦に守られながら、「赤城」に寄り添われるようにして初めての海を進んでいる。

——妙な偶然もあるものだ。

月明かりの中というのかもしれないだろう。「赤城」と「天城」、歩調を合わせるかのように進む二隻の空母を、榊原は感慨深げに見ていた。

天城の邂逅者たる赤城が、元は八八艦隊計画内の巡洋戦艦として計画されたのは、有名な話だ。ただし、彼女は一番艦ではない。彼女の姉、すなわち巡洋戦艦のネームシップは、「天城」の名を冠されていた。

ワシントン海軍軍縮条約によって空母への換装が決まったのは、「天城」と「赤城」であった。本来であれば、姉妹は「天城」型航空母艦の一、二番艦になるはずだったのだ。

しかし、「天城」を不運が襲った。関東大震災によって復旧不可能な損傷を受けた「天城」は放棄され、彼女の代わりに竣工したのが、「赤城」と共に第一航空戦隊——一航戦を構成する「加賀」だ。以後、「天城」の艦体は解体され、横須賀のポンツーンの資材として使用された。

現在「赤城」の隣を進む「天城」は、「雲龍」型航空母艦二番艦であり、「赤城」の姉妹艦ではない。それでも、天城の邂逅者に赤城が選ばれたことには、何かしらの運命を感じられずにはいられなかった。

「・・・武蔵」

隣でポツリと呟かれた声に、榊原は気が付いた。同じようにして「赤城」と「天城」を見つめていた大和が、その両の瞳から、ひとしずくの涙を流す。

「・・・あつ、ヤダ。大和ったら、何で泣いてるの」

榊原の視線に気づいたのだろう。大和は慌てて小さな水の流れを拭いた。

——姉妹は、恋しいものだよな。

同じような想いを経験したことのある榊原には、ある程度わかる。ようやく目元を拭いきったらしい大和は、無理に笑おうとしていた。

「だ、大丈夫ですよ、提督」

淡い月の光が、その横顔を余計に寂しく映しだす。榊原にできることは、これくらいしかなかった。

ポンポン

艦娘たちの頭を撫でるのも、段々と板に着いてきてしまった。残念ながら、榊原はそれ以外になす術を知らなかったのだ。

「大丈夫。必ず、会える」

だから榊原は笑うのだ。言葉を知らない自分の気持ちだが、少しでも

伝わるように。

大和の頬を、もう一度涙が伝った。

「も、もう。せつかく、止まったと思ったのに」

さめぎめと泣く彼女が再び顔を上げるまで、榊原はその頭を撫でていた。

真夜中。日本では、丑三つ時などと言う時間帯だ。仮眠でも取ろうかと思つたが、昼間の戦闘の熱が冷めずに、結局寝付けなかつた榊原は、満天の星空が広がる露天艦橋に上がっていた。

原速とはいえ、吹き付ける風は強烈だ。殊に、十一階建てのビルくらいはある「大和」の艦橋トップともなれば、その勢いはすさまじい。ビョウビョウという音が耳で木霊する。

現在の当直は、三直艦を預かる近藤のはずだ。オートナビゲーションによる夜間航行中とはいえ、油断は禁物。何かあつた際、最高指揮官が指揮を執れる状態になるまで、臨時に指揮をするのが当直の提督の役目だ。

つい先ほどまでは榊原の役割だったが、〇時を回つた時点で近藤に引き継いでいる。

「大和」もオートナビゲーション中であるため、現在の第一艦橋には誰もいない。大和はというと、艦内の風呂に入っている。

——— といえば、「曙」の時はシャワーだったな。

風呂は真水の無駄ということで、狭い駆逐艦の艦内には用意されていなかった。が、艦体に余裕があり、真水も十分過ぎるほどある「大和」の艦内には、一人用ながら風呂があつた。

今頃大和は、昼間の戦闘の疲れを癒していることだろう。

艦橋に上がったはいいものの、やはり手持ち無沙汰な榊原は、ふと、すぐ横を航行する駆逐艦に目を向けた。

「曙」だ。彼女もまたオートナビゲーション中であり、羅針艦橋に人の気配はない。静かに海面を切り裂き、白波を立てている。

と、その艦上に動きがあつた。艦橋脇の扉が開き、中から小柄な人影が現れる。風にたなびく長い髪、花の髪止め。見紛うことのない、

榊原の秘書艦曙であった。

キヨロキヨロと辺りを見回した彼女は、どうやら「大和」艦橋からそちらを見ていた榊原に気づいたらしい。大きく振られた手には、何か旗のようなものが見えた。

———そうか。

彼女がやろうとしていることに思い至った榊原は、露天艦橋を見回して目当てのものを見つけた。赤く塗られた用具入れの中から、曙と同じような旗を二つ取り出し、左右の手に一つずつ持つ。それを、曙に向けて大きく振って見せた。

いわゆる、手旗信号だ。最近ほとんど使われなくなったが、提督候補生時代に教えられたし、以後も万一の連絡手段として記憶していた。

今宵は雲もなく、月の光は海上を美しく照らしている。さらに海面からも反射した光が当たるので、目が慣れてしまえばある程度のもんは見える。

曙の両手が大きく動かされた。

「ミ・エ・ル・カ」

榊原も返答する。

「ミ・エ・ル」

それを確認したのか、曙がさらに動いた。月明かりの中でも動きがよく見えるよう、大きくはつきり動いてくれていた。

「オ・ツ・カ・レ・ク・ソ・テ・イ・ト・ク」

榊原は苦笑する。こんな時まで、彼女の呼びかけは「クソ提督」だ。最後に聞いたのはパラオを出撃した時だろうか。それまで毎日聞いてきただけに、どこか懐かしさすら覚えた。

「オ・ツ・カ・レ・サ・マ」

「ネ・レ・ナ・イ・カ」

曙には全てお見通しだった。全くもって聡い艦娘である。

「ネ・レ・ズ」

手旗信号の、短い文。それでも、彼女には全てわかってしまうのだろう。榊原が、なぜ眠れないかなど。

「ジ・シ・ン・モ・テ」

曙は、一際大きく、旗を振った。その言葉が、胸の奥底に染み渡る感覚がした。隣にいて、直接言葉を交わしているわけでもないのに、彼女の言葉は、確かに榊原に届いている。それはまさしく、洋上に訪れる曙のような暖かき。

「ア・リ・ガ・ト・ウ」

しばらく考えた後、榊原は夜空を見上げて、こう信号を付け加えた。
「ツ・キ・キ・レ・イ」

それに対する曙の返信は、異様に早かった。おかげで、その内容を読み取るのに苦労したが、何ということはない。彼女らしい言葉が送られてきた。

「コ・ノ・ク・ソ・テ・イ・ト・ク」

そのまま、彼女はスタスタと艦内に戻ってしまった。後に残された榊原は、その理由に思い至らず、苦笑する。それでも、曙の言葉を聞いて、どこか楽な心持ちになった。上空の星も月も、今はその輝きがぬくい。

しばらく星を楽しんだ後、手旗信号を仕舞い、榊原は露天艦橋を後にした。今更寝るつもりはなかったが、大和が戻るまで、静かな海を眺めているのも悪くない。それには、風の吹きつける露天艦橋よりも、階下の第一艦橋の方がよかった。

柔らかい月明かりが、ラッタルを下がっていく榊原を、そっと見守っていた。

*

手旗信号の会話の後、結局やることがなかった曙は、艦橋でウトウトとしながら、ぼんやりと海を眺めていた。

——月が綺麗、か。

前甲板を照らす夜の女王は、確かに神々しい輝きを湛えている。満月ではないが、冷たい優しさに満ちた光景だ。嫌いではない。

キラキラとなびいていく波を眺めるうち、時間はすぐに過ぎ去っていった。

一時間ほどが経つただろうか。曙はそれに気づいた。

何か聞いてこえる。否、それは耳からではなく、頭の奥底で響いているような感覚だ。何か——誰かが、彼女を呼んでいる。

瞬時に曙は理解した。ドロップだ。近くに、眠りから覚めようとしている、艦娘がいる。

感覚を研ぎ澄ます。まるで、艦と一体となっているかのような、そんな錯覚。

——いた。

艦隊の針路から十時の方向。距離は一万五千くらいだろうか。

すぐさま、曙は「大和」に——クソ提督のいる戦艦に通信回線を開いた。

まだ起きていたのだろう。呼び出しから数秒とせずに応えたのは、艦娘の大和ではなく、榊原だった。

『何かあったか?』

随所に硬さは見えるが、かなり様になってきた。彼は今しも、一人の立派な提督になろうとしている。

「ドロップよ。近いわ」

『位置は?』

「十時の方向、距離一万五千」

『わかった。上に具申してみる』

そう言つて、榊原との通信は一端途切れた。

おそらく、「赤城」座乗の塚原に、邂逅の許可を求めているのだ。艦隊の総指揮は「陸奥」の東郷が執るが、一機艦の行動については、全て塚原が任されている。

程なく、もう一度回線が開かれた。

『許可が出た。霞と共に、邂逅に向かつてくれ』

曙と同じく一機艦の左翼に位置取る霞が随伴に選ばれた。「了解」と短く答えて、曙は左に舵を切る。鋭い艦首はすぐに振られ、船魂の眠る海域へと向かつていった。

一万五千ともなると、それなりに時間がかかる。霞にも速力を上げるように伝えて、原速から強速へと足を早めた。

海域を包む淡い光が、鼓動のように波打っている。何度も見てきた

光景だ。光の中央で、船魂が海面に揺らめいていた。

月明かりに負けない輝きの中へ、二隻の駆逐艦が侵入していく。

「霞、そこで待ってて」

『了解』

並んで進んでいた「曙」と「霞」は、船魂の五百メートル手前で分かれる。「曙」はそのまま船魂に近づき、舵を切った。「霞」は「曙」と船魂を見守るように、半径五百メートルの円を描く。

「両舷停止」

頃合いよしと見て、曙は推進機を止める。その後も惰性で進み続けた艦体は、船魂のほぼ真横で動きを止めた。

艤装との精神同調を切断し、羅針艦橋を出て甲板に立つ。邂逅者の存在を察知したのだらう、船魂が海面を飛び出し、さながら人魂のように空中をさ迷う。

——こつちよ。

頭の中で呼びかけ、両の手を差し出す。投げ所を見つけた船魂は、静かに曙の手に収まった。

それはまさしく、生なる心臓の拍動。波打つ波動は、今にも生命を宿さんとしている、不思議な暖かさに溢れていた。

愛しさと慈しみを持って、曙は船魂に口付ける。瞬間、脈動は一層強くなり、大いなる海原へ解き放てと、曙に急かしてきた。生まれ出でようとするその力強い魂を、曙は月光の海面へと送り出す。彼女が、本来あるべき場所へと。

水蒸気が沸き起こり、辺りが乳白色に包まれる。横方向の衝撃が襲ってきたはずだが、不思議と「曙」の周囲は凧いでいた。

やがて光が収まる。少しずつ晴れていく視界の中から、艦影が姿を現した。

駆逐艦である。全体的にシュツとしたデザインだ。兵装配置は「曙」とも「霞」とも違う。何よりその艦は、連装砲ではなく単装砲を備えていた。

「睦月」型駆逐艦。戦闘能力こそ高くないものの、速力があり何よりも小回りが利く。装備さえしっかりしていれば、対空、対潜とこれ

ほど頼りになる駆逐艦もない。

——さて、と。

後は、艦娘が目覚めるのを待つしかない。

甲板で腕組みをし、曙は目の前の駆逐艦が機関を動かすのを待つ。だが、いくら待っても、機関が動く様子はなかった。不気味な沈黙を保っている。

——まさか、本当に起こしに行くことになるなんて。

思い出したのは、以前榊原に言ったことだ。言った当初は、自分でやることになるとは思いもしなかった。

強制接舷をするために、艦橋に戻ろうとする。事態が激変したのはその時だった。

何かが風を切り裂く音。高速で迫る物体。曙の直感が、その存在を感じ取った。

ハツとして振り返る。

そう遠くない場所に、白銀に輝く水柱が現出した。

ソノ身ヲ賭シテ

白濁の水柱が立ち上るのを、曙は両の目ではつきりと捉えた。頭は一気に現実へと引き戻され、たった今噴き上がった水柱を観察する。数は三本。大きさからして、八インチ級——重巡の砲撃と思われるた。

——どうして・・・っ！

どうして気づかなかった。そこまで思った時、曙はその原因に辿り着く。

周囲を警戒する「霞」は、対水上電探として二二号電探を装備している。現在の日本海軍駆逐艦としては、標準的な装備だ。

しかし、その未改修型は故障が多く、電探を回転させる部分が止まったり、変なノイズが入ることがあった。横須賀で開発された改修型は故障も減ったが、まだ配備数は少ない。戦艦や巡洋艦、一部の対水上戦闘を専門とする駆逐艦に優先的に配備されているくらいだ。

「曙」は元々横須賀の配属であり、どちらかと言えば対水上戦を専門としていたため、この改修型を搭載していた。しかし、呉出身で対空専門の「霞」には、未だに未改修型が搭載されている。

パラオ出発時から調子がおかしかったらしいが、何とか騙し騙し使っていた。ところが、一機艦の対空戦闘時に、引き起こしをかける敵雷撃機による機銃掃射を受け、マストにあった二二号電探は、ついに故障してしまった。

——迂闊だった・・・っ！

気が緩んでいなかったと言えば嘘になる。今の今まで、そのことに思い至らなかつたなんて。

ラツタルを物凄い勢いで駆け上がり、羅針艦橋に飛び込む。すぐさま艤装と精神同調に入った。

「精神同調完了ー！」

その瞬間、二度目の射弾が落下する。今度も三発。先よりも近い。

『ごめん曙、見つけれなかった』

悔しさを滲ませる声で霞が言った。

違う。謝るのはあんたじゃない。

「とにかく、話は後！」

主機を動かし、「曙」は加速する。二二号電探を旋回させ、敵艦を探した。

やはり、いた。

おかしいと思つたのだ。電探が使えないとはいえ、「霞」には優秀な見張り妖精がいる。この月明かりの中で、射程距離にまで迫った敵巡洋艦を見つけれられないわけがないのだ。

見つけられなかった理由は簡単だ。なぜなら敵艦は、今「霞」のいる位置とは、「曙」を挟んだ反対側にいたのだから。「曙」と「睦月」型駆逐艦の艦体が障害となつて、その視界を遮つてしまつていたのだ。

『あたしが迎撃する！』

霞が吼えるように言つた。だが曙も、それに負けじと声を張る。

「馬鹿言つてんじゃないわよ！電探が故障してて、どうやって夜間戦闘するつもり!？」

『見張り員がいる！』

「却下！あたしの電探の方が、ずっとよくわかる！」

『けどっ！』

「ああもうっ！いいからあんたは、さっさとクソ提督に連絡しなさい！—でもって、そこの寝坊娘をさっさと起こして！」

それだけ指示して、一方的に通信を切つた。切られたスピーカーの向こうで、ワーワーギャーギャー霞が騒いでいる気がするが、そんなものを気にする曙ではなかった。

——邂逅者はあたしだ。

あの娘は、あたしが守らなくちやいけない。そして何より、あそこまで責任を感じている霞を、戦闘に出したくなかつた。

主機を一杯にして、「曙」は急加速する。置いてけぼりにされた霞は、渋々ながらも曙の指示に従つたらしかつた。

再び敵弾が降り注ぐ。先程まで「曙」がいた辺りだ。冷や汗ものである。

曙は改めて敵艦の位置を確認した。電探の情報によれば、距離はざっと一万三千。敵艦隊の編成は中小艦艇のみで、恐らく残存の敵艦が遊兵と化したものだ。

厄介だ。遊兵と化した敵艦は、下手をすれば見境なく襲いかかってくる可能性がある。

霞たちへの攻撃を止めさせる方法はただ一つ。敵艦隊の目標を、「曙」へと向けさせること。

上がった速力そのままに、「曙」は敵艦隊への突撃を敢行する。とにかく動く。それが、敵艦隊の注意をこちらへと向けさせる、手っ取り早い方法だ。加えて。

突如として、闇夜を一条の光が貫く。光の根元は、「曙」の前部煙突の後ろだ。

探照灯の強い光源が、夜の海をはつきりと照らした。射撃を続ける敵重巡まで、その光は届いていないが、それで構わない。今大事なのは、敵の注意を「曙」へと向けさせることなのだから。

「当てられるものなら、当ててみなさい！」

曙の咆哮と共に、彼我の距離は一万を切った。

疾走する風。艦上を駆け抜ける飛沫。高められた艤装との精神同調を通して、それらがまるで自らの感覚であるかのように感じられた。

敵重巡が再び発砲する。

——こつちに来る……っ！

曙は直感していた。

十数秒後、八インチ砲弾が弾着の水柱を噴き上げる。「曙」の探照灯が照らしだす海面に生じた白柱は、その光を受けてきらきらと輝いていた。

*

霞からの緊急信を、榊原は「大和」艦橋で聞いた。長い髪を一生懸命乾かしていた大和共々、スピーカーから聞こえてきた霞の切迫した声に、一気に現実へと引き戻される。

「敵艦隊の編成は!？」

『少なくとも重巡一を含む！それ以外はまだよくわからないけど、小艦艇が五隻前後！』

「了解。早急に離脱してくれ」

『それは無理。邂逅した艦娘がまだ目覚めてないの。それに、曙が・・・』

曙が、囨になつて敵艦隊に向かった。

榊原の背中に、一時に物凄い量の冷や汗が流れる感覚がした。

『あたしも曙を支援する！』

頼む。咄嗟にそう口走りそうになつて、榊原は強く歯を食い縛つた。ぎしぎしという音が聞こえるのではないかという程、強く。

「・・・それは許可できない」

『どうして!?!』

「俺たちが救援に向かうまで、霞は待機だ。新しい艦娘の意識を覚ますことを、優先してくれ」

『でもっ、でもそれじゃあ、曙が・・・っ!』

曙が、沈んでしまう。掠れて絞り出すような霞の声を、通信機は律儀にも拾っていた。

——「指揮官に大切なことは、何だかわかる?」

曙の言葉が蘇る。彼女の答えは、「味方の損害を最低にすること」。絶対に、無茶な戦場に、艦娘を送り出さないこと。

「すぐに向かう。それまで、霞は現在位置で待機していてくれ」
『・・・っ!・・・この・・・っ!』

この、クズ司令官!涙に近い声で、霞との通信は切れた。

「敵艦隊視認しました!砲炎見えます!」

艦装との精神同調を終えた大和が叫んだ。水平線上に、赤々と炎が上がっている。その光の下に見えるのは、紛うことなき、重巡り級である。

「大和、大至急『赤城』に繋いでくれ」

「もう繋がってます。いつでもどうぞ」

そう言つて大和は促した。榊原は頷き、手に持ったマイクのスイッチを入れる。

「こちら榊原少佐です」

『聞こえている。何かあったか?』

塚原の落ち着いた声は、緊急に通信を入れた榊原の用件を、ある程度予想していたらしかった。

「邂逅に向かった曙と霞が襲撃を受けました。救援に向かいます」

『了解した。摩耶と満潮、陽炎を連れていけ』

何かを言い募ることなく、塚原は榊原の求めていたものを、すぐに理解してくれた。摩耶、満潮、陽炎。パラオ泊地所属の彼女たちもまた、榊原や大和と同じように、仲間の危機には駆けつけずにいられないはずだ。ただし、さすがに護衛戦力が足りなくなるので、長波は置いていく。

「感謝します」

それだけ言って、通信は短く終わった。入れ替わりに、榊原は三人のパラオ泊地所属艦娘と、回線を開く。代表して口を開いたのは摩耶だ。

『話は聞いてた。あたしたちは、いつでも行ける』

彼女たちの表情が、ありありと浮かぶようだった。仲間を助けた。その強い意思がこもった瞳は、間違いなく榊原に向けられている。

「提督、ご命令を」

隣の大和が、静かに言った。

「これより、パラオ泊地所属艦隊は輪形陣を離脱。曙、霞、及び新艦娘の救援に向かう」

気迫のこもった返事が重なった。

四隻のBOBが、一機艦の輪形陣から離脱していく。左翼に位置取る「大和」と「陽炎」は取舵を、右翼に位置取る「摩耶」と「満潮」は面舵で大きな円を描いて、曙と霞の待つ方へ艦首を向ける。

「全艦両舷一杯！摩耶、満潮と陽炎を連れて先行してくれ」

『了解！』

機関の発揮しうる最大出力で、三隻が「大和」の前に出る。「大和」は二七ノットしか発揮できないが、「摩耶」、「満潮」、「陽炎」

は三四ノツトの高速力を誇る。

あつという間に“大和”を追い抜いていった三隻の戦乙女を榊原は見つめていた。その時だ。三隻の先頭を行く摩耶が、その場にいた全員を叱咤激励する。

『月夜の守護者が誰なのか、思い知らせてやれ!』

誰もが摩耶の言っていることを理解する。『三日月夜の鋼鉄乙女たち』。パラオ泊地艦隊は、そう名乗っている。仲間と共に戦う、その決意は、各々の艦橋側面に美しき女神として描かれていた。

全員が威勢よく返答する。若干どころではなく口が悪いのも、パラオ泊地所属の駆逐艦娘たちにはいつものことだ。

月夜の中を、四隻は驀進していく。淡い月光に照らされる、美しき女神の肖像に、確かな決意を秘めて。

*

“曙”と敵重巡との距離は、すでに七千を切っていた。

およそ二十秒置きに立ち上る水柱を、持ち前の素早さをもって回避していく。方法は至ってシンプルだ。一度砲弾が落下した位置に、立て続けに弾着する確率は極めて低い。その特性を活かして、とにかく手近な水柱に向けて舵を切るのだ。

とはいえ、いつまでもそうしていられるわけではない。砲撃が繰り返されれば、いずれは命中弾が出る。その時、装甲の薄い“曙”が、八インチ砲の直撃に耐えられる道理はないのだ。

命中弾が出た時。それは、敵艦隊にとって“曙”が脅威たり得なくなる時と同義だ。その先の砲撃は、後方の二隻の駆逐艦に向かうことになる。

霞からは、“睦月”型駆逐艦への強制接舷準備に入った旨が報されている。また、榊原率いる救援部隊も、駆けつけてくれると言う。

——だから、それまで辛抱しなさい!

自らを叱責する。

敵駆逐艦が前に出てくる。回避を続ける“曙”の動きを妨害しようとしているのは明白だ。

「見えすいてんのよー!」

探照灯を先頭の一隻に向けさせる。一端激しい動きを止め、敵駆逐艦に砲門を向ける。

発砲。『曙』の一二・七センチ連装砲は、平射ならば高角砲と変わらないスピードで連続斉射が行える。敵重巡が誤差修正を終える前に、敵駆逐艦を沈めるつもりだった。

彼我の距離は四千。この距離で、曙が外すはずがなかった。

第二射目で命中弾を得て、そこからは連続斉射だ。先頭の駆逐艦が沈黙するのに、一分とかからなかった。

敵重巡との相対位置を変えるべく転針する。

「まだまだっ！」

——こんなものじゃなかった。

思い出したのは、かつて——まだ、艦娘たちが日本近海の安全すら確保していなかった頃のことだ。

同じような状況だったあの時。曙は守られる側だった。まだ練度の不足していた曙は、被弾し、速力を大きく落としていた。

曙を守ってくれたのは、当時の艦娘たちの中でも、ずば抜けて練度の高かった先輩駆逐艦娘だ。華麗に敵弾をかわし、的確に敵戦力を削いでいく。

彼女は、曙の教官だった。人間不信で荒んでいた曙に、今を生きることを、生きる術を教えてくれた。

——当たるはずがなかった。

彼女の練度なら、当たるはずがなかったのだ。

なのに彼女は、損傷した『曙』を庇って被弾した。その体を張って曙の盾となり戦う姿は、阿修羅の如くだった。

救援の艦隊が辿り着くまで、彼女は曙を守った。多数を被弾し、強制活性化の限界にあった彼女が沈むのは、誰の目にも明らかだった。

艦装を脱ぎ、彼女の艦に乗り込んだ曙は、艦橋で力なく倒れる彼女に泣きついた。ごめん、何度も謝った。それなのに彼女は、「無事だよかった」と、たった一言、それだけ言ったのだ。

彼女から、曙は海を奪ってしまった。

「……仲間を守れずして、」

何が。

「何が駆逐艦だあああああつ！」

「曙」の砲撃が、二隻目の駆逐艦を撃沈する。それに苛立つかのよ
うに、敵重巡が再び発砲する。

その発砲炎の中、ふと、曙の目が何かを捉えた。

見張りから報されて、知ってはいた。敵の重巡は二隻だと。だが、
今砲撃を続けている奴と違い、もう一隻は特に何をしてもなく、不
気味な沈黙を保っていた。

砲炎の光で浮かび上がったのは、そのもう一隻の重巡だった。

——まさか！

そのまさかだった。もう一隻の重巡も発砲する。斉射だ。

曙は悟った。こいつらは遊兵なんかじゃない。最初から、邂逅のた
めに離脱した少数艦を叩くつもりだったのだ。

巨弾が迫る気配。

弾着の衝撃が、艦を揺さぶる。焼かれるような痛みの中で、曙の脳
裏には、吹雪の顔が浮かんでいた。

守リタクテ

強制接舷に成功した霞は、*「睦月」*型駆逐艦の艦体に移り移っていた。

曙に言われた通り、まずはこの寝坊娘を叩き起こす。護衛対象である彼女が動けば、孤軍奮闘する曙も海域から離脱できるはずだ。

——こうしてられない。

艦体に移り移るや否や、霞は艦橋に向けて走り出す。ラツタルの手すりを半ば強引に掴み、それを頼りにして急階段を一気に駆け上る。

*「睦月」*型の艦橋は羅針艦橋ではなく露天だ。上にはキャンバスが掛けられているだけで、時折駆け抜ける風すら感じられる。

その艦橋の中央、床の上に、この艦の主はいた。この緊迫した状況など露ほども知らない様子で、両手を枕にして、心地よさそうに眠っている。

鮮やかなピンクの髪。幼い顔立ち。肢体は細くしなやかだ。穏やかな寝息を立てる口元は、小さくすぼめられている。

ぶん殴って叩き起こしたい苛立ちを抑え、霞は大きく息を吸い込む。腹の底に力を溜め、声を限りに叫んだ。

「いい加減起きなさい、この寝坊助ええええええっ!!」

「うみやあああああああっ!?!」

突然の大声に、艦の主は慌てて飛び起きた。何が起こったのかわからない様子で辺りを見回している。

「い、一体何だったぴよん・・・?」

「こつちよこつち、こつち見なさい」

全くもって見当はずれの方角を見ている彼女を、霞は急かすようにして呼んだ。声の出所がわかったのか、彼女はまだ眠そうな目を擦りながら、霞に非難の視線を向ける。

「せっかく気持ちよく寝てたのに。起こすにしてももう少し優しく起こしてほしいぴよん」

「ああもう、どうでもいいわよそんなの!」

状況を全く理解していない彼女の言葉に、霞の苛立ちが募る。だが

それを彼女にぶつけたところで、何の解決にもならないことは、霞もよくわかっていた。

今、真つ先にやるべきことは、彼女に艤装との精神同調をやってもらい、この艦の機関を動かすことだ。機関を動かさなければ、現海域を離脱することも叶わない。

「ほら、起きて」

半ば強引に手を差し出し、彼女の体を起こしにかかる。若干文句を言いながらも、彼女は大人しく従って、立ち上がった。スカートを整え、霞の前にまっすぐ立つ。

「あたしは霞」

目の前の彼女に、霞は短く自己紹介をした。本当はこうしている時間も惜しいが、こればかりはそうもいかない。お互いの信頼関係に関わる。

霞の自己紹介を訊いた彼女は、その両目をジツと見つめていた。やがて納得したように、威勢よく頷いて口を開く。

「卯月ですー！うーちゃんって呼んでほしいぴよん！」

「卯月ね」

「うーちゃんって呼んでって言ったの、聞いてなかった!？」

「聞いてなかったわ」

「ひどいぴよん！あんまりだぴよん！」

卯月はそう言って盛大にいじけた。

「とにかく、あんたは艤装を着けて、さっさと精神同調に入って。離脱するわよ」

「?..どういうことぴよん?..」

霞は、後方の窓から見える「曙」と深海棲艦の戦闘を、おもむろに指し示す。赤々と上がる砲炎が、月光の海面を照らしている。その様子を見た卯月の表情が、明らかに怯えの色を帯びた。

「わかった？」

「り、了解ぴよん」

卯月が艤装に近づくのを確認して、霞も艦橋を後にしようとする。「機関を動かしたら待機して。あたしがあんたを誘導する」

卯月はこくりと頷いて、艤装を背負った。すぐに、精神同調の準備に入る。

艦橋を出た霞は、入った時と同じように手馴れた勢いで、ラツタルを駆け下りる——否、滑り下りる。手すりを巧みに使って飛ぶようにラツタルを降り、甲板に足を着いた霞は、その視界の隅で真っ赤な炎が上がるのを見た。

思わず、そちらをまじまじと見てしまった。炎の下、それまで俊敏な動きで敵弾をかわしていた「曙」が、炎を噴き出して動きを鈍らせている。

間違いない。「曙」は粘ったが、ついにその身に、敵弾を受けてしまったのだ。

——急がなきゃ・・・！

奥歯を食い縛り、霞は自らの艦に乗り移る。妖精たちが強制接舷を解除して、「霞」と「卯月」の接合は解かれた。

「卯月」の機関が、その始動の唸りを上げた。新たな息吹を宿した機関が大気を震わせ、「霞」の艦橋を震わせる。これで準備は整った。

「卯月、聞いている!?!」

通信機のスイツチを入れ、霞はたった今初めて機関を動かした新艦娘を呼び出す。しばらく妙なノイズがあった後、先ほどと同じ元気一杯の声が聞こえてきた。

『ちやんと聞こえてるびよん!』

「了解。通信機はいつでも受信できる状態にしときなさい。あたしや司令官からの指示は、全部そこに入るから」

『わかったびよん』

その返事を聞き届けてすぐに、見張りから「曙」の状況が報された。被弾は二。重巡の砲撃をまともに受けたらしく、炎上して速力も落ちているとのことだ。

「曙聞こえる!?! こっちは寝坊娘が起きたから、あんたも早く離脱しなさいー!」

強引に通信回線を開き、曙に向かって声の限り告げる。が、彼女か

ら返答はなかった。スピーカーからは、ただただ虚しい雑音が聞こえるだけだ。

——まさか、通信装置をやられた・・・!?

奥歯を噛みしめ、霞は唸った。これでは、あちらの詳しい状況を知ることができない。

装甲の薄い駆逐艦だ。いくら艦娘との精神同調の強化によって、ブルーアイアンの強制活性化ができるとはいっても、そこには限度がある。そしてその限度は、それほど長くない。

霞は機関の圧力を上げる準備を始める。卯月に、単艦でこの場を離脱するよう、指示を出そうとした時だ。

『待たせたな霞！その新人連れて離脱しろ！』

スピーカーから、澆刺とした声が聞こえてきた。改めて確かめるまでもない、パラオ泊地所属の重巡洋艦娘、摩耶だ。彼女たちが、救援に駆けつけてくれたのだ。

「曙を願ひ！」

『任せとけて！』

短く答えた後、「摩耶」の艦体が、高速で「霞」の横を掠めていく。その後ろには、「陽炎」と「満潮」も続いていた。全員が全員とも、たった一隻で奮闘し、損傷した曙を助けんがため、その全力を振り絞っている。

『霞』

そしてもう一人。韋駄天の如く駆けて行った摩耶の後を追うようにして現れた、超弩級戦艦。その艦橋にいるのであろう霞の指揮官が、静かな声で、彼女に呼びかける。

『よくやってくれた』

「・・・あたしは、」

あたしは、何もしていない。そう続けようとした霞の言葉は、榊原によって遮られた。

『摩耶も言った通り、後は任せてくれ。曙は、絶対に沈めさせない』

それ以上の言葉はなかった。だけど霞にはわかってしまった。

お前のせいじゃない。榊原のその言葉が、聞こえてきそうだった。

「・・・卯月を連れて、離脱するわ」

『頼んだ。彼女には、挨拶は後でゆつくり、と伝えておいてくれ』
「了解」

通信は切れた。その瞬間、全身から力が抜ける感覚が襲う。飛びそうになった意識を、霞は何とか繋ぎ止めた。そのまま艦装との精神同調を維持し、卯月に通信を開く。

「卯月。現海域を離脱するわ。あたしに着いて来て」
『了解ぴよん』

それを聞いて、霞は通信を切ろうとした。しかしその前に、卯月の言葉が続く。

『うーちゃんがいるから、大丈夫だぴよん！』

どこかわざとらしいほどに明るい声だった。能天気に見える彼女は、その実は周りの機微に敏感なのもかもしれない。この世に顕現したばかりだというのに、あの短い通信から霞の気配を感じ取る。それは、並大抵のことではない。

——あたしにも、そんなことができたら。

素直に他人を励ますことの苦手な霞は、少しでも新人を見習ってみようかと思いつきながら、原速で海域を離脱し始めた。

*

“大和”と敵重巡の距離は、すでに二万を切っていた。先に突入した摩耶はすでに射撃を始めており、損傷した“曙”から目を逸らせようと、駆逐艦や二隻の重巡と撃ち合う。しかし、砲火力の不足は目に見えていた。“摩耶”の見張り員によれば、重巡の一隻はelite、もう一隻は未知の艦種ということで、この二隻と同時に撃ち合うのは、さすがの摩耶にも荷が重い。

二隻の駆逐艦を前に出してもいいが、彼女たちの砲力は小さく、かといって魚雷を使うのは、重巡二隻や駆逐艦が健在なうちはリスクが高かった。

そこで重要なのが、“大和”の砲撃支援だ。戦艦である“大和”をもつてすれば、二隻の重巡相手でも十分に戦える。榊原はそう考えていた。

「弾着、今！」

大和が叫ぶ。これで五度目の砲撃だ。闇夜の先、月明かりに照らされる海面に、きらめく水柱が三本立ち上った。幻想的な光景に、思わず息を呑む。だが――

「全弾遠！」

――当たらない……！

声にならない唸りを上げる。

昼間、〃大和〃は二万五千の距離で、五回の観測射を行うことで命中弾を得ていた。だが、二万を切つていても、夜間はその五回で命中弾を得ることができなかった。

榊原と大和は、夜間戦闘の困難さを、身をもって感じていた。

「第六射、撃て！」

それでも、ここで止めるわけにはいかない。何としても命中弾を得て、〃摩耶〃たちを支援しなければならない。

〃大和〃よりも敵艦隊に近い位置では、〃摩耶〃がり級eliteと思しき重巡と撃ち合っている。ほとんど直角だ。発砲遅延装置による散布界の縮小がある分、〃摩耶〃の方が若干押しているだろうか。

もう一隻、〃大和〃が相手取っている新形式のり級は、砲撃を受けてもなお、発砲する様子はない。ただ静かに航行を続けている。まるで、この戦闘全体を見守っているかのように。

第六射が落下する。今度も全弾遠。精度は上がっているはずだが、焦れるような気配が隣の大和から伝わってきた。

「っ！敵艦隊転針！撤退していきますー！」

「……やはり、か」

榊原は、半ばこの動きを予測していた。〃摩耶〃たちの救援が駆け付けた時点で、敵艦隊の戦闘には明らかに積極性が欠けていた。それは、今まさに先頭切つて撤退していく新形式のり級に顕著だった。

奴らの目的は群れからはぐれた子羊たちであり、大きな大人の羊が現れた時点で、その狩り自体を諦めていたのかもしれない。

「追撃はしない。〃曙〃の救援を優先」

榊原の決断に、どこからも異論は出ない。仰角をかけていた各艦の砲身が下げられ、這う這うの体で戦場を離脱後その行き足を止めていた「曙」の方へと向かっていく。

「大和、接舷できるか？」

「乗り移るおつもりですか!？」

「そうだ」

「わ、わかりません。難しいと思いますけど・・・やってみます」

大和は目を閉じ、精神同調を高める。全ての神経を、舵による操艦に集中しているらしかった。

「曙」の艦体が迫る。被弾した後部甲板が無残に引き裂かれ、真っ赤な炎と黒煙を噴き出している。その舷側に、ゆっくりとした動きで、「大和」の巨体が迫っていた。

帰ルベキ場所

最終的な「曙」の被弾は七発を数えた。その全てが八インチ砲弾だ。駆逐艦には、なかなか荷の重い被害である。ブルーアイアの強制活性化をもつてしても、どの程度対処できたのかは定かではない。

距離が縮まるにつれて、大破した「曙」のデイテイルが繊細に見取れるようになった。海面を赤々と照らしだす炎が燻る後甲板の惨状を見て、榊原は顔をしかめた。

二基ある後部砲塔のうち、二番砲塔は完全に爆砕され、跡形もなく消え去っている。残存の三番砲塔も、砲身があらぬ方向を向いており、最早射撃が不可能であることは明白だった。

「接舷作業に入ります」

緊張の面持ちで大和が告げる。停船している「曙」に対して、「大和」の巨体が迫っていた。

「甲板に出て待っている」

「はい。そうしてください」

事態は急を要する。早急に「曙」へと乗り移るべく、榊原は眼下の「大和」甲板へと下りることにした。

艦橋のほぼ中央にあるエレベーターの扉を開き、中へと入る。工事現場の昇降機を思わせるむき出しのエレベーターが動きだし、榊原を上甲板へと運んでいった。その先の廊下を少し進めば、夜の甲板へと出ることができる。

一番副砲塔の基部辺りから艦外へ出た榊原は、辺りに立ちこめるむっとした空気に、思わず制服の袖を口元に当てた。すでに惰性だけで動いている「大和」の右舷前方、目と鼻の先に「曙」がいる。燃え盛る後甲板の熱気が、ここまで伝わってきているのだ。

——魚雷は大丈夫か!?

額を汗が伝う。魚雷に誘爆してしまったら目も当てられない。

「大和」所属の妖精たちが、甲板の端に集まって、必死に「曙」へ手を振っている。数名がかりで太いロープを持っており、あれで繋ぐ

らしかった。

幸いにして、「曙」所属の妖精たちも健在だった。あちら側の後甲板では何人かが消火活動を始めており、艦の緊急時において、迅速な対応を取っていることが分かった。

一人の妖精が、「曙」のマストに立っている。手旗信号で何かを伝えてきた。

「ゼ・ン・カ・ン・パ・ン・セ・ツ・ゲ・ン・ヨ・ウ・イ・ア・リ」

前甲板接舷用意あり。被害のない前甲板と接舷しろということらしかった。

「大和」の妖精たちが、了承の意を伝える。それから、両艦の妖精たちは、接舷に備えて甲板のへりから離れた。

「大和」程の巨艦ともなれば、その周囲に生じる水流の強さは凄まじい。惰性で進んでいる今でも、停船中の二千トンに満たない小艦艇を、自艦に近づけるぐらいの強さはあった。

じりじりと、互いの距離が縮まっていく。もう少して、「大和」側の緩衝材が「曙」の舷側に触れようかという頃合いで、「大和」側の妖精が、細いロープをもつて思いつきジャンプした。甲板の高さの差も手伝って、彼はひらりと「曙」の前甲板に舞い降りる。

次の瞬間、二艦の舷側がぶつかった。緩衝材がひしゃげ、衝突のエネルギーを受け止める。わずかな横方向の揺れを感じながら、榊原は接舷作業を待った。

先程「曙」側へ乗り移った妖精と、「曙」の妖精たちが、細いロープを手繰り寄せる。その先は太いロープと結ばれており、両艦を繋ぎ止める。

接舷が確認されると、縄梯子が降ろされた。妖精たちが一斉に榊原の方を振り向き、促す。これで乗り移れ、ということらしかった。

「ありがとう」

それだけ言って、榊原は縄梯子を降り始める。目測で五メートル以上ありそうな乾舷の差を、不安定な縄梯子を踏みしめ、一段一段降りていく。時折艦が揺れ、それとともに縄梯子も揺れる。想像以上の難しさだ。

それでも、何とか降りきって、「曙」の甲板に足を着ける。

「大和、こちらは乗り移った」

持参した無線機に呼びかける。雑音交じりの返答があった。

『了解しました。こちらは、消火活動を行います』

「よろしく頼む」

ほどなく、各艦から消火作業が行われるはずだ。

無線を切って、榊原は走り出す。目指すのはもちろん艦橋だ。ラツタルの手すりを掴み、強引に上っていく。

開いた扉の先、羅針艦橋の中に、曙はいた。天井から提がる艤装にもたれるようにして、ピクリとも動かない。その側で、妖精が一人、心配そうにしていた。

真つ先に妖精が榊原に気付く。彼の仕様だけで、「急いで」と言っているのがわかった。

「曙、大丈夫か」

頭に負傷があつては大変だ。下手に揺すらないように細心の注意を払って、榊原は曙に呼びかける。顔の前にかざした手には息がかかったし、首筋の脈もある。大丈夫だ、少なくとも生きている。それを確認した瞬間、言いようのない脱力感が榊原を襲った。

ともかく、ここで取り乱すわけにはいかない。気力を保ち、榊原はもう一度呼びかけた。

「曙、しっかりしろ。目を開けるんだ」

ピクリ。苦悶に歪んだような曙のまぶたが動いた。長いまつ毛がゆっくりと開かれ、焦点のはつきりしない瞳が榊原を捉える。

「・・・クソ・・・提督」

「そうだ。俺だ」

意識が朦朧としているのだろう、どこか現実味のない視線がきらめき、垂れ下がっていた右手が上がってくる。

「なんで・・・ここに・・・」

「・・・わからない。でも、今、俺がいるべきなのはここだと思つた」

榊原としても、それ以外に答えようがなかった。

曙が目を見開いた。それからフツと頬が緩み、優しく笑いかける。

「何それ。ほんと・・・バツカじゃないの」

「ああ。そうかもしれないな」

自然と榊原の表情も綻ぶ。やはり、曙は榊原にとって、特別な艦娘だった。

艦装に体重を預けていた曙が立ちあがる。

「よっこいせ」

「大丈夫なのか？頭打ったり、どこかに怪我はないか？」

「大丈夫よ、私自身に問題はないわ。ちよつと、強制活性化の負荷で、気を失ってただけだから」

やっぱり、吹雪は凄いわね。そう聞こえた曙の眩きの意味は、榊原にはわからなかった。

「各部の状況を聞かせてほしい」

たったそれだけの指示で、曙は榊原の欲している情報をくれた。

「精神同調率低下、現在四十三パーセント。戦闘は無理ね。各種兵装は、気を失う前に対火災処置をしておいたわ」

「それじゃあ、魚雷は？」

「投棄済み。誘爆なんてしないわよ」

榊原は胸を撫で下ろす。これで、一番の問題は解決したわけだ。

「後甲板の損害は、主砲塔一基喪失、一基大破。舵とスクリューに問題はなし。火災は・・・もう少して、鎮火する」

パラオ所属の各艦から、消火活動が行われているのだ。曙もそのことを知ったのだろう。

「航行はできるか？」

「問題ないはずよ」

「わかった。消火活動が終わり次第、航行の準備に入ってくれ。一機艦と合流する」

笑顔を湛えて、榊原は言った。

「帰ろう。パラオ泊地に」

ところが、ことはそう簡単に進まなかった。精神同調率の低下した状態では、艦を動かすことで精一杯だ。まして曙は、その前にブルー

アイアンの強制活性化を行っており、心身共に大きな負荷がかかったばかりだった。

「ぐ……っ！」

艦体を動かそうとした瞬間、曙が苦悶の表情を浮かべる。

「辛いのか？」

「大、丈夫……よ」

機関の動きと、スクリューが回転を始める振動が伝わる。「曙」がまさに息を吹き返そうとする中、その艦娘たる曙だけは、額に玉のような汗を流していた。

「あっ……ぐ……っ！う、ご……け……っ！」

それでもなお、艦を動かそうと歯を食い縛る曙の隣で、榊原はただ、きつく両手を握り締めているしかなかった。

「曙」が、わずかながら前進を始める。少しずつ、微速にすら満たないほどの速度で、さざ波を乗り越える。

「クソ、提督……！」

突然、曙が榊原を呼んだ。

「どうした」

「……手」

スツ。曙の、小さな手が差し出された。

「繋いで」

一も二もなく、榊原はその手を取った。見た目のまま、榊原の手にすっぽりと収まってしまふほど、小さな手だ。それでも、そこから伝わる覚悟と決意は、何よりも強く逞しい。榊原を——否、パラオ泊地を支える、頼れる仲間の手だった。

曙の手に力が入る。心持ち、機関の上げる唸りの調べが、高鳴った気がした。

行ける。榊原は直感した。

その直感を裏付けるように、「曙」の速力が少しずつ上がり始めた。微速を超え、やがて半速、ついには原速を回復する。一度走り出してしまえば、艦体の周囲に生じる水流と慣性の法則が、「曙」の動きを支えてくれた。

曙の前髪が、汗で額にへばりついていて、手を握り、彼女の荒い呼吸すら聞こえてくる榊原もまた、額に水滴が伝うのを感じた。

『いいぞ曙！その調子だ！』

並走する摩耶が、榊原の無線機越しに励ます。その声を聞いたからか、曙は益々速力を上げた。

十分ほどの時間が経過した時、一機艦から離れていた“曙”たちは、ついに輪形陣へと到達した。卯月を連れて先に戻っていた霞が、彼女たちを出迎える。無線に届いたその声は、端がわずかに震えて聞こえた。

「オートナビゲーションを設定」

艦装が自動航行モードに切り替えられる。これで、曙の仕事は終わりだ。

精神同調を切り、艦装を脱いだ曙は、そのまま榊原の方へと倒れ込んできた。全身を火照らせて、滝のように汗をかいた彼女の制服は、ぐっしよりと湿っている。

「しばらく、寝るわ」

荒い呼吸の中で、それだけ告げた曙は、そのままゆっくりとまぶたを閉じる。安らかな寝息とともに、その体から力が抜けていく。

曙を抱きとめた榊原は、乱れた前髪を整えながら微笑む。先ほど繫いだ手から伝わってきた、鬼気迫る軍人の気迫。その時と同一人物とは思えないほど、華奢で軽やかな彼女の体。柔らかな寝顔。

「・・・よく、やってくれた」

自らの身を賭して、仲間を守った曙。その心意気に敬意を表する。妖精たちに後を任せ、榊原は曙を抱きかかえる。特に鍛えていたわけでもない榊原でも、軽々と持ち上げて、ラツタルを降りることができる。そのまま、艦橋直下にある仮眠室に寝かせるつもりだった。

美しき月の女神が見守る中、“曙”たちはパラオ泊地への帰路を急いだ。

ここに、第一次トラック攻勢と、それに伴う各戦闘は終了した。日本海軍は、決して小さくはない損害を負ったものの、一隻の喪失艦も

出すこともなく、トラック守備の敵艦隊を撃滅することができたのだ。

それ以外にも、大きな収穫を得ることができた。

深海棲艦の陸上基地建設。どういう手を使ってか、深海棲艦はその触手を、ついに陸上まで伸ばしてきた。

奴らは進化する。人類も艦娘も、想像しえない方向へと。それを、榊原、そしてパラオ泊地所属の艦娘たちが知るのは、まだ先——しかし、そう遠くない日のことだ。

訪レタ風、来ル荒波

パラオ泊地には、トラック沖海戦に参加した各艦が集っていた。損傷した艦、そうでない艦、別行動だった潜水艦も、第一潜水隊も、パラオ泊地で海戦後の垢を落としていた。パラオ名物となった大浴場は、連日疲れを癒す艦娘たちで大賑わいである。

——「やっぱり、パラオはこうじゃなくちやな」

留守を預かっていた木曾は、榊原にそう言つて、一週間ぶりの活気に頬を緩めていた。

艦娘だけではない。損傷したBOBもまた、この時のために準備されていたパラオ泊地の四つの浮きドックが、修復に当たっている。もつとも、基本的には航行に支障のない程度の修復を行つて、本格的な修理は内地の各所属鎮守府で実施される予定だった。

現在ドック入りしているのは、大破して航行能力が著しく低下している「飛鷹」、後部の損傷が激しい「五十鈴」の二隻だ。両艦とも、内地回航が可能な程度まで修復が完了するのに、あと三日ほどと見積もられている。それを待つて、各艦隊はパラオを発つ。

さて、当のパラオ泊地提督である榊原は、パラオ泊地の医務室に足を向けていた。

トラック攻略戦時の最前線基地だけあって、パラオの医療施設は整っている。病棟のベッドの数も多い。

その病棟の一室。真新しい白の扉の前で、榊原は深呼吸をする。制服の乱れを整えて、扉をノックした。

この時ほど、緊張することもない。しばらくして、中から返事があった。

「どーぞ」

随分と投げやりな返事が、部屋の主の機嫌を如実に示していた。

——「……やっぱり、怒ってるか。」

半ば予想していたことである。それだけの覚悟をもって、榊原は扉を開けた。

部屋の内装と同じ純白のベッドには、パリッと糊のきいた患者服に

身を包む、パラオ泊地秘書艦がいる。明らかに不満げな表情の彼女は、入室してきた榊原を半目で見つめていた。

「何の用？このクソ提督」

——相変わらずだな。

元気そうで何よりである。

「執務が一通り終わったから、顔を出そうと思ったんだ」

「顔を出す前に、あたしをここから出さないよ」

曙はそう切り返した。

「どこに怪我があるわけでもなし、さっさと秘書艦に戻しなさい。作戦終了後で、ただでさえ書類が多いでしょうが」

こうして投げやりな言い方をしても、心配するのは榊原のことだ。責任感が強いというのか、単に世話焼きというのか、榊原としてはむず痒い限りだ。

「それは心配ない。摩耶が手伝ってくれてる」

「ふーん。．．．あつそ」

なぜか、曙の機嫌が急降下を始めた。

艦隊の帰還から一日。曙がこうして病棟の一室に押し込められているのは、榊原が念を入れたためであった。曙自身は強硬に大丈夫だと言い張っていたのだが、彼女は榊原の前で一度倒れており、心身ともに大きな負荷がかかっていたのは間違いない。数日間の休養がてら、榊原は彼女に入院を命じたのだ。

曙のことだ。体が何ともなければ、榊原の下で秘書艦業務をやらうとするはずだ。こうでもしなければ、彼女にゆつくりと休養を取らせることができない。

目の前の彼女の様子を鑑みるに、榊原の判断はあながち間違いではなかったようだ。

大破した「曙」の艦体の方かというと、四番浮きドックに入渠している。強制活性化まで用いて、無理に艦体を維持したため、修復には相応の時間がかかると見積もられていた。

どっちにしろ、彼女には十分な休息を取るだけの時間がある。

「思えば、これだけゆつくり休めるのは、パラオに来て初めてじゃない

か？」

「そーね。暇で暇でおかしくなりそうだわ」

「まあ、そう言わないでくれ」

榊原は苦笑するしかなかった。本当に、真面目な艦娘なのだ、彼女は。榊原も脱帽である。

「今度は、もう少し普通の休みが取れるといいんだけど」

病棟に押し込められていては、本当にゆっくりするしかない。休息らしい休息とは、言えないだろう。

榊原の言葉に、曙はしばらく黙ったままだった。やがてゆつくりと、その口を開く。穏やかな、包み込まれるような声は、彼女がときおり見せる優しきだった。

「いつか取るわよ。全員揃って」

「・・・そうだな」

全員で。曙の言った「全員」には、パラオや『IF作戦』参加艦艇だけではなく、戦いに赴く艦娘たち、そして提督たちも含まれているような、そんな気がした。

「クソ提督の奢りで、どっかバカンスね」

せめてもの誤魔化しのように、曙はそっぽを向いて言った。榊原の苦笑が益々大きくなる。

「それまでに、予算を貯めておかないといけないな」

榊原の切り返しに、患者服の天使が温かに微笑んだ。

「甘い奴だ、お前は」

しばし曙との雑談を楽しんで、病室を後にした榊原に、棘のある声が入りこみ刺さった。こんな言い方をする知り合いを、榊原は一人しか知らない。

丁度榊原が差ししかかろうとした廊下の曲がり角、妙に様になる寄りかかり方で、第一種軍装の男が立っていた。細いその双眸が、榊原を捉えている。

清水はおもむろに動き、榊原の前に立ちはだかる。相変わらず、その視線からは何を考えているのか、読み取ることはできなかった。

なぜ、ここにいるのか。榊原が尋ねるのを遮るかのようには、清水が口を開いた。

「お前には先に言うておく。近いうちに、俺はパラオ泊地の提督になる」

あらゆる思考が、一瞬のうちに吹き飛んだ。榊原は思わず目を見開く。

「お前が提督に!?!」

「何か問題があるか?」

問題はない。何を考えているのかわからない清水だが、頭は切れるし、状況判断能力も高い。それは、第五期生の同期として、榊原もよく知ることだ。艦娘たちを指揮する提督として、これほど適任な人物もいまい。

とはいえ、清水は現在連合艦隊司令部付きの将校であり、その能力は司令部のような、作戦そのものを統括する組織において最も発揮されるはずだ。そのことは、清水も理解しているはずである。

榊原の疑問に答えるように、清水が話を続ける。

「長官に具申して、認められた。いくら秋山中将のお墨付きとはいえ、お前一人にこのパラオを任せておくのは荷が重すぎる」

「だが、お前の実力は、司令部の中でこそ発揮されるべきだろう」

「新米少佐の意見など、司令部での扱いには高が知れている。で、あるならば、現場の指揮官になった方が、戦局に与える影響は大きい」

なるほど、一理ある。清水が言うのと、妙な説得力があった。

「そもそも、俺の志望は提督だった」

「そうだったのか!?!」

初耳である。いや、そもそも清水は自分のことをまず喋らないし、榊原やあの相模も、積極的に踏み込もうとはしない。司令部配属と聞いた時も、勝手に清水の第一志望が通ったのだらうと思っていた。

——成績がいいからといって、第一志望が通るわけではない。

あの噂は、本当だったのだ。

「主席は、司令部から声がかかるらしい。過去の首席は、全員司令部付きだ」

そんなことも知らないのかと言いたげな様子で、清水は言った。彼の話は続く。最大の用件は、どうもここまでのことではなかったらしい。

「本題はここからだ」

清水はそう切り出した。

「お前、養成学校時代に、機密情報の持ち出しをしたらどう。いや、パラオの提督になってからも、か」

「・・・知ってたのか」

まあ、この男に限って言えば、それほど驚くほどのことではない。そもそも機密情報は、司令部の管轄だ。司令部付きの清水なら、それを知る手はいくらでもあるはずだ。

もつとも、清水がそのことを、上に報告している可能性はゼロに近い。そんな不合理なことを、この男がするはずがなかった。

「実行は相模だろう。あいつなら、そういうのは得意なはずだ」

意外と、同期をよく観察している奴だ。

「だが相模は、今回の作戦が終わった時点で、ルソンへの配備が決まっている。お前は、以後の機密情報入手するルートを、開拓しなくてはならない」

榊原は沈黙のまま、清水の言葉に耳を傾けている。だんだんと、この主席の言わんとしていることがわかってきた。

「俺なら、それができる」

つまり、そういうことなのだ。

少し考えればわかることだ。榊原の周囲で、司令部管轄の機密情報へと繋がるルートを見つければ、清水からしか辿ることはできない。

「俺は司令部付きだ。機密情報に触れるのは相模より容易いし、そのためツテもある」

どうだ？そう問いかけるような視線が、榊原よりも少し高い位置から向けられた。

——是非もなし、だな。

清水が何を考えているのかはわからないが、何の理由もなくこんな

ことを言いだす奴じゃない。

「お願いしたい」

「・・・そうか」

清水の返事は、やはりそっけなく、静かなものだった。

「俺は、お前とは違う。俺にとってBOBと艦娘は、不完全な兵器ではない。感情という不確定要素を持った、人類最後の希望だ」

「・・・」

「残念だが俺には、彼女たちを人間と同じだと思うことはできないし、扱うこともできない」

それは、清水の一方的な呟きだった。言葉を挟むことはできず、榊原は彼と対峙していた。

「だが、目的は同じだと思っている。目指すところは、全ての提督と——お前と同じだと思っている。だから、俺はお前や彼女たちと共に戦う」

それだけ言い切った清水は、話はこれで終わりと、踵を返す。その背中に向かって、榊原は少しだけ、言葉を投げかけた。

「彼女たちは艦娘だ。一人一人が、たった一つの意思を持っている。想いを持っている。だから、彼女たちは俺たちの仲間だ。人間と同じ、頼れる戦友だ」

それを、お前もわかってくれると信じている。最後の言葉は、喉から出る前に飲み込んだ。今の清水には、きつと届くことのない、榊原の私的な願いだったからだ。

清水は振り返ることなく歩いていく。その行く道は、まだまだ榊原とは遠いものなのだろう。

「・・・やっと思ったか」

そんな呟きと共に、物陰からひよっこりと顔を出したのは、相模だ。清水の方を見て、「桑原桑原」と手を合わせる。

お前もどこからやってきた、というツツコミは、この悪友に対して野暮でしかないので、榊原はしないことにした。

「難儀な奴だ、まったく」

清水が消えた廊下の先に向かって、相模は呆れたように溜め息を吐

いた。

「ああいう友人を持つってのも、大変なものだ」

「・・・友人、か」

相模の何気ない言葉を反芻するように、榊原は呟く。果たして、俺たちと清水は、友人と言えるのだろうか。

「確かに、友人だな」

「そうだよ」

何の躊躇いもなく、相模は笑って肯定した。

形の違いはあるにしろ、三人が三人とも、同じ目標に向かって進んでいる。表現の違いはあるにしろ、三人はお互いの存在を強く意識している。

「ま、何にしろよかったじゃないか、機密情報持ち出しの同志が見つかって」

「結構最初の方からいたんだな、お前」

「こういうのは得意なんだよ」

相模はひらひらと手を振った。

二人の将校は、どちらからともなく歩きだす。日本は梅雨の季節だが、ここパラオの廊下に差す光は今日もいい日和だ。染み一つない白い廊下に、二人分の足音が木霊する。

「で、どうだった。お前の初期艦は」

「元氣そうだ。無理矢理医務科に押し込んだから、恨まれてるかもしれないけど」

「お前って、やることがたまに強引だからなあ」

「ひとのこと言えないだろ」

「まあな」

相模が笑う。

「彼女によりしく伝えておいてくれよ。できれば、素面の時に会いたかったが」

「・・・わかった」

相模は、まもなくルソン警備隊の配属となる。おそらくもう二度と、パラオ泊地を訪れることはない。次にいつ会えるのかは、お互い

にわからなかった。

「元気でやれよ、相模」

「何だよ、まだ早いって。後三日はここにいるんだぞ」
「そうだな」

二人は医務室を後にする。西に傾き始めたパラオの太陽が、前途多難な若き将校を励ましていた。

二人ノ提督

「ねえねえ、そこゆく将校さん」

パラオ泊地の食堂で夕食を終えた塚原の背後から、聞き覚えのあるおどけた口調が聞こえてきた。最早、誰かなどと聞かなくてもわかる。塚原の同期であり、猛将と名高い女性将校を、彼は振り向いた。「なんだ、角田」

「ちよつと塚原、もうちよつと気の利いた答え方はできないのかな？」
角田は黒髪を揺らしてへらへらと笑っている。以前は癩に障つたものだが、今は特に気にはならない。慣れというのは恐ろしいものだと、塚原は常々思っている。

「うら若き美女が、君に話しかけてくれたんだよ？もつとこう、『どうしましたか、お嬢さん』みたいなことは言えないのかな？」

こいつは。角田はこういう奴なのだ。

「・・・用がないなら行くぞ」

こいつにはこれで十分だ。踵を返した塚原を、角田は苦笑しながら引き留めた。

「ごめんごめんって」

その仕種に、作っている様子は微塵もない。これを天然でやっているのだとしたら、全くもってタチの悪い奴だ。比叡の気苦労が知れる。

——俺の皺が増えたら、間違いなくこいつのせいだ。

溜息を吐きながらも、結局この同期の話を聞いている自分は、余程のもの好きなのだろうか。

「で、なんだ」

足を止め、角田を振り返る。彼女の顔には、いつもと変わらない朗らかな笑みが浮かんでいた。

「話、聞いてくれるんだ」

「俺がお前の話を聞かなかったことがあるか？」

「たまに無視して、どっか行こうとするよね？」

「結局、お前が強引に聞かせるだろうか」

こめかみの辺りを押さえない衝動を押し殺す。角田の笑みは益々大きくなった。

「いいから。さっさと用件を言え」

何かを誤魔化すように、塚原は角田を急かす。

「ああ、うん。そうだね」

話を始めようとした角田が、ほんの一瞬言い淀むような間があったことを、塚原は見逃さなかった。角田には珍しい。そしてこいつが一瞬言い淀むような時は、大抵深刻な内容であることも、塚原は知っている。

表情に出ないように気を付けながら、塚原は内心を引き締めた。

チラリ。角田が周囲に目を遣り、もう一度塚原を見据える。

「えっと、塚原に相談があるんだけど」

「・・・相談？」

角田の口から、まさかそんな言葉が出てくるとは思わなかった。

「そう。相談」

「珍しいこともあるもんだな。明日辺り、大雨になるんじゃないか」

「茶化さないでくれよ」

角田が可愛らしく頬を膨らませる。

「いいぞ。俺が聞いて、解決できるようなことなら」

「うん。ありがとう」

これまた珍しく、柔らかな笑顔で角田は微笑む。妙に気恥しくなった塚原は、わずかに視線を外して、尋ねる。

「場所を移すか」

「・・・その方がいいかもね」

角田の同意を受けて、塚原はどこかに手隙の部屋がないかと、廊下を歩き始めた。

見つけたのは、多目的室と表札の出ている部屋だった。中はペンギンやら謎の雲やらのぬいぐるみらしきものが詰まった段ボールが一杯だ。中から鍵がかけられるので、丁度良かった。

「海側か」

夕食を終えても、パラオの太陽はまだ沈んでいなかった。大きく西に傾いた陽の光が室内に差し込んでいる。海側に面した窓から、オレングジに染まった海面がよく見えた。

窓際に立った塚原の横に、角田も寄せる。二人は揃って、海を眺めていた。

「えつと・・・話を始めてもいいかな」

わざわざ確認を取るような間柄でもないのに。やはり何か、非常に重い案件らしかった。

「ああ」

塚原は短く答える。それを受けて、角田が口を開く気配がした。

「今回僕たちは、トラックにある深海棲艦の拠点——つまり艦隊の整備を行うための港湾施設を破壊し、同方面での深海棲艦の活動を抑えることを目的とした」

「そうだ。遊撃部隊を率いたお前は、施設の破壊に成功し、さらに建設途中だった飛行場も撃破した」

作戦の要を、角田は十二分に果たしたのだ。

むしろ塚原としては、状況が状況だったとはいえ、敵機動部隊の殲滅まで遊撃部隊に依頼してしまって、申し訳ない気持ちもある。否、申し訳ないとは思っていないが、いらぬ手間は増やしたかもしれない。

「うん・・・。そう、だね」

塚原の答えに、角田は曖昧な影を落としたまま頷いた。横顔からは、それしか窺えない。角田が抱えているものは何なのか、相談の内容はどんなものなのか、塚原には掴めなかった。

待つしかない。今、角田が話してくれることを待つしかない。この同期を急かす必要がないことは、塚原が一番わかっていた。

案の定、角田が悩んでいた時間は、さほど長くなかった。夕陽の空を見つめたまま、角田は告げる。

「違うんだよ、塚原」

「・・・何がだ」

何が、違うと言うんだ。

「トラックの港湾施設を破壊したのは、僕たちじゃない」

塚原は我が耳を疑った。それくらいに、角田の言葉は衝撃的だった。だが、その驚きを大っぴらに表に出さないだけの精神力を、塚原は持ち合わせているつもりだ。

意図的に軽く息を吐き、角田に尋ねる。

「どういうことだ」

夕陽から目を逸らすように塚原を捉えた角田の双眸は、橙色の困惑に染まっていた。

「僕たちが水道に突入した時には、すでにほとんどの港湾施設が破壊されてた」

普段に見られない、淡々とした口調で、角田は語る。

「最初は、一機艦の第一次攻撃が、破壊したのかと思った。でも、違うよね？一機艦は、あくまで敵艦隊誘因のために、トラックに強襲をかけたに過ぎない。あそこまで徹底的に港湾施設を叩く余裕はなかったはずなんだ」

「その通りだ」

現に塚原は、第一次攻撃の目標を、敵警戒艦隊に集中するよう指示を出していた。敵機動部隊に備えるのが第一であり、そのための戦力を温存しなければならなかった以上、目標を警戒艦隊か港湾施設のどちらかに絞る必要があった。

「第一次攻撃隊の報告によれば、基地港湾施設には『彗星』隊の半数程度が攻撃をかけたただけだ。その攻撃は、ドックに集中している。以降、港湾施設への攻撃は行っていない」

「やっぱり、そうだよね」

この答えは、角田も予想していたらしい。

「話はそれだけじゃないんだ。環礁内に突入するまで、僕たちが受けた襲撃は一回だけ。それも、まるで残存のかき集めみたいなの、小さな部隊だった」

「・・・それも、おかしな話だ」

第一次攻撃前、黎明を狙ってトラック環礁に放たれた偵察機は、最低でも六つの警戒艦隊が展開していたことを確認している。いずれ

も重巡や大型軽巡を中心とした部隊だ。

第一次攻撃隊が叩いたのは、この内の三つだ。戦果報告では、一つの警戒艦隊を撃滅し、二つに大きな損害を与えている。撃沈したのは、重巡三隻、軽巡二隻、駆逐四隻だ。つまり深海棲艦のトラック艦隊は、少なくとも後四個警戒艦隊分の戦力は残していたことになる。それなのに、遊撃艦隊は、襲撃をわずか一回しか受けなかったというのか……？

「考えられる可能性は、一つしかないと思うんだ」

オレンジが益々強くなった陽光の中で、角田は指を一本立てる。その先に彼女が何を言おうとしているのかは、塚原も理解することができた。

「考え得ることは一つだけだ。」

「トラック沖には、僕たちと深海棲艦以外にも、少なくとももう一つの勢力がいた。おそらく、機動部隊が」

角田の確信に満ちた指摘に、塚原は頭の中で地図を広げる。

一機艦が実施した索敵の範囲、予想される「もう一つの勢力」の空襲可能半径、一制艦とトラック戦艦部隊の戦闘海域、それらを加味すると、正体不明の機動部隊の居場所を、おおよそ予測することができる。

「トラックの南方面海域が、手薄だ。いたとしたらそこだな」

「そう。でね、もう一つ重要かもしれない情報があつて」

吹雪は、その艦隊のことを知っていて、何らかの連絡手段も持っている。

これには、塚原も眉をひそめて、怪訝な表情になった。

「吹雪は、敵警戒艦隊が何者かによって撃滅されていたことを、知っていた」

「なるほど。警戒艦隊を撃滅した何者かから連絡を受けていたから、そのことを知り得た」

「そういうことになるね」

塚原はあごに手を当て、考える。

「……大出力の電波は、連絡手段に使えないな」

そんなことをすれば、吹雪の乗っていた「川内」よりも前に、「比叡」や一制艦の戦艦群が電波を捉えてしまう。とすれば他の手段だ。

「使うなら航空機、あるいは潜水艦か」

「待つて待つて、航空機？潜水艦ならともかく、これ見よがしに遊撃艦隊に迫ってくる航空機があつたら、僕たちも気づくよ？」

「帰還する第一次攻撃隊に紛ればいい」

角田が目を見開く。

「・・・その手があつたか」

「まあ、今となつては、どんな手段で連絡を取つたのか、確かめようがないけどな」

それはひとまず置いておこう。塚原の気になることは、他にもあつた。

「もう一つ気になるのは、仮にもう一つの勢力が機動部隊だつたとして、艦隊の拠点はどこにあるか、ということだ」

機動部隊参加の空母は、そのほとんどが本土の鎮守府に所属している。そのうち、「蒼龍」、「飛龍」、「千歳」、「千代田」の四隻はインド洋攻撃に参加しており、「翔鶴」、「瑞鶴」はカタパルト設置を含めた改装中だ。トラックを叩くことはできない。

現在本土に残っているのは、練習空母の「鳳翔」と軽空母の「龍驤」だけであり、当然この二隻の搭載数では、トラックの港湾施設を壊滅させることなどできない。航空の専門である塚原の計算では、トラックの港湾施設を一日で壊滅させるために必要な艦載機は、正規空母二隻分は必要はずだ。

この時点で、塚原は火力部隊による港湾施設の破壊を可能性から除外している。火力部隊が角田たちよりも先にトラックに突入しようとするなら、一機艦の索敵網にかかるはずだ。

「正規空母を運用するなら、それなりの施設と設備がある。それに、護衛艦も必要だ。それだけの施設を持つている泊地や基地は、かなり限られてくる」

現在、トラック周辺——つまり南太平洋の防衛を主に担っているのは、日本海軍だ。米海軍は、ルソンに基地航空隊と、オーストラリ

アに警備艦隊がいる程度となっている。

「・・・いずれにせよ、その艦隊の母港は、南太平洋にある可能性が高いねえ」

角田が言った。

「確かめる方法があるかもしれない」

塚原の脳裏に、ある方法が浮かんだ。

塚原は、艦隊を預かる提督だ。不確定要素は減らしたい。正体不明の艦隊が、何を目的としているのか。その目的が、塚原たちと一致するなら、重要な戦力となるかもしれない。

まず何にしろ、その艦隊の居所を突き止める必要がある。

「ルソン警備隊のあいつに、頼んでみたらどうだ」

「あいつって・・・卓己くんのこと？」

「そうだ。ルソンは、南太平洋で一番大きい索敵能力を持っている。正体不明の艦隊がトラック周辺を活動域とするなら、また現れた時に捕捉することも可能なはずだ」

卓己中佐は、塚原たちの同期だ。成績ははずば抜けて高かったわけではないが、高い語学力と対話能力を買われて、米軍との共同運用となるルソンを任されていた。基地航空隊ともパイプのある彼なら、ある程度融通を利かせてくれるかもしれない。

「で、卓己くんには何て説明するの？」

「ありのままを話すしかないだろう。あいつは、そういうのを無暗に公言するような奴じゃない」

「まあ、そうだよね」

角田は頷いて、夕陽に再び目を向ける。太陽はすでに半分以上が水平線に消えていた。

「話してもいいか。卓己に、今お前が言ったことを」

——わざわざ確認することでもないのに。

今日の俺は、やはりどこか変だ。

「いいよ、もちろん」

角田は了承した。

「さて、どうやって伝えに行くか、考えないとな」

塚原の提案に関する問題はそこだった。この案件は、直接ルソンに伝えに行くしかあるまい。だが塚原には、そんなことをすることはできなかつた。

考え込む塚原に答えを示したのは、隣に立つ角田だった。

「・・・あるよ、伝える方法」

「何？」

「もう二人、この話に巻き込むことになるけど」

「もう二人？」

太陽は完全に海の向こうへと消えた。訪れた夜闇の中、角田の語った方法に、塚原は大きく目を見開く。だが、その提案に賛意を示した。

見エザル機動部隊

パラオ泊地の食堂も、さすがに夜が更けてくると静まっていた。夕食後、食堂のいたる所で、別れを惜しむかのようにおしゃべりを楽しむ艦娘たちの姿が見えた。早い艦娘では、もう二日後にはパラオを発つことになる。姉妹艦同士、あるいは仲のいい者同士、別々の鎮守府に所属していることが少なくない艦娘たちは、積もる話に花を咲かせたり、静かに酒を酌み交わしたりと、思い思いの時間を過ごしていた。

その艦娘たちも、今はまばらだ。代わりに、パラオの静かな夜が、食堂に満ちている。

そんな食堂の一角で、榊原と相模は談笑していた。ルソンへの配属が決まっている相模は、最も早い帰還組だ。横須賀に戻った後は、すぐにルソンへと移ることになるそうだ。

清水にも声をかけたのだが、彼は来なかった。ちなみに清水も、最も早い帰還組だ。

「しっかし、驚いたな。まさか清水も、提督になるなんて」

欠席したことで、必然的に清水の話題となった。相模はコップの麦茶を煽る。これがお酒なら格好が付くのだが、生憎相模の持ち込んだ酒は一本だけで、それも作戦前に角田大佐によつて飲み干されてしまっていた。

「あいつなりに考えあつてのことだろう」

そう言つて自らも麦茶を煽つた榊原は、二杯目の麦茶を注ごうとした。と、その手がやんわりと止められる。見れば、榊原たちの腰掛ける机の横に、見知った将校が立っていた。

塚原大佐だ。反射的に立ち上がるとうとする二人の様子を悟つたかのように、塚原はそれを手で制した。

「二人に差し入れだ」

浮かしかけた腰を戻した二人の前に、塚原は一升瓶を差し出す。

「“赤城”の艦内に取つておいたものだ。飲まないか」

「ありがたく、いただきます」

若干の戸惑いを覚えながらも、二人は塚原の厚意をありがたく受け取ることにした。隣の机から椅子を引いてきた塚原は、そこに腰掛ける。榊原は、さつきまで麦茶を飲んでいたコップを持って立ち上がり、洗って、塚原の分も持って戻ってくる。

「開けますよ、塚原さん」

相模が塚原から一升瓶を受け取り、開ける。それを三つのコップに注ぎ入れた。

乾杯。塚原が小さく言って、控えめにグラスを鳴らす。クイツと煽った透明な液体が、脳天に心地よい熱を伝えた。

「まずは、作戦ご苦労様。初参加で、色々大変だったと思うが、よくやってくれた」

「いやあ、自分は何もしてないですよ」

塚原の労いに、相模が苦笑する。その言に、塚原は不敵に笑っていた。

「謙遜だな。あの広瀬さんが託した情報を、的確に捌いたのは君だ。東郷長官も感心していた」

作戦においては、情報の取捨選択が最重要事項だ。が、そうした情報処理能力に優れた人材というのは、なかなか得難いものである。その点、相模は元々の思い切りの良さと勘の鋭さもあってか、情報を瞬時に取捨選択できる能力がある。性格は大雑把だが、こと情報の収集や分析に関しては、同期の中でもトップクラスだった。

「榊原君もそうだ。一制艦が戦線を持たせたのは、君と大和の活躍があったからだ。機動部隊を預かったものとして、感謝している」

「い、いえ。自分は何も……。あそこで踏ん張れたのは、ひとえに大和のおかげです」

恐縮した榊原を、塚原はジッと見つめていた。やがてその端正な表情が破顔する。低く抑えた控えめな笑い声が、その容姿によく似合っていた。

「つくづく、謙遜なやつらだ、君たちは」

塚原は相模が注いだ二杯目を呷る。

「これからの戦い、今回よりもさらに厳しいものになる」

塚原が言外に含んだ意味に、榊原も相模も気づいている。

今回の作戦は、トラック攻略戦の前哨戦に過ぎない。遊撃艦隊によってトラックには敵航空基地が確認された。深海棲艦が何を目的にしているにしろ、その戦力を陸上にも振り向けることが可能だということが判明したのだ。トラックを奪還する戦いは、これまでになく激しい戦いになる。

それだけではない。トラックを攻略した先に待つのは、深海棲艦最大の拠点、ハワイの開放。そこに展開する敵艦隊もまた、強力無比なものだ。解放には、より一層の困難が予想される。

自然と、二人の背筋は伸びた。

「我々提督にとっても、そしてもちろん艦娘たちにとっても、厳しく辛い戦いが続く。その時、必要とされるのは、君たちだ。艦娘たちに寄り添う、若き提督たちだ」

塚原の頭が、ゆっくりと下がる。

「どうか、彼女たちをよろしく頼む」

それは、同じ提督としての、懇願に近い言葉だった。榊原も相模も、伸びた背筋のまま、はつきりと返答をする。

「はい」

これは、決意だ。提督として、艦娘たちと歩んでいく、確たる意志。二人の返事に、塚原は満足げな微笑みを浮かべていた。

食堂の人影は、いよいよまばらとなる。艦娘たちは会話の場を大浴場へと移しつつあり、食堂に残ったのは、ついに榊原たちだけとなった。

三杯目を注いだ塚原が、人気のなくなったのを確認したかのように、体をわずかに前に傾けて、再び話し始めた。

「実は、二人に内々に、頼みたいことがある」

——内々に・・・？

およそ塚原の口から出たとは思えない言葉に、榊原はクエスチョンマークを浮かべた。一方の相模はというと、早速興味津々といった様子で、話を聞く姿勢に入っていた。

「ある艦隊を、探してほしい」

「『ある艦隊』？」

塚原のぼかした表現に、榊原は首を傾げた。

「正確には、艦隊かどうかもわかっていない。なにせ、誰も見たことがないからな。が、論理的に推察すれば、艦隊、それも機動部隊である可能性が非常に高い」

「その、根拠というのは？」

塚原は語りだす。角田から受けた相談の内容。トラック環礁への予想以上の損害。壊滅した敵警戒艦隊。それらを精査した結果、その存在が浮かび上がってきた『もう一つの勢力』。

榊原も相模も、終始唾然として聞いているしかなかった。

「今ある情報は、これで全てだ。ここから、俺たちはトラック沖にもう一つ、艦隊が存在していた可能性が高いと考えている」

「・・・他国の艦隊、例えば米国のBOBである可能性はないんすか？」

相模はすでに臨戦態勢だ。軽い受け答えのようだが、今頃その情報処理能力は、フル回転しているはずだ。

「それはないな。米国艦隊には、『IF作戦』の詳細を知る術はない。『IF作戦』の内容を正確に知っていなければ、こちらの索敵範囲を予測し、そこから逃れて極秘裏に行動することは不可能だ」

「では、作戦立案に関わった、海軍上層部と繋がりのある遊撃部隊、ということですか」

「そうなるだろう」

相模の質問が止まる。それを見て、塚原が話の続きを始めた。

「その艦隊は、トラック周辺——南太平洋を活動拠点にしている可能性が高い。接触を狙うなら、そこしかない。そこで、二人に協力をお願いしたい」

榊原は、頭の中で地図を広げた。

南太平洋は、日本からオーストラリアを結ぶ数多くの島々を含め、非常に広大な範囲になる。それらの各所には、日本やアメリカ、オーストラリアなどが運用する警備隊や基地、泊地が点在していた。

その中でも特に規模と重要度が大きいのが、パラオとルソンだ。前者は言わずもがな、南太平洋における最前線であり、後者は対豪航路

やインド洋航路を守る、輸送路の砦だ。また、ルソンに関しては、アメリカとの共同運用という観点でも重要度が高い。

そのいずこかに、機動部隊運用の拠点を設けることは、十分に可能はずだ。

——大体、やりたいことがわかってきた。

榊原、そして相模が選ばれた理由を。

榊原はパラオの提督であり、相模はルソンへの転属が決まっている。横須賀所属の塚原なら、そのくらいは知っているはずだ。

「トラック戦は、最低でもあと一回、生起する。その時、今回のような不確定要素は取り除いておきたい。それに、個人的な興味もある。正体不明の艦隊は、なぜその姿を隠しているのか。秘密裏に進めなければならぬような、重大な「何か」を持っているのか」

何とも言えない沈黙が場に広がった。

「・・・協力の内容を、教えてください」

榊原が口を開く。塚原は頷いて、詳細を話し始めた。

「まずは、艦隊を捕捉しなければならない。そのためには、ルソン警備隊の協力が不可欠だ。そこで相模少佐には、ルソンで指揮を執る卓己中佐に、今回の件への協力を打診してほしい。彼には、余すところなく情報を伝えても大丈夫だ」

「わかりました」

「艦隊発見後の行動は、迅速に頼む。理想は二人に接触してもらおうことだが、位置によってはどちらか片方で構わない。最終的に、お互いに情報が共有できればそれでいい」

——俺と相模が、塚原さんの目となり耳となる。

どこにいても知れない艦隊を探し出し、接触する。一筋縄ではないかない任務だ。

「動きがあれば、「赤城」の通信室に、俺宛てにして連絡をくれ。暗号の組み方は、出港前に残しておく」

塚原は説明をそこで切り上げ、殊更真剣な口調で最後に言った。

「無理は承知だ。だが、どうかよろしく頼む。これは俺の勘でしかないが、正体不明の艦隊が、これからの戦いに大きな影響を与える気が

してならない」

塚原が去った後、温まったかもよくわからないうちに風呂を上がった榊原と相模は、濡れた髪のまま無造作にタオルを首にかけ、作戦室の海図と睨み合っていた。時刻はすでに十一時を回り、庁舎に人影はないが、念には念を入れて、誰かに気付かれないよう部屋の電気は極力落としてある。広げた海図の南太平洋の辺りが、辛うじて見えるくらいだ。

「さて、と。どこから探すか」

のん気な声で相模が言った。

実は、二人ともすでに、重点的に搜索すべき範囲には目星をつけている。何も言わなかったが、恐らく塚原も、同じ海域を念頭に入れて話していたはずだ。でなければ、わざわざ相模に声をかけた理由が見当たらない。

塚原は、どうしても、ルソンの卓己に、今回の情報を伝えたかったのだ。

「どうしても、ルソンが——フィリピンが必要だった」

「その心は？」

呟いた榊原に、相模がおどけて尋ねる。一切淀みなく、榊原は答えた。

「フィリピンの近くにあるんだ。最も探すべき場所が」

「あるな。思いつきり怪しい海域が。通常船どころか、BOBまで進入禁止の危険区域、だっけか」

「確か、深海棲艦の襲撃率が異様に高い、魔の海域って言われてるんだったよな」

「そうだ」

二人が見つめるのは、フィリピンの南方にある海域だ。深海棲艦の出現時から、幾度となく船団が襲撃され、BOBの艦隊をもつてしても侵入が危険とされる、死の海域。

いつからか、そこは『Z海域』と呼ばれるようになった。

「よく見ると、危ないところにあるなあ、ルソン警備隊」

両者の位置関係を確認した相模が、苦笑交じりに言った。ミンダオよりはいくらか遠いとはいえ、十分に近距離と言える。

「だが、どうやってZ海域を搜索する？ 確か、航空機も進入禁止になっていた気がするが・・・」

「まあ、その辺は俺に任せとけって」

そう言っつて胸を張る相模に、妙に納得してしまう自分がいる。こいつなら、どうにかこうにかして、なんとかするのだろう。

「卓己中佐がどんな人かは、会ってみなくちやわからないけど。少なくとも、理解のない人じゃない。あの塚原さんが、協力を打診しようと思う人だしな」

「違うない」

それから二人は、熱心に議論を重ねる。最終的な索敵計画がまとまった時、時刻は午前一時に迫ろうとしていた。

摩耶「閑話だぜ」

パラオから、艦隊が去っていく。

「飛鷹」と「五十鈴」の出渠を受けて、連合艦隊各艦は、各々の所属する鎮守府へと帰還を始めた。その第一陣はすでに三日前、パラオ泊地から出港したところだった。

清水と相模は、この第一陣で本土へと帰還することになった。それと、塚原麾下の機動部隊もだ。別れを名残惜しみながらも、榊原は水平線の向こうへと小さくなっていく艦影を見送り続けた。

一方の第二陣は、ルソンから本土へと向かう船団を護衛するため、損傷のない軽巡や駆逐艦を中心としている。その指揮を執るのは、角田だった。

今まさに、内火艇で沖の「比叡」へと向かおうとしている先輩将校と、榊原は埠頭で対面していた。第二陣の艦娘たちも、その横に整列しており、それと向かい合うようにして、手隙のパラオ泊地艦娘たちも立っていた。榊原の隣には、病棟から出てきた曙が立っている。

「短い間だったが、世話になった」

普段とは打って変わったきびきびとした声で、角田が敬礼する。身の引き締まる響きに満ちたその声に、榊原も敬礼で応える。お互いに手を降ろした時、角田が破顔した。

「まあ、また会うことになるだろうけどねえ」

「そうですね」

角田ほどの将校が、トラック戦に参加しないことはあり得ない。いずれ、もう一度実施させるであろうトラック攻略戦、その時にまた会うことにはなりそうだな。

——その時は。

その時は、一艦隊を任される提督として、参加したい。そのための努力を誓うように、榊原は角田に言った。

「道中、お気をつけて」

「うん、ありがとう」

角田は朗らかに笑っていた。

艦娘たちが、次々と内火艇に乗り移っていく。その中には、比叡の姿もあった。角田の右腕たる彼女とこの数週間のうち随分と親しくなった大和は、一抹の寂しさを浮かべた目で、たった一言「お元気で」と言った。比叡もまた、「手紙書くからね」と笑う。

内火艇が離れていく。パラオ沖に停泊した各艦に、艦娘たちを送り届けるのだ。小さくなっていくその姿に、榊原たちは大きく手を振る。振動で内火艇が揺れるのではと思うほどに、去りゆく艦娘たちもブンブンと手を振っていた。

やがて、その姿も小さく、見えなくなる。わずかな痺れを感じる右手を降ろし、榊原はポツリと呟いた。

「これで一段落、か」

熾烈を極めた『IF作戦』第一段階は、今まさに終了した。だが、全てが終わったわけではない。トラックを解放する戦いは、まだ続くことになる。

あくまでこれは、戦いの一段落。いずれ訪れる嵐の前の、静かなる嵐に過ぎない。

「何が一段落よ、たく」

隣の曙が、榊原にだけ聞こえる声で罵る。腕組みをして海を見つめるその横顔に、相変わらず容赦はない。いつも通りの秘書艦の姿が、そこにはあった。

曙が言外に込めた意味を、榊原はわかっている。

散々悩んだ末、榊原は曙にだけ、塚原から託された極秘任務のことを話した。秘書艦であり、聡明な彼女には、いずれ気づかれてしまう。だったら、最初から協力を仰いだ方が賢明だ。

面倒くさいものを引き受けたものだ、と嘆いていたが、曙は協力を承諾してくれた。

「なあ、おい」

何とはなしに海を眺めていたパラオ泊地の面子の中で、最初に口を開いたのは木曾だ。自然と、全員の意識がそちらに向いた。

「そう言えば、川内はどこへ行っただんだ？」

「あ？川内？」

摩耶が沖に目を凝らすのに倣って、榊原も泊地の海を見つめる。

最も大きな艦は、角田の乗艦であり第二陣を指揮する「比叡」だ。旗艦らしい威風堂々たる艦影に、丈高い艦橋がよく栄える。新型戦艦

——「大和」型のテストベッドとして各種新機構が採用されており、どこことなく「大和」艦橋に似た風情があった。

その横には、軽空母の「瑞鳳」がいる。船団護衛に欠かせない、エアカバーと対潜哨戒の要だ。平甲板型のため、艦橋は庇のように前に突き出た飛行甲板の下にある。

その他は、軽巡一隻と駆逐艦五隻だ。彼女たちも、同じように泊地沖に停泊している。

その、残った軽巡というのが、川内だった。

先程並んだ第二陣参加艦娘の中に、川内の姿はなかった。てつきり、もう乗り込んでいたのかと思っていたが……。

「どこほつつき歩いてんだ……?」

「呼んだ?」

剽軽極まりない声は、どこかから突然聞こえてきた。

「おわっ!」

木曾の叫び声が聞こえた。見れば、驚いて仰け反った顔の横から、キラキラという擬音が聞こえてきそうなもう一人の少女が覗いている。二つに結んだ黒髪に、ささやかな髪飾り。何より、風になびく長い純白のマフラーが目を引いた。

名乗らずともわかる。川内だ。

どこから沸いて出てきた。

「さすがは、歴戦の夜戦ニンジャ」

当の木曾は、驚嘆とも呆れともとれる、気の抜けた声で言った。満面の笑みを、川内は浮かべている。

「まあねえ。隠密行動と肉薄は水雷戦隊の基本だから。ていうか木曾、私の気配に気づかないなんて、ちよつと気が抜けてんじゃない?」

「やかましい。ていうか、その位置で話をするな」

「はーん」

顔をしかめて苦言を呈した木曾の前に、川内が出てくる。本当に、

自由奔放な、軽やかな艦娘だ。

「もう、川内さん置いていかないでくださいよ」

そう言つて、川内の後を追つてきた影がある。小柄な第一種軍装に、頭の後ろで結ばれた髪が揺れていた。

「遅いぞ、吹雪ー。最近鈍つてるんじゃないかー?」

「鈍つてるとか、そういう問題じゃないですよ」

「鬼の初期艦様はいずこへ」

「一度もそんな二つ名もらったことないです」

駆けてきた吹雪は、乱れた衣服を整えて、榊原たちの前に立つ。

「すみません、お騒がせしました」

「いえ・・・」

そんなことはありません、とは言えないのが、榊原が榊原である所以だ。

吹雪が苦笑いを浮かべていた。

「短い間でしたが、お世話になりました」

吹雪と川内が、鮮やかに敬礼する。それに、榊原以下のパラオ泊地所属艦娘たちが応えた。それぞれの視線が数瞬交錯した後、各人の右手が下がった。

「また、お会いしましょう」

榊原は吹雪に向けて言う。結局、今回は彼女と、あの時以上に話をすることはできなかった。まだ、吹雪と話したいことがある。知りたいいことがある。

彼女は何のためにここに来たのか。

——彼女と、対等に話せるだけの何かを、今の俺は持っていない。塚原から頼まれた正体不明の艦隊の存在すら、吹雪は知っているのだ。

何を成そうと言うのだろうか。

何を目指そうと言うのだろうか。

今の榊原には、想像することも、触れることすらもできない。何かを、吹雪は持っている。

榊原の言葉に、吹雪は困った笑顔を見せた。

「どうでしょう。以降の『IF作戦』に、私は参加を予定してませんか」

これには、榊原も驚いた。吹雪は、このままこの『IF作戦』を、最後まで見届けるものだと思っていたのだ。それが、秋山と彼女の意志であると、吹雪自身も語っていた。

「なぜですか？」

榊原が問いかける。

話が長くなりそうなることを悟ったのだろう。川内や摩耶たちは、それぞれで開き始めた。川内は、埠頭に着けた自らの内火艇に駆け寄り、乗り込む。

ただ一人、曙だけは、律儀に榊原の横に残っていた。

人が捌けたのを横目で見遣って、吹雪は口を開く。あの夜と同じ、微かな笑みが口元にあった。

「私が直接来る必要がなくなった、と言えはわかるでしょうか？」

そんな言葉と共に、愛らしく首を傾げる。その意味は、もちろん榊原にもわかった。

「吹雪さんや秋山中将と同じ考えを持った誰かが、このトラック戦に関わるんですね」

「半分正解、でしょうか。むしろ、彼の考え方は、私たちと逆とも言えるかもしれません。ですがだからこそ、彼は私たちへの協力を申し出てくれました。トラック戦という、一つの大きな転換点を、見つめることを」

——…まさか。

思い当たる人間が、いる。否、榊原以外に適任な人物は、彼を置いて他にない。しかし、彼が吹雪に協力を申し出たということが、榊原には意外でならなかった。

「そういうわけですから、もしかしたら、次に会うのはずっと後のことになってしまいかもしれませんね」

「…そう、ですか」

少しばかり残念ではある。

「その代わり、と言ってはなんですけど」

言葉が続けた吹雪は、両目を細めて悪戯っぽく微笑む。どこか大人びた艶やかさすら感じる口元だ。

そういえば、と榊原の意識は吹雪の容姿に向かう。駆逐艦娘たちが、こぞつて顕現した時の容姿——十代前半頃の姿のままなのに対し、艦娘ではなくなったという吹雪は十代後半相当の背丈や顔立ちをしており、軽巡や重巡の艦娘に近い印象を受ける。丁度、艦娘でなかった三年間分、成長したかのように。

吹雪が榊原に歩み寄る。その、甘やかな薫りが、鼻孔をくすぐるほど近くに。

「司令官から託された資料を、榊原少佐にお渡しします」

吹雪が榊原の右耳に囁く。

「資料・・・？」

「執務室に、鍵をかけて置いてあります。開けるためのパスワードは、然るべき時が来れば、わかるはずです。『その時が来れば』、きつと貴方の助けになります」

『その時が来れば』。いったい何の時が来ると言うのだろうか。

吹雪の顔が離れる。相変わらずの朗らかな笑みを湛えて、海を背景に立っていた。黒に輝く髪が、吹き抜けた風に揺れる。

「私は、艦娘の起源を探しています。私たちは——私はなぜ、この世界に現れたのか」

よく通る澄んだ声で、吹雪は自らの目的を告げる。

「今回、確信しました。私の探しているものは、トラックにあることを。いずれ、その眠りが覚めることを」

涼しい風がもう一度吹く。潮の香りを孕んだ空気が三人を包み、辺りのざわめきを消し去った。笑顔のままの吹雪をジッと見つめて、榊原も曙も沈黙を保っている。

「吹雪——早く——」

やがて、内火艇で待ちくたびれたらしい川内が、吹雪を呼んだ。

「そろそろ、行かないといけません」

「・・・また会える日を、楽しみにしています」

「はい」

短く答えた吹雪は、再びこちらへと歩み寄り、今度は榊原ではなく曙の方へ顔を近づける。唇を左耳に寄せて、何かを囁いているようにだが、榊原には聞こえなかった。

曙の顔が、みるみる朱に染まっていく。

「ば、バツカじゃないのっ!？」

ナニを言われたのか知らないが、曙がものすごい勢いで反駁した。

「あはは、曙ちゃん真っ赤になってるよー」

吹雪は無邪気に笑っている。初めて見る表情だ。

「この・・・っ!」

掴みかかろうとした曙の手からヒラリと身軽に逃れて、吹雪は内火艇に向かっていく。彼女が飛び乗るのを見計らったように、艇は静かに埠頭を離れた。

艇上の二人が、手を振っている。榊原と曙も、それに振り返りて見送った。

吹雪たちの乗り込みを確認したのだろう。第二陣の各艦が動き出す。駆逐艦二隻を先頭にして、「川内」や「比叡」、「瑞鳳」が続いていく。戦いを終えたBOBたちが、飛沫を散らしながら、泊地の外へと滑り出ていった。

「・・・行ってしまったか」

これで、本当に一段落だ。

しかし、戦いが終わったわけではない。いずれ始まる、新たな戦いに向けて、榊原たちは備えなければならないのだ。

水平線の向こうに消え行く艦影を見つめる。パラオ泊地を海上に照らし出す太陽は、遙かな高空から、榊原と曙を見守っていた。

「ちなみに、さっきは何て言われたんだ?」

尋ねた榊原に、曙が無言で蹴り（結構本気）を入れた。

艦艇「データファイルI」

艦艇「データファイル」(第一次トラック沖海戦)

艦艇「データファイル」(第一次トラック沖海戦)

◇パラオ泊地所属艦娘

「曙」

全長・・・一八メートル

全幅・・・一〇・四メートル

排水量・・・一七一〇トン

速力・・・三四・七ノット

五〇口径一二・七センチ連装砲三基

六一センチ三連装魚雷発射管三基

二五ミリ連装機銃四基

一三ミリ単装機銃四基

神原の初期艦であり、パラオ泊地の現秘書艦。艦娘たちの中でも古参の部類に入り、経験、練度とまずは抜けている。口調は厳しいが、基本的に面倒見がよく、提督就任後間もなくしてパラオ泊地の提督長となった神原を支えている。料理はできる。

「摩耶」

全長・・・二〇三・八メートル

全幅・・・二〇・四メートル

排水量・・・一万三四〇〇トン

速力・・・三四・三ノット

五〇口径二〇・三センチ連装砲四基

四〇口径一二・七センチ連装高角砲六基

六一センチ四連装魚雷発射管四基(次発装填装置あり)

二五ミリ三連装機銃十六基

二五ミリ連装機銃六基

一三ミリ単装機銃十基

零式水上偵察機二機

零式水上観測機一機

パラオ泊地唯一の重巡洋艦。大雑把な性格だが、こと対空戦闘に関しては誰よりも緻密で強力。旗艦になることを拒むが、理由はまだ明かされていない。料理はできない。

〃木曾〃

全長・・・一六二・一メートル

全幅・・・一四・二メートル

排水量・・・五二三〇トン

速力・・・三五・八ノット

五〇口径一四センチ単装砲五基

四〇口径一二・七センチ連装高角砲一基

五〇口径七・六センチ単装高角砲二基

六一センチ四連装魚雷発射管二基（次発装填装置あり）

二五ミリ連装機銃八基

一三ミリ単装機銃八基

零式水上偵察機一機

個性的なパラオ泊地の水雷戦隊を率いる軽巡洋艦。面倒見はいい方だが、駆逐艦については放任主義を取っている。北方警備に就いていた際の迷彩がお気に入り。料理はできる。

〃満潮〃

全長・・・一一八・〇メートル

全幅・・・一〇・四メートル

排水量・・・二〇〇〇トン

速力・・・三五・〇ノット

五〇口径一二・七センチ連装砲三基

六一センチ四連装魚雷発射管二基（次発装填装置あり）

二五ミリ連装機銃四基

一三ミリ単装機銃六基

パラオ泊地三大ツンデレ駆逐艦の二人目。仲間を守ることに関しては人一倍敏感であり、そのために被弾することもしばしば。佐世保時代に仲のよかった扶桑や山城から、時折心配の手紙が届く始末。パ

ンは焦げる。

〃霞〃

全長・・・一一八・〇メートル

全幅・・・一〇・四メートル

排水量・・・二〇五〇トン

速力・・・三四・八ノット

五〇口径一二・七センチ連装砲二基

六一センチ四連装魚雷発射管二基（次発装填装置あり）

二五ミリ三連装機銃四基

二五ミリ連装機銃六基

一三ミリ単装機銃二基

パラオ泊地三大ツンデレ駆逐艦の三人目。横須賀時代には曙と行動を共にしていた。呉転属後は駆逐艦たちのリーダー格を務めており、パラオでも秘書艦で忙しい曙に変わって駆逐艦の面倒を見ることが多い。料理はできる。

〃陽炎〃

全長・・・一一八・五メートル

全幅・・・一〇・八メートル

排水量・・・二〇〇〇トン

速力・・・三五・〇ノット

五〇口径一二・七センチ連装砲二基

六一センチ四連装魚雷発射管二基（次発装填装置あり）

二五ミリ三連装機銃二基

二五ミリ連装機銃四基

一三ミリ単装機銃二基

パラオ泊地初期六人の中では最も顕現が遅いが、呉時代に霞が相当鍛えたため、練度は確か。基本的に気分屋のため、一度やると決めたらとことんやる。ぶつ切りならでできる。

〃長波〃

全長・・・一一九・三メートル

全幅・・・一〇・八メートル

排水量・・・二〇七七トン
速力・・・三五・〇ノット
五〇口径一二・七センチ連装砲三基
六一センチ四連装魚雷発射管二基（次発装填装置あり）
二五ミリ連装機銃二基
一三ミリ単装機銃二基

敵強攻偵察部隊戦時に邂逅。水雷戦を愛する駆逐艦の中の駆逐艦。手先が器用であり、彼女の描いたラフスケッチが、パラオ泊地艦隊のシンボルマークとなっている。料理は多分できる。

〃大和〃

全長・・・二六三・〇メートル
全幅・・・三八・九メートル
排水量・・・六万五〇〇〇トン
速力・・・二七・〇ノット
四五口径四六センチ三連装砲三基
六〇口径一五・五センチ三連装砲四基
四〇口径一二・七センチ連装高角砲六基
二五ミリ三連装機銃十二基
二五ミリ連装機銃四基

零式水上偵察機四機

零式水上観測機三機

大出力船魂召喚儀式——大型建造により顕現。戦艦らしい威厳はあるが、普段はおつちよこちよいな一面も。着任時の出来事をきっかけに、榊原に好意を寄せる。料理はプロ級。

〃祥鳳〃

全長・・・二〇五・七メートル
全幅・・・一八・二メートル
排水量・・・一万二二〇〇トン
速力・・・二八・〇ノット
四〇口径一二・七センチ連装高角砲四基
二五ミリ三連装機銃十基

二五ミリ連装機銃八基

蒸気カタパルト一基

零式艦上戦闘機二十四機（補用三機）

九七式艦上攻撃機六機

パラオ泊地の航空戦力として、呉より転属になった。『加賀』と共に、カタパルトを試験装備している。小悪魔っぽいところがあり、好みどストライクだった榊原を狙っている。料理は嫁級。

『卯月』

全長・・・一〇二・七メートル

全幅・・・九・一メートル

排水量・・・一三一五トン

四五口径一二センチ単装砲四基

六一センチ三連装魚雷発射管二基

一三ミリ単装機銃二基

トラック沖襲撃戦時に邂逅。自由奔放がそのまま服を着たような艦娘だが、周囲の機微に敏感。時に、持ち前の明るさで周りを気遣うこともある。料理は食べる専門。

◇その他登場艦娘

『吹雪』

全長・・・一一八・〇メートル

全幅・・・一〇・四メートル

排水量・・・一六八〇トン

速力・・・三五・〇ノット

五〇口径一二・七センチ連装砲三基

六一センチ三連装魚雷発射管三基

一三ミリ単装機銃二基

人類が最初に邂逅した艦娘。現在は艦体を失っているものの、横須賀の秘書艦として秋山を補佐する。艦娘と深海棲艦の存在に迫る謎を追っている。艦娘としての曙の教官。料理だけでなく、家事、掃除から雑務まで何でもこなす、最強の秘書艦。

『赤城』

全長・・・二六〇・六メートル

全幅・・・三一・三メートル

排水量・・・三万六五〇〇トン

速力・・・三一・二ノット

五〇口径二〇センチ単装砲六基

四〇口径一二・七センチ連装高角砲六基

二五ミリ三連装機銃五基

二五ミリ連装機銃十四基

零式艦上戦闘機三十機（補用十二機）

艦上攻撃機「天山」三十機（補用十二機）

日本海軍機動部隊を率いる大型航空母艦。鳳翔と並び、最古参の空母艦娘でもある。横須賀の塚原大佐麾下の艦隊所属であり、日々航空戦の研究に勤しむ。ご飯には目がない。

「比叡」

全長・・・二二二・二メートル

全幅・・・三二・〇メートル

排水量・・・三万二一五〇トン

速力・・・二九・七ノット

四五口径四一センチ連装砲四基

四〇口径一二・七センチ連装高角砲十基

二五ミリ三連装機銃十四基

二五ミリ連装機銃八基

零式水上偵察機一機

零式水上観測機二機

角田大佐麾下の高速打撃部隊を率いる高速戦艦。本人はお姉様ラブなのだが、角田がことあるごとに絡んでくる。塚原大佐と並ぶ苦勞人。彼女に料理をさせてはいけない。

「川内」

全長・・・一六二・二メートル

全幅・・・一四・一メートル

排水量・・・五二〇〇トン

速力・・・三五・〇ノット
五〇口径一四サンチ単装砲五基
四〇口径一二・七サンチ連装高角砲一基
五〇口径七・六サンチ単装高角砲二基
六一サンチ四連装魚雷発射管二基（次発装填装置あり）
二五ミリ連装機銃八基
一三ミリ単装機銃六基
九八式水上偵察機一機

横須賀の水雷戦隊を率いる軽巡洋艦。曙の元上司にあたる。夜戦をこよなく愛する、自他ともに認める夜戦バカ。実は女子力高め。

〃長門〃

全長・・・二二四・九メートル
全幅・・・三四・六メートル
排水量・・・三万九二〇〇トン
速力・・・二五・四ノット
四五口径四一サンチ連装砲四基
五〇口径一四サンチ単装砲一八基
四〇口径一二・七サンチ連装高角砲六基
二五ミリ三連装機銃十基
二五ミリ連装機銃八基
零式水上偵察機一機
零式水上観測機二機

現日本海軍連合艦隊旗艦。陸奥と共に艦娘側の代表として司令部に出向することが多く、横須賀所属と言うより連合艦隊直属の向きが強い。料理などしない。

〃吹雪〃型（〃白雪〃、〃初雪〃、〃深雪〃、〃叢雲〃、〃磯波〃）

全長・・・一一八・〇メートル
全幅・・・一〇・四メートル
排水量・・・一七〇〇トン
速力・・・三四・三ノット
五〇口径一二・七サンチ連装砲二基

六一センチ三連装魚雷発射管二基

二五ミリ三連装機銃五基

二五ミリ連装機銃六基

一三ミリ単装機銃四基

吹雪の姉妹艦たち。元は別の鎮守府だったが、吹雪の意向で横須賀に集められている。新型兵装等の試験艦的役割も果たしており、練度も高い。料理はできたりできなかったり。

始まりの話

全テノ始マリ

彼女の——いや、彼女と俺の話をしよう。

それが、全ての始まり。三年に亘る、艦娘と深海棲艦の戦いの始まりだった。世界は、俺と彼女が出会ったことで、回り始めたのだから。

*

海は、変わってしまった。

海上自衛隊護衛艦「あけぼの」の見張り所から海を眺めながら、秋山真好一尉はそんなことを思っていた。

「あけぼの」は、自衛隊の水上艦艇としては数少ない生き残りだ。第一護衛隊群に所属している。とはいえ、この第一護衛隊群もほとんど寄せ集めのようなもので、戦闘を生き残った数少ない護衛艦たちは、横須賀に身を寄せ合っている。

近海の哨戒任務から帰還した「あけぼの」もまた、かつての賑わいを失くした横須賀の埠頭に辿り着くべく、その歩を進めていた。

時刻は間もなく日付をまたごうとしている。最新鋭の電波の目があるとはいえ、この暗闇の中を進むのは薄気味が悪い。特に艦橋は、レーダー画面が無い分、目視でこの海を捉えている面が大きく、緊張感は益々高かった。

深海棲艦と名付けられた、正体不明の艦艇群が現れて、すでに二年。日本はそのシーレーンが大きく損なわれ、近海の制海権確保すら危ういほど追い込まれていた。

深海棲艦は強大だった。人類と深海棲艦の初邂逅にして最初の戦闘となったハワイ沖海戦では、第二次大戦級の旧式軍艦の姿を模した深海棲艦艦隊に、リムパック艦隊が敗北を喫した。わずかに、重巡二隻、軽巡四隻、駆逐艦六隻の艦隊にだ。各国の最新鋭艦が、なす術もなく次々と沈められていった。

なぜ、リムパック艦隊は、たかが旧式の軍艦に勝てなかったのか。それは、深海棲艦が、特殊な装甲で覆われているからだだった。

ブルーアイアンと仮称されるその装甲は、ミサイルや魚雷を被弾してもすぐに再生して破孔を塞ぐ代物だった。原理、製法等は全くもつて不明。現状、深海棲艦のみが運用可能な、特殊鉱物であると推察された。

このブルーアイアンのために、人類は深海棲艦を沈めることができなかつたのだ。生起した海戦ではことごとく敗れ、人類は海上でのその版図を急速に失っていった。たった二年で、この有り様である。

海上自衛隊も同じだ。日本の海を守ってきた護衛艦たちも、深海棲艦を沈めることができず、自らが愛してやまなかつた海に飲み込まれていった。

人類には、もはやかつての栄光を取り戻す力はなかつた。

「当直任務は冷えるな」

同じように見張り所に立つ広瀬武雄一尉が、身振りで寒さを表明する。

「そうも言ってもらえないだろう。この辺は変温層があるから、ソナーが潜水艦を捉えられないかもしれない」

「うちのソナーが、そんなへまはしないとと思うけどなあ」

「あけぼの」は、残存護衛艦の中では古参の部類に当たる。乗組員の習熟度も練度も高い。ソナーも、変温層の存在は十二分に把握し、対策を講じているはずだ。

だが、万が一ということもある。その万が一に備えるのが、秋山たちの仕事だ。

「こうしてると、静かな海なんだがな」

おもむろに双眼鏡を覗き込みながら、広瀬がポツリと呟いた。確かに、夜に包まれる目の前の海は静寂そのものであり、正体のわからない敵艦たちが跋扈している世界とは思えない。その先を考えることを、秋山は意図的に止めた。

双眼鏡で海を堪能し続ける広瀬と違い、秋山は何をするでもなく、ただ海面を眺めていた。上弦の月は夜空の低い位置にあり、波を照らしだすまでには至らない。それが、何とも侘しかった。

だから、秋山はそれに真っ先に気付いた。

「・・・何だ、あれは」

見つめていた海に、何かが見えた。月のきらめきとは違う。上手く言えないが、どちらかと言えば太陽からの反射に近いように、秋山には思えた。そんな光が、波の先に、一瞬きらめいた。

「どうした？」

双眼鏡を覗いていた広瀬が顔を上げたまさにその瞬間、世界は激変を始めた。

海上に閃光が走った。思わず目を覆ってしまうほど強烈な光に、秋山は目を細める。夜に慣れた目には、あまりに刺激が強すぎた。

「前方に光源！」

秋山は艦橋に向けて叫んだ。その艦橋には、CICからの報告が入る。視界が奪われたせいで、その声がよく聞き取れた。

『CICより艦橋！前方海域で爆轟音！聴音、何も聞こえません！』

——ソナーがやられた!?

秋山は本能的に身構えた。今この瞬間を狙われたら、*“あけぼの”*には魚雷を避ける術はない。

必死に目を見開き、前方——光源の方を見つめる。辺りを乳白色に染め上げた真昼の光は、不思議な波動を放って秋山の心を揺さぶる。どこか懐かしさすら感じるその光の中で、何かが形作られていく様子を、秋山の双眸ははつきりと捉えていた。

『前方に艦影！距離一万！』

艦橋にも、CICからの報告が上がる。艦影の位置は、丁度光源の辺りだ。

目が次第に慣れてきたことで、秋山は改めて前方の海域を視認する。そこには確かに、船らしきものの姿を認めることができた。

「前方に艦影見ゆ！」

再び、秋山は叫ぶ。何が起きているのかは全くわからない。ただ、あの光の中から、船が現れたという事実だけは、理解できた。

その始まりと同じく、光は急速に収束へと向かっていった。辺りを再び闇が覆うのに、大して時間はかからない。月の光が、その支配権を取り戻したのは、秋山が最初に光源を発見した時から、一分程度で

あった。

「・・・何だったんだ、一体」

広瀬と二人、ただ茫然としているしかなかった。

「艦橋よりC I C。艦影はまだ映っているか？」

艦長の中川一佐が、C I Cに問い合わせる。秋山も双眼鏡に取り付いて、先ほど艦影が見えた辺りを搜索し始めた。

『艦影一、前方に確認。動いていない模様。距離、九千』

「見張り、どうか」

尋ねられた秋山は、すぐに答えた。

「見えました。前方に艦影を確認」

「深海棲艦か？」

「灯火を落としているため、はつきりとはわかりません。ですが、識別表では見たことがない艦型です」

——いや、見たことがあるぞ。

秋山には心当たりがあった。それは、深海棲艦の戦術——すなわち、第二次大戦級の兵器について調べていた時。図書室からかき集めた資料の一つ。

『帝国海軍艦艇総覧』

かつて帝国海軍に所属していた艦艇たちを、写真や側面図などと共に紹介した本だった。その本の一ページに、目の前の艦影は酷似している。

主砲は、前部に一基、後部に二基。シユツとまとまった艦橋に、その後ろのマスト。二本ある煙突のうち、前にある一番煙突の吸気口は、キセル型となっている。そして何より、その艦を特徴づける三基の魚雷発射管が、甲板の中央に直列で並んでいた。

「おい、サネ」

秋山をあだ名で呼んだ広瀬もまた、それに気づいたらしかった。

「見張りより艦橋。前方の艦影は・・・吹雪型駆逐艦と思われます」

荒唐無稽としか思えない報告を、秋山は艦橋に告げた。

速力を落として正体不明の船——吹雪型駆逐艦に酷似した艦影

に近づいた。『あけぼの』から、内火艇が降ろされた。

中川艦長の判断で編成された臨検隊を指揮するのは、秋山だ。砲雷科と航海科から選抜された臨検隊は、謎の艦影にさらなる接近を試みる。

近づくことで、より一層そのデイテイルが鮮明になっていく。現代軍艦とは全く違った存在感を放っていた。それは、自らの目の前にいる敵と対峙するための、穏やかな闘争心に他ならない。かつて大洋を疾駆していた高速重武装駆逐艦の姿が、そこにはあった。

「ラツタルが見えます！」

航海科の一人が報告した。臨検隊を乗せた内火艇は、そのラツタルへと接近していく。駆逐艦の舷側に降ろされたラツタルに艇が横付け、臨検隊が甲板に上っていった。

前甲板に上りついた臨検隊を迎えたのは、小ぶりの連装砲塔だ。おそらく、五〇口径一二・七サンチ連装砲のA型。吹雪型駆逐艦のみが装備していた形式だ。

秋山も、写真でなら見たことがある。だが、よもや実物を見ることになるうとは、思いもしていなかった。

「臨検隊を二手に分ける。A班は甲板、B班は艦内を頼む」

号令で隊が二手に分かれる。秋山は艦橋をチラリと見遣り、A班の隊員二名に付いてくるよう目配せした。

『あけぼの』に比べれば小ぶりの艦橋だが、同時期の駆逐艦の中では大きい部類に入る。天蓋付きの羅針艦橋には、やはりラツタルで上る必要があった。

二名の隊員は秋山を挟むようにしてラツタルを上っていく。上りきった先頭の隊員が、小銃で周囲を警戒して、艦橋に立ち入る。秋山もそれに続いた。

「一尉！」

突然、先頭に立って羅針艦橋に入った隊員が、声を張って秋山を呼んだ。小銃を降ろして唾然としている彼の見る先を、秋山の視線も追いかける。

自らの両目が、一杯に見開かれたのがわかった。それほどの衝撃

が、秋山の目の前に横たわっていた。

羅針艦橋の床に、少女が寝ている。穏やかな寝顔で、スースーと心地よい寝息がリズムを刻んでいる。頭の後ろで小さく結ばれた髪が、それに合わせて揺れていた。年の頃は十代前半、中学生か高校生といったところだろうか。呼吸に合わせて、セーラー服から見える胸元が上下に動いていた。

これだけでも、十分に非現実的な光景だ。だがそれと同じくらいに秋山を驚かせたのは、寝ている少女の横で、何かを窺うようにこちらを見つめている小さな人影——まるで妖精のようなものの存在だ。よく見ると、あちらこちらにいる。この艦橋内だけで五、六人はいらるだろうか。あるものは物陰から、あるものは床の上に立ち尽くして、こちらをジッと見ている。

と、そのうちの一人に、後から入ってきた隊員の足が伸びた。ギョツとして、秋山は声を上げる。

「何をしている!」

その声で妖精が我に返り、隊員の足を避けた。間一髪だ。あと少しで、踏み潰すところだった。

隊員を睨む秋山に、当の彼は困惑の色を浮かべて尋ねた。

「あの・・・どうかしたのですか」

「どうかした、って・・・もう少しで踏みつけるところだったんだぞ!」その秋山の言葉にも、隊員は合点がいつていない風に視線を彷徨わせる。なぜ怒られているのか、全くわかっていない様子だった。

——まさか、見えていないのか?

もう一人の隊員も、妖精のようなものが見えている様子がない。少女の横にいる妖精を指差して、秋山は尋ねる。

「二人とも、あれが見えるか?」

「はあ、女の子です」

「違う、その横にいる、小さいものだ」

その質問に、二人は首を傾げるばかりだった。

——まさか、本当にこんなことがあるとは。

オカルトの類は全くもって信じていない秋山だが、まさか自らの身

の上に降りかかってくるとは。

「・・・すまなかつた、俺の勘違いだ。とにかく、”あけぼの”に連絡を入れてくれ。俺は彼女を起こしてみる」

気になることは山ほどある。それらを頭の隅に押し遣り、秋山は床でスヤスヤと寝ている少女の横にしゃがみ込んだ。それまで横に立っていた妖精が、秋山にスペースを空けてくれる。

呼吸があることは確認済みだ。後は意識があるかどうか。

「聞こえますか？」

肩を叩きながら、意識の有無を確認する。二回、三回。呼びかけ続ける。

「・・・んっ・・・ふあああ・・・ふう」

——意識がある・・・っ！

「大丈夫ですか？」

秋山の呼びかけに、ついに少女が、ゆっくりとその目を開いた。虚ろだった焦点が次第に合いはじめ、視線の先に秋山を捉え始める。

現状をうまく呑み込めなかつたのだろう。完全に目を開いた少女は、パチクリと瞬きをした。

「あの・・・えっと」

困惑している様子だ。秋山はまず、自らの名前と所属を名乗る。

「私は、海上自衛隊の秋山です。怪我はありませんか？」

「・・・海上、自衛隊・・・？」

意識がまだはつきりしないのだろうか。少女は小首を傾げた後、思い出したように答えた。

「あつ、はい。ケガとかはない、です」

それから、体を起こそうとする。反射的に、秋山はその背中に手を回して、補助をした。少女の言う通り、体のどこにも異常は無さそうだった。

「君の名前を、訊いてもいいかな？」

半身を起こして、興味深げに辺りを見回していた少女は、秋山の問いかけに若干の戸惑いを見せながらこう答えた。

「吹雪です。わたしは、吹雪といいます」

——こんな。

こんな偶然があるものだろうか。

正体不明艦が酷似している、かつての駆逐艦と同じ名前を、少女は名乗った。

艦娘、吹雪

吹雪、と名乗った少女と、秋山は対峙していた。まだ状況がよく呑み込めていないらしい彼女は、艦橋をきよろきよろと見回して、所在なさげにしている。何か飲み物があつた方がよかつただろうか、秋山は用意の悪さを悔いた。

そんな吹雪に、妖精の一人が近づく。やはり、秋山にははつきりとその姿が見えていた。うつすらと月光の差す艦橋で、吹雪は不思議そうに妖精の方を見つめていた。

「・・・見えますか。そこの、妖精が」

秋山が小声で尋ねると、吹雪はそれがさも当然のことのように頷いた。

「見えますよ」

「そうですか。どうも、見えない者もいるみたいです」

クリクリとした吹雪の目が、まん丸に見開かれた。

「・・・そんなことが、あるんですか?」

「理由はわかりませんが。少なくとも、この場で見えているのは自分だけです」

自分に見えているものが、他人には見えていない。その感覚をいまいち掴めないのは、秋山も吹雪も同じようだった。とにかく、説明のしようがないのである。何とも困ったものだ。

——それは、とりあえず置いておこう。

この手のオカルト的な現象には、何らかの科学的考証が入れられるはずだと、秋山は信じている。だが、それは秋山の専門ではない。

「あの・・・それで、秋山さん」

寄ってきた妖精を肩に乗せた吹雪は、また辺りを窺って秋山に尋ねた。

「ここは、どこですか?」

難しい質問だった。

「海の上・・・船の上です」

「船の上?秋山さんの船ですか?」

「いいえ。自分の乗っている船は、あそこに」

そう言つて、秋山は艦橋の窓から見える「あけぼの」を指差した。臨検隊から逐次入れている報告で、あちら側もこちらの状況は把握しているはずだ。何も言つてこないということは、今は秋山に任せられている、ということだろう。

「自分は、この船を調査するために、ここに来ました」

「・・・臨検、つていうものですか」

「そうです。よくご存じですね」

「いえ・・・」

感心している秋山に、吹雪は曖昧な笑みを浮かべるだけだった。

「吹雪さんは、この船について何かご存じじやありませんか？今のところ、貴女と妖精以外に、乗組員を見つけることができません」

問いかけた秋山に、吹雪は申し訳なさそうに首を横に振った。

「すみません、何も。なんで、自分がここにいいのかも、わからなくて」

——記憶喪失、つてことか？

一体、この船は何なのだろうか。

「そうですか・・・」

「えっと、この船は、どんな船なんですか？」

さて、どう答えたものだろうか。

記憶を失った人間に何かを教える時は、慎重にやらなければいけない気がした。

「自分たちも、わからないというのが本音です。任務からの帰還中、突然現れましたので」

「突然・・・？」

色々なことが、益々わからなくなつてしまった。

——失敗だったな。

目の前で眉を八の字に下げて困惑している少女を見て、秋山は自分の考えの浅はかさに思い至った。

ともかく。明らかに一般人の彼女を、これ以上この事態に巻き込みたくはなかった。

「吹雪さんの身柄は、*“あけぼの”*で保護します」

「本当ですか？」

「はい」

まずは彼女に、何か温かい飲み物でも。『あけぼの』の艦内なら、お茶やコーヒーはもちろん、インスタントのスープ類も取り揃えている。肌寒い夜にピッタリだ。

「もうしばらく、待っていてください」

「わかりました」

吹雪の目が、月光のようにきらめいた。

一人でいること。目覚めたら、見知らぬ船の中。いたいけな少女にとって、それは大きな精神的ストレスになりかねない。『あけぼの』なら、吹雪の話し相手になる女性自衛官——WAVEも多い。少しでも、彼女の寂しさを紛らわせるなら。秋山はそう願わずにいられなかった。

横須賀に着けば、彼女の身元も判明するかもしれない。なぜ、吹雪がこの船にいたのかはわからないが、今は一刻も早く、海から彼女を離すことが大切だ。

「二尉、この船はどうしますか？」

横に控えていた隊員が、小声で話しかける。

「艦長次第だが……現状で曳航するのは、得策ではないかもしれないな」

大幅に航路を邪魔しているわけでもないし、この船については、ここに放置していくしかないかもしれない。

「わかりました。船内から特に不審なものも出ていませんし、臨検隊に引き上げる準備をさせます」

「よろしく頼む」

隊員は、すぐに無線機を取り、船内を機関部の方へと向かったB班に通信を送る。了解の返事があり、臨検隊は撤収準備に入った。

秋山も、『あけぼの』の中川に状況を報告する。

「こちら臨検隊、秋山。不明船内から不審物は見つかりませんでした。撤収作業に入ります」

『了解した。今夜の曳航は断念する。見失わないよう、マーカ―だけ

残しておいてくれ』

「了解」

中川からの指示を受け、艦首にマーカー用の発信器が取り付けられた。潮の流れはほとんどないが、船の位置が動くことは十二分に考えられる。その時、マーカーの発信源をたどれば、いち早くこの船を見つげられるという寸法だ。

あらかたの指示を出し終えた秋山は、改めて吹雪に向き直る。

肩に乗せた妖精と共に、吹雪は不思議そうに臨検隊の動きを見ている。

「もうすぐ、内火艇にご案内します」

「あ、はい。お願いします」

この船に横付けされた内火艇は、臨検隊の帰還を待っている。小さな艇だが、帰りに少女一人と妖精たちを収容する余裕くらいはあった。

甲板の臨検隊A班が撤収を始めている。B班の方も、すぐに機関室から上がってくるとのことだ。艦橋内に残った二名の隊員にも、秋山は撤収を促す。

「あの・・・秋山さん」

そんな時、秋山を遠慮がちに呼ぶ声があった。

「どうかしましたか、吹雪さん?」

「これは、何でしょうか?」

吹雪が指差したのは、艦橋中央にぶら下がっているものだ。

肩紐が二本あることから、リュックのように背負うものだとわかる。設置位置からして、秋山のような大の男が背負うことはできない。それこそ、吹雪ぐらいの背格好の娘が背負うのに丁度いいだろうか。

大きさは、登山用のリュックよりも一回りほど大きい。ただ、形状が特殊だった。まるで煙突のようなものがベースとなる部分から伸びており、細いマスト状のものも付いている。側面には、やはり首か肩から提げられると思われる紐のついた、主砲塔のようなものが見えた。

およそ、無駄なものを極限まで削った船に据え置かれているものと

は思えない。決して広いと言えない羅針艦橋のかなりのスペースを、それは喰っているのだから。

「よくわからないんですよ。コンソールみたいなものかと思ったんですけど、それらしい働きをするようには見えません」

秋山の代わりに、それまで艦橋中央の物体について調べていたらしかった隊員の一人が答えた。

「・・・触ってみても?」

「大丈夫だと思いますよ」

興味が湧いたのだろうか。吹雪は恐る恐るといった様子で、物体に手を伸ばしていく。細くしなやかな少女の指が、金属を思わせる表面に優しく触れて、そつと撫でる。

刹那。船上を何かが走り抜けたような錯覚を、秋山は覚えた。

視界が真っ白に染まる。一時間ほど前、この船が現れた時の、太陽のような光ではない。秋山もよく知っている、それは人工的で刺すような白い光だ。

目が慣れるのに、さして時間は要さなかった。回復した視界の中で、さつきまで薄暗かった羅針艦橋を、はつきりとした光の中で捉えることができた。艦橋内に光が満ちている。

——一体、何が・・・

突然の出来事に呆気に取られていた秋山は、その耳に入ってくる音に気づくのに、しばらくの時間を必要とした。気づいた時には、その音は波の打ちつける音をかき消すぐらい、猛々しく頼もしいものとなっていた。

まさしく、この船の息吹。鼓動のような旋律。

『機関が始動準備に入っています!』

入れっ放しだった無線機に、B班から報告が入る。それまで一切の動きを見せず、沈黙を守ってきたこの船が、今その本性を現そうとしていた。

考えられる要因は、ただ一つ。

秋山が見遣った吹雪は、自ら手を着いた物体をじつと見つめていた。先までの——いや、これまでのどの視線とも違う。全てをわ

かつたうえで、彼女は物体を見つめ続けていた。

やがて吹雪は、おもむろに物体に背を向け、その肩紐をかける。

「……秋山さん」

覚悟を滲ませたかのような声で、彼女は秋山を呼んだ。

「思い出しました。わたしが何者か。何者であつたか」

すう。静かに呼吸を整えた吹雪は、前甲板を見つめて厳かに口を開いた。

「ブレイン・ハンドシエイク」

ブレイン・ハンドシエイク。精神同調。戦闘機や人型ロボットの制御システムとして研究がされていた分野だ。なぜそんな言葉を、彼女が呟くのだろうか。

「機関始動」

秋山は何も言えぬまま、黙って吹雪を見つめていた。

それまで、小さな鼓動でしかなかった音が、咆哮にも似た爆音を伴って大気を震わせた。紛う事なき、機関始動の音だ。この船全体を震わせたその音に、秋山もまた軽い身震いを覚えた。

『臨検隊、何が起きている！』

中川から、報告を求める声が届いた。秋山はとっさに決断を下す。

「臨検隊は直ちに離脱。俺がここに残る」

見届けなければならぬ。そんな気がした。

「現在、不明船の機関が始動。臨検隊は早急に離脱します」

『了解した。回収準備はしてある。早急に不明船から離脱せよ』

すでに撤収に入っていたA班に加え、機関部のB班も甲板を指し、駆け上がってくる。後は、艦橋に残った三人だけとなった。

「一曹」

「はい」

「俺はここに残る。艦長に状況説明を頼む」

一曹はしばらく逡巡した後、「了解」と答えて、艦橋を後にした。

いよいよ、残されたのは秋山と吹雪だけとなった。

「秋山さん。この船を曳航する場合、行き先は横須賀でいいんですか？」

「その通りです」

この時点ですでに、秋山は吹雪という少女とこの船の関係に、大体的見当をつけることができていた。彼女が、今から何をしようとしているかも。

「現在位置は把握できますか?」

吹雪は首を横に振った。

「あけぼの」に先導してもらえると、助かります」

当のあけぼのは、撤収した臨検隊を回収し、いつでも現海域を離脱できる用意を整えていた。今すぐにでも、この船を先導することは可能だ。

秋山は頷いて、再び無線機のスイッチを入れる。

「秋山より、艦橋。不明船は航行可能。あけぼの」による、横須賀までの先導をお願いします」

中川には珍しく、返答に時間がかかった。

『・・・了解。不明船を横須賀まで先導する』

あけぼのの艦尾が静かに泡立ち、艦が前進を始める。並行していた艦体が、完全にこの船を追い抜いたのを待って、吹雪が新たな動きを指示した。

「両舷微速」

何かが回転する音が、艦体を伝って艦橋にも聞こえる。心持ち、機関の音も高鳴っていた。

不明船の主機が、動き始めたのだ。

少しずつ、前へと進み始めているのがわかる。先導するあけぼのの後ろについて、船は横須賀を目指す航路に入った。

「秋山さん」

前方を見つめたままの吹雪は、静かに、それでいて機関の音に負けないように、話を始める。

「この船は、吹雪」といいます」

——やはり、そうなのか。

やはりこの船は、特型駆逐艦のネームシップ、吹雪なのだ。

「わたしは、吹雪」を一人で動かすことができます。そしてわたし

「私たち」は、

リンとした静けさが、艦橋の中に満ちていた。

「わたしたちは、深海棲艦と戦える、唯一の戦力です」

艦娘、ソシテ提督

深海棲艦に対抗可能な唯一の戦力。

そう名乗った吹雪との出会いから、二か月が経とうとしていた。

あの夜以来、秋山が吹雪に会う機会はなかった。初めて吹雪と会った人間とはいえ、一尉でしかなかった秋山には大した権限が与えられないはずもなく、基本的な彼女の対応はもつと上の人間が担っていた。

「吹雪」の艦体は、横須賀に停泊している。秋山もその様子だけは見ることができた。時折その艦影が見えなくなるあたり、沖合に試験運転でもしに行っているのかもしれない。

この二か月の間に、大きく変わったことがある。

陸海空、三つの自衛隊が解体され、あらたに陸海空軍が創設された。特に海軍——旧自衛隊の変化は大きい。「あけぼの」含めた旧護衛隊群は、海軍の中でも本土防衛艦隊に編入され、日本の最終防衛線としての役割を果たすこととなった。

そして、この本土防衛艦隊とは別に。「連合艦隊」と呼称される新たな艦隊が、創設された。

何を説明されずとも、秋山にはその艦隊の目的が分かった。

吹雪は、「『わたしたち』」と言った。すなわち、深海棲艦に対抗可能な戦力は「吹雪」だけでなく、他にもいるということだ。おそらく、「吹雪」と同じような、第二次大戦時の軍艦が。

連合艦隊は、彼女たちが所属することになるであろう。

人員は、旧海上自衛隊から引き抜かれていくことになるはずだ。できればその一人に、秋山も選ばれたかった。

海軍への改変に伴い、秋山が一尉から少佐——三佐相当へと昇進したのは、戦時特例に基づいたものだ。もつとも、その実は幹部となる人員が足りなくなっているからだろうか。

広瀬も昇進していた。それに伴い、彼は海軍情報部へ転属となっている。

秋山も、そのうち転属になる可能性が高い。叩き上げの前任伍長などと違い、尉官以上の幹部は転属が多いからだ。

そんな折、新たに設置された連合艦隊の司令部に、秋山は呼ばれていた。

真新しい廊下に、秋山の靴音が響く。設置されたばかりとあって、行き交う人は皆慌ただしい。丸めた大きめの書類をいくつも抱えた人や、山のような本を台車で押している人。敬礼を交わす間も惜しむように、秋山とすれ違っていった。

「……ここか」

目的の部屋を見つけた秋山は、表札を確認してノックをする。「連合艦隊司令長官公室」の扉が、心地良い音を立てた。

「秋山少佐、参りました」
「入れ」

ガチャリ。すんなりと開いた扉から、室内に入る。置かれたばかりらしい執務机に、第一種軍装の将校が腰掛けていた。

秋山もよく知っている。前第一護衛隊群司令、東郷源八郎大將だ。連合艦隊の創設にあたり、彼に司令長官のお声がかかったらしい。

「失礼します」

右手を軍帽のつばに合わせる秋山を、東郷はチラと見遣ったただけだった。

「秋山少佐。BOBの第一発見者、か」

「はい」

BOBとは、「青い海の戦艦」の略称で、二か月前に現れた「吹雪」のことを指す。ちなみに、BOBを操作することのできる吹雪を、艦娘と呼んでいた。

「回りくどいのは苦手だ。本題から行こう」

東郷はそう言つて、秋山をここへ呼んだ用件を話し始める。

「知つての通り、連合艦隊はBOB、ひいてはそれを操作する艦娘を中心とした組織だ。二か月にわたる慎重な調査の結果、艦娘は我々人類と何ら変わらない、肉体と精神を持つことがわかった」

執務机の上にある資料のうち一つが、秋山に示される。艦娘——
吹雪に関する調査報告書であるようだ。

「彼女たちは、深海棲艦と戦うことを使命としている。だが、強大な深

海棲艦と戦い、勝利するには、確かな戦術とそれを教え、指揮することのできる者が要だ。さらにいえば、たった一人で強大な軍艦を動かす彼女を、心理的にもサポートできる、人間的に優れた人物であることも求められる」

老練な光を帯びる東郷の双眸が、秋山を捉えている。ハワイ沖海戦を生き残った彼は、以後も多くの深海棲艦との戦闘に参加していた。言葉や眼力の端々に見える説得力が違う。

「吹雪が提示してきた条件は二つ。第一に、艦娘と同じように、BOBの乗組員たる妖精を見ることができること」

妖精を見ることができる人間とそうでない人間の違いは、結局まだよくわかっていない。仮説としては、可視光の領域が関係しているのではと言われている。すなわち、秋山のように妖精を視覚できるのは、常人よりも脳が認識できる可視光の領域が広いからとする説だ。実際、可視光領域外——赤外線では、妖精の姿を捉えることができなかったらしい。

「第二に、艦娘を愛し、艦娘に愛され、ともに戦うことのできる人物であること」

——うまい言い回しだ。

この一言で、吹雪はこれから現れるであろう艦娘たちの尊厳を守ったことになる。艦娘は艦娘。決して、人間が深海棲艦と戦うための道具ではない。自らの指揮官は、自らで選ぶ。彼女はそう宣言したのだ。

もしも、この文言を吹雪一人で考えたのだとしたら、彼女は非常に聡明であると言えた。

「私が知っている限り、この条件に合致するのは、秋山少佐だけだ。幸い吹雪も、初めて出会った少佐のことを慕っている」

東郷が何を言わんとしているのか。それを理解した秋山は、自然とその背筋が伸びるのを感じた。

「秋山少佐」

「はっ」

「少佐は、二階級特進の上、新設される横須賀鎮守府の指揮官に就任し

てもらおう」

東郷の言葉に、秋山は思わず目を見張る。

「二階級特進ですか!？」

「そうだ。少佐には——大佐には、連合艦隊最初の戦力を任せる」
後は現地に行つて説明を受ける。最後にそう言った東郷は、質問をしようとした秋山をさっさと室外へ追い出してしまった。

◇

「あけぼの」艦内の荷物を急ピッチでまとめ、秋山が横須賀鎮守府に着任したのは翌日のことだった。

深海棲艦の出現後、本国へと帰還してしまつた米海軍の基地施設を返還してもらつた跡地に、連合艦隊が使用する新たな鎮守府は建設されてきた。とはいつても、建物などの施設はほとんど使い回しだ。そのうちの、「鎮守府庁舎」と表札の掲げられた、ペンキ塗りの白が眩しい建物に、秋山は入つていった。

「秋山さんー」

入口に入るや否や、秋山を呼ぶ元気な声が聞こえた。二か月ぶりでも、忘れるはずがない。あの夜と変わらない姿で、彼女は秋山を出迎えてくれた。

「お久しぶりです。また会えてよかつた」

「ありがとうございます。わたしも、また秋山さんに会えて嬉しいです」

そう言った吹雪の顔には、思わず惚れ惚れしてしまうような満面の笑みが浮かべられている。秋山の表情も、自然と綻んでいた。

「荷物、お持ちします」

「大した量じゃないから、大丈夫ですよ」

「そうですか?じゃあ、秋山さんのお部屋まで案内しますね」

吹雪が先導する形で、庁舎の中を進んで行く。ここもやはり、連合艦隊司令部と同じように、人の行き来が多く、慌ただしい印象を受けた。やはり、一つ大きな組織を作るといふのは、それなりに手間も時間も人員もいるのだ。

「そういえば」

前を進む吹雪が、秋山を振り向いて思案顔で尋ねた。

「秋山さんが、わたしの指揮官になるんですよね」

「はい。そう聞いてます」

聞いたのは昨日であるが。

「それじゃあ、秋山さん、っていう呼び方もなんだかおかしいですね」「うーん、気にするようなことでしょうか？」

確かに、締まりがない感じはするのだが。かと言って吹雪に秋山大佐と呼ばせるのは、何だか堅苦しい。

「気にするようなことです。せつかくだから、カツコイイ呼び方がいいじゃないですか」

吹雪は何だかんだと楽しんでる様子だった。

カツコイイ呼び方、と言われても、秋山にはいまいちピンとこない。そもそも、吹雪にとってカツコイイとはどういうことなのだろうか。歩きながら、下唇に人差し指を当てて考える吹雪を、秋山は微笑ましげに見つめる。これでは、「真面目に考えてくださいー」と怒られてしまうかもしれない。

「あ、ここです。こちらが、秋山さんの私室になります」

吹雪が一つの部屋に案内する。「司令控室」の表札がかかったその部屋のノブを捻る前に、何かに思い至ったらしい吹雪が大きく柏手を打った。

「そうだ！司令官、っていうのはどうですか？」

「司令官……」

何だかむず痒い。つい先日まで……というか、つい昨日までは、あけぼのの一乗組員でしかなかった。それが今日から、一個艦隊にまで育つかもされない、新設艦隊の指揮官となるのだ。文字通り、吹雪の司令官として。

持って来た荷物を、これから秋山の自室となる部屋に置く。

——何をすべきか。それは、俺の足で歩いて、決めなければ。

「吹雪さん」

「はい」

早速探そう。自らがなすべきことを、この鎮守府で。

「鎮守府の施設を、案内してもらえますか？」

「あ、はい！もちろんです」

秋山のオーダーに、吹雪は笑顔で応える。

持っていた荷物を置いてきた分、身軽になって鎮守府内へと歩きだす。敷地は広い。ちよつとした散歩ぐらいの気分だ。

工場、補給所、装備保管所、ドック。一部工事中のそれらの施設を回りながら、吹雪が簡単な説明——特にさらなる艦娘との出会いについて、詳しく話してくれた。

曰く、新たな艦娘との邂逅には、二つの種類があること。そのどちらも、どんな艦娘と出会うことができるのかを、選ぶことができないこと。

「建造なら、資材が入るようになればすぐできますよ」

「開発資材、というのが必要なのは・・・？」

「わたしが持っています」

「吹雪さんが？」

「この間、試験航海中に見つけたんです。五個ぐらいありますから、開発にも使うとして、建造が二回はできると思います」

秋山の質問にも、吹雪は淀みなく応える。まるで、全ての答えを知っているかのような。どことなく違和感は感じたが、今はとにかく、彼女の話聞く必要があつた。

「あの・・・司令官？」

「？どうかしましたか？」

さつきまではきはきと説明していたのとは一転して、こちらを窺うような上目遣いで、吹雪は秋山を見つめていた。

「その・・・わたしのことは、吹雪って呼んでほしいです」

少しモジモジとしながら頼んでくるあたり、本当に見た目通りの、少女に変わりのない。秋山は微笑んで、吹雪の名を呼ぶ。

「吹雪」

「・・・はいっ！」

吹雪は満面の笑みで威勢よく返事をした。

最後に案内されたのは、鎮守府の埠頭だ。艦はほとんど泊まってい

ない。ただ一隻、秋山が邂逅した、唯一深海棲艦に可能だという「吹雪」のみが、静かにたたずんでいるだけだ。

「一隻だけだと、少し寂しいですね」

眉を八の字に下げて、吹雪が言った。

「そんなこと、ないですよ」

風が吹き抜ける埠頭を、秋山は「吹雪」に向かって歩いていく。

風は、「吹雪」の方から吹いてくる。被った軍帽を飛ばすほどではないが、強く、確かな風だ。そこに乗る潮の香りが、また何とも言えない風情を醸し出す。

風の中で、「吹雪」は静かに秋山と対峙する。艦体から溢れる決意にも似た雰囲気。駆逐艦としての心意気。

人類の希望。共に戦う、頼もしい仲間。

「司令官？」

「吹雪」を見つめ続ける秋山に、横に立った吹雪が不思議そうに声をかける。

「何でもないです」

そう答えながらも、二人は並んだまま、「吹雪」と向き合い続ける。内なる決意が滲み出ていることは、言うまでもないことだ。

◇

戦いが始まった。

深海棲艦と人類、そして艦娘。出会った提督と艦娘が、世界を新たな方向へと回していった。

そして、三年が経った今もまた――

異端者たち、探究者たち 休日ト改装

『IF作戦』の終結から早二週間。パラオ泊地には、穏やかな時が流れている。

今日も今日とて、頭上の太陽から燦々と光が降り注ぐ。文句なしの快晴だ。気温は高いが日本の夏ほどではなく、過ごしやすい日和と言えた。

が、パラオ泊地提督の榊原には、そんなものを気にしている暇などなかった。

「はい、提督。あーん♪」

店舗の外に並べられた、プラスチック製の白い簡易机。そこへ榊原と向かい合うようにして腰かける黒髪の美女が、いつそ清々しいくらいの満面の笑みで、スプーンに乗ったパフェのアイスを差し出してくる。ちなみに、本当にちなみにだが、それはさっきまで彼女がパフェを食べていたスプーンである。

——何なんだ、この状況は。

作戦前に海水浴へ行った時以上の何かを、榊原は感じていた。

加えて。その感情に拍車をかけるのが、私服姿の祥鳳の後ろに見える人影だった。あれで隠れているつもりなのだろうか、物陰からは、明らかにこちらを窺っている、長い茶髪がのぞいていた。

変装用に眼鏡をかけている大和は、榊原と祥鳳の方をジッと見つめていた。

——どんな拷問なんだ、これは。

溜め息を吐きたいのを、榊原はグツと堪えた。今日は、作戦前に約束していた通り、祥鳳と一日外出中なのだから。

「提督？どうしました？」

祥鳳は笑顔を崩すことなく、スプーンを差し出してくる。明らかに、大和が後ろで見ているのを知ってやっているらしかった。榊原の胃は、マツハで痛くなっていく。悲鳴を上げる時は近い。

「い、いや。何でもない」

「ならいいです。はい、あーん♪」

差し出されるスプーンの上のアイスを、おずおずと口にする。まさか提督になって、それもパラオ泊地に着任して、女性から「あーん♪」をされることになるとは、思いもしていなかった。

こんな時でも、アイスは冷たく、甘い。舌の上でとろける香りが、たまらなくおいしい。ここ最近食べていかなかっただけに、少し感動ものだ。

「うまいな」

「よかった。それじゃあ、次は提督のクレープをください」

「いいぞ」

榊原が差し出したクレープに、祥鳳は上品にかぶりつく。潤った唇に、生クリームが付いていた。それを拭き取る仕種も、大人っぽい艶がある。

何だかんだと思うところはあがあるが、一応榊原は、祥鳳との休日を楽しんではいた。

「今日はありがとうございました。楽しかったです」

帰りがけ、祥鳳はそう言って笑った。二人の手には、途中で寄った市場で仕入れた、今夜の食材が紙袋に入ってぶら下がっている。

「俺の方こそ、楽しかった。ありがとう、祥鳳」

榊原も笑う。祥鳳は照れたように、その頬を赤く染めていた。

「また行きましょうね」

「また〃、どこに行くんですか？」

二人の会話を遮る声は、パラオ泊地庁舎の正門の方から聞こえてきた。そろそろ沈もうかという太陽をバックに、まるで往年の刑事ドラマのようにして、長い髪がなびいていた。

大和だ。いつの間にか尾行をしなくなっていたと思ったら、やはり先に帰っていたようだ。

「た、ただいま、大和」

若干声が引きつりながらも、榊原は大和に呼びかける。薄くオレン

ジがかつた景色の中で、大和がニコリと微笑んだ。

「お帰りなさい、提督」

それから、ヒールの音も高らかに、榊原と祥鳳の方へ歩み寄ってくる。

海水浴の時にも感じた、あの嫌な予感が、榊原の脳内を駆け巡っていた。

「荷物、お持ちしますね」

ギユムツ

——…ジーズス。

事態は、案の定の方向へと動き出した。荷物を持っていた榊原の右手に、大和がピッタリと体を密着させてくる。おかげで、柔らかい超弩級のそれが、思いつきり榊原の二の腕に当たっていた。完全に確信犯である。

大和と祥鳳の間に、プラズマ放電が起こる様が見えた気がした。

「…提督、」

やはり、祥鳳は動いた。

「荷物が重いので、一緒に持つくれませんか？」

ムニユツ

——…おお、神よ。

空いていた左腕に、祥鳳が取り付いてくる。いつもと違う私服は、弓道着よりも薄く、祥鳳のたわわなそのの存在感を余すところなく伝えてくる。完全に確信犯であった。

「提督？大和は、今日一日、お二人がどこでどんなことをしていたのか、お聞きしたいです。今後の参考のために」

——今後の参考って、何だ…？

「二人で仲良く街を歩いたり、おしゃべりしたり、お買い物をしたり、ご飯を食べただけですよ」

祥鳳が答える。

「他には手を繋いでみたり、ちよつとイチャついてみたり、デザートを食べさせ合ったりしましたね」

根も葉もない、でつちあげである。…最後の一つを除いて。

「ふーん。．．．ふーん」

聞いていた大和も、一部始終は見ていたはずである。二の腕に押し付けられる胸の圧力が高まり、二人の間に散る火花は益々大きくなる。このまま燃料庫に近づけば、大爆発してパラオ泊地が消滅するかもしれない。深海棲艦万々歳である。

榊原は天を振り仰いだ。だれか、今の状態から自分を救い出してくれる者はいないのか、と。

彼の願いに応えてか、救いの手は颯爽と現れた。

「何してんの、あんたら」

呆れが多く混じった声と共に、往年の西部劇よろしく、大きな夕陽をバックにして立っている影があった。顔の右側から流れる群青の髪に、橙色の陽光がキラキラと反射する。榊原には、彼女が女神に思えた。

ゆっくりと三人の方へやってきた曙が、静かな目で榊原を見つめる。

「た、ただいま、曙」

「おかえり、クソ提督」

そう言った曙は、両目を細めてさらにこう付け加えた。

「両手に花でよかったじゃない」

この状況でなければ、榊原ももっと素直に喜んでいたかもしれない。

「ほら、いつまでもコバンザメみたいにくっついてんじゃないわよ。さっさと食堂に持って行く」

深い溜め息を吐いた後、曙は強引に大和と祥鳳を引き剥がし、荷物を持たせて食堂へせかす。駆逐艦とはいえ、さすがはパラオ泊地の秘書艦。有無を言わさぬ様子に、二人は渋々といった様子で、買ってきた食材を食堂に運んでいった。

「．．．助かった」

「．．．ふんつ、別に。クソ提督が祥鳳とクレープを食べさせ合おうが何しようが知ったこっちゃないわよ」

ばれている。

「で、ここからが本題。技師長が呼んでたわよ」

「そうか、わかった。わざわざありがとう」

「終わったら引っ張ってきなさい。あの人、何かに没頭するとすぐ他のこと忘れるから」

「そうするよ」

技師長の用件は大体わかっていた。榊原は、彼女が詰める工廠へと駆け足で急いだ。

夏川技師長の研究室は、電灯が最低限しか入っていないかった。というより、人の気配が全くしない。訝しみながらも、榊原は部屋の中に足を踏み入れた。

机という机に、資料が山のように積まれている。時折見えるスペースは、何かの作業場なのだろうか。パソコンが置いてあったり、謎の削りカスが散らばっていたり、ペンギンが鎮座していたり。不可解そのものであった。

「夏川技師？」

「・・・んあ？」

榊原の呼びかけに、間の抜けた返事があった。声のした方を覗き込むと、資料の山に埋もれるようにして、くたびれた白衣が動くのが見えた。やがて資料の山の向こうから、細身の眼鏡をかけた顔がのぞく。

一瞬、榊原は我が目を疑った。

「ああ、榊原君か。来るの早いねえ」

口調で辛うじて夏川だとわかる。榊原がこれほどまで驚いたのは、彼女の容姿だ。普段ぼさぼさの髪が、今日は綺麗に整えられ、肩口で揃っている。

榊原の視線に気づいたのだろう。夏川は照れたように髪をいじった。

「・・・やっぱり、似合わないかなあ」

「いえ、そんなことは。すごく、似合ってます」

「そうかな？」

髪をいじっていた手で頬を掻き、夏川は益々照れた様子で微笑する。

「ありがと。せっかくご招待にあずかったから、髪ぐらいは整えようと思ってねえ」

同じ工廠部の女性技師に切ってもらったらしい。逆に、普段はどうしているのかの方が気になってしまった。

こほん。場の空気を入れ替えるように、夏川は咳払いをした。

「それで、君を呼び出した用件だけ」

資料の山の頂上辺りに置かれていた書類の束を、夏川が榊原の方に放った。三つのクリップで止められたそれらのうち、一番上にあるものを榊原はめくる。

「まず、君に頼まれていた、二五ミリ機銃の改修の件。基礎研究が終わって本格的な改修作業に入れそうだから、その報告」

「終わったんですか」

夏川の仕事の早さに、榊原は目を見張った。

工廠で開発できる装備には、限界がある。そこで、開発された装備のさらなる性能向上を図るのが改修と呼ばれる作業だ。ところが、これがなかなか難しい。ブルーアイアンという人智を超えた金属でできている装備を、人間が望むように手を加えるのだから。

実際海軍工廠部は、三連装魚雷発射管を酸素魚雷に対応させるために、数か月という時間をかけている。魚雷発射管と機銃という違いこそあれど、夏川はその作業をわずか二週間で終わらせてしまったのだ。

「主な改修点は二つ。三連装や連装機銃座は、全銃身が同時に発砲する」

それまでの二五ミリ機銃は、各銃身が交互に撃つ仕様だ。これでは、せっかくの三連装でも弾幕が薄くなってしまう。これを、全銃身が同時に撃つ仕様に変更したのだ。

「そして、機銃指揮装置と連動した簡易計算機の搭載。これで、命中率は格段にアップするはずだ」

これはすなわち、機銃の指揮を手動から主砲と同じ機械式へ切り替

えたことを意味する。数基の機銃が同一目標に向けて同時に発砲するため、弾幕はさらに厚くなる。

「重量増加に伴う旋回機構の改良も問題ない。ただ、ベルト給弾方式については、まだ研究が必要だね」

——まさに神の手だな。

夏川の解説を聞きながら資料をめくっていた榊原は、戦慄にも似た衝撃が背中を走るのを感じていた。

「ついでに、この改修型機銃を試験搭載するBOBが欲しい。できれば、駆逐艦が」

「わかりました。相談してみます」

「ん、よろしく。それとこっちだけ」

夏川はさらに、もう二つの書類を示した。

「BOBの大規模改装に関する資料ね。『摩耶』と『木曾』の分を用意してる。こっちも、本人たちに改装を受けるか否かの確認を取っておいてほしい」

BOBの大規模改装。それは、精神同調率が高く、安定している艦娘にのみ許されるものだ。普通は、多くの経験を積むことで、艦娘が精神同調に慣れ、可能になるものだった。ただ、艦体や装備等に大幅な変化が加わり、場合によっては改装後の精神同調へ大きな負担がかかるようになるため、あくまで艦娘の任意ということになっていた。

人類側の技術で、この精神同調の負担をある程度軽減はできる。が、その程度は艦娘によってまちまちであり、やはり改装時にはかなりの覚悟が必要だった。

『『摩耶』大規模改装試案』『『木曾』大規模改装試案』

そう書かれた書類を、榊原は神妙に受け取った。

「まあ、まだ試案の段階だから」

よく考える時間をあげて。最後は優しげに、夏川はそう言った。「伝えておきます」

「ん。さて、これで用件は終わり」

くたびれた白衣を脱いだ夏川は、それを椅子の背にかけた。

「すぐに着替えてくるから。先に行って待っててよ」

「はい。お待ちしてます」

榊原にひらひらと手を振って、夏川は部屋の奥の更衣室へと入っていった。

今日は、パラオ泊地全体での食事会だ。開設から四か月、思えば泊地の人員全員が顔を合わせる機会はなかった。『I F 作戦』も一段落を迎えたことだしと、艦娘たちから提案があつて、立食形式のパーティーが実現したのだった。

三つの書類を抱えたまま、榊原は研究室を後にする。食堂で待つ賑わいに、今は心を弾ませていた。

乾杯ノ音頭

普段より多くの人間で賑わっている食堂の正面に、榊原はビールの入ったグラスを持って立っていた。

パラオ泊地に所属する全ての人間が、この食堂に集まっている。工廠部、港湾部、食堂部、この泊地を支える百人近い人員が、初めて一堂に会していた。

その乾杯の音頭を、榊原は任されたのだ。

「本日はお集まりいただきありがとうございます」

食堂全体に通るよう、声を張る。シンとした空間に、声はよく伝わった。

「パラオ泊地の開設から四か月近くとなりました。改めて、ここまで来られたことを感謝いたします」

榊原の着任は二か月前だが、その前からパラオ泊地は動きだしている。特に港湾部のタグボート船員などは、警備隊の艦娘たちと同じく最初期からこの泊地で働いていることになる。それこそ、パラオ沖海戦に伴うパラオの解放直後からだ。

「今夜この場が、皆さまの親睦の場になれば幸いです。それでは、僭越ながら乾杯の音頭を取らせていただきます」

全員が、手に持ったグラスを掲げた。ビール以外にも、麦茶やソフトドリンクの入ったグラスも見える。皆が皆、決意を秘めた強い視線で、榊原を見つめていた。

「ここが、最前線パラオ泊地だ。」

「乾杯！」

「「乾杯！」」

グラスを掲げ、あるいは近くの人と打ち鳴らす。それからは、会場内が和気藹々とした雰囲気包まれた。あちこちで、各部員同士の会話が始まっている。

「いい挨拶だったんじゃない」

立食のテーブルの方へと戻ってきた榊原を、いつもの調子の声が迎えた。オレンジジュースのグラスを持っているのは曙だ。

「そうか？」

「あくまであたしの個人的な意見よ」

相変わらず容赦はない。

「ん。ほら、乾杯」

曙はそう言つて、ぶつきらぼうにグラスを差し出す。プイツと少し外を向いている辺り、全くもって彼女らしい。

「ああ。乾杯」

榊原は微笑を浮かべつつ、曙のグラスに自らのグラスを打ちつける。カツン。中に液体が入っていることで、独特の響きが生まれる。お互いにグラスを傾けて、中のものを呷った。

「これからも、よろしく頼むよ」

「・・・ふんつ。ま、いいわよ。・・・よろしく」

そう言つた後、曙の顔は益々そつぽを向いてしまった。それがまた、榊原には微笑ましい。

「・・・ほらつ。あんたはそんなところ立ってないで、挨拶回りでもしてきなさい！」

緩んだ榊原の頬が気に入らなかつたのだろうか。曙は押し出すようにして、榊原を他の机へと押しやる。その仕種に今度は苦笑を浮かべて、榊原は彼女の言葉通り、各部への挨拶回りへと出た。

「榊原君」

真つ先に榊原を捕まえたのは、工廠部の夏川だった。

小さな丸テーブルを囲んで、三人が立っている。工廠部を取り仕切る夏川。港湾部を取り仕切る大野作蔵。食堂部を取り仕切る釣掛美穂。パラオ泊地、そして艦娘たちを陰から支える、各部門の長たちだ。「皆でおしゃべりしながら食事っていうのも、いいもんだねえ」

取り皿に控えめに取つた料理をパクパクと食べながら、夏川が笑つた。普段は研究に没頭しているせいで、一人で食事をすることも珍しくないという。

「明美ちゃんらしいや」

そう言つたのは大野だ。初老の彼は元商船の船長だったらしく、海で生きてきた経験は榊原よりもずっと長い、大先輩だ。そんな大野

は、大盛に盛られたおかずたちをゆっくりと消費しながら、年相応の上品な笑みを浮かべていた。

大野が取り仕切る港湾部は、泊地の港湾施設に関わるありとあらゆることを一手に引き受ける、泊地最大の集団だ。タグボートによるB O Bや通常船舶の離着岸援助はもちろん、船舶への補給作業や貨物等の積み下ろし作業、大型船舶の水先案内、哨戒艇による近海対潜哨戒までこなす。

「もう、ご飯はすっかり取ってもらわないと」

困り顔でそう苦言を呈したのは、食堂部長の釣掛だ。同じ女性部門長ということもあって、夏川とは普段から親しい。それゆえに、友人の体調管理の甘さが、頭痛の種なのだ。お皿に取った料理をつつきながら、グラスを傾ける。

食堂部は、単に艦娘や泊地の人員に食事を提供するのが役目ではない。庁舎や官舎、艦娘寮といった泊地の諸施設についても、食堂部が管轄している。いわば、泊地の生活面全般を支える部署なのだ。

「いやあ、人間自らの知的好奇心には敵わないよ」

特に悪びれる様子もなく、夏川は空いた皿に新しい料理を盛りに行ってしまった。

夏川の工機部は、建造、開発、修復と、B O Bに関わる技術部門だ。十数名の部員数は三部門の中で最も少ない。

それぞれに、この泊地を支える役目がある。その部門を取りまとめる三人は、だがしかしそんな気苦労など感じさせない余裕があった。

「毎日立食パーティーなら、夏川技師もご飯を食べるかもしれませんね」

ポツリと呟いた榊原に、二人が同調する。

「それはそうかも」

「意外といい案かもしれないな」

三人で笑ってしまった。

「・・・何を笑っているのか知らないけど。なんとなく、私のことを馬鹿にしてる気がするんだけど」

料理を取って戻ってきた夏川が、何かを察してそう言った。

「そんなことないぞ。さあ、明美ちゃんは食べた食べた」

「そうじゃないでしょ、大野さん。何のために榊原君を引き留めたのさ」

「おっとそうだった」

大野が榊原に向き直る。夏川も、釣掛もだ。

「乾杯、したいと思ってるな」

代表して口を開いた大野が、グラスを掲げた。

「これからの、航海の無事を祈って」

——航海、ですか。

大野の言い回しが、すんなりと心に染み入った。

パラオ泊地という、荒波に漕ぎ出す船。その無事を祈るために、グラスを交わしたい。

「どうかな、という顔をしている大野に、榊原は大きく頷いた。

「ぜひ。喜んで」

乾杯。四人のグラスが打ち鳴らされる。パラオの明日に、想いを馳せながら。

パーティーの各所を一通り回った榊原は、ワイワイと会話を弾ませる参加者たちを見渡せる、端の席にいた。

摩耶は、親しい港湾部員と何やら話し込んでいる。木曾と霞は、隙あらば暴走しようとする卯月を止めるのに必死だ。満潮と長波は、工廠部員と話を楽しんでいる。陽炎は、曙に連れられて釣掛のもとに向かっていた。祥鳳と大和はというと、何だかんだ二人で楽しんで呑んでいるらしい。

最前線とは思えない、和やかな空気が、食堂に漂っていた。

その様子を見守りながら、榊原は四杯目のビールを呷る。泡立つ琥珀の液体が、今夜の雰囲気にはぴったりだ。

グラスをテーブルに置いた後、自分の取り皿に箸を伸ばした榊原は、そこで取り皿が空になっていることに気付いた。いつの間にかやら、全て食べてしまっていたらしい。

新しい料理を取ってこようと、席を立とうとした榊原の前に、人影

が立った。こちらを見上げる、青い瞳。曙だ。

「ほら、適当に見繕ってきたから」

その手に、取り皿に盛られた料理が乗っている。小腹を満たす程度の控えめな量だ。丁度、榊原が取ろうと思っていた分量だった。

「ありがとう」

素直に受け取って、二人で席に戻る。早速、榊原はシウマイに手を付けた。

「陽炎と釣掛さんのところに行つてたんじゃなかったのか」

「行つたわよ。陽炎が自分の作つた料理を教えないから、釣掛さんに直接聞きに行つた」

「陽炎が作つた料理？どれだ？」

「それよ」

曙が指差したのは、たつた今榊原が食べたばかりのシウマイだった。榊原は目を見張る。

「今のシウマイ、陽炎が作つたのか!？」

「たく。あんだけできるんだつたら、最初つからやりなさいよ」

そう言いながら、曙もシウマイを一つ摘まむ。ゆつくりと噛みしめた後、納得するように頷いた。

「おいしくできてるじゃない」

榊原が着任したての頃、陽炎はまともに料理をすることができなかった。それから、時々釣掛に料理を習っていたらしい。

「他にはないのか？」

「今回はそれだけだつて。他にも色々練習してはいるみたいだけど」

いつか、陽炎の料理が、新艦娘の歓迎会に並ぶようになるかもしれない。

「・・・二か月、か」

ここへ着任して、もうそんなに時間が経つたのだ。

あつという間のことで、振り返る暇すらなかった。こうして一時の息抜きがなければ、気づくこともなかった。

「何感慨深げにしてんのよ。辛気臭いわね」

変わったこともあれば。この曙の辛口コメントのように、変わらな

いこともある。

「そうだな。まだ、これからだ」

「そ。まだこれからよ」

そう言った榊原と曙は、またシウマイを一つ取り上げて口に運ぶ。アクセントのグリーンピースが、プチツとはじけた。

「ねえ」

料理が再びなくなった頃、曙が榊原に呼びかけた。

「ん？」

「デザート、いる？」

料理が盛られていた大皿はほとんどが空になり、代わりにフルーツやスイーツが乗せられた大皿が運ばれている。

「欲しいな。取ってこようか？」

「いいわよ。あたしが選んでくるから」

言うや否や、曙はスタスタと大皿の方へ行ってしまった。相変わらず、行動の早い秘書艦である。

しばらくして彼女が持ってきたのは、南国のフルーツ盛り合わせと、小さなケーキだった。フォークも忘れずに持ってきている。

「ん。こんな感じでよかった？」

「ああ。ありがとう」

榊原は、曙からフォークを受け取ろうとした。が、

「ち、ちよつと待って」

その手に、曙が待ったをかけた。それから曙は、チョコレートのケーキにフォークを入れ、大体一口くらいの大きさにする。

そして、そのケーキを、おもむろに榊原へ差し出してきた。

「ほ、ほら。あーん」

あまりに衝撃的なできごとに、榊原の背筋を電流が走り抜けた。

「あ、曙!？」

「な、何よ。祥鳳のは食べれるくせに、あたしのは食べれないってわけ!？」

精一杯の強がった声。よく見れば、曙の頬は林檎のように赤く上気し、ケーキを差し出すフォークはかすかに震えている。

どうして、曙がそんなことをしたのか。榊原にはわからなかった。だが、差し出された、細かく揺れるケーキを、食べないという選択肢もなかった。

「……いただきます」

「ど、どうぞ」

パクリ。瞬間、口の中にとろけたチョコレート風味が広がる。ほろ苦くて、それでもやっぱり甘い。それはまるで――

――そうか。

心を込めた料理には、その人の表情が見える。

「ど、どう?」

「うまい。最高だ」

「……へ、へえ。そっか」

曙は、気恥ずかしげに、赤い頬を搔いた。

「このケーキ、曙が作ったのか?」

「っ! な、なんで、わかったの」

そうか。そういうことだったんだ。

「なんとなく、かな。食べた時に、わかった」

曙は目を真ん丸に見開く。それから顔を茹でダコのようにして、細かい声で言った。

「……おいしかったなら、よかった」

――本当に、かわいいやつだ。

そう思った榊原が、ほとんど無意識に頭へ伸ばした手を、今夜の曙は振り払わなかった。

米艦隊カラノ接触

嵐は——世界を変える大きな波は、突然やって来る。

トラック沖海戦から一か月。世界を衝撃が走り抜けた。欧州で、艦娘が独立を宣言したのだ。

『私たち、グインディペンデンス・フリート』は、人類の指揮権から独立することを、ここに宣言する。自らを、自らで治める力が、私たちにあるからだ。人類には、私たちが貴方方と対等な自治組織と認めたいうえで、対深海棲艦の共同戦線を構築するための、軍事同盟締結を望む』

『グインディペンデンス・フリート』——それまで女王艦隊と呼ばれていた艦隊を率いる巡洋戦艦『フッド』の艦娘の宣言に、各国の政府はもちろん、艦娘たちの間にも激震が走った。

パラオ泊地として例外ではない。全世界に向けて発せられた宣言の内容を、その日の夕食の席で、榊原は余すところなく艦娘たちに伝えた。

彼女たちの返答は、至ってシンプルなものだった。

——「あたしたちの居場所は、ここよ」

全員を代表して、曙はそう言った。

——「あたしたちは、クソ提督と一緒に戦い続ける」

真っ直ぐに榊原を捉える瞳。そこに込められた、信念、誇り。大切な何かを守り抜く、大切な何かのために戦う、決意。

榊原は、その想いに応えることを、一層強く、心の中に誓った。

フツドの宣言から二日。パラオ泊地は、いつもと同じように活動を続けていた。『IF作戦』中に溜まっていた書類も片付け終わり、榊原と曙は、平常に戻った書類たちと格闘している。

そんな折、執務室の扉がノックされた。心地良いリズムに、榊原は答える。

「どうぞ」

「失礼するわ」

執務室の扉を開いたのは、霞だった。

「艦体のドック入りが完了したから、報告に来たわよ」

工廠部が開発した、改修型二五ミリ機銃は、「霞」への試験搭載が決まっている。昨日、その準備が整った旨が夏川より知らされた。それを受けて、今日早速「霞」がドック入り、改修作業に入った。出渠は三日後を予定している。そこから、各種の試験データが回収される。

「わかった。これからどうする？ せっかくだから、少し外出でもしたらどうだ？」

「いいわよ、別に。それより、卯月の訓練に付き合ってくるわ」

「そうか。よろしく頼む」

「了解」

そう言つて、霞は執務室を後にした。

「ねえ」

再び書類に向き直ろうとした榊原を、今度は曙が呼び止める。執務机の横に並べた秘書官机から、曙がこちらを見つめていた。

「どうした？」

「書類、終わったわよ」

—— 相変わらず、早いな。

榊原も随分慣れたつもりではいたが、それでもまだ、執務をこなすスピードは曙の方が早かった。本当に、優秀な秘書艦である。

「そうか。こっちもすぐ終わるから、一息入れようか」

「ん。お茶淹れてくる」

言うや否や、曙は席を立って、応接室の隣にある給湯室へと向かっていった。こうして、執務の合間にお茶を飲むのが、最近の榊原のお気に入りとなっていた。

それから数分。榊原が丁度書類を終える頃に、お茶とお茶請けを乗せたお盆を持って、曙が戻ってきた。

二人分の湯呑みを、どちらからともなく傾け、至福の溜め息を吐く。

この一杯のために、執務をこなしていると言つても過言ではない。

「普段より、早く終わったな」

お茶請けの煎餅に手を伸ばしながら、榊原はチラリと時計を見遣る。時刻は十時を回ったばかりで、お昼にはまだ時間がある。午後は艦娘たちの訓練に付き合うとして、それまでの間が手持無沙汰であった。

「・・・暇なら、また兵棋演習でもやる?」

煎餅をかじりながら、曙が提案する。兵棋演習といえば、前回は榊原の惨敗で終わった。復仇戦というのも悪くはない。時間的には、昼食前に丁度いいだろうか。

「そうするか」

「じゃ、これ飲み終わったら作戦室ね」

そういうことになった。

だが、その約束は、果たすことが不可能となった。嵐はいつでも、唐突に表れて、予定を狂わせる。

湯呑みのお茶がほとんどなくなった頃、執務室を慌ただしくノックする者があった。音から伝わる緊迫した空気を感じ取り、榊原も曙も身構える。

「どうぞ」

「失礼します!」

飛び込んできたのは、港湾部の通信員だ。メモと思しき紙片を持っており、その顔には困惑の色が浮かんでいる。

「電文を受信しました」

「電文・・・?」

榊原は彼の差し出す紙片を受け取る。彼の報告は続いた。

「受信したのは十分前です。海軍の国際共通バンドを使用して発信さ
れていました。発信元は」

一瞬の間があった。

「発信元は、米海軍第七方面艦隊です」

「米海軍?!」

渡された紙片を、榊原は物凄い速さで読み上げていく。横から覗く曙も同じだ。ものの数秒で読み終わった電文はしかし、さらなる疑問符を榊原にもたらしたただけであった。

「何・・・どういうこと」

曙もまた怪訝な表情を浮かべている。それくらいに、妙な電文であつた。

『任務遂行にあたり、重大な問題が発生した。パラオ泊地との情報交換を求む。寄港を許可されたし』

全くもって、わけがわからない。

「あちらは返信を待っています。どうしますか」

通信員の言葉に、榊原は黙考する。これは難しい問題だ。答えはすぐには出そうにない。

「・・・曙」

「何?」

「しばらく、執務室を任せてもいいか?俺は通信室へ行つてくる」

「・・・了解」

曙の返答を確認して、榊原は通信員に促す。今自分は、ここよりも通信室にいるべきだ。

庁舎内の通信室までは、三十秒ほどで着く。扉を開けて中へ入った榊原の前で、通信員は素早くヘッドセットを着け、各種機器の準備を進める。

「準備、できました」

こちらを振り返つた彼に、榊原は熟考の末に選んだ通信相手を指名する。

「・・・横須賀に繋いでくれ。防諜回線で、だ」

「横須賀ですか?」

パチクリと瞬きをした後、彼は横須賀へ回線を開く。それから、ヘッドセットをもう一つ通信機器に接続して、榊原に差し出した。彼に倣つて、榊原もヘッドセットを着ける。

「呼び出します」

呼び出し音は、普通の電話と同じだ。昔懐かしい黒電話のようなコールが二回、三回と繰り返される。五回目途中で、相手は出た。

『こちら横須賀鎮守府、秘書艦の吹雪です。榊原少佐ですか?』

ヘッドセットの向こうに聞こえる声は、つい先日の『IF作戦』で

顔を合わせたばかりの、横須賀鎮守府秘書艦、吹雪であった。

「榊原です。秋山中将に繋いでいただけませんか？」

『すみません、司令官は外出中で、三日は帰ってきません。その間の案件は、全て私が預かっています』

吹雪もまた、榊原の声から何かしらの事態が起こったことを悟ってくれたのだろう。ともかく、今は急ぐ。パラオ泊地を直轄する横須賀に、これから榊原が取ろうとしている選択を伝え、意見をもらいたかった。

「では、吹雪さんにお伝えします。十分ほど前に、米第七方面艦隊を名乗る相手から、海軍の共通バンドで接触がありました。パラオ泊地と、情報交換がしたいと言っています」

『っ！それは本当ですか？』

吹雪の声に、どこか弾んだ色が見えたのは気のせいだろうか。

『ちよつと待つてくださいね。今、確認を取りますから』

そう言った吹雪は、一旦通信を中断する。二分後、再び通信機の向こうに、吹雪が出た。

『お待たせしました。確認が取れました。接触してきたのは、米第七方面艦隊である可能性が極めて高いです。同艦隊は、一か月ほど前にパナマを離れ、サンディエゴの所属になったと記録があります。ですが、私の情報筋では、サンディエゴに第七方面艦隊の所属艦は一隻も確認されていません。おそらく、同時期に実施された輸送船団の往路を護衛した後、豪州周辺で活動していると予想されます』

一体どこから、そんな情報を手に入れたのだろうか。スラスラと第七方面艦隊についての情報を述べる吹雪に、榊原はヘッドセット越しにもかかわらず、冷たい汗が流れるのを感じた。

『指揮官は、ウィリアム・ハルゼー大佐。自らの緻密な考察にもとづいて、大胆不敵な作戦を行う、米海軍内でも有名な猛将です。今回の接触は、彼の行動ロジックとも一致します』

やはり、電文の相手は米艦隊なのだ。

疑問は残る。なぜ、今この時期に、接触を試みてきたのだろうか。情報交換とは、何なのだろうか。そして彼らが、豪州沖で行動する理

由は何なのだろうか。

確かめる必要がある。

「・・・彼らの意図を、確認する必要があると考えます」

『榊原少佐の意見に、私も賛成です』

方針は、決まったと言つてよかつた。

「パラオ泊地は、米第七方面艦隊の寄港要請を、承認します」

『わかりました。では、三点ほど、お願いしてもいいでしょうか?』

お願い。オブラートに包んでいるが、それはどこまでなら情報を開示していいのかということだ。いかに米国が同盟国とはいえ、開示できない機密事項も存在する。

果たして、吹雪はどこで線引きをするのだろうか。榊原は、耳を澄ます。

『二つ目に、開示する情報の内容についてですが。榊原少佐に一任します』

彼女に驚かされるのは、これで一体何回目だろうか。

「自分の裁量で決めていいのですか!？」

『はい。責任は私に取ります。榊原少佐が必要だと思ふことを、彼らに開示してください』

呆然としたままの榊原に、吹雪は二つ目のお願いをする。

『会談の内容は、私にも報告をお願いします。議事録は作っておいてください。ただし、公式記録には残さないでください』

そして、三つ目。

『・・・泊地の皆に、一応確認を取ってください。皆、そういったことはすでに乗り越えていると思うんですけど。それでも、彼女たちにすれば、アメリカは“元敵”です』

「・・・わかりました」

榊原も、一瞬忘れかけていた事実だった。かつて日本は——パラオ泊地の艦娘たちは、アメリカと戦争をしていたのだ。

『以上三つだけ、よろしくお願いします』

会談の成功を、祈ります。そう言い残して、榊原と吹雪の通信は終わった。

そのまま、榊原は全艦娘を通信室に呼び寄せる。訓練中だった摩耶、木曾、長波、卯月たちが最後に入ってくる。深呼吸をして、榊原はありのままを彼女たちに伝えた。全員の反応は、榊原の予想よりもさらに静かなものだった。

「・・・ま、七十年以上も前の話だしな」

そう言い切ることのできる摩耶に、尊崇にも似た念を抱かざるを得なかった。

ここに、パラオ泊地の取るべき選択肢は完全に固まった。所属全艦娘の前で、榊原は待機していた通信員に、米艦隊への返信を指示する。「米第七方面艦隊宛てに返信。『貴艦隊の寄港を歓迎す。パラオ泊地に、情報交換に応じる準備あり』」

たった一時間。その間に、パラオ泊地を取り巻く世界は、目まぐるしく変わろうとしていた。

猛牛

米第七方面艦隊がパラオ泊地へ到着したのは、最初に電文を受信してから三時間ほどが経った時だった。

泊地の停泊場所へは、木曾が誘導する。入港誘導の連絡が入り、木曾は埠頭を出港していた。間もなく、第七方面艦隊と合流するはずだ。

木曾からの連絡を、榊原は通信室で待っていた。隣には、秘書艦の曙だけがいる。

ほどなく、木曾から通信が入った。

『こちら木曾。たった今、第七方面艦隊と合流した。これより、予定される碇泊地へ誘導を開始する』

「了解。相手側の編成はわかるか？」

返答に数秒の間があった。

『“ヨークタウン”級が一隻、“アラスカ”級が一隻、“ブルックリン”級が一隻、“ブレッチャヤー”級が二隻。それと、艦型不明艦が一隻』
「艦型不明艦？」

『どっかで見た気がするんだが……すまん、思い出せない。少なくとも、米海軍艦艇の識別表には載っていない』

——その艦型不明艦が、あちらが提示する情報か……？

ともかく、この目で確かめる必要があるようだ。

「そのまま誘導を頼む。こちらは、埠頭で待つことにする」
『了解』

木曾との通信はそこで切れた。

「曙、作戦室の準備は？」

「とつくに。必要になるかもしれないものは、あらかじめ集めておいたわ」

「そうか。ありがとう」

「別に。これも秘書艦の仕事のうちだし。それよりほら、さっさと出迎えに行く」

曙に押される形で、榊原は通信室を後にした。

庁舎の外に出て、埠頭を目指す。今日は風もなく、波も静かだ。入港と停泊にあたって、特に障害となるものはなさそうだった。

「提督、曙……こつちだこつち！」

二人を急かすようにして手招いた摩耶は、双眼鏡を覗き込んで、泊地の沖を見つめている。わずかにだが、肉眼でも艦影を確認することができた。

「貸してくれるか？」

「おう。ほらよ」

摩耶から受け取った双眼鏡を、榊原も覗き込む。拡大された艦影が海面を進む様を、はつきりと観察することができた。

先頭に見えるのは、大型の空母だ。平らな飛行甲板の右舷側に、大きな煙突を背負った艦上構造物が目立つ。〃ヨークタウン〃級の一隻であることは明白だった。

その後には、二隻の〃フレッチャー〃級駆逐艦を従えるようにして、〃ブルックリン〃級軽巡洋艦が続いている。〃高雄〃型に似た砲塔配置が特徴的だ。

そして。最後尾には、二隻の大型艦が続いていた。

一隻は、塔状の艦橋がそびえる、細身の艦だ。三連装砲塔を搭載しており、〃アラスカ〃級大型巡洋艦だとわかる。

だが、もう一隻は明らかに違う。箱型の基部から三脚楼が立つ艦橋は、一見すれば籠マストからの改装を受けた米戦艦の特徴のように思える。しかし、その三脚楼を囲むようにして各種の装備が追加されている様子は、どちらかと言えば日本戦艦、特に〃金剛〃型を彷彿とさせる。

主砲は連装砲塔。大きさからして、一六インチ級だろうか。その他、艦上構造物群を取り巻く両用砲の類は、明らかに後付けされた雰囲気だ。

そして何より、その大きさだ。隣の〃アラスカ〃級よりも、一回りは大きい。あの艦が戦艦だとすれば、基準排水量でゆうに四万トンはあるのではなからうか。それほどの規模になる軍艦は、米海軍の中でもかなり限られてくる。否、戦艦に限れば、榊原の知る限り四万トン

を超えるのは、〃アイオワ〃級のみだ。

そうこうしているうちに、第七方面艦隊の各艦が碇泊場所へと誘導されていった。大型の空母や戦艦は少し沖——〃大和〃や〃祥鳳〃の隣だ。軽巡以下は、それよりも埠頭に近く、〃摩耶〃と舳先を並べて錨を下ろした。

「何だか・・・不思議な気持ちね」

同じように埠頭から泊地沖を見つめていた艦娘たちのうち、満潮がポツリと呟く。

かつて敵同士で戦った相手。今は、同じく深海棲艦と戦う者として、こうして同じ泊地に舳先を並べている。

昨日の敵は今日の友、と言うには、いささか遠い日の話に過ぎるかもしれない。それでも、何か思うところがあるのだろう。

パンパンツ

感慨にふける雰囲気を払拭するように、曙が柏手を打つ。

「ほら、そろそろ整列して」

出迎えの準備をしなければ。

榊原の横に、曙以下パラオ泊地所属艦娘たちがズラリと並ぶ。どこか緊張気味なのは、榊原も艦娘たちも同じだ。その緊張が、何に由来するものなのか、誰一人完全には掴めていなかった。けれども、それほど悪いものではないように、榊原は感じていた。

「戻ったぞ」

「お疲れ様。ありがとう」

「お安い御用だ」

埠頭に着けた〃木曾〃から木曾が降り立ち、榊原たちの列に加わる。丁度その時、碇泊した空母から内火艇が降ろされた。海面に着いた内火艇は、碇泊した各艦を回って、それぞれの艦娘たちを乗せている。最後に〃フレッチャー〃級の駆逐艦娘を乗せた内火艇は、真っ直ぐとこちらへ向かってきた。

内火艇の舳先に、米海軍の制服を着た将校が立っている。おそらく彼が、第七方面艦隊の提督、ウィリアム・ハルゼー大佐であろう。

埠頭に近づいた内火艇が減速する。〃大和〃や〃祥鳳〃の内火艇

が集まる内火艇用の埠頭に、綺麗に横付けた。飛び降りた妖精がロプを取り、艇を舫う。

「気を付け！」

曙が号令し、パラオ泊地艦娘たちの背筋がシャンと伸びる。そんな彼女たちの前に、内火艇から降り立った艦娘たちが並んだ。

「アテンション」

向こう側の、艦隊旗艦と思しき空母艦娘が、曙と同じようによく通る声で号令する。十数名の日米艦娘が、静かに向かい合っていた。

「ウエルカムトウ、パラオ。パラオ泊地提督、榊原広人少佐です」

敬礼しつつ英語で挨拶した榊原に、ハルゼーは一瞬驚きの色を浮かべた後、悪戯っぽい笑顔をわずかに見せて、こう返礼した。

「ありがとう、榊原少佐。本官は米第七方面艦隊提督、ウィリアム・ハルゼー大佐だ」

流暢な日本語だった。驚きで目を見開いた榊原に、ハルゼーの笑みが一層はつきりした気がした。

「私の師匠が、日系人だったんだ。日本語は師匠から教わった。うちの秘書艦も同じだ」

隣に控える空母艦娘を、ハルゼーがそう言っただけで紹介する。彼女は緊張気味に頭を下げ、同じく日本語でこう名乗った。

「航空母艦、エンタープライズです」

「「エンタープライズ!?!」」

素っ頓狂な声を上げてしまったのは、榊原もパラオの艦娘たちも同じだった。その声に、当のエンタープライズはビクリと肩を震わせる。

エンタープライズと言えば、米海軍の中でも武勲艦の名高い空母だ。海軍の人間なら誰でも知っている。

「は、はい。提督には、エミリーって呼ばれます」

エンタープライズ——エミリーの挨拶が終わったのを見計らって、再びハルゼーが口を開いた。

「寄港許諾、感謝する。お礼と言っただけなんだから……」

ニヤリ。ハルゼーの口角が吊り上がる。

「『オミヤゲ』を持って来た」

——お土産……？

一体、ハルゼーは何を手渡すつもりなのか。『お土産』という言葉が何を意味するのか掴めず、榊原は怪訝な表情を浮かべる。そんな彼をよそに、ハルゼーはエミリーの方へ促した。短い髪を揺らして、エミリーが榊原の方へ歩み寄る。

「あ、あの。こちら、粗品ですが」

そう言つて、エミリーが何かの入った紙袋を差し出す。それをありがたく受け取りながら、榊原はそれとなく、袋の中身を確認した。

入っていたのは、ジャムとハチミツであった。

——本当にお土産だったっ!?

本日一番の衝撃を、榊原は受けていた。

パラオを訪れたのは、米第七方面艦隊所属のグアム、ヘレナ、フレッチャー、オバノン、そしてコンステレーションだった。その内、作戦室に入ったのは、榊原とハルゼー、そして互いの秘書艦たちだ。他の艦娘たちは、食堂に案内している。釣掛にお願いして、軽食を出してもらうことにした。第七方面艦隊の面々は、昼食がまだであつたらしい。

「失礼します。サンドイッチをお持ちしました」

作戦室にも、食堂部員の一人が軽食を運んできた。

ローストチキンとレタスのサンドイッチは、即席で作ったとは思えないほど綺麗だ。いかにもジュシーな切り口が、榊原たちの胃を刺激する。

「ありがとうございます」

榊原の礼に、食堂部員は笑顔で応えて、作戦室を後にした。

「さて、早速始めるか」

そう言いつつ、ハルゼーはサンドイッチに手を出し、豪快にかぶりついた。エミリーもまた、控えめにサンドイッチに口を付ける。

「んんっ、うまいー」

ハルゼーが感想を漏らした。それから、同じく出されたコーヒーを

すすり、話を始める。

「まず、俺たち第七方面艦隊の目的について話すべきだな。俺たちは現在、ニューギニア島ポートモレスビーを拠点に活動している」

作戦室の中央に広げられた南太平洋の広域地図の中、まるで龍のような姿をした大きな島を指差して、ハルゼーが言った。

「対豪航路の防衛、それとルソンとの連絡路確保が主な目的だ」

——サンディエゴの所属になっていたのは、そういう理由か。

太平洋の作戦を主導するのは、サンディエゴの米太平洋艦隊司令部だ。対豪輸送や米ルソン警備隊は、サンディエゴの管轄であり、それを防衛するのが第七方面艦隊であるならば、ハルゼーたちの配属がサンディエゴという扱いになっているのも頷ける。

——何だか、パラオと似てるな。

トラック攻略戦の最前線基地となるパラオもまた、横須賀という連合艦隊司令部直下の鎮守府が直轄している。ハルゼーたちと、境遇が似ていると言えるかもしれない。

「で、だ。俺たちは一か月ほど前、オーストラリアへの輸送船団を護衛しながら、クツク諸島沖を航行していた。対豪輸送路において、最も深海棲艦の襲撃が多い海域だ」

だが、襲撃はなかった。ハルゼーの話は続く。

「索敵機にかかった敵艦隊はたったの一つ。まるで任務を放棄したかのように、忽然と深海棲艦が姿を消していた。だから俺たちは、その要因を探りに、トラック沖へ偵察に行った。丁度、日本海軍がトラック沖で戦闘をしていた頃だ」

あの時。ハルゼーたちもまた、トラック沖にいたのだ。

「そこで俺たちは、奇妙な電文を受信したんだ」

「電文？」

「そう。海軍の共通バンドで発信されてたな。出力はそこまで大きくなかったが、位置によっては日本海軍の方でも受信できたんじゃないか？」

曙の用意した鉛筆を取って、榊原はハルゼーに尋ねる。

「発信位置は、どの辺りですか？」

「正確な位置までは掴めなかった。だが、大体の位置なら割り出せた」
ハルゼーたちの偵察艦隊がいた位置。電文の大まかな発信方向。
それらは全て、トラックの南方海域に書き込まれていた。

—— “大和”なら、傍受できていたかもしれないな。

その海域に最も近かづいたのは、一制艦のはずだ。特に通信設備の良い “大和” であれば、その電文を傍受しているかもしれない。榊原は、後で大和に確認を取ることを決めた。

「俺たちは、電文の発信方向に索敵機を出した。だが、何も見つけることができなかった。船一隻、見つからなかった。おそらく、こちらの索敵機を早急に見つけて、回避行動を取ったんだ」

—— 回避行動？

一体、何のために。

発信者は、海軍の共通バンドを用いていた。だが同海域で、日本海軍の他の艦艇は活動していない。ハルゼーの口ぶりからすると、米艦でもないはずだ。それ以外の国家は、そもそも選択肢にすらならない。

では、深海棲艦？だが、それもおかしな話だ。深海棲艦には、機動部隊がいた。索敵機を見つけたのなら、さっさと戦闘機で撃墜すればいい話だ。だが、それをしなかった。すなわち、発信源にいたのは、少なくともハルゼーたちの敵ではない。

榊原には、心当たりがあった。発信者かどうかはわからないが、同じ頃あの海域にいたであろう艦隊。塚原から託された、『IF作戦』の謎。

ハルゼーもまた、榊原と同じ結論に至ったようだ。

「俺たちは、発信者が何らかの密命を帯びた人類側の勢力だと考えた。そして、網を張った」

ニューギニア島の北西海域を指差して、ハルゼーが口の端を持ち上げる。

「そして、見つけた」

ハルゼーが言うのに合わせて、エミリーが持っていた封筒から、数枚の写真を取り出す。鮮明に写された “その艦” に、榊原は目を見

張った。

大きな連装砲塔が、艦の前後に二基ずつ。〃大和〃型を彷彿とさせる、すつきりまとまった艦上構造物。片舷四基の連装高角砲。艦の中央部に航空作業甲板とカタパルト。

太平洋に生きる謎を、榊原は今、目の当たりにしていた。

未成ノ艦隊

作戦室は、しばしの間不思議な静寂に包まれている。海図台を挟んで向かい合う両艦隊の代表は、黙ったまま、置かれた数枚の写真を見つめていた。

榊原と曙は、エミリーが提示した写真、一枚一枚を精査するように見続ける。見れば見るほど、疑問は深まるばかりだ。

マストにひるがえる旗、そして空母の甲板に並ぶ艦載機の識別記号から、それらの艦が少なくとも日本海軍の所属であることはわかる。だがどの艦も、艦型識別表には載っていない。否、確かにどの艦も、どこか日本の艦に近い雰囲気はある。艦橋や対空砲の配置、シアーのかけ方。それらに、日本海軍に所属している艦の、面影があつた。

写真で確認できるだけでは、その編成は戦艦二、空母二、巡洋艦二、駆逐艦四。立派な機動部隊だ。

「うちの参謀長に頼んで、そこに写っている各艦の推定諸元を導いてもらった。何かの参考になるかもしれない」

口を開いたハルゼーがエミリーに頷くと、几帳面にまとめられた薄い書類の束が出された。推定全長や排水量の数値が書き込まれたその書類を、榊原と曙二人で覗き込む。

最初の写真にあつた艦は、推定で全長二四〇メートル、四万トンの艦とされている。「長門」型に近い艦影だが、断じて違う。「長門」型の二隻は、この写真が撮られた時榊原たちとともにパラオへ帰還している途中で、ニューギニア島沖にいるはずがない。

では、この写真に写っている艦は？砲塔配置的に一番近いのは「金剛」型の四隻だが、その可能性も低い。「金剛」と「比叟」は『I F 作戦』に参加しており、「榛名」と「霧島」は本土だ。やはり、ニューギニア島の沖にいる意味がわからない。

つまり最初の写真の艦は、日本海軍の所属を掲げていながら、榊原の知る日本海軍のどの戦艦でもないことになる。

それだけではない。ハルゼーたちが空撮した写真は、少なくとも六つの艦型がある。

二つの艦型——空母と駆逐艦は、辛うじて艦級を判別できる。前者は「翔鶴」型かその発展型、後者は明らかに「島風」型だ。だが、それ以外の艦に関しては、日本海軍の艦型識別表に当てはまるものはない。

最初の写真に写る、高速戦艦。空母に付き従う、高角砲を満載した、軽巡洋艦。 「妙高」型を縮小したような、重巡洋艦。

そして、推定で「大和」を上回る八万トンの巨軀を誇る、超弩級戦艦。

「・・・ちよつと、いい?」

最初に沈黙を破ったのは、意外にも曙だった。最近執務用に購入したらしい眼鏡の下から、鋭い視線が覗いている。海図台に並べた写真をチラリと見遣つて、曙がしゃべりだす。

「写真に写つてる艦。どれも、海軍艦艇の進化の系譜に、ピッタリ当てはまる気がする」

「どういうことだ?」

「コンステレーションを見て思ったのよ。同じ匂いがする。同じ：：未成艦の匂いが」

細められた双眸は、真つ直ぐにハルゼーの方を向いていた。

コンステレーションという艦名を聞いた時点で、榊原たちは木曾が報告してきた艦型不明艦の正体に思い至っていた。

「レキシントン」級巡洋戦艦。旧帝国海軍が夢見た幻の巨艦構想「八八艦隊」と時を同じくして計画された、米国の建艦計画「ダニエルズ・プラン」にて建造が予定されていた巡洋戦艦だ。五〇口径一六一センチ連装砲四基八門。基準排水量四万二千トン。「天城」型巡洋戦艦のライバルと目されていた艦である。ワシントン海軍軍縮会議で建造にストツプがかかったその二番艦は、名を「コンステレーション」と言った。

曙の指摘に、ハルゼーはニヤリと笑った。

「やはり、そう思うか」

「ええ。大型戦艦は、どう見ても「大和」型から繋がる新鋭戦艦シリーズ、さしずめ超「大和」型といったところね。高速戦艦の方は、

超甲巡か、〃金剛〃型代艦。軽巡は計画だけあったマル五計画の防空巡洋艦に見えるわ」

—— 未完成艦の艦隊、ということか。

それであるならば、日本海軍艦艇の特徴を残しているのも頷ける。進化の系譜上にながら、竣工することはなかった艦たち。

「・・・うちの〃コンステレーション〃はな、このエミリーが最初に建造した艦だ」

ハルゼーの言葉に、エミリーは神妙に頷いた。

「だが、未成艦ができたのはその一回だけだ。一体何が原因で〃コンステレーション〃が建造されたのかは、今もってわかっていない」
基本的に、BOBの建造は「かつて第二次世界大戦を戦った軍艦」に限られている。そこに未完成の軍艦は含まれていない。

では、〃コンステレーション〃は——そして写真に写る艦たちは、なぜ建造されたのか。

「・・・ひとまず、その辺の考察は置いておくわよ」

そう宣言した曙が、榊原の方を見る。「どうする？」そう訊いているのがわかった。

—— 次は、こちらが情報を提示する番か。

榊原は、すでに話すことを決めていた。

「・・・実は、現在私人として、ある密命を受けて活動をしています」
口を開いた榊原を、ハルゼーもエミリーも静かに見つめていた。

「撮影された艦影は、その任務に関わるものである可能性が、極めて高いです」

「つまり、榊原少佐も、この艦たちを追っていた、と？」

「はい」

榊原は、塚原から受けていた依頼の内容を、全てハルゼーに説明する。『IF作戦』で、その存在が疑われた、もう一つの勢力。トラック環礁の港湾施設を壊滅に追いやった、機動部隊の存在。吹雪との関係。

「・・・そんなことが」

榊原の話に、ハルゼーは両腕を組んで唸った。

「確かに、我々が捉えたこれらの艦は、その正体不明の艦隊である可能性が高いな」

正規空母二隻という艦隊編成は、塚原が導き出した正体不明艦隊の最低限保有戦力に一致する。

「タイムミング的に見て、まず間違いないと言えらると思います。自分は、この正体不明の艦隊が、Z海域——具体的にはタウイタウイかブルネイ、リングガに拠点を置いていると考えています」

榊原の言葉に、ハルゼーが目を見開いた。

「・・・そうか、この艦隊も、我々と同じか」

「と、言いますと?」

「第七方面艦隊のポートモレスビー配備は、確かに対豪航路防衛とルソン警備隊の連絡路確保に主目的がある。だが、それとは別に、このZ海域における調査活動も任務に含まれていた」

「っ!!」

榊原と曙の、声にならない驚きが重なった。やはり、米国は動きだしたのだ。いまだに——いや、深海棲艦とBOBの出現によって再び世界トップの超大国になったアメリカ合衆国が、Z海域の存在を放っておくことなど、ありえないのだ。

米国には、世界のあらゆる事象を調査、研究し、その結果を許容するだけの力があつた。

「・・・Z海域、か。一体、何があるというんだ」

ハルゼーの眩き同様、榊原の好奇心も、益々大きくなるばかりだ。Z海域という、封鎖された海。

「もう一つ、気になることがある」

ハルゼーは言った。

「塚原大佐の話が正しければ、この艦隊はほぼ一方的にトラックの港湾施設を叩いて、退避したはずだ。なのになぜ、高速戦艦には明らかな損傷の痕がある?」

解像度の高い、非常に鮮明な写真を指差し、ハルゼーは疑問を呈する。

写真の中の高速戦艦は、真っ白いウエーキを引きずって何事もない

かのように航行しているが、その甲板のところどころに、被弾によるものと思われる破孔が穿たれていた。中には、応急処置で塞がれている箇所もある。

「・・・損傷具合からして、戦艦クラスの攻撃ね」

破孔を確かめるように、曙が言った。

「はい。『ドーントレス』の妖精さんが言うには、おそらく一六インチ級の徹甲弾を被弾した跡のようです」

曙の指摘を、エミリーが補う。

「それも、おかしな話ですね。事前偵察で確認されたトラック沖の深海棲艦に、戦艦は四隻しかいません。その全ては、日本海軍の戦艦部隊と交戦していました。トラック南方海域に展開していたこの艦隊と交戦する余裕はなかったはずですよ」

では、一体何者か。まさか、事前偵察で確認できなかった戦艦がいて、それと交戦したのだろうか。

———そういえば。

作戦開始前の最終打ち合わせ。そこで提示された事前偵察時に空撮された写真に、トラック南方で撮られたものは含まれていなかった。

榊原の背中を、冷たいものが流れる。まさか、連合艦隊司令部は、トラック南方に別の戦艦戦力がいることを知っていながら、それを公表しなかったということだろうか。

———何のために・・・？

そうする理由は全くもってわからない。何か、余程知られたくないことがあるのだろうか。

「・・・一体、『何』と戦ったんだ」

ただ一つ。確かめる方法があるかもしれない。

「答えは、Z海域にあるはずですよ」

榊原の言葉から何かを汲み取るように、ハルゼーは殊更ゆっくり肯した。

「Z海域は、なぜ封鎖されたのか。その理由が、多くの謎を解く鍵になると考えられます」

「……やはり、確かめるしかないか」

覚悟を滲ませて、ハルゼーは腕を組み、二度三度と頷く。その双眸に、榊原は自らと同じ「提督」の色を見た。艦娘たちとともにこの世界を航海する、一人の男。

「榊原少佐」

「はい」

それまでと打って変わった、ハルゼーの改まった口調に、榊原も背筋を張る。ハルゼーの言うことはわかっていた。そしてそれに対する答えも決まっていた。

「無茶なお願いだとは、重々承知している。だが、この件——乙海域と謎の艦隊に関する情報について、これからも継続的に、お互いにやり取りをしていかないか？」

やはり。

「我々の艦隊は、しばらくは拠点周辺の制海権を確保する必要があり、早急な乙海域の調査はできない。だが、本国にあるツテを使えば、ある程度の情報収集は可能なはずだ」

榊原にとつて、願ってもない提案だった。

「喜んで。こちらこそ、どうぞ協力のほど、よろしく願います」

榊原の返答に、ハルゼーの相好が大きく崩れた。それから、その大きな右手が差し出される。

「『同盟』 成立、だな」

悪戯っぽいその口調に、榊原も笑って応え、右手をガツシリと掴む。これ以上に、頼もしい協力者もいない。

「それで、当面はどうするつもりなんだ？」

「ルソン警備隊に、知り合いがいます。彼が、個人的に乙海域の調査を引き受けてくれるそうです。その報告を待って、以後の行動は決めるつもりです」

榊原の説明に、ハルゼーはもう一度力強く頷いた。

「重ねてになるが、我々は榊原少佐たちへの協力を惜しまない。必要なことがあれば、いつでも申し出てほしい。できる限りの援助を約束する」

夕闇が迫ろうかというパラオ泊地から、第七方面艦隊の六隻が出港しようとしている。母港であるポートモレスビーへの帰途に着くのだ。

榊原は一日の碇泊を勧めたが、ハルゼーは「早く帰らないと、参謀長のお叱りがあるんでな」と苦笑いして、今日中に出港すると言った。

泊地近海の対潜哨戒は、すでに港湾部の哨戒艇と「陽炎」、長波隊が終えていた。周囲に敵潜なしの報告を受け、いよいよ第七方面艦隊が錨を引き抜く。各艦の錨鎖が巻き上げられ、海面に顔を出した錨が、定位置にしっかりと固定された。

ポーツ

微速前進を始めたハルゼー座乗の「エンタープライズ」が、パラオ泊地の埠頭に立つ榊原たちに向けて汽笛を鳴らす。夕陽に映えるその音は、単に別れの挨拶に留まらず、踏み出した新たな道への抜錨を意味しているように、榊原には思えた。

六つの艦影は、やがて水平線へと消えていく。太陽が沈み、星たちの支配する世界となったパラオに、晩御飯を報せるほのかな香りが立ち込めていた。

モウ一人ノ提督

穏やかな海を、輸送船を伴った数隻の船団が進んで行く。艦首にあたって砕ける波は静かで、上がる飛沫も太陽に反射してキラキラとしている。

「気持ちいい〜」

オートナビゲーションを設定し、艦橋トップの防空指揮所で海風を浴びる摩耶は、鼻孔をくすぐる潮の香りに大きく伸びをした。その短い髪を、涼しげな風が撫でる。降り注ぐ太陽光も、心地良い眠りへと摩耶を誘おうとする。今にも、倉庫に仕舞ってある雑魚寝用のゴザを甲板に敷いて、昼寝に入りたいくらいだ。

——…つて、ダメだダメだ。

重力に従い始めた瞼を感じて、思いつきり頭を振り、頬を張る。今の摩耶は、この船団の旗艦だ。当直以外でも、早々寝るわけにはいかない。

摩耶たちの船団が目指しているのは、南方航路の要衝フィリピン、ルソンだ。数日前にパラオに入港してきた輸送船の復路を護衛しつつ、ルソンへ向かっていた。ルソンで物資を積み込んだ船団は、護衛を摩耶たちから佐世保の部隊に引き継がれ、本土へと戻っていくことになる。

眠気と戦う摩耶の足を、艦橋を任せた妖精が引つ張った。そろそろ、目的地が近づいてきているようだ。

「ん、サンキューな。今戻る」

摩耶の言葉にコクコクと頷いて、妖精は艦橋に戻る。その後ろに摩耶も続いた。

「摩耶」の艦橋は、ガランとしている。いや、あくまでイメージ的な意味だ。実際には、見張りなどの妖精が十人ほど詰めており、運航の手助けをしている。それでも、どこか物足りない気持ちに駆られてしまう。

まるで何かが…誰か…がいないうな。

——やめよう、いい加減。

さつきとは違った目的で、摩耶はかぶりを振る。そのまま自らの艤装の前に立ち、精神同調の準備に入った。

「ブレイン・ハンドシェイク」

途端、摩耶の頭を数多の記憶が駆け抜け、押し流す。実際には、ほんのわずかな時間。コンマ数秒にも満たない瞬間。それでも摩耶には、痛みを伴った、それなりの長さのある時間だ。瞬間瞬間を追いかけそうになる自らを、強引に現実に引き留める。

精神同調が終わり、閉じていた目を開く。艦橋内は、白みがかつた光に満ちていた。

——また、か。

いい加減、自分にうんざりする。

「精神同調完了。システム正常、舵もらいます」

あらゆるしがらみを無理矢理に掃き捨て、摩耶は艦の操作に集中した。

「祥鳳、何かあったか？」

船団に付き従う軽空母を呼び出す。彼女が、対空、対潜の要だ。

『特に何も。そろそろ、対潜哨戒機の回収作業に移るわね』

「おう、よろしく頼むぜ」

ルソンまでは、後小一時間ほど。最後まで気を抜くことなく、船団は蒼い海を進んで行った。

ルソンの港湾に接近し、速力を落とした船団に、誘導を担当する艦が近づいてきた。ルソン警備隊所属のBOBで、その後方にタグボートや案内船など数隻が控えている。

——水上機母艦、か？

距離にして一万ほど。こちらへゆったりと向かってくる艦影に目を凝らして、摩耶はそう判断した。

ルソン警備隊は、基地航空隊と協同で航路防衛に当たっている。特に、長駆偵察と対潜哨戒など、多種多様な任務に対応できる汎用性を持った水上機母艦が、その主力となっていた。『IF作戦』に先立ってトラック環礁の偵察任務を行ったのも、ルソン警備隊の“秋津洲”に

所属する二式大艇だった。

そんな水上機母艦が、船団入港というもつとも危険な作業中に、周辺警戒を担ってくれるのはありがたかった。

——．．．にしても。

いつもの癖で、右手を庇のように額に当てて、摩耶はもう一度艦影に目を凝らす。どこかで見たような気がしてならなかった。

そんな摩耶に、まったく突然通信が入った。感極まったような、嬉しさに満ちた響きのある声だった。

『摩耶さん．．．！』

スピーカー越しではあるが、声の端にお嬢様然とした穏やかさが感じられる。澄んだ湖面に茂る葦原を揺らす、清らかな風のような声が、摩耶に何かを思い起こさせた。

一層艦影を注視しながら、摩耶は口を開く。

「お前．．．瑞穂か!？」

摩耶の呼びかけに、水上機母艦娘はさらに嬉しそうに、返事をした。

『はい．．．はい!』

水上機母艦“瑞穂”は、太平洋戦争で最初に失われた軍艦（艦首に菊の御紋を着けた艦艇）だ。その最後を、摩耶は姉妹艦の高雄と共に看取っていた。その時の記憶は、艦娘となった今も、艤装を通して受け継いでいる。

かつて、自らの前で海に帰っていった艦が、今こうしてその壮麗な姿を浮かべている。存在を誇示するかの如く、白波を蹴立てて航進している。これほど嬉しいこともない。

『その節は、御世話になりました』

改まって言われると、どう言ったものかわからず、摩耶は頬を掻きながら曖昧に答える。話題を変えようと、たわいもない話を始めた。

「そうか、ルソンの配属だったんだな」

『はい。つい一月ほど前に着任したばかりですけれど』

おっとりとした調子で、瑞穂が答えた。

「．．．元気そうで、何よりだ」

『ありがとうございます。瑞穂は、とても元気です』

一言一言、一つ一つの言葉に、今を生きている喜びが滲んでいた。そんな瑞穂の様子が、摩耶はこの上なく嬉しい。

上品な咳払いの後、瑞穂が少しだけ声の調子を変える。もつとも、今までのしゃべり方が素であるらしく、あまり変わっていないようにも聞こえた。

『周辺警戒は、瑞穂がお引き受け致します。摩耶さんたちは、ルソンへ入港を』

「おう、サンキューな」

『それでは、また後程』

通信が切れると、前方の「瑞穂」から零水偵が発艦を始めた。四基が装備されている「瑞穂」のカタパルトから、一機ずつ計四機が飛び立ち、周辺の対潜哨戒の任に就く。頭上を通過する羽音を頼もしく感じながら、摩耶もまた入港準備に入った。

輸送船に先を譲り、殿に着いた「摩耶」の横を、「瑞穂」が強速を保って通過していく。その艦橋に立ち、艦を操る艦娘を見遣って、摩耶はふっと笑みを漏らした。

「パラオからの護衛、ご苦労だった」

埠頭に上がった摩耶たちを出迎えたのは、いつもの提督——ルソン警備隊を指揮する卓己中佐ではなく、真新しい少佐の徽章を着けた若い男性だった。確か、榊原の同期の……。

「本土へ出張中の卓己中佐に代わり、ルソン警備隊を預かっている相模少佐だ」

名乗りながら敬礼を解いた相模に倣い、摩耶と長波、卯月、祥鳳も右手を下ろす。途端に緊張を解いた相模は、そのまま爽やかな笑みを浮かべた。

「ルソンを出港するまで、後三日はある。その間、十分に骨を休めていってくれ」

そう言った相模が頷くと、横に控えていた二人の艦娘が前に進み出た。

一人は、摩耶も面識がある。パラオ開設の少し前からルソン警備隊

に所属している、水上機母艦娘の秋津洲だ。人懐っこい笑みを浮かべる彼女は、いつもの特徴的な語尾で、四人の艦娘に話しかける。

「それじゃあ、寮の方に案内するかも。荷物を持って、秋津洲と漣について来てほしいかも」

秋津洲の横にいる艦娘は、漣と紹介された。特II型——「綾波」型駆逐艦の八番艦で、特に「綾波」型後期型とも呼ばれる。パラオ泊地秘書艦、曙の同型艦だ。言われてみれば、どこことなく似ている気が……しなくもない。多分。

最低限を詰め込んだ荷物を持って、摩耶たちが埠頭から寮の方へと向かおうとした時。その背後から、先ほど聞いた声が聞こえてきた。「提督……」

摩耶が思わず振り返ると、零水偵を回収して帰還した瑞穂が、小走りでこちらへ——相模の方へ駆け寄ってきていた。

「おう、瑞穂。哨戒お疲れ様」

今にも抱き着かんばかりの勢いで戻ってきた瑞穂を、相模も温かく迎え、労いの言葉をかける。一目で瑞穂を大切にしていることがわかる声音だった。

「はい。本日も何事もなく、本当によかったです」

「そっか、それは何よりだ。瑞穂のおかげだな」

「そ、そんな。瑞穂には、勿体ないです」

頬を染めて照れている瑞穂に、自然と摩耶の表情も緩む。

と、そんな二人の様子に、溜め息を吐く者が。摩耶の横で困り顔なのは、秋津洲だ。

「……またやってるかも」

やれやれ、とばかりに呟くその様子は、どう見ても世話焼きなお母さんである。

「何だ？いつもあんな感じなのか？」

「まったくもってその通りかも」

「いいじゃんか、仲良さそうで」

「全っ然よくないかも！」

物凄い勢いで、秋津洲が反論する。摩耶が思わず仰け反るほどの、

裂帛の氣迫だった。

「毎日毎日あんな感じで！仕事させるこっちの気にもなってほしいかも！」

「お、おう」

秋津洲先輩も、何かと思うところがあるようだ。

「別に仲が良いのはいいことだと思うかも。でも、仕事ぐらい真面目にやってほしいかも！こっちが何も言わないと、周りにバラ園を引き連れて見つめ合ってるだけとかやめてほしいかも！」

説明が的確過ぎて逆にわかりにくい。

お酒が入っていない状態でこれである。今夜あたり一緒に呑もうものなら、物凄い勢いで愚痴を吐かれること間違いなしである。早急に呑ませて潰すと、摩耶は心の中に誓った。

なお、その晩のお酒の席で、仲睦まじく酌を酌み交わす相模と瑞穂に、秋津洲先輩の中で何かのリミッターが吹き飛んだのは、また別の話である。

◇

「護衛を引き継ぎます！那珂ちゃんダヨー！」

佐世保から来た船団護衛の引き継ぎ相手は、元氣澆刺を通り越した何かで、そう言った。『川内』型軽巡洋艦三番艦、艦隊のアイドルを自称する那珂だ。摩耶とは、佐世保時代の知り合いである。

「よう、那珂。相変わらず元氣だけはいいなあ」

「もう、摩耶ちゃん！『だけ』は余計だよ！」

「ははは、わりいわりい」

端から見ればふざけた態度だが、本人が「地方巡業の星」と言うだけあって、船団護衛の経験は豊富だ。過去に、何度も敵潜水艦やはぐれ艦隊の襲撃から船団を守ってきた。日本海軍最強軽巡と言われる

『川内』型、その三番艦は伊達ではないのである。

それに、那珂の歌う歌は、不思議と元氣が出るということで、船団に参加する輸送船やタンカーの乗組員たちにも好評であった。アイドルの底力、恐るべしである。

「今回も、『地方巡業』、無事成功させてくれよ」

「もちろん！まっかせといてよ」

そう言つて、那珂は胸を張つた。

輸送船団が出港すれば、次は摩耶たちの番となる。それぞれのB O Bに乗り込んでいく那珂たちを見送りながら、摩耶たちも出港の準備に入った。とは言つても、察から荷物を撤収してくるぐらいだが。

全ての準備が整い、摩耶たちは埠頭に並ぶ。その前には、見送りに来た相模、瑞穂、秋津洲が立っている。

加えて。もう一人、相模の隣に、最低限の荷物を抱えた、同じような第二種軍装が立っていた。

すらつとした長身。細身の眼鏡に、それに見合つた切れ長の目。短く揃えられた髪。いかにも切れ者といった風貌の、海軍少佐だ。

輸送船団の護衛。それとともに、帰りは彼をパラオへ連れていくことが、摩耶たちがルソンまで来た目的だった。

一歩前に進み出た将校は、見惚れてしまうほどの鮮やかな敬礼を決めて、単刀直入に名乗った。

「清水隆之少佐だ。以後、よろしく頼む」

航海、後悔

名乗った清水に、摩耶たちも同じようにして敬礼で答えた。しばらくして、お互いの手が下がる。

——こいつが、新しい提督。

第一印象は、榊原と全く逆のタイプに思える。どこか、摩耶たちと一線を引いているように、摩耶には思えた。

が、そんなどこか冷徹な雰囲気などお構いなしに、横に立っていた相模が強引に清水の首に手を回し、引き寄せる。清水の表情が、わずかに迷惑そうに歪んだ。

「何を隠そう、俺と榊原の同期で、主席様だ」

白い歯を覗かせて言った相模に、清水は面倒くさげな溜め息を吐く。そこには、「またか」というニュアンスが少なからず含まれている気がした。

「そんな情報はいらんだろ」

「おう、いらぬいな」

清水の苦情をあつさりを受け入れた相模。清水の溜め息は益々深くなる。意外と、苦労人タイプなのかもしれない。

「……いらぬと思うならわざわざ言うな」

そう言った清水は、引つ付いた相模を剥がしにかかった。第二種軍装を整え、もう一度真っ直ぐに立つ。

「あたしは摩耶。よろしくな」

ひとまずは、自己紹介だ。摩耶に続いて、三人が名乗る。清水は、それをただジツと聞いていた。

「……それで、」

全員の自己紹介が終わると、清水はおもむろに口を開く。

「この艦隊の、旗艦は誰だ」

「あたしだけど?」

摩耶は手を上げて答える。こちらを向いた清水は、何かを見定めるように摩耶の目を見つめた後、細い両目を一層細くした。

「そうか。なら、俺は摩耶に乗る」

ほんの数瞬、摩耶は清水の言った意味を理解できなかった。頭がそれを理解した時、次に襲ってきたのは背中を走る冷たい感覚と、右腕の痛み。摩耶はいつか榊原にそうしたように、何ともない風でひらひらと手を振った。自らを守るために。

「あー、あたしはパス。そういうの柄じゃない。旗艦を譲るから、誰か他の娘にしてくれ」

長波、卯月、祥鳳は、特に驚いた様子を見せない。彼女たちは、摩耶が自分に人間を乗せることを嫌がることを知っている。理由はまだ説明していないが、そのことを受け入れてくれていた。

だが、清水は違った。

「責任逃れか？」

グサリ。狙い澄ましたかのような鋭い一言が、摩耶の心を抉る。

端から見れば、全くもつてその通りなのだ。それでも摩耶は、受け入れることはできない。自らに、人間を乗せることを。もう二度と、あの時のような思いはしたくないし、させたくない。

「何も、どうしてもお前に乗りたいと言っているわけじゃない。だが、榊原から旗艦を任せられ、引き受けたのはお前だろ。それを覆すようなことは、責任逃れの前に重大な裏切り行為だ」

「裏切り・・・!?!」

思わずカツとなりかけた摩耶は、それでも拳を強く握りしめ、歯を食い縛って耐える。

違う。裏切るつもりなどない。榊原のことは信頼しているし、認められているつもりだ。艦娘を大切に想ってくれている、誇るべき提督だ。

「裏切りでないというなら、旗艦を拒む——いや、俺を乗せたくない明確な理由を説明しろ」

清水の言葉に、摩耶の背中を激震が走った。清水は気づいているのだ。摩耶が旗艦を拒むのではなく、自らに人間を乗せることを拒んでいることに。

「理由は・・・」

開いた口の中が乾く。頭の中を、あの時の情景がよぎる。

——ダメだ。

仕舞い込むと決めたのだ。これはずっと——摩耶が摩耶でなくなるまで、自らで背負っていくと決めたのだ。

「……お前には、言えない」

「……そうか」

氷のように冷え切った声から、摩耶は目を逸らす。隣に立つ長波と卯月が、ハラハラと二人の推移を見守っている気配がした。

「つまり、俺が信頼できないから、乗せないんだな」

清水の問いかけに、摩耶は沈黙することを選ぶ。

「……旗艦とは、戦場のみならず、艦隊が安全な航海をするために、その全てを指揮する艦だ。ただ単に、指揮官が乗っている艦というわけではない」

まるで教え子を諭すかのように、清水はゆっくりとした口調で摩耶に説明する。だが摩耶とて、そんなことは百も承知なのだ。

「BOBの指揮をする艦娘、その運航を手助けするのが俺たち提督だ。俺には、お前たちを安全にパラオまで送り届ける義務がある。旗艦の選定は、そのためにも大事な事項だ」

清水の鋭い眼光が、真つ正面から摩耶を射すくめた。

「正当な理由なしに、旗艦の指定を曲げることはできない」

——ふざけるな……！

自分でもわかるくらい、摩耶はきつく清水を睨み据えた。

「理由ならある」

「ほう？」

「あたしが決めたからだ」

摩耶の言葉を、清水もまた真つ正面から受け止めていた。

「あたしは、人間はもう乗せないって決めたんだ。だから、あんたがなんと言おうと、あたしはあんたを乗せない」

お互いが、言葉を発することなく、静かに見つめ合う。西部劇で銃を引き抜く前に漂う、あの緊張感だ。相手の奥深いところを覗き込む。

「はいはい、そこまで」

緊張感の中に割って入ったのは、それまで状況を見守っていた相模

だった。ひらひらと、現状に似合わないおちやらけた表情で手を振り、睨み合いを強制中断させる。

「二人とも、西部劇じゃないんだから。今にも銃を引き抜きそうな雰囲気を漂わせるなよ」

隙あらば引き抜いて二、三発撃ちこむつもりだったのだが。

相模の言葉を受けてか、清水の視線にわずかな温度が戻る。代わりに、感情を消し去ったかのような瞳の奥に、軽蔑に似た色が見えた。摩耶は、それに気付かなかったふりをする。

これ以上、この男に関わるのは御免だった。

「・・・わかった。俺は祥鳳に乗る。旗艦も彼女だ。それで文句はないな」

「・・・ああ、ないね」

投げやりに答えた摩耶の後、祥鳳も戸惑いながらその申し出を承認した。こうして、復路の旗艦は摩耶から祥鳳に変更されることとなった。

——なんなんだよ、あいつは。

精神同調を終え、出港準備の整った「摩耶」から、清水の乗り込む「祥鳳」の方を軽く睨む。艦橋に立っているであろう清水は、飛行甲板の庇の影になって見ることはできなかった。

『出港、全艦両舷微速』

その代わりに、スピーカーから清水の指示が聞こえてくる。返事をするのも癪だが、復唱だけはちゃんと返して、主機を動かし始めた。

「長波」を先頭にして、四隻のBOBはルソンを旅立つ。

わだかまりを抱えながらも、摩耶たちはパラオを目指した。

◇

パラオ泊地に帰還した摩耶は、艦体をいつも通りの投錨地に固定して、内火艇で埠頭へと向かった。艇首に立ち、涼やかな風を受けても、その心は晴れない。清水の言葉が、ずっとしこりのように、残ったままだった。

間が悪いことに、同じように投錨した「祥鳳」からも内火艇が出て、先に内火艇埠頭に横付けていた。祥鳳と清水を乗せた内火艇の後

ろに横付けることになった摩耶は、今まさに埠頭に上がる清水の方を見る。接近するこちらに清水も気づいたらしいが、チラリと窺っただけで何か表情に出すわけでもなく、そのまま祥鳳が上がるのを待って、庁舎の方へと歩き始めてしまった。

——なんなんだよ、あいつ！

ふつつつと湧き上がる苛立ちをなんとか押さえこみ、摩耶も埠頭に上がる。帰還を告げるべく、執務室へと向かっていった。

庁舎の廊下を執務室へと向かう間、摩耶は前を進む清水を観察し続ける。憎らしいほどシヤンと伸びた背筋からは、歩き方すらも鍛えられていることがわかる。無駄に口を開くことはなく、祥鳳が時々交える泊地の説明を、終始黙って聞いていた。

しばらくして辿り着いた執務室には、すでに長波と卯月が待っていた。二人の艦体は直接埠頭に着けているため、執務室に戻るのも早い。

「護衛任務、無事完了しました」

榊原と秘書艦の曙に、一言だけ真面目に報告した祥鳳は、そのまま疾風迅雷の如く榊原にすり寄り、猫撫で声を発する。

「ねえ、提督？私、旗艦の大任をちゃんと果たしましたよ。何かご褒美をください」

そこまで言い切ったところで、祥鳳は曙によって無理矢理引つpegされる。その際に「あんつ」と微妙に色っぽい悲鳴を漏らすのもお約束だ。

「待って、旗艦は摩耶だったはずだけど？」

鬼の秘書艦によって羽交い絞めにされている祥鳳に苦笑しながら、榊原が首を傾げる。摩耶は頬を掻いて、曖昧に答えた。

「いやー、まあ。ちよつと色々・・・紆余曲折あつてな」

「・・・そうか」

榊原は何も聞かず、頷いた。

「報告ありがとう。一応、摩耶は残ってくれ。祥鳳、長波、卯月は解散して大丈夫だ」

「おう。お疲れさん」

「お疲れ様だぴよん！」

「お疲れ様でした」

三人が退室し、後には摩耶と曙、そして榊原と清水が残った。

「清水、よく来てくれた」

執務机を立った榊原が、清水に握手を求め、差し出された手を値踏みするように見た清水は、十秒ほどしてその手を取り、握手を交わす。

「話はこつちから始めさせてもらうぞ」

数秒の握手があつた後、清水が切り出した。

「用件は二つ。まず、連合艦隊司令部から、お前宛てに預かってきたものがある」

「俺宛てに？」

清水は持つていた鞆を開き、中から黒いファイルを取り出す。そこから取り出されたのは、一枚の書面だった。

「榊原広人少佐。本日付で一階級昇進を命じる」

——昇進・・・!?

清水の存在も忘れて、摩耶は飛び跳ねそうになった。榊原が——摩耶たちの提督が、その功績を認められて昇進したのだ。嬉しくないわけがない。曙の瞳にも、嬉しそうな光がきらめいていた。

「名目上は、お前がパラオの提督長だ。俺もお前も少佐ではややこしい。妥当な判断だろうな」

水を差すように余計なことを言った清水を、摩耶は軽く睨む。だが当の清水は、特に気にすることもなく、さらに話を続けた。

「二つ目に、俺の配属に関する書類。最終確認はお前がしてくれ」

それは、連合艦隊司令部から、清水にパラオ泊地配属を命じる書類。そして、提督としての清水についての書類。それらが合計五、六枚ほどだ。

書類一枚一枚をペラペラとめくっていた榊原の手が、一か所で止まる。その頭上に、大きなクエスチョンマークが浮かんでいる気がした。

「なあ、清水」

「なんだ」

「初期艦の欄が未記入だが？」

四枚目の書類、その記入箇所の一つを指差して、榊原が清水に尋ねる。全ての提督には初期艦と言われる艦娘が必ず割り振られており、艦娘とBOBに関するあらゆる運用術を実践的に教え込む役割を担っている。

「パラオ配属後、お前の裁量で決めろとのことだ」

「そうか・・・」

清水に言われた榊原は、顎に手を当て、しばらく考える仕種を取る。

パラオ泊地に所属する艦娘は、曙、摩耶、木曾、満潮、霞、陽炎、長波、大和、祥鳳、卯月で全てだ。このうち、長波、大和、卯月は初期艦になれるほどの練度はない。また、祥鳳は航空母艦という艦種であり、初期艦には不向きとされた。

摩耶が思うに、最も妥当なのは木曾か霞だ。二人とも十二分に練度が高く、ものを教えるのも上手い。

「よし」

榊原は、決めたようだった。真っ直ぐに清水を——それから摩耶を見つめた。

「初期艦は、摩耶に任せたい」

摩耶の背中を、強烈な電流が走り抜ける。

——冗談だろ。

目の前が暗くなるのを、摩耶はこれほどはつきり感じたことはなかった。

二ツ名

「面舵三四。針路二二三」

摩耶の横に立つ第二種軍装が、静かな声でこの艦の艦娘に告げた。その様子を、摩耶は腕組みをして聞いている。今鏡が手元にあったら、摩耶の表情は誰が見てもわかる仏頂面であるに違いない。

「了解びよん！」

清水の指示を受けた卯月が適当に復唱し、舵を切り始める。ふざけた返事にも、清水は特に何も言わなかった。

排水量の小さい「卯月」は、すぐに舵が利き始める。旋回半径も小さい。「睦月」型駆逐艦が船団護衛に最適な駆逐艦と言われるのも頷ける。

「・・・想像以上に小回りが利くな」

回頭を終えた「卯月」に、清水がぼそりと感想を漏らす。

「ふっふー、うちちゃんの本気はこんなものじゃないびよん！」
褒められたと受け取ったのだろう、卯月が得意げに胸を張る。普段なら、その仕種に苦笑するところなのだが、今の摩耶はそんな気分ではなかった。

摩耶と清水が揃って「卯月」に乗り込んでいるのは、艦娘とBOBに関する説明と慣熟を、卯月の訓練と同時並行して行っているからだ。

清水を——人間を自らに乗せることを良しとしない摩耶が、考えた方法だ。

——提督は、何考えてんだ。

清水の初期艦に、摩耶が選出されたのは昨日のこと。それからあれこれと考えてはみたが、結局榊原が摩耶を清水の初期艦に指名した理由は未だわからずじまいだった。

何か考えがあるらしいことはわかる。その考えを、少なくとも曙は理解していることも。だが自分のこととなると・・・どうも、鈍感になるらしかった。

「・・・摩耶」

摩耶を呼ぶ声が、隣から鋭く聞こえた。考えに耽っていた摩耶は、ハッと我に返って声の方を見る。清水が、いつも通りの細い目でこちらを見ていた。

「そろそろ昼食の時間だ。泊地へ戻るぞ」

「・・・ああ、そうしてくれ」

操艦の指示の出し方や、艦隊運動の基礎は、海軍出身のこの将校は一通り身に付けている。その辺りは教え込む必要がなかった。おそらく残りは、通常艦船とBOBの操作性の違いによる感覚のずれをすり合わせていくことになるだろう。

「取舵一杯。針路〇八五」

「了解だつびよん！」

清水の指示に、卯月がこれでもかと舵を利かせて、急速に回頭を始める。細い「卯月」の艦首が一気に左に振られて、艦が針路を変える。回頭が終わると、艦橋の正面には丁度天頂の太陽に照らされるパラオ泊地が見えていた。

「お腹すいたびよん」

艦の操作を行いながら、卯月がお腹の辺りをさする。一か月ほどの訓練でかなり慣れてきたとはいえ、まだまだ摩耶たちほど、自らの手足のように艦を操ることはできていない。それなりに集中力と体力を消耗するはずだ。

「卯月」の鋭い艦首が、穏やかな海を割いていく。泊地への入港は、後十分ほどと摩耶は見積もった。

◇

「終わったわよ」

お昼前。そろそろ書類に終わりが見えだした頃、曙が榊原に声をかけた。彼女に頼んでいた分が終わったらしい。曙専用と化している秘書官机の上で、書類がきれいに整理されて並んでいた。

「ありがとう。こつちもすぐに終わる」

「了解。お茶、いる？」

「頼む」

榊原がラストスパートをかけている間に、曙が給湯室へと向かう。

そしていつも通りに、榊原が書類を終えた丁度そのタイミングで、曙がお茶の入った湯呑みを二つ持って来た。今日はお昼が近いので、お茶請けはなしだ。

「ねえ」

受け取った湯呑みに口を付けようとした榊原に、曙が呼びかけた。上げかけた湯呑みを下ろし、榊原は曙を見る。そのまま、彼女は話を始めた。

「なんで、清水少佐の初期艦を、摩耶にしたの」

切れ長の目の奥、蒼い瞳が榊原を捉えている。

曙のことだ。どうして、榊原が摩耶を選んだのか、ある程度理解しているはずだ。その上で、その真意を確かめようとしている。生半かな答えは許されないし、そもそもそんな気は榊原にはなかった。

「・・・そうだな」

手に持った湯呑みを置き、軽く息を吐く。

「きっかけが、必要だと思った」

「きっかけ？」

摩耶が、胸の奥底に抱えているもの。普段の彼女は、泊地の良き姉御として、明るく振る舞っている。だがその内には、何か大きな壁がある。それを、摩耶はいまだに越えられていない。

その壁が、摩耶が旗艦を断り続ける——否、自らに人間を乗せることをよしとしない理由に繋がっていることはわかる。

「・・・いい意味でも、悪い意味でも、清水と摩耶はお互いを強く意識している」

乗り越えられない壁に向かい続ける、葛藤した摩耶の感情。自らの信念なら、感情すらも押し殺す清水。

「多少強引な手だけど。摩耶が自分の中の“何か”を乗り越えられるとしたら、そのきっかけは清水だと思う」

そう言うってから、榊原は少し考え、こう言い換えた。

「摩耶が欲しているのは、“彼女自身の”新しい提督だ」

言い切った榊原を、曙は静かな目で見つめていた。何かを見定めようとする、深い蒼の瞳。

やがて、その小さな唇がゆっくりと開かれる。出てきたのは、まったくもって彼女らしい一言だった。

「・・・いつの間に、一人前の提督みたいなこと言うようになってんのよ」

「まったくだ、な」

苦笑するしかない。だが、自分の考えが間違っているとも思っていない。

「クソ提督の考え、わかったわ。こつちでも、フォローできるところはフォローする」

「よろしく頼むよ」

曙は、時たま見せる柔らかかな笑みを浮かべて、榊原の頼みに答えた。「秘書艦として当然のことよ。クソ提督は、あたしの——あたしたちのクソ提督なんだから」

曙の言葉が、榊原の心を打つ。言った本人は、照れたように頬を掻いて、そっぽを向いている。

——それは殺し文句だよ。

目線の合わない曙の横顔に、榊原は微笑む。

彼女こそ、榊原の秘書艦であった。

正午を回った食堂には、昼食を取る十人の艦娘と、二人の提督がいた。釣掛以下食堂部員が作ってくれた料理に、全員が舌鼓を打っている。課業上がりのご飯は格別だ。

「ねえ、そういえばなんだけど」

青じそドレッシングをチョイスしたサラダを頬張りながら、陽炎が榊原と清水の方を見遣った。

「清水少佐のことは、なんて呼べばいいの?」

「呼び方・・・?」

陽炎の質問に、清水は照り焼きチキンに伸ばしかけた手を止めて、怪訝な顔になる。

「どっちも『司令』とか『提督』じゃわかりにくいじゃない」

「・・・それもそうね」

満潮もそれに同調した。

「普通に、『清水少佐』でかまわないと思うが」

当の清水は、興味なさげにそう言った。だが、陽炎がそれで納得するわけもなく、口を尖らせて考え続ける。

「『清水少佐』じゃ味気ないじゃない？だからもつところ、『司令』みたいに親しみの湧く二つ名がある方がいいと思うけど」

陽炎の「司令」呼びは二つ名感覚だったのか。

「・・・『將軍』、とか？」

陽炎の提案に、満潮がツツコミを入れる。

「それじゃ陸軍っぽいじゃない」

「そうよねえ・・・」

再び悩んでしまう二人。代わりに元気よく手を上げたのは、卯月だった。

「はいはい！『キャプテン』とかかっこいいと思うぴょん！」

「海賊っぽいわね。ていうかそれ、木曾さんでしょ」

パラオ泊地には、すでにキャプテン・キツソがいたので却下。考え込む艦娘が三人に増えてしまった。

「なあなあ、じゃあさ」

続いての挑戦者は長波だ。自信ありげに、八重歯をチラつかせて提案する。

「『頭領』、とかいいんじゃないか？」

「水軍？水軍よね、それ」

「何？ダメ？」

「水軍と海軍じゃ違うでしょ」

却下ということになってしまった。四人の駆逐艦娘が再び考え込む。

「・・・なあ」

うんうん唸る四人を尻目に、清水が怪訝な表情のまま、榊原の方へ小声で呼びかける。榊原もそちらへ身を寄せ、清水の言葉に耳を傾ける。

「このくんだり、必要なのか」

「ごもつともである。」

「・・・まあ、楽しそうだから。いいんじゃないか」

苦笑いする榊原は、実は完全に他人事と思つて楽しんでた。清水が軽く溜め息を吐く。

「お前は、相変わらず甘いな」

そうこうするうちに、今度は満潮が柏手を打つ。何かを思いついたようだ。

「『アドミラル』ってどう?」

「それ英語。あたしら日本語」

まだまだ続きそうな気配だった不毛な争いに終止符を打ったのは、意外にも霞だった。白米の入った茶碗を平らげた彼女は、完全に投げやりに、こう言い放った。

「何、くだらない事で悩んでんのよ、あんたたちは」

まったくもって、彼女の言う通りである。

「そんなの、最初から決まってるでしょうが」

「・・・ん?」

どういう意味だろうか。

「こっちが『クソ』なんだから、そっちは『クズ』に決まってるでしょ」
それでいいのか霞さん。というか、決まってるのか。

前言は撤回せざるを得ないのかもしれない。霞もまた、何だかんだとこの会話を楽しんでたようだ。

「なるほど・・・」

霞の言葉に、四人の駆逐艦娘が納得したように腕組みをして頷いている。他の艦娘たちも、苦笑いこそしているが、やはり納得してしまつたようだった。

「・・・」

一方、「クズ」とあだ名を付けられかけている清水は、微妙な表情で沈黙したままだ。その微妙な表情のまま、清水は榊原の方を向く。

「・・・お前、『クソ』って呼ばれてるのか」

その瞳の奥に、「お前は一体何をした」というニュアンスが含まれているのを、榊原は読み取つた。

この件に関して、榊原は上手く説明をすることができない。苦笑のまま、曙の方を——榊原を「クソ提督」と呼び始めた彼女の方を向く。チラと視線を合わせた彼女は、何も言うことなく、パイとそつぽを向いてご飯を口に運んでいた。

「まあ……色々あってな」

榊原が誤魔かしている間に、箸を置いた霞が決を採ろうとしている。

「それじゃあ、以後は『クソ提督』と『クズ司令官』ということだ」

異論の声はどこからも出なかった。代わりに、清水はさらに榊原に尋ねてくる。

「……駆逐艦娘って、こんなに口が悪いものなのか」

これには、榊原も乾いた笑みを浮かべるしかなかった。

「そういうことになったけど、いいでしょ秘書艦」

霞が最終的な確認を曙にする。昼食を食べ終わった彼女は、手を合わせて「ごちそうさま」と言ってから、完全に投げやりな口調で、

「それでいいんじゃない、別に」

そう決定した。

ここに、二人の提督が、パラオ泊地に誕生した。ただし、その二つ名は、お世辞にも格好のいいものとは言い難かった。

夜、ラムネ、摩耶

内火艇から埠頭に乗り移った摩耶は、久しぶりに気持ちのいい演習ができたことに満足し、大きく伸びをした。突き上げた両腕にパラオの風が絡まり、薄い汗を心地よく吹きさらす。このまま風呂に入ったら、さぞかし気分がいいことだろう。

今日行われた演習は、摩耶と霞が考案した、新陣形の実験だった。〃大和〃と〃祥鳳〃を中核に据え、高い防空能力を発揮できるように工夫したものだ。

〃霞〃が試験的に搭載した二五ミリ機銃の改修型も、良好な結果を残している。今回の演習に同伴してその性能を確かめた夏川は、全艦への搭載を目指して早速度産型の開発に移るとのことだ。

改修型二五ミリ機銃がパラオ泊地全艦に配備されれば、艦隊の近接防空能力は大きく向上するはずだ。

「そうすつと、やっぱり問題は遠距離と中距離か・・・」

埠頭を離れて庁舎の方へと歩きながら、摩耶はポツリと呟く。

遠距離防空は、電探と戦闘機を駆使したエアカバーのことだ。パラオ泊地でこの任に当たるのは祥鳳とその艦載機隊である。防空専門空母の向きが強い改装を受けた〃祥鳳〃には、優秀な電探と多数の戦闘機が搭載されている。だがいかんせん、その二つを有機的に繋げる、実用に耐えうる機上通信機が無かった。本土防衛艦隊が保有している現代艦船や航空機にあるものと同じものを搭載できればいいのだが、BOB艦載の航空機も、母艦と同じように現代製の部品に対して拒否反応を起こしてしまい、優秀な通信機を配備できていなかった。

当分は現用のもので対応するしかないが、呉の工廠部ではすでに改良型の開発が終了したらしく、榊原と夏川の名前で、仕様書を回してもらおうよう要望してみるとのことだった。

一方、中距離防空とは、高角砲を用いた対空射撃のことだ。現在、パラオ泊地を含めた日本海軍の主力高角砲となっているのが、四〇口径一二・七センチ高角砲だ。連装型は多くのBOBが搭載しているが、

装填速度と旋回俯仰速度にロスがあり、満足のいく装備とは言えない。

次に主力と位置付けられているのが、「秋月」型駆逐艦に搭載されている六五口径一〇センチ高角砲だ。長一〇センチ砲とも呼ばれるこの高角砲は、一二・七センチ高角砲では足りなかった装填速度と旋回俯仰速度が大きく改善されている。砲口径が小さくなったために、高角砲弾の危害半径は狭くなったが、それを補って余りある濃密な弾幕を形成することができた。整備性や砲身命数が短いなど、問題はいくつかあるものの、現状最も優秀な高角砲と言えた。

だが、中距離防空における問題は、何も高角砲だけではないのだ。高角砲を指揮する高射装置にも、克服しなければならぬ課題があった。そもそも、この高射装置の航空機追尾性能が悪いのである。いくら優秀な高角砲を積んでも、それを指揮する高射装置が敵機を捉えることができなければ、豆鉄砲と同義なのだ。

この問題を、夏川たちパラオ泊地工廠部は、改修型二五ミリ機銃に据え付けた簡易式計算装置によって解決しようとしている。台座部分の旋回性能を大きく向上させた高射装置に、計算速度の速い射撃指揮装置を組み込み、高角砲の諸元算出までにかかるロスタイムを大幅に削ろうというものだ。将来的には、電探との連動も考えているという。

遠、中距離における防空戦闘の問題は、近いうちに解決される。だがそれは、あくまで技術的な問題であり、せつかくの新型装備を十二分に扱うためには、それを搭載するBOB、そして艦娘の習熟が必要不可欠だ。

——兵装の習熟、か。

摩耶の頭をよぎったのは、半月ほど前に榊原から説明された、自らの大規模改装の試案だった。そこには、これら多くの新型装備を搭載した、まさしく「対空番長」とでも言うべき「摩耶」の姿が描かれていた。

摩耶はしかし、この大規模改装について、受けるか否かの返答をしばらく保留にしている。理由は、実のところ自分でもよくわ

かかっていない。ただ、大規模改装に対する決心が着かないでいたのだ。

同じく大規模改装の話が来た木曾は、一も二もなく承諾していた。彼女の改装内容は、すぐ上の姉二人がそうであったように、高い雷撃能力を誇る一撃必殺の艦種、重雷装巡洋艦への大幅な改造となる。ただし「木曾」の場合は、「北上」、「大井」よりも発射管を二基減じ、代わりに個艦防衛能力——対空兵装の増備を行うらしい。完了の暁には、「木曾」は五連装魚雷発射管を八基搭載し、片舷二十射線、計四十射線の雷撃能力を確保しつつ、高い防空能力を持つことになる。

改装計画の概要はすでに固まりつつあり、早ければ二週間以内にドック入りして、改装作業に移るそうだ。

「・・・あー、やめやめ」

女々しい思考に入りそうになった摩耶は、慌てて頭を振った。この方向はよくない。

「とりあえず、風呂だ風呂」

諸々の葛藤を、大して感じてもない頭の疲れのせいにして、摩耶は大浴場へと歩みを速めた。

汗をさっぱりと流した後のご飯は、また格別だった。パラオ泊地食堂部員が腕によりをかけて作った今日の夕御飯は、カレイの煮付けを中心とした純和食だ。優しい味つけに、腹が満足した。

夕食を終えた摩耶は、食堂からラムネを持ち出して、なんとなくに埠頭へと向かった。自らの内火艇が泊まっている内火艇埠頭のへりに、摩耶は靴を脱いで腰かけた。

第一から第六埠頭までと違い、内火艇埠頭は潮の満ち引きに合わせて上下する、浮き埠頭だ。乾舷の低い内火艇のために、海面からの高さを一定にする必要があるからだ。

そのため、足を投げ出すと、海面に足先が浸かる。ひんやりとした海水の感触に、摩耶は心地よく溜め息を吐いた。

普段なら、木曾あたりと話したり、自室で読書や研究に没頭したりしているのだが、生憎今日は、木曾が夏川に呼び出されて不在だった。

大和と祥鳳は、何やら怪しげな笑みを浮かべて食堂の調理場を借りており、摩耶の本能が関わるなど警告した。

駆逐艦娘たちは、いつものごとくトランプやら将棋やらに熱中していた。その輪の中には、やはりいつものごとく、榊原が巻き込まれている。

まあ、要するにだ。たまには静かに、潮風に吹かれながらラムネを傾けるのも悪くはないと、摩耶は思ったのだ。

シユポツ

爽快な音がして、ラムネのビンに蓋をしていたビー玉が外れ、ビンの中に落ちる。噴き出しそうになる炭酸をしばらく押さえ、溢れないようにした。

やがて、泡が収まる。それを待っていた摩耶は、よく冷えたビンを傾け、中身の透明な液体をあおる。

痛いほどの涼しさが、喉を走り抜けた。

「うまい……！」

夏はやはりこれに限る。もうすぐそこまで迫った季節を思い、摩耶はもう一度ラムネに口付ける。まあ、気候が一年を通して温暖なパラオは、日本で言えば一年中夏みたいなものだが。

ビンの三分の一ほどを飲み干したところで、摩耶はもう一つ持ってきたものを太ももの上に出す。小さなタツパーだ。

開けた中には、一口サイズに切られたスイカが入っている。日本から届けられた、今年の初物だそうだ。食堂を出る際、釣掛が持たせてくれた。

大きな一切れを思いっきりかじるのもいいが、これはこれでまた面白い。中に入っているつまようじを取って、一切れにツツと刺し、口に運ぶ。シャリシャリとした食感に、瑞々しい甘さ。紛れもない夏の風物詩だ。

——でも、やっぱりかぶりつくのが至高だな。

そんなことを思いながら、摩耶は二つ目を口にした。

和やかに吹く潮風の中、ふと近づく足音がした。港湾部員でも見回りに来たか？ そう思った摩耶は、クルリと後ろを振り返った。

あまりに予想だにできなかった人物の登場に、摩耶は目を見開いて固まった。

夜だというのに、きつちりと第二種軍装を着こなす影。短く揃えられた髪。細いフレームの眼鏡が、海面に映る夜を反射して、銀色に輝いていた。

「摩耶・・・？」

自分で近づいておきながら、清水は摩耶に驚いたようだ。怪訝な表情のまま、こちらへやって来る。

——なんで、お前なんだよ・・・。

なぜ、こんな夜中に顔を合わせるのが、こいつなんだ。

「埠頭に人影があると思ったら、摩耶だったのか」

夜のようにひんやりとした声音だが、最初に顔を合わせた時のような刺々しさがなく、摩耶は気づいている。基本的に感情を表さない清水だが、だからといって艦娘に冷たいなんてことはないのだ。「なんだよ、あたしがいちや悪いのか」

もつとも、第一印象が最悪な摩耶が、素直に彼の登場を喜べるかどうかは別だ。

隣にあったボラードに腰かけた清水は、そんな摩耶の言葉を気にする風もなく、なぜか手に持っているラムネのビンを開ける。

シュポツ

摩耶の時と同じ、爽快な音が走り抜けた。

「お前は、他の奴と一緒にいることが多いからな。こうして一人でいるのは、意外だった」

清水の言葉に、摩耶は目を見開く。

・・・意外と、他人のことをよく見ている提督なのかもしれない。

「・・・別に。あたしだって、一人でいたい時はあんだよ」

そう言った語尾は、さつきよりも弱くなった。

摩耶が無言で差し出したスイカを、清水も摘まむ。シャリシャリ。波音の合間に、二人分のスイカを食べるメロディーが重なっていた。

「・・・摩耶」

ふと、なんの前触れもなく、清水が摩耶の名前を呼んだ。彼の方を

向くことなく、摩耶は態度だけで話を聞いていることを示す。

「はつきりさせておく。俺は、俺の考えが間違っているとは思わない。艦娘を指揮するのが提督の仕事で、その職務を全うするために、旗艦は最もその役目に相応しい艦を選ぶべきだ」

——その話を、ぶり返すか……！

摩耶は力の限りラムネのピンを握りしめた。だが次に清水が放った言葉は、摩耶の想像とは違った。

「が、お前の考えが間違っているとも言えない。そんなことを言う権利は、俺には与えられていない」

——…何を。

何を言おうとしているんだ。

「お前たちに感情がある以上、俺のような者を乗せたくない気持ちもあるはずだ。それを無理強いしてまで乗り込めば、精神同調によって繋がれたお前たちの艦にも、何らかの悪影響があるかもしれない」

その言葉がわずかに早くなっていることは、摩耶にはわからなかった。

「要するに、だ。この間の一件は、俺に非がある。子供っぽく、ムキになっただけだ。すまなかった」

思わず、摩耶は清水の方を見た。その摩耶に向かって、清水は頭を下げている。あまりに突如な出来事で、摩耶はとっさに言葉が出てこなかった。ただ、一つ。

——そっか。こいつも…提督なんだ。

言いたいことは、それだけだったのだろう。残ったラムネを一気にあおり、清水は立ち上がる。

「二つだけ答えてほしい。お前が大規模改装への返答を保留にしたのは、お前が俺を『摩耶』に乗せないのと、同じ理由か？」

言われて、背中に電流が走った。今まで思い至らなかった——いや、考えないように、心のどこかでできていたのだろうか。

「…わからない。でも、多分、そうだと思う」

清水の指摘を、摩耶は素直に認めた。

「…俺は、お前に何かしてやることはできない」

眩くような声が、背中に聞こえた。

「あいつのマネくらいは、してやれる」

あいつ——榊原の「何をマネできる」のか。明言しなくとも、摩耶には伝わっていた。

再び一人になった摩耶は、ラムネのビンを顔の前に掲げて、向こう側を透かして見る。海面の揺らめきに反射した星の光が、ビンとラムネで散乱して無限の輝きに変わった。そのきらめきが、今の摩耶には眩しいくらいだ。

ビンに口付け、クイツとあおる。炭酸ののどごしが、爽やかな刺激を伝えた。

悩メル艦娘

食後のお風呂を出た榊原の目に、ふと休憩スペースの冷蔵庫に入っていたコーヒー牛乳がとまった。頭を拭いていたタオルを首にかけ、冷蔵庫の方へと歩み寄る。懐かしい形のビンを中から取り出して、休憩スペースに据えられたベンチに腰掛けた。

最近多いプラスチックの蓋ではなく、紙でされた蓋なところに、コーヒー牛乳を発注している食堂部のこだわりを感じる。その蓋を器用に取り外して、榊原はビンを傾けた。ほろ苦い液体が、冷たく風呂上がりの体を駆け抜ける。

一息にあおった榊原は、大きく息を吐いて中身を全て飲み干した。「いい飲みっぷり」

口元を拭った榊原の後ろから、聞きなれた声があった。ホカホカと湯気を立て、寝間着に身を包んでいるのは、我らがパラオ泊地秘書艦の曙だ。風呂上がりの髪は結ばずに流したままで、肩にタオルをかけている。切れ長の目元が、少し下がっていた。

「うまかった。風呂上がりは、やっぱりこれに限るな」
「あっそ」

そう言った曙は、おもむろに冷蔵庫を開け、中からコーヒー牛乳のビンの一つ取り出す。それから、榊原の隣に腰を下ろした。

細い指で器用に蓋を取ると、曙もビンを傾け、風呂上がりの一杯をおおる。ピンクに染まった喉がゆっくり動いていた。口を離すと、微かな吐息が出る。

「ん、おいしい」

そう感想を漏らしてから、半分ほど残った中身を一気に飲み干した。榊原と同じように、口元を拭う。

「いい飲みっぷりだ」

笑った榊原から、曙はツイットと視線を外してしまった。その頬が若干赤いのは、風呂のせいだろうか。

「誰かと一緒じゃなかったのか」

「一人よ。風呂場まで、あんなうるさい連中と付き合ってらんないっ

ての」

ぶつきらぼうに言った曙に、榊原は苦笑する。そんな憎まれ口を叩きつつも、面倒見のいい初期艦なのである。

「湯船の中ぐらい、一人でのんびり、星でも眺めてたいの」

「・・・それ、できるか？」

「無理ね」

「そうだよなあ」

二人して諦めに近い溜め息を吐き、次いで笑ってしまった。

パラオ泊地艦娘たちの威勢の良さは折り紙付きだ。それは風呂場でも変わらない。女湯の隣にある男湯にまで声が聞こえてくるほどだ。

「たく、あいつら、一体いつ休んでんのよ」

「元気なのはいいことじゃないか？」

「限度つてもんがあるの」

その時、背後の風呂場——女湯の暖簾の向こうから、何か恐ろしげな声が聞こえた。続いて、爆発するような笑い声。間違いなく、今パラオ泊地の風呂場は、戦場と化していた。

「・・・水雷戦でもやってるのか？」

「はぐれ深海棲艦でも入ってきたんじゃない」

秘書艦殿の溜め息は、益々深くなるばかりだった。

「俺もさ。一人で星を眺めてるんだけど。隣から声が聞こえてきて、何て言うか・・・全くもって、一人で風呂に入っている気がしない」

でも、嫌なうるささじゃない。その認識は、榊原も曙も同じだった。星空の下で、湯気に紛れて木霊する声が、パラオ泊地そのものだ。「・・・まあ、風呂自体はちゃんと入ってるし。一通り騒いだら、大人しくなるし」

大人しくなるまでが大変だけど。そう呟く曙は、どこからどう見てもお母さんだ。だから榊原は、思わずポロツと、こんなことを口走ってしまった。

「なんだか、曙はお母さんみたいだな」

言われた曙の反応は劇的だった。物凄い反応速度で榊原の方を見

た彼女の頬は、熟れた林檎のように赤い。

「な、何わけわかんないこと言ってるのよ、このクソ提督！」

目を怒らせた曙が反論するが、それが照れ隠しに近いものだと、榊原にはわかった。

「周りをよく見てて、優しくて、世話焼きで」

榊原が一言発する度に、曙の頬の赤みが増し、プルプルと震えだす。悶えるような表情は、どこか艶っぽくもあった。

「っ！そ、そんなこと言ったら！クソ提督だって、お父さんみたいなもんでしょがっ！」

彼女にとっては、それが精一杯の反撃だったらしい。榊原は苦笑する。

「せめてお兄さんって言ってほしかった」

「それ言ったら、あたしのこともお姉さんって言いなさいよ」

「それはそうか」

そんな、他愛もない会話。気づくと、榊原も曙も、口元が緩んでしまっている。やがて耐え切れずに、決壊した。腹を抱えるほどに笑ってしまう。

「ほんつと、どうでもいいじゃない」

「ああ、まったくだ」

本当に、下らない話だ。

「もう部屋に戻るわ。クソ提督も、早く寝なさい」

「ああ、そうするよ」

二人は共に立ち上がり、飲み干したコーヒー牛乳のビンを回収ボックスに入れる。蛍光灯の光を中に封じ込める二つのビンは、仲良く並んで回収ボックスに収まった。

「さ、戻るわよ」

榊原を見上げた曙が、満足げにそう言った。

執務室の隣にある自室に戻った榊原は、すぐには眠らず、自作の艦型識別表を見つめていた。もちろん、収められているのは「謎の艦隊」の艦型だ。

ハルゼーから譲り受けた写真や推定諸元をもとに、その艦型を割り出したこの艦型識別表を、榊原は時折眺めていた。見れば見るほど、不思議な艦たちだ。

と、その時。榊原の部屋の扉がノックされた。小刻みなリズムは、どこか柔らかい。

この時間帯に、来客というのも珍しかった。

「提督、いるか？」

さらに榊原を驚かせたのが、ノックの主が摩耶だったことだ。

「どうぞ」

珍しいこともあったものだと思いながら、榊原は入室を促す。一応、榊原の私室には、小さな机と椅子が二脚、置かれていた。

ゆつくりと扉を開けた摩耶は、片手で詫びながら部屋に入ってきた。

「わりい、こんな遅くに」

「気にするな。もう少し起きているつもりだった」

椅子を勧めると、迷ったような素振りの後、遠慮がちに腰掛けた。摩耶には珍しいなと思いつつながら、榊原は尋ねる。

「何か飲むか？お茶かコーヒーぐらいしかないが」

「いや、いいよ。あたしも、ちよつとしたら寝るから。ほら、カフェイン入ると、眠れなくなるし」

「そうか」

電気ケトルに伸ばしかけた手を引っ込め、榊原は机を挟んで摩耶と向かい合う椅子に座った。

「それで、どうかしたのか？」

「あ、ああ。えつと」

言い淀むような間があった。榊原は急かすことなく、彼女が言葉を探している時間を待つ。やがて視線を彷徨わせながら、摩耶は話を始めた。

「その、さ。変なこと訊いてるって思うかもしれないけど」

こちらを窺うような目線に、榊原は小さく頷くことで応える。

「あいつは・・・清水ってのは、どんな奴なんだ」

尋ねた摩耶に、榊原はわずかながら目を見開いた。

何があつたのかはわからない。ただ、摩耶が清水のことを知ろうと思つた、そんなことがあつたのは間違いない。

それがなんであるか、関知するつもりはない。ただ榊原の中で、願望が少しずつ確信に変わりつつあつた。やはり、摩耶が彼女の中の「何か」を乗り越えるのには、清水の存在が欠かせないのだ。

「そうだな・・・」

言葉を選びながら、榊原は考え込む。だがやがて、そうして考え込むこと自体が無駄なことだと思ひ至り、苦笑を浮かべてしまった。

「よくわからん奴だ」

「・・・え？」

砕けた調子で言つた榊原に、摩耶は理解できないような顔をした。

正直なところ、榊原とて清水という提督を理解していない。確かに、同期の中では相模と同じくらいには清水のことを知っているつもりだが、それはあくまで彼らの思つていることに過ぎない。提督としての清水が、いかな信念に従つてここにいるのかを、榊原は知らない。「自分のことは、あまり喋りたがらない性質でな」

「それは・・・確かにそうかもしれないな」

摩耶にも、何か思い当たることがあつたのだろう。

「確かに、俺と相模が、清水との付き合いは同期たちの中で一番深い。それでも、お互いのことを話し合うような仲じゃなかった。清水が提督志望だつていうのも、つい最近知つたことだ」

榊原が慎重に言葉を選んで喋つているのを、摩耶はジツと聞いていた。

「けど、これだけは言える。清水も、俺たちと同じだ。艦娘と共に戦うことを選んだ、覚悟と信念ある提督だ。摩耶たちと戦うことには、何の躊躇いもない」

候補生時代からそういう奴だった。いい奴かどうかは別にして、実直で、そして自分を信じている。提督にこれほど適任な人物はいないと、榊原も思っている。

榊原の言葉を聞き届けた摩耶は、その真意を測るように、両目を閉

じて黙考していた。やがて、迷いの色を帯びた両の瞳が、伏し目がちに机を見つめる。

「…あいつに言われたんだ。どうして、旗艦指定を断るのか、って」
どのタイミングの話をしているのか、榊原にも見当が付いた。ルソンから帰還してきたとき、旗艦を任せた摩耶ではなく、祥鳳が旗艦を務めていた。摩耶たちと清水の初顔合わせの際に何かがあつたことは、想像に難しくない。

「今のあたしには、それに答える覚悟がなかった。お前にも、あいつにも、ずっと黙つたままだ」

机の下で、摩耶の両拳が、強く、強く握られた気がした。

「正直、責められても文句の言えないことだとはわかつてる。だからこそあたしは、もしかしたらこのことを、ずっと黙つたままでいるかもしれない」

なのに。掠れたような声を、摩耶の心の眩きを、榊原は静かに聞いているしかなかった。

「あいつは、お前と同じように、待つてくれるって言った。それだけじゃない。ルソンで一方的にあたしを責めたことを、『子どもっぽくムキになっていた』って、頭まで下げて」

噛み締めた唇。摩耶は戦っているのだ。清水によって突き付けられた、自分の中の「何か」と。彼女自身、乗り越えなければならないとわかつている壁と。

「…子どもっぽいの、どっちだよ…」

絞り出すような言葉を最後に、摩耶は口を閉ざした。

「…摩耶」

そんな摩耶に、榊原はできるだけ声音を柔らかく、言葉をかける。

「清水は、絶対に嘘はつかない」

そんな、非合理的なことを好んでする奴じゃない。

「待つてくれる。摩耶が戦う覚悟を決めているからだ」

何と戦うかなんて、言わなくても摩耶には伝わったようだった。

「あいつも俺も、頑固だからな。待つと言ったら、とことん、いつまでも待つぞ」

榊原の言葉に、目の端を湿らせた摩耶が薄く笑った。

「何だよ、それ」

「相模にはよく呆れられたもんだ。あいつも大概だと思うが」

候補生時代、三人で我慢比べをして、サウナからなかなか出てこず、教官に怒られたことがあった。

「だから、摩耶。もしも摩耶が、理由を話してくれるつもりになったら、まず清水に話してやってくれ。きつと、どうしたらいいか、あいつも考えてくれる」

「・・・わかった。そうする」

摩耶は小刻みに、何度も頷いた。その頭に、榊原はいつものように手を乗せて、ポンポンと叩く。それが、精一杯の励ましになるように、と。

ルソン警備隊ノ提督

七月ともなれば、日本の季節は夏になる。ここルソンも同じだ。今日も今日とて、ポカポカ陽気が辺りを満たしていた。

カランコロンという、下駄が規則的に床を打つ音が、軽やかに響いていた。ルソン警備隊の庁舎を、執務室へと向かう瑞穂の心も、下駄の音と同じように軽やかだった。

両手には、今しがた資料室から持って来た紙束を抱えている。瑞穂が愛する提督に頼まれて持って来たものだ。

彼女の提督である相模少佐は、この警備隊の提督長ではないため、本来は執務室に詰めていることはない。普段はもっぱら、周辺地域の警戒活動や対潜掃討作戦、訓練なんかの視察をしている。そんな彼が、今執務室にいるのは、警備隊の提督長、卓己中佐が本土へ出張中であつたからだ。臨時に、指揮を任されているわけである。

普段が不真面目と言うつもりはないが、執務室で真面目に書類仕事に勤しむ相模の姿は、いつものフランクな感じとギャップがあつて、またかつこいい。生来飲み込みが早いのだろう、ルソン警備隊秘書艦の由良から教わつた書類仕事のノウハウとコツを二、三日で会得した相模は、スラスラと書類の山を片付けていた。瑞穂の手伝いがいらないくらいだ。

瑞穂自身、どちらかと言えばのんびりで、飲み込みが遅い方だというのはわかつているつもりだ。そのせいで、相模の足手まといになっているんじゃないか。そんなことを気にした瑞穂に、相模は書類の上にペンを走らせていた手を止めて、その大きな手で頭を撫でてくれた。

——「書類を片付けるのは、俺の仕事だ。瑞穂のために、今の俺ができることをしたいんだ」

そう言つて微笑んだ相模。その表情を思い返すだけで、胸が高鳴り、頬が熱くなる。撫でられた頭が暖かい。口元が緩んでしまうのを感じて、瑞穂は慌てて頭を振つた。

——瑞穂、しっかり。

相模が瑞穂のために頑張るのなら。瑞穂もまた相模のために頑張りたい。そう思ったのだ。

頬の緩みを引き締めて、瑞穂は執務室の前に辿り着いた。扉をノックしようとした彼女は、そこであることに気がついた。

両手が塞がって、扉をノックすることができない。というか、そもそも扉を開けることができない。

——ど、どうしましょう。

相変わらずどこか抜けている自分に、瑞穂は頭を抱えたい気分だった。

「あ、あの。提督?」

仕方なく、瑞穂は執務室の中にいるであろう相模を呼んだ。程なく、内側から扉が開かれる。中から、相模の優しげな顔が覗いた。

「どーした、瑞穂?」

尋ねた相模が、瑞穂の手元を見る。彼は、それで全てを理解したらしかった。

「・・・あー。それじゃあ、ドアを開けられないよな」

「あの・・・すみません」

「いや、俺もそこに気づかなかったわ。悪かったな。資料、ありがとう」

そう言って、相模は瑞穂の頭を撫でる。代わるものがないその感触に、瑞穂は頬が熱くなるのを感じながらも、笑顔で応えた。

「資料は、どちらに置けばよろしいでしょうか?」

「あそこのスペースに頼む」

「はい。わかりました」

相模に示された位置に、瑞穂は持ってきた資料の束を置く。執務机の方は、すでにほとんどの書類が終わったらしく、積み重ねていた紙の山が消えていた。

さすがの処理の速さだった。

「提督。瑞穂、お茶を淹れてきますね」

そろそろ仕事が終わるのを感じて、瑞穂は申し出る。執務机に戻った相模は、爽やかな笑みで頷いた。

「おう、よろしく」

「はいっ」

瑞穂も元氣よく返事をして、執務室の隣に設けられた給湯室に入る。電気ケトルのスイッチを押し、コポコポとお湯が沸く音を聞きながら、お茶つ葉を急須に取った。

お茶の美味しい淹れ方を教えてくれたのも、相模だった。彼のお婆ちゃん直伝の淹れ方だという。そんな他愛のないことでも、教えてもらったことが嬉しい。

——お茶請けはなし、ですネ。

もうすぐお昼時だ。

淹れたお茶が、飲みやすいくらいに冷めるまで待つ。執務が一段落した後の一杯目は、一息にあおるのが相模だった。熱いよりも、少し冷めているくらいがいい。

お茶を淹れ終わった瑞穂が執務室に戻ると、相模がペンを置くタイミングは同じだった。

「お、来た来た」

瑞穂が持つて来たお茶を、嬉しそうに待っている。そんな彼のもとに、瑞穂は足元に気をつけながら、急いだ。

「お疲れ様でした、提督」

瑞穂が差し出した湯飲みを、相模が受け取る。

「いやあ、大したことじゃないって、これくらい」

笑った相模は、湯飲みに口付けて、グツとあおる。

「ん、美味しい」

「それは良かったです」

瑞穂は満面に笑顔を浮かべた。

「美味しいお茶が淹れられて、料理もできて。瑞穂は、いいお嫁さんになるなあ」

「そ、そんな」

そんなことを言われると、照れてしまう。席に着いてお茶を飲むことも忘れ、瑞穂は赤くなつた顔をお盆で隠した。

「て、提督だからですよ」

その時、執務室の扉がノックされたのだが、瑞穂も相模も気づいていなかった。

「それは身に余る光栄だな」

相模はまた笑った。よく笑ってくれる提督なのだ。だから、瑞穂も嬉しい。

「瑞穂」

「はい、提督」

笑顔で名前を呼ぶ相模に、瑞穂も微笑みで応える。

「瑞穂」

「提督」

ズバタアーンツ

「お前らしい加減にしろかも!!」

物凄い勢いで、執務室の扉が開かれた。瑞穂が振り向くと、そこには彼女が尊敬する先輩水上機母艦娘が立っていた。

「いつまで待たせる気かも！ていうか人を待たせといて、周りにお花畑オーラ振り撒くなかも！」

そこまで一息に言い切った秋津洲は、ゼーハーと肩で息をしている。

「お疲れ様です、秋津洲先輩。執務、終了しました」

「あ、うん。お疲れ様かも。さすが、仕事が早いかも」

秋津洲が感心したように言った。

「おうっす、お疲れ、秋津洲先輩」

一方、ニヨニヨという擬音が聞こえてきそうなのは、相模だ。彼の軽い労いの言葉に、秋津洲は頬を膨らませる。

「本当にそう思うなら、せめてノックぐらい気づいてほしいかも。ていうか先輩って呼ぶなかも」

「えー。なんで瑞穂はよくて、俺はダメなんだ？」

「瑞穂の『先輩』には愛があるかも。でもアツシーの『先輩』には、茶化してるニュアンスしか感じないかも」

ちなみに「アツシー」とは、相模の初期艦である漣と秋津洲が考えたあだ名である。

「まことに遺憾である」

一瞬だけ真顔を作った相模は、だがしかしすぐに破顔してしまった。秋津洲は、やれやれとばかりに首を振る。そんな二人の様子に、瑞穂もまた微笑んだ。

「それで、用件はなんだ、秋津洲先輩」

「そうそう、それかも」

二人が真面目な話を始めることを悟り、瑞穂は気を引き締めて、相模の隣に控える。それを待って、秋津洲が話を始めた。

「ついさつき、二式大艇ちゃんが帰還したかも」

「そうか」

相模が「秋津洲」所属の二式大型飛行艇——二式大艇を使って、偵察を行っていることは、瑞穂も知っている。偵察場所は、Z海域。偵察目的は、『IF作戦』時に存在が疑われた謎の艦隊、その根拠地の搜索だ。卓己には許可を得ている。

「それで、今回はどうだった？」

相模の問いに、秋津洲は首を横に振る。

「いつも通り、かも。今回は黎明に超低空から侵入したのに、ものの見事に例の「紫電」に見つかったかも」

実は、「秋津洲」の二式大艇は、すでに三度ほど、謎の艦隊との接触に成功していた。ただし、接触したのは謎の艦隊に所属するBOBでも、彼女たちの根拠地でもなく、おそらくその艦載機と思われる「紫電」改だった。

ただ、その「紫電」改が問題だった。

「今回も写真は撮れたか？」

「バッチリ、激写したかも」

そう言って、秋津洲は現像された写真を差し出す。執務机に置かれたそれらを、瑞穂も相模と共に覗き込んだ。

「・・・やっぱり、違うよなあ」

相模は唸る。

瑞穂が先ほど持って来た資料には、かつて帝国陸海軍が開発し、運用していた機体の詳細が描かれている。その資料をめくり、相模は「

紫電”改のページを出す。

この機体は、間違いなくかつての帝国海軍“紫電”シリーズ——水上戦闘機“強風”から始まる一連の局地戦闘機シリーズの一機だ。ただ、各部の詳細が異なる。

“紫電”シリーズのうち、艦載型とされるのが“紫電”改二、“紫電”改四とも呼ばれる機体だ。だが、写真に写る“紫電”は、その機体詳細と異なる。特に、機首はより太く、発動機の逞しさを感じさせた。

「低翼配置だから、“紫電”改なのは間違いないんだが。どうもこの機首の部分が違う」

「技師長が言うには、二千馬力越えの出力が出る発動機の可能性が高いらしいかも」

それともう一つ。秋津洲は人差し指を立てて、示した。

「今回の件で確信したかも。“紫電”改を寄越した奴らは、電探以外の方法で二式大艇ちゃんたちを捉えてるかも。相当低高度を飛んだのに、夜明けとともに“紫電”改が現れて、追い払いにかかって来たかも」

今まで、相模たちは様々な侵入方法を試みていた。最初は通常高度での侵入。二度目は日没を狙っての高高度偵察。三度目は夜明けとともに高高度偵察。そして今回の黎明時超低高度偵察。その度に、Z海域内の搜索を試みる二式大艇を、謎の“紫電”改が補足して、海域から出るよう警告してきた。

「いくら二式大艇ちゃんが大きいって言っても、超低高度を飛んでるところを電探で捕捉するのは困難かも。それでもこつちを正確に捉えてきたってことは、何か別の方法を取ったとしか考えられないかも」

別の方法。それが何かを考えるのは、この際後だ。今一番大切な情報は、相模たちの探している相手が、こちらがZ海域内をくまなく搜索する前に、追い出しにかかってくるという事実だ。

「今、もっとも大切な情報は、俺たちがあちらのことを知ることではなく、あちらに俺たちのことを報せることだと思っただが、どうかな？」

「それは、その通りだと思うかも」

秋津洲と瑞穂も、相模の意見に賛同する。

「どうやって報せたもんかなあ。これっていわゆる、着信拒否状態だしなあ」

相模が苦笑いしながら、そうこぼした。

「着信拒否・・・言い得て妙かも」

「何か、一方的に送り付けられるものがあるといいのでしょうけれど・・・航空機相手だと、そうもいきませんよね。あちらの通信帯もわかりませんし」

「・・・一方的に、送り付ける、か」

瑞穂の何気ない言葉に、相模が何かを考え込むような仕種をした。

その頭上に、大きな電球の光が灯ったような気がした。

「それだ、瑞穂！」

「え、ええつと・・・はい？」

状況を飲み込めず、瑞穂は困惑する。そんな彼女の様子には構わず、相模は悪戯っぽい笑顔を浮かべて、こう言った。

「一方的に送り付けられるかもしれん。名付けて、プレゼント大作戦だ」

発動!?!プレゼント大作戦!

太陽が中天に輝く、正午。蒼く輝く海面に、大きな黒い影が落ちていた。影は悠々としたスピードで、海面を這っていく。

“秋津洲”所属の二式大艇、その内の三号機は、海面すれすれの低高度を飛行している。静かな波面にプロペラの後流が打ち付けるほどの低空飛行は、目標海面が近づいた時点から始めていた。すでに二十分ほどだろうか。

見張りの妖精は、危険海域に近づいていることを知って、さらに周辺への警戒を厳にする。高度を下げていることで、警戒は上方だけに集中すればいい。文字通り目を皿のようにして、彼らは辺りを見回していた。

接近する機影はないか。ウエーキは見当たらないか。水平線まで、あるいは雲居にまで目を凝らす。

“乙海域”と俗称されているその海域は、あらゆる艦船、航空機の侵入を許さない、魔の海域だ。五年前——深海棲艦が確認された頃から、特に襲撃の頻度が高く、また深海棲艦自体の性能も高いため、国際的に海域への立ち入りが禁止されたのだ。

その海域に、二式大艇は侵入しようとしていた。

“秋津洲”所属の二式大艇は、予備機も含めて五機だ。うち、今回の作戦に参加しているのは、一号機から三号機までの三機。それぞれが割り振られた侵入進路から、超低空で乙海域に迫っている。

航法を務める妖精が、地図とコンパスで現在位置を確認する。ルソンを経って随分飛んできた。そろそろ、乙海域にたどり着く頃合いだ。

二式大艇は、さらに高度を落とす。カツオ節とあだ名される機体の下部に、飛び散った海水の飛沫がかかるのではないかと思うほどだ。

十数分後、二式大艇三号機は、乙海域に到達した。

線が引かれているわけでも、海の上に標識があるわけでもない。それでも、機体の外に漂う雰囲気、ひんやりと変わった気がした。身を震わせるような空気に、見張り妖精はさらに辺りを注視する。

穏やかな波間に、時折白い波頭が漂う。群青に染まった世界を行く濃緑色の機体は、「火星」発動機の咆哮を引きずって、その波頭を風圧で砕いた。

四基の発動機、プロペラ、ともに異常はない。機長はそのことを改めて確認して、見張りから「機影見ゆ」が報告されれば、すぐに機体を動かせるようにした。

しばらくの間、静かな時間が続く。四翔プロペラが風を切る鈍い音、発動機の唸り。聞こえるのはそれだけだ。

だが、静寂の時間は、決して長くは続かなかった。

見張り妖精が、雲量二の空をこちらへと向かってくる、人工的な輝きに気づいた。青空にきらめいたその光に、見張り妖精は目を凝らす。

間違いない。二つの影が、二式大艇へと接近してくる。雲の合間に見えるその影は、紛うことなき航空機のそれであった。

見張り妖精から航空機の接近を知らされた機長は、臨戦態勢を指示する。機体各所に設けられた、七・七ミリ機銃四挺、二〇ミリ機銃五挺が、いつでも発砲可能なように身構えた。飛行艇であるがゆえに、唯一の弱点となっている機体下面は、超低空飛行によってカバーしている。

機体の向きをわずかにずらしながら、機長は航法要員に機体が飛んできたと思われる方向のメモを取らせる。航法要員の地図によれば、機体が向かってきたのはおそらくタウイタウイ島方面からとのことだった。巡航速度諸々を換算しても、大体勘定が合う。これは、過去三回の接触と同じだ。

おそらく、あの機体の出所は、タウイタウイにある。それも、空母が。

みるみるうちに接近してくる機影を確認する。深海棲艦の艦載機のような、特異な形ではない。胴体から長く主翼が生えており、コックピットと思しき反射も見える。

その繊細なデイトールが、肉眼でも見えるようになってきた。

太い機首は、その発動機が現用航空機の主流であるジェットエンジン

ンではなく、レシプロエンジンであることを示している。尾翼根元の一点に向かって絞り込まれた機体は、猛獣のような野性味と鋭さを感じさせた。己の存在を誇示するかのようには、主翼は刀の如く研ぎ澄まされている。

海面を這うようにしていたとはいえ、二式大艇ほどの機体が気づかれないはずもなかった。二機の航空機は、一直線に接近を試みている。その動きは、こちらを撃墜せんとするものではなく、単に危険空域に入っていることを報せ、回避させようとするものだ。

だが、二式大艇は退かない。もとより、ある程度の危険を冒しても、この海域を捜索することが、彼らの任務なのだから。

そんな二式大艇の機首上方を、二機は編隊を崩さずに通り過ぎる。素早いその動きは、間違いなく戦闘機のものだ。

“紫電”改。現在、日本海軍ではどの航空母艦も採用していないはずの機体だ。

日本海軍機動部隊の主力艦上戦闘機は、三年間を通して零式艦上戦闘機——零戦のままだ。もちろん、性能は向上している。初期に使用していた二一型の姿はもはやほとんどの空母の艦上から消え失せ、現在では五二型丙や六四型が、艦隊の空の守りに残っている。

零戦の後継機となる機体は、少数ではあるが配備が始まっていた。その名は“烈風”。第二次世界大戦中、ついで日の目を見ることになった幻の制空戦闘機で、零戦の正統な後継機と言えた。

もちろん、中央の工廠部でも、“紫電”シリーズの艦載型——“紫電”改二は開発に成功している。ただ、性能的に深海棲艦の艦載機を圧倒するものではなく、現在は“烈風”の開発に主眼が置かれていた。もつとも、開発も建造と同様、ある種のランダムな要素が関わってくるため、“烈風”の開発中に稀に“紫電”改二が完成することはある。そうした“紫電”改二は、工廠部の倉庫に、万が一の備えとして格納されているとのことだ。

つまるところ、“紫電”改はルソン周辺に配備されていないことになる。

一航過の後、反転した“紫電”改は、再び二式大艇に接近してくる。

警告を続けているのだ。その様子を確認した機長は、作戦を次の段階へと移すタイミングだと判断を下した。

目配せをされた照準手が、その指示に頷く。彼は手元にある爆弾の投下レバーに手をかけた。

二式大艇には、爆装や雷装も施すことが可能だ。積載可能重量は決して大きくないが、それでも八百キロ爆弾か航空魚雷を翼下に二発、懸吊することができた。

頃合いよしと見た照準手が、レバーを引く。機構が動く音がして、翼下から何かが投下された。その様子は、二機の「紫電」改からも、はつきりと見えたはずだ。

二式大艇から投下されたそのうち一つは、海面に触れると外郭が弾け、急激に膨張した。浮き袋に入った空気が、海面に浮かぶのを助ける。

もう一つの方は、一旦海中に沈み込んだ後、浮き袋の横に浮かんできた。やがて中から、赤色の煙がもうもうと立ち上る。これが、狼煙の役割を果たすはずだ。

これで、二式大艇の任務は完了だ。低空飛行をやめた機体は、「紫電」改の誘導した通りに、乙海域からの離脱にかかる。反転した機体の尾部から、見張りの妖精は浮き袋を投下した地点を見る。赤い煙が立ち上る周辺を、二機の「紫電」改が円を描いて飛んでいた。

やれることはやった。託したメッセージが伝わるかどうかは、神のみぞ知ることだ。

*

相模が「プレゼント大作戦」と名付けた作戦が成功した旨の報告を、瑞穂は彼や秋津洲とともに、作戦室の海図の前で聞いた。

「手紙」を投下した三号機の位置が、海図には書き込まれている。三号機はいつも通りに「紫電」改から接触を受け、海域から退避を始めたとのことだ。

「プレゼントは、無事届いたわけだ」

海図に手を着いた相模は、瑞穂と秋津洲の方を向いて口角を吊り上げた。そんな挑戦的な表情も、相模の魅力だ。ほうつと呆けたよう

に、瑞穂は相模を見つめた。

「でも、まだ受け取ってくれたところを確認したわけじゃないかも」
秋津洲は冷静に指摘する。それに対して、相模はかぶりを振った。
「はい、って渡して受け取ってくれる相手じゃないからな。言っただろ？着信拒否状態だ、って」

だから、相手に受け取らせるのではなく、一方的に送り付ける。それがプレゼント大作戦だ。

二式大艇から投下された浮き袋には、完全防水された容器に入れて手紙が入っている。そこには、相模たちがZ海域に侵入を続ける理由——謎の艦隊の根拠地搜索と接触を試みていることが書かれている。

「こちらから、メッセージは送った。向こうに受け取る意思があるなら、手紙を受け取ってくれるだろう。そして、こちらと接触する意思があるなら、近日中に反応があるはずだ」

後はあちら任せ。こちらとしては、運を天に任せて、祈るしかない。
「二式大艇は？どれぐらいで戻る？」

三機出した二式大艇各機には、すでに帰投するように伝えてある。
「一時間ちよつとで戻るかも。その時に、色々訊いてみるかも」

それを確認して、相模は作戦の終了を宣言する。緊張を弛緩させた三人は、ひとまず昼食を取るべく、食堂へと戻っていった。

◇

本土への出張を終え、卓己中佐が戻ってきたのは、その次の日のことだった。ルソン警備隊の指揮を、相模は彼に返し、瑞穂も秘書艦の仕事を由良に戻す。ルソン警備隊は、再びいつも通りの活動を再開した。

それから三日は何事もなかった。出入港をする各輸送船や、近海航路等にも異常はなく、平和そのものだ。

だが、四日目に変化は訪れた。

通信室から呼び出しを受け、瑞穂は廊下を小走りに急いでいた。下駄というのは、走るのにコツがある。脱げばもう少し速く走れるのだろうか、今の瑞穂にそこへ思い至る余裕はなかった。

「お待ちませ致しました！」

通信室に飛び込むと、すでに相模と秋津洲は待っていた。普段は通信員が一人いるのだが、相模の意向で席を外してもらったらしい。

瑞穂を迎え入れた相模は、上機嫌だった。その手には、小さな紙片が握られている。

「返事があつたぞ、瑞穂！」

「へ、返事・・・？」

何の返事であるか、瑞穂は思い至った。例のプレゼント大作戦だ。

「ほ、本当ですか・・・!?!」

「ああ。作戦は大成功だよ！」

そう言つて、相模は紙片を見せてくれた。十分前に入電し、相模に届けられたというそれには、以下のような文面が書かれていた。

『発タウイタウイ泊地、磯崎舞特務大尉。宛ルソン警備隊、相模篤少佐。貴官からの申し出をお受けいたします。この電文発信から二十分後、指定した通信帯に回線を開いてください』

指定されていた通信帯は、見たことのないものだった。ただ、海軍の防諜仕様が施された回線であることはわかる。それも、最上級の防御だ。

入電した時刻から換算すると、もう間もなくで通信回線を開く約束の時間だ。

目の前の通信機は、すでに調整が完了しているらしい。そこから、三人分のヘッドセットが繋がっている。

「今から、ファーストコンタクトだ」

さも楽しげに笑った相模は、瑞穂と秋津洲にヘッドセットを差し出し、自らもそれを着ける。二人も続いて装着し、交信の準備は整った。時間だ。

相模が通信機のスイッチを入れる。十数秒のノイズの後、ヘッドセットの向こうに、相手が出る気配がした。

そして、三人は「彼女」の声を聞いた。

『初めまして。タウイタウイ泊地提督、磯崎舞特務大尉です』

朗報

ルソン警備隊を經由してパラオ泊地に入港した船団を護衛していたのは、「祥鳳」を旗艦とした、「満潮」、「陽炎」、「卯月」の四隻だった。定期便となつているこの船団は、パラオ泊地が消費、及び次期作戦に向けて備蓄している資源の他にも、パラオ諸島各地で消費させる生活必需品なども運んでいる。十二隻のタンカーや輸送船の入港と接舷作業を、榊原は執務室からチラリと見遣つた。

「ほら、よそ見してないで手を動かす」

途端、横から厳しい言葉がかけられる。本日も榊原のお目付け役——もとい、秘書艦として執務室に詰めているのは曙だ。相変わらず書類仕事は榊原よりも得意で、秘書官机の上に残っている書類は、榊原のそれよりも少ない。

「気になるのはわかるけど。どうせ後で報告に来るでしょうが」

「まあ、そうなんだがな……」

もちろん、船団の入港作業の様子は気になる。だがそれ以上に、榊原がその動向に目を遣つてしまうのは、この船団がルソンからやつてきたからだ。

ルソン警備隊に所属し、ともに正体不明の艦隊を探している相模とのやり取りは、基本的に電文ですると決めていた。それでも、何か電文では送りづらいことを文書で送ってくるかもしれない。そんな、余計な心配をしまつている自分がいた。

——まあ、あの相模に限つてそんなことはありえないか。

頭からこの件に関するの思考を振り払つて、目の前の書類仕事に集中する。執務室には、二人分のペンを走らせる音が木霊するだけとなつた。

しばらくして、扉がノックされた。残り数枚となつた書類の手を止めて、榊原は顔を上げる。

「どうぞ」

「失礼します」

返事と共に、船団護衛を担当していた四人の艦娘が入つてきた。旗

艦の祥鳳が代表して報告を始める。

「ルソンからの船団護衛、無事に終了しました」

「ご苦労様。特に異常はなかったか？」

「それは、もう。提督が恋しくて仕方なかったです」

満面に、いつそ晴れ晴れしくらしいの笑顔を浮かべて、祥鳳がそう言った。あまりにストレートな言葉に、榊原も苦笑いするしかない。隣の曙は、どこか不機嫌そうに顔をしかめている。

「他に、報告はあるか？」

「あ、そうでした。提督宛に、文書を受け取りました。非常に重要な書類だったようでしたので、一応事務係の方を通してます。すぐに、こちらに来ると思いますけど」

重要な書類。特に思い当たるようなものはない。とにかく、執務が終わっても、祥鳳の言った書類が届くまでは、執務室にいた方がいいだろう。

「わかった、ありがとう。丁度おやつ時だから、食堂に行くといい。食堂部にパフエをお願いしておいた」

「「パフエツ!？」」

駆逐艦娘三人の目がわかりやすく輝いた。甘いものが好きなのは艦娘も普通の女の子と変わらない。穏やかな日々が続いているこの頃は、こうして船団護衛任務終わりに、労いのデザートが振る舞われるようになった。

「それでは、失礼しますね」

祥鳳たちの敬礼に、榊原と曙も起立して答礼する。報告を終えた四人の艦娘は、嬉々として食堂へと向っていった。それを見送った榊原は、再び席に着き、残りの書類に手を付けようとする。と、そんな榊原の方を、曙がジツと見つめていた。すでに彼女の担当分は終了しており、もう上がつてもいい頃だ。それなのに、「もう上がるわ」とも言わず、静かに榊原を凝視している。その視線が気になり過ぎて、結局榊原は、書類一枚が終わったところで顔を上げた。

「どうかしたか、曙？」

問いかけられた秘書艦殿は、目を細めて榊原を見た後、いつものよ

うにピイツとそつぽを向いてしまった。

「・・・別に」

こういう時の「別に」が、何ともないわけではないことを、さすがに榊原も知っていた。しばらくすると、曙が根負けしたように、口を開いた。

「あたしも、パフエ食べたいな・・・って」

そう言い終わると、益々顔を背けてしまう。わずかに見えているその柔らかそうな耳たぶが赤い。こうして時折見せる可愛らしさが、何とも言えなく、榊原の頬を緩めてしまう。

その時、ちよつとした悪戯心が生まれたのは、なぜだったのだろうか。

「パフエは遠征組限定だからなあ」

「はあっ!?!」

曙がものすごい勢いでこちらを振り返った。その頬は、これまでで一番不満げに膨らんでいる。真つ赤な二つの林檎が、さらに榊原の笑いに拍車をかける。

「何笑ってんのよ!ていうか、あたしが遠征行ってないのは、クソ提督があたしが秘書艦じゃないとまともに書類仕事できないからでしょうが!」

真つ赤になって反論する曙に、榊原は笑いを必死に押し殺しながら答える。

「でも、曙だけ特別にあげるわけにはいかないしなあ」

「秘書艦!あたし秘書艦頑張ってるでしょうが!それぐらい労いなきい、このクソ提督!」

そんなやり取りも微笑ましい。頬が勝手に緩んでくるのに気付きながらも、榊原にはそれを止めることができず、ますます曙は頬を膨らませた。

と、その時。扉のノックとほとんど同時に執務室に入ってくるものがあった。言い合っていた二人は、シンクロしたようにそちらを見る。パラオ泊地に所属するもう一人の提督が、半目でこちらを見つめていた。

「・・・執務中にイチャつくとは、いいご身分だな中佐殿」

「ちよつと待て、今のどろがイチャついてるように見えるのよー」

曙は真つ赤になって反論する。その剣幕にも、清水は特に反応しない。曙の方も、取り敢えず大声で反論ができたことである程度満足したらしく、頬を膨らましてそつぽを向きながらも、それ以上は何も言わなかった。

「事務係に寄つたら、お前宛に書類を預かつた。渡しておく」

「ああ、助かつた。その書類待ちだつたんだ」

清水が差し出した、やけに大仰な封筒に入つた書類を、榊原は受け取る。中身は何らかの書類の束らしく、ズシリと重い。これは、夕御飯までに少し骨の折れる作業となるかもしれない。

「確かに渡した。俺は少し、作戦室に籠らせてもらう」

そう言い残して、清水は執務室を後にした。その背中を見送つて、榊原は再び受け取つた書類に目を落とす。予想としては、何らかの指令書の類だろうか。それにしても結構な量だ。

「さつさと終わらそうか」

「・・・ビミョーにパフェの件を誤魔化された気がするけど。まあ、いわ。手伝つてあげる」

諦めたような溜め息を吐く曙に、榊原は少しだけ、私語を続けた。

「この間見つけたトロピカルパフェが旨かつたんだ。どこかで休暇が取れた時に、一緒に行こう」

封筒の口を開きながら言つた榊原の言葉に、曙が振り向く。

「そつ・・・それつて・・・デート・・・?」

後半が力なく裏返つたその問いかけに、榊原は一瞬だけ言葉を詰まらせた。封筒の中から書類を取り出す手を止めて、少し考える。

「まあ・・・そう、なるのか?」

「そ、そう・・・。ふーん・・・」

気の抜けた返事の後、何かを消化するように二、三回頷いた曙は、いつもの彼女らしい声音と言葉でこう答えたのだった。

「ま、まあ。クソ提督がどうしても、つて言うなら、着いて行つてあげないこともないけど」

通信室から榊原に呼び出しがかかったのは、夕御飯も終わった頃だった。内容はもちろん、ルソン警備隊の相模からのものだ。

通信室へと向かう廊下で、榊原の脳裏をよぎったのは、夕食前に確認した書類——指令書の内容だ。非常にうれしいものだった半面、感じる責任もひとしおである。

——とにかく、その件は後で取りまとめよう。

書類仕事でもそうだが、榊原には二つの物事を同時並行で考えられるような才能はなかった。

通信室に入ると、当直の通信兵が出迎えてくれた。彼からヘッドセットを受け取り、席を外すように指示する。機器の使い方はわかっていた。

通信兵が部屋を後にしたことを確認して、榊原は通信機器のスイッチを立ち上げた。保留にされていた秘匿回線が繋がれ、その向こうにいる相模の、相も変らぬ陽気な声を拾っている。

『おう、元気にしてるか榊原』

『ああ、元気にやってるよ。相模はいつも通りだな』

『まあな』

ヘッドセットの向こうで豪快な笑みを浮かべているところがありありと想像できて、榊原も頬を緩める。

『おっと、秘匿回線使って雑談するわけにもいかん。早速本題に入るぞ』

相模の声が、すぐに仕事モードへと切り替わった。それに合わせて、榊原もヘッドセットを心持ち耳に押し付ける。相模が口を開いた。

『例の、正体不明の艦隊との接触に成功した。先方との話し合いの結果、近々会談を持つ約束も交わせた。場所は乙海域内、タウイタウイ島だ。そこに、彼女たちの泊地があるらしい』

『そうか・・・！』

ついに。ついに、相模は見つけたのだ。トラック諸島の謎の、片鱗を。

『他に、現在判明している情報は、正体不明の艦隊が『T・T独立艦隊』と名乗っていること。そこまで大きな規模の艦隊ではないこと。提督は、磯崎舞特務大尉であることだ』

「特務大尉・・・そんな階級があるのか？」

『俺も初めて聞いたよ。おそらくは、独立艦隊を取りまとめる提督の存在を秘匿するために、特別に用意されたものだ』

相模の説明に、榊原も一応納得する。まあ、その辺りのことは、本人に直接訊くのが早いだろう。

榊原は、手帳をめくるまでもなく、会談が可能な日時を導きだした。丁度近々、フィリピンに向かわなければならぬ理由が、ついさつきできたところだった。

「二週間後、フィリピンに向かう用事がある」

『ほう、そりやまた。どういった用件だ？』

「政府要人の護送だよ。ついさつき、指令書が届いた。二週間後に、パラオの政府はコロールに戻って来るそうさ」

随分急な話だとも思ったが、元々パラオ政府は緊急避難的に政府をフィリピンに移しただけで、政府施設等はこちらにそっくりそのまま残していたらしい。政府の移転自体もほんの三年半ほど前のことで、引き継ぎもスムーズに行つたとのことだ。それだけ、パラオ周辺の制海権は回復している。ある意味、榊原たちパラオ艦隊の頑張りが目に見える形で現れたと言えた。夕食時に知らせたところ、艦娘たちも大いに喜んでいた。

『ああ、あれか。こつちもてんやわんやだよ。めでたいこと、なんだろうけどな』

相模も話は聞いていたらしい。

「その護送作戦時に、俺はルソンに行く。一週間後くらいに入港すれば、ある程度時間はあるはずだ。そこで、会談を持ちたい」

『わかった。先方には、こちらからの要望として伝えておく』

「よろしく頼む。塚原大佐には？」

『「赤城」宛に暗号電を送っておいた』

「そうか。それじゃあ、この件に関しては以上だな」

榊原は話を畳みにかかる。いかに秘匿回線と言えども、長い間の通信は憚られた。

『ああ、終わりだ。一週間後、また会おう』

そう言っ、お互いに通信を終了する。ヘッドセットを取り外して通信員と交代した榊原は、すでに暮れている空を見上げた。これから、忙しくなる。そんな予感を抱きながら、護送計画を練るべく、足を作戦室へと向ける。その足音は、心なし高鳴っていた。

岐路二立ツ

政府要人護衛作戦——『五車星作戦』と呼称される作戦の参加艦艇は、書類が届けられてから数日中に決定された。

パラオ泊地からの参加艦艇は、榊原の旗艦「曙」を筆頭に、「祥鳳」、「霞」、「陽炎」。これに、本土から派遣された「鈴谷」、「熊野」、「睦月」、「如月」が加わるようになっていく。本土側の派遣部隊を取り仕切るのは、榊原とは同期になる速水淳少佐だ。階級的にも、経験的にも、作戦全体を指揮するのは榊原ということになる。

今回の政府要人移送が、空路ではなく海路になったのには、いくつか理由がある。

第一に、政府要人を移送できるような機体がなかったこと。深海棲艦の出現以後、民間航路は絶えて久しく、そうした会社も機体も残っていない。ルソン島には、日米共同の基地航空隊が置かれているが、所属する機体はいずれも軍用機であり、政府要人機などは用意されていなかった。

政府要人機は、空の官邸などとも呼ばれる。陸から離れた状態であっても、政府としての機能を維持し続ける必要があるのだ。並大抵の機体では、その大役を果たせない。

第二に、護衛の戦闘機の問題だ。ルソン島に展開する基地航空隊は、基本的に対潜哨戒部隊であり、現用戦闘機は小数機しか配備されていない。政府要人は守るべき存在だが、そのためにルソン周辺の民間航路が侵されるような事態があってはならない。両方を守り切るには、いかにせん機体の数が足りなかった。

それに、護衛の引き継ぎの問題もある。ルソンには、前述の通り少数であるものの、F-35といった最新鋭機が配備されている。しかし、その航続距離では、ルソン島からコロール島までの全行程を護衛することはできない。護衛戦闘機の引継ぎが必要なのだ。

パラオに展開する第一二航空戦闘団は、数でルソン航空隊と同等、質では明らかに劣る。政府要人機を十分に守り切れるとは言い難かった。

こうした要因があり、今回空路による移送は断念され、代わりに海路による護衛作戦が策定されたのだ。

「と、いうわけだ。異存はないか？」

夕食の席、全員の前で作戦要綱を読み上げた榊原は、そこに座るパラオ泊地所属の全員を見回して確認する。ラムネを片手に、真剣な面持ちで聞いていた艦娘たちは、取っていたメモを見返したり、互いに顔を見合わせたりしている。

そんな中手を上げたのは、意外にも清水だった。

「一つ、訊いておきたいんだが」

「なんだ？」

確認するような口調の清水は、怪訝な表情で尋ねる。

「・・・この手の話は、ラムネ片手にするものなのか？」

「ツッコむところはそこかよ」

清水の質問に真っ先にツッコミを入れたのは摩耶だ。呆れとも取れるような溜め息が漏れている。

「こんなの、いつものことだぜ」

「仮にも作戦要綱だぞ。然るべき時と場所を選んで報せるべきだ」

「考え方が堅いんだよ、お前は」

摩耶の言葉に、清水はどこかムツとしたような表情を見せる。候補生時代は鉄面皮で有名だった清水だが、このところはある程度表情が見えるようになってきた。いい傾向であると、榊原は勝手に思っている。もつとも、そんなことを当人に言った日には、ブリザードのごとき言葉の嵐が降り注ぐのだろうか。

とにかく。この、よくわかりづらい、捻くれたお人好しは、もつと表情を見せるべきだ。

「ま、これがうちのやり方なのよ」

二人の問答を遮るように言ったのは、榊原の横が定位置になりつつある曙だ。最近、艦隊の旗艦としての風格——と言うよりもお母さん属性が付き始めている気がしなくもないのだが、もちろんそんなことを本人に言おう日には、掃海具の代わりに海に投げ込まれること

間違いなしなので、榊原は口をつぐんでいる。

「郷に入っては郷に従え、って言うでしょうが。それに、こんな辺境の地で一々雰囲気気にしたってどうもないわよ。緩いくらいがいいの」
「・・・そういうものなのか」

「何度も言わせないで」

「なら、そういうことにはしておこう」

清水はある程度納得したように、言葉を切った。

次に手を上げたのは、摩耶だ。

「なあ、提督。今回の作戦は、提督が、〃曙〃旗艦で、直接艦隊を率いるんだろ？」

作戦参加艦艇の発表時に榊原が言ったことを、摩耶が繰り返す。その確認に頷いて、榊原は続きを促した。

「その間、この艦隊の指揮権はどうなるんだ？」

「もちろん、次席の指揮権を持つ清水に引き継ぐことになる」

摩耶が微妙な表情になった。それについてはひとまず頭の隅に押しやり、榊原は清水の方を見た。

「任せて大丈夫だよな」

「当然だ」

何の問題がある、とでも言いたげに、清水は表情を変えることなく返事をした。

「やることは大体覚えた。書類仕事も、少なくともお前よりは得意だ」

伊達に主席ではないのだ。

「ただ・・・一つ気になることはあるか」

「なんだ？」

清水がわざわざ「気になること」と言うとは、珍しい。榊原の方を真っ直ぐに見つめて、その端正な口元が動く。

「今まで、この泊地の秘書艦は曙が務めていただろう。そうすると、曙不在の間、秘書艦は誰が務める？」

言われてみればそうだった。パラオ泊地は、基本的に秘書艦を曙で固定している。これならば、無駄な引き継ぎ等もなく、また一人があらゆる情報を集約することができる。いわば曙は、榊原と同じ情報を

持った、この泊地のもう一人の提督とも言えるわけだ。同じようなことは、横須賀の吹雪にも言えるかもしれない。

反面、秘書艦の入れ替わりがないため、必然的に各艦娘の秘書艦経験はなくなる。こうした、秘書艦が空ける時に、その代わりに入れる者がいないのだ。実際パラオ泊地には、秘書艦業務の経験がある艦娘は二人しかいなかった。

一人は、もちろん曙。そしてもう一人は――

「摩耶にお願いするのが、妥当だと思う」

ガタツ。摩耶の椅子が、わかりやすく動揺した音を立てた。

「なっ・・・あたし!？」

「まあ、そりやそうよね」

納得するように、満潮が眩く。

「だって、司令官が着任するまで、書類業務ほとんど一人でこなしてたし」

パラオ泊地に榊原が着任するまでの一か月間――正確には、警備隊の開設から三週間、この泊地の代表として取り仕切っていたのは、紛れもない摩耶だ。榊原自身、様々な業務については、摩耶から引き継いでいる。また、曙の入院中も、代わりに秘書艦を務めてくれたのは摩耶であった。

「・・・そうか。それなら、摩耶にお願いしよう」

各人からの説明に、清水も頷く。ただしその視線は、摩耶の方を向いてはいなかった。

摩耶もまた、伏し目がちにラムネの瓶を見つめている。

「・・・いいのかよ、あたしなんかで」

おおよそ摩耶らしくない言葉に、清水はゆっくりと口を開く。

「摩耶である必要はない」

紡ぎ出されるのは、いつもと同じ、冷淡な声だ。

「だが現状で、一番秘書艦に適しているのは摩耶だろう。それとも前は、俺と働くのは嫌か？」

それでもその言葉の端々に、生きて人間の温かみを感じられるのは、おそらく榊原だけだ。候補生時代の、歩く猛吹雪だった頃とは、明

らかに——ほんの少しずつではあるが変わり始めている。

清水からの逆の問いかけに、摩耶はフルフルと首を振り、答える。

「別に。お前だから嫌、なんてことはない」

「なら、決まりだな。摩耶、秘書艦を頼む」

「・・・わかった」

その話は、短く畳まれた。

◇

艦隊の出港を告げるラッパが鳴り響いた。旗艦となる「曙」の艦橋に立ち、その音色を聞いた榊原は、埠頭から出港する艦船を見守る人影を見遣る。白の第二種軍装が一人に、長身細身の影が二人、後はセーラー服だ。

その人影が、一斉に手を振った。帽子を持った者は、その帽子を頭上で旋回させ、そうでない者は、これでもかと大きく腕を振る。

榊原も応える。制帽を取り、頭の上でゆつくりと回した。その隣では、艀装を背負った曙が手を振る。しばらくすると、「曙」の艦体がタグボートに引かれて、埠頭から離れた。それを合図とするように、お互いが手を振るのを止める。

「続いて「霞」、離岸するわ」

制帽の位置を定めた榊原に、曙が報告する。見れば、「曙」の隣に停泊していた「霞」が、同じようにタグボートに引かれて、埠頭を離れるところだった。

『「陽炎」、出港準備完了』

『「祥鳳」、抜錨準備完了しました』

残った二隻の準備も完了している。すでに良き相棒となっている双眼鏡でそれぞれの様子を確認した榊原は、再び前を見遣る。タグボートに引かれるうち、「曙」は随分と埠頭から離れていた。

埠頭から完全に離れたところで、前側のタグボートが「曙」の艦首を押し込み、逆に後ろ側のタグボートが艦尾を引っ張る。「曙」の艦体が、その場でぐるりと回り、艦首を港外へと向けた。それを確認して、タグボートと繋がっていたロープが解かれる。

二隻のタグボートに敬礼を送る。右手を下げて、榊原は曙に次の指

示をした。

「行こう。両舷前進微速」

「両舷前進微速」

榊原の指示を曙が復唱する。この辺りのやり取りは何度も繰り返してきた。

主機が二軸のプロペラシャフトに接続し、回転を始める。港外に出るまでは、最低限の操舵性を確保できる速度だ。それでも二つのスクリューが力強く水を掻き、艦を前に推し進める。

「半速」

榊原が何も言わずとも、曙が主機の回転速度を上げる。この辺りの間合いも、お互いよくわかっていた。だから、榊原が「曙」の操艦に關して何かを言うことは滅多にない。

曙が艦の操作に集中している間に、榊原は艦隊内の通信を開く。

「港外で陣形を組む。『祥鳳』を中心とした対潜陣形を形成する」

三つの了解が電波に乗って届き、隣でももう一つ了解と返事がある。

「・・・ねえ」

艦首で立つさざ波を見つめていた榊原を、曙が呼んだ。

「あの二人、どう思う？」

どの二人のことかは、すぐにわかった。

「どうだろうな。少なくとも、摩耶の方はかなり歩み寄ろうとしていると思うが。・・・いや、歩み寄るといふよりも、自分の中の何かと向き合い始めた、と言った方がいいかもしれないな」

「そういうことじゃなくて」

榊原的には、精一杯分析して答えたはずなのに、曙から返ってきたのは、お叱りとも、呆れとも取れる言葉だった。最後には、おまけのように盛大な溜め息までついてきている。

「・・・もういいわ」

「なんだ、気になるじゃないか」

今の話の中に、そこまで呆れられるような要素を見つけられず、榊原は曙に尋ねる。それに対する曙の答えは、たった一言、短い文言

だった。
「クソ提督が鈍感だって話よ」

ルソン到着

久しぶりのルソン入港は、朝の九時となった。太陽が昇った穏やかな海面に、榊原率いるパラオのBOB四隻が入っていく。ルソンはそこまで大きな港ではないが、四隻分の埠頭が空けられており、大型の“祥鳳”から岸壁に着けていった。

全艦の入港作業を見届け、最後に埠頭に着けたのは“曙”だ。埠頭近くまで寄せた“曙”の舷側を、二隻のタグボートが押していく。岸壁との間の緩衝材がひしゃげて、衝撃を緩和した。

「舷梯出して」

舳を取ったり、雨よけのキャンバスを用意したりと、甲板をちよこまか動いていた妖精のうち数人が、左舷着けした“曙”の舷側にラツタルを下ろしていく。その位置が決まったところで、入港作業は終了だ。“曙”を岸壁に押し付けていたタグボートが離れていき、かかっていた力の分傾いていた甲板が元に戻る。

「精神同調終了」

甲板の妖精が作業終了のサインを送ってきたのを確認して、曙が艀装を脱いだ。緊張をほぐすように大きく背伸びをして、深呼吸をしている。

「お疲れ様」

「別に。いつも通りよ」

榊原の労いにひらひらと手を振って曙が答えた。その様子に、榊原も表情を緩める。

各部の手仕舞いが完了したことを確認して、二人は“曙”の羅針艦橋を出、ラツタルを甲板へと下りていく。そこから、舷梯を伝って埠頭に足を着いた。丁度、他の三艦からも艦娘たちが下りてきたところだ。

入港の報告をするべく、ルソンの警備隊庁舎へ足を向ける。そこへ、慌ただしい足音と共に一人の少女が突貫してきた。

「ぼくの〜ちや〜んっ!!」

疾風のごとき神速で突撃してくる少女は、後ろに流れていく風にピ

ンク色の髪をなびかせて、一直線にこちらへ——榊原の隣にいる曙の方へと向っていた。

「うえっ!?ちよっ、さぎな」

曙が少女の名前を呼びきる前に、彼女の方は思いつきり跳躍し、モモンガもかくやという程に体を大の字に広げて、曙に飛びかかった——もとい、襲いかかった。それを、慌てた様子で曙が受け止める。

物理法則に正しく則って重力加速度を受けた少女が曙の上のにかかるのに、さして時間はかからなかった。

ボスツ

ようは砲弾と同じである。両手を広げたことで最大限に空気抵抗を受けるようになっていたとはいえ、相応の重量を持った物体がのしかかれば、普通の少女とさして変わらない、むしろ少し小さいぐらいの体格である曙が支えきれぬ道理はなかった。

「ってて」

それでも、辛うじて衝撃に備えていたらしい曙は、体を起こすと同じ時に自らに抱き着いているピンク髪の少女の脳天に、端から見ても遠慮会釈の無いのがわかるゲンコツを叩き込んだ。

「イッタイ!?ぼのちゃん何すんの!？」

「何すんの、はこっちのセリフよ!ケガでもしたらどうすんのよ!」

「あ、漣のこと心配してくれるんだ」

曙は無言で少女の頬をつねった。

「いひやいいひやい、ギブギブ!」

少女の必死の訴えからたっぷり二十秒ほどの時間を取って、曙は手を離れた。

「うゝ、痛い」

「自業自得。ほら、いい加減どきなさいよ」

「はーい」

曙の声に、渋々といった様子で少女は立ち上がる。重量物が取り除かれたことでやっと身動きの自由を手に入れた曙は、立ち上がると埃を払い、制服を正した。それから榊原の方を振り向いて、少女を紹介する。

「これ、あたしの妹で、漣」

「綾波型九番艦、漣でっす！いつもぼのちゃんがお世話になってます、
榊原中佐」

元氣一杯の挨拶の後、なかなか堂に入った敬礼を決める漣に、呆氣
に取られていた榊原も答礼する。

「パラオ泊地提督の榊原広人中佐です。こちらこそ、曙にはいつもお
世話になってます」

お互いに敬礼を下げると、漣がこちらを観察するように、身を乗り
出して興味ありげな視線で見つめてくる。最後に満足そうな笑みを
浮かべて、チラリ、横にいる曙を見遣った。曙はハツとしたように
そっぽを向いてしまう。なぜだか、その耳たぶが少し赤かった。

「ふ、ふん。本当にそう思ってるなら、普段から態度と行動で示しなさ
いよ」

そんな彼女らしいセリフに、漣の笑みは益々大きくなった。

「だ、そうですよ。榊原中佐」

「善処しましょう」

榊原の答えの後に、漣は元の位置に戻った。

「それでは、庁舎まで案内しますね」

言うや否や、大げさな仕種で着いてくるように示して、漣が歩き出
す。その背中に、曙が問う。

「漣、あんたあたしたちを案内するために、わざわざ迎えに来たわけ
？」

「ん〜？」

歩きながら、漣がこちらを振り向く。考えるように人差し指を顎に
押し当てた後、何かを含むような笑いを浮かべて、その口を開く。

「まあ、それもあるんだけど」

「だけど？・・・って、ちよつ！」

次の瞬間、漣が曙の細い体に抱き着いた。あまりに突然の出来事
に、曙が驚いたような声を上げる。

「ふえっ？ちよつ、と。何なのよ」

されるがままの曙に十秒ほど抱き着いていた漣は、ゆっくりと顔を

上げると、それはそれは可愛らしく、悪戯っぽく笑っていた。

「久しぶりに、ぼのたんのペツタンお胸を堪能したくて、早く迎えに来ちゃった」

曙の華麗な巴投げが炸裂して、漣の体が宙を舞った。

「ようこそ、ルソンへ」

入港の報告を終え、敬礼を下げた途端、柔和な声が目の前の将校からかけられた。温厚そのものといった笑顔で、右手が握手を求めてくる。それに、榊原も応えた。

「ありがとうございます、卓己中佐」

ルソン警備隊を取り仕切る先輩中佐は、温和な表情のままですらに強く、手を握ってきた。

「相模君から、色々とは話は聞いているよ。塚原も、随分と君のことを買っているようだね。今回の要人輸送作戦の指揮官として、榊原中佐を直々に推薦してくるほどだ」

——なるほど、そういうことか。

榊原の中で、ピースが繋がった。

今回の作戦、自分に陣頭指揮が任せられたのは、塚原が働きかけてくれたからだ。それはおそらく、例の謎の艦隊——『T・T独立艦隊』の独自調査について、こちらに配慮してくれたからだろう。

榊原がルソンに来るタイミングと、相模が『T・T独立艦隊』との接触を果たしたタイミングが完全に一致していることが、塚原が予測したことなのか、はたまた運命の悪戯なのかは定かではないが、ともかくこうして榊原がルソンに来れたのは、塚原によるところが大きいだろう。

それだけ、塚原は本気なのだ。そしてこの絶好の機会を、榊原も逃すつもりはなかった。

握手を終え、ソファへの着席を勧められた榊原と随行する秘書艦の曙は、卓己の向かいに腰を下ろす。丁度その時、ルソン警備隊の秘書艦、由良が、人数分のお茶とお茶請けを持って現れた。

「長旅、お疲れ様です」

ヒマワリを思わせる優しい笑顔で差し出されたお茶を、榊原はありがたく受け取った。全員にお茶を出した由良は、そのままゆつくりと卓己の横に腰掛ける。『T・T独立艦隊』の件については、彼女も知っているらしかった。

「それじゃあ、早速本題を始めようか」

全員がお茶に口を付けたのを確認してから、卓己が切り出した。温和な表情はそのままだが、その瞳の奥には、理知を感じさせる鋭い光が宿っている。

「とは言っても、この件に関して、実際の作戦行動は全て相模君に任せてしまったからね。ことの顛末は榊原中佐も彼から聞いていると思うから、端折ることにするよ。代わりに、僕が本土にいた間、伝手を使って可能な限り集めた情報は、いくつか教えてあげることが出来る。それについては、このレポートを読んでくれ」

そう言った卓己に合わせて、由良が茶封筒を取り出した。厚さはあまりない。すなわち本土には、『T・T独立艦隊』に関する資料はほとんどなかったということだ。

「中身は後で見てください。今、私が一番確認したいのは、これからの君たちの行動予定だ」

真剣な眼差しでこちらを見ている卓己に、榊原は口を開く。

「彼女たちとの、直接の接触を試みるつもりです。具体的には、彼女たちが母港とするタウイタウイ島で、と思っています」

「・・・どうしても、行くつもりかな」

卓己の問わんとしていることはわかる。タウイタウイは、封じられた魔の海域、Z海域内に存在する。そこに侵入することがどれだけ危険なことか、ルソン警備隊を率いる卓己が一番知っているはずだ。

「はい」

榊原ははつきりと頷く。卓己は一瞬だけ、諦めたように目を細めると、お茶で唇を湿らせた。

「・・・面白いデータがある」

「面白いデータ、ですか？」

「過去に、Z海域に侵入した艦船のうち、生還することのできた艦船に

関する傾向だ」

そう言った卓己が席を立とうとすると、由良が横から一枚の書類を差し出した。

「提督さん、こちらですよね？」

「ああ、そうだ。さすがは由良だ」

「いいえ、とんでもないです」

嬉しそうに笑った由良から受け取ったその書類を、卓己は榊原と曙に示す。

「小数船団。三、四隻の艦船で構成された船団だと、襲撃される確率が下がっている。全くないとは言い切れないが、少なくとも船団規模が大きければ大きいほど、襲撃を受ける頻度も、非生存率も高くなる傾向がある。この三年、まともに艦船が通行していないから、最新のデータとは言い難いが、少なくともこれまでには、嵐等で誤って乙海域に侵入してしまったはぐれ輸送船が襲撃されたケースはない」

「侵入するなら、少数編成がいい、と？」

その通りだ。そう言いたげに、卓己は頷いた。

「ルソン警備隊が創設されてからおよそ二年半、私はここで海を守ってきた。その自負はある。君たちが成そうとしていることには、私やルソンの艦娘たちの経験が、きつと役立つはずだ。相模君にも言ったが、何かあれば遠慮せず頼ってくれ。少なくともこの警備府で、君たちは『孤独』ではない」

力強い卓己の言葉に、榊原も曙も静かに首肯した。

◇

「舩放て！」

出港用意が整った各艦は、舩を離し、あるいは錨を引き抜く。『曙

』の艦上で行われている一連の作業を、榊原は艦橋から見ていた。

『いよいよ船出の時だ。この世界の真実へ、榊原たちは一步を踏み出そうとしている。』

今回のタウイタウイ遠征に参加するのは、榊原の旗艦『曙』と、相模配下の『瑞穂』、『漣』の三隻だ。艦隊の目として同行する『瑞穂』の艦橋に、相模は立っている。

本件について知らない他の艦娘たちには、乙海域への偵察任務と伝えてある。嘘というのは、真実と混ぜ合わせることで、信憑性が増す。実際、彼女たちが疑っている様子はなかった。もつとも、全員が乙海域の危険性については知っているため、心配もされたが。

若干の罪悪感を頭から振り払う。埠頭から離れ、港外へゆつくりと進んで行く。『曙』に身を委ねながら、榊原は脳内に焼き付けた資料を見返した。

卓己が本土から持ち帰ったのは、過去の乙海域に関する資料であった。襲撃があつた日時や状況、航過した航路など、軍事機密に指定されているであろう情報もある。それらをもとに相模と協議した結果、今回の遠征で通るコースを選んでいた。

——あとは、神のみぞ知る、つてところか。

思わず天を振り仰ぐが、そこにあるのは羅針艦橋の天井であつた。

「両舷原速」

港外へ出たことで、曙が速度を上げるよう指示を出す。三隻分の航跡は、やがて針路をほぼ真南に取り、一路タウイタウイを目指していった。

乙海域進入

ルソンを出港した榊原たち特殊遠征部隊は、南下する航路を取った後、フィリピン南部のミンダナオ島を掠めるように進んだ。ルソンに次ぐ大きさを誇るミンダナオだが、乙海域と直に接しているということもあって、船舶の行き来は沿岸寄りに限定されている。特に乙海域に指定されている南側では、小さな漁船以外に航行する船はまずない。

「・・・静かな海だ」

起動している二二号電探の反応がまばらになって来たのを確認して、榊原はポツリと呟く。かつて多くの船舶が行き来していた海域とは思えない。

電信室の妖精に後を託し、榊原は再び艦橋に戻る。羅針艦橋横の見張り所に立つのは、すでにオートナビゲーションへと切り替え、艀装を外した曙だ。よく冷えていそうなペットボトルを片手に、風に当たっている。顔の右でまとめられた群青の長髪が、しなやかに揺れていた。

「ん、戻ったの？」

「ああ。電探の反応がまばらになってきた」

「でしようね」

いつも通りの簡素な答えが返ってくる。榊原は、制帽が飛ばされないよう気を付けつつ、曙の隣に立った。

「クソ提督も飲む？」

そう言っつて曙が差し出したのは、彼女が持っているのと同じ、ペットボトルに入ったスポーツドリンクだった。よく見れば、曙の足元に氷の入ったバケツが置かれている。ペットボトルはそこに浸け込まれていたらしかった。何とも用意のいい秘書艦だ。

「ありがとう、もちろんですよ」

丁度喉が渴いてきたところだった。差し出されたペットボトルをありがたく受け取り、蓋を開けて中身を啣る。よく冷えた液体が涼しい。

「にしても暑いわね」

キユツと蓋を閉め、ペットボトルをバケツの中に戻した曙が、セーラー服の裾をパタパタとしながら言った。緯度は下がるばかり。赤道に近づくとつれて、気温は上がっている。日光から隠れるものが無い分、甲板の上では余計に暑さが感じられた。

「こういう時は湯船に浸かりたくなるもんだが、そうもいかないしな」
「・・・ていうか、クソ提督はその見てるだけで暑い服装をどうにかしたら？」

曙に指摘されて、榊原は自分の服装を見る。今着ているのは、夏用の第二種軍装。生地は薄手だが、長袖であるところは第一種軍装と変わらない。確かに少し暑い。

「そうは言っても、これが制服だからな」

「こんな極秘任務中に、そんなこと気にしても仕方がないでしょ。着替えてきなさいよ」

「そうか？」

数秒考えた後、榊原は曙に言われた通り、服装を変えることにした。少なくとも、タウイタウイに着くまでは入用にならないはずだ。その間は、夏季作業用に支給されている作業服に着替えることとした。生地は第二種軍装よりも薄く、上着は半袖にもできる。

艦橋を曙に任せ、自室へと足を向ける。曙は艦橋のへりから海を見つめたまま、ひらひらと手を振っていた。

数時間後。

特殊遠征部隊は、張り詰めた緊張感に包まれていた。いよいよ、Z海域に侵入するのだ。

Z海域とはいっても、何か目印があったり、線が引かれているわけではない。ただ海図上に、危険海域、進入禁止の表記があるだけだ。

民間商船では、GPSの位置情報がある一定の距離まで来ると、警報を鳴らしてくれる。しかし、現代機器を受け付けないBOBには、そんな警報装置はない。代わりに、乗艦する提督はGPSの受信機を携帯しているが、今回榊原も相模も、その警報装置の音量を切ってい

た。

すでに精神同調を終えた曙の横に立ち、榊原は自らのGPS受信機を見る。警告音は鳴っていないが、先ほどから受信機は赤い明滅を繰り返している。乙海域まで三海里を切っている証拠だ。先ほど確かめた海図上では、残り一海里半となっていた。

「電探に反応は？」

「全く。『瑞穂』と『漣』が映ってるだけ」

「こんな位置を航行する船舶など、いないのだ。」

見張り所に出て、榊原は双眼鏡を『曙』の後方に向ける。単縦陣を敷いて続行するのは、相模の乗る『瑞穂』、そして『漣』の順番だ。双眼鏡で覗いた『瑞穂』の艦橋から、相模がグツと親指を突き立てている。

「曙、『瑞穂』宛発光信号。無線封止を厳となせ。警戒機、発艦準備」
「了解」

連絡用の探照灯が、カシヤカシヤと信号を送る。程なく、『瑞穂』から了解した旨の返信があった。

——さて、と。

果たして深海棲艦は、見逃してくれるだろうか。

卓己のレポートによれば、確かに少数船団の方が海域進入時の生還率は高い。が、そうは言っても、やはり半数近くが帰らぬ船となっているのは事実だ。残りの半数に、『曙』たちがなれる保証はない。

「『瑞穂』より、警戒機発艦準備完了」

「発艦始め」

「『瑞穂』宛、発艦始め」

『瑞穂』の両舷に備えられたカタパルトから、二機の零水偵が射出された。『曙』の前に出た二機は、部隊の前方警戒を担当する。数分後、さらに二機が射出され、同じく前方の警戒任務に就いた。

「各艦、周囲への警戒を厳となせ」

上空からの目に加えて、各艦の見張り員も動員し、接近する艦艇に注意を払う。波は静かだが、水平線の先のどこかに、数多の船舶を沈めてきた敵艦隊がいると思うと、心は平静でいられない。艦橋中央に

立ちながらも、榊原はいつ飛び込んでくるかもしれない報告に、耳を傾けていた。

とはいえ、常に気を張り詰めていることはできない。乙海域進入から最初の四時間が経過すると、曙は艀装をオートナビゲーシヨンに切り替え、周辺警戒を瑞穂と交代する。精神同調の完了と警戒引き継ぎの旨が「瑞穂」から報され、曙は緊張を解いて艀装を脱いだ。筋肉を弛緩させたのは榊原も同じだ。しばらくは、息抜きをすることができ

る。そうして、二度周辺警戒を交代した後。再び曙が周辺警戒を担っている間に、異変はあった。

時間はすでにミッドナイトを回っていた。警戒機は飛んでいない。夜間飛行をすることは、現状では危険すぎた。今頃搭乗員妖精たちは、母艦となる「瑞穂」の格納庫内に愛機を預け、ぐっすりと眠りについているはずだ。

代わりに頼りになったのは、「曙」が搭載する二二号電探、いわゆる電子の目であった。

「接近する艦影、数少なくとも四！」

——来たか……！

叫んだ曙の報告に、榊原は意識を緊張させた。

「こちらに気付いた様子は？」

「間違いなく見つかった。逆探に感があったし、真っ直ぐ突っ込んでくる」

「艦種は？」

「そこまでは。もう少し接近しないと何とも」

状況は十分に揃っていた。

「無線封止解除。合戦準備」

「……強行突破、つてわけね」

問いかけた曙に、榊原は頷いた。夜間仕様で灯火は落としているが、月明かりでその動きは見えたとはずだ。

『無線封止解除。中佐、状況を報せてください』

作戦行動中ということで、相模の呼びかけも、中佐である榊原に対

する丁寧語だ。こんな状況にもかかわらず、どこか滑稽なその声に、榊原は苦笑してしまった。

「艦影四が接近中。敵味方は不明なるも、接近方向より敵艦である可能性が高い。それと、以後は同期の話し方で結構」

『はいよ、了解した。『瑞穂』は速力があまり出ない。夜戦には不向きだ』

「わかっている。漣を預かってもいいか？」

『もちろんだ。頼んだぞ』

親友との短いやり取りが終わる。やがて、部隊後尾に位置取る駆逐艦娘から通信が入った。

『こちら漣です。ぼのちゃん聞こえてる？』

「聞こえてるわよ。漣、あんたの能天気っぷりは相変わらずね」

『本音がうまく言えないだけですよー』

「はっ、どうだか」

そんな軽口のやり取り。曙の口元が、月明かりの中で自信ありげに吊り上がっていた。

「やることはわかかってんでしょ？」

『もちろん。これくらい、川内さんの訓練に比べればお茶の子さいさいってもんですよ』

「あつそ」

漣とのやり取りを終えたらしい曙が、榊原を向く。静かに頷いたその深い瞳が「いつでもやれるわよ」と雄弁していた。

榊原も頷き返し、マイクのスイッチを入れる。

「漣」

『はい、榊原中佐』

「しばらく、君の指揮権を自分が預かってもいいか？」

『もちろんです。こう見えて、やるときは徹底的にやっちゃう性格ですよ』

隣の曙が、呆れたように息を吐くのがわかった。つまりそれは、漣が言っていることへの、肯定の証。

あの相模の初期艦に選ばれるほどの逸材だ。榊原も、余計な心配は

していなかった。

「艦影に接近して、確認を試みる。危険な任務だが、必ずやり遂げるぞ。我々は、何としてもタウイタウイに辿り着かなくてはならない」
「了解」

『ほいさっさー』

二人の返事を聞き届けて、榊原はもう一度、電信室に確認する。上がってくる報告は変わらない。艦影は方位一五五、部隊の左舷方向から接近してきている。距離は現時点で三万。敵味方の識別を求める電信に、返事はない。敵であると判断された。

「第三戦速。『漣』は『瑞穂』の前に出ろ」

榊原の指示で、二隻の駆逐艦が加速する。『瑞穂』を追い抜いた『漣』は、ピタリと『曙』の後ろにつけている。もとはといえば、両艦とも横須賀の『川内』傘下で同じ水雷戦隊に所属していた。連携は心配する必要がないだろう。よく鍛えられている。

二隻の駆逐艦が、横に並んだまま取舵を切り、接近する艦影の方へと向かっていく。

「電探の感度上昇。あちらも増速」

——挑んでくるか。

どちらにしろ、現状は夜戦だ。水平線よりも手前、相手を目視できる状態でなければ戦闘も行えまい。

「正面砲撃戦用意。接近する艦影が発砲、あるいは艦型識別ができた時点で攻撃を開始する」

攻撃開始のタイミングを榊原が告げた時点で、彼我の距離が二万になった。そろそろ、水平線にその艦影が現れるはずだが、何分頼りとなるのは月明かりだけであり、視認することはなかなか難しい。榊原は艦橋に足を踏ん張ったまま、報告が入るのを待った。

「艦影見ゆ！本艦正面、距離一万二千！」

見張り員からの報告を、曙が叫んだ。双眼鏡を覗きこみ、榊原も確認する。月明かりの下、朧げにマストらしきものが見えている。その下には、艦上構造物らしき箱型の影も。

「艦型識別は？」

「まだ無理ね。でも、この距離であの大きさだとすると、巡洋艦級か駆逐艦級の可能性が高いわ」

「了解」

向かい合って進んでいるため、彼我の距離は見る見るうちに縮まっ
ていく。あつという間に一万を切り、次第にその艦影がはつきりとし
てくる。月光きらめく海面に、黒々とした影が差していた。

彼我の距離が七千を切った時、戦場は急沸騰を始めた。

「敵艦発砲！」

砲炎を確認した時点で、曙は「艦影」ではなく「敵艦」と報告した。
波間の向こうにめくるめく閃光が走る。

「艦型識別できた！先頭から三隻は駆逐八級、その後方に軽巡ト級！」

「撃ち方よーい！」

榊原は即座に、砲撃戦の開始を決断した。すでに測敵を終え、諸元
を入力していた「曙」と「漣」の主砲が、冷たい月夜にキラリと輝
く。

「撃ち方、始め！」

「てーっ！」

敵艦からの第一射が弾着する中、二隻の駆逐艦から反撃の砲火が放
たれた。

乙海域強行突破作戦

互いの砲火が入り乱れる海戦場を、神速が駆け抜けていく。飛沫を散らす艦首は榊原の号令で同時に動き、二隻の駆逐艦はその俊敏さを遺憾なく発揮していた。

「距離六〇―！」

曙が叫ぶのと同時に、八級から放たれた五インチ砲弾が弾着し、水柱を跳ね上げる。榊原も曙も、それに気を留めることなく、ただ前を見つめていた。

榊原がマイクを握る。

「漣、敵艦隊と右舷対右舷ですれ違う。右砲撃戦、右雷撃戦用意！」

『ほいさっさー！右砲撃戦、右雷撃戦用意！』

復唱する漣の声音には、随分と余裕が見られた。どこか曙に似ているその雰囲気にも、頬を緩める。

「・・・何笑ってんの？」

前を見つめたまま、曙が問う。声でも漏れていたのだろうか。

「大したことじゃないよ。それより、どうだ？」

「先頭艦と二番艦に命中弾。ただまあ、今は一番砲塔でしか砲撃できないから、無力化にはまだ時間がかかると思う」

「了解。とりあえず今は、牽制でいい」

「わかってる」

その間にも、〃曙〃は再び咆哮する。敵艦隊へ指向可能な前甲板の一番砲塔二門の一二・七センチ砲から生じた砲炎が海面を赤々と照らしだし、波間を揺らした。駆逐艦とはいえ、腹の底に響く砲撃音だ。

砲撃を続行しつつ、〃曙〃はわずかにその位置をずらし、左へと舵を切る。しばらくして、〃漣〃がその後ろに続いた。

「射角に入った！」

「二番、三番砲塔撃ち方始め！」

針路を変え、右舷対右舷で敵艦隊とすれ違う格好になった〃曙〃の後部二番、三番砲塔が、その射角に敵艦を捉え、発砲する。

もちろん、入れ替わりに敵駆逐艦も全砲で発砲する。それに続い

て、後方の軽巡ト級もだ。『曙』と『漣』の周囲に立ち上る水柱の密度が増す。

それでも、練度は曙たちの方が高かった。

二隻が砲撃を集中していた敵一番艦が、業火に包まれていく。六秒に一回、二隻平均で三秒に一回、一二・七センチ砲弾六発が降り注ぎ、敵艦の甲板を抉った。

敵一番艦の行き足が鈍り始める。炎は収まる気配がなく、月夜の海面を怪しく光らせる

「目標を二番艦へ！」

榊原が指示するまでもなく、曙が叫ぶ。『漣』と揃って、主砲が沈黙し、砲撃目標の変更に入った。

その間、わずかに舵が切られる。相対位置を変え、敵艦の砲撃から逃れるためだ。針路が完全に変わると、再び二隻が発砲。

——さすがの練度だ。

着任直後の戦闘を思い出しす。あの時は、『曙』単艦で駆逐艦三隻を屠ったのだ。

「漣！」

『何かなぼのちゃん？』

「雷撃、行くわよ！」

『お任せあれ！』

曙の声に応え、二隻の駆逐艦が雷撃の準備に入る。今は夜。酸素魚雷でなくても、雷跡を発見するのは困難だ。適切な回避運動はまず取れない。射角を間違えなければ、ほぼ確実に当てられる。まして今回雷撃を行うのは、初期艦に選ばれるような高い練度を持つ駆逐艦二隻だ。

「距離・・・二〇！」

間もなくすれ違おうかという敵艦隊との距離を、曙が読み上げる。彼我の距離はわずかに二千メートル。この距離で外すはずもない。

「投雷始め！」

『漣』と合わせて六基十八本の魚雷が放たれる。海面に飛び込んだ鋼鉄の槍が、滞りなく航走を始めたことを、榊原も確認した。到達

まではおよそ一分半。

「取舵一杯！離脱する！」

用件は終わった。こちらが魚雷を撃てるということは、相手も撃てるということ。敵の航跡を確認してからでは、回避運動は間に合わない。今のうちに、被弾面積を最小にしつつ、離脱を図るべきだ。

「後方、雷跡！」

案の定、魚雷はやってきた。白線の接近を見張り員に知らされた曙は、何やら首を傾げている。

「確認できるだけで四本……？」

——少ないな。

魚雷というのは、数を撃つて当てる兵器だ。たった四本では当たるものも当たらない。非常に合理的な深海棲艦が、そんな非合理的な判断を、この状況ですとは思えなかった。

何かあるのか。榊原の疑問に対する答えは、迅速かつ明確に示された。

「っ!?!敵駆逐艦回避運動!?!」

「何だと!?!」

——投雷タイミングを読まれていた!?!

細かな転舵は続けていたが、「曙」も「漣」も、基本的に敵艦隊とずっと反航していた。そこから、投雷のタイミングを完全に読むことは不可能だ。

では、航跡を発見してから転舵したのか？それも考えにくい。「曙」たちは九〇式魚雷を雷速最大にして投雷している。航跡を見つけてから舵を切るのでは、たとえ駆逐艦でも完全に回避することはできない。

おどろおどろしい轟音が聞こえてきた。見張り員から報された戦果は、回避運動が遅れたト級への命中のみ。ト級は右舷に大きな浸水を生じたらしく、急速に傾いていった。

だが、敵駆逐艦は、まだ二隻が残っている。

苦虫を噛み潰したかのように、曙が表情を歪めた。

「……敵駆逐艦、魚雷を回避。なおも健在」

「取舵一杯。再び接近しての攻撃を試みる」
「了解」

曙はすぐに答え、二隻の駆逐艦が再び舵を切る。魚雷を回避した残存の敵駆逐艦も同じくだ。互いに二隻ずつの駆逐艦が、およそ四千メートルの距離を持って同航している。

「砲撃を再開！」

転舵が終わると、すぐさま主砲が火を噴く。高速での運動を続ける「曙」と「漣」だが、激しい転舵の後も呼吸はピタリと合っている。前甲板にきらめく砲炎の向こう側にも、「漣」の砲炎が見えた。

同航する敵駆逐艦も、砲撃を再開する。艦の前後に据えたじょうろを思わせる単装砲に砲炎が迸り、「曙」たちと同格の五インチ砲弾が飛翔を始める。互いの砲弾が凄まじい速度で交錯し、目標と定めた相手に到達するのに、大して時間はかからなかった。

「っ！」

神原は目を見開いた。「曙」の射弾が正確なのはいつもの通りだ。だが、それと比肩するほどに、敵艦から放たれた射弾も正確だった。「曙」の艦首付近に、明らかに至近弾のそれとわかる水柱が上がっている。砲撃の腕は、それまでの深海棲艦とは比べるべくもない。先ほどまで空振りを繰り返していた敵駆逐艦とは思えなかった。

「取舵一杯！」

次の瞬間、曙が弾かれたように転舵を指示した。どういうことだ。そう尋ねる前に、その答えが目の前に提示される。

朧げな月明かりの下、波間には確かに、こちらへと向かってくる白線が多数見て取れた。見紛うことはない、それは正しく、あらゆる艦艇を水底へと誘う、水面下の死神であった。

「嵌められた・・・っ！」

曙が憎々しげに呟く。あの時と逆だ。接近する魚雷を避けるために、その進路を固定されているのは、「曙」の方だった。

魚雷の通過までは、おそらく三十秒近い時間がかかる。その間、「曙」は敵駆逐艦に丁字を描かれ続けることになる。

ほどなく、敵駆逐艦から五インチ砲弾が飛んでくる。その狙いは正

確だ。命中こそしなかったものの、水柱は「曙」を包み込むように生じており、散布界に捉えられているのは明白だった。

「それなりに覚悟してて、クソ提督」

いつになく、重く低い声で、曙が言った。次の瞬間、敵艦からの次なる射弾が降り注ぎ、艦が被弾の衝撃に打ち震えた。艦橋から被弾箇所は見えない。おそらくは艦の中央部辺りに命中したはずだ。

「曙」も反撃するが、いかんせん、敵艦に対して指向可能なのは前甲板の一二・七センチ連装砲塔一基二門だけであり、いかに曙の腕が確かであると言っても、効果的な射撃を行うことはできなかった。

そうこうしている間にも、敵弾は降り注ぐ。ダビットに直撃した砲弾がそこに吊るされていたカッターを吹き飛ばした。艦橋基部への命中弾が、榊原の足をふらつかせる。探照灯が打ち砕かれ、粉々になったガラスの破片が、キラキラと宙を舞った。

「正面、雷跡！」

それだけではない。艦橋から見える艦首の先、月光を受けて怪しく輝く細長い影。白い航跡を引きずって、魚雷が接近していた。

その行方を、榊原はただ、固唾を呑んで見守ることしかできなかった。曙のとっさの転舵で、被弾面積は最小になっている。後は当たらないことを祈るのみ。

雷跡が迫る間も、五インチ砲弾が五月雨式に襲いかかる。前甲板に命中した敵弾が弾け、リノリウムを抉る。艦橋を掠めた敵弾に、窓が震えた。

「魚雷通過！取舵一杯！」

雷跡の通過を確認して、「曙」はすぐさま艦首を左に振る。同じように回避行動を取っていた「漣」もそれに続いた。二隻の駆逐艦は、自らの身を焦がす敵弾から逃れるように、反航戦の形態へと移行する。だが、そう簡単に逃してくるはずもなく、敵駆逐艦が急速反転、再び同航戦に移行した。

榊原の額を冷たい汗が伝う。現状不利なのは、どう見ても「曙」たちだ。

なんとかしなければ。「曙」が再び放った斉射を見つめながら、榊

原が思考の海に乗り出そうとした、その時だった。

“曙”と相対する敵駆逐艦の周囲に、白亜の巨城を思わせる水柱が、同時に多数立ち上った。本数は八本。沸騰した海水が天を突かればかりの勢いで舞い上がり、やがて重力に従って倒壊する。ほんの一時の幻想的な光景は、その終焉と同時に、白濁のカーテンの内に隠していた敵駆逐艦を跡形もなく消し去った。

何が起きたかは明白だ。どこから飛んできた砲弾が、その冒瀆的な破壊力で敵駆逐艦を貫き、痕跡一つ残すことを許さずに水底へと引きずり込んだのだ。

——一体何が・・・？

目の前の状況に呆気にとられているのは、榊原だけではない。隣の曙もまた、臨戦態勢の険しい表情で、今しがた敵駆逐艦が浮いていた海面を見つめていた。

「・・・水柱の大きさからみて、今のは多分、三六センチ級の砲撃ね」
それだけポツリと呟いたまま、押し黙る。

状況はそれだけでは終わらなかった。先の弾着からおよそ三十秒、今度は“漣”と相対していた敵駆逐艦の周囲に、海水の瀑布が生じる。その後には起きたことは同じだ。水滴のオーロラの向こう側に一瞬だけ赤い光が見えた気がしたが、それを確認する間もなかった。

—— たった二射で、駆逐艦二隻を撃沈するとは・・・。
驚くべき射撃精度だ。あまりの正確さに寒気すら襲ってくる。

「周囲に艦影は？」

「今搜索中」

敵駆逐艦に指向され続けていた二二号電探が旋回し、周囲にたった今の射撃を行った艦影を探す。程なく、電探に反応があった。

「艦影三。方位一九〇、距離二万」

——二万!?

すなわち、たった今の砲撃を行った張本人は、夜間にもかかわらず、距離一万五千メートルで初弾から敵駆逐艦に砲撃を命中させたのだ。それも、二回続けて。

一体何者なんだ。

電信室が、不明艦からの通信を報せる。艦橋へ直接繋げるよう指示して、榊原はマイクを取った。

スピーカーから、「彼女」の名乗りが聞こえた。

『タウイタウイ泊地より、お迎えに参りました。　「雲仙」型超巡洋艦
一番艦の、雲仙と申します』

閉海ノ探索者

朝が、海上にやってきた。水平線まで澄み切った海面に、朝陽が顔を見せる。波頭をオレンジ色に染める光景に、榊原は目を細めた。

「朝、ね・・・」

眩いた曙の視線は険しい。その目線は、緩やかに波を切り裂く艦首の先を向いていた。

そこには、三隻の艦が、"曙"たちを誘導するかのようになり、静かに航行している。特に、正面の艦影が印象的だった。細く絞られた艦体に、どつしりとした連装砲塔が乗っている、見るからに速そうな戦艦だ。スツキリとまとまった艦橋は、パラオ泊地に所属する"大和"に似ている。

"雲仙"型超巡洋艦、一番艦の雲仙。彼女はそう名乗った。

超巡洋艦と言えば、マル五計画で建造が予定されていた艦艇だ。B65型とも呼ばれる。条約型重巡洋艦を圧倒しうる砲力を求められ、三〇センチ砲を搭載する予定であった。最終的な艦型は、おそらく米海軍の"アラスカ"級大型巡洋艦に近いものとなっただろう。

ただ、目の前の"雲仙"は、超巡洋艦というにはあまりにも強力だ。三六センチ砲搭載の巡洋艦など聞いたことがない。それはもはや、巡洋戦艦や高速戦艦と呼ぶべき代物だ。

——想像以上に、とんでもない艦だ。

鋼鉄をきらめかせる"雲仙"を、榊原もまた見つめる。丁度その時、"雲仙"から通信が入った。

『タウイタウイ泊地まで五海里です。入港の準備を』
「了解」

入港準備の指示を受け、曙が精神同調に入る。入港時の細かな作業は、艦と一体になった艦娘にはお手の物だ。

太陽が昇ったことで、近づいてきた島の形がはっきりし始めた。そこに設けられている港湾施設もよく見える。この数年間、船舶の出入りがなかったとは思えないほど、整備の行き届いた施設だった。

あれが、謎の艦隊——『T・T独立艦隊』が拠点とする、港湾施

設なのだろう。

「停泊中の艦船を確認」

曙が報せる。榊原も双眼鏡を覗き込んだ。第四埠頭への入港を指示された「曙」の進路に、邪魔になる船がないか確かめる。

「・・・デカいな」

真つ先に浮かんだ感想はそれだった。

港湾施設の沖に、錨を打っている艦船。その中で、一際大きな艦体を持つBOB。

「泊地まで三海里」

港湾施設が近づいてくるにつれ、その艦影もはっきりとして来る。同時にそのあまりに巨大な艦体も際立つ。

天までそびえるような艦橋。要塞がごとき主砲塔からは、極太の砲身が突き出している。針鼠のような高角砲は、遙かなる高空を睥む。それらの艤装類を支える艦体は、巨躯と呼ぶに相応しい。

それだけではない。泊地には何隻ものBOBが停泊していた。

同型と思しき大型空母が二隻、仲良く寄り添うようにして錨を下ろしている。

高角砲を満載した巡洋艦。

艦型のよく似た重巡洋艦と軽巡洋艦。

「雲仙」の同型艦と思われる戦艦も見えた。

そのどれもが、日本海軍——否、世界のどの海軍の艦型識別表にも記載されていない軍艦たちだ。

タグボートが近づいてくる。「曙」を第四埠頭に横付ける手伝いをしてくれるようだ。後ろの「瑞穂」と「漣」にも、同じようにタグボートが付き従っている。

——全ては、これから明らかになる、か。

憶測を並べる必要はない。答えは目の前にあるのだから。自ら真実を解き明かすことができるのだから。

この艦隊の目的。そして、存在しないはずの軍艦たち。

第四埠頭に待つ人影を見つけた時、「曙」が着岸作業に入った。

「ようこそ、タウイタウイ泊地へ」

舷梯から降り立った榊原と相模を、朗らかな笑みの少女が敬礼で出迎えた。

着ているのは海軍の白い第二種軍装だ。年の頃は十六、七といったところだろうか。まだ幼さの残る顔に、深みのある瞳が印象的だった。

その隣には、長身の女性が立つ。いわゆる巫女服を着た彼女は、きりりと引き締まった表情のまま、少女の横に立っていた。

少女の敬礼に、二人も応える。手を下げた後、少女が名乗った。

「タウイタウイ泊地提督、磯崎舞特務大尉です」

内心の衝撃は言うまでもない。これほどの規模を持った艦隊を預かっているのが、明らかに年端もいかぬ少女だったのだから。

「パラオ泊地提督、榊原広人中佐です」

「ルソン警備隊提督、相模篤少佐です」

それぞれに名乗った後、握手を交わす。舞の手は手袋越しでもわかるくらい温かく、こちらをしつかりと握り返してきた。彼女の信念のようなものを、感じた気がした。

「応接室の方へ、ご案内します」

巫女服の女性——紀伊と名乗った『T・T独立艦隊』の秘書艦の案内で、二人と曙、瑞穂、漣は庁舎の方へ足を向ける。その間、隣を歩く舞が、『T・T独立艦隊』の概要について軽く説明を入れてくれた。「私たちの艦隊は、戦艦一隻、空母二隻、超巡洋艦二隻、重巡洋艦一隻、軽巡洋艦三隻、駆逐艦六隻で構成されています。創設はおよそ二年前。私は二人目の提督になります」

「二人目？」

「前任者に会ったことはありません」

舞がチラリと紀伊を窺う。

「調べることは可能だと思いますけど、正直この半年間、それどころではなかったのです」

「それは・・・そうでしょう」

半年間。この、誰にも知られることのない、秘密の艦隊を、一人で

指揮してきたということか。余裕なんてないであろうことは、同じように一人でパラオ泊地を切り盛りしていた時期がある榊原にもわかった。

「この艦娘たちとは、どのように邂逅を？」

「皆建造だそうですよ。まあ、私が着任するよりも前の話なんですけど」

——この艦隊を育てたのは、その前任者ということか。

きつと、舞自身も、まだまだ答えを探している途中なのだろう。

応接室は、決して大きな部屋ではなかった。榊原と相模はともかく、曙たちが座るスペースはない。三人には待つているように指示をして、二人だけが舞と紀伊と共に中に入った。曙たちについては、奥入瀬と名乗った気の優しいような軽巡洋艦娘が、レクリエーションスペースへ案内してくれた。

応接室のこじんまりとした机に、榊原と相模、舞と紀伊が向かい合って座る。机にはすでに全員分のお茶が用意されていた。

「わざわざお越しいただいて、ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ、無理を言ってしまいました」

彼女たちとの接触のために、多少強引な手を使ったことは、榊原も聞いている。二人は揃って頭を下げた。

「本題に入る前に、お聞きしてもいいですか？榊原中佐と相模少佐は、どうして私たちの存在に辿り着いたのですか？」

「正確には、気づいたのは我々ではなく、横須賀に所属している提督です。トラック沖海戦の精査をしていた際に見つけた矛盾点を洗い出した結果、同海域にもう一つの艦隊が存在した可能性を導き出しました。彼自身は、直接調査をできる身の上になかったので、自分と相模少佐が調査を引き受けました」

「・・・まあ、そうですね。あれだけ、派手にトラックを攻撃しましたし」

舞は苦笑気味に頬を掻いた。それから咳払いを一回挟み、本題を話し出す。

「さて、まずは何かからお話ししましょうか」

「皆さんの目的について、お聞きしたい」

「そうですね。では、そこから話を始めましょう」

榊原の問いに頷いて、舞は湯呑みに口を付け、話を始めた。

「私たちの目的は、大きく分けて二つあります。一つ目に、乙海域における深海棲艦の動きの監視。二つ目に、深海棲艦と艦娘の存在の探求」

舞は二本の指を立てる。

「乙海域の監視は、タウイタウイ泊地創設時から変わらない目的です。お二人もご存じの通り、乙海域は深海棲艦の行動が活発な、危険海域です。さらに言うと、深海棲艦全体の性能も練度も、他の海域のものより高い」

その点に関しては、榊原も身を持って体験していた。

「・・・それに加えて、乙海域内には、ここにしか存在が確認されていない、未知の深海棲艦が展開しています」

「それは、ハワイ沖の・・・暫定呼称が『鬼』や『姫』とされているものとは違うのか？」

手を上げて尋ねたのは相模だ。舞は首を横に振る。

「場合によっては、それよりもさらに、タチの悪い存在です。性能はもちろん、練度も異様に高い。例えば戦艦で言えば、初弾命中は日常茶飯事です」

二人は息を飲む。戦艦の砲撃において、理想とされる初弾命中であるが、いざ成そうとした時に実現するのがいかに難しいことかは、深く考えずともよくわかる。

「通常のBOBでは、まず太刀打ちできない深海棲艦。私たちは『イレギュラー』と呼んでいます」

「『イレギュラー』・・・」

「これらの深海棲艦が、乙海域外に出て行ってしまうことは、非常に危険です。今のところそのような兆候はありませんが、乙海域内での深海棲艦の動きには、注意を払っていかなければなりません」

「・・・もしかして、皆さんがトラック沖で作戦行動を行っていたのは、その『イレギュラー』が確認されたからですか？」

「その通りです。先ほどもお話ししましたが、私はこの艦隊の提督としては二人目になります。ですが、前任者から直接引き継いだわけではありません。私が着任するまでの一か月ほど、提督不在によりこの艦隊の活動が停滞していた時期がありました。おそらくその間に、警戒線を抜けたものと思われまます」

「それで、わざわざトラック沖へ出撃を？ 連合艦隊に任せると言う判断はなかったのですか？」

舞は静かに首を横に振った。

「まず第一に、『イレギュラー』の存在を公にするわけにはいきませんでした。それに、トラック沖の『イレギュラー』——コードネーム『コマツグミ』と呼ばれている戦艦は、連合艦隊が戦うにはあまりにも強力過ぎます。『イレギュラー』との戦闘に慣れている私たちが相手取るべきだと判断しました」

筋は通っている。『イレギュラー』というのがどのような深海棲艦なのか、榊原は実際に見たわけではないから、何とも言えない。逆に言えば、何も知らないのだ。そんな相手と戦うのは危険すぎる。であるならば、すでにそうした経験のある『T・T独立艦隊』に任せるのが上策というものだ。

まあ、終わったことをあれこれ考えても仕方がない。

「では、皆さんの第二の目的、深海棲艦と艦娘の存在の究明については？」

「これも、『イレギュラー』の存在が大きいかかわっています」

そこで舞は、隣に控えていた紀伊に目配せをした。紀伊が領いて、巫女服の袖から一枚の紙を取り出す。大きさや紙質からして、写真の類であると思われた。

差し出された写真を受け取り、榊原と相模は覗き込む。

映っているのは、三人の女性だ。一人は舞。もう一人は、衣装は変わっているが紀伊であるとわかった。

最後の一人は、夜の海を思わせる漆黒のドレスを纏っている。黒のリボンをした深い艶のある銀髪は長く、風になびくのを白い手が押さえていた。瞳は深紅。不思議な佇まいの女性だった。

さらに、写真を取られた場所も不可思議だ。おそらくは船の甲板上。しかし、その甲板は所々煤汚れ、被弾のような跡も見える。

「この写真は・・・？」

「『アマギゴエ』という『イレギュラー』との戦闘後に撮ったものです」

——まさか・・・！

榊原の背中を、雷に打たれたかのような衝撃が走った。

「彼女は、『アマギゴエ』の『艦娘』、アスチルベです。『イレギュラー』には・・・いえ、全ての深海棲艦には、彼女のように『艦娘』と同じ役割を果たす存在がいます」

それはつまり——

「私たちと深海棲艦は、限定的ですが、意思疎通を図ることが可能です」

異端者、先駆者

少し考えれば、わかることだ。

BOBも深海棲艦も、艦体を構成しているのは同じブルーアイアンだ。そして艦娘は、精神同調によってブルーアイアンと接続され、艦体を自らの手足のように動かすことができる。で、あるならば。深海棲艦もまた、艦娘と同じような存在を持っていると考えるのが妥当だ。

「艦娘、そして深海棲艦の起源に迫る探究。そのために私たちは、『イレギュラー』との接触を続けています」

舞はそう言って、ゆっくりとお茶に口を付けた。

「接触を・・・受け入れてくれるのですか？」

「『イレギュラー』は変わっています。自分たちを『異端者』だと、名乗っていました。そしてどうやら、彼女たちの目的は、私たち『T・T独立艦隊』と同じであるようです。ですから、私たちと『イレギュラー』との間では、意思疎通、情報交換が可能です。まあ、やり方は少し乱暴ですけどね」

驚くべき事実だ。深海棲艦は、これまで一切の呼びかけに応じてこなかった。故に人類は、深海棲艦には人類に相当する意思がない、あるいは対話の意思はないと判断して、一切の対話の手段を排除して戦闘を行ってきた。

——それもおかしな話だ。

深海棲艦には、確かな行動ロジックと明確な戦術、戦略が存在した。それは、意思を保有していなければ成し得ないことだ。

我々は、物事を自分の都合のいいように解釈しすぎていたのかもしれない。

「・・・皆さんの目的については、理解しました。まだ、信じ難い部分はありませんが」

「そう、ですよ。正直なところ、私自身も、まだまだ消化しきれっていないところがあります」

舞もまた、困ったように苦笑を浮かべていた。

「これまでの話を聞く限り、」

今度は相模が口を開く。愛用のメモを取り出し出している彼は、塚原からこの件に関して依頼された時と同じ表情をしている。鋭い眼光の奥にも、溢れんばかりの好奇心が見て取れた。

「舞ちゃんは、俺たちと共同戦線を張ることについては、慎重つてこと
でいいかな？」

相変わらず、真剣な時ほど口調が軽くなる相模であった。

「そういうことです」

堅かった舞の表情に、年相応の穏やかさが戻る。こういうところ、自分にはない才能だと思いつつ、榊原は舞と相模の話に耳を傾けた。「トラック沖での作戦行動について話があった時も、判断を保留にさせてもらいました。優柔不断だとは思いますが、それでもやっぱり、皆を……この艦隊の仲間を衆人の目にさらすのは、憚られます」

「イレギュラー」と同様、『T・T独立艦隊』の面々もまた、本来存在するべきではない軍艦”たちだ。その存在が公になった時、世界に与える衝撃は想像もつかない。

「そっか。舞ちゃんにとってこの艦隊の皆は、何よりも大切な存在なんだね」

微笑んだ相模に、舞は一瞬驚いたように目を見開いた後、相好を崩した。海面に覗いた朝陽のような笑顔だった。

「はい。私にとっては、唯一無二の家族みたいなものですから」

この、磯崎舞という少女に、何が起こったのかはわからない。なぜ彼女が、この艦隊の提督となったのかも。それでも少女は、強く生き
ている。

「話が逸れちゃいましたね。今も言いました通り、私たちは基本的に、このZ海域から出るつもりはありませんでした。おそらくこれからも、もう二度と、出ることはないと思います。ただ、」

舞の表情が引き締まった。

「トラック沖に出撃したことで、状況に変化が訪れたのも事実です」

「変化、ですか」

「先日……二週間ほど前ですけど、初めて『イレギュラー』側から接

触がありました」

「っ!!」

「今まで彼女たちは、こちらから接触しなければ、決して意思の疎通を図ろうとはしませんでした。その辺りは普通の深海棲艦と変わりません。トラック沖の攻撃後、深海棲艦の上位意志が立てた計画に狂いが生じたとの理由で、あちら側から対話を望んできました」

対話のためにタウイタウイへやってきたのは、「イレギュラー」——否、深海棲艦の中でもかなりの上位であると目される『艦娘』であつたらしい。

「計画、というのは？」

「さすがにそこまでは。『彼女』——ミヤコワスレの寄港目的はあくまで『報告』でした。自らの意志がどこにあつて、何をしたか、何をするか。それだけです。最低限教えてくれたことは、『イレギュラー』、そして私たちが探しているBOBと深海棲艦の『起源』は、元々一つであつたらしいこと。ミヤコワスレは、今なお行方をくらましている『起源』の存在を知っているということ。計画を立てたのは、その『起源』自身であること」

そこまで言い切つてから、舞は何やら考えるようにして、さらに続けた。

「こうも言っていました。ミヤコワスレたちが『大いなる先駆者』と呼んでいる『起源』は、人類に一つの『鍵』を渡した。その『鍵』は、ある時二つに分かれてしまった。計画に狂いが生じた結果、『大いなる先駆者』は、近いうちに二つの『鍵』を一つに戻す必要に迫られた」

キーワードは揃っている。しかし、繋がりが見えない。まるで謎かけのような言葉だ。大の男二人も唸つてしまう。

「『鍵』、『大いなる先駆者』……何か厨二臭いネーミングだな」
「二つ一つに意味はあるんだろうが……それだけでは、何か掴むことは難しいな」

「だが、ある程度は絞れるぞ」

相模が愉快そうに笑う。

「『鍵』が二つに『割れた』、ではなく『分かれた』ということは、大いなる先駆者」が俺たちに与えたものは、物理的な何かではないということだ。おそらくは精神的なもの、あるいは考え方だ。それと、重要なのは、『鍵』そのものよりもその先にある・・・仮に『門』とでも呼ぼうか、そっちの方だな。でなければ、わざわざ『鍵』なんて言い回しをする必要はない」

「・・・すごいですね、その通りです。ミヤコワスレもそう言っていました」

舞が心底驚いた様子で言った。

「相模さん、何者なんですか？」

「ただの、ギンバイが得意な情報屋だよ」

相模が華麗なウインクを決める。

「もしかして、その先まである程度予想できたりしますか？ミヤコワスレは、それ以上のことは答えてくれなかったの」

「そうだな・・・『二つに分かれた』ってことは、その『鍵』が何らかの拍子で存続の危機に立たされたとき、自由に動けなかったってことだ。だから保険として、自らを二つに分け、最低でもどちらかが存続するように仕向けた。この考えだと、『鍵』には持ち主・・・抛り所が必要になるな。人類側に『鍵』を渡すとして、抛り所になり得るのは、艦娘かBOBしかないだろう。そして、『大いなる先駆者』が『鍵』を与えるとしたら」

「・・・最初の艦娘、吹雪しかないってことか」

「そういうこと。あくまで、俺の仮説な」

筋は、通っている。もちろん、情報が少ないゆえに、色々と粗削りな部分はある。結局、『鍵』が何なのか、そこには辿り着いていない。それでも、大きな前進と言えるだろうか。

「・・・確かに、一応、筋は通りますね」

「そう。あくまで『一応』だ。何の拍子に、吹雪を抛り所としていた『鍵』が二つに分かれたのか。分かれた『鍵』のもう片割れはどこへ行ったのか。説明の着かんことは山ほどだな」

相模の大胆な仮説を聞き届け、榊原は湯呑みに手を伸ばす。湯気を

立っていたお茶はいつの間にか冷めて、唇を湿らすには丁度良かった。

「『鍵』・・・『門』・・・結局、最後には何が待っているんでしょうか？」

静かに話を聞いていた紀伊が、鈴の音のように澄んだ声で尋ねる。各人が考えるような間があった後、榊原はゆっくりと慎重に、その口を開いた。

「BOBと深海棲艦、二つの存在の、『起源』としか・・・」

深海棲艦の『起源』——『大いなる先駆者』の考えが読めない。そもそも、『大いなる先駆者』は、本当に深海棲艦なのか？他の深海棲艦とは、あまりにもその目的が違い過ぎている。

それはあたかも、戦いを望んでいるかのような策略。敵であるはずの人類に、わざわざ『鍵』を送り付ける不可解な行為。

いや・・・果たして『大いなる先駆者』には、人類と戦っている意識はあるのか？

「『起源』と言えば、」

どん詰まりになりかけた話を転換するように、相模が軽い口調で切り出した。頭の切り替えが早い悪友の存在が、今回は非常にありがたい。

『T・T独立艦隊』の皆は、どうやって建造されたのかな？」

「・・・確かに、気になるな」

自分でも難しくなっていたのがわかる顔を、意識的にほぐし、榊原も舞たちの方を見る。向かい合った二人も少しだけ表情を緩め、冷めたお茶に手を付けた。話を始めたのは紀伊だ。

「私たちは、一人を除いて建造の儀式を行うことができません。ですからこの泊地の艦娘は、全員彼女が——軽巡洋艦娘の三瀬が建造しています」

三瀬、と聞いて、榊原は先ほど埠頭で見た艦影を思い出す。

軽快そうな細身の艦体は、軽巡洋艦らしい鋭さに満ちている。その艦上に、これでもかと据えられた五基の一五・五サンチ三連装砲塔、二基の四連装魚雷発射管、四基の高角砲。イメージとしては、軽巡時代

の「最上」型と「阿賀野」型を足して二で割った感じだろうか。

「彼女が泊地最古参です。前任の提督と共に着任しています」

「なるほど。それじゃあ、三瀬がお母さんで、後は皆姉妹みたいなものか」

「そうなりますね」

相模の言葉に、紀伊がクスリと笑う。

「三瀬が邂逅者となって建造を行った結果、私たち「本来存在しない」軍艦が生まれました。そして全員、邂逅者としての資格を持ちません」

「・・・つまり、三瀬さんだけが、新しい艦娘と邂逅できるということですか」

「はい。それに、今はもう。建造を彼女だけに頼ったために、かなりの負荷がかかっています。三瀬も、もう二度と、建造や邂逅はできません」

——・・・ちよつと待てよ。

三瀬が邂逅者となったことで、本来存在しない軍艦が建造された。それでは、

「三瀬」自身は、誰が建造したんだ？

旧帝国海軍艦——のみならず、世界中のどこにも、軽巡洋艦「三瀬」に該当するような軍艦はない。「三瀬」自身もまた、本来存在しない軍艦だ。

「三瀬」が「三瀬」と邂逅したのでは、それこそ鶏と卵どころの話ではない。

つまり、本来存在しない軍艦である「三瀬」と邂逅した艦娘がいるはずだ。

「・・・三瀬自身は、どうやって生まれたんですか？」

努めて何となしに訊いたのだが、紀伊はその口をつぐんでしまった。しまった、と思った時にはもう遅かった。

「それは・・・」

紀伊は口を開きかけ、また止める。その目が舞を見た。

「すみません、榊原中佐。それに関しては、軍機指定です。さすがの私

でも答えられませんよ」

舞は唇に人差し指を当て、片目を瞑りながらおどけて言った。どこか相模に似たその仕種に、榊原も紀伊もホッと胸を撫で下ろす。

磯崎舞とは、何とも不思議な少女だ。

「女性の出自を気にするようじゃ、まだまだだな広人」

相模も笑いながら、榊原の背中をバシバシと叩く。そんな二人の様子に苦笑した舞が、柔らかな表情のまま再び口を開く。

「ちなみにですけど。お二人は『刃櫻会』について、聞いたことはありませんか？」

静カナ海、静カナ夜

乙海域という荒海にも、静かな夜はやって来るものだ。月夜が反射するタウイタウイ泊地の波面は優しい光を振りまき、辺りを朧げに照らしている。体に触れる夜の空気を、榊原は肺一杯に吸い込んだ。

タウイタウイには、一応士官用の風呂がある。ただ、舞は普段艦娘たちと一緒に入っているらしく、ここしばらくは使われていなかったそう。パラオよりは小さいが、細かい内装にこだわりが見られる、趣のある風呂だった。

風呂から上がり、手持無沙汰となった榊原は、特に何をすることもなく、タウイタウイの風に当たっていた。

舞との話を終えた後、榊原と相模、曙たちはタウイタウイ泊地を案内された。その時のおかげで、ある程度地理はわかる。庁舎を出た榊原の足は、フラフラと埠頭に向かっていった。

海から吹く風が、風呂上がりの体に心地いい。日中は暑かったが、こうして風が吹いた時の涼しさは何にも代えがたい。ビールでもあれば最高だ。

「舞さん？」

ふと、そんな榊原に呼びかける声があった。上の方から降ってきた声に、榊原は辺りを見回す。

月光に浮かび上がる人影は、榊原の背後に停泊するBOBの艦橋にあった。軽巡洋艦の「三瀬」。タウイタウイ泊地最古参の艦だ。

人影と目が合った。月に照らされるのは、伝説の白蛇を思わせるような、神々しい白髪。柔らかい眼差し。しなやかに揺れる、巫女服の白。

「あ……すみません」

少女も榊原を認めたらしい。しばらく逡巡するような間があった後、少女は予想だにしない行動に出た。

なんと、艦橋脇見張り所のへりを飛び越えたのだ。

軽巡とはいえ、「三瀬」の艦橋脇見張り所から甲板までは十メートル近くある。ただではすむまい。

脊髄反射で動きだした榊原だが、その行動が実を結ぶ前に、少女は甲板に激突している。否、まるで重力に逆らうかのように、非常に柔らかな着地を決めていた。

何がおだかわからない榊原を気にする風もなく、少女は『三瀬』の甲板から埠頭に移ってきた。

「失礼しました。こんな時間に出歩くななんて、舞さんぐらいだったので」

「は、はあ・・・」

物理法則完全無視の事態に関する整理と理解を半ば放棄して、榊原は少女を見た。

「自分は榊原広人中佐です」

「ルソンからいらしてた方ですね。驚かせてしまつてすみません。私は・・・軽巡洋艦『三瀬』です」

名乗る時に、微妙な間があった。

「貴女が、三瀬さん。舞さんからお話は何いました。こちらこそ、こんな夜遅くにすみません」

「いいえ、気にしないでください」

三瀬が微笑する。どこか寂しげな笑みだった。

「三瀬さんは、艦内で生活されてるんですか？」

「はい。ご飯を食べるのも、お風呂も、基本的には『三瀬』の中ですね。できるだけ、一緒にいたいので」

三瀬がチラリと後ろを仰ぎ見る。よく見れば、甲板の上に集団でくつろいでいる妖精がいた。お酒でも飲んでいのだろうか。微笑んだ三瀬につられて、榊原の表情も和らぐ。

「仲が良いんですね」

「今の私を預けられる、大切な人たちです」

誇るわけでもなく。慈しむような三瀬のその視線は、どこか曙に似たものを感じる。いつだか、榊原に「信じてる」と言ったあの時の、深い蒼の瞳。

「榊原中佐は、どうしてこちらに？」

「少々手持無沙汰です。風にでも当たろうかと」

「いえ、そういうことではなく。どうして、タウイタウイにいらしたんですか？どうして、危険を冒してまで、来ようと思ったんですか？」
「ああ、そういうことですか」

「こちらを覗き込むような三瀬の質問に、榊原はしばし考える。自分が、この危険な海を渡ろうと思った理由を。彼女たちに会おうと思つたわけを。自分の中で、上手く説明できていなかった部分を。

「・・・自分が、提督だから、としか言いようがありません」
「どうゆうことですか？」

「例えば、こういう話を相模以外にするのは初めてだ。

「艦娘たちを守るのは、自分たち提督だけです。彼女たちを導くのが、自分たちの役目です。だから自分は、知り得ることを全て知っておきたい。判断の材料は多いにこしたことはありませんから」

「それで、タウイタウイに？」

「公式の記録に残らない艦隊。言ってしまうえば、非常に異質な存在です。記録に残らないから、その目的も、行動も、知るためには直接来るしかありませんでした」

「静かにこちらを見ている三瀬の目を、榊原も見つめ返す。

「今回ここに來ること、貴女方に会って、その目的を知ることができました。危険を冒してまで來る意味はあったと思っています」

「・・・そうですか」

榊原の話を聞いていた三瀬が、何かを噛みしめるように小さく何度も頷く。その深い瞳が、再び榊原を捉えた。

「舞さんとそっくりですね。『私は皆の港でいたい』、そんなことを言っていたことがありました」

「港、ですか。言い得て妙ですね」

「私たち、本来存在しないはずの“軍艦にとって、舞さんは唯一の”帰るべき場所”なんです」

胸に手を当て、三瀬が言う。落ち着いた仕種が、彼女の心の内を示しているようだった。細められた瞳が光る。

「・・・榊原中佐は、灯台、でしょうか？艦を導く、明るい光」
「それはいいですね」

大きく頷いてみせる。

「艦娘たちの灯台。そうなれるならば、自分は本望です」

はつきりと答えた榊原に、三瀬が微笑んだ。

「そろそろ戻らないと。お散歩の途中だったのに、すみません」

「とんでもないです。お話が聞けて、本当によかった」

三瀬が艦内に戻っていく。その背中を見送った榊原は、改めて「三瀬」を見渡す。

——灯台、か。

海征く者の道標。果たして自分に、その大役が務まるであろうか？
務まるかどうかでは、ないのであろう。自分がやるしかないのだ。
なぜか。榊原が、提督だからだ。

*

曙は、遅めの風呂を満喫していた。いつもの通り、体を手早く洗い、長い髪をまとめる。陸にいるため、清水の節約を考えなくていいのがあるがたい。

タウイタウイの風呂も、パラオと同じく露天風呂があった。岩風呂の横に、アレンジメントとして南方の草花が植えられている。しかもその間から、綺麗な星空が見えた。泊地の灯火が控えめゆえだ。

「んっ……」

その星空に向かって、大きく伸びをする。それから全身の筋肉を弛緩させると、気の抜けた溜め息が漏れた。

やっぱり、風呂はいい。

そこではつとして、柵の向こう、隣の男湯を窺う。人の気配らしきものはしない。この泊地唯一の男性——榊原は、そこにはいないらしい。

「……何を、気にしてんのよ」

気にしても仕方のない。

「何を気にしてるの？」

「ふえあっ!?!」

代わりに。人の気配は後ろからした。自分でもわかるくらい素っ頓狂な声に赤面しつつ、曙は後ろを振り返る。

屋内浴室との入口に立っている人影。肩口で髪を揃えた少女は、首を傾げて曙を見ている。磯崎舞特務大尉。このタウイタウイ泊地の提督だ。

「隣、いいかな？」

「・・・いい、いいけど」

昼間の、榊原たちを案内していた時のような、かっちりした雰囲気はない。大人びた気配もない。どこか砕けた様子の、一人の少女が立っている。

舞はゆつくりと腰を下ろし、曙の横で湯船に浸かる。天に向けて大きく伸びをすれば、歳相応に発育したそれが主張する。曙は思わず、自分の胸に手を当ててしまった。

「それで、曙ちゃん。何を気にしてたのかな？」

舞がニッコニコの笑顔で訊いてくる。

「べ、別に。何も気にしてないわよ」

「ふーん？」

こちらを覗き込んでくる舞から目を逸らす。明らかに納得していない。というか面白がっている。

「榊原中佐には、気の抜けたところ、見せたくない？」

「ぶっ!!」

思わぬ指摘に、曙は噴き出し、咳き込んでしまう。ようやく収まったと思った顔の温度が再び上がってくるのを感じて、曙は反論する。

「な、何でそうなのよー」

「違うの？」

さらに言われて、言葉に詰まる。

自覚がないと言えば、嘘になるだろうか。だけれども、それは当たり前のことだと思っている。

なぜならあたしは、初期艦だから。クソ提督の秘書艦だから。前に突き進む榊原広人という提督の、そばにすることができるのはあたしだけだから。

気の抜けたところは、見せたくない。

「・・・そりゃ、気の抜けたところ、見せたくないわよ。あたしはクソ提

督の初期艦で、秘書艦だから」

「そっか」

「何よ、文句ある?」

舞は笑って首を振った。

「曙ちゃんは、好きな人には、かっこつけたいタイプか」

唐突に襲ってきた過去最大の衝撃に、曙は一時的に艦種を駆逐艦から潜水艦に変更することで対処した。

温度計が振り切れるかと思うほど上がった顔の温度が冷める前に、曙の肺活量が限界を迎え、急速浮上する。再び駆逐艦に戻った曙は、精々の抵抗とでも言うように、水面でブクブクと息を吐く。

「話は変わるんだけど」

そんな曙の様子を知ってか知らずか、舞は構うことなくさらに話を続ける。

「曙ちゃんは、横須賀の所属だったよね?それも、かなり早い頃から」
口調は砕けたままだが、雰囲気は違った。榊原と同じだ。この少女は立派に提督だ。

「・・・そうよ。それがどうかしたの?」

「じゃあ、もちろん吹雪さんのことも知ってるわけだ」

曙の中で、チクリと何かが痛んだ。

「知らないわけではないでしょ。ていうか、あたしの教導が吹雪だったし」

「へえ、それじゃあ、曙ちゃんが吹雪さんの愛弟子になるんだ」

「正確には、最後の“愛弟子”ね。他の艦娘も、基本的なところは全部吹雪が教えてたわけだし」

今の曙を作ったのは、吹雪であると言っても過言ではない。

「・・・それじゃあ、吹雪さんの轟沈のことも、知ってる?」

今度の胸の痛みは、チクリではなくズキリだった。

「・・・知ってるわ」

「そっか。当時のこと、聞ける人がいなくて。吹雪さん本人も、答えてくれなかったし」

「あんたには、教えない」

舞を見ることなく。二人で並んで、同じ方向を見たまま、曙はきつ

ぱりと言った。

「・・・クソ提督にも話せてないのに、あんたに先に話せるわけない」
「そっか」

舞の答えは、それまでと変わらず軽かった。

「なら、いいんだ。『答え』は私が、自分で探すことにする」

「・・・なんで、吹雪が轟沈した時のことを、聞きたいの？」

「うーん、」

満天の星空へと立ち上っていく湯気の中、舞は人差し指を唇に押し当て、考え込む仕種をする。たつぷりと時間をかけた後、悪戯っぽく笑ってこう言った。

「私からは言わない。その理由は、曙ちゃんが、吹雪さんが轟沈した時のことを榊原中佐に話せば、中佐が教えてくれると思うよ」

新タナル船出

早朝のタウイタウイ泊地は、慌ただしい空気に包まれていた。泊地の浮きドックで応急処置を受けた「曙」が出渠、それに伴い、榊原たちはルソンへと帰還することになったのだ。

タウイタウイへ来た時とは違い、今度はルソンへの最短距離を選んでいる。定期的な哨戒と対潜掃討作戦のために、『T・T独立艦隊』の部隊も出撃するらしく、彼女たちに護衛されて、最短の経路でZ海域を抜けることを、榊原たちは選んだ。

「ブレイン・ハンドシエイク」

海水が注入され、沈降していくドック内の「曙」、その羅針艦橋に立ち、曙は艤装との精神同調に入った。その横に、榊原は立っている。「出港するのは・・・『三瀬』と『九頭龍』か」

埠頭から離れる準備を進めている二隻の軽巡洋艦を認めて、榊原は呟く。前者はタウイタウイ最古参の攻撃型軽巡洋艦、後者は長一〇センチ連装高角砲六基を搭載した防空巡洋艦だ。両者ともに、対潜能力は非常に高いとのことだった。

これに加えて、「島風」型駆逐艦四隻が出港準備に入っている。こちらは艦影が似通っており、判別をすることはできなかった。

「バラストポンプ始動。両舷バラスト注水、トリム調整」

ドック内の注水が進めば、「曙」の艦体は浮力を生じて台座から浮き始める。その際、艦内のタンクに水を入れることで重心を下げ、艦体が左右に振れるのを防ぐ、これがバラストの役目だ。これに対しトリムは、艦の前後の傾きのことであり、基本的に艦尾側が艦首側よりも低い方がいいとされている。

「甲板員、喫水に注意」

艦橋からでは喫水の状態はわからない。それを確認するのは妖精の役割だ。

やがて、艦体が台座から完全に離れる。一瞬の浮遊感。「曙」は再び、海の上に戻った。

「バラストポンプ停止」

トリムが適切であることを報告され、ポンプが停止する。バラスト水の量は普段と変わらない。

タグボートが「曙」の艦首を引っ張り、ドックから引き出す。ドックから完全に艦体が出たところでロープが放された。この時点で、機関の始動準備は整っている。

「機関始動、両舷前進微速」

羅針艦橋の後ろ、マストを挟んだ位置にある前部煙突から、機関の唸りが響き、煙が噴き上がる。「曙」が真にその姿を取り戻した瞬間だ。

「曙」がそろそろと動き始め、鋭い艦首が静かに海面を切り裂く。それを満足げに確認した曙が、榊原の方を見た。

「よかったの、これで？」

彼女の言わんとすることはわかる。榊原も満足はしていない。けれども、有益な情報を得られたことに間違いはない。何より、直に彼女たちと接することができたのは、大きかった。

「ああ、よかったんだ」

「・・・あつそ。クソ提督がそう思ってたんなら、別にいいけど」

それだけ確認したかったらしい。それ以降曙が何か言うことはなく、淡々と操艦を行っている。

通り過ぎようとした埠頭、そこに人影を認めて、榊原は目を移す。舞と紀伊の二人だ。脱帽した舞が、その制帽を頭上で大きく振っている。

艦橋から見張り所に出た榊原も、その帽振れに応えた。白の制帽がタウイタウイの風を捉え、大きく映える。一分ほどそうしていただろうか、どちらからということもなく制帽を被り直す。こちらを見つめる舞と、視線が合った気がした。

——また、いつか。

再び会う予感を感じて、榊原は胸中で呟く。それから羅針艦橋に戻った。

「両舷前進半速」

丁度その時、曙がさらなる増速を指示した。「曙」の行き足がわず

かに速まり、それに伴う波も大きくなる。

「曙」以下、「瑞穂」、「漣」の三隻、そして「三瀬」以下『T・T独立艦隊』の六隻が、港湾を出ていく。最後にすれ違ったのは、巨大な「紀伊」の艦体だ。「大和」よりも一回りは大きいその艦体を見上げる。その横を抜ければ、もう港外だ。埠頭にいた舞たちは、すでに見えなくなっていた。

「出港作業完了。両舷前進原速」

港外へと完全に脱したこと確認し、「曙」の速度がもう一段階上がった。このまま、オートナビゲーションの設定ができる。

付き従う「瑞穂」と「漣」、並走する『T・T独立艦隊』の六隻も原速に移行したことで、曙がオートナビゲーションを設定し、艦装を脱ぐ。榊原も筋肉を弛緩させた。しばらくはこのまま、周辺を警戒しながらの航海になる。

「・・・ねえ」

航海日程を頭の中でおさらいしていた榊原に、再び曙が呼びかける。

普段、艦装を脱いだ直後の雰囲気とは、明らかに違う。榊原よりも低い視線は、真っ直ぐで真剣だった。

「パラオに帰ったら、話しておきたいことがあるから」

「話しておきたいこと・・・?」

「大したこと・・・はあるか。とにかく、クソ提督に言わなきゃなんないことがあるの。今は、それだけ」

言い切った曙は、なおも榊原を見つめ続ける。大きな瞳には、深い海を思わせる蒼が宿っていた。それがさらに、彼女の言葉を重くする。

「わかった」

曙が果たしてどんな話をするのか、榊原には皆目検討もつかない。領く仕種がどことなくこちなかったのに、自分でも気づく。それでも、榊原は曙の視線に応え続けた。

三隻のBOBは、Z海域を切り裂いてルソンへと向かう。『五車星作戦』を遂行し、榊原たちがパラオに帰り着くまでは、まだ一週間し

ばしの時間があつた。

◇

「よく、無事で帰ってきてくれた」

ルソン入港を果たした榊原と相模を、卓巳が迎えてくれた。整然としていた卓巳の執務室だが、今は机の上が資料で少し乱れている。どうやら榊原たちがいなくなつた間も、様々な記録を引つ張り出し、情報を集めてくれていたらしかった。

「帰ってきて早速ですまないが、報告を聞きたい。いいだろうか？」

「はい」

二人が頷いたことで、卓巳がソファを勧める。ありがたく腰掛けると、秘書艦の由良が温かなお茶を出してくれた。一口口付けると、ここ数日の緊張感が一気に和らぐようだ。

「工廠部から報告があつた。『曙』の損傷は、二日で復旧可能だそう
だ」

「そうですか。ありがとうございます」

ルソン入港と共に、『曙』は再びドック入りしている。元々、タウイタウイで受けたのは軽い応急修理のみだ。本格的な修復は、『五車星作戦』発動前にルソンで行うつもりだった。

被弾したのは駆逐艦の五インチ砲弾のみであり、被害もそこまで大きくない。復旧が早いのもつとものだ。

「乙海域が、進入禁止海域に指定されている理由を、理解した気がします。あれだけの練度を持つ深海棲艦と戦い、勝利するのは、非常に困難と言わざるを得ません」

「・・・それほどの難敵か」

卓巳が両腕を組み唸る。

「それでその・・・『T・T独立艦隊』とは、会見できたのか？」

「はい。敵駆逐艦との戦闘を援護してくれたのも、彼女たちでした。その後は、短い間でしたが、タウイタウイで情報交換を」

「そうか。それは何より」

辰巳が視線だけで続きを促す。榊原は余すところなく会談の内容を伝えた。

「本来存在するはずのない」軍艦たち。「イレギュラー」と呼ばれる深海棲艦。艦娘と深海棲艦の「起源」。「大いなる先駆者」、そして「鍵」。

『T・T独立艦隊』の目的。

さらに、それに付け加えて、相模が自らの仮説について説明する。

「鍵」、「門」、その先に待つもの。「大いなる先駆者」と、人類が握る「鍵」の持ち主。吹雪との関係。

それらの言葉を、卓己も由良も、ただ黙って聞いていた。

全ての話が終わる頃には、全員分の湯呑みからお茶の香りが消えていた。静寂の横たわる執務室の中、カチコチという時計の針の音だけが木霊する。

「お茶、淹れ直してきますね」

由良が全員分の湯呑みを回収し、給湯室へ向かう。その背中を見送ってから、卓己が重々しく口を開いた。

「・・・相模少佐の仮説、なかなか筋が通っているな」

「まだ、確信はありません」

相模の答えに、辰巳がかぶりを振る。

「そうではない。相模少佐の仮説は、なまじ筋が通っているからこそ、恐ろしい。それに、その仮説によって、説明がつく事柄もある。例えば、艦娘の建造やドロップ、開発に関する研究。最初の艦娘である吹雪との邂逅から、秋山中将が提督として着任して、現在の連合艦隊が始動するまではわずかに二か月。早いと思わないか？」

「確かに・・・。それらを一から研究したのだとしたら、二か月と言う期間は短いかもしれません」

「だが、相模少佐の仮説を用いれば。吹雪の中に、艦娘の生みの親に繋がるものがあるのだとすれば。彼女は最初から「答え」を知っていた可能性もある。それならば、二か月と言う研究期間も納得がいく」

卓己の言葉で、相模の仮説がさらに真実味を帯びてくる。ゴクリ。榊原は生唾を呑みこんだ。

「・・・時は来た」、「そういうことか。この辺りが頃合いかもしれん」

——時は来た・・・？

卓己の妙な言い回しに、榊原の中で何かが引つかかる。だがその引つかかりの正体に気づく前に、卓己はさらに話を続けた。

「我々は、根本から目を逸らし続けてきた。いや、見えていたが、見て見ぬふりをした。その余裕がなかったからだ。だが、もう三年だ。それも限界にきている。『艦娘はどこから来た、何者なのか』、『深海棲艦はどこから来た、何者なのか』。その命題に、挑まねばならない時が、来たのかもしれない」

戦うしかなかった。

それが、言い訳であるとしても。人類は、そして艦娘は、戦うしかなかった。地球表面積の七割を占める海洋で、自らが生き残るために。

給湯室から戻った由良が、全員の前に湯呑みを差し出す。新しく淹れられたお茶から立ち上る湯気と薫りが、温かい。

「今回の件、私は確かに、塚原から頼まれた。だが、これ以上、首はツッコまない。以後のことは、二人に任せようと思う。その方が、何かと動きやすいだろう?」

確認するような卓己の問いかけに、榊原と相模は顔を見合わせる。今、彼は問うているのだ。艦娘たちの「起源」に迫る気はあるのか、と。

是非もなしだ。

二人して頷く。それに、卓己は笑顔で答えた。

*

先ほど二人の若い将校が座っていた位置には、空になった湯呑みが二つ、残されている。卓己がそれをぼんやりと見つめていると、横から白い手が伸びてきた。

「湯呑み、片付けちゃいますね。提督さんも、お茶、淹れ直しましょうか?」

由良が、まだ残っている、若干冷めた卓己のお茶を見て訊いた。卓己は笑顔で首を横に振る。

「いや、いいよ」

「そう?」

そのまま由良は、卓己以外の湯呑みを持って、給湯室へと入っていった。

執務室に一人となった卓己は、誰もいないのをいいことに大きく息を吐き、背もたれに全体重を預ける。頭上にあるのは、見慣れた白い天井だ。見慣れた、と思つてしまうほどには、卓己はその天井を見上げていた。

そんな卓己の顔に、影がかかる。

「提督さん」

由良が、静かな瞳で卓己を覗き込んでいた。ともすれば吸い込まれそうになる、不思議な魅力。

その眼差しに、つい弱音を吐きそうになってしまう。

「由良・・・俺は・・・」

「いいよ、提督さん。何も言わなくて、大丈夫」

由良の白い手が、卓己の顔の横に添えられる。その人並み以上に整った優しげな顔が近づいて、コツンとおでこがぶつかった。少しひんやりとして、気持ちいい。

「提督さんの言いたいこと、わかるから」

——本当に。

本当に、この娘は優しすぎる。時にこちらが心配になるほどに。そしてそれに、自らが甘えていることも、わかっているつもりだ。

「大丈夫。提督さんは、『彼女たち』のこと、ちゃんと守ってるから」
「・・・お見通し、か」

卓己の苦笑に、由良は柔らかな微笑みで応える。

「どうなると思う？」

「どうなる、かな。由良にもわからないよ」

ゆっくりと由良の顔が離れる。それが少し名残惜しい。

「でもね、由良は・・・ずっと、提督さんと一緒にいるから」

天井を背景にする由良の顔を、ジッと見つめる。卓己はその言葉に頷き、再び体を起こした。

それぞれの想、そして
想イ

『五車星作戦』参加各艦の準備が整ったのは、「曙」の出渠からさらに一週間後のことだった。

最終的な参加艦艇は以下の通り。

・第一警戒艦隊

榊原広人中佐

「曙」、「祥鳳」、「霞」、「陽炎」

・第二警戒艦隊

速水淳少佐

「鈴谷」、「熊野」、「睦月」、「如月」

この他、特務艦「栄光丸」（政府要人艦）以下、輸送艦十二隻が参加する。

それらの輸送艦の中には、パラオに展開する第一二航空戦闘団への増強装備品が含まれている。具体的には、警戒機となるE-2C、輸送機のC-2、さらに防空能力の増強としてF-15。

これら装備品の増強が行われることになった背景には、第一二航空戦闘団が拠点とするバベルダオブ島の空港施設の拡大強化にある。パラオ奪還後から細々と続けられてきたその作業が実を結び、さらに多くの機体と装備を管理、運用する能力が備わったのだ。

また、政府がパラオへ戻ったことで、その防衛の必要性が出てきたことも、理由の一つだ。フィリピンでは日米合同の基地航空隊とルソン警備隊が担っていた責務を、今度は第一二航空戦闘団とパラオ泊地艦隊が担うのである。

——今回の作戦が持つ意味は大きい。

出港していく各艦艇、船舶を見守りながら、榊原は噛み締めるように胸中で呟く。その隣には、いつものごとく曙が立ち、出港作業を指揮していた。

結局、あれ以来曙が何か言ってくることはなかった。ただいつも通

りに、曙は榊原の横に立ち、補佐をする。

だから、榊原から何かを言うこともない。パラオに帰ったら、話がある。真剣に言った彼女の言葉を叶えるため、今はこの船団を無事パラオへと送り届けることを考える。

微速で港灣から離れていく「曙」に、相模が手を振っていた。破顔した榊原も、それに応えて制帽を振る。悪友と次に会うのは、恐らくずっと先のことになるのだろう。

榊原はマイクを取る。

「港灣を出た後、警戒陣形を敷く。速力の調整に注意」

船団が、パラオに向けて帰っていった。

◇

今日も今日とて、摩耶は柔らかな陽射しの差し込む執務室で、書類たちと格闘していた。

パラオ泊地の提督長である榊原、そして秘書艦の曙が出立して、すでに二週間。その間、パラオ留守番役の清水と秘書艦代理の摩耶が、業務を請け負っている。

摩耶からすれば、初期に警備隊長を務めて以来の書類仕事。ある程度慣れてもいたので、それなりにこなせていたつもりだ。

「・・・よしっ、と」

最後の一枚を書き上げ、判を押し、「済」のボックスに入れる。愛用のペンを置いた摩耶は、大きく伸びをした。

「・・・終わったか」

その仕種を待っていたかのように、隣から声がかかる。きつちりと着こなす第二種軍装は、いつぞ憎らしいほどに体に合っている。切れ長の目に切り揃えられた短髪が、いかにも理知的だ。

「・・・おう」

どこかぎこちなくなっているのを自覚しながらも、摩耶は答える。見れば、摩耶よりも少し多かったはずの清水の書類は、綺麗さっぱり片付いていた。榊原と違い、清水の方はこうしたデスクワークもお手の物らしい。

「お茶、淹れてくるな」

「ああ、頼む」

言うや否や、摩耶は立ち上がり、給湯室へと向かう。いつもは曙が整理しているその部屋も、どこに何があるか、この二週間で覚えてしまった。

電気ケトルに新しく水を入れ、スイッチを入れる。独特の音を立ててお湯が沸かされるのを聞きながら、摩耶は若干の溜め息を吐いた。

また、やってしまった。

なぜ、清水に対してぎこちなくなっているのか、何となくだがわかつている。

——「俺も、あいつのマネぐらいはしてやれる」

摩耶が、自らの中にある記憶を乗り越えるのを、待ってくれど、清水は言ったのだ。

その言葉に応えたい気持ちがないわけがない。だけれども、何かから話せばいいのかがわからない。自分の中で、整理もついていない。

だからせめて。．．いや、せめてという言い方はおこがましいが。清水を、〃摩耶〃に乗せられるようになりたい。

今後のことを考えても、必要なことだ。この泊地で、〃摩耶〃は〃大和〃に次ぐ戦闘指揮能力を持っている。特に、防空戦闘を指揮するには、〃摩耶〃の能力はもってこいだ。だがそれも、提督を乗せればの話である。

これもまた、自分でも理由がわからないのだが。もしも提督を乗せるのなら、清水がいいと思っっている自分がいる。それも摩耶はわかっていた。

——「な、なあ、清水」

だから。演習に出るたびに、摩耶は清水に声をかける。今日は〃摩耶〃に乗ってみないか。そう、言うために。

けれども。振り返った清水の視線を捉えるたびに。その瞳を見つめるたびに。重なるのだ。過去の情景が。

自分自身のトラウマが。

心に重しのように圧しかかるそれが、摩耶が開こうとした蓋に引つかかる。たった一言が、口をついて出てこない。

「……なんだ、摩耶?」

問いかけた清水に、言葉が出なくなる。背中を冷たいものが走る。膝が震えてしまいそうになる。終いに摩耶は、こう言ってしまうのだ。

「いや……なんでも、ない」

そんなやり取りを繰り返す度に。清水に合わせる顔がなくて、ぎこちなくなる。元々、お互いに話をする方ではなかったのに、妙に気になって。勝手に気にして、またぎこちなくなる。

清水の方も、そんな摩耶の心の内を知ってか知らずか、何度摩耶が言いかけて止まっても、何も言うことなく、待っていてくれた。それが嬉しくもあり、また逆にプレッシャーともなっている。

「……って、何考えてんだよ、あたしは」

悩んでも仕方のないことに、悩むような性格ではない。それでも、思わずにはいられない。

コポコポと音を立てて電気ケトルのスイッチが落ちていることに、摩耶は気づかなかつた。それに気づかず、考え続けている自分にも。

そして、給湯室を覗いた人影にも。

「……摩耶?」

「うひゃああうえっ!?!」

自分でもわかるぐらいの素っ頓狂な声を上げて、摩耶は給湯室の入り口を振り返った。そこに立っているのは、さっきまで摩耶と一緒に執務をしていた、清水。

バクバクと言っている心臓と熱くなった頬を誤魔化すように、摩耶は抗議する。

「お、驚かすんじゃないやねえ、このクソがっ!」

「……ああもうっ、あたしはっ!!」

自分でもうんざりする。

「……心配して見に来たのに、酷い言われようだ」

そう言う清水に、怒っている雰囲気はない。むしろ普段以上に――

――摩耶なら気づける程度には、優しげだ。

そのまま清水は、給湯室に入ってくる。摩耶の隣に並んだ、スラリ

と高い背丈から、思わず目を逸らす。何となく、直視できない。

「なあ、摩耶」

先に口を開いたのは、清水の方だった。

「先に執務室に戻ってる」

「は？何でだよ」

「・・・今日は、俺がお茶を淹れる」

「は!？」

何を言い出すかと思ったら。摩耶は清水の顔を見た。清水もまた、摩耶を見つめている。

「い、いいって。あたしが淹れるから」

「いいや。俺に淹れさせてくれ」

頑固なのはお互い様だと、摩耶も理解している。こう言ったら、清水が譲ることはない。

「もう少しすれば、榊原たちが帰ってくる。そうすれば、俺も摩耶もお役御免、晴れて自由の身だ」

「・・・だから?」

「せめて最後まで、お前を労わせろ」

「っ!!」

ようやく治まったと思ったらのに。陽に当てられたわけでもなく温度の上がる頬を誤魔化せない。

「そういうわけだ。執務室に戻れ」

「・・・わかった」

なんだかうまくあしらわれた気がしなくもないが、摩耶は清水の言う通りに、執務室へと戻ることにした。

待つこと数分。給湯室から戻ってきた清水は、普段使っているお盆の上に、おしやれなティーポットと二人分のカップを乗せていた。察するに、紅茶だろうか。

「紅茶なんて、あったのか」

「俺の私物だ。これで最後だな」

そう言っつて摩耶の前にお盆を置いた清水は、執務機の椅子を秘書艦机の摩耶の前に持って来る。それから静かに、二つのカップへ紅茶を

注ぐ。ティーポットを傾ける仕種が、随分と様になっていた。

「・・・清水に紅茶なんて、似合わねえな」

「・・・そう言うな」

二人分の紅茶を淹れ終わった清水が、摩耶の前に腰掛ける。その表情をチラリと窺つてから、摩耶は恐る恐る、カップに手を伸ばした。

いい薫りだ。日本茶と違って、どこか気高さを感じさせる、落ち着いた雰囲気。心が自然と静まる。

「いただきます」

そつと口を付ける。熱くはない。飲みやすい、程よい加減だ。何より、今まで飲んだことのあるどの紅茶よりもうまい。

「意外と、いけるだろ」

そう言った清水も、カップに口を付ける。

しばらくはただ静かに、ゆっくりと過ぎていく時間に身を任せ、紅茶の薫りを楽しんでいた。

やがて清水が口を開く。

「無理して俺を乗せる必要はないぞ、摩耶」

その言葉に、ギクリと肩が跳ねる。やはり清水には、お見通しだったのだ。

「・・・別に、無理なんてしてない」

せめてもの強がり口にしてみるが、その後半は弱くなってしまう。目線が琥珀色の液面に落ちて、そこに映る自分の表情を捉えた。どこか不安げに意地を張っている、少女の表情だ。

「なら、いい」

それ以降、清水が口を開くことはない。摩耶が何かを話しかけることもない。空になったカップを、コトリと置く。それを見た清水が、何も言わずに、片付けてしまった。

——結局、何をやってんだろうな、あたしは。

清水にまで気を遣わせて。結局のところ、自分自身で空回りしていただけだ。

ソロリと席を立ち、さつきまで清水が座っていた椅子を、元の通り執務机に戻そうとする。

背もたれにかけた手が、ピタリと止まる。そこにはまだ、清水の温もりがある。不愛想で、冷たく見える、彼の体温。

——何考えてんだよ、バカ。

よっこいせ。持ち上げた椅子を執務机に戻したところで、清水が帰ってくる。そのまま彼は、壁際に掛けていた制帽を取り、きつちりと被った。その鋭い双眸が、摩耶を捉える。

「行くぞ。そろそろ、あいつらが帰ってくる頃だ。出迎えの用意をしよう」

摩耶を促して、執務室の扉を開く。さつさと廊下へ出て行ってしまった清水の背中を、摩耶は追いかけた。

廊下の先を行く清水。白い制服が、蛍光灯の光の中で、シヤンと立っている。真つ直ぐに前を向いて、歩いている。

摩耶はどうしようもなく、その背中を蹴飛ばしたくなった。そしてどうしようもなく、その背中に抱き着きたかった。思いつきり抱き着いてやりたかった。

「置いていくぞ」

振り返った清水が言う。胸の高鳴りの理由を、頭を振ることで無理やり思考の外へ追い出し、摩耶は走り出す。清水の背中に追いつき、追い越すため。

パラオ泊地に、『五車星作戦』参加艦艇の入港を告げる、ラツパが鳴り響いた。

空ノ護り主、海ノ護り主

無事に『五車星作戦』を終え、二週間ぶりにパラオ泊地へと帰還した榊原たち。

留守を務めてくれた清水と摩耶から業務を引き継ぎ、パラオ泊地は平常運航へと戻りつつある。

パラオの民間港へと入港した「栄光丸」からは、パラオ政府要人が降り立ち、旧庁舎に政府中枢が帰ってきた。

さらに、三隻の輸送船によって運ばれてきた、第一二航空戦闘団への増援物資も、その積み下ろしが進んでいる。バベルダオブ島基地への陸路輸送と各種組み立て、整備の期間を考えれば、本格的に運用ができるようになるのは二週間後以降と言ったところだろうか。

これら航空隊の運用を維持していくためにも、これまで以上に輸送路の安全確保が必要となってくる。本土の三鎮守府からも、護衛艦隊の増援はあるようだが、それらも含めて、輸送計画の見直しや連携確立が喫緊の課題となることが予想された。

そんな、『五車星作戦』終了から一週間。榊原と曙の姿は、泊地庁舎のあるコロール島ではなく、政府施設が置かれているバベルダオブ島にあった。

バベルダオブ島の南部、そこにパラオ唯一の空港、ロマン・トメトウチェル空港はある。もとは民間の国際空港だが、パラオ航路が途絶えて久しい今、そこに民間機の影はない。代わりに現在は、日本空軍第三航空機動群第一二航空戦闘団、及び日本海軍第二偵察航空隊第八哨戒隊が展開の拠点としている。

今回の増援によって規模が拡大したこれらの航空隊は、新たに海空軍共通の指揮系統を持つパラオ防空隊として新しく編成されることとなった。今日榊原は、その指揮官との顔合わせのために、ロマン・トメトウチェル空港を訪れていたのだった。

「・・・へえ、見ないうちに随分立派になったのね」

正門が迫るにつれて各施設が見えるようになってきた頃、曙が呟いた。二人は前に一度、ここを訪れたことがある。榊原が着任した直後

のことだ。

パラオ開設当時は隊員庁舎など多くの建物や施設が工事中だったが、今ではリーダーや管制塔も新しくなり、大きなハンガーや地对空ミサイル——PAC—3も用意されている。

正門に立つ守衛に敬礼し、身分証明書を手渡す。榊原と曙を交互に見た守衛は、嚴重なロツクがかかつていたゲートを開けてくれた。黙礼を送りつつ、二人は空港の中へ足を踏み入れる。

正門からすぐの所にある第一二航空戦闘団庁舎——パラオ防空隊庁舎としても使われる建物に入り、目的の部屋を目指す。木製の扉を叩くと、中から穏やかな返事があった。

「入ってください」

「失礼します」

扉を開いた二人は、中の人物に敬礼する。所属は海軍と空軍で違うが、彼の方が榊原よりも階級が上だ。

源田稔大佐。パラオ防空隊の司令として、新しく配属された空軍の将校だ。

「日本海軍、パラオ泊地執務室長、榊原広人中佐です」

「日本空軍、パラオ防空隊司令、源田稔大佐です」

お互いに挨拶を交わした二人の将校が、握手をする。柔らかな源田の表情が、榊原の横に控える曙を見てさらに優しくなった。

「可愛らしいお嬢さんがご一緒のようで」

その言葉に、榊原は隣の曙を窺う。その表情に、特に変化は見られない。

「ええ。私の秘書艦で、曙です」

「曙さん」

「自慢の艦娘です」

隣の曙が、なぜか咳き込む気配がした。

「わざわざご足労いただき、ありがとうございます。早速ですが、こちらへ」

そう言った源田が自ら先頭に立ち、指し示した先は、今まさに榊原たちが入ってきた扉だ。そのまま三人は、ツカツカと庁舎の出口へ向

かう。

今日、榊原たちがロマン・トメトウチエル空港を訪れたのは他でもない、再編されたパラオ防空隊との顔合わせと、その装備——主に防空能力について説明を受けるためだ。

今後のパラオ防衛を担っていくのは、紛れもなくパラオ泊地艦隊とパラオ防空隊だ。連携は密に取る必要がある。

庁舎を出た三人は、滑走路の横を、ハンガーとエプロンのある方へと歩いていく。

穏やかな表情のまま、源田が話し始めた。

「これほど書類が多くなるのは、思いもありませんでした。出迎えにも上げられず、申し訳ない」

「いえ、お気になさらず。自分も、その辺りは理解しているつもりです」

ほんの数か月前のことを思い出して、榊原は苦笑する。そういえばあの頃は——いや、今もだが、曙にどやされながらエベレストのような書類と格闘していたものだ。

「榊原中佐は、パラオ泊地開設の初期からこちらにおられるのでしたね」

「はい。もう随分と長いこといるように感じています」

「初期の頃は、航空戦力も満足ではなかったようです。我々空軍としましても、申し訳ない気持ちです」

柔らかい口調で語られる分、そこには言い知れぬ重みが加わっていた。と同時に、事前に調べていた情報からの印象と違う雰囲気、榊原は感じていた。

——「防空の鬼」とは思えないな。

まだ艦娘とBOBが現れていない頃、一度だけ、深海棲艦の機動部隊が日本本土を攻撃しようとしたことがあった。その時、防空戦闘の指揮を執ったのが、航空自衛隊幹部だった源田だ。限られた時間と装備の中で、源田は見事に本土を守り抜き、深海棲艦を退かせている。

被害に対する効果が薄いと判断したのか、それ以降、深海棲艦は人類側の本拠地を襲おうとはしていない。

そんな源田が、最前線パラオの防空隊司令に選ばれたのは、ある意味必然と言えるかもしれない。

「しかし、よく『イーグル』なんて引っ張ってこれましたね」

「そこはまあ、色々。昔の伝手やら何やらで、上を説得しました。さすがに『ライトニング』は無理でしたけど」

『イーグル』はF-15の愛称、『ライトニング』はF-35の愛称である。前者は長い間航空自衛隊の主力戦闘機を務めた機体、後者は深海棲艦出現とほぼ同時期にライセンス権を獲得し、少ない空軍の予算の中で細々と配備を進めている新鋭機だ。

「着きました。ここです」

そうこうしているうちに、三人はハンガーに辿り着く。鉄製の真新しい扉を源田が開いて、中に榊原と曙を招いた。

ハンガーには、空の守護者がその灰色の翼を休めていた。BOBが搭載するレシプロ機と違い、機首は鋭く尖って正しく鷲のようだ。三角形に近い翼が俊敏さと力強さを感じさせる。

「F-15J『イーグル』。ようやく、二機目の組み立てが終わったところですよ」

よく見ると、後ろではさらに二機のF-15が組み立て作業中だ。こういうところ、ライセンス獲得の利点である。すなわち、自分たちで分解、改造、整備、修理を行うことができる。

「全部で四機、ですか」

「これが限界でした。私の伝手的にも、この空港の能力的にも」

——十分過ぎる。

大体、個人的な伝手でF-15を回してもらえただけでも凄い。何者なんだこの人。

「あ、源田司令！」

「ああ、今日も元気そうですね、岩本くん」

源田を認めたらしい、岩本と呼ばれた航空兵が走ってくる。空軍仕様作業服の肩章から見るに、階級は中尉。パイロットだろうか。

「『イーグル』隊は全員いますか？というか、菅野くんはどこ行きました？」

「ああー、菅野隊長なら、いつも通りにあそこです」

岩本が指差したのは、奥にある組み立てられたF-15のコックピットだ。よく見るとそこには、フルフェイスヘルメットを装着して操縦席に座る人影があった。そのヘルメットには、なぜか水色と白の三角形を組み合わせた模様が入っている。丁度、新選組の衣装に似ている。

「・・・あれは、こつちを気にも留めてませんね」

「すみません、今自分が行ってきます」

そう言つて、岩本がF-15に駆け寄つていく。彼が機によじ登るようにしてコックピットの中の人影を揺すつて初めて、人影はこちらに気づいたらしく、フルフェイスヘルメットを取った。

——女性・・・？

コックピットから降りてくる人物に驚く。作業服にフルフェイスヘルメットという不釣り合いな組み合わせのパイロットは、鍛えられているのがわかる引き締まった体躯をしていた。すらりとした長身に似合う端正な顔と、流れる風を思わせる黒髪が、ヘルメットの中から露になった。

「剣部隊集合ー！」

こちらへと歩いてきながら、菅野がよく通る声で呼びかける。すると組み立て中だった機体の影から、さらに二人のパイロットが現れて、菅野を追い越し、榊原たちの前に並んだ。その二人の隣に岩本、そして最後に菅野が立つ。

「気をつけー！」

並んだ四人が、踵を鳴らして直立不動の姿勢を取る。シャンと伸びたその姿に、自然と榊原と曙も姿勢を正した。

「相変わらず、瞑想してたのかな、菅野くん」

苦笑気味に尋ねた源田に、菅野がニヤリと笑った。

「『イーグル』が飛んでいるところを、想像していました」

「君は本当に空が好きだね」

関心とも呆れとも取れるその言葉に、菅野の笑みは益々大きくなった。

「紹介しよう。『イーグル』隊——剣部隊の隊長で、菅野直子大尉だ」

「菅野です」

スツとした敬礼に、榊原も応える。

源田は、『イーグル』隊——剣部隊の隊員を一人ずつ紹介していく。

二番機を務めるのが、岩本徹中尉。菅野と小隊を組む。

三番機は、赤松貞文中尉。第二小隊の長機だ。

そして四番機が、杉田庄平少尉。赤松と小隊を組む。

『イーグル』——戦闘機のパイロットを任される、優秀な四人だ。

多分。

「パラオ泊地執務室長、榊原広人中佐です。以後、よろしくお願いします」

自らも名乗った榊原は、その右手をパイロットたちへ——パラオの空を護る有翼の勇者たちへ差し出す。

「よろしくお願いします」

不敵な笑みと共に握り返した菅野の手は、女性らしい線の細さがありながらもたくましい。

空の守護者。海の護り人。パラオに立つ防人たちは、無機質なハンガーの中で誓いを交わし合った。

◇

その日の夜。

ロマン・トメトウチエル空港から戻り、業務を終わらせた榊原は、風呂を終えた後、艦娘寮の一室の前にいた。

——「今日、あたしの部屋に来て」

曙に呼び出された理由を、榊原は理解している。パラオに帰ったら話すと言っていたこと。その機会が巡って来たということか。

深呼吸を一回。できる限りの平常心で、榊原は扉をノックした。軽やかな音が鳴る。

「・・・来たわね」

ゆつくりと開いた扉の向こうから、曙が顔を出す。風呂上がりのしつとりとした表情に、寝間着。どこか普段と違う雰囲気、少しだけドキリとする。

「入って」

「お邪魔するよ」

入った部屋の中にはすでに、机と二人分の椅子、そして湯呑みと急須が用意されていた。

さて、と。

振り返った群青の瞳が、榊原を覗き込んだ。桜色の小さな唇が、ゆつくりと開く。

「話を、始めるわよ」

アノ日

「はい、お茶」

用意されていた急須で淹れたお茶を、曙が差し出してくる。温かいその湯呑みをありがたく受け取り、榊原は曙が向かいの席に着くのを待った。

自分の分の湯呑みをお供にして、曙が榊原の前に腰掛ける。風呂上がりで後ろに流したままの髪はよく整えられ、艶やかな輝きを放っている。以前——第一次トラック沖海戦の前に、その髪を梳かしたことを思い出す。そこに秘められた、少女としての曙の想いも。

「・・・何よ、ジツと見て」

半目の曙が指摘する。こちらを見つめる蒼い瞳に誤魔化しが通用しないことは、榊原もよくわかっていた。

「前に、この部屋に来た時のことを思い出してな」

苦笑しながら頬を掻く。曙は一瞬目を見開いた後、静かに湯呑みに口を着け、中の液面を見た。それからゆっくりと湯呑みを置き、そっぽを向いてぶつきらぼうに言った。

「そういえば、そんなこともあったわね」

その横顔に笑みが漏れてしまったのは、彼女にバレていたようだった。

咳払いの後、曙が話を始める。

「・・・クソ提督に、話さなきゃいけないことがある」

「そうか」

姿勢を正すべきか迷った後、榊原はそのまま、曙の話に耳を傾けることにした。普段のままの彼女と、普段のままの自分で。

「大体わかってるんじゃない?」

「・・・そうだな」

なぜ、このタイミングなのか。

今、曙が示せるもので。今、榊原の情報に欠けているもの。

曙が語らなかつたこと。

「吹雪」が轟沈した時、あたしはその場にいた。吹雪の一番近くに

いて・・・その轟沈を見届けた」

『T・T独立艦隊』との会談で、「吹雪」の轟沈とその後に関する情報への関心は、嫌でも高まった。

なぜ吹雪は、艦体を復元できないのか。それだけでも十分過ぎる疑問だ。実際にはそれだけではない。もしも彼女が「鍵」を握っていたのだとしたら。その「鍵」は、「吹雪」と共に沈んでしまったのか。それともまだ、吹雪が持っているのか。

曙は聡い艦娘だ。それは榊原も含めて、パラオの誰もが認める事実である。だから気づいたのだろう。「吹雪」の轟沈が持つ意味に。

彼女が見届けた、その光景に隠されているかもしれない、この世界の真相に。

榊原は待つ。たった一人の少女が語る、彼女の過去の話を。

「あの日、あたしと吹雪は、輸送船の護衛任務に就いてた」

曙が語りだす。「あの日」のことを。

「なんていうか、丁度基礎演習の最終段階みたいなものだった。吹雪に教導されたあたしと、叢雲に教導された漣で、輸送船団を護衛してくる任務」

本土近海で行われたこともあり、比較的安全な作戦であったはずだった。

ところが。

「船団は、襲撃を受けた。それも、重巡と軽巡を含む艦隊に」

当時は、最初の艦娘である吹雪が着任して、まだ四か月。鎮守府の開設からも二か月しか経っていない。BOBの数も十分ではなく、その運用も確立していない。さらには、それを指揮する提督も、所謂〇期生と呼ばれる初期の三人——秋山真好大佐、飯田恒久中佐、清河純一郎中佐しかおらず、はつきり言って手一杯の状態であった。

つまり、本土近海の制海権も、確立しているとは言い難かった。

「それでも、あの規模の艦隊の侵入を許したのは、迂闊だったと思う。それを考慮してなかった、あたしも含めて」

襲撃が起こった時、真っ先に動けたのが、吹雪だった。

「多分・・・多分吹雪は、ある程度予想してたんだと思う。水平線に敵艦隊が見えた瞬間に、すぐ指示が飛んできて、あたしたちはそれに従うのが精一杯だった」

——『速力上げて！急いで避難する！』 叢雲、漣は船団の誘導、吹雪と曙は後衛！』

「でも、すぐに追いつかれて、砲撃が始まった。それで・・・真っ先に被弾したのが、あたしだった」

降り注いだのは、重巡の八インチ砲弾だったか、軽巡の六インチ砲弾だったか。あるいは、駆逐艦の五インチ砲弾だったか。艦尾を直撃したそれが、曙から速力を奪った。

怖かった。怖くて、適切な回避行動を取れなくて。被弾したら、もつともつと怖くなった」

握り締めた曙の拳には、冷や汗が浮かんでいた。

「逃げ切れない。そう思ったわ」

逃げ切れる道理がなかった。けれど。

——『叢雲、漣は退避を急いで！』

——『ちよつ、何するつもり、吹雪!』

困惑したような、叢雲の声。それに答える、決意に満ちた吹雪の声。

——『わたしはここに残る』

「・・・声が、出なかった。本当は、あたしなんか置いて逃げてって、それが一番だつてわかつた。だから、そう言うべきだつて、わかつた。でも・・・でも、言えなかった。どんなに頑張っても、言葉を口にできなかつた」

動きが鈍った吹雪を守るように、敵艦隊との間に吹雪が立ち塞がる。ほぼ満身創痍の状態だった曙の煙を背に、敵艦隊に果敢に反撃し、駆逐艦二隻を炎の塊に変えた。

——『司令官が、救援を出したつて！後少しで着くからつて！』
それまで頑張つて。必死で通信機に呼びかけるその声が、何かを引き裂かれる音と痛みを堪える呻きに遮られたのは、格上の軽巡に黒煙が立ち上り始めた時だった。

吹雪が被弾した瞬間だった。

——「吹雪！」

——『だ、大丈夫。これぐらい、いつものことだから』
思わず叫んだ曙に、気丈に答える声。

動けない自分。

傷ついていく仲間。

精神同調によって「曙」の記憶に触れた彼女には、それがかつての光景と重なる。

「吹雪」の艦体が、波打つように淡い光を放つ。ブルーアイアンの強制活性化。艦娘自身に巨大な負荷をかけるその方法を、吹雪が選んだことがわかった。

艦装と繋がっているだけでも、大変な苦痛のはずなのに。それでも「吹雪」は、正確無比な砲撃を繰り返す。

狙い澄ましたような魚雷が、残った駆逐艦の艦底を抉り、水底へと引き込む。

一二・七サンチ砲弾が軽巡の主砲塔を貫き、弾け飛ぶ。

阿修羅の如く戦い続ける「吹雪」。
けれども。

被害が蓄積しているのは、「吹雪」も同じだ。

吹き飛ぶ艦装の断片。

爆砕される第二砲塔。

後部マストがねじ切れ、三番連管に押し掛かる。

満身創痍など、当の昔に通り越していた。

それでも吹雪は戦い続けた。救援艦隊が駆け付ける、その時まで。

「即席編成の救援艦隊を率いてたのは、秋山提督だった。すぐに「扶桑」の砲撃が始まって、敵艦隊は撃滅されて。船団も無事、入港できてたつて。でも、」

でも、吹雪は。

艦上は正にスクラップの状態だった。あらゆる箇所が強制活性化の限界を迎え、抉れて、吹き飛んで、跡形もなく消え去って。

「こつちに向かってくる「扶桑」を——秋山提督を見て、安心したんだと思う。そこから、一気に沈み始めた。吹雪が脱出する暇なんて

なかった」

榊原は息を飲んだ。

船舶の沈没に巻き込まれることがどれほど危険なことか、榊原も候補生時代に嫌という程教え込まれた。巨大な質量は、抗うことを許さぬ渦を産み出し、ちっぽけな人間など波間に飲み込んでしまう。

「何も考えてなかった。その前の戦闘で、頭の中なんてとつくのうに真っ白だった」

後部からゆっくりと沈み始めた「吹雪」に横付け、艀装を脱いだ曙は、艦橋を飛び出して走りだす。被弾の痛みを残す体に鞭打って、甲板を蹴り、吹雪に乗り移る。そのまま、ボロボロの艦橋によじ登った。

窓ガラスという窓ガラスが吹き飛んだ艦橋の真ん中で、吹雪は艀装に体重を預けてぐったりと立っていた。セーラー服は破け、後ろで結んだ髪は解け、額からは赤い筋が一本流れている。

——「吹雪・・・吹雪！」

わけもわからず叫んだ。ただただ、彼女の名前を呼んだ。

自分でもぐちゃぐちゃの思考のまま、ひたすらに謝った。この体からあらゆる水分が消えてしまうのではないかと思うほどに泣きじゃくり、自らの失態を恥じた。「逃げて」と言えなかった自分を許せなかった。

「でも・・・でも、吹雪が言ったの。薄っすら目を開けて、いつもの優しい微笑みで」

——『無事で・・・よかった』

弱々しく伸ばされた手を取った時、「吹雪」の沈没が加速した。後部へと傾斜し、激震が艦橋を揺する。吹雪の艀装にすがりつくようにして、曙は立ち続けた。

やがて艦橋に海水が流入する。最初は開け放された艦橋後部から。やがて割れた窓からも。

思いつきり息を吸った曙は、激流に耐える。完全に海水で満たされてしまえば、吹雪を艀装から外して、海面に上がれると思った。

力ない吹雪を、艀装から解放する。艦首を——その先にあると思

われる海面を、睨みつける。沈没が生み出す激流の渦中に、曙は吹雪と共に出ていった。

「そこからは、正直よく覚えてない。ただ我武者羅に、必死に泳いで、海面を目指してたんだと思う」

海面に出た二人を、「扶桑」の内火艇が收容してくれた。損傷した「曙」は、随伴の駆逐艦が曳航していく。

「……これが、あたしが見た「吹雪」轟沈の全て」
「……」

言葉が出てこなかった。黙って曙を見つめる榊原に、彼女は続ける。

「あたしは……あたしは、吹雪から海を奪ってしまった。『誰かを護る』ことを奪ってしまった」

自らに言い聞かせるような言葉。蒼い瞳の奥のきらめき。引き結んだ、薄いピンクの小さな唇。

「だから、あたしが守るって決めた。吹雪の分まで、この海を守る」
それに。眩くような一言の後、曙には珍しく、視線が机に落ちた。

「もう……目の前で仲間が沈むのは、嫌」
単純な、極々簡単なことだったのだ。

なぜ、曙の練度が、群を抜いて高いのか。
——強くあろうとしたんだ。

何かを守るために。大切なものを失わないために。
その想いにどれだけの覚悟が込められているのか、榊原には計り知れなかった。

その覚悟を見せてくれる程度には、榊原のことを信頼してくれている、そう思っているのだろうか。

「ありがとう。話してくれて」

「……別に。クソ提督になら、話してもいいと思ってたし。……いつかは、絶対に話さないと、って思ってたし」

顔を上げた曙は、そう言って咳払いをする。瞳の帯びた色が変わる。そこにはすでに、榊原の初期艦で、パラオ泊地の秘書艦を務める、駆逐艦娘がいた。

「舞さんが、吹雪の轟沈した時のことを聞きたがってた」

「やっぱり、か」

やはり舞も、〃答え〃を探していたのだ。

舞とした話や、相模の仮説については、すでに曙にも話している。そのことと、吹雪の轟沈が、何らかの関わりを持つていることも、曙は気づいているだろう。

『〃鍵〃は二つに分かれた』。〃鍵〃の持ち主が、BOBの〃吹雪〃だった場合、〃鍵〃は沈没したBOBと艦娘の間で二つに分かれたことになる」

そして、可能性としてはもう一つ。

「〃鍵〃の持ち主が艦娘の吹雪自身だった場合、おそらく〃鍵〃もまた、もう一人、〃他の艦娘〃との間で分割された可能性が高い」

あの時。〃鍵〃の片割れを受け取った可能性が一番高いのは。

「吹雪のそばにいた、曙だ」

榊原は、真っ直ぐに曙を見る。曙が、真正面から見返す。

「……わからない。少なくともあたし自身には、その自覚はない」

「……そうか」

それはそうだ。自覚があれば、曙が何のモーションも起こしていないのはおかしい。

「ただ……あたし自身、疑問に思っていることはある。〃鍵〃と関係あるのかは、わからないけど」

「なんだ？」

尋ねた榊原に、曙は淀みなく、口を開いた。

「あたしは……〃曙〃は、大規模改装が受けられないこと」

過去ヲ告ゲル者

「・・・汗かいて気持ち悪いから、シャワー浴びてくるわ」

そう言つて席を立ちあがった曙は、タンスの引き出しを開けて、着替えを取り出し始めた。風呂はすでに閉まっているが、艦娘寮に据え付けられているシャワー室は夜中でも開放されている。汗を流すには丁度いい。

「俺もお暇するよ」

「あつそ」

席を立ちあがった榊原に、曙は普段のそつけない口調で答えた。しかしその顔が、すぐに上がって榊原を見た。

「ねえ」

「?どうかしたか?」

榊原の問いには答えずに。着替えを抱えて立ち上がった曙は、そのまま二歩三步、パタパタと踵を鳴らして、榊原の真つ正面に立った。パラオの海を思わせる、蒼く澄んだ瞳が、部屋の蛍光灯の光を反射しながら、榊原を見つめていた。

「・・・なんていうか、その」

ほんの少し、言い淀むような間。曙が時々示す、彼女の心の言葉。榊原が言えた義理ではないが、不器用ながらの、精一杯の表現。

「あたしは、クソ提督があたしの指揮官でよかったって、思ってるから」

「・・・随分と、急、だな」

全く予想もしていなかった言葉に、榊原の心臓が跳ねる。

「い、いいでしょー!こういう時じゃないと、言う機会ないし!」

自分で言いだしておきながら、曙は真つ赤になって、早口でまくしたてる。それでも、自分が言ったことを、取り下げたりはしなかった。衝撃は大きくて。整理が追いつかない頭では、実感も湧かない。けれども。

彼女の言葉は、いつでも榊原の心を、大きく揺さぶる。

「ありがとう」

何とか榊原は、そう言った。浮かべた笑顔は、まだまだぎこちなかっただろうか。

「はい、終わり！早くシャワー浴びたいから、さっさと出るわよ」

そう言って、照れ隠しをしている曙が、この上なく可愛らしかった。「曙」

榊原を自室から追い出し、自らはシャワー室に向かおうとする曙を、榊原は呼んだ。シャンと伸びた背中が廊下に立ち止まり、こちらを振り向く。

「君の隣に立てることを、誇りに思う。俺は必ず、曙の隣に経つに相応しい提督になることを約束する」

その言葉に、曙は何も言わず、ただコクリと、小さく頷いた。それから突然駆け出し、群青の髪を揺らして角の向こう側へと消えてしまった。

「・・・戻るか」

一人、廊下に取り残された榊原は、ポツリと呟いて自らの部屋へと戻っていく。新たな想いを、その内に宿して。

なお、この後摩耶に見つかった榊原が、半目の彼女に必死になって誤解を解こうとしたことは、また別の話である。

◇

翌日。午前の執務を終えた榊原は、執務机で“ある物”とにらめっこをしていた。

現在曙はいない。例の、摩耶が主体となって研究していた新防空システム、その確認のために、演習に参加している。書類仕事があった榊原に代わり、演習の監督をしているのは、清水だ。

書類仕事を終えた榊原は、“ある物”を引き出して執務机の上に置き、以来ずっとそれを調べている次第である。

——・・・さっぱりわからん。

“ある物”とは、トラック沖海戦後に吹雪が残っていたものである。銀色のそっけないアタッシュケースだ。開けていない——そもそも開け方がわからないので、中身はわからないが、持った感じからして、何か書類の束ではないかと思われた。

榊原が悩んでいるのは、アタツシユケースのロック、八ヶタの暗証番号である。

腕組みをして、もう一度頭の中身を整理し直す。

吹雪は、秋山からの資料だと言っていた。おそらく彼女と秋山は、この中身を知っている。それから、開けるための暗証番号も。

しかし吹雪は、それを教えてはくれなかった。彼女が残したのは、たったこれだけの言葉。

——「開けるためのパスワードは、然るべき時が来れば、わかるはずです」

然るべき時とは？ 謎かけのような吹雪の言葉の意味を、その時は理解できなかった。

だがその疑問は、二週間前の、卓己中佐の一言によって解決された。

——「時は来た」

妙な言い回しだとは思った。頭の中で何かが引つ掛かってはいた。

卓己中佐は、知っていた。どこまで知っているのかはわからない。だが少なくとも、この件に関しては。

彼がルソン警備隊に配属されたのは、単にコミュニケーション能力が高いからではあるまい。

時は来たのだ。然るべき時、今こそがこのロックを開けるとき。それははずなのに、未だにその鍵を開ける八ヶタは見つからないままだ。

アタツシユケースは海軍仕様のもので、三回入力を間違うと、おそらくもう二度と開けることはできない。ミスは許されない。あてずっぽうでやるわけにはいかないのだ。

「・・・どうしたもんかなあ」

然るべき時に開けるようにと言われた代物だ。中に入っているものは、『T・T独立艦隊』に関するものである可能性が高い。すなわち、艦娘と深海棲艦の始まりに関する、何か重要な資料。

世界の真理に迫る手掛かりが目の前にあるというのに、それに手が出せないのは忸怩たるものがある。

「・・・何を、難しい顔をしてるんだ？」

あまりに唐突に掛けられた言葉に、榊原は心臓が飛び出るかと思っ

た。顔を上げると、制帽を小脇に抱えて清水が立っている。演習が終わって、戻って来たらしい。

「終わったか」

「ああ。それで、お前は何をしてたんだ？」

「・・・」

清水に見つかってしまった以上、答えるしかあるまい。隠し通すのは無理というものだ。それに、元はといえば清水は、吹雪の代わりにトラック攻略戦を見届けるための人間である。

本人からそんな話が出たことはないが、この手の話に巻き込んでも大丈夫なはずだ。

「暗証番号がわからなくてな。このアタツシユケースを開けられない」

「忘れたのか？」

「いや、俺のものじゃないんだ。『IF作戦』後に、吹雪さんから預かった。然るべき時が来たら開けろ、と」

「・・・また、回りくどいことを」

ピクリと眉を動かして、溜め息でも吐くように、清水は言った。

「暗証番号を覚えてもらってないのか」

「ああ、教えてもらってない。その時が来れば、わかるはずだと」

「なんだ、それは・・・」

呆れに近い言葉を漏らした後、清水は榊原の手元、暗証番号の入力部分を覗き込んできた。もともと、番号入力用の小さなキーボードがあるだけだが。

「海軍仕様か。面倒だな」

「試し打ちできないからな。慎重に行かないと」

そのまま二人の将校は、アタツシユケースを挟んで考え込む。カチコチ。再び執務室には、時計の秒針の音のみが響くこととなった。

やがて、清水がおもむろに口を開く。

「榊原。今から俺の言う数字を、何も訊かずに入力しろ」

「どういう意味だ？」

「質問は受け付けないと言ったはずだ。一度しか言わないぞ」

「・・・わかった」

この同期主席に、説明が欠如しているのはいつものことだ。誰も考
えも及ばないようなことを、唐突に言いだすことが、清水にはある。
その真意を理解することは、榊原にも難しい。

榊原が準備した頃合いを見計らったのか、清水がゆつくりと口を開
き、八ケタの数字を口にした。

「二、九、四、二、〇、六、〇、八」

——待てよ、その数字って・・・。

八ケタの数字が意味するところに気付いて、榊原は清水の方を向き
そうになった。しかし、結局実際に顔を上げることが、何かを問いか
けることもせず、八ケタの数字を入力した。

——一九四二年六月八日。

日本時間で言えば、ミッドウエー作戦が終了した次の日ということ
になる。

入力を確認し、ロック解除のボタンを押す。果たして、カチリとい
う鍵が外れる音がして、アタツシユケースに隙間ができた。

開いたのだ。清水の暗証番号は合っていた。

なぜ知っていた、そんな疑問よりも先に。なぜその日付が暗証番号
になっていたのか。何も意図するところがないとは思えなかった。

「・・・開いたな」

ただ淡々と、清水は言った。

「これの中身を、知っているのか？」

ポツリと呟く榊原に、清水は首を横に振る。

「その中に入っているものが、何かは知っている。だが、どこまで詳細
な資料か、『あの組織』の何を書いた資料なのか、それは知らない」
清水も知りたいのだろう。このアタツシユケースの中にあるもの
を。

知りたくば、この蓋を開けよ。

意を決した榊原は、アタツシユケースに手を掛け、ゆつくりと引き
上げる。蛍光灯の光で影になっていた中身が、少しずつ白く照らさ
れ、明らかとなる。

嚴重な緩衝材で保護された中には、A4サイズの書類が束となつて入っている。その書類の束の上には、封筒が置かれていた。

封筒の中を確認する。差出人は吹雪。それ以外の情報は、封筒には何も書かれていない。

ペーパーナイフを取り出し、封を切る。中に入っていたのは、小さな便箋が一枚。吹雪が書いたと思われる、綺麗で整った字が、たった一行書かれていた。

『貴方の好きにしてください』

便箋の裏を確認してみたが、それ以上の文言はなかった。ひとまず便箋を封筒へ戻し、榊原たちは書類の束を取り出しにかかる。

決して厚いものではない。束の数は二つ。どちらも、写本である旨が書かれている。

『船魂計画』『刃櫻会』

—— 刃櫻会。

その組織の名前を聞いたのは、舞との会談の時。舞はそれ以上の質問を許してはくれなかった。

おそらくは『T・T独立艦隊』の創設にかかわる組織。そして——

チラリと窺った清水は、何かを探るような瞳で、執務机に並んだ二つの紙の束を見定めていた。その唇が、ポツリと言葉をこぼす。

「・・・まだ、現存していたのか」

榊原の中で、仮説が確信に変わる。

パラオに来たのが、なぜ清水だったのか。吹雪がこの資料を残していったのはなぜなのか。

暗証番号を教えなかったのはなぜだったのか。

全ては、〃然るべき時を、吹雪の望むタイミングにするため〃。榊原たちの覚悟を確認するため。

清水を見上げた榊原に、彼は目を細める。こちらの考えなどお見通しであるかのように。

「お前の思っている通りだ」

一切の淀みなく、清水はさも当たり前のように、肯定した。

「俺は刃櫻会の人間だ。海軍に入る前からな」

パラオ泊地の執務室は、それまでにない沈黙に包まれる。
手にした資料が告げるもの。

それは過去からの告白。

時間を超越して、紙と言葉は世界を動かす。

幻

本日をもって、我が「刃櫻会」の活動は事実上終了することとなる。我々が関わってきた本事案が、収束とは程遠い状態とはいえ、帝国の敗戦という事態を鑑み、今後予想される連合国による機密情報の回収を懸念し、我が会の活動に関する資料の一切を焼却処分とすることを決定した。

しかしながら、本事案と“幻”はいまだ予断を許すものではなく、今後帝国の将来において重大な損害を与える可能性を加味し、私を含めた一部の同志によってその資料を抜粋、然るべき時に然るべき人物に渡るよう画策するものである。

(中略)

「刃櫻会」は表向き、敗色濃厚となった帝国の将来と、終戦時の混乱から陛下をお守りするべく結成されたものということになっている。結成は一九四四年十二月。もちろん、秘密裏に結成された組織であり、その存在は侍従長や海軍大臣といった非常に限られた人間しか知り得ない。であるが、実際に「刃櫻会」が行っていた活動を知るのは、さらに限られた人物のみである。

「刃櫻会」の前身である「草薙研究会」が結成されたのは、故山本五十六元帥が連合艦隊司令長官であった時分である。研究会を主宰していた櫻井（仮名）少佐（当時。終戦時大佐）は、山本長官の懐刀とも呼ばれ、いわば研究会は山本長官の直属という形でスタートしたことになる。

海軍甲事件により、山本長官が戦死なされた後は、しばらく独自に活動をしていたものの、“幻”の内地回航決定に際して連合艦隊司令長官預かりという形になり、一九四四年に「刃櫻会」となるまでは連合艦隊司令部直属組織として従来通りの活動を続けている。

◇

昭和十六年十二月八日。帝国、米英に対し宣戦布告。

(中略)

昭和十七年六月七日。MI作戦中止。

同月八日。航空母艦「鳳翔」所属九六式艦攻が海上にて漂流中の所属不明艦船を発見。山本長官、敵艦隊襲撃の懸念なしと判断し、曳航を指示。駆逐艦「舞風」、野分が曳航作業に入る。

同月十二日。所属不明艦船をトラックへ入港。この時点で、仮称を「不明巨大戦艦」とする。

同年七月七日。不明巨大戦艦の調査を目的とし、山本長官の密命を受けた「草薙研究会」が発足。櫻井（仮名）少佐を首班とする。

同月八日。研究会員はトラックへ移動。

同月十四日。第一回調査。機関区を調査せるも、駆動理論、構造ともに現用のものと大きく異なり、始動は困難と判断。艦体構成素材についても、未知の合金である可能性が高い。

同月二十一日。艦内にて、所属不明の民間人女性二人を保護。意識なし。トラック海軍病院へ移送、隔離。すでに調査済みの場所に倒れており、どこから艦内に侵入したかは不明。

同月二十二日。女性一人の意識が回復。身体に異常認められず。食事可。なれど記憶障害あり。

同月二十三日。もう一人の女性も意識が回復。身体に異常認められず。食事可。なれど記憶障害あり。

同月三十日。第二回調査。女性二名も同行。艦橋施設を調査せるも、こちらは機関区と違い、現行装備と相違は認められず。

同年八月八日。米軍ガ島上陸。第一次ソロモン沖海戦。

同月十日。不明巨大戦艦の機関が突如として始動。保護女性、自らを不明巨大戦艦の「船魂」と名乗る。

同月十一日。女性二名による不明巨大戦艦の操作（機関・発電機始動、兵装駆動系動作）を確認。以後は二名を不明巨大戦艦の船魂と仮定する。

同月十五日。第三回調査、及び第一回試験航海。不明巨大戦艦、機関始動の後主機駆動を確認。女性二名による操艦は不安定なるも、原速での航行及び転針に成功。

同月十七日。連合艦隊司令部内地を出港。

同月十八日。不明巨大戦艦の研究会内呼称を「幻（マホロバ）」に

決定。二名の女性を、それぞれナキとナミと命名。女性の承諾を得る。

同月二十八日。連合艦隊旗艦「大和」、及び連合艦隊司令部、トラックに到着。研究会の途中報告を提出。

同月二十九日。山本長官、内密にナキ、ナミと会談。両名、以後連合艦隊司令部の管理下に入ることを承諾。

同年九月三日。第四回調査、及び第二回試験航海。第一戦速の発揮に成功。

同月十五日。第五回調査、及び第一回公試。第三戦速の発揮に成功。主砲照準（測敵、諸元計算、俯仰旋回）試験異常なし。注排水系統異常なし。予想される余剰浮力は、「大和」型の倍以上であると推定。

同月十八日。第六回調査、及び第二回公試。機関最大出力による運転に成功。艦橋速力計が計測せる速力二八ノット。高角砲、及び機銃群照準試験異常なし。この時点で、「幻」機関の燃費が、既存のものよりも遥かに良好なことが判明。重油タンクの容積から計算するに、巡航での航続距離は三万海里に達するものと思われる。

同月二十日。第七回調査、及び第三回公試。主砲公試を開始。四〇度の最大仰角にて交互撃ち方を三度実施。最大到達距離五万を記録。

同月二十一日。第八回調査、及び第四回公試。第一戦速での主砲公試。仰角二〇度にて斉射を三度実施。発砲遅延装置の搭載を確認。散布界狭。

同月二十三日。第九回調査、及び最終公試。曳船を用いての動目標射撃を実施。交互撃ち方六回、斉射三回。

同年十月三日。連合艦隊司令部、「幻」をこのままトラックに留め置くことを決定。

同月十日。第十回調査、及び砲術訓練。交互撃ち方九回、斉射四回。帰途にて敵潜の雷撃を受けるも、目立った損害なし。

同月十一日。潜水夫による被雷箇所を確認を行うも、損傷見当たらず。なれど艦内防水区画に浸水発生。排水作業後、浸水の原因調査に入る。以後、しばらくの出港を取り止め。

同月十二日。浸水区画の調査を行うも、目立った破損箇所、及び亀裂等浸水の原因と思しきものは発見されず。

(中略)

昭和十八年四月七日。い号作戦発動。

同月十八日。海軍甲事件。山本長官戦死（公式発表は一か月後）。研究会は後ろ盾を失うが、独自に活動を続けることで総意を見る。

同月二十一日。古賀峯一大将が連合艦隊司令長官となる。

同年五月二日。電波探信儀の優先配備が決定。設置場所の検討が行われる。

同月二十日。工作艦「明石」による電探設置作業を行うも、設置予定位置に台座を設置できず、断念。調査の結果、「幻」艦体を構成する未知の合金は、空いた穴を自己増殖によって塞いでしまう能力があることが判明。先の被雷に際して、破孔等が見つからなかったにもかかわらず浸水が発生していたのは、この特殊合金の特性によるものと思われる。以後、この特殊合金を「蒼鋼」と呼称する。

同月二十一日。電探増設作業断念。今回の結果を鑑みるに、人類製の兵装等を増設することは困難を極めると思われる。また、ナキ、ナミ曰く、増設された兵装は彼女らで操ることができないとのこと。彼女らの感覚的操作が及ぶのは、蒼鋼で構成されている部分に留まる模様。研究会内に、この蒼鋼に関する研究を行う部門を立ち上げる。

(中略)

昭和十八年十月七日。「幻」の内地回航が決定。回航に際し、臨時艦長として大石（仮名）大佐が着任。この時点で、研究会は連合艦隊司令長官預かりとなった。

同月十四日。「幻」、トラックを抜錨。

同月二十五日。「幻」、柱島に投錨。

(中略)

昭和十九年九月十日。リングに投錨。

同年十月十九日。捷一号作戦発動を受け、リングを抜錨。別働隊として第二艦隊のレイテ湾突入を支援するべく、比島へ向かう。

同月二十三日。レイテ沖海戦始まる。

同月二十五日。栗田艦隊反転に際し、「幻」もレイテ湾突入を断念。レイテ沖海戦終了。

(中略)

昭和二十年三月十日。東京大空襲（九日深夜）。

同年四月一日。米軍沖繩侵攻を開始。

同月六日。菊水作戦発動。戦艦「大和」出撃。これを支援するべく、「幻」も出撃する。

同月七日。「大和」沈没。「幻」、単艦での沖繩突入を図るも作戦中止を受け反転する。その際、米軍偵察機と思しき機体が上空を通過するが、空襲はなし。

(中略)

昭和二十年七月二十五日。横須賀回航が決定。

同月二十六日。呉を抜錨。

同月二十七日。横須賀投錨。

同月二十八日。呉空襲。

同年八月六日。広島に新型爆弾が投下。後に原子爆弾と判明。

同月八日。ソ連宣戦布告。

同月九日。長崎に原爆投下。

同月十四日。御前会議にてポツダム宣言受諾が決定。海軍の若手将校がこれに反発、反乱を企てる。「幻」の掌握を画策、強制乗艦。混乱の中、ナミが行方不明となる。その後、「幻」強制出港。唯一の生存者、坂上（仮名）少尉の証言によれば、大石（仮名）艦長以下艦内に残る会員は全員が戦死。「幻」は、残った十数名の反乱軍と共に、ナキの独断で出港した模様。以後、一切の消息が不明となる。

同月十五日。玉音放送。帝国、連合軍に降伏。

同年九月二日。戦艦「ミズーリ」艦上にて、降伏文書の調印が執り行われる。

同月三日。「刃櫻会」解散を決定。一切の活動に関する書類を焼却処分。（なお、本書を含めた一部は、有志が独自に保管）

「幻」諸元（推定）

全長・・・三五三・七メートル

全幅・・・四三・二メートル

排水量・・・一万七〇〇〇トン

速力・・・二八ノット

五〇口径五六センチ三連装砲四基

五〇口径一二・七センチ連装高角砲十八基

二十五ミリ機銃多数

◇

「船魂計画」

我々が邂逅した「幻」は、かくも巨大なる戦艦であるが、その操艦、及び戦闘行動に必要な人員は、わずか二人と非常に少ないものである。これはひとえに、ナキとナミ、二人の少女が持つ特殊な艦体制御方法にある。

仮に「精神同調」と呼んでいるこの手法が確立されれば、我が帝国はより一層の飛躍を遂げることとなるであろう。そこで「草薙研究会」のうちの数名は、この精神同調に関する基礎技術を研究、本土において種々の実験を行うことを試みた次第である。

ナキとナミは、「幻」の艦体を運用する際、特殊な機器の補助を受けずに精神同調を行っている。これは艦体を構成する蒼鋼に直接接触れることで、艦内各部との接続を可能にしていると考えられる。また、あれだけの規模の艦体を掌握する負担は、両名が役割を分担（ナキは航海、ナミは戦闘）することで軽減している。

これを人類側の技術に落とし込む場合はどうなるであろうか？

現状の技術では、帝国、否世界中のどこにも、蒼鋼の働きを再現することは不可能であろう。となると、艦体については、通常の鋼鉄で作ることになる。したがって、蒼鋼を介した直接的精神同調は断念せざるを得ない。

しかし、精神同調を補助する装置を介することで、同様の制御を行うことは可能である。「草薙研究会」に所属する理化学研究所員は、「幻」の調査によってその基礎理論を特定、私を含めた数名の研究会員と共に内地へ戻り、精神同調補助装置（ここでは単純に「装置」と称

する)の完成を目指す。初期達成目標は、人間単独での航海系操作全般の掌握とした。

試験艦としては、マル五計画の改定による空母の建造にあたって、突貫工事の後ドックから引き出された第三〇一号艦(「伊吹」型二番艦)の艦体を流用することが決定。欺瞞工作として、第三〇一号艦は、「天城」建造のため解体され、ドックを明け渡したこととした。

装置の完成は昭和十九年二月。第三〇一号艦は艤装作業が四割程度しか進んでいなかったが、ともかく装置を航海系の設備と接続し、精神同調の試験に入った。

同年五月、精神同調に初めて成功する。成功者は民間の協力者で光瀬(仮名)女史。

同年十月まで行われた試験の結果、成功者は四名。いずれも女性である。このことから、現在未解明の精神同調に関わる脳の働きが、女性の方が適合性が高いと判断される(追研究の結果、この現象は艦船のみに限られることが判明)。

また、現行の装置の性能では、航行の制御をするので精一杯であり、戦闘行動には乗組員が必要である。これは、装置の性能向上によって解決されると思われる。

しかしながら、戦局の悪化にともない、入手できる資材等の問題を鑑みて第三〇一号艦の完成を断念。本計画もまた、凍結されることとなった。

空襲警報

軽くかかったシアアの向こう側で、海面を二つに割る白い飛沫が上がつっていた。太陽を浴びて黒鉄の輝きを帯びる艦首は鋭く、否応なしにこの艦の性格を思い知らされる。高速度のままに敵艦隊へ肉薄するのが、駆逐艦の役目である雷撃戦の姿だ。

駆逐艦「曙」の艦橋、原速から強速に増速された反動を感じながらも、榊原の思考はどこかここにあらずと言ったところだった。先日の一件以来、頭の中を色々な思考が走り抜ける。ふとした時に、その意識は情報の海に沈む。

「ねえ……ねえってばー!」

その意識を現実に戻してくれたのは、もはや榊原の隣が定位置となりつつあるパラオ泊地秘書艦、曙だ。ハツとした榊原がそちらを向くと、彼の肩ほどにある曙の顔が、心配しているように眉尻を下げている。彼女にこんな顔をされたのは初めてのことだった。

「……何ぼーつとしてんのよ。大丈夫?」

「ああ……問題ないよ」

「そう……それならいいけど」

そう答えつつも、曙はジツと榊原を見つめていた。その深い視線から目を逸らすことができず、榊原もまた、曙を見つめ続ける。

「い、いつまで見つめてんのよ、このクソ提督!」

自分から見つめてきたのに、そんなことを言っただけで、曙はそっぽを向いてしまった。その耳たぶが、ほんのりと赤く染まっている。

——心配をかけてしまったか。

自分の悪い癖だと反省して、榊原は思考を隅に置き、前を見る。

今日、「曙」が海に出ているのは、防空演習のためである。研究段階を終え、実戦を想定した演習の段階へとステップアップした新防空陣形を、パラオ各艦が参加する形で確認するのだ。

このため、今日はパラオ泊地に所属する全艦が出港し、演習に参加している。

程なく、防空陣形の指揮を執る「祥鳳」から、清水の声が届いた。

『榊原中佐、始めてもよろしいでしょうか』

出港中ということ、その呼びかけは階級を意識したものとなっている。榊原はマイクを取り、短く答えた。

「始めよう。以後の指揮を、〃祥鳳〃及び清水少佐に一任する」

『了解。第一陣、第二陣は帛式防空陣形を形成せよ』

清水の指示に、第一陣指揮艦 〃摩耶〃、第二陣指揮艦 〃祥鳳〃が応答する。

『第一陣了解。各艦、防空陣形へ。速度、針路に注意』

『第二陣了解。各艦、防空陣形へ。速度、針路に注意』

それぞれの陣に所属する艦娘たちから、了解の声が続く。やがて、陣形が動きだした。

まず動くのは第二陣だ。所属する 〃祥鳳〃、〃大和〃、〃木曾〃が三角形の陣形を描いて中心に据え、その両側に 〃満潮〃と 〃陽炎〃がつく。両駆逐艦には、〃霞〃にて試験運用を終えた改良型二五ミリ機銃が搭載されている。〃大和〃と 〃祥鳳〃の直衛艦として十分過ぎる能力を有していた。

それに続いて、第一陣が動く。第二陣の中核にあたる三角形に、傘のようにして被さり、第二陣と合わせて魚鱗の陣に似た隊形を作る。最も前に位置取るのは、もちろん 〃摩耶〃だ。陣形右翼は 〃長波〃と 〃曙〃、左翼は 〃卯月〃と 〃霞〃が守る。

帛式防空陣形。前方と横方向に対する対空砲火の集中を狙った陣形だ。パラオ泊地工廠部が開発した改良型機銃、その性能あつてこそのものである。

この防空陣形では、各艦の防空区画が明確に決められている。また、後方に射撃の空白を作ったのは、そもそもその方向からの攻撃が難しいのと、戦闘機による迎撃区画としたためだ。

戦力が限られるパラオ泊地艦隊が、その中で最大限の防空能力を発揮できるよう、清水と摩耶が中心となって考案したものだった。

清水と摩耶の距離は、確実に近くなっている。

どちらもそれらしき素振りを見せないが、お互いを意識している。そうでなければ、この計画をここまでまとめ、的確に実行することが

できなかつたであろう。

——ただ、清水としては、やはり“摩耶”から指揮を執りたいんだらうな。

真にこの陣形が機能するためには、やはり陣形先頭に立つ“摩耶”からの確な指示を飛ばす必要があるだろう。この陣形における“摩耶”の位置。そこには少なからず、摩耶の覚悟が見えている気がした。

「“長波”との間隔は適切。曙、配置完了」

各艦配置完了の報せが届く。最後にそれを、摩耶と祥鳳がまとめ上げた。

『第一陣配置完了』

『第一陣配置完了、了解。第二陣配置完了。帛式防空陣形配置完了』

祥鳳がそう報告した清水が、ゆつくりと口を開いた。

『号令より配置完了まで、十分三十秒。まずまずと言ったところだろう。続いて、空襲想定演習に移行する』

その言葉を境に、本格的な防空演習が開始された。

『想定、想定。電探に感あり。敵編隊接近。方位〇七五、距離六万。対空戦闘よーい』

全ての演習を終え、提督も艦娘も緊張を弛緩させたとき、風雲急を告げるブザーが“曙”の艦橋に鳴り響いた。

そのブザーは、外部から入った通信を意味していた。艦橋内でランプが点灯していた受話器は艦隊外からのものだ。泊地からかと思いいくらか気持ちを引き締めて、榊原は受話器を取る。

「こちらパラオ泊地所属駆逐艦“曙”、榊原広人中佐です、どうぞ」

電話の相手は、意外な人物だった。

『パラオ防空隊、源田稔大佐です』

——源田大佐……？

榊原の頭の中で、警鐘が鳴る。源田大佐が直接“曙”に連絡を入れてくるような、何か重大な案件が起きている予感が。

源田はほんの数秒すらも惜しむように、早速本題に入った。

『五分前、レーダーに所属不明機が映りました。それも、一機や二機ではありません。確認しただけで六十機。おそらく、さらに増えると思います』

——六十機の大編隊・・・！

榊原は息を飲んだ。

『念のため確認させていただきます。そちらの艦載機ではありませんか？』

「違います」

パラオ泊地艦隊で唯一艦上機を運用する「祥鳳」の搭載機数は三十機。補用含めても四十機に満たない。これに、「大和」や「摩耶」の水上機を加えても、パラオ泊地所属航空機は五十機そこそこだ。

『了解しました。いまだ確認が取れていませんが、すでに「フアントム」がスクランブルしています。間もなく確認が取れると思いますので、その際にはもう一度連絡を入れさせていただきます』

「わかりました。回線は海空共通の作戦行動用バンドに切り替えてよろしいですか？」

『お願いします。通信終わり』

榊原が受話器を置くのとほぼ同時に、上空をジェット機特有の轟音が通り過ぎていった。F-4「ファントム」。初期からパラオに配置されている航空機だ。もはや骨董品と言ってもいい機体だが、整備は行き届いている。

「どうすんの？」

榊原を見据える曙の問いかけは端的だ。それに対する榊原の答えも決まっている。

「このまま、現海域に防空陣形で待機する」

受け取ったマイクに吹き込み、各艦からの返信を聞き届けた。

細かな指示を出すにはまだ情報が不足している。榊原は艦橋を曙に任せ、階下の海図室に向かった。演習海域のパラオ周辺を映した海図が広げられている海図台の上には、海軍の防諜仕様が施された液晶パッドがある。

航海中、両手を塞ぐ液晶パッドを持ち歩くなどもつてのほかだ。ま

して「曙」は駆逐艦。揺れる時はとことん揺れる。だからこの液晶パッドは、基本的に作戦要綱等を確認するだけで、海図室に放置していた。

ところが、今回は違う。液晶パッドは、受信ランプが緑色に点滅している。予想通りだ。パラオ防空隊との共通データベースを作っておいて正解だった。もともと、榊原は提案をしただけで、実際に作ったのはパラオ防空隊の人員だが。

液晶パッドを立ち上げると、すぐに共通データベースのページに飛んだ。そこには、パラオ防空隊の防空指揮所から送られてきた、敵編隊や防空隊所属航空機の状態が記されている。

現代機器を受け付けないBOBだが、パラオ泊地周辺限定なら、パラオ防空隊の最新鋭レーダーの情報を取り入れることができた。

敵編隊が向かってくる方位は、ほぼ真東、距離二百キロ。パラオから向かってその方向にあるのは、先日榊原も攻略作戦に参加した、トラック諸島である。

——まさかな。

トラック諸島に建設途中だったという深海棲艦の陸上基地のことを思い出して、榊原はかぶりを振る。

現状、最も有力な説は、最近新たにトラック沖に確認された敵機動部隊がパラオに接近し、攻撃隊を放ってきた可能性だ。

トラック諸島は、ハワイと並ぶ、深海棲艦太平洋艦隊の重要活動拠点であった。港湾施設も整備されており、ここで整備を受けた各艦隊が、太平洋各地で活動していた。以前パラオを固めていた敵艦隊も、その拠点はトラックであったことがわかっている。

そのトラック港湾施設は、紆余曲折あったとはいえトラック沖海戦時に完全に破壊されている。復旧には半年がかかると見込まれていた。艦隊行動の重要な拠点を失った深海棲艦の行動、特に南太平洋におけるものは大きく減ったことは間違いない。

間違いないのだが、おまけもついてきた。トラックを拠点としていた艦隊が行動を制限された結果、トラック周辺にその艦隊が集まってきたってしまったのだ。現状確認されているものだけで、機動部隊二つ、

火力部隊一つ、水雷戦隊二つ、その他小規模の襲撃艦隊四つ。その防御の固めっぷりは、トラック沖海戦の時以上である。

自らの拠点を攻撃された深海棲艦が、逆に人類側のトラック攻略戦の拠点となっているパラオを襲おうと思っても、何らおかしくはない。

——おかしくはないが・・・深海棲艦のロジックから外れるな。

深海棲艦は、功を焦ることはしない。トラックを人類が攻めることはわかり切っているのだから、基本的に深海棲艦は、それを待ち伏せて戦いを挑む。それが深海棲艦のスタイルだ。余程戦力的に余裕がない限り、最前線基地で守りが堅いことなどわかり切っているパラオを攻撃してくることはないはずだ。

それに、襲撃してくるとしても、それは水上部隊と組み合わせるものであろう。空襲と同時に水上部隊に襲撃されれば、パラオの防衛戦力もその全戦力を投入せざるを得なくなる。そうなれば、自ずと隙も出てくる。

しかしながら、いまだに水上部隊発見の報せはない。

——不思議なことばかりだ。

液晶パッドを見つめていた榊原は思案する。その思考をいったん遮って、艦内スピーカーから曙の声が入った。

『パラオ防空隊から通信が来たわよ。そっちに直接回す』

「了解」

すぐに、海図室内の受話器のランプがついた。それを取る。

「榊原中佐です」

『源田大佐です。先ほど、防空指揮所を立ち上げました。データは行っていますか?』

「はい。確認しました」

『了解しました。今、"フロントム"より報告がありました。所属不明機は、深海棲艦の機体である可能性が高いとのこと。ですが、機体形状が識別表にあるものではなく、確定できる情報ではありません』

新型機、ということだろうか。こちらが"紫電"改二や"烈風"を

開発しているのと同じように、深海棲艦とて新たな機体を開発しても何らおかしくはない。

『こちらからは以上です。パラオ泊地艦隊はどうされるおつもりか、お尋ねしたい』

「防空戦闘への参加を具申します。『祥鳳』戦闘機隊は、間もなく燃弾補給を終え、出撃が可能になります。対空砲弾もたっぷりあります」

『わかりました、具申を受け入れます。以後は作戦コードを使用します』

「作戦コード使用、『月光』了解」

『『月光』確認、『翼』了解』

作戦コード『月光』はパラオ泊地艦隊、『翼』はパラオ防空隊である。

「もう一点、よろしいでしょうか？」

自分の周囲を見渡した榊原は、周りの景色が全く見えない海図室の状態を鑑みて、源田に要請する。

「『曙』からでは、こちらからの情報を確認しつつの防空指揮が困難なため、以後の防空指揮を『祥鳳』の清水少佐に委任しようかと思えます」

『わかりました。こちらにお任せします』

「お願いします。指揮権委任の確認は、共通データベースに上げます。通信終わり」

受話器を置いた榊原は、すぐに『祥鳳』に通信を入れ、清水に防空指揮を一任する。清水はたった一言、『了解しました』と答えて、共通データベースに指揮権を委任された旨を掲載した。それを確認して、榊原は艦橋に戻る。

艦橋で待っていた曙は、榊原の方をチラリと見遣っただけで、再び前を向いた。その横顔を横目で窺って、榊原も前を向く。

パラオ防空戦が始まろうとしていた。

鷲八進発セリ

「達するー！」

エプロンに鳴り響く轟音をものともせず、菅野は声を張り上げて、目の前に立つ部下たちに告げた。

第一二航空戦闘団第三四三航空隊第一小隊、通称“イーグル”隊。菅野が“新選組”と自称するF-15装備部隊は、すでに対空装備を満載し、出撃の準備を終えていた。第一二航空戦闘団含むパラオ防空隊全体を指揮する防空指揮所からは、すでに所属全機について出撃命令が出ている。後は彼女らが乗り込み、管制塔からのゴーサインで飛び立つだけである。

そんな出撃前の緊張感。パイロットスーツを着用し、小脇に各々のヘルメットを抱えて、“イーグル”隊の三人が姿勢を正していた。

——いい表情だ。

全員が航空自衛隊時代からの戦闘機パイロットだ。飛ぶことに対する緊張の色は見えない。引き締まった口元が、どこか清々しかった。

「パラオでバカンスしようと思ってたら、さっそくこれだよ、バカヤロウ」

口角を吊り上げて言う菅野に、三人が苦笑を漏らした。パラオは日本でも人気の旅行先だった。源田に半ば強引に引き抜かれ、配属先を聞いた菅野が、その白い砂浜を少なからず楽しみにしていたのも事実だ。

「ともかく、だ」

そこで間を取り、菅野は三人を交互に見遣る。

「テメエらも、アタシたちがするべきことは、わかっただら？」

なあ、赤松？そう目線で訊いた菅野に、赤松は満面の笑みで答えた。

「隊長のバカンスのために、パラオの白い砂浜を守る、ですわね？」

「わかっただらねえか」

「砂浜だけではもったいないですわね」

岩本が相変わらずの穏やかな声で言う。

「パラオは他にも、見たいところがたくさんありますからねえ」
「そうかそうか」

部下の言葉に、菅野は満足げに笑った。
「てえわけだ。テメエら、アタシのバカンスのために、しっかり戦えよ」

「酷い激励の仕方っすね」

杉田が押し殺した笑い声を上げた。

「じゃあ、この出撃が終わったら、隊長の奢りで、全員揃ってバカンスですわね」

しれっと奢りにしている岩本を、半笑いで睨みつける。その程度でこのエースたちが怯むはずもなく、赤松と杉田も両手を合わせて、「ごちそうさまです」と言っていた。

——大した奴らだよ、まったく。

航空自衛隊初の実戦となった「東京防空戦」の時とは大違いだ。死線を潜り抜けることが、これほどに余裕を生むのだろうか。不敵な笑顔とは裏腹に、菅野はある種の皮肉を感じられずにはいらなかった。

全員で拳を突き合わせ、組み立ての終わっているそれぞれの乗機へと向かう。時間はあまりなかったが、機体の状態を確かめるための試験飛行はできていた。問題なく、やれる。

敵編隊接近に際し、出撃機体は、F-115四機、F-4六機、T-4改造機が四機。全機が対空ミサイルを搭載している。パラオ防空隊の保有する対空ミサイルの、六割近くを使用した作戦だ。

計器を確認し、自らの機体が万全の状態であることを確かめた菅野は、管制塔からの指示を待つ。やがて、管制官から通信が入った。

『管制塔より、イーグル』。防空指揮所より出撃命令が下りました。滑走路へ進んでください』

「イーグル」了解。これより滑走路に侵入する」

口頭マイクに返し、イーグル」隊全機に手振りで指示を与える。機体に乗っているのは、エンジンの轟音で声など届かないからだ。

四機のF-115が動きだす。ダイヤモンドの形に編隊を組んだま

ま、エプロンを出て、滑走路に入った。ロマン・トメトウチエル空港の滑走路は決して長いとは言えないが、「イーグル」の離陸には十分だ。

コックピットを閉じ、フルフェイスヘルメットを被る。ヘッドアツブディスプレイには、今の機の状態が滑走路を背景にして映っていた。

『管制塔より「イーグル」。離陸を許可します』

「「イーグル」了解。幸運を祈ってくれ」

『管制塔より「イーグル」。グッドラック』

管制塔との通信を終える。滑走路脇の航空管制員が、旗を振り、滑走開始を指示した。

F-15に備えられた二基のエンジンが、それまでに倍する轟音を上げて、強烈な加速度を与える。シートに押し付けられる、というよりは見えない壁とシートに挟まれるような感覚だ。無理矢理に肺をこじ開け、空気を入れる。Gに負けて酸欠状態になるなど、シャレになっっていない。

操縦桿をゆつくりと引く。F-15の機首が上がり、揚力を得た機体はそのまま上昇を始めた。四機同時だ。ダイヤモンドの隊形を保ったまま、編隊は上昇していく。

ぐんぐんと高度を稼いでいく機体。ランディングギアを引き込み、離陸は完了した。

『防空指揮所より「イーグル」。高度八千にて待機』

「了解。高度八千で待機する」

接近する敵編隊の高度は六千から七千と報告されている。それより高度を稼ぐのは、ミサイルを撃ち切った後の機関砲による上方からの攻撃も想定しているからであろうか。

「東京防空戦」において想定外となったのは、ミサイルを撃ち切った後の対応だった。絶え間なく襲来する敵機を止めるべく、各機は機関砲を用いての近距離戦闘に突入した。

ミサイルに対する妨害装置は持っている最新鋭機だが、深海棲艦の艦上機が放ってくる機銃の雨霰の中を突破する方法など知らなかつ

た。上方からの襲撃訓練も行っていないかった。

東京が空襲されるといふ最悪の事態は防げたものの、運悪く機銃に掴まって撃墜されたF-15が二機、この他損傷機が五機。まるでシヤワーのように降り注ぐ機銃弾など経験したことのない自衛隊パイロットにとつて、それは究極の度胸試しであった。

だが、今回は違う。菅野たちは、そうした対深海棲艦を想定した上方からの襲撃訓練も受けている。ミサイルを撃ち切ったとしても、十二分に戦えるはずだ。

——来るなら来い。

すでにレーダーが捉えている敵編隊との距離は百五十キロ。攻撃開始の指示が防空指揮所より下されるのを、菅野は舌なめずりをして待っていた。

*

榊原から防空戦闘に関する指揮権を委任された清水は、パラオ泊地艦隊を敵編隊の予想進路上、バベルダオブ島から一万メートルの距離に配置した。その最後尾、"大和"と並ぶように航行する防空指揮艦の"祥鳳"甲板には、燃弾補給を終えた零戦が次々に並べられていた。準備の整った機体から「金星」発動機の暖機が始まっており、後はカタパルトに繋いで射出するだけだ。

もつとも、飛行甲板の下にある艦橋からでは、その様子を見ることのできないのだが。ここから見えているのは、甲板の前縁とその下部に設けられているカタパルトの構成部品くらいである。

——まだるっこしいな。

そんなことを思った清水は、艦橋を出て、舷側の見張り所から発艦指揮所に移った。そこには、片袖をはだけていつでも発艦指示を出せるように待機している、祥鳳がいた。飛行甲板柄の和弓を握り締め、風上を見つめていた。

彼女から目を移し、甲板を確認する。轟音で満たされるそこは、機体の整備を担当する妖精や搭乗員妖精で溢れていた。暖機に入った機体で最後まで状態を確認している整備員妖精と搭乗員妖精が交代する。そんな光景がいたる所で起きていた。

今回出撃準備をしているのは、二十四機の零戦。『祥鳳』が搭載する全機だ。後は対潜哨戒用の九七艦攻と二式艦偵だけである。

パラオ防空隊との協議の結果、『祥鳳』戦闘機隊が担当するのは、二波に分かれる敵編隊のうち第二波だ。敵味方識別装置——IFFを搭載しない『祥鳳』戦闘機隊の誤認を防ぐ処置である。

第一波はパラオ防空隊の戦闘機が迎撃し、第二波は『祥鳳』戦闘機隊とパラオ泊地艦隊の対空砲火、ロマン・トメトウチエル空港に設置された対空ミサイルで叩く。それが防空戦闘の基本概要だ。

清水の頭上を、聞きなれたジェットエンジンの音が通過していった。数は多い。各機のエンジン音が重なり、ドブプラー効果による低音の差をつけながら、敵編隊の方向へと向かっていく。共通データをベースに上がっていた情報によれば、防空指揮所は高度八千での待機を命じたようだ。

——零戦では、そこまで上がるだけで一苦労だ。

元々高高度性能を追求した機体ではない。「金星」発動機を搭載した六四型でも、基本は変わらないわけだ。

だが、戦いようはある。何も上から一航過を仕掛けるだけが、対爆撃機戦闘ではない。その辺りの指示は、すでに全ての妖精に与えてあった。ぶつつけ本番になるが、彼らはやってみせると、自信ありげに親指を立てて見せていた。

「・・・発艦は、まだ先になりそうですね」

祥鳳が清水の方を振り向いて言った。清水は無言のまま頷く。

黒い瞳が、清水を見つめていた。風に揺れる長い黒髪は艶やか。女性らしい体つき。

パツと見ただけでは、誰もが認める美人だ。艦娘であることを抜きにすれば、彼女に好意を寄せられる同期が羨ましくない、と言えば嘘になるだろう。

艦娘は、驚くほどに人間的だ。自らの力で巨大な軍艦を動かしながらも、その内面は同じ年頃の女性と変わらない。気をつけていなければ、彼女たちが艦娘であるということを見失ってしまいそうなくらいに。

ふと、清水の意識は、パラオ着任から最も付き合いのある重巡洋艦娘に向いていた。艦隊の先頭に位置取る彼女の艦の姿は、最後尾の「祥鳳」からはわからない。その艦橋に立つ少女の姿もまたしかりだ。艦娘としての摩耶を、実は見たことはない。

今まで清水が見てきた摩耶。それは、感情を剥き出しにしながらも、自らも傷つけてしまう一人の少女。それは、過去と向き合おうとし、葛藤の中で悩む一人の少女。それは、嫌いなはずの俺を、何とか受け入れようとしてくれる一人の少女。

思えば清水にとって、摩耶は一番艦娘であるところを想像しにくい娘かもしれない。

「何見てるんですか？」

清水に祥鳳が呼びかける。こちらを覗き込むその目は、清水の考えていることなどお見通しなのであろう。人の機微にはよく気づく艦娘だ。

「摩耶さん、やっぱり気になりますか？」

「・・・」

すぐに言葉を選べなかつた時点で、清水の負けは確定していた。

「もつと素直でいいのに。その方が、私の好みですよ」

「それは君の好みの問題だろう。というより、君は自分に素直になり過ぎだ」

榊原への執拗なスキンシップを差して反撃を試みるが、そんなものが無駄であることはわかり切っていた。祥鳳は一番いい笑顔を浮かべて、言い切る。

「決めたんです。伝えたいことを伝えられずに沈むのは、もう嫌ですから。それに、ライバルが多い方が、楽しいでしょう」

魅惑的な笑み。正直、負けた。

「そうか」

それだけ答えて、清水は艦橋に戻る。ここどころ、沖に出ている間に、余計な思考をする機会が多くなっていることは、清水自身自覚があった。

パラオ防空戦

レーダーに映る多数の敵機の影。それをチラリと確認しながら、菅野は防空指揮所からの指示を待っていた。

『防空指揮所より各機。敵編隊へのミサイルによる攻撃を許可する。以後は管制機の指示に従え』

パラオ上空には、早期警戒と防空隊誘導としてE-2Cが展開している。防空戦闘時の細かなデータは、このE-2Cから送られることになっていた。まさに“ホークアイ”——鷹の目である。
「了解」

各機から返事がある。戦闘機隊の先頭を飛ぶ菅野は、不敵な笑みを浮かべて、管制機からの指示を待った。

『“ホーク”より各機。マーク“アルファ”を攻撃』

六十機からなる敵編隊第一波。その鼻っ面をガツンと叩くイメージだ。

選択したミサイルが、目標をロックオンする。敵一機に付き、ミサイルも一機。過去の戦訓から、深海棲艦の機体性能では、ミサイルの追尾能力をかわすことができないと判断されていた。

操縦桿と一体化したスイッチのカバーを外し、押し込む。胴体下のステーションからミサイルが脱落し、数瞬後に推進器が点火、ロックオンした目標へと真っ直ぐに飛翔していった。ミサイルの数は八機。

使用したのは、AAM-4九九式空対空誘導弾。中距離戦闘用のミサイルだ。今回の出撃では、F-15とT-4改造機が搭載している。F-15は四機ずつ、T-4は二機ずつ、計二十四機。

——大人しく、餌食になれ！

レーダーで捉えている敵編隊とミサイルの動きを確認しながら、菅野は次発の用意をしている。敵編隊先頭集団は、何とかこのミサイルを回避しようともがいているようだが、そんなものが通じるはずもなかった。

菅野機から伸びていった輝点が、敵機を示す輝点と交錯し——お互いが消える。同じようなことは、八回続いた。敵編隊先頭の八機

が、ミサイルによって撃墜されたのだ。

なんとも味気ないようだが、これが現代戦闘機と深海棲艦航空機の戦いだ。レシプロ機と変わらない性能しか有さない深海棲艦艦載機は、現代戦闘機の攻撃にはなす術もない。また、母艦のような回復能力も有さない（これはBOB側の航空機も同じだが）ようでも、言ってしまうえばいい鴨だ。

ただそれでも、多すぎる鴨は手に余る。攻撃能力と防空能力の飛躍的な向上により、大編隊を組んでの空襲というのが現実的ではなくなった現代航空機は、基本的に数よりも質を重視した戦いと言っている。数こそ命の第二次大戦級航空戦術とは相容れない存在だ。すなわちその物量は、防空能力の許容量を超えている。

——さあ、ここからが腕の見せ所だ。

二射目のAAM-4を放ちながら、菅野は内なる血潮が滾るのを感じる。どうも自分は、ドッグファイトというのが好みでいけない。

この二射目が終わった時点で、四機のT-4改造機は搭載ミサイルを撃ち切った。元はと言えば練習機改造機であるから、搭載量はそこまで大きくない。それに、そもそもパラオ防空隊の弾薬事情からして、参加全機にフル装備というのが無理な話なのだ。こういう最新鋭装備は、どうしても本土やフィリピンといったところに重点配備されがちだ。

T-4改造機は、そのまま少しばかり高度を稼ぐ。この後の上方からの襲撃に備えたものだ。

“イーグル”隊の四機は、いまだにAAM-4を二機ずつ残している。その二機を用いてさらに八機を撃墜したところで、戦闘は短距離と言える距離まで近づいた。菅野機以下、全機が使用ミサイルを切り替えた。次の出番は、AAM-5四式空対空誘導弾。短距離での対空戦闘を考慮したミサイルだ。

翼下のパイロンから、ミサイルが放たれる。F-15四機、F-4六機の計十機から一機ずつだ。

常人よりもいい菅野の目は、遙かの空に人工的な光を認めていた。未だ距離はあるが、恐らくはあれが敵編隊だ。すでに半数近くを撃墜

されているにもかかわらず、敵編隊は速度も進路も変えずに、パラオを目指していた。

知っているのだ。こちらのミサイルが、いつか尽きることを。

——上等。

酸素供給マスクで覆われた口元を歪める。フルフェイスヘルメツト越しに敵機を睨む。

——すぐに叩き落としていやる。

管制機の指示の下、AAM-5の第一射が放たれた。

*

防空指揮所とリンクした液晶パッド上、敵編隊第一波が半数以上の機体を失ってもなお、進撃を続けている状況を、清水は確認していた。

——やはり、引き返すことはないか。

あらかじめ予想されたことだ。おそらく深海棲艦は、第一波攻撃をミサイルへの盾として使い、第二波以降の攻撃に託すつもりである。

液晶パッドでは、各機の残弾の状況も確認することができる。AAM-4はすでに全機が撃ち尽くされ、戦闘は短距離と呼べる範囲にまで近づいた。各機が残しているミサイルの残弾は、残存の第一波を十分に迎え撃てるが——

「・・・第二波以降は、厳しいか」

ポツリと呟き、液晶パッドを置いている海図室よりも前の艦橋を見遣った。祥鳳は航空隊の発艦指示にいつでも対応できるよう、席を外しており、舵を握っているのは艦橋要員の妖精の一人だ。

その時、敵第一波全滅の報告が液晶パッドに示された。続いて、パラオ泊地艦隊に戦闘機の応援要請。

「来たか」

ここからは、古典的なやり方だ。『祥鳳』の戦闘機隊で、敵編隊を襲撃し、戦力を削ぐ。力と力、技と技。

「戦闘機隊、全機上げろ。発艦始め！」

清水のよく通る声をもってしても、発動機の轟音が鳴り響く発艦指揮所に、指示は届かない。間を取り持つ妖精が手振りで発艦を伝え、祥鳳がその弓を唸らせる。カタパルトに設置された零戦が、急速な加

速を得て、甲板から飛び出した。

全二十四機の発艦が続く。カタパルトを使用しているが、そもそも一基しか設けられておらず、全機の発艦には十分近くがかかる。そこから高度を稼ぐのに、さらに十数分。

その間、第二波に向かうのはパラオ防空隊の機体だ。ミサイルをほとんど撃ち切ってはいるが、機関砲で応戦するつもりはなかった。

——— 少しでも持たせてくれ。

液晶パッドの画面、敵編隊へと向かっていく現代戦闘機の輝点を見つめるのを止めて、清水は艦橋に戻る。発艦指示を終えた祥鳳が戻り、丁度精神同調に入るタイミングだった。

「ブレイン・ハンドシェイク」

機関の上げる調べがわずかに高鳴った気がした。『祥鳳』の指揮権は、再び彼女に託されたわけだ。

全機の発艦が完了した零戦が、編隊を組んで高度を稼ぎにかかる。パラオ防空戦、その第二ラウンドが始まろうとしていた。

*

「来るなら来やがれ！ 相手してやる！」

前方に迫りつつある敵編隊を睨んで、菅野は意気込んだ。第一波六十機全機を撃墜した第一二航空戦闘団のうち、菅野機と僚機の岩本機だけが、AAM-5を残している。そのため、迫りつつある敵編隊第二波正面に位置取り、注意を引き付ける役を引き受けたのだ。

残りの機体は、それぞれに分かれて、雲間に身を隠している。菅野たちが最後の空対空ミサイルを撃ち切り次第、突入する手はずだ。

——— 距離十分！

外すわけもない距離で、菅野は残りのミサイルを全て放つ。岩本機も同じくだ。最後の矢を使い切ると、二機はエンジンを吹かして上昇する。

直後、ミサイルが敵機を捉えた。しかし、撃破したのは六十数機の第二波のうち四機に過ぎない。残りの機体は、無傷のままパラオへと迫る。残り距離は百キロを切ろうとしている。

次の瞬間、上空から音速の矢が飛び出し、敵編隊を貫いた。二機が

火を噴き、フラフラと高度を落とす。第一二航空戦闘団の機関砲による攻撃が始まったのだ。

先陣を切ったのはF-4だった。二機ずつ三隊に分かれた彼らは、菅野機によつて前方に注がれていた敵編隊の隙を突き、上方の雲間から襲いかかったのだ。

ジェット機の射撃タイミングは一瞬だ。まして、上空からの急降下攻撃ともなれば、尚更。その瞬間をいかに逃さないかが腕の見せ所だ。

F-4に続くのは、T-4の改造機だ。こちらは奇襲とはいかず、敵編隊から迎え撃つような火箭が伸びてくる。それをものともせず、T-4は敵編隊下方へと抜けた。しかしながら、撃墜はない。

『隊長、行きましようぜ』

合流した赤松が急かすように言った。まとまった四機のF-15も、急降下にベストな位置につけた。頃合いだ。

「っしやあ、やるぞテメエら！赤松小隊は右端の奴を狙え！アタシらはその隣を狙う！」

三つの「了解」が重なるや否や、菅野は操縦桿を倒して翼を翻す。ロールした機体は、そのまま機首を敵編隊に向けて、真つ逆さまに降下し始めた。

対爆撃機の基本戦術、真上からの急降下だ。本来現代戦闘機がやるような戦い方ではないが。

菅野機たちの動きに気付いたのだろう。敵編隊から、機銃が飛んでくる。曳光弾のシャワーが、四機のF-15を包み込んだ。

——っ!!

思わず仰け反りそうになるのを、ぐっところえる。曳光弾の量が尋常ではない。これまで深海棲艦の爆撃機や攻撃機が装備しているのは、後方に一挺か二挺の機銃のみだった。それが今回は、明らかにそれどころではない数の機銃弾が飛び交っている。まるで機体そのものが、無数の機銃で覆われているかのようだ。

そしてもう一つ、菅野は気づいたことがあった。

敵機の形状が、既存のそれと大きく違う。

最初に接触したスクランブルのF-4から、情報だけはあった。しかしこれは、あまりにも形が違い過ぎる。深海棲艦艦載機独特の、炎を引きずるようなマークがなければわからない。

風船のように膨らんだ機体は、ほとんど球体だ。その横に、まるで悪魔のように羽が生えている。機銃は、その球形の機体の各所から、菅野たちへと伸びてきていた。

そしてなにより、大きさだ。既存の三機種の子機はあろうかという大きさをしている。

——こいつは・・・艦上機じゃねえな。

こんな機体を、航空母艦の甲板で扱うことはできない。おそらくは陸上機。

深海棲艦も、進化するということか。

だが。

「その程度じゃ、アタシは落とせないぜ・・・っ！」

機銃の動きは、完全にF-15に追いつけていない。弾量は凄いが、その照準は明らかに、F-15の後方へと流れて行ってしまうている。当たるはずがない。

射撃タイミングは一瞬。その瞬間を、菅野の目は逃さなかった。

——今！

トリガーを一瞬だけ弾く。バルカン砲の連射音が響いたころには、菅野機は敵編隊を抜けていた。そのまま降下を続け、頃合いを見て操縦桿を引く。部下たちはしっかりとついて来ていた。

そこで初めて、自らの上げた戦果を確認した。翼をもがれた球形の悪魔が、不安定に機体を揺らして墜落していく。赤松たちが狙った機も同じだ。"イーグル"隊は、二機を撃墜したのだった。

だが、これで四機。菅野と岩本がミサイルで落とした機体を合わせても八機。敵機はまだ五十機以上残っている。

『防空指揮所より各機。帰投し、燃弾補給せよ。以後はパラオ泊地艦隊航空隊が受け持つ』

見ると、敵編隊上空、陽光を反射する明灰白色の腹が見えた。パラオ泊地艦隊の"祥鳳"に所属する零戦隊だ。菅野たちが迎撃をする

うちに、高度を稼ぐことができたらしい。

—— 厳しいな。

敵第二波の侵入高度は、高度六千と第一波よりも若干低い。しかしそれよりも高度を取ろうと思ったら、レシプロ機の零戦には厳しいはずだ。

今は任せるしかないのか。ミサイルは撃ち切ったが、機銃はまだある。そんな菅野の思惑を知ってか知らずか、防空指揮所の源田が釘を刺す。

『燃弾補給は “イーグル” 隊を優先します。 “イーグル” 隊は速やかに帰投すること』

完全に思考を読まれていたことに軽く舌打ちをして、菅野は翼を翻した。何だかんだと、あの大佐とは付き合いは長いのだ。

背後で新たな戦闘が始まる気配がした。今は彼らに任せ、第三次以降の襲撃に備えようと、菅野は気持ちを切り替えた。

ソノ手八届カズ

何とか高度を稼いだ零戦隊。まばらな雲間から眼下に見える敵編隊を見遣って、『祥鳳』戦闘機隊長妖精は表情を険しくした。

敵編隊は、まだ五十機以上を残している。対するこちらは、二十四機。単純計算で、一機につき二機の敵機を落とさなければならぬことになる。

しかも相手は、初見参の大型機と来た。こちらは一機を狩るのに、最低でも二機を割かねばなるまい。隊長は四機小隊による攻撃を命じている。

パラオまでの距離二十キロを切ると、対空戦闘は最終段階に移る。帛式防空陣形を敷くパラオ泊地艦隊からの対空射撃と、数少ないパラオ防空隊の地对空ミサイル攻撃だ。どんなに頑張っても、それで落とせるのは二十機と見積もっている。

最低でも半数。それが、零戦隊に求められるノルマだ。

頃合い良しと見た隊長妖精が、手信号とバンクで攻撃開始を指示する。四機ずつでまとまった零戦が、「金星」発動機の猛々しいリズムを響かせて、翼を翻した。一本槍となった機体が、敵爆撃機に向けて突撃する。

敵編隊に、直掩機と思しき戦闘機の影はない。全機が大型航空機——陸上機と思われる機体で、トラックから飛んできたであろう奴らに、追隨できる航続距離を持った護衛戦闘機はいなかったようだ。

戦闘機の妨害がなかっただけ、ありがたいたと思うべきであろうか。敵編隊から伸びる曳光弾の光には目もくれず、零戦隊は急降下を続ける。もつとも、機体構造の限界があるので、その降下はある程度制限されたものとならざるを得ない。

発揮しうる最高速度で、零戦隊は敵編隊へ迫る。隊長機が狙いをつけたのは、編隊の先頭集団に位置する一機だ。その機体の動きに合わせて、周囲の機体が動いていることから、指揮官機であると判断したので。

敵機からも、負けじと機銃が飛んでくる。まるでこちらを殴りつけ

るかのような機銃弾の嵐を、零戦隊は突き進む。時折主翼や機体をかすめた敵弾が、嫌な音を上げた。

隊長妖精は、ただ真つ直ぐに、照準器いつぱいに映る敵機を見つめる。翼端どころか、その丸っこい機体が照準器を埋め尽くすまで、引き付けた。

スロットルレバーと一体になった機銃の発射把柄を握る。途端、両翼に備えられた二〇ミリ機銃と一三ミリ機銃が同時に火を噴き、火箭を伸ばす。その効果を確かめる前に、隊長機は敵機の下へすり抜けていた。発射時間はわずかに三、四連射分程度だ。後続の二番機以降も、同じような射撃を繰り返す。

高度を五百メートルほど落としたところで、機体の引き起こしをかけ、戦果を確かめた。狙いをつけた敵機は、黒煙を噴き上げて、編隊から落伍しかかっている。やがて、搭載していた爆弾に引火したのか、盛大に爆ぜて無数の破片となった。周囲の機体も爆風に煽られるが、さすがに巻き込まれて落ちる機体はいなかった。

他の小隊も攻撃を終えている。確認したところ、撃墜は四機、損傷を与えたのが二機といったところか。

やはり、狙った機体全機が撃墜とはいかないようだ。

下方からの再攻撃を検討したが、隊長妖精はかぶりを振った。下方からの攻撃では、こちらの機銃の威力が下がる。それに零戦では、その上昇能力に限界があり、撃墜される確率も高くなる。

再度高度を稼ぐ。その旨を僚機に伝えた時だった。

上空から降り注ぐ人工的なきらめきを、隊長妖精は捉えた。瞬間の判断で僚機に危機を伝え、本能的に翼を翻す。その翼端をかすめて、青白い曳光弾が通り抜けた。冷や汗ものだ。

現れたのは敵戦闘機で間違いはない。しかしながら、上空から確認した時も、こうして一航過を終えた時も、敵戦闘機の姿は確認できなかった。それが今になって現れるとは。

急旋回により回る世界の中、敵機が降ってきた方向を——敵編隊の方を凝視する。

信じられない光景が広がっていた。

敵編隊を構成する一部の機体。その下部、本来爆弾槽が設けられているであろう位置から、なんと三角形の物体が切り離されたのだ。それは一瞬重力に従って落下した後、推力を得て加速し、零戦隊に襲いかかってくる。

戦闘機母機とでも言おうか。敵機は爆弾の代わりに、戦闘機を運ぶことで、護衛戦闘機をここまで運んできたのだ。

といっても、数はそこまで多くない。精々が十数機といったところか。それでも、この敵機を排除するために、零戦隊は戦力の半数以上を割かれざるを得ない。

隊長妖精は歯噛みする。すでにあちこちで格闘戦が始まっており、火箭が入り乱れている。優勢なのは零戦隊のようだが、そうこうしているうちに爆撃機の方はどんどんパラオに迫っているのだ。

照準器にとらえた敵機に向けて、苛立ち紛れに機銃を浴びせ、撃墜する。僚機の無事を確かめると、急ぎ上昇を指示する。各所で相手取った敵戦闘機を撃墜した小隊も、それぞれで上昇に移っていた。

高度を再び稼ぐのに数分。その時間が、実にジリジリとしたものを感じられた。

やがて十分に高度を稼ぎ、眼下の敵編隊を望む。残弾を確認。まだ半分以上が残っており、十分すぎるほどだ。編隊左翼の一機に狙いをつけ、降下に入った。

再び敵編隊から火箭が伸びてくる。光の雨は重力に逆らって零戦を包み込み、眼前に迫る。その勢いは、先ほどから全く衰えた様子はない。それはそうだ。まだ四機しか落としていないのだから。

それでも、隊長機は怯むことなく、敵編隊に肉薄する。先ほどの射撃も、時機はピッタリだったようだ。ならば同じタイミングで撃てばいい。

普段相手にしている敵艦上機よりも大きい分、照準器からはみ出るほどに接近しなければ、的確な射撃は望めない。

隊長機はタイミングを計り続ける。

やがて、一瞬だけ発射把柄を握る。両翼から四本の火箭が伸び、本日二機目の獲物の胴体を的確に貫いた。

*

見張り員妖精が知らせる空戦の様子を、摩耶はただジツと聞いていた。零戦隊の奮闘はすでに肉眼でも見える位置まで移動してきており、時たまチラリとそちらを窺う。

帛式防空陣形の最前にいる「摩耶」は、すでに対空戦闘の準備を整えていた。四基の二〇・三サンチ連装砲には対空砲弾の零式通常弾が装填され、各高角砲も高射装置からの指示で高空を睨んでいる。艦体各所にハリネズミのように設置された機銃群も同じだ。工廠部が制作した改造機銃座は、その性能をいかになく發揮しようと構えている。

——この防空陣形も、まだ完全じゃないな。

兵装的な意味ではない。がらんとした艦橋の雰囲気を感じて、摩耶は思う。本来ここには、もう一人いるはずだ。いるべきだ。それが、帛式防空陣形を最大限に機能させるために必要なことだ。それができていないのは、摩耶の勝手によるところが大きいことも、自覚している。

清水は、「摩耶」の代わりに「祥鳳」に乗艦し、防空戦の指揮を執っている。

余計な思考に陥っていることに気づいて、摩耶は慌てて頭を振る。今は目の前の戦闘に集中しなくては。

『敵編隊、距離三〇〇。二〇〇で発砲する』

丁度その時、清水の声がした。「祥鳳」から、射撃開始のタイミンを指示してくる。転針等の指示はまだないが、おそらく面舵を切ってくる。艦の側面を敵編隊に向けることで、全対空火器を使用できるようにするためだ。

——バベルダオブ島まで、後四万、か。

防空戦は、いよいよ大詰めだ。

電探に映る敵編隊は、距離二万五千メートルを切った。そろそろ始まる。口火を切るのは、「大和」搭載の三式弾、そして「摩耶」搭載の零式弾になるはずだ。

零戦隊が、さらに敵編隊に襲いかかる。一本槍でまとまった銀翼が

一航過をすると、被弾した敵機が錐揉みとなり、あるいは黒煙を噴き上げながら落ちていく。逆に、敵爆撃機の機銃に絡め取られたのか、主翼を真つ二つにして燃え盛る零戦もいる。戦況はどちらに有利とも言い難い。

それでも、零戦隊の攻撃は、敵編隊の進行方向を制御するのに十分だった。事前に策定した進行ルートをも、敵編隊は真つ直ぐに進んでいく。

『全艦逐次回頭、針路一七八』

来た。清水からの転針指示だ。

「面舵、針路一七八」

先頭に立つ「摩耶」が、真つ先に回頭を始める。それに続くようにして、パラオ泊地艦隊全艦の回頭が終わった時、ついに敵編隊が、対空射撃の範囲に入った。

『「大和」、撃ち方始め。続いて「摩耶」、頃合いを見て撃ち方を始めろ』

冷静な清水の声。数秒後、艦隊の後方から百雷にも勝る轟音が聞こえてきた。「大和」の主砲が、三式弾による射撃を開始した音だ。九門の四六センチ砲が一斉に咆哮を上げ、一トン半の超巨大な砲弾を音速の二倍という信じられない速さで高空へ投げつける。

——頃合いを見て、か。

清水の声は静かで落ち着いたものだ。彼が求めているものは、皆まと言わずとも伝わる。この帛式防空陣形を考案したのは、摩耶と清水なのだから。

二十秒を過ぎたあたりで、「大和」が放った三式弾が炸裂した。砲弾に込められていた無数の子弹が漏斗状に広がり、敵編隊を包み込む。三式弾の炸裂をもちに受けた敵機は、一時に十機が火を噴き、そのうち六機が墜落していった。

炸裂タイミングの難しさからその効果を疑う者もいる三式弾であるが、その大きな理由は、射撃タイミングを悟った敵機が散開、あるいは予想進路とは違う進路を選んだことによるものが大きい。三式弾自体の威力は十分だ。

炸裂タイミングを計り辛いのであれば。炸裂する地点に敵機を誘い込めばいい。戦闘機を有効に使えば、それが可能となる。

たった今の「大和」の射撃は、それをもの見事に証明したのだ。やれる。戦いようはある。摩耶は確信した。戦闘機と防空陣形を上手く組み合わせた帛式防空陣形であれば、敵機に対抗できる。

そして、摩耶の番が来た。

再装填を終えた「大和」の主砲が咆哮した時点で、敵編隊の距離は一万メートルに迫ろうとした。「大和」の砲声が治まるころ、摩耶は声を張る。

「撃ち方、始め！」

八門の二〇・三センチ砲が、一斉に咆哮と火炎を上げた。戦艦には及ばないものの、その衝撃と反動は大きい。対空兵装等の増設に合わせてバルジを追加していた「摩耶」の艦体も、仰け反るように横方向へ揺れた。艦上を走り抜けた衝撃波が艦橋の窓を震わせる。

「大和」に遅れて撃ち出された「摩耶」の零式弾は、「大和」の三式弾が炸裂してから数秒後に信管を作動させた。三式弾が敵の鼻っ面で炸裂するのと違い、零式弾の信管は敵編隊下部で炸裂するよう、タイマーをセットしている。真下から突き上げるように、無数の断片が敵編隊を襲ったはずだ。

「高角砲、撃ち方始め！」

それに続くようにして、高角砲群が砲炎をきらめかせる。「摩耶」左舷に三基が据えられた一二・七センチ連装高角砲が、主砲よりも遙かに早い装填速度で対空砲弾を撃ち出す。敵編隊が、真っ黒い花で包まれた。

しかし、やはり大型機ゆえか、そう簡単には落ちない。やはり、三式弾の弾並みの貫通能力と威力がなければ、一撃で落とすのは難しいのだろうか。

さらに。現高度を維持するのは危険と判断したか、敵編隊は上昇を始める。高度五千から、やがて六千へ。

——まずいぞ。

「摩耶」搭載の——否、パラオ泊地艦隊が保有する高角砲の主力

となつてゐる一二・七センチ高角砲では、七千を超えるような高度への正確な対空射撃は望めない。高射装置の性能も追いつかない。艦上機を相手取るならそれでも十分だと思つていたが、今はそれが仇となる。一万付近の高度に届くのは、長一〇センチ高角砲ぐらいだ。

「摩耶」の頭をよぎつたのは、榊原から説明だけ受けていた、自らの大規模改装試案。そこには、高角砲を長一〇センチ連装高角砲に換装する旨が書かれていた。

今更悔やんでも仕方がない。木曾と同時期に提示されながら、自分はその答えを保留にし続けていたのだから。

仰角をさらに増して、各艦の対空砲火が撃ちまくる。しかしながら、高度六千を超えたところで一機を撃墜して以来、敵機に墜落する様子はない。

遥かな高空へ、摩耶は手を伸ばす。その手が何かを掴むことはない。と知りながらも。

『各艦、撃ち方止め。以後は、パラオ防空隊の地対空ミサイルが対処する』

「祥鳳」から入った通信で、摩耶は射撃を止める。三十秒ほどがして、ロマン・トメトウチエル空港に設けられた防空陣地からミサイルが飛来し、敵機を撃墜する。その様子を眺めながらも、摩耶の心中は晴れやかとは言い難かった。

マリアナ強襲

「パラオ防空戦」の公称が定められた戦闘から、一週間が経とうとしていた。

最終的に、空襲は二度の攻撃のみに留まっていた。パラオ諸島に被害はない。

付近に深海棲艦の機動部隊が発見されなかったこと、敵機が大型だったこと、その襲来方向から、トラック諸島に展開する陸上機による空襲であったと断定された。攻撃が二度に留まったのは、これが初実戦であり、様子見の出撃であったからと考えられる。

『IF作戦』時、角田大佐指揮下の遊撃艦隊が建設途中の飛行場を砲撃していたから、今回の空襲をしのげたと、榊原は考えていた。砲弾の雨霰によって飛行場を破壊したことにより、建設の完了は大きく遅れたに違いない。それまでの建設ペースを考えれば、少なくとも一か月の時間は稼げたはずだ。

もしも、その一か月がなかったら。考えるだけで背筋が冷たくなる。

第一二航空戦闘団の増強前だったパラオは、深海棲艦陸上機による攻撃を防ぐことができず、大きな被害を被っていた可能性が高い。

——まさに紙一重だったわけだ。

読み終えた戦闘詳報を閉じて、榊原は深い息を吐いた。

「・・・ほんとに危なかったわね」

そう言つて、給湯室から戻った曙が、湯呑みを差し出してくれた。暖かな湯気を上げる湯呑みから、優しいお茶の香りが漂う。一息入りたい時は、やはりこれに限る。

「ありがとう」

一言お礼を言い、彼女も席に着いたのを確認して、榊原は湯呑みに口づけた。いつもより少し薄めのお茶は、心を落ち着けるには丁度いい。何も言わず、むしろ言葉はきつめであるが、無言の細かい気遣いがある艦娘なのだ。

二人してのんびりと執務終わりの時間を過ごし、しばらくした頃。

昼下がりの執務室に、軽快なノックの音が響いた。残った湯呑みの身を惜しく思いながらも、榊原は入室を許可する。

「どうぞ」

「失礼するよ」

明るい声色で執務室の扉を開いたのは、トレードマークの白衣を身にまとった夏川だった。いつぞやのパーティーの時が嘘のように、今日も今日とてその髪の毛はぼさぼさである。

入室した夏川は、曙がお盆に乗せて片付けていた湯呑みを見つけて、眉尻を下げた。

「もしかして、休憩中だったかな？」

「いえ、気になさらないでください」

「ごめんねえ。申し訳なさそうに言いながら、夏川は持っていた書類を差し出した。それほど厚いものではない。以前に提出してもらった時と同じくらいだ。表紙には端的な活字が打たれている。

『「霞」大規模改装試案』

練度十分と判断された霞について、大規模な改装を施す計画の試案が、まとまつたらしい。

「元々、呉で受けてた改装が、対空重視だったからね。高射装置も増設済みで、新しく乗つける必要もないし、「木曾」の時よりも短くて済むと思う」

夏川は簡単に概要を説明する。

改修した機銃の増設を主眼に置き、さらに対空兵装の増備を図る。可能であれば、一二・七センチ高角砲や長一〇センチ高角砲への換装も試みるという。

「いつも通り、確認をよろしく。それと、他の駆逐艦の娘の改装についても、基本的に「霞」と同じ方向性にするつもり」

夏川たち工廠部にも、帛式防空陣形については説明がされている。そもそもこの陣形の発案にあたって、清水や摩耶が工廠部の意見をもらいに行っていた。

対空兵装の増備を主眼に置いているのは、この帛式防空陣形に対応したところが大きい。

「というわけで、本題は終わりだね。ここからはなんていうか・・・雑談だと思って聞いて欲しい」

胸ポケットに収めた眼鏡を気かけながら、夏川が切り出す。彼女に珍しいものの言い方だ。雑談と言われながらも、榊原も曙も、どこか緊張した心持ちで聞かざるを得なかった。

「・・・話は二つ。まず、摩耶のこと」

摩耶の大規模改装の話が出たのは、すでに二か月も前のことだ。同時期に試案が提出された木曾については、改装とそれに伴う完熟訓練もすでに終えている。

摩耶の改装をどうするか否か。艦娘本人がその答えを出せずにいることは、おそらく夏川も承知しているのだろう。それでもなお、工廠部の責任者として、懸念を口にする。

「工廠部の方でも、いつ結論を出されてもいいように、準備は終わらせているよ。摩耶がやる気を出してくれば、その次の日にでも改装作業は始められる。でも、次回の作戦開始時期を考えると、そろそろ改装時期としてはギリギリになると思う」

摩耶の改装については、文字通り大規模なものになると説明を受けている。その期間は最短でも二週間。そこから、精神同調や艦体の扱いに慣れることを考えれば、さらに一か月は見積もるべきか。

予定されるトラック攻略戦の第二段階は、二か月後か遅くとも三か月後には始まる。それを考えれば、摩耶の改装時期は今がタイミングとしてギリギリだ。

この件に関して、榊原は摩耶本人と清水に任せている。とはいえ、そろそろ答えの期限が迫っているということか。

「二つ目は、曙のこと」

そのまま続いた夏川の話題は、榊原の隣に控える曙のものとなった。内容は大体想像がつく。

「彼女の練度は十分だよ。艤装との精神同調率も高く、安定してる。この泊地じゃダントツだね。本来なら、十分に大規模改装が可能はず」

でも、できない。『曙』の艦体が、そして曙自身が大規模改装に伴

う精神同調の変化を受け入れない。

「色々試したけど、やっぱりだめ。できるのは、機銃の増設とか魚雷発射管の換装ぐらい」

『五車星作戦』の後、艦体整備のために入渠した『曙』は、そこで魚雷発射管を酸素魚雷対応のものに換装している。横須賀のデータをもたうけ、改修を施したのだ。この他、機銃についても増設がされているが、主砲の換装といった大規模な改装は依然として不可能だとう。

「原因も探ってみたけど、正直お手上げだね。どうしてか、わからない」

「・・・そう」

眩く曙の言葉には、落胆の色は見えない。どこか達観したような、わかっていたような、短い一言だった。

「これからも、何かの折に調査はするつもりだけど。さっきも言った通り、トラック攻略作戦のことを考えると、それまでに改装を行うことは無理だつて、はつきり言つとく」

大規模改装を施す方法がわかったところで、そこから試案を作成し、実際に着工するだけで一か月以上の大仕事なのだ。間近に迫ったトラック攻略戦に間に合わせることはできない。

話は終わり。夏川は白衣を翻し、執務室を後にした。残された二人の間に、静寂が流れる。

「・・・何やってんの。さっさと霞に確認取つてきなさいよ、夕御飯前に」

促されて、榊原は先ほど手渡された書類を見る。

「・・・いや、夕御飯の後にしよう。その方が、ゆっくり話もできる。それより、お茶、おかわりもらえるかな」

「・・・はいはい」

そう言つて曙は、再び給湯室に入つていった。彼女がお茶を淹れ直している間に、榊原は試案の内容を確認する。

◇ やがて出てきた二杯目のお茶は、先よりも濃い目で、苦かった。

事態を一変させる報告は、パラオ空襲以上の衝撃を伴って、榊原のもとに届けられた。

その日の昼食は、入電した緊急電によって早急に切り上げられ、パラオ泊地全員は食堂から作戦室へと強制的に送られた。榊原が執務室やら書庫やらから持ち出した資料と共に作戦室へ入った時、すでに全ての準備が整っていた。

いつでも、始めて。目線で促す曙に頷き、榊原は早速状況の説明を始める。

「食堂で言った通り、マリアナが襲撃を受けた」

端的に言うや、手に持っていた紙片を海図台の上に置く。通信員に渡されたメモだ。マリアナの警備艦隊から送られてきたという電文は、『我、空襲を受く。一一〇五』という短いものだ。その後は次々に続報が入っているらしく、通信員はフル稼働で処理に当たっていた。「電文は特定の相手に向けて送られたものではなく、可及的速やかに救援を求めるものだ。事態はそれほどに切迫しているということだろう」

そこでもう一枚、榊原は紙を取り出す。こちらはメモのような紙片ではないが、正式な書類でもない。書かれている文面だけが、妙に定型的だ。

「先ほど、横須賀の秋山中将に連絡を取り、正式な命令ではないが、早急にマリアナ救援に向かえとの指示をもらった」

マリアナは、パラオ、ルソンに並ぶ外地での重要拠点だ。大規模な艦隊泊地には向いていないものの、本土とパラオを結ぶ航路の拠点となっており、またルソンを経由する南方航路の砦の役目も果たしている。ここと小笠原に展開する偵察部隊が、常に本土と重要航路に太平洋側から接近する深海棲艦を監視しているのだ。

マリアナを抑えているからこそ、日本海軍は太平洋解放のための大規模作戦を実施できる。万が一そこを失うようなことがあつてはならない。

「深海棲艦の意図がどこにあるかは、この際無視する。それよりも、マリアナ諸島のグアム警備隊救援を優先しよう」

「マリアナ近海に存在する艦隊だが、」

榊原から受け継ぐように、清水が口を開く。その手に持った駒を、海図台に広げられたマリアナ沖の地図に、一つずつ置いて行った。青は日本海軍、赤は深海棲艦だ。

「現在確認できているのは、グアム警備隊と小笠原近海から急行中の演習艦隊、これが日本海軍の戦力すべてだ。一方の深海棲艦は、機動部隊が一つ」

「演習艦隊？」

木曾が訪ねる。大規模改装に伴って制服も変わっている彼女は、漆黒のマントを羽織ってまるで本物の海賊のようだ。眼帯で隠れていない左目が、鋭く海図を見ている。

「横須賀所属の高速打撃部隊だ。角田大佐指揮下と聞いている」

——角田大佐が、マリアナ沖に。

『IF作戦』時に顔を合わせた女性将校を思い出す。彼女が率いているということとは、*“比叡”*以下の艦隊であろうか。

「警備艦隊には、どの程度の戦力が？」

「防空と対潜特化の軽空母が一隻。後は重巡一隻に水雷戦隊。機動部隊と真正面からやり合うには分が悪い」

警備艦隊の戦力が枯渇するのは時間の問題だ。さらにマリアナの基地航空隊は、ルソンと同じように、どちらかといえば周辺海域の哨戒を目的としており、戦闘機の配備数はパラオよりも少ない。対航空機で、圧倒的優位に立てるとは言い難い。

「秋山中将は、塚原大佐指揮下の機動部隊をすぐに出すと言っていた。それまで何としてでも、マリアナを守らなければならない」

全体に向けて、榊原は言った。その場に居合わせた艦娘たちは、無言のうちに頷く。やることは決まった。

「出撃に際して、まずは早急な警備艦隊への増援を優先する。そのため、対空能力と速力に優れた帛式防空陣形第一陣を、最大戦速で急行させる。第二陣は、それを追いかける」

異論は出ない。

「第一陣は、さっそく出撃準備にかかってくれ。指揮は俺が執る」

「ま、待ってくれ、提督！」

榊原の言葉を遮ったのは、意外にも摩耶であった。榊原が見つめたその瞳が、ほんの一瞬揺らぐ。それでも、彼女の内なる芯の強さを映して黒目が淡く光り、今度は真っ直ぐに、清水を見た。

「あたしに、やらせてくれ」

その場の全員が、目を見開いた。

「あたしに、第一陣の旗艦をやらせてくれ」

海ヲ走ル救援

埠頭を離れた内火艇が沖に停泊する艦に近づくとつれて、心臓の鼓動は明らかに早く、大きなものとなった。前から吹き付けてくる風が、凍えるように寒く感じられる。制服の内側に、すでに汗をかいていることも、摩耶は気づいていた。

大きく深呼吸をする。内火艇を操る妖精が、不安げに摩耶を見ていた。そんな彼に、摩耶は笑って見せた。それから後ろを振り返り、そこに立つ将校を呼ぶ。

「もう着くぞ。準備してくれ」

「わかった」

白の第二種軍装が随分と様になっている。スラリとした立ち姿は、海風に当たってさらに理知的な印象を抱かせる。

今から、彼が、*「摩耶」*に乗る。*「摩耶」*に乗って、そこで作戦の指揮を執る。

ドクン。

——鳴るな……！

再び跳ね上がった心臓を感じながらも、摩耶はそれを無視して、目の前の艦体を見つめる。*「高雄」*型重巡の象徴とも言うべきどつしりとした艦橋。その前方に二基の高角砲が増設されていることが、*「摩耶」*の特徴だ。

自らの、苦い思い出、その象徴でもある。

内火艇が、舷側に出されたラツタルに横づける。摩耶がまず飛び移り、数段を上って、後に続く清水を待った。

艇のへりにやってきた清水が、ラツタルに飛び移る手前で立ち止まり、チラリと摩耶の方を窺った。その目が問いかけようとしていることを、摩耶も知っている。だから何も言わず、ただジツと、清水がラツタルに飛び移るのを待つ。

摩耶の艦へと、乗艦する瞬間を待つ。

艇を蹴った清水は、難なくラツタルに飛び乗った。その瞬間、それまでと比べ物にならないほどの悪寒が、摩耶の背筋を走る。

——そんなに。

そんなに、嫌なのか。否、怖いのか。自分はそれほど、自らに人間が乗ることを、恐れていたのか。

一瞬すみそうになつた足を悟られまいと、摩耶はラツタルを駆け上る。何度か足を絡めそうになるのを堪えて、*「摩耶」*の甲板に出た。ハリネズミのように、至る所に施された対空兵装の数々が、彼女を迎える。

清水がついて来ていることを確認して、摩耶は艦上構造物を上り続ける。艀装が置かれている、最上部の艦橋に辿り着くまで、二人とも無口なままだつた。ただ淡々と、ラツタルを打つ足音だけが響く。

ガランとした艦橋に足を踏み入れた時、摩耶の制服も髪も、汗でぐっしよりだつた。二、三度足をもつれさせて、膝を打っている。けれども、その鈍痛すら忘れるほど、今の摩耶に余裕はなかつた。

しばらくして、清水が艦橋に入ってきた時、その緊張は最大に達する。

その姿をあえて見ないように。艦橋の天井からぶら下がっている艀装の前に立ち、目を閉じて深呼吸を一回、二回。

そんな摩耶の様子を知つてか知らずか、隣に立った清水は、こちらを窺うことも、何か口を開くこともなく、ただ正面の艦首を見つめていた。冷淡なほどのこの提督の立ち居振る舞いが、今は逆にありがたくすらある。

呼吸を整えた摩耶は、カッと目を開き、厳かに声を発した。

「摩耶、精神同調に入る」

艀装に接続し、精神同調の準備が完了した。

「・・・ブレイン・ハンドシェイク」

途端、記憶の奔流が摩耶の精神を飲み込み、押し流した。それは、*「摩耶」*の記憶。そして、摩耶の記憶。

人間と同じ体では、直に体感することはない。ふとした瞬間に頭をよぎり、あるいは夢に見るくらいで済む。

だが、艀装と接続したとき。精神同調を行い、*「摩耶」*と一つになるとき。記憶はただの過去ではなく、まるで実体験しているかのよう

に、鮮烈な感覚を伴って摩耶を襲う。

あの時の痛み。それはただの痛みだけではない。肉体の痛みと共に、心の痛みを思い出す。感じた絶望を、悲壮な叫びを思い出す。

視界が霞む。目の前の艦橋の光景に、何かが重なる。
挟れた隔壁。

割れた窓ガラス。

黒煙を噴き上げる第三砲塔。

煤汚れた床に広がる、どす黒い血の海。

その記憶は、いつもよりも鮮明なものとして、摩耶の前に広がる。けれども、追いかけてはならない。精神同調において、記憶を追いかけることはしてはいけない。

摩耶の居場所は記憶の中の過去ではなく、たった今日の前に広がる艦橋にあるのだから。

霞んだ視界が、次第に回復してくる。しかしそれとは別に、何かの液体が右目に入り、思わず目を瞬く。それが、額から滝のように流れ出ている汗であることには、少ししてから気づいた。

髪がべったりと額に張り付いている。

握りしめた拳のグローブが気持ち悪い。

背中を伝う水滴に鳥肌が立つ。

「・・・摩耶」

呼びかけられた声にハツとした。「摩耶」に乗艦して初めて、清水が言葉を発した。

こちらを覗き込む瞳に、摩耶は笑ってみせる。思えば、初めて清水の前で笑ったかもしれない。

清水は黙って摩耶を見つめ、何も言わずに前を——摩耶と同じ方向を見た。

「最大戦速で飛ばせるな」

「・・・ああ」

通常艦船に比べて燃費がいいBOBは、ことに最大戦速付近においてその効率が最もよくなる。燃料槽の小さい駆逐艦でも、パラオとマリアナの往復程度なら、最大戦速で飛ばして何ら問題ない。

それでも、マリアナ到達までは一日近くがかかる。急げるだけ、急がなければ。

艦首甲板の揚錨機が作動し、「摩耶」を泊地に留めていた錨が巻き上げられていく。錨鎖がガコガコと海底から引き揚げられ、やがて錨本体が海面から姿を現した。

清水がマイクを取る。呼び出し相手は、第二陣の旗艦「大和」、そこに乗艦する榊原だ。

「第一陣各艦、出撃準備完了。マリアナに向けて、先行します」

『了解。こちらもすぐに追いつく。貴艦らの健闘を祈る』

通信が終わると同時に、「摩耶」の錨が定位置に固定された。始動した機関が主機と接続され、スクリューが回転を始める。微速から半速、やがて原速。泊地を離れたところで、一気に速力を上げるつもりだ。

第一陣参加の駆逐艦が続行する。今回は、これに加えて第二陣の「木曾」が加わっていた。「摩耶」を先頭に、「曙」、「霞」、「長波」、「卯月」、「木曾」の順で単縦陣を組む。

「艦隊速力を三四ノットとする。針路〇六〇」

パラオ泊地艦隊が動き出した。マリアナ諸島で待つ味方艦隊を救援するため。襲いかかる深海棲艦を叩くため。

——それだけじゃない。

まだ、時折ズキリと痛みが襲う。

これは摩耶自身の戦いでもある。摩耶自身が乗り越えなければならぬことでもある。

それでも不思議と、辛さはない。清水とならば、やれる気がする。なぜだかはわからない。

疾走する風の中を、六隻の高速艦が行く。いつしか汗は乾いていた。

◇

「どうかな、比叡ちゃん」

闇夜が訪れたマリアナ沖。双眼鏡を覗き込んだ角田は、隣に立つ比叡に問いかけた。角田の双眼鏡では何も見えなかったため、「比叡」

搭載の電探の結果を聞きたかったのだ。

「・・・感、ありました。まだ解像度的にギリギリですけど」

比叡が声を潜めて報告した。

角田座上の「比叡」以下、横須賀所属の水上部隊は、小笠原沖で大規模な艦隊演習を行っていた。今回の目的は、新兵装の慣熟訓練、特に電探を用いた間接観測射撃を中心としている。

——まさか、こんな形で、実戦投入することになるなんてね。

角田は暗闇の中で苦笑いを浮かべるしかなかった。

マリアナ急襲の報を受けた角田は真つ先に転進し、戦場へと急行した。結果、第二次空襲にギリギリ間に合い、襲来した敵編隊迎撃に参加している。何とか一日目は、凌ぎ切ることができたという感じだ。

状況がさらにかき回されたのは、索敵隊が夕方に発見した敵艦隊の影によるものだ。機動部隊とは別に確認されたのは、戦艦二、重巡二を伴った火力部隊であった。夜間のうちにマリアナ諸島に接近し、艦砲射撃をもって飛行場を破壊せんとするものと判断された。

これを受けて、角田は麾下の艦隊での邀撃を決意した。

参加するのは、角田直率の砲戦部隊、「比叡」、「金剛」、「高雄

」、「愛宕」。そして、橋本慎一郎中佐指揮の「川内」以下「吹雪」

型駆逐艦で構成された水雷戦隊。

「川内」率いる水雷戦隊は、普段吹石少佐——吹雪が指揮しているが、今回の演習に際しては、橋本中佐に指揮権が渡されていた。

現在角田たちは、マリアナ東方で敵艦隊の来襲に備えている。

「方位〇八七、距離二〇〇」

「逆探は？」

「感あります。間違いなく見つかっていますね」

「まあ、そうだよねえ」

深海棲艦の戦艦にとつて、レーダーは基本装備だ。

「無線封止解除。全艦合戦準備」

角田の指示は、比叡によってすぐに各艦に伝えられた。

「っ！敵艦隊見ゆー！」

見張り妖精が、接近する敵艦隊を発見した。この時点での距離は一

万八千メートル。

「二二〇より砲撃開始。電探と測距儀を併用するよ」
「了解」

単縦陣で接近する敵艦隊に対して、角田たちは丁字を描くことに成功している。一万二千メートルの距離は、戦艦同士の夜間砲戦距離としてはまずまずといったところだろうか。

「二救艦(第二救援艦隊。『川内』以下の水雷戦隊の呼称)は突撃。『高雄』、『愛宕』は二救艦の援護。敵戦艦は『比叡』と『金剛』で迎え撃つ」

角田の指示に呼応して、二隻の重巡洋艦と水雷戦隊が舵を切る。三四ノットの最高速度を発揮する韋駄天たちが、敵艦隊へ挑むべく、その艦首に真っ白い波を立てて突き進んでいった。

「敵戦艦面舵。本艦と同航するようです」

「やる気だねえ。本艦目標一番艦、『金剛』目標二番艦」

『比叡』の三三号対水上電探と測距儀が旋回し、目標となる敵一番艦を補足する。距離はすでに一万三千メートル。八の字を描いて同航する敵戦艦部隊が一万二千メートルの距離を割るのはもう間もなくだ。

だが、その前に敵艦隊が動いた。

海上の闇夜を消し去るようなまくるめく閃光が生じた。思わず目を細めてしまうほどの光量を発したのは、敵戦艦一番艦であった。先に撃ち始めたのは、深海棲艦の方であった。

「司令ー！」

「まだまだー！もう少し待つー！」

比叡の問いかけに角田が答えて数秒、『比叡』の上空に淡い光が現れた。敵一番艦が放ったのは、こちらを照らし出すための星弾であったらしかった。

次からは、本射が来る。

角田の予想通り、すぐに一番艦の本射が始まった。三連装砲塔の中砲が鎌首をもたげ、真っ赤な火炎を吐き出す。その光が、艦上構造物をくつきりと映し出す。

「観測機に吊光弾投下を打電」

すでに飛び立っていた零観に電文が飛び、すぐに吊光弾が投下された。マグネシウムの発する淡い光が、敵艦隊を闇夜に浮かび上がらせる。

「見張りより、敵艦はル級と認む」

「種別は？」

「・・・改flagshipと思われませう」

「っ!!」

第一射弾着の衝撃を感じながら、角田は声にならない呻き声を上げた。

ル級改flagship。flagshipすらも凌駕する性能を持つと言われる戦艦だ。

しかしながら、本来はハワイ沖に展開する深海棲艦であつたはずだ。それがなぜ、マリアナを襲撃する。

——考えるのは後。

いよいよ、敵艦との距離が一万二千メートルを切ろうとしているのだ。

「撃ち方用意」

“比叡”の艦上に、主砲発射を告げるブザーが鳴る。それが治まつた時、ついに彼我の距離は一万二千メートルになった。

「撃ち方始め！」

「てーっ！」

敵一番艦の第二射弾着の衝撃をもともせず、“比叡”の主砲が咆哮する。四基が据えられた四一サンチ連装砲。その右砲から、弾着修正用の砲撃が放たれた。その反動に、艦が震える。

ビリビリと轟音に揉みしだかれる艦橋に足を踏ん張り、角田は第一射の成果を待ち続けた。

マリアナ沖ノ砲火

吊光弾の白い光が淡く照らす海面に、きらめく光の塔が林立した。白光を受けてキラキラと反射する水柱が四本、敵戦艦の手前に現出し、その姿を覆い隠す。まるで一撃のうちに敵戦艦を撃沈したかのような錯覚に捕らわれるが、実際には命中弾が生じていないことは、すぐに観測機から知らされた。

「全弾近。諸元修正」

比叡が淡々とした声で射撃指揮を執り続ける。今ので第二射。命中弾はまだない。

「どうしたのかな、比叡ちゃん？そろそろ当ててくれないと」

「もう、わかってますから。少し黙っててください、修正の邪魔です」
おどけて言った角田に、比叡は頬を膨らまして反論する。そんな彼女の様子に薄く笑って、角田は再び敵戦艦を見遣った。

丁度その時、敵一番艦が新たな射弾を放った。吊光弾の下で真っ赤な炎が生まれ、高速の火矢が飛び出す。これが四射目だ。

距離一万二千メートルの夜戦とはいえ、そろそろ至近弾が出だす頃だ。実際、先の第三射では、弾着時の衝撃が大きく、「比叡」を揺すっていた。

「修正完了。てーっ！」

比叡が号令をかけ、各砲塔の右砲が咆哮した。四一サンチ砲の反動は大きく、細く絞られた高速戦艦の艦体を大きく動揺させる。

その砲声が収まらないうちに、敵一番艦の第四射が降ってきた。衝撃はそれまでで最も大きい。暗闇の中でも、間近に丈高い水柱が確認できた。

—— やつぱり、厳しい相手だねえ。

背中を冷たいものが伝う。

ル級改flagshipの性能は、基本的にル級flagshipの上位互換であるとみられている。ハワイ艦隊自体の観測結果がそれほど豊富ではないために断定はできないが、推定排水量で四万トンを超え、主砲は長砲身の一六インチ砲が九門、装甲も相当なものであ

ると見積もられていた。本来、「比叡」が面と向かって戦える相手ではない。

しかしながら、今は夜。いかに電波の目があるうとも、必然的に砲戦距離は短くなり、装甲を撃ち破れる可能性は高くなる。十分に戦えると、角田は判断していた。

その判断が間違いではなかったのか。一瞬そんな考えがよぎるほど、激しい衝撃が「比叡」を揉みしだいていた。

「だんちやーくー！」

今度は「比叡」の第三射が敵一番艦に到達する。派手な水柱が立ち上るが、命中弾炸裂の炎は見えない。「比叡」第三射は、再び空振りに終わったのだ。

「敵艦隊取舵！さらに接近してきますー！」

比叡が報せた。

「針路は？」

「三五〇！」

それまでの針路が三五八、「比叡」たちが〇〇二であるから、より急角度で接近を図ってきたことになる。距離を詰め、力で押し切るつもりであろうか。

敵一番艦が第五射を放つ。相対位置はほとんど変わらないため、新しく諸元を導き出す必要はなかった。「金剛」と砲火を交えている敵二番艦（夕級通常型）も、新たな砲炎を瞬かせる。

「高雄」、「愛宕」と二救艦も交戦を始めている。こちらは高速艦らしい急機動を繰り返して、敵軽艦艇部隊とやり合っていた。「比叡」たちよりも一回りほど小さい砲炎が多数見える。

戦場の様子をすばやく確認した角田は、意識を目の前の砲戦に戻す。丁度、「比叡」の第四射が準備を終えたところだった。

四一サンチ砲が四度目の咆哮を上げる。鎌首をもたげた左砲の砲口から炎が湧き出し、真っ黒い煙を吐く。硝煙の香りが艦橋まで漂ってきていた。

敵一番艦の第五射が迫る。砲声に混じって聞こえる甲高い飛翔音に、角田は若干の違和感を感じていた。

弾着の瞬間、その違和感の正体を悟る。強烈な衝撃と何かが押しつぶされるような音が、艦橋の後方から襲ってきた。「比叡」が被弾したのだ。

「損害軽微、戦闘航行に支障なし」

真つ先に比叡が報告するが、その額には痛みを堪えるような皺が刻まれていた。「比叡」の艦体に食い込んで炸裂した敵弾による破壊が、痛みとなって彼女を襲ったのだろう。

気丈な彼女の表情に無言で頷いて、角田はたった今放たれた第四射の結果を見守る。先手を取られたとはいえ、これで当てれば五分だ。まだ戦いようはある。

「だんちやーくー！」

比叡が時間を報せた。四発の巨弾が敵一番艦の頭上から降り注ぎ、白い巨塔となる。

——ダメか……！

奥歯を噛み締める。水柱はその全てが敵一番艦の手前に生じていた。夾叉も命中もない。「比叡」の砲撃は再び空振りに終わったのだ。

諸元修正と第五射の準備が急がれる。その間、敵一番艦は不気味な沈黙を保っていた。斉射の準備をしているのだと、角田も比叡も理解している。その沈黙が破られる時が、破壊の始まりだと。

重苦しい時間は、やがて終わりを迎えた。「比叡」が諸元修正を終えた時、敵一番艦がそれまでとは比べ物にならないほどの光に包まれる。一瞬辺りを昼間のように染め上げたその光が、敵一番艦の第一斉射によるものと、二人は瞬時に悟った。

九発の一六インチ砲弾が迫る。その気配をひしひしと感じながらも、比叡が声の限りに叫んだ。

「てーっ！」

第五射。そろそろ当てたいところだ。

砲撃の反動で左舷に仰け反る「比叡」に、敵弾が容赦なく襲いかかってきた。金属の上げる悲鳴が聞こえる。衝撃はやはり後ろから来たが、先ほどよりも小さい。どうやら後甲板に命中したらしかっ

た。

被害が報告される間に、第五射が到達する。当たれ。二人分の願いを乗せて、四発の四一サンチ砲弾が弾着した。

立ち上る水柱の合間に、今度こそ紛うことなき火炎が見て取れた。ついに「比叡」も命中弾を得たのだ。

「次より斉射！」

各砲塔で斉射の準備が進められる中、敵一番艦が二度目の斉射を放った。斉射の間隔は三十秒。大質量物が大気を切り裂き、「比叡」の頭上を圧迫する。そのプレッシャーが最大限に達した時、新たな命中弾が生じる衝撃に、艦橋が大きく揺さぶられた。よろけた角田は、何とか艦橋のへりに掴まって激震をやり過ごす。

「負けるかあああつ！」

比叡が絶叫し、次の瞬間、第一斉射が咆哮を上げた。八門の四一サンチ砲は、発砲遅延装置によって若干の時間差をつけられ、連続的な砲声を響かせる。それまでに倍する衝撃が艦上を走り抜け、被弾の炎と煙を吹き飛ばした。

「比叡」の第一斉射弾八発が、十数秒の飛翔を終えて、敵一番艦に襲いかかる。非常に小さくまとまった散布界のおかげで、敵艦を覆うカーテンのように水柱が立ち上り、その内側に命中弾炸裂の火柱を生じる。数は二つ。

敵一番艦が堪えた様子はない。被弾から数秒とせず、平然と第三斉射を放った。

「比叡」の各砲塔でも次弾装填作業が行われているが、その装填装置では次の斉射を放つのに四十秒を要する。手数多きは敵一番艦に譲らざるを得ない。

「比叡」に勝機があるとすれば、散布界の狭さを生かして、一度に多数の砲弾を命中させ続けることだ。

敵一番艦からの第三斉射に耐えた「比叡」が、第二斉射を放つ。四基八門の主砲は全てが健在であり、先と変わらずに猛々しい咆哮を上げた。イカスミのように艶のある海面が、衝撃波で円形に抉れる。

ほとんど同じタイミングで、敵一番艦が四度目の斉射を放った。い

かにも頑丈そうな艦上構造物がハッキリと照らし出され、威圧的にこちらを睨む。巨大な怪物か何かのように、その存在感は圧倒的だった。

お互いの砲弾が落下する。一六インチ砲弾が艦体に突き刺さり、衝撃が伝わってきた。比叡が歯を食い縛っている。艦が苦悶に震えていた。

妖精たちのダメージコントロールチームが、被弾箇所で忙しく動き回る。すでに二か所で火災が発生し、その鎮火作業にも追われていると報告が上がってきていた。

対する敵一番艦には、これといって被害は見受けられなかった。小規模な火災は見てとれたが、それすらもすぐに鎮静化されている。まるで何事も無かったかのように、第五斉射が放たれた。

被弾の衝撃が足元から角田を揺さぶる。激しい縦揺れに何かが軋むような異音が混じり、容赦なく耳朶を打った。

「ぐう……っ！」

比叡が呻く。精神同調によって繋がれた艦体の被害が、激痛となって彼女を襲っているのだろうか。

「比叡ちゃん、速力上げられる?」

痛みを堪えつつ第三斉射を放った比叡に、角田が尋ねる。

「機関は、まだ何ともありません。行けますよ」

「了解。相手の頭を押さえよう。最大戦速、針路〇一〇」

角田の指示により、「比叡」と後続の「金剛」が速力を上げ、同時にわずかに面舵を切った。増速によって敵戦艦の頭を押さえる位置に回ることができるが、反面命中率は下がる。お互いの速力差が大きくなれば、それだけ相対位置の変化が大きくなるからだ。

「比叡」たちの狙いを見極めるように、敵戦艦はしばし沈黙する。この転舵によって、相対位置が大きく変わった。お互いに観測射からやり直さなければならぬ。

「敵一番艦、速度、針路変わらず」

「諸元算出急げ。最初から斉射で行くよ」

角田がさらに指示を出したとき、丁度吊光弾が燃烧を終え、敵戦艦

は再び闇夜に飲まれた。数十秒後、二発目の吊光弾が投下され、再び敵戦艦を照らし出す。青白い光の下で、ギリリと輝く砲身が、鎌首をもたげていた。

「諸元算出完了！全砲塔射撃準備完了！」

「撃ち方始め！」

「てーっ！」

両戦艦部隊の砲撃再開は同時だった。夜の海を真昼のように照らす炎が、およそ一万メートルの距離を隔てて沸き起こる。十数秒後には、お互いの主砲弾が海水を沸騰させ、白濁の巨壁のごとくそそり立った。

艦底部から突き上げてくるような衝撃が「比叡」を襲う。敵一番艦もまた、「比叡」と同じく初弾から斉射を繰り返してきており、至近に弾着した一六インチ砲弾が海面下で遅延信管を作動させた。四万トン近い「比叡」の艦体はその威力に弄ばれ、艦底を痛めつけられる。

初弾からこの精度だ。やはり恐るべき相手である。

「比叡」の砲撃も至近弾を叩き出している。早ければ次には命中か夾叉が得られそうだ。

再装填は敵一番艦の方が早い。敵艦上三か所から爆発的な閃光が生じたかと思うと、次の瞬間には真っ黒い雲になって後方へ流れていった。

「てーっ！」

負けじと比叡も叫ぶ。右舷を指向した八門の主砲口に火球が生まれ、一トンの巨弾を吐き出す。音速の火矢が放たれたまさにその時、敵一番艦の砲撃再開後二度目の斉射が到達した。

瞬間、艦上からすべての音が消え失せる。水柱が視界を奪い、暗夜の中に純白に輝く。

襲ってきた衝撃は、それまでで最も大きかった。

守護者

真下から突き上げるような衝撃に、床から足が浮かび上がり、角田はバランスを崩して膝をつく。床を転がらないだけかもしれませんが、言うべきだろうか。

「司令、大丈夫ですか!？」

自らも相当な激痛があるであろうに、比叡は角田を心配している。軽く膝を払って立ち上がり、角田は微笑した。

「大丈夫、何ともないよ。比叡ちゃんこそ、大丈夫?」

痛みはないか、と訊いたつもりだったが、真面目な彼女は、たった今の被弾による被害を報告する。

「艦橋基部に被弾。二番高角砲が吹き飛びました」

「主砲射撃の電路は?」

「無事です」

ほつと胸を撫で下ろす。たとえ主砲が健在でも、射撃指揮所からの指示を伝える電線がやられては、正確な主砲射撃は望めない。艦橋基部には、それらの電路が集中しているのだ。

たった今の被弾で、比叡が受けた敵弾は八発。艦はまだ戦い続けているが、そろそろどこかに異常をきたしてもおかしくない。

一方、先の比叡の斉射もまた、敵一番艦を捉えていた。これで、与えた命中弾は六発。敵一番艦に、堪えた様子は微塵も見受けられなかった。

——まずいねえ。

心中の呟きはのん気なものだが、実際にはじつとりとした汗が、制服の下を流れていた。どうしようもなく、覆しようのない、歴然とした力の差。それを思い知らされたかのようだ。

それでも、比叡が射撃を止めることはない。敵一番艦から通算八度目の斉射が降り注ぐ中、比叡の主砲も再び撃つ。眼下の前甲板にめくるめく閃光が走り、巨弾が大気を押し退けて飛翔していく。

「第二缶室、浸水!」

艦底部からの被害が寄せられた。命中せずに至近で炸裂した敵一

番艦の徹甲弾は、その爆圧をもって「比叡」の艦底部を痛めつけ、機関区の一部に浸水被害を発生させたのだ。

被害は艦底部に留まらない。否、直接の被害は、当然のごとく甲板上や艦上構造物の方が大きかった。艦の中央付近で起きている火災はいまだ収まっておらず、連続した被弾による破孔からはどす黒い煙が噴出している。艦後部を覆うほどの量だ。すでに後部射撃指揮所から、光学測距による射撃指揮が困難であると、報告が上げられていた。

ここにきて、各部からの被害報告が相次ぐ。そこへ、本日九度目の轟音が飛び込んできた。衝撃を支えきれなかった角田は、自らの体を支えきれずに、艦橋の壁面に額を打つ。目の前で星が飛ぶという感覚を、理解した気がした。

立ち上がろうとして、腕を痛めていることにも気づく。変な着き方をしたのだろうか。左腕に力が入らない。

それでも角田は立つ。朦朧とする意識を、持ち前の無茶っぷりで現実には縛り付け、比叡の横に立ち続ける。それが、指揮官としてのあるべき姿であると、角田は思っている。最後まで艦橋に立ち、艦娘たちを導き戦うのが、自らの使命であると。

額から伝う生暖かい液体の感触。それでも角田は、暗闇に向かって不敵に笑う。

こいつらを足止めできれば、こちらの勝ちだ。

十度目の斉射による被害は、何を聞かずとも判明していた。合計で十三発目となる被弾は、たった今転針後四度目の斉射を放っていた第一砲塔に吸い込まれ、頑丈なその装甲をまるでブリキか何かのように内側から吹き飛ばした。砲塔は真ん中から真っ二つに裂け、右砲があらぬ方向を向く。左砲はどこかへ飛ばされていった。

これで「比叡」は、全火力の四分の一を喪失したことになる。

その時、敵一番艦の周囲に、四本の水柱が立ち上った。「比叡」のものではない。誰のものかは、すぐにわかった。

第一救援艦隊——一救艦二番艦に位置する「金剛」だ。敵二番艦は、彼女の砲撃により四一サンチ砲弾多数を被弾し、大きく炎上し

て落伍している。更なる攻撃の要なしと判断した金剛は、その目標を敵一番艦へと転じたのだ。

『お待たせしたデース！』

スピーカーから、澆刺とした金剛の声が聞こえてきた。いついかなる状況でも陽気なその声が、今は一番の励みとなる。

金剛の話は続いた。

『比叡と角田テイトクは退避してクダサイ。後は私が引き受けマース！』

旗艦であり、損傷のある“比叡”を下げ、後を“金剛”たちに任せろということらしかった。

答えようとした角田は、チラリと比叡を見遣る。額に玉のような汗を浮かべ、半ば艤装に支えられるようにして立つ彼女はしかし、角田の目線に沈黙をもって答えた。敵弾落下の衝撃に踏ん張り、負けじと残った六門の四一サンチ砲を放つ比叡の瞳は、波風一つない湖面のごとく、静かな決意を秘めていた。

比叡が、柔らかな唇を、ゆつくりと開く。

「いいえ、下がりません、お姉様。ここで退いたら、“金剛”型高速戦艦の名が廃ります」

『変な意地を張ってる場合ではアリマセン！比叡はフラッグシップ、最後まで指揮を執り続けることが義務デース！』

「二対一では、あの戦艦に勝てません。でも、私とお姉様なら、勝てるかもしれないんです。だから、残ります。私は最後まで、戦い続けま

す」

『っ!!』
スピーカーの向こうで、金剛が黙る。遠雷のような音は、主砲を撃った音だろうか。

『ワーツ、モウ！お姉ちゃんの言うことを聞かない比叡ちゃんなんて知りマセン！後で思いつきり抱き締めてやるから、覚悟しとくデース！』

金剛との通信は、そう言って一方的に切られた。

“比叡”は砲撃を続けている。敵一番艦もまた、その目標を変える

ことなく、比叡を撃ち続けている。『比叡』には着々と被害が蓄積し、戦闘続行が困難となるのは時間の問題だった。

「比叡ちゃん、探照灯用意」

「はい」

角田は探照灯の使用を指示する。彼我の距離はすでに一万を割っており、強烈な探照灯の光であれば十分にその姿を照らすことができる。

「・・・司令」

探照灯照射の準備が進む中、比叡が低い声で角田を呼んだ。

「マリアナを守って、司令と一緒に、必ず帰りますよ」

次の瞬間、眩い光線が、『比叡』から伸びた。真つ直ぐに海面を切り裂いた光は、その先に敵一番艦を捉える。暗闇の中に、その艦影がはつきりと浮かび上がった。

それを目印として、『比叡』、そして『金剛』が主砲を放つ。『金剛』は未だ散布界に敵一番艦を捉えておらず、各砲塔右砲を用いた交互撃ち方だ。

両艦の砲撃にも、敵一番艦は怯むことなく、さらなる射弾を送り込んでくる。探照灯の光の中に褐色の炎が沸き起こり、それまでと変わることはない九発の一六インチ砲弾が飛んできた。

『比叡』と『金剛』の射弾が先に到達し、落下する。白い水柱が五本立ち上り、火柱が一つ生じる。それから数拍を置いて、今度は紅に染まった水柱が四本沸き上がった。

一式徹甲弾の風帽部分には、どの艦から放たれた砲弾であるかわかるように、染料が仕込まれている。『比叡』には染料が入っていないが、『金剛』搭載の砲弾には赤色の染料が込められており、弾着と同時に風帽が外れた際、この染料が海水に溶けて、水柱に色が着く。弾着観測をやりやすくするための工夫だ。

ちなみに、この染料の色が、戦艦娘の下着の色と同じという噂が、まことしやかに囁かれていたりするのだが、さしもの角田もその真相を知り得る術は持たなかった。

「さっすがお姉様！」

探照灯の中に立ち上る。『金剛』第三射の成果を確認して、比叡が感嘆の声を上げる。さすがは『金剛』型戦艦一番艦、BOBの中でも古参艦だけあって、練度は確かだ。

もつとも、そこには少なからず、『比叡』が使用した探照灯による効果があるのだろうか。

『比叡』が再び激しい揺れに襲われた。今度の被弾箇所も、艦橋に近い。低い呻きが、比叡の口から漏れていた。

まさに満身創痍だ。『比叡』艦上には至る所に大穴が穿たれ、艦全体を覆うほどに黒煙が噴出している。火災はもはや収まる気配がない。戦っていることが不思議なほどだ。

——塚原に怒られるかなあ。

新たな斉射に伴う『比叡』の揺れに身を任せながら、角田は心の中で漏らす。慎重派——と言うよりも、時々神経質なほど心配性な彼は、きつと私の無茶を怒るのだろう。艦娘に無茶を強いるなど、叱るのだろう。

だが、ただ怒られるわけではない。塚原の機動部隊が辿り着くまで、何としてでも時間を稼ぐ。マリアナを守る。そうしなければ、塚原に叱られる機会は、永遠に巡ってこないかもしれない。

「第六缶室に浸水！」

いよいよ、本格的にピンチかもしれない。浸水の報告が相次ぎ、機関部妖精は応急修理に忙しい。

排水のためのポンプは、まだ正常に作動している。艦の傾斜もなく、砲撃自体は続行可能だ。しかしながら、これだけの被害を受けていながら、まだ機関部が生きていることの方が奇跡なのだ。

——いつまでもつかな。

『比叡』と『金剛』の斉射を聞き届けながら、角田は内心の焦りを募らせていく。

その時、予想だにしないことが起こった。

「っ!?敵戦艦面舵、反転離脱していきますー！」

「……えっ?」

信じられないといった様子。比叡の報告に、角田も間の抜けた返事

をする他なかった。圧倒的優位だったはずの敵艦隊は、突如砲戦を止めて、その艦首を転じ、戦場から離脱していく。

『「高雄」より「比叡」。敵巡洋艦部隊、離脱を開始。追撃の是非を問う』

同じタイミングで、「高雄」たちが相手取っていた巡洋艦部隊も、反転していく。

何かの罠か？

そもそも、奴らがここまでやってきた目的は何だったんだ？

——まさか・・・僕たちと戦うことが、目的だったのかな？

角田はかぶりを振る。ともかく今は、追撃の是非を判断しなければ。

「追撃の要なし。逐次集まれ」

深追いは禁物だ。角田たちの目的はあくまでマリアナの防衛であり、いらぬ戦闘は避けるべきである。去る者は追わないのが、防衛戦の基本だ。

一、二救艦参加の各艦が再び集まり、陣形を組んでマリアナ諸島の方へと帰っていく。

「比叡」艦内では、被害個所の応急修理がなおも進んでいる。控えめに言って、その損害は中破といったところだ。この他、敵巡洋艦と激しく撃ち合った「高雄」、「愛宕」が小破、「叢雲」中破の判定となっている。各艦とも戦闘航行に支障をきたすほどではなく、翌日の戦闘にも参加可能だ。

陽が昇るまでまだ時間がある。空襲を生き残っていた二つの浮きドックを使い、最低限の修理を施したいところだ。

戦いはまだ、一日目が終わったところであった。

マリアナ急行

清水麾下のパラオ艦隊第一陣がマリアナ沖に到着したのは、そろそろ正午を回ろうかという時だった。

最初の方こそ、オートナビゲーションを使用しての航行であったが、戦闘海域が近づいた朝方からは艦娘たちが艤装と精神同調を行い、操舵を行っている。

最大戦速を發揮しての連続航行は大きな負担ではあったが、今はとにかく時間が惜しかった。

艦上をどうこうと走り抜ける風の音を聞きながら、摩耶は電探の観測結果を気にかけて、全速航行を続けていた。すでに敵艦載機の爆撃可能圏内、いつ敵機を捉えてもおかしくなかった。

——間に合ってくれ……！
願わずにはられない。

マリアナからは、朝を迎えてすでに二度の空襲を受けた旨の報告があった。どちらもマリアナの基地航空隊と軽空母「龍鳳」の艦載機隊が迎撃したが、すでに限界が近く、港湾施設や滑走路に投弾を許してしまったとのことだ。在泊艦艇にも被害が生じ、港外への退避が間に合わなかったタンカー一隻が撃沈され、輸送船二隻が敵弾を受けている。

第三次空襲があった時、これを凌げるとは思えなかった。そのために、「摩耶」たちは急いでいる。

「出たぞ」

海図室から現れたのは、徹夜明けにもかかわらず、白の第二種軍装をキツチリと着こなす清水だ。夜中、摩耶が仮眠を取っている間の当直を務めてくれていた彼は、彼女が艦橋に戻った後も仮眠を取るでもなく、海図室に籠っていた。何をしているのか、気にはなっていたところだ。

「何が出たんだ？」

「敵艦載機の残存戦力だ」

そんなものが計算できるのか？自分でも怪訝な表情になるのがわ

かった。その疑問に答えるように、清水は説明を始める。

「敵戦力の分析は、深海棲艦が現れた当初から行われている。特に空母は重点的にな。俺も、中央にいた頃はその辺に関わっていたから、各種データを手に入れるのは簡単だった」

「そういえば、この提督は元々、連合艦隊司令部付きの将校であったと、摩耶は思い出した。」

「空母の戦闘能力、すなわち搭載数は、格納庫容積と甲板の面積、敵航空機の大きさから導き出せる。ヲ級なら、通常型とeliteで定数七十機、露天駐機を使えば八十機。flagshipで定数七十六機、露天駐機を使えば八十八機。又級なら、どの形式でも定数四十機、露天駐機を使えば四十四機といったところだ」

「スラスラと並べられる数字。摩耶はそれを黙って聞き続ける。」

「今回確認されている敵機動部隊は、ヲ級が二隻、又級が二隻。はつきりした形式は判明していないが、その艦載機総数は二百二十機から二百六十機といったところだ。ここから、撃墜された機体を差し引く」

「待て。撃墜された敵機の数なんて、どうやって調べるんだよ」

「使用された弾薬の量だ」

「言われてハツとする。」

自衛隊時代からの名残で、日本の三軍は、使用した弾薬を銃弾、薬莖の一つに至るまで、克明に記録し、公表している。今朝からの分はともかく、少なくとも昨日の三回の空襲を防いだ戦闘の際の使用弾薬量は、すでに計算を終えて、中央に報告されているはずだ。

元司令部配属の清水ならば、多少のコネがあれば、それを入手することは可能はずだ。データ自体は、海凶室の液晶パッドに送ればいい。民生品と違い、軍の仕様であるそれには、たとえ洋上であろうともデータを送ることが可能はずだ。

「どこから入手したかは、聞かないでおくのが得策であると、摩耶は判断した。」

「マリアナの中継所が生きていてよかった。あそこがやられたら、入るデータも手に入れない」

清水が言う。

「昨日使用された弾薬の量から、残弾と、指揮官の使用傾向がわかる。今日行われた二回分は、そこから割り出した予想使用量で補うしかないが、これで現在の敵機動部隊残存戦力がわかる。どれほど多く見積もっても、総数で百二十機。作戦続行はギリギリなはずだ」

少数とはいえ、現代戦闘機とBOB艦載機、地对空ミサイルの迎撃を受ければ、やはりそれ相応の被害を受けるのだ。

「普通の指揮官なら、これだけの被害を受けて現場海域に留まり続けることはあり得ない。作戦中止、即帰投か攻撃方法を変更する。ところが深海棲艦には、今のところその選択肢を取ろうとする素振りはない」

清水が言わんとしていることを掴みかね、摩耶はさらに続きを促す。

「何が目的かは知らないが……この状態でも、航空機による攻撃を続行しようとするならば、選択肢は二つ。往復距離を短くするために接近するか、さらに他の空母を呼ぶか」

「……手っ取り早いのは、前者だな」

「ああ。そうなった場合、昨日の敵機動部隊の位置から、現在の大体の位置と、攻撃隊の侵入経路がわかる」

そう言った清水は、おもむろに「摩耶」の左舷を——北マリアナ諸島の主要島、サイパン島を見た。海図上での距離は三万ほど。

摩耶の横を離れた清水は、艦橋前面中央に位置するリピータコンパスに歩み寄る。ジャイロコンパスの母機と連動しているそれに手を当て、片目を瞑ってサイパン島の方を見た。どうやら方位を測っているらしい。

この提督の考えていることをすべて理解することは、まだ摩耶には難しかった。

代わりに、その指示を一言も聞き漏らすまいと、意識を集中する。発せられる命令に瞬時に反応し、その意図を汲み取ろうと、神経を尖らせる。

やがて、清水がゆっくりと、その口を開いた。

「減速、第一戦速」

「減速、第一戦速！」

清水の指示は、すぐに第一陣全艦に通達された。「摩耶」が速力を落とすのに合わせて、後続の駆逐艦四隻と「木曾」も減速する。

「なんで減速したんだ？このまま警備艦隊と合流するんじゃないのかよ」

「いや、ここでいい。必ず、ここを通る」

「・・・わかった」

断言した清水に、摩耶は頷く。減速して、艦の動揺がいくらか落ち着いているので、この機会に各部の確認作業をする。これから始まる対空戦闘に、万が一にも支障があつては困る。

主砲、高角砲、機銃。各部から異常なしの報告が上げられ、摩耶は満足げに頷いた。今、この艦は最高の状態にあると言つていい。

その時。

「っ！対空電探に感あり！敵編隊、真っ直ぐこちらに向かつてくるー！」
二一号電探が、接近する機影を捉えたのだ。清水が言つた通りであつた。

「方位一〇三、距離五万」

「マリアナの基地航空隊に動きは？」

「機体の出撃は確認できない」

答えた摩耶は、ゆっくりと敵編隊が迫る方角を見遣つた。その姿は、いまだゴマ粒ほどでしかない。しかし確かな存在感を放つて、摩耶たちに迫ってきているのだ。

ゴクリ。生唾を飲み込む。普段なら、これほど緊張などしない。

出撃した時と同じように、背中を汗が伝う。清水を乗せて一日が経ち、人間を乗艦させるという状況に慣れたと思つていたのだが、やはり戦闘となると訳が違うのか。

それでも、もはや引き返せない。

踏み出した一步を下げるつもりは、摩耶にはなかった。

清水と共に戦う。それが今の、摩耶にできることだ。

——死ぬなよ。

行き場を失つた不安が口をついて出そうになり、それを無理やり噛

み殺す。その言葉は、今必要ない。

「対空戦闘用意。摩耶、一応警報を出しておいてくれ」

清水の指示が第一陣全艦に伝えられるとともに、「摩耶」から飛んだ電波がマリアナの基地航空隊と警備隊に敵編隊接近を報せる。もつとも、基地航空隊の保有するレーダーの方が性能はいいはずなので、すでに補足している可能性の方が高いが。

それでも戦闘機が上がってこないということは、まだ燃弾補給が終わっていないのか、あるいは出撃できる状態にないのか。

ともかく、その辺を考えるのは後だ。

対空戦闘用意を受けて、各機銃や高角砲を担当する妖精たちが配置につき、戦闘の準備を進める。ベルト給弾方式を採用していない機銃座では、予備弾倉を目一杯に抱えた妖精が控えていた。使用済みの弾倉を素早く交換するためだ。同じようなことは、高角砲の揚弾機前でも行われている。

各部から配置完了の報告が寄せられ、摩耶は全配置の完了を確認した。同様の報告が、「曙」、「霞」、「長波」、「卯月」、「木曾」からも上げられた。第一陣は、いつでも対空戦闘を行える準備が整った。

「距離四〇〇」

摩耶が敵編隊の距離を読み上げた時、警備隊旗艦の「龍鳳」から通信が入る。

『こちらグアム警備隊、「龍鳳」。パラオ泊地艦隊、応答願います』

摩耶が差し出したマイクを、清水が受け取る。スイッチを入れ、清水が落ち着いた声で龍鳳に答えた。

「パラオ泊地提督、清水隆之少佐です」

『清水少佐ですね。グアム警備隊の指揮権を預かっています、龍鳳です。提督の初瀬少佐が、退避船舶誘導にあたっているため、私から状況をお伝えします』

「お願いします」

『「龍鳳」航空隊は燃弾補給を終えたばかりです。出撃には少なくとも十分かかります』

その間に、敵編隊は「摩耶」たちの上空に到達する。

『基地航空隊の戦闘機隊も似たような状況です。ですのでそれまで、対空砲火のみで応戦をお願いします』

「わかりました。こちらで、時間を稼ぎます」

清水が通信を切る。その間に、敵編隊との距離はさらに縮まった。およそ三万五千メートル。

「陣形はこのまま。注意をこちらに引き付ける」

摩耶たちは単縦陣を維持したままだ。それもそのはず、輪形陣を敷いて守るような大型艦はいないのだから。それならば、艦隊運動が取りやすく、片舷の対空砲火をフルに使うことのできる単縦陣の方が、かえって効果的だ。囮としても、こちらの方が目を引く。

「二五〇で対空戦闘を開始する」

まず口火を切るのは、「摩耶」の主砲だ。そこにはすでに、対空戦闘用の三式弾が装填されている。もともと、今回は敵編隊の動きをそこまで制限できるわけではないので、効果のほどはお察しだ。それよりも、三式弾を撃つことによる敵編隊の散開を、摩耶は狙っていた。

「距離三〇〇」

じりじりとした時間が過ぎる。敵編隊はその綺麗な陣形を保ったまま、高度三千メートルを飛行し続ける。それを睨む「摩耶」たちの高角砲もまた、まだ撃たない。

静かな時間が、かえって摩耶の緊張感を増す。心臓が早鐘のように打ち、額を汗が伝った。

機数にして七十機そこそこの編隊が、まるで数百の大航空機集団であるかのような威圧感を覚えた。

このまま、自らの艦ごと押し潰されてしまうのではないか。そんな錯覚すら覚えた。

「距離二〇〇」

それでも、その時は確実に迫ってくる。双眼鏡を覗いた清水が、厳かに命じた。

「撃ち方用意」

トリガーを引く準備はできている。後はそこにかけた指に、ほんの

少しの力を加えるだけ。加わった力は、電路を伝って装薬に点火し、砲弾を放つ。

やがて、その時がやってきた。

「距離一五〇」

「撃ち方始め」

「てーっ！」

摩耶の号令に、右舷を指向していた八門の二〇・三サンチ砲が咆哮した。仰角がかけられた砲身から飛び出すのは、内部にたっぷりと子弾を詰め込んだ三式弾。

反動が艦を左舷へと仰け反らせる。衝撃は等速度的に広がって、海面を、艦上構造物を叩く。濡れ雑巾でひっぱたかれたような感覚だ。数百もの大太鼓を打ち鳴らしたかのごとき轟音が艦橋内に木霊する。

摩耶の戦いが始まった。

摩耶、奮闘

空中に、八つの火炎が沸き起こった。まるでススキ花火のように細い火箭が、漏斗のような円錐形に広がる。その一つ一つが、三式弾の子弾だ。

「摩耶」から放たれた八発の三式弾は、調定された時間で一齐に炸裂していた。ただ、予想していたように、敵機は散開して三式弾の危害半径を逃れており、撃墜されたのはわずかに二機。

敵編隊の概算は、六十機と摩耶は見積もっている。うち戦闘機を差し引けば、四十数機が攻撃機ということになるだろうか。

「摩耶」の三式弾による射撃を散開によつてやり過ぎた敵編隊は、再び集結を図りつつ、サイパン島への進撃を続行する。その途上に位置取ったパラオ艦隊を気に留める様子はない。

島嶼攻撃のために、おそらく全ての機体が爆装を施されている。在泊艦艇の退避も終わっているため、サイパン港内の輸送船を攻撃する必要もないだろうから、魚雷を積んでいるとは考えにくかった。逆に言えば、パラオ艦隊を攻撃する手段に乏しい。ここは無視を決め込み、あくまでサイパン島の港湾施設や基地を叩くことを目的としているのだろう。

——もし襲いかかってくるとすれば。

上空を進む敵編隊を睨みながら、摩耶は考える。上げられる可能性は、二つ。爆撃機による急降下爆撃と、攻撃機による水平爆撃。

「タダで通すな」

横に立つ清水が、双眼鏡を覗き込んで状況を確認しながら、低い声で告げた。

あの敵編隊をサイパンに向かわせるな。彼の指示には珍しく具体的に欠けるが、その分勢いはあった。

摩耶の闘志に火がつく。いつぞやの記憶と重なる。

普段の清水は豪快とは程遠いが、今はその横顔がどこか挑戦的な表情のように見えた。

「……駄賃はしっかり払ってもらうぜ」

「摩耶」の主砲が、二度目の斉射を放つ。今度の弾種も三式弾だ。その発砲に合わせるようにして、敵編隊が再び散開する。

その時を待っていた。

「各艦、対空戦闘始め」

「対空戦闘始め！」

清水の指示を摩耶が復唱する。第一陣各艦に飛んだ通信に呼応して、搭載された一二・七センチ砲が一斉に撃ち始める。

「摩耶」右舷の高角砲群からも、小太鼓を打ち鳴らすような砲声が聞こえてきた。主砲に比べて速射性能がよく、数秒おきに爆音と火炎が生まれる。自らの艦が上げる重厚な旋律を、摩耶はしっかりと聞いていた。

散開した敵編隊それぞれの周囲で、一斉に高角砲弾が炸裂する。逃げた先に待ち構えていた罠になす術もなく、まとまって四機が撃墜された。

もつとも、そううまくいくわけではない。第一陣参加のBOBで、まともに高角砲を装備しているのは、「摩耶」と「木曾」の二隻。「曙」と「長波」、「霞」搭載の一二・七センチ砲は高角砲架ではなく平射砲であり、「卯月」に至ってはそもそも主砲による対空戦闘が絶望的である。

それでも、各艦は砲火を上げ続ける。三隻の駆逐艦は、平射砲ゆえに若干間延びした射撃となっているが、それでも猛烈な勢いで砲弾を撃ち上げる。その砲撃は驚くほどに正確だ。

即席ではあるが、各艦の対空射撃能力を向上させるべく、曙が考案した手法。それは戦艦の統制砲撃にヒントを得た、高射装置の諸元共有戦術だ。唯一高射装置を搭載している「霞」が目標と旋回角、俯仰角を指示し、それを「曙」と「長波」でも共有する。

もちろん、統合射撃装置と言った類いの豪勢なものは駆逐艦に搭載されていないから、諸元の伝達も発射タイミングの指示も、全て口頭だ。先ほどから、三隻の駆逐艦の間では、まるで怒号のように通信が行き交っており、さすがに摩耶はスイッチを落とした。一方、対空射撃に参加できない「卯月」は、さもつまらなそうに、敵機が機銃の射

程圏内に入るのを待っている。

摩耶は東南東の空を見た。

まとまって炸裂した高角砲弾にもろに突っ込んで黒煙を噴く機体。弾片が推進機を破壊したのか、形を保ったまま落ちてくる機体。

搭載していた爆弾が暴発して、跡形もなく消し飛ぶ機体。

一機、また一機と、深海棲艦の機体が落ちていく。

——さあ、どうする？

心の中で問いかけた摩耶に答えるように、敵編隊が新たな動きを見せた。

三式弾の回避と対空砲火から逃れるために散開して、いくつかの小編隊に分かれていた敵編隊。そのうちの一部分が、突然速力を上げて、

“摩耶”たちに接近を凶つてきたのだ。

そこに、明確な攻撃意志を、摩耶は感じ取っていた。

必ず来る。水平爆撃か、はたまた急降下爆撃か。ともかくあの小編隊は、島ではなく“摩耶”たちを、攻撃目標に選んだのだ。

狙い通りであった。三式弾による対空射撃は、これを狙ったものだったのだ。

三式弾に対して有効な回避方法は、とにかく散開して危害半径から逃れること。危害半径外へのダメージが非常に限定的なものとなる三式弾には、これだけで十分だ。

しかし結果として、敵編隊はいくつかの小規模な編隊に分かれることとなった。戦闘中において、分裂した各編隊が統一意志をもって動くことほど難しいことはない。盛んに対空砲火が放たれているとしたら尚更だ。

激しい対空砲火に耐え切れず、目標を変える編隊が現れるはず。それが、摩耶たちが三式弾による射撃を選択した意図だった。

案の定、その予想は当たっていた。

「動きからして、急降下爆撃機だな」

清水が冷静に呟く。その言葉からは、相変わらず一切の感情が読み取れない。けれどもそれが、摩耶の戦闘指揮と操艦術への、確固たる信頼のように感じられた。そう信じていた。

何よりも摩耶は、今の自分を信じることにした。

もう誰も死なせない。そんな決意は、今までもずっと、これからもずっと、胸の内から出すつもりはなかった。

「撃ちまくれ！」

それだけ、腹の底から叫んで、摩耶は上空に迫る爆撃機の動きを見測る。

艦体の大きい「摩耶」が敵弾に対して適切な回避運動を取るには、何よりもタイミングが大切であった。

各艦からの対空砲火が、接近を図る敵編隊に集中する。真っ黒な花が咲き乱れ、敵編隊を押し包む。上と言わず、下と言わず、あらゆる方向で炸裂する高角砲弾は、衝撃で敵機を揺さぶり、容赦なく鋭い弾片を浴びせかけていた。

鼻っ面で高角砲弾が炸裂し、機首を下に向けて真っ逆さまに落ちていく機体。

弾片が機体を貫き、白煙を引いた機体は次第に速力と高度を落とすていく。

「敵降爆（急降下爆撃機）、概算で十五機！」

艦橋上部に設けられた露天の防空指揮所から寄せられた報告を、摩耶が読み上げる。

——距離四〇。

高角砲弾は数多の真っ黒い雲となるが、その全てが効果的な射弾とはなり得ない。むしろ空振りに終わることがほとんどだ。

それでも、さらに一機が撃墜された。

「対空機銃、撃ち方始め！」

次の瞬間、無数の曳光弾が「摩耶」の艦体各所から敵編隊に向けて伸びた。パラオ泊地が改修を施した二五ミリ機銃、その初陣だ。

密度は、『I F 作戦』時に比べて遥かに濃い。三連装、あるいは連装の銃架は、その全てが同時に発砲し、濃密な弾幕を形成していた。弾倉の取り換えは多いが、妖精たちは忙しなく動き、それらの交換作業を担う。

真っ赤な火箭に包み込まれ、一機が撃墜される。

さらにもう一機、集中砲火を浴びた機体がずたずたに引き裂かれ、ぼろ雑巾のように落ちていく。

——すごい……！

実戦で初めて試す改修型二五ミリ機銃の威力に、摩耶は目を見張る。機銃そのものに手は加えていない。ただ、発砲の仕方を少し変更しただけだ。

艦上スペースの消費範囲をさほど増やすことなく、「摩耶」たちは大幅な対空火力の向上に成功したと言ってよかった。

それでも、敵機全機の撃墜などというのは、夢のまた夢である。高速で移動する航空機に対して、機銃が対応可能な時間はごく短い。敵機はあつという間に投弾地点に到達する。

「摩耶」の上空に迫り着いた敵機は、次々に機体を翻すと、急降下に入った。どちらかという横陣に近い体形を取るのが、深海棲艦艦載機の急降下爆撃の特徴であった。

避けるのは比較的容易い。だが投弾の妨害は難しい。横に広いため、的を絞りにくいのだ。

二五ミリ機銃が振りまく弾丸をもとせず、敵機は突っ込んでくる。

機銃弾を機首からまともに受けたのか、コントロールを失った機体
が、射線を外れていく。

機体の左側に集中して弾痕が穿たれた機体は、錐揉みとなって編隊から落伍する。

狙いは、この「摩耶」で間違いない。何せ重巡洋艦。第一陣の中で最も大きく、目立つのだ。それに、対空砲火も一番盛んである。目障りな相手と思われても、何ら不思議はない。

「面舵一杯、針路一〇五！」

頃合い良しと判断した摩耶は、回避運動に入る。なおも激しい対空砲火を撃ち上げる「摩耶」、一万三千トンの艦体がすぐに艦首を振ることはない。舵角指示器が面舵一杯を表示しても、艦が横方向の力を得るには、それなりの時間がかかった。

そうこうするうちに、敵機の腹部から、黒々とした弾頭の爆弾が投

下された。そのまま、敵機は機体の引き起こしをかける。機体の影に隠れていた爆弾が、太陽に照らされて鈍い輝きを放った。

ここにきて、ようやく「摩耶」の舵が利き始めた。艦首が右に振られ、航跡が急な円を描く。一度曲がり始めてしまえば早い。すぐに艦首が方位一〇五を向き、適正な当て舵によって針路を固定する。

次の瞬間、艦橋右舷の海面が、にわかには沸き立った。投下された敵弾が、到達し始めたのだ。

間髪を入れず、二発目が落下する。今度も艦の右舷側だ。先ほどよりも近く、飛び散った海水が舷側と甲板を強かに打つ。

三発目は左舷に落ちた。音だけは聞こえてきたが、視界には入らず、衝撃も小さい。おそらくは、艦後部からさらに距離のある位置へ弾着したのだろう。

このまま乗り切れるか。そう思った摩耶だが、ことはそううまくは行かなかった。

四発目が弾着する。瞬間、艦の後部で至近弾炸裂とは明らかに異なる異音があった。衝撃も直に伝わる。そして何より、精神同調した艤装を通して、若干の痛みが摩耶を襲ったのだ。

被弾した。

「被害状況報告せ！」

摩耶が応急修理の妖精たちに命じる間も、敵弾は降り注ぐ。右、左と伝わってくる至近弾に混じって、命中弾の炸裂音が聞こえる。それでも、重巡洋艦である「摩耶」の艦体は、よく耐えていた。

最終的な投弾数は十一発。うち三発が命中弾となった。

精神同調に異常は見られない。同調率は高いままであり、痛みもない。損害は大したものではなかったらしい。

敵編隊は、なおも摩耶たちを目指してくる。すでに大規模な編隊としての統制意思はなく、小編隊が各々の判断で攻撃を行おうとしている、そんな印象を受けた。

「艦隊針路〇四五」

単縦陣のまま、第一陣参加BOBは舵を切る。まだまだ、摩耶たちは敵機を迎え撃つつもりであった。

その時。

「上空、〃龍鳳〃 戦闘機隊！」

見張り員がさらに報せた瞬間、上空から十数機の零戦が敵編隊に襲いかかった。猛禽を思わせるスラリと凜猛な翼に発射炎が見えたかと思うと、数機の敵機が火達磨になる。

摩耶たちは、どうにか時間を稼ぐことに成功したらしかった。

味方機を誤射しないようにと、撃ち方待てが下令される。各艦の艦上で止むことのなかった対空砲火の砲声が、ぴたりと止まった。

それでも、各高角砲や機銃は高空を睨み続ける。〃龍鳳〃 戦闘機隊の零戦は残存がたった十六機であり、敵編隊全機を防ぐことなど到底不可能だろう。深海棲艦戦闘機が零戦を相手取る間に、残った機体が、摩耶たちやサイパンを狙おうと考えるかもしれない。

摩耶は両目を細めて、空戦の状況を見守り続ける。やがて、攻撃を諦めた敵編隊が、元来た方角へと退避していくまで。

第二夜

深海棲艦からの最後の空襲を凌ぎ切った摩耶たちは、そのままマリアナ沖に留まり、夜を迎えていた。

艦隊内の緊張感も増して張りつめている。昨夜、マリアナは深海棲艦水上部隊の襲撃を受けている。ル級改flagshipを中核としたこの艦隊は、一、二救艦の奮闘によつて退けられたが、あくまで一時的な撤退を図つたものと考えられた。

今夜も襲撃がある可能性が高いと、摩耶含めた全員が踏んでいる。敵水上部隊に備えているのは、「摩耶」を筆頭としたパラオ艦隊第一陣（第三救援艦隊と呼称）と一救艦の三隻だ。昨夜の戦闘で損傷した一救艦旗艦の「比叡」は参加していない。角田自身も怪我をしており、本来は戦闘指揮を止められてしかるべきなのだが、本人が頑として譲らなかつたため、そのまま「金剛」に将旗を移している。受け入れ先の金剛曰く、

——「夜の戦闘で指揮官を欠くことは、非常に危険です。角田テイトクの言うことに、一理あることは認めます。だから、今回は特別に、怪我したまま私に乗ることを許可します。バット、角田テイトクがこれ以上比叡ちゃんを傷つけるようなことをしたら、問答無用で海に叩き落してやりマス」

とのことであつた。

「金剛」以下の一救艦は、昨日戦艦部隊の襲撃があつた、サイパンよりの方位〇八五の海域に展開している。一方の三救艦は、敵機動部隊とサイパンを結ぶ直線上、方位一三五に展開していた。

辺りを警戒するのは、電探と夜間見張り員。雲が濃いため、月は当てになりそうにない。そもそも、今宵の月は、それほど光量が多くないはずだ。

「・・・現在時刻、〇〇〇〇」

正時を差す蛍光塗料の針を、摩耶が読み上げた。

「第二陣到着まで、三時間と少し、といったところか」

確認するように清水が呟いた。日の入り前に「大和」から寄越さ

れた通信によれば、第二陣到着予定は日本標準時刻の午前三時前後、現地時間で四時前後となる。以後通信がないところを見るに、無事な航海を続けているものと思われた。

日没後に沈黙を保っているのは、第一陣も同じだ。ピリツとした空気が、*「摩耶」*の艦橋にも満ちている。あらゆる目が、暗闇に目を凝らし、敵影の接近に備える。

備えている、かに見えた。

『う〜っ！いい加減暇びよん！』

緊張感を台無しにしたのは、艦隊最後尾であり、日中の対空戦闘にもあまり参加できていなかった卯月であった。ウサギを思わせるその語尾が、通信機の向こうでびよんびよんと飛び跳ねる。

『し〜っ！静かにしろって、卯月。夜間警戒中だぞ』

それに答えるのは長波だ。注意しているその声は、しかし電波に乗ってしまったっている時点ですでに、静かにという言葉と矛盾している。

「お前らなあ・・・」

せっかく張った緊張の糸を、遠慮会釈なくプツツリと断ち切つてくれた駆逐艦娘に、摩耶は頭を抱えそうになる。

その時、清水が動くのがわかった。怒られるか？通信機を取った清水の言葉に耳を傾ける。

「いや、静かにしない方がいいかもしれないな」

思いもよらない発言に目を見開く。

確かに、旗艦の*「金剛」*から、無線封止の命令が来ているわけではない。しかし、電波を盛んに発することは、その電波を探知されて、敵に見つかる可能性も高くなるということだ。敵発見の報告以外、電探を除いた電波を発するものを使用することは、まずない。

「盛んに電波を飛ばしていれば、こちらが迎撃の準備をすでに完了している、深海棲艦に思わせることができる。未然に接近を防げるかもしれないし、少なくとも奇策を用いられることはないはずだ」

正面からの戦いなら、こちらにも十分な勝機はある。清水はそう言いたいようだった。

——確かに、一理あるかもしれない。

摩耶が深海棲艦を襲撃するとして、だんまりを決め込む相手になら色々と策を考えてみたりもするが、盛んに通信をしている相手の場合、すでにこちらが発見されているものと考えて、一獲千金を狙うような奇策よりも、堅実な作戦を選ぶ。

同じ思考は、深海棲艦にも通用する。

『……クソ提督も大概だったけど。あんたも似たようなもんね』

溜め息混じりの言葉は、曙だ。そんな彼女の言葉を、ニヤニヤという言葉が当てはまる、愉快極まりないといった様子で茶化したのは、パラオ着任時から曙を知る木曾だった。

『曙って、口を開けば榊原のことだな。何かと、比べる時もあいつが基準だし』

『なっ……!』

木曾の指摘に、曙が絶句する。目の前にいたら、きつと面白い表情が見れたであろうことは、想像に難くなかった。

『んなことないわよ!』

『えー。それこそ一理ありだろ』

長波も木曾に便乗する。摩耶はとりあえず、まだ口を挟まないことにした。

『確かに、クソ提督なんて言ってる割には、アイツのことはよくしゃべるわよね』

追撃するのは霞。元々、自分にも、他人にも、深海棲艦にも容赦のない艦娘である。

『そ、そんなわけ……』

言葉に詰まるあたり、意外と凶星であったのかもしれない。素直になれないのは相変わらずだ。彼女らしいと言えば彼女らしい。

『うーちゃん知ってるぴよん。曙の部屋にあるドレッサーの、上から二番目の』

『わあーわあーわあーっ!』

『……おいうるさいぞ。聞こえなかったじゃないか』

『知らないわよ! どうか聞かなくていいから!』

歴戦の駆逐艦娘も、防戦一方であった。一方の摩耶もまた、込み上げる笑いの波に防戦一方であった。

『あんたたちなんか大っ嫌いよ！』

『あ、一応補足すると、今の曙は若干拗ねてツンデレモード入っているから』

『つまり今の発言は、大好きという意味でオツケーぴよん？』

『そーゆーことになるな』

これを受けて曙、完全にいじけてしまった。この場に榊原がいないことが、せめてもの救いであろうか。

「・・・本当に容赦がないな、駆逐艦娘は」

隊内通信をオフにした状態で、清水がポツリと呟いた。

「ここで聞いたことは、榊原には言わない方がいいな」

「・・・そうした方が賢明だな」

そうした方が面白い、と言わなかった分、自分は良心的であると摩耶は思うことにした。

その時、電探が影を捉えた。摩耶の意識は、急激に冷却されて目の前の状況に向きあう。

夜の戦闘は、いつでも突然訪れる。

「電探に感！」

「距離、方位報せ」

弾んでいた少女たちの会話が、ピタリと止まっている。摩耶は電探に映る影の諸元を読み上げた。

「本艦よりの方位一三五、距離三五〇」

「合戦準備。一救艦に通報。もう少し引き付けたのち、こちらから仕掛ける」

端的に指示を飛ばした後、清水はさらに一言、付け加える。

「まだ話していいぞ。その方が、変な力が入らずに済む」

言われてぎくりとしたのは摩耶だ。名指しはしないが、見抜かれていたのだろうか。

日中から何となく感じてはいたが、やはり肩に力が入らずにはいられなかった。今も少し痛い。

『・・・で、結局、曙のドレッサーには何が隠されてるんだ？』

『それはねえ〜』

『ああもう、あんたたちは！それをぶり返すか！帰ったら特別訓練をつけてやる！』

桑原桑原と、摩耶は心中で手を合わせる。曙の特別訓練は、霞と比べ物にならないくらい、容赦がない。つくづく、駆逐艦娘でなくてよかったと、摩耶は思った。

『いいんじゃない。日頃の訓練の成果を見せてきなさいよ』

普段、秘書艦の曙に代わって駆逐艦の訓練を受け持つ霞が、さらっと特別訓練をすり抜けている。

『いやー、ちよつとあたしは遠慮しとくかな』

長波は早速卯月を裏切ってしまった。

『じゃ、卯月とマンツーマンね』

『ま、待つびよん！普段嚮導する側の霞こそ、たまには訓練をつけてあげるべきだと思うびよん！その方が霞のためになるとーちゃん思っぴよん！』

卯月、一旦は逃れた霞を巻き込む。

『卯月、後で特別訓練つけてあげるわ。感謝しなさい』

霞の声に、卯月は墓穴を掘ったことに気づく。曙ほどではないとはいえ、霞の特別訓練も、大浴場の浴槽で脱力する程度には厳しいものである。

他愛のない会話はなおも続いていた。しかしながらその間にも、各艦は着実に戦闘の準備を進めている。もはや身に染みついた作業だ。

「距離三〇〇」

「第二戦速、艦隊逐次回頭、針路〇六五」

清水の指示通り、三救艦の六隻が回頭を始める。丁度、接近する敵艦隊に対して、頭を抑えに行く形だ。

『清水少佐、聞こえる？』

「摩耶」に入感した、戦闘中でもものん気な声は、一救艦を率いる手負いの将、角田だ。清水が元々連合艦隊付きで横須賀に所属していたということもあり、お互いに顔見知りではあるらしい。

「感度良好です。どうぞ」

『ん、オツケー。そつちに着くのは、十分後くらいになると思うから、そのつもりで。あまり無理はしないようにね』

それを貴女が言うか、というツツコミを、摩耶は胸の内に仕舞い込むことにした。

「そつくりそのまま、お返ししたい気分ですよ」

が、せっかく摩耶が飲み込んだ言葉とほぼ同義のことを、清水は通信機の向こうへ返答する。角田の笑い声が聞こえてきた。

『言つてくれるねえ』

「塚原大佐からは、貴女のことにも頼まれています」

『まったく、心配性なんだから』

その言葉はおそらく、横須賀で機動部隊を率いている提督に向けられたものだ。

『まあ、お互い無理し過ぎない範囲で、無理をするということ』

「・・・そういうことになっておきます」

『じゃあ、よろしくー』

そう言つて切られた通信に、摩耶ならば盛大な溜め息を吐き出したところであった。

「距離二〇〇」

いよいよ、彼我の距離が二万メートルに迫っていた。まだ目視はできない。さすがの夜間見張り員でも、ほとんど光の漏れ出ていない暗闇の中、二万メートル先の敵艦を発見するのは、よほどの幸運がなければ不可能であった。

今は電探に頼るしかない。しかしながら、“摩耶”搭載の二一号や二二号は、射撃管制に使えない。最終的には、測距儀による目視で諸元を算出するしかないのだ。

「零水偵、発艦準備完了」

頼みの綱は、上空から吊光弾を投下して敵艦を照らす、水上偵察機であった。

火薬の炸裂音が響き、カタパルトから零水偵が押し出される。高度を稼いだ機体は、電探の捉えた敵影へと接近を図った。

やがて、吊光弾が投下される。月に代わって、淡く白い光が波間を照らし、暗闇にゴツゴツとした敵艦の姿を映し出した。

戦海ノ乙女たち

「撃ち方始め」

「てーっ！」

清水の声に応えた摩耶の絶叫。次の瞬間、
“摩耶”艦上の四か所に、めくるめく閃光が走った。接近する敵艦隊に向けて、三救艦が応戦を始めた瞬間だった。

敵艦隊の方も砲戦を始める。上空の零水偵から確認された編成は、重巡二隻、軽巡（雷巡）一隻、駆逐艦三隻。先頭の旗艦と思しき重巡、及び駆逐艦の一隻はeliteであることが確認されていた。

彼我の距離は八千メートル。

『おい、清水提督』

第一射の結果を確認する“摩耶”艦橋の清水を呼んだのは、すぐ後ろにつく木曾だった。

『そろそろ仕掛けてもいいか？』

“摩耶”を除いた三救艦の各艦は、お世辞にも砲戦能力が高いとは言えない。駆逐艦ならまだしも、重巡と撃ち合う力はなかった。

その代わりに、彼女たちは魚雷の搭載数が多い。中でも“木曾”は圧倒的だ。大規模改装によって重雷装巡洋艦へと変貌した彼女には、五連装魚雷発射管が片舷四基計八基も据えられている。片舷二十射線。

彼女の姉にあたる“北上”と“大井”は、五連装魚雷発射管を片舷五基計十基と“木曾”よりも多いが、代わりに“木曾”には、艦隊全体の雷撃戦を指揮することが可能な統合雷撃戦指揮所が設けられている。水雷戦隊全体で見た時の雷撃能力は、姉二人よりもむしろ上だ。

木曾としては、“摩耶”が砲戦で敵重巡を引き付けている間に、雷撃戦を仕掛けるつもりなのだろう。砲戦を行いつつ、航跡の見えない酸素魚雷の大群に意識を向けるのは、いくら深海棲艦でも無理難題というものだ。それだけ、雷撃の成功率は高くなる。

摩耶が誤差修正を行う中、清水がマイクを取った。

「任せる。暴れてこい」

『任された。行くぞお前ら！』

清水の許可を受けた木曾が、ニヤリと笑った雰囲気がした。彼女に呼ばれた駆逐艦娘たちが、口々に答える。

『掛け声はいいから、さっさと転針しなさい、キャプテン・キッツ』

『あんたが指示しないと始まらないでしょうが、キャプテン・キッツ』

『眠いんだけど、キャプテンキ・キッツ』

『うーちゃんここまで口悪くないぴよん、キャプテン・キッツ』

相変わらず、適当というか、口の悪い駆逐艦娘たちであった。

『・・・なあ、摩耶』

その先に続くであろう木曾の言葉を察して、摩耶は口を開く。

「大事な駆逐艦たちを頼んだぜ、キャプテン・キッツ」

『・・・了解』

諦めに似た返答をしても、次の瞬間にはその声を張る。凜とした、一本筋の通った声色だった。

『針路〇九〇、我に続け！』

木曾の掛け声と共に、快速重雷装の水雷戦隊が突撃を開始する。鍛え上げられたその腕を、今こそ示す時であった。

摩耶も負けていられない。空振りに終わった二射を踏まえて、修正第三射が放たれた。交互撃ち方の各砲塔から一発ずつ計四発の二〇・三センチ砲弾が撃ち出され、迫る敵重巡に向けて飛翔していく。十数秒後の弾着を、摩耶はジツと待った。

吊光弾に照らされた敵重巡の周囲に、四本の水柱が上がった。キラキラと怪しい光を放つ海水の塊に、摩耶は拳を握る。遠二、近二。夾叉だ。

「次より斉射！」

摩耶が宣言した直後、今度は敵重巡の八インチ砲弾が到達した。急速に飛翔音が迫ったかと思っただ直後、艦の両舷で海面が割れ、崩れ去る水柱がバラバラと甲板を叩く。

タイミングから見て、一番艦のり級eliteであろうか。あちらも“摩耶”と同じく、第三射で夾叉を得ることができたのだ。

——さて、どうするか？

チラリと隣の清水を窺う。戦艦よりも速力があり、小回りがきく重巡であれば、何も馬鹿正直に砲戦を行うことはない。戦いようはいくらでもある。

清水は摩耶と視線を合わせることなく、真つ直ぐに敵艦を見据えたままだ。暗闇の中、その口元だけが、鋭く動く。

「撃て。撃ち倒せ」

その言葉に込められた意味に、気づかない摩耶ではなかった。

斉射の準備が整った。尾栓から砲弾が込められた二〇・三センチ砲が鎌首をもたげ、敵一番艦に向けてギリリと砲身をきらめかせる。

「てーっ！」

「摩耶」右舷へと指向した八門の主砲から、紅蓮の炎が沸き起こった。反動が艦体を横に揺らす。

数秒後、敵一番艦にも主砲発射の炎が踊った。その量は先ほどまでよりも明らかに多い。斉射に移行したのは明白であった。

条件は五分。後はどちらが先に音を上げるかだ。

「摩耶」の第一斉射が敵一番艦を包み込む。敵艦の装甲にぶち当たった砲弾が信管を作動させ、真つ赤な火炎となるが、すぐに水柱がカーテンとなって戦果を覆い隠す。被害のほどは窺い知れなかった。

「観測機より、命中弾二」

上空の目を務める零水偵が報告を寄越す。零水観と違って弾着観測専門の機体ではないが、滞空時間が長く、任務に就くことは十分に可能であった。

零水偵の報告と入れ替わるようにして、敵一番艦の第一斉射が降り注ぐ。至近弾の爆圧が艦底を突き上げた。命中弾の衝撃は後方から伝わってくる。

艦装を通して痛みが伝わることはない。多少チクリとした程度だ。被害は大したことはない。

数秒遅れで、二番艦につけるり級の通常型からも砲撃が届く。こちらはまだ精度が高くない。

『摩耶！』

第二斉射を放った「摩耶」の艦橋に、木曾の声が割り込む。

「なんだ？」

『投雷距離を四〇にする！それまで牽制を頼んだ！』

「了解！」

木曾はまさしく、敵艦隊を一網打尽にするつもりだ。そのための肉薄雷撃。その間、木曾たちの突撃を妨害させないのも、摩耶の役目だ。その「木曾」たちは、接近を阻もうとする子級と撃ち合っている。子級の砲戦能力は低い。低下した「木曾」の砲撃能力でも、十分に渡り合うことが可能だった。

現在の「木曾」たちと敵艦隊の距離は、七千メートルを切ったところ。三〇ノット超で接近しているから、単純計算で三分と少しといったところだろうか。

——支えてみせる・・・！

敵弾落下の衝撃に耐えながら、摩耶は敵艦隊を睨んだ。

景色は違えど、想いは同じ。あの日守れなかつたものを守るという決意。

この夜を超えることが、摩耶に与えられた試練なのか。

気負いは不思議とない。想像していたよりもずっと、心は軽い。

早くも第四斉射の咆哮が上がる。斉射間隔は戦艦の半分であり、砲戦のテンポも早い。艦体は幾度となく撃ち震える。

零水偵の報告を合計すると、「摩耶」は三度の斉射で四発の命中弾を与えている。一方の敵一番艦は、三度の斉射で三発の命中弾を「摩耶」に与えていた。

両者共に目立った被害がないまま、「摩耶」第四斉射が落下する。瞬間、立ち上る火柱の中に、木の枝のような細い物体が舞った気がした。しかしそれを確かめる暇もなく、水柱が敵一番艦の手前にそそり立つ。

敵一番艦の被害は、零水偵が確認していた。「摩耶」と入れ替わりに到達した敵一番艦の八インチ砲弾が降り注ぐ中、報告が上げられる。

「観測機より、命中弾一。第一砲塔を破壊した模様」

暗闇の中での観測であるから、全面的に信頼することはできない。ともかく、次の敵一番艦の射撃を見てみないことには。

新たな被弾に耐えた「摩耶」が、五度目の斉射に踏み切る。咆哮から衝撃波が生じて海面にぶつかり、さざ波を綺麗に打ち消す。硝煙の匂いは、艦橋にまで漂っていた。

「摩耶」から数秒遅れて、敵一番艦の艦上にも主砲発射の炎が確認できた。真っ赤な火球が艦の前後で生まれ、ガツシリとした艦上構造物を照らす。

しかしながら、その量は、先の第四斉射よりも明らかに少なかった。具体的には、艦前部第一砲塔の砲炎が確認できない。

「敵艦、第一砲塔沈黙！」

これで優位に立てる。一気に畳みかけ、勝利をこちらのものにする。第五斉射が再び一発の命中弾を得たのを見届けて、摩耶は第六斉射の準備を急がせた。

敵一番艦から放たれた第五斉射は、一発が「摩耶」の前甲板に命中した。非装甲区画に当たったのか、暗闇の中でも確認できるほどの破孔が穿たれ、そこから火柱が生じる。艦装を通して痛みを感じるが、致命的な個所への被弾ではない。艦は問題なく航行を続けている。

『距離六〇！』

木曾がそれだけ報告する。見ると、千級が炎を上げて海面を漂っていた。多数の命中弾を受けて、戦闘航行不能に陥ったのだろう。「木曾」たちはなおも三隻の駆逐艦と戦闘を続けているが、優勢に戦いを進めているらしかった。

が、その「木曾」の周囲に、新たな水柱が立ち上った。

——しまった・・・！！

摩耶は内心で歯噛みする。間違いなく、あれは敵重巡二番艦の射撃だ。先ほどまで「摩耶」を目標としていたその主砲は、接近する水雷戦隊へとその矛先を転じたのであった。

通常型とはいえ、重巡は重巡。八インチ砲を搭載し、装甲もそれなりだ。脆弱な「木曾」や駆逐艦たちが相手取るにはいささか荷が重い。それに「木曾」は、一発でも被弾すれば魚雷が一時に誘爆し、大

損害を被りかねない。

方法はただ一つ。『木曾』たちが回避運動でやり過ぎしている間に、摩耶が敵一番艦を撃破し、砲撃の目標を二番艦へと転じることだ。第六斉射が放たれた。『摩耶』の主砲は、いまだ全てが健在であり、二〇・三センチ砲八門の猛々しい咆哮を轟かせている。

敵一番艦も新たな射弾を放つ。沈黙している第一砲塔を除いた六門の主砲から砲炎を吐き出し、『摩耶』に対抗してくる。あたかも、手負いの龍が怒りにまかせて、荒々しい炎を噴いているかのようであつた。

先に飛翔を終えた『摩耶』の砲弾が、敵一番艦の頭上から降り注ぐ。二〇・三センチ砲弾は甲板に突き刺さって盛大に爆ぜ、大穴を穿ち、爆風で周囲のものを薙ぎ払う。これで、与えた命中弾は十発。

数秒遅れで迫った飛翔音が途切れると、敵一番艦の第六斉射が弾着する。襲ってきた衝撃はそれまでで最も大きかった。艦橋基部に命中したらしい八センチ砲弾は、そこに据えられていた一二・七センチ連装高角砲をずたずたに引き裂いてスクラップに変えていた。

「てーっ！」

だが、『摩耶』から戦闘能力を奪うまでには至らない。摩耶の闘志をくじくこともない。装填が終わった第七斉射は、裂帛の摩耶の声と共に、厳かに放たれた。

八発の二〇・三センチ砲弾は、夜の空気を切り裂いて飛翔していく。上空に緩やかなアーチを描いた砲弾は、やがて重力に任せるまま、敵一番艦に降り注ぐ。

摩耶が目視で確認できた火柱は一本。それ以外は全て海面を叩き、海水を沸騰させる。

その水柱が崩れる頃、敵一番艦からの砲撃が降り注ぐ。その飛翔音に、摩耶は違和感を抱いた。

それまでよりも、遠い気がしたのだ。

八インチ砲弾が落下する。しかしその水柱は、まるで見当違いの方向に立ち上っていた。命中弾どころか、『摩耶』には至近弾すらない。

先の第六斉射が敵一番艦に与えた被害を、摩耶は悟った。命中した二〇・三センチ砲弾のうち一発が、敵一番艦の射撃指揮装置を破壊したのだ。統制のとれた射撃が不可能となった敵一番艦は、砲塔からの各個照準による砲撃を行ったのだろうが、その結果は見ての通りだ。さらに、敵一番艦の様子に変化が訪れる。突然明後日の方角へと舵を取り始めたのだ。

砲撃を一時止める。取舵を切っている敵一番艦は、回頭を止めることなく、大きな円を描き始めた。主砲射撃指揮装置に続いて、今度は舵をやられたらしかった。

敵一番艦は、最早脅威とはなり得ない。

「目標を変更。新目標、敵二番艦」

清水が淡々と指示する。「摩耶」の測距儀が旋回し、今も「木曾」に向けて主砲を放っている敵二番艦を指向した。

敵二番艦の頭上に、新たな吊光弾が投下される。暗闇に浮かび上がったその姿への諸元算出を終えた「摩耶」が、再び主砲を放つのに、さして時間はかからなかった。

佐世保ノ記憶

右舷を掠めた水柱を見遣つて、木曾は内心で両手を合わせ、桑原桑原と唱えた。弾着したのは深海棲艦の八インチ砲弾。先ほどから「木曾」に狙いをつけている、敵二番艦からのものだった。

重雷装巡洋艦という、聞こえはカッコいい艦種へと改装された「木曾」であるが、その実は魚雷を満載した、走る弾火薬庫である。一発の被弾が命取りになりかねない。

それでも「木曾」が重雷装巡洋艦へと改装されたのには、日本海軍内にある「砲雷分離思想」という考え方に影響されたところが大きい。読んで字のごとく、「砲雷分離思想」とは、艦隊内において砲撃と雷撃を担当するBOBを明確に分けるといふ思想のことである。

深海棲艦との戦いは、主に島嶼の奪還を目的としたものが多い。必然的に、島嶼の守備に当たる艦隊と、水上砲雷撃戦となる。この砲雷撃戦を制するため、日本海軍は各艦の役割をより明確にしたのだ。

当然、「砲」を担当するのは、戦艦や重巡である。これに対して、「雷」を担当する艦として日本海軍が注目したのが、太平洋戦争前に旧帝国海軍が産み出した、重雷装巡洋艦という艦種であった。

「北上」、「大井」の二隻は、日本海軍所属のBOB内で真っ先にこの改装を受け、フィリピン、マリアナ、パラオの解放戦に参加した。結果は良好。戦艦部隊との連携によって島嶼近海まで突入した「雷」担当のBOBたちは、その魚雷をもって見事制海権を確保して見せた。

この戦果を受けて改造計画が策定されたのが、「木曾」であった。日本海軍内では三隻目の重雷装巡洋艦——雷巡となる。この他、「長良」型の後期三隻（「由良」、「鬼怒」、「阿武隈」）のうち、「鬼怒」と「阿武隈」についても、それぞれ雷巡やそれに近い目的の改装が計画されている。

改装の方向性としては、雷巡以外に機動部隊随伴の防空巡洋艦へと改装される艦も少なくない。

火力、雷装ともに中途半端な日本海軍の軽巡は、能力を特化させる

ことで、一線級の戦力であり続けているのだ。ともあれ。

木曾は敵二番艦を見つめ続ける。上空の吊光弾で照らされるその姿は、「木曾」たち「雷」担当のBOBが最も恐れる重巡洋艦のものに他ならない。通常型という性能も練度も高くない種別であっても、脅威に変わりりはなかった。

その敵二番艦の周囲に、水柱が立ち上る。マストほどはあろうかというその大きさは、紛れもない二〇・三センチ砲によるもの。敵一番艦を撃ち倒した「摩耶」が、その目標を二番艦へと変更し、最初の射弾を放ったのだ。

夜間とはいえ、両者の距離はすでに七千メートルを切っている。第一射から、その射撃は正確だ。四本の水柱は、敵二番艦の右舷、かなりの至近距離に生じている。

——落ち着いてるな。

「摩耶」の艦娘の様子を、木曾はそう評する。

木曾と摩耶とは、木曾がまだ佐世保鎮守府所属だった時からの知り合いだ。着任はほとんど同時、わずかに一週間ほど木曾が早いくらいである。

お互いに、所属する艦隊——直属の提督は違った。木曾は佐世保鎮守府執務室長艦隊の指揮下、一方の摩耶は当時着任間もなかった新人提督の指揮下であった。

仰ぐ指揮官は違えど、同じ鎮守府、同じ釜の飯を食べる仲間。着任時期が近かったことと、お互いに姉妹艦がいなかったこともあり、よくつるんでいた。

「あの日」も、木曾は摩耶の近くにいた。正確には、「摩耶」の救援に駆け付けたのが「木曾」たちの部隊であった。

激しい炎を上げる「摩耶」。撃ち碎かれた第三砲塔。抉れた甲板。吹き飛んだ後部煙突。

艦橋の横にまで、弾痕が見えた。

「あの日」、どれほど壮絶な経験を彼女がしたのか、木曾には想像もつかない。

ただ一つ言えることは、摩耶という艦娘が、基本的に明るく気さくであること。それゆえに、誰かにその内心を打ち明けられないこと。その胸の内を、無理矢理にさらけ出させるほど、木曾は摩耶の中に踏み込める存在ではなかった。きっとそれは、姉妹艦だけの特権だ。

「あの日」から数日が経てば、摩耶の表情には再びいつもと同じ色が戻り始めた。いつも通りにご飯を食べ、冗談を言い、風呂で温まる。唯一変わったのは、彼女が自らの艦に誰も乗せなくなったこと。まるで、ぽっかりと空いた空間を、誰かに埋められることを拒むかのよう。

木曾の大湊行きが決まったのは、被弾によって失われた第三砲塔を高角砲へと換装した「摩耶」が、その慣熟訓練を大方終えた頃だった。

夕陽の中、どこか憂いを帯びたようにたたずむその姿が、なぜか印象に残っている。

大湊警備府での北方警備任務に従事している間、木曾は一度も摩耶と接触をしていない。筆まめな方ではなかったし、そもそも携帯電話やスマートフォンのようなものは持っていない。各艦の通信装置を個人的な用事に使うなどもってのほかだ。近況を報せることも、知ることもしなかった。

「パラオ沖海戦」の後、同地の警備隊に推薦された木曾は、そこで久方ぶりに摩耶と再開する。

——「おう、元気だったか？」

——「見ての通りだ。そっちも、元気そうだな」

挨拶は、あの頃と変わらない、明るくて軽いもの。むしろ南国の太陽のせいだ、一層眩しくなっているくらいだ。

しかし、相変わらず摩耶は、自らに誰かが乗ることを良しとしなかった。

それが、「あの日」からの逃亡に他ならないことは、木曾も、もちろん摩耶も気づいていた。けれどもやはり、摩耶の内面に土足で踏み込んで、空いた空間を埋めてやれるほど、木曾は礼儀知らずでも、近い存在でもなかった。

それは、彼女たちの新しい提督となった榊原にしても同じだった。彼も、摩耶の中に空いた空間を埋めるまでにはならなかった。

——しかしまさか、*「あっちの提督」*が、な。

あれほど誰かを乗せることを拒んでいた摩耶が、初めて自らに人間を乗せた。新しい提督。摩耶が初期艦に選任された、清水提督。

なぜ彼だったのだろうか。

清水の中に、何か通じるものがあつたのだろうか、木曾は考えている。

二人は似ている。摩耶が矛盾だらけなら、清水も矛盾だらけだ。

それは恐怖からか、強すぎる責任感からなのか。当人たちがそのことに気づいているかは知らない。だが一步引いている木曾にはわかつた。

——まあ、後は当人たちに任せるしかないか。

摩耶はようやく、その心の扉を開いた。その意志に、想いに、清水は応える気があるのか。応えられるのか。

木曾にはもう、見守る以外に選択肢がなかった。

*「摩耶」*の第二射が、敵二番艦に降り注ぐ。瞬間、白い水柱に混じって、真つ赤な火柱が敵艦上に生じた。*「摩耶」*は、早くも第二射で命中弾を得たのだ。

その様子を見ていた木曾は、一気に息を吐き出す。

何も、ただ魚雷を撃ち込むだけが、水雷戦隊の役目ではない。「砲」と「雷」の連携戦術こそが、「砲雷分離思想」の真骨頂だ。

「摩耶」

一度閉じていた回線を、再び開く。第三射の準備を進めているのか、摩耶の返答は短かつた。

『なんだ』

「あいつのスコアは、お前にやる」

通信機の向こう、摩耶は木曾の言葉に何かを返すでもなく、黙っている。それには構わず、木曾は続けた。

「お前が敵二番艦を沈めろ」

『・・・どうした木曾。頭でも打ったか』

コノヤロウ。二度とこんなこと言つてやるものか。

「俺はいたつて正常だよ。ピンピンしてるついでに言うと、俺の判断はこうだ。戦艦ならまだしも、たった一隻の重巡に、五十本近い魚雷は無駄遣い極まりない」

半分は詭弁だ。どんな相手でも、全力で倒しにいかなければ、逆に手痛い被害を被りかねない。

それでも、この敵艦を撃ち破ることは、摩耶にとってそれ以上の意味を持つことになる。この夜を越えることが、摩耶にとっては何よりも大切で、必要なことだ。

壁を撃ち破れ。恐怖に撃ち勝て。過去の束縛から、摩耶が逃れるために。

「俺たちが敵の砲撃を引き付ける。叩けるだけ叩きつけろ」

「砲雷分離思想」の真骨頂は、「砲」と「雷」の連携にある。何も「雷」がトドメを刺す必要はないのだ。

『・・・わかった。ありがたく、スコアはもらうぜ』

木曾が口にしなかった意図を、摩耶が理解したかどうかはわからない。それでも、彼女は戦う意志を示した。マリアナを守るために、自らの力を振るうことを。

「摩耶」の第三射、敵二番艦に対する初めての斉射が放たれた。艦上にはそれまでに倍する閃光が走り、赤々と海面に反射する。砲炎は「木曾」艦橋の窓に映り、一瞬艦橋内に朱色が差した。

「転針、針路〇七五―」

「曙」以下の駆逐艦に命じて、自らも舵を切る。あたかも、「木曾」たちがまだ、敵二番艦への肉薄を図っているように見せかけるためだ。

敵二番艦にも新しい動きがあった。鋭く面舵を切ったかと思うと、反転離脱にかかる。不利を悟り、これ以上の戦闘を逃れようと試みているらしかった。

——させるかよ！

「針路一三〇―」

敵二番艦よりも優速な「木曾」たちは、その逃走を防ぐべく、さら

に舵を切る。清水は止めてこない。彼もまた、この夜の意味を理解しているらしかった。

悪いが、敵二番艦には、ここで生け贄となってもらう。

相対位置の変化に伴い、諸元を再算出していた「摩耶」が、その砲口に新たな火炎を生じる。よほど自信があるのか、最初から斉射を行っていた。

「左砲戦！敵二番艦の頭を押しさえろ！」

木曾は更なる指示を与える。次の瞬間には、すぐ後ろにつける「曙」が、砲戦の口火を切った。どうやら、元々敵二番艦に照準をつけていたらしい。

「木曾」も発砲する。前甲板二基、後甲板一基が据えられた一二七センチ連装高角砲が、オレンジ色の炎を吐き出した。

「木曾」たちと敵二番艦の間には、いまだ五千メートル半の開きがある。夜間のこの距離で砲撃が命中するとは、木曾も考えていなかった。それでも、小口径砲ゆえの速射性能をいかし、面の制圧力を発揮することは可能だ。

もつとも、中には「曙」のように、初弾から命中弾を出す高練度な駆逐艦もいるが。

「摩耶」の砲撃は、三射目から敵二番艦を捉えた。最初の一発が後甲板に突き刺さったかと思うと、爆炎が噴き上がって細かな破片が舞う。

「摩耶」の斉射は、およそ二十秒に一回。その度に水柱が敵二番艦を覆い、命中弾炸裂の閃光が艦上に走る。艦が上げる軋み音が聞こえるかのようだ。深海棲艦が苦悶している。

第六射が敵二番艦を襲った時、すでにその運命は決していた。炎に包まれた敵二番艦は、先ほどの敵一番艦と同じく、みるみるうちに速力を落としていく。もはやその戦闘能力が無きに等しいことは、遠目に見ている木曾にもよくわかった。

筋肉を弛緩させる。安堵に近い頬の緩みが、木曾の顔に浮かんでいた。

これで、摩耶が「あの日」を越えられたのかは、木曾にはわからない。

い。それはきつと、マリアナ防衛戦が終結して、無事にパラオに帰ることができたら、わかることだろう。

守り切る。木曾が決意も新たに「摩耶」を見遣った、まさにその時であつた。

電探に新たな反応があつた。さらに次の瞬間、その反応の正体を示すように、水平線に曙光を思わせるまばゆい光が沸き起こつた。

「新たな艦影！本艦よりの方位〇九五、距離二万！」

十数秒後、重巡のそれとは比べ物にならない衝撃が、艦底部から「木曾」を突き上げた。

目的ハ何カ

夜を映し出す照明弾の光と、その下で特大の水柱に包まれる軽巡洋艦の姿を、角田の目はギリギリで捉えていた。

「金剛！」

「電探に、小さな感がありマース！この距離でこれだけの影なら、間違はなく戦艦デース！」

横に控える艦娘の反応は早い。独特の語尾が、戦闘中はさらに強調されている。

戦艦娘の金剛。角田率いる横須賀の水上部隊旗艦を務める比叡の、すぐ上の姉に当たる。いつでも明るく親しみやすい艦娘だが、その戦闘指揮能力は経験に裏打ちされた確かなものだ。

損傷が激しく、旗艦任務続行不能と判断された「比叡」に代わり、今は一救艦の旗艦となっている。

「距離三五〇。三救艦からの距離は二〇〇」

「夜戦にしては遠いねえ」

「遠いデスネー」

いかに深海棲艦の戦艦が電探を搭載しているとはいっても、夜間距離二万メートルでは戦闘を行うこと自体現実的ではない。せめて一万五千メートルまでは近づきたいところだ。

ではなぜ、敵戦艦はこの距離で砲撃を始めたのだろうか。

「ともかく急ごう。こっちも、距離を縮めないことにはどうにもならない」

「了解デス。三救艦にも連絡しマース」

角田の意図を察して、金剛がすぐに三救艦旗艦「摩耶」に電文を送る。内容はもちろん、撤退しつつ一救艦との合流を図れというものだ。

「摩耶」からの返答は早い。

『獲物はそちらへ追い込む』

短く言って切れた清水の声に、角田は苦笑する。

「これは撤退する気ないねえ」

「困ったものデース」

そう言いつつも、金剛は各部の状況を確認し、戦闘準備を進めていく。

「観測機、発艦準備完了デース」

「すぐに出して」

角田の要請に応え、〃金剛〃後甲板第三、四砲塔間に設置されたカタパルトから、零水観が放たれた。火薬式のカタパルトから洋上へと躍り出た双葉単フロートの機体は、弾着観測の任に着く。

「〃摩耶〃一号機（〃摩耶〃搭載の零水偵）より、敵戦艦はル級改 f 1 a g s h i p と認む」

「あいつかー」

昨夜の戦いが脳裏をよぎる。あの戦艦一隻のために、〃比叡〃は甚大な被害を受けた。一方、十発近い四一サンチ砲弾を撃ちこんだにもかかわらず、ル級改の砲火には全くの衰えが見られなかった。

ル級改は、〃金剛〃型の手には余る。角田はそう判断していた。

まさかそんな難敵と、二夜連続で戦うことになるとは。

「・・・やれるね、金剛」

「やれない、なんて答えるとしても思いマシタカ？」

「いいや、全然」

「それじゃあ、そういうことデース」

一瞬だけ角田を見、微笑みを湛えて前を向いた金剛の横顔は、次の瞬間には妖しい光を宿して黒々とした海面の先を見つめていた。

「それに、妹を傷つけられて黙つてられるほど、私は人間ができてマセーン。復讐は必ず成し遂げマース」

「・・・そうだね。僕も、自分の嫁さんを傷つけられた相手に慈悲をかけるほど、聖人じゃないからね」

「私は、一度として角田テイトクと比叡ちゃんのケツコンを認めたこととはありませんヨ？」

「またまたー」

ひらひらと手を振る角田に、金剛は深い溜め息を吐いた。それから何事かを呟いた気がしたが、声は機関の上げる轟音にかき消され、唇

の動きは暗くて読み取れなかった。

聞き返す必要性を感じず、角田は余計な思考を頭の隅に押しやる。ル級改から放たれる一六インチ砲弾は、いまだに三救艦を標的としており、「木曾」の周囲に巨木を思わせる水柱が林立する。その間を細かく舵を切りながら進む軽艦艇たちは、さながらジャングルの中を行く探検隊のようであった。

——いや、マングローブの間を泳ぎ回る、恐ろしい肉食魚と例えるべきかな。

不用心に水辺に近づいた動物は、容赦なく食い殺す。

だがしかし、今彼女らが相手取ろうとしているのは、大河の支配者たる巨大ワニだ。あまりにも分が悪い。

戦うにしろ、少しでも手数が必要になるはずだ。

「距離三〇〇」

『提督、先行しても?』

入った通信は、「高雄」からのものだ。「金剛」よりも、彼女たちの方が足が速い。砲戦距離に捉えるのは彼女たちの方が早いはずだ。「うん、よろしく。まともに撃ち合わず、少しずつこちらに引き付けてね」

『了解です』

言うや否や、「高雄」以下が加速して「金剛」の前に出る。二救艦から急遽参加している「初雪」と「深雪」も付き従った。それでも、砲戦距離に捉えるには十数分がかかるだろうか。

それまでは何とか、三救艦に頑張ってもらおうしかない。

「『摩耶』発砲!」

三救艦旗艦の重巡は、「高雄」たちの妹に当たる。勇猛果敢な艦娘であると伝え聞いていた。そしてその戦闘能力も、敢闘精神に見合った、姉譲りの高いものだ。

「どの辺で撃てる?」

「どの辺で撃ってほしいデスカ?」

「二〇〇」

「難しい要求をしてきますネー」

それでも、金剛は「できない」とは言わなかった。

理論上、二万メートルの距離から電探を用いた射撃を行うことは可能だ。可能だが、やはり現実的とは言えない。条件はBOBも深海棲艦も同じだ。

前方の海面では、お互いの砲火が入り乱れていた。深海棲艦の巨弾を軽艦艇たちが回避する。中口径砲弾が深海棲艦に挑みかかる。

「距離二五〇」

報告が寄せられた次の瞬間、ル級改が大きく舵を切った。右舷を三救艦に向けていた巨艦は大きく面舵を切り、その艦首をこちらへと向ける。その艦上で、一時的に砲火が収まっていた。

一体どういうことか。その理由は、ル級改の砲撃を紙一重で回避し続けていた軽巡洋艦以下水雷戦隊の動きでわかった。

“木曾”を先頭として一糸乱れぬ艦隊運動を行っていた水雷戦隊は、全艦が大きく取舵を切り、離脱にかかっていた。その動きは、魚雷発射後のそれに他ならない。彼女らは、自らに搭載された必殺の酸素魚雷を放ったのだ。

とはいえ、お互いの距離はまだ一万メートルほどがある。この距離で魚雷を放つても、命中は望めなかった。ただし、魚雷が航走している数分間の行動の自由を、ル級改から奪うことができる。

ここぞとばかりに、“摩耶”が主砲を放つ。一方のル級改も、対応可能な前部二基の主砲に発射炎をきらめかせるが、さすがに交互撃ち方だった二発では、有効な射撃とはいかなかった。

「敵戦艦に命中弾！」

先に命中弾を出したのは“摩耶”だ。ル級改の左舷両用砲群辺りに主砲弾炸裂の閃光が走り、吊光弾の中で橙色の炎が踊る。戦艦のそれに比べれば遥かに小さいが、破壊力は本物だ。

二十秒後には、“摩耶”が斉射に移る。一方のル級改も、どこか苛立たし気に、前部全六門一六インチ砲を咆哮させた。業を煮やして、斉射に移行したのだろう。

「距離は？」

「二一〇。あとちよつとデス」

「針路を変えるよ。三、四番も使えるようにする。針路一〇五」

「取舵一〇、針路〇七五」

「金剛」は、すぐには変針しない。四万トン近い艦体に生じる慣性力に打ち勝ち、舵が利き始めるには数十秒がかかった。

転針の指示から三十秒ほど直進を続けた「金剛」が、次第に左へと艦首を向け始める。正面に見えていた交戦の炎が、ゆつくりと右舷側へ流れていく。

「清水少佐、聞こえてる？」

転針を終え、いよいよ砲戦を始めようかという中、角田は再びマイクを取る。「摩耶」艦橋の少佐からは、すぐに返事があった。

『感度良好です』

「三救艦は離脱。以後は一救艦に任せてもらうよ」

『意見具申。』「摩耶」のみは現海域に留めるべきと考えます』

——こんなに頑固者だったかなあ。

内心で苦笑しながらも、角田の答えは決まっていた。

「意見具申了承。『摩耶』は現海域に留まって」

『了解しました』

通信が切れると同時に、「摩耶」が新たな斉射を放つ。一方のル級改は、酸素魚雷の網から抜け出せていないのか、いまだ直進を続けている。その前部甲板にも、次なる斉射の炎が踊った。

「へい、テイトク。射撃準備完了ネー」

「距離は？」

「二〇〇ジャストデース」

「よし、砲撃始め」

「撃ちます、ファイアー！」

次の瞬間、鎌首をもたげた各砲塔右砲から、巨大な火球が生じた。艦左舷前方へと指向した主砲口から砲弾が飛び出し、その反動が一瞬艦の前進を止めたかのような錯覚にかられる。鼓膜をしたたかに打つ轟音が、四一サンチ砲の威力を物語っていた。

加熱した右砲から、陽炎が立つ。次弾装填のため下げられた右砲に代わり、今度は左砲が持ち上がった。弾着の確認と誤差修正が終わり

次第、発砲する手はずだ。

「弾着アース！」

次の瞬間、ル級改の周囲に巨大な水柱が立ち上った。吊光弾に照らされる水柱は莊嚴の一言に尽き、キラキラと輝いている。あれが、恐るべき破壊力を秘めた砲弾によって作られたものだとは思えないほどだ。

観測機が報告を上げ、誤差修正が行われる。再入力された諸元に従って、各砲の旋回角と府仰角が調整された。

第二射を放とうとしたその時、目を疑うようなことが起きた。

「敵戦艦面舵、反転！離脱していきマス！」

「何!？」

——— どういうこと？

昨日と同じだ。ル級改は再び、離脱にかかる。まるで戦いを避けているかのように、だ。

「・・・どうしマスカ？」

困惑気味に金剛が尋ねる。しばらく考えた角田は、静かに口を開くしかなかった。

「砲撃止め。深追いはしない」

「・・・了解デス」

左砲の仰角が下げられる。

「一、三救艦は現海域に留まり、引き続き敵艦隊への警戒を行う」

マイクにそれだけ吹き込んだ角田は、戦闘配置が解かれつつある

金剛の艦橋の天井を見上げ、思案顔を浮かべていた。

ル級改の目的は何だったのか。

積極的に戦うわけでも、戦いを避けるわけでもない。ひよっこりと現れ、有利な状況にもかかわらず、突然離脱していく。

なぜだ。その目的が全く掴めない。

今までの、どの深海棲艦とも違うように、角田には思えた。

「何者ですか、アイツは。まるで・・・私たちを試しているみたいデス」

角田の思案を知ってか知らずか、金剛がポツリと呟いた。

「・・・そもそも、マリアナを襲う理由にしたって曖昧だ。戦力も中途

半端。まるで困だね。その割には、もう二日間も近海に張り付いてるし、どこか別の場所が襲撃されたって情報もない。明らかに深海棲艦の行動ロジックから外れてる」

「同じことは、この間のパラオ空襲にも言えませんか？」

「そうかもしれないねえ」

何にせよ、深海棲艦が張り付いている限り、こちらでもマリアナを離れるわけにはいかない。この地を取られることは、トラック攻略戦に多大な影響を及ぼすことになるからだ。

「明日には、塚原の機動部隊や、榊原君のパラオ艦隊も到着する。まずは今夜を乗り切ることだね」

速力を落とした艦隊は、再び周辺海域の警戒任務に戻る。朝までは、まだしばらくの時間がかかりそうだった。

第二陣到着

パラオ艦隊第二陣のマリアナ到着は、二日目の夜が明けた、〇八三〇であった。

合流した三救艦の「摩耶」にて指揮を執る清水から状況を聞いた榊原は、「大和」艦橋であごに手を当て、思案顔になっていた。

「・・・気になるな」

榊原が気にしていたのは、二夜連続で襲撃を行いながらも、中途半端な戦闘のみに留めているル級改の存在であった。

マリアナを防衛していた戦力では、ル級改を撃破することは非常に難しい。やろうと思えば、ル級改は十分に、その艦砲をもってサイパン島を砲撃できたはずだ。

にもかかわらず、ル級改はそれをしなかった。第一夜は「比叡」を撃破した段階で戦闘を切り上げているし、第二夜に至っては「金剛」が砲撃を開始した時点で反転している。まったくもって意味がわからない、というのが正直なところだ。

ともかく、これを撃破するのは、塚原の率いる横須賀の機動部隊が到着してからだ。こちらは、今日の正午前には、艦載機隊の航続半径範囲内にマリアナ諸島を捉えるとのことだった。

『提督、索敵機の発艦準備が整いました』

榊原を現実に取り戻したのは、第二陣に参加している軽空母艦娘からの報告だった。「祥鳳」搭載の「彩雲」に索敵を命じたのは榊原である。

「私と「摩耶」からも出せます」

大和も付け足して報告する。こちらは足の長い零水偵を用いることになる。

「よし、発艦を始めてくれ」

「わかりました」

十数秒後、「大和」後部のカタパルトから単葉双フロートの機体が飛び出した。両舷に据えられたカタパルトを用いて、「大和」からは計四機が飛び立つ。「摩耶」からは二機だ。

一方、〃大和〃後方に控える〃祥鳳〃からは、次々と〃彩雲〃が発艦し始めていた。こちらは全六機。細く絞られた機体は、直線であれば戦闘機にも劣らないほどの速度を有する。索敵任務にはもってこいだ。

上空をしばらく旋回しながら高度を稼いだ索敵機が、それぞれに割り振られた方位へと飛んでいく。目標とするのは、敵機動部隊と水上部隊の搜索だ。

青空の中へ溶けていくその翼を、榊原は静かに見つめていた。

索敵機がもたらした報告に、パラオ艦隊はにわか慌ただしくなった。

『敵水上部隊見ゆ。サイパンよりの方位二〇〇、距離五十海里。速力一八ノットで貴方に向かう』

ル級改が、再び現れたのだ。

——間が悪い。

軽い舌打ちを噛み殺す。もう間もなくで塚原の機動部隊が到着するということに。

来ないものを嘆いても仕方がない。榊原はマイクを取ると、マリアナ沖に展開するもう一隻の戦艦へと繋いだ。

「こちら四救艦(第四救援艦隊。パラオ艦隊第二陣の呼称)、〃大和〃。角田大佐、聞こえますか」

『よく聞こえてるよ』

相変わらずの陽気な声が返ってくるが、そこにはいささかの疲れが見えていた。現海域における最高指揮権を持つ彼女は、おそらくここ二日、まともに休めていないはずだ。

『打って出よう。サイパンの目と鼻の先で迎撃するのは、ちよつとりスクが高い』

「わかりました。砲撃戦の指揮は、自分がいただいてもよろしいですか?」

『・・・うん、そうだね。今の僕は、間違いなく判断力が落ちてる。実質的な戦闘指揮は、榊原君に任せるよ。責任だけは僕が取るから、安

心して、大暴れして』

角田の言葉に「了解」と短く答え、通信を切る。次にスイッチを入れた時は、全救援艦隊に向けたものへと切り替えていた。

「一、四救艦を統合、指揮は榊原中佐が執る。二救艦及び『祥鳳』、『陽炎』、『満潮』は現海面にて警戒行動を続行。三救艦は四救艦に続け」

参加各艦から了解の返答があり、榊原が受け持つこととなった一、三、四救艦が大きく面舵を取る。進撃しながらの陣形変更は、慎重を期して行われていた。

『『曙』、前路警戒に着く』

言うや否や、『大和』の前に躍り出たのは、やはり『曙』であった。彼女らしい。鮮やかな舵取りでピタリと艦隊先頭に立った駆逐艦に、榊原も大和も、舌を巻くと同時に苦笑していた。

そんな『曙』を先頭にして、艦隊は複縦陣を敷く。左列は『大和』、『金剛』、『高雄』、『愛宕』。右列は『摩耶』、『木曾』、『霞』、『長波』、『卯月』。即席ではあるが、砲雷ともに強力な部隊だ。

もつとも、懸念がないと言えば？になる。四救艦はともかく、一、三救艦はすでに戦闘を行っており、損傷のある艦が少なくない。

それでも、十分に戦える。榊原はそう思っていた。

丁度その時、接敵を続けていた索敵機から、追加の報告が上げられる。

「読みます。敵の編成は、戦艦一、重巡二、軽巡二、駆逐六。典型的な水上部隊ですね」

「それ以外に、敵艦隊見ゆの報告はあったか？」

「今のところはありません。これで全て、でしょうか？」

「・・・断定はできないな」

これで全てかもしれないし、まだ他にもいるかもしれない。

榊原個人としては、これで敵水上部隊は全てであると考えている。清水からは、昨夜の襲撃のうち、巡洋艦によるものは、敵艦隊の出現方位から機動部隊より派遣されてきたものである可能性が高いと聞

いている。また、昨夜ル級改が現れた際には、随伴が駆逐艦三隻しか確認されていなかったとも。

それに、今確認された水上部隊の編成は、第一夜の戦闘時で撃破しきれていなかったものと勘定が合っている。これらから、マリアナ沖に展開する水上部隊は、報告に上げられたもので全てだと判断したのだ。

もつとも、確たる証拠はない。まして相手は、目的不明の行動を取るル級改だ。今までの深海棲艦の行動ロジックは、当てはまらないと考えた方がいい。

いずれにせよ、今の榊原たちにできることは、向かってくる目の前の敵を、全力で叩くことのみだ。

——それに、確かめたいこともある。

心の中で呟く。まあ、その願いが叶う可能性は、極めて低いと言わざるを得ない。舞が語った通り、深海棲艦に意志があるのなら、尚更。そんな榊原の思惑をよそに、索敵機が報せる両艦隊の距離は、刻々と縮まっていた。お互いに一八ノットを発揮する両艦隊の相対速度は三六ノット。五十海里の距離を縮め、砲戦距離に入るには、一時間と少ししかない。

「今回は、最初から徹甲弾ですね」

飛沫を上げる艦首を見下ろしながら、大和が言う。そういえば『I F作戦』の時には、最初の三射を三式弾で行うことになった。

「思う存分、撃つてくれ。大和ならできるってことは、俺が一番わかっている」

「・・・はいっ!」

榊原の言葉に、大和が元気よく返事をした。

やがて——

「電探に感ありました!方位一〇〇、距離四〇〇!」

光よりもわずかに重力の影響を受けやすい電波の目が、その特性を生かして、まだ水平線の向こうに隠れたままの敵艦を捉えた。

「観測機発艦始め。三救艦、*「高雄」*、*「愛宕」*は先行せよ」

後甲板で準備されていた零水観が発艦を始めると同時に、清水に率

いられた快速水上部隊が加速した。『摩耶』を先頭とした、三隻の重巡、一隻の雷巡、四隻の駆逐艦で編成された部隊だ。砲力こそ戦艦には劣るが、片舷投射可能な魚雷の数は実に五十二本（『曙』、『卯月』は魚雷を撃ち切っているため）。

今から先行させれば、三四ノツトを発揮可能な彼女らは、丁度『大和』たちの砲戦が大詰めを迎える頃に、敵艦隊に肉薄できる計算だ。

「敵艦見ゆー」

防空指揮所からの報告を大和が叫ぶ。首から下げた双眼鏡を、榊原は覗き込んだ。

空と海が一体になるうかという水平線上に、マストと思しき細いものの先端が見えていた。高速で接近しているからか、次第にその姿が大きく、はつきりとしたものに変わっていく。

艦橋トップの測距儀が現れる。塔のような艦橋が現れる。そこからは早い。水平線から突き出す艦橋が見るからにがっしりとした印象を抱かせるようになる頃には、それ以外にも多くの影が水平線上に確認できた。

——あれが、ル級改か。

双眼鏡を目から離す。がっしりとした艦橋の下に、圧倒的な力を誇る戦艦がいることは間違いなかった。

「距離三五〇」

「砲戦距離は二〇〇とする」

榊原の指示に、大和がパチクリと目を瞬いた。

「二五〇ではないのですか？」

「ル級改に対して、『金剛』の四一センチ砲が有効な打撃を与えるためには、最低でもそこまで近づかなければダメだ。それに、初速と突入角の関係から、深海棲艦の一六インチ砲は二〇〇でも、『大和』の装甲を貫けない。であるなら、命中率を高めるためにも、接近するのが得策だ」

「・・・わかりました」

榊原の説明に、大和も納得したらしかった。

「敵巡洋艦部隊に動きはあるか？」

「いえ、今はまだ。そろそろ動きだすと思いますけど・・・」

「動いたら、俺に報告せず、直接三救艦に報告してくれ」

艦橋が高く、視点が上がる“大和”の方が、敵艦隊の動きを見張りやすい。向こうの動きを早く報せることができれば、三救艦も動きやすくなるはずだ。

敵巡洋艦部隊が加速したことを大和が報告したのは、彼我の距離が三万メートルを切った時だった。さらに、この時点でル級改も動いた。わずかに面舵を切り、“大和”たちの頭を抑えにかかったのだ。

——まさか、もう撃つてくるつもりか？

榊原は身構えるが、すぐには何も起こらない。相変わらず、お互いに距離を縮めるだけだ。その主砲に砲炎が踊ることも、丈高い水柱が上がることもない。ただ、上空をお互いの観測機が飛んでいるだけだ。

新たな動きがあったのは、お互いの距離がついに二万五千メートルを切った時だった。

「敵戦艦、主砲旋回しています！」

すでに測敵も終えて、じつとル級改の動きを見つめていた大和が叫んだ。ル級改の艦上、三基の三連装砲塔が、のっそりと動き始めている。横方向の旋回に、やがて縦方向の仰角も加わる。

彼女は、今まさに砲戦を始めようとしているのだ。

「このまま、距離を縮める！」

榊原が指示に変更がない旨を伝えた、次の瞬間。

ル級改の主砲に、めくるめく閃光が走った。さながら地上に現れた太陽のごとき火球が生じ、一拍後には真っ黒い煙となって後方へと流れていく。

三十秒ほどが経つと、大質量の物体が無理矢理に空気をかき分けて落下してくる、異様な音が聞こえてきた。その音が途切れた時、左舷に巨大な水柱が生まれて、少なからず“大和”を揺らし、その舷側に激しく水滴を叩きつけた。

新型戦艦ヲ撃破セヨ

彼我の距離が縮まるのは、想像以上に早かった。

ル級改の発砲後も、“大和”は変わらず一八ノットの速力で接近を試みていた。バルバスバウの効果で巨体と速力の割りに小さいとはいえ、艦首では大波が生じて艦の後方へと流れている。航跡を引きずって、“大和”は海面を割いていった。

そんな“大和”の行く手を阻むように、極太の水柱が上がる。各砲塔一門ずつの交互撃ち方を続ける、ル級改の一六インチ砲弾が、弾着時に巻き上げる海水の塊に、“大和”の艦首が突っ込んだ。崩れた水柱はバラバラと“大和”艦首甲板に降り注ぎ、錨鎖や揚錨機を濡らす。

「距離二一〇！」

「艦隊逐次回頭、針路〇二五！右砲戦用意！」

噴き上がる水柱に負けじと、榊原が叫ぶ。“大和”の舵が利き出すにはそれなりに時間がかかるから、今から曲げておけば、回頭終了時に丁度二万メートルを割るという計算だ。

「取舵一杯！針路〇二五！」

大和が復唱、すぐさま舵が傾き始める。舵角指示器の針が、取舵側へと大きく振れていき、やがて一杯のところまで止まった。それでも、“大和”はまだ曲がらない。艦はじれつたいぐらいに、直進を続けていた。

ル級改の砲撃が再び降り注ぐ。その狙いは明らかに“大和”だ。今度も至近に一六インチ砲弾が落下して、爆圧が艦底部を襲う。

転舵の指示からたつぷりと三十秒ほどをかけて、ようやく“大和”の艦首が左に振られ始めた。艦橋の正面からほんのわずか左に見えていた敵艦隊の姿が、次第に右方向へと流れていく。その動きに合わせてるようにして、“大和”の巨大な三連装砲塔が、鈍い駆動音を発しながら右舷を指向した。艦橋からは見えないが、艦橋構造物トップにある十五メートル測距儀も旋回して、ル級改を捕捉しているはずだ。

相対位置が大きく変化したからか、ル級改からの砲撃が止まってい

る。しばらくすると、あちらも面舵を切り、針路を変更した。どうやら、「大和」たちに同航戦を挑むつもりらしい。

「『金剛』、回頭完了！」

後続の高速戦艦も回頭を終える。

「距離二〇〇」

「本艦、及び『金剛』目標、敵戦艦一番艦。先に『大和』が撃つ」

次なる榊原の命令を受け、ル級改への諸元算出が急がれる。十五メートル測距儀では、三角測量の要領で彼我の距離が計測され、その他の各種データと共に射撃方位盤へと打ち込まれる。そこから算出された旋回角と俯仰角が各砲塔に送られ、いよいよその右砲が鎌首をもたげる。重々しいその動きには、言いようのない迫力と凄みが感じられた。

主砲発射を告げる、ブザーが鳴り響いた。

「撃ち方始め！」

「てーっ！」

榊原の号令、大和の咆哮。次の瞬間、艦の右舷に向けて、紅蓮の炎が沸き起こった。前部二基、後部一基の主砲塔から各一発ずつ、観測射撃用の第一射が放たれる。それでも、四六センチ砲の発砲に伴う衝撃は、全幅三十九メートルにも達する『大和』の艦体を、横方向へと動揺させた。

「敵一番艦、砲撃を再開しました」

ル級改の艦上にも、砲炎が上がった。相対位置変更に伴う諸元の算出やり直しを終えて、再度の砲撃に踏み切ったのだ。

両者の砲弾が、巨大なアーチを描いて交錯し、それぞれの目標へと落下していく。

「だんちやーくー！」

『大和』に続いて砲撃を開始した『金剛』の砲声が収まる頃、第一射がその飛翔を終える。

ル級改の姿を覆い隠すようにして、巨大な水柱が上がった。数は三つ。さながらそそり立つ壁のようだ。

「全弾近！」

観測機からの報告を大和が読み上げると同時に、ル級改からの砲撃も“大和”に降り注ぐ。飛翔音が頭上を圧したかと思うと、“大和”を飛び越えて左舷側に水柱が現出した。

——近い……！

視界を奪うほどの白い巨塔に、榊原は唸り声を噛み殺す。改fla g s h i pと呼ばれるだけあって、練度は高い。

「修正完了」

大和はさほど動揺した様子は見せず、諸元の修正が完了したことを報せた。各砲塔中砲が仰角をかけられ、固定される。

「てーっ！」

第二射が放たれた。爆炎の中から一・五トンもの巨大な砲弾が飛び出し、彼方のル級改へと放物線を描く。

“大和”の第二射から十数秒を置いて、“金剛”も新たな射弾を放つ。“大和”より一回り小さい四一サンチ砲だが、右舷へ沸き起こる炎の量は凄まじい。

榊原は腕時計をチラリと確認する。秒針の動きを追えば、そろそろ弾着の時間が近いことがわかった。

「だんちやーくー！」

丁度その時、大和が主砲弾の到達を報せた。ル級改の手前に、先ほどと同じような水柱が生じる。マストの二倍はあろうかという巨大な柱が、天を突かんばかりに立ち上っていた。

入れ替わりに、ル級改の第二射が“大和”に襲い来る。今度も左舷に落下した一六インチ砲弾三発が海水を沸騰させた。距離は二、三百メートルといったところだろうか。

——とにかく、撃つのみだ。

こちらは二隻に対して、相手は一隻。落ち着いてやれば、手数で十分圧倒できる。焦らず、いかに早く諸元の修正を終えるかが勝負のカギだ。

“大和”の修正第三射が放たれる。各砲塔左砲が咆哮し、艦橋の窓をビリビリと震わせた。揺れる艦橋に、榊原は足を踏ん張る。

『三救艦、これより戦闘に突入する』

清水からの短い報告が、スピーカーを通して聞こえた。お互いの快速艦艇たちもついに交戦距離まで接近し、その砲門を開こうとしていた。

「大和」とル級改、それぞれの第三射は、再び空振りに終わる。それから十数秒遅れた「金剛」の第三射も同様だ。各々の砲弾は空しく海面を叩き割り、海水を持ち上げる。

「修正急いで！」

射撃指揮所を急かす大和の声は、それでもまだ落ち着いていた。トラック沖での戦闘時とは明らかに違う。超弩級戦艦娘としての威厳や風格のようなものが感じられた。

彼女もまた、成長しているのだ。

諸元修正が終わり、第四射のトリガーが引かれた。砲身の中を滑走する間、砲弾は十分に力積を受け続け、またライフリングによって回転を付与されて、砲口から飛び出す。加熱した砲身から陽炎が立ち上り、黒いすがすが付着した砲口から冷却水が流れ出る。

距離二万メートルでの第四射だ。すでに至近弾と言っているレベルまで精度は詰められている。そろそろ、命中弾か、最低でも夾叉が欲しいところだ。

カチカチという秒針の音が、時を刻む。弾着まで、十秒……五秒……

「だんちやーく！」

四六サンチ砲弾の描いていた放物線が、海面と接触する。その成果は、果たして――

「やりました！敵戦艦に命中弾ー！」

大和が歓声を上げた。ル級改の手前、二本の水柱が生じている。その間から覗くように、艦上にオレンジ色の爆炎が上がるのを、榊原の目はしかと捉えた。

「次より、斉射に移行します！」

興奮気味に報告する大和に、榊原も頷く。押し切れ。その意志は、彼女にはつきりと伝わったようだ。

次の瞬間、ル級改の砲撃が到達した。水柱が上がる。それに混じって、後方から鈍い衝撃が伝わってきた。

「っ！」

確認するまでもない。『大和』もまた、ル級改の一六インチ砲弾を被弾したのだ。

これで、条件は五分と言っている。後は、巨弾の応酬、ノーガードの殴り合いだ。どちらかが音を上げるまで、激しい撃ち合いが続く。

『金剛』の第四射は、再び空振りとなった。連日の戦闘が響いているのであろうか。砲撃が精度を取り戻すまで、もうしばらく時間がかりそうだった。

斉射に備えた沈黙が支配していた艦上に、改めてブザーが鳴る。眼下に見える一、二番砲塔は、収められた四六センチ砲全てを振り立てて、ル級改を睨んでいた。

ブザーが、止まる。

「第一斉射、てーっ！」

大和が声を張る。ほんの一瞬の静けさが、艦橋に流れた。

それまでに倍する轟音が、艦橋を包み、揉みしだく。あまりに大きな音は、瞬間的に榊原の聴覚を奪った。世界が音を取り戻す頃、砲口から飛び出した真っ黒い雲が、艦の前進に伴って後方へと流れていた。

「敵一番艦斉射！」

ル級改も斉射を始める。艦の前後で湧き起こった炎が艦上構造物を挟み込み、赤々と照らした。

彼我の砲弾は、すぐには到達しない。その間、加熱した砲身が下ろされて、冷却と次弾の装填が行われる。弾火薬庫から砲室に上げられた砲弾と装薬を、ちよこまかと動き回る妖精たちが、懸命に装填していた。

その作業が完了する前に、『大和』の第一斉射が飛翔を終え、ル級改の頭上から降り注ぐ。噴き上がった水柱のカーテンが、命中弾と思わしきオレンジ色の光に、内側から染まっていた。

戦果を確認する暇もなく、今度はル級改の砲撃が落ちてくる。甲高い飛翔音が次第に大きくなり、途切れたかと思った瞬間、後方から突き飛ばされるような衝撃が襲ってきた。主砲発射の時とは全く異なる

る激震だ。

大和がわずかに顔をしかめていた。

「被害報告ー」

とはいえ、巨大な「大和」の被害を確認するには、しばらくの時間がかかる。集計された被害が報告される前に、第二斉射の準備が整う。

更なる咆哮に、艦が再び撃ち震えた。九発の四六サンチ砲弾は、物理法則にしたがった軌道を描いて、高空へと上っていく。

わずかに数秒後、ル級改も新たな射弾を放つ。斉射と斉射の間隔はおよそ三十秒。他の深海棲艦と変わりはない。四十秒を要する「大和」よりも、テンポの速い連続斉射が可能だ。

丁度その時、被害報告が上がる。被弾は計二発。いずれも後部のバィタルパート内に命中していた。損害は軽微。

「大丈夫です。まだまだ、戦えます」

大和は余裕のある笑みを浮かべていた。自らの装甲の強靱さを、わかっているのだ。榊原も、それについては身をもって体感している。一発や二発の被弾で、「大和」が音を上げることなどないのだ。

第二斉射は、彼我数秒の誤差しかなく弾着する。四六サンチ砲の水柱がル級改の姿を隠したかと思うと、至近に生じた一六インチ砲の水柱がこちらの視界を奪う。

観測機から、命中弾二の報告が入った。これで、「大和」が与えた命中弾は四発。対するル級改は三発。発砲遅延装置による散布界の縮小が利いているのかもしれない。

しかしながら、次なる第三斉射の発砲は、ル級改の方が早い。両者とも搭載する主砲の数が同じだから、手数が多さはル級改に軍配が上がる。

——油断は大敵、ということか。

数秒遅れで放たれた第三斉射の轟音を聞き届け、榊原は艦橋に足を踏ん張る。砲戦は、まだ始まったばかりであった。

意志ノアル所

“大和”とル級改の戦いは、両者一步も引かずに、長期戦の様相を呈し始めた。

が、次第に互いの優劣が見え始めてくる。ここでもものを言ったのは、“大和”の分厚い装甲であった。

ル級改から放たれる高初速の一六インチ砲弾にも、“大和”はよく耐えていた。一方で、“大和”の四六センチ砲弾は強烈な一発となつてル級改を襲い、装甲に大穴を穿つ。斉射が降り注ぐたびに、ル級改にはダメージが蓄積していった。

“金剛”も斉射に移行している。“大和”の第三斉射直後に命中弾を得た“金剛”は、搭載した四一センチ砲八門を振り立てて、果敢に砲撃を繰り出していた。

第七斉射の弾着を見届け、榊原は思案げに口元へ拳を当てた。

ル級改の甲板では、すでに何条かの黒煙が立ち上っている。相当の被害を受けているのは間違いないが、戦闘能力を損失するまでには至っていないかった。それを示すように、新たな斉射の炎が、燻る黒煙を吹き飛ばす。

砲炎が収まり、再び黒煙で隠れたル級改に、“金剛”の射弾が降り注ぐ。海水性のカーテンで覆われた内側に、命中弾と思しきオレンジ色の炎が見えた。

「てーっ！」

負けじと、“大和”も新たな斉射を放つ。これで八度目。巨大な砲声が艦上を支配し、榊原たちが立つ艦橋がビリビリと震えた。

——やはり、堅牢な艦だ。

いかに強力な四六センチ砲と言えども、たった数射で敵戦艦を沈黙させるほどの威力はない。前回深海棲艦と会い見えたトラック沖の砲撃戦では、一隻につき十発前後は撃ち込まなければ、沈黙させることができなかった。

それでも、やはりル級改の防御性能はすば抜けている。七度の斉射で“大和”が与えた命中弾は、実に十二発。ここに、“金剛”の四斉

射分計六発の命中弾が加わる。それだけ被弾したにもかかわらず、ル級改は速力に衰えを見せることなく、砲戦を続行していた。

ル級の第八斉射が「大和」の装甲にぶち当たる。怪物じみている、という意味では、こちらも似たようなものだ。ル級改の高初速一六一インチ砲弾をすでに十四発も被弾しているというのに、主砲や機関といった艦の心臓部は全くの無傷だ。まあ、右舷の副砲や高角砲は、はつきり言って屑鉄以下になってしまったが。

「右舷重要防衛区画内に被弾。損害軽微。戦闘航行に支障ありません」

同じような報告は、今日で四、五回目だ。

『こちら三救艦。敵巡洋艦を撃滅し次第、そちらの援護へ向かう』

清水から通信が入る。三救艦の重巡と水雷戦隊は、確実に深海棲艦を撃破していき、重巡一隻を残すのみとなっていた。

三救艦は、魚雷を残している。重巡の援護のもと、「木曾」以下水雷戦隊を突入させるつもりだろう。

「大和」の第八斉射が、ル級改に襲いかかる。前甲板で火の手が上がったようにも見えたが、すぐに水柱で隠れて見えなくなった。こればかりは、上空に展開する観測機からでなくては、窺い知ることにはできない。

水柱が崩れるなり、ル級改が更なる斉射を放った。が、その炎は後部の三番砲塔のみで上がっていた。前甲板に据えられている一、二番砲塔は、まるで張子の虎でもあるかのように、沈黙したままだ。

先の砲撃によるものであることは間違いない。二つの砲塔が同時に破壊されるとは考えにくいから、両砲塔の中間に命中して、旋回機構や射撃指揮所からの電路を、まとめて吹き飛ばしたのだろう。いずれにせよ、ル級改はその火力の三分の二を一時に失ってしまったわけだ。

立て続けに、今度は「金剛」の砲撃がル級改を捉える。立ち上る白い巨塔と、隙間から覗く火柱。それらが崩れた時、ル級改艦上の様子が露わとなった。

幸運——ル級改にしてみれば不運極まりないが、やはりその類の

ものというのは、続くものなのだ。

後部第三砲塔から、黒い煙が上がっている。双眼鏡で覗けば、砲身が千切れ、あるいはあらぬ方向を向いているのがわかる。砲塔自体も、回転台からずれて、摺座していた。その火力が奪われてしまったことは、もはや明白だった。

「砲撃止め」

トドメを差すべく、更なる斉射に踏み切ろうとした大和を、榊原が引き止めた。大和は目を丸くして、尋ねる。

「砲撃止め、ですか？」

「そうだ。俺に、少し考えがある」

「・・・わかりました」

“大和”、“金剛”が砲撃を止める。それでも、ル級改が新たな砲撃を行うことはない。こちらが砲撃を止めたというのに、離脱を図ろうとすることもない。まるで榊原の意図を図るように、あるいは榊原の意図を汲んだかのように、速力と針路を保ったまま、航進していた。

一方、三救艦の戦闘はしばらく続いていた。最後に残ったり級が業火に包まれて、行き足を止めたところで、ようやく砲撃が止まる。その三救艦も、榊原の指示で、更なる追撃は行わなかった。

『・・・どういふつもりですか、榊原中佐』

案の定、清水から指示の内容を尋ねる通信が入る。マイクを取った榊原は、その通信を“摩耶”への限定したのではなく、艦隊全体に共有したものにした。

「深海棲艦に、降伏を呼びかける」

艦隊に所属する誰もが、電撃を受けたように目を見開き、息を飲む様子が、榊原にははつきりとわかった。

『・・・降伏を呼びかけて、どうする。鹵獲するのか？』

「会談を行いたい」

『可能だと？』

「ル級改は、過去のどの深海棲艦とも違う。目的がいまだにはつきりしない。それは、ル級改が複雑な思考と、深海棲艦とは違う目的を持ち合わせているからだ。だから、俺たちはその目的を読み切れない」

マリアナ攻撃を主導していたのは、ル級改で間違いない。であるなら。

「直接聞くのが、手っ取り早い。意思疎通は可能なはずだ」

はつきりとは言わない。だがこれだけで、清水と角田には通じるはずだ。二人には、舞との会談内容を伝えてある。すなわち、深海棲艦にもまた、艦娘と同じような存在がいることを。

それ以上、清水は何も言っていない。最後に、榊原は角田に確認を取る。

「よろしいですか、角田大佐」

『金剛』の艦橋にいる角田は、しばらく考え込むような間があった後、おもむろに口を開いた。

『・・・やってみよう』

角田も承認したことで、榊原は初めて、深海棲艦への降伏勧告を行うこととなった。

「大和。海軍の共通バンドと発光信号で、ル級改に降伏を呼びかけてくれ」

「はい」

榊原の指示に頷いた大和は、すぐに降伏の呼びかけを始めた。海軍の共通バンドで降伏を呼びかける文面が送られるとともに、信号用の探照灯に取り付いた妖精が、国際モールス信号でも勧告を行う。

——さて、どう動くか。

ル級改の動きを、榊原は注視する。

なぜ、深海棲艦はマリアナを襲撃したのか。襲撃した割には、あまり積極的と言えないのはなぜなのか。榊原なりに立てている仮説は二つ。

一つは、時間を稼ぐこと。マリアナという重要拠点を襲撃すれば、日本海軍は対応せざるを得なくなる。そこに、少しでも被害を与えることができれば、トラック攻略戦の発動時期を遅らせることができる。

なぜ遅らせる必要があるのか。理由はいくらでも考えられるが、一番大きいのはトラックの防衛体制が整っていないことだろうか。

そして、もう一つは――

「っ！ル級改より返信です！」

「読んでくれ」

「降伏条件について交渉したい。本艦への乗艦を求む」

――そうきたか。

ある程度予想はできていたことだ。目的ははっきりしないが、ル級改は人類側との、直接の接触を望んでいる。そんな仮説が立ったのは、この戦闘中だ。

申し出に対する答えと覚悟は決まっていた。

「了解した」

「本当に、乗りこむおつもりですか!？」

大和が素っ頓狂な声で尋ねる。しかし榊原は、それがさも当然であるかのように、落ち着き払って頷いた。

『……罨だ。そう考えるのが妥当ではないですか』

絶句している大和の言葉を受け継ぐように、清水が会話に割り込む。その声には、抑えに抑えた憤りのようなものが感じられた。この艦隊と、榊原の身を案じてのことであろうか。

それでも、榊原の考えは変わらない。

「例え罨だとしても、得るものの方が大きいと判断している。それくらい、深海棲艦との接触は、重大な出来事だ」

清水は何も言わず、黙って話を聞いていた。榊原は話を続ける。

「軍隊っていうのは、よくできた組織だ。俺一人の代わりは、いくらでもいる。いつでも、最悪の事態は想定されているんだ。だから、より良い方向に物事を考えることもできる。俺の命を掛け金にするだけで、深海棲艦に関する新たな情報を得られるかもしれない。当たれば一獲千金、当たらなくても被害はほぼゼロだ」

『……無駄に筋が通っているのが、気に食わん』

それでも、清水は反対をしなかった。榊原の主張自体は認めてくれたらしい。

だが、一人。猛烈な勢いで、榊原に食ってかかった声があった。

『ふざけたこと言ってるんじゃないわよ、クソ提督!!』

最早言うまでもない。声の主は、曙であった。

『クソ提督が死んでも、代わりはいる!? わかったようなこと言ってるじゃないわよ!! あんたがいなくなったら、あたしが困るのよ!!』

叫びに近いその声が、ズシリと榊原の心に圧しかかる。それを知つてか知らずか、盛大な鼻息と共に、曙が有無を言わせぬ口調で注文をつけてきた。

『どうしても行くって言うなら、あたしも一緒に行く。そもそも罨じゃないなら、あたしがついて行くことに異論はないわね? それに罨だった時も、あたしが一緒なら、生きて帰るために取れる手段が増える。交渉に護衛を伴っていくのも、問題ないはずでしょ』

『・・・僕も曙ちゃんの意見に賛成だね』

それまで議論に口を挟まなかった角田も口を開く。ここは、榊原の方が折れる他なかった。

——見透かされてるか、やっぱり。

最も付き合ひの長い彼女に、隠し通せる道理もなかった。彼女は、榊原の中にあつた陳腐な犠牲心を、見抜いていたのだろう。

「わかった。曙には、交渉への同行を命じる」

『了解。今そつちに向かうから、乗り移って』

三救艦から、"曙"が離脱してくる。その間に、榊原は後の指揮を角田に預けた。"大和"以下の艦隊はこの位置でル級改を捕捉し続け、少しでも不審な動きがあれば、これを速やかに撃沈する手はずだ。やがて、"曙"が"大和"に横づける。いつぞやの時のように、繩梯子で甲板から甲板に乗り移り、艦橋に上がった。

人類初、深海棲艦との降伏条件交渉へ向けて、"曙"は舵を切った。

マリアナ沖ノ火八鎮マリ

榊原たちが、ル級改との戦闘に突入するよりも少しばかり前——
マリアナ北西の海域を慕進する、巨大な艦体があった。鋭い艦首では、高速発揮に伴って大きな飛沫が迸り、割れた海面が白い帯となつて後方へ流れていく。巻き上げられた水滴が、飛行甲板を濡らすのではないかと思えるほどだ。

塚原大佐隷下の横須賀機動部隊。その旗艦を務める空母「赤城」の飛行甲板は、多くの妖精たちが入り乱れ、まるで蜂の巣をつついたような状態となっていた。

『塚原大佐。攻撃隊、いつでも出せます』

機動部隊を構成する各艦の準備が整ったことを、発艦指揮所の赤城が報せる。それに頷いた塚原は、チラリと艦橋右手に見える飛行甲板を窺った。

『I F作戦』終了後、「赤城」は中規模の改装を受け、艦体各所の装備を更新している。

主なものは、僚艦の「加賀」で試験運用がなされた、カタパルトの設置だ。埋め込み式のそれを、「赤城」は二つ、備えている。

また、着艦装置の更新も行われた。「天山」の運用に当たって、強度が問題となった着艦制動索をより強固なものに変更。艦の前後で張り出した飛行甲板を支える支柱も、数が増やされている。これにより、新型艦攻として開発と配備が急がれている「流星」の運用にも、支障はないとされていた。

さらに、搭載数を増やすため、露天駐機用のスペースと装備も用意されている。駐機数は八機程度と見積もられていた。

航空機運用以外では、対空火力の強化がなされていた。高角砲は、より発射速度に優れた長一〇サンチ砲へ。機銃も多数が増設されている。

加えて、本格的な艦隊運用設備が設けられていた。通信機器も強化がなされ、名実ともに機動部隊の旗艦に相応しい艦となっている。

各装備の習熟を終え、これが初の実戦だ。

「攻撃隊、発艦始め」

塚原が静かに命じると、赤城が引き絞った弓を解放し、カタパルトから最初の一機が飛び出した。

濃緑に塗られた機体だが、零戦とは形状が異なる。零戦がスマートな隼なら、こちらはまさに鷲。大空の主に対応しい、太くたくましい機体だ。

新型艦上戦闘機、名を「烈風」。日本海軍が次期主力戦闘機と位置付ける機体は、「八四三」発動機の猛々しい唸りを響かせて、大直径の四翔プロペラが産み出す後流を確かに翼で捉え、一気に上空へと舞い上がっていった。

ようやく部隊と呼べる数が揃ってきた「烈風」は、現在「赤城」に八機が搭載されている。その発艦は、二基のカタパルトによって、ものの二分で終了していた。

「烈風」に続いて発艦するのは、既存の零戦だ。カタパルト発艦を考慮した改造を受けており、軽い機体でも危なげなく飛び立っている。

「赤城」において、戦闘機の後に続くのは、攻撃機の「天山」だ。最高速度が五百キロ毎時近くにもなる高速の攻撃機は、「火星」発動機を唸らせて、油圧式のカタパルトから射出されていた。魚雷を抱えた機体は、一旦沈み込んで甲板の縁に消える。すわ、墜落したかと錯覚しそうになるが、すぐに翼が揚力を生じて、大空へと浮かび上がっていった。

「二人とも、順調なようですね」

「赤城」の発艦作業を見守っていた塚原に、艦橋に戻ってきた赤城が話しかける。彼女が気にかけていたのは、後続する二隻の僚艦だ。

普段、「赤城」が僚艦としているのは、同じ横須賀所属の「加賀」だ。しかし、その「加賀」は、現在トラック攻略戦に備えて、艦体の整備を受けるために入渠しており、出撃はできなかった。

代わりに、「赤城」の僚艦を務めることとなったのは、やはり今回が初実戦の二隻の空母。

一隻は、「赤城」に勝るとも劣らない巨艦だ。しかしその艦容は、

元巡洋戦艦であるがゆえに、諸設備を上にと盛っている「赤城」とは根本的に違う。最初から航空母艦であることを運命付けられ、そのために洗練されている姿は、どこかのっぺりとした印象を受けた。真つ平な甲板の右舷側に、煙突と一体化した大きな艦橋が設けられていた。

航空母艦「大鳳」。「翔鶴」型の改良形とも言われている。特筆すべきは、二基ある昇降機の間を、五百キロ爆弾の直撃にも耐えられる装甲で覆ったことだ。装甲設置による重心の上昇を防ぐため、格納庫は一段のみ、搭載数六十機前後となっている。これに、露天駐機と、重心の低下措置によって可能となった「天井から機体を吊る」という格納方法で、予備機抜きで八十機近い搭載数を確保できる。

もう一隻は、「大鳳」よりも一回りほど小さい。艦容に先鋭さは感じられないが、堅実ゆえの安心感はある。どこか、佐世保の「蒼龍」や「飛龍」に似た艦影だ。

航空母艦「天城」。「雲龍」型航空母艦二番艦の彼女は、「赤城」の姉の名を受け継いでいる。赤城は何かと彼女のことを気にかけて、天城もまた、そんな赤城のことを慕っている。搭載数こそ控えめだが、本人が赤城から多くを吸収したこともあって、航空隊の錬成は随分と進んでいた。

「大鳳」も「天城」も、「赤城」同様にカタパルトの設置を行っている。その発艦作業は早い。結局、総数百機を超える第一次攻撃隊の発艦に、全艦合わせて十数分しかかかっていなかった。内訳は、「烈風」八機、零戦三十六機、「彗星」三十機、「天山」三十六機。「天山」は「赤城」と「大鳳」から、「彗星」は「大鳳」と「天城」から出されていた。

発艦した攻撃隊は、編隊を組みつつ、進撃を開始する。その姿を、塚原は双眼鏡で追った。

「・・・よろしかったのですか？」

そんな塚原の真意を窺うように、赤城が尋ねる。

第一次攻撃隊に対して、塚原は敵機動部隊への攻撃を命じていた。今まさに角田たちが迎撃している水上部隊ではなく、機動部隊の撃滅

を優先したのだ。

「状況が錯綜しているからこそ、セオリー通りにやるのが大切な時もある。確かに、敵機動部隊の戦力は、大きく削がれている可能性が高い。しかしそれは、あくまで可能性が高いだけだ。現に、機動部隊はマリアナ近海から離れることなく、留まっている。そこに機動部隊がいる以上、当該海域の制空権を確保するために、その撃滅を優先することが定石だ」

「定石、ですか」

塚原の言葉を、意味ありげに反芻する赤城。さも可笑しそうに目を細める彼女に、塚原は不機嫌そうな溜め息を吐いた。

「その定石を破って、攻撃半径ギリギリから攻撃隊を放った人が、よく言いますね」

本来、塚原たち横須賀機動部隊の現在位置から、敵機動部隊に向けて攻撃隊を放つのはナンセンスだ。攻撃半径というのは、艦載機が往復できる半径のことであるが、攻撃を実施することを考慮に入れていない。攻撃半径ギリギリから攻撃隊を放つ「アウトレンジ戦法」が、現実に沿ったものと言えないことは、太平洋戦争におけるマリアナ沖海戦で証明されているのだ。

くしくも、同じ海域で同じ戦法を取った塚原。

「これから追いかけるんだ。文句はないだろう」

塚原の考えは、発艦した攻撃隊を、機動部隊の方が全速力で追いかけるというものであった。敵機動部隊の方へ全速力で突っ込んでいくため、こちらが攻撃を受ける可能性は高まるが、攻撃隊の飛行距離を縮めることができる。攻撃半径ギリギリからの攻撃は、往復距離の長さによる搭乗員の疲労が問題であったが、この方法ならば実質的な飛行距離は通常距離での攻撃と変わりない。帰りを考えなくていい分、搭乗員も攻撃に集中できるといえるものだ。同じ戦法は、南太平洋沖海戦において、“隼鷹”が実施、成功させている。

攻撃隊が敵艦隊に辿り着くまで、二時間弱。その間に、“赤城”たちは三〇ノットで慕進、さらにマリアナ諸島への接近を図る。攻撃隊の回収地点は、敵機動部隊との距離百海里を切る可能性まである。

「艦隊速力三〇ノット、針路一一五。第二次攻撃隊の準備を急がせろ」
「わかりました。面舵一〇、針路一一五」

塚原の指示に、赤城が応える。同時に、機動部隊を構成する各艦にも、同様の指示が送られた。『赤城』以下三隻の空母は艦体が大きく、すぐには艦首を振らない。二十秒ほどの間があつた後、横須賀機動部隊は輪形陣を保つたまま舵を切つた。

たつた今飛び立っていった攻撃隊を追いかけようにして、横須賀機動部隊は三〇ノットの高速力で進撃を開始する。『赤城』艦首では、それまでも増して巨大な波が起こり、辺りに白い霧となつて飛沫が漂う。三隻の巨艦が波頭を砕きながら進む姿は、勇壯の一言に尽きた。

飛行甲板では、第二次攻撃隊の準備が、急ピッチで進められている。格納庫の機体が、警告音と共に昇降機で飛行甲板へと上げられ、折りたたまれた翼の端が広げられると、チョークで止められて暖機運転が始まつていた。それら一連の作業が、各所で繰り広げられる。

——・・・ようやく。

ようやく、ここまでたどり着いた。やっと、敵艦隊を叩くことができる位置までたどり着いたのだ。

頼むから、もう無茶はしてくれな。今も敵水上部隊を迎撃しようとしている、同期の馬鹿に、届かない願いをかける。あの馬鹿は、こつちが見張っていないければ、その体力が尽きるまで猛進し続けるのだ。こつちの気も知らないで。沸々と込み上げる感情が、自分の勝手な心配であることは百も承知だ。それでも、言わずにはいられない。

——終わったら、説教してやる。

そんな呟きを心の中に仕舞い込み、塚原は顔をしかめる。怪我をしているのに、前線で指揮を執り続ける馬鹿がどこの世界にいる。

とにかく、全てはこの戦いが終わってからだ。

第二次攻撃隊が準備を終えるまでに、それから一時間弱がかつた。甲板に並んだ攻撃隊が、カタパルトによって次々に発艦していく。

その発艦作業が終わる頃、件の女性提督から、ル級改との砲撃戦に

突入した旨の報告があつた。実質的な指揮は、パラオから駆け付けた
“大和”座上の榊原中佐に任せるとのことだ。そちらは十分に食い
止めてくれると、塚原は判断していた。

それから数十分。第一次攻撃隊から、『突撃隊形作レ』の電文が、
“赤城”宛てに届けられた。

初メテノ接触

降伏条件の交渉のため、榊原と曙はル級改との接触を目指していた。

接近していくにつれて、ル級改の艦容がはつきりとしてきた。戦闘能力は全喪失しているが、その艦体はまだ確かに海に浮いている。

わずかに残った両用砲は、抵抗の意志がないことを示すように俯角がかけられている。行き足も止めており、「曙」が接舷するのを待っている様子だった。

「・・・静かなものね」

ポツリと曙が呟いた。ル級改の艦体では、まだ黒煙が燻っている。だが、そのたたずまいは、不気味なほど静かなのだ。

「ル級改の左舷前部甲板に接舷するわ」

「ああ。頼む」

いよいよ距離一千メートルを切り、すでにスクリューの回転を止めている「曙」は、惰性だけでル級改に接近していく。舵はまだ利くが、少し角度を変えるにも一杯まで切らないと艦は反応してくれない。それでも、曙は絶妙な操艦術で、ル級改の舷側へと接近していく。

チラリ。「曙」の艦橋から、榊原は救援艦隊の方を窺う。ル級改から一万五千メートルの距離に位置取る二戦艦——「大和」と「金剛」は、その砲門を、しかとル級改に向けていた。不自然な兆候があれば、いつでもトドメを差せるようにとの備えだ。

「接舷するわよ。衝撃に備えて」

曙の声に、榊原は意識を目の前に戻す。「曙」の右舷に迫ったル級改の舷側とは、もう数メートルの差だ。

やがて、両艦の舷側がぶつかった。間に挟まれた緩衝材が衝撃を和らげるが、足元はわずかに揺らぐ。両足に体重をかけて踏ん張った榊原は、その巨大な艦体を見上げた。

「曙」のマスドで準備をしていた妖精たちが、そこからル級改の甲板へと飛び移った。「曙」の甲板から数メートルの高さがあるため、そこから飛び移るしかなかった。

飛び移った数人の妖精たちに、「曙」前甲板の妖精が細いロープを投げる。その先には太いロープが結ばれており、手繰り寄せたル級改側の妖精がそれを結び付けて、艦同士を固定する。同じ作業は後甲板でも行われていた。

「曙」とル級改がしっかりと結び付けられたのを確認して、両艦の間に縄梯子がかけられた。接舷と乗り移り作業が完了したことを、前甲板の妖精が手振りで伝える。

——行くか。

深呼吸を一回した榊原は、羅針艦橋から出ようとする。その後を、艀装を脱いだ曙が着いてきた。

「・・・本当に、ついてくるのか」

「当たり前でしょ。何度も言わせんな」

両腕を組んで、曙が言う。「一人でなんて行かせない」、そう言っているかのようだ。

——本当に、君は。

曙は、時に融通が利かないくらい、真面目だ。それを、自分のことを案じているからだ、そう思っているのだろうか。それがどうしてもむず痒い。

——ここまで来たんだ。

「行こう。一緒に」

二人で羅針艦橋を出る。ラッタルを下り、前甲板の縄梯子へ。その一段目に、榊原は足をかけた。

舷側を上っていく。縄梯子、と言っても今回使っているのはジャコブスラダーだ。清水に持ってきてもらったものである。足がかりはしっかりしている分、ただの縄梯子より格段に上りやすい。

上り切った榊原は、甲板で曙が上ってくるのを待つ。華奢な体で上ってきた曙が、舷側の縁から甲板によじ登るのを、体を引いて助けようとする。

「ひゃっ」

素っ頓狂な声を曙が上げた。

「ど、どこ触ってんのよ、このクソ提督！」

「不可抗力だっ！」

体を引き上げるために、腋の下に手を入れただけである。他意はない。

「と、ともかく引き上げるぞ」

「・・・くううっ」

自分で甲板によじ登れないのもわかっているのだろう。顔を真っ赤にした曙は、榊原になされるがままとなっていた。

そんな顔をされると、こっちの方が意識してしまう。

何とか曙を甲板に引き上げる。顔を赤くしたままの彼女は、スカートを叩いて、榊原から目を逸らす。その先、ル級改の丈高い艦橋を見上げた。

二人が甲板に上がっても、依然として辺りは静かだ。黒煙の噴き上げる破孔から、時折パチパチという火花の音が聞こえるくらいである。全くもって、気配が感じられない。

——本当に、意思疎通が可能なのだろうか。

何をしていいかわからず、二人が辺りを見回した、その時だった。

ギイツ

それまで単調だった甲板上に、新たな音が生まれる。二人は揃って、音の方向を——艦橋基部の方を向いた。

艦橋基部に、扉がある。被弾箇所が近くにあるからか、煤汚れて、わずかに歪んでいるようにも見えた。その扉が、軋み音を立てながら、ゆっくりと、開いていく。

ゴクリ。二人して生唾を呑んだ。果たして、扉の向こうから、何が現れるのか。

扉が完全に開いた。奥に広がる、深い闇。その中に立つ人影が、辛うじて判別できた。

そう、人影だった。明らかな人の形をした影が、闇の中に立っていたのだ。

——やはり、ここでも。

舞に見せられた写真を思い出す。『イレギュラー』の艦娘（便宜上そう呼ぶが）は、完全な人の形をしていた。だから、深海棲艦の艦娘

も、人の形をしているのではと、思つてはいた。

正体不明とされていた敵の中に、見知つた存在がいたのだ。拍子抜けした、と言えはいいのだろうか。妙な驚きがあると同時に、納得もできる。

人影が動く。扉の奥、闇の中から、一步足を踏み出す。

しなやかな足。ぴっちりとした体のラインに沿っている黒のパンツが、どこか怪しげな雰囲気醸し出していた。

やがて、全身が露わとなる。身長は大和よりも少し低いだろうか。服装はすべて黒で統一されている。短い袖からは、向こう側が透けて見えるのではと思えるほどの、白い肌がのぞいていた。

流れるような黒髪が、腰にかかるほど長い。真珠のような純白の表情は、世界を睥睨するかののように、端正で凛々しい威厳に満ちていた。爛々と輝く瞳は、右が気高い金色、左が神秘的な深い蒼。

こちらを見ていた瞳が、細められる。右手を庇にして、「彼女」は太陽を振り仰いだ。

「・・・眩しい」

眩いて、「彼女」は笑った。

ひとしきり太陽を眺めていた「彼女」は、顔を下ろし、ゆっくりとこちらへ歩いて来る。一步一步、甲板を踏みしめる確かな足取りを、榊原は身じろぎせずに見つめていた。

ピタリ。スラリとした「彼女」が榊原と曙の前に立つ。互いに直立不動のまま、少しの時間が流れた。

「・・・初めまして」

榊原が先に口を開く。思い出したように腕を上げ、敬礼の姿勢を取った。

「日本海軍所属、榊原広人中佐です。こちらは曙」

名乗った榊原の挨拶を見定めるように、「彼女」がまた目を細める。それから興味ありげに、榊原と曙をあちこちから観察し始めた。

——なんだ、一体。

どうするべきか判断しかね、榊原は曙と顔を見合わせる。曙の方も肩をすくめていた。

一分ほど榊原たちを眺めていた。彼女が、満足げに頷く。それから再び榊原の方へ向き直り、色の薄い唇を開いた。

「面白い」

何が、面白いのだろうか。

「相当なお人好しか、でなければ馬鹿か。罨だとは思わなかったのか？」

「彼女」が榊原に尋ねる。至極もつともな疑問に、榊原は答えた。「罨をしかける理由が見つかりません。貴女にとって何のメリットもない。それに、例え罨でも、得るものの方が大きいと判断しました」

「なるほど、なるほど」

「さも可笑しそうに、彼女」は笑っていた。

「申し遅れたな。私がこの艦の主、名はサノという」

「サノ？」

「去るお方・・・お前たちは『大いなる先駆者』、と呼んでいるのか？彼女からもらい受けた名だ。何でも、神話の登場人物にちなんでいるらしい」

榊原がピンときたのは、かの有名なスサノオノミコトだ。

「まあ、『もらい受けた』、と言っても、実際に会ったことはないのだがな」

そう言つて、サノは肩をすくめた。本気で残念がっているらしい。

「貴女は、『大いなる先駆者』のことを、『ご存じなのですね」

「ご存じも何も、私含めた一部の深海棲艦は、『大いなる先駆者』が直接の手足として造った存在だぞ」

聞いてないのか？そんな風に、サノが首を傾げた。

「いえ、初耳です」

「そうか」

榊原の答えに、サノが思案するような顔を浮かべる。

「乙海域の人類艦隊と接触した、と聞いていたから、てつきりそこで教えてもらったものかと」

まあ、いいか。呟いたサノは、咳払いを一つして、話を始めた。

「お前たちが改flagshipと呼んでいる深海棲艦は、『大いな

る先駆者”が自分の手足として産み出した存在だ。私を含めて、その指揮系統は“統制者”を通さず、直接“大いなる先駆者”に繋がっている。とは言っても、直接的な指示が与えられることはほとんどなかったから、実質フリーハンドだがな」

「では、やはり今回のマリアナ襲撃は、貴女が立案したもの」

「ふむ、半分正解といったところか。“統制者”たちが、時間稼ぎをしたがっていてな。そこに私が、マリアナ襲撃の提案を投げ込んでやっただけだ」

望んだのは、“統制者”——「鬼」や「姫」と呼ばれる深海棲艦。実行したのは、サノ。

——マリアナ襲撃なんて突拍子もない手を、すぐに思いつくとは思えない。

きつと、用意していたのだ。“統制者”の思惑を利用して、その計画を実行に移した。

「言っただろう、私たちにはある程度のフリーハンドが与えられている。それに、私たちの自己意識は、“統制者”と同じくらいしつかりしている。だから、興味が湧いてしまったんだ。会ってみたくなくなった。人類と艦娘に。特に——危険を冒してまで乙海域に侵入した、榊原中佐に」

「・・・まさか、自分に会いたくて、マリアナに？」

「ご名答」

サノがそれまでで一番の笑顔を浮かべていた。

「私の期待通り、お前たちは現れた。そればかりか、こうして目の前で、話をする事ができている。これほど心が踊ることもあるまい？」

そう言って踵を返したサノは、手振りだけでついてくるように促す。向かう先は、左舷を指向したまま動きを止めている、第一砲塔のさらに前だ。

「お前たちは、私に聞きたいことが、山ほどあるだろう。私にも、お前たちには、聞いてみたいことがある。知りたいことがある。死ぬのはそれからでも遅くないはずだ」

——まあ、読まれてるよな。

サノの後ろ姿について歩きながら、榊原は予想していた事態に諦めに近い苦笑を浮かべる。

降伏勧告は本物だ。だが真の目的は、直に深海棲艦と会うこと。原始的なやり方だが、やはり直接会って、話してみることが大切だ。その辺り、サノも察してくれているらしかった。彼女が言った通り、深海棲艦の中でも、特に自己の意識が確かな——言ってしまったら人間に近い存在だ。

前甲板には、小さなテーブルと椅子が三脚用意されていた。被弾痕のある鈍色の軍艦に、白いテーブルはいささか浮いた存在で、滑稽ですらあった。

「時間が許す限り、お前たちの話を聞かせてくれ」

椅子の背もたれに手をかけて、サノが微笑んだ。

深海ト艦娘

テーブルについた榊原と曙に、サノが暖かなティーカップを差し出した。カップには、テーブルの上に準備されていたティーポットから、いい香りのする紅茶が注がれている。ありがたく受け取った榊原と曙は、サノが席につくのを待って、カップに口をつけた。

「紅茶だけですまない。スコーンでもつけてやればいいのだが」

真つ白な表情が、少し申し訳なさそうに歪む。その仕種に、榊原はわずかに緊張を緩めた。

「紅茶を飲むのは、久しぶりです」

「そうか。どうだ？可能な範囲で研究などしてみただが……。率直な意見を聞かせて欲しい」

「こういうのには疎いので、何とも。でも、おいしいですよ」
「なら、よかった」

サノは薄く笑った。安堵するように呟いた彼女は、自分のカップに口をつける。十数分前まで戦闘をしていたとは思えないほどの、のどかな時間が、両者の間に流れていた。

「ところで」

カップの自身が半分ほどになったところで、サノが話を切り出した。コトリ、カップをソーサーに戻した彼女は、真つ直ぐにこちらを見ている。否、見つめている先は榊原ではなく、隣の曙だ。

「曙、といったか」

「そう名乗ったでしょ」

曙はいつもと変わらない、どこかぶっきらぼうな言い方で答える。その様子を、サノはためつすがめつしながら、観察していた。

「……以前、どこかで私と会わなかったか？」

「はー」

質問の意図がわからない、というように、曙が怪訝な顔になる。

「脈絡のない問いかけであることは理解しているが、どうも初対面とは思えなくてな。曖昧な言い方で遺憾だが、お前から以前嗅いだことのある匂いがする。それもおそらく、かなり前の記憶だ」

「・・・よくわかんないけど、あんたとは初対面よ。ていうか、そもそも深海棲艦と話すのが初めてだし」

「・・・それもそうだな」

サノはあつさりと言及をやめた。もう一度カップに口づけ、唇を湿らせた後、再び話を始める。

「さてと、息抜きは十分だろう。最初はそちらのターンと行こうか。何が訊きたい？」

問われた榊原は、一瞬曙と目配せをし、口を開いた。

「まず確認したいのは、深海棲艦がどれほどの意識や思考を持っているのか、です。あらゆる深海棲艦が、こうして貴女と同じように対話が可能なら、この戦争に新しい選択肢が生まれる」

舞からは、ここに関して詳しく聞いていなかったし、彼女自身も知らない様子だった。あくまで、『T・T独立艦隊』の目的はZ海域の封鎖と『イレギュラー』との接触であり、通常の深海棲艦とまでコンタクトを取る余裕はなかったらしい。それに、彼女たちが知りたがっていた情報は、『イレギュラー』しか持ち合わせていない。

榊原の質問に、サノはかぶりを振った。

「残念ながら、彼女らに意識や思考という概念はない。普通の深海棲艦は、戦略を実行するために必要な思考と論理はあっても、戦略を立てるような高度な意識と思考は持ち合わせていない。そう作られたのかどうかは知らないが、ともかくほとんどの深海棲艦は、操り人形みたいなものだ」

お前たちはついてるよ。サノはそう言って、口の端を吊り上げる。「彼女たちは、戦略的思考を持っている者の指示に従うだけ。現にこの海域には、私の指示でいまだに機動部隊が残っている。戦力はほぼ壊滅しているにもかかわらず、だ。『統制者』や『異端者』、あるいは私のような存在の方が異質なんだ」

言い終わったサノが、さもつまらなそうに息を吐いた。その真意を伝えるように、言葉を続ける。

「『大いなる先駆者』は、人間をよく知っている。高度な意識と思考を持つことには、それが故の弊害がある。深海棲艦の直接指揮権を持

つ「統制者」は、言いなりの駒にはならない私や「異端者」を嫌った。深海棲艦という、一つの種とでも言うべき我々が、自らの存在の探求と、他者との接触のために産み出したのが、私や「異端者」であったというのに。疎まれた「異端者」は狭い海域に押し込まれ、いつしか「イレギュラー」と呼ばれるようになった。一方で、「大いなる先駆者」直属であるが故に、難を逃れて、私は今ここにいます。何とも、面白いのか、面白くないのか」

自嘲するような笑みを漏らしたサノは、最後にこうしめる。

「ともかく、深海棲艦と和平や共存を望むのは、大きな間違いだ。「統制者」たちが人間との戦争を望んでいる以上、その実現性は極めて低い」

——まあ、当然と言えば当然か。

それほど甘い話ではないのだ。

「・・・根本的なことなただけど。なんであんなたちは、人間を目の敵にしているわけ？」

横から鋭い言葉を浴びせかけたのは、曙だった。その質問に目を瞬いたサノは、考え込むようにあごに手を当てる。

「・・・「統制者」がそれを望んでいるから、としか言いようがないな。正確には、「統制者」の命令の根幹となっている、初歩的な命令——

「おそらく「大いなる先駆者」が出したであろうその命令に従って、深海棲艦は人類とそれに与する艦娘に攻撃を加えている。それ以上の考えは、持ち合わせていない」

それから再び、少しの間があった。

「逆に訊くが、なぜ艦娘は人類に味方する？なぜ深海棲艦を攻撃する？明確な理由はあるのか？」

「それは・・・」

珍しく、曙が言葉に詰まった。

「ないだろう。そういうことだ。つまり、そういうことなんだよ」

サノがジッと曙を見つめる。その視線を、曙は真っ向から受け止め、同じだけの強い意志を込めた瞳で見返す。

「・・・少なくとも、今のあたしは、あんなたちとは違う」

「・・・そうか。見つけることができたんだな、理由を。それが幸せなことかどうかは置いておいて、羨ましく思う。心から」

挑むような曙の言葉に真正面から対峙し、サノは頷いた。それから意味ありげに榊原の方を見遣る。その視線の意味に気づけず、榊原はクエスチョンマークを浮かべた。

「これはあくまで私の個人的な考えに過ぎない。そのことを、前もって言っておく」

榊原のクエスチョンマークには答えず、サノはさらに言葉を紡ぐ。

「“大いなる先駆者”に、人類と戦争をしているという認識はない。いや、あつてもそのことが目的じゃない。人類を攻撃することで、“大いなる先駆者”は別の何かをなそうとしている」

「『何か』って何よ」

「それがわかれば苦労はしない。言っただろう、私は“大いなる先駆者”に造られた存在だ。その考えなど知り得ない。人類のことわざにも、『親の心子知らず』というのがあるだろう」

それとこれとは意味が違う気がしたが、あながち当たっている気もして、否定もできない。

「戦争は、一種の外交的手段だと捉えることができる。例えば土地や権利の獲得といった、外交目的を達成するために執られる、手段の一つだと。だが、我々は別に、そうした目的を持ち合わせているわけではない。土地も権利も資源もいらぬ。あるのは命令を遂行することだけ。最初に与えられた命令は、人類と戦って、海から追い出すこと。そして、反抗するものは、なんであろうと排除すること。今の私たちは、戦争を目的とした戦争をしている状態だ。絶対にあつてはならない、下策中の下策に他ならない」

それでも、戦い続けるのか。だとしたら、その戦う理由は？

「“大いなる先駆者”にとつては、今のこの状態さえ、思い描いた通りなのかもしれないな。私から“統制者”、“異端者”、全てひっくりめて、言ってしまうえば“大いなる先駆者”の駒なのだから」

普通の深海棲艦よりも、高度な意識と思考を与えられたサノも、その点に関しては何ら疑問はないという。戦う意味をひっくり返そう

とは思わないという。

「お前たちと会う、という私個人の欲求は、必ずしも『大いなる先駆者』の思想に反しないと、私は判断している」

きつぱりと言い切ったサノの様子は、いつそ清々しいくらいだ。

「さてと、そろそろこちらからも質問をしていいだろうか？」

榊原たちが考え込もうとしている雰囲気を感じ取ったのか、その思考を遮るようにサノが畳みかける。了承せざるを得ない。

「さつきも言ったが。なぜ、艦娘は人間と共に戦う？なぜ、人間は艦娘と共に戦う？」

意外な質問の内容に、榊原は思わず曙の方を見た。目が合った彼女は、ツイとそっぽを向いてしまう。仕方なく、榊原が先に口を開いた。「つまらない正義感、だと思えます。本当は人類の問題なのに、俺たちは彼女たちに頼りつきりだから。せめて、その隣で戦おうとする、そういうことだと」

「なるほど。都合のいい考え方だ。自分が満足するために、艦娘と共に戦う、と？」

「最初は、きつと皆そうだったと思う。でも、ある時気づくんです。うまく言えないけど、彼女たちの隣で戦う意味に。それを教えてくれたのは、曙です」

思い出したのは、身を盾にして仲間を守った、曙の姿。炎の艦橋で最後までたち続けた、華奢な少女の姿。

あの時。榊原は、心の底から、彼女の隣にいたいと願った。

「そういうものなのか」

榊原の話聞いていたサノが、言葉の意味を噛み締めるように、二度三度と頷く。それから好奇心に満ちた瞳を、曙の方に向けた。

なぜか耳まで赤くなっている曙が、まるで叩きつけるように言う。

「さ、さつき言った通りよ！あたしは見つけたの、戦う理由を！だから、クソ提督の隣に立ちたいと思ってる！それだけっ！」

言い切った曙の視線が、榊原のものとぶつかる。瞬間、よく熟れたトマトのように赤くなつて、曙は盛大にそっぽを向く。やはりその理由は、榊原にはわからなかった。

「そうか・・・そうか」

曙の意図を理解したらしく、サノは微笑を浮かべて首肯した。その目は榊原と曙を交互に見るが、腕組みをして明後日の方向を見てしまっている曙とは、結局視線が合わなかったようだった。

「最終的な答えは、お互いにまだまだ、といったところか」

「そうですね。答えを探しているからこそ、共に戦っているのかもしれない」

「人間というのも、艦娘というのも、難儀な生き方なのだな」

そう言いつつも、サノの瞳はどこか羨望の色に染まっていた。

知覚ヲ求メル者

榊原、曙、サノ。人間と、艦娘と、深海棲艦。三人の会談は、一時間ほどで終了した。

理由は単純だ。丁度その時、塚原麾下の横須賀機動部隊から放たれた攻撃隊が、マリアナ沖に展開していた深海棲艦機動部隊を撃滅したので。

「さて、この辺が潮時だろう」

報告を受けたサノは、少しばかり名残惜しそうに、そう言った。

榊原も心得ている。

「本題に移りましょう。貴女の、降伏条件について」

潮時、とはそういうことだ。サノを——ル級改をどうするか、決めなくてはならない。

「・・・降伏するとして、私はどうなる?」

「航行は可能ですから、我々の監視のもと、一旦サイパンに碇泊してもらいます。その後については、海軍上層部の判断を仰いでみないことには、断言できません。ただ、そのまま当地に留まる可能性が、高いかと思えます」

「なるほど、本土には連れていきたくない、か。妥当な判断だな」

「鹵獲した」ならまだしも、「降伏した」深海棲艦を、本土の人たちに見せるわけにはいかない。それはすなわち、正体不明の敵が、実は意思の疎通が可能であることを示すことになるからだ。

人類の対深海棲艦戦略太平洋戦線を形成する日本としては、深海棲艦の正体が判明するのは何かと都合が悪いのだ。否、正確には、民衆がそのことを知るのが、都合が悪いのだ。

現状、太平洋において深海棲艦と戦えるのは、日本とアメリカの海軍だけ。それも、お互いある程度の無理をして、だ。残念ながら、しばらくは無理をしなければならぬ。太平洋戦線は、二つの海軍だけで支えているのだから。

日本はまだ、太平洋で戦い続けなければならない。そのためには、降伏したサノをマリアナに留めておくのが、最も穏便な方法なのだ。

「それが、そちらの最低条件、ということか」

「というよりも、それ以上に提示するべき条件は、今のところありません。マリアナに留まってくれさえすれば、貴女の身の安全と自由は保障できると思います」

「そうか・・・」

噛み締めるように呟いたサノは、腕を組み、椅子の背もたれに体重を預けて空を仰ぐ。太陽はもう間もなく天頂に上ろうとしており、降り注ぐ光線がサノの表情をますます白くする。やがて彼女は、残念そうに眉尻を下げて、返答を寄越した。

「やはり・・・？むことはできないな」

そういう判断になってしまうのだ。

「それは、そうですね」

「すまないな、要望に沿えそうになくて」

真面目な顔で、サノは目礼する。

考えなくともわかることだ。

なぜ、多くの軍艦は味方によって雷撃処分をされるのか。

「渡すわけにはいきませんか。貴女方の技術を」

「ああ・・・お前たちはそう考えるのか。まあ、そうだな、それも理由の一つだ」

サノが目を細める。その奥に宿る色は、どこか悲しげに見えた。

「もつと大きな理由がある。曙には、わかってもらえるかもしれないがな」

チラリとサノから向けられた視線に、曙は沈黙をもって答える。真つ直ぐなその瞳が、言葉以上にものを語っている。サノの口の端が、ほんの少し緩んだ。

「私たちは艦。私にとって、艦は全てだ。降伏したとしても、その艦を誰かの好きにされるのは、我慢ならない。だからそもそもとして、私は降伏を受け入れるわけにはいかない」

——タテマエ、か。

もとはと言えば、この「タテマエ」を作ったのは榊原自身だ。降伏の条件に関する交渉という「タテマエ」。サノはその「タテマエ」に

乗っかってくれたに過ぎない。

「タテマエ」は「タテマエ」だ。人間と艦娘、そして深海棲艦が出会うための、「タテマエ」。それを誰もが理解していた。「タテマエ」があまりに脆く、崩れやすいことも。

「・・・わがままを言っていることは、理解しているつもりだ」

「いえ、もとはと言えば、こちらがわがままを言ったのです」

榊原は頬を緩めた。自然に緩んでしまった。

今、この場の三人は、確かに「タテマエ」を共有していた。

「降伏が受け入れられないとすれば、我々としては貴女を撃沈するほかありません」

「もとより、そのつもりだ。すでに存分に戦った。この世界に、思い入れと呼べるものもない」

そう言ったサノの言葉には、微塵のブレもなかった。

「・・・最後に、一つだけ。撃沈を望んだのに、自分たちと会談を持ったのは、なぜですか？なぜ、会ってくださったのですか？」

「答えは明快、人類と同じだ。例えば死ぬとわかっていても、私は知識を追い求める。新たな刺激を求める。それは、正しい姿ではないか？」

サノがこちらの目を覗き込んでくる。深い蒼の瞳、輝く金色の瞳。そこに、榊原と曙が映り込んでいる。

「人は本を読む。テレビを見る。誰かと意見を交換する。そんな知覚の営みを、死ぬまで続けていく。その生が短かろうと長かろうとだ。私の場合、たまたま知覚を得る相手との接触が、死の間際だっただけ、とも言える」

その声音を、何と表現していいのか、榊原は適当な言葉を知らなかった。いや、言葉で表せるようなものなのか、わからなかった。

代わりに、曙が口を開く。

「深海棲艦も、ブルーアイアンでできてるでしょ。強制活性化を使えば、生き残れるはずでしょ」

「私たちがそれを使えないことは、知っているだろう？艦娘と深海棲艦の違いはそこだ。私たちは、艦娘ほどの個性を持たない。意識を持つ個体もごくわずか。その必要がなかったからだ。いや、できなかつ

たというべきかな？なぜなら、私たちの精神同調は、平坦で起伏に乏しいからだ。艦娘のように、感情や自らの精神的負担を増すことで、ブルーアイアンの活動を促せるようには、そもそもなっていないなかった」

「・・・あなたたちは、個性を捨てる代わりに、何を得たっていうの？」
「さあ、ね。少なくとも、私自身が、身をもって感じられるようなものではなかった」

サノはかぶりを振った。

「私は、それを探していたのかもしれない。個を捨てた深海棲艦において、なぜ私は個を得たのか」

——探しているものは、誰も同じか。

それは、人類が長い歴史の中で探し続けてきたもの。吹雪が気づき、一部の艦娘たちが探し始めているもの。

生きとし生けるもの、誰もが探す運命にあるのだろうか。自分が、この世界において「たった一つ」であることに気づいてしまった時から。

「最後に、一つだけいいだろうか？」

サノの確認に、二人が頷く。

「彼女に、よろしく伝えておいてくれ」

視線が向いた先、こちらに砲口を向けたまま海上に鎮座しているのは、*“大和”*だ。

「彼女の一発は効いたよ、なかなかね」

魚雷を撃ち尽くしていた*“曙”*に代わって、*“霞”*がル級改の雷撃処分を担当した。発射された四本の酸素魚雷が、ル級改の左舷に吸い込まれる。次の瞬間、摩天楼を思わせる巨大な水柱が連続して立ち上り、ル級の姿を覆い隠す。

巻き上げられた海水が、バラバラと崩れる。霧がかかった景色の向こう、甲板に立つ人影が見えた。黒髪が風になびくのは、ル級改に残ったサノだ。

その姿を、榊原は真っ直ぐに見つめる。サノもまた、*“曙”*を見つ

めている。距離はあっても、不思議な引力のようなものが、両者の間にあつた。

やがて、ル級改が傾き始める。被雷した左舷に向けて、ゆっくりと傾斜を増していく艦体。ある角度を過ぎた辺りから、その傾き方は急激に増していった。その頃には、サノの姿はもう、甲板上にはなかつた。

泡立つ海面が、ル級改の甲板とキスをする。大量の海水に抱き込まれた巨大戦艦の艦体は、いとも簡単に波間へと没していった。

艦首からズブズブと沈み込み、次第に艦尾が持ち上がっていく。

前甲板が消えた。

第一砲塔が消えた。

第二砲塔が消えた。

艦橋が、煙突が、マストが、次々に波の蒼と混ざり合い、その中へ引き込まれていく。

「……ル級改、まもなく完全に沈没」

曙が低い声で報告する。

艦尾が大きく持ち上がり始めた。高角砲群が没するのと入れ替わりに、海水に浸かっていた舵やスクリューが露わとなる。

天を突くように屹立した艦尾。それもやがて、沈んでいく。巨大な渦を起こし、海面をかき混ぜながら。

サノと共に、沈んでいく。

最後の黒光りが、榊原の目を射る。鈍色の輝きは波間を走り抜け、辺りのものに最後を報せる。次の瞬間、そのきらめきすらも、深い蒼の底に溶け込んでいった。

——これで、終わりだ。

ようやく、マリアナ沖に静けさが戻った。その時だった。

『ドロップを確認』

通信は、沈みゆくル級改に巻き込まれないようにと、退避させていた「霞」からだった。

「位置は？」

『たった今、ル級改が沈んでいった地点』

「っ!!」

——「艦娘と深海棲艦、違いは思ったよりも少ないのかもしれない」

サノの言葉が、脳髓を駆け抜ける。

——「艦娘は、かつての軍艦の記憶をもって生まれる。深海棲艦も同じだ。はつきりとしたものではなく、断片的な記憶でしかないがな。多くの無念と怨嗟、のどの渴きに似た衝動。それが、我々を駆り立てる」

艦を降りる榊原と曙を見送りに来た彼女は、そう言いながら「大和」を見つめていた。

——「朧気だが、彼女の記憶もある。本分を尽くせなかった無念を、知っていた」

今、彼女は幸せか？ 幸せになれるか？

問いかける薄い瞳が印象的だった。

「……本当に、何なのかしらね、私たちの違いは」

曙が、宙空に向けてポツリと呟く。答えは誰も持ち合わせていない。

二つは同じなのか？ 同じところから始まったのか？

——知るためには、まず彼女たちを知らなければならぬ。

榊原はチラリと曙を窺う。輝くその瞳は、今まさに邂逅へと向かっていく「霞」の姿を追っていた。もしかしたら、その先にもっと別のものを捉えているのかもしれないが。

顕現が始まる。辺り一面、金色と乳白色が混ざり合ったような光に包まれ、ありとあらゆる視界が奪われる。生命の息吹を宿した光の脈動が、「霞」の方へ——先ほどル級改が沈んでいた海域へと収束していく。

光が収まった時、水蒸気に覆われた景色の中で、新たな鈍色が動きだす。生命が産声を上げ、自らの意志をもってブルーアイアンを動かす。流麗なその艦影が現れるのを、誰もが眩しげに目を細め、見守っていた。

羅針艦橋のスピーカーから、声が流れる。

『駆逐艦「磯風」だ』

新たな艦娘。新たな仲間。

なぜ、深海棲艦を撃滅した海域で、艦娘がドロップするのか？

それは繋がりか。記憶の浄化か。はたまた、何者かの意志なのか。

榊原はマイクを取る。

「榊原広人中佐だ。君と出会えたことを、心より嬉しく思う」

ようこそ、この世界へ。

木曾「閑話だ」

「お前って奴はっー」

「静かに」というのが暗黙のルールである病棟において、あつてはならない大音声が響いていた。これでも抑えている、と言われても、全く納得いかないところである。一応は、彼なりに病人の傷を労わっているらしいが。

サイパン島の医療施設は、被害を免れていた。その一室から、医務官を震撼させるような声を発したのは、塚原その人であった。その目の前、白衣を纏ってベッドに体を起こしている角田は、大きさに耳を塞ぐ仕種をして見せていた。

「ちよつとちよつと、塚原。病人にかける第一声として、それはどうなのかな?」

「知らん。お前のような病人がいてたまるか。そもそも、怪我は病氣に入らん」

「うわ、暴論」

そう言いながら、角田が笑う。まったくコイツは、こっちの心配も知らないで。

「お前が怪我をするのはいい。百歩譲つてもういい。だが、どこの世界に、怪我したまま旗艦で敵艦隊に突っ込んでいく馬鹿がいる、この馬鹿ー」

「えー、だつて僕が最先任だつたし」

「余計突っ込んでいくな!もう少し自分の頭脳を大事にしろ、阿呆!」
「もう、ちよつとは労わってくれよ、塚原」

すねた風に、角田は唇を尖らせる。こんな時まで、普段の軽い調子を崩さない角田に、塚原の方が力が抜けて、ベッド横の椅子に座り込んでしまった。

「・・・お前は、もう少し自分の体を大切にしてくれ」

「心配しすぎだよ。ちよつと腕を骨折したのと、頭打っただけだし」

ブツン。自分の中で、何か吹き飛ばすのを塚原は自覚していた。

顔を思いつきり角田に寄せる。いつもひよいひよいかわしてし

まう彼女が逃げられないように、両の頬を押さえつけて目線を固定した。

「・・・頼むから。俺の目の届かないところで、無茶をするんじゃない。お前を止められる奴がいなくていいところで、突っ込んで行かないでくれ」
角田の澄んだ瞳が、わずかな抵抗とでもいうように、視線を角田からずらす。

「・・・塚原が来てくれるから、安心して突っ込めるんだよ?」
「安心して突っ込むな、この暴走機関車。俺に早死にされたくないから、少し自重しろ」

その先の言葉を言うべきか否か、一瞬だけためらう自分が、今回だけは嫌いになりそうだった。

「・・・俺の心臓が悪い」

角田の方も、視線を伏せたまま、沈黙している。やがてその瞳が、再び真っ直ぐに塚原を捉えた。いつものような茶化した色は、少なくとも塚原には感じられなかった。

「それは、僕にいなくなったら、困る、ってことかな?」

「・・・横須賀の水上部隊を指揮するお前に万が一のことがあったら、誰でも困る。だが、それとは別にして、俺はもっと困る」

「・・・そっか」

頬を解放してやると、角田が柔らかく笑った。

「塚原がそう言うなら。僕も、君と会えなくなるのは、嫌だしね」

「・・・そっか」

気恥ずかしくなった塚原は、誤魔化すように呟いて、ベッドの脇に目を移す。

「・・・リンゴでも食べるか」

「ああ、うん。食べたいね」

「待ってる、今剥く」

そう言った塚原を、角田が意外そうな目で見た。

「へえ、塚原って、リンゴとか剥けるんだ」

「・・・なんだその意外そうな面は。俺だって果物くらい剥ける」

「塚原がリンゴを剥いてる姿なんて、似合わないなあ、と」

「・・・剥いてやらんぞ」

「ごめんごめん。よろしくお願いします」

笑い半分で謝ってくる角田に苦笑を漏らすことしかできず、塚原はリンゴを手を取った。果物ナイフで皮を剥き始めると、白衣の戦乙女が感心したような声を漏らした。

*

角田の見舞いに訪れた榊原は、彼女が入れられている部屋の前に、横須賀高速水上部隊の旗艦が立っているのに気がついた。

比叡も榊原に気づいたらしい。人差し指を唇に当てて、「静かに」と手振り以示す。その指示に従って、榊原は抜き足差し足忍び足、比叡の方へと近づいて行った。

「司令のお見舞いに来てくださっただけです」

「はい。何だかんだと一日空いてしまいましたけど」

マリアナ沖での戦闘が収束してから、すでに一日。駆け付けた救援艦隊は、午後から夕方にかけてサイパン港に入港、各種整備と補給を受けていた。

各種艦艇の整理やマリアナへの空襲による被害状況の確認、連合艦隊司令部への報告などの業務を、榊原は塚原の下でこなしていた。その結果、昨日は面会が許可される十七時を回ってしまったため、今日面会に来たのだ。

先に塚原が向かっていたことは知っていたから、時間をずらしてきたのだが、どうやらまだ面会中だったようだ。

比叡は、角田が入っている部屋を覗いている。並んだ榊原も、それに倣って室内に目を向けた。

中では、角田が塚原に、リンゴを餌付けされていた。

白衣のまま、満面に笑みを浮かべる角田。一方の塚原は、やれやれと言った様子で、その口に切ったリンゴを差し出す。彼が角田のために切ったリンゴらしかった。

「・・・なるほど、そういうことでしたか」

小声で言った榊原の言葉を、比叡は無言で肯定して、室内を覗くのをやめた。

「そういうことです」

彼女はそう言つて、満足げな長い息を吐いた。

「まったく、面倒のかかる二人なんです。司令はあの通りだし、塚原大佐は公私混同大嫌いだし。見てるこっちがイライラしてきますよ」

「そんなに、だったんですか」

「そりゃあ、もう」

なぜか誇らしげに胸を張った比叡に、榊原は苦笑を漏らす。

「自分はお邪魔ですね」

「あの二人は気にしないと思えますけど、そろそろ年貢の納め時ということで。ご協力お願いします」

「わかりました」

比叡の協力要請を受諾して、榊原は角田へのお見舞いを今しばらく遅らせることとした。

「パラオ艦隊は、明日戻られるんですよね」

「はい。このまま空けておくわけにはいきませんし、色々と精査したいこともあります」

「そうですか。次にお会いするのは、トラック攻略戦の時になりそうですね」

トラック攻略戦は近い。早ければ一か月後、遅くとも二か月後には、正式に発動されることとなるだろう。その時はまた、パラオ泊地を起点として、多くの艦娘と提督たちが作戦を遂行することになる。

そこに、榊原と比叡も加わることだろう。

「比叡さん、怪我の方は？」

「私自身はかすり傷だけでしたので、全然問題ないです。艦体も、後四日ぐらいで応急修理が終わりますから、そうしたら横須賀に戻ります」

第一夜にル級改と激戦を演じた殊勲艦は、現在その艦体をサイパンに残った入渠ドックに横たえている。戦闘能力は大きく喪失していたが、航行能力については被害が少なく、軽い応急修理で横須賀への帰投が可能と判断されていた。横須賀所属の艦隊は、比叡の出渠を

待って、サイパンを去ることになる。

一方、サイパンの警備艦隊については、増強が決定されていた。具体的な配備艦等は決まっていないが、サイパンの第十一戦闘航空団増強と共に、トラック攻略戦前には行われる予定だ。

「それじゃあ、私はこれで。修復の様子を見てきます」

「自分も一度、戻ります。午後にも、もう一度来ます」

「その時は、榊原中佐からも言っておいてください。いい加減塚原大佐とくっつけ、って」

◇ 容赦のない比叡の言い方に、榊原は再び苦笑いを浮かべた。

補給作業が終了したBOBたちが、サイパン港の沖に碇泊している。景色はすでに夕焼けのオレンジに染まっており、光の中に浮かび上がる黒鉄の城たちをより一層引き立てていた。

埠頭に立つ清水は、そんなBOBたちのうち、「摩耶」を見つめていた。盛り上がるような艦橋は夕陽によって陰影がよりはつきりとしており、独特の存在感を示す。

「美しい……」

ポツリと呟く。その時、背後に人の気配を感じて、清水は後ろを振り返った。

肩にギリギリ届かない位置で切りそろえられた髪。影を映す威勢のいい瞳。腕を組んで立つ姿は、スラリとして非常に様になっている。

「なーに黄昏てんだよ」

軽い調子で言った摩耶は、ゆつくりと清水に歩み寄り、その横に並んだ。それに何かを言うわけでもなく、清水は再び沖へと目を向ける。先ほど見ていた「摩耶」の周囲には、同じくパラオ泊地に所属するBOBたちが錨を打ち、最大戦速で駆け付けた艦体の疲れを癒していた。

「……あのさ、清水」

隣の摩耶が切り出す。かすかに吹いた風が二人の間を抜け、潮の薫りを運んだ。お互いに沖を見たまま、摩耶は話を続ける。

「ありがとな。色々」と

「・・・礼を言われるほど、俺は何かをしてないぞ」

「ちっ、素直じゃない奴」

「お互い様だろ」

そう返して、気づく。自分が、この少女に対して、素直でなかったことに。

——似た者同士、か。

思わず苦笑が漏れそうになる。そんな清水の心の内を知ってか知らずか、摩耶が再び口を開いた。

「お前にその気がなくても、いい。あたしが、勝手に礼を言いたいだけだしさ」

「そうか」

摩耶という少女が戦っているところを、初めて見た。彼女が自らの壁と戦っていることを知っていた。

果たして、彼女が壁を乗り越えられたのか。それは、清水にはわからないことだ。

「清水の旗艦でよかった。お前がいてくれてよかった」

「褒めても何も出ないぞ」

「ああ、もう！いちいち茶化すな」

摩耶が頬を膨らませてそっぽを向く。少し調子に乗りすぎただろうか。

「俺は、礼を言われるようなことはしてない」

摩耶にだけ届くようにと、呟く。

「摩耶がよかったと思えるなら、それだけで十分だ」

「あつそ。・・・そうかよ」

明後日の方を向いたままの言葉は、それでもちやんと、清水に届いていた。

「じゃあ、あたしは風呂入ってくるから」

用件は済んだのか、摩耶は踵を返して、マリアナ警備隊の庁舎へと戻っていく。が、一度足を止めて、もう一度清水を振り返った。

「そういうえば、新入りが張り切ってたぞ。あたしたちに料理を振舞う

んだと」

お前も来いよ。それだけ言い残して、摩耶は埠頭を離れていった。太陽は、いよいよ地球の裏側に隠れようとしている。オレンジだった海面は、次第に島の影を映し始め、夜の色に染まろうとしている。ただ、水平線まですべて夜空を映すには、今しばらくの時間がかかりそうだった。

「摩耶」を見つめる。思えば、あの艦と——彼女と出会ったことが、全ての始まりだった。

——俺にとって、艦娘とは何か。

その問いかけに、自分でもいい加減、決着をつける時だろうか。「……らしくないな。まったくもって、俺らしくない」

自嘲気味にかぶりを振った清水は、摩耶に倣って回れ右をすると、士官用の庁舎へと戻っていく。そろそろ夕食時だ。磯風が振舞ってくれるという晩御飯の前に、風呂に入ってしまった。

一瞬吹いた風が、清水の背中を押す。マリアナに、静かな夜が訪れようとしていた。

その晩のご飯は、艦娘や提督たち曰く、「天にも昇るほど」であったという。

決戦前夜 彼女ノ決意

パラオ泊地を、一隻のBOBが、ゆつくりとタグボートに曳かれて移動していた。

狭い港湾内においては、大型艦が自由に動くことはできない。主機を止めた重巡洋艦「摩耶」は、タグボートにされるがまま、第二浮きドックへと向かっていた。

——いよいよ、か。

深呼吸とも溜め息ともつかない息を吐いて、摩耶は目の前の作業を見守っていた。

タグボートの船尾が白く泡立ち、「摩耶」を引いて、あるいは押し、その位置を調節している。沈降した浮きドックは、すでに「摩耶」受け入れの準備を終えていた。あとは船台の上に「摩耶」を誘導して、そのドックを浮揚させるだけだ。

「摩耶」入渠の理由は、言わずもがな、大規模改装実施のためである。彼女はついに、自らの艦体に大幅に手を加えることを、承諾したのだった。

理由はいろいろあるが・・・やはり、埠頭の端の方でこちらを見ている、長身の将校の存在が大きいだろうか。

「・・・心配し過ぎだった」

呟くその声の端が緩んでいることを、摩耶自身も自覚している。それをニヤニヤと見つめている妖精に気づいて、彼女は赤くなりかけた頬をそっぽに向けた。

ドックへの収容作業は、いよいよ大詰めだ。側面に大きく「二」と書かれた第二浮きドックへ、「摩耶」の艦体が滑り込んでいく。大きなクレーンや制御室がゆつくりと艦橋の横を流れ、コンクリートの壁が視界を覆う。

「摩耶」の位置が定まると、タグボートから伸ばされていたロープが外され、ドックから離れていく。

『これより、ドック内バラストタンクの排水を行う』

管制室から通信が入る。浮きドックを沈めるために海水を入れたタンクから、ポンプで排水していくのだ。

ポンプが作動し始めたのか、ドックが少しずつ浮き上がり始める。

「摩耶」艦底部と船台との差は二メートルあり、少しすれば船台に艦体に乗っかることになる。

「バラストポンプ、作動準備」

ドックの上昇に伴って、「摩耶」艦内のバラスト水も排水しなければならぬ。その準備は、すでに機関室内で始まっているはずだ。

やがて、「摩耶」の艦体が船台に乗る。少しずつ艦体が海水から浮かび上がり始めた。

バラストポンプが作動し、海水が排出されていく。船台とのバランスを見ながら、慎重に。

全ての作業が終わり、摩耶は精神同調を解除する。大きく伸びを一つ。

◇ 「摩耶」の大規模改装が始まった。

◇ 「摩耶」の入渠から数日前――。

摩耶は、清水の部屋を訪れていた。夕食後、いつかの夜のように果物を持参して清水の部屋の扉を叩き、今は彼の淹れる紅茶を待っているところだ。

「紅茶に果物・・・面白い組み合わせな気もするが」

そんなことを言いながら、清水が二人分の紅茶を机に出す。「サイパン沖海戦」(マリアナ沖における一連の戦闘の海軍呼称)後、本土から届いたものだ。

「それで、話したい事ってのは？」

向かいに腰を下ろした清水が、早速とばかりに切り出す。それは、今夜摩耶がこの部屋を訪れた、本題であった。

紅茶で唇を湿らせて、摩耶は息を吸い込む。

「お前には・・・話しておくべきだと、思った」

そう前置いて、話を始める。

「あたしが、佐世保所属になって、最初の提督は、あたしと同じような新人の提督だった」

それは、二年ほど前のこと。配属命令を受けて足を運んだ先に待っていたのは、まだ初期艦と二人きりという、若い提督だった。

豪放磊落が服を着て歩いているような提督で、摩耶も彼と馴染むのにそれほど時間はかからなかった。

彼の指揮下では最大のBOBということもあり、作戦では摩耶が旗艦を務めることが多かった。当然、その艦橋内には、提督の姿があった。

——「海はいいな。難しいことを考えなくていい」

そんなことをのたまう彼に、摩耶はいつも苦笑いを浮かべるしかなかった。

「良くも悪くも適当な奴でさ。書類仕事が苦手で、一杯溜まつてるのに、あたしらのことばっかり見てて。一回、佐世保の提督長に叱られたことがあった」

でも、仲間想いの、いい提督だった、と思っている。

ある時、佐世保鎮守府主導の作戦が、立案された。南方航路上の深海棲艦を撃滅するための作戦だった。

作戦遂行にあたって、摩耶所属の艦隊は夜間襲撃部隊の一翼を担うこととなった。当然、“摩耶”は旗艦として、作戦に参加する。初の大きな作戦ということもあり、摩耶以下艦隊の士気は高かった。

「昼間は空母の航空戦を支援して、夜になり次第、突入した。で、あたしらが相手取ったのは、重巡二隻を中核とした通商破壊部隊の一艦隊だった」

夜戦の常として、近距離での砲撃戦が始まった。“摩耶”が二隻の敵重巡を相手取っている間に、軽巡以下の艦隊が突撃し、魚雷戦を仕掛ける。乱戦になりがちな夜戦だからこそ、基本に忠実に、戦うことを選んだ。

転針を繰り返しながら、“摩耶”は重巡二隻と撃ち合った。訓練の成果もあり、“摩耶”は砲戦を優位に運んでいた。これなら勝てる、と、摩耶が思った時だった。

強烈な衝撃が、横方向から襲ってきた。目の前がくらみ、激しい痛みが襲う。何が起こったのか、全く理解ができなかった。

目を開けた時、真っ先に感じたのは、左から髪を揺らす風。それから、ぼんやりと艦橋内を照らす、月明かり。

「・・・あたしは、艦橋に被弾した」

艦橋の左側に、大穴が穿たれていた。潮と硝煙の混じった、戦場独特の匂いが、艦橋内に容赦なく侵入して、摩耶の鼻をつく。そこに、嗅いだことのない、得体の知れない匂いが微かに混じっていることに、摩耶は気づいた。

ベタリ。自分の額を濡らす熱いもの。それが血だということには、気づいていた。

だが、それだけでは説明がつかないほどの血が、摩耶の足元に溜まっていたのだ。

「提督の、血だった」

破碎された隔壁の破片が、もろに提督を襲ったのだった。艤装に寄りかかる彼の、あまりにひどい出血に、摩耶の頭は真っ白になった。

——「前を・・・見ろ。俺の、ことは、いい。お前は・・・必ず、生き残れ」

取り乱す摩耶に、提督はそれだけ言った。右手を掴む彼の握力はあまりに弱々しく、しかも血が滴って滑る。その手を必死に掴もうとした摩耶の努力も虚しく、崩れ落ちるようになってしまう。その手は摩耶の右手を離れていった。

「たった一発で、あたしは全て失った。艤装との精神同調率は五十パーセントに低下。そのせいで正確な操舵は望めなくなった。砲撃にも支障が出る。被弾時に通信関係の機器も破壊された。そして・・・提督まで、いなくなつた」

拳を握る。今でも、あの時を思い出すと、震えが止まらない。嫌な汗が噴き出る。

「その後は、ただただ主砲を撃つしかなかった」

操艦と戦闘を同時にこなすという器用なことは、精神同調率が低下するとできなくなる。華麗な操艦で、常に敵艦隊に対して優位な砲撃

戦を展開することは、最早望めなかった。

二隻の敵重巡との、壮烈な撃ち合い。それは、水雷戦隊が放った魚雷が、敵艦隊に到達するまで続いた。

戦いには、勝った。だが、やり遂げた感慨はない。艦橋脇に空いた穴と同じ、ぽっかりと空いた空間。

撃ち碎かれた第三砲塔が黒煙を噴き上げる。弾火薬庫の誘爆を引き起こしてくれたのなら、どれほど楽だったことか。

艦体を燻す炎の向こう側に、見知った軽巡の姿が見えた時、摩耶はその意識を手放した。

「あたしは・・・守れなかったんだよ」

「それは違うだろう。お前は、確かに守った。その身を賭して、仲間を守った」

「でも、提督を守れなかった！それは・・・それは旗艦として、間違っているだろう」

旗艦とは、提督を乗せる艦。指揮を執る提督を、旗艦は守らなくてはならない。それなのに、あたしはその役目を果たせなかった。

「怖く、なった。あたしに誰かを乗せて、その誰かがまたいなくなるのが。また・・・あたしは、誰かを守れないんじゃないか」

紅茶の暖かさは、すでに夜気に吸われていた。琥珀色の液面には、歪んだ自分の顔が映っている。

「・・・誰も——どんな提督も、艦娘に守ってもらうつもりで、戦場には立っていない」

沈黙のうちに発せられた清水の言葉は、いつも通りに冷静なものだった。それでも今日は、普段と違う温もりのようなものが感じられた。

彼なりに、摩耶を慰めてくれているのだろうか。

「・・・俺も、少し話していいか？」

「ああ」

「ありがとう」

——こいつに礼を言われるのは、初めてかもしれないな。

清水は間を取るように、紅茶を一口すする。冷えた液体に顔をしか

めると、カップを置いて、口を開いた。

「・・・BOBは、深海棲艦に対抗可能な唯一の兵器で、その一部である艦娘もまた兵器だ。いざという時、非情な決断を下せるように、深く関わることは避けるべきだと判断した」

着任当時の清水を思い出す。どこか一線を引いた雰囲気は、気のせいではなかったら良かった。

あの頃から比べれば、清水は随分と丸くなった・・・気がする。少なくとも、以前よりずっと、摩耶たち艦娘と関わるようになった。

「それはどうやら、間違いだったらしい。BOBと艦娘は、独立した別々のものとして、考えるべきだ。摩耶は、艦として、あるいは一人の人として、同じように悩んでいる。答えを探して、戦おうとしている」

その言葉が。真つ直ぐな瞳が。摩耶を捉えて、離さない。

——たく、こんな奴の、どこが。

思わず、苦笑が漏れそうになってしまう。

「俺だって逃げていた。お前たちを、人であると認めることが、怖かった。その時、俺は何かを守るための、判断ができなくなると」

清水も、同じだったのだ。

「摩耶。君と戦えて、よかったと思っている。今の俺に、君たちと戦うことへの迷いはない。共に戦い、生き残るために、俺は君に乗る」

腕組みをした清水の仏頂面は、口元だけが笑っていた。

「俺は頑固者らしくてな。悪いがまだ、摩耶たちを人と同じだと、認めることはできない。答えはまだ出ていない。だからこそ、その答えを摩耶に示すまで、俺は死ねない。死なない。それだけは、確かに約束できる」

「・・・らしくて、じゃなくて、絶対頑固者だろ」

「違うない」

肩をすくめた清水は、おもむろに立ち上がると、二人分のティーカップを取り、席を離れようとする。冷めた紅茶を淹れなおしてくれるようだ。

「清水」

その手を、一旦呼び止める。怪訝な彼の表情は、癖なのだともう知っていた。

「もしも・・・お前が、あたしを人だと、認められるようになったら、さ」

女の子だと、認めてくれるようになったら。とは、さすがに恥ずかしくて言えなかった。

「お前を・・・あたしに、惚れさせてみせる。今まで色々あった分、あたしを好きにしてやる」

それは、宣戦布告に近い、宣言。この胸が弾けてしまいそうなほど、高鳴る想いを真っ直ぐに。

清水の両目が、真ん丸に見開かれる。こんな彼の表情を見るのは初めてだった。意表はついたらしい。

清水は笑う。挑戦的なその口元が、印象的だった。

「言ってる。・・・その時を、楽しみにしている」

新シイ風

日本の暦では、いよいよ秋が始まろうとしていた。とはいえ、季節による気候変化の希薄なパラオでは、穏やかな昼の陽気に変わりはない。今日も今日とて、暖かな南国の太陽が、庁舎の廊下を照らしていた。

昼食時の時間帯、工廠を後にした榊原と曙は、食堂へと足を向けていた。そろそろ、昼食の準備ができていく頃だ。

隣同士で歩いていても、何か特別、雑談をすることもない。何となくだが、こうして歩いているときも、お互いに仕事モードが入ってしまふのだ。

今日の話題は、順調に改装作業を進めている、「摩耶」についてだった。

「順調で何よりね。この分なら、あと数日で完了して、出渠できるって。慣熟訓練も含めると、『NT作戦』には、何とか間に合いそうだし」『NT作戦』は、第二次トラック攻略作戦につけられた呼称だ。その概要についても、間もなくパラオに届けられるはずである。

「ああ。色々とあったみたいだが・・・摩耶も清水も、壁は乗り越えることが、できたみたいだな」

「・・・乗り越えた、っていうより、まだその途中じゃない？」

曙の細い目が、前を見据えたまま物を語る。彼女の意見が意味するところを理解して、榊原は頷いた。

「そうかもしれないな」

二人が本当に乗り越えられたのかどうか、それがわかるのは、もう少し先になりそうだ。少なくとも、「摩耶」が改装を終えて、出渠するまでは。

「難しい顔してんじゃないわよ、クソ提督」

曙に言われて、自らが眉間に力を入れていることに気づいた。

——この期に及んで、何を心配してるんだ、俺は。

あの二人は、もう大丈夫だ。必ず、自分たちで答えを見つけることができる。榊原が心配しても、詮無いことである。

「難しい顔は元々だよ」

「ダウト」

誤魔化しに使った言葉は、呆気なく曙に否定される。そのあまりの早さに、榊原は苦笑するしかなかった。

「クソ提督が難しい顔してるのは、大体くだらない事考えてるときでしょ」

「・・・ひどい言われようだ。どうしてそう言い切れる?」

「どんだけクソ提督と一緒にいると思ってるんだよ。普段のクソ提督は、」

そこでなぜか、曙は言葉を詰まらせた。榊原は首を傾げる。覗き込んだ彼女の顔は、明るい陽の光のせいか、わずかに朱が差していた。

何とも言えない表情をしていた曙は、観念したようにそっぽを向き、半ば投げやりに言った。

「け、結構いい表情してるからっ」

何とも可愛いことを言う秘書艦である。その言葉と表情に、どうしようもなく微笑みが漏れてしまった。

曙が噛みつく。

「な、何笑ってんのよ!」

「いや、すまん。・・・ありがとう」

「何のありがとうよ、ったく」

拗ねてしまったのか、曙は急に歩調を早め、榊原を追い抜く。

スラリと伸びた背。小気味いリズムを刻む足音。それに合わせて揺れる群青の髪。カラコロと鳴るのは、髪飾りについた金の鈴だ。

榊原よりも小さく、それでも頼もしい背中。

「置いてくわよ、クソ提督!」

振り返りざまに放たれた曙の言葉に苦笑して、榊原も歩調を早めた。自らが最も信頼する艦娘の隣に、並ぶため。

「呉から、新しい艦娘が来ることになった。重巡洋艦だそうだ」

昼食の席上、泊地特製ラーメンをすするパラオ泊地の面々を前に、榊原は今朝届けられた連絡事項を告げた。魚介ベースのラーメンを

おいしそうに食べていた艦娘たちは、その手を止めることなく、話を聞いている。

「新しい艦娘？」

全員を代表して、摩耶が尋ねる。大規模改装に伴って、その制服にも変更が加えられていた。どこか、姉二人を思わせるデザインだ。が、布面積が以前よりも小さいため、しばらくは目のやり場に困りそうである。

「そうだ。『NT作戦』において、俺たちはトラック環礁突入部隊に参加することが決まっている。その際の切り込み隊長として、重巡洋艦の派遣なんだろう」

「なるほどね」

『NT作戦』の環礁突入部隊は、戦艦を主力とした火力部隊と、その護衛部隊から成る。このうち、大和と祥鳳を除いたパラオ泊地所属全艦が、護衛部隊に所属することになっていた（大和は火力部隊、祥鳳はその上空直掩）。

しかしながら、駆逐艦を主力とする現在のパラオ泊地艦隊の編成では、火力不足は否めない。まともな砲戦火力を有するのは、摩耶のみである。

その火力を補うための、重巡洋艦編入であると、榊原は判断していた。

「誰が来るかは決まってるのか？」

「まだ協議中らしい。ただ、二週間後ぐらいには、こっちに来るそう
だ」

「そういうことなら、もう今頃、決まってるだろうな」

レンゲでスープを飲みながら、清水が言う。諸々の手続きを含めると、確かに時期的には今頃だろう。

「呉か・・・どんな人がいるんだ？」

チャーシューを頬張る磯風は、姉であり、呉出身でもある陽炎の方を見た。縮れ麺を咀嚼していた陽炎は、宙空を見るようにして考える。

その目が怪しく光った意味を、榊原はまだ知らない。

「えーつと、色んな人がいるわよ。古鷹さん。加古さん。利根さん。筑摩さん。最上さん・・・は、軽巡か。それから、」

そこで一瞬の間を取った陽炎は、ニヨニヨと変な笑顔のまま、黙々とラーメンをすすっていた霞の方を見る。同じく呉出身の祥鳳も、その視線の意味を察したらしく、可笑しそうに口元を緩めていた。

そんな二人の視線を受けてか、霞が実に微妙な表情になる。

「後は・・・足柄さんとか、ね」

霞の咀嚼が、一瞬止まる。そこから、なんとなく何かを察した榊原であった。

が、しかし。そんなことはお構いなしなのが、この艦隊の駆逐艦娘であった。

「陽炎としては、どの人がいいと思っっているのだ？」

ラーメンを食べ終え、律儀に手を合わせた磯風は、単純な興味で陽炎に尋ねる。その純粋な問いかけに、何とも悪い笑みを浮かべる、からかい好きなお姉であった。

元呉鎮守府駆逐艦筆頭を、ここぞとばかりにいじる気満々なのであろう。

「さあ、あんまり重巡の人とは関わりなかったからなあ。あー、でも、足柄さんのことなら、霞が詳しいわよ。ねー、霞？」

霞の細い目から、「後でおぼえてろ」という無言の圧力を感じて、榊原はこの件にこれ以上首を突っ込まないことを決意した。

「そうなのか、霞？」

「・・・まあ、関りがなくとも、ないわね。ただ」

箸を置いた霞は、左眉をピクリと跳ね上げて、答える。

「アイツでないことを祈るわ」

なぜか深刻な表情で放たれたその言葉は、残念ながら他の駆逐艦娘——特にパラオ泊地しか知らない三人には、納得してもらえなかったようだ。

「えー、つまりどーゆーことびよん？」

「なんかこう、具体的な話はないのか？」

「あーもうっ！うざい！知らない！」

そっぽを向いて口をつぐむ霞。余計なことは言わない。そんな意志が感じられた。

が、そんな彼女の意向などお構いなしに、余計なことをしゃべり始める陽炎。

「そんなこと言つて。すつごく仲良かったのよ、足柄さんと霞」

「ど、どこがよっ！」

噛みつく霞の顔は真つ赤だ。

「お正月には、餅つきをしたり〜」

「こたつでのんびりしようとしてたら、無理矢理引きずり出されて付き合わされたんだけど？」

「豆まき大会とか〜」

「鬼役の足柄に反撃されたんだけど？」

よくもまあ、スラスラと出てくるものである。

その後も、呉であったあれこれを、陽炎が披露していく。それに答える霞は、相変わらず微妙な表情をしていた。しかし、声音はどこか楽し気で、柔らかい響きを含んでいた。

「話を聞くに、色々トンデモなお姉さんだな、足柄さん」

「トンデモどころじゃないわよ。ったく、他人を巻き込まないでほしいわ」

「うーちゃん、その人がいいぴよん。なんだか気が合いそうだぴよん」
「やめて。これ以上あたしの胃を痛くしないで」

ワイワイと好き勝手言い始める駆逐艦娘に、大和や祥鳳たちも苦笑を浮かべている。すでに全員のどんぶりが空になっており、食堂はお昼休みモードだ。話題はどうであれ、会話が弾むのはいいことである。

なお、この後行われた午後の演習では、普段以上に熱の入った霞の指導により、曙と満潮以外の駆逐艦娘がへとへとになってお風呂で溺れかけるのだが、それはまた別の話だ。

◇

暦と違って、まだまだ秋とは言い難い、呉の昼下がりに。鎮守府の廊下を、陽気な鼻歌交じりに歩いていく人影があった。

きつちりとタイトな制服。ネクタイの代わりにしているスカーフの柄は、無事の航海を祈るUW旗に、今日はなっていた。カチューシャで抑えている長い黒髪は、わずかにウェーブがかかっている。何より、スラリと自信に満ちた立ち姿が印象的だ。

目的の部屋に辿り着いた彼女は、いかにも重厚な、いかつい木製の扉を叩く。小気味いいノックの後、中から返事があった。

「失礼するわね」

一言断ってから扉を開き、中に入る。室内では、一人の男性が、彼女を待っていた。

飯田恒久中将。よく、提督〇期生だの、提督三銃士だのと並び称される、最初期からの提督の一人だ。ここ呉鎮守府の、執務室長でもある。

「来たか」

「急な呼び出しだから、びっくりしちゃった。何か私に頼み事？」

彼女の問いに頷くと、飯田は一枚の紙を差し出した。最初に辞令と書かれていることから、大体内容は察することができた。

「転属の命令だ」

「ふーん。行先は？」

「パラオだ」

ピクリ。彼女の中で、何かが反応した。そう、パラオといえば――

「いいところらしいぞ。青い空。透明度の高い海。白砂のビーチ」

『IF作戦』に参加した艦娘たちから、話は聞いている。あの加賀までもが「いいバカンスでした。また楽しみたいものです」と言っていたのだ。

しかも、それに加えて。

「若い提督二人に――霞ちゃんまでついてくるぞ」

「素晴らしいわね」

この時点で、彼女はパラオ行きを何の不満もなく承諾していた。

「もちろん、君なら、パラオで求められている役目を、十分に果たせると判断している。ゆえに、君を派遣することにした」

「そう。まあ、理由はどうでもいいわ。どこであろうと、私は私の役目を果たすだけ。・・・私の役目は、この海と仲間を守るために、戦うことですよ?」

「そういうことだ」

彼女の言葉に、飯田は満足げな笑みを浮かべた。それから真剣な表情で、最後の確認をする。

「では、行ってくれるな——足柄」

彼女——足柄は、不敵な笑みと共に、はっきりと答えた。

「喜んで」

飢工夕狼

この日のパラオ泊地は、いつにない忙しきで満ちていた。特に港湾部は、輪をかけて忙しい。なぜか。

この日は、定期の輸送船団が入港する日であった。それに加えて、改装作業の完了した「摩耶」のドックからの引き出し作業があった。港湾部のタグボートやら、水先案内人を乗せたパイロット船やらが、朝からパラオ泊地内を行ったり来たりしている。

港湾内の整理が一段落したことで、いよいよ「摩耶」の引き出し作業が行われようとしていた。気づけば時刻は十五時を回っており、太陽が西に傾き始めている。日没にはまだ時間があるが、時間が経つ早さを実感する。

「いよいよね」

執務を終え、手空きとなった榊原は、他の艦娘たちと共に埠頭で第二浮きドックを見つめている。いつものごとくその隣に立った曙が、含みを持たせた言い方で呟いた。

大規模改装は、新たな始まりでもある。BOBそのものを扱う慣熟訓練も再度必要になるし、場合によっては使用する戦術そのものが大きく変わってくる。

さらに、摩耶の場合は、もう一つ。

その鍵を握る清水は、やはり静かに、第二浮きドックの様子を見守っていた。おそらくは、そこに収まった「摩耶」の艦橋に立つ、一人の少女のことを。

「たく、遅いんだっての」

そんなことを言った木曾は、その片目を細めて、笑っている。大規模改装の計画時期は同じだったが、結果的に摩耶は、木曾よりも大きく遅れることとなった。

「注水が始まったみたいね」

よく通る声が聞こえた。聞き覚えのない声だ。それもそのはず、声の主は、本日付でパラオ泊地の所属になったばかりであった。

重巡洋艦娘、足柄。凜とした立ち姿が印象的な女性だ。船団を護衛

してきた彼女は、泊地沖に艦体を錨泊させて、午前のうちに着任の挨拶をしたばかりであった。

呉でも古参の部類に入るらしい足柄は、同じく呉出身の陽炎や祥鳳とも顔見知りらしく、懐かし気に言葉を交わしていた。元々社交的な性格のようで、他の泊地所属艦娘たちともすぐに打ち解けていた。その際、冗談交じりに榊原と腕を組んだ足柄と、祥鳳、大和の間に、空中放電現象が起きたことはいまでもない。

ともあれ、榊原の足柄に対する第一印象は、気さくなムードメーカーといったところだった。そんな、理想の幼馴染のようだった足柄が豹変したのは、霞に出会った時である。

——「霞ちゃん！」

——「げえっ!？」

霞を見るや否や、まるで獲物を見つけた猛獣か何かのように飛びかかったのだ。が、さすがは霞、華麗な身のこなしで第一撃を回避し、その場から逃走。そこから、霞の逃走劇が幕を開ける。

が、所詮は駆逐艦、航続距離で重巡に敵うはずもなく、三十二分と四十秒で捕獲されたのだった。

——「会いたかったわよ霞ちゃん」

——「や、め、ろーっ!!」

必死の形相で足柄の魔手から逃れようとする霞。そんな霞を、息を荒くしながら抱きかかえ、頬ずりを始める足柄。

着任初日にして、「ロリコン」の烙印を押されてしまった足柄なのであった。

そんな足柄も、今は静かにドツクの様子を窺っている。が、その腕の中には、死んだ魚のような眼をした霞が、すっぽりと収まっているのであった。

某所では、「三大ツン駆逐艦娘」の一人にも数えられるほど、普段から威勢のいい霞が、借りてきた猫——否、まな板の上の鯉のように大人しくなっている。

——「あのままでもいいのか・・・？」

自分はいらぬ心配をしているのだろうか。パラオ水雷戦隊を率い

る木曾や、秘書艦である曙は、別段止める様子はない。木曾に至っては、楽しんでいる向きさえある。

とりあえず、今は放っておくことにした。

榊原たちが見守る中、浮きドックがゆつくりと沈降していく。もう間もなく、船台が海面に到達しようとしていた。浮きドックの周りには、引き出し役のタグボートが控えている。双眼鏡を覗くと、「摩耶」の艦首にも妖精が見えた。海面の様子を窺っているようである。

ドック内に海水が流入し始め、「摩耶」の艦体が海水で覆われている。艦底色で塗られた喫水線下が、次第に海面下へと没して、艦に浮力を与えていく。海面下に働く浮力と、艦体にかかる重力とが釣り合った時、「摩耶」は再び海上に浮くのだ。

「摩耶」の沈み込みがある一点で止まった。それからしばらくはドックの沈下が行われるが、それもやがて止まる。ついに「摩耶」は、船台から離れて、海面にその巨体を浮かせたのだった。

その「摩耶」に、タグボートが近づいていく。タグボート周辺の海面が泡立つと、「摩耶」が少しずつドックから引き出され始めた。排水量にして、自身の数倍はある船を動かすために、タグボートの機関は非常に強力なものが搭載されている。

斜め上方向から差す南国の陽光が、新たな鈍色の輝きを照らし出す。タグボートに曳かれて、「摩耶」の艦体が、ゆつくりと露わになり始めた。

鋭い艦首は、まるで波を切り裂くナイフだ。シアーがかかった艦首の後に現れるのは、太い砲身を二本備えた主砲塔。背負い式に配された第二砲塔の後部には、多数の機銃座とその指揮装置、さらに高角砲と高射装置が据えられている。「高雄」型の特徴ともなっているが、つしりとした大型艦橋は、今回の改装にあたっていくらか手直しがされているようだ。艦橋と煙突の間にそびえる櫓型のマストは、電探や各種装備品の追加に伴って、より大きくなっている。煙突を含めた艦上構造物の周りには、高角砲と機銃が所狭しと並べられ、高空への睨みを利かせる。後部艦橋以降の艀装については、大きな差異は見受けられなかったが、艦尾周辺にはやはり機銃座が増設されていた。

まさしく浮かべる剣山だ。夏川が「対空番長」と呼んでいたのも頷ける。

「まさしく軍艦、といった風情だな」

清水がポツリと呟く。確かに、「大和」や「曙」とは違った美しさが、「摩耶」には感じられた。

ついに全体像が露わとなった「摩耶」からタグボートが離れると、主機が回転を始め、微速で沖へと向かう。その艦影を横から眺めて、榊原は「摩耶」の改装計画を思い返す。

大規模改装が施された「摩耶」だが、その外見に大きな違いはない。しかし、各部の装備品は大きく強化、改良がなされていた。

前部と後部に二基ずつ据えられた主砲塔は、従来と同じE型砲塔だ。しかし、備えられた砲は違う。「三号砲」と呼ばれるそれは、従来の二〇・三センチ砲の砲身を伸延した、五五口径砲だ。撃ち出した際の初速が速く、貫通能力が向上している。また、装弾機構にも手が加えられたことで、発射間隔が十五秒とわずかながら早くなっている。

六基据えられた高角砲も、換装されていた。日本海軍の標準的な高角砲だった四〇口径一二・七センチ連装高角砲から、「大鳳」や「大淀」と同じ六五口径一〇センチ連装高角砲に変更している。現在の日本海軍では最優秀とされている高角砲だ。これと組み合わせる高射装置も、九四式にパラオ工廠部製の簡易計算機を組み込んだ、最新鋭のものとしている。

機銃は言わずもがな、改修型二五ミリ機銃だ。三連装のそれを、甲板の至る所に並べていた。

こうした新型装備の積載による、トップヘビーと復元性の低下を考慮して、両舷のバルジもより大きなものとしていた。

速力低下を防ぐために、艦尾の延長と機関部の強化もなされている。もつとも、速力に関しては、実際に動かしてみなければわからないが。

こうした改装の結果、排水量にしておよそ五百トンほどが増加していると見込まれていた。

微速で泊地沖を指していた「摩耶」は、いつもと同じ位置――

“大和”や“祥鳳”、“足柄”と舳先を並べる形で、投錨作業に入る。後進がかけられた直後、主錨が海面に突入して飛沫を上げる。やがて、その艦体が海上に固定された。

しばらくして、“摩耶”から内火艇が下りてくる。海面をのんびりとこちらへ向かってくる内火艇の艇首に、人影が見えた。満足げに腕を組み、短髪を風になびかせる少女の表情は、随分と晴れやかなものに見えた。

埠頭についた摩耶を、全員で迎える。彼女は視線を彷徨わせ、恥ずかしげに頬を掻いた後、照れたような——とても朗らかな笑みで、こう言った。

「終わったぜ」

その表情に、榊原は頷く。それから一気に、頬の力が抜けていった。「何ともなかったか？」

真っ先に尋ねた清水に、摩耶はひらひらと手を振って答える。

「心配し過ぎだって。・・・大丈夫だ、何ともなかった。いい艦だと思うよ。お前にも、早く見せたい」

「そうか。なら、よかった」

そんなやり取りを聞きながら、榊原は曙と顔を見合わせる。彼女は何も言わないが、その視線だけで会話は成立した。

——きつと、大丈夫だ。

「明日から、早速慣熟訓練だな」

大きな伸びをしながら、摩耶が言った。そちらについては、清水に一任すると、榊原は決めている。

「・・・よしっ！それじゃあ今日は、私の着任と摩耶の改装を祝して、パーティーするわよ！」

柏手を打ってそんなことを言い出したのは、ようやく霞を解放した足柄だ。一方、解放された霞の方は、魂の抜け落ちたような表情で、満潮の方へと逃げてくる。

「こういう時は、やっぱりカツね。おいしいカツレツを揚げてあげるわ」

「カツ!?足柄さんカツ作れるの!?!」

興奮した様子で言った長波と同じように、駆逐艦娘たちが目を輝かせる。その表情に負けないくらい、いい笑顔を見せた足柄は、自信満々に胸を叩いた。

「任せなさい！呉の秘書艦にも、太鼓判を押されてるんだから」

それから、確認を取るように、榊原の方を見る。

「食堂部の釣掛さんに、一応確認してくれ。多分、大丈夫だと思うけど」

「はい。わかったわ」

頷いた足柄は、足取りも軽やかに、庁舎の方へと戻っていく。その背中を追いかけた長波と卯月は、どうやら足柄の手伝いを申し出ているらしい。そこに加わろうとした磯風を、陽炎が長女権限と実力による羽交い絞めで食い止める。

その様子を眺めていた榊原の脇腹が、曙に小突かれる。

「いつまでそこに立ってるつもり？ほら、クソ提督も戻るわよ」

こちらを覗き込む瞳に首肯して、榊原も歩きだす。パラオ泊地艦隊の背中を押すように、一陣の風が吹き抜けていった。

その晩は、足柄が腕によりをかけたカツに、全員で舌鼓を打った。

決戦二備エテ

今日は普段よりも波が立っている。波頭は崩れる際に白く泡立ち、舷側にぶつかる波も大きい。それでも、一万五千トンの艦体はビクともせず、艦首で波を切り裂きながら、悠然と海上を進んでいた。

——いい調子だな。

自らの艦の状態が良好なことを受けて、摩耶は満足げに頷いた。それから、通信回線を開く。

「おい、足柄。しつかりついて来いよ」

『私を誰だと思ってるの？任せなさい、〃狼〃の二つ名は、伊達じゃないのよ』

自信たっぷりには答える声の通り、〃摩耶〃に後続する〃足柄〃は、的確なあて舵で針路を維持し、陣形を保つ。

今日、パラオ泊地の沖合では、摩耶の慣熟訓練を兼ねた砲撃演習が行われる。

昨日で各種海上公試を終えた〃摩耶〃は、これが初めての实战を想定した訓練になる。

単縦陣で〃摩耶〃の後ろに続くのは、順に〃足柄〃、〃大和〃、〃霞〃、〃磯風〃、〃曙〃。〃木曾〃他は、泊地で留守番だ。

電探に映る後続艦の様子を確認する。丁度その時、海図室から出てくる人影があった。清水だ。執務のある榊原に代わって、彼が演習を見守ることになっている。

「各艦の状況は？」

隣に立ち、清水が尋ねる。

心臓の鼓動が、わずかに早くなる。まだ、誰かを乗せることに、慣れたわけではない。恐怖がないわけでもない。それでも、少しずつ、前に進むと決めたのだ。

深呼吸を一つ。清水の問いかけからいくらか間を取り、摩耶は口を開く。その間の意味を、清水も理解してくれているらしく、急かす素振りもなく待ってくれていた。

「陣形は単縦陣。速力二二ノット。波があるから、いつもより広めに

間隔を取ってる」

「わかった。浮標は確認できたか？」

「バッチリ見えてる」

見張り妖精からは、波間の浮標が、はっきり見えている旨、報告があった。電探にもちゃんと映っている。

「・・・大丈夫か？」

呟くような清水の質問の意味を、一瞬凶りかねた。それから、摩耶のことを心配して発せられたものだど気づく。

それまでとはあまりにもかけ離れたその問いかけに、堪えられずに笑いが込み上げる。怪訝な表情をする清水に、摩耶は笑みを浮かべながら、答えた。

「問題ない。ていうかお前、心配し過ぎだろ、最近」

凶星だったらしい清水が、わずかに息を詰まらせる。それが益々、摩耶の笑いを誘う。

「お前ってさ、弟とか妹にウザがられるタイプだよな。心配性と、過保護で」

その言を受けた清水は、瞬きを一回、目線を摩耶から逸らす。まさかの凶星だったらしく、最早摩耶は、笑いを隠すことができなかった。

「・・・弟と同じことを、よもや摩耶に言われることになるうとは」

「へー、弟いたんだ。ちなみに何をやらかして、そんなことを言われたんだ？」

「宿題やってるのを、横から口出ししてた」

「うわ・・・典型的なダメ兄貴がここにいる」

清水の意外な一面に、苦笑する。

いつも冷たくて、感情の起伏が乏しいように思える清水。実際のその通りなのだが。それでも、全く欠点がないわけではない。

清水は、誤魔化すように、咳払いを一つ。

「始めるぞ」

「わかった」

何とか笑いを押し殺し、摩耶は再び前を見る。波の動きはよく見えていた。むしろこれくらいの方が、初めての砲撃演習にはもってこい

かもしれない。

「これより、砲撃演習を始める」

清水がマイクに吹き込んだ瞬間、浮標が動き始める。遠隔操作式の電動曳船に曳かれているのだ。それが全部で三つ。

「電探に感あり。見張りより、目標は浮標と認む。数三。右舷三十度、距離二五〇（二万五千メートル）」

摩耶が読み上げる。双眼鏡を覗き込んだ清水も、同じように浮標を確認したらしく、すぐに指示が与えられた。

「第一戦速。転針、艦隊針路三四五。距離を詰める。右砲戦用意」

「第一戦速。面舵二〇、針路三四五。右砲戦用意」

清水の指示を、全員が次々と復唱していく。艤装との精神同調率が上がり、「摩耶」は合戦準備を整えつつあった。

増速した艦に舵が利き始め、「摩耶」の艦首が右に振られる。動きだしてしまえば早い。針路が三四五度に近づいたところで舵を中央に戻し、あて舵で回頭を止める。直進に戻った艦は、浮標に対して丁度「八」の字を描くように進んでいる。

後続艦も次々と舵を切る。

「足柄」、面舵。続いて「大和」、面舵」

先頭艦であり、旗艦でもある「摩耶」は、僚艦の動きも気にしななければならぬ。一年ほどの間、旗艦経験などなかったが、昔取ったなんとやら、だ。マリアナ沖の時もそうだったが、特に違和感はない。むしろ慣れ親しんだ安心感さえある。

最後尾の「曙」がピタリと着けたところで、変針が完了する。その様子が見張り妖精から報告され、摩耶は頷いた。

「浮標を、先頭よりイ、ロ、ハと呼称。本艦目標、イ。足柄」目標、ロ。大和」目標、ハ。大和」は二〇〇より砲戦開始。「摩耶」、

「足柄」は一五〇より砲戦開始」

清水が出す矢継ぎ早の指示を聞き届けながら、自らへの命令を正確に聞き取り、復唱する。

「摩耶」目標、イ。測敵始め」

艦橋頂部の測距儀が旋回し、浮標イに狙いを定める。三角測量の要

領で得られた距離に、彼我の速力や針路、天候等の情報が加味され、射撃諸元が産出される。

主砲塔も右舷へと旋回する。砲塔の旋回盤にも改良がなされたおかげで、動きは滑らかなうえに早い。

——これはありがたい。

主砲の旋回速度では、航空機への追従など不可能だ。それでも、動きが早ければ、選べる手は増えてくる。

旋回を終えた主砲の右砲が、次第に仰角を増していく。距離を詰めるまで発砲はしないが、いつでも発砲できる構えは見せておく必要がある。浮標は撃ち返してこないが、実戦では相手もまた、相手の戦術とタイミングでこちらを撃ってくるのだから。

電探に映る浮標との距離は、刻々と縮まっていく。二万メートルを割るのに、さして時間は必要なかった。

「距離二〇〇」

清水に告げてから十数秒後。

「“大和”、撃ち方始めた」

見張り妖精からの報告が上がる。それから十秒と立たず、遠雷を思わせる轟音が、後方から届いた。“大和”の四六センチ砲が、早速観測射を放ったのだ。

さらに二十秒ほどが経過すると、浮標ハの手前に、巨大な水柱が立ち上った。数は三本。各砲塔から放たれた一トン半の砲弾が巻き上げる海水の量は、半端ではなかった。

諸元の修正が完了したのか、“大和”が再び発砲する。“摩耶”からは二キロ近く離れているというのに、その砲声は背中から圧迫されるような迫力があつた。

三射、四射と繰り返される“大和”の砲撃を見守りながら、“摩耶”は自らの番を待つ。後ろの“足柄”からは、「早く撃たせろ」との通信が入るが、すべて却下していた。

距離が一万五千メートルを切ったのは、“大和”が第二斉射を放つた時だった。

「撃ち方始め！」

威勢よく号令するや否や、振り立てられた五五口径二〇・三センチ砲が咆哮する。間近で聞く分、こちらの方が「大和」よりも迫力がある。大太鼓をまとめて打ち鳴らしたかのような大音声が、「摩耶」の艦橋を揺さぶった。

撃ち出された高初速の二〇・三センチ砲弾は、今までよりもわずかに低いアーチを描きながら、浮標イへと飛んでいく。

「『足柄』、撃ち方始めた」

後続の「足柄」も、待つてましたとばかりに発砲する。「足柄」もまた大規模改装は受けているが、こちらは三号砲に換装していなかった。装填機構の改良はされているので、斉射間隔は「摩耶」と同じ十五秒となっている。

第一射が弾着する。艦橋からでは、その正確な弾着位置まではわからない。今回は観測機を用いていないので、見張り妖精の目だけが頼りだ。

「全弾遠。諸元修正急げ」

「摩耶」の第一射は、その全てが浮標イを飛び越えた位置に落ちていたのだ。

弾着の結果をもとに、第二射への諸元修正が加えられる。装填のため下げられた右砲に代わり、左砲が鎌首をもたげる。

第二射が放たれる。前甲板の二か所で真つ赤な火焰が踊るのを見つめながら、摩耶は見張り妖精から報されたことを気にしていた。

思考の海に沈む前に、第二射が弾着する。今回も全弾遠。再装填の終わった右砲が、射撃位置へと仰角を増していく。

見張り妖精からは、先ほどと同じ報告が上げられていた。

——やっぱり、散布界は広がっちゃうか。

軽量砲弾特有の問題だ。どうしても、高初速にすると散布界が広がってしまう。発砲遅延装置のおかげである程度抑制はできているが、それでも従来よりは広く散らばってしまう。工廠部の事前計算では、散布界半径が一割から二割、拡大する可能性ありとのことだった。

大型艦への射撃ならそれほど問題とならないだろうが、駆逐艦への牽制砲撃には影響が出てしまうかもしれない。

その辺りは、後続している駆逐艦娘たちとの連携で、埋めていくしかなさそうだ。

「足柄」は第三射、「摩耶」は第四射で夾叉弾を得、斉射へと移行する。その間に、「大和」には「砲撃止め」が下令された。このまま撃ち続けたら、いかに「沈まなことを追い求めた」射撃訓練用の浮標といえども、パラオ沖で濺標になってしまう。

斉射に移行したことで、艦体を襲う衝撃は倍となる。炎が生じるとともに、バルジが追加された艦体が横方向に動揺した。その揺れが、どこか心地いい。

六射を放ったところで、「摩耶」と「足柄」に「砲撃止め」が下令される。砲身を下げ、冷却作業に入る。足柄はまだ撃ち足りない様子であったが、渋々清水の指示に従っていた。

ここからは、駆逐艦の番だ。

「霞」、機風、曙、右砲戦、右魚雷戦用意。以後の指揮を、別命あるまで曙に移譲」

了解と答えた三隻の駆逐艦は、早速とばかりに増速すると、鋭く舵を切って浮標に接近していく。先陣を切る「霞」の艦影が、すぐさま「摩耶」の横をすり抜けていった。

「サイパン沖海戦」後、「霞」もまた大規模改装を受けている。より対空戦闘を意識した改装による艦容の変化が、各所に確認できた。

主砲は高角砲に換装されている。「秋月」型と同じ、砲塔型の長一〇サンチ砲だ。それを前後に一基ずつ、計二基四門。

魚雷発射管は一基に減らされている。その代わり、新開発の六連装発射管だ。それまで二番発射管があった場所には、機銃座や大型対空電探が増設されている。

高射装置も、「摩耶」と同じものに換装していた。

同じ改装は、現在「陽炎」と「満潮」に施されている。「霞」の改装期間が一週間弱で済んだことから、この二隻についても来週中には出渠し、『NT作戦』までに慣熟訓練を終えられる予定であった。

やがて、駆逐艦たちが発砲する。小太鼓を叩くような砲声が連続して響き、曇天のパラオ沖を震わせた。

進ンダ先ニ待ツモノ

夕闇迫るパラオ泊地。埠頭のコンクリートを染めるのは、暖かいオレンジ色だ。庁舎やら工廠施設やらの影が所々にさして、まだら模様を作っている。海のグラデーションとはまた異なる色使いを、榊原はどこかぼんやりと眺めていた。

『NT作戦』の発動は近い。もう二週間もすれば、各地の鎮守府や泊地からBOBが終結し、このパラオを基点として作戦を遂行していくことになる。

作戦要綱も届いた。内容を確認し、いつものように執務机の鍵がついた引き出しに仕舞っている。

——始まろうとしている。

『IF作戦』の時から、多くのことがわかった。それと同じくらい、多くの謎と疑問が生まれた。

艦娘と深海棲艦の存在に迫る何かが、トラック諸島にはあるのだ。

パラオ泊地艦隊が、そんなトラック諸島への突入部隊に編入されたのは、ただの偶然ではあるまい。おそらくは、塚原か角田あたりが、意見申をしたのだろう。それから、吹雪も。

彼ら彼女らに代わり、トラック諸島に何かあるのかを確かめるのも、榊原と清水の大切な役割だ。

——一体、何が待ち受けているんだ。

先はまだ、霧の中だった。

そこでハッと意識が目の前に戻る。そこは、浮きドックにほど近い、第一埠頭。眼前に舳われているのは、我らがパラオ泊地秘書艦にして榊原の旗艦、「曙」だ。この艦との付き合いも、何だかんだと長い。

自分の足が自然に向いていた先に、榊原は苦笑するしかなかった。

「曙」の甲板上、当直をしていたらしい妖精の一人が、榊原に気づく。陽気に手を振る彼に続いて、チョコチョコと数名の妖精が現れた。榊原もそれに振り返す。

「・・・どこで黄昏てるかと思ったら、こんなところにいたのね」

背後にある人の気配は、そんなことを言いながらこちらへとやってくる。曙は、わざわざ榊原を探しに来てくれたらしかった。

「ああ・・・少し、散歩でもしようかと思ってる。晩ご飯、もうできた？」

「まだよ。もうそろそろできるみたいだけど」

答えながら、曙も榊原の隣に並ぶ。右隣の横顔をチラリと窺った。深い蒼にオレンジが差したその瞳は、泊地前に広がる海のごとく、澄んでいる。

榊原の視線に気づいたのか、曙が怪訝な表情を見せた。

「何よ」

「・・・不思議だな、と思った。考え事をしながら、ただぼーっと歩いていただけなのに、いつの間にか『曙』のところに来ていた」

目を見開いた曙は、プイツとそっぽを向いてしまう。

「ふ、ふーん。あっそ」

言葉も反応もそっけないが、その端々にはまんざらでもなさそうな雰囲気が見える。本当に、可愛らしいやつなのだ。

「それから、これまでのことを、思い返してた。曙との付き合いも、随分と長くなったなと、思ってたな」

黒光りする『曙』の艦体に触れる。影になった舷側はヒンヤリとして、榊原の手から熱を奪う。それが心地よい。思えば、いつもこの艦に、色々なものを委ねてきた。

「・・・ねえ」

感慨にふけていた榊原を、曙が呼ぶ。夕方のせいか、どこか優しく、慈しみの籠った声音。

「少し、上がってかない？まだ、ご飯まで時間あるし」

そう言いながら、『曙』の方を指さす。その先では、妖精たちがチョイチョイと手招きをしていた。上がってこい、ということらしい。

「いい風に当たれるわよ」

タラップに足をかけた曙の誘いを、素直に受けることにした。

「お言葉に甘えて」

先上がった曙を追いかけるように、榊原もタラップを上がついていく。舷門から甲板に上がった途端、潮風が通り抜ける。とつさに制帽を抑えた。

「いっちょよ」

艦尾の方へ歩いていく曙の背中についていく。第一煙突の横から、一番連管、少し細い第二煙突と通り過ぎる。二番、三番連管の間には、機銃座が増設されていた。後部マストに追加されているのは、対空用の一三号電探だ。マスト基部にも機銃が増設され、その後ろに第二、第三砲塔と続く。そうして辿り着いた後部甲板も、爆雷投射器や投下軌条、掃海具などが設置されている。

それらを流し見ながら、曙の待つ艦尾へと向かう。風に流される長い髪。飾りの鈴が、太陽の光を反射していた。

「いつ見ても、美しい艦だ」

素直な感想を漏らす。曙はどこか嬉しそうに、「あつそ」と答えた。彼女の隣に並び、夕暮を映し出すパラオ泊地沖を見つめる。波間に反射するオレンジ。所々は眩しい白。飛び交う海鳥の声まで聞こえる。水平線の向こうは、まだ透き通った蒼に染まっている。

のどかな、ただただゆるやかな時の流れる、広大な海がそこに横たわっていた。ここが最前線の基地であることなど、忘れてしまいなほほど。

曙は何も言わない。榊原もまた、何も言わない。

この景色を伝える言葉を、榊原は持ち合わせていなかった。曙にかける言葉も、わからなかった。

それなのに、隣の彼女の想いだけが、ひしひしと伝わってくる。この景色の中に映りこむ彼女の決意が、確かな感触を伴ってこの胸に伝わってくる。

「・・・心配を、かけたか」

ポツリと漏れてしまった言葉は、飲み込むには遅すぎた。

「自覚があるなら、いいけど。・・・クソ提督、ここのところ、考え込んでることが多かったから」

秘書艦として、一緒にいる時間が長いから、というのもあるのだろ

うが。よく周りを見ている娘だ。榊原程度の誤魔化しでは効くまい。考えることが、多くなつたのは事実だ。現にさつきまで、思考の海に没頭していた。言い訳のしようはない。

「色々考えちゃうのは、わかるわ。あたしだって、色んな事が気になる」

進んだ先、そこには何があるのか。誰が待っているのか。過去を認識できるからこそ、未来に思いを馳せてしまう。それは幸せで、同じくらい辛い事。

我々はどこから来たのか。我々は何者か。我々はどこへ向かうのか。同じ問いかけは、艦娘にも通用する。

「・・・ほんと、難儀よね。どうして、ただの軍艦じゃなかったのか」諦観にも似た呟き。その答えは、誰も持ち合わせていない。少なくとも、今は。

海を映していた曙が、榊原を振り向く。海色を写し取ったかのような群青の瞳に、真つ直ぐ射竦められる。風がギリギリ吹き抜けていくだけの距離、ほんの数センチ。榊原の肩ほどしかない曙が、こちらを見上げるようにして、榊原の顔を覗き込む。

「クソ提督」

「どうした？」

「・・・海の方を、向いて。あたしがいいって言うまで、そのまま」指示の意味がわからず、首を傾げながらも、曙の言ったとおりにする。オレンジの領域は、先ほどよりも広くなっていた。水平線の辺りにも、すでに蒼は見つからない。

しばらくそうしていたが、何も起こらない。

「曙・・・？」

榊原が尋ねようとした、まさにその時。

ギョツ。

小柄で柔らかい温もりが、はつきりとした存在感を榊原の背中に伝えた。

何が起こったかを理解するのに、数秒を要した。

榊原の背後から、曙が抱き着いている。細くしなやかな手が腰のあ

なりに巻き付き、前で交差する。締め付けは強めだ。それゆえに、彼女の体温と重さ、そして心臓の鼓動まで、聞こえてきそうだった。

「こっち向くな。何も言うな」

うろたえた榊原の切っ先を制するように、曙が早口でまくし立てる。開きかけた口を閉じるしかない榊原は、曙が抱き着くまま、身動きが取れない。

「……暖かい?」

「……ああ」

背中越しに伝わる曙の温もりは、昼間の太陽が作る、陽だまりのようで。否が応でも伝わってくる、優しさ、愛しさ。

「そっか。……よかった」

榊原の短い答えにも、曙は満足そうに言った。

「あたしの体温は、ちゃんとクソ提督に伝わってる。だから、偽物じゃない」

ポツポツと語る言葉に、普段のような力強さはない。そこにいるのは、たった一人、曙という少女。榊原に見せたことのない、曙自身。だから、俺に振り向かせないのか。

それはおそらく、彼女の矜持。艦娘として、秘書艦として、提督である榊原を支えていくという、決意。

「言葉だけじゃ、ダメよね。こうして、相手に触れて、その温もりを感じることも、きつと必要だから」

難儀な体と、意思を持って。それでも、こうして嬉しいこともある。喜びがある。

曙の言葉に、榊原は身じろぎ一つできず、耳を傾ける。

「……クソ提督は、あたしが護る。クソ提督が見たいものがあるなら、あたしがそこまで連れて行ってあげる。……だから、あたしにも……クソ提督と一緒に未来を、見させて」

かつてない破壊力を持った、殺し文句。

それからゆつくりと、曙が榊原から離れていく。その温もりを名残惜しく思ったのは、贅沢が過ぎるというものだろうか。

「い、いいわよ、もう。ありがとう」

上ずった声が聞こえて、榊原はようやく、曙の方を振り向く。夕陽の中でも明らかに赤い頬。わずかに泳ぐ視線。それらを誤魔化すように、曙が言う。

「そ、そろそろ、準備も終わる頃ね。戻るわよ、クソ提督」

速足で艦を後にしようとする曙の背中。その背中に、榊原は声の限り、呼びかける。

「曙ー」

ピタリと動きを止めた彼女は、それでも振り返らない。構わずに、榊原は続ける。

「俺の夢は、曙たちの未来を作ることだ。この戦いが終わった、その先の未来を描くことだ。まだ絵空事にしか過ぎないし、超えなきゃいけないものは、俺が思っている以上に厳しく、多いかもしれない。それでも、俺は曙たちと、未来を見たい。だから、」

だから、俺の未来に、付き合ってくれ。

榊原の言葉を聞き届けて、曙は初めて振り返る。浮かぶのは、稀に見せてくれる、満面の笑み。そして、頬を伝う一滴。

大きく、頷く。何度も何度も、こちらに届くように、首肯して見せる。やがて彼女は、駆け足でタラップを下り、庁舎へと戻っていった。残された榊原に、妖精が歩み寄る。よくやった、とでも言うように、ポンポンと足を叩いて、再びどこかへと行ってしまった。

夕陽が沈む。西の空、泊地の沖に見える、水平線。その縁同士が触れてからは、想像以上に早い。あつという間に三分の一ほどが向こう側に消える。明日の夜明けが来るまでは、しばしの別れだ。

曙。それは、夜と朝の境界線。明日の始まりを告げるもの。未来の希望を静かに謳うもの。

パラオの曙に出会うのは、まだ先の、しかしそう遠くない未来のことだ。

過去ニ隠サレタ

横須賀鎮守府は、作戦前の忙しさと熱気に包まれている。工廠部が騒がしいのは言わずもがな、港湾部でも作戦参加艦艇の入渠と艦体の整備が行われている。提督たちは、図上演習による作戦詳細の確認に余念がない。艦娘たちも、より一層の訓練に励んでいる。

『NT作戦』参加艦艇第一陣の出立まで、一週間を切っている。この賑わいも、無理からぬことだ。

ただし、そんな横須賀鎮守府においても、普段と変わらぬ落ち着きと静けさを保っている者が、少なくとも二名はいた。

昼食を終えた吹雪は、資料室から借りていた資料を返し終わり、執務室へと戻っていく最中だった。その手には、封筒が一つのみ。

今回の作戦、彼女は参加しない。横須賀鎮守府執務室長の秋山も同じくだ。そういうわけで、横須賀——のみならず、日本海軍を根底から支えるこの二人は、どこか取り残されたように落ち着いた時間を過ごしている。

執務室の扉を叩く。そのまま、秋山の返事を待つことなく、扉を開いた。長年一緒にやってきた二人だからこそ、許されることだ。

「戻りましたよ」

「ありがとう。助かった」

手元の書類から顔を上げた秋山は、笑顔でお礼を言ってくれた。それに頬を緩めて頷く。

「さ、お仕事しましょう」

「吹雪が片付けに行ってる間に、ほとんど終わった。後二枚だけだ。思ったより少なくて助かったよ」

「そうですか。それじゃあ、どうします?」

「そうだな・・・」

書き上げた書類を「済」の箱に入れ、秋山は最後の一枚に取り掛かる。このペースなら、二分と経たずに終わるだろうか。

「とりあえず、お茶淹れますね」

「お願いしよう」

給湯室に入った吹雪は、抱えていたA4サイズの封筒を戸棚の端に差し込んでから、電気ケトルでお湯を沸かす。沸騰するまでの間に、書類を終えた秋山が給湯室に入って来た。間取りの広い横須賀の給湯室には、吹雪と秋山専用と化している、休憩スペースがある。

「お茶請けは、紅葉饅頭でいいか」

机を濡れ布巾で拭き、お菓子が入れられている戸棚を開いた秋山が尋ねる。先日、呉の飯田中将から送られてきたものだ。

「いいですね。食べましょう」

「つぶ餡か、こし餡」

「こし餡で」

電気ケトルのスイッチが上がり、お湯が沸いたことを示す。湯呑みに一度注ぎ、しばらく温度が下がるのを待って、急須へ。三十秒ほどそのままにしておくのと、豊かなお茶の香りが漂い始めた。

湯呑みに注いで、秋山の前と、自分の前に出す。

「一息入れるには、少し早い気がするが」

「それもそうですね」

時刻はまだ二時を少し回ったところ。おやつにはまだ早い。二人して苦笑しながら、湯気を上げるお茶に口をつけた。

「・・・なんだか、私たちだけ、のん気ですね」

「留守番だしなあ。それに、トップの俺たちが、今更慌てても仕方ない」

緊張感なく呟いた吹雪に、秋山ものん気な答えを返す。再びお茶を口にして、ほっとするように息を吐いた。紅葉饅頭に手を伸ばす。

「そういえば」

ふわふわとしたカステラ生地をかじりつつ、秋山が口を開いた。

「第七期生の資料が来ていた」

「もう、そんな時期ですね」

提督候補生の第七期生が、いよいよその課程を終えて、各鎮守府に研修を目的として配属となるのだ。また、初期艦の選定と、半年間の訓練スケジュール、最終的な配属先も決めなければ。

提督候補生は、『有資格者』と呼ばれる、妖精が見える人の中から、

試験と研修課程を経て、人間性なども含めた総合的な判断のもと選別される。では、その『有資格者』は、どうやって見つけるのか。

最初に確認された有資格者は、言うまでもなく秋山だ。その後、第一期生と第一期生は、全て手探り状態から、『有資格者』を探し当てた。旧海上自衛隊内から選ばれた『有資格者』は、第一期生まででたったの七人。半年かけて、これしか見つからなかった。

が、ここである事実が判明する。七人の遺伝子内に、共通した部分が発見された。『有資格者』のみに見られるこの遺伝子(T遺伝子と呼ばれる)は、色覚と空間把握に関わるものと推測されている。この遺伝子があるために、『有資格者』は妖精を見ることができるとだ。

この事実を受けて、『有資格者』の大捜索が始まった。方法は至ってシンプル。「存在する血液サンプルを、片っ端から調べる」のだ。病院での採血や、献血によって確保された血液サンプルの調査が行われた。遺伝子解読技術の進歩があったからこそ、できることだった。

もつとも、『有資格者』の選出にあたって、そんな方法が取られているなどということは、海軍内でもごく一部の人間しか知らないことだ。国家権力の名のもとに、個人の遺伝情報を、勝手に解析したのだから。国家危急の事態だったとはいえ、褒められたものではない。

かくして、第二期生以降の提督候補生は、判明した『有資格者』に、欺瞞を兼ねた軍人や一般人を無作為に抽出して加え、試験と研修を課すことになった。

ただ、根本的なところは、まだわかっていない。

なぜ、そんな遺伝子が存在するのか。単なる突然変異、偶然で片付けていいのか。

——「艦娘と深海棲艦に関わること、そこにはいつも、何らかの意味と作為があった。『有資格者』に関しても、その可能性が高いとみるべきだ」

それが、吹雪と秋山の答えだ。

否、吹雪はすでに、答えの片鱗を持ち合わせていた。

なぜか。提督の選任にあたって、『有資格者』であることを条件として提示したのは、紛れもない吹雪なのだから。

「彼女」が、吹雪にそのことを教えてくれた。そしておそらく、「彼女」がこの遺伝子を仕組んだ張本人。そのことは、秋山にも教えている。

——あ。

そこで吹雪は思い出す。ここ数日、資料室の書類等、及び海軍内の協力者を通して集めた情報。先ほど受け取ったばかりのそれは、まだ中身を見ていない。

『有資格者』の調査については、秋山と吹雪で継続中だ。特に、「どこで遺伝子が混じった」のかについて。これまで色々目処をつけ、仮説を立て、調査を行ってきたが、どれも外れだった。

果たして、今回は。

「さっき、受け取ってきましたよ。今回はどうでしょうね」

二杯目のお茶と一緒に、封筒を取り出して、机に置く。ゆっくりと封を解き、中身を取り出した秋山は、湯呑みを傾けながら中身に目を通し始める。

その動きが、ピタリと止まった。湯呑みを置いた彼は、食い入るように書類を見つめ、めくる。少しずつ険しくなる表情。

「……何か、ありましたか」

「……吹雪も見てください」

秋山の声音は、艦隊指揮官としての、低く冷静なものに変わっていた。差し出された書類。受け取った吹雪は、そこに並んでいる文字列の違和感に、すぐ気づいた。

同時に、戦慄にも似た冷たさが、背中を駆けていく。にわかには信じがたい。それでも、書類を読み進め、紙をめくっていくにつれ、確信へと変わっていく。

読み終えた吹雪は、書類を封筒へ戻し、秋山の方を見る。一息を吐くように湯呑みに口づけた彼は、嘆息にも近い息を漏らす。吹雪も同じ気分だった。

「……どうして、このタイミングなのか。本当に、神の悪戯としか思えない」

神の悪戯。そんな言葉を使いたくなるのもわかるというものだ。

書類に記されているのは、調査の結果。今回実施したのは、各『有資格者』の出身地や、家族に関する調査だ。

どの対象にも共通する事項が一つ。書類から読み取れる事実。胸の内にいる『彼女』は、やはり沈黙を保ったままだ。

「……『彼女』は、何か言ってるか？」

「いえ、何も。見てはいると思いますけど」

「そうか……」

しばらく考えるようにした秋山は、腕時計を確認して、手元の湯呑みを掴む。一気に傾けて中身を飲み干した彼は、封筒を手にして立ち上がった。

秋山がやろうとしていることを、吹雪はすぐに悟った。同じく立ち上がり、二人分の湯呑みを手早く洗って、片付ける。これで、準備は整ったはずだ。

「行こう。幸いにして、俺たちには直接確かめる手がある」

給湯室を出た秋山は、制帽を被り、執務室の扉を開く。

足早に廊下を歩いていく。艦娘たちは午後の演習に取り組んでいるため、庁舎は静かなものだ。唯一、作戦室からは、塚原と角田のものと思しき声が聞こえてきた。凶上演習をやっているらしい。

「灯台下暗し、とはよく言ったものですね」

ポツリと言った吹雪の言葉に、秋山は無言で頷いた。

『有資格者』たちに共通していた事項。それは、全員が四世代前に、太平洋戦争に兵士として参加した家族を持つということだ。もっと言えば、全員が終戦を外地で迎え、戦後の復員輸送で日本に戻ってきている。

それだけなら、決して珍しい事ではない。復員輸送によって日本に戻って来た兵士は、六百万人にもものぼる。

問題は、復員輸送に用いられた、船であった。全員が全員、同じ船で、日本へと輸送されていたのだ。

復員輸送船には、旧帝国海軍艦艇、日本船舶、アメリカ貸与船舶の三種類が存在する。合計でおよそ四百隻。その内のたった一隻に、『有資格者』の家族が集中していたのだ。

仮説は、確信へと変わった。やはりこれは、仕組まれたもの。七十以上の時を経て、私たちの前に姿を現した、隠された真実。

庁舎を出ると、まだ夏の気配を残す、むっとした空気が立ち込めていた。それでも、海の近くであるからか、幾分かは涼しさも感じられる。時折吹く風も、頭を冷やして思考を落ち着かせるには持つてこいだ。

吹雪たちが向かう先、そこにあるのは、大型艦も横付け可能な大埠頭だ。以前米軍が横須賀に居を構えていた際は、排水量十万吨を超える原子力空母まで停泊可能だった。

今でもそこには、空母が艦体を休めている。ただしその大きさは、全長三百メートル強の米原子力空母の半分程度しかない。日本海軍の空母では最も小さく、大型な新鋭機の扱いには適さないとして、現在は対潜哨戒と航空隊の錬成を主任務としている。近代空母の特徴である島型艦橋も持たないため、どこかのつぺりとした、かまぼこのような印象を受ける艦だ。

大埠頭の前まで来て、秋山も吹雪も足を止める。そこには意外な——そしてあまりにも予想通りな人物がいたのだから。

「そろそろ、来る頃だと思っていました」

普段と変わらず、穏やかな笑みを浮かべている彼女は、やはりいつも通りの優しい声で、静かに言った。後頭部で結んだ髪が、風に揺れている。

「そうか。．．．それなら、話は早い。君に訊きたいことがある」

秋山もまた、真っ直ぐに彼女——航空母艦娘、鳳翔を見つめる。コロコロとした笑みのまま、彼女は首肯した。

仕組マレタ今

「鳳翔」の飛行甲板には、生暖かい初秋の風が吹いている。発艦時には、艦の前進に伴う合成風力が艦首から吹いてくるのだが、停泊している今はやや艦尾寄りからやってきていた。

「ここでもよろしかったのですか？」

飛行甲板を歩き、風に髪をなびかせながら、鳳翔は歩いていく。その背中を、吹雪は秋山と並んで追いかけていた。

秋山が口を開く。

「むしろこの方がいい。話を聞かれる心配はないし、もし誰かが上がって来てもすぐにわかる」

「そうですね。せめて、お茶なりと出せばいいのですが」

振り返った鳳翔が眉尻を下げる。いたって普通の受け答えが、今の状況では逆に緊張感をもたらす。この二年で慣れてしまった張りつめた空気に、吹雪は気を引き締めた。

「本題に入ろう」

「・・・わかりました。そうしましょう」

答えた鳳翔に、秋山が話し始める。

「ずっと、疑問に思っていたことがあった。艦娘でなければ、艦娘と邂逅し、顕現することはできない。それなのに、なぜ吹雪は現れたのか。・・・答えは簡単だ。吹雪よりも先に、艦娘がいたんだ」

秋山の言葉にも、鳳翔は微笑を湛えたまま、変わらない。それに構うことなく、秋山は話を続ける。

「旧帝国海軍内部に、『刃櫻会』と呼ばれる研究会があった。彼らは、ミッドウェー沖で邂逅した、巨大不明戦艦——BOBと艦娘に、非常によく似た存在を研究していたことが、断片的な資料からわかっている」

『刃櫻会』に関する資料は、本当に少ない。残っていても、断片的なものばかりだ。吹雪たちはそれを集めた。多くのこと——特に、艦娘と深海棲艦を生んだと思われる、二人の少女のことがわかった。一方、『刃櫻会』の構成員に関する情報は、全くと言っていいほどわから

なかった。

「俺の仮説はこうだ。海に消えたナギか、行方不明のナミか、どちらはわからない。ともかく、二人のうちどちらかが、艦娘を生んだ。……七十年前に」

秋山の推理を、黙って聞き届けた鳳翔。しばらくの沈黙の後、秋山の言を肯定するでも、否定するでもなく、彼女の話始める。

「……残ったのは、ロートルの私と、産まれたばかりの葛城ちゃんだけでした。他の皆は……今、私のことを慕ってくれている彼女たちは、皆沈んでしまいました。感情はなくても、そのことは理解できました。そして感情を持った時、理解は底知れぬ闇となりました」

閉じたり開いたりする右手は、向こう側が透けるような白さだ。掴もうとしている虚空に、感触はなく、ただただ手を動かす。

「艦娘が、直接艦の記憶を持つことは、とても辛いものを背負わされる時もあります。だから、記憶を司る艤装に、艦の記憶は格納されています。触れることに違いはありませんが、それでも少しの隔たりを持って、艦の記憶を冷静に受け止めることができます。……あんなに深い悲しみは、私だけで十分ですから」

その言葉は、まるで自分に言い聞かせているかのようで。秋山も吹雪も、口を引き結び、風の中の彼女の言葉に耳を傾ける。

「ナミさんと出会ったのは、私が最初の復員輸送に向かう時でした」
「……ナミが、君を目覚めさせたのか」

「はい。彼女が、私の船魂を、顕現させたんです。もともと、同時に感情を知ったことで、私はしばらくの間、話をするどころではなくなっていましたけど。彼女を恨んだことも、一度や二度ではありません」

まるで幼子です。苦笑する鳳翔。どう反応するべきかわからず、吹雪も秋山も、沈黙をもって答える。

「ようやくまともに会話ができるようになった私に、ナミさんは色々なことを話してくれました。特に、ナギさんのことを。離れ離れになっちゃった、姉妹だそうで。混乱の中で、大切な人と引き裂かれた彼女に、少なからず私と重なるものを感じました。ですから、ナミ

さんの計画に協力することを、承諾しました」

「それが、T遺伝子の埋め込みか」

「内容までは、知りませんでした。知るつもりもありませんでしたし、必要もないと感じていました。・・・ただ、彼女はこう言っていました」

——「ナギを止めないといけない。それは今じゃない、ずっと先の話だろうけど。だから、ナギを止めるための、準備をしなくてはいけないの。その頃にはもう、私にはどうしようもなくなっているだろうから」

すなわち、ナミは最初から、このつもりだったのだ。ナギ——深海棲艦を止めるために、それに対抗しうるBOB、艦娘を指揮するための人間を用意する。それが、ナミが鳳翔を目覚めさせた理由。

「不完全ながら、私は艦娘となりました。すでに意識だけとなったナミさんを胸の内に宿し、復員輸送に従事。その後、解体され、私の魂は自由となりました。ただし、安らかな眠りとは、いきませんでした。ナミさんの意志を、確かに次なる人へ渡すために。その時が来るまで」

「そして・・・あの日が来た」

「はい。私は吹雪ちゃんを顕現し、ナミさんの願いをその艦装に込めて、秋山中将に引き合わせました。ようやく、私の役目は終わったのです」

吹雪が思い返すのは、秋山と出会った日のこと。

あの時が始まりじゃなかった。全て、七十年前に始まっていたこと。ナミは世界初の艦娘、鳳翔を目覚めさせ。鳳翔は艦としての役目を終えるとともに、ナミの想いを抱き、時を超え。ナミの想いは、顕現された吹雪の船魂に受け継がれた。

これで話は終わり。そういうような鳳翔の雰囲気、吹雪は疑問を呈する。まだ、彼女が隠していることがある。語られていないことがある。

「・・・いいや、君の役目は、まだ終わっていないはずだ。違うか？」
秋山はなおも問いかける。広大な青空のような鳳翔の瞳は、変わら

ず澄んだまま、ジツと秋山を見つめている。柔らかな表情から、何かが見取れることはない。

「さすがですね。全て、お見通しといったところですか」

「そんなことはない。少し考えればわかることだ」

ニコニコと鳳翔は話の続きを促す。

「復員輸送船『鳳翔』に、女性に乗っていたなんて記録はない。いや、断言するのはよくないな。だが少なくとも、そう言った記述を、俺は見ることがない。艦娘に関する公式資料を、見落とすことなどありえない。・・・その資料が、非公式資料でない限りは」

その通りだ。吹雪が艦娘でなくなって以来、船にまつわる女性の、ありとあらゆる資料を集めた。けれども、帝国海軍の軍艦に、女性に乗っていたなどという記述はない。

『刃櫻会』を除けば。

「復員輸送を担当したのは、『刃櫻会』の構成員で・・・君もまた、会員だったのだろう。復員輸送船『鳳翔』艦内の女性の話は、公式資料には残されず、君とナミは守られた。そして『刃櫻会』は、来るべき『その日』のために、なおも極秘の活動を続けてきた。吹雪が着任した時点で、建造や開発、改装の仕方も『わかっていた』んだ。二か月の期間は、それらが正しいということをし、証明するために使われた」吹雪にとっては、懐かしい日々でもある。同時に、尽きぬ疑問に頭を悩ませた日々でもある。

胸の内の『彼女』は、全ての答えを知っているかのようだった。建造も、開発も、改装も、そのやり方は全て、『彼女』が知っていた。その疑問が解けたのは、つい一年ほど前のこと。

最後のピースが、たった今はまったのだ。

「正直、驚きました。私が顕現したその日に、『刃櫻会』を名乗る人がやって来たんです。私が眠っていた、何十年もの間に、すでに自然消滅したものだと思っていましたから」

鳳翔が顕現した時のことは、吹雪も覚えている。日本海軍最初の空母でもある鳳翔は、ここ横須賀のドックで建造されたのだ。

「あちらも驚いていたようでした。なにせ、七十年前の『刃櫻会』の

ことを知っていた者は、私しかいないのですから。だからこそ、艦娘として再び顕現してからも、協力を求められたのだと思います」

『刃櫻会』の目的は、ナミの行方を捜すことか」

「ええ、おそらくは。ですから、その件に関する協力はお断りさせていただきますました。というよりも、正直にお答えさせていただきますました。彼女はすでに、この世にはない存在です。私は、ナミさんによって、この世界に生を受けました。しかしそれは、深海棲艦という脅威に、対抗しうるBOBと艦娘を生むためでしかなかった、と」

嘘は吐いていない。事実、ナミの肉体は、当の昔にこの世のものではなくなっていた。しかしながらその意識だけが鳳翔に宿り、現在まで伝えられた。

そのナミは今、吹雪の中にいる。始まりの艦娘と共に、この世界を見守り、導くために。

いや、決してそれだけではないはずだ。

「代わりと言っては何ですが、横須賀の動向——特に、秋山中将と吹雪ちゃんの動きについては、報告をさせていただきますました。もつとも、吹雪ちゃんが艦娘でなくなってから、お二人の行動を微に入り細に入り報告することは不可能となってしまいましたけど」

そう言う鳳翔の表情には、やはり特に、何かを感じることはできなかった。

「先ほど秋山中将が言われた通り、私は会員『だった』という表現が適切ですね。今の私は、やはりあの時と同じ、何もできないロートルですから」

それで話は本当に終わりだったのだろう。しばらく真っ直ぐに秋山の視線を受け止めていた鳳翔は、その瞳を吹雪へと転じる。そこには、それまで見て取ることでできなかった光が、映っているような気がした。

「吹雪ちゃんには、望まぬものを、背負わせてしまいましたね」

憂いを帯びた瞳に、首を振って否定する。

背負ったものは大きかったかもしれない。私はそれを望んでいなかったかもしれない。

それでも、これが私なのだ。どれほど重い荷物を背負おうとも、私は私なのだ。そう思えるようになったのは、秋山に出会ったから。鳳翔が、彼に出会わせてくれたから、とも言えるかもしれない。

「・・・本当に、大きく、強くなったのですね」

吹雪の頬に触れようと伸ばされた鳳翔の右手は、すんでのところで止められる。その意味は、吹雪も理解したつもりだ。

「私が話せるのは、これだけです」

「・・・これだけ答えて欲しい。なぜ、教えてくれなかった」

答えなどわかり切っていた。秋山も、吹雪も。それを知っているのであろう鳳翔もまた、朗らかな笑みと共に、至極当然のように答えた。

「答えは自らが探すものだからです。決して、誰かに与えられるものではないからです」

南海ノ防人夕子

フィリピン、ルソン島に本拠を構える警備艦隊は、日米共同の基地航空隊と共に、日本の生命線を守る重要な部隊だ。特に、対潜哨戒に重きを置いた編成となっているため、小回りの利く小さな艦が多い。哨戒用の水偵や局地防衛用の甲標的を運用する、水上機母艦が最大の艦である。

そんな、ルソン警備隊基地、港湾施設の沖。警備隊最大の水上機母艦、*「瑞穂」*の隣には、それよりもさらに大きな艦が錨を打っていた。よく見てみれば、その他にも、普段は見慣れない艦影が、基地沖の海面に落ち着いている。

刀を思わせる、スラリと細い艦体。丈高い艦橋は*「大和」*型に酷似した、スツキリまとまったシルエットをしている。備えられた連装主砲塔は、艦の前後に二基ずつ四基八門。後部艦橋のすぐ後ろに航空艀装を施している点は、*「長門」*型や重巡洋艦に似ている。

日本海軍の艦型識別表には載っていない艦型、ましてこのルソンになどいてはいけない艦だ。

窓の外に艦影を望みつつ、卓己は意識を目の前に巻き戻した。そこに立つのは、第一種軍装に身を包む、高校生ぐらいの少女。しかし、こちらを見つめる瞳は、ただひたすらに真っ直ぐで力強い。

直接会うのは、随分と久しぶりだ。

「久しぶりだね、舞ちゃん」

「ご無沙汰してます、卓己さん」

ペコリ。舞が頭を下げる。くせつ毛のある髪が揺れた。

この部屋は、普段誰かと話をするときに使う、執務室や応接室とは違う。ルソン警備隊庁舎内で唯一、卓己しか鍵を持っていない部屋だ。防音対策も施されており、外部に音が漏れることはない。舞たち

——『T・T独立艦隊』の面々と会談する時のみ、使う部屋だ。

この部屋には今、卓己と舞、由良しかない。相模も同席させるべきか迷ったが、今回彼には、この場を外してもらったことにした。代わりに、今頃は沖合の*「雲仙」*に乗り込んで、『T・T独立艦隊』所属艦

娘たちと話しをしているはずだ。

——あちらは、彼に任せるとしよう。

ひとまずそのことを頭の隅にやり、卓己は舞に着席を促す。持ち込んだ電気ケトルでお湯を沸かし、由良が人数分のお茶を淹れてくれる。

「急に訪れてしまって、すみませんでした」

「・・・そうだね。できれば、君たちのことを知っている人間を、これ以上増やしたくなかったんだけど。それにしても、まさか舞ちゃんの方から、こつちに来るとは思わなかった。そつちのほうが、よっぽどビックリしたよ」

『T・T独立艦隊』は、編成からずっと、Z海域のみを活動域としていた。彼女たちの存在はあまりにもイレギュラーすぎて、公に扱うのは非常に難しいという判断からだ。

舞は『T・T独立艦隊』編成時からの提督ではない。しかしながら、閉じた海で活動せざるを得ない理由も、そこで生きるしかない雲仙たちの苦悩や外界への恐怖も、理解していたはずだ。そのうえで舞は、自らもまたその閉じた海で、彼女らを導いていくのだ、と。

それがなぜ、こうしてルソンへやって来たのか。衆人の目に、雲仙たちを晒すようなことをしたのか。

——何か、あつたかな。

卓己と舞だけが知る暗号電で、この訪問を打診してきたときから、何となく感じている。ここ数か月、これまでにない変化が、『T・T独立艦隊』に訪れた。それ故に、どうしてもこうせざるを得なかった、ということか。

「何か、あつたのかな？」

卓己の問いかけに、少女は少しの沈黙を作る。やがて、ゆつくりと言葉を選ぶように、薄桃色の唇を開いた。

「・・・色々なことが、ありました。それこそ、私の判断では、追いつかないほど、たくさん。私が、こうして提督でいられるのは、皆の支えあつてのことです」

沈黙の中から紡ぎ出される言葉は、大きく、重い。引き付けられる

ように、卓己は口を閉じ、黙って話に聞き入る。

「卓己中佐」

「何かな？」

「まずお話ししなくてはいけないことは、私たちの……『T・T独立艦隊』の意志に関することです。私たちが考え、選び出した一つの答えです」

——意志、か。

イレギュラー極まりない、『T・T独立艦隊』の艦娘たち。彼女らを産んだのは、全て三瀬というたった一人の少女だ。

彼女に意志を植え付けたのは、他でもない卓己たちだ。正確には、*“三瀬”*という、ある種呪われた異形の軍艦を、*“自らの手で造り出した”*、『刃櫻会』だ。

そこに宿るのは、造られた意志、造られた想いである。ルソン警備隊長として、航路保全と同時に『T・T独立艦隊』の監視を命じられた時、卓己はそう考えていた。

健全なる精神は、健全なる肉体にのみ宿る。健やかなる魂は、健やかなる環境によって育まれる。

例え、それが造られた意志であろうとも。彼女たちを育んだのは、先代の提督であり、また目の前に座る舞でもあったのだ。

その声を、卓己も同様に、真摯な心持ちで聞き届けなければなるまい。

「聞こうか」

深呼吸を一回挟んだ舞は、一息に言い切った。

「近いうちに、乙海域を出ようと考えています」

「……そうか」

心臓が飛び出るかと思うほどの衝撃を飲み下す。今ここで慌てることは、自分も舞も望んでいない。

「『イレギュラー』たちはどうする？」

「乙海域内から、『イレギュラー』を駆逐しつつあります。以前報告した通り、ここ数か月は、米第七艦隊と半ば共同戦線を張っていますから」

米国が、Z海域の調査及び解放を目的として、ポートモレスビーに派遣した艦隊のことは、卓己も聞いています。

太平洋戦域における深海棲艦の最重要拠点、ハワイは、もとはと言えば米軍基地である。その解放こそが、米国の最終目的だ。ハワイを失ったことで、米国の太平洋方面における活動、特に島嶼の集中している南西太平洋での活動は、事実上不可能となってしまっている。

Z海域から深海棲艦を駆逐することは、来るべき最終決戦において共同戦線を張ることになるであろう、日米間の連絡路を確保するという意味で、非常に重要な問題なのだ。第七艦隊の派遣は、そのための布石である。

「統計でも、Z海域における深海棲艦の活動は、下火になりつつあるとの結果が出ています。トラックやハワイの守りを固めるため、と考えられます」

深海棲艦には、自らの拠点に近いほど、防備を厚くする傾向がある。各国の本土が直接攻撃を受けなかったのは、沿岸地域に出現するのがほとんど駆逐艦や軽巡、潜水艦であったからだ。

『NT作戦』の発動時期など、詳細まではわかっていないだろうが、このところの日本海軍の動きを見れば、その開始が近いことぐらい素人でもわかる。だからこそ、深海棲艦は守りを固めているのだろう。Z海域から、戦力を引き抜いてまで。

「Z海域内に残っているのは、旗艦と思しき巨大戦艦を中心とした艦隊と、その他の警戒艦艇のみです。撃破は十分に可能であると、考えています」

「つまり、もう君たちが、常時監視する必要はない、と?」

「はい。『イレギュラー』がどのように生まれるのかはわかりませんが、少なくともZ海域内において『イレギュラー』が増えたという報告は受けたことはありません。今後は、航空機による監視を主として問題ないはずですよ」

そこで舞は目を伏せる。

「私たちがZ海域にいたのは、存在を公にしないようにするためであったことは、理解しています。Z海域における深海棲艦の脅威が排

除されたからと言って、そこから出てもいい訳ではないことも。それでも、私は彼女たちに外の世界を見せてあげたい。他の艦娘と同じように、この世界で何を考え、どう生きていくか、選ばせる自由をあげたいんです」

舞の言葉を受け、卓己は腕組みをし、椅子の背もたれに体重を預ける。考える時間が必要だ。

そもそも、卓己の一存で、どうこうできることではない。最終的な判断は、『T・T独立艦隊』の存在を把握している、海軍上層部の一部の人間に委ねられることになる。卓己にできるのは、監視役としての、口添えぐらいだ。

——もう少し、俺が中央に近ければ。

今更悔やんでも仕方がない。

卓己が『刃櫻会』に入ったのは、単に成り行きに過ぎない。元はと言えば、彼の伯父にあたる海上自衛官が、『刃櫻会』の人間だった。その伯父が自衛官を退官する際、当時防衛大学校を出たばかりだった卓己を引き込んだのだ。

伯父の紹介であったこともあり、よく知りもしないで『刃櫻会』に所属することになった。ただ、元々卓己には出世欲というものがあまりなく、そもそも防大での成績もあまりよくなかったために、自衛隊の中枢に入り込む気はなかった。『刃櫻会』の中でもそれほど地位が高いわけでもなく、研究会の全容など知りようもない。

自衛隊から海軍に変わった今も、その中枢には『刃櫻会』の会員が入り込んでいるはずだ。一方の卓己は、たまたま『有資格者』であったことから、こうして提督となり、ルソン警備隊に配属になっている。重要な任務であることは理解しているが、やはり中央からは距離が遠すぎた。

せめて、日頃からもう少し、上の人間とのパイプを作る努力をしておくべきだった。そんなことを、今更悔やんでも仕方があるまい。

——それでも、できれば彼女の意向に、添わせてあげたい。

勝手な思い入れをしまっている自分は、軍人としても、『刃櫻会』の構成員としても、他人の監視者としても失格だ。レッドカード

で一発退場である。

同じレッドカードにしても、もう少し派手にやれないものだろうか。

「・・・ちなみに聞いておきたい。舞ちゃんは、どのタイミングで、Z海域を飛び出すつもりなのかな?」

卓己としては、何気ない質問、ちよつとした確認のつもりだった。

しかし、それを受けた舞の表情は、明らかに変わった。ただでさえ緊張感を帯びた瞳は、なお一層に研ぎ澄まされ、張りつめた空気を生み出す。こちらが気圧されそうになるほどの迫力だった。

「実は、その件に関わる、重要なお話があります」

変な喉の渴きを感じたが、冷めてしまった湯呑みに手を付けるわけにはいかなかった。卓己は黙って、続きを促す。

「タイミングとしては、『NT作戦』と同時か、少し後を考えています」
「その理由は?」

息詰まるような空間に吐き出された舞の言葉は、特大の爆弾に似た衝撃を伴って、部屋の空気をどよめかせた。

『NT作戦』によってできる戦力の間隙を狙って、深海棲艦が本土を襲撃します。これを、Z海域から出奔した『T・T独立艦隊』で迎撃するのです」

静力ナル盾

夜中の十一時だというのに、ルソン警備隊庁舎内の作戦室には、煌々と電灯がついていた。

地図と海図が広げられた作戦室中央の台を囲むように、四人が立っている。各々の視線は険しく、引き結ばれた口は何かを言うことはない。

ルソン警備隊長の卓己と、秘書艦の由良。その向かいに立つのは、相模と瑞穂。四人が四人とも、『T・T独立艦隊』との関わりが深い。議題はもちろん、日中に舞たちが持つてきた、本土襲撃の可能性についてだ。

「・・・まずは、状況を整理しますね」

執務中にかけている眼鏡の位置を直し、由良が口を開く。

「舞さんが本土襲撃の可能性を示唆したのは、『イレギュラー』から提供された情報を根拠としています」

二か月ほど前、舞たちは乙海域内に展開する『イレギュラー』たちの中でも、最上位と思われる『イレギュラー』の艦娘——ミヤコワスレと会合する機会があった。その際に、彼女が舞にだけ、教えてくれたことらしかった。

「・・・つまり、自分と榊原が訪れた時には、すでにそのことを知っていたということですか」

相模は唸るように呟く。なぜ彼女が話さなかったのか、なぜ今報せたのか。そして、報せた相手がルソン警備隊だった理由。そのどれも、理解できるつもりだ。

「あの・・・私たちの処理能力を、完全に超えている事案ではありませんか？」

瑞穂が不安げに発言する。答えるのは卓己だ。

「その点に関しては、異論の挟みようがない。そもそもが、警備隊だ。配備されている戦力も、大して多くない。今回の件、対処するにしても、中央の協力が必要になるのは明白だ」

ルソン警備隊が現在保有している戦力は、水上機母艦二隻、軽巡一

隻、駆逐艦六隻。この他、哨戒艇や警備艇も所属しているが、BOBでないこれらは戦力に換算できない。ここに『T・T独立艦隊』の戦力が加わるとはいっても、それだけの戦力では、本土を襲撃しようとする深海棲艦艦隊を迎撃することは、困難を極める。

迎撃作戦には、『NT作戦』に参加しない本土の戦力との連携が不可欠だ。

「だがな。事案が事案だけに、どこに報せるか、誰に報せるかが問題だった。結果、最適任は横須賀の秋山中将であると判断した」

「・・・異論はありませんね」

横須賀の提督長である秋山が、『T・T独立艦隊』の運用に一枚噛んでいることはわかっている。現状、相模と卓己が把握している、最も海軍上層部に近い『T・T独立艦隊』を知る人物だ。

「・・・秋山中将は、ご存じだった」
「っ！」

「二か月前、舞ちゃんはすでに、秋山中将と吹雪さんに報告をしていたらしい」

「・・・それでは、なぜ」

なぜ、秋山中将は何もしていないのか。

「何もできない、というのが実情だろうな。トラック攻略は、既定の戦争計画で、非常に重要な部分を占める。今更中止や延期というわけにはいくまい。それに、例え中止したところで、本土に戦力が集まっていれば、深海棲艦も本土襲撃は取りやめるに違いない。お互いに得るものはなく、トラック攻略だけが遅れる」

ただし、秋山も、手をこまねいて、敵艦隊の本土接近を許すつもりはないらしい。

「秋山中将は、独自に迎撃計画を練っているらしい。だが、参加できるのはあくまで横須賀の艦隊のみということだ。本土襲撃の可能性を報せることで、『NT作戦』に取り掛かろうとしている艦隊に不安を与えたくないというのものもあるだろうが、何よりも情報の出所が出所であるからな。そう易々としゃべれないだろう」

「つまり、本土襲撃艦隊を迎撃できるのは、横須賀残存艦隊とルソン警

備隊、『T・T独立艦隊』のみということになりますか」

心許ないと言わざるを得ない。第一、本土襲撃艦隊がどの程度の規模になるのかも定かではないのだ。

「戦力について、話し始めても仕方ない」

かぶりを振った卓己が、由良に促す。頷いた由良は、手にした資料をめくり、再び口を開いた。

「本土を襲撃してくる艦隊は、ハワイに展開している戦力から抽出されてくることでしょう。それ以外には、考えにくいです」

トラックを守る艦隊は、『NT作戦』参加艦艇との戦いで手一杯なはずだ。となれば、本土を襲撃するようなまとまった艦隊を派遣できるのは、ハワイのみになる。

「ハワイの深海棲艦には、まだわかっていない部分が多い。編成の情報も曖昧だ」

卓己が残念そうに言う。

ハワイは、太平洋のほぼ真ん中に位置する島々だ。航空偵察を実施するにしても、その難易度は今までのものとは比べ物にもならない。

日本空軍では、民間に残されたボーイング747や787を買い取り、偵察機仕様にしてハワイまで飛ばしているが、成果は芳しくない。マツハ〇・八の巡航速度は、確かに深海棲艦艦載機よりも優速かもしれない。だが、それは必ずしも、落とされないといいことを意味するものではない。多数機による襲撃を受ければ、いかに速度があろうともただではすまない。所詮は軍用機ではないからだ。

結果として、偵察は高高度からのものとならざるを得ない。それは、ハワイに展開する深海棲艦の詳細までを調べきえることはできなかった。

アメリカの軍事監視衛星も頑張ってはいるようだが、こちらも詳細を詰めるには至っていない。そもそも、ハワイを拠点とする艦隊が、どこまでをそのテリトリーとしているかがわかっていないのだから、全貌を把握するなど土台無理な話なのだ。

ハワイ艦隊の正確な規模を計るには、トラックを攻略するしかない

い。

「そこで、逆算をしてみました。本土を襲撃するためには、どの程度の戦力を必要とするのか。あくまで、試算でしかありませんが」

そう前置いて、由良が予想される編成を読み上げる。

「本土襲撃に艦載機が有効でないのは、深海棲艦も承知しているはずです。よって、戦艦の艦砲射撃をもって、直接叩きに來ます。戦艦は四から六、空母は防空に特化させて二、護衛に巡洋艦と駆逐艦を入れて、合計二十隻を割るといったところでしょうか」

「・・・少なく見積もり過ぎではないですか？」

「本土を襲撃しようと考えた場合、規模は小さくまとめた方が得策です。その方が索敵網にかかりにくいからです。それに、艦隊規模が大きくなれば、それだけ準備や進撃にかかる時間も長くなります。万が一にも、トラックに行っている艦隊が反転して追いかけてくる、なんてことにはなりたくないはずですから、艦隊規模をできるだけ小さくまとめて、少数の高速艦隊で一点突破をかけてくると考えるのが妥当です」

指示棒でハワイから日本本土への線を書きながら、由良は答える。筋は通っている。『NT作戦』によって手薄になった本土の戦力では、この規模の艦隊でも荷が重い。

「狙いは横須賀でしようね」

「そう見て間違いないと思います」

相模の問いかけに、由良が確信をもって頷いた。

日本海軍の拠点の中でも、本土の横須賀、呉、佐世保は、規模や設備面で非常に重要な鎮守府であることは、言うまでもない。この内、呉は瀬戸内海に存在するため、襲撃は困難だ。また佐世保は、九州を回り込む必要が出てくる上に、マリアナと小笠原、二つの索敵網にかかることになる。こちらも考え難い。

その点、横須賀は、航路を選べばマリアナの索敵網を回避することが可能であり、直線で襲撃が可能な位置にある。何より、首都である東京から近く、日本政府に与える衝撃は最も大きくなる。横須賀が壊滅するようなことになれば、海軍はしばらく積極的な作戦展開を控え

ざるを得なくなる。例えトラックを攻略しても、政府の判断によつては、維持を放棄することになるかもしれない。

戦略的思考を有する深海棲艦、それも最上位であると目されるハワイ艦隊が立案する作戦となれば、当然横須賀を狙つてくると考えるべきだろう。

「小笠原の哨戒隊が発見してから駆けつけていたら、間に合いませんね」

仮に、哨戒圏ギリギリの南鳥島沖で発見したとして、そこからルソンを抜锚したのでは、間に合わない。せめて後四時間は欲しい。

「沖ノ鳥島沖辺りで待機していて、発見と同時に急行するというのが、妥当でしょうか」

「・・・いや」

相模の提案に、卓己が首を振った。

「それはできない。『T・T独立艦隊』の存在は、できるだけギリギリまで、秘匿しておきたい。それに、イレギュラーを表沙汰にするなら、周りの状況もイレギュラーであつた方が、問題も起こりにくい」

「なるほど。木を隠すなら森、混乱のもとを誤魔化すなら混乱の中、ということですか」

「日常に異常を足せば異常になるが、異常に異常を足したところで異常のままだ」

日本海軍の混乱に乗じて、ルソン警備隊と『T・T独立艦隊』が、深海棲艦本土襲撃艦隊を迎撃する。それが卓己の狙いらしかった。

「しかし、最低限必要な四時間はどうしますか？こればかりはどうにかしてもらわないと、我々は追いつくことができません」

「こればかりは、秋山中将の手腕と横須賀残存艦隊を信じるしかあるまい。報告があつた時点で、我々は現場海域に急行する」

「・・・わかりました」

厳しい条件には違いないが、それでもやるしかない。

「だが、手をこまねいて待つているつもりはない」

——卓己中佐のこんな姿を見るのは、初めてだな。

どこか肝の据わつた眼差し卓己に、相模はそんな感想を抱く。普

段の彼は、どちらかといえば文官といった雰囲気、ルソン基地航空隊との折衝などに手腕を振るっていたが、艦隊の指揮官という印象は薄かった。

何が彼にそんな覚悟をさせたのかはわからない。だが、守るべきものを、全力で守りたいという根幹の部分は、嫌というほどわかる。

『T・T独立艦隊』を動かすわけにはいかないが、ルソン警備隊が動く分には問題ないはずだ。そこで、

チラリ。卓己は相模と瑞穂を順に見て、一瞬の間を設けた。

「相模少佐に、頼みがある。『瑞穂』、『秋津洲』、『漣』を連れて、小笠原に行ってくれ。派遣理由は、こつちで何だかんだと付けておく」

「時間稼ぎをするためですね」

「そうだ。『瑞穂』と『秋津洲』なら、それができる」

本来、水上機母艦という艦種は、索敵や哨戒を主任務としており、攻撃能力、特に対艦戦闘能力は無きに等しい。精々高角砲が搭載されているくらいである。

だが、『瑞穂』と『秋津洲』は違う。そのことは、相模も承知していた。

「わかりました。お引き受けいたします」

了承した相模は、隣の瑞穂に目配せをする。緊張気味に背筋を伸ばした彼女は、それでもはつきりと、首を縦に振った。おっとりとしていても、一本芯の通った、強い艦娘だ。

『NT作戦』の開始が近づく中、ルソンでは秘かに、本土を守る「盾」が準備されていた。その全貌が明らかになる時は、そう遠くない日のことだ。

戦いの予感を、誰もが感じ取っていた。

満夕七盃

パラオの夜は、昼間の喧騒と陽気が嘘のように、静かな涼しさに包まれている。風通しさえよくしておけば、空調機器を使わなくても、寝苦しくなるようなことはない。網戸の隙間から侵入して来ようとする蚊がいないことはないが、日本製の蚊取り線香やら何やらによる防空射撃によつて撃滅されるため、刺される心配をしなくて済む。

風呂から上がった榊原は、静まった泊地の雰囲気を肌で感じて、食堂を覗く。さつきまで、オセロだの将棋だので艦娘たちと盛り上がっていたそこは、すでに三分の一の電気が落とされている。食堂部も後片付けを終えており、台所には一人、釣掛が残っているのみだった。冷蔵庫内の食材を確認しているらしい。

「あら、榊原中佐」

榊原に気づいたようで、釣掛がこちらを振り返った。お互いに軽い会釈を交わす。

「晩酌ですか？」

「ええ、そんなところですよ」

「ビールしかありませんけど、いいですか？日本酒が入ってくるのは、次回の船団なので」

そう言いながら、釣掛が冷蔵庫から缶ビールを取り出してくれる。コップの有無を聞かれたが、今更洗い物を出したくないので、遠慮することにした。

「それでは、お先に。おやすみなさい」

「おやすみなさい」

釣掛はそう言い残して食堂を後にする。残された榊原は、戸棚からツマミになるようなものを漁ってみた。出てきたのは柿ピーだ。それらを手に、どこか夜風に当たれるところを探すつもりだった。

「榊原中佐？」

そんな榊原に、声をかける者がいた。食堂の入り口からこちらを覗くのは、ラフな部屋着の足柄だ。こちららも風呂上がりのようで、長い髪を後頭部でまとめていた。

「足柄か」

「そうよ。それで、榊原中佐は、何してるの？晩酌？」

提督二人体制になってから着任したためか、足柄は「榊原中佐」、「清水少佐」と呼んでいる。一方、同じように提督二人体制移行後着任の磯風は、榊原を「提督」、清水を「司令」と呼んでいた。

「まあ、そんなところだ」

「ふーん。榊原中佐、お酒飲むのね。あんまり見たことなかったから言われてみればそうかもじゃない。元々、一人で飲むことがあまりない。清水はあまりお酒が好きではなく、そもそも付き合いいい男ではないので、一緒に飲むことはめつたにない。最近は、週二、三回といったところだ。」

「そんなに飲む方でもないしな。一人で飲むのが好きというわけでもないし」

答えた榊原に、足柄は納得した様子で頷いた。それから何かを閃いたように、柏手を叩く。

「そうだ。ちよつと待ってて、中佐」

そう言い置いて、足柄はパタパタと台所に駆け入っていく。しばらくして戻ってきたその手には、榊原と同じビールの缶があった。

「一緒にしてもいいかしら？」

いい笑顔で、缶を振って見せる。足柄は飲む口らしい。思わぬところから現れた飲み友に、驚きと共に相好を崩す。願ってもない申し出だ。

それに、足柄とゆっくり話すのは、これが初めてかもしれない。

「さ、どこに行きましょうか？」

「屋上かなとも思ったが・・・埠頭に行こう。ちよつと、潮風に当たりたい気分だ」

「そうなの？それじゃあ、そうしましょう」

言っつてすぐに、足柄は歩きだす。その後を追いかけるようにして、榊原は食堂を後にした。

廊下に並ぶ蛍光灯は、節電のため交互に半分が点けられ、少し薄暗い印象を与えた。それでも、この静かな夜には、これぐらいが丁度い

いかもしれない。

「パラオは、星がよく見えるわね」

廊下の先、庇付きの玄関から出たところで、足柄がおもむろに呟いた。

港湾施設や泊地沖の航路を示す灯標識以外に光源はなく、空気が澄んでいふこともあつて星空を邪魔するものはない。日本では見えなような光量の小さい星も、ここでは無数と言つていいほど観察できる。おまけに、そこに打ち寄せる波の音が加わるのだ。風情は十分である。

「星の海と・・・艦たちの休息、つてね」

そう言つた足柄は、悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

埠頭に据え付けられたボラードに腰を下ろす。金属製の舳取りは、夜風で程よく冷却されていて、心地よい。足柄の方は、脱いだサンダルを綺麗にそろえて、埠頭のふちに腰かけていた。足先が水面をつつく、ピチャピチャという音が聞こえてくる。

「んー、夜の海もいいわねえ」

プシュツ

爽快な音と共に、缶ビールのプルタブを開ける。急かされるように榊原も栓を開け、二人で乾杯。そのまま、クイツと一口目をあおつた足柄が、それはそれはおいしそうに息を吐いた。

「いい風景に、いいお酒、いい女。贅沢な夜ねえ、榊原中佐」

「ほぼ全面的に同意だが・・・いい女つて、自分で言つちやうか」

「細かいこと気にしないのよ」

そう言つて微笑む足柄に、苦笑が漏れる。大雑把でいて気遣いもできず、本当に姉のような艦娘だ。

そんな足柄につられるようにして、榊原もビールを傾ける。思い出したように柿ピーを開け、それも二人で摘まんだ。こうして、誰かとお酒を飲むのは、随分と久しぶりだ。

「ねえ、榊原中佐」

缶の中身が半分ほどになったところで、足柄が切り出す。海を見つめたままの彼女をチラリと窺うが、その目がこちらに向けられること

はない。

「なんだ？」

榊原も、同じように海を見つめていた。沖合に停泊している中、大型艦の姿が、月と星の光で海面に浮かび上がっている。星の海を進んでいるかのような錯覚を受けた。

「いえ、大したことじゃないの。明日が楽しみね、って話よ」

「ああ。楽しみだ。前回よりも、随分と賑やかになったしな」

日曜日である明日は、『NT作戦』直前ということもあって、艦隊全員で休暇を取ることになっている。そして、例のごとく、パラオのビーチへ繰り出す予定であった。

『IF作戦』前よりも艦娘が増えたこともあり、より一層賑やかになるだろうと、榊原は思っている。いい息抜きになるはずだ。

「・・・やっぱり、不安？」

飛び出した足柄の問いかけは、あまりにも突然で。答えに詰まるというよりは、心臓を鷲掴みにされた気分だ。

不安。

何のために？何が不安なのか？

問いかけに答えるよりも先に、榊原の視線は手元のビールへと移る。

「そうかもしれない」

否定することはできなかった。

酒を飲みたい気分だったのは。夜風に当たりたい気分だったのは。

果たして、何もなかったと言えるだろうか。無意識のうちに、何かを誤魔化していなかったか。

「提督の俺がこれでは、笑われてしまうな」

今にも、厳しい秘書艦の声が聞こえてきそうだ。

戦闘中に感じることはない。おそらくは、本能的な部分で、押さえつけられているのだ。だからこそ、こうして迫る戦いを感じる時が、一番不安になる。

「不安はある。恐怖も知ってる。それでも、隣に誰かがいるから、俺は戦える。君たちを導くために、戦場に立ち続けたいと思える」

不安だからこそ、一所懸命に考える。誰かを大切にしたいと思う。それが、自らを紛らわせるものだとしても、何もしいよりはずつといい。

「笑顔っていうのは不思議でな。誰かが笑うだけで、不安を忘れることができる。心からの笑みであればあるほど、他人まで幸せにできる」

「・・・大切なね、曙ちゃんのこと」

「またもや発せられた足柄の唐突な指摘に、今度こそむせてしまう」

「な、何をどう解釈したら、そういう話になる」

「ふふん、艦娘だって女ですからね。こういうことは、鈍感な男なんかより、ずっとよくわかるのよ」

「自慢げに胸を反らし、足柄はなおも追求する。貴方にとって、曙は特別なんだろう、と。」

「それは・・・もちろん大切だ。だけど、曙だけじゃない。俺にとっては、皆大切な仲間で、特別な存在だ」

「ふーん・・・ふーん？」

缶を片手にしたまま、足柄がこちらを探るよう見つめてくる。大和や祥鳳とは違った積極性に戸惑いながらも、その目を見つめ返す。やがて、小さな溜め息を吐き出し、足柄が微笑んだ。

「ま、そういうことしておくわ」

もう一度缶を傾け、喉を鳴らす。缶の底の部分に、夜の光が反射していた。

「私は、戦いが好きよ。主砲を撃って、魚雷を放ち、海の上を走り抜ける。これほどに心が踊ることはないわ」

足柄が静かに話します。吹いた夜風とコンクリートを打つ波が、ゆるやかなBGMの代わりをしていた。話の内容に反して、どこか穏やかな時間が流れている。

「でもね、それは海にいる時だけのことよ。陸に上がって、ふとした時に思っちゃうの。ある日突然、戦いがなくなったらどうしよう、って」

榊原もビールをあおる。ずっと握りしめていたせいか、体温が伝わって随分とぬるくなってしまう。わずかに顔をしかめて、中

身を飲み干す。

「戦いが終わった世界で、戦いが存在意義だった私は、生きていけるのか。それは、許されることなのか。そんな余計なことを、考えちゃう時もあるのよ」

物憂げに髪をいじる足柄は、しかし次の瞬間には、晴れやかな笑顔を見せた。あたかも、朝日が駆け足でやって来てしまったかのような、そんな笑顔だった。

「でも、そんなこと考えたって、しょうがないじゃない。それは、将来のことを考えるのは、大切で、とても素晴らしいことだとは思うわよ？ だけど、それで今をおろそかにするのは間違ってるわ。だから決めたの。まずはとにかく、今を精一杯に楽しもう。たくさん楽しんで、たくさん笑って。時々、戦うことで、誰かを幸せにして。それは、きつと間違ったことではないはずよ」

力強く宣言して、足柄は立ち上がる。手にしたビールはすでに飲みきったようで、同じ手に器用にサンダルを持った。空いた左手で、榊原の頬を引っ張る。

「あんまり難しい顔しないのよ、榊原中佐。せっかくの海水浴も、楽しさが半減しちゃったら、元も子もないでしょ」

手が離れていく。それほど力が入っていたわけでもなく、引っ張られた右頬がわずかな温もりを残しただけで、それもすぐに空気に溶け込んでしまう。

「・・・付き合ってくれて、ありがとう」

「お礼を言われるほどのことじゃないわ。またいつでも、付き合うわよ。・・・それじゃあ、私は霞ちゃんの寝込みを襲撃してくるわね」どさくさに紛れて、霞にちよっかいを出そうとしている足柄。「お酒で酔っていた」とでも言い訳するつもりなのだろうか。榊原が止める前に、その背中は艦娘寮の方へと消えていった。

—— 気を遣わせてしまったか。

食堂で鉢合わせた時点で、足柄は気づいていたのだろう。だから、榊原の酒に付き合った。

ただ、さっきのことを、伝えるために。

思えば、前から同じことを言われ続けている気がする。

考えても詮無い事まで、考えてしまうと、自分の悪い癖。曙や足柄のように、指摘してくれる者がいなければ、いつか煮詰まってしまうていたかもしれない。

今を楽しむこと。それは簡単なようで、意外と難しいことでもある。

しばらく、ぼんやりと海を眺めていた榊原は、おもむろに立ち上がって、庁舎へと戻る。明日の楽しみに向けて、今日は早く寝ることにした。

翌朝、簀巻きにされた足柄が、廊下に転がっていたという。

青い空、白い雲

その日のパラオは、目を見張るほどの快晴だった。

どこまでも果てしなく蒼い空と、それを映したかのように透き通った海は、水平線の彼方でその境界を溶け合わせている。漂う真っ白な雲も少なく、南国らしい太陽光線が燦々と降り注いでいた。その景色を、鳥たちが優雅に飛び回る。

絶好の海水浴日和と言えた。

「綺麗に晴れたわね。よかった」

隣に立つ曙が、空を見上げてそう言った。普段着ているセーラー服ではなく、白いゆったりとしたワンピースだ。つばの小さい麦藁帽子が、花の飾りがついた髪留めとよく合っていた。華奢な体つきもあって、どこからどう見ても、育ちのいい、清純な美少女だ。

「・・・何よ」

榊原の視線に気づいたのか、曙が目元を険しくして尋ねる。幾度となく繰り返してきたやり取りのおかげで、その表情が意味するところはわかっていった。

「なんでもない。よく似合ってるよ。可愛いって、思ってた」

「かわっ・・・!」

榊原の言葉に、曙の顔が一気に沸騰する。噴き出した蒸気で、帽子が飛んでしまうのではと思えるほどだ。目線をぐるぐるとひとしきり泳がせた後、曙はゴニョゴニョと、言葉にならない呟きを繰り返す。紅潮した顔が、こつちを向いて一言。

「そ、そういうところがクソ提督なのよっ!」

だが、その後に小さく続けられた、「ありがとう」の台詞も、榊原はしっかりと聞き取っていた。

今日は『NT作戦』前に与えられた、最後の休暇である。パラオ泊地艦隊は、全員でコロール島のビーチへ、海水浴に行くことにした。『IF作戦』前に行ったことを話したところ、卯月が「うーちゃんも海水浴したいびょん!」と言いだしたことで、今回も全員で海水浴という結論になった。

例のごとく、泊地の方は港湾部に任せて、何かがあつたら榊原か清水に連絡を入れてもらう。

「待たせたな、提督、曙」

そう言つて、摩耶が現れる。それから続々と、集合場所である庁舎の玄関前に、パラオ所属艦娘たちが集まり始めた。霞と陽炎は、釣掛から昼食と飲み物の入ったクーラーボックスを受け取つてきている。

榊原と清水で、クーラーボックスを抱える。とはいえ、それなりの大所帯となつたパラオ泊地全員分の食料品を運ぶのは、さすがに無理というものだ。そこで今回は、「大和」所属の内火艇で、ビーチ近くの棧橋まで行くことにした。

「それじゃあ、行くとするか」

榊原の掛け声で、パラオ泊地艦隊が動きだした。

白い砂浜は、相も変わらず、貸し切り状態だ。かつては観光客で賑わっていたであろうここも、今は人影がない。日本海軍が進出して半年以上が経過したとはいえ、パラオはまだ、のん気に観光に来られるような場所ではなかった。

棧橋につけた内火艇からの荷下ろしが終わり、しばらくすれば陣地作りも終了した。広げたパラソルの下、各々の荷物がレジャーシートの上に並ぶ。

「俺が荷物を見ておくよ。先に着替えてきてくれ」

荷物番を引き受けた榊原を残して、全員が更衣室に向かう。残った榊原は、白波が打ち寄せる波打ち際を眺めて、誰かが戻ってくるのを待つ。おそらくは、清水が一番早く戻ってくるはずだ。

と、その時。

サクツ。サクツ。小気味よく砂を踏む足音が、後ろから近付いてきた。振り返るとそこには、日傘を差して大和が立っていた。榊原に微笑む。

「提督。大和も一緒に、荷物番をしますよ」

「・・・そうか。じゃあ、よろしく頼む」

特別追い返す理由もなく、榊原はそう返す。そのまま、大和は榊原

の右隣に立って、同じように海の方を見た。日焼け対策なのか、薄手の長袖を着ている。

「えっと・・・こうして、二人きりなものも、久しぶりですね」

言われてみれば、その通りだった。言い訳をするつもりはないが、ここのところ、忙しさで思考にかまけて、まともに彼女たちと接していなかったかもしれない。

「せっかくだ。皆が戻って来るまで、少し雑談しないか？」

「は、はい。ぜひ」

榊原の提案に、大和が嬉しそうに頷く。雑談をするのに、わざわざ誘うのもどうかと思うが。

「いつもは、海で戦ってばかりだからな。たまにはこうして、全力で遊ばないと。せっかく、これだけ綺麗な海があるのに、もったいない」「とても綺麗ですよ、パラオの海。私は、この海の色しか知りませんが。それでも、この海が、一番好きです」

「同感だ」

提督としてパラオに着任するまで、海外旅行の経験などなかった。だから、比べる対象といえ、日本の海になってしまっただが。やはりこちらの海は、抜群に美しい。

この海で経験した色々なことが、より一層に、海を美しく思わせるのかもしれない。

波間にきらめく光たち。

透明な海には、魚たちが行き交う。

海底に広がるのは、珊瑚の草原だ。

そのどれもが、ここだけの美しさだ。

「大和は、艦娘として生まれ出でた海が、このパラオであったことが、とても嬉しいです。それに・・・こうして、素敵な提督にも出会えましたし」

南国の花のごとく、麗しい大和の笑顔は、こちらが照れてしまうほどだ。気温とは別の意味で熱くなった顔を誤魔化すように、榊原は頬を搔く。

「・・・買いかぶりすぎだよ。俺はまだまだ未熟だ。君たちの隣に立つ

だけで、精一杯だよ」

「確かに、未熟かもしれませんが。提督は自分を卑下し過ぎですよ。大和は……いえ、皆、貴方の隣にいらっしゃることを、貴方と共に戦えることを、誇りに思っています」

「そうか……」

ますます照れる結果となってしまうた。

大和の真っ直ぐな瞳が、その中心に榊原を映して、細められている。かつての不安げな色が、そこには見えない。彼女は、海軍最強の戦艦を預かる艦娘として相応しいだけの、威厳と実力を備えるに至った。その瞳に映る俺は、果たして成長しているだろうか。

提督は、単に艦隊を指揮するだけの人間ではない。常に艦娘と共にあり、彼女たちを導く存在でもある。

彼女たちと共に立つ俺は、明確に道を示せているだろうか。

暗闇に航路を示す灯台として、その役目を十分に務めているであろうか。

「……ありがとう。信じてみるよ、俺自身のことも」

「はい。そうしてください。だって貴方は、私たちの提督なんですから」

自信にあふれたその声に、背中を押されているような、そんな気がした。

再び海の方を向いた大和が、可笑しそうに声を漏らす。

「ふふ、何だかくすぐったいです。提督にこんなこと言ったの、初めてかもしれません」

海を見つめたまま、口に拳を当てて、コロコロと笑う。彼女自身も、言っていて恥ずかしかったのかもしれない。

波の音が混じる。くるぶしまで届こうかという大和の髪は、木々を揺らす風に乗ってなびく。桜のかんざしも、そよそよと踊っていた。

「あの……提督?」

「どうした?」

「一つ、お願いがあるんですけど、いいですか?」

大和の口から出た「お願い」という珍しい単語に、首を傾げる。了

承しない理由はなかった。

「手を、繋いでいただけませんか。前みたいに」

思い出すのは、トラック沖での、砲撃戦のこと。初めて経験する砲撃戦に緊張する大和の手を、榊原が握ったことがあった。

「俺の手でよければ」

差し出された手を握る。白くて細い手は、以前のように不安で震えてはいない。こちらが握れば、しつかりと応える。優しい温もりを包むような手だ。

「提督の手は・・・暖かくて、やっぱり安心できます」

「・・・そうか」

そう言われるのは、満更でもない。

と、その時。後方から迫って来る足音——否、駆け足が。

「てやつ」

そんな声と共に、繋いでいた二人の手を、何者かが手刀で強制解除する。その正体にある程度の予測がついている榊原は、ゆっくり後ろを振り向いた。

予想通りだったのは、長い黒髪を揺らす祥鳳が飛び込んできたことだ。

予想外だったのは、水着に包まれていた祥鳳の大きな胸が、たわわに揺れていたことだ。

「お待たせしました、提督」

「い、いや。それほどでもないぞ」

若干の動揺を押し殺しながら、答える。祥鳳は、大和と反対側に立った。

二人の間に、強烈な電圧がかかって、空中放電現象が起こる。

「随分と早かったんですね、祥鳳さん」

「ええ、提督をお待たせするわけにはいきませんから」

そう言いながら、祥鳳が榊原の左腕を取り、引き寄せる。張りのいい、瑞々しい果実が、二の腕を包み込む。

——・・・ナムサン。

「それより提督。どうですか、私の水着は？」

「あ、ああ。とても似合ってると思うぞ」

「本当ですか？ありがとうございます、嬉しいです」

その時、反対側の大和が、対抗するように右腕を引つ張った。超弩級の名に恥じぬ、大きくて柔らかいそれが、二の腕に当たっている。

——・・・ガツデム。

この状況を、両手に花と思えば、どれほどよかったことか。

前に海水浴に来た時も、同じような状況になったことを思い出す。

「祥鳳さん。提督は水着に着替えるんですよ。その手を離してください」

「大和さんこそ。どうぞお先に、着替えてきてください」

双方ともに沈黙。アーク放電の渦中に放り込まれた榊原は、両側からの強烈な圧力を感じていた。このままでは命に係わる。

そもそも、アーク放電が生じるような状況というのは、船の発電機にとって致命傷である。

「・・・随分楽しそうだな、少佐殿」

今回、このどうにもならない状況から救い出してくれる救世主は、曙ではなく清水であった。

楽しそうに見えるなら代わってくれ。

「荷物番は、俺と祥鳳が交代する。榊原と大和は、早く着替えてきたらどうだ」

清水の言葉に、ようやくアーク放電が収束する。解放された榊原は、そのまま着替えを持って、更衣室に足を向けた。もちろん、大和を連れだつてである。

途中、着替え終わった曙とすれ違った。フリルのついた可愛らしい水着の上から、いつぞやと同じパレオをしている。目が合うなり、

「二人とも、早くしなさいよ」

と言い置いて、足早に砂浜へ向かつていった。

更衣室からは、続々と着替え終わった艦娘たちが出てくるところであった。彼女たちと入れ替わるようにして、榊原と大和が更衣室に入る。もちろん、男女別々だ。

「それでは提督。また、後ほど」

そう言つて、大和は更衣室の中へ消えていった。
榊原も更衣室へ入る。海水浴はこれからだ。

波間ノ艦娘夕子

「でりやあああつー！」

裂帛の声に、砂浜が震える。腹の底まで響くようなその声が発せられると同時に、何かが強烈な勢いで打ち出される音。その一部始終を、清水はこの目でしっかりと見届けた。

ネットの手前ギリギリに上げた清水のトスを、絶妙のタイミングで突っ込んで来た摩耶が、ジャンピング・スパイクで相手コートに送り込む。随分と奮闘したが、足柄、霞ペアもここまでだ。

「なんのおおおっー！」

とつさに反応した足柄が、ボールに向かって飛び込む。伸ばされた右手、だがしかし、ボールは無情にも、その先に落ちた。

「よっしー！」

試合を決めた最後の一打に、摩耶が満足げなガッツポーズを作る。そのままごく自然にハイタッチを求めてきた。清水がそれに応える。

「うがああああつ、負けたあああつ」

よっぽど負けたのが悔しかったのだろう。相手側コートでは、足柄が悶えるように転げまわっている。それを力づくで止めた霞が、容赦なくズリズリと引きずっていった。

「提督、曙！次、やろうぜ！」

「うーちゃんの実力、見せてやるびょん！」

長波、卯月ペアが、榊原と曙のペアを急かす。早くも、次の試合が始まりそうだ。

決戦場から退避した清水は、近くの木陰に腰を下ろす。火照った体に、木々の間を抜ける風が心地よい。久しぶりに、いい運動をした気分だ。

バレーコートでは、すでに次の試合が始まっていた。パラオ泊地秘書艦が、華麗なジャンピング・サーブを決めている。

———当分動かしていないと、なまるものだな。

試合の様子を見守りつつ、腕と肩をほぐす。昔取った何とやら、である程度動けはしたが、やはり動きの重さは否めない。

その時。

ぴと。冷たいものが首筋に触れる。思わず肩を跳ね上げると、押し殺した笑い声が聞こえてきた。摩耶だ。

「お疲れさん」

青春ドラマの定番のような格好で差し出されたのは、よく冷えたスポーツドリンクだ。それをありがたく受け取り、すぐにふたを開けて一口。体の奥底まで染み渡るような感覚がした。

「お前って、バレー経験者だったのか？」

隣に腰かけた摩耶が、意外そうな口ぶりで尋ねる。

「経験者というほどではないがな。高校時代、二年間だけ、バレー部に所属していた」

「十分経験者だろ。いやー、お前と組んで正解だったぜ」

「摩耶の方こそ。随分堂に入ったものだったじゃないか」

「へへん、まあな」

どこか誇らしげに胸を反らす。実際、摩耶の運動能力は凄まじい。パラオ泊地艦隊の中では圧倒的と言っていいだろう。あんなに見事なスパイクが打てる人間は、そうそういない。

「佐世保にいた頃から球技が好きなんだよ。他にもいろいろできるぞ、野球とか」

「なるほど、趣味の一環というわけか」

「ま、そんなとこだな。それに、体を動かすのも、好きだしさ」

そう言いながら、眩しいほどの笑顔を見せる。最近では、本当によく笑ってくれるようになった。それは、清水に打ち解けてくれたからだと、思ってもいいだろうか。

決戦場では、なおも試合が続いている。有利なのは榊原、曙ペアだ。というよりも、ほぼ曙が試合をリードしている。

レシーブに失敗した榊原の背中を、曙が叩く。「ドンマイ」とでも言っているのだろうか。

「・・・あのさ、清水」

のんびり試合の行方を見守っていると、摩耶がわずかに真剣な口調で切り出した。そちらに顔を向ければ、普段から勝気なその瞳が、な

お一層強い輝きを放っている。

「なんだ？」

「・・・いや、何ていうか」

うまく言葉が見つからないのか、ほんのしばらくの間があった。

「上手く言えないけど。こうして、また皆と、一緒にワイワイやりたいなって、思った」

「・・・そうだな」

彼女の言わんとしていることは、何となくだが伝わった。

「あたし、この泊地が好きなんだ。海も、空も、仲間も・・・清水や榊原も、前部ひつくるめて、この泊地が好きだ。皆と一緒にいるのが、好きだ。うまく伝わってるか、わからないけど・・・ともかく、そういうことなんだよ」

最後の方は、照れたようにそっぽを向いてしまった。海の方を向いた横顔が、ペットボトルに口をつける。程よく日に焼け、汗をかいた首筋が、液体を嚙下して動いた。

「わかった。全部とは言わないが、摩耶の言いたいことは伝わった」

「そ、そうか」

「だが、もし摩耶が、俺に全てを伝えることができるとは言葉を見つけたら、また教えて欲しい。摩耶が、この泊地で見つけたものを」

その時はきつと、俺も大切な何かを伝える、言葉を見つけているはずだから。

清水の言葉に、摩耶は黙ったまま、コクコクと頷く。それから、中身が半分ほどに減ったペットボトルを携えて、砂浜へ戻っていく。しなやかなラインを描くその背中を、清水は見つめる。

摩耶から受け取ったペットボトルを、もう一度傾ける。ふたをきつく締め、立ち上がる。榊原、曙ペアと、長波、卯月ペアの決着がそろそろ着きそうだ。コートの脇では、陽炎、磯風ペアと、満潮、木曾ペアが準備体操を行っている。両者ともやる気十分だ。

「いっけえええっー」

へっぺり腰ながらも、榊原がトスを上げる。そこに遠慮会釈なく突撃してきた小柄な駆逐艦娘が、トドメとなるスパイクを放つ。勝負は

あつた。

——やはり、問題はあのペアだな。

パラオ泊地ビーチバレー対決を全勝でもって制するべく、清水は戦略を練り始めた。

*

ビーチバレー対決は、清水、摩耶ペアの全勝で幕を下ろした。昼食を採り終え、今は各々、海を満喫している。

水鉄砲を構えた駆逐艦娘たちが、白兵戦さながらに大型艦娘を襲撃する。それに対して、潜水して背後に忍び寄った足柄が、長波と満潮を同時に海の中に引きずり込む。気づいた霞が対応行動に入り、制圧。

次の瞬間、準備が完了した大和の特大水鉄砲が火を噴いた。猛烈な勢いで、反撃の砲火が駆逐艦娘に放たれる。

「すごい威力だ・・・」

いつぞやと同じく、棧橋から釣り糸を垂らす榊原は、その様子を眺めて苦笑した。

負けじと、駆逐艦娘も反撃している。それまで傍観していた木曾と清水も巻き込んで、最早大乱闘の様相を呈している。

その時、クイクイツと釣り糸が引かれる。引きの大きさからして、結構な大物がかかった可能性が高い。

だが、結局魚はかかっていなかった。釣り糸を引いたのは魚ではなく、海中からこちらを見つめる曙だったのだ。

「残念ね、クソ提督。魚じゃなくて、あたしよ」

「・・・ある意味、大物が釣れた、か」

棧橋のへりに掴まった曙が、よじ登ろうとする。竿を置いて、登ってくるのを助ける。

「ちよつ、どこに手入れてんのよっ!」

「不可抗力だ!」

腋に手を入れて体を引き上げようとしただけである。他意はない。というか、似たようなやり取りを、少し前にしなかっただろうか。

引き上げられた曙は、頬を真っ赤に染めて、明後日の方を向いてし

まう。

「・・・座つたら、どうだ」

「・・・そうするわ」

榊原の呼びかけに、曙はゆつくりと腰を下ろした。彼女が隣に座つたのを確かめて、榊原は再び竿を握る。垂らした釣り糸の先を、またぼんやりと眺めた。

座つた曙も、ピチャピチャと足で遊んでいた。

「何か釣れた？」

「小魚が何匹か。食べるわけでもないし、そのままリリースしてるけど。結構、カラフルな奴がかかるぞ」

「ふーん」

そう言いながら、棧橋の下側を覗き込む。よくよく目を凝らせば、太陽光が浸透する海面下に、悠々と泳ぐ魚たちが見えるはずだ。

「で、クソ提督は泳がないわけ？」

「海に入ったら、あの戦いに巻き込まれるだろ？」

砂浜で繰り広げられる肉弾戦を目線だけで指し示す。最早水鉄砲すら投げ捨てて、艦娘たちが戯れている。キャツキャウフフ、そんな生易しいものでないことは、榊原でなくてもわかるはずだ。

「ああ・・・なるほど」

曙も納得してくれたらしい。

「それで？また黄昏てんの？」

「黄昏時じゃないから、黄昏てるわけじゃないぞ」

「はいはい、その屁理屈はもういいから」

曙に何かを誤魔化すのはもう諦めている。

「曙は、このパラオ泊地のこと、好きか？」

「はあ？何よ、急に」

榊原の質問の意味を掴みかねたのか、曙が怪訝な声を出す。しばらく考えるような間があった後、こう答えた。

「クソ提督の『好き』がどういう意味合いかわからないけど。あたしは、好きよ。騒がしいし、皆勝手だし、提督は『クソ』に『クズ』だけ。・・・楽しい場所だと思う。だから、好き」

「そうか。それなら、よかった」

釣り糸の先、海面に漂う浮きは、特に動く様子はない。ただただ、静かに波間で揺れている。

「上から通達が来ていてな。『NT作戦』後、無事トラック諸島の解放に成功したら、俺たちがそのまま、拠点を移すことになるらしい」

「つまり、作戦が成功したら、ここはお別れってこと？」

「そういうことになる」

「ふーん。そう」

寂しくなるわね。呟くような短い言葉に、曙の心の内が漏れているようだった。

『パラオ泊地艦隊』として戦うのは、これが最後だ」

たった、半年ほど。それだけの期間でしかなかったはずなのに。

この泊地で、多くの経験をした。

提督になって。

戦闘のイロハから、指揮官としての心構えまで、曙をはじめとしたパラオ泊地の面々に教わった。

共に戦場に出て、深海棲艦と戦った。

多くの疑問もまた生まれた。

これほどに充実して、中身の詰まった半年間は、先にも後にも、これだけに違いない。

そして。

隣の曙を窺う。

榊原の隣には、いつも彼女がいてくれた。最も付き合いの長い艦娘。厳しくも優しい、パラオ泊地の秘書艦。

「・・・ねえ」

そんな曙が、榊原を呼ぶ。

「やつぱり、泳ぐわよ。この綺麗な海を楽しまないなんて、もったいないでしょ、クソ提督」

言うや否や、曙は栈橋から飛び込む。上がる水飛沫。一旦潜航した後、海面から顔を上げた曙が、榊原を手招く。

「ほら、クソ提督。泳ぐわよ」

前髪を滴る雫。波間を漂う艶やかな髪。南国の太陽をその奥に宿す、群青の瞳。

「ああ、そうするか」

釣り針を引き上げ、テキパキと片付ける。上に羽織っているパーカーを脱ぎ去った。そうして、曙に倣い、栈橋から飛び込む。

瞬間、世界から音が消える。飛び込んだ先、視界一杯に広がる景色は、揺らめく光線に照らされて、幻想的な美しさを醸し出す。その中を、優雅に泳ぐ魚たちが、随分と親しげな存在に思えた。

海面に顔を出す。目の前には、いつになく柔らかな笑みを浮かべた、曙がいた。

「綺麗でしょ」

「・・・ああ」

綺麗だ。そこに込めてしまったもう一つの意味は、彼女に気づかれなかったようだ。

パラオの海を、全身に感じる。海を掻き分け、波間に漂い、仲間たちとはしやぎまわる。

パラオ最後の休日は、たくさんの笑顔と、幸せと共にあった。

第二次トラック沖海戦 本土防衛艦隊

日本海軍の中にある二つの艦隊。旧海上自衛隊からの流れを直接受け継ぐ本土防衛艦隊横須賀司令部には、*「招かれざる」*客がいた。外は雨だ。司令部庁舎（横須賀鎮守府からほど近い場所に存在）内の作戦室にも、窓を打つ雨粒の音が木霊している。雲が空を覆っているためか、電灯が点いていてもどこか薄暗い印象を受けた。

できることなら、この息苦しい空間から早々に抜け出したい。そう願いながらも、それが叶わぬ夢であることは、承知していた。溜め息が漏れそうになるのを押し込め、伊藤整次少将は意識を作戦室内へと引き戻す。そこには、彼を含めて、四人の人物がいた。

作戦室中央、机型の電子パネルを挟むようにして、二組の制服が立っている。

伊藤側に立つのは、彼の他に豊田武富中将。海上自衛隊時代から変わらぬ制服を身に着ける彼らは、日本海軍の中でも、絶滅危惧種となってしまう現代艦船を集めた艦隊、本土防衛艦隊の人間だ。

対して、向かい側に立つのは、秋山中将と吹石少佐。どこか旧帝国海軍を彷彿とさせる制服を身にまとう二人は、現在の日本海軍主力、連合艦隊の人間だ。

同じ海軍内に存在する、二つの艦隊。その間の確執を示すかのよう
に、無機質な電子パネルの上には、冷たい沈黙が横たわっていた。

最初に静寂を破ったのは、豊田だった。咳払いを一つ挟むと、温和な彼には珍しく、険しい表情で話します。

「連合艦隊からの要請は、承服しかねます」

たった今、二人に提示されたのは、すでに発動が一週間後に迫った『NT作戦』に関する、連合艦隊からの要請だった。

『IF作戦』において、本土防衛艦隊は連合艦隊への積極的協力を渋った。

深海棲艦の登場によって減る一方だった現代艦船は、さらに連合艦

隊の編成と予算捻出のために、新造がままならない状態であった。完成間近だった「はぐろ」（八二〇〇トン型護衛艦）だけは何とか就役に漕ぎつけたが、それ以降の新造艦調達は無い。かつては四個護衛隊群を有していた彼らも、今や横須賀と舞鶴に一個護衛隊群ずつがあるのみである。まさに絶滅危惧種なのだ。

これ以上、現代艦船を減らすわけにはいかない。そういう判断があったことは、間違いなかった。

しかし、そうも言っていられなくなってきたのだ。日本海軍内における連合艦隊の発言力が増せば、それだけ本土防衛艦隊の肩身は狭くなる。上のお偉方は、それがどうにも我慢ならなかったようだ。

そこへ飛び込んできたのが、『NT作戦』である。トラック諸島の解放という、太平洋戦線において重大な意味を持つこの作戦に、本土防衛艦隊も一枚噛もうと画策した。

その結果が、伊藤率いる第一護衛隊群の作戦参加である。

深海棲艦を撃沈することはできない現代艦船だが、戦い方を選べばその戦力に対抗できる。そのことは、『IF作戦』における第一潜水隊の活躍が如実に示していた。すなわち、護衛隊群はその本来の目的である、「空母機動部隊を空と海中の脅威から守る」ことだけに徹すればよいのだ。

この企みを、上はあの手この手を使って、何とか『NT作戦』にねじ込んだらしい。

だが、苦勞の末に混入された異物を、目の前の二人はいともあっさり、取り去ろうとしていた。

本案件について預かる、横須賀護衛隊司令の豊田中将が険しい表情になるのも、頷けるといふものだ。

「皆さんが作戦に参加することの意義は、十分に理解しているつもりです。現代艦船の高い対空戦闘能力があれば、軽減される負担もあるでしょう」

話し始めたのは、秋山ではなく吹石だった。まだ二十歳にも達していないのではという少女は、それでも凜とした声で淡々と話す。

「ですが、実際にやるとなると、非常に困難なことであることは、お二

人も理解されているわけではありませんか？」

吹石の指摘に、伊藤も豊田も沈黙をもつて答える。吹石の話は続いた。

「第一に、敵味方識別の問題があります。ご存知の通り、BOBに関する装備には、人類が使用する機器の据え付けが一切できません。それは航空機にしても同じです。拒絶反応を起こしてしまう。ですから、連合艦隊の航空機には、IFFが搭載されていません」

それはつまり、護衛隊群が放ったミサイルが、誤って味方機を撃墜してしまう可能性があるということだ。というよりも、そもそもレーダー上で、敵味方の識別ができない。飛んでいるものは、全て「味方ではない」航空機として表示されることになる。

「それでは、対空戦闘中は、そちらが航空機を飛ばさなければよいのでは？対空戦闘については、護衛艦の方が圧倒的に能力が高い。こちらに任せて頂いて結構です」

それが苦し紛れの指摘に過ぎないことは、吹石にはお見通しであったようだ。

「そこで、第二の問題が発生します。確かに、護衛艦の対空能力は、BOBよりも高いでしょう。ですがそれは、『一発の弾で一機を撃墜する能力』が高いということでしょうかありません。深海棲艦の機動部隊は、一度に百機を超える攻撃隊を放ってきます。その全てを撃墜する能力を、護衛艦隊は有していないでしょう？最終的には、味方戦闘機による迎撃が不可欠になります。つまりどうあっても、私たちは護衛艦隊による対空戦闘中であろうと、こちらの航空機を飛ばさなくてはなりません」

——元々、無理のあるねじ込みだったのだ。

この作戦が、所詮は机上の空論でしかないことは、伊藤も豊田もわかっていた。

「・・・護衛隊群は、深海棲艦との機動部隊戦において、期待したほどの能力を発揮できないと？」

顔にこそ出ていないが、豊田がどれほどに悔しいかを、伊藤は感じ取った。守るべきものすら守れない。それは、護衛艦乗りにとって、

この上ない屈辱と口惜しさなのだ。

豊田の問いかけには答えず、秋山が吹石の後を引き継ぐ。

「第一護衛隊群には、このまま横須賀に残り、従来通り本土防衛の任務についていただきたい。残念ながら、今現在においても、深海棲艦のみが我々の敵であるとは言いい切れませんから」

秋山の言わんとしていることは、伊藤にもわかる。連合艦隊の最前線は太平洋かもしれないが、本土防衛艦隊の最前線はいつでも日本海だ。万々々々が一にも、そこから弾道ミサイルが飛んでくるようなことがあれば、これを迎撃しなければならない。そのためには、現代艦船が必要だ。

『NT作戦』には、『IF作戦』時と同じく、呉の潜水艦隊にのみ、参加していただきます」

それでよろしいですね。そう言うような視線に、二人は静かに頷くしかなかった。

「本土防衛艦隊の上層部には、東郷大将から話をつける予定です。その際に、お二人からも口添えをお願いしたい」

——これが、発言力の差か。

日本海軍内にできてしまった、歴然とした力の差に、伊藤はまた溜め息を吐きそうになった。

「・・・わかりました。リスクに見合う効果が上げられないと、私たちからも上申しましょう。それでいいかな、伊藤君」

「はい。異存はありません」

「では、そのようにお問い合わせします」

そう言い残して、二人の部外者が作戦室を後にしていく。退室時の一礼が妙に華麗で、癩に障る。

作戦室に取り残された二人は、ほぼ同時に緊張感の緩和に由来する溜め息を吐き出した。

「横須賀のママシ夫婦とは、よく言ったものですね」

横須賀護衛隊内で秋山と吹石を揶揄する言葉を思い出す。

「・・・だが、これでよかったのかもしれない」

電子パネルの上に置かれた制帽を指で撫ぜながら、豊田が言った。

「意地だの権力だの、そんな争いに部下たちの命をかけられるのは、いい気がしない。私たちは本土防衛艦隊だ。最前線で戦うだけが海軍じゃない。連合艦隊にできないことを、私たちはやっている」

現代艦船は、深海棲艦に苦杯を舐めさせられ続けてきた。それでもなお、乗組員たちは腐ることなく、日々己の技量を磨いている。いつか来てしまうかもしれないその日が、永遠に來ないことを祈りながら、研鑽を積んでいる。

それは、並大抵の覚悟でできることではない。

「そういうわけだ、伊藤君。第一護衛隊群は、これまで通り、定期の哨戒と訓練に勤めてくれ」

「わかりました」

伊藤は制帽を取り、作戦室を後にしようとする。第一護衛隊群の旗艦であり、自らが乗艦する『はぐろ』に、このまま戻るつもりだ。

「・・・なあ、伊藤君」

その背中から、豊田が引き止めるように声をかけた。振り返ると、彼は電子パネルの上に置かれた、連合艦隊からの要請書を見つめて、何かを考え込むような仕種をしている。

「どうして、今だったんだらうな。もっと前に、要請をしてもよかったはずだ」

本土防衛艦隊上層部が、『NT作戦』に第一護衛隊群の参加をねじ込んだのは、少なくとも三週間は前のことだ。その後、連合艦隊側からは、特に何も言ってこなかった。それなのに、作戦開始の一週間前になって、突如第一護衛隊群の参加を拒否してきたのだ。

要請をするのならば、もっと早いタイミングがあったはずだ。

「戯言と思って聞いてくれ。所詮は、私の勝手な憶測にすぎない」
そう前置いて、豊田は伊藤の方を見た。

「敵味方識別について、連合艦隊は何らかの解決策を、すでに見出していたんじゃないか？」

「・・・それではなぜ、我々ではなく潜水艦隊の作戦参加を要請してきたのです？」

「どうしても、第一護衛隊群を横須賀に残しておくべき理由があった。

そうとしか考えられない。作戦開始一週間前に要請してきたのは、その情報が入って来たのがつい最近だったからか、あるいは私たちに何かを探らせる時間を与えないためか。ともかく、彼らは敵味方識別の解決策を隠し、私たちに要請だけを突きつけた。発言力の違いにものを言わせてね」

一応筋は通っている。それはつまり、伊藤たちにとって、最悪の事態が起るかもしれないということだ。

「・・・穿ちすぎでは？」

「そうかもしれない。私の悪い癖だ」

苦笑いを浮かべる豊田の表情は、普段通りに温和なものへと戻っていた。

「引き止めてすまなかった。今のは、やはり戯言ということで、忘れてくれ」

「わかりました。それでは、失礼します」

一礼をして、今度こそ作戦室を後にする。廊下の突き当り、階段とエレベーターを見比べて、階段を選ぶ。艦船勤務のせいで身についた習慣だ。エレベーターというのは、どうも落ち着かない。

雨脚は先ほどよりも強くなっていた。雨具を着込み、そのまま「はぐる」へと駆けていく。舷門に繋がるラツタルの前で足を止め、その艦影を見上げた。「こんごう」型、「あたご」型と踏襲されてきた、大きな艦橋が、そこにはそびえている。

——君の力を、借りることになるかもしれない。

BOBと同じように、この艦にも宿っているかもしれない船魂に呼びかける。その時が来ないことを、ただ祈るしかなかった。

「はぐる」は、深海棲艦との戦いが始まってから、この海に生を受けた。生涯戦果〇。実戦経験なしが誇りだった護衛艦の中で、この「はぐる」だけは、静かな海を知らない。

いや、この海が静かだったことなど、一度もなかったかもしれない。

灰色に塗られた艦体をバシバシと打つ雨と、水平線を覆い隠す霧が、先に待ち受ける「何か」を予感させるようだった。

艦隊集結

パラオ泊地に、いつぞやと同じ賑やかさがやって来た。

入港を告げる汽笛が鳴り響く。野太い音は、ようやく水平線のこちら側にやって来たばかりの艦影からも、よく届く。腹を震わせるようなその音に、懐かしさすら感じた。

『NT作戦』が、間もなく発動される。その参加艦艇のうち、第一陣が、今日入港するのだ。そして案の定、その第一陣を率いていたのは、榊原の知る人物であった。

十数隻の艦隊において、最も目を引くのは、二隻の巨艦だ。どちらも、連装砲塔を四基備える、スラリと絞られた艦体が印象的だった。一目で、日本海軍最速を誇る高速戦艦、〃金剛〃型の二隻だとわかった。そして、〃金剛〃型二隻を中心とした高速水上部隊を率いる提督は、一人しかない。

停泊作業が終わり、しばらくすると、独特の音を響かせながら内火艇が近づいてきた。その艇首に立つのは、二人の女性。勝気な印象の第一種軍装と、元気に満ち溢れた巫女服だ。

「お久しぶり・・・と言うほどでもないかな、榊原中佐」

内火艇から降りた第一陣の艦娘たちと敬礼を交わし終わるなり、角田は気さくに話しかけてきた。

「お久しぶりです。お怪我は、もう大丈夫なのですか？」

「おかげさまでね。まあ、元々元気だけが取り柄だからさ」

そう言つて、角田は先日の戦闘で骨折した左腕を叩いて見せる。驚異的な回復力だ。

「その、唯一の取り柄を最大限に活かすためにも、もう少し自分の体を大切にしてくださいよ」

後ろに控える比叡は不満げだ。その目が、本気で心配していることを窺わせる。

「角田テートクと一緒にだと、何だかもう一人妹ができた気分です」

そう言つて、金剛も比叡を援護する。サイパン沖での角田を知るだけに、二人とも思うところがあるのだろう。

だが、そんなことをいちいち意に介するような角田でないことは、その場の誰もがわかっていた。言っても無駄なことは承知だが、それでも言わずにいられないこともある。

「大丈夫だって、あんな無茶はもう二度としないから」

「・・・司令の『大丈夫』ほど信頼できない言葉もないんですけど」

半目で角田を見つめる比叡が、盛大に溜め息を吐いた。相変わらずの苦労人属性である。

「塚原大佐の心配もわかります」

「えー、そこで塚原の名前を出すのはズルイよ、比叡ちゃん」

サイパン沖の無茶の後、角田が「常識をわきまえている」同期の提督にこっぴどく叱られたことは、榊原も聞いていた。塚原の心配には、少なからず角田への愛情が含まれていることも。

角田にとつて、文字通り塚原が最後のブレーキなのだ。

「ほらほら、それより早く寮に行こうよ」

形勢不利と見たか、角田が比叡の背中を押す。立ち話もなんだ。積もる諸々は、食事の時にでもすればいい。

食堂部が艦娘と提督をそれぞれ寮へと案内していく。その背中を目で追いながら、榊原は参加艦艇第一陣の編成を思い返していた。

角田座上の「比叡」を旗艦とする第一陣の編成は以下の通り。

戦艦・・・「比叡」、
「金剛」

空母・・・「瑞鳳」

重巡洋艦・・・「高雄」、
「愛宕」、
「鳥海」

軽巡洋艦・・・「鬼怒」、
「川内」

駆逐艦・・・「白雪」、
「初雪」、
「深雪」、
「叢雲」、
「磯波」

これらのBOBは、「瑞鳳」を除いて、パラオ泊地艦隊とは別の突入艦隊として、トラック環礁への直接攻撃を担当する部隊だ。

『NT作戦』参加艦艇は、全てで四陣に分けられて、このパラオにやってくる予定だ。第二陣は早くも五日後には入港予定で、主力となる戦艦や空母部隊を伴うことになっていた。

総参加艦艇数は六十隻を超える。文字通り、過去最大の作戦規模であり、それだけトラックの守りが固いということでもあった。

再びパラオに吹き付け始めた、戦いの風。生暖かいその空気を敏感に感じ取って、榊原は踵を返す。今はとにかく、自分の職務を全力で果たす他なかった。

到着したての角田たちを労う意味も込めて、今夜の夕食はいつもより贅沢だった。とはいっても、おかずが一品増えた程度なのだが。それでもやっぱり、嬉しいものである。

トレーに並んだ今晚の夕食に、腹の虫が鳴きそうになるのを感じつつ、榊原は食堂に席を探す。いつもより机の数が増えた食堂は、あちこちで艦娘の声が出た。

「榊原中佐」

喧噪の中でもよく通る声に、そちらを振り向く。見れば、角田が満面の笑みで手招きをしていた。一緒に食べないか、ということだろう。

「失礼します」

角田の前に席を取り、腰かける。彼女の腹心たる比叡は、金剛と大和、祥鳳と同じ席に座っていて、楽しげに談笑していた。その様子を、角田が微笑ましげに見つめている。

「いいよねえ、ああいうの」

何のけなしに呟くその頬が、ますます緩んだ。

「女の子同士が仲良くしてるのって、微笑ましいねえ」

発言がおっさんクサイですよ、とはさすがに言えず、榊原はその台詞を飲み込んだ。こうなると、同意の首肯を返すしかない。まあ、実際非常に微笑ましい光景ではあるのだが。

「ま、それは置いといてさ。せっかくの機会だし、久々にゆっくり話そうと思ってるね」

箸を進めるように言いながら、角田が話し始める。

「もう、随分と『提督』が板についてきたみたいだね」

「いえ、そんなことはありません。まだまだ未熟で……曙には、叱られっぱなしです」

「あはは、相変わらず謙遜だねえ。そんなこと言ったら、僕だっていつ

つも、比叡ちゃんや塚原に怒られてばっかりだよ」

角田が苦笑いを浮かべた。

「そういうことじゃなくてさ。艦娘と共にあり、艦娘を導く者としての覚悟みたいなのが、決まったみたいだね」

ホカホカと湯気を上げる白米を口に運びながらの、軽い口調だ。それでも、確かな重みと、それに反して湧かない実感と共に、榊原の手のひらに圧しかかる。

「わかりません。でも、もつと自分を信じてみたいと思います」

「うんうん、そうだね。それがいいよ」

大げさに頷いた角田は、ニコニコと上機嫌な様子でそう言った。

「話は、全く違うのですが」

魚の煮つけを箸でほぐしながら、角田の方を窺う。目線で先を促す彼女に、榊原はさらに続けた。

「横須賀の——本土の様子は、どうなのですか？こちらにいますと、あまりそういったことに触れる機会がないので」

「ああ、なるほどね」

得心した様子の角田は、しばらく考えるようにして、口を開く。

「そうだなあ。やっぱり、一番大きい動きは、本土防衛艦隊とのことかな」

「何かあったのですか？」

「今回の作戦に、横須賀の第一護衛隊群が参加する予定だったのは、知ってるよね？」

「はい。参加取りやめの通知は、つい五日前に来ました」

第一護衛隊群は、横須賀を母港とする本土防衛艦隊所属の艦隊だ。もつとも、旧自衛隊時代の第一護衛隊群とは、大きく異なる組織である。

横須賀に所属する現代艦艇は、まとめて横須賀護衛隊群と呼称される。この内、水上部隊（ヘリ空母を除く）を集めたものが、第一護衛隊群だ。その編成は、自衛隊時代の定数八隻を満たしておらず、現在は五隻の艦隊だ。

理由は二つ。第一に、そもそも残存現代艦艇が少ないこと。第二

に、その残存現代艦艇の配備は、舞鶴が優先されていること。現に、舞鶴の第四護衛隊群は、一応定数の八隻を満たしている。

そんな第一護衛隊群には、『NT作戦』において、BOB艦隊を空と海中の敵から守る役目が与えられる予定だった。それが、作戦開始直前になって、突如中止されたのだ。

理由の説明は受けていないが、おそらく敵味方識別の問題が解決されなかったのだらうと、榊原は考えている。

「その参加取りやめなんだけどね。どうも、東郷長官を動かしたのは、秋山中将と吹雪みたいなんだ」

「秋山中将と、吹雪さんが？」

横須賀のみならず、日本海軍の中心人物とでも言うべき二人の名前の登場に、榊原は訝る。これは何か、裏があるかもしれない。

「航空機の敵味方識別が難しい、というのが表向きの理由だけど。何ていうか、あんまり釈然としないんだよねえ」

角田も首を傾げる。考え込むような表情のまま、漬け物に箸を伸ばした。やがて、その肩を大袈裟に疎める。

「まあ、その辺り詳しく聞く前に、こうして作戦が始まっちゃったわけだけどさ」

「言い方は悪いですけど。何だか、それ以上の追求を、逃れようとしているみたいですね」

「そうそう。そんな感じが拭えないんだよね。確かめる手段が無いけど」

残念ながら、角田の言う通りだ。すでに作戦は発動段階を迎え、二人はパラオ泊地にいる。最早、その真意を確かめる術はなかった。

「塚原にも一応訊いてみるつもりだけど。あいつも、答えを得るまでは行ってないだらうしなあ」

食べ終わった角田は、御馳走様と手を合わせる。米粒一つ残さない、綺麗な食べっぷりに、きつと釣掛も喜ぶはずだ。

「結局、僕たちは僕たちにできることをやるしかない、ってことかな」

どこか諦観を含みながらも、角田ははつきりと言いつ切る。その割り切りは、ぜひ見習いたいところである。

「先にお風呂に入ってきていいかな？この話の続きは、その後にも」
ウインクを決めて、角田は席を立った。話の続きは、一息入れてから、ということだろう。

榊原も本格的に箸を進める。海軍での生活に慣れるにつれて、食事のスピードは次第に上がっていた。

ものの十分とせず、全てのおかずを空にした。手を合わせて、改めて周りを見回す。すでに食べ終わった艦娘が多く、食堂は食後の歓談といった雰囲気だ。重巡洋艦娘たちは、軽く酒も交えて談笑していた。作戦発動前とは思えない、のどかな空気が満ちている。

——今から気を張っても、仕方がないか。

所詮は人間。緊張感を持ち続けることなどできない。それは体調を崩すことに繋がる。

トレーを持って立ち上がる。角田に倣って、風呂で一息つくとしよう。今日は雲も少なかったから、露天風呂からは綺麗な星空が見えるはずだ。

この時。榊原は大切なことを失念していた。それは、角田が無類の酒好きであり、酒豪と称するに相応しい女傑であったことだ。

風呂上がりの席には、それが当然であるかのように、一升瓶が置かれていた。今宵、角田を止める者はどこにもなく、榊原は自らの運命を悟ったのであった。

機動部隊ノ主夕子

『NT作戦』参加各艦が集合したのは、第一陣の到着から二週間が経つてからだった。

横須賀、呉、佐世保、各地から集まった機動部隊、火力部隊、水雷戦隊が、パラオ泊地に所狭しと並んでいる。巨大な戦艦、空母から小柄な駆逐艦まで、鈍色の艦艙が錨を下ろす様は、壯観の一言に尽きた。そんなパラオ泊地、庁舎内の廊下を歩く塚原は、背後からズカズカと近づいてくる大きな足音に、気づかないふりをした。その足音の音が、鬼の形相でこちらを追いかけていることが、ありありとわかったからだ。

「貴様、どういふつもりだ！」

案の定、大気を震わせるような怒号が襲ってきた。隠すつもりが微塵もない怒気に、塚原はむしろ冷静になることができる。表情を変えずに、後ろを振り向いた。

肩を怒らせながら廊下をこちらにやって来るのは、大佐の階級をつけた大柄な男だ。所属する鎮守府こそ違うが、同期ということもあり、よく知った仲である。

「なんだ、南雲。そんなに大きな声を出すな」

「何だもへつたくれもあるか！」

塚原の目の前でようやく足を止めた将校——南雲忠治大佐は、こちらの胸倉を掴まんばかりの勢いで問い詰める。

「まあまあ、先輩。落ち着いてくださいよ。仮にも、今の塚原さんは、上官なんですから」

そう言って南雲をなだめにかかる声は、同じく大佐の徽章をつける将校のものだ。彼——井上成浩大佐の言う通り、今の塚原は、階級が上がって少将となっていた。

井上の冷静な声は、どこかこの状況を楽しんでいるようだった。

「そんなものは知らん！戦場ならいざ知らず、陸の上では俺貴様だ！遠慮などせん！」

「・・・やけに荒ぶってるな、今日は」

元々、感情を表に出す人物だった。それでも今日は、いつになく感情的だ。その理由に、察しがつかない塚原ではない。

南雲がここまでになるような爆弾を投下したのは、他でもない塚原であつたのだから。

「話を逸らすな！あの作戦は何だと聞いている！」

南雲はなおも問い質す。

今の今まで、パラオ泊地の作戦室では、『NT作戦』に参加する提督たちのブリーフィングが行われていた。そこでは、各艦隊の具体的な編成と、指揮をする提督、作戦の大まかな運びが話し合われた。

今回の『NT作戦』は、大きく五つの部隊によつて実施される。各艦隊の編成は以下の通り。

○第一機動艦隊

塚原二郎少将

・第一航空艦隊

塚原二郎少将直率

“赤城”、“加賀”、“千歳”、“千代田”、“飛鷹”、“五十鈴

”

・第六直衛艦隊

近藤信忠中佐

“利根”、“筑摩”、“秋月”、“浦風”、“谷風”、“浜風”

○第二機動艦隊

南雲忠治大佐

・第二航空艦隊

南雲忠治大佐直率

“蒼龍”、“飛龍”、“翔鶴”、“瑞鶴”、“瑞鳳”、“長良”

・第八直衛艦隊

高須三郎中佐

“最上”、“三隈”、“照月”、“野分”、“舞風”、“天津風”

○第三機動艦隊

井上成浩大佐

・第三航空艦隊

井上成浩大佐直率

“大鳳”、“雲龍”、“天城”、“葛城”、“龍驤”、“大淀”

・第七直衛艦隊

速水淳少佐

“鈴谷”、“熊野”、“初月”、“嵐”、“萩風”、“時津風”

○第一挺身艦隊

栗田健宏少将

・第一制圧艦隊

栗田健宏少将直率

“武蔵”、“大和”、“長門”、“陸奥”

・第三制圧艦隊

清水隆之少佐

“摩耶”、“足柄”、“祥鳳”、“卯月”、“磯風”

・第五水雷艦隊

榊原広人中佐

“木曾”、“曙”、“満潮”、“霞”、“陽炎”、“長波”

○第二挺身艦隊

角田治美大佐

・第二制圧艦隊

角田治美大佐直率

“金剛”、“比叡”、“高雄”、“愛宕”、“鳥海”、“鬼怒”

・第四水雷艦隊

橋本慎一郎中佐

“川内”、“白雪”、“初雪”、“深雪”、“叢雲”、“磯波”

基本的な方針としては、三個機動部隊がトラック環礁周辺に展開している敵機動部隊、及び基地航空隊を相手取り、これを漸滅。可能であれば、環礁から引き剥がす。これが一日目。

敵戦力を漸減したところで、第一挺身艦隊が北東水道から、第二挺身艦隊が南水道から環礁内への突入を目指す。前者は敵水上部隊の誘因と撃破を目的とし、後者は敵基地への艦砲射撃と残敵相当を担当する。これが二日目。

環礁周辺の深海棲艦が排除されたことを確認した時点で、同地に駐留する陸軍部隊と警備艦隊を派遣することになる。

これが、『NT作戦』の概要であった。規模こそ段違いだだが、基本的なところはこれまでの解放作戦と変わらない。深海棲艦は海上戦力しか有していないため、海戦の勝利がそのまま解放作戦の成功に直結する。

そこが問題だった。トラック環礁の深海棲艦は、これまでにない強力な部隊だ。勝利を得ると一口に言っても、そう簡単なことではない。

連合艦隊機動部隊の最先任として、塚原はあらゆる手を講じるつもりであった。

「この作戦が持つ重要性は理解している。深海棲艦が強大な敵であることも知っている。だがな！」

南雲はなお声を張る。

「あの配置はなんだ!？」

——やはり、そこか。

南雲は短気で、暑苦しいほどの男だが、それは彼の優しさゆえだと知っている。今回も、彼は優しすぎた。

「なんだ、とは?」

「貴様は、第一機動艦隊を囿にするつもりか!?! 全ての攻撃を、一身に受けるつもりか!?!」

三個機動部隊のうち、最もトラック泊地に近い位置まで接近するのは、他でもない、塚原直率の第一機動艦隊——一機艦だった。

表向き、その理由は第一挺身艦隊——一挺艦の上空援護も兼ねるためとなっている。だが、その結果一機艦を襲うものことなど、素人でもわかる。

前に出れば、それだけ敵機動部隊にも見つかりやすくなる。そして見つかってしまえば、一機艦が敵機の集中攻撃を受けることなど目に見えていた。

だが、その間隙をついて、他の二個機動部隊が反撃できる。自らの身をもって、味方に活路を開く。それを囿と呼ばずして何というの

か。

それでも、塚原は揺るがない。

「南雲、トラックの敵機動部隊は何群確認されている?」

「・・・全部で三つ。奴らのセオリー通り、一つの機動部隊は、正規空母二隻に軽空母三隻で構成されている。計十五隻、こちらとほぼ互角だ」

「いや、向こうの方が優勢だ」

「そうだろうか?言外に込めた意味に、南雲も気づいたようだった。」

「陸上基地のことを言っているのか?」

「そうだ」

「あれは大型の陸上機を配備してだろうか。確かに戦闘機はいるかもしれないが、少なくとも機動部隊に直接損害を与えることはできない」

大型で鈍重な陸上機は、そもそも軍艦を攻撃するのに向いていない。攻撃を当てようとして高度を落とせば、戦闘機や対空砲火の餌食になる。逆にそれらを回避して高度を上げようものなら、そもそも当たらなくなる。

洋上を進む軍艦を、撃破するには至らない。よしんば撃破しても、費用対効果が小さい。それが陸上機への評価だ。

だが、塚原は別の可能性を考えていた。

「基地航空隊の航空機が、必ずしも大型で鈍重な陸上機とは限らない」

「・・・何が言いたい」

「トラックの基地が完成してから、少なくとも三か月が経過している。それなのに、これまで空襲があったのはたった一回だ。その一回も、パラオ艦隊と第一二航空戦闘団によって迎撃され、失敗に終わっている」

深海棲艦が初めて実施した陸上機による空襲は、何ら被害を与えることはなかった。そしてその一回以降、深海棲艦は陸上機による空襲を実施していない。

「この状況を、お前ならどう考える」

「さあな。そんなことは、深海棲艦に訊かん限りわからんだろう」

「相変わらずですね、南雲先輩は」

やれやれ、とでも言いたげに井上が溜め息を吐いた。

「井上はどうだ」

「戦術を切り替えたとみるのが妥当でしょう。陸上機は有効な長槍となり得ますが、トラックからでは爆撃できる範囲が限られますし、拠点防衛には向きません。パラオの空襲は、多分に実験的要素が強かった。深海棲艦としては、陸上機がどの程度の威力を發揮できるのか知りたかったのでしようが、残念ながらその目論見は外れた。だとしたら、その戦術を転換し、トラックの防衛力強化を優先したとみるべきです」

それが意味するところは明白だ。

「トラックの航空基地は、大型の陸上機ではなく、従来の艦上機を転用した戦力を展開している可能性が高い。つまり、我々が相手取らなければいけないのは、機動部隊四つ分の航空戦力ということになりますね」

「・・・井上が言った通りだ」

改めて、塚原は南雲を見る。彼は相変わらず非難の視線を向けてくるが、その口を開くことはなかった。

数で勝る相手に、正面から戦いを挑んでも仕方がない。だから塚原は、一機艦を囷とする作戦案を考えた。普段よりも戦闘機を多く搭載する一機艦が敵機の攻撃を吸収し、残った二、三機艦は攻撃に集中する。目の前の敵を確実に叩く、航空戦の要諦を逆手に取った作戦だ。「他に、やりようがあるだろう」

絞り出すように、南雲が言う。そんな代案がないことは、彼自身が一番よくわかっているはずだ。

「これが、一番確実なやり方だ」

「それなら、俺の二機艦や井上の三機艦が務めてもいいはずだ。貴様と赤城を——機動部隊の要を、同時に失うわけにはいかない」

「だからこそだ。この役目を果たせるのは、最も経験の多い俺と赤城しかない。それに、この作戦の成否は、一機艦がどれだけ長い間、敵艦隊の攻撃を引き付けられるかにある。そう易々と、やられてやるつ

もりはない」

「・・・ああ、そうかよ」

とうとう南雲は、踵を返して、またズカズカと歩いて行ってしまおう、こちらを見向きもしない。

「生きて帰ってこなかったら、ぶん殴ってやる」

凄みのある声でそれだけ言うと、今度こそどこかへ行ってしまうた。

後に残された二人は、同時に息を吐き出す。その意味合いは、塚原と井上で少し違ったはずだ。

「・・・私も、この作戦が最善だと考えます。ですが、納得しているわけではありません。誰かの犠牲を前提とした作戦は、最早作戦ではないと、思っています」

「さつき言った通りだ。犠牲になるつもりはない。まだまだ、やりた
いことはあるしな」

「・・・わかりました。そういうことにおきます」

そう答えた井上は、律儀に一礼して、南雲の後を追う。大丈夫だ。彼らなら、必ずや機動部隊を勝利に導いてくれる。

自室に戻ろうかとも思ったが、足は自然と庁舎の外に向いた。風を浴びながら、塚原は他愛もない思案にふける。

——あいつは、どう思っただろうか。

ブリーフィングに出席していた提督の面々を思い返す。その席上には、横須賀高速水上部隊を率いる、破天荒極まりない同期の顔もあつた。

角田は、塚原の作戦案に何かを言うこともなく、ただジツと、海図台の上を見つめていた。角田には珍しいと、妙な違和感を覚えたことは事実だ。

大きくかぶりを振る。今考えても、詮無きことだ。

パラオの風に背を向け、塚原は庁舎に戻る。先ほどまで見つめていた海面、そこには空と海を支配する巨大な艦隊たちが、静かにその身を横たえていた。暮れ始めた太陽に照らされる横顔は、戦いを前にした覚悟と高揚に満ちているようであつた。

決戦の始まりは、もうそこまで迫っていた。

出撃ヲ前二

「提督！ほら、早く早く！」

午前の執務を終え、昼食までの一息を入れていた榊原と曙は、摩耶によつて半ば強引に手を引かれるまま、庁舎を出た。『パラオ泊地』の立て札がかかる庁舎の入り口前には、パラオ泊地所属艦娘がズラリと顔をそろえている。

天頂に近い太陽は、庁舎前を明るく照らしていた。雲一つない空が、今日も清々しい。

「どうしたんだ、一体？」

急に連れてこられて状況が掴めない榊原は、摩耶に尋ねる。いつも何かを思いつくのは、元氣澆刺なこの艦娘だ。

ニヤリ。摩耶が口角を吊り上げて、笑う。ろくでもないことを考えているのではと、榊原は身構えた。摩耶は、背中側から何かを取り出す。

「じゃーん！これだよ、これ」

摩耶が取り出したのは、四角い手のひらサイズの機器。銀色が陽光を浴びてきらめく。

「デジカメ・・・か？」

榊原と同じく、強制連行されてきたらしい清水が、その機器の名を呟く。それに対して、摩耶はどこか誇らしげに胸を反らした。

「おう。木曾と通販したんだ」

「通販？」

「『IF作戦』の時に、高雄に頼んだんだよ」

「通販」の意味を、木曾が解説する。ともかく、そういうわけで、摩耶の手元にデジカメがあるというわけか。

「で、だ。せっかくだから、みんなで写真撮ろうぜ」

そう言つて、摩耶はさらに笑みを大きくする。そういえば、艦隊全員で揃つて写真を撮ったことはなかった。

異論の声は出ない。

「どこで撮る？『パラオ泊地』の立て札があるし、玄関がいいかと思つ

ただけど」

「・・・海」

眩くような、それでいて断定的な言葉は、隣の曙から発せられたものだった。必然的に彼女に集まった視線に、頬を薄く紅色にして、そっぽを向く。

「埠頭から、海を映して、撮りたい」

曙はなおも提案を繰り返す。

この海が好きだと言っていた。この泊地が好きだと言っていた。パラオ泊地沖に広がる蒼い海に、やはり特別な思い入れがあるのだろう。

「曙に賛成だ」

榊原は口を開く。曙が、こちらを仰ぎ見る。その瞳に、薄くはにかんだ。

「じゃ、それで決まりだな」

摩耶が引率する形で、パラオ艦隊は埠頭を目指す。やはり榊原の隣を歩く曙が、チラリとこちらを窺った。色の薄い唇が動く。

「ありがとう」

それが何に対するお礼なのか、榊原にははつきりとはわからなかった。それでも、曙の声が、時折見せてくれる、優しく柔らかいものであったことに、微笑んだ。

「提督、曙！」

摩耶が呼ぶ声がした。二人同時に、そちらを向く。その時。

パシヤリ。シャッターが切られる、電子音がした。カメラを構えていた摩耶は、してやったりとばかりに歯を見せて笑う。

「ほー、よく映ってんな」

「な、何勝手に撮ってんのよ！」

「大丈夫だって、可愛く映ってたぞ。後でやるよ」

「べ、別にいらないわよ！っていうか、消しなさい！」

摩耶の手からカメラを奪うべく、曙が急加速、接近を試みる。が、背丈の差がものを言った。曙がどれだけ跳ねても、摩耶の手にあるカメラを奪うには至らない。

「心配すんな、誰にも見せないから」

そう言ったそばから、カメラを長波に渡してしまう。摩耶から格好の獲物を受け取った長波は、そのまま他の駆逐艦娘とともに、デジカメの画面を囲み込む。最早、曙に手出しのしようはなかった。

「ほら、皆並んで」

引率の先生のように、足柄が手を叩いて、駆逐艦娘たちを促す。カメラは再び摩耶の手に戻り、手早く広げられた三脚に据えられる。その間に、どこからか現れた妖精が、折りたたみ椅子を二つ、設置した。グツと親指を突き出して、そのまま、また風のように何処かへと去っていった。相変わらず、仕事の早い。

「提督二人は椅子な」

カメラの画面を覗き込み、アングルを確認する摩耶が、そう指示する。何だか、七五三や結婚の記念に撮る家族写真のようだと、榊原は思った。

目配せで、榊原が左、清水が右に座る。その周りを囲むように、艦娘たちが立った。榊原の隣には、曙が立つ。改めて写真を撮ることに緊張しているのか、背筋を伸ばすその顔はわずかに硬い。

「曙」

榊原の呼びかけに、ハツとして曙が振り向く。

パラオ生活が長いからか、わずかに日に焼けている健康的な肌。細い首筋と、同じように細い体つきは、ともすれば簡単に折れてしまいそうなほど。それでも、瞳の奥に覗く、その体を支える信念は、ひたすらに真っ直ぐだ。

長いまつ毛。勝気な目もと。小さな唇。海風に揺れる花飾りと、群青のきらめきを宿した髪。

「一番の笑顔で、頼むよ」

笑いかけながらの一言に、曙が一瞬固まる。息を吐いた彼女は、美しい波間で見せたあの笑顔を浮かべていた。

「善処するわ」

全員の並び順が決まり、摩耶が細かい指示を出して、画面の中に収める。満足のいく配置になったらしく、タイマーの設定に入った。

「いいかお前ら、ちやんと笑えよ。特に清水」

「・・・余計なお世話だ」

そういう清水は、いつも通りの仏頂面を作って見せた。その表情も、すぐに穏やかなものに変わる。

「それじゃ、いくぞ」

タイマーがスタートして、摩耶が後列に加わる。シャッターが近いことを示して、カメラのサインが点滅した。

パシヤリ。機械的な音と共に、シャッターが切られる。

海風そよぐパラオ泊地に、十四の笑顔が並んでいた。

◇

多くの艦娘と提督が詰めかけるパラオ泊地の食堂は、これ以上ない賑わいと、ほのかな緊張感に包まれていた。

明日は、いよいよ作戦発動の日だ。後方支援や上陸部隊用の輸送船、パラオ泊地警備の部隊を残して、全作戦参加艦艇が抜錨する。

「ごちそうさま」

食事を終えた曙は、手を合わせ、すぐに席を立つ。

「何よ、もう行くの?」

向かいに座る霞が、そっけなく立ち上がった曙に尋ねる。同じ机に座っていたパラオ泊地所属駆逐艦娘の面々も、こちらを見ていた。

「あたしが体調でも崩したら、洒落にならないでしょ。さっさと寝て、明日は早起きすんの」

作戦前はいつもやっていることだ。今回は特に、念入りに。

第一挺身艦隊——一挺身艦所属として出撃する曙。彼女含めた水雷戦隊はその全艦がパラオ泊地所属であり、指揮も榊原が取る。その部隊の旗艦に、榊原は曙を指名した。

——「曙」が、俺にとつては一番慣れ親しんだ艦だ。勝手知った艦の方が、指揮は取りやすい」

榊原はそう言った。

日本海軍には、指揮官先頭という伝統がある。すなわち、部隊で最も戦闘能力の高い艦に、指揮官が座上するということだ。この場合、榊原が乗るべきは、「木曾」ということになる。

もちろん、これにはそれなりの理由あつてのことだが、デメリットがないわけではない。高性能艦ということは、それだけ敵の砲火にさらされやすいことを意味している。そうなれば、司令部機能の維持は難しい。

大切なのは、いついかなる時でも、司令部機能を保ち続けること。そのためには、別に高性能艦に乗る必要はない。

榊原は、その命を預ける先に、曙を選んでくれたのだ。その想いに、応えたい。

食堂を後にした曙は、すぐに風呂に入る。予想通り、風呂場に人影はまばらだった。まだ多くの艦娘が、食堂で話し込んでいるのだ。

さつと体を洗い、浴槽に浸かる。ゆっくりと体を温めて、二十分後には風呂を出た。寝巻に着替え、髪を乾かしつつ、暖簾をくぐる。

風呂の前、休憩スペースには、よく冷えているであろうコーヒー牛乳が置かれていた。風呂上りにはたまらない一杯だが、大事を取って我慢する。

その時、辺りを——具体的には、士官用の風呂の方を窺ったのは、なぜだったのか。期待した人影はそこにはなく、ほっとするような、残念なような、何とも言えず小さく息を吐き、踵を返す。

部屋に戻る途中、窺った食堂は、まだ賑やかだった。チラリと覗いた中に、小さなグラスを片手に語り合う戦艦娘たちの姿が見えた。その中には、大和もいる。

大和の向かい、彼女に負けないぐらいに背の高い艦娘が座っていた。特徴的な髪形とツインテール。雰囲気からして豪快な彼女は、大和の妹であり、一挺艦の旗艦を務める武蔵であった。彼女の入港時、姉妹との再会を喜ぶ大和のはしやぎっぷりは凄かった。

ふっとした笑みが漏れるのを、自覚した。そのまま曙は、艦娘寮の自室へと戻る。乾いた髪を梳かしておかなければ。しばらく、まともな髪の手入れは望めない。駆逐艦内の風呂は、風呂ではなく個室の狭いシャワーだけである。海水でないことが唯一の救いか。

ドレッサーの鏡を覗き込み、ゆっくりと櫛を通していく。

思い出したのは、『IF作戦』前のことだった。あの時は、風呂場の

前で出くわした榊原に、髪を梳いてもらったっけか。

優しい手。曙の髪を、綺麗だと褒めてくれた。

その時のことを思い出し、頬が熱くなるのを感じる。ブンブンと頭を振り、強制的に熱を下げる。覗き込んだ鏡の中に、榊原の姿はない。

「・・・クソ提督」

どうしようもなく呟いて、曙はまた、髪の手入れに戻っていった。

全ての寝る支度を終えた後、今度は翌日の準備にかかる。日用品等はあらかじめいくらか積み込んでおいたが、今日まで使っていたために、明日持ち込む必要があるものも多い。

ドレッサーの棚や、本棚から、必要なものを選別し、まずは机の上に並べていく。軽く声に出しながら、指差し確認。きつと、遠足に行く前も、こうして確認作業を行うのだろう。

「・・・よう」

他に持つべきものがないことを確かめて、小さい旅行鞆に詰めていく。小物類はポーチにまとめた。

だが、これで終わりではない。

ドレッサーの前に置かれた、手紙を入れる封筒。それを開いて、中身を取り出す。昨日撮った写真だった。枚数は二枚。現像して、摩耶が手渡してくれたものだ。

「今度、写真立てを調達しないと」

そんなことを思っ、写真を封筒に戻し、ドレッサーの右横、上から二番目の引き出しを開ける。そこに、大切に、仕舞う。

代わりに。中に保管していたものを、曙は取り出した。小さな手帳。一年前に使っていたものだ。

すでに使い切った手帳を開く。中には文字が並ぶが、それらは今回、特に大事ではない。

中ほどのページ。何度もめくってきたからか。あるいは、挟んだもののせいで、そこだけわずかに隙間があるからか。いとも簡単に開けたそのページを、ただジツと、見つめる。

「・・・クソ提督」

手帳を閉じる。しばらく迷って、それも鞆の中に入れた。これで、

正真正銘、全ての準備が終わった。

布団に入り、電気を消す。半ば習慣的に、眠気がすぐやってくる。今日だけは、夢を見ないように祈って、曙は眠りに身を委ねた。

決戦前夜。夜はただただ静かに、パラオの海を覆っていく。その支配権が太陽に返された時、史上最大の戦いの幕が、切って落とされることと相成った。

全艦拔錨セヨ

出航を告げるサイレンが、朝焼けを望むパラオ泊地沖に響き渡った。甲高い音が、停泊していた各艦の舷側に当たり、反射する。十秒近い長音を聞き届けるや、泊地沖はにわか慌ただしくなった。

『NT作戦』発動。ついにこの日が来たのだ。これより、連合艦隊の総力を挙げた攻略作戦が展開される。

泊地に停泊していた全てのBOBが、すでに機関に火を入れていた。缶圧も十分。後は海底に下ろしている錨、あるいは浮きにつけた舳を引き上げるだけだ。

——いよいよ、始まったか。

第五水雷艦隊——五水艦の旗艦に定めた「曙」艦橋から、榊原は停泊する各艦の様子を見ていた。隣に立つ曙は、艤装との精神同調を終え、自らの拔錨する順番を待っている。

「四水艦（第四水雷艦隊）、出航する」

見張り員からの報告を、曙が淡々と読み上げる。まず出るのは、第二挺身艦隊——二挺身の直衛を務める、横須賀の水雷戦隊だ。全体的にほっそりとした印象の中小艦艇たちが、次々に錨を引き抜き、急速で動き始める。

それに続くのは、二挺身主力となる第二制圧艦隊——二制艦だ。旗艦となる「比叡」の艦橋には、角田が立っている。

彼女が率いる高速水上部隊が、その巨大な艦体をのっそりと動かし始めた。排水量がある分、その動きは緩慢で、それ故に言い知れぬ威厳に満ちていた。さながら、眠れる龍が、その身をゆっくりと起こし始めたかのようなだ。

「比叡」、
「金剛」と続く艦隊は、泊地の外に出て、陣形を組み始める。それを見計らったように、泊地の二か所で、新たな動きがあった。

「七直艦（第七直衛艦隊）、八直艦（第八直衛艦隊）、出航する」

『NT作戦』部隊主力となる、二機艦、三機艦。それぞれの護衛部隊が、パラオの海面を滑り出す。どちらも、対空能力を高めた大型軽巡を主

力としている。また、「秋月」型を筆頭として、所属する駆逐艦は全て対空戦闘に秀でている艦が厳選されている。

「・・・三機艦には、長官が座上されるんだったな」

護衛部隊が動きだしたことで、主力空母たちも出航する。その中に混じる、司令部座乗艦を、榊原は双眼鏡で確認した。

『NT作戦』もまた、『IF作戦』の時と同じように、連合艦隊司令部が直接指揮を執る。ただし、今回は最前線には立たない。

現在の連合艦隊旗艦は、「長門」から「武蔵」に移されていた。が、東郷の将旗は今、三機艦所属の「大淀」に翻っている。この旗艦変更は、武蔵の要請によるものであったらしい。

「武蔵」含めた一挺艦は、非常に激しい戦闘になることが予想されている。一挺艦が突入を目指す北東水道には、『IF作戦』時以上に強力な戦艦部隊がその防衛についていることが、事前偵察で確認されている。航空写真に写っていた四隻の内、二隻はただの深海棲艦ではない。「姫」と呼称される、強力な深海棲艦。ハワイ沖で確認された際、「戦艦棲姫」という呼称が定められた敵艦であった。おそらくは、この艦隊が、トラック環礁付近の深海棲艦を統括している。

それだけ強力な敵艦隊と戦うのだ。いかに堅牢な「武蔵」といっても、無事で済む保証はどこにもない。司令部機能を維持し続けるには、戦艦部隊ではなく、機動部隊のどれかに旗艦を移すのが好ましい。司令部座乗艦に選ばれた「大淀」は、艦体後部に大型の水上機格納庫を設置している。この内部を改装し、専用の司令部施設として使用していた。通信能力も申し分なく、旗艦を務めるのに十分な能力を有する。

「六直艦、出航する。続いて一航艦、出航する」

パラオ泊地内に残るBOBも少なくなってきた。錨を上げたのは、日本機動部隊の象徴とも言うべき巨艦だった。全長二百六十メートル、全幅三十一メートル、基準排水量三万六千五百トン。「大和」や「武蔵」に迫ろうかという「赤城」が、朝陽の中、その鋭い艦首でさざ波を切り裂いていった。

艦体に比して小さい左舷島型艦橋に目をやる。反射した窓の奥に、

人影を見出すことはできない。それでも、厳しい戦場へと赴く、二人のキーパーソンの覚悟のようなものが、滲み出ている気がした。

「……」(武運を)

ポツリと呟いて、気を引き締める。いよいよ、榊原たちの番だ。

『一挺艦、出航する。五水艦、抜錨せよ』

「武蔵」座上の栗田から、通信が入る。阿吽の呼吸で差し出されたマイクを取り、榊原は麾下の六隻に命じた。

「了解。五水艦、抜錨」

「錨上げ！」

曙が声を張り上げる。次の瞬間、前甲板左舷の揚錨機が動き始め、海面下の錨を巻き上げていく。これより少し前、すでに錨は大部分が引き上げられており、錨冠が海底に触れるか触れないかという状態にされていた。揚錨機の作動から数分もせずに、錨が海面からその姿を現す。

「両舷前進微速」

主機が接続され、「曙」が動きだした。じわりじわりと加速していき、艦首に波が生じ始める。今再び、この艦が戦場への航海に出ようとしている。

「曙」以外の艦も動きだす。見張りが寄越す報告を、曙が一つ一つ読み上げる。それを、実際に各艦の様子を確かめながら、榊原は聞いていた。

微速から半速へ。しばらくすれば原速へ。泊地の外へ向かいつつ、後続の一、三制艦が出航するのを待つ。

程なく、日本海軍最大の艦隊たちが、その腰を上げた。

*

「五水艦、出航する」

揚錨作業が続く。「摩耶」の艦上には、重い物体がゆつくりと引き上げられてくる、独特の重低音が響いていた。艦橋にまで伝わってくるその振動の中、精神同調を終えた摩耶が、先行する五水艦の様子を報告した。

——ついに、行くのか。

主機に接続したことで、わずかに泡立つ「曙」の艦尾。あの艦に乗る、同期であり、この泊地の提督長でもある男の顔を思い浮かべる。次に直接顔を合わせるのは、一週間以上先のことになるだろう。

前甲板で揚錨作業にあたる妖精が、手振りで「錨が見えた」と報告する。シアーがかかっている関係で、艦橋から錨を見ることは不可能だ。

「両舷前進微速」

摩耶の指示があり、主機が接続される。四軸ある「摩耶」の推進軸が、どこかもつたいつけるように回転を始めた。水をかいたプロペラに反作用がかかり、それが軸を介して主機本体、ひいては艦体を押し。一万トン強の「摩耶」は、のそりのそりと加速していく。次第に、艦体の周囲に、前進に伴う水流が生じ始めた。

「他艦の様子は？」

「『祥鳳』 抜錨。続いて『足柄』 抜錨。出航作業は順調だぜ」
「そうか」

淀みなく答えた摩耶の方をチラリとだけ見遣り、清水は再び視線を艦首に戻す。回頭した「摩耶」は、すでにその舳先を港外へと向けていた。もう間もなく、半速に増速するつもりだ。

「・・・あたしらが、最後だな」

何気ない風に、摩耶が呟いた。

偶然にも、このパラオ泊地を最後に出航する艦隊は、パラオ泊地艦隊が所属する一挺艦だった。摩耶たちは最後まで、パラオ泊地の姿を目に焼き付ける。

「しばらく、見納めだ。あの太陽も、この海も」

全くもつてらしくない、詩的なことを口にして、清水は眉間に力を入れる。どうも、この数か月で随分と愛着がついてしまったらしい。寝泊まりをし、ご飯を食べるといふことは、それだけ大事なことになる。最早清水にとって、帰ってくる場所はここ以外に考えられない。

「・・・なんだ、やっぱり不安か？」

茶化すように、摩耶が言う。益々眉間に力が入るのを、清水は感じ

た。

「何を言ってるんだ」

「お前らしくない、詩的なことを言うからさ」

完全否定できる材料を見つけれず、清水は沈黙を選ぶ。

——不安、か。

この作戦の、あまりの規模に、俺は飲まれているのかもしれない。

「へへん、心配すんなって。この摩耶様に任せときな」

笑いながら、摩耶が胸を張って言い切った。その言葉の端が、わずかに震えていることに気づかない清水ではない。彼女とて、完全に克服できたわけではないのだ。誰かを失ってしまうのではという恐怖と戦っているのだ。

溜め息に近い苦笑が、漏れてしまった。

「そうか。．．．任せよう、摩耶に」

清水の言葉に、摩耶が満足げに頷いた。

「摩耶」はいよいよ、パラオ泊地を脱する。清水麾下、三制艦の面々も、「摩耶」に続くようにして単縦陣を形成しようとする。舵の利きをよくするためにも、清水は速力を半速、さらに原速へと引き上げた。

「二制艦、出航する」

トラック泊地攻略艦隊の主力戦艦たちが、ついに動き出した。

四隻の、大艦巨砲の代弁者たちで構成される艦隊の顔ぶれは、そうそうたるものだ。

真つ先に動き出したのは、二隻の「長門」型戦艦だ。四一サンチ砲連装四基八門、装甲も相応のものを装備しており、これまで数多の深海棲艦戦艦部隊と激闘を繰り広げてきた、連合艦隊の殊勲艦だ。その練度もずば抜けており、二隻の射撃諸元を共有する統制砲撃戦において、この二隻の右に出るものはないとまで言われる。

艦型がシンプルだけに、各所に追加されている装備品類が、武骨さを際立たせる。陽光にきらめくその黒鉄は、戦乙女と呼ぶにふさわしかった。

「長門」、
「陸奥」に続くのは、我らがパラオ泊地所属の「大和」、

そして連合艦隊旗艦であり、一挺艦の将旗を掲げる「武蔵」だ。先の「長門」型が子どもに見えるほどに巨大な二隻の艀艀は、それ一基がまるで要塞のような四六サンチ三連装砲塔を三基も搭載している。日本海軍——否、世界で唯一の一八インチ砲搭載戦艦であり、世界最強の名を欲しいままにする巨艦姉妹だ。

四一サンチ砲よりも一回り大きい極太の砲身が、太陽光線の中でぎらついている。全体的にスツキリとまとまった艦上構造物が、逆に主砲の威圧感を増していた。

『一、三制艦で複縦陣を形成。五水艦は前路哨戒を担当せよ』

一挺艦の出航作業完了を確認したのか、栗田が新たに指示を飛ばす。単縦陣を形成していた清水は、三制艦各艦に主機の回転数を下げよう指示して、一制艦が追い付くのを待った。一方、榊原指揮下の五水艦は横陣を敷き、潜水艦への警戒を始める。

呉の本土防衛艦隊所属、第一潜水隊群から派遣された、第一、三潜水隊の現代潜水艦たちが先行して、パラオからトラックへの道中に確認した敵潜水艦を制圧してくれているはずだが、油断は大敵だ。海底の起伏や変温層に隠れて、優秀な耳を逃れた輩もいるかもしれない。

『NT作戦』は、まだ開始されたばかりだった。

機動部隊、会敵

トラック環礁よりの方位二八五。二百五十海里。

針路を北東に取り、一二ノットの速力で悠々と進む艦隊があった。トラック沖には、朝が訪れたばかりである。東側——すなわちトラック環礁方向から登ってくる太陽の光が海面に乱反射していた。非常に綺麗な光景ではあるのだが、見張り員にとつてはやりにくいことこの上ない。この時間帯は特に注意が必要であった。

そんな朝の海面に、爆音が響く。

穏やかな波間を進む麾下の艦隊の様子を確認し、塚原は爆音の主を目で追った。丁度、艦橋右に見える「赤城」飛行甲板から、カタパルトで艦載機が発艦していくところだった。

「後三機です」

夜明け直前から始めていた発艦作業が、間もなく終わることを「赤城」が告げる。カタパルトを使うと、こうも早く終わるものか。

一機艦の他の航空母艦も、発艦作業をほとんど終えている。

塚原麾下の一機艦は、黎明の敵基地攻撃を目論んでいた。艦載機による飛行場攻撃では、その効果などたかが知れている。それでも、ひとまず今日一日、最低でも午前中の間、その航空隊を使用不能にしておきたかった。

それに、この攻撃には、一機艦が名乗りを上げる意味も含んでいる。これで、嫌でもトラックの深海棲艦艦隊は、塚原たちを意識せざるを得なくなるはずだ。

「第一次攻撃隊、全機発艦しました」

最後尾の「天山」が飛び立ったことを確認し、赤城が報告を上げた。対地兵装を満載した第一次攻撃隊は、編隊を組み、トラック環礁に向けて進撃を開始する。次第に小さくなっていくその姿を見守りながら、塚原は次の指示を出した。

「第二次攻撃隊を、対艦兵装で待機。索敵機、及び直掩機発艦準備」
「了解です」

「赤城」の艦上は、再び忙しくなった。格納庫からは、直掩任務に

就く零戦が昇降機で引き出され、遮風柵の後ろに並べられて、暖機運転を開始する。〃赤城〃含め、各艦から四機ずつ計二十機。増援と直交代に備えた待機の機体が四機。

また、格納庫内では、敵機動部隊を攻撃するための〃天山〃艦攻や〃彗星〃艦爆も準備されている。前者の腹には魚雷が、後者には五百番爆弾が取り付けられ、いつでも格納庫から引き出せるようになっていた。

「直掩隊、発艦準備完了。〃加賀〃、〃千歳〃、〃千代田〃は、索敵機の準備も終えています」

「各艦に通達。直掩隊、索敵隊、発艦始め」

「直掩隊、発艦始め」

暖機運転を終え、カタパルトに接続された零戦。「金星」発動機がその唸りを増し、三翔プロペラを力強く回す。次の瞬間、乾いた音と共にカタパルトが起動し、強烈な加速度を零戦に与えた。ワイヤーで引っ張られ、甲板の外へと放り出された零戦は、一度沈み込んだのち、見事空気を捉えて、上昇に転じる。その頃には二番機の発艦準備が完了し、再びカタパルトが乾いた音を発する。

直掩隊は、あつという間に一機艦の上空三千メートルまで達し、旋回しつつ周囲を警戒する。彼らの防空誘導を担当するのは、一航艦所属の〃五十鈴〃だ。一機艦全体の防空指揮艦を担当している。

直掩隊の発艦が完了すると、今度は索敵機の発艦作業が行われる。艦上偵察機〃彩雲〃を搭載しているのは、〃加賀〃、〃千歳〃、〃千代田〃の三隻。それぞれに四機ずつだ。これに、六直艦所属の〃利根〃、〃筑摩〃から二機ずつの零水偵を加え、索敵線を形成する。
「・・・上手く、かかるといいんだが」

発艦していく〃彩雲〃を見守る。こればかりは、運と根気だ。

「後は、運を天に任せて、と言ったところですね」

赤城も、どこか他人事のように呟く。どうしようもないものは、どうしようもないのだから、仕方がない。

「各艦、対空警戒を厳となせ。どんな些細な兆候も見逃すな」

それだけ下令する。電探を担当する妖精や、見張り員の妖精は、目

を皿のようにして、敵機の機影に気を張っていた。

——まずは、敵基地の攻撃だ。

全てはそこから始まるのだ。

ようやく海面から離れた太陽の方角を見遣り、塚原は口を引き結ぶ。攻撃隊がトラック環礁に到達するには、まだ二時間弱の時間がかかるはずだ。

◇

雲の少ない空は、身を隠すには適さないが、眼下の様子をよく見ることが出来る。

チャートとにらめっこをし、コンパスと戦いながら、「赤城」艦攻隊長妖精は第一次攻撃隊を誘導していた。人類が使うGPSとやらが使えれば随分と楽になるのだろうか、生憎と人類製の機器はBOBの艦載機に設置できなかった。そもその問題として、彼は機械とというのが大の苦手である。

ともかく。そんな彼の努力は、実を結んだ。攻撃隊の目指す先に、明らかに島と分かる隆起が見えたのだ。

素早く方位とこれまでの飛行経路を計算し、チャート上で確認する。間違いない、あれがトラック環礁だ。

攻撃隊が目指すのは、トラック環礁内の春島に確認されている飛行場である。『IF作戦』時には建設途中だった飛行場だが、二か月前には完成し、運用する陸上機でパラオ泊地を空襲している。

その飛行場で、現在は艦上機を運用しているというのが、彼の直属の上司にあたる赤城、そして塚原の見解だった。

——「正しく不沈空母だ。確実に、叩いてくれ」

攻撃隊の発艦前、塚原からはそう頼まれている。

第一次攻撃隊に参加しているのは、「烈風」三十二機、零戦十六機、「天山」三十二機、「彗星」二十四機。「天山」は対地攻撃用の八百番爆弾を搭載している。飛行場の破壊を「天山」、その他付随施設をピンポイントで攻撃する「彗星」というように、役割が振られている。

制空隊の「烈風」が、スロットルを開き、編隊から突出する。彼ら

の仕事は、敵基地上空に展開が予想される迎撃隊を排除することだ。一方、直掩の零戦隊は、そのまま攻撃隊の編隊に追従する。こちらは、上空からの奇襲に備え、最後まで攻撃隊から離れることはない。

隊長妖精は目を凝らす。その先、春島に滑走路と思しき灰色の部分が見えた。長短合わせて、二本あるだろうか。付随施設も確認できる。

攻撃隊に対して、突撃隊形作れ——トツレの無電が飛ぶ。これを受け、編隊が地上爆撃に備えて編隊をさらに詰める。後部座席の見張り員兼後部機銃手は、いつ現れるともしれない敵戦闘機に身構えていた。

飛行場の上空に、黒く小さな粒が見える。どうやら、急ぎ飛行場を飛び立ち、高度を取って待ち受ける敵迎撃隊らしかった。

しばらくして、“烈風”隊と敵迎撃隊の戦闘が始まった。たちまち、乱戦となる。その詳しい様子を窺い知ることができなかったが、どうやら数で互角らしく、“烈風”隊であれば十分に攻撃隊から引き剥がしてくれるであろうと確信していた。

改めて、敵飛行場を見遣る。事前偵察で、ある程度の付随施設の位置はわかっているが、対空砲陣地などはその全てを把握しているわけではない。

飛行場爆撃を担当する“天山”隊としては、“彗星”隊がうまく対空砲陣地を叩いてくれることを祈るしかない。

隊長妖精は、敵飛行場の位置を確認しつつ、“赤城”艦攻隊を爆撃針路へと誘導する。まずは彼らが、最も大きい滑走路を叩き、その戦果を確認した後に、“加賀”艦攻隊が再度の爆撃を行う。

その時。後部を見張っていた妖精が、敵戦闘機の襲来を報告した。攻撃隊の上方だ。次の瞬間には、直掩の零戦隊が翼を翻す。重い八百番を積んだ“天山”隊も、機体を傾けてその射線から逃れようとするが、如何せんその動きは鈍重に過ぎた。

“天山”各機の後部機銃が、一斉に火を噴く。当たることはまずない。目的は、この射撃で敵の狙いを外すことにある。

隊長妖精の指示で曳光弾の比率が多めにされた一三ミリ機銃が、敵

機に対してまるで光の雨のように降り注いでいた。しかしながら、敵機が火を噴くことはない。その雨の中を、猛速で突っ切った敵機が、

“天山” 隊を上方から貫く間に、一連射を浴びせかける。

視界の端で、少なくとも三つの炎が生じるのを、隊長妖精は確認した。

下方に抜けた敵機に対して、零戦が仕返しとばかりに襲いかかる。

“烈風” や “紫電” 改二には劣ると言えど、優秀な猛禽であることに変わりはない。格闘性能だけで言えば、まだまだ新鋭機を圧倒する。その敢闘を、隊長妖精は願った。

しかしながら、そううまくはいかない。

零戦に追いつがられた敵機は、その身を翻して二〇ミリ機銃の洗礼を回避すると、果敢に反撃してくる。ここでもものを言ったのは、数だった。襲撃してきた敵機は、ざっと見ただけでも三十機はいる。十六機の零戦隊では分が悪い。

さらに、味方の被害と共に気になる報告が攻撃隊各機から寄せられた。

敵戦闘機は、新型と認む。後部銃座の見張り妖精も、同じことを指摘した。

零戦隊を難なく逃れた敵戦闘機が、今度は攻撃隊正面から襲いかかってくる。こちらの正面火力が皆無であることを知っているのだ。

“彗星” が機首の七・七ミリ機銃で反撃を試みるが、そんな豆鉄砲で落ちる敵機ではなかった。

攻撃隊は、再び機を滑らせることで回避を試みる。隊長機の横を、青白い曳光弾が掠めた。主翼を敵弾が打つ、嫌な音が操縦席に響く。次の瞬間には、敵機は攻撃隊後方へと抜けていた。

今度は、隊長妖精も、そのフォームをしかと見届けた。

それまでの三機種とは、根本的に違う機体だ。真っ白い機体はたこ焼きのような球体で、機体正面に二か所、まるで目のように赤く発光する部分があった。速度も異様に早い。「金星」に換装した零戦が、全く追いつけていなかった。

敵飛行場までの距離を目測する。このままの速度で進むとして、攻

撃開始まではまだ二、三分かかるはずだ。

そこまで、攻撃隊が辿り着けるのか。隊長妖精の額を、冷たい汗が伝う。

後方からの再攻撃を予測して、攻撃隊各機にさらに編隊を詰めるよう指示を出す。味方機の損失により生じた穴を埋めるように、味方編隊が翼を寄せ合う。

零戦隊はまだ来ない。恐らくは、残りの敵機を相手取るので精一杯なのだ。『天山』も『彗星』も、自らの力で活路を開かねばならない。

今は、耐えるしかない。そう肝に銘じて、隊長妖精は次なる攻撃に備える。操縦桿を握る操縦手妖精が、深呼吸したようだ。全ては、彼の腕と、後部銃座の奮闘にかかっている。

『天山』の「火星」発動機が唸る。攻撃隊が、無事に敵飛行場を攻撃できるのか、それはまだわからなかった。

そして数秒後、後方から敵機の第三撃が襲いかかってきた。

飛行場強襲

敵機の攻撃は苛烈だった。

第三撃として攻撃隊の後方から襲来した敵戦闘機は十数機。全てが新型機だ。

彼我の機銃が交錯するのは、ほんの一瞬だった。後部銃座から連射音が響き、敵機の放つ青白い曳光弾が編隊をすり抜けるのがほぼ同時。次の瞬間には、敵機の姿は前方へと抜けている。その後ろ姿に「彗星」が七・七ミリ機銃を放つが、当然のごとく落ちない。

見張り員を兼ねる後部銃座から、被害の報告が上がる。今の攻撃で、少なくとも二機（「天山」一機、「彗星」一機）が撃墜、二機が編隊から落伍しかかっている。

被害を集計すると、攻撃隊はすでに、十機を失ったことになる。

飛行場はもう目の前だ。それなのに、その距離がとてつもなく遠いもののように感じられた。

前方に抜けた深海棲艦の新型機が、その独特なフォルムを翻して反転。再度、攻撃隊を襲う構えを見せる。まるでこちらを笑っているかのように、たこ焼きは口のような部分を震わせた。真っ赤な光を宿す機体正面を、隊長妖精は睨みつけた。

操縦手が、小刻みに機体を滑らせて、射線をずらそうと試みる。その正面から、猛然と敵機が突っ込んできた。むき出しの歯が並ぶその口が、こちらの機体を噛み切らんばかりに開かれた。

曳光弾が編隊を切り裂く。数瞬後には、敵機の姿は後方へと抜けており、見えなくなる。しかし、その機銃が新たに味方機を貫いたことを示す火炎が上がった。隊長妖精は歯噛みするしかない。

たった今の被害は、四機。やはり、機銃による妨害が使えないと、敵機の射撃を逸らすことができず、被害が増えてしまう。

後部銃座から上げられる報告は、悲痛なものばかりだ。残念ながら、その一つ一つに何かを返している暇はない。

妖精は、BOBの憑神のようなもの。BOBが沈まない限り、妖精もまた、死ぬことはない。例え撃墜されても、目が覚めた時には、ま

た母艦に戻っている。

そうはわかっているても、やはり苦楽を共にしてきた仲間が撃墜されるのは、見るに堪えない。

反転した敵機が、第五撃を加えるべく、編隊後方から接近する。直掩の零戦隊は、いまだに戻らない。新型機相手に、随分と苦戦しているらしかった。数の差をひっくり返せるとは思えない。

「天山」も「彗星」も、決して鈍重な機体ではない。速度や操縦性能だけで言えば、非常に優秀な部類に入る。それでも、爆弾を抱え込み、身重な状態では、単身で戦闘機をどうこうできるものではない。

再び、後部座席から機銃が放たれる。できることは、それしかなかった。

すぐ真横で、オレンジ色の炎が上がる。隊長妖精が直率する小隊の二番機が、翼から黒煙を引きずっていた。次の瞬間、左翼が弾けて木の葉のように空中を舞う。コントロールを失った二番機は、くるくると錐もみ状態になって、眼下の海に向けて急降下していった。

どうしようもないもどかしさにも、今はとにかく耐え忍ぶしかない。

すでに、飛行場の完全破壊は諦めている。攻撃隊の被害が大きすぎた。そもそも、一機艦は全航空機に対する戦闘機の割合が高く、攻撃機の数が少ない。奇襲にならなかった時点で、手数が足りなくなることは、ある程度予想されたことだった。

正面から、再び敵機が迫って来る。すでに五回の攻撃を行い、残弾は決して多くないはずだ。現に何機かは、弾切れを起こしたらしく空戦場から引き返していく。隊長妖精は、これが最後の攻撃になることを祈った。

敵機の射撃を予測し、身構える。

その時。待ちに待った救世主が、敵機の編隊にアップパーカットを決めた。四機のとこ焼きを一時に炎の塊に変えたのは、濃緑の翼に赤い真円が主張する機動部隊の守護神。

敵迎撃隊との戦闘から抜け出した「烈風」が、こちらの救援に駆け付けたのだ。

形勢不利と見たか、残った敵機も引き返していく。『烈風』はそれを追いかけることなく、攻撃隊の上空に位置取った。うち一機が、「待たせて申し訳ない」とでも言うように、バンクをした。

零戦隊も、ポツポツと戻って来る。その数は大幅に減じていた。やはり零戦では、新型機と戦うのは荷が重かったと言うことか。

敵機の攻撃は、すでに終了していた。編隊の乱れを直し、間隔を詰めるよう、指示を出す。

次の瞬間、地上の数か所ではほぼ同時に砲炎が上がった。戦闘機隊の離脱を受けて、対空射撃が始まったのだ。

数秒後、攻撃隊の上と言わず、下と言わず、真っ黒い対空砲弾の花が咲く。至近弾の衝撃波が操縦席の窓ガラスを揺らし、飛び散る弾片が翼を打って不気味な音を立てる。

翼を振った『烈風』が、攻撃隊から離脱していく。翻る操縦席の中で、妖精が敬礼していた。「武運を」そう言っているようだった。

やってやる。無言のうちに頷き、隊長妖精は再び前を見据えた。

現在攻撃隊は、敵飛行場に対して、北西から侵入を凶っている。最も近くに見えるのは、戦闘機用と思しき短い滑走路だ。爆撃機なども使うと思われる最長の滑走路、及び付随施設等は、攻撃隊から見えてさらに奥に位置している。

対空砲火の中、『彗星』隊がスロットルを一杯に開き、『天山』隊の前に出る。強襲となったことで、『彗星』が先にピンポイント爆撃を実施する。狙いは対空砲陣地と、付随施設——特に燃料タンクだ。

一方、残存の『烈風』隊は低空に舞い降り、上空退避が間に合っていないかった機体を機銃掃射で攻撃する。いかに強力な航空機も、地上にいてはただのいい的だ。敵戦闘機との戦闘で機銃弾を消費してはいたようだが、零戦よりは残弾に余裕がある。

『彗星』には高射砲が、『烈風』には機銃が集中する。

一機の『彗星』が、高射砲弾の爆発に巻き込まれ、粉々になる。「アツタ」発動機を破片に切り裂かれたのか、推力を失った『彗星』が次第に減速して、落ちていった。

それらの火点もまた、「烈風」に狙われて機銃掃射を受ける。防盾で火花が散り、高射砲が擱座する。

空を覆うほどの対空砲火の中、「彗星」の急降下が始まった。

まず翼を翻したのは、「千歳」艦爆隊長妖精が率いる六機の「彗星」だ。狙いは燃料タンクと、その付近の基地施設。

黒い花が、不気味な青白い雨に代わる。しかし、ダイブブレーキを一杯にして、猛速で急降下を始めた「彗星」に、機銃はそうそう当たらない。そして、鍛え抜かれた「千歳」艦爆隊が、攻撃を外すはずもなかった。

爆弾の投下高度は、実に三百五十メートル。急降下の間に、一機が機銃に巻き込まれたものの、それ以外は全てが投弾に成功していた。

地上で次々に爆炎が踊る。土煙が舞い散り、その間で破片と思しき黒い影が飛ぶ。

燃料タンクに直撃弾が生じたのだろう。一際巨大な火柱が生じて、眼下の光景をオレンジ一色に染め上げる。衝撃波がここまで伝わってきて、操縦席の窓を震わせた。

「千代田」、「飛鷹」の艦爆隊は、それぞれに個別の目標を設定し、攻撃している。こちらも命中弾が出たらしく、各所で火の手が上がった。

擱座した高射砲から、黒煙が燻っている。

主翼を引き裂かれ、あるいは胴体を真っ二つにされた敵機が、駐機場で炎を纏って横転している。

さらに、追い討ちをかけるようにして、低空に降りた「彗星」が七・七ミリ機銃を乱射している。威力は小さいが、その分装弾数は多い。防御の貧弱な部分に集中して撃ち込めば、基地機能を奪うことは十分に可能だ。

そして。いよいよ、「天山」たちに出番が回ってきたわけだ。

隊長妖精は、すぐに各機に指示を出す。先行して攻撃する「赤城」隊の残存は九機。目標は飛行場中央の、最も長い滑走路だ。

操縦手が、スロットルを開き、機を加速させる。八百番という大型爆弾を積んでいるが、その加速度は凄まじい。頼もしい「火星」発動

機の唸りに笑みを浮かべて、隊長妖精は再度目標を確認。続いて爆撃照準装置を覗き込んだ。

現在の「天山」隊は、高度二千五百メートルで滑走路上空に進入を図っている。この位置からの投下でなければ、爆弾に十分な位置エネルギーを与えられず、滑走路を深く抉り取ることができないからだ。水平爆撃は、命中率が悪い。しかしそれは、洋上を航行中の艦船に對してのこと。目標が動かず、かつ大威力の爆弾でなければ十分なダメージを与えられない陸上基地には、最も効果的な攻撃方法だ。

「天山」隊を次なる脅威として認識したらしく、再び飛行場周辺から対空砲弾が吐き出され、周囲に真っ黒い花の絨毯を作り出す。だがその量は、明らかに先ほどよりも少ない。「彗星」隊が対空砲を叩いてくれたおかげだ。さらに言えば、各所から上がる黒煙も、照準の妨げとなっていないのかもしれない。

もっとも、その黒煙で照準が狂うのは、こちらも同じ事だ。強襲になると、対空砲火を先制して叩くために、艦爆隊がまず突入する。そのため、後からやって来る艦攻隊は、どうしても黒煙の上から爆撃をする必要が出てくるのだ。

「赤城」隊長妖精も、敵陸上施設、ましてや飛行場の攻撃など、初めての経験だった。事前に予想されたことではあったが、やはりどうしても邪魔になる。

それでも、今は自分の腕を信じて、やるしかあるまい。操縦手にコースの微修正を告げる。機首がわずかに振られ、それに合わせて編隊そのものも動く。

覗き込んだ照準装置からは、必死の勢いで撃ち出される高射砲の様子がしかと見えていた。今も時折、至近弾が炸裂して、機体を揺らし、異音が響く。隊長妖精は、心を静め、ただコースを修正することだけに専念する。

後部銃座から、一機が対空砲火の餌食になったことが報された。それに短く答えるだけで、照準装置を覗き込み続ける。

残った八機の「天山」は、怯むことなく、ただ真っ直ぐに、飛行場上空へと進入していった。

そして。

爆撃点に達する寸前、隊長妖精は爆弾の投下を指示する。次の瞬間に、投下レバーを引いた。八百番爆弾の重りが切り離されたことで、軽くなつた機体が浮き上がる。

後部銃座からは、列機も爆弾を投下したことが報される。『赤城』
隊の八機は、無事爆弾の投下に成功していた。

切り離された爆弾は、後は重力に従うまま、地面へと真っ逆さまに落ちていく。空気抵抗を考慮して公式に当てはめれば、その到達時間を計算することは容易だ。ざっと計算したその時間を、隊長妖精は測り続ける。

残存各機が離脱を終える頃、地上に人工の隕石が落下した。黒光りする弾頭は、その質量と落下直前の速度に応じたエネルギーを、容赦なく地面に叩きつける。航空機の発着用に舗装されていた地面は、そのエネルギーに耐え切れず、弾頭にわずかに道を譲る。そのほんの一瞬を待った八百番爆弾は、食い込んだ地面を蹴破らんばかりの勢いで盛大に弾け飛んだ。

八百番は、重量八百キロの爆弾を意味する。その重さは、三六センチ砲弾よりも重く、四一センチ砲弾よりも軽い。しかし、純粹に破壊力だけを比べるならば、そこに込められた炸薬の量は、戦艦の砲弾よりも遥かに多い。

滑走路に降り注いだ全八発の爆弾が、炎と土の混じったオベリスクを造り上げた後には、ぽつかりと大きな穴が開いていた。まるで、最初からそこには何もなかったかのように、巨大なクレーターが口を開いていたのだ。

隊長妖精は、その様子をしかと観察する。確認しただけで、四発が滑走路上に命中して、地面を抉っている。その他の爆弾も、周辺の駐機場や、発着陸装備類を容赦なく薙ぎ払っていた。

これで少なくとも、中央の滑走路は、当分の間使えないはずだ。それがどの程度の期間かはわからない。今日一日使えないかもしれないし、午前中のうちに復旧することも、あるいは向こう一週間使用できないことも考えられる。

『IF作戦』時、〃比叡〃以下の砲撃で設営途上だった飛行場を滅多打ちにしてから、パラオが空襲を受けるまでに二か月がかかっている。この時の修復速度を基に計算した結果、塚原たちは「最低半日から一日は使用不能にできる」と判断している。

飛行場に対して、すでに「加賀」隊による第二撃が加えられていた。こちらは、残った二本の滑走路を叩いている様子だった。

全ての攻撃が終わり、攻撃隊に空中集合を指示する一方、隊長妖精は一本の電文を打たせる。

「メシメシメシ——我、敵飛行場の攻撃に成功せり」

敵機動部隊見ユ

「何とかなつた、でしようか」

作戦室に降りてきた赤城は、開口一番にそう言った。その言葉に無言で頷き、塚原は再び海図に視線を戻す。妖精の手によって書き込まれているのは、一機艦から放たれた「彩雲」が形成する索敵線だ。定時報告が上がるたび、そこに点が書き込まれる。

「最低限はやり遂げた。そう解釈するべきだろうな」

塚原は答える。

「攻撃隊からの電文は、『メシメシメシ』、つまり『我、敵飛行場の攻撃に成功せり』だった。完全に破壊したとなれば、『シロシロシロ』の電文が送られてくる。やはり、そううまくはいかなかつたということだ」

「どの程度破壊できたかは、攻撃隊の帰還を待つほかありませんね。後・・・一時間半ほど、でしようか」

「それも、あくまで何事もなければの話だがな」

春島の基地が攻撃されたとなれば、深海棲艦とて黙ってはいまい。必ずや、こちらの機動部隊を捕捉するべく、索敵線を張る。攻撃隊が帰還する一時間半、敵の索敵機に一機艦が発見されない保証はどこにもない。むしろ、現状でトラック環礁に一番近い分、遅かれ早かれ、発見されるとみるべきだ。

「攻撃隊長にも、できるだけ派手に動くように、と言ってあります。正午を迎える前に、発見されると考えた方が賢明ですね」

第一次攻撃隊には、航路偽装をさせていない。つまりその飛来方向を真っ直ぐに辿れば、一機艦に行きつくようになっていく。

敵の偵察機が攻撃隊の後をつければ、こちらを見つけることは容易だ。雲も少ないことだし、見落とすということは考えにくい。

——焦らせば焦らすほど、敵は焦って、功を急ぐ。視野狭窄は、こつちにとつて好都合だ。

「ところで、塚原提督。一つ、よろしいですか？」

「なんだ？」

「対艦兵装で準備させている格納庫内の攻撃隊は、どうしますか？敵機動部隊を発見したとしても、私たちは攻撃しないのですよね？」

「四である一機艦の艦上機は、実に六割近くが戦闘機で占められている。反面、攻撃能力は低い。敵機動部隊に本格的な攻撃隊を出すのであれば、第一次攻撃隊の帰還を待つて攻撃隊を再編、出撃させるのが妥当だ。」

「損害を見て考える。守りに徹するにしろ、派手に暴れまわるにしろ、選択肢は残しておきたかった」

「なるほど」

赤城はそれで納得してくれたらしかった。

「今のうちに、現状を確認しておこう」

「これからの忙しさを予感して、塚原は話題を切り替える。鉄板が埋め込まれている作戦室の海図台に、磁石のついた敵味方の駒を並べた。」

「現在の我が艦隊はこの位置。一挺艦はこの位置です」

味方を示す青い駒を二つ、海図の上に置く。一機艦が突入を援護する一挺艦は、一機艦よりも二十五海里ほど前に位置取っている。

「敵艦隊のうち、現在確認が取れているのは、北東水道を守る戦艦部隊、及び環礁内の巡洋艦部隊です。それぞれを、『甲イ』、『甲ロ』と呼称しています」

「いずれも、一、二挺艦の環礁突入にあたって、障害となることが予想される艦隊だ。」

「両艦隊とも、飛行場攻撃後に目立った動きはありませんでした。接触を続けている『彩雲』からは、こちらの突入を待ち続ける構えである旨が、報告されています」

「やはり、動かなかったか」

「当初の予想通りではある。こちらが環礁への直接攻撃を図ることなど、深海棲艦側も容易に予想がついていることだろう。自らのこのことやってくる敵を、わざわざ迎えに行く必要はない。そういう判断を下したことは、容易に想像できた。」

「選択肢として、これらの艦隊を攻撃することも考えられますか？」

「いや、それはできない」

赤城の提案にも、塚原はかぶりを振る。

「環礁内の巡洋艦ならまだしも、戦艦を攻撃するとなると、圧倒的に手数が足りない。戦艦を沈めるには、反復攻撃が必須だ。時間を食うし、効率も悪い」

やはり、戦艦を叩くのであれば、戦艦が一番だ。あくまで、塚原たち機動部隊の第一目標は機動部隊であり、現状で距離のある戦艦部隊を叩く必要はない。

まずは、トラツク近海の制空権をめぐる戦いに勝利する。それが第一目標であった。

「話を戻しましょう。現在、敵機動部隊の捜索を行っていますが、各索敵機より、いまだ発見の報告は上がっていません。各機とも定時連絡は滞りなく入っていますし、いまだ接触をしていないというのが実情でしょう。逆探に感ありとの報告もありません」

塚原たちは、深海棲艦の機動部隊が、トラツクの北から北西にかけての海域、あるいは西から南西にかけての海域、百五十海里以内にいると踏んでいる。この位置は、基地航空隊との連携を保ちつつ、北東、南、両水道を守るのいうつつけだ。上手くすれば、日本海軍機動部隊を挟撃することもできる。

一機艦索敵隊は、この内、北側に索敵線を絞っていた。西側は現在の位置からでは距離があり、発見したとしても攻撃が容易ではない。攻撃機が少ない以上、反復攻撃が行いやすい北側に、索敵線を集中させていた。

「二、三機艦・・・南雲さんと井上さんは、どうするおつもりでしょうか？」

残る二つの機動部隊とは、艦隊間の大出力通信を止めている。一機艦が派手に発している電文は、あちらも聞いているだろうが、あちら側から通信が寄越されることは、今のところない。

あの二人のことだ。必要な時に、艦隊間の無線封止を解除してくるだろう。

「矛盾のことは、矛に任せる。俺たちは、盾としての役割を、十二分に果

たすだけだ」

制帽の位置を見る。再度海図を確認した塚原は、赤城を連れだつて、艦橋へと戻っていった。

*
索敵機にとつて、雲が少ない空模様というのはありがたい。敵機の襲撃を警戒してある程度高度を取っていても、海上の様子を十分窺える。

昇り始めた太陽できらめく海面を見つめつつ、三人の妖精はそれぞれに眼下と頭上に目を凝らしていた。

「彩雲」が搭載する逆探に感があったのは、つい先ほどのことだった。予定された索敵線の、復路に差し掛かってしばらくしてからだ。位置からして、敵機動部隊である可能性が高い。逆探の反応を追いつつ、妖精たちは緊張の中で飛行と索敵を続けていた。

逆探に感があったということは、こちらが敵の電探に見つかっている可能性も高い。単機であることを考慮しても、どこまでもつか。

燃料の残量を確認する。まだ十分に飛んでいられる。

電信を担当する妖精が、ついに敵電波の方向を掴んだ。すぐさま、チャート上で機位と方位を確認。頷くと、操縦桿を倒し、高度を下げることを選んだ。

「彩雲」はグングン高度を下げていく。操縦員妖精は、海面すれすれまで、降りるつもりだった。

広範囲の索敵は難しくなるが、敵の電探には捕捉されにくくなる。これは、海面に反射する電波に、機体の反射を紛れ込ませることができるところからだ。

また、防備の観点でも有利だ。機体が海面に近づくことで、敵機の警戒は上方だけで済む。しかも、機体の真下に海面があることで、機体下部へ抜ける急降下攻撃がやりにくくなる。雷撃隊の妖精から学んだ技術だ。

電信員が、針路が正しいことを伝える。逆探の感も、次第に大きくなっていくそうさ。

頼む、このままうまく見つかつてくれ。超低空飛行を、自らの腕に

ものを言わせてこなしながら、操縦員妖精は祈った。

しばらくは、何事も起こらなかつた。海は特に大きく波が立つこともなく、ただただ真つ青な穏やかさを広げている。艦影らしきものを見ることはできない。時間が刻々と過ぎていくにしたがつて、不安が募っていく。

まだか、まだか。

今、こうしている間にも、敵機動部隊の索敵機が一機艦を発見し、攻撃隊を放っているかもしれないのだ。索敵隊が敵機動部隊を見つけない限り、一機艦はただ一方的に叩かれて、海の藻屑と消えてしまう。そうさせないためにも、今は逆探の感を信じて、機を進めるしかない。

どれほどの時間が経っただろうか。燃料計の残量を心配し始めた頃だつた。

見張り員が、機の左を示した。三人分の目が、そちらに向かう。水平線の辺り。青と蒼が混じり、その境界を無くそうかという寸前。そこに、明らかに異質な、黒い影があつた。

海面から突き出た細長い棒のようなそれは、紛れもなく、船のマストだ。

高度を上げないように気をつけながら、機を滑らせて、旋回する。見張り員はより一層目を凝らして、上空の敵機を警戒する。何も動きがないところを見るに、低高度からの進入は功を奏したようだった。

水平線の影が、みるみるうちに大きくなり、その数を増やしていく。目測で一万メートルを切った時、スロットルを開いて、機を加速させた。『彩雲』の「誉」発動機が唸り、三翔プロペラを力強く回す。

操縦桿を引き付けて、機体を上昇させた。水平線に連なる影でしかなかった艦影が、みるみるうちに陣形を形作る艦隊へと変わる。

儒教の曼陀羅を思わせる円形の陣形は、間違いなく輪形陣。空母機動部隊の基本とする陣形だ。

外縁を固めるのは、小柄な艦体に単装砲や魚雷発射管を積んだ駆逐艦。そしてそれよりも一回りから、二回り大きい巡洋艦。

丈高い艦上構造物が特徴的な大型艦の姿は見えない。どうやら、戦

艦はいないようだ。

代わりに。

陣形の中央。戦艦に負けず劣らずの巨体が、二つ。それよりも一回りほど小柄な艦影が、三つ。いずれも、艦上はまっさらで、突起物はほとんど見当たらない。唯一、艦橋と思しき小ぶりの箱が、右舷側に見受けられるだけだ。

見つけた。高度を上げる「彩雲」から眼下の艦隊を見つめる三人の妖精は、その影の正体を理解した。

深海棲艦の空母。正規空母であるヲ級と、軽空母のヌ級。トラック環礁を守る機動部隊のうちの一隊に間違いなかった。

その数で大雑把に数えながら、電信員に打電を命じる。一機艦だけでなく、その他の二、三機艦にも届くように、最大出力での打電だ。

敵艦隊の上空が、にわか慌ただしくなった。こちらを認めたのだろう、上空で旋回していた敵機が、一斉に翼を翻し、「彩雲」へと向かってくる。

電信員が、鬼のような形相のまま、常人では考えられないような速度で打鍵を叩く。「敵艦隊見ゆ」の一報と、発見位置、艦隊構成、打電時間。それらを猛速で打ち込み、打電完了を電信員が報告した。

次の瞬間、敵機が「彩雲」に襲いかかってきた。凧のような三角形の機体が、前方から迫る。それを寸でのところで回避すると、機を旋回させ、スロットルを一杯に開く。「誉」発動機の調べが、明らかに変わった。

芸術品とも称される優秀な発動機は、熟練した整備員妖精による完全の管理体制と、現代日本が提供する高オクタン価ガソリンがもたらす能力を、いかなく発揮した。

艦上偵察機である「彩雲」は、敵戦闘機の迎撃をかくぐつて索敵任務を遂行するために、破格の速力を与えられていた。直線飛行であれば、その右に出るものはなく、まさに「我に追いつく敵機なし」の名文に相応しい。

打電終了から一気に加速した「彩雲」は、実に六百五十キロ毎時を超える速度をもって、敵機の追撃を振り切った。あまりの速さに、敵

機もどこかポカンとした様子で見過ごすしかなかった。

攻撃隊、発艦セヨ

「見つけたか！」

トラック沖を進む航空母艦「翔鶴」の艦上に、南雲の声が響いた。電信室からの報告を上げるなり、前のめりになる南雲に、艦娘の翔鶴は苦笑を浮かべる。この提督は、このまま「烈風」に飛び乗って、出撃してしまいそうだ。

「どうされますか？」

「決まってるだろう。攻撃隊の発艦準備を急がせるぞ」

「はい。わかりました」

威勢のいい南雲の声に、翔鶴はチラリと飛行甲板を見遣る。格納庫で準備を終えていた攻撃隊は、昇降機によつて次々と飛行甲板に引き出され、暖機運転に入っていた。濃緑に塗られた猛禽たちが、ズラリと翼を並べる様子は、壮観の一言に尽きる。

整備を担当する妖精が機体の状態を確認し、搭乗員妖精に交代する。自らの愛機が万全の状態にあることを確かめて、搭乗員妖精が親指を突き出した。飛行帽をかぶる彼らに、翔鶴は微笑を浮かべる。

「翔鶴」率いる二機艦は、三個機動部隊の中でも、練度、装備、共に最高レベルにある。特に艦載機は、『NT作戦』に参加する機動部隊の中で、最も優遇されていた。

戦闘機は、次期主力戦闘機として配備が進み始めた「烈風」。零戦に比べて大型の機体は、カタパルト運用に耐えられるよう改良がなされておき、暫定的に二一型と呼ばれている。火力では「紫電」改二に劣るものの、機動力、格闘性能、航続距離、制空戦闘機として必要な能力を高い次元で備えた機体だ。

攻撃の要として搭載されているのは、艦攻と艦爆の統合機である「流星」。細身の胴体に、W字の逆ガル翼が特徴的な機体だ。「誉」発動機が、大直径の四翔プロペラを回す。雷撃はもちろん、急降下爆撃もこなす。そのために頑丈な機体は、カタパルトでの運用にも十分対応していた。

二機艦が用意している第一次攻撃隊は、この二機種で構成されてい

る。〃烈風〃四十機、爆装〃流星〃四十機、雷装〃流星〃五十六機。合計で百三十六機の攻撃隊だ。

時刻は間もなくお昼を迎える。翔鶴は、今日中に出せる攻撃隊を、二回と想定していた。多少の無理をすれば第三次攻撃を実施できなくもないだろうが、收容が日没後になる可能性が高いことと、明日以降も戦闘が続くことを考慮すれば、しなくてもいい無茶だ。

発艦指揮所の妖精が、全機の準備が整ったことを報せた。それに頷いて、翔鶴は艦の舵を艦橋の妖精に渡す。任せろ、と言いたげに、艦橋の妖精が舵を握る。

「行つてきます」
「うむ」

艦橋で仁王立ちする南雲は、翔鶴に軽く頷いただけだった。それが何よりの信頼の証と感じて、翔鶴は頬を緩める。

甲板横の発艦指揮所は、艦の前進に伴う猛風が吹いていた。翻る銀髪を押さえながら、翔鶴は辺りを見回す。輪形陣中央、複縦陣を敷く四隻の主力空母たちだ。〃翔鶴〃の右舷には、妹の〃瑞鶴〃が、それぞれの後ろに〃蒼龍〃と〃飛龍〃が付き従う。その周りを囲むように、護衛艦が輪形陣を敷く。

敵攻撃隊への備えとして、艦載機による上空直掩と、回避運動に重点を置く日本海軍の機動部隊は、深海棲艦に比べて編成されている艦艇が少ない。ゆえに、その輪形陣もあまり大きくない。それでも、十二隻のBOBが整然と陣形を保ち、大海原を駆ける様は、壮麗な雰囲気醸し出していた。

鉢巻きを締め直し、弓を握る。もう間もなく、南雲が「攻撃隊発艦始め」を下令するはずだ。

甲板の遮風柵が倒される。暖機運転が完了している先頭の〃烈風〃が、ゆつくりと甲板の前に運ばれ、左舷側のカタパルトに接続された。発艦準備は完了している。

チラリ。艦橋を見遣る。そこに立つ南雲と目が合った。おもむろにマイクを取った彼が、厳かに告げる。

『攻撃隊、発艦始め』

「第一次攻撃隊、発艦始め」

弓に矢を番え、引き絞る。張力の一杯まで張りつめた弦の反発を、確かに感じる。手を離せば、解放された弦が矢を勢いよく放った。

ひようふつ。矢が宙空に消えるのを合図にして、カタパルトが起動し、最初の一機が甲板上を駆けていく。揚力を得るのに十分な速さに達したところで、機体が甲板前縁から海上に放られた。「八四三」発動機を猛々しく唸らせ、四翔プロペラで確かに空気を掴んだ。「烈風」は、ほぼ中天の太陽に銀翼を主張しながら、高空へと駆けていく。

「瑞鶴」、
「蒼龍」、
「飛龍」でも、同じことが行われている。一番機の射出が終わると、早くも二番機の準備が進められ、再度カタパルトが起動して「烈風」が飛び立つ。

カタパルトによる発艦作業は迅速だ。全機が発艦し、上空で編隊を組んで進撃を開始するのは、三十分前後であろう。

自らの世界へその翼を伸ばした猛禽たちを見送り、翔鶴は環境へと戻っていった。

*

ある程度予想はできていたことだった。

「彩雲」から「敵艦隊見ゆ」の電文が入るとほとんど同時に、「五十鈴」搭載の二一号電探が、一機艦に接近する機影を捉えた。反応が小さく、おそらくは単機。深海棲艦の偵察機であることは、容易に察せられた。

しかし、距離五万での発見は、あまりにも遅すぎた。

直掩隊が急行したが、撃墜の前に電文を発見したことが確認された。

これで、一機艦は敵機動部隊に発見されたことになる。

甲板上で進む第一次攻撃隊の収容作業を見守りながら、塚原も赤城も表情を曇らせていた。

「……来るな」

「……来ますね」

それは、つい今しがた発見した機動部隊（「乙イ」と呼称）からかもしれない。あるいは、まだ見ぬ別の機動部隊からかもしれない。ともかく、少なくとも二時間以内には、この一機艦に敵攻撃隊がやって来

ることになる。

「各艦とも、迎撃の準備は整っています」

すでに直掩隊は増やしている。さらに、電探が敵編隊を捉えれば、直ちに追加で発艦できるよう、格納庫内で準備も進んでいる。

「攻撃隊収容の進捗状況は？」

「半分が終わりました。後三十分ほどで完了する見込みです」

敵攻撃隊がやって来るには間に合いそうだ。

春島への空襲を成功させ、帰還した第一次攻撃隊だが、損害は大きかった。特に敵戦闘機による迎撃が熾烈であったと、報告が上がっている。飛行場から迎撃に上がってきたのは、タコヤキ型の新型機だったという。

今もまた、「天山」が一機、「赤城」の飛行甲板に着艦する。着艦制動索にフックを引っかけて前部昇降機付近で静止した「天山」は、傍目から見てもわかるほどに損傷している。主翼や胴体側面に穿たれた弾痕が、戦闘の激しさを物語る。

搭乗員が下りた機体に、すぐ整備妖精が取り付く。スパナを背中に背負った彼は、しかしその首を横に振る。損傷が激しく、修復は不可能と判断されたらしかった。

妖精たちがワラワラと集まり、一斉に「天山」を押し始める。舷側方向へ横滑りした「天山」は、やがてその主脚を脱落させて、海面へと落ちていく。海中投棄された機体に、妖精たちが手を合わせていた。

そうした作業が、何度か繰り返され、やがて全機の収容が完了した。前部昇降機が次々に第一次攻撃隊を格納庫へ降ろしていく一方、中部と後部の昇降機は、直掩増勢のために発艦させる「烈風」や零戦を引き出す。

暖機運転の爆音が轟く中、彼方から迫りつつあるジュラルミンの嵐に、二人は身構えていた。

『電探に感あり！敵味方不明航空機多数、接近中！』

スピーカーを震わせる「五十鈴」からの報告に、一機艦の緊張感は

一気に高まった。

『方位三五〇、距離六〇〇（六万メートル）』

一機艦は現在針路を一五五に取っており、攻撃隊は艦隊の左舷後方からやって来ることになる。

「対空戦闘用意！飛行甲板上の直掩機は直ちに発艦！」

報告を受け、塚原は直ちに下令する。慌ただしく艦橋を後にした赤城が弓を放ち、カタパルトが起動して直掩隊を増勢する。

各艦の対空砲には、砲員の妖精が取り付いて、高射装置や機銃指揮装置からの指示を待つ。『赤城』の両舷でも、ヘルメットをかぶった妖精たちがそれぞれの高角砲、機銃に取り付き、やって来る空からの脅威に備えていた。

「一挺艦の『武蔵』に繋いでくれ」

「はい」

対空戦闘の準備が進んでいくのを見守りつつ、塚原は赤城からマイクを受け取る。呼び出した一挺艦は、一機艦からわずかに二十五海里しか離れていない位置を航行中だ。

「一機艦『赤城』より、一挺艦『武蔵』。聞こえますか。どうぞ」

「こちら『武蔵』。感度良好。どうぞ」

『武蔵』座上の栗田からは、すぐに返答があった。

「敵編隊が我が艦隊へ向かっています。これより、対空戦闘に入ります。どうぞ」

『了解した。こちらから増援は送れない。貴艦隊の健闘を祈る。どうぞ』

「ご期待に沿えるよう、最大限の努力をします。終わり」

通信を終えるのと、最後尾の『烈風』が飛び出すのは同時だった。

『利根』より一機艦各艦。これより、防空戦闘の指揮を執る』

六直艦旗艦『利根』座上の近藤が、防空戦闘の指揮を執る旨、各艦に伝える。『IF作戦』の際も、機動部隊の直衛として指揮を執った提督だ。塚原も信頼している。

『敵編隊、距離五〇〇！』

『『赤城』隊、『加賀』隊は、準備出来次第攻撃始め。『千歳』隊、』

千代田”隊、”飛鷹”隊は、艦隊上空で待機」

”利根”から直掩隊に指示が飛ぶ。発艦し、高度を稼いだ”赤城”と”加賀”の戦闘機隊が、スロットルを全開にして、迫りくる敵編隊へ突撃していく。唸る「ハ四三」発動機と「金星」発動機の轟音が、ここまで聞こえてきそうだ。

「方位からして、先ほど発見した『乙イ』からの攻撃隊でしょうか」

精神同調を終え、艦橋中央に立つ赤城が、塚原に言った。

「その可能性が高いと見るべきだろうか」

「そう上手くはいきませんね。他の機動部隊も釣れるのではと、期待していたのですが」

帰還する攻撃隊を追跡すれば、その母艦を発見できる。もしも、発見した「乙イ」以外から出撃した攻撃隊であれば、その後に索敵機をつけることで、別の機動部隊を発見できたかもしれない。

「まずは、目の前の敵と対峙しろ。そういうことでしょうか」

「・・・そういうことにはしておこう」

次の瞬間、四万メートル離れた空域で、戦闘が始まった。敵攻撃隊から分離した制空隊が、”烈風”や零戦と激しく銃火を交える。機銃弾に引き裂かれた彼我の機体が、黒煙を引きずって落ちていく。

「各高角砲、機銃、全て配置完了しています」

”赤城”自身の対空戦闘準備も完了したことを告げる。それに軽く頷いて、塚原は空を睥んだ。

これからの半日、これまでにない激闘が予感された。

機動部隊ノ攻防

『“赤城”隊、“加賀”隊は、準備出来次第攻撃始め』

その指示が、防空指揮艦となっている“利根”より届くや否や、“赤城”戦闘機隊長妖精はスロットルを一杯に開いて、発動機の調べも高らかに、機を加速させた。愛機としている“烈風”は素直にその操作に応え、轟音と共に四翔プロペラを回転させる。強烈な加速が、戦闘機隊長妖精を座席に押し付ける。

“赤城”から発艦した戦闘機隊長妖精麾下の機体は、“烈風”十二機、零戦八機。一方の“加賀”隊は、“烈風”二十四機。計四十四機の戦闘機が、艦隊に迫る脅威を排除せんと、高空から敵攻撃隊に迫る。小隊ごとに編隊を組む僚機たちを確認し、戦闘機隊長妖精は前方の空を見遣る。彼の目は、ゴマ粒のように小さな影を、先の空域に捉えていた。

高度は三千メートルでほぼ同じ。どちらが優位ということもないだろ。

問題は、敵戦闘機の種類だ。もしも、春島上空で初見参した新型戦闘機だった場合、少々厄介なことになる。

日本海軍が防空戦闘の基本に据えている、戦闘機による迎撃は、最も効果的な戦術だ。ただし、欠点がないわけではない。

性能的優位と、数的優位。この両方を満たしていなければ、戦闘機による迎撃の効果は大きく減じてしまう。どれほど性能が優れていても、数の優位がなければ、攻撃隊に手が届かない。どれほど数があっても、性能が追い付いていなければ、護衛戦闘機の壁を破れない。

“烈風”は、新型戦闘機に対して互角以上に戦える。しかし、零戦ではそうはいかない。零戦が新型戦闘機に対抗するには、少なくとも二倍以上の機数が必要というのが、各母艦戦闘機隊長の共通認識だ。果たして、目の前の敵機は、どちらだ。

攻撃隊から、機体が分離してくる。おそらくは制空隊の戦闘機だ。

“赤城”隊、“加賀”隊は、あの機体と戦うことになる。

改良された無線機に指示を吹き込む。先陣を切るのは“赤城”隊

だ。

お互いが発揮しうる最大速度であるがゆえに、距離が縮まるのはわずかに数十秒の出来事だった。ゴマ粒は小さな種ほどの大きさに、やがて肉眼でもそのデイトールを確認できるほどの大きさになる。

まるでエイが空を飛んでいるような影は、日本海軍が「デネブ」のコードネームをつけた従来の艦上戦闘機だ。新型機ではない。

深海棲艦もまた、こちら同様、新型機を全部隊に行き渡らせるのは時間がかかるらしい。

これならば、十分勝機はある。内心ほくそ笑みながら、猛速ですれ違おうとする敵機を見据える。お互いが反航している以上、その一回目の射撃機会はほんの一瞬だ。

目の前の敵機、そして照準装置内の敵機。それらを素早く確認しながら、その機会を探る。

照準環内の敵機が、息をする間にも大きくなる。先頭の一機が照準環から溢れようかという時、ほんの一瞬だけ、機銃の発射把柄を握る。そのまま機体を横ロール。

長銃身の二〇ミリ機銃から、一連射分の射弾が飛び出す。逆に敵機から放たれた機銃が、青白い曳光を伴ってロールした翼端を掠める。

両者の会敵はコンマ数秒という時間だった。頭を巡らせながら、本能的に機体を動かし、格闘戦が始まる。

真っ先に敵機に取り付いたのは、零戦だ。例え旧式となっても、良好な格闘性能は健在である。鋭くカーブを描いた二機ずつのペアが、同じく二機ずつで編隊空戦を挑もうとする敵機を追い込む。四つの翼たちが入り乱れ、時折火箭が飛ぶ。

「烈風」も負けてはいない。零戦の直系となる機動部隊の新翼は、大型な機体に似合わず優秀な格闘性能を持つ。後ろにつこうとした敵機の射線をひらりとかわし、横旋回、縦旋回などを繰り返しながら、その後ろを狙う。射線にさえ捉えてしまえば、強力な二〇ミリの火矢が機体を貫く。

戦闘機隊長妖精も、自らの「烈風」で手頃な敵戦闘機に襲いかかる。他の零戦を狙っていた敵戦闘機の不意を突く形で、添の横っ腹に

突っ込む。こちらに気づいたららしい敵機が慌てて翼を翻すのも織り込み済みだ。弱点であるその下腹部に狙いを定め、発射把柄を握る。翼内の二〇ミリ機銃と機首の一三ミリが火を噴き、真っ赤に燃え盛る礫を投げつける。機体にミシン目が走るように穴が開いた敵機は、そのまま黒煙を吹いて落ちていった。撃墜確実だ。

「赤城」隊が敵制空隊をかき乱したところで、「加賀」隊が加勢に加わる。これで敵戦闘機と数はほぼ互角。否、まだ艦隊上空には、攻撃機を虎視眈々と狙う零戦が五十機も残っている。敵攻撃隊の漸減は、十二分に可能なはずだ。

彼我の機体が網の目状に飛行機雲を引きずる中、戦闘機隊長妖精は、わずかに高度を取り、空戦場の様子を確認する。

激しい旋回戦の末、敵機の後方を取った零戦が機銃を浴びせかけ、ずたずたに引き裂く。

上方からの襲撃を受けた敵機が、為す術なく弾丸に貫かれ、爆発四散する。

機体のコントロールを失った敵機は、錐揉みになりながら高度を下げ、やがて海面に激突する。

逆に、敵機に背後を取られ、尾翼を撃ち抜かれた零戦がフラフラと落ちていく。

エンジンカウルを撃ち抜かれたらしい「烈風」は、自慢の「八四三二」発動機から黒煙を吹きだし、その息吹を止める。

全体としては、日本海軍側が有利だ。さらに、格闘戦が続いていることで、徐々にではあるが、敵制空隊を攻撃隊から引き剥がすことに成功している。

そろそろ頃合いであろうか。戦力の薄いところに再度突撃しながら、戦闘機隊長妖精がそんなことを思った時だ。

『「千歳」隊、「千代田」隊、攻撃始め。 「飛鷹」隊は高度を下げ、敵雷撃隊を警戒』

入れっぱなしにしていた無線機から、艦隊上空に残っていた零戦たちに向けた新たな指示が聞こえてきた。艦隊との距離は、間もなく三万メートルになろうとしている。

通信が入った後、「赤城」隊と「加賀」隊の戦い方は、明らかに変わった。敵機を執拗に追い回し、必要以上に格闘戦を挑む。全戦闘機妖精が、今自らが果たすべき役目を理解していた。

攻撃隊を襲撃する他隊の邪魔はさせない。その一心で、敵機に追いつき、機銃を叩きこむ。

「千歳」隊と「千代田」隊の攻撃が始まった。

戦闘機隊長妖精たちが空戦を繰り広げる空域からいくらか艦隊よりの位置。十分に高度を稼いでいた計三十二機の零戦は、獲物を見つけた猛禽類のごとく、急降下で敵攻撃隊に襲いかかる。陽光を浴びてその翼端が、あるいはキャノピーが、一瞬白銀に輝く。

編隊が敵攻撃隊の下方に抜ける間に、射撃機会は一度しかない。ましてや、急降下という、ただでさえ操縦の難しい状況だ。それでも、効果は抜群だった。

とつさに機体を傾け、回避運動を取った敵攻撃隊だったが、全機が機銃弾の洗礼を逃れることはできなかった。四機が一瞬にして火達磨になり、十機近くが煙を吐き出して落伍する。

直掩の護衛戦闘機が、一航過を終えた零戦に挑みかかる。しかし、いかんせん数が足りなかった。熟練の零戦たちが護衛戦闘機を翻弄している間に、残った機体が再度攻撃を仕掛ける。

味方攻撃隊の危機に気づいたのだろう。「赤城」隊と「加賀」隊が相手取っていた敵機が、にわかに翼を翻し、攻撃隊の方へと戻ろうとする。

が、そうは問屋が卸さない。

それを見逃すほど、戦闘機隊長妖精も、また他の戦闘機妖精も、甘くはなかった。

空戦場から抜け出そうとした敵機に、「烈風」が襲いかかる。速力ではこちらの方が上だ。逃げられると思っただら大間違いである。

不意を突かれたのか、二機の敵機が同時に炎を上げて、真つ逆さまに落ちていく。

「烈風」の射弾を素早い身のこなしでかわして、なおも攻撃隊に戻ろうとする敵機もいたが、上方から現れた零戦の二〇ミリ機銃が操縦

席に命中して、原形を留めたまま海に吸い込まれる。

それでも、こちらの追撃を振り切つて、攻撃隊へ辿り着いた敵機が、
“千歳”隊と“千代田”隊を妨害する。これを追つて、“赤城”隊と
“加賀”隊も攻撃隊の方へと機体を傾けた。

『敵編隊、距離二五〇』

“利根”が読み上げる艦隊までの距離に、戦闘機隊長妖精は大きく
息を吐く。まだだ。まだ、十分に迎撃の時間はある。

その時、敵攻撃隊が二手に分かれた。雷撃隊と爆撃隊であることは
明白だ。“千歳”隊、“千代田”隊は迷いなく爆撃機の方を追つた。
戦闘機隊長妖精は、バンクでついてくるように促し、雷撃機を追う。
残存の敵戦闘機が、なおも追いつがって来る。戦闘機隊の奮戦もあ
り、多くを落としたが、残っているだけでも邪魔だ。

チラリと、機体の残弾を確認する。半分を切つたが、後二、三回戦
ぐらいは行けそうだ。

自らが直率する小隊を引き連れ、雷撃隊の上空からこちらを妨害し
ている敵戦闘機に襲いかかる。

初撃はかわされた。すぐさま二機ずつのペアに分かれ、格闘戦に移
行しようとする。しかし、敵機は乗つてこない。あくまで雷撃機の守
りに徹するつもりのようなのだ。それならば。

目線だけで小隊に指示を伝える。無線機がなくなるとも、最も気心知れ
たこの四人内なら、やることはわかる。小隊は再び二機ずつのペアに
分かれた。

目の前の雷撃隊と艦隊の距離は、もう間もなく一万五千メートルに
なろうとしている。狙いは恐らく、外縁の“利根”、あるいは中央の
“加賀”だ。

雷撃機に対して、“赤城”隊が攻撃を加える。最後まで艦隊上空に
残っていた“飛鷹”隊も、別方向の雷撃隊を迎撃中とのことだ。

雷撃機上空の敵機が、“烈風”と零戦の射撃を妨害する。決して深
追いせず、そのまま再び雷撃機の上に戻る。

そこが狙い目だった。

戻ろうとした敵機に、分かれた小隊の二機が襲いかかった。これを

手慣れた動きで回避。

が、その先に、戦闘機隊長妖精の“烈風”と僚機が待ち構えていた。敵機が気付いた時にはもう遅い。未来位置に照準をつけていた戦闘機隊長妖精は、三連射分発射把柄を握る。先頭の二機が、火箭の只中に突っ込んで、蜂の巣になった。

“烈風”を避けようと、さらに機体を傾けた敵機の横っ腹から、待つてましたとばかりに零戦が襲いかかる。勝負はあった。

まだ敵戦闘機は残っていたが、“赤城”隊を相手取るその数はすでに一桁だ。これでは満足に妨害もできない。必死に雷撃機を守ろうとする敵戦闘機を強引に突破して、“烈風”や零戦が射弾を浴びせる。

揚力を失って、正面から海面に突き刺さる機体。

魚雷に誘爆したのか、盛大に火の粉を振りまいて粉微塵になる機体。

一連射ごとに、雷撃機が数を減じていく。

しかし、さすがの“赤城”隊も、そう何度も攻撃はできなかつた。多くの機体が、敵戦闘機との空戦で弾薬を消費しており、すぐに弾切れが来た。かくいう戦闘機隊長妖精も、二〇ミリ、一三ミリともに使い果たした。

後は、艦隊の対空兵器に任せる他ない。戦闘機隊に引き上げを命じ、高度を稼ぎ始めた丁度その時、“利根”から無線が入る。

『全戦闘機離脱せよ』

それはすなわち、対空砲火の危害圏から離れるという意味だ。

ほどなく、艦隊の各所で砲炎が迸り、大気が微かに揺れる。輪形陣先頭の大型駆逐艦、主砲を前部に集中配備した巡洋艦、さらには空母までもが、自らに牙を突き立てんとする小さな狩人を火焰と硝煙で出迎える。

発砲から十数秒後、攻撃隊の進路に、真っ黒い花の絨毯が敷かれ始めた。

防空駆逐艦

電探に映る影と、見張り員から届けられる影。二つを確認しながら、一機艦輪形陣の先頭に行く。〃秋月〃は、〃利根〃からの射撃開始の指示を待っていた。

〃秋月〃型は、日本駆逐艦の中で最も大きいクラスだ。排水量は二千七百トンと、軽巡の〃夕張〃に迫る。

それを反映してなのか、艦娘の秋月も、他の駆逐艦娘と比べて大人びた容姿をしている。艶やかな黒髪を後頭部でまとめた彼女は、緊迫する状況の中でも、落ち着いて周囲を見回すだけの余裕があった。

敵編隊との距離は、すでに二万メートルを切った。雷撃機と爆撃機がそれぞれに分かれ、一機艦に迫る。

いくつかの隊に分かれた攻撃隊に、なおも味方戦闘機が追いつける。零戦や〃烈風〃が、敵編隊後方、あるいは上方から射弾を浴びせては、一機、また一機と敵機を漸減する。

——ありがとうございます。

心の中で礼を述べる。

対空砲火は、あくまで最後の砦だ。やはり、航空機を落とすには航空機が一番であり、いかに〃秋月〃が防空駆逐艦と言われるほどに優秀な対空戦闘能力を持つていようと、戦闘機の防空能力には劣る。

それでも、間もなく限界が来る。

距離が一万メートルを切ろうかという時、その指示がきた。

『全戦闘機離脱せよ』

防空指揮を執る〃利根〃からだ。その指示はすなわち、全戦闘機に対空砲火の危害圏から逃れることを促すものであり、同時に防空戦闘が戦闘機隊から〃秋月〃たちに委ねられた瞬間でもあった。

『六直艦、目標敵雷撃機。一航艦、目標敵爆撃機』

〃利根〃から射撃目標が割り振られる。より対空能力に優れる六直艦が雷撃機を叩き、爆撃機は回避を主体として対処するつもりなのだろう。

「目標、方位〇六五の敵編隊！」

艦隊の左舷正横から侵入を凶っている雷撃隊だ。距離が最も近く、数も多い。最大の脅威であると、秋月は判断していた。

機械的な駆動音が響く。艦橋頂部の高射装置が旋回し、それに合わせて、彼女自慢の長一〇サンチ砲も左舷を指向する。

「秋月」型は、日本海軍駆逐艦の中で唯一、対艦戦闘以外に主眼を置いている駆逐艦だ。日本海軍駆逐艦の象徴であった魚雷は、四連装一基に次発装填装置、計八本しかない。その魚雷にしても、今回の作戦に際して、「秋月」は機銃群と爆雷投射器に換装している。

主兵装は、長一〇サンチ連装高角砲四基。高射装置も最新のものが融通されており、その能力は駆逐艦の中でも群を抜いている。

高射装置が算出した射撃諸元をもとに、長一〇サンチ砲が旋回俯仰する。もつとも、狙いは低空進入を凶る雷撃機であり、照準はすぐに固定された。

「撃ち方、始め！」

秋月の号令から一拍、左舷に指向された長一〇サンチ砲八門が一斉に火を噴いた。六五口径という長砲身砲ゆえに、初速は速く、一万メートル先の敵機までは十秒足らずで到達する。

第一射の調定した時限信管が作動する前に、「秋月」の長一〇サンチ砲が再び発砲する。戦艦のそれに劣るとはいえ、発砲の衝撃は空気を震わせ、秋月の肌をピリピリと刺激する。

長一〇サンチ砲の装填速度は、毎分十七発から二十発。およそ三秒に一発の発砲が可能だ。人力装填であるがゆえに、妖精の熟練度にも左右される。

後方からも砲声が届く。防空指揮艦である「利根」はもちろんのこと、輪形陣左翼に位置取る「浦風」、「浜風」も、搭載する高角砲を振り立てる。一航艦は、「五十鈴」を中心として、盛んに敵爆撃機へ射撃を繰り返していた。

「秋月」が第四射の装填を待つ間に、高角砲弾が炸裂し始める。

接近する敵雷撃機の正面、時限信管を作動させた高角砲弾が、まるで真っ黒な花のように次々と炸裂する。砲弾の断片が高速で飛び散り、鋭いナイフとなって敵雷撃機に襲いかかる。

しかし、やはりと言うべきか、そう簡単に撃墜される敵機はいない。断片に襲われ、あるいは爆風に打ち据えられても、雷撃機は海面を這うようにして艦隊に迫り続ける。なかば執念じみたものを感じずにはいられなかった。

——それは、こつちだつて同じです！

「まだまだです！撃ち続けて！」

秋月は更なる弾幕の形成を命じる。合点承知、とでも言うように拳を突き出した妖精たち。高角砲内の熱気は増し、吐き出された薬莖の処理も惜しむように次弾を装填していく。

いよいよ、高角砲弾の効果が出始めた。

断片による被害が蓄積したのか、先頭に位置していた雷撃機が、フラフラと速力を落とし、やがて海面に突っ込む。それを皮切りにして、次々に撃墜の報告が入り始めた。

高角砲弾が正面で炸裂した敵雷撃機は、機首の原形が留まらないほどに押し潰されて、波間に飲み込まれる。

機体から炎が噴き出し、爆発四散して果てる敵雷撃機もいる。

輪形陣外縁の六直艦が、低空の雷撃機に狙いを集中したことで、効果的な弾幕が形成されているのだ。目標を絞ったことで、結果として弾幕の密度が上がる。

ただし。それは一部の弾幕を犠牲にしていることも意味している。

——っ！

敵爆撃機が「赤城」に向けて急降下を始めた、見張りが報せる。高空からの進入を試みていた敵爆撃機を、一航艦は完全に阻止することはできなかつたのだ。

高角砲、そして距離が近づいたことによる機銃も撃ち上げながら、「赤城」が舵を切り始める。急降下してくる敵爆撃機の真下に入り込むことで、回避を試みているのだ。

それだけではない。敵爆撃機は、外縁を固める六直艦にも、急降下を仕掛けてくる。狙われたのは「利根」、そして「秋月」だった。

妖精がこちらを振り向く。射撃目標をどうするのか、と聞いているのだ。

その問いかけに、秋月は首を振った。

「目標は敵雷撃機のままです。機銃のみ、敵爆撃機に対応！」

脅威度が高いのは、雷撃機で変わりない。急降下爆撃は恐ろしい相手に違いないが、コツさえ掴めば投弾の妨害も回避も十分に可能であるし、第一一撃で沈むことはめつたにない。まして今の「秋月」は、即轟沈に繋がる魚雷を搭載していない。

一発でも当たれば艦隊行動に支障をきたす魚雷、これを搭載した雷撃機の方が、最優先で撃墜すべき目標だ。

艦橋の天井を見上げる。そこに敵爆撃機は見えない。頼みの綱は見張りの妖精だ。

「取舵一杯！」

敵爆撃機が左舷方向から急降下に入った旨が報告されるや否や、秋月は転舵を指示した。駆逐艦とはいえ、満載で三千トンにもなる「秋月」ともなると、舵が利くまでのタイムラグは無視できない。実際に舵を切ってから十秒近い間を置いて、艦体は左へと曲がり始める。逆に、艦橋含めた艦上構造物は、遠心力で右舷側へと傾く。秋月は両足に体重をかけて、傾斜する艦橋に踏ん張った。

「戻せ！」

舵を中央に戻し、当て舵をして針路を安定させる。敵爆撃機はすぐ正面だ。

「砲撃続行！」

転舵に合わせて旋回した長一〇サンチ砲は、変わらずに砲炎を吐き続ける。その様子を前甲板に望みながら、秋月は艦を直進させる。

航空機は、降下角度が深くなればなるほど、操縦が難しくなる。ゆえに、急降下してくる敵爆撃機の真下に潜り込むことで、その照準を難しくする。

加えて、艦体各所から上空に向けて撃ち出される機銃が、敵爆撃機の照準を狂わせる。

「秋月」に急降下爆撃を仕掛けてきたのは、九機の敵爆撃機であった。特徴的な三角形の機体が、高空から襲い来る。その編隊を二五ミリ機銃弾が包み込むが、落ちる機体はない。唯一、弾幕にもろに突つ

込んだ一機が、コントロールを失って落伍したくらいだ。

一方で、敵雷撃機に対する射撃も続行されている。八門の長一〇サンチ砲は変わらずに射弾を送り出し、調定された時間通りに信管を作動させる。射撃の効果は出ているようで、中には投雷を諦めて魚雷を投棄し、離脱していく敵雷撃機もいる。

砲身が焼け付くほどの連続射撃を繰り返す中、ついに敵爆撃機が投弾する。

横隊を敷いた敵爆撃機が、隊長機と思しき先頭の機体に続いて次々に爆弾を切り離す。各機の腹から離れた爆弾の弾頭が太陽光に黒光りして、甲高い音と共に降り注ぐ。

——当たるな・・・！

やれることは全てやった。後は秋月に、戦場の女神が微笑むか否か。

艦橋左舷からは、同じように回避運動を取る「利根」が見えた。先に投弾を許したのだろう、その周囲に水柱が立ち上り始める。海面を突き破り、遅れて炸裂した爆弾が、沸騰した海水を天へと突き上げる。瀑布に囲まれ、姿を隠す「利根」は、轟沈してしまったようにも見える。

次の瞬間、秋月の視界を塞ぐように、第一弾の水柱が噴き上がった。爆圧が艦底から突き上げ、艦橋も揺れる。大丈夫だ。至近弾ではあるが、命中はしていない。

それを皮切りにして、次々に爆弾が降り注ぐ。第二、三弾。水柱はどれも左舷に弾着しており、どうやら「秋月」の対空機銃と回避運動は、敵機の狙いを外すことに成功したらしかった。

このままやり過ごせるか。同時に弾着した第四、五弾の水柱を見つめ、秋月は固唾を呑む。

第六弾は艦首のすぐ前に弾着し、爆圧のアップercットを「秋月」に見舞う。艦体がわずかにそり上がり、艦橋内の秋月も仰け反る。海水が錨鎖を通すホースパイプを逆流し、艦首甲板を盛大に濡らした。

第七弾が迫る。その風切り音に、秋月は言いようのない不快感を感じ取った。この爆弾は、今までと違う。

風切り音が途切れる。次の瞬間、艦橋の後方から経験のない衝撃が襲ってきた。大男に投げ飛ばされたかのような勢いに、秋月は思わず前にのめる。艦装を背負っていないなかったら、そのまま床に投げ出されていたに違いない。

——喰らった・・・！

衝撃の大きさからして、艦の中央付近であろうか。艦装を通じて伝わる痛みは、背中を舐めるように広がっていく。寒気に似た震えに折れそうになる足を、辛うじて踏ん張る。

「被害報告！応急修理急いで！」

秋月が叫んだ直後、最後となる第八弾が弾着した。こちらは艦尾付近に落ちたらしく、飛び散る水滴がスコールとなって甲板を打った。バラバラと激しい音が聞こえる。

程なく、ダメージコントロールを担当する妖精から報告が上げられる。命中箇所は魚雷発射管の設置箇所。増設した機銃二基とK砲一基が吹き飛ばされたが、幸い機関区に被害はなく、戦闘、航行共に支障なしとのことだった。

冷や汗ものだ。もしも魚雷を下ろしていなかったら、命中した爆弾に巻き込まれて誘爆を起こし、「秋月」は航行不能に陥っていた可能性が高い。

額の汗を拭いながら、秋月は射撃を続けていた敵雷撃機を見遣る。こちらもすでに投雷を終え、退避を始めていた。損害が大きかったらしく、中央の空母への投雷は諦め、輪形陣左翼の「利根」、*浦風*、「*浜風*」を狙っている。もともと、それも有効な射点に取り付けているとは言えず、三艦はすかさず回避運動に入っていた。

敵雷撃機には、艦隊右舷に回り込んで攻撃しようとしているものがまだ残っている。これに相対するべく、「秋月」が舵を切り、輪形陣先頭に戻ろうとした時だ。

「*赤城*」に命中弾?！」

艦隊中央、一際巨大な空母の甲板後方から上がる黒煙に、顔から血の気が引くのを感じた。

紙一重

艦体に衝撃が走った。四万トンを超える巨体が、微かに震え、その痛みを訴える。地震大国に産まれたせいで慣れてしまった揺れという現象に、どこか落ち着き払った心持ちで、塚原は指示を飛ばす。

「被害報告」

そう言いつつ、艦橋右舷に広がる飛行甲板を見遣る。視界の範囲に、被弾痕らしきものは見受けられない。まっさらな木甲板が横たわるだけだ。

報告が寄せられるよりも前に、残った敵弾が降り注ぐ。艦橋のすぐ脇に海水の塊が沸き起こり、左舷側の視界を真っ白に染める。艦底部から突き上げるような振動が伝わってくるが、「赤城」は動じた様子を見せていなかった。

「四番高角砲に命中しました。飛行甲板への損害は確認できません」妖精からの報告を赤城が読み上げる。塚原は内心で安堵の溜息を吐いた。

例え艦体は無事でも、甲板に穴を穿たれれば、その時点で「赤城」は全ての戦闘能力を失うことになる。

「消火作業に勤めます」

「よろしく頼む」

赤城に領いて、塚原は艦隊右翼を見た。そこに位置取る「筑摩」、
「谷風」の二艦は、いまだ対空戦闘に参加していない。しかしながら、その高角砲はすでに、新たな敵機に対して砲口を指向していた。

『六直艦、一機艦、目標右舷敵雷撃機』

「利根」から新目標の指示が来る。他の攻撃隊を迎撃している間に、艦隊右舷方向に回り込んできた敵雷撃機が、間もなく対空砲火の有効射程圏内に入ろうとしていた。

直掩隊はすでに離脱している。濃緑と明灰白色を塗られた機体が翼を翻し、高度を稼ぐ。それが、対空射撃の開始が近いことを如実に示していた。

「目標、方位二二五の敵編隊」

先ほどまで敵爆撃機に対して射撃を行っていた「赤城」の高角砲が、今度は砲身を提げて、敵雷撃機に照準をつける。改装によって換装された長一〇センチ砲が、その真価を発揮する時だ。

「来るでしようか？」

どこかのんびりとした様子で、赤城が呟く。輪形陣中央の「赤城」からは、まだ高角砲の有効射程に敵雷撃機を捉えられていない。

「一発逆転ホームラン狙いは、十分に考えられるな。回避運動で陣形がわずかに崩れてる。この機会を見逃してくれるほど、深海棲艦も甘くはないからな」

塚原が答えるのと同時に、「筑摩」と「谷風」が発砲した。振り立てた一二・七センチ連装高角砲から褐色の炎が噴き出し、艦隊に迫る脅威を排除しようと一気呵成に畳みかける。

塚原は、海面すれすれをミススマシのように這っている影に視線を移す。三角形に近いフォルムは、どこか紙飛行機のように、滑稽ですらある。しかし、その腹で黒光りしている鋼鉄の槍は、軍艦の腹を容易く貫くことができる、恐ろしい兵器だ。

放たれた高角砲弾が、敵雷撃機の周囲で炸裂し始める。真っ黒い雲が敵編隊を包み込み、その姿を隠す。すわ、まとめて敵機を屠ったようにも錯覚してしまうが、数秒後には敵雷撃機が雲の合間から健在な姿を現す。

二艦の対空射撃は続く。およそ六秒おきに、高角砲が火を噴き、調定された時限信管を作動させて、砲弾が弾片を周囲にまき散らす。衝撃波が敵雷撃機を揉みしだき、容赦なく揺さぶっている。

それでも、敵雷撃機はなかなか落ちない。相変わらず頑丈な機体だ。

その雷撃機めがけて、なおも各艦から対空射撃が続く。艦上で橙色の炎が踊るたびに、超音速で高角砲弾が飛び出し、雷撃機の群れに突入していく。

編隊のほぼ中央付近で、時限信管が作動し、真っ黒な花卉が広がる。弾片をもろに受けたのか、一機がフラフラと高度を下げていく。

爆風に押し潰された一機は、原形を留めずに海面に叩きつけられ

る。

「『秋月』、撃ち方始めました」

赤城の報告に、塚原は輪形陣前方を見遣る。回避運動の結果、一時陣形から外れていた防空駆逐艦が、盛んに主砲を撃ち上げる。艦中央付近からは、被弾のものと思われる黒煙を引きずっているものの、それを意に介することなく、艦隊を守る盾としての役目を果たす。

「『浜風』、撃ち方始めました」

輪形陣最後尾の駆逐艦も、対空砲火を再開する。陣形は乱れたが、一機艦はようやく本来の対空射撃を取り戻したことになる。

「敵編隊、距離一〇〇。高角砲、撃ち方始めます」

「よろしく頼む」

塚原の言葉に、赤城が頷く。次の瞬間、飛行甲板右舷の長一〇センチ砲が、一斉に咆哮した。戦艦のそれには劣るとはいえ、八門の一斉射撃ともなれば、艦上に響く砲声も猛々しい。

後続の一航艦各艦も高角砲を撃ち上げる。変則的な複縦陣を敷いている一航艦は、最前部に『赤城』、最後部に『五十鈴』を配し、『加賀』と『飛鷹』、『千歳』と『千代田』が並んでいる。この内、右舷から迫る敵雷撃機に対して射撃が可能な、『赤城』、『飛鷹』、『千代田』、『五十鈴』が対空砲火に加勢する。

投射される弾量が増えたことで、雷撃機にも被害が蓄積し始める。それでも、概算で三十機になろうかという全機を撃墜することは不可能だ。

「敵雷撃機、真っ直ぐこちらに向かってきます！」

艦橋トップ、防空指揮所からの報告を、赤城が口頭で伝える。雷撃機の狙いは、あくまで輪形陣中央、一航艦の空母ということか。

「距離が二〇を切ったら、回避運動に入ってくれ」

雷撃機の投雷距離は、一千メートル前後だ。艦体の大きな『赤城』が転針するまでにかかるロスタイムを考えれば、距離二千メートルで舵を切りだすことで、敵雷撃機に投雷位置の修正を許さないことになる。

赤城もそれをわかっている様子で、対空砲火を放ちながら、敵雷撃

機との距離を計り続けている。

「筑摩」、谷風の対空砲火に、機銃の曳光が加わり始めた。しばらくすると、「秋月」も対空砲火を機銃に切り替える。敵雷撃機は、すでにそこまで、間合いを詰めているのだ。

「距離六五」

海面を突き進む敵雷撃機は、高角砲弾と機銃の嵐の中を、怯むことなくこちらに向かってくる。丁度、「秋月」と「筑摩」の間を通過して来るコースだ。

無数の曳光弾を引いている機銃弾が、海面をミシン目のように這いまわって、小さな水柱を上げ続ける。

正面からまともに機銃を受けた機は、機体の各所に穴を穿たれ、白煙を引きずって波に飲み込まれる。

機銃と高角砲弾の炸裂に挟みこまれた機体は、なす術なく空中で分解して、バラバラと海面をざわめかせる。

「距離三五」

敵雷撃機がついに、六直艦の弾幕を抜けて、一航艦に迫る。その後から追いつがるようにして、「秋月」と「筑摩」の機銃弾が浴びせかけられるが、それらが新たに敵雷撃機を捉えることはない。

後は、「赤城」たち自身の対空砲と、回避運動に託された形だ。

魚雷の投網を投げかけようとしている敵雷撃機を、真つ直ぐに睨みつける。ここが正念場だ。

「赤城」からの対空砲火にも、機銃が加わる。改装時に増設された機銃が唸りを上げ、葉莢を銃座周辺にばらまきながら、敵雷撃機に口径二五ミリの弾丸を吐き出し続ける。

曳光弾のシャワーが、敵編隊を包み込む。ともすれば、その勢いのみで敵雷撃機を絡め取り、海の藻屑に変えてしまいそうなものだが、そんなことは起きない。輪形陣を突破する間に、二十数機まで数を減らした敵雷撃機だが、それ以上戦力を削られることなく、まるで感情を欠落させたように、こちらへ向かってくる。

敵編隊の狙いは、おそらくこの「赤城」と、対空砲火が貧弱な「千代田」だ。

「距離二〇。取舵一杯。最大戦速」

先に決めた通り、赤城が転針を指示する。舵角指示器の針が一杯まで振り切れ、舵が最大の効力を発揮しようと艦尾で頑張っていることを示す。

それでも、艦体はすぐには曲がらない。四万トンもの艦体が引き連れている慣性力は非常に大きく、艦の方向を変えるにはそれなりに時間が必要だ。

「敵機、投雷した模様。距離一〇」

「赤城」が転針するよりも前に、投雷点に辿り着いた敵雷撃機が、腹に抱えていた魚雷を落とした。活躍の時を虎視眈々と待ち望んでいた魚雷は、海面に突き刺さるや否や、正常にその主機を作動させて、真っ直ぐに「赤城」へ猛進してくる。航跡が白く海面に伸びていた。

この時になって、ようやく舵が利き始める。鋭い「赤城」の艦首が、穏やかな海面を引き裂きながら右へ右へと向いていく。その先には、刻一刻と魚雷が迫っていた。

投雷を終えた敵雷撃機が、転針していく「赤城」の艦首を掠める。

「赤城」は、間もなく魚雷への正対を完了しようとしていた。

「舵戻せ、中央」

舵が戻され、当て舵によって針路が安定する。艦首方向、飛行甲板前縁の向こう側から、魚雷の真っ白な航跡が、海中を進む鉄槍となつて「赤城」に襲いかかろうとしていた。

——後は運次第だ。

やれることは全てやった。ここから先には、ある種の割り切りが必要だった。

「赤城」は機関を唸らせて、魚雷に向けて突き進む。その距離がゼロになるまで、さして時間はかからなかった。

艦首の先、迫る魚雷の白い軌跡。泡立つ海面、その下の淡い青色の影が、艦首の向こう側に吸い込まれた。

赤城が息を飲む。塚原もまた、丹田の辺りに力をこめ、これから襲ってくるであろう衝撃に備える。

しかし、予想に反して、魚雷炸裂の衝撃は襲ってこない。「赤城」

は相変わらず、穏やかな海面を、全速力で駆けている。

「・・・魚雷、本艦の後方に抜けました」

どこか拍子抜けした様子で、赤城が報告した。それから、チラリとこちらを窺ってくる。

「・・・水流が、魚雷を跳ね飛ばしたんだろう」

最大戦速を發揮する大型艦の周囲には、大きな水の流れが生じる。四万トンの艦体に押し退けられた海水が、ある種の壁となって、魚雷の進路を狂わせたのだろう。

各部に被害はない。対空砲火と回避運動、また自らの排水量が、
赤城”に被雷を許さなかったのだ。

だが、万事うまくいくわけではない。

後方から、おどろおどろしい轟音が届いた。反射的に音の方向を振り向く。

“赤城”と同じように回避運動を取っていた小型空母の舷側に、遙かな天を突く勢いで海水のオブジェがそびえ立つ。白濁した海水は、火薬を含んでいるからか、わずかにくすんで見えた。それが、船にとって最悪の事態が訪れたことを示している。

「“千代田”被雷ー」

件の軽空母は、回避運動を取ったものの、最後の最後で運を使い果たしてしまったのだろう。

被雷箇所は艦首付近であろうか。“千代田”は速力を落とし、応急処置を始めている。今のところ、沈没の兆候はない。

『こちら“千代田”！艦首右舷に被雷ー。ダメージコントロールにかかります！』

千代田が報告する。

艦隊の速力を落とし、陣形を再構築するように命じてから、塚原は去っていく敵編隊の方向を見る。

これで終わりではない。あれだけの防空戦術を駆使しても、艦隊の被害をゼロにすることはできなかったのだ。

敵編隊が去っていく先、第二次攻撃隊の準備をしているであろう敵機動部隊を、塚原は睨む。陽が沈み、航空機の世界が終わりを告げる

には、まだ四時間近い時間があつた。

突撃隊形作レ

一機艦が敵機動部隊からの攻撃を受けている頃——
西へと徐々に傾きつつある太陽に、蒼い海面が照らされている。頭上に広がる空とはまた違った蒼を湛える海は、波も穏やかで、キラキラと陽光を反射する。眼下に見える絶景につかの間頬を緩めた時、その報告はやって来た。

攻撃隊を誘導する「翔鶴」艦攻隊長妖精は、水平線上に目的の物を見つけ、内心で秘かにガッツポーズを作る。

攻撃隊正面、距離は六万といったところだろうか。水平線ギリギリに、波とは違う影が見える。チャートを確認すれば、それが攻撃隊が目標としてきた、敵機動部隊であることは明白だった。

その上空。まだ蚊ほどの大きさもないが、黒い影がブンブンと飛び交っている。恐らくは敵の直掩戦闘機。

二機艦を飛び立つ直前、一機艦が敵索敵機に見つかった旨、報告があった。とすれば、恐らく目の前の「乙イ」部隊は、そちらへ攻撃隊を差し向けたはずだ。

今は、第二次攻撃隊の準備中か。それとも、こちらの接近に気づいて、直掩機の増勢にかかっているか。

前者であってほしいものだが、後者であるとみるべきだろう。「乙イ」側もまた、日本海軍がその存在を掴んでいると、知っているはずだ。甲板上に並べていた攻撃隊をどかしたら、次は来襲するBOBの攻撃隊に備える。それが定石であり、最善手だ。

案の定、と言うべきか。敵艦隊上空の敵戦闘機の動きが、にわかには慌ただしくなる。敵のレーダーに見つかったか。

制空隊の「烈風」二十四機が、「八四三二」発動機の唸りも高らかに、攻撃隊の前に出る。士気は高い。必ずや、攻撃隊に活路を開く。そんな気合がひしひしと感じられた。

制空隊を率いる「翔鶴」戦闘機隊長の「烈風」を見遣る。「任せろ」と言わんばかりに、力強くバンクをした「烈風」が、グングン攻撃隊を追い抜いていった。

敵直掩機との戦闘に向かう制空隊を見送りながら、艦攻隊長妖精は「突撃隊形作れ」の打電を後部座席の電信員に命令する。翼を連ねる「流星」たちが身を寄せ合い、襲撃が予想される敵戦闘機に備える。制空隊と敵直掩隊の戦闘が始まったのは、「流星」たちが敵機動部隊までの距離四万を切った時だ。

二十四機の「烈風」と敵直掩戦闘機の機影が交錯し、飛行機雲を引きずりながら入り乱れる。初撃で落ちた機体は、彼我共にない。鋭く身を翻した戦闘機たちが、空中で激しいダンスパーティーを始める。

その様子を眺めながら、各機に目配せを飛ばし、バンクと共にわずかに機体を滑らせる。深海棲艦には悪いが、この「流星」も、艦攻隊長妖精も、ダンスは苦手だ。パーティーは眺めているだけでいい。

下手にダンスの輪に巻き込まれないように、攻撃隊は敵艦隊への進入路を変える。

その時、空戦場から抜け出してきた、空気の読めない敵戦闘機の影が見えた。数は多くないが、脅威であることには変わらない。襲撃を予感して、身構える。

攻撃隊に最後まで張り付いていた十六機の「烈風」が、わずかに前に出る。敵戦闘機への最後の砦だ。彼らの腕に期待するしかない。

それと同時に、スロットルレバーと一体化した発射把柄の安全装置を外す。艦爆の流れをくむ「流星」は、翼内に二〇ミリ機銃を備えている。いざとなれば、これで反撃するのだ。もともと、重い荷物を抱えた「流星」たちが、戦闘機の機動についていけない道理はない。あくまで牽制だ。

敵戦闘機は、他には目もくれないことなく、一直線に攻撃隊の方へやって来る。それを防ごうとする「烈風」も必死だ。すれ違いざまに銃火を交わすと、鋭いターンを繰り返して、ダンスの誘いを無視した無礼者の背中を追いかける。

「烈風」の機銃と、敵戦闘機の機銃、両者はほぼ同時にその調べを奏でた。

攻撃隊の「流星」たちは、牽制の弾幕を形成しつつ、機体をずらしながら射線から逃れようとする。しかしながら、そこにはやはり限界が

あつた。『天山』より良好とは言え、魚雷を抱え込んだ攻撃機の機動性など、たかが知れている。

弾幕を抜けてきた敵戦闘機に、二機の『流星』が喰われる。さらに一機が白煙を噴いて、速度を落とした。

とはいえ、敵戦闘機も無事ではない。『烈風』に撃たれて二機が、さらに『流星』からの弾幕に正面から突っ込んだ一機が、大威力の二〇ミリ機銃に捉えられて黒煙を引きずり、あるいは瞬時に炎の塊と化する。

残った敵戦闘機は、そのまま攻撃隊の後方へと抜けていった。追い抜きざまに、後部銃座から一三ミリ機銃が放たれるが、当たる道理はなかった。後ろに抜けた敵機のことには後部銃座に任せ、艦攻撃隊長妖精は前を見据える。他に、『烈風』の壁を突破してくる敵戦闘機はないか。敵機動部隊への距離はどの程度か。

敵機動部隊輪形陣中央の空母からは、依然として敵戦闘機が飛び立つ。数はまばらで、五月雨式だが、それでも増勢されていることに変わりはない。敵機動部隊への肉薄時に、障害となるのは明白だ。

輪形陣外縁までは二万五千メートルといったところだろうか。艦攻撃隊長妖精は、編隊の散開タイミングを、輪形陣外縁からの距離一万五千メートルとした。

航空機が一万メートルの距離を縮めるのに、さして時間はかからない。快速の『流星』であれば、ものの二分といったところだ。

それでも、その二分の間、攻撃隊は敵戦闘機の銃撃にさらされることになる。

『烈風』のエアカバーは厚く、強力だった。しかし完璧とはいかない。時折その壁を突破してきた敵戦闘機が攻撃隊に喰らいつき、一機、二機と『流星』を撃墜する。

翼をもがれるもの。穴だらけになったもの。発動機をやられたもの。そうした機体が、編隊から落伍する度に、空いた部分を埋め合わせる。

今はただ、ひたすら突き進むしかない。

敵戦闘機の五回目の襲撃が攻撃隊右翼に抜けた頃、ついに輪形陣外

縁との距離が一万五千メートルを割った。

無線を飛ばすまでもなく、爆装隊は上昇へ、雷装隊は下降へ転じる。さらに各航空隊ごとに分かれて、狙うべき相手を見定める。

日本海軍の航空機戦術はシンプルだ。輪形陣外縁を命中率の高い急降下爆撃で叩き、しかる後に生じた対空砲火の空白部分から、雷撃隊が中央に侵入する。

今回もそのセオリーは崩さない。航空隊は大きな「個」の集合体だ。アクロバティックな戦術は執れない。だからこそ確実に、訓練通りにやっつけていく。

上昇した爆装隊の様子を見遣る。高度は四千メートルと言ったところだろうか。五百番を爆弾倉内に抱えた「流星」は、雷装よりもわずかだが身軽だ。「誉」発動機を高らかに吹かして、輪形陣上空へと迫る。

その後方から、敵戦闘機が追いつがる。それを阻むのは「烈風」だ。巧みな動きで敵戦闘機を寄せ付けない。

散開した爆装隊に対して、対空砲火が始まった。最初に発砲したのは、輪形陣外縁の駆逐艦と巡洋艦。続いて空母も高角砲を撃ち上げる。

対空砲火の真つ黒な花畑の中、爆装隊は臆することなく、敵艦へと接近していく。対空砲火の効果を減衰させるために編隊の間隔を広くした爆装「流星」を率いるのは、「蒼龍」の艦爆隊長だ。

投弾点に達したのだろう。爆装隊が次々と翼を翻し、急降下に入る。目標は輪形陣外縁、丁度雷装隊の正面を遮る形の巡洋艦と駆逐艦だろうか。特に巡洋艦の方は、艦体をハリネズミのように覆う対空火器を盛んに撃ち上げている。厄介だ。

急降下に入った「流星」を、さらに激しい対空砲火が出迎える。高角砲だけではなく、機銃の青白い曳光までが、爆装隊を包み込んだ。弾幕に捉えられた「流星」は、ずたずたに引き裂かれ、あるいは跡形もなく爆砕されて、炎の塊となる。

それでも、全機を阻止するには至らない。

爆装隊の戦術は巧みだった。従来の、長機を先頭とした単縦陣での

急降下ではなく、横陣を敷いての攻撃だ。この方法は命中率の低下を招くが、対空砲火を分散させることができる。

さらに、敵艦を両側から挟み込むように、数機ずつに分かれて攻撃を仕掛ける。どちらに逃げてても、確実に捉えられる算段だ。

この戦術は、日本機動部隊の中で最も艦爆隊の練度が高い、*「蒼龍」と「飛龍」*の隊だからできる技だった。

雷装隊の目の前、輪形陣外縁の三か所で、ほぼ同時に水柱と火柱が生じた。白濁するカーテンの内側で、火薬が弾けて赤々と輝く。それは正しく、艦攻隊への道が開かれた合図だ。

水柱が収まった時、輪形陣右翼を構成していた巡洋艦一隻と駆逐艦二隻から黒煙が噴き上がっていた。駆逐艦二隻はすでに傾斜して、速力も落ちている。巡洋艦は耐えたようだが、後部が激しく燃えており、対空砲火が減殺されたのは明白だ。

仕事はしたぞ。そう言うように、敵艦艦上をフライパスした爆装隊が悠々と高度を稼ぐ。

今度は、こちらの番だ。その意志を込めて、「ト連送」の打電を命じる。全機突撃せよだ。

輪形陣外縁との距離は、すでに一万メートルを割っている。先ほどから対空砲火が飛んでくるが、その勢いは爆装隊に対するそれよりも明らかに衰えた。

行ける。これならば、輪形陣外縁を食い破り、中央の空母を狙える。艦攻隊長妖精はそう確信した。

四隊に分かれた雷装*「流星」*は、速度を投雷可能なギリギリのところまで上げて、輪形陣中央を目指す。一方で、高度は海面を這うように、プロペラの先端が波を叩いてしまうのではというほど下げている。

その頭上に、高角砲の炸裂音が響く。鳴動した大気が機体を容赦なく揺さぶり、弾片が翼を叩いて嫌な音を上げた。何度聞いても聞ききれない。

炸裂した高角砲弾の爆圧をまともに受け、一機が海面に叩きつけられる。

鋭い弾片に補助翼をもぎ取られた「流星」が、バランスを失って弾幕にもろに突っ込んだ。

機銃弾のシャワーも降り注ぐ中、艦攻隊長は自らが率いる十二機の「流星」の狙いを、正面に見えているヲ級に定めた。右舷の高角砲をこれでもかと撃ち出す深海棲艦の主力空母を、眼光で沈めんばかりに睨みつける。

超低空飛行を続けていた雷装隊は、ついに輪形陣外縁を突破した。黒煙を引きずる巡洋艦の艦尾を掠めるようにして内部に侵入した艦攻隊長機とヲ級の距離は、ついに四千を切った。

ヲ級の舷側に、機銃発砲の小さな光が連続してきらめく。次の瞬間、弾丸のシャワーが降り注ぎ始めた。まるでミシン目のように海面を打つ機銃弾。炎の礫が、燃える握り拳となつてこちらに襲いかかる。

その中を、雷装隊はさらに距離を詰める。

片舷からの投雷であるため、回避もされやすい。それゆえ、ギリギリまで、敵空母の進路を見極める必要があつた。

編隊の中央付近で炸裂した高角砲弾が、「流星」のエンジンカウルを引き裂く。

機銃弾に方向舵と昇降舵を破壊され、錐揉みになつて落ちる機体もある。

艦攻隊長機の翼を機銃弾が掠めたのも、一回や二回ではない。

距離が二千を切った時、右側から強烈な光が発せられ、防弾ガラスに反射した。すぐ右横の列機が火達磨になつて速度を落とし、海面の衝突する。燃料槽を撃ち抜かれたのだろうか。

何かを思っている暇はない。敵艦はもう目の前。あと少しだ。

ヲ級が舵を切る。こちらに艦首を向け、魚雷を回避するつもりなのだろう。

その動きを見極め、投雷位置と角度の最終調整を行う。まもなく、投雷距離としては標準的な、一千メートルだ。

左翼方向から、発動機にも負けない轟音が聞こえてきた。先に投雷した雷装隊が、他の敵艦に見事魚雷を命中させたのだろうか。

次は我々だ。その想いをこめ、魚雷の発射レバーを引く。途端に機体が軽くなり、ふわりと浮かび上がる感覚がした。それを抑え込み、なおも低空飛行を続ける。

他の列機も投雷を終えた旨、報告がなされる。それに軽く頷いた艦攻隊長は、敵空母の甲板すれすれで引き起こしをかけ、フライパスした。そのまま、戦果を確認するべく、機を上昇させる。

回避運動を試みる敵空母のほぼ正横から、真っ白い航跡が迫る。数は九本。扇状に放たれたそれから逃れる時間は、ほとんど残されていない。

そして、その時が来た。

敵空母の艦尾付近、白線が吸い込まれ、一瞬の静けさが訪れる。次の瞬間、天を突く勢いで海水のオベリスクが立ち上がった。数は二本。巨大なヲ級の艦体が、衝撃で震えている。

重力に従って崩れ行く水柱が、太陽に照らされて白銀にきらめいていた。

静謐ノ海、激動ノ空

トラック環礁攻撃の主力となる一挺艦は、一機艦よりの方位一〇五、距離二十五海里の位置を、真東に向けて航行していた。

全十五隻のBOBが敷くのは、帛式防空陣形。パラオ泊地で産み出された、前方突破型の防空陣形だ。

その中央。山のような二隻の巨艦が、静かに海面を切り裂いている。日本海軍最大の戦艦姉妹、「大和」と「武蔵」だ。

一挺艦旗艦である「武蔵」に後続する「大和」の艦橋トップ、防空指揮所。戦闘即応状態でオートナビゲーションを設定した大和は、足元まで届きそうな長髪を風に揺らして、そこから艦隊全体を見回した。

トラック環礁北方では、すでに大規模な機動部隊戦が始まっている。しかしながら、激しい戦場の空気とは裏腹に、この一挺艦は静かな航海を続けていた。今のところ空襲はないし、敵艦隊と接触もない。潜水艦発見の報告と対潜攻撃は一応あったが、それもわずかに二回だけだ。

「・・・本当に、静かですね」

ポツリと呟いた声に応えるのは、艦上を吹き抜ける風のみであった。

その時、背後でブザーが鳴る。旗艦から入電があったことを報せる音だ。何か動きがあったか。

踵を返した大和は、入れっ放しにしておいたスピーカーからの声に耳を澄ます。

『「武蔵」より各艦。一機艦より入電。敵味方不明編隊接近中』

——もう来た・・・!?

一機艦への第一波攻撃が去ってからまだ四十分ほどだ。今頃一機艦は、収容した直掩戦闘機隊に燃弾補給を施し、甲板上に並べて、カタパルトから撃ち出しているところだろう。

一機艦のいる方を見るが、二十五海里の彼方ではさすがに「大和」の艦橋トップからでも見る事ができない。電探ならば辛うじて捉

えているだろうか。

上空を見遣る。そこを飛んでいるのは、「祥鳳」から発艦した上空直掩の零戦十二機。一挺艦の空の守りだ。

——祈るしか、ないのですね。

階下の第一艦橋へと続くラツタルを慎重に降りながら、そんなことを思う。

残念ながら、「大和」には二十五海里離れた味方を救援する能力はない。自慢の巨砲も、迫りくる敵機を叩き落とすことはできない。

今できることは、万が一敵編隊がこちらへ来た時に備えること。そして、明日以降の環礁攻撃を、必ずや成功させること。

艀装の前に立つ。戦艦級に相応しく巨大なそれを背負い込む。

「ブレイン・ハンドシエイク」

途端、記憶と時間の奔流が、大和を押し包む。それはかつて、自らと同じ名前を冠していた巨大戦艦の記憶。苦しくも懐かしい記憶。

大和は今、「大和」と一つになる。

精神同調が完了し、大和はゆっくりと目を開く。見慣れた艦橋は、どこか柔らかな光に満ちていた。

「精神同調完了。システム正常」

艦体各所の状態が、自らの感覚となってわかる。前進に伴ってまわりつく風まで感じられそうだ。

「オートナビゲーションを解除。舵もらいます」

ジャイロコンパスの通り、針路を保っていたオートナビゲーションの設定が解除され、マニュアルに移行する。後は補針も大和の腕次第だ。

『こちら「霞」。潜水艦を探知したわ。これより掃討に向かう』

栗田からの許可が出るや、すぐに舵を切る二隻の駆逐艦。その姿を目で追いかける。

* 日没までは、後三時間を切ったところだ。

「直掩隊は、間に合いそうにありませんね」

発艦作業を続ける甲板上の零戦を冷静に見遣って、赤城はそう言っ

た。全く同意見の塚原は、それに対して頷くだけに留める。

第一波攻撃があつた後、一機艦各艦は被害を集計しつつ、直掩隊の回収作業に入った。燃料はともかく、連続した防空戦闘のために半数近い機体が弾薬不足に陥っており、補給の必要が生じたためだ。

しかしながら、ここで問題が生じた。

格納庫には春島攻撃を担当した機体が収容されている。これらの機体は、敵の第一波攻撃が来襲する直前に回収されていた。その直後に対空戦闘が開始され、激しい運動が予想されたため、補給作業にストップがかけられたのだ。

空母の格納庫は、爆弾やら魚雷やらガソリンやら、可燃物の宝庫である。補給作業には、特に慎重さが要求される。今回は、それが完全に裏目に出た。

攻撃隊が引き上げた時点で、回収する直掩隊と交代が可能な機体は、春島攻撃に参加した戦闘機の半数程度でしかなかった。

とりあえず、交代の機体を上げ、直後から直掩隊の回収を開始した。回収した機体は最前部の昇降機から格納庫に降ろされ、弾薬を補給される。しかし、例えば補給が完了したとしても、直掩隊の着艦作業が終了して、飛行甲板前部に集められた全ての機体を下ろし終わるまで、新たに航空機を上げることができない。

同じ全通甲板でも、現用空母と違ってアングルドデッキを有していない「赤城」は、発艦と着艦を同時に行うことはできないのだ。

かくして、新たな敵編隊の出現に、直掩隊は間に合っていないかった。「先の攻撃隊から、まだ一時間弱。『乙イ』からの第二次攻撃隊とは考えにくいですね。とすれば、別の機動部隊でしょうか」「だろうな」

トラツク沖の機動部隊は全部で三つ。おそらくは付近にいた別の機動部隊から飛んできたものだろう。まだ発見していないが、暫定的に『乙ロ』と呼称することとする。

「攻撃精神旺盛なのは、さすがに元襲撃艦隊、といったところですね」「ごちちとしては、難儀な相手だ」

「まったくです」

ともかく今は、一機でも多く、直掩隊を上げることだ。

『上空の直掩隊は距離四万より迎撃を開始せよ。発艦中の直掩隊は艦隊上空で待機』

“利根”からの指示が飛ぶ。所属航空母艦関係なく、すでに高度を稼いでいる機体には、真つ先に敵攻撃隊の迎撃を任せ、しかる後に、現在発艦中の機体が高度を稼いだ後加わる。

とはいえ――

「回避運動が主体になります。ぶん回しますよ」

「頼む」

秩序立った組織的な防空戦闘は、残念ながら今回は望めない。戦闘機と対空砲火の壁を破って来る雷撃機や爆撃機も、第一波の時より多くなるだろう。そうなれば、後は艦娘の操艦術に頼る他なくなる。

距離が四万を切ったところで、先に上がっていた直掩の零戦と“烈風”が襲いかかる。それに応えるのは、敵攻撃隊の制空戦闘機だ。上空は瞬時に銃火の入り乱れる戦場となる。

――そう上手くはいかないか。

直掩隊の数が足りない。奮闘はしているが、制空隊の相手をするので手一杯といったところか。残った雷撃機や爆撃機は、悠々とこちらに接近してくる。

『全機迎撃開始。一航艦、六直艦は、対空射撃用意』

上空で待機していた残りの直掩隊も、スロットルを一杯に吹かして迫る攻撃隊に襲いかかる。とはいえこちらにも、十分な数があるとは言えない。いかに熟練した“赤城”や“加賀”の整備員と言えども、降ろしたばかりの機体全てをすぐに整備し、補給を行って甲板に上げることがは不可能だった。

残った直掩機はわずかに二十機。これが最後の盾だ。

翼を翻し、零戦が、“烈風”が、敵編隊に襲いかかる。これに対するは敵攻撃隊に最後まで張り付いていた三角形の戦闘機だ。

高速ですれ違う機体。敵戦闘機には目もくれず、零戦と“烈風”は攻撃隊の方に襲いかかる。斜め上方から攻撃隊に覆いかぶさるようにして銀翼をきらめかせた空の守護者たちが、襲撃者に鉄槌を振る

う。

二〇ミリ機銃が命中した敵機が、バラバラになって落ちていく。ミシン目のように機体を縫った一三ミリ機銃が燃料槽を直撃し、爆発四散する敵機もある。

推進器をやられたらしく、機体形状を留めたまま墜落していく敵機は、やがて海の蒼に吸い込まれていった。

一航過を終えた直掩隊に、敵戦闘機が追いつがる。あちらも攻撃隊を守ろうと必死だ。

鋭い旋回や横ロール、縦ロールがあちこちで繰り出され、乱戦の様相を呈し始める。何とか敵戦闘機を振り切った直掩隊の機体が攻撃隊に襲いかかり、一連射を加える。その後を敵戦闘機が追いかけて、再び巴戦に突入する。その繰り返しだ。

敵攻撃隊の数は、一向に減る気配がない。戦闘機隊の攻撃を受けて、一機、二機と撃墜されてはいるが、全体で百機もなる敵攻撃隊全体から見れば微々たるものだ。

輪形陣各艦が対空戦闘を始める前に、大きくその戦力を減じることが望めない。

「赤城」の左舷で、高角砲が旋回する。備えるのは急降下してくる爆撃機だ。雷撃機の方は六直艦に任せる。

次の瞬間、それまでまとまって進撃していた敵攻撃隊が散開した。輪形陣への突入態勢に入ったのだ。

『六直艦目標、敵雷撃機。一航艦目標、敵爆撃機』

「利根」からは予想通りの目標指示が届く。それからしばらくして、六直艦各艦が射撃を開始した。目標としているのは、左舷から侵入を試みる敵雷撃機の一群のようだ。

そして、「赤城」もまた。

「目標、方位〇〇五、高度三千の敵爆撃機」

赤城の指示が艦橋に響き、高射装置の導いた諸元に沿って高角砲が旋回俯仰する。中天を通過し、次第に低くなりつつある太陽が、砲口をギリギリと輝かせた。

「撃ち方始めっ」

健在な左舷高角砲三基が、轟然と砲炎を吐き出した。薬莖が排出され、開かれた尾栓から、装填手が新たな砲弾を詰め込む。すぐさま尾栓が閉まり、再び発砲。わずかに数秒という発射間隔が、長一〇センチ砲の売りだ。

「加賀」、飛鷹、千歳、千代田も続く。最後尾の五十鈴も、自らに備えられた一二・七センチ高角砲を振り立て、迫りくる敵爆撃機に砲弾を投げつける。

高空の敵爆撃機周辺で、高角砲弾が炸裂する。真っ黒い雲が空を覆いつくすのではないかという勢いだ。雷雲にも似た激しい空を、敵爆撃機は飛行する。

一方、六直艦も奮闘している。

艦中央部への被弾の応急処置を終えた「秋月」は、四基の長一〇センチ砲の性能にものを言わせて、猛然と対空射撃を続けている。狙うのは低空から侵入する雷撃機だ。真っ赤な火焰が、三、四秒おきに艦体の前後で沸き起こる。

激しい対空砲火が、敵攻撃隊の進撃を阻む。

しかし、その歩みを止めるまでには至らない。

その報告が、ついにやって来た。

「敵爆撃機、急降下！目標は「飛鷹」です」

黒光りする異形の艦載機たちが、一斉に身を翻すと、その翼を連ねて輪形陣中央に襲いかかってきた。

三時間

「戻せー」

両舷で迸る高角砲から、硝煙の匂いがここまで漂ってきた。鼻をつく匂いが、戦場の激しさを如実に物語っている。それでもなお、長一〇サンチ砲は砲声と共に砲弾を撃ち出した。

赤城は叫ぶ。

「面舵一杯！」

艦の針路が安定するや、すぐさま舵を反対に切る。とはいえ、四万トンの「赤城」がすぐに頭を振ることはなく、惰性でしばらく直進し続ける。

塚原は、頭上から迫りつつある機影を見つめる。翼を翻し、急降下に入るのは、少数編隊の敵爆撃機だ。

敵は戦術を変えてきた。その狙いもわかっている。わかっているも、それ以上何かをすることはできない。目の前の敵機を避けることだけだ。

一機艦の各所では、同じように散発的な、少数編隊による急降下爆撃が繰り返されていた。右から、左から、あるいは正面から。それらに各艦が反応し、取舵や面舵を切って回避運動を試みる。

現時点で、確認されている被弾は三つだけだ。少数編隊による攻撃だから、当然と言えば当然だ。命中率は高くない。

それでも痛かったのは、「飛鷹」への一発だ。沈没するほどの被害ではないが、艦首甲板を叩き割った敵弾一発により、「飛鷹」は現在発着艦不能の状態だ。おまけに、この一発でカタパルトがやられたため、仮に強制活性化で破孔を塞いでも、大型機の運用は困難となる。しかし、これはほんの序の口に過ぎない。

急降下爆撃による爆弾が降り注ぐ中、塚原は輪形陣外縁に目を遣る。そこには、こちらの様子を窺う敵雷撃機の姿があった。

連続した回避運動で、輪形陣は乱れている。その間隙について、輪形陣中央、空母を狙うつもりなのだろう。爆撃機はそのための囚だ。

——空母をよくわかっている。

これが戦艦なら、話は違つただろう。しかし空母は、どうしても急降下爆撃を避けなければならぬ。たった一発でも爆弾が命中すれば、空母の攻撃力の源泉たる航空機を、運用することができなくなってしまう。それは、今の「飛鷹」が如実に示している事実だ。

通算四度目となつた回避運動から、「赤城」が直進に戻る。さすがの赤城も、額に汗を浮かべていた。

「骨が折れますね」

適切な回避運動のおかげで、今のところ「赤城」に被弾はない。それでも、何度か至近弾が生じて、その爆圧が艦底から突き上げてきた。飛び散る飛沫は舷側を濡らす。

「爆撃機はあらかた片付いたか？」

「そうですね」

上空を見上げる。散発的な爆撃機編隊は、随分と少なくなつていった。となれば――

「っ！敵雷撃機、動きだしました！」

「来たか……っ！」

外縁で飛行していた敵雷撃機が、一斉に身を翻し、輪形陣への突入を開始した。その機首は、明らかに五隻の空母へと向けられている。

雷撃機の進入を阻もうと、輪形陣各艦から対空砲火が伸びる。しかし、陣形が乱れている今、その射撃にはどうしても濃淡が生じてしまう。

「利根」、秋月、浦風の射撃は輪形陣左翼、筑摩、

谷風、浜風の射撃は輪形陣右翼、それぞれの方向から侵入を試みる敵雷撃機に対して行われる。

「塚原大佐、方位〇二五の敵機に、射撃を行います」

針路を一〇〇に取っている一機艦の、ほぼ正横から突っ込んでくる編隊だ。間違いなく、狙いはこの「赤城」。塚原が頷く。

それまで上空に向けられていた高角砲が仰角を落とし、今度は低空の雷撃機に狙いをつける。連続射撃の影響で、長一〇サンチ砲の砲身が過熱していた。立ち上る陽炎が、艦体を照り焼きにしている。

「撃ち方始め！」

赤城の号令で、左舷高角砲が射撃を再開する。高角砲の発砲に伴って、オレンジ色の炎が舷側に向け沸き起こり、蒼い海面に反射している。砲口から硝煙の匂いが流れ去る暇もなく、再度発砲。およそ一千メートル毎秒の初速で放たれた口径一〇センチの砲弾が、海面の上を、敵雷撃機に向けて飛翔していく。

時限信管がその仕事を果たし、宙空に真っ黒い花を咲かせる頃には、「赤城」の高角砲は第四射を放っている。

高角砲弾が、敵雷撃機を押し包む。右に左に、次々に炸裂しては、爆風と弾片をまき散らす。

同じ編隊を、「秋月」も狙っている。二艦合わせて七基十四門の長一〇センチ砲が、猛烈な勢いで弾幕を形成していた。

編隊のほぼ中央で炸裂した砲弾が、同時に二機の雷撃機を叩き落とす。

弾片に推進器を撃ち抜かれたのか、形状を綺麗に留めたまま、海底へと行先を変更する機体もある。

対空砲火はなお一層苛烈になっていく。距離が近づくにつれ、発砲から炸裂までの時間差が縮まっていった。

「秋月」の対空砲火に、機銃が加わる。それから数秒もせず、「全機銃座、撃ち方始め！」

赤城が下令した。増設された「赤城」の機銃が、海面付近の敵雷撃機めがけて一斉に火を噴く。

とはいえ、手動で動かしている機銃が、高速で動いている航空機を、そう簡単に捉えられるはずがない。

曳光弾のシャワーの中を、敵雷撃機は突っ込んでくる。それを機銃座が追いかけるが、なかなか捉えきれない。

「取舵一杯！」

赤城が号令する。艦尾に平行にして取り付けられた舵が左舷方向に切られていく。舵角指示器の針が一杯まで振り切れ、艦を直進させる流れに逆らって左向きのモーメントを生じさせようとする。

この時点で、敵雷撃機との距離は三千メートルになろうとしていた。

「秋月」の艦尾を通り抜けた編隊は、真っ直ぐに「赤城」へと突っ込んでくる。その腹でギリりと輝く鈍い魚雷の色が見えた気がした。

「赤城」の艦体が、ようやく艦首を左に振り始める。しかし、正横の敵編隊に対して艦首を向けるのには、それなりの時間が必要だ。じりじりとした時間の中、塚原は敵雷撃機の機首を睨む。

「赤城」が回頭していることに気づいたのだろう。敵雷撃機が、接近するコースを修正する。この時、距離は二千メートル。

最後の足掻きとばかりに、「赤城」の高角砲と機銃が咆哮する。が、急速回頭中という不安定極まりないプラットフォームから放たれた射弾に精度など望むべくもなく、空振りを繰り返す。

やっとの思いで一機を撃墜したその時、敵雷撃機との距離が一千メートルを割った。

——来る・・・っ！

塚原が身構えたその瞬間、赤城が叫んだ。

「敵機投雷ー！」

「赤城」に迫る十二機の敵雷撃機の腹から、漆黒の鉄槍が海中に降ろされた。沈み込み、姿が見えなくなった魚雷だが、数秒後には調定された深度まで浮上してきて、真っ直ぐに「赤城」へと向かってくる。放出される窒素が泡となって、航跡を引いていた。

仕事を終えた敵雷撃機が、「赤城」の甲板すれすれをフライパスする。黒々とした異形の機体が、艦橋内の二人を嘲笑うように離脱していった。

「戻せー！」

魚雷に正対するまで回頭していた艦体を、赤城が止めにかかる。やはり惰性で取舵を切り続けようとする「赤城」に対して、反対側に当て舵を切り、艦の針路を真っ直ぐに安定させる。

その正面から、真っ白い尾を引きずって、魚雷が接近していた。

——当たってくれるなよ・・・！

やれることはやった。最早後は、運を天に任せる他ない。ゴクリ。隣の赤城が生唾を飲み込む音がした。

「赤城」はなおも直進を続ける。主機は相変わらず艦体に推進力

を与え、グングンと魚雷の方へ近づけていった。

みるみるうちに魚雷との距離が縮まっていく。艦首方向、飛行甲板前縁の向こう側から、何条もの白線が伸びてきた。

斜めに差す陽光が、海面下の暗殺者を青白く照らす。その姿を睨みつける。最早その距離は、目と鼻の先だ。

魚雷の航跡が、甲板の前縁と重なる。消えて見えなくなったその影の行方を、固唾を吞んで見守る。

しばらくは、何も起こらなかった。魚雷命中の衝撃も、つんのめるような感覚も、何も起こらない。「赤城」は直進を続け、艦隊各艦は他の雷撃機に射撃を続けている。

「成功……した？」

赤城が呟いた次の瞬間。

「赤城」の艦体が、それまで感じたことのない衝撃で打ち震えた。地震大国日本もかくやというほどに激しく揺れる艦橋に、塚原も赤城も両足を踏ん張る。重心を低くした体勢のまま、塚原は艦橋の前を見た。

そこには、幻想的な輝きを放つ白い巨塔が、天をも突かん勢いでそり立っていた。水滴がキラキラと太陽に反射し、先端がこちらを見降ろしている。激震が襲う艦橋の中にありながらも、あまりに壮麗な光景に一瞬言葉を失った。

魚雷命中の水柱は、海面から二十メートルもの高さにある。「赤城」の飛行甲板を易々と越えて、海上にその姿をさらしていた。重力に逆らっていた海水たちは、やがて一斉に崩れ去り、海面へ戻ろうとする。大粒の水滴が、舷側の機銃座とまとめて、飛行甲板をバラバラと打った。

「赤城」はついに被雷したのだ。

「両舷停止！ダメージコントロール、急いで！」

被雷の苦痛に顔を歪めながら、赤城が指示を飛ばした。応急修理を受け持つ妖精たちが、すぐさま駆けていった。

「格納庫の安全確認！非常用海水ポンプ始動準備！」

火災への備えまで行ってから、赤城が塚原に向き直る。

「左舷中央部に被雷。バルジの防護箇所でしたので、被害はそこまで大きくならないはずです。いざとなったら、強制活性化を使います」
そう言い切って笑う。痛みがあるのだろう、額に汗を浮かべながらも、赤城は気丈に笑っていた。

「これくらいで、私は沈みませんから」

その宣言に、塚原は無言で頷いた。日本海軍機動部隊の長、共に歩んできた彼女のことは、誰よりも信頼している。彼女が大丈夫と言っているのだ。まだ、やれる。

応急修理中の妖精から、報告が上がって来る。浸水箇所の隔壁を閉鎖し、補強材で固めている。赤城の指摘通り、バルジ装着箇所ということもあって、被害はそれほど深刻ではなさそうだ。浸水による傾斜はあるだろうが、それも反対舷への注水で解決する。

しかし、それで全てが終わったわけではなかった。

「っ！『飛鷹』被雷！」

『赤城』に付き従っていた中型空母の右舷に、水柱が二本生じていた。艦の前部と後部、二か所に命中した魚雷のせいで、『飛鷹』が大きく左に仰け反ったように見えた。

『飛鷹』の基となった船は、商船だ。北太平洋航路に就役予定の頑丈な船だったとはいえ、軍艦には及ばない。

二本の魚雷を受けて、無事で済むとは思えなかった。

さらに――

「『五十鈴』被雷！」

一航艦最後尾の防空巡洋艦の姿は、『赤城』の艦橋からは見えなかった。それでも、五千五百トン軽巡である『五十鈴』にとって、魚雷の命中は致命的であることはわかる。

「・・・艦隊各艦に、被害の集計を命じてくれ」

「・・・はい」

艦橋の空気は重い。帰途につく攻撃隊の様子を見つめていた妖精が、不安げにこちらを窺う。

その時。

『『赤城』、こちら『加賀』。索敵機の即時発艦と攻撃隊の発艦準備

を具申します』

反撃ノ天山

轟音を唸らせて四翔プロペラを回す「火星」発動機。プロペラの残像の向こう側、いよいよ視界に捉えた敵艦隊を、「赤城」艦攻隊長妖精は睨んだ。

「赤城」艦攻隊含めた一機艦の航空隊は、敵第二波攻撃の終息後、即時発艦を始めた。これは加賀からの意見具申によるものだ。

第一波攻撃隊が去った後、真つ先に発艦したのは、「加賀」の格納庫で準備を終えていた「彩雲」だった。カタパルトから飛び出した日本海軍最速の艦上機は、そのまま敵編隊の後方につき、その出所——「乙ロ」の位置を探っていた。

「彩雲」が「乙ロ」を探している間に、「赤城」と「加賀」、「千歳」の航空隊で、第二次攻撃隊が編成された。格納庫内で急ピッチで整備と補給を終えた戦闘機、爆撃機、攻撃機が、準備ができたものから甲板に並べられる。最終的に全機が発艦し、攻撃隊が進撃を開始したのは、日没の二時間前になってからだ。

チラリ。艦攻隊長妖精は機内時計を確認する。現海面の日没時刻まではおよそ一時間。一機艦からここまで飛行してくるのに一時間弱かかった。着艦作業は、日没後になるかもしれない。

敵艦隊——「乙ロ」の上空に、活発な動きは見られない。その理由は考えずともわかる。

一機艦の第二次攻撃隊が「乙ロ」に迫り着くまでの間に、一機艦へと向かう敵攻撃隊とすれ違った。「乙ロ」からの第二次攻撃——一機艦にとっては第三波攻撃となる攻撃隊だ。すなわち「乙ロ」は、現在攻撃隊を出したばかりということになる。

加えて、時間的には、引き上げていった第一次攻撃隊の收容作業が終わった直後でもあるはずだ。つまり今の「乙ロ」は、もつとも戦闘機の壁が手薄ということになる。

叩くならここしかない。日没ギリギリの攻撃になるが、午前の攻撃以降ただ耐えるしかなかった分、全妖精ともやる気は十分だ。

「飛鷹」と「五十鈴」の仇は取る。ここに来られなかった他の二

空母の分まで、日本海軍機動部隊の旗艦が、敵空母を叩く。静かな闘志を内に秘め、電信員に通じる伝声管に顔を近づける。そろそろ、攻撃開始だ。

「トツレ」が打電され、攻撃隊がにわかには殺気を帯び始める。操縦員は操縦桿に添えた手を握り直し、電信員は後方からの敵機襲来に備える。艦攻隊長妖精の背後からも、後部銃座の安全装置解除と弾倉設置の旨、報告が上がった。

数少ない敵直掩機が、攻撃隊を迎撃しようとしてやってくる。それに立ち向かうのは、制空隊の「烈風」だ。攻撃隊の直掩を零戦に任せ、新鋭の翼たちは動き始める。

その動きを目で追いながら、艦攻隊長妖精はもう一度敵機動部隊を観察する。

輪形陣はさほど大きくない。もとは太平洋上で通商破壊を含めた海域封鎖作戦を行っていた艦隊だ。行動しやすいように、規模は小さくまとめられていた。

それでも、空母の周りは駆逐艦と巡洋艦で隙間なく固められている。熾烈な対空砲火は、自ずと予想できた。

そうこうするうちに、「烈風」と敵戦闘機との空中戦が始まる。数はほぼ互角。最初の一航過からすぐさま翼を翻し、お互いの飛行機雲が複雑に入り乱れる格闘戦が始まった。

右に、左に、あるいは急降下や横ロールを駆使して、互いに一步も譲らない。しかし、性能では「烈風」の方が上だ。ドッグファイトが繰り返されるうちに、一機、また一機と敵戦闘機が落ちていく。

押し切れるぞ。制空隊の奮闘に、艦攻隊長妖精が目を奪われていた時だった。

後部座席の電信員が、敵機の接近を告げる。制空隊を相手取っているものとは別の敵戦闘機が、攻撃隊の後方から、襲いかかってきたのだ。

後部銃座が、敵戦闘機に向けて発砲する。「火星」発動機とはまた違った衝撃が機体を伝い、風防を揺する。操縦員は機体を横滑りさせ、敵の射弾をかわそうと試みていた。

高速で航過していく敵機の影が、風防のすぐ横を掠めた。黒々としたエイのような機体は、空の彼方の魔界から舞い降りてきたのではと思うほどに禍々しい。炎のように揺らめく紋様が、機体側面にくつきりと映っていた。

射弾をかわしきれなかった「天山」や「彗星」が、瞬時にオレンジ色の火球に変わり、あるいは黒煙を噴きながら機首を下げる。しかしながら、それらにいちいち気を向けている暇は、攻撃隊のどの機体にもなかった。次は我が身だ。

報復とばかりに、攻撃隊直掩の零戦が、一航過した敵戦闘機に襲いかかる。

「金星」発動機が唸りを上げて零戦の機体を前進させる。翼が翻り、憎き敵戦闘機の背中を追いかける。空飛ぶエイが、数秒の後にエイヒレになってしまった。

高速で繰り広げられる戦闘機同士の空中戦には目もくれず、攻撃隊はただ淡々と前進を続けていた。もう間もなく、敵機動部隊の輪形陣に突入する。

頃合い良しとみて、艦攻隊長妖精は攻撃隊全機に散開を命じる。艦攻隊長妖精直率の「赤城」艦攻隊。「加賀」艦攻隊。「千歳」艦爆隊。三つに分かれた編隊は、それぞれ下降と上昇に転じる。

艦攻隊が狙うはただ一つ、輪形陣中央、五隻の空母。又級三隻（通常型二隻、elite一隻）、ヲ級二隻（elite一隻、flagship一隻）。硬い壁の向こう、できればその横っ腹に、一発なりと魚雷を叩きこんでやりたい。

「天山」たちが腹に抱えている九一式航空魚雷は、又級なら一発で航行不能に陥れることができる。最も防御能力の高いヲ級flagshipでも、当たりどころがよければ、二発で発着艦不能になるほどの傾斜を生じさせることが可能だ。

耐え忍んできたこの一日の分を、魚雷の命中という形で、必ず晴らしてみせる。

艦攻隊長妖精が率いる「赤城」艦攻隊は、二十一機を擁していた。うち一機が発動機の不調で引き返し、二機が敵戦闘機の襲撃により撃

墜されている。現在は十八機で編隊を組んでいた。

敵機動部隊輪形陣の各艦から、対空砲火が放たれる。その狙いは、まず攻撃を始めようとしている、〃千歳〃艦爆隊に向いていた。敵基地攻撃後、その腕を見せる機会に恵まれなかった十機の〃彗星〃は、高角砲弾が炸裂する空を、微塵もゆるがない様子で、真つ直ぐに進んでいく。

対空砲火による二機の撃墜があったものの、予定していた降下地点に取り付いたらしい〃千歳〃艦爆隊が、一齐に翼を傾けて、急降下に入った。「アツタ」発動機を積んだ鋭い機首の向かう先を、艦攻隊長妖精は目で追う。そこにいたのは、艦攻隊が突入を目指す輪形陣左翼で最も激しい対空砲火を放つ、ツ級と見られる巡洋艦であった。〃千歳〃艦爆隊は、その小うるさい高角砲を黙らせるつもりなのだろう。

編隊による急降下爆撃でなく、横隊を敷いての連続攻撃。余程腕に自信があるのだろうか。不敵な笑みを浮かべながら、嬉々として操縦桿を駆る〃千歳〃艦爆隊長妖精の表情が見えるようだった。

ギリギリまで急降下していった、鏃を思わせる〃彗星〃は、その機首が敵艦のマストに突き刺さるのではという高度で引き起こしをかける。誘導索によってプロペラ回転範囲の外から投下された八発の五百番爆弾は、重力に従って落下していく。

艦攻隊長妖精の目の前で、連続して爆炎が踊った。派手な炎の中に、細かな破片と、箱型の何かが飛び散る。艦攻隊長妖精は目を見張った。

命中の炎は、確認できるだけで四つ。敵巡洋艦の全体に満遍なく、火柱が噴き上がった。

急降下爆撃の命中率は、どんなに良くても三割ほどと言われている。八機で急降下爆撃を仕掛ければ、命中弾は二発か、良くて三発。にもかかわらず、〃千歳〃艦爆隊は四発の命中弾——命中率五割を達成した。しかも、命中率が低下しがちな、横隊での急降下でだ。それほどに、〃千歳〃艦爆隊の練度は高かった。

艦攻隊の頭上を、艦爆隊がフライパスしていく。先頭に行く隊長機が「どうだ」とでも言いたげに、力強くバンクを振った。

こちらにも負けてはいられない。

もう一度前方を見据える。「彗星」たちが爆弾を叩きつけた巡洋艦だが、沈没には至っていない。深海棲艦の巡洋艦は、基本的に艦体規模が大きく、余剰浮力がある。艦体の四か所から炎と黒煙を噴き上げながらも、なお洋上にその姿を留めていた。

しかし、対空砲火が大幅に減じられたことは間違いない。

輪形陣との距離が詰まったことで、艦攻隊に対する対空射撃が始まった。輪形陣各所で同時多発的に閃光が走り、局所的な豪雨となつて、横殴りに編隊を叩く。右、左で炸裂する高角砲弾の衝撃が、ビリビリと風防を震わせた。

やはり、対空砲火の勢いは、減じられている。黒煙を引きずる巡洋艦は、必死に高角砲を放とうとしているが、その火焰は艦の前部でしか生じていない。その照準もバラバラで、効果的な射撃ができていないと言えなかった。

それでも、航空機にとつて、高角砲弾が脅威であることに変わりはない。残った駆逐艦、さらには空母までもが、備えた全ての砲を振り立てて、「天山」たちを迎え撃つ。

深海棲艦の駆逐艦でも、二級や八級のeliteは、主砲を高角砲としている。それらから放たれた砲弾が周囲の空間で炸裂し、襲いかかる弾片が機体にあたって異音を上げた。それも、一度や二度ではない。

それでも、艦攻隊が怯むことはない。視界のあちこちで花開く高角砲弾には目もくれず、ただ真っ直ぐ、空母を見据える。操縦桿はピクリとも動かさない。

輪形陣外縁まで三千メートル。中央の空母までは五千メートル。対空砲火に機銃が混じり始める。艦攻隊は、さらに高度を下げ、海面すれすれを飛行していく。腹に抱えた魚雷が、波頭に触れてしまうのではないかというほどの、超低空飛行だ。

しかし、無傷とはいかない。

機銃弾がエンジンカウルに飛び来い、「火星」発動機が黒煙を噴いてその動きを止める。

翼をもがれた「天山」は、コントロールを失って、錐揉みとなった。弾雨の中を艦攻隊が突破し、ついに輪形陣内部、空母まで二千メートルを切った時点で、「赤城」艦攻隊の残存機数は十四機になっていた。

艦攻隊長妖精が目標に定めたのは、正面で激しい対空砲火を放つ、ヲ級eliteだ。えり好みせず、目の前の敵艦を確実に叩く。

鶴翼の陣に近い編隊となった艦攻隊は、最後の根比べを、敵空母と繰り広げる。

距離千五百メートル。編隊両翼の「天山」が、ほとんど同時に炎を噴き、墜落する。その様子を横目に確認して、なおも艦攻隊は進んでいく。

ヲ級eliteは、こちらに合わせて、回避運動を取り始めた。艦首を魚雷に正対させ、被雷面積を少しでも減らす処置だ。

しかし、航空機から見れば、空母の動きなど、カタツムリの行進と変わらない。妨害さえなければ、その未来位置に合わせて、針路を変更することなど朝飯前だ。

敵艦の艦首の動きや、波の立ち方に目を凝らし、魚雷の進行方向を修正していく。細かな操縦桿裁きを要求されるこの作業にも、熟練の操縦員は的確に応えてくれた。

距離千メートル。それでも、艦攻隊長妖精はまだ投雷しない。たとえ被害が大きくなろうと、ここで確実に仕留める。

これが、「赤城」艦攻隊にとって、最後の攻撃機会なのだから。

○八。機銃弾の雨に突っ込んだ「天山」が、機体のそこかしこに穴を開けられ、ぼろ雑巾のようになって落ちていく。

○七。操縦を誤った「天山」のプロペラが海面を叩き、そのまま速力を失って波に激突する。

ただ、ただ前を見つめる。風防正面一杯まで迫ったヲ級eliteの舷側を睨みつける。

○六。ついに隊長妖精は、投雷を指示する。投下レバーが引かれ、重量八百キロの魚雷が海面に吸い込まれた。それを確認した操縦員はすぐさま機体を引き起こし、ギリギリのところまで空母の甲板上をフ

ライパスする。

最早確認するまでもない。艦攻隊長妖精は戦果を確信していた。

二十数秒後、ヲ級eliteの左舷に、四本の水柱がそそり立った。海水の塊は、艦首から艦尾にかけて、満遍なく生じている。『天山』が放った鋼鉄の槍は、あらゆる船にとって最大の弱点である柔らかい下腹部を、容赦なく抉り取った。

撃沈確実。静かにガッツポーズをした艦攻隊長妖精は、『加賀』艦攻隊が上昇してくる様子を視界に捉える。彼らが狙ったのは、又級eliteであったようだ。

ほどなく、その舷側にも魚雷命中の水柱が屹立する。自らの上げた戦果を確認して、艦攻隊長妖精は全機に集合を命じた。

闇夜カラ迫ル影

トラック沖には、ようやく夜が訪れていた。

ジュラルミン製の怪鳥たちが支配していた空は今、墨汁で塗り潰したような深い黒に染まっている。漆黒を映し出す海面には、半月と星々の瞬きが反射していた。

そんな、静かな海を、軍艦の集団が航行していた。端からは勇壮に映るその姿だが、敵弾に傷つき、硝煙で煤汚れているものが少なくない。さらに見れば、陣形の所々に明らかな穴があるのもわかる。

夜航海のために灯火を落としている「赤城」艦橋で、塚原は黙って正面を見つめていた。

艦橋には当直中の彼と妖精だけだ。赤城は仮眠室で横になっている。三度の空襲で激しい回避運動を続けていた彼女には、さすがに疲労が溜まっていた。

当直と言っても、これといってやることのない塚原は、ふと「赤城」の周囲を見回す。

航行しているのは、一機艦の各艦。しかし、その数は今朝よりも二隻減している。三度の空襲を受けた代償だった。

「乙ロ」への攻撃隊を放った後、一機艦には三波目の深海棲艦攻撃隊が襲いかかった。損傷が重なり、処理能力は限界に近かったが、とにかく上空直掩の戦闘機だけは展開できた。

戦闘機隊は奮闘した。敵攻撃隊に喰らいつき、引き裂き、叩き落す。

手負いの一機艦を守らんと、その銀翼をきらめかせる。

だが、完璧な防空を望むことはできなかった。

攻撃隊に戦闘機を割いたため、第一波の時のような、完璧な体制での防空戦術の展開はできなかった。戦闘機の壁を突破し、弾幕の中を突っ切った敵攻撃隊が、爆弾や魚雷を次々に投下する。

一機艦各艦は、必死に舵を切り、回避を試みる。しかし、全弾を回避することは困難だった。

真つ先に餌食になったのは、魚雷によって速力を失っていた「飛鷹」だった。十数機の雷撃機と爆撃機に狙われた彼女は、満足な回避も

叶わず、被弾した。魚雷三本、爆弾四発を受けて、無事でいられる道理はなかった。

ほとんど同時に、輪形陣右翼でも轟音が生じていた。そちらは「谷風」が被雷し、爆沈した音だった。「筑摩」を狙った雷撃をかばった結果であった。

かくして、一機艦は二隻のBOBを喪失する結果となった。「飛鷹」と「谷風」の艦娘は無事に救助されたのが、幸いだろうか。

被害はそれだけではない。沈没こそしていないものの、ほとんどの艦は被弾や至近弾で少なからず被害を受けていた。

それでも、何とか一日目を凌いだ。最低限の役割を、一機艦は果たしたことになる。

この時点で、反転するという選択肢もあつた。これ以上敵の攻撃に晒されれば、一機艦は文字通り壊滅する。それは塚原の望むところではない。だが、状況がそれを許してはくれなかった。

——『トラック南西方面に、敵機動部隊を見ず』

日没ギリギリに送られた電文は、三機艦からのものだった。十時間以上の搜索にもかかわらず、三機艦は最後の機動部隊——暫定呼称「乙ハ」を発見できなかったのだ。

トラック南西には、敵機動部隊がいなかった。つまり深海棲艦は、トラック北方の守りを固めたのだ。こちらの作戦を、ほぼ読み切られたことになる。

それ以上の電文を井上は寄越さなかったが、おそらくは夜のうちに、北上してくるつもりだろう。

二機艦が「乙イ」を壊滅させたとはいえ、こちらは一機艦がほぼ戦闘力を喪失している。残った「乙ロ」、「乙ハ」、そして陸上基地を相手取るには、三機艦の参加が不可欠だ。

二、三機艦が機動部隊との戦闘につきつきりになる以上、環礁への突入を目指す一挺艦のエアカバーは、一機艦がやるしかない。

——皆には、苦勞をかけるな。

それを決して口に出しはしない。そんなことを言うのは、全てが終わった後で十分だ。

まあ、帰ったらおいしいものでも奢ってやらなければ。

「起きてましたか」

塚原がそんなことを思っていると、艦橋に顔を出す声が後ろから聞こえてきた。

暗順応ができている目で見れば、灯火を落とした艦橋内でも、艶やかな黒髪を見つけることができる。仮眠室から出てきたところなのだろう、肩にブランケットをかけた赤城が、顔を覗かせていた。

「・・・寝ててよかったんだぞ」

眠そうに眦を下げている赤城に、塚原は声をかける。それに屈託なく笑った赤城は、無言で首を横に振る。そのままゆったりと歩いてきて、塚原の隣に立った。

「もう、十分寝ましたから。それに、やはり戦闘中は、どうしても寝付けない」

「・・・そうか」

それ以上を、お互いに話すことはない。日本機動部隊を預かる二人は、静寂に身を任せて、目の前の黒々とした海を見つめるのみだ。

戦闘の合間の、凧とでも言えはいいのだろうか。そんな一時が、
赤城”の艦橋に満ちていた。

*

『当直交代前の引継ぎを行います。どうぞ』

「願います。どうぞ」

スピーカーから聞こえてくる声に清水が答えると、ほどなく、相手が引き継ぎ事項を読み上げ始めた。艦隊針路、速力、風向、潮流、即応待機状態（オートナビゲーション未設定）の艦娘、それらを一通り聞き終わって、質問等無い旨を伝える。

『それでは、当直を交代します。どうぞ』

「交代しました。終わり」

そこで、
曙”座上の榊原との通信は終了した。マイクを置き、後ろを振り返る。

オートナビゲーションを設定せず、艤装を装着している摩耶が、腕を組んで立っていた。

「状態はどうだ」

「全く異常なしだぜ。ピンピンしてる」

「そうか」

短く頷いて、清水は再び前に向き直った。

「摩耶」の艦首で、夜の海が割れている。白い飛沫が月明かりに照らされて、キラキラと輝いた。穏やかな海に、呼吸を落ち着ける。

「摩耶」は、一挺艦の最前を進んでいる。帛式防空陣形で要となる彼女の能力は、この位置で最も効果的に発揮されるからだ。

同時に、夜間の早期警戒も「摩耶」が担う。昼間は「祥鳳」の艦載機が上空直掩と警戒を担当していたが、夜間はそうもいかない。頼りになるのは電波の目だ。

諸々の警戒を摩耶に一任する。「任せろ」とばかりに、摩耶は片目を瞑ってみせた。

電探の動向を摩耶が見守る中、清水は妖精たちに混じって周囲を警戒する。もつとも、夜間見張り員の訓練など受けていない清水に、妖精たちほどの働きができるとは思えなかったが。

目の数は多い方がいい。清水の目でも、無いよりあった方がいいに決まっている。

大型双眼鏡に取り付く妖精の横で、自前の双眼鏡を覗き込む。海面のきらめきに混じる影がないか、目を凝らす。

後ろから、視線を感じた。

摩耶が、何を言うでもなく、ただジツと清水の方を見ていた。視線が合うと、ツイと逸らされてしまう。

「なんだ？」

「い、いや・・・」

何でもない、わけがない。

摩耶は観念したように、モジモジとらしくない様子で口を開く。

「少し、話さないか？」

清水は暗闇の中で目を見開く。それから、気の抜けたような息が漏れるのを感じた。

「怖いのか？」

「茶化すなつて。んなわけねーだろ、あたしの柄でもない」

そう言いながら髪をいじる仕種の方が、よっぽど柄ではないと思うのだが。

「なんていうか……。今日一日、結局何もなくて……。拍子抜けした、つていうか」

「……なるほどな」

確かに、それはそうだ。三個機動部隊がトラック沖には展開していたのだ。一機艦のエアカバー下にあるとはいえ、一挺艦が空襲される事態は十分に考えられた。しかし敵機動部隊は、あくまで機動部隊同士での戦いを挑んできた。近くにいなながら、一挺艦は特に攻撃を受けることなく、トラック沖を北東水道に向けて進撃していた。

「戦略上の価値は、空母の方が高いと判断したんだろう。それ以外には考えられない」

「そういうもんか」

「ああ」

どこか納得いかない様子で、摩耶は眉間にしわを寄せている。快活な彼女には、あまり似つかわしくない表情だ。

スツ。

「っ!？」

摩耶が驚いたように顔を上げる。それには構わず、清水は差し出した手で、眉間の辺りを揉んでやった。暗闇の中でもはっきりとわかるほど、摩耶の顔が赤くなる。

「な、何すんだよっ!」

「そんな顔するな。らしくない」

散々眉間のしわを伸ばしてから、手を離す。おでこの辺りを手で押さえ、非難の視線を超越す摩耶に、清水はこれと言って表情をこぼすことなく、語りかける。

「何があるうと、俺たちが守り抜くだけだ。そうだろう」

「……そう、だよな」

ポツリ、答えた摩耶が、ジッと清水を見つめる。軽く頷いて、清水は周囲の警戒と当直業務に戻った。

ただし、今度は、摩耶の隣で、だ。
艦橋に並んで立つ二人と、妖精たち。夜航海は続いていた。

それが現れたのは、当直交代から一時間ほど後だった。最初に気づいたのは、言うまでもなく、摩耶だ。

「対空電探に感あり！」

「対空電探だと？」

予想だにしない報告に、清水は摩耶の方を振り返る。彼女もまた、困惑した様子で、更に報告を続けた。

「あ、ああ、間違いない。感があつたのは対空電探だ。方位一九〇、距離四五〇（四万五千メートル）」

一挺艦は針路を真東に取っているから、その右舷に感があることになる。

現在、味方機が飛行しているとの情報はない。とすれば――

「深海棲艦の夜襲か・・・？」

これまでには見られなかった戦術だ。

無数の電子の目を備えた現代戦闘機にとって、夜の空は昼間とさして変わらない。しかし、そんなハイテクな代物ではないBOBや深海棲艦の艦載機は、話が別だ。夜間の攻撃は、非常に難しいものになる。

ましてや、陸上の基地などの静止目標ではなく、洋上航行中の軍艦となれば、尚更。

夜間攻撃でネックとなるのは主に二つ。目標の視認が困難であることと、着艦作業の難易度が格段に上がることだ。

昼間とは違い、遠くから目標を確認できない夜間では、近距離に接近するまで、まともに狙いを定めることもできない。さらに海面も見えない可能性が高いから、飛行は高度計頼みとなる。これを克服するには、専用の航法員を増やすか、機載電探で補うしかないが、そうならば当然機体は大きくならざるを得ず、空母での運用は不可能となる。

さらに、飛行甲板を視認できないことから、着艦作業も困難を極める。こちらは着艦誘導灯と艦尾の誘導員の指示に頼るしかない。仮

にそれらがあつたとしても、着陸する先が見えないということは、機体の傾きを制御するタイミングも計れないということになる。

これらのリスクが効果に釣り合わないことから、今までBOBも深海棲艦も、夜間攻撃には踏み切らなかつた。否、踏み切れなかつた。だが今回、深海棲艦はそれをやって来た。

考えられる可能性は一つ。

「基地に降りるつもりか。．．．いや、基地航空隊そのもの、か」

今朝破壊された春島の飛行場が、その復旧作業を終え、陸上機による攻撃を仕掛けてきたのだろう。陸上運用であれば、多少大型になることを覚悟のうえでオプションをつけ、夜間攻撃が可能な機体にすることはできる。

ともかく、考えるのは後だ。

捕捉した影がこちらに向かつてくるかはわからない。それでも、備えは必要だ。何せ今は、艦隊を敵機から守ってくれる戦闘機が、上空にいないのだから。

「一挺艦全艦に警報。敵編隊捕捉。対空戦闘用意」

一挺艦の防空指揮艦も兼ねる「摩耶」から、新たな敵の襲来を告げる電文が飛ばされた。

見エザル敵機

艦橋から右舷側に目を向け、同時に電探に映る影を意識しながら、摩耶は顔をしかめた。理由は明白、目の前に横たわるこの暗闇だ。

電探が捉えた敵編隊だが、残念ながら肉眼で見えることはできない。訓練を受けた夜間見張り員でも、最大で距離二万メートルの敵艦を見つけることしかできない。三万メートル以上離れた航空機を目視しようというのが、到底無理な話なのだ。

第一、月と星の明かりだけでは、一千メートル先の敵機を見つけるのでさえ、一苦勞である。

——こりや、厳しいな。

益々顔が険しくなるのがわかった。艦隊の対空番長に相応しい装備と経験を持つ摩耶だが、それでも夜となると勝手が違う。敵機を直に見て対空戦闘をすることは望めない。頼みの綱と言えば、電探と見張り員ぐらいだ。

「敵編隊に動きはあるか？」

直立不動のまま、清水が尋ねる。口調はすでに、防空指揮を執る指揮官のそれだ。冷静な声に、深呼吸を一つ。

「特にない。多分、まだこっちに気づいてない」

「わかった。何か動きがあったら、すぐに報告してくれ」

「言われなくても」

灯火を落とした艦橋の中で、長身の影がはっきりと頷いた。機関の音に混じって、衣ずれの音がする。

清水が対空戦闘用意を通過したことで、艦隊はにわか慌ただしくなり始めた。ただしその動きは、敵機に気配を悟られぬよう、極力抑えられている。

そうこうする間に、敵編隊との距離がわずかず縮まっていく。電探の影がはつきりし始めて、摩耶はその規模を推し量る。

「数、三十から四十」

何とも言い難い数だ。

「主砲を右舷に向けておけ」

「了解。弾種は三式弾から変えてない」

「わかった。俺の号令まで待機」

眼下の連装砲塔が、鈍い音と共にゆっくりと旋回していく。装填されているのは、昼間のうちから対空戦闘に備えておいた、三式弾だ。全八門の五五口径二〇・三サンチ砲が、右舷を指向して鈍色にきらめく。

「『大和』、『武蔵』、主砲旋回中」

後方に続いている二隻の巨大戦艦の様子を、見張り員が報せる。どうやら栗田もまた、二戦艦の主砲による三式弾射撃を狙っているようだ。

とはいえ、各艦ともに主砲の引き金を引くことはない。この暗闇だ、できれば穏便に済ませたい。見つからなければ、それで万事解決だ。

——頼む、このまま見つからずに、通り過ぎてくれ。

対空戦闘の準備を怠らないながらも、摩耶はそう願っていた。

「距離、三〇〇（三万メートル）」

そんな摩耶の思いをよそに、敵編隊との距離はジリジリと詰まってくる。緩慢に過ぎていく時間が、嫌な汗を内から噴出させる。

息を潜める一挺艦各艦の機関音は、心なしか静まっていた。

「っ!!」

だが、来るべきものが来てしまった。

距離二万を切った頃、敵編隊の動きが明らかに変わった。それまで何かを探し求めるように、フラフラと飛行していた電探上の影が、急に統制のとれた動きを取る。予想される針路が北寄りに修正されていき、やがて真っ直ぐに、この一挺艦の方を向いた。

「気づかれた！敵編隊、針路を変えてこちらに接近中！」

「全艦対空戦闘始め！」

清水が言い終わるか終わらないかのうちに、摩耶は主砲の引き金を引いていた。暗闇の中、蒼を極限まで濃くしたような黒色に染まる海面に、オレンジ色の炎が現出して、反射する。艦の前進に伴う波が光を受けて、場に似つかわしくない、幻想的な輝きを見せる。

だが、それも一瞬のこと。炎の次に噴出してきた硝煙の黒い雲が、辺りに漂う。鼻をつく匂いが、艦橋まで届いた。

後方からも、遠雷に似た轟音が響く。

「『大和』、撃ち方始めた。続いて『武蔵』、撃ち方始めた」

同じように三式弾の射撃に備えていた二隻の巨大戦艦が、その九門の主砲を咆哮させた。生じる火球の大きさは、遠目に見ても、『摩耶』のそれより遥かに大きなものだと思われる。あれが紛れもなく、世界最強火砲の上げる砲炎だ。

二隻の『大和』型に続いていた『長門』、『陸奥』も発砲する。明日はいよいよ、敵戦艦との一大決戦だ。その前に、揚弾機に乗っている三式弾を撃ち切ってしまうおうという魂胆なのだろう。

三式弾の有効射程ギリギリの射撃だ。到達までは時間がかかる。その間に、『摩耶』は再装填を終え、第二射を放った。

第一射が中空で炸裂する。漏斗状に広がる子弹の光が、本物の花火のように見える。夜空に花開いたそれらが、一齐に敵編隊に襲いかかる。

とはいえ、夜間の射撃と言うこともあり、有効な射撃とはいかなかったようだ。炎が上がった様子もなく、それ以上の戦果確認は不可能だった。

その一瞬のうちに、見張り員が敵機の様子を報せる。

「敵編隊下降！多分雷撃機だ！」

「対空砲火を海面付近に集中！」

仰角を上げていた高角砲が、慌ただしく海面付近に砲口を向ける。迫る敵機の腹に、黒々とした弾頭を主張する魚雷の姿が見えた気がした。

『摩耶』の主砲は、なおも咆哮する。一制艦の四戦艦も、第二射となる三式弾を放った。鏃型の帛式防空陣形、その中央付近で次々に砲炎が踊っていた。

三式弾の豪雨にもろに突っ込みながらも、敵機は怯むことなく、一挺艦へ突撃してくる。その編隊が三つに分かれていることは、見張り員から報告が上がっていた。『摩耶』は最も手近な敵編隊を狙って

いる。

——あいつらの狙いは、間違いなく戦艦だ。

所謂漸減作戦というやつだ。明日の決戦前に、少しでもこちらに手傷を負わせておくつもりなのだろう。

だが、そうはさせない。対空番長の名にかけて、味方艦を必ずやり抜く。それだけの力が、*「摩耶」*には与えられているのだから。

敵編隊が、高角砲の射程圏内に入る。次の瞬間、右舷側の長一〇センチ砲が、褐色の炎を吐き出した。装填速度にものを言わせて、砲身が冷却される間もなく、次々に高角砲弾を撃ち上げる。

空中で炎が沸き起こった。高角砲弾に巻き込まれた敵機が、火を噴いた瞬間だった。

お互いに、手探りとなる夜間の戦闘。その難しさを、改めて痛感する。

残念ながら、日本海軍の高射装置は、電探と完全に連動するまで至っていない。そのデータを流用はできるが、直接的に対空戦闘に關与することはできない。あくまで参考値の一つだ。

じれったい、というのが本音だ。電探に映る影を、摩耶ははつきりと認識している。しかし、その敵機に対する射撃が、満足のいく成果を上げているのか、ここから確かめる術はない。

その時、海面付近に、まばゆい燐光が生じた。蛍光灯を何倍にも強くしたような白い光に、摩耶は目を細める。

照明弾だ。陣形右翼、おそらくは*「曙」*か*「霞」*が、撃ち上げたのだろう。マグネシウムの燃焼に由来する人口の太陽が、限定的ではあるが海面を明るく照らし出す。その中に、うごめく黒い影。

深海棲艦の航空機だ。だが、どうも艦載機とは様子が違う。特徴的な三角形の機体ではなく、どこか丸みを帯びた機体。そのフォルムには見覚えがある。

「陸上機か。夜間襲撃なんて手を使ってくるわけだ」

同じものを確認したらしい清水が、感情の抜け落ちた声で呟く。冷淡なその声が、今はかえって落ち着きを与えてくれた。

改めて、敵機を見遣る。照明弾の光に照らされる機体は、以前パラ

才泊地を空襲した大型機によく似ていた。しかし、そのサイズはいくらか小ぶりだ。艦載機と大型機の、中間くらいの大きさである。

——性格としては、陸攻に近い機体か。

陸攻——陸上攻撃機は、旧帝国海軍が保有していた航空機で、その名の通り陸上基地での運用を前提とした機体だった。主なものは双発の中型機であり、乗員が多いこと、機体にある程度の余裕があることから、夜襲も含めた多角的な任務展開を可能としていた。

ただし、欠点もある。双発機である以上、単発機よりは大型にならざるを得ず、結果として運動性能は低下した。ようは機体が鈍重なのだ。

目の前の敵機も同じだ。照明弾が照らし出すまでは気づかなかつたが、その動きはお世辞にもいいとは言えない。雷撃を狙っているのだろうが、その高度も中途半端で、どうもおっかなびつくりやっている節がある。

照明弾の下で、高角砲弾が炸裂した。光の中に機体が浮かび上がることで、格好の標的となっっているのだ。視認することはできないが、無数の弾片が飛び散って、敵機に襲いかかる。

白に混じって、オレンジの光が海面に反射した。敵機の一機が、高角砲弾に絡め取られ、炎を吐き出している。フラフラと不安定に飛び続けていた敵機だったが、やがて力尽きたのか、海面に衝突する。真っ黒な海に吸い込まれた敵機の姿は、すぐに確認できなくなってしまう。

ほぼ同時に、陣形右翼で新たな閃光が生じた。『曙』と『霞』が、機銃による対空射撃を始めたのだ。暗闇の中を、青白い曳光が鋭く切り裂いていく。

「全機銃、撃ち方用意！」

『摩耶』の機銃も、まもなく敵機を有効射程に捉える。パラオ泊地工廠部謹製の二五ミリ機銃が、今こそその真価を発揮する時だ。

パラオ泊地所属各艦から、濃密な弾幕が形成される。曳光弾の引いている尾が、猛吹雪となって敵機を押し包んだ。

そうそう簡単に落ちたりはしないが、これだけの機銃をもろに受け

て無事でいられる道理もない。機銃弾をまともに浴びて、ズタズタになった敵機が数機、真つ黒い魔物となった海に飲み込まれる。

それ以外の機体は、弾雨を逃れるべく、機体を滑らせている。照明弾の明かりだけでは、その動きに追従するだけでもやっつとだ。

——けど、なんとか・・・なりそうだ。

少なくとも、投雷コースを大きく逸らせることはできている。あんなに不安定な飛行をしていては、統制のとれた雷撃を仕掛けることは難しい。

乗り切れる。摩耶がそう確信しかけた、その時だった。

空中で新たな炎が上がる。丁度敵編隊が飛行しているあたりだ。すわ、敵機を撃墜したか。しかしどうも、様子がおかしい。

オレンジ色をした光は、敵編隊の各所で、ほとんど同時に生じていたのだから。

——一体、なんだ・・・？

得体の知れないことが起こっていることだけを理解して、摩耶は目を凝らすしかできなかつた。その目が驚愕に見開かれる。

人魂のようにも見えるオレンジ色の光が、信じられない速度で、こちらに迫って来たのだ。

「なんだあれは!?!」

摩耶が素つ頓狂な声を上げるのとほぼ同時に、清水が艦隊内通信に設定されている通信機のマイクに向けて叫んだ。

「衝撃に備えろ!」

その短い指示を飛ばした後、こちらを振り返る。

「噴進弾だ!」

「噴進弾!?!」

それ以上の答えを求める前に、『摩耶』正面の海面が沸騰した。目と鼻の先に生み出された海水の柱に、艦首が思いつきり突つ込む。

第二弾は右舷海面に弾着。飛び散った海水が、甲板にバラバラと降り注ぐ。加熱した高角砲の砲身が、ジュツと音を立てた。

噴進弾——ロケット推進を利用した爆弾のことは、話に聞いていた。現代海戦の主力が、航空機からそちらに移っていることも。

それを、深海棲艦も使用してきたのだ。

もちろん、現代の所謂ミサイルとは比べ物にならない。精度は御覧の通りだ。それでも、深海棲艦が新たな槍を手にしたことに変わりはない。

「『長門』被弾！」

後方の戦艦に、噴進弾一発が吸い込まれる。触発信管なのだろう、盛大に炎が噴き上がり、爆砕された備品の破片が飛び散る。

深海棲艦の狙いはこれだったのだ。中途半端な高度で飛行していたのは、魚雷を使うわけではなかったから。おそらく、今回使用された噴進弾は、あくまで滑空爆弾の延長線上にある代物なのだろう。

また一発、噴進弾が炸裂する。今度は『武蔵』だ。スマートな艦橋が、炎で赤々と染め上げられる。

「くそっ」

飛翔してくる噴進弾に機銃を向けるが、並大抵の航空機より遥かに速いそれを捉えるには至らない。

第五弾。今まで味わったことのない種類の衝撃が、艦の後方から襲ってきた。

夜明ケノ足音

「逐次回頭、艦隊針路一八〇」

「面舵二〇。針路一八〇」

角田が出した指示に、すぐ声が答える。比叡の号令後、艦橋上面に取り付けられた舵角指示器の針が動いていき、舵を右に二十度切ったことを示す。四万トンに迫る艦体は、もうしばらくすれば、右へと艦首を振り始めるはずだ。

一、二機艦が航空戦を繰り広げていた頃、角田指揮下の二挺艦は、井上指揮下の三機艦と行動を共にし、トラック環礁南西方面に展開が予想された敵艦隊に備えていた。

が、一日を使つての索敵にもかかわらず、敵艦隊発見の報はなかった。

角田は敵基地へのさらなる攻撃を具申したが、三機艦の目標はあくまで敵機動部隊であるとして、井上は退けている。先の大戦における、ミッドウエーでの第一航空艦隊と同じ轍は踏まない、ということだろう。

結果として、二挺艦も三機艦も、一度として戦闘を行うことなく、一日目を終えていた。

南西方面に敵機動部隊はいない。そう結論付けた井上は、一、二機艦と同じように、トラック環礁北方面に艦隊を差し向けると決定した。

一方の二挺艦は、当初の予定通り、南水道からの環礁内突入を目指す。

日没直前、その旨を艦隊間の大出力通信で一、二機艦、そして一挺艦に伝え、二つの艦隊は別方向へと舵を切った。

以後、二挺艦は潜水艦を警戒して之字運動を繰り返しつつ、夜明けを前にして水道まで三十五海里の位置まで迫っていた。

「比叡」よりも先に、前路哨戒を担当する「川内」、「白雪」、「深雪」が右に艦首を振った。細く鋭い艦影が、みるみるうちに右へと動いていく。朝陽を迎えるために、青白い色を帯び始めた東の空を背

景にして、小型高速の艦たちが変針する。

次は「比叡」の番だった。艦が遠心力で左に傾きながら、針路を右に変えていく。正面右手に見えていた東の空が、ゆっくり左へと流れ去っていった。

青白い光が艦橋のほぼ左正横にきたところで、「比叡」の転針が止まる。後続のBOBも次々に回頭していき、最終的に二挺艦が針路の変更と陣形の再構築に要した時間は三分ほどだった。

「・・・次の変針で、水道入りかな」

角田はポツリと呟く。

「敵艦隊がうまく一挺艦に誘引されているといいんですけど」

比叡が答える。

「ま、そう上手くはいかないしね」

昨日実施した索敵で、三機艦も一挺艦も、深海棲艦の艦影を捉えていない。つまり南水道付近には、敵艦隊の姿はなかったということだ。

ただし、索敵漏れということもある。

「零水偵の準備をよろしくね」

「わかりました」

同様の命令が二挺艦麾下の「金剛」、「高雄」、「愛宕」、「鳥海」にも飛ぶ。航空作業甲板で翼を休めていた零水偵に整備妖精が取り付き、折りたたまれていた主翼を展開し、発動機の始動準備に入る。一番機はすぐにカタパルトに乗せられ、発艦準備を完了した。

艦隊左舷方向から朝陽が昇り始める。赤々と新たな一日の始まりを告げる太陽に目を細めて、角田は下令する。

「索敵機、発艦始め！」

火薬が弾け、カタパルトが起動する。海面に頭を出し始めた太陽に向けて撃ち出された零水偵はその翼にしっかりと空気を捉え、定められた方向へと飛んでいった。

*

索敵機を発艦させたのは、二挺艦だけではない。

夜間のうちに北上し、昨日一、二機艦と深海棲艦機動部隊との激戦

が繰り広げられた戦場に辿り着いた三機艦もまた、索敵機を発艦させていた。

カタパルトから射出され、自らが設定した索敵線を形成する『彩雲』を見守って、井上は艦橋に意識を戻した。

隣に立つ艦娘が、すぐに報告する。

「索敵機、全機発艦完了です。続いて、敵機動部隊への攻撃隊準備にかかります」

「うん。よろしく」

華奢な体つきながらも、スラリと真つ直ぐに立つ彼女の声に、井上は短く答え、頷く。

短く切り揃えられた髪を揺らして、航空母艦娘、大鳳がこちらを振り向く。

「あの、ほんとはよろしかったんですか？」

「うん？なんのこと？」

あくまで私的な意見として言っているのだろう。声色と口調が、戦闘時よりも柔らかい。

口ごもるような間の後、大鳳が言った。

「基地攻撃という選択肢も、あります。居場所のわからない敵空母よりも、そっちを叩いた方が、確実です」

彼女の言うことはもつともだ。

昨日の早朝、一機艦は春島の敵基地に強襲をかけている。その攻撃が功を奏したのか、昨日一日、敵基地は行動不能に陥っていた。

しかし、それ以降攻撃が行われていない以上、敵基地は滑走路の復旧を終え、戦闘参加が可能になったと考えるべきだろう。実際、敵飛行場から出撃してきたとみられる機体に、一挺艦が襲撃されている。

一機艦攻撃隊によって、敵機の地上撃破や付帯施設の破壊は確認されているから、戦力が低減しているのは間違いない。それでも、十分な脅威となり得る。

「理由は三つあるかな」

「教え子——というよりも妹を諭すような感覚で、井上は理由を説明する。」

「第一に、脅威度。今、優先すべきは、まだ未発見の三つ目の機動部隊を見つけてのことだ。見えない敵ほど、怖いものはないからね」

機動部隊戦の要諦は、突き詰めれば索敵にある。攻めるにしろ守るにしろ、まずは敵の位置を知らなければ意味がない。見えないところから一方的に叩かれるという状況は、何が何でも避けなければならぬ。

「第二に、三機艦各艦の、航空隊の練度。夜間飛行をさせるには、まだ不安が残るからね」

三機艦を構成する航空母艦は、“大鳳”を筆頭に“雲龍”、“天城”、“葛城”、“龍驤”の五隻。“龍驤”はともかくとして、残りの四隻は全て、『I F 作戦』前後に着任した新鋭艦だ。航空隊の錬成は急ピッチで行われたが、残念ながら先に着任していた六隻の正規空母には及ばない。

「第三に、時宜を完全に逃していること。もしやるなら、昨日のうちにやるべきだった。それをやらなかったのは、俺の判断だけだ」

もしも、昨日のうちに攻撃していれば、飛行場は復旧がなっておらず、こちらは迎撃機の襲撃を受けることなく、敵飛行場を十分に攻撃できた。しかし今となっては遅い。飛行場が復旧している以上、こちらの攻撃隊が熾烈な迎撃を受け、甚大な被害を被ることは目に見えていた。

今ほとにかく、状況を揃えるべきだ。

「……わかりました」

頷いた大鳳は、それ以上何かを言うことはなかった。

二基の昇降機が甲板に航空機を並べていく様子を確認した井上は、改めて、先ほど飛び立っていった索敵機に行く先に思いを馳せる。

三機艦が夜を徹して北上している間、井上は作戦室に籠り、昨日の間に確認された各艦の状況を洗い出していた。そしてそこから、ある程度、もう一つの機動部隊の居場所に見当をつけ、索敵隊を放っている。

昨日のうちに、ついで姿を現さなかった三つ目の敵機動部隊。暫定呼称「乙八」としているその機動部隊の狙いは、果たして何なのか。

——敵機動部隊は、南北での挟み撃ちではなく、東西での挟み撃ちを狙っているんだらう。

そうなる。今一番危ない状況に立たされているのは——

「・・・先走り過ぎないでくださいよ、水雷馬鹿先輩」

なぜか空母機動部隊を率いている突撃大好きな先輩の顔を思い浮かべ、井上は誰にともなく、呟くのだった。

*

季節が季節だけに、トラック沖の夜と昼の長さは、ほぼ同じようなものだ。すなわち、半日の間、海上は月と星が支配していた。

時間にして約十二時間。たったそれだけの時間だが、航空機の目が失われるその短い間だけで、海の様子は劇的に変わるものなのだ。

最初にそれを捉えたのは、“鳥海”から放たれた索敵機だった。

『敵艦隊見ゆ。南水道よりの方位一九〇、距離十海里』

「敵艦隊だって!？」

報告を受けた比叡が、素っ頓狂な声を上げた。それもそのはず、昨日行われた索敵では、南水道付近に敵艦隊は確認されていなかったのだから。

索敵機からの報告は続いた。

『敵艦隊は、戦艦二、巡洋艦四を伴う』

「・・・立派な水上部隊だねえ」

おそらくは、索敵網の外にいて、発見を免れていたのだろう。そして夜の間に、水道の前に立ち塞がる位置まで移動してきた。

残念ながら、これを避けて通ることは難しそうだ。

現在二挺艦は、南水道のほぼ真南、距離三十海里におり、針路を〇六〇に取っている。この後最後の回頭を行って、南水道に侵入するつもりだった。敵艦隊との距離は約二十海里。予定通りに回頭を行い、現在の速力を維持したとすれば、会敵まで三十分もない。

——やるしかない、か。

そんな角田の決意を知ってか知らずか、比叡はまるで狙ったように、たった一言、呟いた。

「是非もなしですね」

「・・・おー、比叡ちゃんには珍しく、乗り気だね」

「まるで普段の私が、やる気がないみたいな言い方、やめてくれますか？」

いや、そういう意味ではないのだが。

いつだってこの娘は、やる気十分なのだ。頼りになる、相棒なのだ。「ごめんごめん。比叡ちゃんが、僕と全く同じ考えなんて、珍しいからさ」

「あー、悪い病気が伝染してるかもですね」

「む、人のこと、悪い病原菌みたいに言うのやめてくれるかな？」

軽口を言い合うだけの余裕が、まるで信頼の証のように、角田には思えた。

「はい、司令」

比叡がマイクを手渡す。繋がっている先は、二挺艦全艦。受け取った角田は、マイクを口元に寄せ、スイッチを入れる。

「合戦準備」

短い指示が、艦隊中に届いた。

「合戦準備！」

比叡が復唱する。任せとけとでも言いたげに、妖精たちが艦内を駆け巡り、戦闘準備を進めていく。

一方、比叡は艦装との精神同調率を高め、これから始まる砲撃戦に備える。心なし、足元で唸る機関の調べが変わった気がした。高揚感を押さえつけ、冷静であろうとしているように、角田には思えた。その音色に、安心してこの身を委ねることができる。

「観測機は使えそうにありませんね。一応、待機はさせておきますけど」

比叡が残念そうに言う。

現海面は、深海棲艦の制空権下だ。味方航空機の援護は、現状では望めない。そんな状況で鈍足の観測機を飛ばすなど、自殺行為に等しい。

「電探と目視で頑張るしかないね」

角田の言葉に、比叡が力強く頷いた。やってやる、そう言っている

ようだった。

「さて、と。気合い入れていきますかねえ」

「あ、それ私のセリフです」

プクーつと頬を膨らませる比叡に、思わず吹き出してしまう。それから益々膨らんでしまう様子は、まるでフグみたいだった。

愛嬌のある相棒である。

二挺艦は取舵を切り、針路を〇〇〇〇に取る。その過程で、陣形を単縦陣へと変更、戦闘に備えていた。

「甲八」の呼称が定められた深海棲艦水上部隊と二挺艦が接触したのは、それから二十分後のことだった。

環礁ノ番人

二挺艦の南水道接近と時を同じくして、一挺艦もまた、北東水道への突入を試みていた。

帛式防空陣形は解かれ、複縦陣を敷いている。戦艦、及びその支援を目的とした艦隊と、水雷戦隊の二列だ。

水雷戦隊の二番艦に位置する「曙」、その艦橋に立つ榊原は、最後の転針を終えた一挺艦全体を見回す。決戦へと挑む鈍色の艦艙たちは、内なる闘志を滾らせつつ、静かに波を切り裂いている。

夜明けとともに各艦から放たれた偵察機は、すでに北東水道前の敵水上部隊——「甲イ」を発見している。ほぼ同時に、深海棲艦側の偵察機も一挺艦上空に現れ、電文を発していた。これで、お互いにその位置を掴んだことになる。

衝突は時間の問題だった。

「〇八〇〇」

正時を報せる曙の声。海面を離れた太陽は、東の空から海面を照らしている。それを左舷側に見て、一挺艦は北東水道へと進んでいた。

「予定通りなら、水道の入り口から二十五海里といったところか」

「行程消化はほぼ予定通りだし、大体そんなもんでしょうね」

曙の答えを聞き、頭の海図に写し取った航路を思い描いて、残りの行程を計算する。発見した「甲ロ」の位置は、水道入り口から十海里だったから、そろそろ会敵する頃だろうか。

差し迫った戦闘を予感させるように、複縦陣左列が慌ただしくなり始めた。各艦が観測機の発艦準備に入ったのだ。この辺りは敵の制空権下だが、「祥鳳」から護衛の戦闘機を出すことで、観測機を使用する心づもりだった。

戦艦同士の戦いで、観測機を欠かすことはできなかった。

程なく、四隻の戦艦から、零水観が飛び立った。複葉単フロートの機体が「曙」の頭を掠め、「祥鳳」から発艦した零戦に守られながら、高度を上げていく。「瑞星」発動機の爆音とプロペラの風切り音が、羅針艦橋にいても聞こえてきた。

「上からなら、もう見えてるでしょうね」

天井の向こう側、遙かな高みからの展望を想像するように、曙が眩く。

視点が上がれば、必然的に水平線までの距離が遠くなる。

海面から精々十メートルといったところの「曙」とは違い、海域全体を俯瞰できるほどの高度を取る観測機からであれば、もう間もなく十五海里を切るだろうかという敵艦隊の姿を捉えることができるはずだ。

その予想通り、放たれた各観測機から、連続して報告が上がった。

『敵艦隊見ゆ』

旗艦「武蔵」経由で、一挺艦全艦に、敵艦隊発見の報が入った。ほぼ同時に、「大和」と「武蔵」に搭載された二一号電探と三三号電探に感がある。光よりも重力の影響を受けやすい電波は、地球の曲面に沿って、その向こう側の敵艦隊を捉えたのだ。

距離にして、三万五千メートル。一応お互いの主砲射程圏内であるが、視界に捉えていない以上、砲撃戦が始まることはない。

——栗田少将は、堅実な方だと聞いている。

戦艦の砲戦は、攻撃力と防御力が最大限に発揮される距離で行われる。日本海軍内において、それは二万五千メートルから二万メートルとされていた。

だとすれば、その辺りで仕掛けるつもりだろうか。

あるいはその前に、「曙」たち水雷戦隊に対して魚雷戦による攪乱と漸減を命じるかもしれない。

『「祥鳳」は艦隊より分離、後方にて支援に徹せよ。「卯月」、「磯風

」は同艦を護衛』

砲撃戦においてはただの標的ではない空母に護衛をつけ、戦場から退避させる。

『うーちゃんたちの分まで、よろしくぴょん！』

『先輩方のお手並み拝見とさせて頂こう』

卯月、磯風が、それぞれパラオ泊地艦隊向けの回線で激励を寄越す。これから赴かんとしている戦場には似つかわしくない、全くもつてい

つも通りの、飾らない言葉。それがパラオ泊地らしいといえはらしい。

「つたく、あいつら」

そう言いながらも、曙の口元はどうしようもなく緩んでいた。

『曙ちゃん』

最後に呼びかけてきたのは祥鳳だ。回線は「曙」単艦とのものに切り替えられている。

『私のフィアンセをよろしくね』

思いつきり咳込んでしまった。いつの間に俺は祥鳳の婚約者にされてしまったんだ。

「・・・はいはい。ちゃんと守るわよ。命に代えても」

ゴホゴホと涙目になりながら咳込んでいた榊原に代わって、曙が受け答える。そこで祥鳳との通信は終了した。

なんとか気管支の違和感を拭い去り、姿勢を整えて、榊原は前を見る。そこに、曙から追撃の一言。

「・・・クソ提督、いつの間に祥鳳と婚約してたわけ？」

「してないっ」

全力で否定した。

榊原の答えに、曙は目を細める。どこか不満げにも、安心していているようにも見える表情だが、そこから何かを読み取ることは難しい。

「・・・クソ亭主」

ボソリ。曙は呟いて、そっぽを向いてしまう。

「結婚しても『クソ』は取れないんだな・・・」

「ふんっ。言ったでしょうが。まだまだ半人前なんだから、クソで十分よ。仮に提督として一人前になっても、旦那さんとして半人前なら『クソ』のままよ」

そこまで言い切った曙は、なぜだか急に顔を赤くした。その頭から蒸気が噴き出る様子が見える。

「って、こ、これじゃあ、あたしがクソ提督の奥さんになるみたいじゃないっ！」

話がトンデモナイところへ飛躍してしまい、榊原は再び盛大に咳込

んだ。

「な、なによっ！そんつなに、あたしが奥さんじゃ嫌なわけ?!」

違う。そういうことではないのだが、また変になってしまった気管支のせいでそれどころではない。そのせいで、ますます曙の機嫌が悪くなる。

ようやく深呼吸ができるようになった頃には、わかりやすく頬を膨らませて、再びそっぽを向いてしまった。

注意をこちらに向けるため、咳払いを一つ。

「クソ亭主か・・・悪くないな」

振り返った曙が、半目で首を傾げる。

「・・・マゾ?」

「断じて違う!」

そういう意味で言ったわけではない。

「そうじゃなくてさ。曙は、いい奥さんになりそうだなって」

人を奮い立たせるのが、これほど上手い娘も珍しい。

人を思い遣るのが、ここまでできる娘は珍しい。

そう思っているのは本当だ。

「な、何言って」

「曙が奥さんだったら、きつと俺も、楽しいと思う」

さっきのフォロー、のつもりで口にした言葉には、半分くらい本音が入っていたかもしれない。

というか、もしかしなくてもこれ、プロポーズの言葉っぽくなってないか?

お互いにそのことに思い至ったのか、急激に恥ずかしくなって、榊原は意味もなく頬を掻き、曙はますます真っ赤になって俯く。

「・・・そういうこと言うから、クソ提督なのよ」

ポソリとした眩きは、随分と久々に聞く言葉のように思えた。

*

「・・・もう、好き勝手言ってくれますから」

艦隊から離れ、戦場から距離を取りつつある戦友——否、恋敵を大和は軽く睨む。もっとも、これだけ距離があり、通信も切れている

状況では、その意志が伝わるのかどうかは微妙であるが。

卯月や磯風が激励の言葉を残していく中、祥鳳だけは、大和に対してのみ通信回線を開いてきた。

——『提督と、曙ちゃんを、守って』

それだけ残して、祥鳳は離脱していったのだ。

本当に、好き勝手言ってくれる。

けれども、いつもの彼女とは違って、切実な声の色が、大和の心に引つかかっていた。

それは何か、勘のようなものかもしれない、と思っている。ともかく。

大きく息を吸い込み、大和は前を見据える。間もなく見えてくるであろう敵艦隊を叩くことが、第一だ。それが同時に、祥鳳の願いをかなえることにもなる。

この巨砲は誰がために。

この心は誰がために。

右手を握り締める。決意の限りに力強く握ると、手のひらに熱が宿った。

「大和」は現在、複縦陣左列の二番艦につけている。一番艦は「武蔵」、後続するのは「長門」、
「陸奥」の順だ。日本海軍最強の砲戦部隊と言える。

その後方には、パラオ泊地から参加している「摩耶」、
「足柄」、二隻の重巡洋艦の姿もあった。

この六隻で「甲イ」の戦艦、巡洋艦を相手取り、その隙を突いて原指揮下の水雷戦隊が突撃する。典型的な「砲雷分離思想」の戦術だ。

これまでの解放戦でも、よくこの戦術を使ってきた。役割を明確にすることで、「砲」が「雷」を助け、あるいは「雷」が「砲」を援護する、という立ち回りができている。

そんな中でも、一挺艦はこれまでで最強と言っても過言ではない、規模と能力を誇る。その頼もし気な艦影を見回した大和は、安堵に似た微笑みと共に内心では心配も吐露する。

——武蔵は大丈夫かしら。

昨夜に実施された、春島基地からと思しき夜間航空攻撃は、こちらの戦力減殺を狙ったものであった。幸い、喪失や戦闘航行不能となった艦はないが、“大和”以外の戦艦と“摩耶”が、敵の新型兵器――噴進弾を被弾していた。

装甲貫徹能力は低く、水線下への被害もなかったが、炸薬量が多く、艦上構造物には甚大な被害が出ていた。

“武蔵”は二発を被弾。右舷の副砲が爆砕され、主砲の電路にも異常が発生。一時は主砲の射撃が不可能となっていた。現在は復旧しているが、右舷甲板はささくれ立ち、艦橋付近には煤汚れも見える。

“長門”の被弾は三発。最も大きな被害は後部艦橋への一発で、“長門”は予備の射撃指揮装置を失っていた。

“陸奥”は被弾二発。航空作業甲板に立て続けに被弾し、航空燃料に引火。一時航空作業甲板上が火の海となっていた。このせいで観測機も全損し、現在は“大和”から代替機が出ている。

“摩耶”は被弾一発。舷側装甲にぶち当たって炸裂し、高角砲一基を大破させていた。

砲撃戦に支障が出るほどの被害はないが、何かしらの手傷は負っている。対する相手は、無傷の状態だ。これがどう響いてくるかはわからない。

――今はとにかく、全力を尽くすことのみ。

余計な考えを振り払うように、頭を振る。

自慢の四六サンチ砲には、すでに一式徹甲弾が装填されている。狙いを定め、引き金を引けば、後は飛び出すだけだ。

その時は近い。大和が気を引き締め、再び前方の海面に目を凝らした時だった。

『水平線上にマストを視認』

“武蔵”からだ。先頭に立つ“武蔵”が、真つ先に敵艦を発見したのだ。

いよいよ、始まるうとしている。トラック環礁をめぐる最後の戦い、そのゴングが、今まさに鳴らされようとしている。

ゴクリ。生唾を飲み込む。何度目だろうと、この緊張感に慣れるこ

とはない。それに今回は、これまでのように、隣に提督はいない。

今度は私一人で、戦わなくてはならない。

『敵戦闘機、観測機隊に接近しつつあり。『祥鳳』隊は迎撃開始せよ』
鋼の協奏の間に始まるのは、空をかけた猛禽たちの争い。砲撃戦の前哨戦は、空で始まろうとしていた。

迫りくる敵戦闘機隊に、『祥鳳』所属の零戦たちが挑みかかる。一触即発の空戦場、その下を、二つの艦隊は、じりじりと間合いを詰めつつあった。

銀翼ト巨砲

雲量三の空、ポツポツとした影が見えた。透き通るような青を背景に、影は確かに数を増やしつつある。太陽の光を受けてキラリと輝くその影に、“祥鳳”戦闘機隊長妖精は気づいていた。

方角からして、復旧したという春島の敵飛行場から飛んできた戦闘機だろうか。報告では新型機であるとされていた。

防空指揮艦である“摩耶”からは、すでに迎撃の指示が出ている。だが、今回忘れてはいけないことは。

眼下にチラリと意識をやる。そこを進むのは、トラック沖に雌雄を決するべく、波濤を踏み潰す艦種たち。何物をも叩き潰す巨砲は矛、全身にまとう装甲は盾。

海の覇者たるその風格は、戦艦という艦種の偉大さを物語っていた。

それでも、戦艦にだってできないことはある。残念ながら彼女らに、自らの高空の目を守る術はない。

だから、代わりに守るのだ。そう言い聞かせて、戦闘機隊長妖精はスロットルレバーに手をかけた。

整備の行き届いた「金星」発動機が一際大きな唸り声を上げた。三翔プロペラの翼角が最適な角度に調節され、零戦が一気に加速される。

観測機隊の守りにつく“祥鳳”戦闘機隊の数は二十四機。対する基地側の機数は不明だが、大雑把に見積もっても同数程度だろうか。楽に戦える相手ではない。

両戦艦群の距離は三万五千を切ろうかというところだ。相対速度は三十ノット前後だから、砲戦可能な距離になるまで十分とかならない。

ともかく。それまでに、観測機隊が安心して弾着観測を行える環境を整えたい。

観測機隊の直衛に一個小隊を残し、隊長妖精が直率して敵戦闘機へと向かう。

出撃前から、編隊での空戦を厳命していた。単機での能力差は埋めようがない。しかし二機一組であれば、対抗は可能だ。

丸っこい敵機のフォルムが次第にはつきりしてくる。暫定的に「たこ焼き」と呼ばれている敵機は、かわいい見た目に反して、がつぷりと大きな口を開け、真つ赤な炎の紋様を躍らせて、こちらを威嚇している。横から太陽を浴びるその姿は、白い悪魔か、ヒトダマとでも形容するのがいいだろうか。

操縦桿を握り直し、深呼吸を一つ。正面の敵機を見据える。

初撃のタイミングは一瞬だけだ。

お互いに発揮する速力は五百キロ毎時超。みるみるうちに距離は縮まり、正面に見える敵機の姿は大きくなる。

次の瞬間、隊長妖精は操縦桿を倒し、機を横ロールから降下させた。ほとんど同時に、先頭の敵機の両脇で閃光がきらめき、機銃弾の曳光が翼端を掠める。

「祥鳳」戦闘機隊に、機銃弾に捉えられた機体はいない。それは敵戦闘機も同じだ。降下や急上昇で初撃をかわした零戦を、丸い敵機が追いかけて、各所で空戦が始まった。

編隊空戦という基本戦術は彼我共に変わらない。

一機が敵機の後ろにつけば、その後ろから僚機が妨害に入ってくる。

二つずつの機影が複雑に入り乱れ、飛行機雲を引きずる。お互いに一步も譲らない。一所懸命の心構えで戦う「祥鳳」戦闘機隊は、零戦のみで新型機に対して善戦していた。

だが、如何せん数が足りていなかった。

戦闘機隊長妖精が二機の敵機に気を取られている隙に、別の敵機が空戦場から飛び出して、観測機隊へと向かっていく。追いかける暇はない。気を抜けば、撃墜されるのは自分の方だ。

操縦桿を無理矢理倒し、フットバーを蹴る。鍛え上げた空戦技術の粹を集め、隊長妖精は半ば強引に敵機の後ろを取った。

すぐさま後方確認。もう一機の方は、僚機がしつかり押さえてくれている。

発射把柄を握ると、機首一三ミリ、翼内二〇ミリの機銃弾が飛び出す。狙い違わず敵機に吸い込まれた機銃弾は、仕込まれた炸裂弾を作動させ、内側から引き裂いた。銀色に輝く破片が飛び散ったかと思うと、敵機が炎を噴きだす。丸っこい機体は急激に推力を失って、くるくると落ちていった。

僚機に一瞬だけ目配せをして、すぐさま機体を操る。

濃緑で塗られた主翼が翻り、隊長機は空戦場を離脱する。僚機もうまく敵機をかわして、すぐ後ろにつけた。

追いかけるのは、抜け出した敵機だ。チラリと確認しただけだったが、数は四機と言ったところだった。残してきた一個小隊四機で防ぎきれるか。

観測機隊の前で、最後の壁となった零戦が奮闘している。形勢有利とは言い難い。

編隊空戦を駆使して対抗する零戦。その間隙をついて、敵機が観測機に襲いかかる。観測機は鈍足だが、複葉機ゆえに操縦性はいい。何とか寸でのところ射弾をかわしていた。が、それもいつまで続くかどうか。

再び乱戦に突入している敵機の横っ腹めがけて、戦闘機隊長妖精は機体を通貫させる。零戦を追いかけていた敵機はこちらに気づいたらしかったが、もう遅い。

隊長機から四本の曳光が伸びる。十分に引き付けて撃った射弾が、外れるはずはなかった。

僚機ももう一機に取り付いて、海面に叩き落している。六対二になれば、負けるわけではない。ものの一分と経たず、両機とも撃墜する。その時。海面で閃光が走る様を、隊長妖精は見逃さなかった。

眼下、四隻の戦艦。その艦上で、巨大な黒煙が踊っていた。海面に沸き立つ雲のような煙と、大気を揺さぶる咆哮、さざ波を打ち消すほどの衝撃波。

始まってしまった。トラック環礁突入をかけた戦艦同士の砲戦が、ついに開始されてしまったのだ。

*

第一射の結果は、観測機から報されることはなかった。上空では彼の戦闘機が入り乱れて制空権をかけた戦いを繰り広げている真つ最中で、鈍足の観測機が入り込む余地はない。致し方のないこととして割り切るしかなかった。

「全弾近。諸元修正急げ」

大和は淡々と砲戦指揮を執り続ける。無いものをねだっても仕方がない。今はやれることをやるのみだ。

もたげられた各砲塔の中砲は、先の右砲よりもほんのわずかに仰角が大きく取られている。修正された諸元がどこまで正確であるかは、撃ってみなければわからない。

一挺艦の戦艦群——一制艦は、敵艦隊との距離二万五千メートルで砲撃を開始していた。

それより少し前、敵艦隊から分離した巡洋艦部隊もまた、一挺艦へと接近している。これを迎え撃つのは、清水指揮下の「摩耶」、足柄」と、榊原指揮下の五水艦。

——「ご武運を」

そう言つて送り出したのは、つい数分前だった。

現在「大和」は、敵二番艦を目標として砲撃を行っている。艦影から、ハワイ沖において確認されていた新型戦艦と判断されていた。

否、単なる戦艦ではない。艦体の特徴的なカラーリングから、その戦艦が深海棲艦の中でも上位意志に近い存在であると推定されている。

戦艦棲姫。米海軍が「クイーン・オブ・バトルシップ」と呼んでいたところから、日本側でもこのように呼称されるようになった。

艦体のサイズだけで言えば、「大和」型と同等だ。推定される排水量は六万トン超。長砲身の一六インチ砲を三連装砲塔に収め前部に二基、後部に二基。艦上構造物群の両脇は計十基の両用砲で固められていた。

その艦影は、かつて米海軍において計画され、「大和」型の真のライバルとされてきた「モンタナ」級を彷彿とさせる。

それが二隻。あちらも二隻の「大和」型を意識しているのだろう。

その第一射は、それぞれ「武蔵」と「大和」に向けて放たれていることが明白だった。

「第二射、てーっ！」

ブザーが鳴り終わると同時に、大和の号令が艦橋に響く。次の瞬間、右舷を指向した三門の四六サンチ砲が、巨大な火球を吐き出した。万雷にも勝る大音声が海上に響き渡り、艦橋が押しつぶされるのではというほどの衝撃波に震える。

同航する敵二番艦もまた、新たな射弾を放ってくるかと思われた。しかし、敵艦上に新たな炎が生じることはない。不気味な沈黙の意味するところを、大和は掴めずにいた。

——一体、何を・・・？

答えはすぐに示された。敵一、二番艦が、相次いで面舵を切ったのだ。その姿は、「大和」と「武蔵」に「ついて来い」とでも言っているかのようなだった。

あちらも、サシでの勝負を望んでいる。深海棲艦とは思えない非合理的な判断にも、なぜか納得してしまう自分がいた。

『挑戦を受ける』

前に行く「武蔵」から、栗田の声が届く。

『いずれにしろ、雌雄を決しなければならぬ相手だ。ここで、我々の手で、叩く』

大和にも異存はなかった。

体の内側から、何か湧き出てくるような感覚。肌が泡立つほどの興奮。

これから挑むのは、お互いの死力を尽くした、戦艦同士の頂上決戦だ。

『面舵二〇。大和は我に続け』

「面舵二〇」

「武蔵」からの指示に答え、大和は転舵を指示する。舵角指示器の針の動きを追いかけつつ、大和は目線を五水艦へと移す。あちらもまた、まもなく会敵する頃か。

『残りの二隻は、私たちに任せてもらおう』

割り込んできた勇ましい声は、後続していた「長門」からのものだ。「長門」型の二人が相手取るのは、二隻のル級 flagship。鬼や姫を除けば、深海棲艦の中でも五指に入る強力な艦だ。前回の『IF作戦』時には、「長門」が撃ち合って勝てなかった相手だった。

『陸奥と統制砲撃をやる。マリアナの時は、それで退けた』

大和の不安を打ち消すように、長門が力強く宣言する。二隻の同型艦が射撃諸元を共有する統制砲撃戦は、「長門」型二人の十八番だ。単艦では敵わぬ相手に、技術と戦術で対抗するつもりのようなのだ。

「武蔵」に続いて、「大和」が艦首を右に振る。視界には、敵三番艦に対して射撃を集中する二隻の戦艦。「ビッグセブン」と称えられた偉容が、誇らしげにその主砲を猛らせていた。

軽く会釈をして、意識を前に戻す。見据えるのは、二隻の巨大戦艦。

「大和」が戦うべき相手だ。

お互いの針路が、○九〇に定まる。距離は二万三千メートル。

頃合いはいい。測距儀が旋回し、正面に敵二番艦を捉えた。基線長十五メートルの測距儀は三角測量の要領で二番艦への正確な距離を割り出し、そこに速力や位置関係、緯度によるコリオリの力、風向に温度などが加味されて、最終的な射撃諸元となる。

導き出された仰角と旋回角が三基の砲塔に送られ、それに合わせて砲台が旋回、左砲が極太の砲身を上げていく。

陽光を受けて怪しい鈍色をきらめかせる四六センチ砲の砲口は、その先に敵二番艦を捉えていた。

主砲発射を告げるブザーが鳴る。この艦が上げる威嚇の声のように、大和には思えた。

「てーっー！」

大和の号令から一拍。三門の四六センチ砲が、本日三度目、転針後一度目となる砲声を発して、一瞬のうちに全ての音をかき消した。

鼓膜を容赦なく叩く轟音と、襲ってきた横揺れに、大和はその身を任せていた。

頂上決戦

二万三千メートルの彼方へ四六センチ砲弾が到達するまでは、初速が八百キロ毎時近くあろうと三十秒以上の時間がかかる。戦艦同士の砲戦距離というのは、それほどまでに長大だ。

転針後に再開した観測射の第一射を見送る大和は、しかし次の瞬間にはそのことを頭の隅に押しやる。彼我共に、現状で観測機は機能していない。諸元修正を終えるにはそれなりの時間と射撃回数が必要だ。第一射から命中弾が得られるなどと、楽観的なことは考えていない。

冷却作業が進められる左砲が下がり、入れ替わりに右砲が持ち上がる。新たな砲弾も装填済みだ。たった今の射撃を見て諸元に修正を加え、続いて撃つ。

——何としても、先に命中弾が欲しい。

“長門”と“陸奥”の劣勢は明らかだ。環礁前の門番となつている「甲伊」を突破するには、ここで“大和”と“武蔵”が二隻の戦艦棲姫を撃破し、しかる後に反転してル級flagshipとの砲戦に加わらなければなるまい。

そのためには、先に命中弾を得ることがどうしても必要だ。

第一射が弾着する。水平線の近くで三本の水柱が立ち上り、海水を湧き立たせた。今回の作戦では、同型である“武蔵”との同時砲戦が想定されていたので、搭載する一式徹甲弾の風帽内には緑の染料が仕込まれている。

「大和は 国のまほろば たたなづく 青垣山ごもれる 大和し 美し」の歌のごとく、緑色に染め上げられた海水が敵二番艦の姿を覆う。

水柱の向こう側に艦影が隠れたことで、轟沈したような錯覚を覚えるが、そうはならない。数秒後に水柱が崩れると、敵二番艦は健在な姿を現す。

“大和”の第一射は、敵艦を夾叉することもなく、手前に落ちて終わっていた。

逆に、敵二番艦の射弾が“大和”に降り注ぐ。長砲身一六インチ砲

から放たれた高初速の砲弾が四発、まともって右舷海面に激突し、丈高い水柱を噴き上げた。だが、まだ距離がある。目測で四百メートルといったところであり、こちらも諸元修正には時間を要しそうだ。

至近距離に落ちたわけでもなく、「大和」の艦体は何の痛痒も感じさせない。衝撃で艦底が揺さぶられることもなく、平然と航行を続けていた。

諸元修正が完了し、第二射の発砲を告げるブザーがなった。

「てーっ！」

右砲が巨大な砲声を上げた。四六センチ砲の衝撃は極太の艦体をもつてしてもすべてを受け止めることはかなわず、確かな揺れとなつて艦橋を左舷側に仰け反らせる。

三十九メートルの横幅に由来する復元力が働き、傾斜はすぐに戻される。砲身が冷却され、陽炎が甲板の景色を歪めていた。

二万三千メートルの彼方、敵二番艦もまた、新たな射弾を放っていた。艦の前後、計四か所から褐色の炎が生じて、こちらを威圧している。巨大な黒雲に変わった砲炎が流れ去ると、「大和」に似てスツキリとまとめられた艦上構造物が姿を現した。

先に放った「大和」の第二射が弾着する。天をも突かん勢いで立ち上る三つの瀑布は、今回も敵二番艦の手前に生じていた。「大和」の射弾は、今回も空振りに終わっていたのだ。

——そう上手くはいかない、か。

観測機があれば、二、三射で大きく諸元を詰めることができる。上手くすれば三、四射で命中弾が得られる算段だ。

観測機のない砲戦は、それだけで難しいものであった。

——とにかく今は、少しでも射撃の精度を高めないこと。

上空の制空権さえ確保できれば、観測機を使用できる。「祥鳳」の戦闘機隊は奮闘していた。少しずつではあるが、敵戦闘機を艦隊上空から引き剥がしつつある。

大和の思考は、敵二番艦からの第二射到達によって中断された。

弾着は、またしても全て右舷側だ。衝撃は小さく、各所から被害報告が寄せられることもない。

——・・・あれ？

だが、何か。ちよつとした違和感を、大和は感じていた。

その正体を探る間もなく、第三射の準備が完了する。ブザー音の後、各砲塔の中砲から爆炎と衝撃波、大音声が吐き出された。

“武蔵”もまた、“大和”とほとんど同じタイミングで射撃を続けていた。遠雷のような砲声が“大和”の艦上にも届く。

巨大戦艦姉妹に対抗して、二隻の戦艦棲姫も相次いで発砲した。長一六インチ砲を奮い立たせ、派手な砲炎を躍らせる。

ここでも、小さな違和感。だがやはり、その正体はわからない。言うなれば、船としての勘としか言いようがないかもしれない。

あの砲煙の下に、何かを隠している気がしてならないのだ。

“大和”の第三射が飛翔を終え、敵二番艦の手前に弾着する。派手な水柱が三本立ち上る状況は変わらない。諸元を詰めた気配はなく、今回も空振りだ。

諸元修正が急がれる。数をこなし、地道に命中まで持つていく他なさそうだ。

第四射の準備を進める左砲の仰角は、先よりも心持ち大きくされている。最終的な修正値の算出までは今しばし。

その間に、戦艦棲姫からの第三射が到達した。大気を鋭く切り裂く音が間近に迫って来る気配を感じた時、大和の違和感はピークに達した。

いや、もはや誤魔化しようがない。違和感でしかなかった感覚は、明確な「嫌な予感」となって襲いかかってきた。

「っ!？」

弾着の瞬間、“大和”右舷至近の海面が弾けて、大量の海水が舞い上がった。大粒の水滴たちが激しいスコールとなって甲板に降り注ぎ、バラバラと派手な音を立てる。

見まがいのようなない、至近弾だ。夾叉されるのも時間の問題だ。さらに。前方を行く“武蔵”の状況はさらに切迫していた。

“武蔵”周辺に立ち上った水柱は、左舷に三本、右舷に一本。夾叉だ。敵一番艦は、観測機なしにもかかわらず、たった三射で、長一六

インチ砲の射界に「武蔵」を捉えたのだ。

——どうして!?

口について出そうになった言葉を飲み込む代わりに、強く歯を食いしばる。

彼我共に観測機はない。この状況で、射撃精度に大きく差が出るようないことはない。

敵一番艦だけであれば、単なる偶然や、高い練度と片付けることもできたかもしれない。だが同じことは、二番艦の射撃でも起きている。何か共通する要因があるはずだ。

観測機に代わるような、何らかの射撃観測方法。

——・・・いや。

本当に観測機はいないのだろうか？

第四射を放つ左砲の咆哮を聞き届けながら、大和はふと、頭上を見上げた。天井の向こう、広がる青空では、彼我双方の銀翼が入り乱れ、こちらの観測機隊は艦隊上空からの退避を余儀なくされている。

では、敵の観測機は？同じように退避しているのだろうか、それらしい機影は見当たらない。

違うのかもしれない。大和は直接、上空の状況を見ているわけではないのだから。

程なく、防空指揮所の見張り妖精が、興味深い報告を上げてきた。

『上空に陸上機。高度七千』

二一号電探の反応の中に、そんなものが混じっていたとは。高度差まで割り出せない二一号電探の盲点を突かれた形だ。

高度四千メートル付近で練り広げられる空戦を睥睨するように、悠々とした飛行を続けている数機の陸上機は、艦隊上空で一点を保つて旋回を続けているらしい。

大和の頭の中で、一つの仮説が組み上がる。それは、陸上機を用いた、高高度からの弾着観測だ。

高度を高くすれば、海面の様子は見にくくなる。しかしそれは、望遠レンズを用いれば解決可能だ。さらに、大型の陸上機であれば、艦載の小型水上機には搭載不可能な大型の観測機器も積み込める。よ

り精度の高い弾着観測が可能になるというわけだ。

同様の方法は、空軍や海軍航空隊の機体との間で、日本海軍も研究していた。大和はその訓練を受けたことはないが、話だけは聞いたことがある。

同じ方法を、深海棲艦も使ってきたのかもしれない。

とはいえ推測の域は出ない。これ以上考えても仕方ないと頭を振り、大和は目の前の戦闘に意識を戻す。

丁度その時、敵二番艦が第四射を放った。大和もある程度覚悟はしている。今度の射弾は、こちらを夾叉してくる可能性が非常に高い。

一方で、“武蔵”を相手取る敵一番艦は不気味な沈黙を保っていた。その意味するところは、大和にもわかる。先の第三射で夾叉弾を得た敵一番艦は、斉射に移行するべく、全砲の装填を待っているのだ。そして、それが始まった。

敵一番艦から、それまでとは比べ物にならないほどの圧倒的爆炎が迸った。大気を揺るがす咆哮が聞こえるはずもないのだが、重厚な威圧がここまでひしひしと伝わってくる。“大和”型と同等の艦体をプラットフォームとして、十二発もの一六インチ砲弾が飛び出したのだ。

——武蔵……。

大和にできることは、“武蔵”の装甲が一六インチ砲弾を受け止め、弾き返してくれることを祈る以外になかった。

第五射に備えて、右砲が鎌首をもたげる。第四射の弾着までは、後五秒。

——今っ！

カウントダウン通りに、四六センチ砲弾が落下して、白濁した海水が舞い上がる。硝煙を含んでくすんだ水柱が、陽光を受けて怪しく輝いた。その様子を、まじまじと観察する。

「……ダメッ」

悔しさを滲ませた声が漏れてしまう。“大和”が放った第四射は結局敵艦を捉えることなく、またも三つの近弾を生じただけであった。

「武蔵」の射弾も、空振りを繰り返している。「大和」型二隻の砲撃は、命中弾どころか夾叉弾すらも得られず、砲弾を浪費しただけとなった。

観測機の有無が、これほどまでに命中精度の差となって現れるとは。

——焦りは禁物。

誤差修正が行われる中、一度深呼吸。初実戦となった『I F 作戦』時には、誤差修正を完了するまでに実に六射を擁したのだ。それでも、最終的に「大和」は撃ち勝ち、二隻の敵艦を撃沈破している。それだけの実力が、この艦にはあるのだ。

だから、今は耐え、着実に射撃精度を上げていくしかない。

そんな大和の思考を嘲笑うかのように、敵二番艦からの第四射が降り注いだ。次第に大きくなる砲弾の飛翔音が、それまでと違うことに、大和は直感的に気づいた。

来る。身構えた次の瞬間、飛翔音が掻き消え、両舷の海水が重力に逆らって持ち上がる。てっぺんが艦橋から見えない程だ。

同時に、鈍い衝撃と打撃音、艀装を通して痛みが伝わる。

——当たった……！

敵一番艦に続いて、敵二番艦もまた、「大和」を射界に収めたのだ。次からは、全十二門の一六インチ砲による斉射が襲い来ることになる。

そしてそれよりも先に、敵一番艦の斉射が「武蔵」に襲いかかった。

多数の水柱が同時多発的に生じたことで、巨大な「武蔵」の姿でさえも海水のカーテンの向こうに消えてしまった。その内側で、命中弾炸裂のものと思われるオレンジ色の光が瞬く。

水柱が崩れ去れば、「武蔵」は健在な姿を現す。さすがは世界最大の戦艦だ。大抵のものならば、粉微塵に吹き飛ばして欠片も残らなくなるような重量一トンの強烈な一撃を受けても、大して痛痒は感じさせない。むしろ、その闘志を滾らせているようにさえ見える。

「負けてなんて、いられないわよね」

私たちは、世界最大にして最強の姉妹なのだ。

五回目の射撃を告げるブザーが、決意を示すように鳴る。負けるつもりは、微塵もなかった。

「てーっ！」

彼方の敵に牙を突き立てると、「大和」と「武蔵」はさらなる射弾を放った。

火矢ノ雨

第五射に伴う反動で揺れる艦橋に、大和は足を踏ん張っていた。交互撃ち方によるたった三門の射撃でも、世界最大の四六センチ砲が放たれた時の衝撃は凄まじいものがある。ビリビリと震える窓の向こうを、大和は睨みつけた。

“大和”と同航するようにして進む巨艦。二万三千メートルの距離を保って進む敵二番艦の艦上には、いまだ新しい発射炎は生じていない。

不気味な沈黙の意味は、何を言わずともわかる。先の第四射で“大和”に対して命中弾を得た敵二番艦は、全十二門の一六インチ砲による全力斉射に移行しようとしているのだ。

高高度からの弾着観測を用いている二隻の戦艦棲姫は、すでに両艦とも有効射を得ている。対して“大和”と“武蔵”は、夾叉弾すら出していない。完全に諸元修正で後れを取った形だ。

——この第五射で、何とか。

今の大和にできることは、淡々と自らの射弾の結果を待つ以外になかった。

次の瞬間、敵一番艦が、“武蔵”に対する第二斉射を放った。めくるめく閃光が海上に走り、巨大な砲炎が吐き出されている。重量一トンにもなる巨弾が十二発、音速の二倍の速度で大気を切り裂き、“武蔵”へと迫る気配がした。

それに遅れること数秒。今度は“大和”が相手取る敵二番艦の艦上で、同様のことが起こった。

戦艦らしく、がっしりとした印象を受ける艦上構造物が、真っ黒な雲に覆われて見えなくなる。十二門の一六インチ砲が、砲弾に初速を与えるために必要とする火薬の量は凄まじい。そのことを如実に物語っていた。

チラリ。大和は眼下の前甲板を見遣る。“大和”各砲塔の中砲では、新たな射撃の準備が進められていた。今第五射を放ったばかりの左砲も冷却が行われ、開かれた尾栓から一式徹甲弾と装薬が装填され

る。

その間に、遙かな高空で、お互いの巨弾が交錯した。

すれ違った砲弾は、それぞれが目標とする敵艦に向かって、何の疑いもなく、ただまっしぐらに突撃していく。

先に弾着したのは「大和」の第五射だ。位置エネルギーを完全に消費した四六サンチ砲弾は、終端速度に達して海面に突き刺さる。三本の水柱がそそり立った。

「よしっ」

大和は両の拳を握り締め、ガッツポーズを作る。砲弾の行方を観察していた見張りの妖精から、夾叉の報告が入ったのだ。

命中弾こそなかったものの、「大和」はついに、敵二番艦を射界に捉えたのだ。

「次より斉射！」

高らかに宣言する。これを受けて、各砲塔がにわかに慌ただしくなった。全力斉射に備えて、各砲塔で準備が進んでいるのだ。

だがその前に、敵二番艦の第一斉射がやって来る。

被弾の衝撃は、またしても後方から襲ってきた。連続して二回。衝撃自体は大きくないが、被弾には変わらない。すぐに、妖精の応急修理班が動き始める。

大和が確かめるのは、各種射撃関係の機器だ。電路が寸断された様子はなく、各砲塔とも射撃指揮所からの統制が継続されている。斉射に支障はない。

同時に、嬉しい報せも入った。

『これより弾着観測の任につく』

その旨の報告が、上空の観測機から届いたのだ。

防空指揮所の見張り員から続報が入る。どうやら、「祥鳳」の艦載機隊に加え、一機艦の「赤城」から戦闘機が救援に駆け付けたらしい。

——赤城さん……。

上空を支配しつつある銀翼に、日本海軍機動部隊旗艦の覚悟が、込められている気がした。

その覚悟に、応えなくては。

主砲発射を告げるブザーは、どこか心の高鳴りを抑えるように、鳴り響いて、やがて途切れる。それが、反撃の始まりを意味していた。「てーっ！」

号令する大和の声にも、自然と力がこもる。

次の瞬間、それまでとは比べ物にならない爆轟音が、「大和」の甲板を支配した。

あらゆる艦上構造物には、四六センチ砲の暴力的な爆風に備えたシールドが施されている。それでも、九門の巨砲が咆哮する衝撃の前には、そんなものなどお構いなしに、艦上のありとあらゆるものが吹き飛ばされるのではとさえ思えてくる。

これが、私に与えられた力。世界最強戦艦としての実力だ。

トラック環礁の解放は、全てこの四六センチ砲にかかっていると、言っても過言ではない。

見張り員からは、前方の「武蔵」もまた、斉射に移行した旨が報告されていた。「武蔵」も、「大和」と同様に敵艦を射界に収めたのだろう。

——これで、負けはしない。

条件はお互いに五分だ。後は、どちらが先に音を上げるか。

北東水道の入り口は、後方へと流れていく。決着が長引けば、それだけ部隊の再編と環礁への突入に時間がかかる。それを狙っているから、戦艦棲姫たちは針路を東に取ったのだろう。

できる限り早急に決着をつけたいが、こればかりはどうなるかわからない。

大和にできることは、自らの四六センチ砲の威力を信じることだけだ。

彼我の斉射弾は、ほとんど同時に海水を沸騰させた。さすがの「大和」も、至近弾の爆圧に艦底部が持ち上げられ、敵弾が当たった装甲が異音を上げる。今度の被弾は一発。

これまでの被弾による被害が集計されて、報告が上げられた。最初の一発は、後部航空作業甲板に命中し、軌条を破壊していた。それ以

降の被弾は、どれもバイタルパート内に命中しており、「大和」の分厚い装甲が弾き返している。被害は増設した機銃二基が風ぎ払われたくらいだ。

艦の運行——航行にも、戦闘にも、全く支障はない。

斉射を放ったばかりの砲身が下げられ、次弾の装填が急がれる。砲塔内の妖精たちが、弾火薬庫から上げられてきた砲弾と装薬を尾栓から押し込む。

巨弾ゆえに、作業は遅い。駆逐艦なら六秒に一回というハイペースで射撃ができるが、戦艦ではそうもいかなかった。ジリジリと時間が経過していく。

——っ！

先に装填を終えたのは、戦艦棲姫の方だった。仰角をかけられた十本の砲身からは、先と変わらずに豪快な炎が沸き起こっている。観測機から命中弾二発の報告が入っていたが、どうやら戦闘能力を奪うには至らなかつたらしい。

斉射の間隔はおよそ三十秒。他の深海棲艦の戦艦と変わらない。手数では、完全に「大和」が劣っている。

それがなんだというのだ。

ボクシングで例えれば、手数の多さはジャブに似ている。一発で効果がなくとも、何発も叩き込めば相手をノックダウンさせることができる。

「大和」という艦は、ジャブにめっぼう強い。排水量が大きいということは、そういうことだ。

逆に、「大和」が放つ一発は、重いストレートだ。たった一撃でも、相手をノックダウンさせる能力を与えられている。

装甲と排水量にものを言わせて、自らの拳が相手ののど元を抉るのを待つ。それが「大和」の戦い方だ。

敵二番艦から十秒ほど遅れて、「大和」は新たな斉射を放つ。一六インチ砲弾三発を被弾しても、艦は何の痛痒も感じさせない。要塞のように屈強な三基の主砲塔は、先と変わらずに、三発ずつの四六センチ砲弾を撃ち出す。

水圧機が受け止めきれなかった反動は、三十九メートルにも及ぶ艦体が吸収した。それでも全ての衝撃を相殺できたわけではなく、艦橋が仰け反るほどの横揺れが“大和”を襲う。

長い轟音の余韻が収まる頃、艦の揺れも沈静化へと向かう。一瞬の平穏が訪れた艦上では、下げられた砲身の冷却作業と砲弾の再装填が急がれていた。

その静寂を切り裂いて、巨弾が降り注いだ。

連続して水柱が噴き上がり、舞い上がった海水が容赦なく甲板を打つ。正面に生じた水柱へ艦首からもろに突っ込み、艦首甲板から第一砲塔にかけてがびしょ濡れになる。

海水が打ち付けた砲身から、ジュツという音と濛々たる蒸気が立ち上った。

今回の被弾は一発。第二砲塔の正面防盾で火花が散るのが見えた。六百ミリにもなる主砲塔の正面防盾が、一トンの巨弾を弾き返したのだ。

絶対に碎けることはない、鋼の拳。そんな印象を受けた。

だが、それで敵艦が砲撃をやめることはない。懲りることなく、四度目の斉射を放つ。巨龍が咆哮するかの如く、巨大な炎が海面をオレンジに染めていた。

“大和”の装填作業はまだ終わらない。揚弾機が上がってきた砲弾がようやく尾栓から押し込まれ、今度は薬囊の装填が行われている。これから尾栓を閉め、仰角を上げなければならぬ。

ようやく装填作業が完了し、極太の砲身が鎌首をもたげる。かすかに煤汚れた砲口の鈍色が、ギリリと輝いた。

「てーっー！」

三度目の斉射を告げる号令。九門の四六センチ砲は全てが健在で、右舷へと炎の塊を吐き出す。放たれたのは、一トン半という凄まじい質量を誇る火矢だ。鋭く尖った先端は、自らの持つエネルギーであらゆる装甲を貫くことができる。

艦の前進に伴って黒い砲煙が後方に流れ、視界が開かれる。次の瞬間、新たに視界を覆われた。

続いて、これまでで一番大きな打撃音、破壊音。何かがひしやげる、嫌な感覚。

「っ！」

今度は、艀装を通じて、確かな痛みが大和に伝わった。痛みがあれば、ある程度であるが、被弾した場所や、破壊された場所もわかる。

——副砲がやられた・・・！

同じ砲塔でも、主砲に比べて装甲の薄い副砲が、一六インチ砲弾に押し潰され、叩き割られたのだった。

被害報告は、右舷側の二番副砲が爆砕されたというものだった。大和はすぐに、海水ポンプを作動、弾火薬庫に注水する。万が一の誘爆を防ぐためだ。

気にするような被害ではない。どうせ副砲では、戦艦の装甲を貫けない。

すぐさま、敵二番艦は新たな斉射を放ってくる。『大和』の第三斉射はまだ飛翔中だ。二万メートルを超えて敵艦を叩く巨弾は、じれつたいほどに、届くのが遅い。

砲弾の到達時間を計るストップウォッチの数字を追いかける。弾着までは、後三秒。

「だんちやーく、今っ！」

掛け声と同時に、敵二番艦を特大の水柱が押し包んだ。その合間から、はつきりと爆炎が見て取れる。目を凝らせば、細かな破片が舞っている様も確認できた。

確かな手応え。実感が湧きずらいのが、戦艦同士の砲戦の難点だが、今回ばかりは確かな感触があった。

四六サンチ砲は、間違いなく効いている。

観測機から報告された命中弾は一発。水柱が崩れた時、敵二番艦の後甲板からは、うつすらと黒煙が立ち上っていた。

思わず、拳を握る。今日確認された中では初めての、被害らしい被害だ。

新型戦艦に対しても、『大和』の四六サンチ砲は有効だ。そのことが、たった今示されたのだった。

新たな斉射の準備が整ったことで、射撃に備えたブザーが鳴らされる。その合間に、甲高い飛翔音が混じった。

第四斉射の発砲。同時に、敵二番艦からの五度目の斉射が“大和”を包み込んだ。

沸騰する海水。艦首で割れる水柱。異音と共にひしゃげる艦上構造物。

唇を噛み締め、大和は戦艦としての本分を全うせんと、更なる闘志を燃やしていた。

巨艦ノ饗宴

敵二番艦の第五斉射による被害が集計されるよりも早く、第六斉射が“大和”に襲いかかった。

弾着の瞬間、黒い物体が前甲板に吸い込まれるのを、大和は見た。巨大な爆炎が視界を覆う。木くずが飛び散り、衝撃に艦体が打ち震える。

「っ！」

微かな痛みが、艤装を通して伝わる。バイタルパートが弾き返したはずだが、それでも十分な破壊力が“大和”を叩いていた。

衝撃は後部からも襲ってきた。こちらは明らかに何かが破壊された甲高い破壊音が混じっている。装甲の薄い艦上構造物が、一六インチ砲弾に貫かれたようだ。

薄く黒煙を引きずる敵二番艦を睨む。同時に放った“大和”の斉射もすでに到達しており、命中弾は一発と報告されている。今度は前甲板でも、火災らしき揺らめく光と、黒煙が生じていた。

その煙を吹き飛ばして、新たな斉射の炎が海上に踊った。さすがの四六サンチ砲といえども、あれだけの巨艦から攻撃能力を奪うのは、容易いことではない。

敵二番艦の第七斉射からおよそ十秒。遅ればせながらも、“大和”が次なる斉射を放つ。

前甲板六門、後甲板三門の四六サンチ砲が一齐に咆哮した。一六インチ砲弾の爆炎など比べ物にならないほどに巨大な砲炎が、右舷方向へと吐き出された。等速度的に広がる衝撃波が容赦なく海面を叩き、巨大なクレーターを作る。

第二戦速で航進を続ける“大和”の艦体が、大きく左舷に傾いた。斜めになる艦橋の床に、大和は足を踏ん張る。

強烈な反動が、四六サンチ砲の威力を物語っていた。

鼓膜を突き抜けた砲声が、脳髓を震わせる。その余韻がようやく収まろうかという頃、新たな敵弾十二発が、唸りを上げて大和の頭上を圧迫した。

これまでで一番大きな衝撃が、床下から大和を突き上げる。ふわりとした浮遊感。どうやら敵弾が、艦橋基部で炸裂したらしい。

艦橋基部は、戦艦の中でも装甲の厚い部分だ。実質的な被害はないだろうが、やはり気分の良いものではない。

火災発生への報告が上がった。今の被弾で、右舷艦橋基部辺りから出火したらしい。応急修理班が、防火装備を担いで急行する。

——射撃指揮系統に異常なし。

ほっと胸を撫で下ろす。艦橋トップの射撃指揮所と、各砲塔を結ぶ電路は健在だ。

“大和”の第五斉射が敵二番艦に到達する。

白銀の水柱が連続して立ち上り、巨大なその姿を覆い隠す。海水のカーテンの向こう側で、オレンジの光が瞬いた。命中弾の炎だ。

水柱が崩れ去ると、敵二番艦が健在な姿を現す。

——しぶとい・・・っ！

相変わらず黒煙を噴いているが、その量は増えていない。むしろ、根元の火災は小さくなっているようにさえ見受けられる。

頑丈な艦だ。

たった今の斉射で生じた命中弾は二発。それでも、敵二番艦に動じた様子はない。

新たな射弾が、下界を見下ろして嘲笑うかのように、甲高い音と共に落下してくる。約三十秒間隔の斉射は変わっていない。それが敵戦艦の頑強さを如実に物語っていた。

“大和”を八度目の斉射が包み込む。艦橋のすぐ後ろから、金属が強引にねじ切られた異音が聞こえてきた。そのすぐ後には、気体もものすごい速度で排出される掠れた音。

敵弾の一発が、“大和”の煙突を貫いたらしい。

蜂の巣甲板と呼ばれる装甲が、“大和”の煙路には施されている。敵弾から艦の心臓部を守るために備えられた蜂の巣甲板は、その役目を十二分に果たし、一六インチ砲弾の機関室侵入を防いでいた。

機関室からも、異常を報せる報告はない。

大和は自らの眉間に皺が寄っていることを自覚していた。致命的

な被害は受けていないし、「大和」の装甲は完璧に一六インチ砲弾による破壊を防いでいる。それでも、多数の被弾が続くことは避けない。

今後の作戦展開、すなわち『NT作戦』最後の仕上げとなる、敵基地の破壊と上陸拠点の確保に、余力を残しておかなければならない。そして、大いなる矛盾なのだが、『NT作戦』の目的を達成するには、今ここで、全力で敵水上部隊を片付けておかなければならない。

「大和」が、今日六度目となる全力の咆哮を上げた。すでに十発を数える命中弾を受けているが、砲声は衰えず、九門の四六センチ砲からは重量一トン半の徹甲弾が飛び出した。

その牙が狙うのはただ一つ、敵二番艦の喉元のみ。

敵二番艦の第九斉射は、「大和」に遅れること十秒ほどして放たれた。前甲板六門、後甲板六門の一六インチ砲は、いまだ一門として欠けることなく、「大和」に対して明確な敵意を向けている。逆るオレンジ色の炎が、海面すらも焼こうとしていた。

彼我の砲弾、合計二十一発が、遙かな高みですれ違う。それはほんの一瞬だ。徹甲弾は放物線の頂点まで上り詰めると、溜め込んだ位置エネルギーを運動エネルギーに変換しながら、狙いをつけた目標へとまっしぐらに突っ込んで行く。

弾頭が装甲にぶち当たる。被帽と装甲がお互いの身を削り、せめぎ合う。それでも、四六センチ砲弾の持っていたエネルギーが、敵二番艦の装甲に打ち勝った。

盛大に炎が弾ける。水柱の隙間からはつきりと、斉射のそれとは異なる光が見て取れた。

命中弾は二発。今度は後部に集中していた。

敵二番艦への被害を見極める前に、今度は「大和」を衝撃が襲う。艦そのものを揺らすのは命中弾の爆発、艦底から突き上げるのは至近弾の爆圧だ。

二番缶室から軽微な浸水の報告が上がる。多数の至近弾によって、装甲を留めていたりベツトに緩みが出たのだろう。その隙間から、海水が侵入したようだった。

いかに「大和」といえども、その耐久力は無限ではないというわけか。

——それでも、まだまだ戦える！

被害の蓄積など、彼我共に同じだ。こちらが苦しい時は、相手も苦しい。最終的に勝利を収めるか否かは、ここで踏ん張れるだけの能力があるかどうか、そして少しとは言い難い運の要素。

勝利の女神、その笑顔をいかに引き寄せるかにかかっている。

装填が終了した第七斉射を告げるブザーの音。硝煙が燻る艦上に、ほんの一時、静けさが訪れる。

静寂を破ったのは、四六サンチ砲の高らかな砲声だった。頭上で輝く太陽が霞んで見えるほどの光球は、あらゆる聴覚を奪い去る大音声と、艦上の煤をまっさらに吹き飛ばしてしまう衝撃波を伴っている。押し潰された海面が、鏡のように空を映す。

自らが斉射を放つとともに、敵二番艦の様子も観察していた大和は、ふとした違和感を感じる。それまで艦の前後でバランスよく沸き起こっていた砲炎の量が、今回はアンバランスに見えたのだ。具体的に言えば、後部の主砲から生じる炎の方が、少ないように思えた。

——もしかして・・・？

大和の予想を裏付ける報告は、すぐに観測機から寄せられた。

敵二番艦の四番砲塔が沈黙。たった今の第十斉射では、新たに砲炎を上げていなかったというものだった。

先に放った「大和」の第六斉射が、敵二番艦最後部の主砲から、射撃能力を奪ったのだ。

四番砲塔を四六サンチ砲が貫いたのか、あるいは付近に弾着して旋回や発砲に必要な機構を抉り取ったのか、それはわからない。

はつきりしていることは二つ。

四六サンチ砲弾は、敵二番艦から四分の一の火力を奪ったこと。

弾火薬庫は誘爆せず、敵二番艦はまだ健在であること。

発砲からおよそ三十秒。彼我の砲弾はほとんど同時に、目標とする敵艦を包み込んだ。

耳をつんざく打撃音と、頭を搔きむしる破壊音が、「大和」の艦上

に響き渡った。痛みに上げそうになった悲鳴を大和は噛み殺す。

けたたましい音を立てて、真つ二つになった一番副砲が甲板に落下した。三本あった一五・五センチ砲の砲身は、まるで小枝でもあるかのように吹き飛び、海面に盛大な飛沫を上げる。

弾火薬庫への引火はない。副砲自体の装甲は断片防御に毛が生えた程度だが、その下の弾火薬庫の防御は主砲と同等だ。

ひとまず胸を撫で下ろした大和は、冷静に注水を命じる。最早ただの可燃物倉庫となった一番副砲弾火薬庫に、ポンプによってくみ上げられた海水が流入した。弾薬の着火点は水の沸点よりも上だから、弾薬庫の誘爆という最悪の事態は避けることができる。

ダメージコントロールの進捗を確認し、改めて敵二番艦に目を遣る。

観測機からは、一発が新たに命中弾として報告されている。艦上構造物の両脇に配された高角砲群に飛び込み、周囲のモノを薙ぎ払いながら盛大に弾けた。

現在、被弾箇所からは、新たに黒煙が燻っていた。高角砲弾が誘爆して、火災が発生したのだろうか。

しかしながら、敵二番艦はまだ、その闘志を失ってはいなかった。すでに第十一斉射が放たれ、“大和”に向けて飛翔中だ。

一方の“大和”も、まもなく第八斉射の準備を終える。

「てーっ！」

瞬間、艦橋に強烈な光が差し込む。大和の影がくつきりと艦橋の床に伸びる。まばゆいその光に目を細め、大和は再び、弾着までの時間をストップウオッチで確かめる。

一番副砲への注水が完了し、ポンプが止められる。その他にも、被害報告が各所から上げられていた。応急修理の妖精がてんやわんやとなつている。

だが、いくらこの身が傷つこうと、戦いをやめるつもりはない。

高空から風切り音が聞こえ始めた。敵二番艦の第十一斉射九発が、まもなく“大和”に到達しようとしているのだ。

丹田の辺りに力を溜め、大和は身構える。

弾着のその瞬間、後ろから突き飛ばされるような衝撃が襲いかかってくる。一瞬のうちに巨大な応力がかかったことで、耐えられなかったブルーアイアンが断裂した。艦上構造物が大きく抉られる。

「っー」

大和は苦々し気に眉を寄せる。

たった今の被弾で、後部艦橋との連絡が途絶した。途中の電話線がやられたのか、それとも木っ端みじんに消し飛んだか。

後部艦橋には、予備射撃指揮所が設けられている。艦橋トップの射撃指揮所が何らかの理由で使用不能になった際、その代役を担当するところだ。

これで『大和』は、主砲統一射撃に必要な機材の予備を、失ったことになる。

ズキリ。背中が痛む。被弾による損傷が、艤装を通じて、大和の痛覚を刺激する。

だが。

「・・・負けない」

ポツリ、言葉が漏れる。

最早意地に近い、何か。そしてこれ以上ないほど、自らの存在意義を感じる事ができる、強い感情。

「お前たちなんかは、負けない！」

大和の言葉に呼応するように、第八斉射が敵二番艦を包み込んだ。

巨砲潰エル時

第八斉射が産み出した命中弾は、これまでで最多の三発だった。敵二番艦の前部、中央部、後部に一発ずつと、満遍なく命中し、火柱を上げている。抉り取られた構造物の破片が飛散し、甲板と海面を激しく叩いた。

敵二番艦から噴き出す黒煙は、すでに「大和」からでもはつきりに見えるほどになっている。艦が前進を続けているために、火の粉を含んだ黒い雲がたなびいていた。

——やった!?

傍目には、相当な被害を与えているように見える。しかし、黒幕の向こう側がどうなっているのか、ここからは窺い知れない。

「大和」の第九斉射が放たれる。褐色の炎が大量に沸き起こり、太陽にも勝る閃光を青い海に反射させた。反動と爆風が艦橋を襲う。その間も、大和はジツと敵二番艦を見つめていた。

敵艦を観察する大和の視界は、すぐに遮られた。先に放たれた敵二番艦の第十二斉射だ。後方から炸裂音が響き、一番砲塔の正面防盾で火花が散る。

鋭い痛みで顔をしかめる。「大和」として無傷ではない。小火災は各所で発生しており、応急修理要員はてんてこ舞いの状態だ。いかに世界最高の防御力を誇るとはいっても、その能力は満載排水量にして七万一千トン分ではない。

まあ、それでも、破格の防御力であることに変わりはないが。

敵二番艦が黒煙を振り切って第十三斉射を放った。まだだ。敵二番艦はまだ戦うつもりでいる。

何と頑強な艦か。大和は奥歯を噛み締める。四六サンチ砲弾十発以上を命中させてもなお、戦い続けることのできる軍艦があるとは。

敵二番艦が戦い続けるのならば、「大和」もそれに応じざるを得ない。各砲塔では、開かれた尾栓から次弾が装填され、第十斉射の準備が進む。

そしてその前に、先の第九斉射が敵二番艦を押し包んだ。

高空から獲物に襲いかかる猛禽のように、四六センチ砲弾九発が一気に放物線の坂を下り、敵二番艦をを目指す。その内、装甲で覆われた甲板にキスできたのは二発だった。

第九斉射の弾着から十秒ほどして、敵二番艦の第十三斉射が降り注いだ。海神の巨大な手で揉みし抱かれているかのように、艦橋が衝撃で打ち震える。立て続けに襲ってきた激震は、これまでで最も大きかった。

「っ！っ！っ！！」

負けじと、大和は準備の完了した第十斉射の発砲を命じる。発砲遅延装置を介して装薬が点火され、高温高圧のガスが砲弾を加速させる。重量一トン半の砲弾が九発も飛び出した反動は、七万トンの艦体が受け止めた。

一拍ほど遅れて、敵二番艦も新たに第十四斉射を放っていた。健在な九門の一六インチ砲身を振り立てて、あらん限りに砲炎を吐きだしている。どれほど傷ついても、そこには他のあらゆるもの睥睨する畏怖の象徴、戦艦としての威厳が溢れていた。

「右舷高角砲群より火災発生！」

先の被弾のうち一発が、高角砲や機銃が集中している箇所飛び込み、砲弾を誘爆させたらしい。沈没には至らないが、火災炎で視界が遮られれば射撃精度に影響が出かねない。また、断線も懸念される。

応急修理要員は、機関区域付近の隔壁補強に向かっており、今は手が回らない。しばらくは、高角砲や機銃の妖精に自主的な消火を任せる他なかった。

被害はそれだけではない。各所から火災や断線、軽微な浸水の報告が次々に寄せられている。辛うじて主砲の統制射撃に関わる部分のみはほとんど被害を受けていないが、そんな幸運もいつまで続くかはわからない。

ふと、大和は顔を上げ、正面の「武蔵」を見遣る。

「武蔵」と敵一番艦との戦闘もまた、佳境に差し掛かっているらしい。両艦共に斉射の応酬を繰り返して、黒々とした煙を吐き出している。

砲戦に、決着の時が訪れようとしていた。

「大和」と敵二番艦。それぞれの斉射が海水の密林を作り出した。林立する水柱。迸る命中弾の閃光と、飛び散る引きちぎられた艦上構造物。

お互いの姿を隠すように広がった、白濁のカーテン。持ち上がった海水が重力に従って崩れ去り、視界が開けた時、全ては決していた。痛烈な一撃に顔をしかめつつも、大和は顔を上げ、太陽の光が差し込む艦橋から右舷方向を見遣る。

およそ二万メートルの距離。「大和」と同航していたもう一隻の巨艦は、最早勇壮な姿を窺い知ることはできなかつた。

艦中央部から、天を突かん勢いで濛々と黒煙が上がっている。黒煙は風に流され、艦の後ろ半分を完全に覆いつくしていた。

黒煙の合間からは、チロチロと甲板上を這う炎が見て取れる。手の施しようがないことなど、火を見るよりも明らかだった。

「・・・次弾装填」

介錯となる一撃を加えるべく、大和は次の斉射の準備を命じる。冷却された各砲の尾栓が開かれ、揚弾機が上がってきた主砲弾と装薬が詰め込まれる。

装填時間は四十秒。その間に、敵二番艦が新たな射弾を放つことはなかつた。

先の第十斉射が、敵二番艦から主砲射撃の能力を奪い去ったようだ。

装填が終わり、「大和」はトドメとなる第十一斉射を放った。

強敵は、最大の敬意をもって、葬り去る。その意志を示すように、あらゆる音を奪い去る砲声が海上に走った。四六センチ砲九門の衝撃が全幅三十九メートルの艦体を左舷側へ仰け反らせる。砲口から球状に広がった衝撃波が艦橋の窓をしたたかに打ち、ビリビリと震わせた。

砲弾の飛翔時間は、およそ三十秒。ストップウォッチを見つめるその時間が、果てしなく長いものにも、はたまたほんの一瞬の出来事のようにも思えた。

「だんちやーく、今！」

秒読み通り、第十一斉射九発が敵二番艦の頭上から降り注いだ。

水柱は艦首付近に集中している。どうやら、機関にまで被害が及び、速力を落としていたらしかった。

命中弾は二発、確認された。

艦首に飛び込んだ一発は、バイタルパート外なのをいいことに、次々と階層を突き抜け、水線下で炸裂した。リベットと共に隔壁が吹き飛び、浸水が発生する。

もう一発は、第一砲塔の天蓋を叩き割り、これを木端微塵に破壊した。一基で一千トン以上の重量がある主砲塔が、まるで段ボール製の箱でもあるかのように、内側から引き裂かれた。砲身は吹き飛び、甲板に叩きつけられてひしゃげ、あるいは盛大な水柱と共に海中に飲み込まれる。

浸水が増大したのだろうか。観測機から、敵二番艦の行き足が完全に止まったことが報された。黒鉄の城としての威厳はそこにはなく、今はただの燃える鉄屑と化している。甲板はまさに地獄絵図であった。

「砲撃止め」

効果十分と判断し、大和は主砲に砲撃の中止を命じる。高压ガスとライフリングの摩擦による熱を帯びていた砲身が下げられ、冷却作業が始まった。

「武蔵」と敵一番艦の戦闘もまた、終末の時を迎えていた。

健在な姿で海上に留まっているのは、「武蔵」であった。否、無傷とはいかない。先に被弾したため、損傷の度合いは「大和」よりも「武蔵」の方が酷かった。

よく見ると、第三砲塔の砲身が、あらぬ方を向いていた。主砲塔の中でも比較的装甲の薄い天蓋部分を撃ち抜かれ、内部から破壊されたのだろうか。戦艦同士の砲撃戦、正しく重量級の拳同士がぶつかり合う凄まじさを、如実に物語っていた。

それでも、多大な損傷を負いながらも、「大和」と「武蔵」は環礁突入に先駆けて障害となる物のうち一つを、排除することに成功した

のだった。

『右一斉回頭、針路二七〇。転針後、最大戦速』

“武蔵”座上の栗田が反転を命じる。砲戦の間に、“大和”と“武蔵”は北東水道から四海里ほど離れてしまっていた。最大戦速の二十七ノットで反転しても、十分弱かかる。

北東水道の入り口では、水道突入を巡って一挺艦と「甲イ」の激戦が繰り広げられているはずだ。一刻も早く戻って、加勢しなくては。

舵を一杯に切り、七万トンの艦体が艦首を右に大きく振る。まだ各部で燻っている黒煙が、左へとたなびいた。

定格出力十五万馬力の機関が唸り、艦体を加速していく。緩やかな加速度を感じながら、大和は右舷側の甲板を見下ろした。

多数の被弾の跡が見える。副砲はねじ曲がり、高角砲は吹き飛び、機銃の残骸が散乱している。“大和”の右舷甲板は、文字通りスクラップ置き場と化していた。

手空きの機銃員や高角砲員が、残骸を海中投棄している。爆風で煽られた、かつて機銃か何かであった鉄塊が、舷側から波間に落ちて、吸い込まれた。

これが、戦艦同士の戦いだ。世界最強の破壊力を持った鉄の拳で殴り合い、相手の体を滅多打ちにしていく。先に倒れた方が負けになる、シンプルな力の世界。

——だからこそ。

この力は、シンプルに、仲間を守る力となる。新たな世界を切り開く力となる。

それを知っているからこそ、祥鳳は大和に、「頼んだ」と言ったのだろうから。

水平線付近。多数の砲炎が入り乱れ、黒煙と硝煙の香りが燻っている。

戦場の匂い。多くの時を過ごしてきた仲間の匂い。

観測機から、詳細な状況が知らされる。

“長門”と“陸奥”の二隻は、巧みに舵を切りつつ、統制砲撃による命中率の高さを生かした砲撃戦を展開していた。これにより、ル級

flagshipのうち三番艦の呼称が与えられたものを、中破相当まで追い込んでいた。

もちろん、無傷で済むはずもなく、射撃が集中した「陸奥」には、火災が発生している。被害は甚大だ。

巡洋艦以下の艦艇については、我らがパラオ泊地の各艦が相手取っている。「摩耶」、「足柄」の二隻が重巡を迎え撃ち、「曙」以下水雷戦隊が敵戦艦への肉薄のタイミングを虎視眈々と狙っている。

『武蔵』目標、三番艦。「大和」目標、四番艦。測敵始め』

栗田が新たな目標を示す。敵四番艦までの距離は、およそ二万メートル。

「目標、敵戦艦四番艦。測敵始め！」

測距儀が左舷方向へと旋回し、いまだ損傷を受けていない敵戦艦へ、諸元の算出を始めた。

砲塔が水圧機によって旋回していく。目標となる敵戦艦は左舷前方。緩慢な旋回の間、諸元計算が完了し、敵戦艦への射撃に必要な旋回角と仰角を割り出した。

射撃の準備はすでに整っている。艦上に、砲撃戦の開始を告げるブザーが鳴り響いた。甲板上で作業をしていた妖精たちが、艦内へと戻って来る。

「てーっ！」

号令から一拍。「大和」の主砲が再び咆哮した。鎌首をもたげた各砲塔右砲から、敵四番艦への観測射となる、三発の四六サンチ砲弾が飛び出した。

水道攻防

「てーっー！」

今日何度目になるかわからない、主砲発射の号令を叫ぶ。色々な号令を叫び続けているのと、昨夜まともに寝ていないこともあって、喉の状態は最悪だ。それでも、気合いの限りに、声を張る。

清水が座上する「摩耶」に続行して、「足柄」は敵巡洋艦と渡り合っていた。

自慢の二〇・三サンチ砲連装五基十門は、およそ十五秒おきに、砲炎を吐きだしている。現在の目標は、ホ級軽巡だ。

大気を切り裂いた砲弾が、ほっそりとした敵巡洋艦を包み込む。五千五百トン級軽巡ほどの大ききさしかないホ級には、二〇・三サンチ砲弾でも十分だ。水柱が収まると、ホ級の後甲板で炎が燻っている。

一方のホ級も、「足柄」に対して撃ち返してくる。六インチ砲弾が舷側装甲にぶち当たって弾けた。

「それだけかしら？」

こちらは重巡洋艦だ。六インチ砲弾の一発や二発でやられるほど、柔ではない。

全主砲で次弾の装填が終わり、「足柄」は再び斉射を放つ。砲口から飛び出した二〇・三サンチ砲弾が低いアーチを描いて飛翔し、一万メートル先のホ級を襲う。

ホ級の艦上で爆炎が踊り、抉り取られた艤装の破片が舞い散る。手応えはあった。

炎に甲板をあぶられるホ級が、その速力を落としていく。どうやら今の一撃で、艦の推進に関わる機構を破壊したらしい。あるいは機関部まで、被害が及んだのかもしれない。

燃え盛る小柄な軽巡洋艦は、もはや脅威足り得ない。

『右一斉回頭、針路二二一〇』

前を進む「摩耶」から、転舵の指示が来る。敵巡洋艦部隊との位置取りを変えるのだ。

連続した転舵を続けながら、「足柄」と「摩耶」はジワリジワリと

敵戦力の漸減に努めている。敵巡洋艦の残存は、ト級軽巡一とリ級重巡一。どちらも elite だ。

——榊原中佐は、いつ突入するつもりかしら？

チラリ。二隻の重巡と同じように、敵艦隊との距離を計っている、パラオ泊地水雷戦隊を見遣る。

“足柄”たちが相手取る巡洋艦部隊とは別に、敵戦艦の周りには、護衛の駆逐艦が随伴している。敵戦艦に肉薄雷撃を成功させるには、これを振り切る必要があった。

榊原は、その陣形の乱れを待っているようだった。そしておそらく、それは清水も同じだ。

時宜が訪れたのは、“足柄”がト級軽巡に対して三度目の交互撃ち方を行った直後だった。

パラオ艦隊とはおよそ一万五千メートルの距離がある敵戦艦の周囲に、新たな水柱が生じた。戦いが、次なる局面を迎えた瞬間だった。

敵三番艦の周囲には二本、敵四番艦の周囲には三本が立ち上った水柱は、明らかにそれまでのもの——“長門”型二隻の四一サンチ砲のものより、一回りほど大きい。

“大和”と“武蔵”だ。二隻の四六サンチ砲艦が、深海棲艦の大型戦艦と決着をつけ、水道へと戻ってきたのだ。

清水の反応は迅速だった。

『砲撃止め。左一斉回頭、針路一〇五』

「来たわねっ！」

それまでも増して、体中の血が騒ぐ。

針路一〇五。その先は、敵戦艦二隻の針路と交差する点だ。

ついにパラオ艦隊が、敵水上部隊と雌雄を決するべく、肉薄戦を仕掛けるのだ。

“摩耶”と“足柄”の役目は、巡洋艦と駆逐艦の牽制をしつつ、五水艦に突入の道を切り開くこと。

『最大戦速』

回頭が終わるなり、速力を上げるようにと、指示が飛ぶ。“足柄”の主機が唸り、力強くスクリューを回転させて、海水を後方へと掻き

出す。その反動が主軸を通して艦体に伝わり、強力な加速度を与えた。

艦尾の海水が沸き立つ。「足柄」と「摩耶」は、ともに急加速して、三十三ノットの最大速力を発揮していた。

まるで申し合わせたように、五水艦の六隻も速力を上げた。「木曾」を先頭に配し、美しい単縦陣を形成して、一文字に突入していく。単縦陣の四番艦。何かと気にかけている駆逐艦娘の艦を見つけて、口元を緩める。

その道は、必ず切り開いて見せる。

『本艦目標、変わらず敵巡洋艦一番艦（リ級elite）。「足柄」目標、敵巡洋艦四番艦（卜級elite）』

急な加速に、慌てて追従する二隻の敵巡洋艦は、当然こちらの動きを止める気だろう。これを撃破するのは、「足柄」たちの役割だ。

「了解！目標、敵巡洋艦四番艦！測敵始め！」

パラオ艦隊の右舷から迫る敵巡洋艦二隻に向けて、測距儀と主砲を指向する。

まもなく、諸元算出が終了し、各砲塔の右砲が砲身をもたげる。目標とする卜級との距離はおよそ八千メートル。できれば三射程度で命中弾を得たいものだ。

「てーっ！」

仲間への道を切り開くため。そして水道の先へ道を切り開くため。足柄は声を張り上げる。

二〇・三サンチ砲五門の高らかな砲声が、艦橋に木霊した。

*

五水艦と並走する二隻の巡洋艦が、砲撃を始めた。

海面をオレンジ色に染め上げる砲炎を艦橋右舷に認めて、榊原は頷く。

「大和」と「武蔵」が戻ってきた時点で、榊原はこの戦いに終止符を打つべく、突撃を決断した。やるならばここしかなかった。

予想通り、敵戦艦を守る駆逐艦隊の隊列に、わずかな乱れが見られた。どの艦隊に対して備えるべきか、判断を迷っている様子だった。

その乱れが、榊原と清水の狙いだつた。

これで、敵駆逐艦隊による五水艦への妨害がワントンポ遅れる。それだけ、残存の敵戦艦二隻に対して肉薄することができる可能性が高まるということだ。

——最後の問題は。

早くも第二射を放っている「摩耶」と「足柄」から視線を艦首方向へと戻し、榊原は目標とするル級flagship二隻を見遣る。

「長門」と「陸奥」は、息の合った艦隊運動と精度の高い統制砲撃で善戦していたが、さすがに相手が悪すぎた。

統制砲撃の目標としていた敵三番艦に対しては、ある程度被害を与えている。しかし、それとは逆に、敵四番艦に対しては一度も砲撃を行っていない。つまり無傷の状態だ。

ル級flagshipの艦上構造物両舷には、対航空機と対軽艦艇の両方を担当する両用砲が備えられている。連装砲塔、片舷五基、計十基二十門。

敵戦艦への肉薄に際して、この両用砲が、最後の障壁になる。

——射程に入るまでに、戦艦部隊が叩いてくれることを祈る他ない、か。

波を乗り越えた「曙」の艦首が、海面を強く叩く。艦首の質量によつて押し退けられた海水が横方向へと飛び散り、錨鎖管を逆流した海水が艦首甲板を濡らす。

「敵駆逐艦に動きあり。敵艦隊右舷の五隻が離脱して、こちらに接近中。会敵まで五分」

「十分だ」

曙の報告に、榊原は自信をもって答える。

「・・・随分落ち着いてるわね」

隣に立つ曙が、こちらを流し見て言った。それに対して、苦笑に近い溜め息を漏らす。

「落ち着いているというか、どちらかと言うと諦観に近いかな。ここまで来たら、俺にできることは曙たちを投雷点まで連れていくことだけだ」

「・・・あつそ」

ぷいっと視線を前に戻してしまった曙の声は、どこか不満げだ。しばらく、考え込むような間があった。それからゆっくり、曙が口を開く。

「安心しなさい。クソ提督のことは、あたしの命に代えても、守るから」

思わぬ言葉に、目を見開いてしまう。その後には、苦笑が漏れてしまった。

そういう意味で言ったわけではなかったのだが。余計な心配をかけてしまったのだろうか。

頼りになる相棒。逞しい先輩。厳しく、優しい秘書艦。そして、大切な、俺の部下。

曙——彼女たち艦娘を守り、導くのが、提督たる俺の仕事だ。

「・・・わつ、ちよつ、なによっ!？」

曙の頭に手を添え、クシヤツと強めに撫でる。

「すまん。言い方が悪かった。そういうつもりで言ったんじゃない。曙との未来のためにも、必ず勝って、帰ろう」

「わ、わかったから！頭撫でんな、クソ提督！戦闘中だから！」

苦言を呈する曙の言葉に従って、手を離す。調子に乗り過ぎたかもしれない。

手榴で髪を整えた曙が、再びチラリと、こちらを窺った。

「まったく。いい加減自覚しなさいよ、そういうところがクソ提督なの」

と、言われても。具体的にどのあたりがクソ提督なのか、いまいちわからない。

「善処するよ」

「・・・絶対、わかってないでしょ」

完全にはばれている。その点については、半目の曙を、笑顔で誤魔化すしかなかった。

第三射で敵巡洋艦一番艦に対して夾叉弾を得た“摩耶”が、斉射に移行する。一射遅れて、“足柄”も斉射に踏み切った。“摩耶”は八

発、〃足柄〃は十発の二〇・三サンチ砲弾を、敵巡洋艦に対して叩きつける。

五水艦と、突撃を阻害しようとする敵巡洋艦、その間に位置取る〃摩耶〃と〃足柄〃は、さながら五水艦を守る盾だ。

——任せたぞ、清水。

二隻の巡洋艦を指揮する同期に、心の中で呼びかける。その期待に応えるように、〃摩耶〃の砲弾が敵巡洋艦一番艦の頭上から降り注ぎ、艦上に爆発炎を生じさせた。

「敵戦艦は？」

「まだ、〃長門〃、〃陸奥〃と交戦中」

その報告と同時に、敵三、四番艦が新たな砲炎を上げる。一方の〃長門〃と〃陸奥〃は、完全に押されている形だ。

特に〃陸奥〃の損害は、端から見ていても大きいことがわかる。艦の後部は炎と煙で覆われており、その下を窺い知ることが最早できない。

〃長門〃も無傷ではない。四発の一六インチ砲弾を受けた〃長門〃は、副砲数門と高角砲が犠牲になっている。航空作業甲板では小規模ながら火災が発生中だ。

二戦艦の苦境に、険しい顔にならざるを得ない。

新たに砲戦に加わった〃大和〃と〃武蔵〃は、いまだに夾叉も命中もない。二隻の戦艦棲姫との戦闘は、余程激しいものだったのだろう。特に〃武蔵〃の射撃精度がひどい。

「敵戦艦との距離、一二〇（二万二千メートル）」

曙が読み上げる。右舷前方に見える敵戦艦を、榊原は睨んだ。

——始まる・・・か？

榊原の予感、当たっていた。

敵戦艦の艦上に、それまでの主砲発砲とは違う、新たな炎が沸き起こった。

炎は艦上構造物の横で生じている。大きさは小さいが、明らかに数が多い。その正体を、榊原は理解した。

鋭い飛翔音が迫るよりも早く、敵戦艦の艦上に二度目の発射炎が踊

る。射撃の間隔が異様に短い。

数秒後、五水艦の右舷海面が、ミシン目のように連続して沸き立った。多数の水柱だ。一つ一つは戦艦の主砲弾よりはるかに小さいが、何と言っても数が多い。

敵を一撃で葬り去るのではなく、ジワリジワリと戦闘能力を削っていく。そしてそれは、ひ弱な駆逐艦にとって、最も厄介な相手。

敵戦艦の両用砲が、五水艦の接近を阻むべく、両用砲による弾幕を張り始めたのだ。

海戦ノ決着

二隻の戦艦から放たれる両用砲弾が、雨霰と降り注いでいた。

口径五インチの両用砲は、速射性能に優れている。四秒から六秒おきに小さな砲炎を瞬かせ、敵戦艦はこちらを妨害しようと両用砲を放つ。

精度はさして高くない。両用砲の射撃指揮装置は、主砲のものほど精密ではないのだろう。

それでも、数が多いうえに、射撃間隔が短い。反復が早いことで、確実に精度が上がっていく。

「右一斉回頭。針路一二〇」

弾雨の中に、榊原の声が響く。マイクを掴んだ彼は弾着の様子と彼の距離、敵駆逐艦隊の動向を逐一確認しながら、弾幕を避けるように舵を切る。

「面舵一杯、針路一二〇！」

榊原の指示を受けて、曙が転舵を号令した。操舵機の油圧ポンプが舵を回していく。艦体周りの水流が変わり、すぐさま艦首を右に振る。その艦首を掠めるようにして、新たな射弾が弾着した。

「舵中央、戻せ！」

針路一二〇で「曙」が直進に戻る。細く研ぎ澄まされた艦首が波を切り裂き、飛沫を噴き上げていた。その飛沫の先に、敵戦艦を捉える。

より活発に射弾を送り出しているのは、無傷の敵四番艦だ。こちらを指向する左舷十門の両用砲が、活火山のように炎を振りまく。

敵三番艦の様子は、少し違う。主砲の火力も、発揮する速力も変わりはないが、「長門」型姉妹による統制砲撃の影響が確実に出ていた。左舷両用砲群からはうっすらと煙がたなびいており、放たれる弾量も控えめだ。

が、それでも水雷戦隊にとって脅威であることに変わりはない。

「距離九〇（九千メートル）」

ジワリジワリと詰めてきた距離を、「曙」が読み上げる。

——誤魔化しも、ここまでか。

「投雷距離を五〇とする。左一斉回頭、針路一〇五」

左舷を掠めた両用砲弾には目もくれず、榊原は新たに転針の指示を出す。最早偽装も、回避も無意味だ。投雷距離までの四千メートルを、いかにして乗り切るか。

「木曾」を先頭とした単縦陣を再び形成しつつ、五水艦はもとの針路に戻る。ここからは、時間と、根性との勝負だ。

「っ！」「陸奥」さらに被弾！」

曙が叫んだ。

統制砲撃を続けていた「陸奥」だが、向かい合う敵四番艦からさらなる射弾を食らったのだ。

「「陸奥」、速力低下、左に傾斜中！落伍する！」

——やられたか……！

日本海軍屈指の殊勲艦は、真夏の入道雲もかくやというほどに大量の黒煙を噴いている。前部甲板は火の海だ。高初速一六インチ砲弾が、「長門」型姉妹の片割れを浮かぶスクラップに変えてしまった瞬間だった。

「敵戦艦面舵。反転する」

「こちらと距離を取るつもりか」

「陸奥」を仕留めたことで、砲戦を一度仕切り直すつもりなのだろう。二隻の敵戦艦は緩慢な動きで右へと舵を切っていく。それはつまり、五水艦との距離が開くことを意味していた。

「右逐次回頭。針路一七五」

敵戦艦の動きに合わせ、榊原は五水艦の針路を修正する。彼我の距離は変わらず、およそ九千メートルのままだ。

「敵駆逐艦はどうする？」

曙が尋ねる。戦艦部隊の護衛についている敵駆逐艦は、今もってこちらに接近中だ。距離は五千メートルを切っている。

チラリ。榊原は五水艦と並走する二隻の巡洋艦を見遣る。「摩耶」も「足柄」も、いまだ敵巡洋艦と交戦中だ。駆逐艦に砲門を向けている余裕はあるまい。

「五水艦で迎撃する。四〇で発砲」

「了解」

回頭が終わった五水艦の左舷から接近する敵駆逐艦に、五水艦各艦が主砲を向ける。多数の一二・七センチ砲の砲口がきらめいた。

おそらく敵駆逐艦は、魚雷を使った妨害を試みてくるはずだ。深海棲艦の水雷戦隊が使用する魚雷は、速力四十二ノットで馳走距離およそ五千メートルとされている。実際には、もっと近づかなければ話にならないので、投雷距離は三千メートルから二千メートルということになる。

戦争の最初期こそ、深海棲艦の水雷戦隊が魚雷戦を仕掛けてくることもあったが、三千メートルまで接近する間に甚大な被害を受けることから、最近はあまり行つてこない。

代わりに、深海棲艦の駆逐艦は、主としてこちらの水雷戦隊の妨害に魚雷を使うようになった。

島嶼解放戦において、日本海軍は何度も、この駆逐艦に悩まされ続けてきた。

現状で巡洋艦の援護を得られないのは痛い、ともかくここは、五水艦だけで凌ぐしかない。

「任せた」

「ん、任せられた」

曙との短いやり取りがあつた直後、敵駆逐艦との距離が四千メートルを切つた。

「撃ち方始め！」

「てーっ！」

左舷を指向した「曙」の主砲が、一斉に炎を上げた。交互撃ち方など、悠長なことをやっている暇はないし、必要もない。駆逐艦の中でも特に練度の高い曙なら、第一射から命中弾を得ることも可能だ。

「曙」の発砲を皮切りに、五水艦各艦が次々と主砲を放つ。各艦の艦上で連続的に砲炎が迸り、海面に反射したオレンジが鮮やかに網膜に突き刺さつた。

初速の早い一二・七センチ砲弾は、すぐに四千メートルを飛翔する。

ほぼ水平に海面の上を飛んでいった砲弾が、連続して敵駆逐艦の周囲に水柱を立てた。曙が目標に定めたのは、最も右手に見える敵駆逐艦だ。

「命中―！」

曙が弾んだ声で報告する。曙は一射目にして、さつそく命中弾を得たのだ。その練度には脱帽する他ない。

敵駆逐艦も砲撃を始める。前甲板の単装砲を振り立て、五水艦に向けて射弾を放つ。五インチ砲弾の軽やかな飛翔音が聞こえてきて、左舷海面を沸騰させた。

それだけではない。回頭が終了した敵戦艦も、両用砲の砲撃を再開した。駆逐艦数隻分の五インチ砲弾がまとまって飛んでくる。

入り乱れる砲火。弾雨と呼ぶにふさわしい海域の中を、五水艦は突き進んでいく。

「行き足止まった！目標を変更―！」

連続した砲撃で目標の駆逐艦を沈黙させると、曙はすぐさま次の敵艦に狙いを定める。測敵完了と共に発砲。前甲板一基、後甲板二基の一二・七センチ連装砲が咆哮し、小太鼓を打ち鳴らすような音を響かせる。

「一斉転舵、針路一九〇―！」

「『霞』被弾―！」

「砲撃を再開―！」

「敵戦艦四番艦に命中弾！『大和』からの砲撃よ―！」

自らの命令と、曙からの報告が、連続して艦橋に木霊する。砲声中でも確実に声が届くよう、お互いに声を張っていた。喉が急速に乾いていく。

『三制艦より、五水艦。援護する』

入れっ放しにしていたスピーカーから、清水の声が聞こえてきた。敵巡洋艦を片付けた『摩耶』と『足柄』が、五水艦への援護射撃を行うという。

程なく、右舷前方から砲声が聞こえてきた。並走する二隻の巡洋艦が砲撃を始めたのだ。

「曙」の頭上を飛び越えるようにして、二〇・三センチ砲弾が飛翔し、敵駆逐艦の周囲に弾着する。「曙」のものよりも二回りほど大きな水柱が、小柄な駆逐艦を包み込んだ。視界から消え去った駆逐艦が轟沈したような錯覚を受けるが、実際にはそれほど都合よくはいかず、数秒後に健在な姿を現す。

「距離三〇！」

その報告と同時に、新たに二隻の駆逐艦から火の手が上がった。射弾が集中し、みるみるうちに炎の塊となっていく。

「目標を変更！」

スコアをさらに一つ更新した曙は、新たな目標を指示する。再度砲撃が再開されると、チラリ、こちらを窺ってきた。

魚雷回避のタイミングはいつか。そう問うているのだろう。

——まだだ。

敵駆逐艦の位置と、魚雷の馳走距離、予想針路。それらを逐一頭の中でシミュレートする。

「摩耶」の砲撃が命中し、敵駆逐艦の前甲板にぽっかりと穴が開いた。

「満潮」と「霞」が砲撃を集中し、敵駆逐艦一隻を浮かべる鉄塊に変える。

五水艦とて無傷ではない。何十発という砲弾が入り乱れる中で、「霞」、「陽炎」、「長波」が相次いで被弾している。各艦とも、航行や戦闘に支障が出るような被害は幸いにしてないが、「陽炎」の甲板では火災が発生していた。

「距離二五！」

「砲撃止め！左一斉回頭、針路一〇五！」

榊原の号令で、五水艦からの砲撃が止む。単縦陣を形成していた六隻の軽艦艇は一齐に取舵を切った。

次の瞬間、敵駆逐艦もまた、転舵した。魚雷の発射を完了したのは明白だ。

「見張り員、海面に注意！」

艦橋両脇の見張り所から双眼鏡を覗いている妖精たちに、曙が下令

する。榊原自身も、波打つ南国の海面に目を凝らした。

やがて、それが現れる。

「艦首方向より、航跡接近！」

榊原の目も捉えた。敵駆逐艦の放った魚雷だ。

すでに五水艦各艦とも、魚雷への正対面積を最小にしている。後は命中しないことを祈るばかりだ。

——当たるなよ……！

魚雷の接近という事態は、三度目の経験となる。やはりいつでも、嫌なものだ。

できることはやった。拳に汗を握り締め、榊原は航跡を追う。

海面を切り裂くような、真っ白い航跡が、視界から消える。艦首のシアーに隠れて、見えなくなったのだ。

ゴクリ。生唾を飲み込む。

「……！魚雷通過！」

曙が歓声に近い声で報告する。敵駆逐艦から放たれた全ての魚雷は、五水艦に当たることなく、後方へと抜けていったのだ。

——よしっ。

これで、障害を一つ、乗り越えた。

「右一斉回頭、針路一七五！このまま投雷距離まで接近する！」

もはや小細工は不要だ。後は敵戦艦からの両用砲が当たらないよう、祈るのみ。

その敵戦艦は、一制艦との砲戦を続けている。主砲発射の砲炎が沸き起こったかと思えば、逆に被弾による火柱が立ち上る。flagshipの名に違わぬ戦いぶりだ。

現在、敵三番艦に対しては「長門」が、敵四番艦に対しては「大和」が砲撃を行っている。もつとも、「長門」の四一サンチ砲ではflagship戦艦を相手取るのに威力不足であり、敵三番艦がこれと言って堪えた様子はない。

そもそも、手数が足りていない。「大和」も「長門」も、やっと三斉射を放ったところであり、各々命中弾は三、四発。これでは話にならない。

それでも、両用砲の弾幕は、少なからず薄くなっている。艦橋のほぼ正面に見ることのできる敵戦艦は、舷側の辺りから黒煙を噴く。装甲の薄い両用砲の類が爆砕されたことは、容易に想像できた。

「っー」

それでも、一発が「曙」を捉えた。距離は六千メートル。投雷まで後一分もない。

「大丈夫、このまま突っ切つてー！」

その言葉から数秒後、明らかに「曙」を狙っているであろう両用砲弾の集団が、襲いかかってきた。

撃つてきたのは、タイミング的に見て敵四番艦だろう。「曙」の両舷に小さな水柱が連続して上がり、異音と衝撃が後方から襲ってくる。

「っー」

駆逐艦の装甲など、無きに等しい。バイタルパートなど存在するはずもなく、被弾はそのまま被害の発生を意味する。すなわち、その痛みが、直接曙を襲う。

彼女は歯を食いしばり、痛みに耐えていた。

数秒後、再び敵弾が「曙」に降り注ぐ。今度の被弾は一発。艦首右舷の揚錨機が爆砕され、主錨が脱落して海に吸い込まれた。

ジリジリと艦体が挟られ、被害が蓄積していく。それでも、今、突撃をやめるわけにはいかない。

『やろう、ふざけやがってー！』

そんな声が、スピーカーから聞こえてきた。並走していた「摩耶」と「足柄」は、そのまま突撃に加わっている。彼女たちもまた、その甲板に魚雷発射管を備えていた。

声の主は、摩耶だった。次の瞬間、「摩耶」の主砲が砲炎を上げる。目標としているのは敵戦艦のようだ。

『そうこなくっちゃー！』

「足柄」もまた、それに加わる。さらに、ようやく命中弾を得た「武蔵」までもが、敵戦艦に射弾を集中する。

まさに決戦だ。これで、全てが決する。

「距離五〇！」

痛みに負けじと、曙が声を張った。自然と背筋が伸びるのを、榊原は感じていた。

「左逐次回頭、針路一〇〇！右魚雷戦用意！」

五水艦の六隻、さらに「摩耶」、[〃]足柄[〃]が左に舵を切る。敵戦艦に右舷を見せる形だ。そしてそこには、魚雷を備えた細い筒の束が見える。

魚雷戦指揮能力を最大限まで高めた[〃]木曾[〃]が、五水艦全艦に適切な射角を割り振っている。準備は完了していた。敵戦艦に、逃れる術はない。

「魚雷発射始め！」

「てーっ！」

圧搾空気が重量物を放出する音が連続する。火炎炎が燦る[〃]曙[〃]から、九本の九三式魚雷が射出された。

「針路そのまま！撃てるものは撃ち尽くせ！」

欺瞞と妨害を兼ねて、あらゆる火器の使用を命じる。五水艦各艦から残った全ての砲が放たれる。それも一分ほどで取りやめ、左一斉回頭により離脱。

すでにこの時点で、榊原は勝利を確信していた。

魚雷の到達時間を計るストップウォッチが、零になる。次の瞬間、敵戦艦の舷側に、次々と水柱が立ち上った。

南水道ノ攻防

「ああもう、鬱陶しいー!」

すでに二桁になろうかという転針の後放たれた射弾を見送り、角田は苛立たし気に叫んだ。

南水道で敵戦艦と対峙していた二制艦は、いまだにその壁を破れずにいた。

二隻のル級flagshipを、正面から相手取るのは、巡洋戦艦でしかない。『金剛』型には荷が重すぎる。ゆえに角田は、転舵を繰り返して敵艦の狙いを逸らしつつ、搭載する四五口径四一サンチ砲が有効打を与えられる距離まで接近することを選んだ。

だが、ル級もまた巧みだった。

こちらの転舵に合わせて、あちらも舵を切り、距離を取り続ける。加えて、随伴する巡洋艦と駆逐艦の存在が厄介だった。

両者の戦闘は、これだけ激しい艦隊運動を行っていながらも、膠着状態に陥っていた。

三度目の射弾が、敵一番艦に命中して火焰を上げる。これで七発目だ。それでも、まったく堪えた様子はない。平然と新たな斉射を放つてくる。

『金剛』が相手取る二番艦も同じような状態だ。黒煙を吐くこともなく、四隻の巨艦は弾雨の中でダンスを踊っていた。

——せめて敵巡洋艦を何とかしないと。

指揮下の巡洋艦、駆逐艦が肉薄できれば、まだ対抗できる。しかしそれは、高望みというものだ。

敵巡洋艦は、ピタリと敵戦艦に寄せて戦い続けている。こちらの巡洋艦と距離を取り、決定打を受けない位置で砲戦を行っていた。

——弾の浪費は、嬉しくないね。

巡洋艦の主砲は装弾時間が短く、発射間隔が早い。弾火薬庫も大きくないから、あまり戦いが長引きすぎると、環礁突入後に敵艦隊残存や陸上施設を叩く砲弾がなくなってしまう。

そろそろ、覚悟を決めなければならぬか。

「司令・・・」

比叡が問いかけるようにこちらを見る。そろそろ弾火薬庫の残弾を気にし始める頃だろう。

「やるしかない、か」

「はい」

ここを突破しなければ、『NT作戦』を成し遂げることができない。二挺艦に求められているのは、最低限、敵水上部隊を排除すること。

——また、厳しい戦いになりそうだねえ。

eliteですら、『金剛』型には荷が重い。flagshipともなれば、激しい損傷を受けることは必至だ。

それでも、やるしかない。

「左一斉回頭、針路〇三〇！」

ほぼ真東に向けて進んでいた二挺艦に、取舵を命じる。丁度、敵艦隊を南水道へと押し遣るような針路だ。こればかりは、敵艦隊も応じざるをえない。

細く絞られた「比叡」の艦首が、次第に左へと向いていく。それとは逆に、艦橋には右方向の遠心力がかかり、床がわずかに傾く。角田は足を踏ん張って、敵戦艦を睨み続けた。

艦の回頭に合わせて、全四基の主砲塔も旋回する。陽光を浴びて煤汚れた砲口がきらめき、強大な獲物に牙をむく。

案の定、敵戦艦もこちらに合わせて合わせるようにして、舵を切る。お互いに同航のまま、諸元計算がやり直された。

先に計算を終えたのは、二隻のル級だった。

「っ！」

角田は目を見開く。二隻のル級は、初弾から斉射を放ってきたのだ。

——読まれてる・・・!?

こちらが舵を切った時点で、距離を詰め、決着をつけに来ていることを察しているのだろうか。弾量でこちらを圧倒するつもりらしい。

「応戦しますっ！てっ！」

比叡が気合いの限りに叫んだ。左舷を指向した主砲口からめくる

めく閃光が迸り、二万メートルの距離がある敵戦艦に向けて一トンの砲弾を吐き出す。細長い「比叡」の艦体が、大きく横に仰け反った。「高雄」に率いられた巡洋艦部隊も、敵巡洋艦と距離を詰めるべく、加速している。その後には、「川内」指揮下の四水艦も続行していた。切り札となる酸素魚雷ならば、あるいはル級を仕留めることができるかもしれない。

——そこまで接近するためにも、私たちが頑張らないと。

敵一番艦からの第一射が、「比叡」の艦首正面にまともって弾着した。炸裂した砲弾が容赦なく海水を巻き上げ、丈高い水柱を作り出す。

「比叡」の艦首が、もろに水柱に突っ込んだ。日本刀のように鋭い艦首が海水のカーテンに飲み込まれ、錨鎖や揚錨機をバラバラと水滴が打って濡らす。

さすがに初弾命中とはいかなかったようだ。それでも、一度に放たれる弾数が多い分、圧迫感がある。さながら目の前に突如として巨大な壁が出現したかのような感覚だ。

二万メートルという距離が、果てしないもののように感じられる。

——それでも、押し切る他ない。

空振りとなった第一射の結果を受け、「比叡」が修正された第二射を放つ。こちらはセオリー通りの交互撃ち方だ。できるだけ砲弾を無駄にしたくない。

巡洋艦以下の艦艇も、砲戦を始めている。「高雄」型重巡洋艦姉妹三隻と、リ級と思しき敵巡洋艦三隻が撃ち合っている。こちらはまだ距離が離れており、有効打を得るには時間がかかりそうだ。

敵一番艦の第二射は、再び艦首付近で水柱を噴き上げる。海面を叩き割った砲弾が海中で炸裂し、その爆発が波を産む。激しく艦首に叩きつけた波が、錨鎖管を逆流して艦首甲板に溢れた。

入れ替わりで到達した「比叡」の第二射は、敵戦艦の左舷に水柱を上げていく。命中には程遠く、まだ修正が必要だ。

お互いに新たな射弾を放つ。一六インチ級の砲声に大気が揺らぎ、衝撃波で海面がへこんだ。

先に目標に到達したのは、ル級の射弾だ。

次の瞬間、鋭い大気の鳴動に、艦橋の窓が揺れた。

近い。本能的にそう感じると同時に、艦橋のすぐ横で水柱が立ち上った。命中や夾叉こそしていないものの、十分に至近弾と言っている。

敵弾が「比叡」を捉えるのも、時間の問題だ。

このままでは、マリアナ沖の二の舞になる。焦りを多分に含んだ水滴が額を伝った。しかし、有効な手立てはない。このまま押し切る他ないのだ。

奥歯を噛み締めようと、何も変わらない。

その時。ひとと、手に触れるものがあった。

比叡だ。気付かず握りしめていた角田の右手を、比叡の左手が、そつと包み込んでいた。

「大丈夫です」

優しく語りかけるような声に、ハツとする。

「なんとかなりません。なんとかします。今までだって、そうやって来たじゃないですか」

彼女の浮かべている挑戦的な笑みは、おそらくいつも自分が浮かべていたものだったはずだ。

根拠はない。けれどいつだって、そうだった。

なんとかなると信じるところから、いつも始めていたじゃないか。

—— 僕は、馬鹿だなあ。

苦笑が漏れそうになる。角田は小さく頷いて、比叡の意見に賛同を示した。

「それに、こんなところで司令を泳がせたら、塚原さんに申し訳が立ちませんか」

最後についてきた言葉に、思いつきりむせるところだった。

とはいえ、状況が好転するわけではない。敵一番艦は修正された第四射を放ち、それに「比叡」も応じる。

次の瞬間。想像だにしないことが起こった。

敵一番艦を水柱が包み込んだ。敵二番艦も同様だ。

丈高い水柱は、間違いなく四一サンチ砲のもの。しかし、「比叡」の砲撃も「金剛」の砲撃も、到達するには早すぎる。

さらに言えば、日本戦艦の特徴である、極彩色の水柱ではない。海に硝煙が混じっただけの、白濁した水柱だ。

一体、誰が。

答えは、敵一番艦の射弾が至近弾となった瞬間に、示された。

『おい聞こえるか。南水道前でダンス踊ってる日本艦隊』

海軍の国際共通バンドに入感したのは、明らかな米国訛りの、若干粗暴な英語だった。

『こちらは合衆国海軍、ウイリアム・ハルゼー大佐だ。第七方面艦隊、ここに見参』

随分と芝居がかったセリフで、声の主は名乗った。

ウイリアム・ハルゼー大佐。第七方面艦隊。どちらも聞いたことのある名前だ。確か数か月前に、パラオ泊地の艦隊と接触を持ったという、米国の艦隊とその指揮官だ。

「……こちらは日本海軍、角田治美大佐。貴艦隊の目的をお聞かせ願いたい」

角田の問いに対するハルゼーの答えは、単純にして明快だった。

『我々は、日本海軍のトラック攻略作戦を、支援するためにやって来た』

凜々しい笑みを含んだ答えと共に、南の空から発動機の爆音が聞こえ始めた。

「機影と艦影を確認！」

比叡が報告する。

まるでそれを狙っていたかのように、ハルゼーは最後の一言を、流暢な日本語でこう締めた。

『待たせたな、ひよっこども！』

*

「まったく、あの提督は」

こちらの内心を代弁するような一言を漏らし、こめかみのあたりを揉むこの艦の主を、第七方面艦隊参謀長マーク・ミッチャー中佐は苦

笑と共に見つめていた。

「提督には、困ったものです」

話しかけると、少女——グアムが振り向いて、頷いた。随分と難しい顔をしている。

「私にとつては、参謀長だけが救いです」

「そう言ってもらえるとありがたい」

提督であるハルゼーの性格のせいか、この艦隊には自由人が多すぎる。頭痛の種は増えていく一方で、減ることはない。そして、あつからかんを通り越して無頓着の域にすら達しつつある提督の代わりに、いつも頭を悩ませるのは、ミツチャーとグアムであった。

「後で、日本海軍から苦情が来ないといいのですけど」

「まあ、そんなことを気にするような方ではないですからね」

後方の空母に乗って指揮を執っている上司を思い浮かべる。今頃、してやったりとでも言いたげに、大笑いしていることだろう。こちらの気も知らないで。

「・・・ところで、参謀長」

再び声をかけられて、ミツチャーはグアムに意識を戻す。

「私が旗艦で、よろしかったんですか？指揮能力も戦闘能力も、コンステレーション”や”アイオワ”の方が高いと思いますが」

今更その質問をしますか。艦隊随一の頭脳派だが、どちらかと言えば、心配性で臆病な少女なのだ。それを必死に、冷静さで覆い隠し、振舞っている。そのことを知っているのは、ミツチャーだけだ。

「いいんだ。生残性を考えれば、旗艦を最も戦闘能力の高い艦にする必要性はない。それに、私としては、気の合う君と一緒にの方が、やりやすい」

「・・・そう、ですか」

こちらの真意を図るように、ジツと目を合わせるグアム。やがてその瞳に、ヤンキー魂が灯る。

「わかりました。そのご信頼に、必ずや応えて見せます」

——そんなに、肩肘張らなくてもいいんだよ。

心の中で唱えても、口には出さない。彼女が決めたことを否定する

つもりはない。

それに、今後のことを考えれば、しばらく彼女には、肩肘を張っていてもらわなければ。

『ほら、どうしたの後輩。全然見当はずれの方を撃ってるわよ』
『ああもう！気が散るから話しかけないで』

南水道最後の砦となつている敵戦艦へ第四射を放ちながら、二隻の一六インチ砲艦が言い合っている。敵戦艦の方は、彼女らに任せるとしよう。

「敵巡洋艦部隊まで、距離一万六千ヤード（約一万五千メートル）」

「グアム」以下、「ヘレナ」、「グリーンブランド」の三巡洋艦が相手取るのは、I級（日本呼称リ級）と思しき巡洋艦だ。砲戦能力が高く、おまけに魚雷まで備えている厄介な相手だが、「グアム」の一二インチ砲、そして速射性能の高い「ヘレナ」、「グリーンブランド」の六インチ砲をもってすれば、十二分に戦える相手だ。

——それに。

電探に映る影を思い浮かべる。八インチ砲搭載の日本巡洋艦もまた、敵巡洋艦部隊に接近中だ。

この戦いにかかる思いは同じ。否、その先にハワイ解放がかかっている分、合衆国の方が大きいかもしれない。

彼我の距離が一万五千ヤードを割った時点で、「グアム」は最初の射弾を放った。

日米共闘

「第二次攻撃隊、発艦準備完了です」

発着艦指揮所に立つ少女が、凜とした声で告げる。

「おう」

その背中に短く返事をして、ハルゼーは甲板の様子を眺める。飛行甲板上には、発艦の時を待つ航空隊が、暖機運転の轟音を響かせていた。

この艦——“エンタープライズ”が放つ攻撃隊は、その全てがトラック環礁の敵基地及び港湾施設破壊を目的としたものだ。水道前や環礁内で待ち受ける敵艦隊は、日本艦隊とミッチャーが指揮する砲戦部隊に任せている。

環礁上空の制空権を確保するには、今基地を叩かなくては。

すでに一時間ほど前、ハルゼーたち第七方面艦隊機動部隊は、制空権確保と滑走路破壊を目的とした第一次攻撃隊を放っている。今甲板で用意されているのは、その後を引き継ぐ第二次攻撃隊だ。

甲板の前の方に並べられているのは、現在アメリカ海軍が主力戦闘機としている、F6F“ヘルキャット”だ。ずんぐりとした機体は見ただ目通りに頑丈であり、高い速度性能を活かして制空権の確保に努める。

その後に続いているF4U“コルセア”は、逆ガル翼が特徴的だ。じゃじゃ馬っぷりに定評のある機体だが、馬力に余裕もあり、多くの任務をこなせる。今回、“エンタープライズ”搭載の十二機は、対地攻撃用のロケット弾を翼下に吊り下げている。

暖機運転の最後尾は、今回の作戦が初見参となる機体だった。

力強い四翔プロペラ。機体の割に小さなコックピット。機体下部には、これでもかと兵装を積み込んでいる。

A1“スカイレーダー”。雷撃機と爆撃機、二つを統合した新鋭機は、実に三トンという搭載量を誇る。第二次攻撃隊に参加する“スカイレーダー”は、その全機が、当然のように対地爆弾やロケット弾を装備していた。

整備の妖精たちが退避していく。甲板上に並べられた全機が、すでに万全の状態で、発艦の時を待っていた。搭乗員妖精たちが、「いつでも行けますぜ」とばかりに、親指を立てる。

パンツ。乾いた音が発着艦指揮所に鳴り響いた。腰のホルスターから拳銃を引き抜いたエミリーが、艦の進行方向に向けて、引き金を引いたのだ。それが、発艦初めの合図だった。

カタパルトに接続された一番先頭の「ヘルキャット」が、一気に加速していく。ある速度に達すると揚力が重力に打ち勝ち、機体を空中へ浮かせる。ふわりと危なげなく浮かび上がった「ヘルキャット」は、「P&W R2800」——「ダブルワस्पエンジン」を目一杯に唸らせて、高空へと昇っていく。

発艦作業は連続する。カタパルトから次々に機体が踊り出し、上空へと舞い上がっていった。

「ワस्प」、発艦始めました」

後続の中型空母からも、艦載機が発艦し始める。こちらは「ヘルキャット」と、SB2C「ヘルダイバー」の編隊だ。

敵基地攻撃においては、より練度の高い「ワस्प」艦爆隊が先陣を切り、対空砲火を減殺。しかる後に、「スカイレーダー」が飛行場や付帯施設、港湾を攻撃する手はずになっていた。

「フ！提督、第一次攻撃隊、トラック環礁上空に進入します」
「始まったか」

先に放った第一次攻撃隊が、トラック環礁に到達したようだ。今頃は戦闘機隊がスロットルを一杯に開き、敵直掩機と戦闘に入る頃合いだろうか。

——しっかりと頼むぜ。

彼方の空に祈って、エミリーを見遣る。目配せの意味は、そろそろ艦橋に戻ろう、だ。

エミリーも頷き、二人して艦橋へと戻っていく。

「・・・なんだか、嬉しそうですね、提督」

「そうか？」

艦橋への道すがら、エミリーが微笑みながらそう言った。

「はい。とつても、生き生きしてます」

「俺はいつだって、生き生きしてるよ」

ただ、まあ、心当たりがなくなはない。

「・・・ま、困ったときはお互い様、だからな」

トラック環礁解放戦への干渉は、上の思惑あつてのことだ。

アメリカ海軍は、目標としているハワイ解放への糸口を、いまだ掴めずにいる。

ハワイは太平洋のほぼ中央に位置する、まさに孤島だ。近くに島などない。米豪航路の確保や、北方海域の解放に成功したのはいいものの、そこから先、肝心のハワイ攻略には踏み込めずにいた。

そこでアメリカ海軍が目をつけたのが、日本海軍が解放を目指していたトラック環礁であつた。

かつての大戦で、旧帝国海軍が一大拠点としていた事からもわかるように、トラックは大艦隊の泊地として十分なキャパシティを持っている。ハワイとの距離はお世辞にも近いとは言えないが、大型機での長距離偵察が容易な距離だ。

トラックを基点に、アメリカ主導でハワイを解放する。そのためには、ここで日本海軍に恩を売っておきたい。

だが、そんな理屈と思惑だけで、兵隊は動かない。

理論と戦術、戦略で動く軍隊だが、そこに所属する人間は頭だけで動くわけじゃない。人間を動かすには、目的と使命が必要だ。

一個艦隊を預かるハルゼーも、それは同じだ。

確かに彼は、大切な祖国と、平和な海のために戦う。けれども同時に、彼は政治的な曲がったことが嫌いなのだ。

日本海軍からトラック環礁をかすめ取るために出撃するのは気に食わない。

だから今回、ハルゼーたち第七艦隊は、盟友たる日本艦隊を助けるために、戦うのだ。そう思うことが、皆の士気を高めることになる。それに、あのパラオの艦隊も、この海域のどこかで戦っているに違いない。

「間に合つたみたいで、よかつたですね」

「ああ。あとは、エミリーの航空隊に全てを任せるだけだ」

甲板では、発艦作業が続いている。最後の「スカイレーダー」が甲板の前縁を蹴って飛び立ち、第二次攻撃隊の編隊が完成すると、トラック環礁の基地を叩くべく、羽音も高らかに進発していった。

*

「被害報告！」

衝撃を艦橋のへりに掴まってやり過ぎた角田は、たった今の被弾による損傷を確認する。答えは比叡を介して届けられた。

「後部航空作業甲板に被弾！火災発生！」

「戦闘航行は？」

「支障なし！」

被弾の痛みがあるだろうに、比叡は気丈に笑っていた。

ル級二隻と日米戦艦の砲戦は、佳境を迎えていた。

「比叡」は、敵一番艦に対して斉射を繰り返すこと七回。艦上から観察できた命中弾は十一発を数えている。

同じ敵一番艦を目標として射撃を行っているのは、二隻の米戦艦のうち、先頭のものだ。米軍の艦型識別表にはない艦型で、細長い艦体は戦艦というよりも巡洋艦に近い。見た限りでは、一六インチ砲を八門搭載している様子だ。「レキシントン」級巡洋戦艦ではないかと、角田は見当をつけている。

同艦が与えた命中弾は、八発と見られている。二隻で合わせて、二十発近くを、敵一番艦に叩き込んだ計算だ。さすがのflagshipといえども、かなりの被害が蓄積しているらしく、艦体各所からは濛々と黒煙が燻っていた。

それでも、戦闘能力だけはしぶとく残っている。敵一番艦が「比叡」に対して放った斉射は九回。命中弾は十二発だ。舷側の高角砲やら機銃やらは、ことごとく薙ぎ払われ、三番主砲も旋回不能に陥っている。限界に近いのは「比叡」も同じだ。

一方、「金剛」が相手取っている敵二番艦は、「金剛」の他に「アイオワ」級と思しき戦艦が射弾を送っている。命中弾はそれぞれ、十発と五発。

砲戦の決着は近い。次の斉射でどちらが倒れてもおかしくない状態だ。

「てーっ！」

生き残った「比叡」の四一サンチ砲六門が、猛々しい砲声を轟かせた。艦上を走り抜ける衝撃波で黒煙が振り払われ、「比叡」は勇壮なその姿をさらけ出す。

距離は二万メートルを割って、一万七千メートル。到達するまでは二十秒と少しと言ったところだ。

もちろん、敵一番艦も座して待っているわけではない。

「比叡」の発砲から十秒ほどを置いて、黒煙の中、敵一番艦が新たな斉射を放つ。煙が一瞬薙ぎ払われ、赤々とした砲炎と、煤汚れた艦上構造物が露わになる。甲板が炎で焼かれて、その光がまるで地獄絵図のように艦橋をライトアップしていた。

「比叡」の第八斉射は、まだ到達しない。それよりも先に、「レキシントン」級の砲撃が、敵一番艦に降り注ぐ。艦上で閃光が迸り、破片と思しき影が飛び散った。敵一番艦が苦悶しているようにも見える。

「だんちやーくー！」

十数秒が経ち、第八斉射が到達する時間になる。比叡が声を張った。

六本の水柱が敵一番艦を包み込んだ。「比叡」の砲弾に仕込まれている染料は無色透明。海水は正しく白濁のカーテンとなって、敵一番艦の姿を覆い隠した。その内で繰り広げられているであろう惨劇を、ここから窺い知ることはできない。

否。

崩れかかった水柱の向こうで、一際大きな炎が沸き起こり、海水をオレンジ色に染め上げた。

敵一番艦の艦上で、何らかの決定的な出来事が起こったのは、明白だった。

——やったか・・・？

窓から敵艦の様子をさらに観察しようとした瞬間、頭上から風切り

音が迫ってきた。

ハツとして、角田は思わず空を見上げる。一番に信じる彼女の本能が、「比叡」に猛速で近づいてくる危機を報せていた。

来る。じつとりと嫌な汗が流れるのを、角田は感じていた。

風切り音が途切れた。

ふと角田は、目の前から迫る黒い影を捉えた。

砲弾だ。音速を超える速度だというのに、どこかその速度は緩慢だった。

いや、違う。角田の脳が、時間の流れをゆっくりに感じさせているのだ。

不自然に続くスローモーシヨンな映像の中、角田は砲弾を見つめ続ける。

影は「比叡」に吸い込まれた。遅延信管が作動するまでの一瞬間が、永遠に感じられる。

海水が沸騰する。弾ける海面。飛び散る水滴。下から突き上げるような衝撃。艦体を揺さぶる異音。

震度七などゆりかごに思えるような激震が、「比叡」の艦橋を揺さぶった。ふわりとした浮遊感に、思わず手が艦橋のへりから離れる。

「司令！」

比叡の呼ぶ声。次の瞬間、後頭部に鈍くも激しい衝撃が襲ってきた。目の前で星が飛ぶ。

「司令！」

もう一度聞こえた比叡の声は、どこか遠くの世界のものに思えた。頭を打ったのは、理解できた。けれども不思議と痛みはない。

——被害、報告を……。

「比叡」の現状を確認しようとした角田の意志は、言葉になる前に途切れてしまった。

結末ト思惑

「塚原少将、大丈夫ですか」

こちらを呼び続ける、女性の声が聞こえた。どこか不安げに震えている声のおかげで、少しずつ、意識が覚醒してくる。

同時に、全身の痛みも感じた。激しく体を打ち付けた鈍痛で、意識は急激に現実へと引き戻される。

ゆっくりと、重い瞼を持ち上げる。目に入ったのは、黒煙が燻っている青空と、こちらを覗き込んでいる人の影。目の焦点があつていくにつれて、その顔がはつきりと見えてきた。

不安げに塚原を見つめていた赤城は、少しだけ明るい顔を見せた。

「よかった・・・気づいたのですね」

心底ほつとしたようなその表情が、どこか普段の赤城とは違う。

もしかしたら彼女は、機動部隊の長たらんと、いつも一生懸命に背伸びをしていたのかもしれない。

痛む腕を、その頭に伸ばす。髪を軽く撫でると、嬉しそうに口の端を緩めた。

「ああ。この通り、大丈夫だ」

それから呼吸を挟んで、体を起こす。赤城は止めたが、これは俺の仕事だ。

現状を確認しなくては。

「説明をくれ」

「・・・はい」

表情を引き締めて、赤城が頷いた。

「俺はどれくらい気を失っていた」

「三十分ほどです。艦橋付近への被弾で吹き飛ばされて、激しく体を打たれていました」

記憶が飛ぶ前、意識を失った瞬間のことを思い出す。

敵艦載機隊、そして基地航空隊から集中攻撃を受ける一機艦。中でも最大の「赤城」は目立った。

経験にものを言わせて回避運動を続けていた「赤城」だったが、全

弾を回避することなど到底不可能だった。

最終的な被弾は、爆弾八発、魚雷五本。爆弾のうち一発は、艦橋のすぐ正面に命中して、炸裂した。爆風は艦橋をもろに襲い、窓ガラスと共に艦橋の中のもの全てを吹き飛ばした。当然、塚原と赤城も。

艦装に接続されていた赤城は、辛うじて壁面に打ち付けられずに済んだが、塚原はそもいかなかった。

「しばらくは、意識がおりでした。その間に、退艦の指示と、指揮権を近藤中佐に移譲する旨、命令がありました」

「・・・そうか」

報告を受けながら見つめていた景色のおかげで、大体の事情は把握できた。

そこは、見知った「赤城」の艦橋ではなかった。

今、塚原と赤城が身を委ねている船は、四万トンの巨艦とは程遠い。

「赤城」に搭載されていた、内火艇だ。

「赤城」は今、塚原の目の前に横たわっている。その身を炎に焼かれ、赤々と燃え盛る鉄の塊となって、周囲の海水を沸騰させる。四本を被雷した右舷に大きく傾き、今しも海に飲み込まれようとしている。

もはや「赤城」が、救いようのない状態であることは、誰の目にも明らかだった。

——南雲の言っていた通りになってしまったな。

こうなることを危惧していた、同期の顔が浮かぶ。結局のところ、彼が予期した通りになってしまった。

一機艦の受けた損害は、「赤城」の喪失に留まらない。無傷の艦を数える方が早いくらいだ。

空母の中で無事といえるのは、「加賀」一隻のみだ。その「加賀」にしても、至近弾多数と飛行甲板後部に一発を被弾している。

その他、海上に姿を留めているのは、「千歳」と「利根」、筑摩「、三隻の駆逐艦のみだ。一機艦は、実に五隻のBOBを撃沈されたことになる。

ただ、艦娘だけは全員救助されている。それだけが救いかもしれな

い。

「このまま、〃加賀〃に向かいます」

よろしいですね？確認を取る赤城に頷く。

慣れない手つきで、赤城が内火艇のハンドルを握る。普段操船を担当している妖精の姿はない。艦娘と違って、BOBを魂の拠所とする、一種の憑神のような妖精は、その沈没によって姿を消してしまう。だから今、内火艇を操船できるのは、赤城と塚原だけだ。

ゆっくりとした速力で、内火艇は〃加賀〃舷側へと寄せていく。静寂が訪れたトラック沖の空の下、停船している〃加賀〃の舷門には、こちらを心配そうに見つめて佇む人影があった。

◇

『乙ロ』、『乙ハ』は依然健在。現在、二、三機艦の攻撃隊が攻撃中です。『甲イ』、『甲ハ』はすでに排除に成功し、挺身艦隊は環礁への突入を敢行するとのことですよ」

各艦隊から寄せられる報告電を、大淀が一つ一つ読み上げる。その声を、艦橋に上がってきた東郷は、黙って聞いていた。

トラック環礁をめぐる戦鬪は、終局へと向かいつつある。すでに戦艦同士の砲撃戦には決着が付き、機動部隊の戦いも佳境だ。

昨日中に「乙イ」部隊を撃破した日本海軍機動部隊だが、すでに損害の激しかった一機艦が、今朝一の空襲でついに瓦解した。またも運用可能な空母は〃加賀〃と〃千歳〃のみであり、その艦載機隊も壊滅状態だ。もはや戦力には換算できない。

残った二個機動部隊のうち、南雲指揮下の二機艦は、ついぞ昨日中に発見できなかった「乙ハ」とがっぷり組み合って、艦載機の応酬を繰り広げている。背後を取られ、先手を打たれた形になっていた二機艦だが、南雲はうろたえることなく、切り返している。戦況はひっ迫しているとのことだ。

一方の三機艦は、「乙ロ」を目標として攻撃隊を放っている。夜明けとともに索敵隊を放ち、「乙ロ」の再確認後、〇七三〇から第一次攻撃隊を、〇九一五から第二次攻撃隊を放っている。今は第二次攻撃隊を放ち、針路を〇九〇に取ったところだ。

一通り報告を終えた大淀が、眼鏡の位置を直す。レンズの奥で瞳が光った。

「アメリカがトラックを要求してくることは予測できましたが・・・こんな形で、強引な手を使ってくるとは思いませんでした」

米第七方面艦隊——ポートモレスビーを拠点とする艦隊が加勢に現れた旨、二挺艦より報告が上がっている。第七方面艦隊から放たれた攻撃隊は春島の基地施設を叩き、戦艦部隊は二挺艦と共に「甲八」と戦闘を行っていた。

この後、米艦隊がどうするつもりなのかは、いまだ判然としない。少なくとも、二隻の高速戦艦を含む水上部隊は、二挺艦と共に環礁内への突入を計っている節がある。機動部隊の動向は今もって不明だ。

——米国政府から、何らかの接触があつたという情報はない。

内地の政府関係者には、東郷の協力者もいる。日本政府に何らかの動きがあれば、その筋から暗号電が飛んでくるはずだ。

いや、確かに暗号電は飛んできた。しかし、その内容は、日本政府と米国政府間の動きを報せるものではなかった。

また別件で、東郷が危惧していた内容だ。

「アメリカ海軍上層部の独断で動いた、と見るべきでしょうか？」

「いや、確たる成果を残してから、正式に日本政府にトラックの共同管理を持ち出してくるつもりかもしれん。いずれにしても、アメリカが焦り始めているのは事実だ」

遅々として進まないハワイの解放に、アメリカ国内でも政府への批判が高まっている、との情報がある。多少強引な手を使ってでも、状況を打破したいというのが、アメリカの本音だろう。

「今は、彼らの推移を見守る他なさそうですね。ここから、何かできることは、ありませんし」

思案気に首を傾げていた大淀が、眉を八の字に下げた困り顔で結論付ける。東郷にも異論はない。

連合艦隊司令部から、第七方面艦隊に対して、何らかのアクションは取らない。それが東郷の決定だった。

「また、何かあつたら、戻って来る。君の意見は、参考になるからな」

「恐れ入ります」

大淀が一礼したのを確認して、東郷は後部格納庫内の司令部施設に戻るべく、踵を返そうとする。が、その東郷を、大淀の目線が引き留めた。迫力があるわけではない。理知的な色が、このまま格納庫に戻ることを許さないのだ。

何か、言いたいことが、ありそうだ。

「どうかしたか」

「先ほどの、暗号電の件です」

やはり、そこに突つかかって来るか。

『「アメノハバキリ」。横須賀襲撃を意味する電文ですよね?』

「…正確には、日本本土への、深海棲艦艦体接近を意味する暗号だ」
十数分前、横須賀鎮守府からもたらされた極秘電文を解読する乱数表は、東郷のみが持っている。その内容を読めるのは、東郷だけだ。
アメノハバキリ。その文面が意味するところは、深海棲艦の大規模な艦隊の日本本土接近だ。

『NT作戦』遂行中の日本海軍に、本土に戦力を残してくる余裕などなかった。特に横須賀はほとんど残っていない。本土と前線の間、船団護衛を担当する、巡洋艦と駆逐艦を主軸とした部隊のみだ。

昨晚のうちに一度目の戦闘が生じた旨の報告が、電文には添えられていた。今頃は、更に本土に近い海域での、最終防衛戦を展開している頃だろうか。丁度、こちらの砲戦部隊がトラック環礁に突入し、基地施設攻撃を始める時刻と被ることになりそうだ。

本土が攻撃されたとなれば、ことは重大だ。海軍だけの責任問題では済まない。今後の、日本政府の方針にも関わって来る。

「いいのですか?このまま、各艦隊に報せないままです」

「報せたところで、何もできはしない」

東郷はかぶりを振る。

今から全速力で引き返しても、本土までは数日かかる。最早『NT作戦』参加艦艇に、できることはない。

「無駄に不安を煽るだけだ。今は、目の前の作戦に、集中させるべきだろう」

それがわからない大淀ではないはずだ。

大淀はただ黙って、こちらを見つめていた。

「手は尽くした。後は、横須賀の秋山中将に、任せるだけだ」

「・・・わかりました。お引き留めしてしまい、申し訳ありません」

今度こそ、話は終わり。東郷は「大淀」の艦橋を後にして、艦内を後部の格納庫へと戻っていく。

手は尽くした。現状で可能なありとあらゆる方策を講じた。

本土を守るのは、秋山率いる横須賀残留艦隊だけではない。

日本海軍の隠し玉、「本来存在するべきでない」軍艦で構成された艦隊。

それに、本土防衛艦隊第一護衛隊群もいる。

彼ら彼女らが時間を稼げば、呉の高速艦隊も加勢できる。

勝算は、ゼロではない。

——それでも、低いことに変わりはない。

秋山の力量が試されている。否、試されているのは、東郷と、連合艦隊の今後もまた同じだ。

『敵編隊接近。対空戦闘用意』

丁度その時、艦内スピーカーから、敵編隊の接近を報せる大淀の声が聞こえてきた。

戦闘はまだ終わっていない。トラック環礁を解放することが、『N工作戦』の目的であり、東郷が今取り組むべき目の前の仕事だ。

司令部要員が詰める格納庫に戻る頃、敵攻撃隊と直掩戦闘機隊との戦闘が始まった。

環礁二待ツモノ

隊列を再編した一挺艦各艦は、ついに北東水道をトラック環礁内へ進入しようとしていた。

時刻は、現地時間で一一〇〇を回ろうとしている。太陽は中天に近い。

「観測機の交代をしておいて、正解だったな」

上空を飛び交う零水観の群れを見上げて、榊原は呟いた。敵基地砲撃に際し、弾着観測を行う機体だ。

元々、足の長い機体ではない。戦艦同士による砲撃戦に一度参加すれば、それで終わりだ。

そこで、敵戦艦部隊との戦闘後、部隊収集と再編の間に、各零水観が降ろされ、機体を交代したのだ。

交代したのは、観測機だけではない。一挺艦の編成もまた、変更されている。

損傷の激しかった「陸奥」、
「陽炎」、
「長波」が
「祥鳳」と共に
後方待機となり、代わりに「卯月」と
「磯風」が加わった。

「長門」、
「武蔵」もまた、
中破相当と判断される被害を受けていたが、
射撃指揮装置が生きていること、
少しでも砲火力が欲しいことから、
このまま環礁に突入することとなっていた。

そんな一挺艦は今、榊原が乗艦する
「曙」を先頭とした単縦陣で、
環礁内へと北東水道を通過している。

見張りの妖精も、操艦する曙も、
真剣そのものだ。トラック環礁内外を繋ぐ水道の調査は、
ここ数年間行われていない。海図が当てにならないのだ。
それに、深海棲艦が機雷を敷設している可能性も考えられる。

頼りになるのは、見張り員の目と、
艦底部のソナー、そして海の女神の微笑だけだ。

「針路修正、面舵〇五」

見張り員の報告を受けて、曙がわずかに舵を切る。
両舷原速、慎重に水道を通過していく。

榊原としては、彼女の経験に頼むほかない。

やがて――

「……水道を通過」

曙が静かに息を吐きつつ、報告した。特に問題を起こすことなく、
「曙」は環礁内へと至ったのだ。

榊原もまた、額の汗を拭う。

「後続艦、水道を通過中」

面舵を切った「曙」に続いてくる艦影を、榊原は見遣る。

小さな駆逐艦から順に、一挺艦各艦が水道を通過していく。それぞれの間隔を広く取っているため、一隻が通過してから次の一隻が通過するまで、時間がかかる。要の戦艦群は、まだ水道の外だ。

「周辺を警戒。特に、敵残存艦や魚雷艇に注意してくれ」

見張り員に注意を促した榊原は、改めて環礁内を見渡す。

広い。これが、本当に珊瑚に囲まれた海なのかと、疑うほどだ。島は点在しているが、見渡す限りに海一色だ。

「ようやく、辿り着いたわね」

腕組みをして、曙が呟く。

「ああ。ここが、俺たちの目指していた場所だ」

日本海軍が求めた地。太平洋の深海棲艦が、一大拠点としていた場所。

果てしなく遠くに思えた地に今、日本海軍のBOBたちが進入していく。

辺りを見回した榊原は、ふと、青空へ向けて立ち上る黒煙に気づいた。南の方角で、狼煙のように煙が漂っている。海図を頭の中で思い浮かべた榊原は、その正体に思い至った。

「春島の飛行場か」

米第七方面艦隊の加勢は、榊原も聞いている。ハルゼーらしいと言え、らしいのだろうか。

第七方面艦隊に所属する二空母からの攻撃隊は、基地施設の破壊を目的としていた。その成果が、あの煙の正体だろう。煙の下で、破壊された基地施設が炎を上げているところが、容易に想像できた。

「『満潮』、水道を通過」

「曙」に続いて水道を抜けたのは、『満潮』だった。水道を抜けるや、『曙』とは逆方向に舵を切り、警戒の任につく。その後には『霞』が続いていた。

「まだ当分、時間がかかりそうだな」

「全部で十二隻。まあ、仕方がないでしょ」

水道を抜けた『霞』を認めて、曙が答える。残っているのは後九隻。しかも後半は大型艦だ。全艦が通過し、再び陣形を構築するには、それなりに時間がかかる。

環礁内にはいまだ、深海棲艦の巡洋艦部隊——「甲口」がいる。あちらも「甲イ」が敗れたことは知っているだろうし、一挺艦が北東水道から進入してくることも把握しているだろう。どこかで襲撃をかけてくる可能性が高い。

今は、その絶好の機会だ。

水道を抜けた駆逐艦たちは、各々に目を凝らし、周囲を警戒する。程なく、それは現れた。

「『卯月』、水道を通過」

五隻目となる駆逐艦が、北東水道を環礁内へと進入した時だ。

『水道出口よりの方位一一五、距離一三〇（一万三千メートル）に小型艇多数確認！高速で接近中！』

満潮からの報告だった。おそらくは、魚雷艇か水雷艇だ。環礁に侵入したばかりのBOBたちを、至近距離から魚雷を撃ちこんで足止めしようという目論見だろうか。

「左砲戦用意！『満潮』、『磯風』、『卯月』で対応！こちらは今向かう！」

「待って」

飛ばした榊原の指示を、曙の声が遮った。

「新手の小型艇接近！水道出口よりの方位二三五、距離一四〇！」

——挟まれた……！！

敵の狙いは、魚雷の飽和攻撃か。

「左右の小型艇群をそれぞれ『丙イ』、『丙ロ』と呼称。『丙イ』は『満

潮”、“磯風”、“卯月”、『丙口』は“曙”、“霞”で対処！魚雷の射程に入れるな！”

榊原の指示を受け、五隻の駆逐艦がほぼ同時に舵を切った。“曙”もまた、面舵を一杯まで切り、小型艇群と距離を詰めていく。お互いに速力が早く、その距離はグングン縮まっていった。

「曙、指示は任せる。片っ端から叩いていけ」
「了解！」

ギリりと瞳を輝かせた曙は、機関の唸りを威嚇の声にして、ネコ科の猛獣のごとく魚雷艇群を狙う。距離は六千メートルを切っていた。「霞！一番近い奴から叩く！目標、一番右の魚雷艇群！弾種、榴弾！てーっ！」

矢継ぎ早の指示があつて、すぐさま“曙”の主砲が火を噴いた。右舷側に指向した六門の一二・七センチ砲から紅蓮の炎が沸き起こり、着発信管が設定された榴弾を吐き出す。数千メートル先の目標に対して飛翔する砲弾が到達するまでは、わずかに十数秒。

その間にも、“曙”と“霞”は二度目の斉射を放つ。装填時間六秒を切る、駆逐艦ならではの砲撃戦だ。小太鼓を打ち鳴らすような、下腹部を刺激してくる音が、艦上に響いていた。

最初の斉射が弾着する。海面に衝突した途端、一二・七センチ砲弾は素直に信管を作動させ、榴弾としての役目を果たした。徹甲弾よりも炸薬量が多く、無数の断片と爆風をまき散らす榴弾の方が、魚雷艇を面で制圧できると、曙は考えたのだろう。

斉射のたびに、海面が弾け、硝煙の色に染まった水滴が飛び散る。艦橋からは見えないが、猛烈な爆風と鋭い弾片の嵐が、魚雷艇を襲っているはずだ。

第四斉射の弾着と、距離五千メートルを切るのが同時。いよいよ、砲撃の成果が表れ始めた。

爆風に煽られたのか、一番先頭に位置していた魚雷艇が横転する。正面で一二・七センチ砲弾が炸裂した魚雷艇は、艇首を大きく突き上げられた後、海面に叩きつけられる。

弾片に切り刻まれたのか、黒煙を噴き上げて擱座する魚雷艇もあ

る。

——「丙口」の残数は、十六隻と言ったところか。

猛然と主砲を撃ち続ける。『曙』の砲声を聞きながら、榊原は双眼鏡を覗き込む。見つめる先は、海面を切り裂いてこちらへと向かってくる、小さな影たち。横陣に近い陣形で迫りくる魚雷艇。

また一隻、『霞』の放った砲弾が直撃した魚雷艇が、オレンジ色の炎と共に爆発四散する。全長が二十メートル程度の小型艇には、豆鉄砲とも揶揄される一二・七センチ砲弾でも過剰火力だ。跡形も残らないとは、まさにこのことだった。

「機銃もばらまけ！ありったけ撃ち込むのよ！」

勇ましい曙の声と共に、増設された二五ミリ機銃が火を噴いた。

主砲よりも遥かに早い発射速度で、弾丸が撃ち出される。パラオの工廠で密度が増した弾幕が、魚雷艇群を包み込む。三発に一発混じる曳光弾が、光のシャワーとなって海面を舐めていた。

主砲に比べて狙いは甘い、数が圧倒的に多い。海面をミシン目のように這う小さな水柱が、やがて敵魚雷艇に接触した。

細かな破片と思しきものが、連続して舞い散った。到達した機銃弾が、魚雷艇の艇体に突き刺さり、抉り取る。蜂の巣にされた魚雷艇が、速力を失って、あるいはエンジンから炎を噴き上げて、ズブズブと波間に沈み込んでいった。

「距離三〇！」

曙が叫ぶ。魚雷の射程内だ。残存の魚雷艇は七隻。

新たな主砲弾が敵魚雷艇を撃ち砕く。

機銃弾によってぼろ雑巾のようになった魚雷艇。

積んでいた魚雷が誘爆したのか、紅蓮の炎となって海面から消え去る魚雷艇もある。

「あと少し！気張って叩け！」

曙が霞を鼓舞する。その声に応えるようにして、六門の一二・七センチ砲が更なる咆哮を重ねた。

『満潮』より『曙』！「丙イ」の制圧、完了したわよ！そっちも、もたもたしてないで、さっさと叩きなさい！」

「曙」より「満潮」！制圧完了、了解！調子に乗るな！」

満潮の言葉に、曙が答える。その声は澆漑としたままで変わらな
い。

「丙口」も間もなく制圧が完了する。水道を出ようとする味方に、指一本触れさせまいとする気概のようなものを感じさせた。

これでトドメとばかりに、「曙」と「霞」が弾幕を集中する。苛烈な砲撃が空気を切り裂き、唸りを上げて魚雷艇に襲いかかる。海が焼けてしまうのではというほどに熱せられた炎の礫が、海水を沸騰させ、断片と爆風をもつて魚雷艇を出迎えた。

砲撃の時間はそう長くなかった。最後の一隻が海面で火柱を上げる。それを最後に、魚雷艇群の襲撃は終息した。

「曙」より全艦。『丙口』の制圧完了。魚雷の航走は確認できず。周囲に新たな艦影なし」

曙が額の汗を拭う。環礁に入って最初の戦闘。なし崩し的に始まってしまった迎撃戦だったが、何とか乗り切ることができた。

主機の出力を下げ、「曙」たち駆逐艦は再び周辺の警戒に戻る。丁度、「木曾」が水道を抜け、続いて「摩耶」が環礁に入ろうかというところだった。

——これで、「甲口」には対抗できる、か。

敵は巡洋艦部隊だけではないことがはつきりした。またどこかで、魚雷艇が襲撃を仕掛けてくる可能性がある。

油断するにはまだ早い。

そんな榊原の予想は、早くも的中した。

「っ！聴音機に感あり！」

新手の反応を捉えたのは、「曙」艦底部の水中聴音機だった。

「また魚雷艇か？」

電探に感はない。スクリー音だけを捉えたのなら、小型で電波を反射しにくい、魚雷艇の可能性が高い。これが外洋なら、潜水艦と
いう可能性が高いが、ここは水深の浅い環礁内だ。潜水艦の可能性は
捨てていい。

だが曙の言葉は、榊原の予想を裏切るものだった。

「違う！海中から聞こえてくる！」

「何だど？」

窺った曙の目は、これ以上ないくらいの驚愕で見開かれていた。

「なんで……これって……」

一瞬目を瞑り、耳を澄ますようにしていた曙は、艦首を——その先の海を見遣る。

黄金色に光り輝く、誕生の海が、そこには広がっていた。

「ドロップか!？」

そんなはずはない。この場のどの艦娘からも、魂の片鱗から呼びかけがあった旨の報告はなかった。

ではなぜ、今まさに、目の前で顕現が始まろうとしているのか。

「……ぐっ！」

隣に立っていた曙が、突然呻き声を上げた。苦悶の表情を浮かべ、まるで何かから逃れようとするかのように、頭を抱える。

「う……あああああ……ぐ……っ！」

「曙!?!どうした、痛いのか!?!」

返事はない。余程激しい痛みなのか、弾のような汗を浮かべて、曙がのたうち回る。その動きを強制的に押さえつける艤装の肩ひもが、ギチギチと嫌な音を上げていた。

「曙」の艦体もまた、悲鳴を上げるように軋んでいた。艦娘の痛みもまた、艦体に影響を及ぼすのか。

否。

次の瞬間、海が割れた。

光り輝く海面が急速に沸騰し、膨大な水蒸気で辺りの景色を白一色に染め上げる。その只中に、「曙」は巻き込まれた。

同じだ。今まで見てきた顕現と、全く同じことが起きている。

——何かが、来る……!

息を荒げて悲鳴を上げる曙を抱きかかえ、榊原は前方の海面を凝視していた。

海面から、腕が伸びる。太く逞しく、東京のビル一つ分はありそうな、巨大な腕。

いや違う。あれは艦だ。とてつもなく巨大な艦の艦底だ。

海水をまき散らし、水蒸気を切り裂いて、天高く突き上げられた艦首。かすかに見える陽光が、その先端でギリリと輝いた。

何が起こるのか。榊原は全てを悟った。

物理法則を思い出したかのように、巨大なその艦は海面へと落ちてくる。丁度、**「曙」**の真上へと。

榊原は目を見張る。世界のすべてがスローモーションのように思えた。舞い散る水滴一つ一つすら、鮮明に見える。

腕に力をこめる。抱きかかえた曙だけは、決して離さぬようにと。鼓動が聞こえる。息遣いが聞こえる。潮気混じりの、髪の毛も汗で張り付いたセーラー服の感触も。柔らかな肌の温もりも。

轟音と共に、艦が**「曙」**に押し掛かって来る。空は黒い影で覆われ、ありとあらゆる感覚が、外界から遮断されてしまったかのような錯覚さえ覚えた。

その時が来た。

それまでのどんな衝撃とも比べ物にならないほどの激震が、**「曙」**を襲った。艦橋もまた、激しく揺すぶられ、立っているのすらやつとだ。

軋み音。崩落音。圧壊音。爆発音。

そして、女神の囁き声。

ハツと顔を上げる。凜と静まり返った世界。榊原は前を見つめる。

しかし、そうした感覚は全て、艦橋が押しつぶされる爆轟音と、流入した海水の音にかき消されてしまった。

薄れゆく意識の中、腕に抱いた曙の存在だけが、妙にはつきりと感じられた。

失ツタ世界

・・・ああ、眠い。

冷たい。でも、気持ちいいかも。

どこだろう、ここは。

ああ、そうか。私は、確かここで・・・。

どれくらい経ったのかな？

皆は元気かな？

皆、は・・・。

・・・。

・・・はは、皆、いなくなっちゃったんだね。

ああ、でも。あの娘は元気だろうな。私と同じだし。

探しに行かないと。きつと、寂しい思いをしてる。あの娘には私し

かないから。私にはあの娘しかないから。

・・・。

でも、今は動けない、か。

だから、ね。お願い。私の代わりに、あの娘を探して？

やり方は簡単。教えてあげる。

だからきつと・・・私の大切な人を、見つけてね。

・・・感じる。

来て、くれたんだ。

アナタもずっと、私を探してくれてたんだ。

アナタもずっと、私に会おうとしてくれてたんだ。

二つに分かれてしまったって聞いた時は、驚いたけど。

でも、それでもいい。例えば半分でも、アナタに会えるんだから。

それに・・・もう半分も、すぐに取り返すから。

もう、誰にも邪魔させない。私がきつと、取り返す。

そうしたら・・・もう一度、海に出よう。二人で一緒に航海しよう。

今度こそ、誰にも邪魔されず、二人だけで。二人きりで。

絶対に、楽しいから。

ずっとずっと、笑っていられるから。

待ってて。今、動くから。

アナタを迎えに行くから。

動け。動け、私。ほんの少し、あの娘を迎えに行くだけでいいから。

待ってて。今、行くから。

待ってて。私の――

◇

「何が起こったの!?!」

環礁を通過中だった大和は、ひつきりなしに飛び交う味方艦隊の通信を聞き届けつつ、誰にともなく状況の説明を求めた。

いや、聞かずとも、半分はわかっている。理解している。

ただそれを、認めたくないだけだ。

榊原座乗の「曙」が、顕現の余波に巻き込まれて、轟沈。艦体は叩き割られ、激しい圧壊音と共に、トラック環礁の底へと沈んでいった。両名の生死は今もって不明。

嘘だ。嘘嘘嘘嘘。こんなのは、品の悪い冗談に違いない。

けれども、水道を環礁へと進むにつれて、それが紛れもない現実であることを思い知らされる。

水道からすぐの海面。「大和」からの距離二万メートルほどの位置で、朦々と水蒸気が立ち上っている。見紛うことなく、あれは顕現の時に現れる水蒸気。誕生を寿ぐ白い海水のベール。

だが今は、それが血塗られたベールに思えてならない。

あの内側の奴は、最愛の提督を、大切な仲間を、踏み潰したのだ。冷静になれという方が、無理な話だ。実際、環礁へ先に進入したパラオ泊地艦隊各員も、殺気立っている。

現れたアイツは、一体何者なんだ。

「目標、正体不明艦」

大和は水蒸気の中の相手へ照準を命じる。発砲を堪えたのは、なけなしの理性だ。

水蒸気はほぼ正面。測距儀はほとんど旋回することなく、目標を捉える。

『武蔵』より各艦。別命あるまで、射撃を禁じる』

環礁内の緊迫した空気を感取ったのか、最後尾の『武蔵』から栗田が指示する。落ち着いて、深呼吸をしろ。そんな意図が、言外に込められている気がした。

——そんなこと、わかってる。

文字通り胸を撫で下ろすようにして、息を一つ。ただし、鈍色の輝きを放つ主砲だけは、晴れつつある霧の向こうを捉えて離さない。

『摩耶』より各艦。水道出口よりの方位二八〇、距離三〇〇に艦影。敵「甲口」部隊と認む』

来た。このタイミングで、環礁内に残っていた最後の巡洋艦部隊が、一挺艦に接近してきたのだ。

ギリ。大和は奥歯を噛み締める。全くもって間が悪い。

『武蔵』より各艦。三制艦、五水艦は敵巡洋艦部隊に対処。指揮は清水少佐が執れ。『大和』は不明艦を照準したまま待機』

栗田の静かな指示が、冷たくも聞こえ、また頼もしくも聞こえる。それが少し苛立たしい。

「見張り、何か見える？」

防空指揮所と艦橋内の双眼鏡に取り付いている妖精たちに尋ねる。霧の向こうで、何か動きはないか。何かわかることはないか。

——もしも、深海棲艦なら。

迷わず、主砲の引き金を引いてやる。世界最強、ありとあらゆる艦を粉碎可能なこの四六サンチ砲で、叩き潰してやる。

「……水道を抜けます」

立ち上る水蒸気の向こうを睨むうちに、『大和』は水道の出口に到達した。不明艦との距離は一万九千メートル。搭載する全九門の四六サンチ砲を使用できるようにするべく、『大和』は面舵を命じた。

たつぷりと三十秒以上の時間をかけて、舵が利き始め、『大和』が反り上がった艦首を右へと振っていく。その動きに合わせて、三基の主砲塔がゆっくりと左舷側へ旋回する。測距儀も一緒だ。太陽にぎらついて、鈍色の輝きを放つ極太の砲身が、鎌首をもたげて、咆哮の時を待ち望んでいる。

直後、見張りをしていた妖精から、決定的な報告が入った。

不明艦に、深海棲艦特有の紋章と迷彩を確認したというのだ。

迷彩のパターンは、日本海軍の深海棲艦識別表の中にはない。いや、似ているものならある。以前、「大和」も戦った相手であり、日本海軍内では「改flagship」と呼ばれる深海棲艦たちだ。

不明艦の迷彩のパターンには、リアナ沖で戦ったル級改flagshipと、どこか似通ったところがある。

強力な敵であることは、想像に難くない。

大和は、艦橋左舷に見える不明艦へと、さらに目を凝らす。間もなく中天に昇ろうとする太陽が、すでにほとんどが霧散している水蒸気の下に、不明艦の姿を照らしていた。

嫌な汗が伝う。短い間でしかないが、戦場で培われた勘が、警鐘を鳴らす。艦としての本能に近い部分が、目の前に迫る危機を告げる。

目を逸らすわけにはいかない。背中を伝う嫌な汗を無視して、大和は不明艦を凝視する。

なだらかなシアーのかかった艦首。

“曙”を踏み潰した巨大な艦体。

全てを睥睨する要塞のごとき主砲塔。

遙かな天を睨みつける対空砲。

そびえ立つ天守閣を思わせる艦上構造物。

一つ一つ、露わになっていくパーツが、その艦の凄まじいまでの存在感の証。

「嘘……でしょ……」

呆気にとられる、とはまさにこのことだ。怒りも悔しさも、何もかも全てが頭から抜け落ちていくような感覚。それほどに、その艦は圧倒的で、ともすれば危険な魅力をまとっている。

彼我の距離、一万八千メートル。それなのに、ひしひしと伝わってくる、暴力的なまでのオーラ。

破壊と蹂躪の象徴。海洋の覇者にして絶対王者。何者にも撃ち砕けぬ盾と、神すらも葬り去る矛を備えた、神ならざる怪物。

それは、とてつもなく巨大な、そして途方もなく強大な、海の支配

者——戦艦だった。

「『大和』より各艦！不明艦は、未確認の深海棲艦と認む！発砲を許可されたし！」

あれは、敵だ。少なくとも、味方ではない。そして間違いなく、大和の仲間たちを傷つける存在だ。

これ以上、誰も失うわけにはいかない。

『・・・『武蔵』より『大和』。不明艦への発砲を許可する。以後、不明艦を新型深海棲艦と認定する』

栗田が決断する。その命令を聞き届け、大和は表情を引き締めた。目測ゆえに確かなことは言えないが、不明艦の大きさは、先に戦った戦艦棲姫のものよりも明らかに大きい。三百メートルは優に超えている。排水量は十万吨に迫るのではなからうか。

当然、そこに据えられている火炮も、装甲も、戦艦棲姫を上回っているだろう。『大和』だけでは手に負えない。一制艦がまとまって挑んで、ようやく互角に戦えるだろうかといったところだ。

一制艦の残存艦——『大和』、『武蔵』、『長門』のうち、環礁内に入ったのは、まだ『大和』だけだ。後続の『武蔵』が水道を抜け、砲戦を行えるようになるには少なくとも後五分。『長門』はさらに五分ほどかかる。その間、『大和』単艦で、あの戦艦を相手取らなくてはならない。

鳴らされたブザーの音が、環礁内に響き渡る。

未だ生死不明の二人。大切な人たちの無事を、今は祈る他ない。

「てーっ！」

丹田に力を込めて、大和は叫ぶ。号令から一拍。左舷側を指向していた各砲塔の左砲が、観測射となる第一射を放った。

轟音が木霊する。たった三門だけの射撃でも、四六センチ砲の発する咆哮はすさまじい。衝撃波が激しく大気を揺さぶり、そのまま空を叩き落としてしまうのではと思うほどだ。

燃焼ガスによって音速の二倍にまで加速された重さ一トン半の砲弾が、鳴動する大気を切り裂いて、飛翔していく。弾着まではおよそ三十秒だ。

「っ！」

第一射から十数秒後。予想通りのことが起きた。不明艦が動き出したのだ。

艦尾付近が激しく泡立ったかと思うと、巨大な艦体が、次第に加速されていく。丁度、“大和”と同航する形だ。

さらに、その艦上では、備えられた火砲たちがうごめき始めている。観測機から三連装と報されている巨大な主砲塔が四基、威圧的な雰囲気を作りまき散らしながら、殊更ゆつくりと旋回していた。考えるまでもなく、その狙いはこの“大和”であろう。

妙に冷たい汗が額を滑り落ちた。

あれだけの巨艦だ。いったいどれほど強力な主砲を備えているのか。

“大和”と同等、すなわち一八インチ級の主砲を据え付けるなど容易い。あるいはさらに大きな口径の主砲か。それが全部で十二門。陽光にきらめくその姿が、何よりもこちらの恐怖心を煽ってくる。

蛇に睨まれた蛙、とはこのことだろうか。明らか敵意を、圧倒的な力と共に見せつけられた時、誰しも身動きが取れなくなるものなのだ。現に今、大和は金縛りにでもあったかのように、不明艦から視線をずらせずにいる。

大和の意識を現実へと引き戻したのは、先に自らが放った第一射三発の弾着だった。

不明艦の加速を計算に入れていなかったため、四六センチ砲弾は全て艦尾の海面に弾着している。全弾が空振りだ。命中弾や夾叉弾はおろか、至近弾すらない。

「諸元修正、急いで！」

焦りにも似た声で、大和は砲術科と、自らの頭を通り過ぎていく無数の計算式を急かす。

修正された諸元が各砲塔へ送られ、大和が第二射の号令を出す前に、災厄は始まった。

先に火を噴いたのは、不明艦の両舷を覆う対空砲だ。どうやら、対水上戦闘も考慮している両用砲だったらしく、ほぼ水平に近い仰角と

なつた砲身から、無数とも思える炎を吐き出した。

狙いは当然、“大和”よりも前にいる三制艦と五水艦だ。

三制艦の戦闘を行く“摩耶”の周囲に、スクールのような砲弾の雨が降る。立ち上る水柱一つ一つはそれほど大きくない。それでも、異様に多い数と、連続して噴き上がる様が、まるで艦の前に立ち塞がる海水の壁のようにも見受けられた。

そして、いよいよその時もやって来た。

第二射の咆哮を受けた“大和”の動揺がまだ収まらないうちに、不明艦の艦上にめくるめく閃光が走った。

大和は目を見張る。命中弾の光ではない。不明艦が“大和”への砲撃を始めたのだ。

一万八千メートル先の海上で生じた、四つの発砲炎。その尋常でない光量と大きさに、“大和”はしばし言葉を失っていた。

やがて、飛翔音が迫る。頭上を圧迫されるというのは、このことなのだろう。まるで空そのものが落ちてきてしまったかのように、大和には感じられた。

甲高い音が途切れた時、“大和”もまた災厄に襲われた。

天を突かんばかりの勢いで四本の水柱が噴き上がり、巨大な衝撃が艦底から“大和”を突き上げた。一瞬の浮遊感に大和は歯を食いしばり、不明艦を睨む。

数秒後、“大和”は三度目の射弾を吐き出した。

本土近海防衛戦 横須賀ノ防人

『NT作戦』が発動された頃――

昼下がりの横須賀鎮守府。中天を通り過ぎた太陽が廊下に光を当てる。秋を迎えた陽気が、庁舎全体を暖かく包んでいた。

そんな、のどかな雰囲気とは裏腹に、横須賀鎮守府――否、横須賀という街そのものが、慌ただしさを増していた。

その只中に、吹雪もいる。

横須賀鎮守府庁舎内の、資料室、執務室、そして秋山と吹雪の私室を順に巡った吹雪は今、数冊の冊子とファイル、それに二個の鞆を抱えて、廊下を早歩きで急いでいた。向かう先は、奥まったところにある作戦指揮室だ。

ノックもそこそこに、扉を開ける。今横須賀に残っている人間はほとんどいない。わざわざ確認する必要がないのだ。

「お待ちしていました」

ヘッドセットをつけたオペレーター数人が、軽い会釈で吹雪を迎える。それに応え、吹雪はそそくさとその奥を目指した。

オペレーターたちを見下ろす、一段高い位置。電子海図台が置かれたそこに、横須賀鎮守府の主はいた。

「来たか」

海図と睨めっこをしていた秋山が、吹雪に気づいて顔を上げる。緊迫を映す表情が、少しだけ和らいだ。

が、その顔もすぐに引き締められる。状況はすでに始まっているのだ。

「とりあえず、着替えだけ用意しました」

「ありがとう、助かる。今回は長丁場になりそうだからな」

それだけ答えて、秋山は次々電子海図に移される情報に目を通す。資料を脇の机に、持ってきた着替え類を部屋の隅に置き、吹雪もそれに倣った。

「状況はどうなってますか？」

「先にも言った通り、敵艦隊発見の第一報は、一時間前に入った。小笠原の哨戒部隊からだ」

秋山が海図台の一点を指し示す。赤の点でマークがされているのは、小笠原諸島から北へ二百海里ほどの位置だ。

「それから三十分後に続報。敵艦隊の詳細な位置、針路、速度に加えて、編成も可能な限り報告されている」

海図台の上で、赤い点が三十分分動く。その隣には、位置や針路、速度の数値、そして編成が羅列された。それに吹雪も目を通す。

「戦艦六、空母二、巡洋艦四、駆逐艦十二…随分偏った編成ですね」
「こちらの哨戒網を極力避けるための処置だろうな。参加艦艇も速力の高い艦ばかりで固められている。大規模な艦隊運動による時間のロスさえも惜しいらしい」

「現状で一番有効なのは、潜水艦による襲撃と考えますが…？」

現実的な提案をするが、秋山は難しい顔で思案したままだ。

「…潜水艦隊は出すが、足は長くない。それに、六隻もの戦艦を叩けるほど、火力もない」

「では…？」

海図台を最後に一睨みした秋山が、顔を上げる。

「ここまでは、二人にとつては既定路線だ。」

「とにかく、時間を稼ぐ。対抗可能な戦力が到着するまで、敵艦隊を足止めする。それが、作戦案の骨子だ」

そう言つて、秋山はUSBメモリーを取り出した。それを海図台脇の端子に差し込む。中には一つのファイル。

「予定通り、この作戦を実施する」

「わかりました。ルソン艦隊、T・T独立艦隊には、すでに秘匿回線で作戦発動の旨、電文を飛ばしています。今頃は沖ノ鳥島沖から全速力でこちらを目指しているはずです。後は…」

「我々横須賀艦隊と、本土防衛艦隊の動き、だな」

確認するような秋山の言葉に、吹雪は頷く。手元のパネルを操作して表示したのは、横須賀鎮守府に所属する各BOBの状態と、第一護

衛隊群各艦艇の状態だ。

「阿武隈さん率いる護衛艦隊は、第四十二次油槽船団の護衛を終え、八時間後にこちらへ帰還します。ただ、現在は船団護衛用の装備のままです。これを攻撃用の装備に換装し、補給も含めてすべての準備を完了するまで、さらに六時間はかかります。正味で十四時間です」

「現在位置から考えて、敵艦隊が横須賀を攻撃圏に捉えるまで二十四時間。．．いや、こちらに見つかった以上、全速力で突っ切っていくだろう。もっと短いな、十八時間といったところか」

「その計算ですと、会敵は浦賀水道から六十海里を切った海域になります。近いですね」

「大島沖、といったところか。もう少し、離れたところで迎え撃ちたいな」

相模灘に浮かぶ島を、秋山が見遣った。確かに、そこでは近すぎる。現状、接近する敵艦隊を撃破しうる戦力は、T・T独立艦隊を置いて他にない。そのT・T独立艦隊が到着し、敵艦隊と会敵するまでは、どう頑張っても二十四時間がかかる。そのことを考えれば、横須賀残存艦隊が浦賀水道から六十海里という近場で会敵するのは、あまりにも危険だ。最低でも百海里以上の距離——時間にして二時間の足止めが欲しい。

では、誰が足止めするのか。

「本土防衛艦隊——第一護衛隊群が、最初の切り札だ」

◇

「ウイングよりブリッジ。各艦、転針完了。本艦に続行中」

両舷に張り出した見張り所から、見張り員が後続艦の様子を報告した。転針指示を終えた杉浦嘉平艦長が、その声に短く答える。同じく艦橋に立っていた伊藤は、夜の海を切り裂いていく艦首に目を遣ったまま、やり取りを聞いていた。

横須賀出港から間もなく十時間。陽はとつくに暮れており、日付をまたぐまでほど近い。月も出ていないから、頼りになるのは星明りと電子の目だけだ。

もつとも、それだけが敵艦隊（戦艦部隊を「セイバー」、後方の空母

部隊を「シールド」と呼称)の様子を知る手段ではない。高度にシステム化された現代軍艦は、外部のネットワークと接続している。この場合、日本が保有する観測衛星システムを応用して、宇宙からも敵艦隊の様子を見張っている。言うなれば、第一護衛隊群は、遙か高空に目を持ったようなものだ。

これだけの条件があれば、“はぐろ”以下第一護衛隊群の全艦は、搭載するSSM-2をもって敵艦隊を攻撃できる。それをやらないのは、単純に人類製兵器が深海棲艦に効かないことと、今回の作戦目的には合わないことが理由として挙げられた。

今回の作戦、それは、本土へと迫る深海棲艦の撃滅ではなく、足止めを目的とする。

深海棲艦を撃沈できるのは、BOBのみだ。しかし、横須賀に所属するBOBたちは、いまだ装備の換装中であり、戦闘を行うことはできない。

換装終了後に深海棲艦の迎撃作戦を発動した場合、迎撃位置は今よりもずっと本州寄り、大島沖五十海里ほどの位置になると予想された。

現状での最善手は、本土防衛艦隊の残存戦力で、足止めすることだ。

——簡単に言ってくれ。

緊張感に包まれる環境の中央で、伊藤はこの話を持ってきた海軍上層部への愚痴を、誰にともなく頭の中で呟く。いや、今回に限っては、こんな無理難題を振ってきた男の正体がわかっている。

相変わらず、食えない横須賀の隣人だ。

「群司令。先行した“いずも”の『ハチドリ』から、敵艦隊の最新情報が入りました」

CICから上げられた報告に頷く。

「ハチドリ」は、“いずも”に搭載されている、観測任務に特化したV-22“オスプレイ”のことだ。後方待機している“いすも”から発艦した一機が、数分前から深海棲艦艦隊の上空に張り付き、その状況を逐次報告している。

その「ハチドリ」から入った報告を、通信長がそのまま読み上げた。

『敵「セイバー」部隊は、貴艦隊よりの方位〇九五、距離五万の位置。戦艦六、巡洋艦二、駆逐艦八を伴う。うち、戦艦一は他よりも大型の新型艦と認む』、以上です」

報告を終え、通信長が一步下がる。艦橋の空気に、伊藤と杉浦だけが取り残されていた。

「新型艦ですか。例の、ハワイ沖に多数展開しているという、姫級でしようか」

杉浦が伊藤にだけ聞こえる声で尋ねる。

「だとすれば、今回の作戦目的はより明確になるな。その新型艦を押しとどめれば、我々の作戦目的は達成される。その分、第一護衛隊群の負担は増えるがな」

「なんの。きついものには慣れっこですよ」

伊藤の言葉に、杉浦が口の端を吊り上げる。頼もしい限りの言葉だが、現実はそのほど甘くない。伊藤も杉浦も、数年前には実際に深海棲艦と砲火を交えた身だ。その恐ろしさは身をもって知っている。現代兵器が、有効でないことも、含めてだ。

『ランサー』はどうなっている？」

「オペレーション『グランド・オーダー』発動に合わせ、すでに小松基地を出撃したとのこと。現着は三十分ほど後になるかと」

「ランサー」は、小松基地所属のF-35 “ライトニング”、F-2 “ヴァイパー”の混成部隊の呼び出し符丁だ。今回の足止め作戦——オペレーション「グランド・オーダー」の、要となる。

「我々の牽制砲撃は、二十分後から開始する予定です」

「二十分後……。日付が変わって、〇〇一〇、か」

蛍光塗料が塗られた腕時計の針をチラリと確認して、伊藤はすぐに顔を上げた。

「数年ぶりに、砲弾の嵐へ突っ込むことになりそうだ」

『CICより艦橋。レーダーに感。敵「セイバー」部隊と認む』

実質的に戦闘指揮を執る砲雷長から上がった報告に、杉浦がすぐに答えた。

「群司令、始めます」

「わかった。全艦、合戦準備」

伊藤の指示も短い。いらぬ言葉は、極力捨て去るべきだ。

「合戦準備。全火器、安全装置解除。主砲、目標の選定は砲雷長に一任」

瞬間、艦橋の空気が変わった。誰もが慌ただしく、しかしながら言葉少なに動いている。息を殺し、まるで艦と一体となったかのように、艦の一部でもあるかのように、ただ静かに身構える。

ステルス性を考慮したメインマストに据えられている射撃照準レーダーが、目標を指向する。灰色の前甲板では、CICからの操作で主砲塔が動き、六二口径という長砲身の五インチ砲を、射撃照準レーダーの指し示す目標へと向ける。ひとたび戦闘が始まれば、その速射性能にものを言わせ、砲弾の雨を降らせるのだ。

『CICより艦橋。「セイバー」の一部が艦隊を離脱。こちらへ接近してくる模様』

「艦橋よりCIC。離脱する敵艦の種類はわかるか」

『CICより艦橋。駆逐艦クラスが六、戦艦クラスが三。うち一隻は、旗艦と思しき大型艦』

「動いたか・・・！」

——好都合だ。

五インチ砲とはいえ、*“はぐる”*が搭載する現代砲は、第二次大戦級のそれとは桁外れの性能を有する。最大射程だけでも三万メートルを優に超えるそのロングレンジは、戦艦と張り合えるほどだ。

深海棲艦戦艦部隊の主力砲である一六インチ砲は、有効射程が三万メートル前後。すなわち、深海棲艦が第一護衛隊群と撃ち合おうとするなら、戦艦を持ち出さなければならない。

過去の戦闘から、そのことを学んでいるのだろう。第一護衛隊群の作戦を阻止するべく、「セイバー」部隊はその一部を差し向けてきたのだ。

そしてそこには、旗艦であり、殊更に大きな戦艦が含まれている。おそらく、そこに搭載されているのは、三万メートル以上の有効射程

を持つ、大口径砲だ。逆に、こちらをアウトレンジで攻撃するつもりなのだろう。

——当たるかどうかは、別の話だがな。

イージス艦の「イージス」は、ギリシャ神話に登場する最強の盾、「アイギス」を語源としている。本来の役割は、敵艦隊から飛来するミサイルを迎撃し、自艦隊を守ることにある。最近ではここに、弾道ミサイルを迎撃する能力が付与されている。

音速を超えるミサイルを迎撃するために、レーダーの性能はもちろん、目標を選定するコンピューターや対空ミサイルの誘導装置、全てを含めたシステムが非常に優秀な性能を誇る。その性能をもつてすれば、飛来する戦艦の砲弾を捕捉し、予想落着点から退避、あるいは砲弾そのものを迎撃することは十分に可能だ。

ここで、第一護衛隊群が粘れば、「ランサー」が攻撃する隙も生まれるだろう。ようは囷であった。

作戦内容を振り返るような伊藤の思考は、CICからの報告によって遮られた。

『CICより艦橋！敵戦艦発砲、飛翔中の砲弾を捕捉！弾着まで六十秒！』

暗闇の水平線、戦闘の開始を告げるオレンジ色の砲炎が、海面と空を明々と照らしだしていた。

激浪ノ御楯

三万メートルを超える長距離での砲撃ともなると、いくらマツハ二を超える砲弾と言えども、弾着まではそれ相応の時間がかかる。

ただし、砲雷長が伝えてきた六十秒という時間は、小回りが利くとはお世辞にも言えない船にとって、あまり長い時間ではないことも事実だ。

旗艦と思しき大型戦艦が第一射を放った様子は、第一護衛隊群の五隻全艦が把握している。砲口から飛び出した砲弾を一番先に捉えたのは、*「はぐる」*のレーダーとレーダーマンだ。

そこからさらに数秒。砲弾の予想軌道と落着点が算出される。そこから散布界も導かれた。

第一護衛隊群の五隻は、一斉に舵を切る。理想は散布界から完全に抜けきってしまうこと。そうすれば、砲弾に当たることはまずない。予想落着点から離れるだけでも、かなり違う。

第一護衛隊群に所属する現代軍艦たちは、厚い装甲を鎧っていない分、見た目の大きさの割に排水量が小さい。最大の*「はぐる」*でも、重巡に近い大きさながら、排水量は一万トンに満たない。

それでも、舵を切つてから実際に艦が針路を変えるまでには、十秒ほどのタイムロスが存在する。

転針を始めてから弾着までは、四十秒ほどしかない。

「一斉回頭、面舵一杯！針路二三〇！」

「面舵一杯、針路二三〇！」

「おもーかーじ、いっばーいー！」

伊藤の指示を杉浦が復唱し、それをさらに操舵手が復唱する。かつての船に比べて遥かに小さくなった銀色の舵輪を操舵手が一杯まで回し、舵を傾けた。

しばらく惰性で前進していた*「はぐる」*だが、舵が利き始めてからは速い。鋭い艦首が、夜を反射する波を切り裂きつつ、右へ右へと振れていく。

後続の四隻も同じくだ。ほとんど同じタイミングで右に舵を切り、

ウエーキのカーブを綺麗に描いていく。上空から見れば、五隻の朦朧が芸術品のような航跡を残す様がはつきりとわかったことだろう。

その頭上から、最初の巨弾が降り注いだ。

夜闇を押し分ける轟音を背負って、砲弾が迫る。レーダーが捉えたその数は四。これが観測を目的とした交互撃ち方なら、敵艦には四基の主砲が据えられていることになる。

——つまりは、最低でも八門の砲を積んでいることになる。

それも、日本海軍最強の、四六センチ砲より強力な砲を、だ。

『弾着まで五秒！』

CICのレーダーマンが叫ぶ。その場の全員が、生唾を飲み込み、グツと丹田に力を込めた。

次の瞬間、第一護衛隊群の左舷側に、天をも突かん神の鉄槌が下された。沸騰する海水、丈高く伸びる水柱。海をも割らんばかりの衝撃が、一万トン弱の護衛艦をまるで木の葉のように揺さぶる。

『で、敵弾、左舷正横後四ポイント三百メートルに弾着！』

ウイングに立つ見張り員が、声をわななかせながら報告する。

肝が冷えるとはまさにこのことだ。

深海棲艦と砲火を交わした経験はある。戦艦の砲撃を受けたことも、一度だけがある。

だが、これは。この圧力は。

——今までのそれとは、明らかに違う。

伊藤は奥歯を噛み締める。あの砲弾一発で、装甲のない護衛艦など、粉微塵に消し飛んでしまうのだろう。

『敵艦、再び発砲！』

レーダーマンの叫びが艦橋に響いた。彼我の距離は、いまだに三万メートル近い開きがある。五インチ砲の射程には入っているが、有効な射撃を行える位置にはついていない。せめて二万五千メートルまで近づき、五隻の護衛艦で集中砲火を浴びせたいところだ。

「群司令、牽制砲撃開始予定時刻まで五分を切りました」

「わかった。それまでに砲撃可能な位置へつけられるか？」

「善処します」

答えた杉浦は、算出された弾着位置をもとに、再び転舵を指示する。五隻の護衛艦は同じような弧を描き、艦首を振っていった。

今日二度目の砲撃が降り注ぎ、水柱が上がる。今度もまた、衝撃は艦の後方からやって来た。艦尾を突き上げるような爆圧がかかり、はぐるが前のめつたような錯覚すら受ける。

——遠いな・・・！

たった五千メートルだ。海里で言えば二海里半ほど。三十ノットを發揮可能な護衛艦なら、ものの五分で踏破できる距離でしかない。地球を半周することだつて珍しくない船にとっては、取るに足らない距離であるはずなのだ。

その五千メートルが、果てしなく遠いものに思える。それほどまでに敵戦艦からの圧力はすさまじく、水柱のカーテンは分厚い。

だが。その壁を突破しなければ、敵艦隊に日本本土への接近を許すことになる。

チャンスは限られている。そしてそれをものにできるか否かは、第一護衛隊群の奮闘にかかっているのだ。

三度目の回避運動に入った時点で、彼我の距離は二万九千メートル。敵戦艦は常に全砲を使用できるよう、艦の横腹をこちらに向けている。ゆえに、なかなか距離が縮まらない。

だがさらに言えば、敵戦艦の砲撃にも、当たる気配はない。いかな巨砲と言えど、三万メートル近く先の敵艦に照準をつけることができないければ、ただの筒と変わらない。砲弾は届いていても、弾着位置さえ見極めれば十分回避できる範囲だ。

再び四発の巨弾が飛来する。左舷側にまとまって弾着した砲弾が海を割り、盛大に飛沫を飛ばして白濁の巨柱を突き上げる。はぐるがのメインマストよりも高い水柱に、身もすくむ思いだ。あそこには、想像を絶するほどの運動エネルギーと、化学エネルギーが溜め込まれている。

——一発でお釈迦か。桑原桑原。

あんなものとは、まともにやり合いたくない。

『敵艦、再び発砲！四度目です！』

すぐさま、四度目の砲撃が始まった。今度の砲炎は、転舵した位置の關係から、ほとんど正面に見えていた。朝焼けと見紛うほどに染まる水平線。だが、その下からやって来るのは、希望へと繋がる朝陽ではなく、死と破壊をもたらす鋼の塊だ。

「距離二八〇！」

『「ランサー」、作戦高度で接近中。現着まで三分』

二つの声が重なる。伊藤は頭の中で二つの情報を新しく書き換え、この先の作戦展開を思い描く。

——多少の無理が必要か。

いまだ弾着位置は遠い。暗闇に浮かび上がった水柱をチラリと見遣って、伊藤は確信した。

「自由回避やめ。陣形再編後、二五〇まで突っ切る」

「直進ですか!？」

伊藤の指示を聞いた杉浦が、素っ頓狂な声を上げて聞き返す。敵弾降り注ぐ海域を、真っ直ぐに突っ切ろうなどと自殺行為だ。そんな意見が、言外に読み取れる。

「敵艦の誤差修正はまだ終わっていない。チャンスは今を置いて他ないのだ」

「り、了解しました。取舵一〇、針路〇九〇、敵戦艦へ肉薄します」

杉浦の指示で針路が修正され、第一護衛隊群の五隻は再びきれいな単縦陣を形作る。波を砕く艦首の先には、再度咆哮を上げる敵戦艦の姿があった。光源の中に巨大なその影を映し、こちらを威圧する。

額を一滴の汗が伝った。今が夜でよかった。焦燥と不安で流した汗など、部下には見せられない。

この判断が正しくなかった可能性も十分にある。回避運動が功を奏して被弾を免れていただけであり、直進を続ければ、たちまち命中弾が出てしまうかもしれない。たった一発のまぐれ当たりでも、こちらには致命傷になり得るのだ。

直進を続ける「はぐろ」の艦底付近で、ガスタービンエンジンが唸る。小型高出力のタービン機関は、燃燒室で生成された燃燒ガスを作動流体として、タービンを超高速で回転させる。産み出された回転は

減速機を経た後、主軸へと伝えられ、船尾管を越えて艦外の可変ピッチプロペラを回した。その翼角は、最大戦速の位置で固定されている。

航跡を引きずって驀進する五隻の現代軍艦。その頭上から、いかにも旧時代的な徹甲弾が降り注ぐ。敵戦艦から放たれた四発の砲弾だ。

甲高い飛翔音。ガスタービンの高鳴りすら圧迫せんとする死の旋律。その音が途切れた時、一瞬の静寂が訪れる。嵐を告げるような、不気味な静寂だ。

来る。〃はぐる〃の誰もが身構えた次の瞬間、今日五度目の衝撃が、〃はぐる〃の右舷海面から襲ってきた。巨大な海水の塊。天を突くほどの勢いで立ち上る水柱を、何か途方もないものを見るように見上げる。近い。そんな気がするのは、こちらの心持ちゆえだろうか。

「距離二七〇一」

その声とほぼ同時に、敵戦艦が六度目の砲炎を瞬かせる。もはや脳裏に焼き付いた光景だ。オレンジ色の炎が、カメラのフラッシュのごとく、敵戦艦の姿を浮かび上がらせる。不気味な黒い影が海面に反射する様に、誰かが唾を飲み込んだ。

CICからは何も言っていない。であれば、この砲撃は直撃コースに入っていないということだろう。

——そんな、論理的な理由付けで安心できるなら、世話はないか。

結局、どこまでいっても、人間は動物だ。

砲撃目標距離まで千メートルを切るのと、第六射の弾着はほとんど同時だった。直進に戻したからか、その砲撃はそれまでよりも精度が上がっている。とはいえそれは、ほんの少しと呼べる部類だ。後二、三射で直撃弾が出るとは思えない。

「砲撃準備。〃はぐる〃、〃こんごう〃、〃あきづき〃 目標敵戦艦。〃

あさひ〃、〃あけぼの〃 目標敵駆逐艦」

この一射を凌げば、いよいよ砲撃開始となる。各艦への目標の指示は済ませた。あとは伊藤の指示で、一二七ミリ砲が一斉に火を噴く。目標は高角砲や機銃の類、目的は対空兵器滅殺による『ランサー』の支援だ。ミサイルを使わないのは、本土防衛艦隊が保有する対艦ミサ

イルの数が少ないこと、連続して対空火器を潰し続けなければならぬ
いことを考慮してのことだ。

その『ランサー』隊は、もうすぐそこまで来ている。作戦開始の時
刻は近い。

——やるぞ……！

「距離二五〇！砲撃開始予定距離です！」

「全艦逐次回頭、」

伊藤が発しようとした指示を、大質量落下に伴う大波が薙ぎ払つ
た。『はぐる』がまるで木の葉のように揺れる。

「右舷に至近弾！」

——ここにきて……！

敵戦艦が搭載する火砲の決戦距離に近づいてきたからだだろう。今
までで一番精度の高い砲撃が降ってきた。この位置から確認するこ
とはできないが、バラバラと水滴が激しく甲板を打つ音が聞こえる。

——一刻も早く、叩く。

「全艦逐次回頭、針路一二〇。左砲戦用意」

「面舵一杯、針路一二〇。左砲戦用意」

杉浦が冷静に復唱する。しばらくして、『はぐる』は右へと一気に
艦首を振った。正面に見えていた敵戦艦の姿が、左舷ウィングの方へ
と流れていく。

それと同時に、前甲板で動きがあった。軽快な駆動音を響かせて、
『はぐる』に唯一門備えられた一二七ミリの主砲が旋回する。日本
海軍が現在の主力とするBOB戦艦群が搭載する主砲塔に比べて、そ
の姿はどこか滑稽なほどにひ弱な印象を抱かせる。ステルス性の向
上を図ったためにこのようなデザインとなっているが、その性能はす
さまじい。威力こそ、口径相応のものしか備えていないが、戦艦と張
り合える射程と、圧倒的な速射能力、そして何より良好な精度を誇る
現代砲だ。

今回の任務には、最も向いている。

一方的に撃たれる時間は終わった。ここからは、こちらの番だ。

「『あけぼの』、回頭しました。全艦、本艦に続行中」

『データリンク完了。全艦砲戦準備完了』

ウイングとCIC、二つの報告を受け、確認を求めるように杉浦が伊藤を見た。

「作戦第一段階を開始する。第一護衛隊群、砲戦開始」

陽動、支援。これを目的とした、オペレーション『グラント・オーダー』の第一段階。その開始を宣言する。

杉浦は静かに頷くと、灰色の救命胴衣の下から、声を張り上げた。

「砲戦開始！うちーかたーはじめ！」

『うちーかたーはじめっ！』

次の瞬間、前甲板で閃光が走った。光が収まるや否や、次なる砲炎が吐き出される。葉莖が砲身下部から放出され、甲板上に転がった。

第一護衛隊群による、支援砲撃が始まったのだ。

刺シ穿ツ死棘ノ槍

長砲身に由来する高初速の砲弾が、それでも数十秒をかけて敵戦艦に到達する間に、“はぐる”はすでに十数回の砲撃を繰り返していた。

射撃指揮装置と連動したその砲撃に、一瞬の迷いもない。引き金を引く砲雷長も、この日のために研鑽を積んできている。万に一つも、外すことはない。

響く砲声。走る閃光。その頭上を、一際甲高い音が走り抜けていく。どこか“はぐる”のガスタービンに似た音。“ランサー”の戦闘機が上げるジェットエンジンの音だ。新鋭戦闘機のF-35、そして支援戦闘機F-2。編隊を組んだそれぞれの機体が、今まさに第一護衛隊群が撃ち合っている、敵旗艦と思しき巨大戦艦へ向かっている。

深海棲艦に通常兵器は通用しない。正確には、通常兵器ではブルーアイアの自己再生能力を奪うことができず、被弾による被害や破孔は、しばらくすれば復旧されてしまう。

ではいかにして、敵旗艦を足止めしようというのか。

二〇一七年、旧航空自衛隊は対地攻撃能力の保有を決定した。その一環として、航空機搭載の地中貫通爆弾を導入している。今回F-2には、それを空軍が改良した対BOB攻撃用爆弾、イ号弾が搭載されていた。

狙いは何か。ブルーアイアんで構成される深海棲艦、その艦体で唯一、修復に多大な時間を要する箇所がある。精密な部品が多く、さらに高い圧力の蒸気を必要とする、深海棲艦の主機、及びボイラーだ。ここだけは、他の箇所よりも修復に時間を要することがわかっている。破壊の程度にもよるが、一、二時間の間、動きを封じることができきる。

すなわち、イ号弾の狙いは、機関へと直接繋がる煙突である。

本作戦の問題点として、イ号弾が赤外線誘導であることが挙げられた。対空砲火減殺のために第一護衛隊群が砲撃を行っている以上、そ

のせいで生じた火災に爆弾が誘導される心配があった。

その対策として、F-35が事前に爆撃を行う。搭載した誘導弾を煙突へ叩き込み、特定の温度を発する。その赤外線を強く検知するよう、イ号弾の誘導装置を設定しておけば、間違いなく煙突へと吸い込まれる。

煙路防御が施されている可能性はあるが、それもイ号弾であれば貫通可能だ。

深海棲艦は不死身に見えるし、実際通常兵器では倒せない。それでも心臓が弱点であることに変わりはなく、そこを穿てば一時的に敵艦を弱らせることが可能だ。

人類が苦心の末に編み出した、ささやかな反抗の手段であった。

とはいえ、実戦での成功例はただ一度。それも相手は戦艦ではなく、巡洋艦だった。二年も前の話である。

今回はその時以上の苦難が予想された。

第一護衛隊群の牽制砲撃によって対空砲火が減殺されれば、火箭によるパイロットへの圧力が減る。それだけ攻撃時の負担を減らせるはずだ。

そのために、第一護衛隊群は戦っている。

『アーチャー(第一護衛隊群のコードネーム)』、こちら「ランサー1」支援感謝する』

「ランサー」の第一次攻撃隊を率いるF-2から通信が入る。答える伊藤の言葉は一つ。

『ランサー1』、こちら『アーチャー』。貴隊の幸運を祈る』

砲撃だけは続けている。無論、敵戦艦からの砲撃も続いている。たった今など、艦橋からもしっかりと見えるほどすぐ近くに水柱が立ち上っていた。いつ命中弾が生じてもおかしくはない。

CICでは、今もレーダーマンが神経を尖らせている。命中コースの敵弾は、見つけ次第迎撃するようにと指示してある。

『ランサー1』が突入します』

CICのレーダーマンが報告する。『ランサー1』の機体は、敵旗艦の上空を一航過したのち、旋回して艦尾方向から突入を計っている。

——砲撃の成果は、どうだ？

第一護衛隊群の牽制砲撃が、そのまま対空砲火の滅殺に繋がる。だが、ここからでは、どの程度破壊できたのかは確認できない。

仮に破壊できていたとしても、それはこちらを向いている敵艦の左舷側だけに限った話だ。右舷側は無傷で残る。現用兵器に劣るとはいえ、まぐれの一発が『ランサー』を捉えないとは限らない。

そんな伊藤の心配をよそに、『ランサー』の先頭に位置していたF—35が攻撃を始める。四機のうち二機が敵旗艦の上空に到達すると、わずかに機体を傾け、緩降下に入った。ここからでは確認できないが、ステルス性など無視してこれでもかと積み込まれた誘導弾が、敵旗艦の煙突を狙っているはずだ。

そのF—35を目掛け、対空砲火の火箭が伸びる。敵旗艦と単縦陣をなす二隻の戦艦、それを囲む六隻の駆逐艦。それぞれが高角砲を振り立て、機銃を差し向け、「稲光」の異名を持つ最新鋭ステルス戦闘機の行く手を阻まんと試みる。

だが、その火箭もまばらだ。第一護衛隊群の護衛艦たちが約三秒に一発放つ一二ミリ砲の猛射は、高角砲を穿ち、機銃を薙ぎ払い、レーダーを叩き折る。その効果は、今ここに示された。

後は——

何度目になるかわからない衝撃で艦橋が揺さぶられる中、伊藤はそれを確かに見る。

緩降下を続けていたF—35の腹から、何かが切り離される。次の瞬間、推進器を点火したミサイルが数発、真っ直ぐに飛び出した。それを確かめたのか、F—35が引き起こしをかけ、敵旗艦の艦上をフライパスする。ジェットエンジンを吹かしたその離脱はほんの一瞬だ。

緩降下によってギリギリまで引き付けたことで、誘導弾の熱誘導装置も、煙突の排熱以外には目もくれなくなっている。端から見ても美しいほどに真っ直ぐ進んだ推進器の光は、そのまま迷うことなく、敵旗艦の煙突へと吸い込まれる。

あれだけの巨艦だ。当然機関の出力は大きいだろうし、その分排熱

も多く、煙突は太い。そのど真ん中に、F―35二機分の誘導弾が叩きこまれる。

大きな火焰は見えない。煙突の中で爆発したからか、弾着と思しき炎が上がることはなく、妙な静寂が流れる。

——状況はどうなっている……？

伊藤がさらに目を凝らそうとしたその時だ。

前甲板で、それまでとは比べ物にならない炎が上がった。それをかき消すような大量の煙。文字通り、前甲板が白煙の絨毯で覆われたのだ。

艦橋の誰もが息を飲む。

「はぐろ」の前甲板に六十四セルが埋め込まれた垂直発射装置——VLSから飛び出したのは、艦対空ミサイルであるSM―2。夜間であり、航空機が飛び交っていない今、このミサイルが使用される目的は明白だ。

『敵弾二発、本艦への命中コース！対空戦闘開始しました！』

事後報告がCICの砲雷長より挙げられる。命中コースにある敵弾を捉えた時点で、砲雷長は対空戦闘を始めたのだ。

空中に飛び出したSM―2は姿勢制御の後、マツハ二でこちらへと迫ってくる敵弾へと向かう。

イージスシステムやSM―2は、本来音速を遥かに超えるミサイルや弾道弾を十二発同時に迎撃できるだけの能力を備えている。マツハ二の戦艦主砲弾二発は十分に迎撃可能だ。

ただしそれは、あくまでカタログスペックの話。どこまでいっても、結局機械を扱うのは人間であり、イージスシステムもまた同じであった。

『敵弾との交錯まで十秒！』

残ったF―35二機が緩降下に入る中、砲雷長が叫ぶ。迎撃に成功すれば、空中で二度の爆発が起こるはずだ。

——頼んだぞ……！

前甲板でさらなる砲声が響く中、艦橋の誰もが固唾を呑んで祈る。砲雷長が一発でも外せば、その時点でこの艦はお終いだ。

『五・・・四・・・三・・・二・・・一・・・今!』

瞬間、夜闇を切り裂く太陽に似た光が、高空の二か所で生じた。艦橋をオレンジ色の光線が貫き、誰もが目をすがめる。

『敵弾迎撃成功!』

歡喜よりも安堵に近い声色で、砲雷長が報告を寄越す。命中コースに入っていた二発の敵弾。〃はぐろ〃は見事、それを迎撃して見せたのだ。

「よくやった!」

杉浦が砲雷長に声をかける。これからも気張ってくれ、そんな声が混じっているようにも思えた。

——とはいえども。

事態は樂觀できない。命中弾こそなかったが、残った二発は相変わらず至近弾となっている。

しかも。

艦橋から見えるのは、艦首右舷、五十メートルもない位置に生じている水柱。さらに、見張り員から、左舷百メートルの位置に弾着した旨、報されている。夾又だ。〃はぐろ〃は敵戦艦の射界に入ったことになる。

次から降ってくるのは、強力な戦艦の斉射だ。

暗闇に目を凝らす。敵艦の姿はほとんど見えない。墨染の海に浮かび上がるのは、五インチ砲弾多数によって抉られ、小火災を起こしている、その光だけ。イカ釣り漁船か何かのように、ぼうつと漆黒の中に浮かび上がっていた。

不気味な沈黙を保つ敵戦艦。その静寂の意味するところは、伊藤もしかとわかっていた。

『F—2、突入します!』

始まった。第二波攻撃だ。高高度を保ったまま、洋上迷彩を施された翼が、夜闇を割く。パイロンには、各機二発ずつ、イ号弾が搭載されていた。弾頭は固く、あらゆる装甲を穿つことを目的としている。元々は、分厚いコンクリートの壁を貫通することを想定しているのだ。艦船の装甲を貫けないはずがない。ただ、それが戦艦の煙路防御

にまで有効なのかは未知数だ。

先のF―35による攻撃に対し、敵戦艦は堪えた様子を見せていない。ということは、放たれた誘導弾は、全て煙路に施された装甲によって弾かれたのだ。

機関室を破壊するには、この煙路防御を突破する他ない。

F―2 一番機のパイロンから、イ号弾が切り離された。

慣性の法則と万有引力の法則に従って弧を描いたイ号弾は、弾頭を下に向け、真つ逆さまに落下していく。先端に取り付けられたセンサーが赤外線を感知し、目標とする熱源へ到達するよう、方向舵を動かす。

弾着の炎は、“はぐる”からも確認することができた。赤外線が別の目標を捉えてしまったのだろう。一発は舷側付近で盛大な炎を上げた。復旧途中にあったブルーアイアンが再び炎で炙られ、薙ぎ払われる。

だがもう一発は、狙い通り煙路へと突入し、煙路の装甲とキスをしたらしかつた。

一番機に続いて、二番機以降のF―2も投弾する。四機合計で八発。うち、煙路に突入したのは五発。

——どうだ・・・？

巨艦に目を凝らす。激しく燃え上がる黒鉄の城。煙突に五発も叩き込んだのだ。普通の軍艦なら、無事では済むまい。

しかし。

『敵戦艦行き足変わりません！』

レーダーマンの驚愕が、艦橋までありありと伝わってくる。

「馬鹿な、五発だぞ！地中貫通型を改良した爆弾を、五発もまともに受けて、まだ航行してるのか!？」

——当たり前どころがよくなかったか・・・？

奥歯を噛み締める杉浦が、伊藤の内心すらも代弁してくれる。恐ろしいほどに堅牢な軍艦だ。一撃必殺、それぐらいの精度で撃ち込まなければ、機関部を破壊することもままならない。

「砲撃止め」

第一波攻撃が終わったことで、伊藤は支援砲撃を一度やめさせた。現代砲は、装填時間が短い分、弾薬の消費も激しい。頼みの綱となる第二次攻撃まで、温存する必要があった。

もつともそれは、第二次攻撃隊到着まで、第一護衛隊群が生きていられればの話だが。

それまでに倍する圧倒的な光が、水平線を真っ白に染め上げた。ついに準備を終えた敵戦艦が、全主砲を用いた斉射に踏み切ったのだ。見たこともない大きさの火の玉が、海上を照らし出し、砲煙が巨大なその姿を覆い隠す。戦闘が新たな局面へと突入したことを告げるゴングだった。

さらに。

『敵戦艦二、三番艦も発砲！』

——— ついに来たか……！！

頃合い良しと見たのか、残った二隻の敵戦艦も、第一護衛隊群に牙をむいた。天を覆う弾雨は、より一層その濃度を高めようとしている。

「各艦自由回避、全火器使用を許可！」

一発の被弾も許すな。最悪の状況を回避するよう指示を飛ばし、伊藤はC I Cに確認する。

『ランサー2』の到着までどれくらいだ？

その問いに対して、レーダーマンは実に短い言葉で、絶望を告げた。
『あと十分です』

弾雨ノ先二

左へと大きく舵を切る。はぐるゝの前甲板から、再び大量の白煙が溢れ出た。がっしりとした箱型の艦上構造物、その頂部にある艦橋からの視界が一瞬白に染まる。数秒もすれば、炎を吹き出しながら、細長い円筒形の物体がせり出してきて、遙かな高空へと飛び立っていった。

S M—2が再び放たれたのだ。はぐるゝを狙う敵戦艦からの第一斉射。そのうち、明らかな命中コースにある敵弾を迎撃するのだ。レーダーが捉えた八発の敵弾のうち、砲雷長は二発を命中コースと判断して、迎撃を指示していた。

第二波攻撃となる「ランサー2」の到着まで五分。敵戦艦の砲撃はおよそ三十秒おきに降り注いでいる。すなわちあと十回、この砲撃を凌ぎ切らなければならなかった。

——そこまで持つには、余程の強運が必要だな。

そんなことを考え、今までの己を顧みる。産まれてからこの方、人並みに恵まれているとは思ってきたが、果たしてそれが運がいいと言えるほどだったかどうか。

くじ引きの類に当たったためにはない。かといって、外れを引いた覚えもない。今年の正月に引いたおみくじは中吉だったか。

現実を逃避する思考に頭を振る。強運は確かに必要だが、その強運で結果を引き寄せるには、やはり現実と戦わなければ。

『目標に命中。敵弾の迎撃に成功』

砲雷長の声も落ち着いている。これで二度目の、S M—2による迎撃だ。ここまで砲雷科は、訓練通りの練度を遺憾なく発揮している。

あと五分、耐え忍んでみせる。そんな決意がひしひしと感じられた。

「他艦の様子はどうか？」

一難が去ったことで胸を撫で下ろし、杉浦が確認を取る。すぐにレーダーマンから返事があった。

『敵弾は“こんごう”、“あさひ”に集中。両艦ともに回避運動、S M

—2による迎撃にて対処。被害報告はありません。『あきづき』、『あけぼの』も回避運動継続中です』

——よし。

胸中で頷く。理不尽な暴力を極限まで詰め込んだ鈍色の暴風雨に、第一護衛隊群は耐えている。積み上げてきた技術の粋を集め、抗いつけている。

時計の針を見る。蛍光塗料が塗られた針が指し示すのは〇〇二三。予定される「ランサー2」の到達まではあと四分に迫ろうとしている。このまま乗り切れる。額に冷や汗を流しながら、誰もがそう思った。

その思いを剛力のままに押し潰さんと、最早何度目になるかわからない閃光が迸った。敵戦艦三隻による砲炎が闇夜をオレンジ色に染め上げ、赤々と海面を照らし出す。

——頼むぞ、砲雷長……！

伊藤は拳を握る。この緊張感は何度経験しても慣れない。

『敵弾捉えた！弾着まで三十秒！』

その報告と同時に、前甲板から白煙が噴き出した。砲雷長は再び、SM—2による迎撃を命じたのだ。

『命中コース一発！対空戦闘開始しました！』

後追いで報告が入る。前部VLSからSM—2の弾頭が飛び出し、白煙を引きずって高空へと伸びていく。十数秒後、空中でめくるめく閃光が走り、迎撃の成功を報せる。

『迎撃に成功！』

その声に大きく頷いて、伊藤は次の指示を飛ばす。

『二分後、針路〇三〇にて陣形を再編成する。各艦回避運動を継続しつつ、逐次集まれ』

間もなく「ランサー2」が到着する。その前に陣形を戻し、再度の牽制砲撃に備えなければならない。

敵戦艦との距離は二万三千。回避運動を続けている間に、ジワリジワリと差を縮められている。おそらく砲撃開始時には、二万前後の距離になるだろう。つまり第一護衛隊群は、敵戦艦三隻の砲撃に晒され

ながら、牽制砲撃を実施しなければならない。

先の砲撃より、厳しい戦いになる。たつた今日の前で嘖き上がっている海水の巨木を見つめ、伊藤は深く息を吸いこんだ。これからあの密林の中を突き進み、一撃必中の矢を放たなければならぬ。

敵巨大戦艦が、新たな砲炎をきらめかせる。今度は命中しそうな砲弾はない。左へと舵を切りつつある艦の右舷側に、バベルの塔もかくやという白濁の影が八本、並び立つのみだ。ただし、震度七などに超えている激震が、おまけでついてくるのだが。

さらに二分、三度の砲撃に晒されながらも、それらを寸でのところでかわし続け、第一護衛隊群は再度陣形を形成する。針路を〇三〇に合わせ、単縦陣を組み、「ランサー2」突入へ向けた牽制砲撃の準備に入った。

それを阻止せんと、今日何度目になるかわからない巨弾の群れが襲いかかって来た。『はぐる』と『ごんごう』からSM-2が各二発ずつ飛び出し、命中コースにあった敵弾を迎撃する。空中に爆発光が四つ。さらに至近弾が甲板を濡らし、艦体を激しく揺すぶった。

レーダーはすでに「ランサー2」を捉えている。もう間もなく、F-35による準備攻撃が始まるはずだ。

「右、砲撃戦用意。目標変わらず、敵旗艦両用砲群」

伊藤の命令が各艦のCICで復唱され、各艦の前甲板で主砲塔が旋回する。

先の戦闘で、相当数の一二七ミリ砲を放った。残弾数を考えれば、第一護衛隊群による牽制砲撃はこれが最後だ。同じく、現時点で作戦行動可能なF-2と、そこに搭載可能なイ号弾もこれで打ち止めである。これがうまくいかなければ、最早足止めする手段はない。艦娘による反撃作戦も、間に合わない可能性すらある。

「撃ち方始め」

伊藤の敵かな声により、第一護衛隊群の砲撃が開始された。各艦の甲板上で主砲口が光り、超音速の火矢を放つ。それらは狙い違わず、敵旗艦甲板上の両用砲、あるいは機銃へと吸い込まれる。

連続した閃光。ブルー・アイアン製とはいえ、その装甲板は通常兵

器でも貫通できる。飛び込んだ一二七ミリ砲弾が内側から両用砲を吹き飛ばし、構造を引き裂き、スクラップへと変える。ブルー・アイアンの特性として、すぐさま元の形状を復元しようとし始めるが、それをも許さないほどの激烈な砲撃が第一護衛隊群より繰り出される。苛立つように、三隻の戦艦がさらなる砲撃を放った。第一護衛隊群の現代艦艇たちとは対照的な、巨大極まる砲口から砲弾が放たれ、遙かな高空を飛翔し始める。

空中へ飛び出した時点で、砲弾は“はぐる”のレーダーが捉えた。すぐに予想コースが算出され、命中する可能性のあるものへ向けてS M-2が発射される。全力砲撃中の今、敵弾への備えは回避運動よりも迎撃に重点を置かざるを得なかった。

——もうしばらくはもってくれ……！

自衛隊時代から、イージスシステムを核とした対空戦闘の研鑽に勤めてきた。弾道弾の迎撃成功率は、常に九割以上を保っている。だがどれだけ研鑽を積んでも、物事に百パーセントはない。

砲雷長の腕がどれほど確かなものであると、最後には女神の悪戯的要素も加わってきてしまう。

そして今回の砲撃が、正にそれであった。

『CICより艦橋！敵弾一発迎撃失敗、“こんごう”へ向かう！弾着まで十秒！』

「っ！」

恐れていたことが起きてしまった。最善は尽くしたが、それでも一発が外れてしまったのだ。

「ワツチ、“こんごう”の様子を報告！」

焦りを滲ませ、杉浦がウイングへ叫ぶ。そしてあつという間に、十秒は経った。

巨弾が“こんごう”の装甲を貫き、炸裂する。装甲による防御を持たず、艦齢も三十に達する“こんごう”は、その衝撃に耐え切れず、真つ二つになって沈んでいく。そんな光景がありありと想像できた。

だが、身構えていても、“こんごう”が轟沈する爆轟音は聞こえてこなかった。

「敵弾、〃こんごう〃に命中！されど炸裂せず、〃こんごう〃はまだ健在！」

見張り員がそう報告する。

敵弾は、確かに〃こんごう〃に吸い込まれた。だが、その炸薬が爆発することはなかった。〃こんごう〃の装甲が薄すぎて、信管が作動しなかったのだろうか。

〃こんごう〃の乗組員にとっては、生きた心地がしない話だろう。

当然ながら、無傷とはいかない。

『〃こんごう〃より、〃はぐろ〃。誘導装置を破損、SM-2による迎撃は困難です』

——— やられた・・・！

第一護衛隊群に在籍する二隻のイージス艦のうち、一隻がその高度な迎撃能力を喪失したのだ。第一護衛隊群の中では〃あきづき〃も高い対空迎撃能力を持つが、それもイージス艦ほどではない。これより先、敵戦艦の砲弾を完全に防ぎきるのは難しくなるだろう。

だが、もう少しで決着がつくのも事実だ。すでに事前攻撃のF-35が緩降下に入っている。この事前攻撃が終われば、いよいよF-2による煙路への貫通爆弾攻撃が始まる。

後二射、凌げば何とかなる、というところだろうか。

F-35の腹から、ミサイルが離れた。全機が敵旗艦の煙突を目掛け、ミサイルを撃ちつける。排気の熱に引き寄せられたミサイルが、煙路内へ飛び込む。事前攻撃は十分だ。

少しでも邪魔者を排除したいのか、あるいは苛立ちからなのか、敵艦たちはさらに砲撃を放つ。夜闇を切り裂く閃光。爆炎が深海棲艦の怒りを表しているかのようだ。

カタログスペック上、〃はぐろ〃は同時に十二目標を追尾可能だ。理論的には、単艦でも第一護衛隊群全体をカバーすることはできる。

CICのレーダーマンが気を張る。敵戦艦三隻合わせて砲弾の数は二十発。そこから命中コースにあるものを計算し、すぐさまSM-2を放つ。

主砲の発砲炎を遮るように、VLSから白煙が上がる。そこからS

M―2が飛び出した。飛翔を始めたSM―2は、CICが定めた目標に向け、誘導の通り向かっていく。今回は五発のSM―2が発射されていた。

十秒とせず、空中で爆発が巻き起こる。生じた火球は五つ。『はぐろ』は全弾の迎撃に成功していた。

『F―2四機、目標上空へ侵入します』

CICから報告が入る。上空を見れば、両翼灯を点滅させるF―2の姿が見えた。腹に抱えたイ号弾は二発ずつ、敵旗艦の煙突を狙っている。

四機は編隊を保ったまま、敵旗艦上空を艦尾から艦首にかけてフライパスした。肉眼で確認はできないが、すでにイ号弾は放たれたはずだ。今頃は熱源誘導が始まり、その突入コースを微妙に調節していることだろう。弾着までそれほど時間はない。

第一護衛隊群にできるのはここまでだ。あとはイ号弾の弾頭が、うまく敵旗艦の煙路防御を突破してくれることを、祈る他ない。

現在使用可能な火器の大部分を使っても、現代艦船では深海棲艦の足止めすら叶わない。悔しいがそれは、今まで嫌というほど味わってきた事実だ。だがそれでも、取り得る作戦は取ったし、最善を尽くした。

敵旗艦の煙突から炎が噴き出した。先と同じだ。イ号弾は確かに敵旗艦を捉え、その煙路内で炸裂した。後はそれが、機関部まで到達していたか否かの問題だ。

——どうだ……！

暗闇の向こうへ目を凝らす。単縦陣を形成する敵艦隊の、その先頭へ意識を集中する。

『……敵旗艦、速力低下！敵艦隊、隊列乱れます！』

報告はCICから飛んできた。敵旗艦の速力が衰え、単縦陣を維持できなくなっているとのことだ。落伍する旗艦を避けるべく、後続の二戦艦も回避運動を取り、陣形が乱れる。

「やった、か」

安堵の息が各所で漏れた。イ号弾は見事敵旗艦の煙路防御を貫き、

機関室を破壊したのだ。これで一時間は稼げる。

当初の予想通り、敵艦隊の進行は止まっている。やはりあの旗艦が動けるようになるまでは、足止めが利くようだ。

海空軍共同の足止め作戦は、見事成功したのだ。

当てつけのように、三戦艦が砲撃を放つ。正真正銘、これが最後の砲撃だ。これさえ凌げば、任務は完了する。

VLSからは、最多の六発が放たれた。高空へ昇ったSM-2は、定められた目標へ飛翔していく。

命中、そして空中での爆発。誰もが戦闘の終結を予感していた。だが。

『敵弾一発、迎撃失敗！本艦へ向かってくる！』

“はぐる”の艦内は一気に緊張感に包まれた。

距離二万を切った砲撃だ。SM-2で迎撃できなかつた時点で、できることはほとんど残っていない。

CISWSが迎撃を始めるが、効果があるとは思えない。鋼鉄を食い破るために造られている戦艦主砲弾を、たかが二〇ミリの銃弾で破壊できる道理がなかった。

初めて経験する感覚。頭上へ迫る威圧感。

伊藤が認識したのはごくわずかな事象だ。金属の狂騒を引き連れ、何かが天井を食い破る音。何かが床を貫く音。

次の瞬間、“はぐる”は浮かべる地獄へと変貌した。

襲撃者

伊豆大島沖——

『敵艦隊の足止め成功。第一護衛隊群の損失は一隻』、か」
横須賀からの報告を反芻し、相模は表情を引き締めなおした。

本土防衛艦隊も空軍も、決死の覚悟で敵艦隊を足止めたのだ。現代兵器は深海棲艦に通用しないとわかっていても。

その一時間を、無駄にするわけにはいかない。

「提督、秋津洲さんには・・・？」

後ろから呼びかける声に、相模は振り返る。艤装を背負い、戦闘の準備を進めているのは瑞穂だ。

元々、水上機母艦である「瑞穂」は前線向きの艦ではなく、どちらかと言えば後方支援を担当する。だが今作戦においては、同じく後方支援の「秋津洲」とともに、比較的前線へと展開していた。

なぜか。その役割は何か。

「展開は完了したか？」

「はい。いつでも攻撃可能です」

「わかった。・・・秋津洲を動かそう。もう一度、敵艦隊を引っ掻き回す。それで、時間稼ぎは十分なはずだ」

わかりました。瑞穂はそう領いて、「秋津洲」宛てに暗号電を飛ばした。

「瑞穂」も「秋津洲」も、その任務は本隊到着までの時間稼ぎだ。今頃沖ノ鳥島から驀進しているであろう、本土防衛の切り札が戦場へ切り込むための布石だ。

本土防衛には漸減邀撃が最適。日本海軍のお家芸だ。

——好きにはさせん。

本土近海へその気配を迫らせつつある敵艦隊を睨み、相模は次の策を準備し始めた。

*

硫黄島沖——

「うつつ、ほんとにやるの、かも」

作戦にゴーサインが出てから、秋津洲は何度目になるかわからない溜め息を吐いた。

元々、後方支援が任務の艦だ。それは自分自身でよくわかっているし、ルソンという職場に満足もしていた。だがまさか、こんな形で、戦闘に加わることになるとは。それも、本土防衛という、とても大事な局面で。

「胃が痛いかも・・・」

お腹の辺りを抑えつつも、秋津洲は頬を張った。大変なのは自分ではない。大艇ちゃんたちだ。

「秋津洲」と共に顕現した、三機の二式大艇。本来、「秋津洲」は彼らの母艦ではなく、所属は別のところになる。「秋津洲」とは、二式大艇の活動を補助する、補給と整備のための、動く拠点のような存在だ。それでも、両者は縁あって共に顕現した。今は、三機の二式大艇を、「秋津洲」が保有していることになっている。

「秋津洲」の飛行隊。たった三機だが、他のどこにもない、唯一無二の飛行隊。

偵察と哨戒を主任務としてきた彼らだが、一応こういうことも想定して訓練を積んできた。それを指示したのは、他でもない秋津洲本人だ。

今、その成果を試せと言われている。

——送り出すのが、母艦である私の義務、かも！

硬く決意をし、秋津洲は通信機を立ち上げる。ここから少し離れた空域で旋回待機している二式大艇へ、電文が飛んだ。

「作戦発動。大艇ちゃん、やっちゃって、かも！」

*

闇に紛れる忍者たちがいた。

総数はさほど多くない。二つの集団に分かれた忍者たちは、その身を闇に溶け込ませ、静かに、しかし確実に、目標へと接近を試みている。

その、翼の生えた忍者たちは、空軍の偵察機からリアルタイムで送られてくる情報を元に、ただひたすらに漆黒を駆けていた。発動機が

力強くプロペラを回し、機体を前へ前へと推し進める。

そんな忍者の一機、*「秋津洲」* 飛行隊の二式大艇三機を率いる、一番機の機長妖精は、列機の様子を伺いつつ、前方の機影を注視していた。

とはいっても、実際に目視できているわけではない。味方機を見るのは、電子の目の役割だ。二式大艇の妖精たちは、スコープ上の輝点として僚機を見ている。

「秋津洲」 飛行隊を含めた、ルソン基地航空隊は、大きく二つに編隊を分け、ひたすらに敵艦隊——本土を急襲せんとする深海棲艦隊を目指していた。二つの編隊は前後に配置され、そのうち後詰めを担当するのが二式大艇たちである。

一方、先鋒を務めるのが、*「瑞穂」* 所属の航空隊だ。その数は全部で十二機。今作戦が初見参となる。

二式大艇とは異なる、単葉双フロートの機体。水冷エンジン搭載に由来する、研ぎ澄まされた日本刀を思わせるフォルムは、俊敏さを感じさせた。しかもその腹には、航空魚雷を抱えている。

水上攻撃機 *「晴嵐」*。元々は潜水空母に搭載される機体が、回り回ってルソンに配備されていたものだ。*「瑞穂」* に集中配備された彼らは、航空戦力に乏しいルソン基地の、切り札中の切り札である。

「瑞穂」 に搭載され、伊豆大島沖まで運ばれた十二機の *「晴嵐」* は、母艦を飛び立ち、十数分前に二式大艇たちと合流したところだ。伊豆大島沖から敵艦隊までは、それほど時間もかからない。

二時間ほど前、第一護衛隊群と交戦した敵艦隊は、旗艦である新型戦艦の機関復旧を待って、乱れた陣形の再編を行っている。すでにそれも終え、再び横須賀への進撃を開始していた。

当初の予想から二時間分を稼いだとはいえ、敵艦隊が横須賀まで数時間の位置に迫っていることに変わりはない。頼みの綱は、沖ノ鳥島沖から驀進中の独立艦隊、そして横須賀残存の水雷戦隊だ。

ルソン航空隊の使命は、彼女らのために、活路を切り開くことにある。

先頭で隊を誘導する *「晴嵐」* から、「敵艦隊見ゆ」の報告がある。正

確には、視認したわけではなく、電探の探知可能範囲に入ったことを意味する。距離は二万ほど。

報告と同時に、ルソン航空隊全機が高度を下げ始めた。夜間の対空戦闘は、電探頼みだ。であれば、敵の電探を掻い潜れる、低高度を飛行するのが得策である。

軽快な単発攻撃機の編隊に続いて、四発機である二式大艇もゆつくりと高度を下げる。高度計の針が回り、少しずつ小さな値を刻んだ。その値が三十を割り込んでもなお、機長妖精は操縦桿を起こさない。スロットルを絞り、速度を落としてつ、高度の秒読みをしていく。

高度が二十を切った辺りで、機首をわずかに上げた。失速ギリギリの速度を維持し、高度を下げていく。さながら、海面へと着水する時のように。

否、三機の二式大艇は、実際に着水した。

大島沖の海は凪いでいる。風はなく、波も立っていない。精々軽いうねりがある程度。この程度であれば、二式大艇の許容範囲だ。

着水した三機の二式大艇は、そのまま速度を落とすことなく、海面を轟進していく。鰹節のような機体底面が波を切つて、飛沫を上げる。白い海水がまるで航跡のように、後ろについてきた。

操縦席から、少し上空を見る。『晴嵐』は、高度二十を維持して先を急ぐ。戦闘の隊長機が翼を振った。バンクだ。お互いの健闘を祈る、そういう意味だろう。

スロットルを吹かして『晴嵐』が加速、敵艦隊へ突撃する。暗い色の機体はすぐに闇に溶け、視認できなくなった。

代わりに、炎が海面に踊る。おそらくは敵艦隊の対空砲火だ。外縁を固める駆逐艦や巡洋艦が両用砲を振り立て、迫りくる『晴嵐』へ向けて砲弾を吐き出す。

強襲を目的とした艦隊とはいえ、総数二十隻ともなれば、その対空砲火は激烈だ。夜間でなければ、たかだか十二機程度の『晴嵐』に突破できるものではないだろう。

故に、夜だ。航空機の優位を最大限に活かす。連続する砲炎が、敵艦隊の影から上がっている。炸裂する対空砲弾

は見えない。新月の海では、光源と呼べるのは星明りだけであり、その光はあまりにも儚い。この戦場の全景を照らすには、全くもって足りていない。

本来、目まぐるしく移りゆく戦場の光景は、今回に限って誰にも見えていない。敵にも、もちろんこちらにも。

だが、どちらかと言えば、ルソン航空隊に有利な戦場であった。理由は明白だ。敵艦隊が盛大に対空砲火を放ってくれるおかげで、その光に浮かび上がる影を捉えることができた。それが目印となり、「晴嵐」の行く先を指し示す。

機載の電探上で、「晴嵐」が敵艦隊までの距離三千を切った。その高度はいよいよもって低く、対空電探で捉えられるか否かというところまで、電波の反射が海面に紛れてしまっている。

状況は敵艦隊も同じはずだ。いよいよもって、その対空砲火は「晴嵐」を捉えられなくなる。

そこからはあつという間だ。「晴嵐」たちはみるみるうちに距離を縮め、距離およそ六百にまで接近してから、敵艦に向けて魚雷を放った。引き起こしをかけた機体は、発動機の出力にものを言わせ、すぐさま上空へと駆けていく。

「晴嵐」が目標としたのは、敵艦隊の外周を固める駆逐艦と巡洋艦だ。夜間のため輪形陣こそ敷いていないが、敵戦艦部隊は警戒担当の駆逐艦と巡洋艦を数隻ずつ、艦隊両翼に展開していた。その内左翼のものを、「晴嵐」十二機は狙ったのだ。

放たれた十二本の魚雷が、六百の距離を航走するのに、大して時間はいらない。しかも超至近での投下であり、回避運動を取る余裕は全くなかった。

傍目にもわかる激しい閃光が、海面の数か所で生じた。魚雷炸裂の瞬間だ。どれだけの戦果を挙げたのかはわからないが、「晴嵐」の魚雷は狙い変わらず、敵の警戒艦艇を捉えた。

ここから先は、二式大艇の仕事だ。

三機の二式大艇は、いまだ海面の上を滑走している。離水ギリギリの速度を保ち、白波を蹴立てながら敵艦隊へ肉薄していく。穿つはた

だ一点、たった今「晴嵐」がこじ開けた、敵艦隊防衛陣形の穴だ。そこから、さらに内側の敵戦艦を狙う。

極限の低空飛行、というよりも最早水上航行に近い行動を取っているのには理由がある。

いかに二式大艇が優秀な航空機と言っても、それは大型水上機の範囲に限られる。四発機であるから動きは緩慢であるし、俊敏性という点ではどうしても単発機に見劣りする。特別速力が速いわけでもない。まして今回は、たった三機での攻撃である。

そこで、機長妖精は、電探の穴を突くことを考えたのだった。

低空に行けば行くほど、対空電探に捕まりにくくなる。これは、航空機の機体に反射する電波が、海面に反射する電波に紛れてしまい、電探上で判別がつかなくなるために起こる現象だ。ゆえに、海面上を滑走する航空機を捉えることは、ほぼ不可能である。

また、水上目標を捉えるための水上電探は、存外に小型目標を捉えるにくい。理由は対空電探と同様であり、例え捉えられたとしても、相対に距離が近づいてからである。また、対水上電探では、対空砲群との即時連携は難しい。

しかも、作戦実施は視界の利かない夜と来た。

これらの理由を踏まえ、機長妖精は海面滑走という手段を選んだのだ。そして、事実として、距離五千を切ったというのに、敵艦隊に気づいた素振りはない。

二式大艇の翼下には、左右一本ずつの航空魚雷が懸吊されている。三機併せて六本。全て命中すれば、敵戦艦一隻を航行不能に陥れるのに、十分すぎる数だ。

先の魚雷で炎上する軽艦艇が、周囲を朧気に照らし出している。その光の中に、大きな影を捉えた。一瞬見えた艦橋形状から、ル級クラス敵艦とわかる。

機長妖精は、目標をそのル級に定めた。

距離はみるみる縮まっていく。「晴嵐」には劣るとはいえ、船などより圧倒的に速い航空機だ。後一分もせず、投雷点がやってくる。

不気味な沈黙。それがこれ以上ない重圧となって、操縦席を見たい

している。二式大艇に乗り込んだ妖精の、誰一人として、身動きを取らない。ただジツと、息をひそめ、敵艦隊の様子を窺う。

燃える敵軽巡は、眼前まで迫ってもなお、こちらへ気がついた様子はなかった。先に攻撃を仕掛けた「晴嵐」が離脱したことで、もう攻撃はないと油断しているのだろうか。あるいは艦の保全に必死なのか。どちらにしろ、これ以上の好機はなかった。

敵軽巡の舳先を抜けた時点で、距離は一千を切り、七百まで迫っていた。十二分に必中と言える距離だ。これ以上近づけば、引き起こしが間に合わなくなる。

機長妖精は投雷を指示した。すぐに投下レバーが引かれ、二本の魚雷が海中へ解き放たれる。すぐさまスロットルを一杯に開き、二式大艇は離水にかかった。

程なく、巨大な機体は海面を離れ、上空を目指し始める。

さすがに敵艦隊も気づいた。慌てて対空砲火を放ってくるが、すでに三機は離脱にかかっていた。機銃弾が何発か機体を掠めたが、被害はない。

放った魚雷の命中に、大して時間は必要なかった。おどろおどろしい轟音が響き、闇夜にも明らかな水柱が立ち上る。狙い違わず、敵艦の舷側を抉っていた。

その末路は、もはや見届けるまでもなかった。否、その時間もなかった。

戦場に、新たな刺客が到着したからだ。